

Cosminexus
**サービスプラットフォーム
システム構築・運用ガイド**

手引・文法書

3020-3-M73-60

マニュアルの購入方法

このマニュアル，および関連するマニュアルをご購入の際は，
巻末の「ソフトウェアマニュアルのサービス ご案内」をご参
照ください。

対象製品

適用 OS : Windows Server 2003 , Windows Server 2003 R2 , Windows XP , Windows Vista

P-2443-7T74 uCosminexus Service Architect 07-60

P-2443-7U74 uCosminexus Operator 07-60

適用 OS : Windows Server 2003 , Windows Server 2003 R2 , Windows Server 2003 (x64) , Windows Server 2003 R2 (x64)

P-2443-7S74 uCosminexus Service Platform 07-60

適用 OS : AIX 6L V6.1 , AIX 5L V5.3 (5300-06 RMP) , AIX 5L V5.2 (5200-10 RMP)

P-1M43-7S71 uCosminexus Service Platform 07-60

適用 OS : Red Hat Enterprise Linux AS 3 (x86) , Red Hat Enterprise Linux ES 3 (x86) , Red Hat Enterprise Linux AS 3 (AMD64 & Intel EM64T) , Red Hat Enterprise Linux ES 3 (AMD64 & Intel EM64T) , Red Hat Enterprise Linux AS 4 (x86) , Red Hat Enterprise Linux ES 4 (x86) , Red Hat Enterprise Linux AS 4 (AMD64 & Intel EM64T) , Red Hat Enterprise Linux ES 4 (AMD64 & Intel EM64T) , Red Hat Enterprise Linux 5 Advanced Platform (x86) , Red Hat Enterprise Linux 5 (x86) , Red Hat Enterprise Linux 5 Advanced Platform (AMD/Intel 64) , Red Hat Enterprise Linux 5 (AMD/Intel 64)

P-9S43-7S71 uCosminexus Service Platform 07-60

印の製品については、サポート時期をご確認ください。

これらのプログラムプロダクトのほかにも、このマニュアルをご利用になれる場合があります。詳細は「リリースノート」でご確認ください。

本製品では日立トレース共通ライブラリをインストールします。

輸出時の注意

本製品を輸出される場合には、外国為替および外国貿易法ならびに米国の輸出管理関連法規などの規制をご確認の上、必要な手続きをお取りください。

なお、ご不明な場合は、弊社担当営業にお問い合わせください。

商標類

AIX は、米国における米国 International Business Machines Corp. の登録商標です。

AMD は、Advanced Micro Devices, Inc. の商標です。

CORBA は、Object Management Group が提唱する分散処理環境アーキテクチャの名称です。

HP-UX は、米国 Hewlett-Packard Company のオペレーティングシステムの名称です。

IOP は、OMG 仕様による ORB(Object Request Broker) 間通信のネットワークプロトコルの名称です。

Intel は、Intel Corporation の会社名です。

iWay および iWay Software は、Information Builders, Inc. の米国およびその他の国における登録商標です。

Java 及びすべての Java 関連の商標及びロゴは、米国及びその他の国における米国 Sun Microsystems, Inc. の商標または登録商標です。

JDK は、米国 Sun Microsystems, Inc. の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Linux は、Linus Torvalds の米国およびその他の国における登録商標あるいは商標です。

Microsoft は、米国およびその他の国における米国 Microsoft Corp. の登録商標です。

Microsoft Office Excel は、米国 Microsoft Corporation の商品名称です。

ORACLE は、米国 Oracle Corporation の登録商標です。

Oracle は、米国 Oracle Corporation 及びその子会社、関連会社の登録商標です。
Oracle 10g は、米国 Oracle Corporation の商標です。
Oracle9i は、米国 Oracle Corporation の商標です。
Red Hat は、米国およびその他の国で Red Hat, Inc. の登録商標若しくは商標です。
SAP, mySAP, R/3, 記載されているすべての SAP 製品およびサービス名は SAP AG のドイツおよびその他世界各国における登録商標または商標です。
SOAP (Simple Object Access Protocol) は、分散ネットワーク環境において XML ベースの情報を交換するための通信プロトコルの名称です。
Sun, Sun Microsystems, Java は、米国 Sun Microsystems, Inc. の米国およびその他の国における商標または登録商標です。
UNIX は、X/Open Company Limited が独占的にライセンスしている米国ならびに他の国における登録商標です。
W3C は、World Wide Web Consortium の商標 (多数の国において登録された) です。
Windows は、米国およびその他の国における米国 Microsoft Corp. の登録商標です。
Windows Server は、米国 Microsoft Corporation の米国及びその他の国における登録商標です。
Windows Vista は、米国 Microsoft Corporation の米国及びその他の国における登録商標です。
Eclipse は、開発ツールプロバイダのオープンコミュニティである Eclipse Foundation, Inc. により構築された開発ツール統合のためのオープンプラットフォームです。
This product includes software developed by the Apache Software Foundation (<http://www.apache.org/>).

発行

2006 年 5 月 (第 1 版) 3020-3-M73

2008 年 3 月 (第 4 版) 3020-3-M73-60

著作権

All Rights Reserved. Copyright (C) 2006, 2008, Hitachi, Ltd.

変更内容

変更内容 (3020-3-M73-60) uCosminexus Service Architect 07-60 , uCosminexus Service Platform 07-60

追加・変更内容	変更箇所
<p>データベースと Cosminexus RM を使用しない構成、またはデータベースを使用して Cosminexus RM を使用しない構成で、システムを構築できるようにした。また、テスト環境と本番環境で、データベースと Cosminexus RM の使用有無の設定が異なる場合でも、テスト環境で使用したリポジトリを本番環境へ移行できるようにした。これに伴い、HCSC サーバセットアップ定義ファイルに次のプロパティを追加した。</p> <ul style="list-style-type: none"> • db-use • rm-use • hcscserver-data-filepath 	<p>1.1.5, 1.2(11), 2.2, 2.3, 表 2-4, 2.3.9, 2.3.10, 表 2-21, 表 2-22, 3.1.2, 3.1.3(1), 3.1.15, 3.1.16, 3.3, 4.3(1), 4.5, 6.1, 6.2.2(1)(b), HCSC サーバセットアップ定義ファイル, HCSC サーバランタイム定義ファイル, cscpidelete (プロセスインスタンスの実行履歴の削除), cscpireexec (プロセスインスタンスの再実行), cscpiselect (プロセスインスタンスの検索), cscreptl (インポート/エクスポート), cscrepdiff (リポジトリ情報の差分の表示), cscrepls (リポジトリ情報の表示), cscsvsetup (HCSC サーバのセットアップ), csmdeletehistory (電文の実行履歴情報テーブルのレコードの削除), csmlshistory (電文の実行履歴情報の表示), csmlslocation (サービスアダプタまたはビジネスプロセスの情報の表示), csmlsreception (ユーザ定義受付の情報の表示)</p>
<p>開発から実運用までの流れに、テスト環境の作業を追加した。これに伴い、開発環境および運用環境での作業を変更した。</p>	<p>1.2</p>
<p>AIX のバージョンを追加、変更した。</p>	<p>表 1-2</p>
<p>次の適用 OS を追加した。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Red Hat Enterprise Linux 5 Advanced Platform (x86) • Red Hat Enterprise Linux 5 (x86) • Red Hat Enterprise Linux 5 Advanced Platform (AMD/Intel 64) • Red Hat Enterprise Linux 5 (AMD/Intel 64) 	<p>表 1-2</p>

追加・変更内容	変更箇所
<p>次の適用 OS を削除した。</p> <ul style="list-style-type: none"> • HP-UX 11i V2 (IPF) • HP-UX 11i V3 (IPF) 	表 1-2
<p>既存の業務処理システムのファイルを入出力できるようにしたことに伴い、ファイルアダプタ、および次のソフトウェアを追加した。</p> <ul style="list-style-type: none"> • uCosminexus Service Adapter Architect for Flat Files • uCosminexus Service Adapter for Flat Files 	1.4.3(2)(j), 1.4.3(2)(k)
<p>移行内容を 07-60 への移行内容に変更した。また、移行手順に上書きインストールおよびローリングアップデートを追加した。これに伴い、次のコマンドを追加・削除した。</p> <p>追加：cscenvupdate 削除：cscrepupdate また、バージョン移行用のファイルについての内容を追加した。</p>	<p>図 2-2, 2.1.6(1)(a), 4.3(3), 表 10-1, cscenvbackup (HCSC-Manager 環境のバックアップ), cscenvupdate (実行環境のバージョンアップ), 表 B-1, 付録 G</p>
<p>連携先クラスタ情報を追加するサーバの種別を指定できるようにした。これに伴い、連携セットアップ定義ファイルに FirstSetup プロパティを追加した。</p>	表 2-5, 連携セットアップ定義ファイル
<p>指定した電文フォーマットに対して、送受信する電文が適切かどうかを検証できるようにした。これに伴い、HCSC サーバランタイム定義ファイルに telegram-validation プロパティを追加した。</p>	2.3.4(2), 2.3.9(3), 2.3.10(3), HCSC サーバランタイム定義ファイル
<p>CSCMSG_C<クラスタ名>_EXECHISTORY テーブルのレコード数の概算式を変更した。</p>	2.3.6(2)(b)
<p>変換テーブルの合計ファイルサイズを指定できるようにした。</p>	2.3.8
<p>環境をリストアする際、またはリポジトリをインポートする際に、自動バックアップをするかどうかを指定できるようにした。また、バックアップファイルの出力先ディレクトリを指定できるようにした。これに伴い、HCSC-Manager 定義ファイルに次のパラメタを追加した。</p> <ul style="list-style-type: none"> • cscmng.envbackup.dir.envrestore • cscmng.envbackup.dir.import • cscmng.envbackup.autoget.off 	表 2-19, 4.3(2), HCSC-Manager 定義ファイル
<p>システムのセットアップ時の注意事項を追加した。</p>	3.1.1
<p>DB サーバ (Oracle) 側に設定するオブジェクト権限に、SELECT_CATALOG_ROLE 権限を追加した。</p>	3.1.2(1)(b)
<p>Web サーバ (HTTP サーバ) のセットアップ方法を変更した。</p>	3.1.2(5)
<p>開発環境と運用環境で同じリポジトリを共有できないようにした。これに伴い、リポジトリを共有する場合の説明を削除した。</p>	4.1(2), 付録 G.2, 付録 G.3, 付録 G.4
<p>HCSC サーバのリソースの稼働情報を確認できるようにした。</p>	表 4-1, 5.2.18, 表 8-2, 8.5, 表 10-1, cscresinfo (リソース稼働情報の表示), 表 B-1, 付録 E

追加・変更内容	変更箇所
<p>現在の運用環境のリポジットリ情報とインポートするリポジットリ情報で、HCSC サーバの構成情報が異なる場合でもインポートできるようにした（標準インポート）。また、現在の運用環境のリポジットリ情報とインポートするリポジットリ情報で、HCSC サーバの構成情報が同じかどうかをチェックできるようにした（サーバチェックインポート）。これに伴い、次のコマンドに -check オプションを追加した。</p> <ul style="list-style-type: none"> • cscrepctl • cscrepdiff 	4.3, cscrepctl (インポート/エクスポート), cscrepdiff (リポジットリ情報の差分の表示)
<p>運用する前の準備で、アクセスしてはいけないリポジットリのディレクトリを変更した。</p>	5.2.1(1)
<p>サービス呼び出しの流れ、ビジネスプロセスを使った運用、および標準プロトコル以外のシステムとの接続の説明を追加した。</p>	5.4, 5.5, 5.6
<p>プロセスインスタンスを再実行する場合の注意事項を追加した。</p>	6.1.5(1)(b), 6.1.5(2)(c)
<p>電文の実行履歴の概要を追加した。</p>	6.2.1
<p>障害対策について次の内容を追加，変更した。</p> <p>追加</p> <ul style="list-style-type: none"> • 障害対策の流れ • 障害調査のために必要な情報 • Cosminexus サービスプラットフォーム以外の前提製品が出力する障害情報の取得方法 • メッセージログで出力される内容 • Cosminexus の統合メッセージログ、および Cosminexus の J2EE サーバの稼働ログの出力先 • リクエストトレースで取得できる内容 • ファイルアクセス時の性能解析トレースの取得ポイント • Cosminexus の J2EE サーバの例外ログ（障害発生時の例外情報）の出力先 • メソッドトレースで出力される内容、およびメソッドトレースのトレースファイル名（csbpmtd_<HCSC サーバ名>_<面数>.log, csbdbamtd_<HCSC サーバ名>_<面数>.log） • 実行環境に必要なソフトウェアの設定での障害調査 • セットアップおよびアンセットアップ時の障害調査 • HCSC サーバが使用するリソース • オペレーション実行時の障害対策 • Web サービス（SOAP 通信）、SessionBean、MDB（WS-R）、MDB（DB キュー）実行時、ユーザ電文に誤りがある場合、およびシステム全体の障害の障害対策 • JP1 によるメッセージ監視 • 復旧時の自動バックアップ • デッドロックが発生した場合の回復方法 <p>変更</p> <ul style="list-style-type: none"> • Cosminexus サービスプラットフォームが出力するログやトレースの取得方法 • リクエストトレースの取得方法 • 性能解析トレースの取得方法と出力先 	7.1, 7.2, 7.3.1, 7.3.2, 7.4.1(1), 7.4.1(3), 7.4.2, 7.4.2(3), 7.4.3(2)(a), 7.4.3(3), 7.4.4(1)(b), 7.4.4(4), 7.5.4, 7.5.1, 7.5.2, 7.6, 7.7, 7.7.1 ~ 7.7.6, 7.8.1(1), 7.9.3(2)(c), 7.9.4
<p>リクエストトレースの出力項目の変更に伴い、プロトコル種別にカスタムアダプタを追加し、アダプタ種別から DB アダプタを削除した。</p>	表 7-17

追加・変更内容	変更箇所
<p>サービスの種別が MDB (WS-R) の場合、次のサービス情報を表示および変更できるようにした。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 最大メッセージ数 • 順序保証 • 転送キュー作成先 RD エリア <p>これに伴い、サービス情報変更定義ファイルに次のパラメタを追加した。</p> <ul style="list-style-type: none"> • <クラスタ名>.<サービス ID>.MDB_WSR.max_message_num • <クラスタ名>.<サービス ID>.MDB_WSR.rdarea_name • <クラスタ名>.<サービス ID>.MDB_WSR.qos_in_order 	<p>表 8-3、サービス情報変更定義ファイル、表 10-3</p>
<p>HCSC サーバセットアップ定義ファイルの次のプロパティを省略できるようにした。</p> <ul style="list-style-type: none"> • rm-systemname • rm-displayname • dbcon-xadisplayname • dbcon-nodisplayname • dbtype • jdbc-type • db-character-sets 	<p>HCSC サーバセットアップ定義ファイル</p>
<p>targetNamespace に使用できる文字を追加した。</p>	<p>SOAP Fault 動作定義ファイル</p>
<p>次のメッセージを追加した。</p> <p>KDEC00523-W ~ KDEC00527-E, KDEC01025-E, KDEC01026-E, KDEC01520-W ~ KDEC01522-E, KDEC02524-E, KDEC03021-E, KDEC04609-E, KDEC05101-E ~ KDEC05108-W, KDEC05201-E ~ KDEC05212-E, KDEC05506-E, KDEC06014-E, KDEC10071-E ~ KDEC10075-E, KDEC40437-E, KDEC40730-E ~ KDEC40732-E, KDEC50000-I, KDEC50001-I, KDEC50100-I, KDEC50101-I, KDEC50200-I, KDEC50201-I, KDEC50300-I, KDEC50301-I, KDEC51000-E, KDEC51001-E, KDEC51003-E ~ KDEC51012-E, KDEC51015-E ~ KDEC51020-E, KDEC51023-E ~ KDEC51025-E, KDEC51027-E, KDEC51029-E, KDEC51031-E, KDEC51035-E, KDEC51036-E, KDEC51038-E, KDEC51039-E, KDEC51055-E ~ KDEC51065-E, KDEC51900-E ~ KDEC51902-E, KEOS50218-E ~ KEOS50228-E, KEOS50252-E, KEOS52192-I ~ KEOS52203-E, KEOS52779-I ~ KEOS52784-W</p>	<p>11.2.2 ~ 11.2.4, 11.2.6 ~ 11.2.11, 11.2.14, 11.4, 11.6.1 ~ 11.6.3, 付録 F(1)</p>

追加・変更内容	変更箇所
<p>次のメッセージを変更した。</p> <p>KDEC00502-E, KDEC01006-E, KDEC01013-E, KDEC01017-E, KDEC01501-E, KDEC01515-E, KDEC06002-E, KDEC06008-E, KDEC06009-E, KDEC06501-W, KDEC06502-W, KDEC10042-W, KDEC10044-E, KDEC19903-E, KDEC20067-E, KDEC40026-E, KDEC40454-E ~ KDEC40456-E, KDEC40463-E, KEOS50142-W, KEOS50143-W, KEOS50146-E, KEOS50150-E, KEOS50163-W, KEOS50164-E, KEOS50214-E, KEOS52783-E, KEOS52108-E, KEOS52154-E, KEOS52509-I, KEOS52510-I, KEOS52715-I, KEOS52716-I, KEOS52728-I ~ KEOS52732-I, KEOS52737-I, KEOS52744-I ~ KEOS52757-I, KEOS52772-I, KEOS52773-I, KEOS53500-I ~ KEOS53506-I, KEOS53513-I, KEOS53514-I, KEOS53515-I, KEOS53561-I, KEOS53562-I, KEOS53563-I, KEOS53564-E, KEOS53565-W, KEOS53567-E, KEOS53568-E, KEOS53584-W</p>	<p>11.2.2, 11.2.3, 11.2.4, 11.2.11, 11.2.12, 11.2.14, 11.2.16, 11.3.1, 11.4, 11.6.1 ~ 11.6.4</p>
<p>次のメッセージを削除した。</p> <p>KEOS52155-I ~ KEOS52158-E, KEOS52802-I ~ KEOS52815-I, KEOS59001-I ~ KEOS59005-E, KEOS59051-I ~ KEOS59056-I, KEOS59499-E, KEOS59600-E ~ KEOS59605-E, KEOS59696-E, KEOS59900-E, KEOS59901-E</p>	<p>11.6, 11.6.2, 11.6.3</p>

単なる誤字・脱字などはお断りなく訂正しました。

変更内容 (3020-3-M73-40) uCosminexus Service Architect 07-50, uCosminexus Service Platform 07-50

追加・変更内容
<p>Cosminexus サービスプラットフォームの全体像, および環境間の関係についての説明を追加した。</p> <p>サービスリクエストからの実行要求を受け付けるインターフェースとして, 任意の形式を定義できる「ユーザ定義受付」を利用できるようにした。これに伴い, 次の定義ファイルおよびコマンドを追加した。</p> <p>定義ファイル</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザ定義受付ランタイム定義ファイル <p>コマンド</p> <ul style="list-style-type: none"> • csccompoconfig • csccompostart • csccompostop • cscreptnstart • cscreptnstop • csmlsreception
<p>前提 OS から Windows 2000 を削除した。</p>
<p>前提 OS に Windows Vista を追加した。</p>
<p>前提 OS から AIX 5L V5.1 (5100-07 RMP) を削除した。</p>
<p>前提 OS に, Red Hat Enterprise Linux ES 3 (AMD64 & Intel EM64T), および Red Hat Enterprise Linux ES 4 (AMD64 & Intel EM64T) を追加した。</p>

追加・変更内容

前提 OS に HP-UX を追加した。

データ変換定義で、変換テーブルを利用して値を変換する値置換えファンクションを利用できるようにした。

既存の TPBroker システム (Object Wrapper システム) と接続する場合に使用する、次のソフトウェアを追加した。

- uCosminexus Service Adapter Architect for Object Access
- uCosminexus Service Adapter for Object Access

他社 ERP パッケージと連携する場合に使用する、iWay アダプタを追加した。

アンインストール時の削除対象ファイルの格納ディレクトリを追加した。

HCSC サーバセットアップ定義ファイルに、次のプロパティを追加した。

- cluster-type
- cluster-name
- request-userdef-soap

標準受付およびユーザ定義受付の流量制御値を変更できるようにした。

これに伴い、HCSC サーバランタイム定義ファイルに、次のプロパティを追加した。

- request-soap.exclusive.threads
- request-soap.queue-size

HCSC サーバランタイム定義ファイルに、次のプロパティを追加した。

- request-ejb.optional.name
- soapfault-targetnamespace-filepath
- xmltelegram-maxcache-num

サービス情報を変更および確認できるようにした。

これに伴い、次の定義ファイルおよびコマンドを追加した。

定義ファイル

- サービス情報変更定義ファイル

コマンド

- cscsvctl
- cscsvcls

Cosminexus Web Services の初期設定を追加した。

使用する JDBC ドライバの選択方法を追加した。

また、HiRDB Type4 JDBC Driver および Oracle JDBC Thin Driver のセットアップ方法を追加した。

HCSC コンポーネントの配備および削除の指定方法を追加した。

アンセットアップ時にアンセットアップ直前のリポジトリ情報がバックアップされるようにした。

旧バージョンのリポジトリの情報をバージョンアップ後にも使用できる形式に移行できるようにした。

これに伴い、cscrepupdate コマンドを追加した。

また、リポジトリとするディレクトリについての注意事項を追加した。

追加・変更内容

運用環境に発生した障害を復旧する場合や環境を移行する場合に、環境の復旧に必要なファイルをバックアップおよびリストアできるようにした。

これに伴い、次のパラメタおよびコマンドを追加した。

HCSC-Manager 定義ファイル

- cscmng.envbackup.dir
- cscmng.envbackup.autoget

コマンド

- cscenvbackup
- cscenvrestore

また、バックアップファイルの情報を参照できるように、次のオプションを追加した。

cscrepls コマンド

- -envbackfile
-

運用する前の準備、運用の開始、運用中、および運用の終了で実施する作業を追加した。

HCSC サーバの起動および停止の指定方法を追加した。

これに伴い、次のコマンドを追加した。

- cscsvstart
 - cscsvstop
-

HCSC コンポーネントおよび標準受付の、開始および停止の指定方法を追加した。

これに伴い、次のコマンドを追加した。

- csccompostart
 - csccompostop
 - cscrcptnstart
 - cscrcptnstop
-

HCSC サーバおよび HCSC コンポーネントの、情報の参照の指定方法を追加した。

トレースファイルの見積もり方法を追加した。

HCSC サーバが管理しているアプリケーションを操作できるようにした。

これに伴い、cscapputil コマンドを追加した。

基本情報ページを HCSC サーバ、ビジネスプロセス、サービスアダプタ、およびユーザ定義受付の四つのページに変更した。

定義情報ページを追加した。

HCSC-Messaging コマンド共通定義ファイルを追加した。

SOAP Fault 動作定義ファイルを追加した。

HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルの形式を変更した。

HCSC-Manager 定義ファイルに、次のパラメタを追加した。

- cscmng.server:<HCSC サーバ名>.system
 - cscmng.envbackup.dir
-

コマンドの同時実行についての説明を追加した。

cscrepls コマンドに、次のオプションを追加した。

- -csc
 - -oldtype
-

追加・変更内容

メッセージを追加した。

KDEC00005-E, KDEC00039-E ~ KDEC00044-W, KDEC00521-E, KDEC00522-E, KDEC01019-E ~ KDEC01024-E, KDEC01517-E ~ KDEC01519-E, KDEC04513-E ~ KDEC04516-E, KDEC05505-E, KDEC10052-E ~ KDEC10070-E, KDEC10411-I, KDEC10501-E ~ KDEC10502-E, KDEC40023-E ~ KDEC40027-E, KDEC40701-E ~ KDEC40729-E, KDEC68010-E, KDEC68011-E, KEOS50027-E, KEOS50033-E, KEOS50034-E, KEOS50059-E, KEOS50073-E, KEOS50150-E ~ KEOS50251-E, KEOS52010-I, KEOS52036-I ~ KEOS52039-I, KEOS52043-I, KEOS52045-I, KEOS52047-E, KEOS52048-I, KEOS52057-I, KEOS52058-I, KEOS52061-E, KEOS52110-I ~ KEOS52126-I, KEOS52137-E ~ KEOS52139-I, KEOS52146-I ~ KEOS52191-I, KEOS52571-Q ~ KEOS52574-Q, KEOS52738-I ~ KEOS52741-E, KEOS52770-I ~ KEOS52773-I, KEOS53500-I ~ KEOS53699-E, KEOS59001-I ~ KEOS59499-E, KEOS59600-E ~ KEOS59901-E

メッセージを変更した。

KDEC00001-E, KDEC00010-E ~ KDEC00023-E, KDEC00026-E, KDEC00032-E, KDEC00033-E, KDEC00505-E, KDEC01001-E, KDEC01002-E, KDEC01018-E, KDEC01505-E, KDEC01508-E, KDEC01509-E, KDEC01514-E, KDEC02518-E, KDEC04501-E, KDEC04503-E, KDEC04504-E, KDEC04510-E ~ KDEC04512-E, KDEC04517-E, KDEC04601-I ~ KDEC04605-I, KDEC05001-E, KDEC05003-E ~ KDEC05006-E, KDEC05010-W, KDEC05504-E, KDEC06008-E, KDEC10006-E, KDEC10012-E, KDEC10016-E, KDEC10020-E, KDEC10022-E, KDEC10024-E ~ KDEC10026-E, KDEC10031-E, KDEC10034-W, KDEC10039-E, KDEC10045-E, KDEC10046-E, KDEC10048-W, KDEC10049-W, KDEC10051-E, KDEC10401-I, KDEC10403-I, KDEC40210-E, KDEC60001-E, KDEC62001-E, KDEC63001-E, KDEC64004-E, KDEC64007-E, KDEC66003-E ~ KDEC66007-E, KDEC68008-E, KDEC68023-E, KDEC68026-E, KEOS50018-E, KEOS50019-I, KEOS50021-I, KEOS50023-I, KEOS50057-I, KEOS50064-I, KEOS50066-E, KEOS50092-E, KEOS50131-E, KEOS52000-I ~ KEOS52009-I, KEOS52034-E, KEOS52127-W, KEOS52132-I, KEOS52522-Q ~ KEOS52527-Q, KEOS52536-I ~ KEOS52539-I, KEOS52548-E ~ KEOS52551-E, KEOS52565-I, KEOS52566-I, KEOS52746-I ~ KEOS52753-I, KEOS52758-E, KEOS52759-E

メッセージを削除した。

KDEC10404-I

変更内容 (3020-3-M73-20) uCosminexus Service Architect 07-10, uCosminexus Service Platform 07-10

追加・変更内容

JP1/IM-Central Console と連携した障害通知機能を追加した。

ルーティング機能を削除, または変更した。

前提 OS に AIX および Linux (32) を追加した。
これに伴い, 関連ソフトウェアに HA モニタを追加した。

使用できる HiRDB または HiRDB サーバのバージョンを変更した。

追加・変更内容

ロードバランス機能を利用した HCSC サーバの構成を追加した。

これに伴い、次の要素およびプロパティを追加・変更した。

HCSC サーバ構成定義ファイル

- type
- jms-reception
- jms-physical-reception
- ip-address (jms-physical-reception の定義)
- port (jms-physical-reception の定義)
- protocol (jms-physical-reception の定義)
- rm-service-context-root (jms-physical-reception の定義)
- rm-service-name (jms-physical-reception の定義)

HCSC サーバランタイム定義ファイル

- request-ejb.instance.maximum
- request-ejb.ctm
- request-ejb.parallel.count

OpenTP1 を使用する場合の関連ソフトウェアとして、次のソフトウェアを追加した。

- uCosminexus TP1/Server Base Enterprise Option
- uCosminexus Service Adapter Architect for TP1
- uCosminexus Service Adapter for TP1
- uCosminexus TP1 Gateway

サービス側の電文フォーマットがバイナリ形式の場合にデータ形式を変換するための機能を追加した。これに伴い、バイナリ形式のデータと XML 形式のデータを変換する場合に使用する関連ソフトウェアとして、次のソフトウェアを追加した。

- uCosminexus 日立コード変換・Development Kit
- uCosminexus 日立コード変換・Server Runtime
- uCosminexus 日立コード変換・Runtime

インストールおよびアンインストールについての説明を変更した。

JDBC ドライバの種類別に、HiRDB Version8 の TYPE4 JDBC を追加した。

これに伴い、次の要素およびプロパティを追加・変更した。

HCSC サーバセットアップ定義ファイル

- jdbc-url
- cluster-name

HCSC サーバランタイム定義ファイル

- jdbc-bufsize
- jdbc-longvarbinary
- jdbc-longvarbinary-access-size
- jdbc-maxbinarysize
- jdbc-longvarbinary-truncerror

次のデータベースのテーブルについて、レコードの概算式を追加・変更した。

- CSCMSG_C< クラスタ名 >_EXECHISTORY テーブル
 - CSCMSG_C< クラスタ名 >_CSC_CONNECT テーブル
 - CSCMSG_S<HCSC サーバ名 >_LC_DIRECTORY テーブル
 - CSCMSG_S<HCSC サーバ名 >_LC_BPFORMAT テーブル
 - CSCMSG_S<HCSC サーバ名 >_RT_RULE テーブル
 - CSCMSG_S<HCSC サーバ名 >_CV_MAPPING テーブル
 - CSCMSG_S<HCSC サーバ名 >_CV_FORMAT テーブル
-

追加・変更内容

次のデータベースのテーブルについて、テーブルの情報を追加・変更した。

- CSCMSG_C<クラスタ名>_EXECHISTORY テーブル
 - CSCMSG_S<HCSC サーバ名>_CSC_PERSIST テーブル
 - CSCMSG_C<クラスタ名>_CSC_CONNECT テーブル
 - CSCMSG_S<HCSC サーバ名>_LC_DIRECTORY テーブル
 - CSCMSG_S<HCSC サーバ名>_LC_BPFORMAT テーブル
 - CSCMSG_S<HCSC サーバ名>_RT_RULE テーブル
 - CSCMSG_S<HCSC サーバ名>_CV_MAPPING テーブル
 - CSCMSG_S<HCSC サーバ名>_CV_FORMAT テーブル
-

リポジトリ情報の差分表示機能を追加した。
これに伴い、cscrepdiff コマンドを追加した。

HCSC サーバ、サービスアダプタ、およびビジネスプロセスの表示機能を追加した。
これに伴い、cscstatus コマンドを追加した。

実行環境の構築手順を変更した。

HCSC サーバの状態の表示機能を追加した。
これに伴い、csmlsstate コマンドを追加した。

更新日時が表示されるようにした。

サービスコンポーネントまたはサービスグループの情報機能を追加した。
これに伴い、csmlslocation コマンドを追加した。

電文の実行履歴の管理機能を追加した。
これに伴い、次のプロパティおよびコマンドを追加した。

HCSC サーバランタイム定義ファイル

- historyrecord
- historyrecord-data
- historyrecord-binarylength

コマンド

- csmdetelehistory
 - csmlshistory
-

プロセスインスタンスの実行履歴の画面による一括削除機能を追加した。

HCSC サーバ障害発生時の障害対策を追加した。

使用するデータベースで指定した文字コード種別に、EUC-JP を追加した。

追加・変更内容

メッセージを追加した。

KDEC00037-E, KDEC00038-E, KDEC00503-E, KDEC00517-E ~ KDEC00520-E ,
KDEC01018-E, KDEC01501-E ~ KDEC01516-E, KDEC03006-E, KDEC04520-E ,
KDEC05504-E, KDEC06010-E ~ KDEC06013-W, KDEC10051-E, KDEC10401-I, KDEC10403-I ,
KDEC10404-I, KDEC10407-I, KDEC10408-I, KDEC20068-E ~ KDEC20071-E, KDEC40100-E ,
KDEC40101-E, KDEC40200-E ~ KDEC40202-E, KDEC40210-E ~ KDEC40214-E ,
KDEC40220-E ~ KDEC40222-E, KDEC40310-E, KDEC40311-E, KDEC40330-E ~
KDEC40335-E, KDEC40400-E ~ KDEC40402-E, KDEC40404-E ~ KDEC40409-E ,
KDEC40413-E ~ KDEC40416-E, KDEC40419-E, KDEC40420-E, KDEC40430-E ~
KDEC40433-E, KDEC40435-E, KDEC40436-E, KDEC40440-E, KDEC40450-E ~
KDEC40456-E, KDEC40462-E ~ KDEC40464-E, KDEC40466-E ~ KDEC40468-E ,
KDEC40471-E ~ KDEC40475-E, KDEC40477-E, KDEC40478-E, KDEC40482-E ,
KDEC40510-E, KDEC40511-E, KDEC40520-E ~ KDEC40529-E, KDEC40605-E ,
KDEC40606-E, KDEC40610-E, KDEC40611-E, KDEC40613-E ~ KDEC40616-E ,
KDEC40618-E, KEOS50144-I ~ KEOS50149-E, KEOS52034-E, KEOS52035-E, KEOS52128-I ~
KEOS52136-E, KEOS52720-I

メッセージを変更した。

KDEC00504-E, KDEC00506-E, KDEC00515-E, KDEC01003-E, KDEC01005-E, KDEC01015-W ,
KDEC02523-E, KDEC03005-E, KDEC05001-E ~ KDEC05006-E, KDEC10004-E, KDEC10023-E
~ KDEC10026-E, KDEC10029-E, KDEC10030-W, KDEC10033-E, KDEC10037-E ~
KDEC10039-E, KDEC10048-W, KDEC10049-W, KDEC20023-E, KDEC20034-E ,
KDEC20037-E, KDEC20038-I, KDEC20044-E, KDEC20045-E, KDEC20047-E ~ KDEC20049-E ,
KDEC20056-E, KDEC20057-E, KDEC20060-E, KDEC20062-E, KDEC20066-E, KDEC20067-E ,
KDEC35001-E, KDEC66000-E, KDEC66001-E, KDEC66003-E ~ KDEC66005-E ,
KDEC66007-E, KEOS52013-I, KEOS52025-E, KEOS52026-E, KEOS52042-E, KEOS52056-I ,
KEOS52140-E, KEOS52143-E, KEOS52145-E, KEOS52500-I ~ KEOS52510-I, KEOS52514-I ~
KEOS52570-E, KEOS52575-I ~ KEOS52580-W, KEOS52701-I ~ KEOS52704-E, KEOS52706-E
~ KEOS52709-I, KEOS52711-I ~ KEOS52719-Q, KEOS52721-E ~ KEOS52724-Q ,
KEOS52726-E ~ KEOS52737-I, KEOS52742-I ~ KEOS52763-I, KEOS52777-I, KEOS52778-I ,
KEOS52800-E ~ KEOS52815-I

Cosminexus Service Coordinator 管理者の変更方法を追加した。

はじめに

このマニュアルは、Cosminexus が提供する機能を利用して、SOA に対応したサービス統合環境（サービスプラットフォーム）を運用する方法について説明しています。

Cosminexus サービスプラットフォームでは、次に示すプログラムプロダクトを使用してシステムを運用します。

- P-2443-7S74 uCosminexus Service Platform 07-60
- P-2443-7T74 uCosminexus Service Architect 07-60
- P-2443-7U74 uCosminexus Operator 07-60
- P-1M43-7S71 uCosminexus Service Platform 07-60
- P-9S43-7S71 uCosminexus Service Platform 07-60

また、オペレーティングシステム（OS）の種類によって、機能が異なる場合があります。OS ごとの違いがある場合の表記方法については、「適用 OS の違いによる機能相違点の表記」を参照してください。

対象読者

Cosminexus サービスプラットフォーム（uCosminexus Service Architect および uCosminexus Service Platform）を利用して SOA に対応したシステムを運用するシステム管理者を対象としています。

対象読者の前提知識として必要な知識を次に示します。

- SOA に関する基本的な知識
- J2EE に関する基本的な知識
- SQL およびリレーショナルデータベースに関する基本的な知識
- XML に関する基本的な知識

なお、JP1 との連携機能を使用する場合は、次の内容を理解していることが必要です。

- JP1 の統合管理、ジョブ管理、ネットワーク管理、およびアベイラビリティ管理に関する基本的な知識

また、このマニュアルの前提である、マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム概説」を必ずお読みください。

マニュアルの構成

このマニュアルは、次に示す章と付録から構成されています。

第 1 章 SOA に基づいたシステム運用の概要

システム運用の概要、システム構成、および運用方針の設定方法について説明しています。

第 2 章 システムの構築

uCosminexus Service Platform などのインストールやインストール後の設定方法について説明しています。

はじめに

第 3 章 システムのセットアップとアンセットアップ

システムのセットアップ、アンセットアップ、および HCSC サーバの定義について説明しています。また、テスト環境から本番環境へ移行する場合の手順について説明しています。

第 4 章 リポジトリの管理

リポジトリの設定、エクスポートやインポート、およびリポジトリの情報の表示について説明しています。

第 5 章 システム運用

ログイン、ログアウト、および HCSC サーバの運用について説明しています。

第 6 章 実行履歴の管理

システム運用時のプロセスインスタンスの実行履歴の管理方法について説明しています。

第 7 章 障害対策

システム構築や運用時に発生する障害に対して取得できる情報、および障害の対処方法などについて説明しています。

第 8 章 運用環境で使用する画面

Cosminexus サービスプラットフォームの運用環境で使用する画面について説明しています。

第 9 章 定義ファイル

Cosminexus サービスプラットフォームの運用環境および実行環境で使用する定義ファイルの文法について説明しています。

第 10 章 コマンド

Cosminexus サービスプラットフォームの運用環境および実行環境で使用するコマンドの文法について説明しています。

第 11 章 メッセージ

Cosminexus サービスプラットフォームで出力されるメッセージについて説明しています。

付録 A Cosminexus Service Coordinator 管理者の変更方法

Cosminexus Service Coordinator 管理者の変更方法について説明しています。

付録 B 画面とコマンドで実施できる内容

画面とコマンドで実施できる内容の差異について説明しています。

付録 C データベースのテーブルの情報

実行履歴の管理や実行環境の設定をする場合のテーブルやインデックスの情報などについて説明しています。

付録 D SQL スクリプトファイルの設定

SQL スクリプトファイルの設定方法について説明しています。

付録 E HCSC サーバのリソース稼働情報の統計情報

HCSC サーバのリソース稼働情報の統計情報を参照する方法について説明しています。

付録 F JP1 イベント通知をするメッセージ

Cosminexus サービスプラットフォームで出力されるメッセージと JP1 イベント通知の有無について説明しています。

付録 G 下位バージョンからのリポジトリの移行

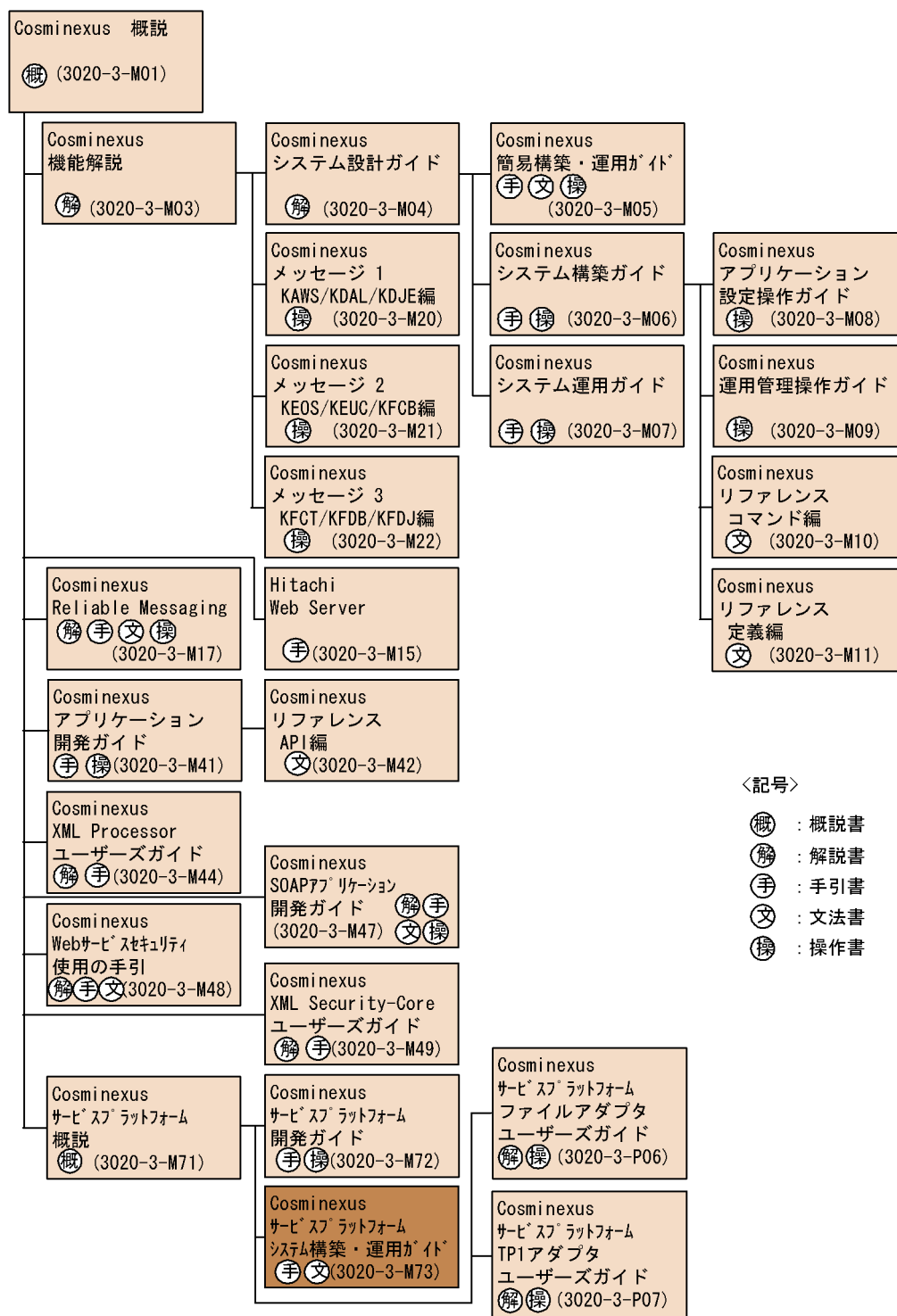
旧バージョンの Cosminexus サービスプラットフォームで構築した開発環境，運用環境および実行環境をバージョンアップし，リポジトリを新バージョンに移行する方法について説明しています。

付録 H 用語解説

このマニュアルで使用している用語の意味について説明しています。

関連マニュアル

Cosminexus のマニュアル体系について，次の図に示します。



それぞれのマニュアルで説明している内容の概要を次に示します。

Cosminexus 概説

Cosminexus の製品概要について説明しています。

Cosminexus 機能解説

Cosminexus の実行環境で提供する機能について説明しています。

Cosminexus システム設計ガイド

システム設計時に、システムの目的に応じたシステム構成や運用方法を検討するための指針について説明しています。また、チューニングの方法についても説明しています。

Cosminexus 簡易構築・運用ガイド

Smart Composer 機能を使用して、システムを構築・運用する手順、および構築・運用時に使用するコマンドやファイルについて説明しています。

Cosminexus システム構築ガイド

運用管理ポータル、またはファイル編集とコマンド実行によって、システムを構築する手順について説明しています。

Cosminexus システム運用ガイド

Cosminexus を使用したシステムの運用方法について説明しています。

Cosminexus アプリケーション設定操作ガイド

Cosminexus Component Container のサーバ管理コマンド、および Server Plug-in を使用した操作について説明しています。

Cosminexus 運用管理操作ガイド

Cosminexus Component Container の運用管理ポータルの画面および画面操作について説明しています。

Cosminexus リファレンス コマンド編

Cosminexus のシステムを構築・運用するときに使用するコマンドについて説明しています。

Cosminexus リファレンス 定義編

Cosminexus のシステムを構築・運用するとき、またはアプリケーションを開発するときに、使用するファイルの形式について説明しています。

Cosminexus メッセージ 1 KAWS / KDAL / KDJE 編, Cosminexus メッセージ 2 KEOS / KEUC / KFCB 編, Cosminexus メッセージ 3 KFCT / KFDB / KFDJ 編

Cosminexus で出力されるメッセージについて説明しています。

Hitachi Web Server

Hitachi Web Server (Web サーバ) の構築、管理方法について説明しています。

Cosminexus Reliable Messaging

Cosminexus RM を使用したメッセージの非同期通信によるアプリケーションの連携方法について説明しています。

Cosminexus アプリケーション開発ガイド

はじめに

構築した Cosminexus のシステムで動作させる、アプリケーションの開発方法について説明しています。

Cosminexus リファレンス API 編

アプリケーションの開発で使用する API およびタグについて説明しています。

Cosminexus XML Processor ユーザーズガイド

Cosminexus XML Processor が提供する XML パーサ・XSLT トランスフォーマの機能、作成方法、および使用方法について説明しています。

Cosminexus SOAP アプリケーション開発ガイド

Cosminexus が提供する機能を利用して、SOAP アプリケーションを開発、実行する方法について説明しています。

Cosminexus Web サービスセキュリティ 使用の手引

Web サービスセキュリティ機能について説明しています。

Cosminexus XML Security - Core ユーザーズガイド

XML 署名データの生成・検証機能、および XML 暗号化・復号化機能について説明しています。

Cosminexus サービスプラットフォーム 概説

Cosminexus サービスプラットフォームで SOA を適用したシステムを実現するための機能、および開発、運用の概要について説明しています。

Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド

Cosminexus サービスプラットフォームを利用したシステムの開発について説明しています。

Cosminexus サービスプラットフォーム ファイルアダプタ ユーザーズガイド

Cosminexus サービスプラットフォーム ファイルアダプタの機能、ファイルアダプタの作成および運用について説明しています。

Cosminexus サービスプラットフォーム TP1 アダプタ ユーザーズガイド

Cosminexus サービスプラットフォーム TP1 アダプタの機能、アダプタの作成および運用について説明しています。

また、マニュアル体系図に示したマニュアル以外で、このマニュアルと関連するマニュアルを次に示します。必要に応じてお読みください。

- TP1/Server Base Enterprise Option 使用の手引 (3000-3-982)
- uCosminexus TP1 Gateway ユーザーズガイド (3000-3-989)
- JP1 Version 8 JP1/Integrated Management - Manager システム構築・運用ガイド (3020-3-K01)
- スケーラブルデータベースサーバ HiRDB Version 7 解説 (Windows(R) 用)(3020-6-271)
- スケーラブルデータベースサーバ HiRDB Version 7 解説 (UNIX(R) 用)(3000-6-271)
- スケーラブルデータベースサーバ HiRDB Version 8 解説 (Windows(R) 用)(3020-6-351)
- スケーラブルデータベースサーバ HiRDB Version 8 解説 (UNIX(R) 用)(3000-6-351)

- スケーラブルデータベースサーバ HiRDB Version 7 システム導入・設計ガイド (Windows(R) 用)(3020-6-272)
- スケーラブルデータベースサーバ HiRDB Version 7 システム導入・設計ガイド (UNIX(R) 用)(3000-6-272)
- スケーラブルデータベースサーバ HiRDB Version 8 システム導入・設計ガイド (Windows(R) 用)(3020-6-352)
- スケーラブルデータベースサーバ HiRDB Version 8 システム導入・設計ガイド (UNIX(R) 用)(3000-6-352)
- スケーラブルデータベースサーバ HiRDB Version 7 システム定義 (Windows(R) 用) (3020-6-273)
- スケーラブルデータベースサーバ HiRDB Version 7 システム定義 (UNIX(R) 用) (3000-6-273)
- スケーラブルデータベースサーバ HiRDB Version 8 システム定義 (Windows(R) 用) (3020-6-353)
- スケーラブルデータベースサーバ HiRDB Version 8 システム定義 (UNIX(R) 用) (3000-6-353)
- スケーラブルデータベースサーバ HiRDB Version 7 システム運用ガイド (Windows(R) 用) (3020-6-274)
- スケーラブルデータベースサーバ HiRDB Version 7 システム運用ガイド (UNIX(R) 用) (3000-6-274)
- スケーラブルデータベースサーバ HiRDB Version 8 システム運用ガイド (Windows(R) 用) (3020-6-354)
- スケーラブルデータベースサーバ HiRDB Version 8 システム運用ガイド (UNIX(R) 用) (3000-6-354)
- スケーラブルデータベースサーバ HiRDB Version 7 コマンドリファレンス (Windows(R) 用)(3020-6-275)
- スケーラブルデータベースサーバ HiRDB Version 7 コマンドリファレンス (UNIX(R) 用) (3000-6-275)
- スケーラブルデータベースサーバ HiRDB Version 8 コマンドリファレンス (Windows(R) 用)(3020-6-355)
- スケーラブルデータベースサーバ HiRDB Version 8 コマンドリファレンス (UNIX(R) 用) (3000-6-355)
- スケーラブルデータベースサーバ HiRDB Version 7 UAP 開発ガイド (Windows(R) 用) (3020-6-276)
- スケーラブルデータベースサーバ HiRDB Version 7 UAP 開発ガイド (UNIX(R)/Windows(R) 用)(3000-6-276)
- スケーラブルデータベースサーバ HiRDB Version 8 UAP 開発ガイド (3020-6-356)
- スケーラブルデータベースサーバ HiRDB Version 7 SQL リファレンス (Windows(R) 用) (3020-6-277)
- スケーラブルデータベースサーバ HiRDB Version 7 SQL リファレンス (UNIX(R)/

はじめに

Windows(R)用)(3000-6-277)

- スケーラブルデータベースサーバ HiRDB Version 8 SQL リファレンス (3020-6-357)

なお、このマニュアルでは、次のマニュアルについて、対象 OS およびバージョン番号を省略して表記しています。マニュアルの正式名称とこのマニュアルでの表記を次の表に示します。

正式名称	このマニュアルでの表記
JP1 Version 8 JP1/Integrated Management - Manager システム構築・運用ガイド	JP1/Integrated Management - Manager システム構築・運用ガイド
スケーラブルデータベースサーバ HiRDB Version 8 解説 (Windows(R)用)	HiRDB 解説
スケーラブルデータベースサーバ HiRDB Version 8 解説 (UNIX(R)用)	
スケーラブルデータベースサーバ HiRDB Version 7 解説 (Windows(R)用)	
スケーラブルデータベースサーバ HiRDB Version 7 解説 (UNIX(R)用)	
スケーラブルデータベースサーバ HiRDB Version 8 システム導入・設計ガイド (Windows(R)用)	HiRDB システム導入・設計ガイド
スケーラブルデータベースサーバ HiRDB Version 8 システム導入・設計ガイド (UNIX(R)用)	
スケーラブルデータベースサーバ HiRDB Version 7 システム導入・設計ガイド (Windows(R)用)	
スケーラブルデータベースサーバ HiRDB Version 7 システム導入・設計ガイド (UNIX(R)用)	
スケーラブルデータベースサーバ HiRDB Version 8 システム定義 (Windows(R)用)	HiRDB システム定義
スケーラブルデータベースサーバ HiRDB Version 8 システム定義 (UNIX(R)用)	
スケーラブルデータベースサーバ HiRDB Version 7 システム定義 (Windows(R)用)	
スケーラブルデータベースサーバ HiRDB Version 7 システム定義 (UNIX(R)用)	
スケーラブルデータベースサーバ HiRDB Version 8 システム運用ガイド (Windows(R)用)	HiRDB システム運用ガイド
スケーラブルデータベースサーバ HiRDB Version 8 システム運用ガイド (UNIX(R)用)	
スケーラブルデータベースサーバ HiRDB Version 7 システム運用ガイド (Windows(R)用)	
スケーラブルデータベースサーバ HiRDB Version 7 システム運用ガイド (UNIX(R)用)	

正式名称	このマニュアルでの表記
スケーラブルデータベースサーバ HiRDB Version 8 コマンドリファレンス (Windows(R) 用)	HiRDB コマンドリファレンス
スケーラブルデータベースサーバ HiRDB Version 8 コマンドリファレンス (UNIX(R) 用)	
スケーラブルデータベースサーバ HiRDB Version 7 コマンドリファレンス (Windows(R) 用)	
スケーラブルデータベースサーバ HiRDB Version 7 コマンドリファレンス (UNIX(R) 用)	
スケーラブルデータベースサーバ HiRDB Version 8 UAP 開発ガイド	HiRDB UAP 開発ガイド
スケーラブルデータベースサーバ HiRDB Version 7 UAP 開発ガイド (Windows(R) 用)	
スケーラブルデータベースサーバ HiRDB Version 7 UAP 開発ガイド (UNIX(R)/Windows(R) 用)	
スケーラブルデータベースサーバ HiRDB Version 8 SQL リファレンス	HiRDB SQL リファレンス
スケーラブルデータベースサーバ HiRDB Version 7 SQL リファレンス (Windows(R) 用)	
スケーラブルデータベースサーバ HiRDB Version 7 SQL リファレンス (UNIX(R)/Windows(R) 用)	

読書手順

このマニュアルは、利用目的に合わせて章を選択して読むことができます。利用目的別にお読みいただくことをお勧めします。

マニュアルを読む目的	記述箇所
システム運用の概要、システム構成、および運用方針の設定方法について知りたい。	1 章
uCosminexus Service Platform などのインストールやインストール後の設定方法について知りたい。	2 章
システムのセットアップ、アンセットアップ、および HCSC サーバの定義について知りたい。また、テスト環境から本番環境へ移行する場合の手順について知りたい。	3 章
リポジトリの設定、エクスポートやインポート、およびリポジトリの情報の表示について知りたい。	4 章
ログイン、ログアウト、および HCSC サーバの運用について知りたい。	5 章
システム運用時のプロセスインスタンスの実行履歴の管理方法について知りたい。	6 章
システム構築や運用時に発生する障害に対して取得できる情報の種類、および障害の対処方法について知りたい。	7 章
Cosminexus サービスプラットフォームの運用環境で使用する画面について知りたい。	8 章

マニュアルを読む目的	記述箇所
Cosminexus サービスプラットフォームの運用環境および実行環境で使用する定義ファイルの文法について知りたい。	9 章
Cosminexus サービスプラットフォームの運用環境および実行環境で使用するコマンドの文法について知りたい。	10 章
Cosminexus サービスプラットフォームで出力されるメッセージについて知りたい。	11 章
Cosminexus Service Coordinator 管理者の変更方法について知りたい。	付録 A
画面とコマンドで実施できる内容の差異について知りたい。	付録 B
実行履歴の管理や実行環境の設定をする場合のテーブルやインデクスの情報などについて知りたい。	付録 C
SQL スクリプトファイルの設定方法について知りたい。	付録 D
HCSC サーバのリソース稼働情報の統計情報の参照方法について知りたい。	付録 E
Cosminexus サービスプラットフォームで出力されるメッセージの JP1 イベント通知の有無について知りたい。	付録 F
旧バージョンの Cosminexus サービスプラットフォームで構築した開発環境、運用環境および実行環境をバージョンアップする方法について知りたい。	付録 G
このマニュアルで使用している用語の意味について知りたい。	付録 H

このマニュアルでの表記

このマニュアルで使用している表記と、対応する製品名を次に示します。

表記		製品名
Eclipse		Eclipse Platform Runtime Binary 3.2.2 以降 (3.3 は対象外)
Excel		Microsoft(R) Office Excel
HiRDB または HiRDB サーバ	HiRDB/Single Server	HiRDB/Single Server Version 8
		HiRDB/Single Server Version 7
	HiRDB/Parallel Server	HiRDB/Parallel Server Version 8
		HiRDB/Parallel Server Version 7
JP1		JP1 関連製品
JP1/Base		Job Management Partner 1/Base
JP1/IM	JP1/IM - Manager	Job Management Partner 1/ Integrated Management - Manager
	JP1/IM - View	Job Management Partner 1/ Integrated Management - View
Microsoft Cluster Service		Microsoft(R) Cluster Service
Oracle	Oracle9i	Oracle9i

表記	製品名	
	Oracle9i R2	
	Oracle 10g	
	Oracle 10gR2	
TP1/EE	TP1/Server Base Enterprise Option	
UNIX	AIX	
	AIX 6L V6.1	
	AIX 5L V5.3 (5300-06 RMP)	
	AIX 5L V5.2 (5200-10 RMP)	
	Linux または Linux (x86 / AMD64 & Intel EM64T)	Red Hat Enterprise Linux AS 3 (x86)
		Red Hat Enterprise Linux AS 4 (x86)
		Red Hat Enterprise Linux ES 3 (x86)
		Red Hat Enterprise Linux ES 4 (x86)
		Red Hat Enterprise Linux AS 3 (AMD64 & Intel EM64T)
		Red Hat Enterprise Linux AS 4 (AMD64 & Intel EM64T)
		Red Hat Enterprise Linux ES 3 (AMD64 & Intel EM64T)
		Red Hat Enterprise Linux ES 4 (AMD64 & Intel EM64T)
		Red Hat Enterprise Linux 5 Advanced Platform (x86)
		Red Hat Enterprise Linux 5 (x86)
Red Hat Enterprise Linux 5 Advanced Platform (AMD/Intel 64)		
Red Hat Enterprise Linux 5 (AMD/ Intel 64)		
Windows Server 2003	Microsoft(R) Windows Server(R) 2003, Standard Edition 日本語版	
	Microsoft(R) Windows Server(R) 2003, Enterprise Edition 日本語版	
Windows Server 2003 R2	Microsoft(R) Windows Server(R) 2003, Standard R2 Edition 日本語版	

表記	製品名
	Microsoft(R) Windows Server(R) 2003, Enterprise R2 Edition 日本語版
Windows Server 2003 (x64)	Microsoft(R) Windows Server(R) 2003 , Enterprise x64 Edition Operating System
	Microsoft(R) Windows Server(R) 2003 , Standard x64 Edition Operating System
Windows Server 2003 R2 (x64)	Microsoft(R) Windows Server(R) 2003 R2 , Enterprise x64 Edition Operating System
	Microsoft(R) Windows Server(R) 2003 R2 , Standard x64 Edition Operating System
Windows Vista	Microsoft(R) Windows Vista(R) Business 日本語版
	Microsoft(R) Windows Vista(R) Enterprise 日本語版
	Microsoft(R) Windows Vista(R) Ultimate 日本語版
Windows XP	Microsoft(R) Windows(R) XP Professional Operating System

Windows Vista , Windows XP , Windows Server 2003 R2 (x64) , Windows Server 2003 (x64) , Windows Server 2003 R2 , Windows Server 2003 を総称して Windows と表記することがあります。

このマニュアルで使用している表記と、対応する Cosminexus の機能名を次に示します。

表記	Cosminexus の機能名
Cosminexus RM	Cosminexus Reliable Messaging
CTM	Cosminexus Component Transaction Monitor
HCSC	Cosminexus Service Coordinator
HCSC-Business Process , ビジネスプロセス基盤 , または BP 基盤	Cosminexus Service Coordinator - Business Process
HCSC-Data Transform またはデータ変換基盤	Cosminexus Service Coordinator - Data Transform
HCSC-DB Adapter または DB アダプタ連携基盤	Cosminexus Service Coordinator - Data Base Adapter
HCSC-Manager または HCSC-MNG	Cosminexus Service Coordinator - Manager
HCSC-Messaging , HCSC-MSG , またはメッセージング基盤	Cosminexus Service Coordinator - Messaging

表記	Cosminexus の機能名
Management Server	Cosminexus Management Server
PRF	Cosminexus Performance Tracer
Server Plug-in	Cosminexus Server Plug-in
TPBroker	Cosminexus TPBroker

このマニュアルで使用している表記と、対応する Java 関連用語を次に示します。

表記	Java 関連用語
EAR	Enterprise ARchive
EJB または Enterprise JavaBeans	Enterprise JavaBeans TM
J2EE	Java TM 2 Platform, Enterprise Edition
J2SE	Java TM 2 Platform, Standard Edition
JAR	Java TM Archive
Java	Java TM
JDBC	JDBC TM
	Java TM Database Connectivity
JMS	Java TM Message Service
JNDI	Java Naming and Directory Interface TM

適用 OS の違いによる機能相違点の表記

このマニュアルは、適用 OS が Windows , AIX , および Linux の製品に対応するため、OS の種類によって、機能が異なる場合があります。OS ごとの違いがある場合は、次に示す表記を使用して、それぞれの説明に OS 名を明記しています。

表記	意味
Windows の場合	Windows に該当する表記です。
AIX の場合	AIX に該当する表記です。
Linux の場合	Linux に該当する表記です。
UNIX の場合	UNIX (AIX および Linux) に該当する表記です。

パスの表記について

このマニュアルでは、原則として Windows のパスの区切り (「¥」) を使用しています。UNIX の場合は、「¥」を「/」に置き換えてお読みください。

このマニュアルで使用している略語

このマニュアルで使用している英略語を次に示します。

英略語	英字での表記
API	<u>A</u> pplication <u>P</u> rogramming <u>I</u> nterface
ASCII	<u>A</u> merican <u>S</u> tandard <u>C</u> ode for <u>I</u> nformation <u>I</u> nterchange
BMT	<u>B</u> ean <u>M</u> anaged <u>T</u> ransaction
BP	<u>B</u> usiness <u>P</u> rocess
BPEL	<u>B</u> usiness <u>P</u> rocess <u>E</u> xecution <u>L</u> anguage
CMT	<u>C</u> ontainer <u>M</u> anaged <u>T</u> ransaction
CORBA	<u>C</u> ommon <u>O</u> bject <u>R</u> equest <u>B</u> roker <u>A</u> rchitecture
CSV	<u>C</u> omma <u>S</u> eparated <u>V</u> alue
DB	<u>D</u> atabase
DBMS	<u>D</u> atabase <u>M</u> anagement <u>S</u> ystem
DOM	<u>D</u> ocument <u>O</u> bject <u>M</u> odel
DTD	<u>D</u> ocument <u>T</u> ype <u>D</u> efinition
GMT	<u>G</u> reenwich <u>M</u> ean <u>T</u> ime
HTML	<u>H</u> yper <u>T</u> ext <u>M</u> arkup <u>L</u> anguage
HTTP	<u>H</u> yper <u>T</u> ext <u>T</u> ransfer <u>P</u> rotocol
HTTPS	<u>H</u> yper <u>T</u> ext <u>T</u> ransfer <u>P</u> rotocol <u>S</u> ecurity
IOP	<u>I</u> nternet <u>I</u> nter- <u>O</u> rb <u>P</u> rotocol
JIS	<u>J</u> apanese <u>I</u> ndustrial <u>S</u> tandards
LAN	<u>L</u> ocal <u>A</u> rea <u>N</u> etwork
MBean	<u>M</u> anaged <u>B</u> ean
MDB	<u>M</u> essage- <u>D</u> riven <u>B</u> ean
NTP	<u>N</u> etwork <u>T</u> ime <u>P</u> rotocol
OS	<u>O</u> perating <u>S</u> ystem
RDB	<u>R</u> elational <u>D</u> atabase
RMI	<u>R</u> emote <u>M</u> ethod <u>I</u> nvocation
SOA	<u>S</u> ervice <u>O</u> riented <u>A</u> rchitecture
SOAP	<u>S</u> imple <u>O</u> bject <u>A</u> ccess <u>P</u> rotocol
SQL	<u>S</u> tructured <u>Q</u> uery <u>L</u> anguage
TSV	<u>T</u> ab <u>S</u> eparated <u>V</u> alues
URL	<u>U</u> niform <u>R</u> esource <u>L</u> ocator
UTF	<u>U</u> CS <u>T</u> ransformation <u>F</u> ormat
VM	<u>V</u> irtual <u>M</u> achine
W3C	<u>W</u> orld <u>W</u> ide <u>W</u> eb <u>C</u> onsortium

英略語	英字での表記
WS-R	<u>W</u> eb <u>S</u> ervices <u>R</u> eliability
WSDL	<u>W</u> eb <u>S</u> ervice <u>D</u> escription <u>L</u> anguage
XML	<u>E</u> xtensible <u>M</u> arkup <u>L</u> anguage
XPath	<u>X</u> ML <u>P</u> ath Language

このマニュアルで使用している記号

! 注意事項

間違いやすい点，および間違えるとトラブルが発生するような項目について説明しています。

ポイント

その説明の要点について説明しています。

参考

補足的な情報を説明しています。

このマニュアルの図中で使用している記号

このマニュアルの図中で使用する記号を、次のように定義します。

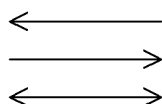
●マシン



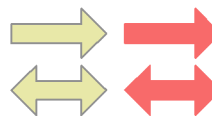
●入出力の動作



●制御の流れ



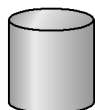
●データ、情報の流れ



●プログラム



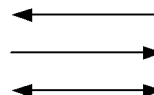
●リポジトリ、データベース



●工程、作業項目の流れ



●その他の流れ



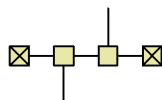
●サーバ



●ネットワーク



●LAN



●CD-ROM



このマニュアルの画面や操作の説明で使用している記号

このマニュアルでは、次に示す記号を使用して画面や操作を説明しています。

記号	意味
[]	ダイアログ名、キー名、メニュー項目名、ボタン名、および画面に表示されている項目名に使用します。
[] - []	- の前に示したメニューから、- の後ろのメニューを選択することを表します。
< >	< > 内の名称がユーザの環境によって異なることを表します。
「 」	入力値、可変値、またはメッセージなどのユーザが入力する内容を表します。
+	+ の前のキーを押したまま、後ろのキーを押すことを表します。 (例) [Ctrl] キー + [V] キー

文法の説明で使用する記号

このマニュアルの文法の説明で使用する記号について次に示します。

記号	意味
	横に並べられた複数の項目に対する項目間の区切りを示し、「または」を意味します。 (例) A B A または B を指定することを示します。

記号	意味
{ }	この記号で囲まれている複数の項目のうちから一つを選択することを示します。項目が横に並べられ、記号 で区切られている場合は、そのうちの一つを選択します。 (例) {A B C} A, B または C のどれかを指定することを示します。
[]	この記号で囲まれている項目は省略してもよいことを示します。 (例) [A] 「何も指定しない」か「A を指定する」ことを示します。
< >	この記号で囲まれている項目は、該当する要素を指定することを示します。 (例) <プロパティ> プロパティを記述します。
...	記述が省略されていることを示します。 (例) ABC... ABC の後ろに記述があり、その記述が省略されていることを示します。
~	この記号の前に示された項目が、記号 ~ に続く < >, (()), << >> などの規則に従うことを示します。
< >	項目を記述するときに従わなければならない構文要素を示します。構文要素については、「このマニュアルで使用している構文要素」を参照してください。
(())	項目で指定できる値の範囲を示します。
<< >>	項目を省略したときに、システムが仮定する標準値を示します。

このマニュアルで使用している構文要素

このマニュアルで使用する構文要素の種類と意味を次に示します。

種類	定義
英字	A ~ Z a ~ z
英小文字	a ~ z
英大文字	A ~ Z
数字	0 ~ 9
英数字	A ~ Z a ~ z 0 ~ 9
記号	_ . -
文字列	任意の文字の配列

常用漢字以外の漢字の使用について

このマニュアルでは、常用漢字を使用することを基本としていますが、次に示す用語については、常用漢字以外の漢字を使用しています。

宛先(あてさき) 個所(かしよ) 桁(けた) 進捗(しんちよく) 貼り付け(はりつけ) 汎用(はんよう) 必須(ひつす) 閉塞(へいそく)

KB (キロバイト) などの単位表記について

1KB (キロバイト), 1MB (メガバイト), 1GB (ギガバイト), 1TB (テラバイト) はそれぞれ $1,024$ バイト, $1,024^2$ バイト, $1,024^3$ バイト, $1,024^4$ バイトです。

目次

1	SOA に基づいたシステム運用の概要	1
1.1	概要	2
1.1.1	Cosminexus サービスプラットフォームの全体像	2
1.1.2	Cosminexus サービスプラットフォームを構成する環境	3
1.1.3	開発環境・実行環境・運用環境の関係	4
1.1.4	開発環境とテスト環境との関係	6
1.1.5	テスト環境と本番環境との関係	7
1.2	開発から実運用までの流れ	14
1.3	システム全体と運用環境・実行環境の関係	23
1.4	動作環境	27
1.4.1	前提 OS	27
1.4.2	前提となるデータベース	28
1.4.3	ソフトウェアの構成	28
1.5	運用方針の決定	33
1.5.1	単一の HCSC サーバによる運用	33
1.5.2	複数の HCSC サーバによる運用	34
1.5.3	複数の HCSC サーバでロードバランスクラスタを構成する運用	35
1.5.4	複数の HCSC サーバで HA クラスタを構成する運用	37
1.5.5	複数の HCSC サーバを連携させる運用	38
1.5.6	クラスタ単位で HCSC サーバを連携させる運用	39
2	システムの構築	41
2.1	インストールとアンインストール	42
2.1.1	インストールの流れ	42
2.1.2	uCosminexus Service Platform および uCosminexus Operator のインストール	44
2.1.3	Eclipse への HCSC-Manager Plug-in の組み込み	47
2.1.4	環境設定	48
2.1.5	HCSC-Manager を使用するための Management Server の設定	48
2.1.6	アンインストール	51
2.2	構成の形態と選択	55
2.3	実行環境に関する設定	57
2.3.1	HCSC サーバ構成定義ファイルを設定する	57
2.3.2	HCSC サーバセットアップ定義ファイルを設定する	59

2.3.3	連携セットアップ定義ファイルを設定する	63
2.3.4	HCSC サーバランタイム定義ファイルを設定する	64
2.3.5	ユーザ定義受付ランタイム定義ファイルを設定する	67
2.3.6	データベースのテーブル容量を見積もる	68
2.3.7	データベースの領域への配置	73
2.3.8	変換テーブルを登録する	74
2.3.9	データベースと Cosminexus RM の両方を使用しない場合の実行環境に関する設定	75
2.3.10	データベースを使用して Cosminexus RM を使用しない場合の実行環境に関する設定	84
2.4	運用環境に関する設定	94
2.4.1	カスタマイズする	94
2.4.2	ユーザ権限を設定する	95
2.4.3	HCSC-Manager コマンド共通項目を設定する	98
2.5	HCSC サーバをロードバランスクラスタ構成にする場合の環境構築	99
2.5.1	ロードバランスクラスタ構成時の環境構築	99
2.5.2	ロードバランスクラスタ構成時の実行環境のセットアップ	105
2.6	HCSC サーバを HA クラスタ構成にする場合の環境構築	109
2.6.1	HA クラスタ構成時の環境構築	109
2.6.2	HA クラスタ構成時の実行環境のセットアップ	114
2.7	JP1 連携機能を使用する場合の環境構築	119
2.7.1	JP1 連携の設定の流れ	120
2.7.2	Cosminexus サービスプラットフォームの JP1 イベント発行の設定	121
2.7.3	JP1/Base のイベントサーバ名の設定	122
2.7.4	JP1/Base の構成定義の作成	123
2.7.5	メッセージマッピングファイルの編集	124
3	システムのセットアップとアンセットアップ	127
3.1	システムのセットアップ	128
3.1.1	システムのセットアップの流れ	128
3.1.2	実行環境に必要なソフトウェアの設定	130
3.1.3	HCSC サーバをセットアップする	154
3.1.4	HCSC サーバの定義情報を設定する	157
3.1.5	HCSC サーバの定義内容を確認する	158
3.1.6	連携をセットアップする	159
3.1.7	サービス情報を変更する	161
3.1.8	サービス情報を確認する	163

3.1.9	サービスアダプタを配備する	163
3.1.10	ビジネスプロセスを配備する	166
3.1.11	ユーザ定義受付を配備する	168
3.1.12	ユーザ定義受付の定義情報を設定する	170
3.1.13	ユーザ定義受付の定義情報を確認する	171
3.1.14	セットアップ後の内容を確認・変更する	172
3.1.15	データベースと Cosminexus RM の両方を使用しない場合のシステムの セットアップ	173
3.1.16	データベースを使用して Cosminexus RM を使用しない場合のシステムの セットアップ	174
3.2	システムのアンセットアップ	181
3.2.1	サービスアダプタを削除する	181
3.2.2	ビジネスプロセスを削除する	183
3.2.3	ユーザ定義受付を削除する	185
3.2.4	連携をアンセットアップする	187
3.2.5	HCSC サーバをアンセットアップする	188
3.3	テスト環境から本番環境への移行手順	190
3.3.1	テスト環境と本番環境でデータベースと Cosminexus RM の使用有無が同じ場合の 移行手順	190
3.3.2	データベースと Cosminexus RM の両方を使用する環境から両方使用しない環境に 移行する場合の移行手順	192
3.3.3	データベースと Cosminexus RM の両方を使用しない環境から両方使用する環境に 移行する場合の移行手順	194
3.3.4	データベースと Cosminexus RM の両方を使用する環境からデータベースを使用して Cosminexus RM を使用しない環境に移行する場合の移行手順	196
3.3.5	データベースと Cosminexus RM の両方を使用しない環境からデータベースを使用 して Cosminexus RM を使用しない環境に移行する場合の移行手順	199

4 リポジトリの管理 203

4.1	リポジトリの概要	204
4.2	リポジトリのエクスポート	207
4.3	リポジトリのインポート	208
4.4	リポジトリの情報の参照	211
4.5	リポジトリの差分情報の参照	212

5 システム運用 213

5.1	HCSC サーバのオペレーションをするための準備	214
-----	--------------------------	-----

5.1.1	ログインする	214
5.1.2	ログアウトする	215
5.2	HCSC サーバのオペレーション運用	216
5.2.1	運用の流れ	216
5.2.2	データベースを起動する	220
5.2.3	PRF を起動する	221
5.2.4	HCSC サーバを起動する	221
5.2.5	Hitachi Web Server を起動する	224
5.2.6	サービスアダプタを開始する	225
5.2.7	ビジネスプロセスを開始する	228
5.2.8	ユーザ定義受付を開始する	231
5.2.9	連携受付を開始する	235
5.2.10	連携を開始する	237
5.2.11	標準受付を開始する	239
5.2.12	データベースの状態を確認する	242
5.2.13	PRF の状態を確認する	242
5.2.14	Hitachi Web Server の状態を確認する	243
5.2.15	Cosminexus Manager の状態を確認する	243
5.2.16	HCSC サーバのセットアップ情報を確認する	244
5.2.17	HCSC サーバの情報を確認する	245
5.2.18	HCSC サーバのリソース稼働情報を確認する	249
5.2.19	連携情報を確認する	250
5.2.20	サービスアダプタの情報を確認する	251
5.2.21	ビジネスプロセスの情報を確認する	255
5.2.22	ユーザ定義受付の情報を確認する	258
5.2.23	HCSC サーバの定義を変更する	262
5.2.24	ユーザ定義受付の定義情報を変更する	262
5.2.25	HCSC コンポーネントの構成を変更する	264
5.2.26	サービス部品の接続先を変更する	265
5.2.27	流量制御値を変更する	267
5.2.28	サービス部品呼び出しの通信タイムアウト値を変更する	268
5.2.29	標準受付を停止する	270
5.2.30	連携を停止する	273
5.2.31	連携受付を停止する	275
5.2.32	ユーザ定義受付を停止する	278
5.2.33	サービスアダプタを停止する	281
5.2.34	ビジネスプロセスを停止する	284

5.2.35	Hitachi Web Server を停止する	287
5.2.36	HCSC サーバを停止する	287
5.2.37	PRF を停止する	291
5.2.38	データベースを停止する	291
5.3	クラスタ構成時の運用	292
5.3.1	ロードバランスクラスタ構成での運用	292
5.3.2	HA クラスタ構成での運用	299
5.4	HCSC サーバのサービス部品を呼び出す流れ	301
5.4.1	サービス部品呼び出しの基本的な流れ	301
5.4.2	Web サービス (SOAP 通信) を使ったサービス呼び出し	332
5.4.3	SessionBean を使ったサービス呼び出し	337
5.4.4	MDB (WS-R) を使ったサービス部品呼び出し	342
5.4.5	MDB (DB キュー) を使ったサービス部品呼び出し	357
5.5	ビジネスプロセスを使った運用	370
5.5.1	ビジネスプロセスの仕組み	370
5.5.2	永続化するビジネスプロセスと永続化しないビジネスプロセス	378
5.5.3	ビジネスプロセスの再実行	380
5.6	標準プロトコル以外のシステムとの接続	384
5.6.1	データベースとの接続	384
5.6.2	OpenTP1 との接続	386
5.6.3	Object Wrapper システムとの接続	390
5.6.4	他社 ERP パッケージとの接続	391
5.6.5	ファイルを扱うシステムとの接続	392

6

実行履歴の管理	395	
6.1	プロセスインスタンスの実行履歴の管理	396
6.1.1	プロセスインスタンスの実行履歴を利用する	396
6.1.2	プロセスインスタンスの実行履歴を検索する	397
6.1.3	プロセスインスタンスの実行履歴の詳細情報を取得する	408
6.1.4	プロセスインスタンスの実行履歴を削除する	415
6.1.5	プロセスインスタンスを再実行する	419
6.2	電文の実行履歴の管理	424
6.2.1	電文の実行履歴の概要	424
6.2.2	データベースに取得する電文の実行履歴を設定する	432
6.2.3	電文の実行履歴を利用する	434
6.2.4	電文の実行履歴を表示する	437

6.2.5	電文の実行履歴を削除する	445
6.3	実行履歴情報テーブルの管理	448
6.3.1	実行履歴情報テーブルのバックアップを取得する	448
6.3.2	実行履歴情報テーブルのバックアップ取得の運用	449
7	障害対策	453
7.1	障害対策の流れ	454
7.2	障害調査のために必要な情報	458
7.2.1	障害を調査するときに必要な情報	458
7.2.2	システム管理者または保守員に連絡するときに必要な情報	462
7.3	障害情報の取得	464
7.3.1	Cosminexus サービスプラットフォームが出力するログやトレースの取得方法	464
7.3.2	Cosminexus サービスプラットフォーム以外の前提製品が出力する障害情報の取得方法	467
7.3.3	トレースファイルの見積もり	481
7.3.4	ログおよびトレース取得時の注意事項	482
7.4	障害情報の種類	484
7.4.1	メッセージログ	484
7.4.2	リクエストトレース	485
7.4.3	性能解析トレース	490
7.4.4	保守用ログおよびトレース	504
7.5	システムのセットアップまたはアンセットアップ時の障害対策	507
7.5.1	実行環境に必要なソフトウェアの設定での障害調査	507
7.5.2	セットアップまたはアンセットアップ時の障害調査	508
7.5.3	HCSC サーバのセットアップおよびアンセットアップ時の回復方法	517
7.5.4	HCSC コンポーネントの配備および削除時の回復方法	522
7.6	オペレーション実行時の障害対策	525
7.6.1	コマンド操作や運用環境の画面操作での障害調査	525
7.7	サービス部品呼び出し要求時の障害対策	531
7.7.1	Web サービス (SOAP 通信) 実行時の障害対策	531
7.7.2	SessionBean 実行時の障害対策	567
7.7.3	MDB (WS-R) 実行時の障害対策	583
7.7.4	MDB (DB キュー) 実行時の障害対策	602
7.7.5	ユーザ電文に誤りがある場合の障害対策	617
7.7.6	システム全体の障害での障害調査	623
7.7.7	ビジネスプロセス実行時の障害対策	625

7.8	障害発生時の自動運用	629
7.8.1	JP1 連携機能を使用した障害の監視	629
7.8.2	Cosminexus サービスプラットフォームから通知する JP1 イベントの詳細情報	630
7.9	HCSC サーバ障害発生後の回復方法	633
7.9.1	HCSC サーバのシステム運用ができなくなった場合の回復方法	633
7.9.2	クラスタ構成時の回復方法	634
7.9.3	運用環境のバックアップと復旧	638
7.9.4	デッドロックが発生した場合の回復方法	641

8	運用環境で使用する画面	643
8.1	画面構成	644
8.2	基本情報ページ	647
8.3	定義情報ページ	654
8.4	稼働運用ページ	657
8.5	稼働確認ページ	668
8.6	履歴管理ページ	673

9	定義ファイル	681
	定義ファイルの種類	682
	定義ファイルの入力形式	683
	定義ファイルの文法の記述形式	684
	HCSC-Manager コマンド共通定義ファイル	685
	HCSC-Messaging コマンド共通定義ファイル	687
	HCSC サーバ構成定義ファイル	689
	HCSC サーバセットアップ定義ファイル	696
	連携セットアップ定義ファイル	715
	HCSC サーバランタイム定義ファイル	718
	ユーザ定義受付ランタイム定義ファイル	729
	HCSC-Manager 定義ファイル	730
	サービス情報変更定義ファイル	736
	SOAP Fault 動作定義ファイル	740

10	コマンド	743
	コマンドの種類	744

コマンドの入力形式	749
コマンドの文法の記述形式	751
cscapputil (アプリケーションの操作)	752
csccompoconfig (HCSC コンポーネントの定義)	755
csccompodeploy (HCSC コンポーネントの配備)	758
csccompostart (HCSC コンポーネントの開始)	760
csccompostop (HCSC コンポーネントの停止)	762
csccompoundeploy (配備済みの HCSC コンポーネントの削除)	764
cscconsetup (連携のセットアップ)	766
cscconunsetup (連携のアンセットアップ)	768
cscenvbackup (HCSC-Manager 環境のバックアップ)	770
cscenvrestore (HCSC-Manager 環境のリストア)	772
cscenvupdate (実行環境のバージョンアップ)	774
cscpasswd (ユーザの管理)	775
cscpidelete (プロセスインスタンスの実行履歴の削除)	779
cscpireexec (プロセスインスタンスの再実行)	783
cscpiselect (プロセスインスタンスの検索)	787
cscrcptnstart (標準受付およびユーザ定義受付の開始)	802
cscrcptnstop (標準受付およびユーザ定義受付の停止)	804
cscrepctl (インポート/エクスポート)	806
cscrepdiff (リポジトリ情報の差分の表示)	809
cscrepls (リポジトリ情報の表示)	812
cscresinfo (リソース稼働情報の表示)	824
cscstatus (状態表示)	828
cscsvctl (サービス情報の管理)	832
cscsvcls (サービス情報の表示)	835
cscsvconfig (HCSC サーバランタイムの定義)	838
cscsvsetup (HCSC サーバのセットアップ)	840
cscsvstart (HCSC サーバの起動)	842
cscsvstop (HCSC サーバの停止)	845
cscsvunsetup (HCSC サーバのアンセットアップ)	848
cscutil (各種操作)	850
csmdetelehistory (電文の実行履歴情報テーブルのレコードの削除)	857
csmlshistory (電文の実行履歴情報の表示)	860
csmlslocation (サービスアダプタまたはビジネスプロセスの情報の表示)	868

csmlsreception (ユーザ定義受付の情報の表示)	873
csmlsstate (HCSC サーバの状態の表示)	877

11 メッセージ	881
11.1 メッセージの種類と形式	882
11.1.1 メッセージの種類	882
11.1.2 メッセージの形式	882
11.2 KDEC00001 ~ KDEC19999 のメッセージ	884
11.2.1 KDEC00001 ~ KDEC00500	884
11.2.2 KDEC00501 ~ KDEC01000	894
11.2.3 KDEC01001 ~ KDEC01500	903
11.2.4 KDEC01501 ~ KDEC02000	910
11.2.5 KDEC02001 ~ KDEC02500	918
11.2.6 KDEC02501 ~ KDEC03000	919
11.2.7 KDEC03001 ~ KDEC03500	926
11.2.8 KDEC04501 ~ KDEC05000	933
11.2.9 KDEC05001 ~ KDEC05500	940
11.2.10 KDEC05501 ~ KDEC06000	953
11.2.11 KDEC06001 ~ KDEC06500	955
11.2.12 KDEC06501 ~ KDEC07000	960
11.2.13 KDEC07001 ~ KDEC07500	962
11.2.14 KDEC10001 ~ KDEC10500	964
11.2.15 KDEC10501 ~ KDEC11000	995
11.2.16 KDEC19901 ~ KDEC19999	995
11.3 KDEC20000 ~ KDEC39999 のメッセージ	997
11.3.1 KDEC20000 ~ KDEC34999	997
11.3.2 KDEC35000 ~ KDEC39999	1015
11.4 KDEC40000 ~ KDEC59999 のメッセージ	1019
11.5 KDEC60000 ~ KDEC79999 のメッセージ	1064
11.6 KEOS50000 ~ KEOS59999 のメッセージ	1092
11.6.1 KEOS50000 ~ KEOS50999	1092
11.6.2 KEOS52000 ~ KEOS52499	1154
11.6.3 KEOS52500 ~ KEOS52999	1200
11.6.4 KEOS53500 ~ KEOS54500	1236

付録	1257
付録 A Cosminexus Service Coordinator 管理者の変更方法	1258
付録 A.1 変更方法	1258
付録 A.2 注意事項	1259
付録 B 画面とコマンドで実施できる内容	1260
付録 C データベースのテーブルの情報	1263
付録 C.1 プロセスインスタンスの実行履歴の管理に関するテーブルの情報	1263
付録 C.2 電文の実行履歴の管理に関するテーブルの情報	1275
付録 C.3 実行環境の設定に関するテーブルの情報	1280
付録 D SQL スクリプトファイルの設定	1288
付録 E HCSC サーバのリソース稼働情報の統計情報	1292
付録 E.1 稼働情報ファイルの出力	1292
付録 E.2 統計情報の参照方法	1293
付録 E.3 HCSC サーバのリソースに対応する情報	1293
付録 E.4 リソースの稼働情報の種類	1294
付録 F JP1 イベント通知をするメッセージ	1296
付録 G 下位バージョンからのリポジトリの移行	1310
付録 G.1 移行の対象となるバージョン	1310
付録 G.2 新規にインストールする場合の移行手順	1311
付録 G.3 上書きインストールする場合の移行手順	1317
付録 G.4 ローリングアップデートの場合の移行手順	1321
付録 H 用語解説	1327
索引	1335

1

SOA に基づいたシステム運用の概要

この章では、Cosminexus サービスプラットフォームでのシステム運用の概要、システム構成、および運用方針の設定方法について説明します。

1.1 概要

1.2 開発から実運用までの流れ

1.3 システム全体と運用環境・実行環境の関係

1.4 動作環境

1.5 運用方針の決定

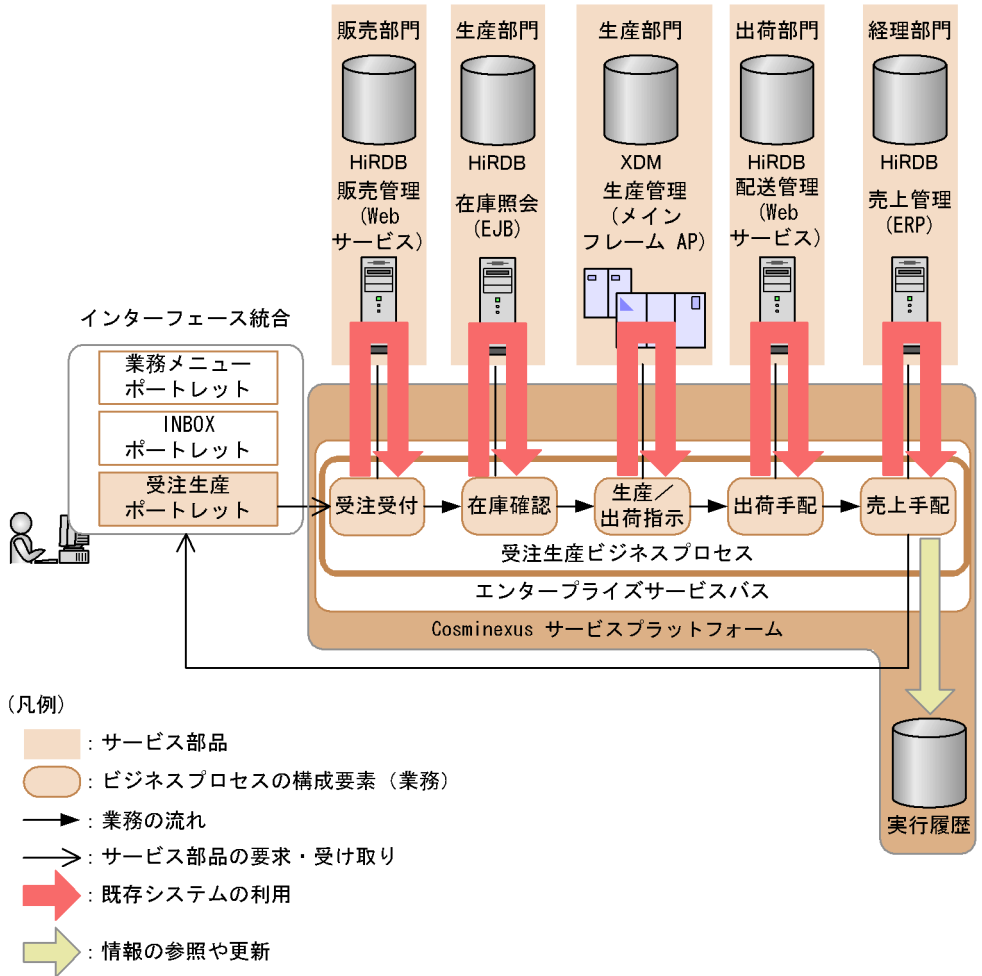
1.1 概要

ここでは、Cosminexus サービスプラットフォーム、およびシステム運用環境の概要について説明します。

1.1.1 Cosminexus サービスプラットフォームの全体像

Cosminexus サービスプラットフォームとは、SOA を実現するシステムの開発・運用の基盤となる製品です。統一された開発・運用環境でビジネスプロセスからサービスの接続までを構築・実行できます。そのため、SOA の利点を引き出して、サービスを柔軟に組み合わせて新しいシステムを迅速に構築・実行できます。この中心となるのが、サービスをプロセスで統合する「プロセス統合」です。プロセス統合を実現するのが、Cosminexus サービスプラットフォームです。Cosminexus サービスプラットフォームを使用したシステムの実現例を次の図に示します。

図 1-1 Cosminexus サービスプラットフォームを使用したシステムの実現例



1.1.2 Cosminexus サービスプラットフォームを構成する環境

Cosminexus サービスプラットフォームは、次に示す三つの環境から構成されています。

- **開発環境**
サービスを統合するために必要な HCSC コンポーネント（開発環境で作成するサービスアダプタ、ビジネスプロセス、およびユーザ定義受付の総称）を作成して、EAR ファイルにパッケージングするための環境です。
- **実行環境**
要求に応じたサービス部品やビジネスプロセスを呼び出して、業務を実行するための環境です。
- **運用環境**

1. SOA に基づいたシステム運用の概要

開発環境で作成した HCSC コンポーネントを、実行環境に配備したり、以降の運用操作を実行したりするための環境です。また、実行環境から情報を収集して、サービス部品の稼働状態を確認できます。

1.1.3 開発環境・実行環境・運用環境の関係

開発環境、実行環境、運用環境をそれぞれ異なるマシンに構築します。

開発環境には uCosminexus Service Architect と Eclipse を、実行環境には uCosminexus Service Platform を、運用環境には uCosminexus Operator と Eclipse をインストールします。

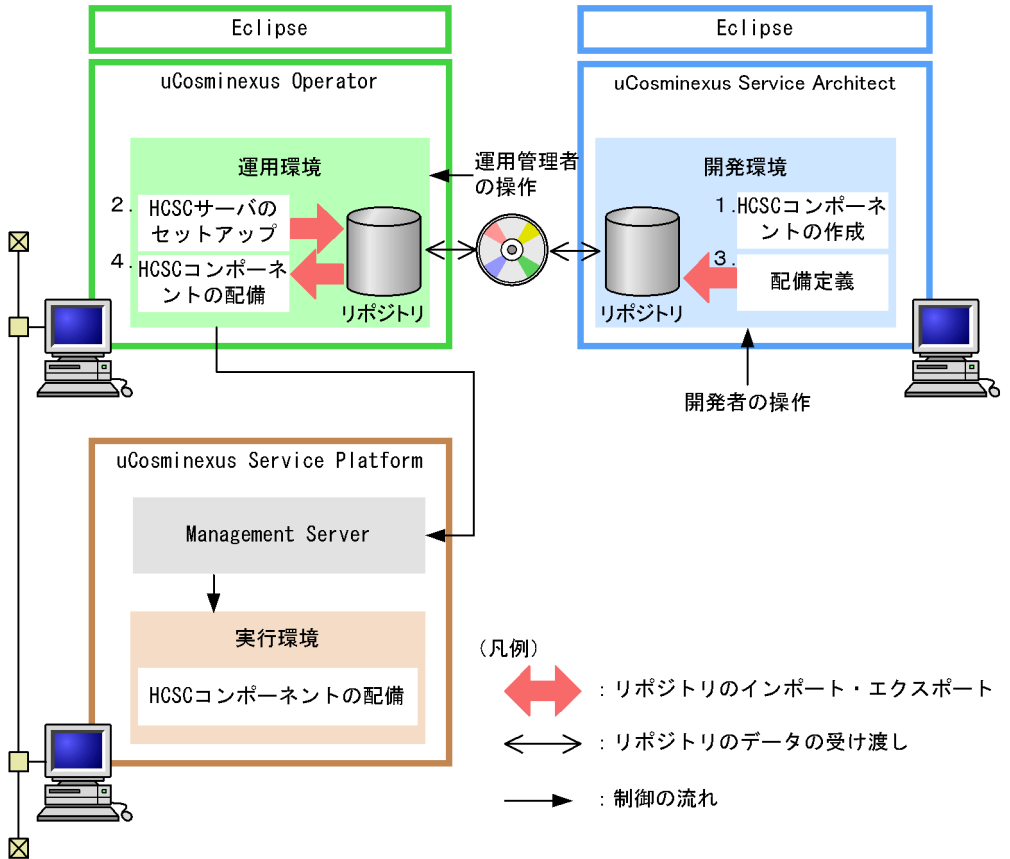
運用環境は、システム内に一つだけ構築します。また、運用の変更に対応するためにも運用環境と実行環境は、異なるマシンに構築しておくことを推奨します。

なお、運用環境から実行環境を操作する場合、Management Server を経由します。Management Server は、運用管理の対象となるサーバを一括管理するものです。HCSC サーバ（実行環境）を構築したマシンには、必ず Management Server を配置します。Management Server の機能の詳細については、マニュアル「Cosminexus 機能解説」の Management Server の機能に関する内容を参照してください。

また、運用環境から実行環境を操作するには、リポジトリというデータモデルが必要です。

Cosminexus サービスプラットフォームを構成する環境を次の図に示します。

図 1-2 Cosminexus サービスプラットフォームを構成する環境



これらの環境は、相互に連携してサービスの統合環境を実現しています。各環境は、環境構築後、次に示す流れを経て実際に運用できるようになります。

1. 開発環境で HCSC コンポーネントを作成します。
2. 運用環境で、HCSC サーバをセットアップし、システムの構成を定義します。
3. 運用環境からリポジトリをエクスポートし、運用環境で定義したシステム構成定義を開発環境にインポートします。このシステム構成定義を基に、システム構成のどこに配備するかを定義して更新します（配備定義）。
4. 開発環境で定義した配備定義を含むリポジトリをエクスポートし、運用環境にインポートします。この配備定義を基に、運用環境から実行環境にコンポーネントを配備します。

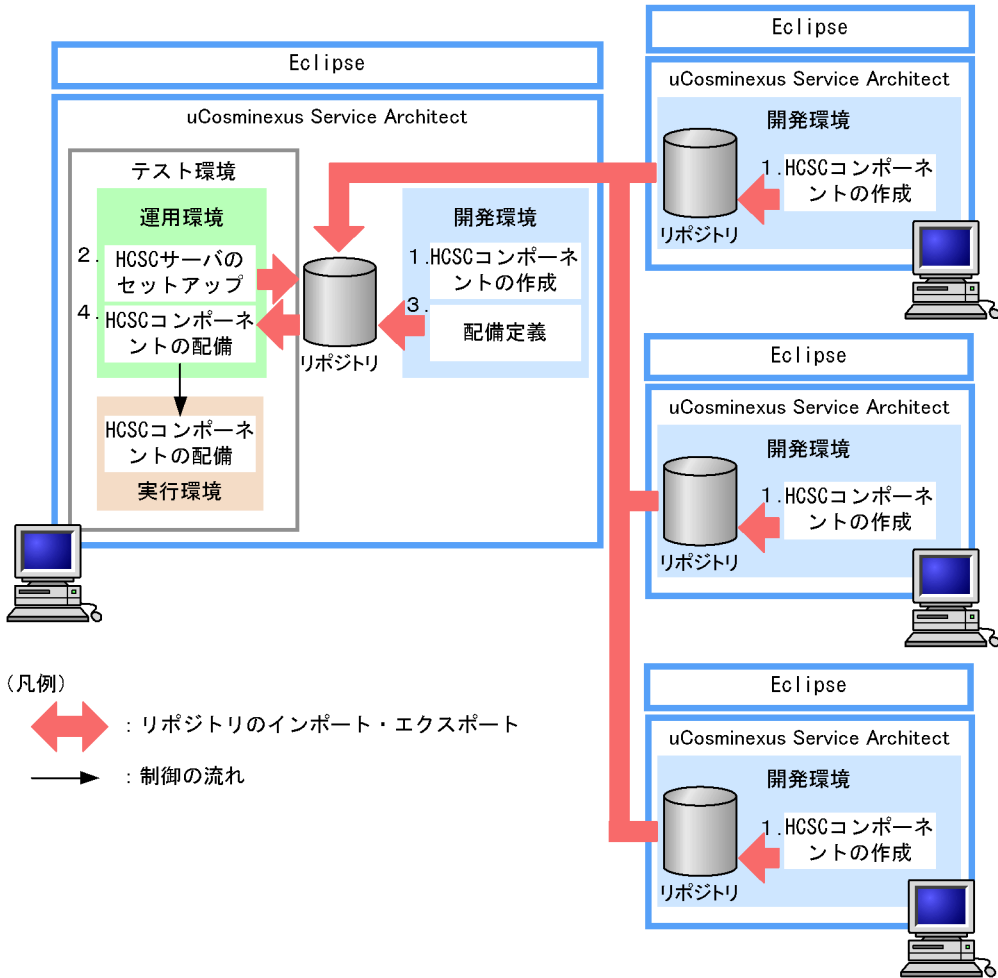
環境間の情報の受け渡しには、環境間で共有する情報を格納したリポジトリを使用します。リポジトリは媒体を経由して、ZIP ファイル形式で保存したり、読み込んだりします。

1. SOA に基づいたシステム運用の概要

1.1.4 開発環境とテスト環境との関係

開発環境には、複数台のマシンで作成した HCSC コンポーネントの情報を、リポジトリを通じて一つにまとめることができます。そして、開発環境と同じマシンに、作成した HCSC コンポーネントのテスト・デバッグを実施するためのテスト環境を構築できます。テスト環境は、テストに必要な簡易的な環境で、一括構築できます。開発環境とテスト環境との関係を次の図に示します。

図 1-3 開発環境とテスト環境との関係



開発環境とテスト環境も、図 1-3 に示す場合と同様の流れを経て運用します。

1. 開発環境で HCSC コンポーネントを作成します。
2. テスト環境を構築します (HCSC 簡易セットアップ機能を使うことで、HCSC サーバのセットアップや、システムの構成が定義できます)。テスト環境の構築時にも、本番用の実行環境を想定します。

3. テスト環境からリポジトリをエクスポートし、テスト環境で定義したシステム構成定義を開発環境にインポートします。このシステム構成定義を基に、システム構成のどこに配備するかを定義し更新します（配備定義）。
4. 開発環境で定義した配備定義を含むリポジトリをエクスポートし、テスト環境にインポートします。この配備定義を基に、テスト環境にコンポーネントを配備します。

この場合のような環境間の情報の受け渡しにも、リポジトリを使用します。開発環境とテスト環境は同じマシンに構築されるため、媒体を使用しないで情報を受け渡しできます。また、テスト環境で使用したリポジトリは、本番用のシステム構成定義に合わせて配備定義をし直し、本番用の運用環境および実行環境で使用します。

1.1.5 テスト環境と本番環境との関係

Cosminexus サービスプラットフォームでは、まず、テスト環境を構築してテストやデバッグを実施します。テスト環境の構築には、HCSC 簡易セットアップ機能を使用できます。

実際のシステム開発では、テスト環境のほかに本番で使用する環境を構築する必要があります。そのため、テスト環境で使用したリポジトリを、本番環境に移行する必要があります。

テスト環境で使用したリポジトリを本番環境へ移行するには、次の三つのケースがあります。

ケース 1

テスト環境と本番環境で、データベースと Cosminexus RM の使用有無を同じ設定で構築した場合

ケース 2

テスト環境と本番環境で、データベースと Cosminexus RM の使用有無を異なる設定で構築したが、テスト環境で使用したリポジトリをそのまま本番環境へ移行できる場合

ケース 3

テスト環境と本番環境で、データベースと Cosminexus RM の使用有無を異なる設定で構築したため、テスト環境で使用したリポジトリを本番環境のリポジトリに作成し直す場合

注

テスト環境で使用したリポジトリをそのまま本番環境へ移行できるかどうかについては、「4.3 リポジトリのインポート」を参照してください。

それぞれのケースに対応する、データベースと Cosminexus RM の使用有無の設定を次の表に示します。なお、データベースと Cosminexus RM の使用有無による構成の形態については、「2.2 構成の形態と選択」を参照してください。

1. SOA に基づいたシステム運用の概要

表 1-1 データベースと Cosminexus RM の使用有無の設定に対応したケース

テスト環境の設定	本番環境の設定		
	データベースと Cosminexus RM の両方を使用する	データベースを使用して Cosminexus RM を使用しない	データベースと Cosminexus RM の両方を使用しない
データベースと Cosminexus RM の両方を使用する	ケース 1	ケース 3	ケース 3
データベースを使用して Cosminexus RM を使用しない	ケース 2	ケース 1	ケース 3
データベースと Cosminexus RM の両方を使用しない	ケース 2	ケース 2	ケース 1

注 テスト環境と本番環境の設定で、通常のユーザが該当する設定です。

それぞれのケースによる移行の概要を次に説明します。

(1) テスト環境と本番環境でデータベースと Cosminexus RM の使用有無を同じ設定で構築した場合

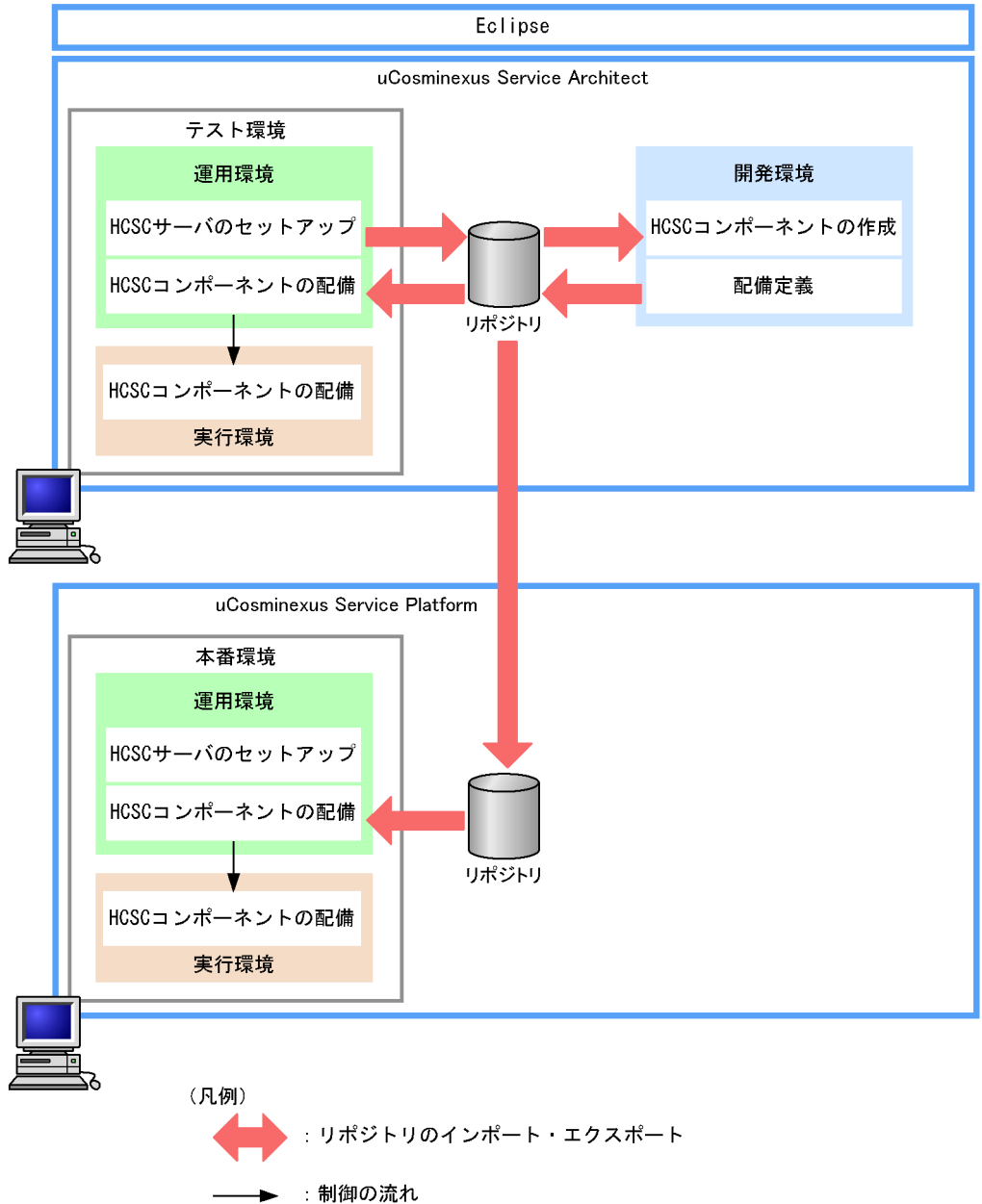
次のようにテスト環境と本番環境で、データベースと Cosminexus RM の使用有無を同じ設定で構築した場合、テスト環境で使用したりポジトリをそのまま本番環境へ移行できます。

- テスト環境と本番環境で、データベースと Cosminexus RM の両方を使用する場合
- テスト環境と本番環境で、データベースと Cosminexus RM の両方を使用しない場合
- テスト環境と本番環境で、データベースを使用し Cosminexus RM を使用しない場合

注 この構成のテスト環境は、HCSC 簡易セットアップ機能では構築できません。

テスト環境と本番環境で、データベースと Cosminexus RM の使用有無を同じ設定で構築した場合の移行の流れを次の図に示します。

図 1-4 データベースと Cosminexus RM の使用有無を同じ設定で構築した場合の移行の流れ



具体的な移行手順については、「3.3.1 テスト環境と本番環境でデータベースと Cosminexus RM の使用有無が同じ場合の移行手順」を参照してください。

(2) テスト環境と本番環境でデータベースと Cosminexus RM の使用有無を異なる設定で構築した（リポジトリをそのまま移行できるとき）

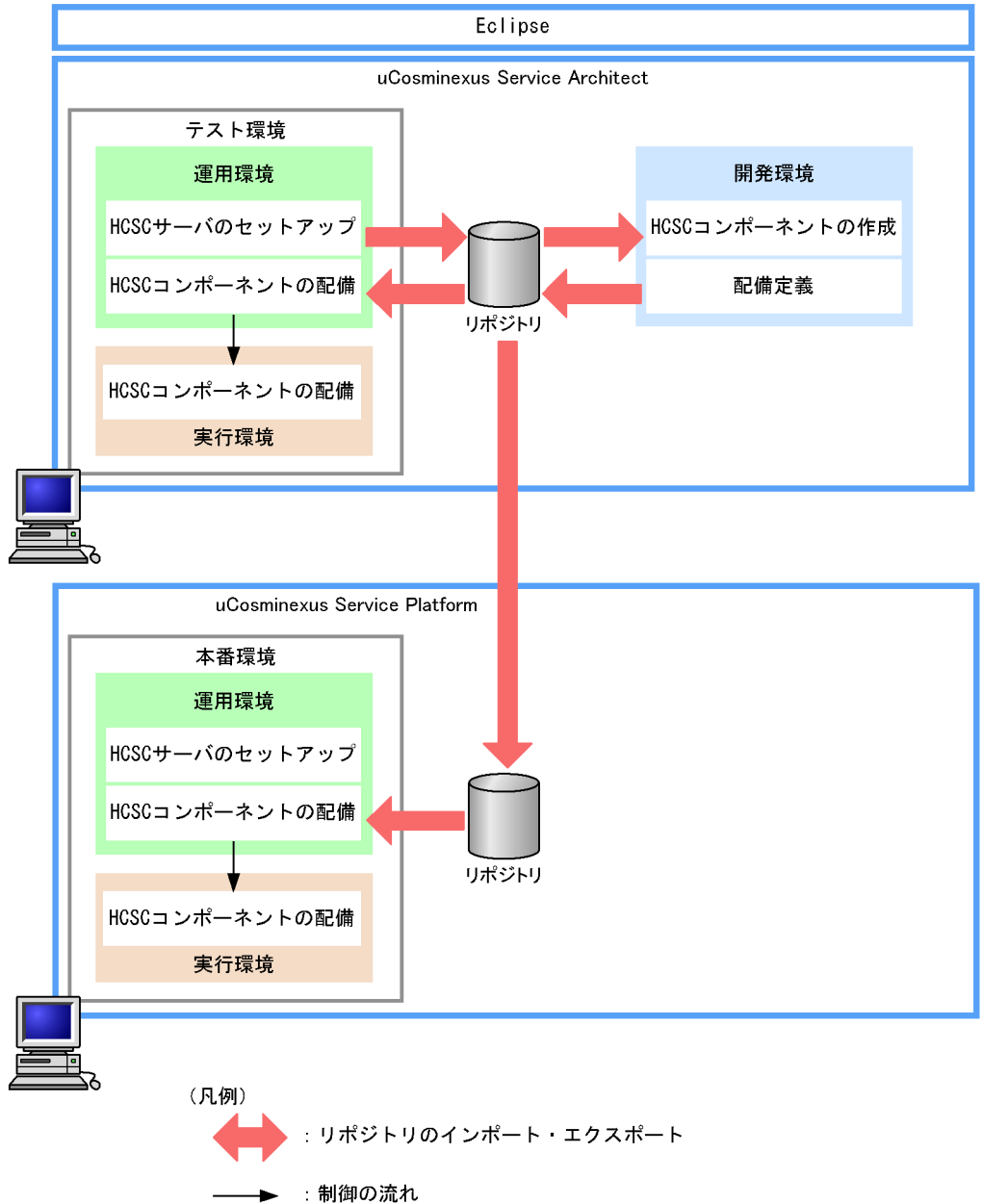
テスト環境と本番環境で、データベースと Cosminexus RM の使用有無を異なる設定で構築した場合でも、次のようなときは、テスト環境で使用したリポジトリをそのまま本番環境へ移行できます。

- テスト環境では、データベースと Cosminexus RM の両方を使用しないで、本番環境では、データベースと Cosminexus RM の両方を使用する場合
- テスト環境では、データベースと Cosminexus RM の両方を使用しないで、本番環境では、データベースを使用し Cosminexus RM を使用しない場合
- テスト環境では、データベースを使用し Cosminexus RM を使用しないで、本番環境では、データベースと Cosminexus RM の両方を使用する場合

注 この構成のテスト環境は、HCSC 簡易セットアップ機能では構築できません。

テスト環境と本番環境で、データベースと Cosminexus RM の使用有無を異なる設定で構築した場合で、テスト環境で使用したリポジトリをそのまま本番環境へ移行できるときの移行の流れを次の図に示します。

図 1-5 データベースと Cosminexus RM の使用有無を異なる設定で構築した場合の移行の流れ（リポジトリをそのまま移行できるとき）



具体的な移行手順については、「3.3.3 データベースと Cosminexus RM の両方を使用しない環境から両方使用する環境に移行する場合の移行手順」および「3.3.5 データベースと Cosminexus RM の両方を使用しない環境からデータベースを使用して Cosminexus RM を使用しない環境に移行する場合の移行手順」を参照してください。

(3) テスト環境と本番環境でデータベースと Cosminexus RM の使用有無を異なる設定で構築した (リポジトリを作成し直すとき)

テスト環境と本番環境で、データベースと Cosminexus RM の使用有無を異なる設定で構築した場合で、次のようなときは、テスト環境で使用したリポジトリをそのまま本番環境へ移行できません。

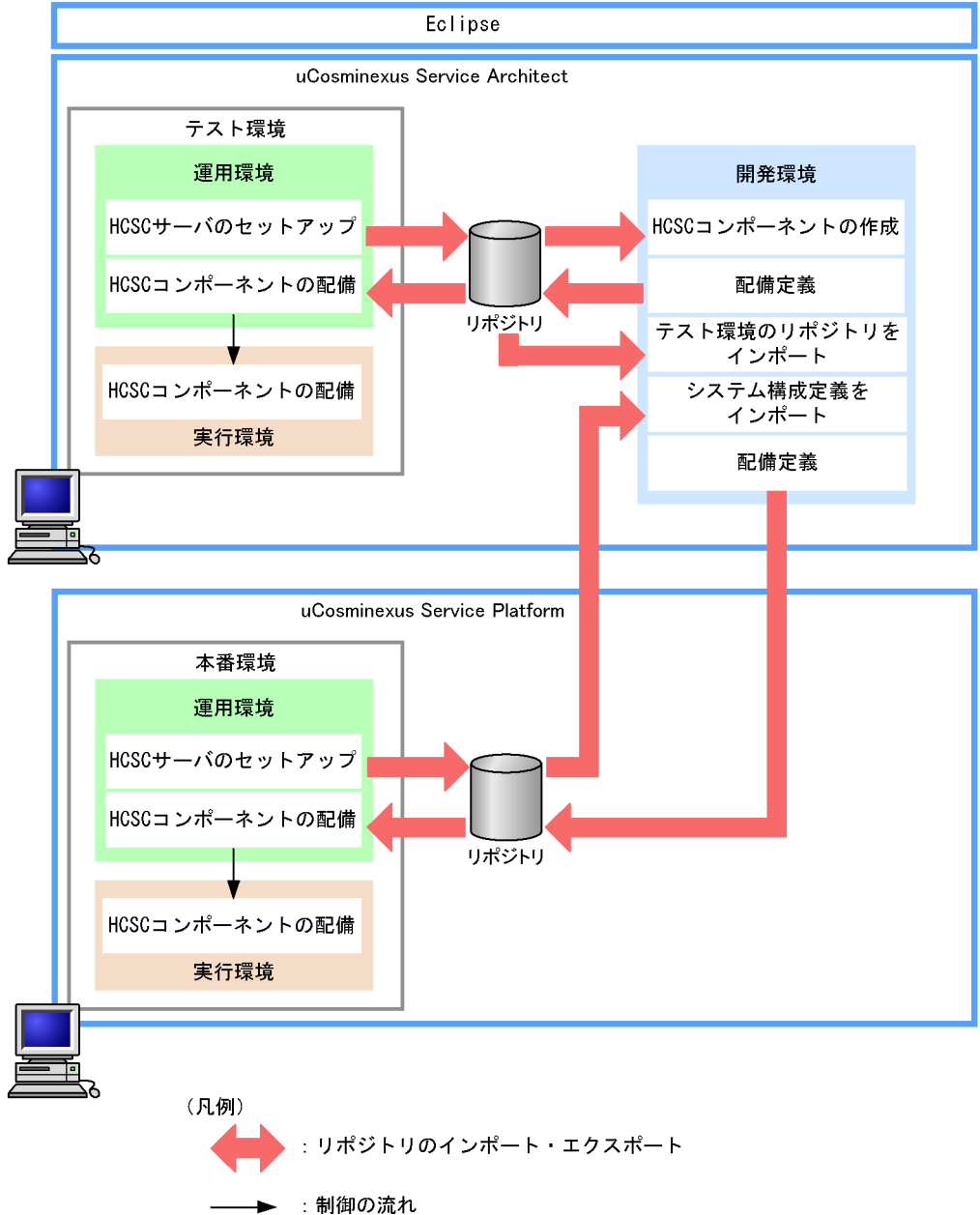
- テスト環境では、データベースと Cosminexus RM の両方を使用して、本番環境では、データベースと Cosminexus RM の両方を使用しない場合
- テスト環境では、データベースと Cosminexus RM の両方を使用して、本番環境では、データベースを使用して Cosminexus RM を使用しない場合
- テスト環境では、データベースを使用し Cosminexus RM を使用しないで、本番環境では、データベースと Cosminexus RM の両方を使用しない場合

注 この構成のテスト環境は、HCSC 簡易セットアップ機能では構築できません。

この場合、テスト環境で設定したシステム構成定義を本番で使用するシステム構成定義に設定し直して、リポジトリを作成し直します。

テスト環境と本番環境で、データベースと Cosminexus RM の使用有無を異なる設定で構築した場合で、テスト環境で使用したリポジトリを本番環境のリポジトリに作成し直すときの移行の流れを次の図に示します。

図 1-6 データベースと Cosminexus RM の使用有無を異なる設定で構築した場合の移行の流れ（リポジトリを作成し直すとき）

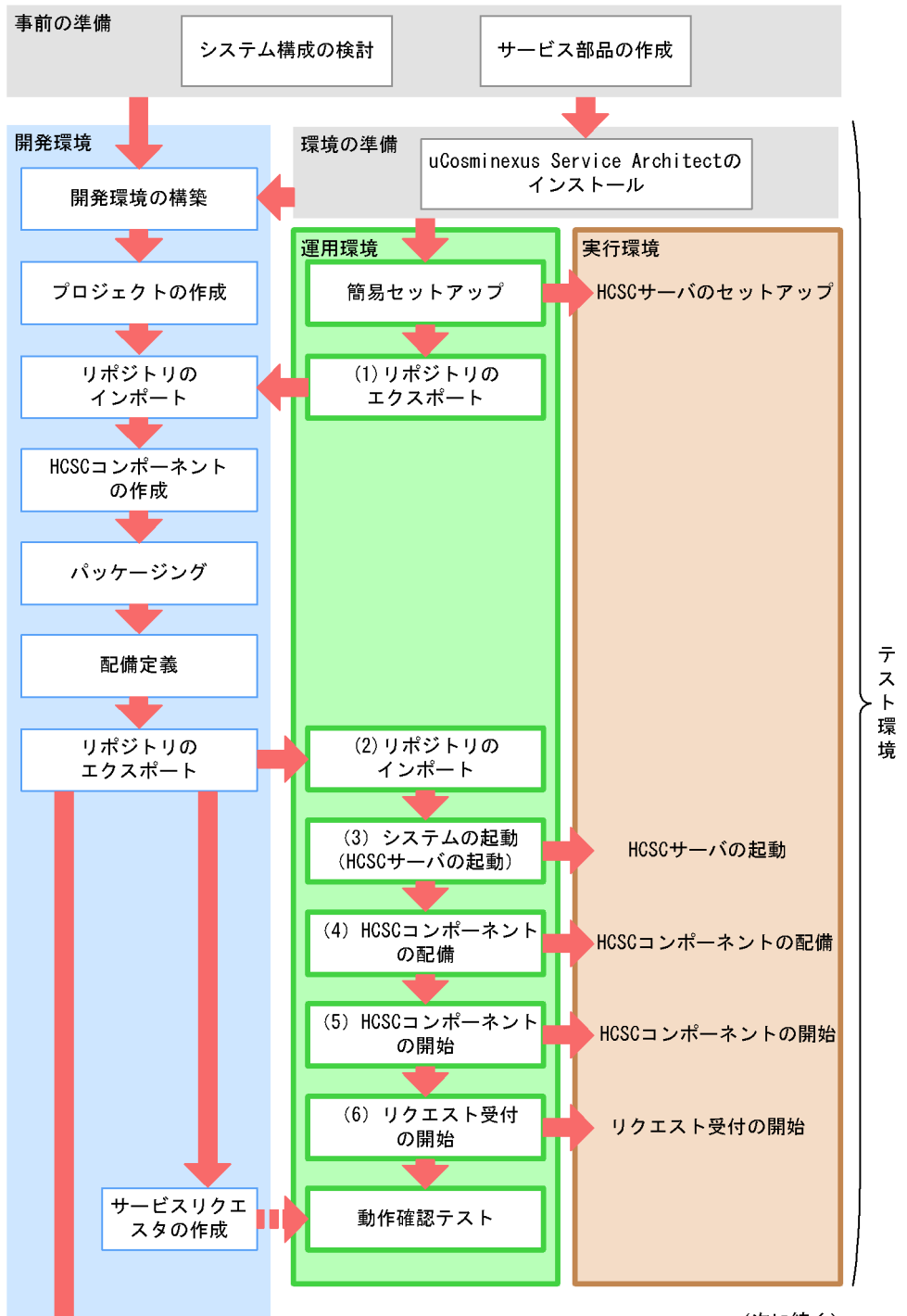


具体的な移行手順については、「3.3.2 データベースと Cosminexus RM の両方を使用する環境から両方使用しない環境に移行する場合の移行手順」および「3.3.4 データベースと Cosminexus RM の両方を使用する環境からデータベースを使用して Cosminexus RM を使用しない環境に移行する場合の移行手順」を参照してください。

1.2 開発から実運用までの流れ

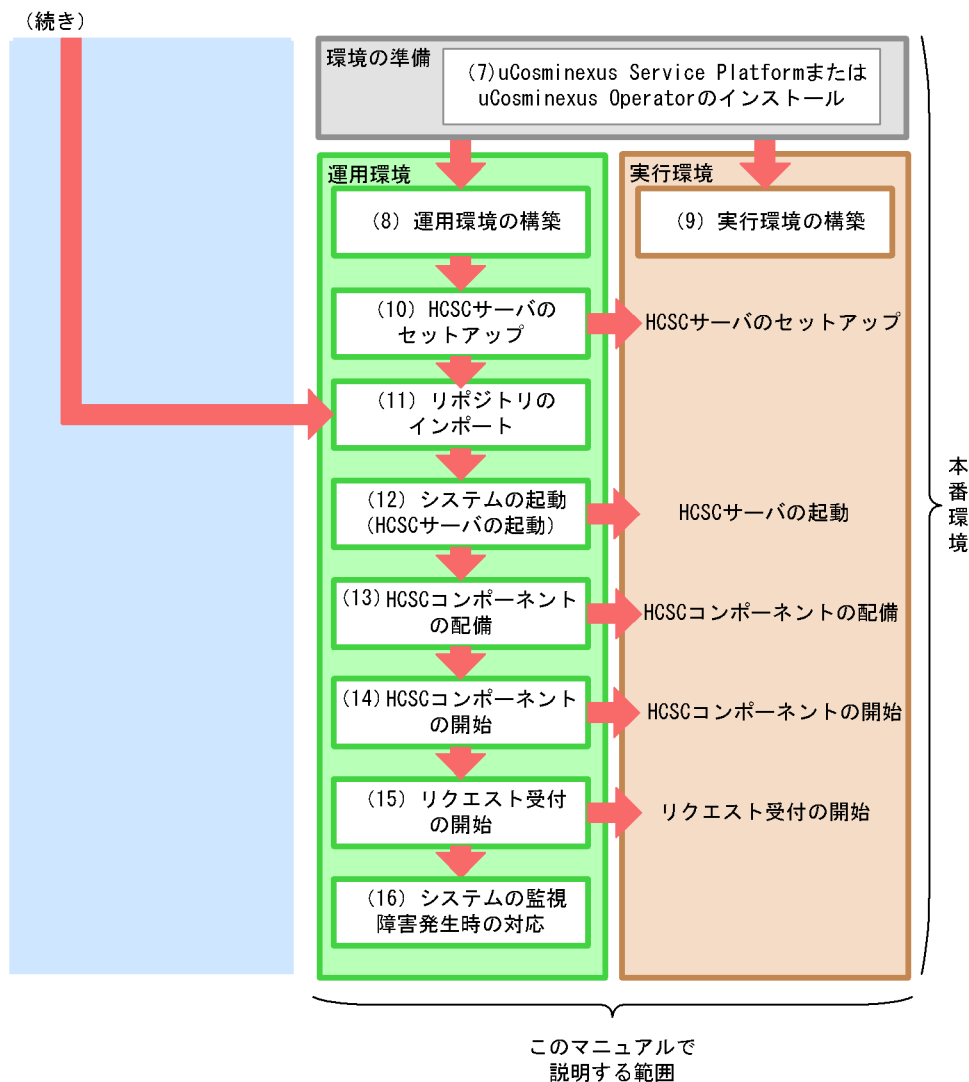
Cosminexus サービスプラットフォームを利用したシステムの開発から実運用までの流れを次の図に示します。

図 1-7 開発から実運用までの流れ



テスト環境

1. SOA に基づいたシステム運用の概要



このマニュアルでは、図中の「運用環境」および「実行環境」で実施する作業の手順について説明しています。開発環境で実施する作業、およびテスト環境のために実施するインストールと簡易セットアップについては、マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド」を参照してください。

図中の各作業の概要を次に説明します。

(1) リポジトリのエクスポート

簡易セットアップを行ったあと、運用環境からリポジトリをエクスポートします。

運用環境からエクスポートしたリポジトリに対して、開発環境で作成した HCSC コンポーネント（サービスアダプタ、DB アダプタ、ビジネスプロセス、およびユーザ定義

付)や、HCSC コンポーネントをどのように配備するかを定義(配備定義)したシステム構成定義の受け渡しを行います。また、運用環境からは、リポジトリを介して実行環境のセットアップ情報(HCSC サーバの構成や、HCSC コンポーネントの配備情報など)を開発環境に渡します。

リポジトリのエクスポート方法の詳細については、「4.2 リポジトリのエクスポート」を参照してください。

(2) リポジトリのインポート

開発環境で HCSC コンポーネント(サービスアダプタ、DB アダプタ、ビジネスプロセス、およびユーザ定義受付)の作成、パッケージング、および配備定義をしたリポジトリを、運用環境にインポートします。

リポジトリのインポート方法の詳細については、「4.3 リポジトリのインポート」を参照してください。

(3) システムの起動(HCSC サーバの起動)

実行環境の起動・停止は、運用環境から実施します。

実行環境の HCSC サーバを起動・停止するには、運用環境の画面またはコマンドを利用します。

HCSC サーバを起動・停止する方法の詳細については、「5.2.4 HCSC サーバを起動する」を参照してください。

なお、HCSC サーバだけでなく、PRF や Hitachi Web Server など、関連するシステムも起動します。

関連するシステムを起動・停止する方法の詳細については、「5. システム運用」を参照してください。

画面およびコマンドの詳細については、それぞれ「8. 運用環境で使用する画面」、「10. コマンド」を参照してください。

(4) HCSC コンポーネントの配備

運用環境にインポートした HCSC コンポーネント(サービスアダプタ、DB アダプタ、ビジネスプロセス、およびユーザ定義受付)を、HCSC サーバに配備します。

HCSC コンポーネントの配備は、運用環境のコマンドを利用します。なお、DB アダプタの配備方法は、サービスアダプタの配備方法と同じです。

HCSC コンポーネントの配備方法の詳細については、「3.1.9 サービスアダプタを配備する」、「3.1.10 ビジネスプロセスを配備する」、および「3.1.11 ユーザ定義受付を配備する」を参照してください。

コマンドの詳細については、「10. コマンド」を参照してください。

(5) HCSC コンポーネントの開始

配備した HCSC コンポーネント（サービスアダプタ、DB アダプタ、ビジネスプロセス、およびユーザ定義受付）を開始します。なお、サービスアダプタを開始する際には、サービスアダプタから実行するサービスも起動している必要があります。

HCSC コンポーネントを開始・停止するには、運用環境の画面またはコマンドを利用します。なお、DB アダプタの開始方法は、サービスアダプタの開始方法と同じです。

HCSC コンポーネントの開始方法の詳細については、「5.2.6 サービスアダプタを開始する」、「5.2.7 ビジネスプロセスを開始する」、および「5.2.8 ユーザ定義受付を開始する」を参照してください。

画面およびコマンドの詳細については、それぞれ「8. 運用環境で使用する画面」、「10. コマンド」を参照してください。

(6) リクエスト受付の開始

サービスリクエストから要求を受け付けるリクエスト受付（標準受付）を開始します。

標準受付を開始・停止するには、運用環境の画面またはコマンドを利用します。

標準受付の開始方法の詳細については、「5.2.11 標準受付を開始する」を参照してください。

画面およびコマンドの詳細については、それぞれ「8. 運用環境で使用する画面」、「10. コマンド」を参照してください。

(7) uCosminexus Service Platform または uCosminexus Operator のインストール

uCosminexus Service Platform または uCosminexus Operator をインストールします。

実行環境と運用環境を同一のマシンに構築する場合は、uCosminexus Service Platform をインストールします。異なるマシンに構築する場合は、実行環境に uCosminexus Service Platform、運用環境に uCosminexus Operator をインストールします。

インストールの詳細については、「2.1.2 uCosminexus Service Platform および uCosminexus Operator のインストール」を参照してください。

(8) 運用環境の構築

実行環境の HCSC サーバを運用管理する運用環境を構築します。ここでは、実行環境を Eclipse の画面で操作するための設定や、運用環境の各種設定を行います。

設定の詳細については、「2.1.3 Eclipse への HCSC-Manager Plug-in の組み込み」および「2.4 運用環境に関する設定」を参照してください。

また、実行環境（HCSC サーバ）のセットアップに必要な定義を作成しておきます。

定義の作成方法の詳細については、「2.3 実行環境に関する設定」を参照してください。

(9) 実行環境の構築

HCSC サーバを動かすための実行環境を構築します。まず、実行環境をセットアップする前に、実行環境に必要なソフトウェアの設定をします。

設定の詳細については、「3.1.2 実行環境に必要なソフトウェアの設定」を参照してください。

(10) HCSC サーバのセットアップ

実行環境でサービス部品を呼び出すための基盤となる HCSC サーバをセットアップします（セットアップした HCSC サーバや複数の HCSC サーバの連携などは、必要に応じてアンセットアップできます）。

HCSC サーバのセットアップは、運用環境のコマンドを利用します。

HCSC サーバのセットアップ方法の詳細については、「3.1.3 HCSC サーバをセットアップする」を参照してください。

また、必要に応じて、HCSC サーバが動作するためのランタイム情報を定義します。

ランタイム情報の設定については、「3.1.4 HCSC サーバの定義情報を設定する」を参照してください。

コマンドの詳細については、「10. コマンド」を参照してください。

(11) リポジトリのインポート

テスト環境で使用したリポジトリを、運用環境にインポートします。なお、必要に応じて、リポジトリ内の HCSC コンポーネント（サービスアダプタ、DB アダプタ、ビジネスプロセス、およびユーザ定義受付）の定義を修正してください。

テスト環境と本番環境で、データベースと Cosminexus RM の使用有無の設定が異なる一部のケースについては、テスト環境で使用したリポジトリをそのまま運用環境にインポートできません。その場合、本番環境でセットアップした HCSC サーバのシステム構成定義を取り込むために、本番環境（運用環境）からリポジトリをエクスポートし、開発環境にリポジトリをインポートする必要があります。詳細は、「1.1.5 テスト環境と本番環境との関係」を参照してください。

リポジトリのインポート方法の詳細については、「4.3 リポジトリのインポート」を参照してください。

なお、開発環境で作成した HCSC コンポーネントについて、接続先、流量制御、および通信タイムアウト値を変更する場合は、このタイミングで行います。

詳細は、「5.2.26 サービス部品の接続先を変更する」、「5.2.27 流量制御値を変更する」、および「5.2.28 サービス部品呼び出しの通信タイムアウト値を変更する」を参照

1. SOA に基づいたシステム運用の概要

してください。

(12) システムの起動 (HCSC サーバの起動)

実行環境での業務の開始・終了などに伴って、運用環境で HCSC サーバを起動したり停止したりします。

実行環境の HCSC サーバを起動・停止するには、運用環境の画面またはコマンドを利用します。

HCSC サーバを起動する方法の詳細については、「5.2.4 HCSC サーバを起動する」を参照してください。

なお、HCSC サーバだけでなく、PRF や Hitachi Web Server など、関連するシステムも起動します。

関連するシステムを起動・停止する方法の詳細については、「5. システム運用」を参照してください。

画面およびコマンドの詳細については、それぞれ「8. 運用環境で使用する画面」、「10. コマンド」を参照してください。

(13) HCSC コンポーネントの配備

運用環境にインポートした HCSC コンポーネント (サービスアダプタ、DB アダプタ、ビジネスプロセス、およびユーザ定義受付) を、HCSC サーバに配備します。

HCSC コンポーネントの配備は、運用環境のコマンドを利用します。なお、DB アダプタの配備方法は、サービスアダプタの配備方法と同じです。

HCSC コンポーネントの配備方法の詳細については、「3.1.9 サービスアダプタを配備する」、「3.1.10 ビジネスプロセスを配備する」、および「3.1.11 ユーザ定義受付を配備する」を参照してください。

コマンドの詳細については、「10. コマンド」を参照してください。

(14) HCSC コンポーネントの開始

配備した HCSC コンポーネント (サービスアダプタ、DB アダプタ、ビジネスプロセス、およびユーザ定義受付) を開始します。なお、サービスアダプタを開始する際には、サービスアダプタから実行するサービスも起動している必要があります。

HCSC コンポーネントを開始・停止するには、運用環境の画面またはコマンドを利用します。なお、DB アダプタの開始・停止方法は、サービスアダプタの開始・停止方法と同じです。

HCSC コンポーネントの開始方法の詳細については、「5.2.6 サービスアダプタを開始する」、「5.2.7 ビジネスプロセスを開始する」、および「5.2.8 ユーザ定義受付を開始する」を参照してください。

画面およびコマンドの詳細については、それぞれ「8. 運用環境で使用する画面」、「10. コマンド」を参照してください。

(15) リクエスト受付の開始

サービスリクエストから要求を受け付けるリクエスト受付（標準受付）を開始します。

標準受付を開始・停止するには、運用環境の画面またはコマンドを利用します。

標準受付の開始方法の詳細については、「5.2.11 標準受付を開始する」を参照してください。

画面およびコマンドの詳細については、それぞれ「8. 運用環境で使用する画面」、「10. コマンド」を参照してください。

(16) システムの監視・障害発生時の対応

実行環境での業務を開始したあとは、運用環境でシステムを監視します。障害が発生した場合には、障害の原因を特定し、対策します。

(a) システムの監視

実行環境での業務を開始したあと、必要に応じて、運用環境から HCSC サーバや HCSC コンポーネントなどの状態を確認できます。

システムの状態の確認は、運用環境の画面またはコマンドを利用します。

システムの状態を確認する方法の詳細については、「5. システム運用」を参照してください。

また、運用環境では、データベースに記録されているビジネスプロセスのプロセスインスタンスの実行履歴の中から、必要に応じて目的のプロセスインスタンスを特定して、その状態を確認したり、実行履歴を削除したり、プロセスインスタンスを再実行できます。

プロセスインスタンスの確認、実行履歴の削除および再実行は、運用環境の画面またはコマンドを利用します。

プロセスインスタンスの実行履歴の管理方法の詳細は、「6. 実行履歴の管理」を参照してください。

画面およびコマンドの詳細については、それぞれ「8. 運用環境で使用する画面」、「10. コマンド」を参照してください。

(b) 障害の対策

システムの運用中に障害が発生した場合、それぞれの環境から、ログファイルやトレースファイルを採取します。ログファイルやトレースファイルを取得し、障害の発生箇所や原因を特定し、障害の対策を実施します。

なお、JP1 と連携するシステムを構築した場合、Cosminexus サービスプラットフォー

1. SOA に基づいたシステム運用の概要

ムでは、発生した障害のメッセージを JP1 イベントとして JP1 に通知します。これによって、出力するエラーメッセージを収集し、JP1 の統合コンソールで集中的に監視できます。

また、JP1 側で特定の JP1 イベント（エラーメッセージ）の受信を契機として、自動的にコマンドを実行することができます。これによって、システム運用（障害の発生をシステム管理者へ通知する、回復のためのコマンドを実行するなど）を自動化できます。

障害時のログファイルやトレースファイルの取得、および JP1 イベントの詳細情報の確認については、「7. 障害対策」を参照してください。

1.3 システム全体と運用環境・実行環境の関係

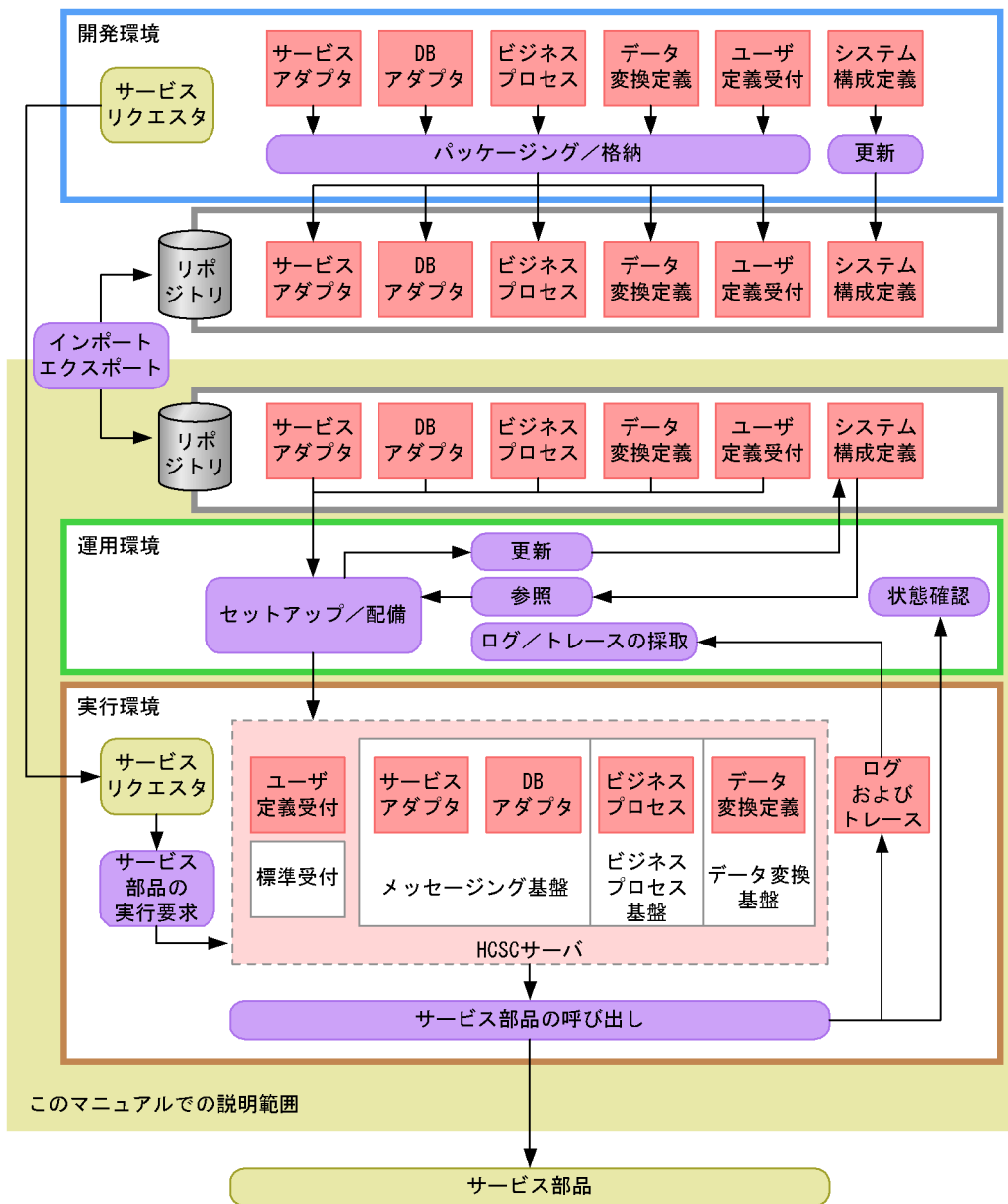
Cosminexus サービスプラットフォームでは、開発環境、運用環境および実行環境が相互に関連してシステム全体を構成します。その中での運用環境および実行環境の位置づけについて説明します。

(1) 運用上の位置づけ

システム全体の運用の中で、運用環境および実行環境がどのように位置づけられるのかについて、次の図に示します。

1. SOA に基づいたシステム運用の概要

図 1-8 運用上の位置づけ



(凡例)

- : 作成、格納されるデータ
- : データの流れ
- : 実施する操作
- : ユーザが準備するプログラム

運用環境では、開発環境で作成した HCSC コンポーネント（サービスアダプタ，DB アダプタ，ビジネスプロセス，およびユーザ定義受付）をリポジトリから読み込み，実行環境に配備します。また，実行環境で利用する HCSC サーバをセットアップします。

運用を開始したあとは、システムの起動・停止・状態の監視をします。

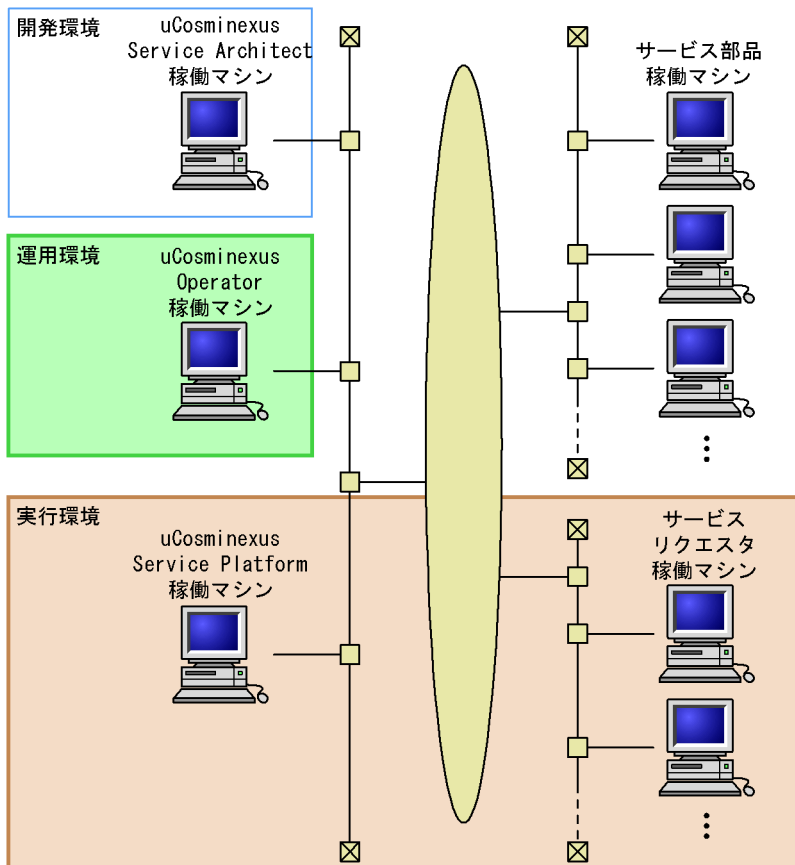
実行環境では、サービスリクエストで受け付けた要求電文に応じて、HCSC サーバを介してサービス部品およびビジネスプロセスを呼び出し、業務を実行します。

(2) ネットワーク上の位置づけ

開発環境、運用環境および実行環境は、インターネットやイントラネットなどのネットワークを使って連結してシステムを構成します。

システム全体での運用環境および実行環境のネットワーク上の位置づけについて次の図に示します。なお、実行環境の構成は、運用の形態によって異なります。実行環境の構成については、「1.5 運用方針の決定」を参照してください。

図 1-9 システム全体での運用環境および実行環境のネットワーク上の位置づけ



UNIX の場合、運用環境と実行環境を同じマシンに構築できません。上の図のように、運用環境を構築するマシンとして別途 Windows のマシンを用意し、uCosminexus Operator をインストールする必要があります。Windows の場合は、uCosminexus Service Platform が稼働しているマシンの一つに、運用環境と実行環境を構築すること

1. SOA に基づいたシステム運用の概要

ができます。

なお、開発環境は別のネットワーク上に構築することができます。

実行環境でのサービス部品の実行状態などの情報は、uCosminexus Service Platform が稼働しているマシンに構築したデータベースへ蓄積されます。

また、uCosminexus Service Platform が稼働しているマシンとネットワークで接続できる別マシン上に、データベースを構築することもできます。この場合、uCosminexus Service Platform が稼働しているマシンと、データベースを構築したマシンは LAN 回線などで接続します。

なお、uCosminexus Service Platform が稼働しているマシンで使用するデータベースは、次の構成をとることができます。

クラスタ構成にしない場合

uCosminexus Service Platform に対して一つのデータベースを作成してください。

また、データベースのスキーマを uCosminexus Service Platform ごとに分割することで、複数の uCosminexus Service Platform を一つのデータベースで使用できます。

クラスタ構成にする場合

クラスタに対して一つのデータベースを作成し、複数の uCosminexus Service Platform でデータベースを共有してください。

1.4 動作環境

Cosminexus サービスプラットフォームの運用環境および実行環境として、uCosminexus Service Platform または uCosminexus Operator を利用する場合の動作環境について説明します。

1.4.1 前提 OS

uCosminexus Service Platform および uCosminexus Operator の前提 OS について次に示します。

(1) uCosminexus Service Platform の前提 OS

uCosminexus Service Platform の前提 OS について、次の表に示します。

表 1-2 uCosminexus Service Platform の前提 OS

前提 OS	前提 OS のバージョン
Windows	Windows Server 2003 Windows Server 2003 R2 Windows Server 2003 (x64) Windows Server 2003 R2 (x64)
AIX	AIX 6L V6.1 AIX 5L V5.3 (5300-06 RMP) AIX 5L V5.2 (5200-10 RMP)
Linux (32)	Red Hat Enterprise Linux AS 3 (x86) Red Hat Enterprise Linux ES 3 (x86) Red Hat Enterprise Linux AS 3 (AMD64 & Intel EM64T) Red Hat Enterprise Linux ES 3 (AMD64 & Intel EM64T) Red Hat Enterprise Linux AS 4 (x86) Red Hat Enterprise Linux ES 4 (x86) Red Hat Enterprise Linux AS 4 (AMD64 & Intel EM64T) Red Hat Enterprise Linux ES 4 (AMD64 & Intel EM64T) Red Hat Enterprise Linux 5 Advanced Platform (x86) Red Hat Enterprise Linux 5 (x86) Red Hat Enterprise Linux 5 Advanced Platform (AMD/Intel 64) Red Hat Enterprise Linux 5 (AMD/Intel 64)

(2) uCosminexus Operator の前提 OS

uCosminexus Operator の前提 OS について、次の表に示します。

1. SOA に基づいたシステム運用の概要

表 1-3 uCosminexus Operator の前提 OS

前提 OS	前提 OS のバージョン
Windows	Windows Server 2003 Windows Server 2003 R2 Windows XP Windows Vista

1.4.2 前提となるデータベース

uCosminexus Service Platform で構築する運用環境および実行環境の前提となるデータベースについて、次の表に示します。

表 1-4 Cosminexus サービスプラットフォームの前提データベース

前提データベース	バージョン
HiRDB	HiRDB/Single Server Version 7 HiRDB/Parallel Server Version 7 HiRDB/Single Server Version 8 HiRDB/Parallel Server Version 8
Oracle	Oracle9i Oracle10g

1.4.3 ソフトウェアの構成

uCosminexus Service Platform と uCosminexus Operator は、構成ソフトウェアと呼ばれる複数のソフトウェアで構成されています。uCosminexus Service Platform および uCosminexus Operator を構成するソフトウェアとその位置づけについて説明します。

(1) 構成ソフトウェア

(a) 構成ソフトウェアの種類

uCosminexus Service Platform および uCosminexus Operator を構成するソフトウェアを次の表に示します。

表 1-5 uCosminexus Service Platform および uCosminexus Operator を構成するソフトウェア

構成ソフトウェア	uCosminexus Service Platform	uCosminexus Operator
Cosminexus cFramework		-
Cosminexus Component Container (DB Connector も含む)		-
Cosminexus Component Transaction Monitor		-
Cosminexus DABroker Library		-

構成ソフトウェア	uCosminexus Service Platform	uCosminexus Operator
Cosminexus Developer's Kit for Java™		
Cosminexus Operator Plug-in	-	
Cosminexus Performance Tracer		-
Cosminexus Reliable Messaging		-
Cosminexus Service Coordinator		-
Cosminexus TPBroker		-
Cosminexus Web Services - Security		-
Cosminexus XML Processor		
Hitachi Web Server		-

(凡例)

- : 含まれます。
- : 含まれません。

Cosminexus サービスプラットフォームで SOA を適用したシステムを構築・運用するための機能 (運用環境・実行環境で利用する機能) は、Cosminexus Service Coordinator で提供されます。Cosminexus Service Coordinator には、次の機能が含まれます。

- ビジネスプロセス実行機能 (HCSC-Business Process)
- データ変換機能 (HCSC-Data Transform)
- DB アダプタ機能 (HCSC-DB Adapter)
- 実行環境の運用管理機能 (HCSC-Manager)
- メッセージング制御・サービス連携機能 (HCSC-Messaging)

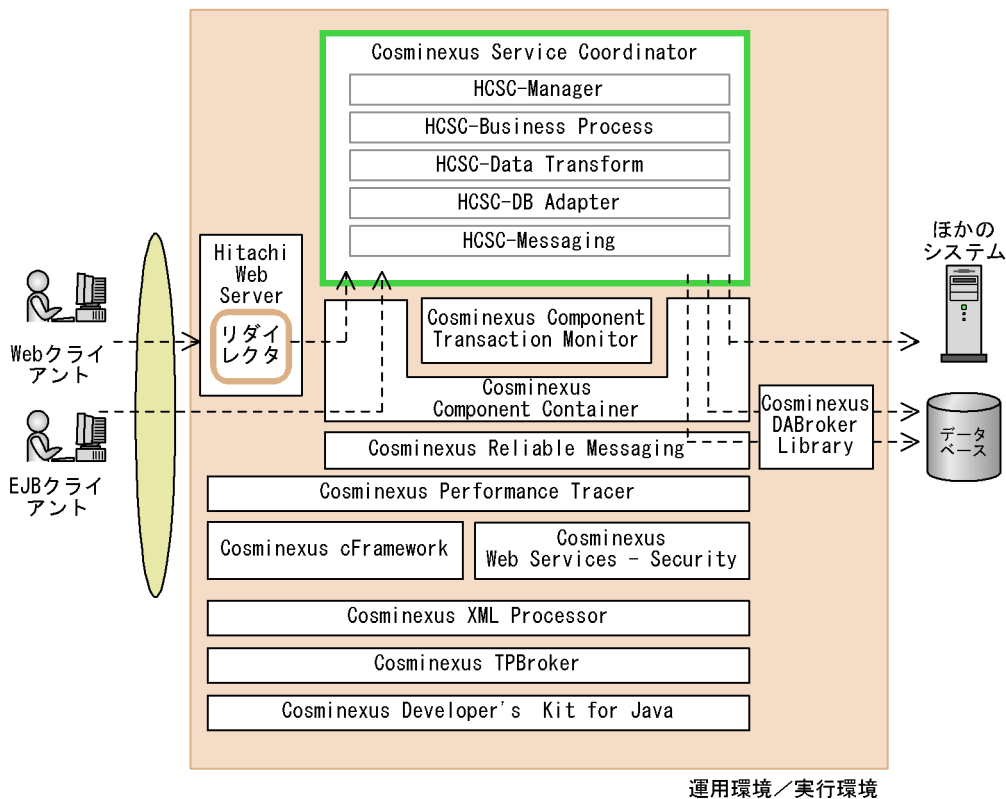
Cosminexus Service Coordinator 以外の構成ソフトウェアの機能の詳細については、それぞれの関連マニュアルを参照してください。

(b) 構成ソフトウェアの位置づけ

uCosminexus Service Platform を構成するソフトウェアの位置づけを次の図に示します。

1. SOA に基づいたシステム運用の概要

図 1-10 uCosminexus Service Platform を構成するソフトウェアの位置づけ



(凡例)

----> : 業務の実行要求の流れ

 : Cosminexus サービスプラットフォームの中心となる構成ソフトウェア

 : そのほかの構成ソフトウェア

(2) 関連ソフトウェア

Cosminexus サービスプラットフォームの関連ソフトウェアについて説明します。

(a) Microsoft Cluster Service

実行環境で、二つの HCSC サーバを組み合わせることで HA クラスタを構成する際に利用します。Windows の場合にだけ使用できます。

(b) HA モニタ

実行環境で、二つの HCSC サーバを組み合わせることで HA クラスタを構成する際に利用します。UNIX の場合にだけ使用できます。

(c) uCosminexus TP1/Server Base Enterprise Option

Cosminexus サービスプラットフォームの実行環境と OpenTP1 の間で、データベースを

介した異なるコンポーネントでの通信を行う場合に利用します。

TP1/Server Base Enterprise Option は DB キューのプロトコルをサポートしています。Cosminexus サービスプラットフォームの実行環境とは、DB キューの受け付けとサービスアダプタで連携できます。

(d) uCosminexus 日立コード変換 - Development Kit

Cosminexus サービスプラットフォームの開発環境で、文字コードを変換するためのマッピングファイルを作成する場合に利用します。バイナリ形式 (XML 形式以外) のデータを扱うとき、またはデータ変換で値置換えファンクションを使用するときに必要です。

(e) uCosminexus 日立コード変換 - Server Runtime

Cosminexus サービスプラットフォームの実行環境で、文字コードを変換する場合に利用します。Windows の場合で、バイナリ形式 (XML 形式以外) のデータを扱うとき、またはデータ変換で値置換えファンクションを使用するときに必要です。

(f) uCosminexus 日立コード変換 - Runtime

Cosminexus サービスプラットフォームの実行環境で、文字コードを変換する場合に利用します。UNIX の場合で、バイナリ形式 (XML 形式以外) のデータを扱うとき、またはデータ変換で値置換えファンクションを使用するときに必要です。

(g) uCosminexus Service Adapter Architect for TP1

Cosminexus サービスプラットフォームの開発環境で、既存の OpenTP1 システムや XDM/DCCM3 内にあるサービス部品を呼び出すためのアダプタを作成する場合に利用します。

(h) uCosminexus Service Adapter for TP1

Cosminexus サービスプラットフォームの実行環境から既存の OpenTP1 システムや XDM/DCCM3 内にあるサービス部品を呼び出す場合に利用します。

(i) uCosminexus TP1 Gateway

Cosminexus サービスプラットフォームの実行環境で、OpenTP1 などの既存システムから、HCSC サーバを経由してサービス部品を呼び出す場合に利用します。HCSC サーバに対して、CTM を経由した同期応答型の送信、または DB キューを介した非同期応答型の送信ができます。

(j) uCosminexus Service Adapter Architect for Flat Files

Cosminexus サービスプラットフォームの開発環境で、既存の業務処理システムのファイルからデータを読み込んだり、ファイルヘータを書き込んだりするためのアダプタを作成する場合に利用します。

1. SOA に基づいたシステム運用の概要

(k) uCosminexus Service Adapter for Flat Files

Cosminexus サービスプラットフォームの実行環境で、既存の業務処理システムのファイルからデータを読み込んだり、ファイルヘータを書き込んだりする場合に利用します。ファイルインターフェースを持つシステムをサービスプラットフォームと連携する場合でも、連携先システムのインターフェースを変更することなく、ファイルアクセスをサービス部品として実行でき、ファイルの入出力を伴う既存システムとほかのサービス部品との連携ができるようになります。

(l) uCosminexus Service Adapter Architect for Object Access

Cosminexus サービスプラットフォームの開発環境で、既存の TPBroker システム (Object Wrapper システム) の CORBA サーバの業務メソッドを呼び出すためのアダプタを作成する場合に利用します。

(m) uCosminexus Service Adapter for Object Access

Cosminexus サービスプラットフォームの実行環境で、既存の TPBroker システム (Object Wrapper システム) で動作する CORBA サーバの業務メソッドをサービス部品として連携する場合に利用します。

(n) iWay アダプタ

Cosminexus サービスプラットフォームの実行環境で、他社 ERP パッケージをサービス部品として連携する場合に利用します。SAP R/3、および Oracle EBS との Web サービスによる連携ができるため、既存 ERP 資産を活用したシステム間連携ができます。

(o) JP1 関連製品

Cosminexus サービスプラットフォームで構築した業務システム全体の監視、問題の検知などの運用を効率良く実施する場合に利用します。

JP1 と連携したシステムの運用については、マニュアル「Cosminexus 機能解説」の JP1 との連携に関する内容を参照してください。

1.5 運用方針の決定

実行環境（HCSC サーバ）の構築・セットアップに際して、実行環境をどのような構成にして運用するかを決定します。

実行環境の構成は、サービス部品の実行を要求する HCSC コンポーネントが配備される HCSC サーバの数、および複数の HCSC サーバの関係によって異なります。業務の規模・内容や、用意できるハードウェアの制約、既存システムからの移行が容易かどうか、負荷分散による性能・信頼性をどの程度確保するかなどを考慮して、実行環境の構成と運用の方針を決定します。

Cosminexus サービスプラットフォームの実行環境では、HCSC サーバの数、および複数の HCSC サーバの関係によって、次のような構成・運用ができます。

- 単一の HCSC サーバによる運用
- 複数の HCSC サーバによる運用
- 複数の HCSC サーバでクラスタを構成する運用
- 複数の HCSC サーバを連携させた運用
- クラスタ単位で HCSC サーバを連携させる運用

HCSC サーバ、クラスタ、連携のセットアップについては、「3. システムのセットアップとアンセットアップ」を参照してください。

以降の項で、それぞれの構成と運用について説明します。

! 注意事項

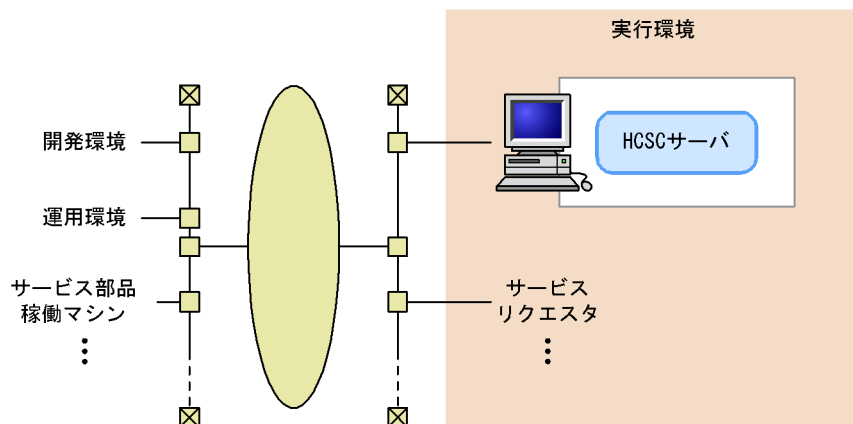
uCosminexus Service Platform または uCosminexus Operator が動作するマシンの時刻を、NTP ソフトウェアなどを使用して進めたり戻したりしないでください。時刻を操作した場合の動作は保証されません。

1.5.1 単一の HCSC サーバによる運用

一つの HCSC サーバでの構成を次の図に示します。

1. SOA に基づいたシステム運用の概要

図 1-11 HCSC サーバの構成（単一の場合）



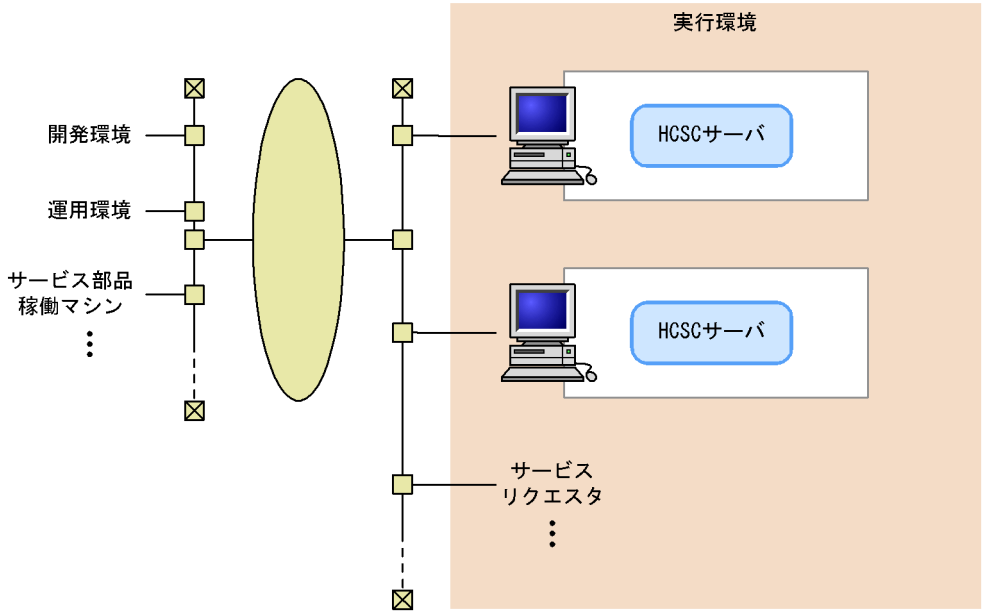
HCSC サーバが一つの場合、すべての HCSC コンポーネントを一つの HCSC サーバに配備して運用します。すべてのサービス部品が、同じ HCSC サーバから呼び出されます。

1.5.2 複数の HCSC サーバによる運用

Cosminexus サービスプラットフォームでは、実行環境に複数の HCSC サーバをセットアップして運用することができます。

複数の HCSC サーバでの構成を次の図に示します。

図 1-12 HCSC サーバの構成（複数の場合）



複数の HCSC サーバによる構成の場合、それぞれのサーバに異なる HCSC コンポーネントを配備して運用します。それぞれの HCSC サーバからはそれぞれ異なるサービス部品を呼び出します。HCSC コンポーネントで呼び出すサービス部品の業務別に HCSC サーバを分けて運用管理する場合などに利用できます。

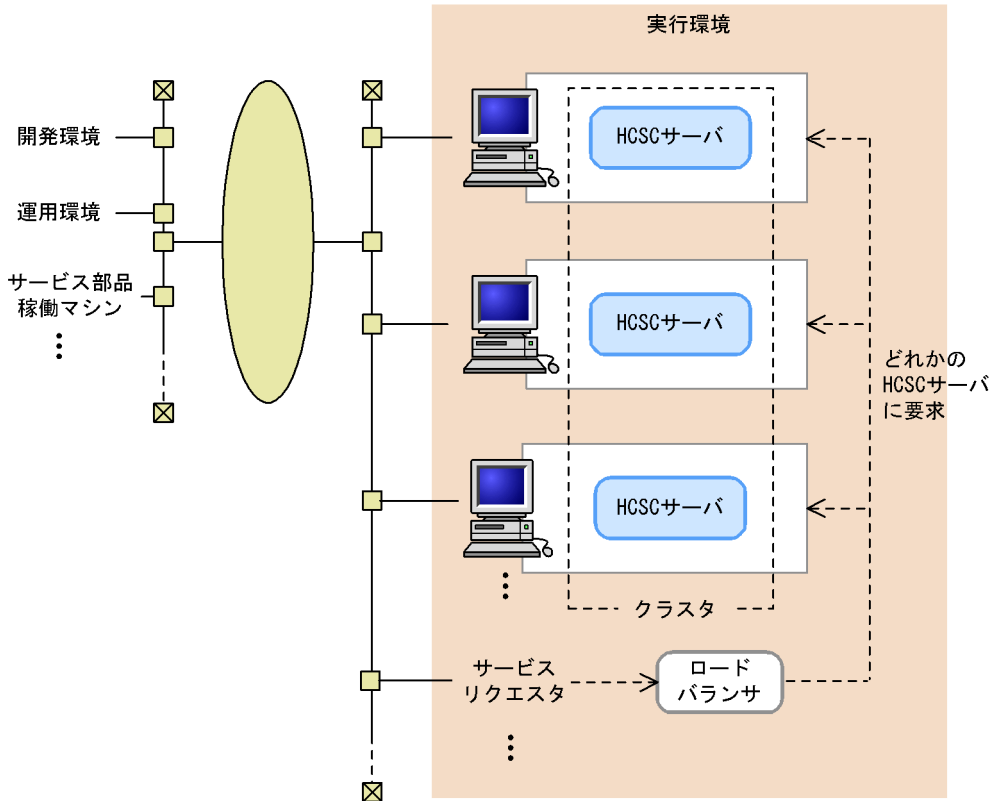
1.5.3 複数の HCSC サーバでロードバランスクラスタを構成する運用

Cosminexus サービスプラットフォームでは、特定の HCSC サーバにサービス部品の実行要求が集中しないように、複数の HCSC サーバをクラスタリングし、汎用ロードバランサまたは CTM を使用して負荷を分散するシステムを構築できます。この構成をロードバランスクラスタ構成といいます。ここでは、汎用ロードバランサと CTM を合わせて、ロードバランサと表記します。

HCSC サーバをクラスタリングした場合の構成（ロードバランスクラスタ構成）を次の図に示します。

1. SOA に基づいたシステム運用の概要

図 1-13 HCSC サーバの構成（ロードバランスクラスタ構成の場合）



(凡例)

---> : 実行要求の流れ

ロードバランスクラスタ構成では、運用を停止しないで、ロードバランスクラスタを構成する HCSC サーバを追加、変更、および削除することができます。

ロードバランスクラスタ構成で使用するロードバランサは、標準の同期受付（Web サービス / SessionBean）へのサービス部品の実行要求だけ受け付けます。標準の非同期受付（MDB（WS-R） / MDB（DB キュー））へのサービス部品の実行要求は、受け付けることができません。なお、標準の同期受付（Web サービス）と標準の同期受付（SessionBean）のどちらにサービス部品の実行要求を送信するかによって、使用するロードバランサが異なります。使用するロードバランサについては、「2.5 HCSC サーバをロードバランスクラスタ構成にする場合の環境構築」を参照してください。

! 注意事項

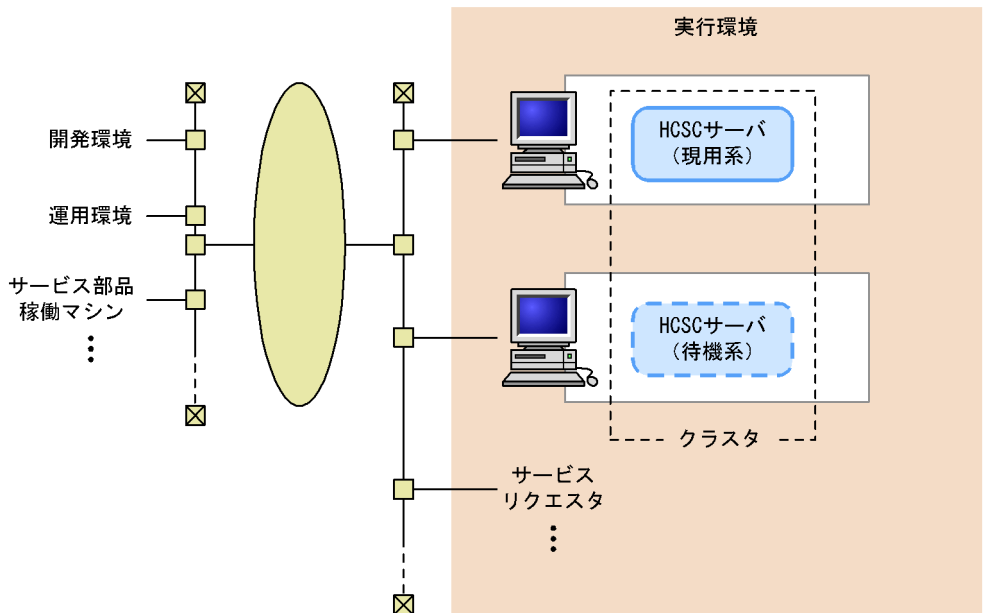
ロードバランスクラス構成では、ロードバランスクラス経由の非同期実行要求 (MDB (WS-R) / MDB (DB キュー)) は受け付けることができませんが、個々の HCSC サーバへの直接の非同期実行要求 (MDB (WS-R) / MDB (DB キュー)) は受け付けることができます。その場合、サービス部品の実行要求を送信するサービスリクエストの宛先を、必ず HCSC サーバに設定してください。ロードバランスクラス構成に対して宛先を設定した場合、サービス部品の実行要求が正しく処理されないときがあります。このため、ロードバランサで標準の非同期受付 (MDB (WS-R) / MDB (DB キュー)) へのサービス部品の実行要求を受け付けないように設定してください。

1.5.4 複数の HCSC サーバで HA クラスを構成する運用


Cosminexus サービスプラットフォームでは、実行環境にセットアップされた複数の HCSC サーバを、二つずつ組み合わせるクラスタリングし、実行系と待機系を 1:1 で運用するシステム (1:1 系切り替えシステム) を構築できます。この構成を HA クラス構成といいます。

HCSC サーバをクラスタリングした場合の構成 (HA クラス構成) を次の図に示します。

図 1-14 HCSC サーバの構成 (HA クラス構成の場合)



(凡例)

 : 起動していないHCSCサーバ

1. SOA に基づいたシステム運用の概要

HA クラスタを構成するには、クラスタソフトウェアが必要です。Cosminexus サービスプラットフォームでは、クラスタソフトウェアとして、Windows の場合は Microsoft Cluster Service を、UNIX の場合は HA モニタを利用します。

クラスタリングされた 1:1 系切り替えシステムでは、実行系に何らかの障害が発生すると、クラスタソフトウェアがこれを検知して、自動的に待機している系に切り替えて業務を続行します。システムがより冗長な構成になり、一方の系で障害が発生してもサービス部品を継続して運用できるようになります。

なお、クラスタソフトには、障害を検知した場合に待機系 HCSC サーバが自動的に起動されるよう次のことを設定しておきます。

- 待機系 HCSC サーバの起動
- 待機系 HCSC サーバの標準受付の開始

! 注意事項

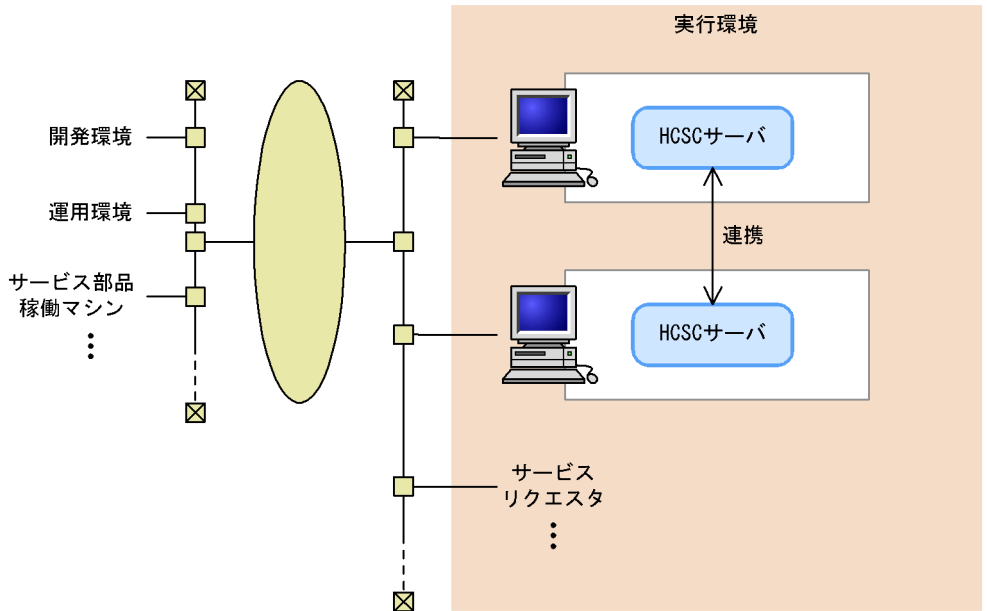
HA クラスタを構成する二つの HCSC サーバには、同じ HCSC コンポーネントが配備されている必要があります。また、OS やユーザも現用系と待機系で同じにしておく必要があります。

1.5.5 複数の HCSC サーバを連携させる運用

Cosminexus サービスプラットフォームでは、実行環境にセットアップされた複数の HCSC サーバを連携させて運用することができます。

HCSC サーバを連携させた場合の構成を次の図に示します。

図 1-15 HCSC サーバの構成（連携の場合）



HCSC サーバを連携させることで、要求された HCSC コンポーネントが配備された HCSC サーバへ実行要求を送信できます。

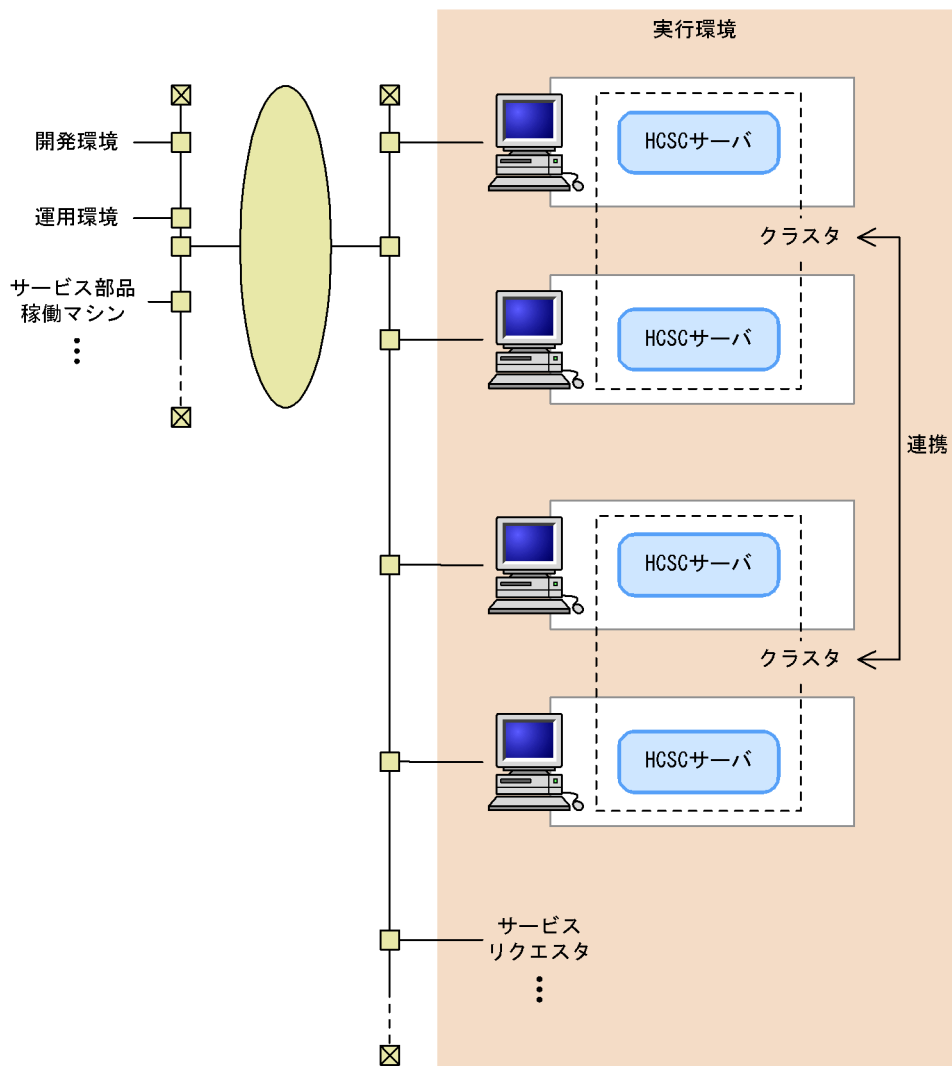
1.5.6 クラスタ単位で HCSC サーバを連携させる運用

HCSC サーバを連携させる場合、クラスタ単位で連携させることもできます。

クラスタ単位で HCSC サーバを連携させた場合の構成を次の図に示します。

1. SOA に基づいたシステム運用の概要

図 1-16 HCSC サーバの構成 (クラスタを連携させる場合)



クラスタを連携させることで、クラスタ構成による冗長性を確保し、要求された HCSC コンポーネントが配備された HCSC サーバを持つクラスタへ転送できます。

2

システムの構築

この章では、uCosminexus Service Platform などのインストールやインストール後の設定方法について説明します。

2.1 インストールとアンインストール

2.2 構成の形態と選択

2.3 実行環境に関する設定

2.4 運用環境に関する設定

2.5 HCSC サーバをロードバランスクラスタ構成にする場合の環境構築

2.6 HCSC サーバを HA クラスタ構成にする場合の環境構築

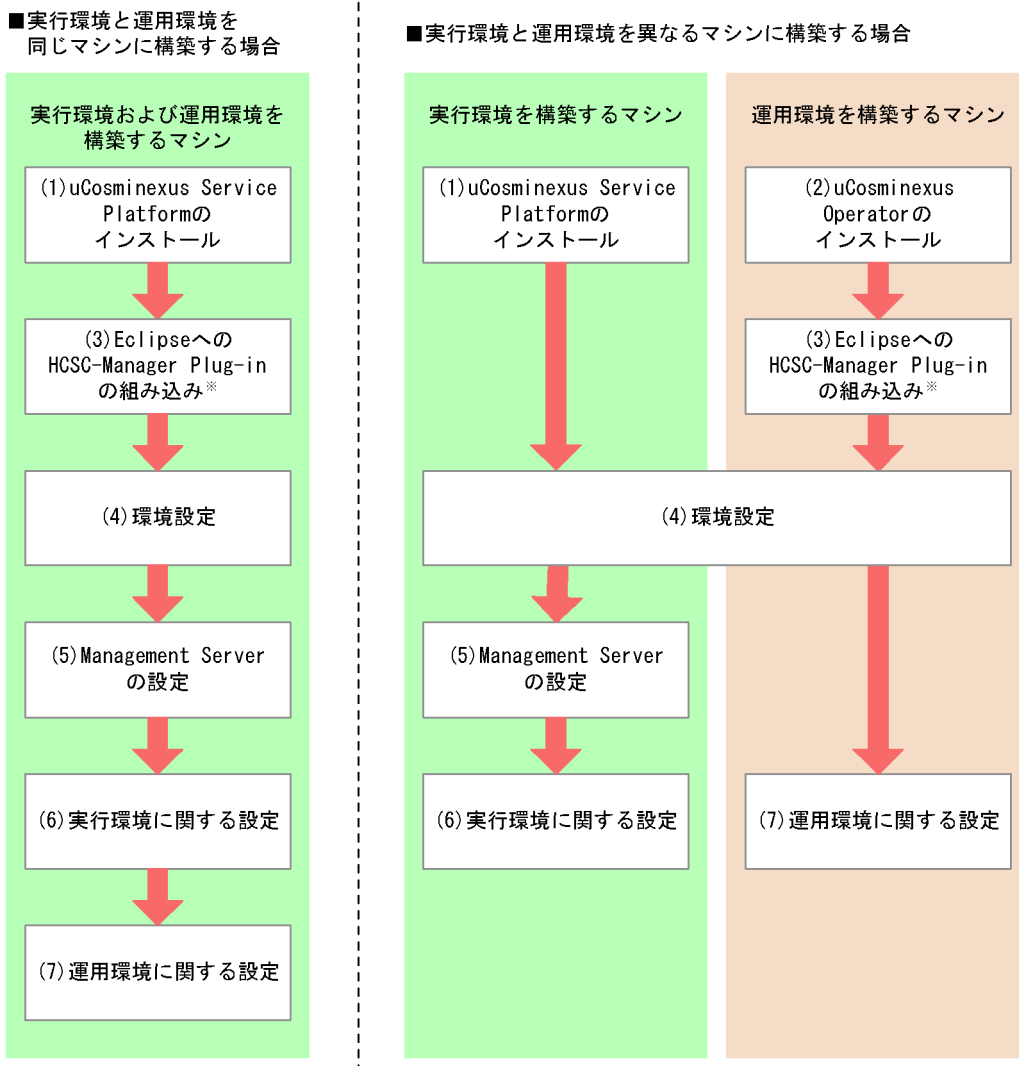
2.7 JP1 連携機能を使用する場合の環境構築

2.1 インストールとアンインストール

2.1.1 インストールの流れ

インストールの流れを次の図に示します。実行環境と運用環境を同じマシンに構築する場合と、異なるマシンに構築する場合とで、インストールおよび設定の作業の流れが異なります。

図 2-1 インストールの流れ



注※ 運用環境でGUIを利用する場合に実施します。

(1) uCosminexus Service Platform のインストール

uCosminexus Service Platform のインストール方法については、「2.1.2 uCosminexus Service Platform および uCosminexus Operator のインストール」を参照してください。

なお、インストールした uCosminexus Service Platform のアンインストールについては、「2.1.6 アンインストール」を参照してください。

(2) uCosminexus Operator のインストール

uCosminexus Operator のインストール方法については、「2.1.2 uCosminexus Service Platform および uCosminexus Operator のインストール」を参照してください。

なお、インストールした uCosminexus Operator のアンインストールについては、「2.1.6 アンインストール」を参照してください。

(3) Eclipse への HCSC-Manager Plug-in の組み込み

運用環境で画面を利用する場合、Eclipse に HCSC-Manager Plug-in を組み込みます。

Eclipse への HCSC-Manager Plug-in の組み込みについては、「2.1.3 Eclipse への HCSC-Manager Plug-in の組み込み」を参照してください。

(4) 環境設定

環境設定としてリポジトリを設定します。

uCosminexus Operator をインストールしたマシンでは、環境設定として環境変数を設定します。

環境設定については、「2.1.4 環境設定」を参照してください。

(5) Management Server の設定

HCSC-Manager を使用するための Management Server の設定を、HCSC-Manager の接続先となる実行環境で実施します。

Management Server の設定については、「2.1.5 HCSC-Manager を使用するための Management Server の設定」を参照してください。

(6) 実行環境に関する設定

HCSC サーバの構成などを設定します。実行環境に関する設定の詳細は、「2.3 実行環境に関する設定」を参照してください。

(7) 運用環境に関する設定

ユーザの権限などを設定します。運用環境に関する設定の詳細は、「2.4 運用環境に関する設定」を参照してください。

2.1.2 uCosminexus Service Platform および uCosminexus Operator のインストール

uCosminexus Service Platform および uCosminexus Operator は、日立総合インストーラからインストールします。日立総合インストーラの指示に従ってインストールしてください。

次に、Windows の場合と UNIX の場合のインストール方法についてそれぞれ説明します。

！ 注意事項

次のドキュメントを参照し、各構成ソフトウェアのインストール上の注意事項を確認してからインストールしてください。

- リリースノート
- マニュアル「Cosminexus システム構築ガイド」のインストール方法

(1) Windows の場合のインストール方法

新規インストール、上書きインストール、アップグレードインストールの場合のインストール方法についてそれぞれ説明します。なお、インストール作業は Administrator 権限が設定されたユーザが実施してください。

(a) 新規インストールの場合

uCosminexus Service Platform または uCosminexus Operator をインストールします。インストール種別を選択する画面では「標準」を選択してください。

(b) 上書きインストールの場合

uCosminexus Service Platform または uCosminexus Operator をインストールします。インストール種別を選択する画面では「変更」を選択して、そのあと、プログラムを選択する画面で上書きインストールをする構成ソフトウェアを選択してください。

(c) アップグレードインストールの場合

uCosminexus Service Platform または uCosminexus Operator をインストールします。インストール種別を選択する画面では「変更」を選択して、そのあと、プログラムを選択する画面でアップグレードインストールをする構成ソフトウェアを選択してください。

！ 注意事項

バージョン 07-00 から、それ以降のバージョンへのアップグレードインストールには対応していません。

(2) UNIX の場合のインストール方法

UNIX の場合のインストール方法について説明します。なお、インストール作業は root 権限が設定されたユーザが実施してください。

uCosminexus Service Platform に含まれるすべての構成ソフトウェアをインストールします。uCosminexus Service Platform に含まれる構成ソフトウェアを次に示します。

- Cosminexus cFramework
- Cosminexus Component Container
- Cosminexus Component Transaction Monitor
- Cosminexus DABroker Library
- Cosminexus Developer's Kit for Java™
- Cosminexus Performance Tracer
- Cosminexus Reliable Messaging
- Cosminexus Service Coordinator
- Cosminexus TPBroker
- Cosminexus Web Services - Security
- Cosminexus XML Processor
- Hitachi Web Server
- uCosminexus Service Platform - Base

なお、上記の構成ソフトウェアがすでにインストールされている場合は、インストール済みの構成ソフトウェアのバージョンが古いものだけをインストールしてください。

(3) インストール後のディレクトリ構成

uCosminexus Service Platform および Cosminexus Operator を構成するソフトウェアのうち、Cosminexus Service Coordinator および Cosminexus Operator Plug-in のインストール後のディレクトリ構成を次の図に示します。Cosminexus Service Coordinator および Cosminexus Operator Plug-in 以外の構成ソフトウェアのインストール後のディレクトリ構成については、マニュアル「Cosminexus システム構築ガイド」を参照してください。

2. システムの構築

図 2-2 インストール後のディレクトリ構成

<Cosminexusインストールディレクトリ>	
CSC	…HCSCのインストールディレクトリ
bin	…コマンド実行用のバッチファイルを格納するディレクトリ
config	…定義類を格納するディレクトリ
dba	…HCSC-DB Adapterの定義を格納するディレクトリ
templates	…HCSC-DB Adapterの定義のテンプレートを格納するディレクトリ
manager	…HCSC-Managerの定義を格納するディレクトリ
templates	…HCSC-Managerの定義のテンプレートを格納するディレクトリ
msg	…実行時にHCSC-Messagingの定義を格納するディレクトリ
DB*	…HiRDBの定義ファイルを格納するディレクトリ
area*	…RDエリアを格納するディレクトリ
bats*	…HiRDBのバッチファイルを格納するディレクトリ
conf*	…定義ファイルを格納するディレクトリ
single*	…single定義ファイルを格納するディレクトリ
large*	…DBサイズ (large) 定義ファイルを格納するディレクトリ
middle*	…DBサイズ (middle) 定義ファイルを格納するディレクトリ
small*	…DBサイズ (small) 定義ファイルを格納するディレクトリ
ini*	…定義ファイルを格納するディレクトリ
lib	…earファイルやjarファイルを格納するディレクトリ
interfaces	…サービスリクエストに提供するスタブを格納するディレクトリ
wsdls	…サービスリクエストに提供するWSDLを格納するディレクトリ
log	…実行時やインストール時にログを出力するディレクトリ
manager	…HCSC-Managerのログを出力するディレクトリ
mbean-plugins	…MBeanの定義情報とjarファイルを格納するディレクトリ
config	…MBeanの定義情報を格納するディレクトリ
lib	…MBeanのjarファイルを格納するディレクトリ
repository	…リポジトリディレクトリ
samples	…各種サンプルを格納するディレクトリ
routing	…HCSC-Messagingのルーティング定義ファイルのサンプルを格納するディレクトリ
spool	…実行時に一時ファイルを出力するディレクトリ
manager	…HCSC-Managerの内部情報を格納するディレクトリ
migration	…バージョン移行用の一時ファイルを出力するディレクトリ
msg	…HCSC-Messagingが実行時に一時ファイルを出力するディレクトリ
sql	…テーブル生成・削除SQLのサンプル
system	…HCSCが使用する各種ファイルを格納するディレクトリ
manager	…HCSC-Managerが使用する各種ファイルを格納するディレクトリ
setup*	…簡易構築定義ファイルを格納するディレクトリ
migration	…バージョン移行用の各種ファイルを格納するディレクトリ
msg	…HCSC-Messagingが使用する各種ファイルを格納するディレクトリ
wsdls	…開発環境に提供するWSDLを格納するディレクトリ
plugins*	…Cosminexus共通のプラグインディレクトリ
eclipse*	…Eclipseへ組み込み時に指定するディレクトリ
features*	…フィーチャーを格納するディレクトリ
plugins*	…Eclipseに組み込むプラグインを格納するディレクトリ

注 uCosminexus Operator Plug-inの場合、 で示すディレクトリだけになります。

注※ Windowsの場合だけ存在するディレクトリになります。

(4) インストール後の作業

Windows の場合、uCosminexus Service Platform および uCosminexus Operator のインストールが終了したら、マシンを再起動します。

なお、運用環境で画面を利用するには、uCosminexus Service Platform または

uCosminexus Operator をインストールしたあとに、次のソフトウェアのインストールおよびセットアップが必要です。

なお、Eclipse のインストールについては、Eclipse のドキュメントを参照してください。

- Eclipse Platform Runtime Binary 3.2.2 以降（3.3 は対象外）

参考

uCosminexus Operator に含まれる Server Plug-in の機能や設定方法および使用方法については、次の Cosminexus の関連マニュアルを参照してください。

- Cosminexus 機能解説
- Cosminexus システム構築ガイド
- Cosminexus システム運用ガイド
- Cosminexus アプリケーション設定操作ガイド

2.1.3 Eclipse への HCSC-Manager Plug-in の組み込み

HCSC-Manager Plug-in を Eclipse へ組み込みます。

HCSC-Manager Plug-in を組み込む手順を次に示します。

1. Eclipse を起動し、メニューから、[ヘルプ] - [ソフトウェアの更新] - [構成の管理] を選択します。
[製品構成] ダイアログが表示されます。
2. ツリービュー上で右クリックし、コンテキストメニューを表示させて [追加] - [拡張口ケーション] を選択します。
[フォルダ参照] ダイアログが表示されます。
3. 次のフォルダを指定します。
<Cosminexus のインストールディレクトリ>¥plugins¥eclipse
4. [OK] ボタンをクリックします。
[インストール / 更新] ダイアログが表示されます。
5. [インストール / 更新] ダイアログに [変更を適用] ボタンがある場合は [変更を適用] ボタンを、[変更を適用] ボタンがない場合は [はい] ボタンをクリックしてください。
 - [変更を適用] ボタンがある場合
パースペクティブの変更の受け入れを確認するダイアログが表示されます。ここで、[はい] ボタンをクリックして、手動で再起動します。再起動されると組み込みは完了です。
 - [変更を適用] ボタンがない場合
[はい] ボタンをクリックすると、再起動が実行されます。再起動されると、組み込みは完了です。

2. システムの構築

HCSC-Manager Plug-in が正しく組み込まれたかどうかについては、メニューから [ヘルプ] - [ソフトウェアの更新] - [構成の管理] を選択して表示される、[製品構成] ダイアログで確認できます。

Cosminexus を再インストールしたときの注意事項

バージョンアップなどによって Cosminexus を再インストールした場合、次に示すどちらかの操作が必要になります。

- 拡張ロケーションの削除

拡張ロケーションを削除して再度プラグインを組み込みます。拡張ロケーションの削除は Eclipse のインストール先 (eclipse.exe があるフォルダ) で次のコマンドを実行します。

```
java -cp startup.jar org.eclipse.core.launcher.Main
      -application org.eclipse.update.core.standaloneUpdate
      -command removeSite
      -to "<Cosminexus のインストールディレクトリ >%plugins%\eclipse"
```

- Eclipse の起動引数の指定

Eclipse の起動引数に -clean を指定して再起動します。

```
eclipse.exe -clean
```

2.1.4 環境設定

uCosminexus Service Platform および uCosminexus Operator をインストールしたマシン上で次の設定を行います。

リポジトリの設定

リポジトリの設定については、「4.1 リポジトリの概要」を参照してください。

環境変数の設定 (uCosminexus Operator をインストールしたマシンの場合)

uCosminexus Operator をインストールしたマシンでは、次の環境変数を設定します。

表 2-1 uCosminexus Operator を利用する場合に設定する環境変数

環境変数名	設定値
PATH	<Cosminexus のインストールディレクトリ >%jdk%\bin
TZ	「JST-9」など

2.1.5 HCSC-Manager を使用するための Management Server の設定

HCSC-Manager を使用するための設定を、HCSC-Manager の接続先となる実行環境のマシンで実施します。設定手順を次に示します。

(1) mserver.properties (Management Server 環境設定ファイル) の設定

実行環境の mserver.properties (Management Server 環境設定ファイル) に、プロパティを追加します。mserver.properties の格納先と mserver.properties に追加するプロパティを次に示します。

(a) mserver.properties の格納先

```
<Cosminexusのインストールディレクトリ
>%manager%config%mserver.properties
```

(b) 追加するプロパティ

```
com.cosminexus.mngsvr.management.enabled=true
com.cosminexus.mngsvr.management.connector.enabled=true
com.cosminexus.mngsvr.management.port=28099
```

注

HCSC-Manager からの接続ポート番号を指定します。設定を省略した場合、デフォルトで 28099 が設定されます。

(2) mserver.cfg (Management Server 用オプション定義ファイル) の設定

実行環境の mserver.cfg (Management Server 用オプション定義ファイル) に、プロパティを追加します。

mserver.cfg の格納先と mserver.properties に追加するプロパティを次に示します。

(a) mserver.cfg の格納先

```
<Cosminexusのインストールディレクトリ>%manager%config%mserver.cfg
```

(b) 追加するプロパティ

データベースで Oracle を使用する場合

```
web.add.class.path=<Oracle JDBC Thin DriverのJARファイル名(フルパス)>
```

注

Oracle Client のインストールディレクトリ下の「jdbc/lib/ojdbc14.jar」が該当する JAR ファイルです。

データベースで HiRDB を使用する場合

HiRDB/Single Server または HiRDB/Parallel Server をインストールしているとき

2. システムの構築

- Windows の場合

```
add.library.path=<HiRDBインストールディレクトリ>%CLIENT%UTL
```

- UNIX の場合

```
add.library.path=<HiRDB運用ディレクトリ>/client/lib
```

HiRDB/Run Time をインストールしているとき

- Windows の場合

```
add.library.path=<HiRDBのインストールディレクトリ>%utl
```

- UNIX の場合

```
add.library.path=<HiRDBのインストールディレクトリ>/client/lib
```

JDBC ドライバに HiRDB Type4 JDBC Driver を利用するとき

```
web.add.class.path=<HiRDB Type4 JDBC DriverのJARファイル名(フルパス)>
```

注

HiRDB のインストールディレクトリ下の「pdjdbc2.jar」が該当する JAR ファイルです。

(3) 運用管理エージェントの起動（起動済みの場合は再起動）

運用管理エージェントの起動については、マニュアル「Cosminexus システム運用ガイド」を参照してください。

(4) Management Server の起動（起動済みの場合は再起動）

Management Server の起動については、マニュアル「Cosminexus システム運用ガイド」を参照してください。

(5) MBean の起動確認

<Cosminexus のインストールディレクトリ>%manager%log% 下の最新の mngsvr[n].log ファイルに KEOS27010-I メッセージが 20 個出力されることを確認します。

なお、KEOS27010-I メッセージの可変値のファイル名には、次に示すどれかが出力され

ます。

- 50cscbp.xml
- 50cscmsg.xml
- 50cscmt.xml

! 注意事項

バージョン 07-50 以降では、「<Cosminexus のインストールディレクトリ >¥CSC¥mbean-plugins」配下のファイルを、「<Cosminexus のインストールディレクトリ >¥manager¥mbean-plugins」にコピーする作業は不要です。

次のファイルが存在する場合、ファイルを削除したあとに (3) ~ (5) の手順を行ってください。

- <Cosminexus のインストールディレクトリ >¥manager¥mbean-plugins¥config¥50cscbp.xml
- <Cosminexus のインストールディレクトリ >¥manager¥mbean-plugins¥config¥50cscmsg.xml
- <Cosminexus のインストールディレクトリ >¥manager¥mbean-plugins¥lib¥cscbp_mbean.jar
- <Cosminexus のインストールディレクトリ >¥manager¥mbean-plugins¥lib¥cscmsg_mbean.jar

2.1.6 アンインストール

uCosminexus Service Platform, uCosminexus Operator, および構成ソフトウェアについて、アンインストールの対象とアンインストール方法を説明します。

(1) アンインストールする前に

uCosminexus Service Platform の構成ソフトウェアである Cosminexus Service Coordinator, および uCosminexus Operator をアンインストールする前に知っておかなければならない内容と、アンインストールする前に行う作業について説明します。

(a) 対象となるファイルおよびディレクトリ

通常インストーラで作成したファイル、ディレクトリだけが削除されます。削除対象のディレクトリ配下にファイルを作成した場合は、アンインストール時に削除されるため注意してください。ただし、次のディレクトリ下は削除されません。

- <Cosminexus インストールディレクトリ >¥CSC¥config¥manager¹
- <Cosminexus インストールディレクトリ >¥CSC¥config¥msg²
- <Cosminexus インストールディレクトリ >¥CSC¥log¥manager
- <Cosminexus インストールディレクトリ >¥CSC¥repository

また、以下のディレクトリ配下のファイルについては、インストール後に、製品によって作成されますが、アンインストール時に削除されます。

2. システムの構築

- <Cosminexus インストールディレクトリ >%CSC%\DB\area
- <Cosminexus インストールディレクトリ >%CSC%\DB\bats
- <Cosminexus インストールディレクトリ >%CSC%\pool\manager
- <Cosminexus インストールディレクトリ >%CSC%\pool\migration
- <Cosminexus インストールディレクトリ >%CSC%\pool\msg
- <Cosminexus インストールディレクトリ >%CSC%\system\msg

注 1 <Cosminexus インストールディレクトリ >%CSC%\config\manager\templates の配下は削除されます。

注 2 Windows 版の場合、Cosminexus Service Coordinator 01-50 以前のバージョンから、Cosminexus Service Coordinator 01-60 以降のバージョンにアップグレードインストールしたあとにアンインストールすると、<Cosminexus インストールディレクトリ >%CSC%\config\msg\cmdconf.bat が削除されます。そのため、アンインストールしたあとで、再度インストールしてシステムを構築する場合は、cmdconf.bat に設定した内容を再設定する必要があります。なお、Cosminexus Service Coordinator 01-60 以降のバージョンを新規インストールしたあとにアンインストールした場合は、<Cosminexus インストールディレクトリ >%CSC%\config\msg\cmdconf.bat は削除されません。

(b) アンインストールする前に行う作業

Cosminexus Service Coordinator をアンインストールする前に、次の作業を実施する必要があります。uCosminexus Operator をアンインストールする場合、この作業を実施する必要はありません。

システムのアンセットアップ

システムをアンセットアップします。システムをアンセットアップしないでアンインストールすると、データベースのテーブル、J2EE サーバの J2EE アプリケーションおよび Cosminexus Reliable Messaging のキューが削除されずに残ってしまいます。

システムのアンセットアップ方法については、「3.2 システムのアンセットアップ」を参照してください。

J2EE サーバおよび Management Server の停止

J2EE サーバおよび Management Server を停止します。

J2EE サーバおよび Management Server の停止方法については、マニュアル「Cosminexus システム構築ガイド」、マニュアル「Cosminexus システム運用ガイド」を参照してください。

(2) Windows の場合のアンインストール方法

Windows 2003 の場合のアンインストール方法について説明します。なお、アンインストール作業は Administrator 権限が設定されたユーザが実施してください。

(a) uCosminexus Service Platform または uCosminexus Operator の構成ソフトウェアをすべてアンインストールする場合

uCosminexus Service Platform または uCosminexus Operator の構成ソフトウェアをすべてアンインストールする場合の手順を次に示します。

なお、次の二つの方法のうち、方法 2 は、uCosminexus Service Platform をアンインストールする場合にだけ利用できます。

方法 1

1. Windows の [スタート] メニューから、[コントロールパネル] の [プログラムの追加と削除] を選択します。
[プログラムの追加と削除] ダイアログが表示されます。
2. [現在インストールされているプログラム] のリストから Cosminexus の製品名を選択し、[変更と削除] ボタンをクリックします。
アンインストール種別を確認するダイアログが表示されます。
3. [はい] ボタンをクリックします。
アンインストールするプログラムの確認画面が表示されます。
4. アンインストールするプログラムを確認し、[次へ] ボタンをクリックします。
アンインストールが開始され、プログラムが削除されます。

方法 2

1. Windows の [スタート] メニューから、[すべてのプログラム] - [Cosminexus] - [uCosminexus Service Platform アンインストール] (または [uCosminexus Operator アンインストール]) を選択します。
アンインストール種別を確認するダイアログが表示されます。
2. [はい] ボタンをクリックします。
アンインストールするプログラムの確認画面が表示されます。
3. アンインストールするプログラムを確認し、[次へ] ボタンをクリックします。
アンインストールが開始され、プログラムが削除されます。

(b) uCosminexus Service Platform または uCosminexus Operator の構成ソフトウェアを単体でアンインストールする場合

uCosminexus Service Platform または uCosminexus Operator の構成ソフトウェアを単体でアンインストールする場合の手順を次に示します。

なお、次の二つの方法のうち、方法 2 は、uCosminexus Service Platform の構成ソフトウェアをアンインストールする場合にだけ利用できます。

方法 1

1. Windows の [スタート] メニューから、[コントロールパネル] の [プログラムの追

2. システムの構築

加と削除]を選択します。

[プログラムの追加と削除]ダイアログが表示されます。

2. [現在インストールされているプログラム]のリストから Cosminexus の製品名を選択し,[変更と削除]ボタンをクリックします。
アンインストール種別を確認するダイアログが表示されます。
3. [いいえ]ボタンをクリックします。
プログラムを選択する画面が表示されます。
4. アンインストールしたいプログラムのチェックボックスをチェックし,[次へ]ボタンをクリックします。
アンインストールするプログラムの確認画面が表示されます。
5. アンインストールするプログラムを確認し,[次へ]ボタンをクリックします。
アンインストールが開始され,プログラムが削除されます。

方法2

1. Windows の [スタート]メニューから,[すべてのプログラム] - [Cosminexus] - [uCosminexus Service Platform アンインストール](または [uCosminexus Operator アンインストール])を選択します。
アンインストール種別を確認するダイアログが表示されます。
2. [いいえ]ボタンをクリックします。
プログラムを選択する画面が表示されます。
3. アンインストールしたいプログラムのチェックボックスをチェックし,[次へ]ボタンをクリックします。
アンインストールするプログラムの確認画面が表示されます。
4. アンインストールするプログラムを確認し,[次へ]ボタンをクリックします。
アンインストールが開始され,プログラムが削除されます。

(3) UNIX の場合のアンインストール方法

UNIX の場合のアンインストール方法について説明します。

uCosminexus Service Platform のアンインストールは,日立 PP インストーラを使用します。アンインストールには root 権限が必要です。

アンインストール時の注意事項などについては,マニュアル「Cosminexus システム構築ガイド」のアンインストール方法に関する内容を参照してください。

2.2 構成の形態と選択

Cosminexus サービスプラットフォームのどの機能を使用し、どのような運用をしたいかによって、データベースと Cosminexus RM の使用有無が異なります。使用する機能ごとに、データベースと Cosminexus RM の使用有無を次の表に示します。

表 2-2 使用したい機能ごとのデータベースと Cosminexus RM の使用有無

使用したい機能		データベース	Cosminexus RM
同期受付を使用したい		×	×
非同期受付を使用したい			
同期サービスアダプタを使用したい		×	×
非同期サービスアダプタを使用したい			
ビジネスプロセスを使用したい	永続化するビジネスプロセスを使用したい		
	永続化しないビジネスプロセスを使用したい ¹	×	×
プロセスインスタンスの実行履歴を管理したい			
電文の実行履歴を管理したい			×
DB アダプタを使用したい		×	×

(凡例)

○ : 必須です。

× : 必須ではありません。

注 1

永続化しないビジネスプロセスを使用する場合、開発環境で定義できるプロセスに制限があるため注意してください。詳細は「5.5.2 永続化するビジネスプロセスと永続化しないビジネスプロセス」を参照してください。

注 2

DB アダプタを使用する場合、HCSC サーバが稼働しているマシン上にデータベースは不要です。しかし、DB アダプタから接続するサービス稼働マシンでは、データベースが必要になります。

表 2-2 から、データベースと Cosminexus RM の使用有無による構成形態は、次の三つのパターンあることがわかります。

- データベースと Cosminexus RM の両方を使用する
- データベースと Cosminexus RM の両方を使用しない
- データベースを使用して Cosminexus RM を使用しない

それぞれパターンによって、システム構築時の実行環境に関する設定内容などが異なります。なお、データベースと Cosminexus RM の使用有無の設定は、HCSC サーバセットアップ定義ファイルで定義します。また、データベースを使用しない場合はデータ

2. システムの構築

ベースの設定が不要で、Cosminexus RM を使用しない場合は Cosminexus RM の設定が不要です。

システム構築時の実行環境に関する設定内容については、それぞれ次の個所を参照してください。

データベースと Cosminexus RM の両方を使用する場合

「2.3.1 HCSC サーバ構成定義ファイルを設定する」～「2.3.8 変換テーブルを登録する」

データベースと Cosminexus RM の両方を使用しない場合

「2.3.9 データベースと Cosminexus RM の両方を使用しない場合の実行環境に関する設定」

データベースを使用して Cosminexus RM を使用しない

「2.3.10 データベースを使用して Cosminexus RM を使用しない場合の実行環境に関する設定」

2.3 実行環境に関する設定

実行環境に関する設定には、次のものがあります。

- HCSC サーバ構成定義ファイルの設定
- HCSC サーバセットアップ定義ファイルの設定
- 連携セットアップ定義ファイルの設定
- HCSC サーバランタイム定義ファイルの設定
- ユーザ定義受付ランタイム定義ファイルの設定
- データベースの設定
- 変換テーブルの登録

実行環境に関する設定は、データベースと Cosminexus RM の使用有無によって設定内容が異なります。実行環境に関する設定内容については、それぞれ次の個所を参照してください。

データベースと Cosminexus RM の両方を使用する場合

「2.3.1 HCSC サーバ構成定義ファイルを設定する」～「2.3.8 変換テーブルを登録する」

データベースと Cosminexus RM の両方を使用しない場合

「2.3.9 データベースと Cosminexus RM の両方を使用しない場合の実行環境に関する設定」

データベースを使用して Cosminexus RM を使用しない

「2.3.10 データベースを使用して Cosminexus RM を使用しない場合の実行環境に関する設定」

2.3.1 HCSC サーバ構成定義ファイルを設定する

HCSC サーバの構成定義時に必要な情報は、HCSC サーバ構成定義ファイルに定義します。

(1) HCSC サーバ構成定義ファイルの作成

HCSC サーバの構成定義情報の設定は、XML 形式の HCSC サーバ構成定義ファイルとして、次に示すディレクトリに格納されているサンプルファイルを利用して作成します。

```
<Cosminexusのインストールディレクトリ>%CSC%config%manager%templates%cscsvsetup.xml
```

定義したファイルは、HCSC サーバのセットアップ時に使用します。HCSC サーバのセットアップについては「3.1.3 HCSC サーバをセットアップする」を参照してください。

2. システムの構築

このファイルには、ユーザ ID やパスワードなどの情報が含まれるため、アクセス権を設定して管理する必要があります。

(2) 設定できる要素

HCSC サーバ構成定義ファイルに設定できる要素を次の表に示します。

表 2-3 HCSC サーバ構成定義ファイルに設定できる要素 (データベースと Cosminexus RM の両方を使用する場合)

項番	分類	使用するタグ名	要素
1	cluster の定義 ¹	name	クラスタ名
2		type ¹	クラスタ種別 (LB または HA)
3	cosminexus-manager の定義	name	Cosminexus Manager 名
4		ip-address ²	Cosminexus Manager の IP アドレス
5		port ²	Cosminexus Manager のリモート管理機能への外部接続ポート番号
6		id	Management Server の管理ユーザ ID
7		password ¹	Management Server の管理ユーザパスワード
8	hcsc-server の定義	neme	HCSC サーバ名
9		id	HCSC サーバが使用するデータベースのユーザ ID
10		password	HCSC サーバが使用するデータベースのパスワード
11		j2ee-server-name	HCSC サーバが使用する J2EE サーバ名
12		setup-properties	HCSC サーバセットアッププロパティファイル名
13	soap-reception の定義 ₁	ip-address ¹ ₂	Web サーバの IP アドレス
14		port ²	Web サーバのポート番号
15		protocol ²	プロトコル種別 (http または https)

項番	分類	使用するタグ名	要素
16	jms-reception の定義 1 3	ip-address ¹ 2	Web サーバの IP アドレス
17		port ²	Web サーバのポート番号
18		protocol ²	プロトコル種別 (http または https)
19		rm-service-conte xt-root ²	RM のサービスコンテキストルート
20		rm-service-name 1 2	RM のサービス名
21	jms-physical-reception の定義 ^{1 4}	ip-address ¹ 2	Web サーバの IP アドレス
22		port ²	Web サーバのポート番号
23		protocol ²	プロトコル種別 (http または https)
24		rm-service-conte xt-root ²	RM のサービスコンテキストルート
25		rm-service-name 1 2	RM のサービス名
26	ejb-reception の定義 ¹	ip-address ¹ 2	NameServer の IP アドレス
27		port ²	NameServer のポート番号

注 1 省略できます。

注 2 2 回目以降設定を変えて再セットアップすると、値が上書きされます。

注 3 クラスタ種別が「HA」の場合に設定します。クラスタ種別が「LB」の場合は、設定しても無視されます。

注 4 クラスタ種別が「LB」の場合に設定します。クラスタ種別が「HA」の場合は、設定しても無視されます。

HCSC サーバ構成定義ファイルの詳細については、「9. 定義ファイル」の「HCSC サーバ構成定義ファイル」を参照してください。

2.3.2 HCSC サーバセットアップ定義ファイルを設定する

各 HCSC サーバのセットアップ時に必要な情報は、HCSC サーバセットアップ定義ファイルに定義します。

(1) HCSC サーバセットアップ定義ファイルの作成

HCSC サーバのセットアップ情報の設定は、J2SE のプロパティ形式の HCSC サーバセットアップ定義ファイルとして、次に示すディレクトリに格納されているサンプル

2. システムの構築

ファイルを利用して作成します。

```
<Cosminexusのインストールディレクトリ
>%CSC%¥config¥manager¥templates¥cscsvsetup.properties
```

(2) 設定できるプロパティ

HCSC サーバセットアップ定義ファイルに定義するプロパティを次に示します。

表 2-4 HCSC サーバセットアップ定義ファイルに定義するプロパティ（データベースと Cosminexus RM の両方を使用する場合）

項番	分類	プロパティ名	内容
1	セットアップ 構成関連	db-use	データベースの使用有無
2		rm-use	Cosminexus RM の使用有無
3		hcscserver-data-filepath	HCSC サーバのシステム管理情報の出力先
4	標準受付関連	request-ejb	標準の同期受付 (SessionBean) の使用有無
5		request-soap	標準の同期受付 (Web サービス) の使用有無
6		request-jms	標準の非同期受付 (MDB (WS-R)) の使用有無
7		request-jms.maxmessage	標準の非同期受付 (MDB (WS-R)) のキューの最大メッセージ数
8		request-dbq	標準の非同期受付 (MDB (DB キュー)) の使用有無
9		request-dbq.maxmessage	標準の非同期受付 (MDB (DB キュー)) のキューの最大メッセージ数
10		request-jms-rdarea	標準の非同期受付 (MDB (WS-R)) の RD エリア名
11		request-dbq-rdarea	標準の非同期受付 (MDB (DB キュー)) の RD エリア名
12		request-dbq-maxlen	標準の非同期受付 (MDB (DB キュー)) の最大メッセージ長
13		ユーザ定義受付関連	request-userdef-soap
14	J2EE 関連	naming-service-hostname	ネーミングサービスのホスト名
15		naming-service-port	ネーミングサービスのポート番号

項番	分類	プロパティ名	内容
16	Cosminexus RM 関連	rm-systemname	Cosminexus RM のシステム名
17		rm-displayname	Cosminexus RM の表示名
18	DB コネクタ関 連	dbcon-xadisplayname	XATransaction 用または LocalTransaction 用の DB Connector の表示名
19		dbcon-nodisplayname	NoTransaction 用 DB Connector の表示名
20	転送キュー関 連	transreq-maxmessage	HCSC サーバ間転送受信キューの 最大メッセージ数
21		transreq-jms-rdarea	HCSC サーバ間転送受信キューの RD エリア名
22	データベース 関連	dbtype	使用するデータベース種別
23		jdbc-type	JDBC ドライバ種別
24		jdbc-url	JDBC 用データベース URL
25		jdbc-dbhostname	データベースのホスト名
26		jdbc-dbconnectinfo	データベースの接続情報
27		db-character-sets	データベース文字コード種別
28	データベース の RD エリア (表領域) 情報	cscserverinfo-tbl-area	HCSC 基本情報用テーブル領域
29		server-trans-tbl-area	連携 HCSC 用テーブル領域
30		location-tbl-area	ロケーション用テーブル領域
31		routing-tbl-area	ルーティング用テーブル領域
32		cv-tbl-area	データ変換用テーブル領域
33		exehistory-tbl-area	実行履歴情報テーブル領域
34		exehistory-idx-area	実行履歴情報テーブルのインデク スを格納する領域
35		process-tbl-area	ビジネスプロセス基盤用 PROCESS テーブルを格納する領 域
36		process-idx-area	ビジネスプロセス基盤用 PROCESS テーブルのインデクス を格納する領域
37		activity-tbl-area	ビジネスプロセス基盤用 ACTIVITY テーブルを格納する領 域
38		activity-idx-area	ビジネスプロセス基盤用 ACTIVITY テーブルのインデクス を格納する領域
39		link-tbl-area	ビジネスプロセス基盤用 LINK テーブルを格納する領域

2. システムの構築

項番	分類	プロパティ名	内容
40		link-idx-area	ビジネスプロセス基盤用 LINK テーブルのインデクスを格納する領域
41		correlationset-tbl-area	ビジネスプロセス基盤用 CORRELATIONSET テーブルを格納する領域
42		correlationset-idx-area	ビジネスプロセス基盤用 CORRELATIONSET テーブルのインデクスを格納する領域
43		string-variable-tbl-area	ビジネスプロセス基盤用 STRING-VARIABLE テーブルを格納する領域
44		string-variable-idx-area	ビジネスプロセス基盤用 STRING-VARIABLE テーブルのインデクスを格納する領域
45		numeric-variable-tbl-area	ビジネスプロセス基盤用 NUMERIC-VARIABLE テーブルを格納する領域
46		numeric-variable-idx-area	ビジネスプロセス基盤用 NUMERIC-VARIABLE テーブルのインデクスを格納する領域
47		boolean-variable-tbl-area	ビジネスプロセス基盤用 BOOLEAN-VARIABLE テーブルを格納する領域
48		boolean-variable-idx-area	ビジネスプロセス基盤用 BOOLEAN-VARIABLE テーブルのインデクスを格納する領域
49		message-variable-tbl-area	ビジネスプロセス基盤用 MESSAGE-VARIABLE テーブルを格納する領域
50		message-variable-idx-area	ビジネスプロセス基盤用 MESSAGE-VARIABLE テーブルのインデクスを格納する領域
51		message-variable-val-area	ビジネスプロセス基盤用 MESSAGE-VARIABLE テーブルの VariableValue 列を格納する領域
52		message-relation-tbl-area	ビジネスプロセス基盤用 MESSAGE-RELATION テーブルを格納する領域
53		message-relation-idx-area	ビジネスプロセス基盤用 MESSAGE-RELATION テーブルのインデクスを格納する領域
54		sql-scriptfilename	SQL スクリプトファイルパス

項番	分類	プロパティ名	内容
55	クライアント定義ファイル	soap-client-def	HCSC サーバ間転送で使用する Cosminexus SOAP クライアント定義ファイル名
56	サーバ間転送関連	csctrans-jms.instance.maximum	サーバ間転送 (JMS 受信) インスタンス最大数

注 「ON」を設定する、またはプロパティを省略します。

HCSC サーバセットアップ定義ファイルの詳細については、「9. 定義ファイル」の「HCSC サーバセットアップ定義ファイル」を参照してください。

2.3.3 連携セットアップ定義ファイルを設定する

HCSC サーバ連携のセットアップ時に必要な情報は、連携セットアップに定義します。

(1) 連携セットアップ定義ファイルの作成

HCSC サーバ連携時のセットアップ情報の設定は、J2SE のプロパティ形式の連携セットアップ定義ファイルとして、次に示すディレクトリに格納されているサンプルファイルを利用して作成します。このファイルは、J2SE のプロパティファイル形式で作成します。

```
<Cosminexusのインストールディレクトリ
>%CSC%config%manager%templates%cscconsetup.properties
```

定義したファイルは、HCSC サーバの連携をセットアップするときに使用します。HCSC サーバの連携のセットアップについては「3.1.6 連携をセットアップする」を参照してください。

このファイルには、ユーザ ID やパスワードなどの情報が含まれるため、アクセス権を設定して管理する必要があります。

(2) 設定できるプロパティ

連携セットアップ定義ファイルに定義できるプロパティを次に示します。

表 2-5 連携セットアップ定義ファイルに定義するプロパティ

項番	プロパティ名	内容
1	SyncTransKind	通信手段オプションフラグ
2	TransQueURL	転送先のキュー間転送用 Web アプリケーションの URL
3	TransQueUserID	転送キュー作成用ベーシック認証ユーザ ID

2. システムの構築

項番	プロパティ名	内容
4	TransQuePassword	転送キュー作成用ベーシック認証パスワード
5	TransQueQosInfo	連携 Qos 情報
6	TransQueMaxMessage	転送キューのメッセージ最大数
7	WebURL	SOAP 転送用宛先 URL
8	WebUserID	SOAP 転送用 Web サービスベーシック認証ユーザ ID
9	WebPassword	SOAP 転送用 Web サービスベーシック認証パスワード
10	RMRdArea	転送キュー作成用 RD エリア名
11	FirstSetup	連携先クラスタ情報を追加するサーバの種別
12	ConnectJ2eeServerName	連携先クラスタの J2EE サーバ名
13	NamingServiceHostName	連携先クラスタのネーミングサービスホスト名
14	NamingServicePort	連携先クラスタのネーミングサービスポート番号

連携セットアップ定義ファイルの詳細については、「9. 定義ファイル」の「連携セットアップ定義ファイル」を参照してください。

2.3.4 HCSC サーバランタイム定義ファイルを設定する

HCSC サーバの起動時に必要なランタイム情報は、HCSC サーバランタイム定義ファイルに定義します。

(1) HCSC サーバランタイム定義ファイルの作成

HCSC サーバのランタイム定義は、HCSC サーバランタイム定義ファイルとして、次に示すディレクトリに格納されているサンプルファイルを利用して作成します。このファイルは、J2SE のプロパティファイル形式で作成します。

```
<Cosminexusのインストールディレクトリ  
>%CSC%\config\manager\templates\cscsvconfig.properties
```

このファイルは HCSC サーバの定義情報を設定するときに使用します。HCSC サーバの定義については「3.1.4 HCSC サーバの定義情報を設定する」を参照してください。

(2) 設定できるプロパティ

HCSC サーバランタイム定義ファイルに定義するプロパティを次に示します。

表 2-6 HCSC サーバランタイム定義ファイルに定義するプロパティ (データベースと Cosminexus RM の両方を使用する場合)

項番	分類	プロパティ名	内容	
1	実行履歴管理	historyrecord	実行履歴採取の有無	
2		historyrecord-data	実行履歴電文データ (ユーザ電文) 採取の有無	
3		historyrecord-binarylength	実行履歴採取電文データ (ユーザ電文) の長さ	
4	ログトレース	methodtrace-filepath	メソッドトレース出力先パス	
5		requesttrace-filepath	リクエストトレース出力先パス	
6		methodtrace-filenum	メソッドトレースの最大面数	
7		requesttrace-filenum	リクエストトレースの最大面数	
8		methodtrace-filesize	メソッドトレースファイル 1 面当たりの最大サイズ	
9		requesttrace-filesize	リクエストトレースファイル 1 面当たりの最大サイズ	
10		methodtrace-level	メソッドトレースの出力レベル	
11		requesttrace	リクエストトレースの採取の有無	
12		bptrace-level	ビジネスプロセス基盤のメソッドトレースの出力レベル	
13		bptrace-filenum	ビジネスプロセス基盤のメソッドトレースの面数	
14		bptrace-filesize	ビジネスプロセス基盤のメソッドトレースのサイズ	
15		DB 情報	dab-bufsize	DABroker からの受信データのバッファ長
16			jdbc-bufsize	JDBC で取り扱うバッファ長
17			jdbc-longvarbinary	データベースのアクセス方法
18	jdbc-longvarbinary-access-size		HiRDB に一度に要求するデータの長さ	
19	jdbc-maxbinarysize		取得するデータの最大長	
20	jdbc-longvarbinary-truncerror		エラーの指定	

2. システムの構築

項番	分類	プロパティ名	内容
21	標準受付関連	request-ejb.instance.minimum	標準の同期受付 (SessionBean) のインスタンス最小数
22		request-ejb.instance.maximum	標準の同期受付 (SessionBean) のインスタンス最大数
23		request-ejb.ctm	CTM 連携の使用有無
24		request-ejb.parallel.count	CTM がアプリケーションを呼び出すために用意するスレッド数
25		request-ejb.optional.name	標準の同期受付 (SessionBean) の別名
26		request-soap.instance.minimum	標準の同期受付 (Web サービス) の最小同時実行数
27		request-soap.instance.maximum	標準の同期受付 (Web サービス) の最大同時実行数
28		request-soap.exclusive.threads	標準の同期受付 (Web サービス) の占有スレッド数
29		request-soap.queue-size	標準の同期受付 (Web サービス) の実行待ちキューのサイズ
30		request-jms.instance.maximum	標準の非同期受付 (MDB (WS-R)) のインスタンス最大数
31		receptionstop-monitor-timer	標準受付, HCSC サーバ転送用受けサービス停止処理のタイムアウト時間
32	サービスアダプタ関連	soapfault-targetnamespace-filepath	SOAP Fault をユーザ定義例外として扱うかどうか
33	データ変換関連	xmltelegram-maxcache-num	XML 電文をキャッシュできる数
34		telegram-validation	電文フォーマットに対して, 送受信する電文が適切かを検証するかどうか
35	実行タイム監視	cscserver-connect-timeout	サーバ間連携の呼び出しを監視するためのタイムアウト値

HCSC サーバランタイム定義ファイルの詳細については、「9. 定義ファイル」の「HCSC サーバランタイム定義ファイル」を参照してください。

! 注意事項

07-50 以前の場合、または 07-60 以降で telegram-validation プロパティに「OFF」を設定した場合、電文フォーマットに対して、送受信する電文が適切かどうかを検証しません。そのため、telegram-validation プロパティに「ON」を設定して、送受信する電文が適切かどうかを検証すると、今までサービス呼び出しに成功していた電文が、サービスアダプタでエラーになることがあります。

2.3.5 ユーザ定義受付ランタイム定義ファイルを設定する

ユーザ定義受付（Web サービス）の情報は、ユーザ定義受付ランタイム定義ファイルに設定します。

（1）ユーザ定義受付ランタイム定義ファイルの作成

ユーザ定義受付のランタイム定義は、ユーザ定義受付ランタイム定義ファイルとして、次に示すディレクトリに格納されているサンプルファイルを利用して作成します。このファイルは、J2SE のプロパティファイル形式で作成します。

```
<Cosminexusのインストールディレクトリ
>¥CSC¥config¥manager¥templates¥cscscurptnconfig.properties
```

ユーザ定義受付ランタイム定義ファイルを作成したあと、csccompoconfig コマンドで定義情報を設定します。ユーザ定義受付の定義情報の設定については、「3.1.12 ユーザ定義受付の定義情報を設定する」を参照してください。

このファイルはユーザ定義受付を配備するときに使用します。ユーザ定義受付の配備については、「3.1.11 ユーザ定義受付を配備する」を参照してください。

（2）設定できるプロパティ

ユーザ定義受付ランタイム定義ファイルに定義するプロパティを次に示します。

表 2-7 ユーザ定義受付ランタイム定義ファイルに定義するプロパティ（データベースと Cosminexus RM の両方を使用する場合）

項番	分類	プロパティ名	内容
1	ユーザ定義受付	user-defined-reception-soap.threads.maximum	ユーザ定義受付の最大同時実行数
2		user-defined-reception-soap.exclusive.threads	ユーザ定義受付の占有スレッド数
3		user-defined-reception-soap.queue-size	ユーザ定義受付の実行待ちキューのサイズ

ユーザ定義受付ランタイム定義ファイルの詳細については、「9. 定義ファイル」の

2. システムの構築

「ユーザ定義受付ランタイム定義ファイル」を参照してください。

2.3.6 データベースのテーブル容量を見積もる

実行履歴の管理や実行環境の設定をする場合、あらかじめデータベースのテーブル容量を見積もる必要があります。

(1) プロセスインスタンスの実行履歴の管理に関するテーブル容量の見積もり

プロセスインスタンスの実行履歴の管理に関するデータベースのテーブルの一覧を次の表に示します。

表 2-8 プロセスインスタンスの実行履歴の管理に関するデータベースのテーブルの一覧

分類	テーブル名	説明
基本情報テーブル	CSCBP_<クラスタ名>_PROCESS	プロセスインスタンスの状態を格納します。
	CSCBP_<クラスタ名>_ACTIVITY	アクティビティインスタンスの状態を格納します。
	CSCBP_<クラスタ名>_LINK	リンクの状態を格納します。
	CSCBP_<クラスタ名>_CORRELATIONSET	相関セットの値を格納します。
変数情報テーブル	CSCBP_<クラスタ名>_STR_VARIABLE	string 型の変数値を格納します。
	CSCBP_<クラスタ名>_NUM_VARIABLE	numeric 型の変数値を格納します。
	CSCBP_<クラスタ名>_BOOL_VARIABLE	boolean 型の変数値を格納します。
	CSCBP_<クラスタ名>_MSG_VARIABLE	message 型の変数値を格納します。
メッセージ履歴関連づけ情報テーブル	CSCBP_<クラスタ名>_MSG_RELATION	メッセージ ID、およびプロセスインスタンス識別子またはアクティビティインスタンス識別番号の関連づけ情報を格納します。

データベース設計時には、次に示す情報を基に、各種データベースのマニュアルを参考に容量を見積もります。

- テーブルおよびインデクス定義
- レコード数の概算式
- インデクスの各種概算式

(a) テーブルおよびインデクス定義

テーブルおよびインデクス定義の詳細については、「付録 C.1 プロセスインスタンスの実行履歴の管理に関するテーブルの情報」を参照してください。

(b) レコード数の概算式

レコード数の概算は、テーブルごとに次のように計算します。

- CSCBP_<クラスタ名>_PROCESS テーブル

$$\text{レコード数} = \sum_{\text{全ビジネスプロセス}} \text{プロセス数}$$

- CSCBP_<クラスタ名>_ACTIVITY テーブル

$$\text{レコード数} = \sum_{\text{全ビジネスプロセス}} \text{アクティビティ数}$$

アクティビティ数 = { ビジネスプロセス定義中のアクティビティ定義数
+ くり返しアクティビティ中のアクティビティ定義数
× (くり返しアクティビティのループ回数 - 1) }
× プロセス数

- CSCBP_<クラスタ名>_LINK テーブル

$$\text{レコード数} = \sum_{\text{全ビジネスプロセス}} \text{リンク数}$$

リンク数 = { ビジネスプロセス定義中のリンク定義数
+ くり返しアクティビティ中のリンク定義数
× (くり返しアクティビティのループ回数 - 1) }
× プロセス数

- CSCBP_<クラスタ名>_CORRELATION-SET テーブル

$$\text{レコード数} = \sum_{\text{全ビジネスプロセス}} (\text{相関セット定義数} \times \text{プロセス数})$$

- CSCBP_<クラスタ名>_STR_VARIABLE テーブル

$$\text{レコード数} = \sum_{\text{全ビジネスプロセス}} (\text{文字列型変数定義数} \times \text{プロセス数})$$

- CSCBP_<クラスタ名>_NUM_VARIABLE テーブル

$$\text{レコード数} = \sum_{\text{全ビジネスプロセス}} (\text{数値型変数定義数} \times \text{プロセス数})$$

2. システムの構築

- CSCBP_<クラスタ名>_BOOL_VARIABLE テーブル

$$\text{レコード数} = \sum_{\text{全ビジネスプロセス}} (\text{真偽型変数定義数} \times \text{プロセス数})$$

- CSCBP_<クラスタ名>_MSG_VARIABLE テーブル

$$\text{レコード数} = \sum_{\text{全ビジネスプロセス}} (\text{メッセージ型変数定義数} \times \text{プロセス数})$$

- CSCBP_<クラスタ名>_MSG_RELATION テーブル

$$\text{レコード数} = \sum_{\text{全ビジネスプロセス}} (\text{メッセージ送受信数} \times \text{プロセス数})$$

$$\begin{aligned} \text{メッセージ送受信数} = & \text{receive アクティビティ定義数} \\ & + \text{応答アクティビティ定義数} \\ & + \text{非同期呼び出しアクティビティ定義数} \\ & + \text{同期アクティビティ定義数} \times 2 \end{aligned}$$

(c) インデクスの各種概算式

インデクスの各種概算式は、インデクス定義、およびレコード数から導き出します。見積もり式については、使用しているデータベースのマニュアルを参照してください。

(2) 電文の実行履歴の管理に関するテーブル容量の見積もり

電文の実行履歴の管理に関するデータベースのテーブルの一覧を次の表に示します。

表 2-9 電文の実行履歴の管理に関するデータベースのテーブルの一覧

分類	テーブル名	説明
実行履歴情報 テーブル	CSCMSG_C<クラスタ名>_EXECHISTORY	電文の実行履歴情報を格納します。

データベース設計時には、次に示す情報を基に、各種データベースのマニュアルを参考に容量を見積もります。

- テーブルおよびインデクス定義
- レコード数の概算式
- インデクスの各種概算式

(a) テーブルおよびインデクス定義

テーブルおよびインデクス定義の詳細については、「付録 C.2 電文の実行履歴の管理に関するテーブルの情報」を参照してください。

(b) レコード数の概算式

レコード数の概算は、テーブルごとに次のように計算します。

- CSCMSG_C< クラスタ名 >_EXECHISTORY テーブル

$$\begin{aligned} \text{レコード数} = & \text{リクエスト受付呼び出し回数}^{※1} \times 2 \\ & + \text{ビジネスプロセス呼び出し回数} \\ & \times \max((\text{各ビジネスプロセスでの} \\ & \text{サービス呼出アクティビティ数}^{※2}) + 1) \times 2 \end{aligned}$$

注※1 サービスリクエストからHCSCサーバに対する呼び出し回数です。

注※2 開発環境のビジネスプロセス定義で、サービス呼出アクティビティを定義した数です。

(c) インデクスの各種概算式

インデクスの各種概算式は、インデクス定義、およびレコード数から導き出します。見積もり式については、使用しているデータベースのマニュアルを参照してください。

(3) 実行環境の設定に関するテーブル容量の見積もり

実行環境の設定に関するデータベースのテーブルの一覧を次の表に示します。

表 2-10 実行環境の設定に関するデータベースのテーブルの一覧

分類	テーブル名	説明
HCSC 基本情報 テーブル	CSCMSG_S<HCSC サーバ名 >_CSC_PERSIST	HCSC サーバの状態を永続化します。
HCSC 連携ディ レクトリ情報 テーブル	CSCMSG_C< クラスタ名 >_CSC_CONNECT	HCSC サーバ(クラスタ)間の連 携管理情報を格納します。
ロケーション ディレクトリ情 報テーブル	CSCMSG_S<HCSC サーバ名 >_LC_DIRECTORY	サービスアダプタ、ビジネスプロ セス、およびサービスグループの ロケーション情報を格納します。
	CSCMSG_S<HCSC サーバ名 >_LC_BPFORMAT	ビジネスプロセスのフォーマット 情報を格納します。
ルーティング ルールディレク トリ情報テー ブル	CSCMSG_S<HCSC サーバ名 >_RT_RULE	サービスのルーティングを行う ルール情報を格納します。
データ変換定義 ディレクトリ情 報テーブル	CSCMSG_S<HCSC サーバ名 >_CV_MAPPING	データ変換定義情報を格納します。
	CSCMSG_S<HCSC サーバ名 >_CV_FORMAT	データ変換を行う電文フォーマ ット定義情報を格納します。

データベース設計時には、次に示す情報を基に、各種データベースのマニュアルを参考

2. システムの構築

に容量を見積もります。

- テーブルおよびインデクス定義
- レコード数の概算式
- インデクスの各種概算式

(a) テーブルおよびインデクス定義

テーブルおよびインデクス定義の詳細については、「付録 C.3 実行環境の設定に関するテーブルの情報」を参照してください。

(b) レコード数の概算式

レコード数の概算は、テーブルごとに次のように計算します。

- CSCMSG_S<HCSC サーバ名>_CSC_PERSIST テーブル

$$\text{レコード数} = 1$$

- CSCMSG_C<クラスタ名>_CSC_CONNECT テーブル

$$\text{レコード数} = 0$$

- CSCMSG_S<HCSC サーバ名>_LC_DIRECTORY テーブル

$$\begin{aligned} \text{レコード数} &= \text{サービスアダプタ数}^{\ast 1} \\ &\quad + \text{ビジネスプロセス数}^{\ast 2} \\ &\quad + \text{ユーザ定義受付数}^{\ast 3} \end{aligned}$$

注※1 csccompodeploy (HCSCコンポーネントの配備)コマンドを使用して、サービスアダプタを配備した数です。

注※2 csccompodeploy (HCSCコンポーネントの配備)コマンドを使用して、ビジネスプロセスを配備した数です。

注※3 csccompodeploy (HCSCコンポーネントの配備)コマンドを使用して、ユーザ定義受付を配備した数です。

- CSCMSG_S<HCSC サーバ名>_LC_BPFORMAT テーブル

$$\begin{aligned} \text{レコード数} &= \text{ビジネスプロセス数}^{※1} \\ &\quad \times \text{配備したビジネスプロセスに定義した} \\ &\quad \text{受付アクティビティ数}^{※2} \end{aligned}$$

注※1 csccompodeploy (HCSCコンポーネントの配備) コマンドを使用して、ビジネスプロセスを配備した数です。

注※2 開発環境のビジネスプロセス定義で、受付アクティビティ (受付のオペレーション名) を定義した数です。ビジネスプロセスの配備は、csccompodeploy (HCSCコンポーネントの配備) コマンドを使用します。

- CSCMSG_S<HCSC サーバ名>_RT_RULE テーブル

$$\text{レコード数} = 0$$

- CSCMSG_S<HCSC サーバ名>_CV_MAPPING テーブル

$$\text{レコード数} = 0$$

- CSCMSG_S<HCSC サーバ名>_CV_FORMAT テーブル

$$\begin{aligned} \text{レコード数} &= \text{配備したビジネスプロセスに定義した} \\ &\quad \text{受付アクティビティ数}^{※} \end{aligned}$$

注※ 開発環境のビジネスプロセスで、受付アクティビティ (受付のオペレーション名) を定義した数です。ビジネスプロセスの配備は、csccompodeploy (HCSCコンポーネントの配備) コマンドを使用します。

(c) インデクスの各種概算式

インデクスの各種概算式は、インデクス定義、およびレコード数から導き出します。見積もり式については、使用しているデータベースのマニュアルを参照してください。

2.3.7 データベースの領域への配置

データベースのテーブル容量の見積もり後、各テーブルおよびインデクスをデータベースの領域 (HiRDB の場合は RD エリア, Oracle の場合は表領域 (テーブルスペース)) にどう配置するかを設計する必要があります。

データベースの領域は、HCSC サーバセットアップ定義ファイルのプロパティで配置を設定します。詳細については、「表 2-4 HCSC サーバセットアップ定義ファイルに定義するプロパティ (データベースと Cosminexus RM の両方を使用する場合)」の「データ

ベースの RD エリア (表領域) 情報」を参照してください。

! 注意事項

一つの領域にすべてのテーブルとインデクスを配置しないでください。配置すると、性能劣化の原因となるおそれがあります。

2.3.8 変換テーブルを登録する

開発環境で作成したデータ変換定義に値置換えファンクションが含まれる場合、値置換えファンクションで利用する変換テーブルを、システムプロパティファイル (usrconf.properties) に登録します。

usrconf.properties の格納先

```
<Cosminexusのインストールディレクトリ>¥CC¥server¥usrconf¥ejb¥<サーバ名称>¥usrconf.properties
```

usrconf.properties への登録方法

usrconf.properties に、変換テーブル ID、変換テーブルの格納先、変換テーブルの合計ファイルサイズ、および使用する文字コードを記述します。格納先と文字コードの情報を一組として記述します。複数の変換テーブルについて記述できます。

usrconf.properties に記述する内容と形式を次に示します。

```
:
csc.dt.valueTable.<変換テーブルID>=<変換テーブルの格納ディレクトリ>
csc.dt.valueTableSize=<変換テーブルの合計ファイルサイズ>
csc.dt.encodeType.<変換テーブルID>= [ MS932|UTF8|UTF16_BIG|UTF16_LITTLE ]
:
```

<変換テーブル ID>

変換テーブル ID として任意の名称を指定します。変換テーブル ID は、開発環境の値置換えダイアログで値置換えファンクションを定義する際、使用する変換テーブルの指定に使用します。

<変換テーブルの格納ディレクトリ>

変換テーブルを保存したディレクトリを絶対パスで指定します。

<変換テーブルの合計ファイルサイズ><<10>>

変換テーブルの合計ファイルサイズ (単位: キロバイト) を指定します。合計ファイルサイズには、正の整数を指定します。指定範囲は、1 ~ 2097151 です。指定を省略した場合は、10 が仮定されます。

[MS932|UTF8|UTF16_BIG|UTF16_LITTLE]

変換テーブルに使用している文字コードを指定します。

2.3.9 データベースと Cosminexus RM の両方を使用しない場合の実行環境に関する設定

データベースと Cosminexus RM の両方を使用しない場合、実行環境に関する設定内容が、データベースと Cosminexus RM の両方を使用する場合と異なります。

ここでは、データベースと Cosminexus RM の両方を使用しない場合に設定する次の内容について、データベースと Cosminexus RM の両方を使用する場合との違いを説明します。

- HCSC サーバ構成定義ファイルの設定
- HCSC サーバセットアップ定義ファイルの設定
- HCSC サーバランタイム定義ファイルの設定
- ユーザ定義受付ランタイム定義ファイルの設定
- 変換テーブルの登録

(1) HCSC サーバ構成定義ファイルを設定する

HCSC サーバ構成定義ファイルに設定できる要素を次の表に示します。

なお、HCSC サーバ構成定義ファイルの作成方法については、「2.3.1(1) HCSC サーバ構成定義ファイルの作成」を参照してください。

表 2-11 HCSC サーバ構成定義ファイルに設定できる要素（データベースと Cosminexus RM の両方を使用しない場合）

項番	分類	使用するタグ名	要素	指定可否
1	cluster の定義 ¹	name	クラスタ名	
2		type ¹	クラスタ種別 (LB または HA)	
3	cosminexus-manager の定義	name	Cosminexus Manager 名	
4		ip-address ²	Cosminexus Manager の IP アドレス	
5		port ²	Cosminexus Manager のリモート管理機能への外部接続ポート番号	
6		id	Management Server の管理ユーザ ID	
7		password ¹	Management Server の管理ユーザパスワード	

2. システムの構築

項番	分類	使用するタグ名	要素	指定可否
8	hscsc-server の定義	neme	HCSC サーバ名	
9		id	HCSC サーバが使用するデータベースのユーザ ID	×
10		password	HCSC サーバが使用するデータベースのパスワード	×
11		j2ee-server-name	HCSC サーバが使用する J2EE サーバ名	
12		setup-properties	HCSC サーバセットアッププロパティファイル名	
13	soap-reception の定義 ¹	ip-address ¹ ₂	Web サーバの IP アドレス	
14		port ²	Web サーバのポート番号	
15		protocol ²	プロトコル種別 (http または https)	
16	jms-reception の定義 ^{1 3}	ip-address ¹ ₂	Web サーバの IP アドレス	×
17		port ²	Web サーバのポート番号	×
18		protocol ²	プロトコル種別 (http または https)	×
19		rm-service-context-root ²	RM のサービスコンテキストルート	×
20		rm-service-name ^{1 2}	RM のサービス名	×
21	jms-physical-reception の定義 ^{1 4}	ip-address ¹ ₂	Web サーバの IP アドレス	×
22		port ²	Web サーバのポート番号	×
23		protocol ²	プロトコル種別 (http または https)	×
24		rm-service-context-root ²	RM のサービスコンテキストルート	×
25		rm-service-name ^{1 2}	RM のサービス名	×
26	ejb-reception の定義 ¹	ip-address ¹ ₂	NameServer の IP アドレス	
27		port ²	NameServer のポート番号	

(凡例)

: 指定できます。

×：指定できません。

注 1 省略できます。

注 2 2回目以降設定を変えて再セットアップすると、値が上書きされます。

注 3 クラスタ種別が「HA」の場合に設定します。クラスタ種別が「LB」の場合は、設定しても無視されます。

注 4 クラスタ種別が「LB」の場合に設定します。クラスタ種別が「HA」の場合は、設定しても無視されます。

HCSC サーバ構成定義ファイルの詳細については、「9. 定義ファイル」の「HCSC サーバ構成定義ファイル」を参照してください。

(2) HCSC サーバセットアップ定義ファイルを設定する

HCSC サーバセットアップ定義ファイルに定義するプロパティを次に示します。

なお、HCSC サーバ構成定義ファイルの作成方法については、「2.3.2(1) HCSC サーバセットアップ定義ファイルの作成」を参照してください。

表 2-12 HCSC サーバセットアップ定義ファイルに定義するプロパティ（データベースと Cosminexus RM の両方を使用しない場合）

項番	分類	プロパティ名	内容	指定可否
1	セットアップ構成関連	db-use	データベースの使用有無	
2		rm-use	Cosminexus RM の使用有無	
3		hcscserver-data-filepath	HCSC サーバのシステム管理情報の出力先	
4	標準受付関連	request-ejb	標準の同期受付（SessionBean）の使用有無	
5		request-soap	標準の同期受付（Web サービス）の使用有無	
6		request-jms	標準の非同期受付（MDB（WS-R））の使用有無	
7		request-jms.maxmessage	標準の非同期受付（MDB（WS-R））のキューの最大メッセージ数	×
8		request-dbq	標準の非同期受付（MDB（DB キュー））の使用有無	
9		request-dbq.maxmessage	標準の非同期受付（MDB（DB キュー））のキューの最大メッセージ数	×
10		request-jms-rdarea	標準の非同期受付（MDB（WS-R））の RD エリア名	×

2. システムの構築

項番	分類	プロパティ名	内容	指定可否
11		request-dbq-rdarea	標準の非同期受付 (MDB (DB キュー)) の RD エリア名	×
12		request-dbq-maxlen	標準の非同期受付 (MDB (DB キュー)) の最大メッセージ長	×
13	ユーザ定義受付関連	request-userdef-soap	ユーザ定義受付の使用有無	
14	J2EE 関連	naming-service-hostname	ネーミングサービスのホスト名	
15		naming-service-port	ネーミングサービスのポート番号	
16	Cosminexus RM 関連	rm-systemname	Cosminexus RM のシステム名	×
17		rm-displayname	Cosminexus RM の表示名	×
18	DB コネクタ関連	dbcon-xadisplayname	XATransaction 用または LocalTransaction 用の DB Connector の表示名	×
19		dbcon-nodisplayname	NoTransaction 用 DB Connector の表示名	×
20	転送キュー関連	transreq-maxmessage	HCSC サーバ間転送受信キューの最大メッセージ数	×
21		transreq-jms-rdarea	HCSC サーバ間転送受信キューの RD エリア名	×
22	データベース関連	dbtype	使用するデータベース種別	×
23		jdbc-type	JDBC ドライバ種別	×
24		jdbc-url	JDBC 用データベース URL	×
25		jdbc-dbhostname	データベースのホスト名	×
26		jdbc-dbconnectinfo	データベースの接続情報	×
27		db-character-sets	データベース文字コード種別	×
28	データベースの RD エリア (表領域) 情報	cscserverinfo-tbl-area	HCSC 基本情報用テーブル領域	×
29		server-trans-tbl-area	連携 HCSC 用テーブル領域	×
30		location-tbl-area	ロケーション用テーブル領域	×
31		routing-tbl-area	ルーティング用テーブル領域	×
32		cv-tbl-area	データ変換用テーブル領域	×
33		exehistory-tbl-area	実行履歴情報テーブル領域	×
34		exehistory-idx-area	実行履歴情報テーブルのインデクスを格納する領域	×
35		process-tbl-area	ビジネスプロセス基盤用 PROCESS テーブルを格納する領域	×

項番	分類	プロパティ名	内容	指定可否
36		process-idx-area	ビジネスプロセス基盤用 PROCESS テーブルのインデクスを格納する領域	×
37		activity-tbl-area	ビジネスプロセス基盤用 ACTIVITY テーブルを格納する領域	×
38		activity-idx-area	ビジネスプロセス基盤用 ACTIVITY テーブルのインデクスを格納する領域	×
39		link-tbl-area	ビジネスプロセス基盤用 LINK テーブルを格納する領域	×
40		link-idx-area	ビジネスプロセス基盤用 LINK テーブルのインデクスを格納する領域	×
41		correlationset-tbl-area	ビジネスプロセス基盤用 CORRELATIONSET テーブルを格納する領域	×
42		correlationset-idx-area	ビジネスプロセス基盤用 CORRELATIONSET テーブルのインデクスを格納する領域	×
43		string-variable-tbl-area	ビジネスプロセス基盤用 STRING-VARIABLE テーブルを格納する領域	×
44		string-variable-idx-area	ビジネスプロセス基盤用 STRING-VARIABLE テーブルのインデクスを格納する領域	×
45		numeric-variable-tbl-area	ビジネスプロセス基盤用 NUMERIC-VARIABLE テーブルを格納する領域	×
46		numeric-variable-idx-area	ビジネスプロセス基盤用 NUMERIC-VARIABLE テーブルのインデクスを格納する領域	×
47		boolean-variable-tbl-area	ビジネスプロセス基盤用 BOOLEAN-VARIABLE テーブルを格納する領域	×
48		boolean-variable-idx-area	ビジネスプロセス基盤用 BOOLEAN-VARIABLE テーブルのインデクスを格納する領域	×
49		message-variable-tbl-area	ビジネスプロセス基盤用 MESSAGE-VARIABLE テーブルを格納する領域	×
50		message-variable-idx-area	ビジネスプロセス基盤用 MESSAGE-VARIABLE テーブルのインデクスを格納する領域	×

2. システムの構築

項番	分類	プロパティ名	内容	指定可否
51		message-variable-val-area	ビジネスプロセス基盤用 MESSAGE-VARIABLE テーブルの VariableValue 列を格納する領域	×
52		message-relation-tbl-area	ビジネスプロセス基盤用 MESSAGE-RELATION テーブルを格納する領域	×
53		message-relation-idx-area	ビジネスプロセス基盤用 MESSAGE-RELATION テーブルのインデクスを格納する領域	×
54		sql-scriptfilename	SQL スクリプトファイルパス	×
55	クライアント定義ファイル	soap-client-def	HCSC サーバ間転送で使用する Cosminexus SOAP クライアント定義ファイル名	
56	サーバ間転送関連	csctrans-jms.instance.maximum	サーバ間転送 (JMS 受信) インスタンス最大数	×

(凡例)

: 指定できます。

×: 指定できません。

注 「OFF」を設定します。

HCSC サーバセットアップ定義ファイルの詳細については、「9. 定義ファイル」の「HCSC サーバセットアップ定義ファイル」を参照してください。

(3) HCSC サーバランタイム定義ファイルを設定する

HCSC サーバランタイム定義ファイルに定義するプロパティを次に示します。

なお、HCSC サーバランタイム定義ファイルの作成方法については、「2.3.4(1) HCSC サーバランタイム定義ファイルの作成」を参照してください。

表 2-13 HCSC サーバランタイム定義ファイルに定義するプロパティ (データベースと Cosminexus RM の両方を使用しない場合)

項番	分類	プロパティ名	内容	指定可否
1	実行履歴管理	historyrecord	実行履歴採取の有無	×
2		historyrecord-data	実行履歴電文データ (ユーザ電文) 採取の有無	×
3		historyrecord-binarylength	実行履歴採取電文データ (ユーザ電文) の長さ	×

項番	分類	プロパティ名	内容	指定可否	
4	ログトレース	methodtrace-filepath	メソッドトレース出力先パス		
5		requesttrace-filepath	リクエストトレース出力先パス		
6		methodtrace-filenum	メソッドトレースの最大面数		
7		requesttrace-filenum	リクエストトレースの最大面数		
8		methodtrace-filesize	メソッドトレースファイル1面当たりの最大サイズ		
9		requesttrace-filesize	リクエストトレースファイル1面当たりの最大サイズ		
10		methodtrace-level	メソッドトレースの出力レベル		
11		requesttrace	リクエストトレースの採取の有無		
12		bptrace-level	ビジネスプロセス基盤のメソッドトレースの出力レベル		
13		bptrace-filenum	ビジネスプロセス基盤のメソッドトレースの面数		
14		bptrace-filesize	ビジネスプロセス基盤のメソッドトレースのサイズ		
15		DB 情報	dab-bufsize	DABroker からの受信データのバッファ長	×
16			jdbc-bufsize	JDBC で取り扱うバッファ長	×
17			jdbc-longvarbinary	データベースのアクセス方法	×
18	jdbc-longvarbinary-access-size		HiRDB に一度に要求するデータの長さ	×	
19	jdbc-maxbinarysize		取得するデータの最大長	×	
20	jdbc-longvarbinary-truncerror		エラーの指定	×	
21	標準受付関連	request-ejb.instance.minimum	標準の同期受付 (SessionBean) のインスタンス最小数		

2. システムの構築

項番	分類	プロパティ名	内容	指定可否
22		request-ejb.instance.maximum	標準の同期受付 (SessionBean) のインスタンス最大数	
23		request-ejb.ctm	CTM 連携の使用有無	
24		request-ejb.parallel.count	CTM がアプリケーションを呼び出すために用意するスレッド数	
25		request-ejb.optional.name	標準の同期受付 (SessionBean) の別名	
26		request-soap.instance.minimum	標準の同期受付 (Web サービス) の最小同時実行数	
27		request-soap.instance.maximum	標準の同期受付 (Web サービス) の最大同時実行数	
28		request-soap.exclusive.threads	標準の同期受付 (Web サービス) の占有スレッド数	
29		request-soap.queue-size	標準の同期受付 (Web サービス) の実行待ちキューのサイズ	
30		request-jms.instance.maximum	標準の非同期受付 (MDB (WS-R)) のインスタンス最大数	×
31		receptionstop-monitor-timer	標準受付, HCSC サーバ転送用受けサービス停止処理のタイムアウト時間	×
32	サービスアダプタ関連	soapfault-targetnamespace-filepath	SOAP Fault をユーザ定義例外として扱うかどうか	
33	データ変換関連	xmltelegram-maxcache-num	XML 電文をキャッシュできる数	
34		telegram-validation	電文フォーマットに対して, 送受信する電文が適切かを検証するかどうか	
35	実行タイム監視	cscserver-connect-timeout	サーバ間連携の呼び出しを監視するためのタイムアウト値	

(凡例)

: 指定できます。

x : 指定できません。

HCSC サーバランタイム定義ファイルの詳細については、「9. 定義ファイル」の「HCSC サーバランタイム定義ファイル」を参照してください。

! 注意事項

07-50 以前の場合、または 07-60 以降で telegram-validation プロパティに「OFF」を設定した場合、電文フォーマットに対して、送受信する電文が適切かどうかを検証しません。そのため、telegram-validation プロパティに「ON」を設定して、送受信する電文が適切かどうかを検証すると、今までサービス呼び出しに成功していた電文が、サービスアダプタでエラーになることがあります。

(4) ユーザ定義受付ランタイム定義ファイルを設定する

ユーザ定義受付ランタイム定義ファイルに定義するプロパティを次に示します。

なお、ユーザ定義受付ランタイム定義ファイルの作成方法については、「2.3.5(1) ユーザ定義受付ランタイム定義ファイルの作成」を参照してください。

表 2-14 ユーザ定義受付ランタイム定義ファイルに定義するプロパティ（データベースと Cosminexus RM の両方を使用しない場合）

項番	分類	プロパティ名	内容	指定可否
1	ユーザ定義受付	user-defined-reception-soap.threads.maximum	ユーザ定義受付の最大同時実行数	
2		user-defined-reception-soap.exclusive.threads	ユーザ定義受付の占有スレッド数	
3		user-defined-reception-soap.queue-size	ユーザ定義受付の実行待ちキューのサイズ	

(凡例)

: 指定できます。

ユーザ定義受付ランタイム定義ファイルの詳細については、「9. 定義ファイル」の「ユーザ定義受付ランタイム定義ファイル」を参照してください。

(5) 変換テーブルを登録する

開発環境で作成したデータ変換定義に値置換えファンクションが含まれる場合、値置換えファンクションで利用する変換テーブルを、システムプロパティファイル (usrconf.properties) に登録します。詳細については「2.3.8 変換テーブルを登録する」を参照してください。

2.3.10 データベースを使用して Cosminexus RM を使用しない場合の実行環境に関する設定

データベースを使用して Cosminexus RM を使用しない場合、実行環境に関する設定内容が、データベースと Cosminexus RM の両方を使用する場合と異なります。

ここでは、データベースを使用して Cosminexus RM を使用しない場合に設定する次の内容について、データベースと Cosminexus RM の両方を使用する場合との違いを説明します。

- HCSC サーバ構成定義ファイルの設定
- HCSC サーバセットアップ定義ファイルの設定
- HCSC サーバランタイム定義ファイルの設定
- ユーザ定義受付ランタイム定義ファイルの設定
- データベースの設定
- 変換テーブルの登録

(1) HCSC サーバ構成定義ファイルを設定する

HCSC サーバ構成定義ファイルに設定できる要素を次の表に示します。

なお、HCSC サーバ構成定義ファイルの作成方法については、「2.3.1(1) HCSC サーバ構成定義ファイルの作成」を参照してください。

表 2-15 HCSC サーバ構成定義ファイルに設定できる要素（データベースを使用して Cosminexus RM を使用しない場合）

項番	分類	使用するタグ名	要素	指定可否
1	cluster の定義 ¹	name	クラスタ名	
2		type ¹	クラスタ種別 (LB または HA)	
3	cosminexus-manager の定義	name	Cosminexus Manager 名	
4		ip-address ²	Cosminexus Manager の IP アドレス	
5		port ²	Cosminexus Manager のリモート管理機能への外部接続ポート番号	
6		id	Management Server の管理ユーザ ID	
7		password ¹	Management Server の管理ユーザパスワード	

項番	分類	使用するタグ名	要素	指定可否
8	hcsc-server の定義	neme	HCSC サーバ名	
9		id	HCSC サーバが使用するデータベースのユーザ ID	
10		password	HCSC サーバが使用するデータベースのパスワード	
11		j2ee-server-name	HCSC サーバが使用する J2EE サーバ名	
12		setup-properties	HCSC サーバセットアッププロパティファイル名	
13	soap-reception の定義 ¹	ip-address ¹ ₂	Web サーバの IP アドレス	
14		port ²	Web サーバのポート番号	
15		protocol ²	プロトコル種別 (http または https)	
16	jms-reception の定義 ^{1 3}	ip-address ¹ ₂	Web サーバの IP アドレス	×
17		port ²	Web サーバのポート番号	×
18		protocol ²	プロトコル種別 (http または https)	×
19		rm-service-context-root ²	RM のサービスコンテキストルート	×
20		rm-service-name ^{1 2}	RM のサービス名	×
21	jms-physical-reception の定義 ^{1 4}	ip-address ¹ ₂	Web サーバの IP アドレス	×
22		port ²	Web サーバのポート番号	×
23		protocol ²	プロトコル種別 (http または https)	×
24		rm-service-context-root ²	RM のサービスコンテキストルート	×
25		rm-service-name ^{1 2}	RM のサービス名	×
26	ejb-reception の定義 ¹	ip-address ¹ ₂	NameServer の IP アドレス	
27		port ²	NameServer のポート番号	

(凡例)

: 指定できます。

2. システムの構築

×：指定できません。

注 1 省略できます。

注 2 2回目以降設定を変えて再セットアップすると、値が上書きされます。

注 3 クラスタ種別が「HA」の場合に設定します。クラスタ種別が「LB」の場合は、設定しても無視されます。

注 4 クラスタ種別が「LB」の場合に設定します。クラスタ種別が「HA」の場合は、設定しても無視されます。

HCSC サーバ構成定義ファイルの詳細については、「9. 定義ファイル」の「HCSC サーバ構成定義ファイル」を参照してください。

(2) HCSC サーバセットアップ定義ファイルを設定する

HCSC サーバセットアップ定義ファイルに定義するプロパティを次に示します。

なお、HCSC サーバ構成定義ファイルの作成方法については、「2.3.2(1) HCSC サーバセットアップ定義ファイルの作成」を参照してください。

表 2-16 HCSC サーバセットアップ定義ファイルに定義するプロパティ（データベースを使用して Cosminexus RM を使用しない場合）

項番	分類	プロパティ名	内容	指定可否
1	セットアップ構成関連	db-use ¹	データベースの使用有無	
2		rm-use ²	Cosminexus RM の使用有無	
3		hcscserver-data-filepath	HCSC サーバのシステム管理情報の出力先	
4	標準受付関連	request-ejb	標準の同期受付 (SessionBean) の使用有無	
5		request-soap	標準の同期受付 (Web サービス) の使用有無	
6		request-jms ²	標準の非同期受付 (MDB (WS-R)) の使用有無	
7		request-jms.maxmessage	標準の非同期受付 (MDB (WS-R)) のキューの最大メッセージ数	×
8		request-dbq ²	標準の非同期受付 (MDB (DB キュー)) の使用有無	
9		request-dbq.maxmessage	標準の非同期受付 (MDB (DB キュー)) のキューの最大メッセージ数	×
10		request-jms-rdarea	標準の非同期受付 (MDB (WS-R)) の RD エリア名	×

項番	分類	プロパティ名	内容	指定可否
11		request-dbq-rdarea	標準の非同期受付 (MDB (DB キュー)) の RD エリア名	×
12		request-dbq-maxlen	標準の非同期受付 (MDB (DB キュー)) の最大メッセージ長	×
13	ユーザ定義受付関連	request-userdef-soap	ユーザ定義受付の使用有無	
14	J2EE 関連	naming-service-hostname	ネーミングサービスのホスト名	
15		naming-service-port	ネーミングサービスのポート番号	
16	Cosminexus RM 関連	rm-systemname	Cosminexus RM のシステム名	×
17		rm-displayname	Cosminexus RM の表示名	×
18	DB コネクタ関連	dbcon-xadisplayname	XATransaction 用または LocalTransaction 用の DB Connector の表示名	
19		dbcon-nodisplayname	NoTransaction 用 DB Connector の表示名	
20	転送キュー関連	transreq-maxmessage	HCSC サーバ間転送受信キューの最大メッセージ数	×
21		transreq-jms-rdarea	HCSC サーバ間転送受信キューの RD エリア名	×
22	データベース関連	dbtype	使用するデータベース種別	
23		jdbc-type	JDBC ドライバ種別	
24		jdbc-url	JDBC 用データベース URL	
25		jdbc-dbhostname	データベースのホスト名	
26		jdbc-dbconnectinfo	データベースの接続情報	
27		db-character-sets	データベース文字コード種別	
28	データベースの RD エリア (表領域) 情報	cscserverinfo-tbl-area	HCSC 基本情報用テーブル領域	
29		server-trans-tbl-area	連携 HCSC 用テーブル領域	
30		location-tbl-area	ロケーション用テーブル領域	
31		routing-tbl-area	ルーティング用テーブル領域	
32		cv-tbl-area	データ変換用テーブル領域	
33		exehistory-tbl-area	実行履歴情報テーブル領域	
34		exehistory-idx-area	実行履歴情報テーブルのインデクスを格納する領域	
35		process-tbl-area	ビジネスプロセス基盤用 PROCESS テーブルを格納する領域	

2. システムの構築

項番	分類	プロパティ名	内容	指定可否
36		process-idx-area	ビジネスプロセス基盤用 PROCESS テーブルのインデクスを格納する領域	
37		activity-tbl-area	ビジネスプロセス基盤用 ACTIVITY テーブルを格納する領域	
38		activity-idx-area	ビジネスプロセス基盤用 ACTIVITY テーブルのインデクスを格納する領域	
39		link-tbl-area	ビジネスプロセス基盤用 LINK テーブルを格納する領域	
40		link-idx-area	ビジネスプロセス基盤用 LINK テーブルのインデクスを格納する領域	
41		correlationset-tbl-area	ビジネスプロセス基盤用 CORRELATIONSET テーブルを格納する領域	
42		correlationset-idx-area	ビジネスプロセス基盤用 CORRELATIONSET テーブルのインデクスを格納する領域	
43		string-variable-tbl-area	ビジネスプロセス基盤用 STRING-VARIABLE テーブルを格納する領域	
44		string-variable-idx-area	ビジネスプロセス基盤用 STRING-VARIABLE テーブルのインデクスを格納する領域	
45		numeric-variable-tbl-area	ビジネスプロセス基盤用 NUMERIC-VARIABLE テーブルを格納する領域	
46		numeric-variable-idx-area	ビジネスプロセス基盤用 NUMERIC-VARIABLE テーブルのインデクスを格納する領域	
47		boolean-variable-tbl-area	ビジネスプロセス基盤用 BOOLEAN-VARIABLE テーブルを格納する領域	
48		boolean-variable-idx-area	ビジネスプロセス基盤用 BOOLEAN-VARIABLE テーブルのインデクスを格納する領域	
49		message-variable-tbl-area	ビジネスプロセス基盤用 MESSAGE-VARIABLE テーブルを格納する領域	
50		message-variable-idx-area	ビジネスプロセス基盤用 MESSAGE-VARIABLE テーブルのインデクスを格納する領域	

項番	分類	プロパティ名	内容	指定可否
51		message-variable-val-area	ビジネスプロセス基盤用 MESSAGE-VARIABLE テーブルの VariableValue 列を格納する領域	
52		message-relation-tbl-area	ビジネスプロセス基盤用 MESSAGE-RELATION テーブルを格納する領域	
53		message-relation-idx-area	ビジネスプロセス基盤用 MESSAGE-RELATION テーブルのインデクスを格納する領域	
54		sql-scriptfilename	SQL スクリプトファイルパス	
55	クライアント定義ファイル	soap-client-def	HCSC サーバ間転送で使用する Cosminexus SOAP クライアント定義ファイル名	
56	サーバ間転送関連	csctrans-jms.instance.maximum	サーバ間転送 (JMS 受信) インスタンス最大数	×

(凡例)

- : 指定できます。
- ×

注 1 「ON」を設定する、またはプロパティを省略します。

注 2 「OFF」を設定します。

HCSC サーバセットアップ定義ファイルの詳細については、「9. 定義ファイル」の「HCSC サーバセットアップ定義ファイル」を参照してください。

(3) HCSC サーバランタイム定義ファイルを設定する

HCSC サーバランタイム定義ファイルに定義するプロパティを次に示します。

なお、HCSC サーバランタイム定義ファイルの作成方法については、「2.3.4(1) HCSC サーバランタイム定義ファイルの作成」を参照してください。

表 2-17 HCSC サーバランタイム定義ファイルに定義するプロパティ (データベースを使用して Cosminexus RM を使用しない場合)

項番	分類	プロパティ名	内容	指定可否
1	実行履歴管理	historyrecord	実行履歴採取の有無	
2		historyrecord-data	実行履歴電文データ (ユーザ電文) 採取の有無	

2. システムの構築

項番	分類	プロパティ名	内容	指定可否
3		historyrecord-binarylength	実行履歴採取電文データ(ユーザ電文)の長さ	
4	ログトレース	methodtrace-filepath	メソッドトレース出力先パス	
5		requesttrace-filepath	リクエストトレース出力先パス	
6		methodtrace-filenum	メソッドトレースの最大面数	
7		requesttrace-filenum	リクエストトレースの最大面数	
8		methodtrace-filesize	メソッドトレースファイル1面当たりの最大サイズ	
9		requesttrace-filesize	リクエストトレースファイル1面当たりの最大サイズ	
10		methodtrace-level	メソッドトレースの出力レベル	
11		requesttrace	リクエストトレースの採取の有無	
12		bptrace-level	ビジネスプロセス基盤のメソッドトレースの出力レベル	
13		bptrace-filenum	ビジネスプロセス基盤のメソッドトレースの面数	
14	bptrace-filesize	ビジネスプロセス基盤のメソッドトレースのサイズ		
15	DB 情報	dab-bufsize	DABroker からの受信データのバッファ長	
16		jdbc-bufsize	JDBC で取り扱うバッファ長	
17		jdbc-longvarbinary	データベースのアクセス方法	
18		jdbc-longvarbinary-access-size	HiRDB に一度に要求するデータの長さ	
19		jdbc-maxbinarysize	取得するデータの最大長	
20		jdbc-longvarbinary-truncerror	エラーの指定	

項番	分類	プロパティ名	内容	指定可否
21	標準受付関連	request-ejb.instance.minimum	標準の同期受付 (SessionBean) のインスタンス最小数	
22		request-ejb.instance.maximum	標準の同期受付 (SessionBean) のインスタンス最大数	
23		request-ejb.ctm	CTM 連携の使用有無	
24		request-ejb.parallel.count	CTM がアプリケーションを呼び出すために用意するスレッド数	
25		request-ejb.optional.name	標準の同期受付 (SessionBean) の別名	
26		request-soap.instance.minimum	標準の同期受付 (Web サービス) の最小同時実行数	
27		request-soap.instance.maximum	標準の同期受付 (Web サービス) の最大同時実行数	
28		request-soap.exclusive.threads	標準の同期受付 (Web サービス) の占有スレッド数	
29		request-soap.queue.size	標準の同期受付 (Web サービス) の実行待ちキューのサイズ	
30		request-jms.instance.maximum	標準の非同期受付 (MDB (WS-R)) のインスタンス最大数	×
31		receptionstop-monitor-timer	標準受付, HCSC サーバ転送用受け付けサービス停止処理のタイムアウト時間	×
32	サービスアダプタ関連	soapfault-targetnamespace-filepath	SOAP Fault をユーザ定義例外として扱うかどうか	
33	データ変換関連	xmltelegram-maxcache-num	XML 電文をキャッシュできる数	
34		telegram-validation	電文フォーマットに対して、送受信する電文が適切かを検証するかどうか	
35	実行タイム監視	cscserver-connect-timeout	サーバ間連携の呼び出しを監視するためのタイムアウト値	

2. システムの構築

(凡例)

: 指定できます。

x : 指定できません。

HCSC サーバランタイム定義ファイルの詳細については、「9. 定義ファイル」の「HCSC サーバランタイム定義ファイル」を参照してください。

! 注意事項

07-50 以前の場合、または 07-60 以降で telegram-validation プロパティに「OFF」を設定した場合、電文フォーマットに対して、送受信する電文が適切かどうかを検証しません。そのため、telegram-validation プロパティに「ON」を設定して、送受信する電文が適切かどうかを検証すると、今までサービス呼び出しに成功していた電文が、サービスアダプタでエラーになることがあります。

(4) ユーザ定義受付ランタイム定義ファイルを設定する

ユーザ定義受付ランタイム定義ファイルに定義するプロパティを次に示します。

なお、ユーザ定義受付ランタイム定義ファイルの作成方法については、「2.3.5(1) ユーザ定義受付ランタイム定義ファイルの作成」を参照してください。

表 2-18 ユーザ定義受付ランタイム定義ファイルに定義するプロパティ (データベースを使用して Cosminexus RM を使用しない場合)

項番	分類	プロパティ名	内容	指定可否
1	ユーザ定義受付	user-defined-reception-soap.threads.maximum	ユーザ定義受付の最大同時実行数	
2		user-defined-reception-soap.exclusive.threads	ユーザ定義受付の占有スレッド数	
3		user-defined-reception-soap.queue-size	ユーザ定義受付の実行待ちキューのサイズ	

(凡例)

: 指定できます。

ユーザ定義受付ランタイム定義ファイルの詳細については、「9. 定義ファイル」の「ユーザ定義受付ランタイム定義ファイル」を参照してください。

(5) データベースのテーブル容量を見積もる

実行履歴の管理や実行環境の設定をする場合、あらかじめデータベースのテーブル容量を見積もる必要があります。詳細については「2.3.6 データベースのテーブル容量を見積もる」を参照してください。

(6) データベースの領域への配置

データベースのテーブル容量の見積もり後、各テーブルおよびインデクスをデータベースの領域（HiRDBの場合はRDエリア、Oracleの場合は表領域（テーブルスペース））にどう配置するかを設計する必要があります。詳細については「2.3.7 データベースの領域への配置」を参照してください。

(7) 変換テーブルを登録する

開発環境で作成したデータ変換定義に値置換えファンクションが含まれる場合、値置換えファンクションで利用する変換テーブルを、システムプロパティファイル（usrconf.properties）に登録します。詳細については「2.3.8 変換テーブルを登録する」を参照してください。

2.4 運用環境に関する設定

運用環境に関する設定には、次のものがあります。

- 各種カスタマイズの設定
- ユーザ権限の設定
- HCSC-Manager コマンド共通項目の設定

2.4.1 カスタマイズする

運用環境では、次の内容をカスタマイズできます。

- インポート先のリポジトリとなるディレクトリ
- HCSC-Manager のログファイルの出力先ディレクトリ
- ログファイルの大きさ
- ログファイルの面数
- HCSC-Manager と Cosminexus Manager 間の接続時の読み込みタイムアウト値
- プロセスインスタンス再実行で応答電文を受け取った場合に、応答電文を格納するディレクトリ
- プロセスインスタンス再実行で応答電文を受け取った場合に、応答電文を格納するときの出力文字コード

カスタマイズに必要な情報は、HCSC-Manager 定義ファイルに定義します。

(1) HCSC-Manager 定義ファイルの作成

HCSC-Manager 定義は、J2SE 形式のプロパティ形式の HCSC-Manager 定義ファイルとして、次に示すディレクトリに格納されています。

```
<Cosminexusのインストールディレクトリ>%CSC%config%manager%cscmng.properties
```

(2) 設定できるプロパティ

HCSC-Manager 定義ファイルに定義するプロパティを次に示します。

表 2-19 HCSC-Manager 定義ファイルに定義するプロパティ

項番	分類	キー名称	内容
1	リポジトリ設定	cscmng.repository.root	リポジトリのルートディレクトリパス ¹
2	ログファイルの設定	cscmng.log.dir	ログ出力先ディレクトリパス ²
3		cscmng.log.<チャンネル名>.filesize	ログファイルサイズ
4		cscmng.log.<チャンネル名>.filenum	ログファイル面数

項番	分類	キー名称	内容
5	Cosminexus Manager 設定	cscmng.manager.< マネージャ識別名 >.timeout	タイムアウト値
6	プロセスインスタンス再実行設定	cscmng.pirexec.response.dir	応答電文格納ディレクトリパス
7		cscmng.pirexec.response.encoding	応答電文格納文字コード
8	HCSC サーバ運用設定	cscmng.server.<HCSC サーバ名 >.system	HCSC システムの管理下におく論理サーバ
9	リポジトリエクスポート	cscmng.repctl.export.dir	エクスポートファイルの出力先ディレクトリパス
10	環境バックアップ	cscmng.envbackup.dir	環境バックアップの出力先ディレクトリパス
11		cscmng.envbackup.dir.envrestore	リストア前の環境バックアップの出力先ディレクトリパス
12		cscmng.envbackup.dir.import	インポート前の環境バックアップの出力先ディレクトリパス
13		cscmng.envbackup.autoget	自動バックアップの仕様の有無
14		cscmng.envbackup.autoget.off	環境をリストアする際、またはリポジトリをインポートする際の環境バックアップの抑止

注 1 インストール後のリポジトリのルートディレクトリパスは次のとおりです。

<Cosminexus インストールディレクトリ >%CSC%repository

注 2 インストール後のログ出力先ディレクトリパスは次のとおりです。

<Cosminexus インストールディレクトリ >%CSC%log%manager

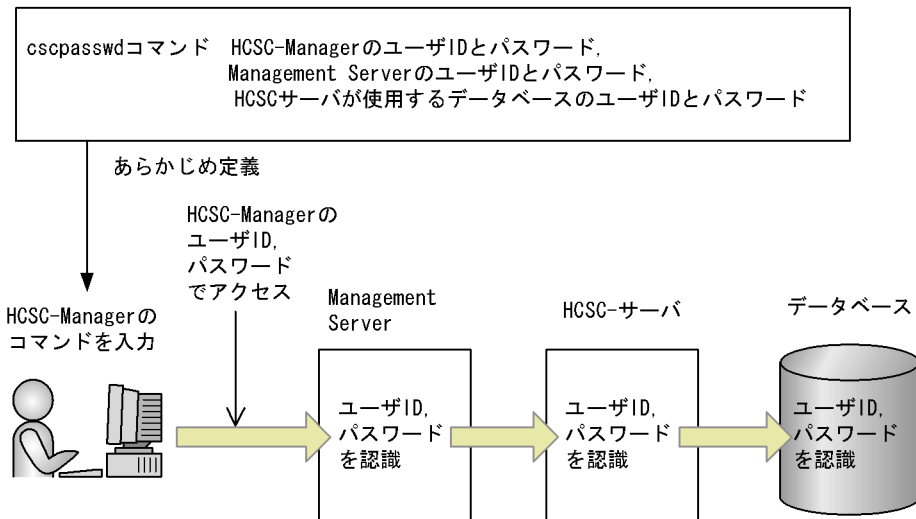
HCSC-Manager 定義ファイルの詳細については、「9. 定義ファイル」の「HCSC-Manager 定義ファイル」を参照してください。

2.4.2 ユーザ権限を設定する

HCSC-Manager の各種コマンドは、Management Server 経由で HCSC サーバにアクセスします。また、HCSC サーバでは専用のデータベースにアクセスします。

2. システムの構築

図 2-3 ユーザ情報の設定



変更したユーザ情報は画面の場合は次回ログイン時に反映されます。コマンドの場合は、ユーザ管理コマンド正常終了後に実行されたコマンド起動から反映されます。

(1) HCSC-Manager にアクセスするユーザの変更

HCSC-Manager にアクセスする管理ユーザのユーザ ID、およびパスワードを変更できます。HCSC-Manager インストール直後は、次のように仮定されます。

HCSC-Manager にアクセスするユーザ ID、およびパスワードは必ず `cscpasswd` コマンドで変更してください。

- ユーザ ID : admin
- パスワード : admin

! 注意事項

HCSC-Manager は HCSC-Manager にアクセスする管理ユーザで HCSC-Manager が管理している資源にすべてアクセスできます。そのため、HCSC-Manager にアクセスするユーザの ID、パスワードは適切に管理してください。

次のコマンドを入力します。

```
cscpasswd [-user <ログインユーザID>]
          [-pass <ログインパスワード>]
          -cscmnguser <変更するユーザID>
          -cscmngpass <変更するパスワード>
```

各コマンドで必要になるユーザ ID (-user オプション) とパスワード (-pass オプション) は HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルに設定すれば、オプションの入力を省略できます。

cscpasswd コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscpasswd (ユーザの管理)」を参照してください。

(2) Cosminexus Manager にアクセスするユーザの設定

HCSC-Manager が Management Server にアクセスするための管理ユーザ ID、および管理ユーザパスワードを変更できます。変更は、HCSC サーバセットアップ後にします。なお、Management Server 自体が管理している管理ユーザ ID、および管理ユーザパスワードは変更できません。

次のコマンドを入力します。

```
cscpasswd [-user <ログインユーザID>]
          [-pass <ログインパスワード>]
          -mng <Cosminexus Manager名>
          -mnguser <変更するユーザID>
          -mngpass <変更するパスワード>
```

各コマンドで必要になるユーザ ID (-user オプション) とパスワード (-pass オプション) は HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルに設定すれば、オプションの入力を省略できます。

cscpasswd コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscpasswd (ユーザの管理)」を参照してください。

(3) HCSC サーバにアクセスするユーザの設定

HCSC-Manager が HCSC サーバにアクセスするために HCSC サーバが保持しているデータベースのユーザ ID、およびパスワードを変更できます。変更は、HCSC サーバセットアップ後にします。なお、データベース自体が管理しているユーザ ID、およびパスワードは変更できません。

次のコマンドを入力します。

```
cscpasswd [-user <ログインユーザID>]
          [-pass <ログインパスワード>]
          -csc <HCSCサーバ名称>
          -cscuser <変更するユーザID>
          -cscpass <変更するパスワード>
```

各コマンドで必要になるユーザ ID (-user オプション) とパスワード (-pass オプシ

2. システムの構築

ン)は HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルに設定すれば、オプションの入力を省略できます。

cscpasswd コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscpasswd (ユーザの管理)」を参照してください。

2.4.3 HCSC-Manager コマンド共通項目を設定する

運用環境で使用する各コマンドの必須項目の省略値を、HCSC-Manager コマンドの共通定義に定義しておくこと、コマンド入力時にそのオプションの入力を省略できます。

HCSC-Manager のコマンド共通の省略値として必要な情報は、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルに定義します。

(1) HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルの作成

HCSC-Manager コマンド共通定義は、J2SE のプロパティファイル形式の HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルとして、次に示すディレクトリに格納されています。

```
<Cosminexusのインストールディレクトリ>%CSC%config%manager%csccmd.properties
```

HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルに省略値を設定、変更したあとに入力したコマンドから、設定した省略値が反映されます。HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルと、コマンドのオプションとの両方に定義した場合は、コマンドのオプションが有効になります。

このファイルには、ユーザ ID やパスワードなどの情報が含まれるため、アクセス権を設定して管理する必要があります。

(2) 設定できる内容

HCSC-Manager コマンド共通項目に設定できる値を次に示します。

- コマンドのすべてに共通する引数のデフォルト値
パラメタ：csc.all.<コマンド引数名>= 値
- コマンド識別子に対応したコマンドのデフォルト引数
パラメタ：csc.<コマンド識別子>.<コマンド引数名>= 値

HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルの詳細については、「9. 定義ファイル」の「HCSC-Manager コマンド共通定義ファイル」を参照してください。

2.5 HCSC サーバをロードバランスクラスタ構成にする場合の環境構築

複数台の HCSC サーバを並列に並べることで、サービスリクエストからのサービス部品の実行要求の一点集中による J2EE サーバの負荷を軽減することができます。これをロードバランスクラスタ機能といいます。

ロードバランスクラスタ機能を利用して負荷を分散する場合、汎用ロードバランサまたは CTM を使用します。ここでは、汎用ロードバランサと CTM を合わせて、ロードバランサと表記します。

標準の同期受付（Web サービス / SessionBean）へのサービス部品の実行要求の場合だけ、ロードバランサで負荷分散をすることができます。なお、標準の同期受付（Web サービス）と標準の同期受付（SessionBean）のどちらにサービス部品の実行要求を送信するかによって、使用するロードバランサは異なります。サービス部品の実行要求を送信する標準受付と使用するロードバランサを次の表に示します。

表 2-20 サービス部品の実行要求を送信する標準受付と使用するロードバランサ

標準受付	ロードバランサ
標準の同期受付（Web サービス）	汎用ロードバランサ（HTTP の負荷分散ができる負荷分散機）
標準の同期受付（SessionBean）	CTM

HCSC サーバをロードバランスクラスタ構成にする場合の環境構築およびセットアップの方法について、次に説明します。

2.5.1 ロードバランスクラスタ構成時の環境構築

HCSC サーバをロードバランスクラスタ構成にする場合、実行環境、運用環境、DB サーバがそれぞれ別のマシン上にある構成となります。

汎用ロードバランサを使用したシステム構成を図 2-4 に、CTM を使用したシステム構成を図 2-5 に示します。

2. システムの構築

図 2-4 汎用ロードバランサを使用したシステム構成

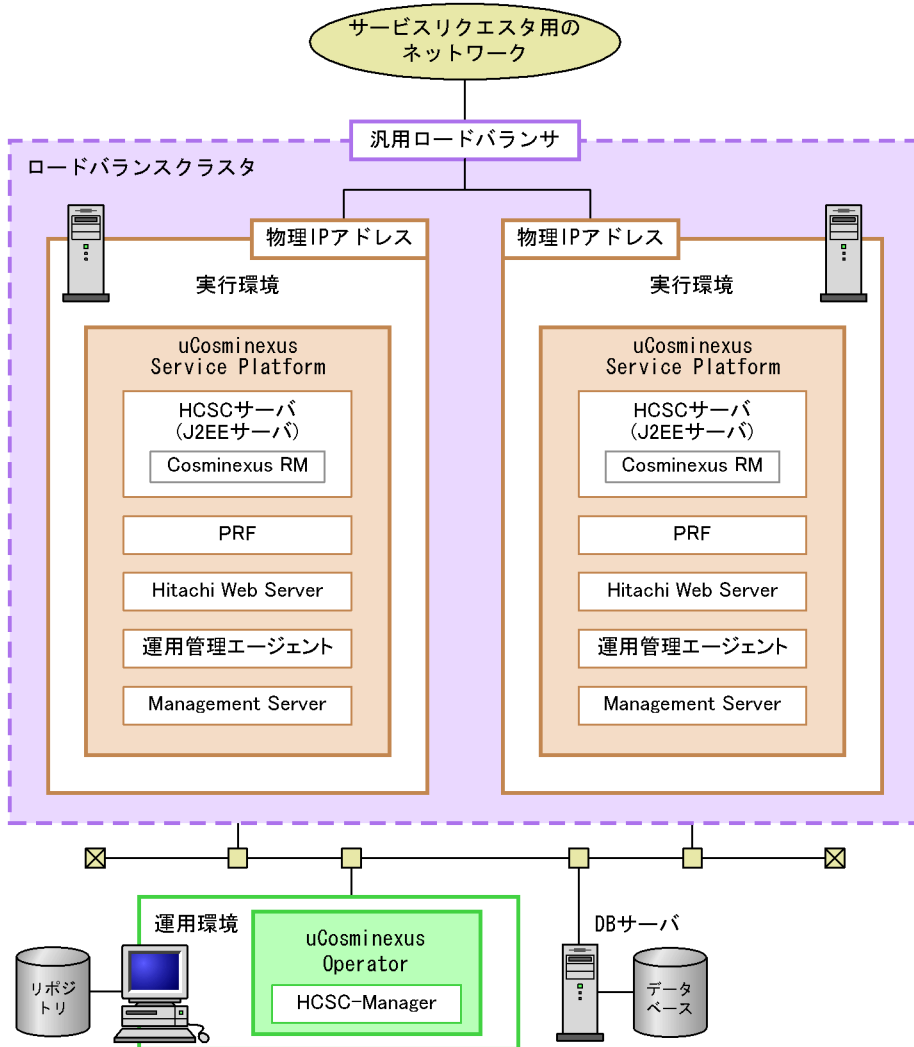
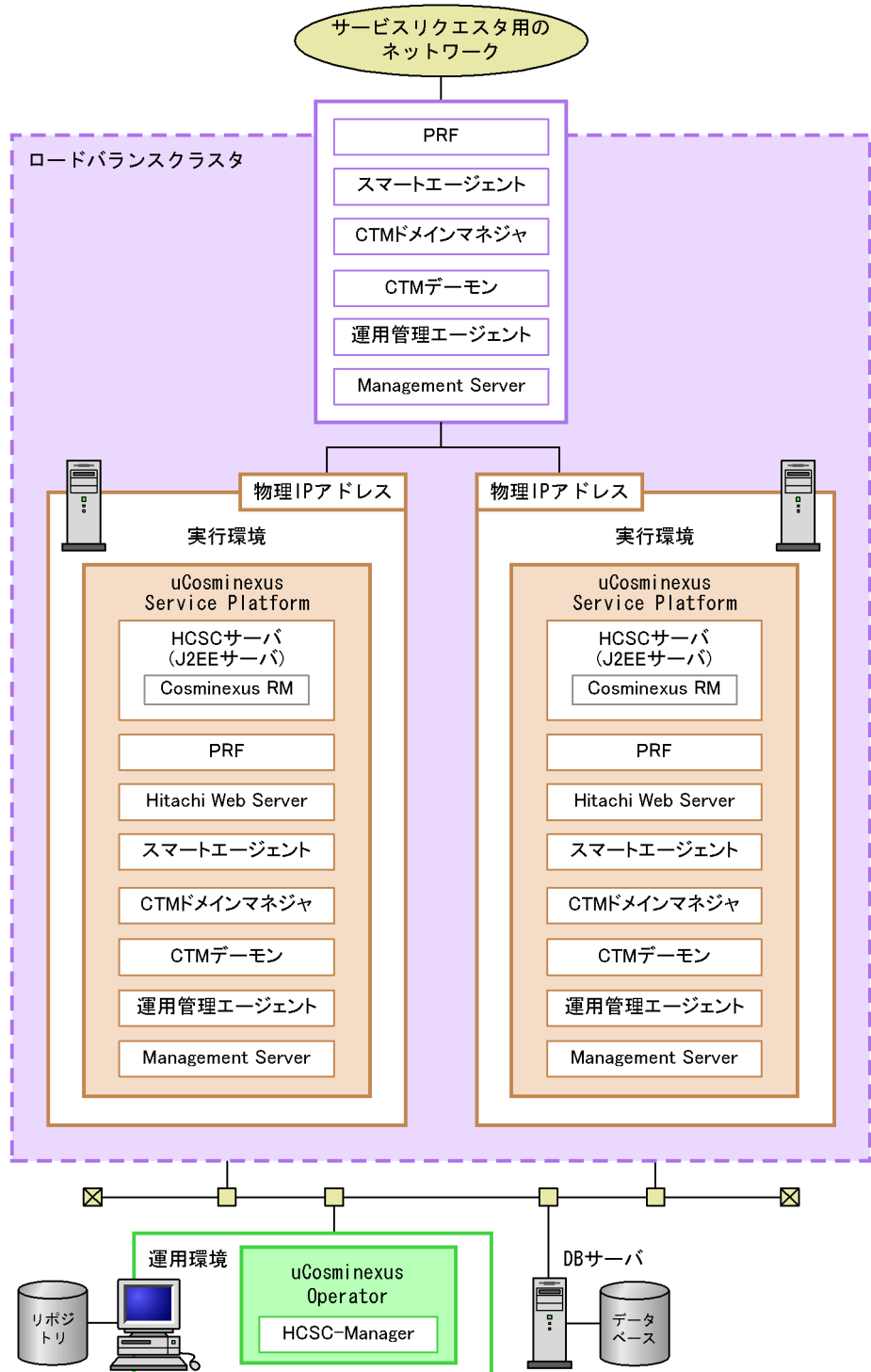


図 2-5 CTM を使用したシステム構成



2. システムの構築

実行環境，運用環境，DB サーバの構築方法を次に示します。

(1) 実行環境の構築

実行環境を構築するには，次の作業を実施します。

(a) uCosminexus Service Platform のインストール

uCosminexus Service Platform のインストール方法については，「2.1.2 uCosminexus Service Platform および uCosminexus Operator のインストール」を参照してください。

(b) Management Server の設定

運用環境で HCSC-Manager を使用するための Management Server の設定を，HCSC-Manager の接続先となる実行環境で実施します。

Management Server の設定については，「2.1.5 HCSC-Manager を使用するための Management Server の設定」を参照してください。

(c) HCSC サーバの構成などの設定

HCSC サーバの構成などの実行環境に関する設定を行います。設定する内容と設定方法については，「2.3 実行環境に関する設定」を参照してください。

なお，実行環境に関する設定で HCSC サーバ構成定義ファイル，HCSC サーバセットアップ定義ファイル，および HCSC サーバランタイム定義ファイルを設定する場合には，次に示す内容に留意してください。

HCSC サーバ構成定義ファイルの設定時の注意事項

HCSC サーバ構成定義ファイルを設定する場合には，次に示す内容に留意してください。

HCSC サーバ構成定義ファイルの設定方法については，「2.3.1 HCSC サーバ構成定義ファイルを設定する」を参照してください。

HCSC サーバ構成定義ファイルに設定する内容の詳細については，「9. 定義ファイル」の「HCSC サーバ構成定義ファイル」を参照してください。

- クラスタ表示名
ロードバランスクラスタ内のすべての HCSC サーバで同じ値を設定します。
- クラスタ種別
「LB」を設定します。
- Cosminexus manager 名
HCSC-Manager で Cosminexus Manager 単位に一意になる識別名を設定します。
- Cosminexus manager の IP アドレス
物理 IP アドレスを設定します。
- HCSC サーバが使用する J2EE サーバ名

- ロードバランスクラスタ内のすべての HCSC サーバで同じ値を設定します。
- Web サーバの IP アドレス（同期サービス（Web サービス）呼び出しをする場合）
ロードバランスクラスタ内のすべての HCSC サーバで同じ値を設定します。
 - Web サーバの IP アドレス（非同期サービス（MDB（WS-R））呼び出しをする場合）
それぞれの HCSC サーバの IP アドレスを設定します。ロードバランスクラスタ構成の場合、jms-physical-reception に設定してください。
 - NameServer の IP アドレス
ロードバランスクラスタ内のすべての HCSC サーバで同じ値を設定します。

HCSC サーバセットアップ定義ファイルの設定時の注意事項

HCSC サーバセットアップ定義ファイルを設定する場合には、次に示す内容に留意してください。

HCSC サーバセットアップ定義ファイルの設定方法については、「2.3.2 HCSC サーバセットアップ定義ファイルを設定する」を参照してください。

HCSC サーバセットアップ定義ファイルに設定する内容の詳細については、「9. 定義ファイル」の「HCSC サーバセットアップ定義ファイル」を参照してください。

同じ値を設定するプロパティ

HCSC サーバセットアップ定義ファイルに設定するプロパティのうち、次の表に示すプロパティはロードバランスクラスタ内のすべての HCSC サーバで同じ値を設定する必要があります。

表 2-21 ロードバランスクラスタ内の HCSC サーバで同じ値を設定するプロパティ

同じ値を指定するプロパティ	プロパティに設定する値
db-use	データベースの使用有無
rm-use	Cosminexus RM の使用有無
request-ejb	標準の同期受付（SessionBean）の使用有無
request-soap	標準の同期受付（Web サービス）の使用有無
request-jms	標準の非同期受付（MDB（WS-R））の使用有無
request-jms.maxmessage	標準の非同期受付（MDB（WS-R））のキューの最大メッセージ数
request-dbq	標準の非同期受付（MDB（DB キュー））の使用有無
request-dbq.maxmessage	標準の非同期受付（MDB（DB キュー））のキューの最大メッセージ数
request-jms-rdarea	標準の非同期受付（MDB（WS-R））の RD エリア名
request-dbq-rdarea	標準の非同期受付（MDB（DB キュー））の RD エリア名
request-dbq-maxlen	標準の非同期受付（MDB（DB キュー））の最大メッセージ長
rm-displayname	Cosminexus RM の表示名

2. システムの構築

同じ値を指定するプロパティ	プロパティに設定する値
transreq-maxmessage	HCSC サーバ間転送受信キューの最大メッセージ数
transreq-jms-rdarea	HCSC サーバ間転送受信キューの RD エリア名
dbcon-xadisplayname ¹	XATransaction または LocalTransaction 用 DB Connector の表示名
dbcon-nodisplayname ¹	NoTransaction 用 DB Connector の表示名
dbtype	使用するデータベース種別
jdbc-type	JDBC ドライバ種別
jdbc-url ²	JDBC 用データベース URL
jdbc-dbhostname	データベースのホスト名
jdbc-dbconnectinfo	データベースの接続情報
db-character-sets	データベース文字コード種別
soap-client-def ³	Cosminexus SOAP クライアント定義ファイル名
request-userdef-soap	ユーザ定義受付の使用有無

注 1 DB コネクタの設定もロードバランスクラスタ内のすべての HCSC サーバで同じにします。

注 2 指定するホスト名には、データベースを格納しているマシンを指定します。

注 3 ファイルの設定内容もロードバランスクラスタ内のすべての HCSC サーバで同じにします。

naming-service-hostname に設定する値

naming-service-hostname には、次の値を設定してください。

- CORBA ネーミングサービスを J2EE サーバ起動時にインプロセスで起動している場合
localhost を設定します。
- CORBA ネーミングサービスを J2EE サーバ起動時にインプロセスで起動していない場合
CORBA ネーミングサービスの物理 IP アドレスを設定してください。なお、ロードバランスクラスタ内の HCSC サーバでは、同一の CORBA ネーミングサービスを使用してください。

異なる値を設定するプロパティ

rm-systemname プロパティには、ロードバランスクラスタ内のそれぞれの HCSC サーバでユニークな Cosminexus RM システム名を指定します。

HCSC サーバランタイム定義ファイルの設定時の注意事項

HCSC サーバランタイム定義ファイルを設定する場合、ロードバランスクラスタ内のすべての HCSC サーバですべてのプロパティを同じ値に設定する必要があります。

また、CTM を使用する場合、次のプロパティを追加してください。

- request-ejb.ctm=true

HCSC サーバランタイム定義ファイルの設定方法については、「2.3.4 HCSC サーバランタイム定義ファイルを設定する」を参照してください。

HCSC サーバランタイム定義ファイルに設定する内容の詳細については、「9. 定義ファイル」の「HCSC サーバランタイム定義ファイル」を参照してください。

(2) 運用環境の構築

運用環境は、クラスタを構成する HCSC サーバから独立して構築します。そのため、運用環境として利用するマシンには、uCosminexus Operator をインストールして環境を構築します。

運用環境を構築するには、次の作業を実施します。

uCosminexus Operator のインストール

uCosminexus Operator のインストール方法については、「2.1.2 uCosminexus Service Platform および uCosminexus Operator のインストール」を参照してください。

Eclipse への HCSC-Manager Plug-in の組み込み

uCosminexus Operator をインストールしたマシン上で、Eclipse に HCSC-Manager Plug-in を組み込みます。

Eclipse への HCSC-Manager Plug-in の組み込みについては、「2.1.3 Eclipse への HCSC-Manager Plug-in の組み込み」を参照してください。

環境設定

運用環境の環境設定としてリポジトリの設定と環境変数の設定を実施します。環境設定については、「2.1.4 環境設定」を参照してください。

ユーザ権限などの設定

ユーザ権限などの運用環境に関する設定を行います。設定する内容と設定方法については、「2.4 運用環境に関する設定」を参照してください。

(3) DB サーバの構築

DB サーバは、ロードバランスクラスタを構成する HCSC サーバから独立して構築し、ロードバランスクラスタ内の HCSC サーバで共有します。

DB サーバとして利用するマシンに利用するデータベースをインストールしてください。インストール方法は、利用するデータベースのドキュメントを参照してください。

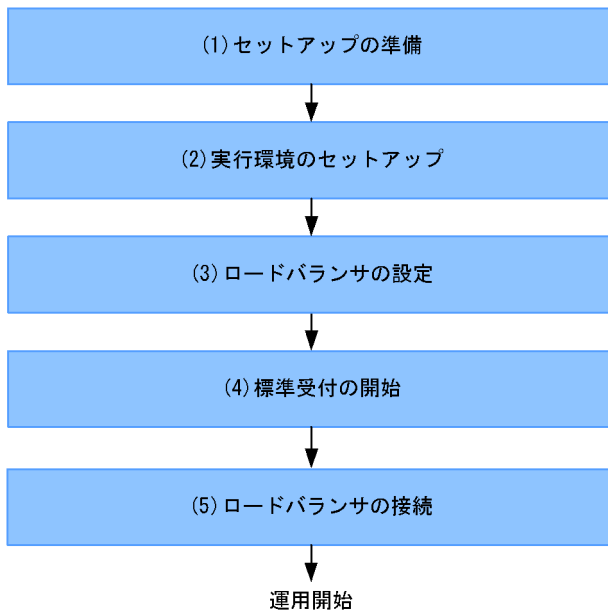
2.5.2 ロードバランスクラスタ構成時の実行環境のセットアップ

環境の構築後、ロードバランスクラスタを構成する実行環境をセットアップします。

ロードバランスクラスタ構成時の実行環境のセットアップの流れを次に示します。

2. システムの構築

図 2-6 ロードバランスクラスタ構成の場合のセットアップの流れ



図中の各工程について、次に説明します。

なお、ロードバランスクラスタ構成での運用については、「5.3.1 ロードバランスクラスタ構成での運用」を参照してください。

(1) セットアップの準備

セットアップ前に、次の作業を行います。次の作業は、ロードバランスクラスタを構成するすべての HCSC サーバで行います。

実行環境に必要なソフトウェアの設定

J2EE サーバのセットアップなどを行います。設定する内容と設定方法については、「3.1.2 実行環境に必要なソフトウェアの設定」を参照してください。

なお、セットアップ時には、J2EE サーバ名をロードバランスクラスタ内のすべての HCSC サーバで同じ名称に設定する必要があります。

また、Cosminexus RM のシステム名は、ロードバランスクラスタ内のそれぞれの HCSC サーバでユニークな名称に設定する必要があります。

CTM を使用する場合の設定

CTM を使用する場合、HCSC サーバランタイム定義ファイルで `request-ejb.ctm` に `true` を設定してください。

HCSC サーバランタイム定義ファイルの詳細については、「9. 定義ファイル」の「HCSC サーバランタイム定義ファイル」を参照してください。

サービスリクエストへの送信制御

サービスリクエスト用のネットワークを切断するなどして、HCSC サーバでサービス部品の実行要求を受け付けられない状態にします。

(2) 実行環境のセットアップ

実行環境のセットアップ手順を次に示します。

1. 次の順序でプロセスを起動します。

- 運用管理エージェント
- Management Server
- PRF
- スマートエージェント
- CTM ドメインマネージャ (CTM を使用する場合)
- CORBA ネーミングサービス (CORBA ネーミングサービスを使用する場合)
- CTM デーモン (CTM を使用する場合)
- J2EE サーバ
- Hitachi Web Server (Hitachi Web Server を使用する場合)

運用管理エージェント、Management Server、PRF、スマートエージェント、CTM ドメインマネージャ、CORBA ネーミングサービス、CTM デーモン、および J2EE サーバの起動方法については、マニュアル「Cosminexus システム運用ガイド」を、Hitachi Web Server の起動方法については、マニュアル「Hitachi Web Server」をそれぞれ参照してください。

2. HCSC サーバをセットアップします。

HCSC サーバのセットアップ方法については、「3.1.3 HCSC サーバをセットアップする」を参照してください。

3. HCSC サーバを起動します。

HCSC サーバの起動方法については、「5.2.4 HCSC サーバを起動する」を参照してください。

4. サービスアダプタとビジネスプロセスを配備します。

サービスアダプタとビジネスプロセスの配備方法については、「3.1.9 サービスアダプタを配備する」および「3.1.10 ビジネスプロセスを配備する」を参照してください。

5. サービスアダプタとビジネスプロセスを開始します。

サービスアダプタとビジネスプロセスの開始方法については、「5.2.6 サービスアダプタを開始する」および「5.2.7 ビジネスプロセスを開始する」を参照してください。

(3) ロードバランサの設定

ロードバランスクラスタを構成しているすべての HCSC サーバへサービス部品の実行要

2. システムの構築

求を送信するように設定します。

CTM を使用する場合、すべての HCSC サーバで CTM ドメインマネージャ名およびスマートエージェントのポート番号を同じ値に設定する必要があります。

汎用ロードバランサの設定方法については、使用する汎用ロードバランサのドキュメントを参照してください。

(4) 標準受付の開始

すべての HCSC サーバの標準受付を開始します。標準受付の開始方法については、「5.2.11 標準受付を開始する」を参照してください。

(5) ロードバランサの接続

ロードバランサを接続し、使用できる状態にします。

CTM を使用する場合、この手順は不要です。

汎用ロードバランサの接続始方法については、使用する汎用ロードバランサのドキュメントを参照してください。

2.6 HCSC サーバを HA クラスタ構成にする場合の環境構築

HA クラスタ構成では、二つの HCSC サーバを組み合わせることでクラスタを構成できます。HA クラスタを構成する場合、クラスタソフトウェアを利用します。Cosminexus サービスプラットフォームでは、次に示すクラスタソフトウェアを利用できます。

- Windows の場合
Microsoft Cluster Service
- UNIX の場合
HA モニタ

HCSC サーバを HA クラスタ構成にする場合の環境構築およびセットアップの方法について、次に説明します。

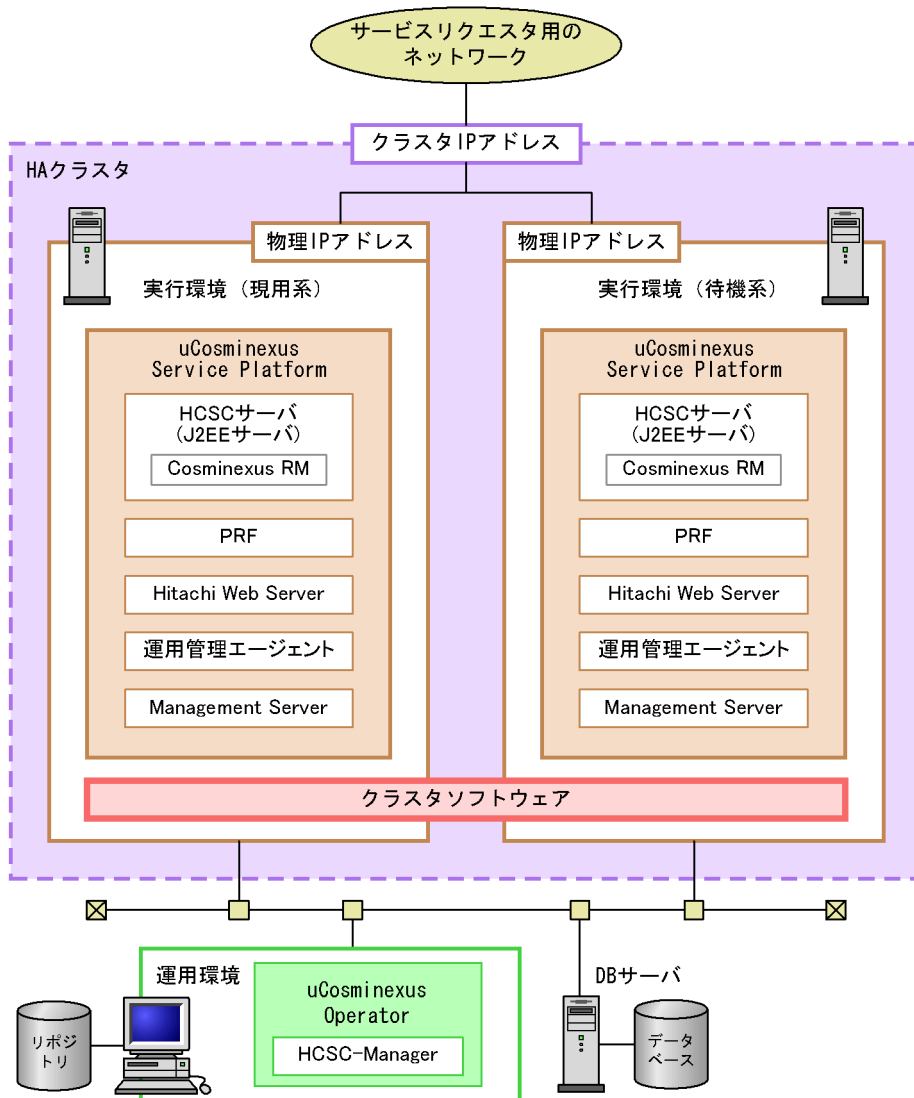
2.6.1 HA クラスタ構成時の環境構築

HCSC サーバを HA クラスタ構成にする場合、実行環境（現用系・待機系）、運用環境、DB サーバがそれぞれ別のマシン上にある構成となります。

HCSC サーバを HA クラスタ構成にした場合のシステムの構成を次の図に示します。

2. システムの構築

図 2-7 HCSC サーバを HA クラスタ構成にした場合のシステムの構成



注 クラスタIPアドレスは、クラスタ単位で設定するIPアドレスです。
クラスタソフトウェアに任意のアドレスを設定します。
サービスリクエストからクラスタIPアドレスに対して送信された実行要求は、
HAクラスタ内で物理IPアドレスに変換されます。

実行環境（現用系・待機系）、運用環境、DBサーバの構築方法を次に示します。

(1) 実行環境（現用系・待機系）の構築

実行環境を構築するには、現用系および待機系で次の作業を実施します。

(a) uCosminexus Service Platform のインストール

uCosminexus Service Platform のインストール方法については、「2.1.2 uCosminexus Service Platform および uCosminexus Operator のインストール」を参照してください。

(b) Management Server の設定

運用環境で HCSC-Manager を使用するための Management Server の設定を、HCSC-Manager の接続先となる実行環境で実施します。

Management Server の設定については、「2.1.5 HCSC-Manager を使用するための Management Server の設定」を参照してください。

(c) HCSC サーバの構成などの設定

HCSC サーバの構成などの実行環境に関する設定を行います。設定する内容と設定方法については、「2.3 実行環境に関する設定」を参照してください。

なお、実行環境に関する設定で HCSC サーバ構成定義ファイル、HCSC サーバセットアップ定義ファイル、および HCSC サーバランタイム定義ファイルを設定する場合には、次に示す内容に留意してください。

HCSC サーバ構成定義ファイルの設定時の注意事項

HCSC サーバ構成定義ファイルで設定するクラスタ種別には、「HA」を設定してください。

また、非同期サービス (MDB (WS-R)) 呼び出しをする場合の Web サーバの IP アドレスは、jms-reception に設定してください。

なお、HCSC サーバ構成定義ファイルに設定する値のうち、次に示す値は現用系と待機系とで異なる値を設定する必要があります。

- Cosminexus manager 名
- Cosminexus manager の IP アドレス

Cosminexus manager の IP アドレスには、現用系・待機系それぞれの物理 IP アドレスを指定します。

上記以外の要素には、現用系と待機系とで同じ値を設定します。

HCSC サーバ構成定義ファイルの設定方法については、「2.3.1 HCSC サーバ構成定義ファイルを設定する」を参照してください。

HCSC サーバ構成定義ファイルに設定する内容の詳細については、「9. 定義ファイル」の「HCSC サーバ構成定義ファイル」を参照してください。

HCSC サーバセットアップ定義ファイルの設定時の注意事項

HCSC サーバセットアップ定義ファイルを設定する場合には、次に示す内容に留意してください。

2. システムの構築

HCSC サーバセットアップ定義ファイルの設定方法については、「2.3.2 HCSC サーバセットアップ定義ファイルを設定する」を参照してください。

HCSC サーバセットアップ定義ファイルに設定する内容の詳細については、「9. 定義ファイル」の「HCSC サーバセットアップ定義ファイル」を参照してください。

同じ値を設定するプロパティ

HCSC サーバセットアップ定義ファイルに設定するプロパティのうち、次の表に示すプロパティは現用系と待機系で同じ値を設定する必要があります。

表 2-22 現用系と待機系で同じ値を設定するプロパティ

同じ値を指定するプロパティ	プロパティに設定する値
db-use	データベースの使用有無
rm-use	Cosminexus RM の使用有無
request-ejb	標準の同期受付 (SessionBean) の使用有無
request-soap	標準の同期受付 (Web サービス) の使用有無
request-jms	標準の非同期受付 (MDB (WS-R)) の使用有無
request-jms.maxmessage	標準の非同期受付 (MDB (WS-R)) のキューの最大メッセージ数
request-dbq	標準の非同期受付 (MDB (DB キュー)) の使用有無
request-dbq.maxmessage	標準の非同期受付 (MDB (DB キュー)) のキューの最大メッセージ数
request-jms-rdarea	標準の非同期受付 (MDB (WS-R)) の RD エリア名
request-dbq-rdarea	標準の非同期受付 (MDB (DB キュー)) の RD エリア名
request-dbq-maxlen	標準の非同期受付 (MDB (DB キュー)) の最大メッセージ長
rm-systemname ¹	Cosminexus RM のシステム名
rm-displayname	Cosminexus RM の表示名
transreq-maxmessage	HCSC サーバ間転送受信キューの最大メッセージ数
transreq-jms-rdarea	HCSC サーバ間転送受信キューの RD エリア名
dbcon-xadisplayname ²	XATransaction または LocalTransaction 用 DB Connector の表示名
dbcon-nodisplayname ²	NoTransaction 用 DB Connector の表示名
dbtype	使用するデータベース種別
jdbc-type	JDBC ドライバ種別
jdbc-url ³	JDBC 用データベース URL
jdbc-dbhostname	データベースのホスト名
jdbc-dbconnectinfo	データベースの接続情報
db-character-sets	データベース文字コード種別
soap-client-def ⁴	Cosminexus SOAP クライアント定義ファイル名

同じ値を指定するプロパティ	プロパティに設定する値
request-userdef-soap	ユーザ定義受付の使用有無

- 注 1 現用系と待機系で同じ Cosminexus RM システム名を指定します。
 注 2 DB コネクタの設定も現用系と待機系で同じにします。
 注 3 指定するホスト名には、データベースを格納しているマシンを指定します。
 注 4 ファイルの設定内容も現用系と待機系で同じにします。

namning-service-hostname に設定する値

namning-service-hostname には、次の値を設定してください。

- CORBA ネーミングサービスを J2EE サーバ起動時にインプロセスで起動している場合
localhost を設定します。
- CORBA ネーミングサービスを J2EE サーバ起動時にインプロセスで起動していない場合
CORBA ネーミングサービスの物理 IP アドレスを設定してください。なお、現用系と待機系で同一の CORBA ネーミングサービスは使用しないでください。
- XA を使用する場合
クラスタ IP アドレスを設定してください。

HCSC サーバランタイム定義ファイルの設定時の注意事項

HCSC サーバランタイム定義ファイルを設定する場合、すべてのプロパティで現用系と待機系で同じ値を設定する必要があります。

HCSC サーバランタイム定義ファイルの設定方法については、「2.3.4 HCSC サーバランタイム定義ファイルを設定する」を参照してください。

HCSC サーバランタイム定義ファイルに設定する内容の詳細については、「9. 定義ファイル」の「HCSC サーバランタイム定義ファイル」を参照してください。

(d) クラスタソフトウェアのインストール

クラスタソフトウェアをインストールします。インストール方法は、利用するクラスタソフトウェアのドキュメントを参照してください。

(2) 運用環境の構築

運用環境は、クラスタを構成する HCSC サーバから独立して構築します。そのため、運用環境として利用するマシンには、uCosminexus Operator をインストールして環境を構築します。

運用環境を構築するには、次の作業を実施します。

uCosminexus Operator のインストール

uCosminexus Operator のインストール方法については、「2.1.2 uCosminexus Service Platform および uCosminexus Operator のインストール」を参照してください。

2. システムの構築

さい。

Eclipse への HCSC-Manager Plug-in の組み込み

uCosminexus Operator をインストールしたマシン上で、Eclipse に HCSC-Manager Plug-in を組み込みます。

Eclipse への HCSC-Manager Plug-in の組み込みについては、「2.1.3 Eclipse への HCSC-Manager Plug-in の組み込み」を参照してください。

環境設定

運用環境の環境設定としてリポジトリの設定と環境変数の設定を実施します。環境設定については、「2.1.4 環境設定」を参照してください。

ユーザ権限などの設定

ユーザ権限などの運用環境に関する設定を行います。設定する内容と設定方法については、「2.4 運用環境に関する設定」を参照してください。

(3) DB サーバの構築

DB サーバは、HA クラスタを構成する HCSC サーバから独立して構築し、現用系および待機系の HCSC サーバで共有します。

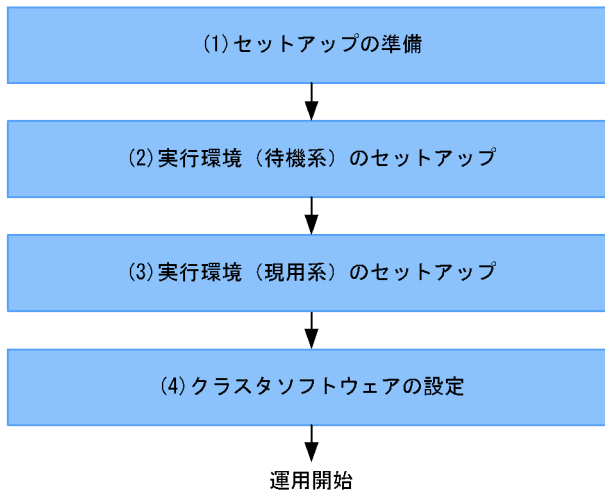
DB サーバとして利用するマシンに利用するデータベースをインストールしてください。インストール方法は、利用するデータベースのドキュメントを参照してください。

2.6.2 HA クラスタ構成時の実行環境のセットアップ

環境の構築後、HA クラスタを構成する実行環境をセットアップします。

HA クラスタ構成時の実行環境のセットアップの流れを次に示します。

図 2-8 HA クラスタ構成の場合のセットアップの流れ



図中の各工程について、次に説明します。

なお、HA クラスタ構成での運用については、「5.3.2 HA クラスタ構成での運用」を参照してください。

(1) セットアップの準備

セットアップ前に、次の作業を行います。次の作業は、現用系および待機系でそれぞれ行います。

実行環境に必要なソフトウェアの設定

J2EE サーバのセットアップなどを行います。設定する内容と設定方法については、「3.1.2 実行環境に必要なソフトウェアの設定」を参照してください。

なお、セットアップ時には、次の名称を現用系と待機系で同じ名称に設定する必要があります。

- J2EE サーバ名
- Cosminexus RM のシステム名

サービスリクエストへの送信制御

サービスリクエスト用のネットワークを切断するなどして、現用系および待機系でサービス部品の実行要求を受け付けられない状態にします。

(2) 実行環境（待機系）のセットアップ

実行環境（待機系）のセットアップ手順を次に示します。

1. 次の順序でプロセスを起動します。

- 運用管理エージェント
- Management Server

2. システムの構築

- PRF
- J2EE サーバ
- Hitachi Web Server

運用管理エージェント、Management Server、PRF、J2EE サーバの起動方法については、マニュアル「Cosminexus システム運用ガイド」を、Hitachi Web Server の起動方法については、マニュアル「Hitachi Web Server」をそれぞれ参照してください。

2. HCSC サーバをセットアップします。

HCSC サーバのセットアップ方法については、「3.1.3 HCSC サーバをセットアップする」を参照してください。

3. HCSC サーバを起動します。

HCSC サーバの起動方法については、「5.2.4 HCSC サーバを起動する」を参照してください。

4. サービスアダプタとビジネスプロセスを配備します。

サービスアダプタとビジネスプロセスの配備方法については、「3.1.9 サービスアダプタを配備する」および「3.1.10 ビジネスプロセスを配備する」を参照してください。

5. サービスアダプタとビジネスプロセスを開始します。

サービスアダプタとビジネスプロセスの開始方法については、「5.2.6 サービスアダプタを開始する」および「5.2.7 ビジネスプロセスを開始する」を参照してください。

6. HCSC サーバを停止します。

サービスアダプタおよびビジネスプロセスを起動したまま HCSC サーバを停止します。

HCSC サーバの停止方法については、「5.2.36 HCSC サーバを停止する」を参照してください。

7. Management Server および運用管理エージェントを停止します。

Management Server および運用管理エージェントの停止方法については、マニュアル「Cosminexus システム運用ガイド」を参照してください。

(3) 実行環境（現用系）のセットアップ

実行環境（現用系）のセットアップ手順を次に示します。

1. 次の順序でプロセスを起動します。

- 運用管理エージェント
- Management Server
- PRF
- J2EE サーバ
- Hitachi Web Server

運用管理エージェント、Management Server、PRF、J2EE サーバの起動方法については、マニュアル「Cosminexus システム運用ガイド」を、Hitachi Web Server の起動方法については、マニュアル「Hitachi Web Server」をそれぞれ参照してください。

2. HCSC サーバをセットアップします。
 HCSC サーバのセットアップ方法については、「3.1.3 HCSC サーバをセットアップする」を参照してください。
 なお、現用系の HCSC サーバをセットアップするときには、cscsvsetup コマンドの -cluster オプションに指定するクラスタ名を、待機系と同じ値にする必要があります。cscsvsetup コマンドについては、「10. コマンド」の「cscsvsetup (HCSC サーバのセットアップ)」を参照してください。
3. HCSC サーバを起動します。
 HCSC サーバの起動方法については、「5.2.4 HCSC サーバを起動する」を参照してください。
4. サービスアダプタとビジネスプロセスを配備します。
 待機系に配備したサービスアダプタおよびビジネスプロセスと同じものを配備します。現用系と待機系の間では、配備されているサービスアダプタおよびビジネスプロセスに過不足がないようにします。
 サービスアダプタとビジネスプロセスの配備方法については、「3.1.9 サービスアダプタを配備する」および「3.1.10 ビジネスプロセスを配備する」を参照してください。
5. サービスアダプタとビジネスプロセスを開始します。
 待機系で開始したサービスアダプタおよびビジネスプロセスと同じものを開始します。現用系と待機系の間では、サービスアダプタおよびビジネスプロセスの状態に差異がないようにします。
 サービスアダプタとビジネスプロセスの開始方法については、「5.2.6 サービスアダプタを開始する」および「5.2.7 ビジネスプロセスを開始する」を参照してください。
6. 標準受付を開始します。
 標準受付の開始方法については、「5.2.11 標準受付を開始する」を参照してください。

(4) クラスタソフトウェアの設定

クラスタソフトウェアでは、現用系に障害が発生したときに待機系に切り替えるための設定を行います。

待機系に切り替えるときに次の操作を行うスクリプトを実行するように設定します。次に示す順に実行されるように設定してください。

なお、OS や HCSC-Manager のユーザなどは、現用系と合わせる必要があります。

2. システムの構築

1. 待機系のプロセスの起動

次の順序でプロセスを起動するように設定します。

- 運用管理エージェント
- Management Server
- PRF
- J2EE サーバ
- Hitachi Web Server

2. 待機系の HCSC サーバの起動

3. 待機系の HCSC サーバの標準受付の開始

注

クラスタソフトウェアで待機系の HCSC サーバを `cscutil` コマンドで起動する場合、次のようにオプションを設定します。

-host オプション

Management Server を起動するホスト名（または IP アドレス）とポート番号をコロン（:）で連結して指定します。ホスト名には「localhost」を指定します。ポート番号が「28099」の場合の指定例を次に示します。

```
-host localhost:28099
```

-mnguser オプション

Management Server の管理ユーザのユーザ ID を指定します。

-mngpass オプション

Management Server の管理ユーザのパスワードを指定します。

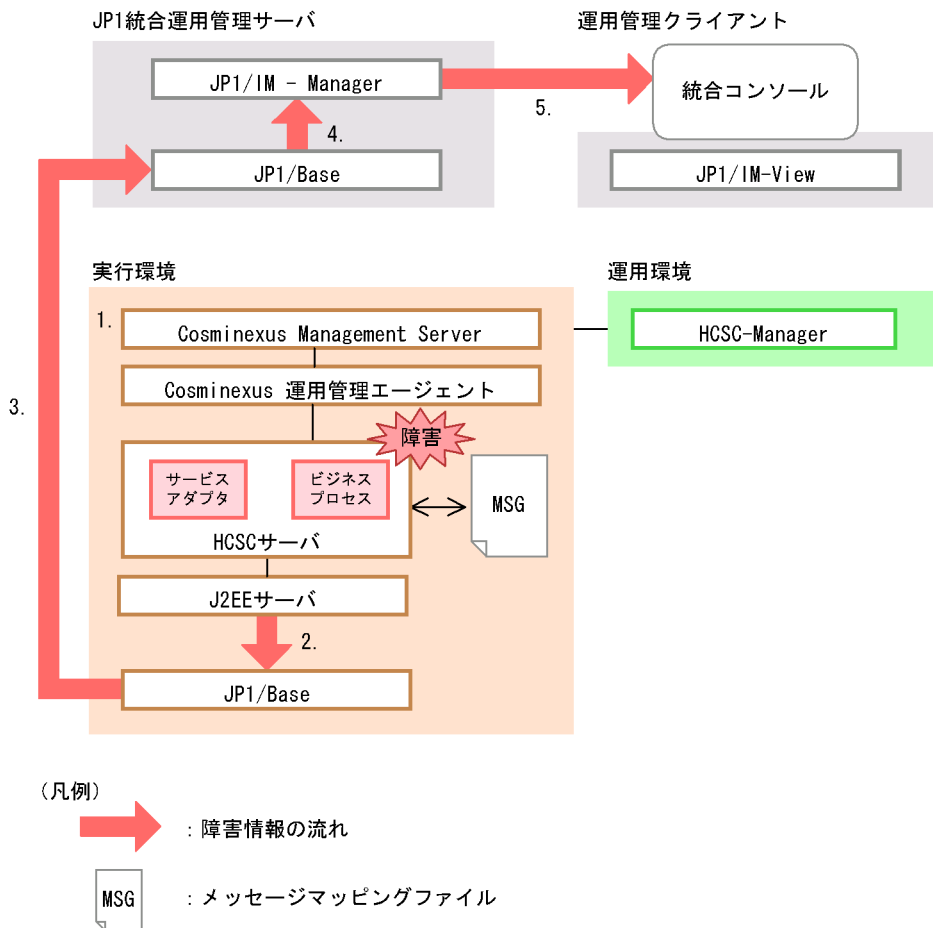
2.7 JP1 連携機能を使用する場合の環境構築

JP1 と連携することで、Cosminexus サービスプラットフォームで発生した障害を監視できます。障害を監視することでトラブルの発生を検知して、原因を究明し、対策することができます。

Cosminexus サービスプラットフォームでは、発生した障害のメッセージを JP1 イベントとして JP1 に通知します。JP1 イベントの詳細情報は、JP1 の統合コンソールから確認します。確認方法については、「7.8.1 JP1 連携機能を使用した障害の監視」を参照してください。

JP1 と連携した障害監視の流れを次に図に示します。

図 2-9 JP1 と連携した障害監視の流れ



1. JP1 イベント発行の設定をします。

Smart Composer でどのようなエラーや障害情報を JP1 イベントとして発行するかを

2. システムの構築

設定します。設定方法については、「2.7.2 Cosminexus サービスプラットフォームの JP1 イベント発行の設定」を参照してください。

2. Cosminexus サービスプラットフォームで障害が発生した場合、障害に関するメッセージが JP1 イベントとして JP1/Base に発行されます。
3. JP1 イベントは JP1 統合運用管理サーバに通知されます。
4. JP1 統合運用管理サーバに通知された JP1 イベントは、JP1/IM-Manager が収集します。
JP1/IM の自動アクション機能を使って運用管理者への通知を設定している場合は、障害が発生したことが運用管理者に通知されます。
5. 統合コンソールから JP1 イベントの詳細情報を確認します。
確認方法については、「7.8.1 JP1 連携機能を使用した障害の監視」を参照してください。

！ 注意事項

実行環境に配備されている HCSC サーバが 1 台の場合、実行環境、運用環境、JP1 統合運用管理サーバ、および運用管理クライアントを 1 台のホストに構築できます。また、1 台のホストに複数の HCSC サーバが配備されている場合も、実行環境、運用環境、JP1 統合運用管理サーバ、および運用管理クライアントを 1 台のホストに構築できます。ただし、複数の HCSC サーバが異なるホストに配備されている場合は、「図 2-9 JP1 と連携した障害監視の流れ」のように、それぞれ別のホストに構築してください。

2.7.1 JP1 連携の設定の流れ

JP1 連携機能を使用するためには、次の表に示す JP1 の製品をインストールおよびセットアップする必要があります。

表 2-23 JP1 連携機能を使用するために必要な JP1 の製品

インストール先	JP1 の製品
実行環境	JP1/Base
JP1 統合運用管理サーバ	<ul style="list-style-type: none">• JP1/Base• JP1/IM-Manager
運用管理クライアント	JP1/IM-View

注

Windows の場合だけインストールできます。したがって、Windows 以外の場合、統合コンソールは表示できません。

JP1 の製品のインストールおよびセットアップについては、マニュアル「JP1/Integrated Management - Manager システム構築・運用ガイド」を参照してください。

JP1 と連携するための設定の流れを次に示します。

1. 実行環境で、次の設定をします。
 - Cosminexus サービスプラットフォームの JP1 イベント発行の設定（2.7.2 参照）
Coxminexus サービスプラットフォームで発生した障害のメッセージを、JP1 イベントとして発行するための設定を行います。
 - JP1/Base のイベントサーバ名の設定（2.7.3 参照）
HA クラスタ構成の場合で、論理ホストの JP1/Base のイベントサーバを使用して JP1 イベントを発行するときだけ設定を行います。
2. JP1 統合運用管理サーバで、次の作業をします。
 - JP1/Base の構成定義の作成（2.7.4 参照）
JP1 統合運用管理サーバが管理するシステムの階層関係を定義します。
この定義を各ホストに配布すると、転送先の情報として識別されます。

2.7.2 Cosminexus サービスプラットフォームの JP1 イベント発行の設定

Cosminexus サービスプラットフォームで発生した障害のメッセージを JP1 イベントとして発行するためには、次の二つの設定をします。

- Cosminexus Management Server 用 JP1 イベントの設定
- J2EE サーバ用 JP1 イベントの設定

それぞれの設定方法について説明します。

(1) Cosminexus Management Server 用 JP1 イベントの設定

Management Server 環境設定ファイル（mserver.properties）に次のように設定します。この設定をすると、Cosminexus Management Server から、障害に関するメッセージが JP1 イベントとして、JP1/Base に発行されます。

Management Server 環境設定ファイルについては、マニュアル「Cosminexus リファレンス 定義編」を参照してください。

```
com.cosminexus.mngsvr.jplevent.enabled=true
com.cosminexus.mngsvr.jplevent.warning=true
com.cosminexus.mngsvr.jplevent.emergency=true
com.cosminexus.mngsvr.jplevent.alert=true
com.cosminexus.mngsvr.jplevent.notice=true
com.cosminexus.mngsvr.jplevent.information=true
com.cosminexus.mngsvr.jplevent.error=true
com.cosminexus.mngsvr.jplevent.critical=true
```

設定した情報を有効にするために、Management Server を再起動してください。

(2) J2EE サーバ用 JP1 イベントの設定

簡易構築定義ファイルの J2EE サーバのコンフィグレーションに次のようにパラメタを指定します。この指定をすると、J2EE サーバから障害に関するメッセージが、JP1 イベントとして JP1/Base に発行されます。

簡易構築定義ファイルについては、マニュアル「Cosminexus 簡易構築・運用ガイド」を参照してください。

```
<configuration>
  <logical-server-type>j2ee-server</logical-server-type>
  <param>
    <param-name>ejbserver.manager.jp1event.enabled</param-name>
    <param-value>true</param-value>
  </param>
  <param>
    <param-name>manager.jp1event.system.filtering.severity.emergency</
param-name>
    <param-value>true</param-value>
  </param>
  <param>
    <param-name>manager.jp1event.system.filtering.severity.alert</param-name>
    <param-value>true</param-value>
  </param>
  <param>
    <param-name>manager.jp1event.system.filtering.severity.critical</
param-name>
    <param-value>true</param-value>
  </param>
  <param>
    <param-name>manager.jp1event.system.filtering.severity.error</param-name>
    <param-value>true</param-value>
  </param>
  <param>
    <param-name>manager.jp1event.system.filtering.severity.warning</param-name>
    <param-value>true</param-value>
  </param>
  <param>
    <param-name>manager.jp1event.system.filtering.severity.notice</param-name>
    <param-value>true</param-value>
  </param>
  <param>
    <param-name>manager.jp1event.system.filtering.severity.information</
param-name>
    <param-value>true</param-value>
  </param>
</configuration>
```

2.7.3 JP1/Base のイベントサーバ名の設定

HA クラスタ構成の場合で、論理ホストの JP1/Base のイベントサーバを使用して JP1 イベントを発行するとき、次の二つの設定をします。

- 実行環境用イベントサーバ名の設定
- J2EE サーバ用イベントサーバ名の設定

それぞれの設定方法について説明します。

(1) Cosminexus Management Server 用イベントサーバ名の設定

Management Server 環境設定ファイル (mserver.properties) に JP1 統合運用管理サーバの論理ホスト名または論理 IP アドレスを設定します。

Management Server 環境設定ファイルについては、マニュアル「Cosminexus リファレンス 定義編」を参照してください。

```
mngsvr.jp1event.event_server_name=< 論理ホスト名または論理 IP アドレス >
```

設定した情報を有効にするために、Management Server を再起動してください。

(2) J2EE サーバ用イベントサーバ名の設定

簡易構築定義ファイルの J2EE サーバのコンフィグレーションに JP1 統合運用管理サーバの論理ホスト名または論理 IP アドレスを指定します。

簡易構築定義ファイルについては、マニュアル「Cosminexus 簡易構築・運用ガイド」を参照してください。

```
<configuration>
  <logical-server-type>j2ee-server</logical-server-type>
  <param>
    <param-name>ex.properties.m</param-name>
    <param-value>.ejbserver.manager.jp1event.event_server_name=<論理ホスト名または論理IPアドレス></param-value>
  </param>
</configuration>
```

2.7.4 JP1/Base の構成定義の作成

JP1/IM が管理するシステムの構成を、JP1/Base の構成定義ファイルに定義します。

JP1/Base の配布機能を利用して、作成した定義を各ホストの JP1/Base に配布すると、定義情報を一括して管理できます。

なお、1 台のホストで実行環境、運用環境、JP1 統合運用管理サーバ、および運用管理クライアントを構成した場合、JP1/Base の構成定義の作成は不要です。

JP1/Base の構成定義の作成手順を次に示します。なお、詳細については、マニュアル「JP1/Integrated Management・Manager システム構築・運用ガイド」のシステムの構成定義情報の設定に関する説明を参照してください。

1. JP1/Base の構成定義ファイルを作成して、システムの構成を定義します。
構成定義ファイル (jbs_route.conf) は次の場所にインストールされています。

Windows の場合

- HA クラスタ構成で運用しているとき

2. システムの構築

<共有フォルダ>¥jp1base¥conf¥route¥jbs_route.conf

- HA クラスタ構成で運用していないとき

<JP1/Base のインストール先フォルダ>¥conf¥route¥jbs_route.conf

UNIX の場合

- HA クラスタ構成で運用しているとき

<共有ディレクトリ>/jp1base/conf/route/jbs_route.conf

- HA クラスタ構成で運用していないとき

/etc/opt/jp1base/conf/route/jbs_route.conf

構成定義ファイルの内容

[JP1 統合運用管理サーバ]

J2EE サーバマシンのホスト名

実行環境のホスト名

2. jbsrt_distrib コマンドを実行して、構成定義情報を配布します。

jbsrt_distrib コマンドは次の場所に格納されています。

Windows の場合

- HA クラスタ構成で運用しているとき

<共有フォルダ>¥jp1base¥bin¥jbsrt_distrib.exe

- HA クラスタ構成で運用していないとき

<JP1/Base インストール先フォルダ>¥bin¥jbsrt_distrib.exe

UNIX の場合

- HA クラスタ構成で運用しているとき

<共有ディレクトリ>/jp1base/bin/jbsrt_distrib

- HA クラスタ構成で運用していないとき

/etc/opt/jp1base/bin/jbsrt_distrib

注意

HA クラスタ構成で運用する場合は、-h オプションに論理サーバ名を指定する必要があります。

2.7.5 メッセージマッピングファイルの編集

メッセージマッピングファイルは、J2EE サーバが検知した障害や通知を、メッセージごとにどの重大度の JP1 イベントに変換するか定義したファイルです。メッセージマッピングファイルを編集して、JP1 イベントとして発行するメッセージを制御するなど、JP1 イベントをカスタマイズできます。なお、マッピング定義がなく JP1 イベントの重大度を割り当てられないメッセージは、JP1 イベントとして発行されません。

メッセージマッピングファイルのファイル名は

「manager.jp1event.system.mapping.properties」です。マッピング関係を定めた標準的なメッセージマッピングファイルを提供しているので、必要に応じて、テキストエディ

タなどで編集してください。メッセージマッピングファイルの格納場所を次に示します。

Windows の場合

<Cosminexus のインストールディレクトリ>\manager\config

UNIX の場合

/opt/Cosminexus/manager/config

メッセージマッピングファイルについては、マニュアル「Cosminexus リファレンス 定義編」を参照してください。

3

システムのセットアップとアンセットアップ

この章では、システムのセットアップ、アンセットアップ、および HCSC サーバの定義について説明します。また、テスト環境から本番環境へ移行する場合の手順について説明します。

3.1 システムのセットアップ

3.2 システムのアンセットアップ

3.3 テスト環境から本番環境への移行手順

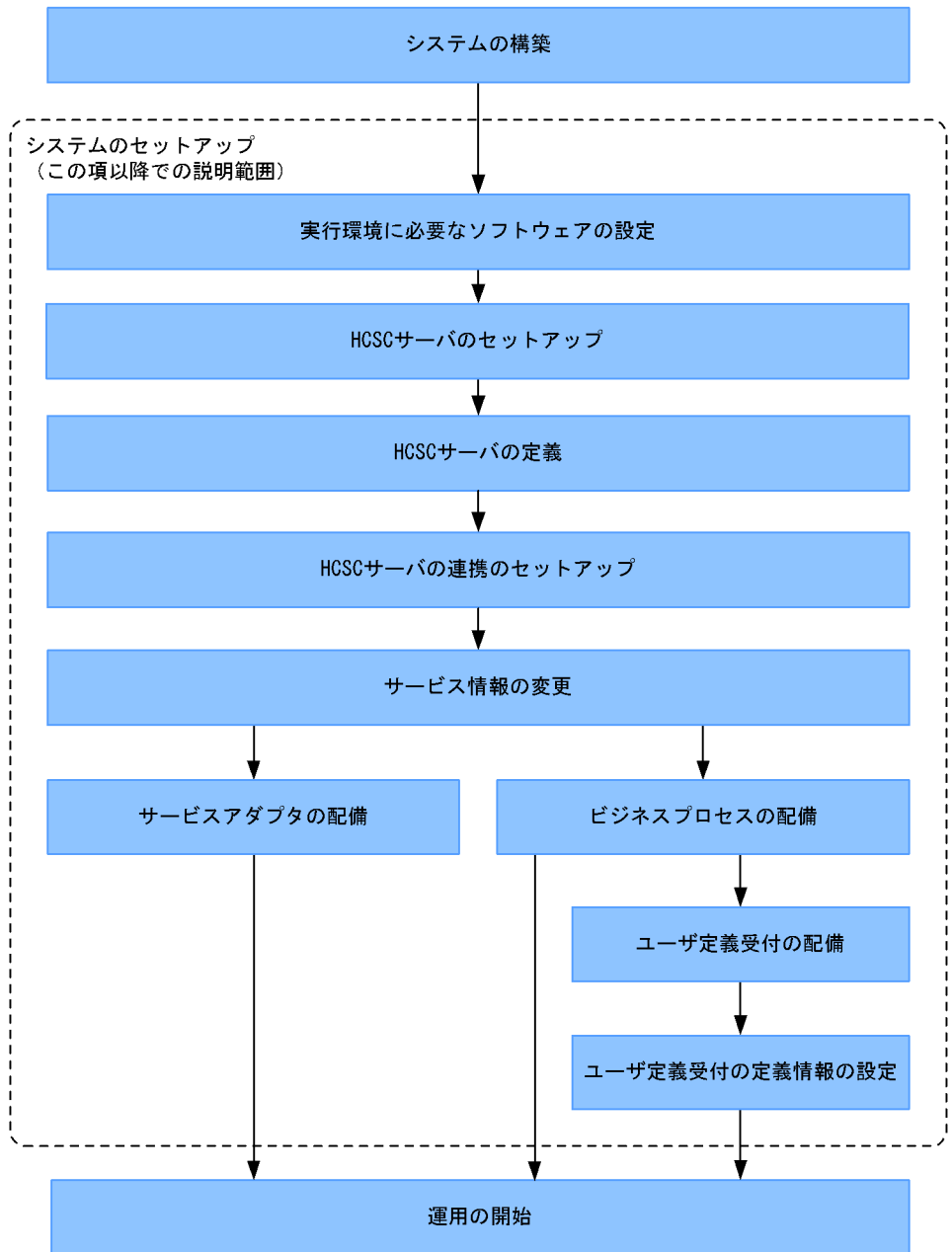
3.1 システムのセットアップ

Cosminexus サービスプラットフォームを利用して、システムをセットアップする方法について説明します。

3.1.1 システムのセットアップの流れ

システムのセットアップの流れについて、次の図に示します。

図 3-1 システムのセットアップの流れ



図中の各工程について、この項で説明します。

! 注意事項

- サービスアダプタの配備，ビジネスプロセスの配備，およびユーザ定義受付の配備の前に，リポジトリをインポートして，リポジトリを最新の状態にしてください。
- 運用時の処理の流れや障害発生時の対策によっては，運用開始前に必要な設定があります。詳細については，「5.4 HCSC サーバのサービス部品を呼び出す流れ」，および「7. 障害対策」を参照してください。

3.1.2 実行環境に必要なソフトウェアの設定

実行環境をセットアップする前に，実行環境に必要なソフトウェアの設定が必要です。実行環境に必要なソフトウェアの設定は，データベースと Cosminexus RM の使用有無によって設定内容が異なります。ここでは，データベースと Cosminexus RM の両方を使用する場合の設定について説明します。データベースと Cosminexus RM の両方を使用しない場合，またはデータベースを使用して Cosminexus RM を使用しない場合の設定については，次の個所を参照してください。

データベースと Cosminexus RM の両方を使用しない場合

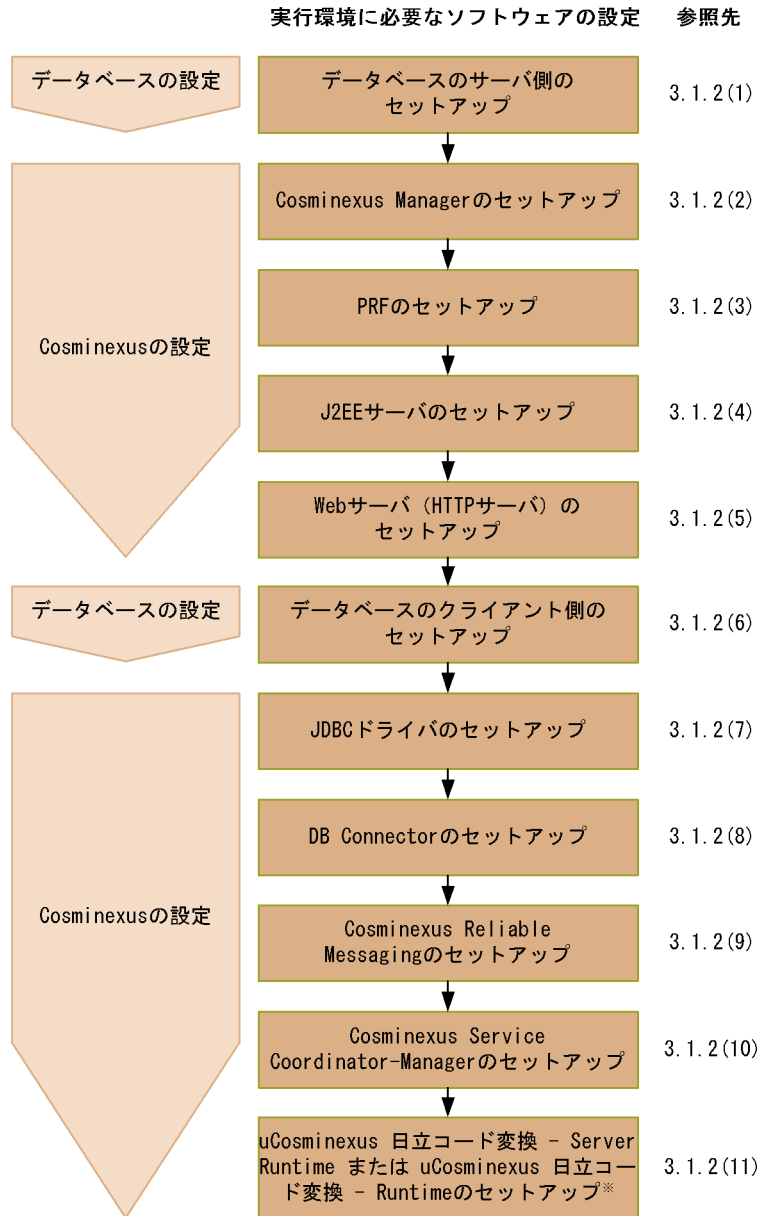
「3.1.15 データベースと Cosminexus RM の両方を使用しない場合のシステムのセットアップ」

データベースを使用して Cosminexus RM を使用しない

「3.1.16 データベースを使用して Cosminexus RM を使用しない場合のシステムのセットアップ」

データベースと Cosminexus RM の両方を使用する場合の，実行環境に必要なソフトウェアの設定の流れについて，次の図に示します。

図 3-2 実行環境に必要なソフトウェアの設定（データベースと Cosminexus RM の両方を使用する場合）



注※ バイナリデータを扱う場合、およびデータ変換の値置換えファンクションを利用する場合にだけ設定します。

実行環境のセットアップ前に実施するソフトウェアの設定について、次に説明します。

3. システムのセットアップとアンセットアップ

(1) データベースのサーバ側のセットアップ

データベースのセットアップとして、DB サーバおよび DB クライアントの両方をセットアップします。

(a) DB サーバ側の設定 (HiRDB の場合)

次の作業を実施します。

HiRDB サーバの文字コードの設定

文字コードにシフト JIS 漢字コード、EUC 日本語漢字コード、UTF-8、または単一バイト文字コードのどれかを設定してください。文字コードの変更方法は、マニュアル「HiRDB システム導入・設計ガイド」の文字コードの指定、または文字コードの選択に関する内容を参照してください。

! 注意事項

HCSC サーバを UNIX で稼働させる場合は、HCSC サーバと HiRDB サーバの文字コードを合わせる必要があります。

環境設定

HiRDB の環境設定についてはマニュアル「HiRDB システム導入・設計ガイド」を参照してください。

ユーザ権限の設定

最初に、接続するユーザの名称を決定します。そのあと、HiRDB に管理情報を格納するため、HiRDB に接続するユーザに権限を設定します。HiRDB では、ユーザに CONNECT 権限を設定することでユーザが作成されます。

設定する権限

- CONNECT 権限
HiRDB を利用するために必要な権限です。データベースに接続 (CONNECT) できるようになります。CONNECT 権限を持たないユーザが HiRDB を利用しようとするとエラーになります。
- スキーマ定義権限
スキーマを定義するために必要な権限です。スキーマ定義権限を設定すると、スキーマ、表、ビュー表、インデクス、抽象データ型を定義できます。また、ストアドプロシジャやストアドファンクションを登録できます。

権限の設定方法

データベース定義ユーティリティ (pddef)、SQL Executer を使用して権限を設定します。権限の設定方法の詳細については、マニュアル「HiRDB システム運用ガイド」を参照してください。データベース定義ユーティリティの使用方法の詳細については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」を参照してください。

データベース定義ユーティリティを使用して権限を設定する場合の手順を次に示します。

1. 次の環境変数を設定します。

Windows の場合

```
SET PDHOST=<HiRDBサーバのホスト名またはIPアドレス>
SET PDNAMEPORT=<HiRDBサーバのポート番号>
SET PDUSER=<DBA権限を持つユーザ名>/<パスワード>
```

UNIX (Bourne シェル) の場合

```
export PDHOST=<HiRDBサーバのホスト名またはIPアドレス>
export PDNAMEPORT=<HiRDBサーバのポート番号>
export PDUSER=<DBA権限を持つユーザ名>/<パスワード>
```

2. 次のコマンドでデータベース定義ユーティリティ (pdddef) を実行します。

```
pdddef
```

3. 次の SQL を実行します。

```
GRANT CONNECT TO <ユーザ名> IDENTIFIED BY <パスワード>;
GRANT SCHEMA TO <ユーザ名> ;
```

注

権限を設定するユーザは、メッセージング基盤が使用する接続ユーザの名前です。HiRDBのクライアント環境変数グループに登録したPDUSER環境変数と同じ値になります。

PDUSER環境変数については、「表 3-2 環境変数グループで設定する環境変数」を参照してください。

4. Windows の場合は [Ctrl] キー + [Z] キーを押したあと、[Enter] キーを押してデータベース定義ユーティリティ (pdddef) を終了します。
UNIX の場合は [Ctrl] キー + [D] キーを押したあと、[Enter] キーを押してデータベース定義ユーティリティ (pdddef) を終了します。

スキーマの定義

HiRDB に管理情報を格納するため、スキーマを定義します。

スキーマの定義方法

データベース定義ユーティリティ (pdddef)、SQL Executer を使用してスキーマを定義します。スキーマを定義する方法の詳細については、マニュアル「HiRDB SQL リファレンス」を参照してください。データベース定義ユーティリティの使

3. システムのセットアップとアンセットアップ

用方法の詳細については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」を参照してください。

データベース定義ユティリティを使用してスキーマを定義する場合の手順を次に示します。

1. 次の環境変数を設定します。

Windows の場合

```
SET PDHOST=<HiRDBサーバのホスト名またはIPアドレス>  
SET PDNAMEPORT=<HiRDBサーバのポート番号>  
SET PDUSER=<ユーザ名> /<パスワード>
```

注

指定するユーザ名は、権限を設定したユーザのユーザ名です。

UNIX (Bourne シェル) の場合

```
export PDHOST=<HiRDBサーバのホスト名またはIPアドレス>  
export PDNAMEPORT=<HiRDBサーバのポート番号>  
export PDUSER=<ユーザ名> /<パスワード>
```

注

指定するユーザ名は、権限を設定したユーザのユーザ名です。

2. 次のコマンドでデータベース定義ユティリティ (pddef) を実行します。

```
pddef
```

3. 次の SQL を実行します。

```
CREATE SCHEMA;
```

4. Windows の場合は [Ctrl] キー + [Z] キーを押したあと , [Enter] キーを押してデータベース定義ユティリティ (pddef) を終了します。

UNIX の場合は [Ctrl] キー + [D] キーを押したあと , [Enter] キーを押してデータベース定義ユティリティ (pddef) を終了します。

RD エリアの準備

メッセージング基盤の管理情報テーブルを格納するため、必要に応じて RD エリアを作成します。RD エリアの作成方法の詳細については、マニュアル「HiRDB システム運用ガイド」を参照してください。

pd_max_users (同時実行可能ユーザ数) の設定

HiRDB のシステム共通定義のオペランド pd_max_users (同時実行可能ユーザ数)

には、実行環境が使用する DB コネクション数の最大値を設定してください。実行環境が使用する DB コネクション数の最大値については、「表 3-1 実行環境が使用する DB コネクションの数」を参照してください。

pd_max_users の詳細については、マニュアル「HiRDB システム定義」を参照してください。

(b) DB サーバ側の設定 (Oracle の場合)

次の作業を実施します。

環境設定

Oracle の環境設定方法の詳細については、Oracle 社が発行するドキュメントを参照してください。

接続ユーザの作成と権限の設定

Oracle に管理情報を格納するため、Oracle に接続ユーザを作成し、権限を設定する必要があります。

設定する権限

システム権限として、次の権限を設定します。

- CREATE ANY INDEX システム権限
- CREATE SESSION システム権限
- CREATE TABLE システム権限
- CREATE VIEW システム権限
- FORCE ANY TRANSACTION システム権限

また、オブジェクト権限として次の権限を設定します。

- SYS.DBA_PENDING_TRANSACTIONS の SELECT 権限
- SYS.DBMS_SYSTEM の EXECUTE 権限 (Oracle JDBC Thin Driver 9.2.0.6 または 10.1.0.3.0 以降を使用する場合)
- SELECT_CATALOG_ROLE 権限

接続ユーザと権限の設定方法

Oracle Enterprise Manager コンソール、または sqlplus を使用してユーザを作成し、権限を設定します。Oracle Enterprise Manager コンソールと sqlplus を使用した場合の設定例を次に示します。

Oracle Enterprise Manager コンソールを使用する場合の設定例

1. sys ユーザでデータベースに接続します。
2. ナビゲータ・ツリーの [セキュリティ] - [ユーザ] を右クリックして、[作成] を実行します。
3. [一般] タブを開き、名前とパスワードを入力します。
4. [ロール] タブを開き、CONNECT ロールを削除します。
5. [システム] タブを開き、システム権限を設定します。
6. [オブジェクト] タブを開き、[SYS] - [ビュー] - [DBA_PENDING_TRANSACTIONS] を選択して、SELECT 権限を設定

3. システムのセットアップとアンセットアップ

します。

7. Oracle JDBC Thin Driver 9.2.0.6 または 10.1.0.3.0 以降を使用する場合、
[SYS] - [パッケージ] - [DBMS_SYSTEM] を選択して、EXECUTE
権限を設定します。
8. [割当て制限] タブを開き、表領域の割り当て制限サイズを設定します。
9. [作成] ボタンを実行します。

sqlplus を使用する場合の設定例

1. sys ユーザでデータベースに接続します。
2. 次の SQL 文を発行します (QUOTA 句の指定値は例です)。

```
CREATE USER <権限を付与するユーザ名> PROFILE "DEFAULT"  
  IDENTIFIED BY <パスワード> DEFAULT TABLESPACE "USERS"  
  TEMPORARY TABLESPACE "TEMP"  
  QUOTA 10 M ON "USERS"  
  QUOTA 10 M ON "TEMP"  
  ACCOUNT UNLOCK;  
GRANT CREATE ANY INDEX TO <権限を付与するユーザ名>;  
GRANT CREATE SESSION TO <権限を付与するユーザ名>;  
GRANT CREATE TABLE TO <権限を付与するユーザ名>;  
GRANT CREATE VIEW TO <権限を付与するユーザ名>;  
GRANT FORCE ANY TRANSACTION TO <権限を付与するユーザ名>;  
GRANT SELECT ON "SYS"."DBA_PENDING_TRANSACTIONS"  
TO <権限を付与するユーザ名>;  
GRANT EXECUTE ON "SYS"."DBMS_SYSTEM" TO <権限を付与するユーザ名>;
```

注

Oracle JDBC Thin Driver 9.2.0.6 または 10.1.0.3.0 以降を使用する場合に指
定します。

(2) Cosminexus Manager のセットアップ

Cosminexus Manager には、Management Server と運用管理エージェントの二つのブ
ロセスがあります。それぞれのセットアップについては、マニュアル「Cosminexus 簡
易構築・運用ガイド」、またはマニュアル「Cosminexus システム構築ガイド」を参照
してください。また、HCSC-Manager を使用するための設定については、「2.1.5
HCSC-Manager を使用するための Management Server の設定」を参照してください。

なお、Management Server と運用管理エージェントは、HCSC サーバを運用するための
基盤となります。そのため、OS の起動と同時に Management Server と運用管理エー
ジェントを自動起動するように設定してください。

(3) PRF のセットアップ

次の作業を実施します。

PRF の設定

PRF の設定方法については、マニュアル「Cosminexus システム構築ガイド」を
参照してください。

(4) J2EE サーバのセットアップ

次の作業を実施します。

J2EE サーバの構築

J2EE サーバの構築方法については、マニュアル「Cosminexus システム構築ガイド」の J2EE サーバに関する内容を参照してください。

！ 注意事項

構築時には、論理サーバ名と実サーバ名を同一にしてください。異なる場合、HCSC サーバのセットアップに失敗するおそれがあります。

J2EE サーバのシステム環境変数の設定

J2EE サーバのシステム環境変数の設定方法については、マニュアル「Cosminexus システム構築ガイド」の環境変数の設定に関する内容を参照してください。

Cosminexus Web Services の初期設定

Cosminexus Web Services の初期設定の手順を次に示します。

1. 次のコマンドを使用して、SOAP エンジンを標準モードに設定します。

Windows の場合

```
setup_mode.bat std
```

UNIX (Bourne シェル) の場合

```
setup_mode.sh std
```

2. Common Public License Version 1.0 に基づいて配布されている WSDL4J を利用するため、「wsdl4j.jar」ファイルを手し、次のディレクトリにコピーします。

```
<Cosminexusのインストールディレクトリ>%c4web%lib以下
```

3. サーバ定義ファイル (c4websv.cfg) を設定します。

HCSC サーバが動作する J2EE サーバでの SOAP 通信基盤のサーバ定義ファイルに指定する内容を次の表に示します。サーバ定義ファイルの作成については、マニュアル「Cosminexus SOAP アプリケーション開発ガイド」を参照してください。

3. システムのセットアップとアンセットアップ

設定項目	キー名称	設定値 (デフォルト)	説明
多重参照	c4web.common.<識別子>.do_multirefs	false	ユーザ定義受付を使用する場合、このプロパティは指定できません。trueを指定した場合の動作は保証しません。
データ型定義	c4web.common.<識別子>.send_xsi_types	true	ユーザ定義受付を使用する場合、このプロパティは指定できません。falseを指定した場合の動作は保証しません。
文字参照形式オプション	c4web.common.<識別子>.character_reference	false	ユーザ定義受付を使用する場合、このプロパティは指定できません。trueを指定した場合の動作は保証しません。
SOAP ヘッダの名前修飾チェックオプション	c4web.common.<識別子>.enable_soapheader_check	true	ユーザ定義受付を使用する場合、ユーザ定義受付での SOAP ヘッダの名前修飾チェックオプションは強制的に false として動作します。
HTTP セッションの維持	c4web.application.<識別子>.app_maintainsession	false	ユーザ定義受付を使用する場合、このプロパティは指定できません。trueを指定した場合の動作は保証しません。

ポイント

HCSC サーバでの識別子とは、サーバ定義ファイル中から動作中のサーバの情報を取得するためのキーのことです。サーバに配備した SOAP アプリケーションのコンテキストルートから先頭の「/」を除いた名称を使用しています。このため、HCSC-Messaging では次のようになります。

標準受付の識別子：クラスタ名

ユーザ定義受付の識別子：ユーザ定義受付の受付 ID

(例) クラスタ名称が「cluster1」の場合

標準受付の識別子：「cluster1」

4. 共通定義ファイル (c4webcom.cfg) を設定します。

HCSC サーバが動作する J2EE サーバでの SOAP 通信基盤の共通定義ファイルに指定する内容を次の表に示します。共通定義ファイルの作成については、マニュアル「Cosminexus SOAP アプリケーション開発ガイド」を参照してください。

設定項目	キー名称	設定値 (デフォルト)	説明
トレースファイル出力の重要度	c4web.logger.log_level	WARN	このプロパティに DEBUG を指定しないでください。DEBUG を指定した場合は、ほかの値を指定したときに比べてより多くのメモリが消費され、スループットに影響が出ます。

HCSC サーバをセットアップするための固有設定

- J2EE サーバ用のユーザプロパティファイル (usrconf.properties) で、ejbserver.rmi.localinvocation.scope に「app」を指定します。
- J2EE サーバ用のユーザプロパティファイル (usrconf.properties) で、ejbserver.server.j2ee.feature に「1.4」を指定します。

コンテナ拡張ライブラリの設定

コンテナ拡張ライブラリとして、「<Cosminexus インストールディレクトリ>¥RM¥lib¥reliablemessaging-api.jar」を設定します。

コンテナ拡張ライブラリの設定方法については、マニュアル「Cosminexus システム構築ガイド」のコンテナ拡張ライブラリの設定に関する内容を参照してください。

(5) Web サーバ (HTTP サーバ) のセットアップ

Web サーバ (HTTP サーバ) をセットアップするには、Cosminexus の J2EE サーバに含まれるインプロセス HTTP サーバを使用する方法と、Hitachi Web Server を使用する方法の二つがあります。

(a) インプロセス HTTP サーバを使用する方法

インプロセス HTTP サーバのセットアップ手順を次に示します。

1. 運用管理ポータルから、[論理サーバの環境設定] を選択します。
2. サーバビューから、[論理 J2EE サーバ] - [J2EE サーバ] - [< J2EE サーバ名 >] を選択します。
3. [HTTP サーバ] タブの [通信・スレッド制御] タブを選択します。
[通信・スレッド制御設定] 画面が表示されます。
4. [Web クライアントとの接続設定] - [Persistent コネクション] - [タイムアウト] に、SOAP 通信基盤 (Cosminexus Web Services) の共通定義ファイルの c4web.common.connection_pool.timeout プロパティに指定した値以上の値を設定します。
例えば、c4web.common.connection_pool.timeout プロパティのデフォルト値 1800 の倍の値である 3600 をタイムアウト値に設定します。
c4web.common.connection_pool.timeout プロパティを設定していない場合は、1800

3. システムのセットアップとアンセットアップ

がデフォルト値として動作します。なお、タイムアウト値に指定できる範囲は 0 ~ 3600 です。そのため、`c4web.common.connection_pool.timeout` プロパティの設定が 1800 よりも大きい場合は、0 を設定してください。

(b) Hitachi Web Server を使用する方法

次の作業を実施します。

Hitachi Web Server のセットアップ

セットアップ方法の詳細については、マニュアル「Hitachi Web Server」を参照してください。

Hitachi Web Server と J2EE サーバを連携する設定

J2EE サーバと連携するための設定方法の詳細については、マニュアル「Cosminexus システム構築ガイド」を参照してください。

Hitachi Web Server の KeepAliveTimeout 値の設定

Hitachi Web Server の環境設定ファイルである `httpsd.conf` の `KeepAliveTimeout` に、SOAP 通信基盤 (Cosminexus Web Services) の共通定義ファイルの `c4web.common.connection_pool.timeout` プロパティに指定した値の倍以上の値を設定します。

例えば、`c4web.common.connection_pool.timeout` プロパティのデフォルト値 1800 の倍の値である 3600 を `KeepAliveTimeout` に設定します。

`c4web.common.connection_pool.timeout` プロパティを設定していない場合は、1800 がデフォルト値として動作します。詳細は、マニュアル「Cosminexus SOAP アプリケーション開発ガイド」のコネクションプーリングに関する設定を参照してください。

(6) データベースのクライアント側のセットアップ

(a) DB クライアント側の設定 (HiRDB の場合)

実行環境のマシンで、次の作業を実施します。

環境変数の設定

Windows の場合は、次の環境変数を設定します。

UNIX の場合は、HCSC サーバが稼働している J2EE サーバ起動時と Management Server 実行時の環境変数に、次の環境変数を設定します。

HCSC サーバが稼働している J2EE サーバ起動時の環境変数の設定方法は、マニュアル「Cosminexus 運用管理操作ガイド」の J2EE サーバの環境変数の設定に関する内容を参照してください。

Management Server 実行時の環境変数の設定方法は、マニュアル「Cosminexus リファレンス 定義編」の `mserverenv.cfg` (Management Server 用環境変数定義ファイル) に関する内容を参照してください。

PDXAMODE

1 を指定します。

PDTXACANUM

Cosminexus サービスプラットフォームが使用する DB コネクション数の最大値を指定します。

DB コネクション数の最大値は、利用する実行環境に応じて見積もる必要があります。実行環境が DB コネクションを使用する契機と数を次の表に示します。

表 3-1 実行環境が使用する DB コネクションの数

DB コネクションの使用先	DB コネクションの使用の契機	DB コネクションの使用数
メッセージング基盤	起動時	1
	コマンド実行時	1
	サービス部品実行要求受付時	サービス部品の同時実行数
	電文の実行履歴の取得時	サービス部品の同時実行数
ビジネスプロセス基盤	ビジネスプロセス実行要求受付時	ビジネスプロセスの同時実行数
DB アダプタ	サービス部品実行要求受付時	サービス部品の同時実行数
Cosminexus RM	マニュアル「Cosminexus Reliable Messaging」の DB コネクションを使用するタイミングと使用するコネクションの数に関する内容を参照してください。	

DB コネクション使用数の和が最大値となります。

PDLANG または LANG

HCSC サーバを UNIX で稼働させる場合、HiRDB サーバの文字コードに応じて、PDLANG か LANG のどちらかに HiRDB サーバと同じ文字コードを指定します。詳細は、マニュアル「HiRDB UAP 開発ガイド」の PDLANG に関する内容を参照してください。

HCSC サーバを Windows で稼働させる場合は、設定は不要です。

LC_CTYPE

HCSC サーバを UNIX で稼働させる場合、HiRDB サーバと同じ文字コードを指定します。

HCSC サーバを Windows で稼働させる場合は、設定は不要です。

LD_LIBRARY_PATH

HCSC サーバを Linux で稼働させる場合、下記のパスを追加します。

- <Cosminexus DABroker Library 運用ディレクトリ >/lib
- <HiRDB 運用ディレクトリ >/client/lib
HiRDB/Single Server, または HiRDB/Parallel Server インストール時に指定します。
- <HiRDB のインストールディレクトリ >/client/lib
HiRDB/Run Time, または HiRDB/Developer's Kit インストール時に指定し

3. システムのセットアップとアンセットアップ

ます。

HCSC サーバを Windows で稼働させる場合は、設定は不要です。

LIBPATH

HCSC サーバを AIX で稼働させる場合、下記のパスを追加します。

- <Cosminexus DABroker Library 運用ディレクトリ >/lib
- <HiRDB 運用ディレクトリ >/client/lib

HiRDB/Single Server , または HiRDB/Parallel Server インストール時に指定します。

- <HiRDB のインストールディレクトリ >/client/lib

HiRDB/Run Time , または HiRDB/Developer's Kit インストール時に指定します。

HCSC サーバを Windows で稼働させる場合は、設定は不要です。

環境変数グループの設定

環境変数グループを次の方法で登録します。

Windows の場合

HiRDB のクライアント環境変数登録ツールで「システムグループ」を選択して、環境変数グループを登録します。この場合、DB Connector のプロパティ定義では、ここで登録した環境変数グループ名を指定してください。

UNIX の場合

HiRDB のクライアント環境変数グループの設定ファイルに登録します。この場合、DB Connector のプロパティ定義では、ここで登録した環境変数グループの設定ファイルのパスを指定してください。

環境変数グループを登録する方法の詳細については、マニュアル「HiRDB UAP 開発ガイド」の環境変数のグループ登録に関する内容を参照してください。

DB Connector のプロパティについては、マニュアル「Cosminexus アプリケーション設定操作ガイド」の DB Connector のプロパティの定義に関する内容を参照してください。

環境変数グループで設定する環境変数を次の表に示します。

表 3-2 環境変数グループで設定する環境変数

環境変数名	設定する内容
PDHOST	データベースのホスト名または IP アドレスを指定します。
PDUSER	データベースのユーザ名およびデータベースのパスワードを指定します。
PDNAMEPORT	データベースのポート番号を指定します。
PDSWAITTIME	Cosminexus Component Container のトランザクションタイムアウトの値 よりも大きな値を指定します。

環境変数名	設定する内容
PDCWAITTIME	Cosminexus Component Container のトランザクションタイムアウトの値 よりも大きな値を指定します。
PDSWATCHTIME	0 を指定します。

注

Cosminexus Component Container のトランザクションタイムアウトの値は、J2EE サーバ用ユーザプロパティファイルで指定します。Cosminexus Component Container のトランザクションタイムアウトの値については、マニュアル「Cosminexus システム設計ガイド」のトランザクションタイムアウトの設定に関する内容を参照してください。

(b) DB クライアント側の設定 (Oracle の場合)

Oracle JDBC Thin Driver をセットアップします。Oracle JDBC Thin Driver のセットアップについては、「3.1.2(7)(c) Oracle JDBC Thin Driver のセットアップ」を参照してください。

(7) JDBC ドライバのセットアップ

使用する JDBC ドライバは、利用条件を考慮して選択する必要があります。

使用する JDBC ドライバの選択方法を次の表に示します。

表 3-3 使用する JDBC ドライバ

利用する DBMS	使用する JDBC ドライバ	JDBC ドライバのパッケージ
HiRDB (Version7 または Version8) 1	Cosminexus DABroker Library	JP.co.Hitachi.soft.DBPSV_Driver.JdbcDbpsvDriver
HiRDB Version 8 2	HiRDB TYPE4 JDBC Driver	JP.co.Hitachi.soft.HiRDB.JDBC.HiRDBDriver
Oracle	Oracle JDBC Thin Driver	oracle.jdbc.driver.OracleDriver

注 1 Cosminexus DABroker Library 用の DB Connector を利用する場合

注 2 HiRDB Type4 JDBC Driver 用の DB Connector を利用する場合

(a) Cosminexus DABroker Library のセットアップおよび環境設定

Windows の場合

Cosminexus DABroker Library のセットアップとして、次の作業を実施してください。

バッファサイズの設定

Cosminexus DABroker Library の環境設定の [リモートアクセス設定] タブ

3. システムのセットアップとアンセットアップ

で、[BLOB/LONG/CLOB 型データ受取バッファサイズ] に、DB Connector の bufSize プロパティに設定する値よりも大きい値を設定します。

bufSize プロパティの設定については、「3.1.2(8) DB Connector のセットアップ」を参照してください。

漢字コードセットの設定

Cosminexus DABroker Library の環境設定の [リモートアクセス設定] タブで、使用する DB の文字コードに合わせて [漢字コードセット] を設定します。データベースの言語モードについては、HiRDB の場合はマニュアル「HiRDB システム導入・設計ガイド」を、Oracle の場合は Oracle 社が発行するドキュメントを参照してください。

使用する ORACLE のバージョンの設定

Cosminexus DABroker Library の環境設定の [共通設定] タブで、[使用する ORACLE のバージョン] に Oracle のバージョンを設定します。

UNIX の場合

Cosminexus DABroker Library をセットアップします。Cosminexus DABroker Library のセットアップ方法の詳細は、マニュアル「Cosminexus システム構築ガイド」の Cosminexus DABroker Library の設定に関する内容を参照してください。Cosminexus DABroker Library 動作環境定義ファイルに指定する設定項目で、特に設定が必要な項目を次に示します。

DABORACLE_TYPE

Oracle を使用する場合に、使用する Oracle のバージョンを指定します。

DABHIRDBA_BLOBBUFSIZE および DABORADBA_LONGBUFSIZE

DB Connector の bufSize プロパティに設定する値よりも大きな値を設定します。

bufSize プロパティの設定については、「3.1.2(8) DB Connector のセットアップ」を参照してください。

DAB_LANG

使用する DB の文字コードを設定します。

(b) HiRDB Type4 JDBC Driver のセットアップ

HiRDB Type4 JDBC Driver のセットアップについては、マニュアル「スケーラブルデータベースサーバ HiRDB Version 8 UAP 開発ガイド」の HiRDB Type4 JDBC Driver に関する内容を参照してください。

なお、HCSC サーバを使用するために、次の設定をする必要があります。

1. <Cosminexus インストールディレクトリ >/manager/config/msserver.cfg ファイルに、HiRDB Type4 JDBC Driver の JAR ファイル (pdjdbc2.jar) をクラスパスとして指定します。このとき、「web.add.class.path=<pdjdbc2.jar のパス>」の形式で指定してください。

例 1 (HiRDB/Run Time の場合)

```
web.add.class.path=<HiRDB/Run Time インストールディレクトリ >/client/lib/
pdjdbc2.jar
```

例 2 (HiRDB/Single Server の場合)

```
web.add.class.path=<HiRDB/Single Server インストールディレクトリ > /
client/lib/pdjdbc2.jar
```

注 <HiRDB インストールディレクトリ > は、hirdb_s というディレクトリになります。

- 運用管理ポータル「論理サーバの環境設定」にある論理 J2EE サーバの [J2EE コンテナの設定] 画面の拡張パラメタに、HiRDB Type4 JDBC Driver の JAR ファイル (pdjdbc2.jar) をクラスパスとして指定します。このとき、「add.class.path=<pdjdbc2.jar のパス >」の形式で指定してください。ここでの設定値は、J2EE サーバのユーザ定義ファイル (usrconf.cfg) に反映されます。「論理サーバの環境設定」での設定については、マニュアル「Cosminexus システム構築ガイド」を参照してください。

例 1 (HiRDB/Run Time の場合)

```
add.class.path=<HiRDB/Run Time インストールディレクトリ >/client/lib/
pdjdbc2.jar
```

例 2 (HiRDB/Single Server の場合)

```
add.class.path=<HiRDB/Single Server インストールディレクトリ > /client/
lib/pdjdbc2.jar
```

注 <HiRDB インストールディレクトリ > は、hirdb_s というディレクトリになります。

- HCSC-Messaging コマンド共通定義ファイルの HCSC_ADDCLASSPATH に、HiRDB Type4 JDBC Driver の JAR ファイル (pdjdbc2.jar) をクラスパスとして指定します。HCSC-Messaging コマンド共通定義ファイルの詳細については、「9. 定義ファイル」の「HCSC-Messaging コマンド共通定義ファイル」を参照してください。

(c) Oracle JDBC Thin Driver のセットアップ

Oracle JDBC Thin Driver のセットアップについては、マニュアル「Cosminexus システム構築ガイド」または、使用しているデータベースのマニュアルを参照してください。

なお、HCSC サーバを使用するために、次の設定をする必要があります。

- <Cosminexus インストールディレクトリ >/manager/config/mserver.cfg ファイルに、Oracle JDBC Thin Driver の JAR ファイルをクラスパスとして指定します。このとき、「web.add.class.path=<Oracle JDBC Thin Driver のパス >」の形式で指定してください。

例

3. システムのセットアップとアンセットアップ

```
web.add.class.path=<Oracle Client のインストールディレクトリ >/jdbc/lib/  
ojdbc14.jar
```

2. 運用管理ポータル「論理サーバの環境設定」にある論理 J2EE サーバの [J2EE コンテナの設定] 画面の拡張パラメタに、Oracle JDBC Thin Driver の JAR ファイルをクラスパスとして指定します。このとき、「add.class.path=<Oracle JDBC Thin Driver のパス>」の形式で指定してください。

ここでの設定値は、J2EE サーバのユーザ定義ファイル (usrconf.cfg) に反映され
ます。

「論理サーバの環境設定」での設定については、マニュアル「Cosminexus システム
構築ガイド」を参照してください。

例

```
add.class.path=<Oracle Client のインストールディレクトリ >/jdbc/lib/  
ojdbc14.jar
```

3. HCSC-Messaging コマンド共通定義ファイルの HCSC_ADDCLASSPATH に、Oracle JDBC Thin Driver の JAR ファイルをクラスパスとして指定します。HCSC-Messaging コマンド共通定義ファイルの詳細については、「9. 定義ファイル」の「HCSC-Messaging コマンド共通定義ファイル」を参照してください。

(8) DB Connector のセットアップ

HCSC サーバは、データベースと接続するために DB Connector を利用します。処理のタイミングやテーブル種別に応じて、DB アクセスをトランザクション管理する場合と管理しない場合があるため、トランザクションサポート種別が XATransaction または LocalTransaction の DB Connector と、トランザクションサポート種別が NoTransaction である DB Connector の、二つの DB Connector を準備する必要があります。

なお、トランザクションサポート種別が XATransaction または LocalTransaction の DB Connector は、処理性能を向上させるため、Cosminexus RM と連携できる DB Connector を利用します。

それぞれの DB Connector の表示名は、HCSC サーバセットアップ定義ファイルの「dbcon-xadisplayname」と「dbcon-nodisplayname」に指定します。HCSC サーバセットアップ定義ファイルの詳細については、「9. 定義ファイル」の「HCSC サーバセットアップ定義ファイル」を参照してください。

(a) DB Connector のインポート

インポートする DB Connector は、利用条件を考慮して選択する必要があります。インポートする RAR ファイルの選択方法を次の表に示します。

表 3-4 インポートする RAR ファイルの選択方法 (Cosminexus RM を使用する場合)

HCSC サーバセットアップ定義ファイルのプロパティ	利用する DB	ライトトランザクション機能の利用の有無	
		利用する	利用しない
dbcon-xadisplayname	HiRDB (Version7 または Version8) 1	DBConnector_DABJ_CP_Cosminexus_RM.rar	DBConnector_DABJ_XA_Cosminexus_RM.rar
	HiRDB (Version8) 2	DBConnector_HiRDB_Type4_CP_Cosminexus_RM.rar	DBConnector_HiRDB_Type4_XA_Cosminexus_RM.rar
	Oracle	DBConnector_Oracle_CP_Cosminexus_RM.rar	DBConnector_Oracle_XA_Cosminexus_RM.rar
dbcon-nodisplayname	HiRDB (Version7 または Version8) 1	DBConnector_DABJ_CP.rar	
	HiRDB (Version8) 2	DBConnector_HiRDB_Type4_CP.rar	
	Oracle	DBConnector_Oracle_CP.rar	

注 1 JDBC ドライバに Cosminexus DABroker Library を利用する場合です。

注 2 JDBC ドライバに HiRDB Type4 JDBC Driver を利用する場合です。

DB Connector のインポート方法については、マニュアル「Cosminexus アプリケーション設定操作ガイド」のデータベースと接続するための設定に関する内容を参照してください。また、プロパティ定義については、マニュアル「Cosminexus リファレンス定義編」の Connector 属性ファイルに関する内容を参照してください。

ライトトランザクションについては、マニュアル「Cosminexus 機能解説」を参照してください。また、設定方法については、マニュアル「Cosminexus 運用管理操作ガイド」を参照してください。

また、DB アダプタを利用する場合は、DB アダプタが利用する DB Connector をインポートします。インポートする RAR ファイルの選択方法を次の表に示します。

3. システムのセットアップとアンセットアップ

表 3-5 インポートする RAR ファイルの選択方法 (DB アダプタを利用する場合)

利用する JDBC ドライバ	利用する DB	ライトトランザクション機能の利用の有無	
		利用する	利用しない
Cosminexus DABroker Library	HiRDB (Version7 または Version8)	DBConnector_DABJ_CP.rar	DBConnector_DABJ_XA.rar
	Oracle		
HiRDB Type4 JDBC Driver	HiRDB (Version8)	DBConnector_HiRDB_Type4_CP.rar	DBConnector_HiRDB_Type4_XA.rar
Oracle JDBC Thin Driver	Oracle	DBConnector_Oracle_CP.rar	DBConnector_Oracle_XA.rar

(b) プロパティの定義

DB Connector をインポートしたあと、マニュアル「Cosminexus リファレンス 定義編」の Connector 属性ファイルに関する内容を参照して、プロパティを定義してください。ただし、次の表に示す内容をプロパティに設定する必要があります。

表 3-6 dbcon-xadisplayname に設定する DB Connector 属性ファイルの設定内容 (DABroker/Oracle)

設定項目	設定値
<display-name> タグ	DB Connector 表示名
<config-property> タグに設定する databaseName プロパティ	データベース名 ¹
<config-property> タグに設定する bufSize プロパティ	システムで利用する最大の電文長よりも大きな値 ²
<transaction-support> タグ	XATransaction ³
	LocalTransaction ⁴

注 1

使用する DB Connector によって設定値が異なります。設定値については、マニュアル「Cosminexus リファレンス 定義編」の Connector 属性ファイルに関する内容を参照してください。また、データベースに接続するために必要な情報もあわせて設定してください。

注 2

使用する DB Connector が次の DB Connector で、LONGVARBINARY_Access プロパティに REAL を指定した場合に指定してください。

- DBConnector_DABJ_XA_Cosminexus_RM.rar
- DBConnector_DABJ_CP_Cosminexus_RM.rar

注 3

ライトトランザクション機能を利用しない場合に、次の DB Connector に対して指定してください。

- ・DBCConnector_DABJ_XA_Cosminexus_RM.rar
- ・DBCConnector_Oracle_XA_Cosminexus_RM.rar

注 4

ライトトランザクション機能を利用する場合に、次の DB Connector に対して指定してください。

- ・DBCConnector_DABJ_CP_Cosminexus_RM.rar
- ・DBCConnector_Oracle_CP_Cosminexus_RM.rar

表 3-7 dbcon-xadisplaname に設定する DB Connector 属性ファイルの設定内容
(HiRDB Type4)

設定項目	設定値
<display-name> タグ	DB Connector 表示名
<config-property> タグに設定する maxBinarySize プロパティ	システムで利用する最大の電文長よりも大きな値 ¹
<transaction-support> タグ	XATransaction ²
	LocalTransaction ³

注 1

LONGVARBINARY_Access プロパティに REAL を指定した場合に指定してください。また、必ず 0 以外の値を指定してください。

注 2

ライトトランザクション機能を利用しない場合に、次の DB Connector に対して指定してください。

- ・DBCConnector_HiRDB_Type4_XA_Cosminexus_RM.rar

注 3

ライトトランザクション機能を利用する場合に、次の DB Connector に対して指定してください。

- ・DBCConnector_HiRDB_Type4_CP_Cosminexus_RM.rar

注意

データベースに接続するために必要な情報を設定してください。設定値については、マニュアル「Cosminexus リファレンス 定義編」の Connector 属性ファイルに関する内容を参照してください。

表 3-8 dbcon-nodisplayname に設定する DB Connector 属性ファイルの設定内容
(DABroker/Oracle)

設定項目	設定値
<display-name> タグ	DB Connector 表示名

3. システムのセットアップとアンセットアップ

設定項目	設定値
<config-property> タグに設定する databaseName プロパティ	データベース名 ¹
<config-property> タグに設定する bufSize プロパティ	システムで利用する最大の電文長よりも大きな値 ²
<transaction-support> タグ	NoTransaction ³

注 1

使用するデータベースによって設定値が異なります。設定値については、マニュアル「Cosminexus リファレンス 定義編」の Connector 属性ファイルに関する内容を参照してください。また、データベースに接続するために必要な情報もあわせて設定してください。

注 2

使用する DB Connector が次の DB Connector で、LONGVARBINARY_Access プロパティに REAL を指定した場合に指定してください。

- ・DBConnector_DABJ_CP.rar

注 3

使用する DB Connector が次の DB Connector に対して指定してください。

- ・DBConnector_DABJ_CP.rar
- ・DBConnector_Oracle_CP.rar

表 3-9 dbcon-nodisplayname に設定する DB Connector 属性ファイルの設定内容
(HiRDB Type4)

設定項目	設定値
<display-name> タグ	DB Connector 表示名
<config-property> タグに設定する maxBinarySize プロパティ	システムで利用する最大の電文長よりも大きな値 ¹
<transaction-support> タグ	NoTransaction ²

注 1

LONGVARBINARY_Access プロパティに REAL を指定した場合に指定してください。また、必ず 0 以外の値を指定してください。

注 2

使用する DB Connector が次の DB Connector に対して指定してください。

- ・DBConnector_HiRDB_Type4_CP.rar

注意

データベースに接続するために必要な情報を設定してください。設定値については、マニュアル「Cosminexus リファレンス 定義編」の Connector 属性ファイルに関する内容を参照してください。

表 3-10 DB アダプタを利用する場合に設定する Connector 属性ファイルの設定内容

設定項目	設定値
<display-name> タグ	DB Connector 表示名 ¹
<config-property> タグに設定する databaseName プロパティ	データベース名 ²
<transaction-support> タグ	XATransaction
	LocalTransaction

注 1

この値は、DB アダプタのアプリケーション統合属性ファイルの <linked-to> タグにも設定します。アプリケーション統合属性ファイルについては、マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド」のアプリケーション統合属性ファイルの作成に関する内容を参照してください。

注 2

使用する DB Connector によって設定値が異なります。設定値については、マニュアル「Cosminexus リファレンス 定義編」の Connector 属性ファイルに関する内容を参照してください。

(9) Cosminexus Reliable Messaging のセットアップ

Cosminexus Reliable Messaging をセットアップします。作業の詳細については、マニュアル「Cosminexus Reliable Messaging」を参照してください。セットアップ作業のうちプロパティのカスタマイズについては、次に示す方法で実施します。

Cosminexus Reliable Messaging のコンフィグレーションプロパティの設定

設定するコンフィグレーションプロパティと指定する値を次の表に示します。なお、認証情報（User および Password）には、Cosminexus RM が HiRDB または Oracle にアクセスするために利用する接続ユーザのユーザ名およびパスワードを指定してください。

表 3-11 設定するコンフィグレーションプロパティと指定する値

プロパティ名	設定内容	設定値
RMSystemName	システム名	連携するシステム全体で一意的なシステム名を指定します。
RMLinkedDBConnectorName	連携する DB Connector の表示名	連携する DB Connector の表示名を指定します。

3. システムのセットアップとアンセットアップ

プロパティ名	設定内容	設定値
RMSSHConnectFlag	共用キューを使用して複数システム間でのアプリケーション連携をする場合の受信用共用キューの有無	標準の非同期受付 (MDB (DB キュー)) を使用する場合「true」を指定します。 標準の非同期受付 (MDB (DB キュー)) を使用しない場合、または DB キューを使用できないデータベース (Oracle) を使用している場合「false」を指定します。
RMTRConnectFlag	キュー間転送の使用有無	「true」を指定します。
RMMMaxDeliveryNum	配送回数の最大値	0 以外 (1 ~ 512) を設定します (推奨値: 10)。
RMDeadMessageQueueName	デッドメッセージキュー名	1 ~ 20 文字の識別子を設定します。 なお、必ずデッドメッセージキューを使用してください。 また、デッドメッセージキューはローカルキューとしてください。

注意事項

- コンフィグレーションプロパティ RMWaitRestoration の値は変更しないでください。Cosminexus RM のデフォルト値「true」で動作します。
- デッドメッセージキュー名「RMDeadMessageQueueName」に指定するデッドメッセージキューは、非同期の標準受付や非同期のサービスアダプタを使用している場合に、配送回数が最大値に達してサービス部品が呼び出されなかったメッセージが移動される特別なキューです。
デッドメッセージキュー名を設定していない場合、およびデッドメッセージキューを作成していない場合、無限にサービス部品を呼び出す処理が再実行されるため、注意してください。
なお、デッドメッセージキューとして使用するキューは、Cosminexus RM の設定後、最初に開始したあとに作成してください。
- データベースに Oracle を使用する場合、非同期受付キュー (MDB (DB キュー))、および非同期のサービスアダプタ (MDB (DB キュー)) は使用できません。

(10) Cosminexus Service Coordinator-Manager のセットアップ

必要に応じて、「2.4 運用環境に関する設定」を参照し、設定してください。

(11) uCosminexus 日立コード変換 - Server Runtime または uCosminexus 日立コード変換 - Runtime のセットアップ

実行環境でバイナリデータを扱う場合、およびデータ変換の値置換えファンクションを

利用する場合、実行環境の OS が Windows のときは uCosminexus 日立コード変換 - Server Runtime を、UNIX のときは uCosminexus 日立コード変換 - Runtime をセットアップします。

(a) インストール

uCosminexus 日立コード変換 - Server Runtime，または uCosminexus 日立コード変換 - Runtime をインストールします。

インストール方法の詳細は、uCosminexus 日立コード変換 - Server Runtime または uCosminexus 日立コード変換 - Runtime に添付されているドキュメントを参照してください。

(b) 環境設定

環境設定として、次の作業を実施します。

クラスパスの追加

オプション定義ファイル (usrconf.cfg) に次の定義を追加します。

```
add.class.path=<コード変換ライブラリのjarファイルのパス>
```

例えば、実行環境の OS が Windows の場合で、uCosminexus 日立コード変換 - Server Runtime を「C:¥Program Files¥HITACHI¥CodeConvJ」にインストールしたときには、次のように定義を追加します。

```
add.class.path= C:¥Program Files¥HITACHI¥CodeConvJ¥Java¥codeconv.jar
```

変換テーブル (ユーザマッピングファイル) の格納パスの追加

システムプロパティファイル (usrconf.properties) に次の定義を追加します。

```
csc.dt.codetablepath=<変換テーブルの格納ディレクトリパス>
```

例えば、実行環境の OS が Windows の場合で、uCosminexus 日立コード変換 - Server Runtime を「C:¥Program Files¥HITACHI¥CodeConvJ」にインストールした場合、次のように定義を追加します。

```
csc.dt.codetablepath=C¥:¥¥Program Files¥¥HITACHI¥¥CodeConvJ¥¥Table
```

ユーザマッピングファイル (外字ファイル) の格納

開発環境の uCosminexus 日立コード変換 - Development Kit で作成したユーザマッピングファイルを、システムプロパティファイル (usrconf.properties) に追加した

3. システムのセットアップとアンセットアップ

パス（csc.dt.codetablepath に指定したパス）に格納します。

uCosminexus 日立コード変換・Development Kit でのユーザマッピングファイルの作成については、uCosminexus 日立コード変換・Development Kit に添付されているドキュメント、およびマニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド」を参照してください。

3.1.3 HCSC サーバをセットアップする

サービスアダプタ、ビジネスプロセス、ユーザ定義受付を HCSC サーバに配備して、実行環境をセットアップするには、まず、HCSC サーバをセットアップする必要があります。また、HCSC サーバをセットアップするときに、あわせてクラスタもセットアップできます。

HCSC サーバのセットアップの前提条件、およびセットアップ方法について次に説明します。

参考

HCSC サーバをセットアップしたあと、HCSC サーバを起動する前に、HCSC サーバの定義情報を設定することを推奨します。HCSC サーバの定義方法については、「3.1.4 HCSC サーバの定義情報を設定する」を参照してください。

(1) 前提条件

HCSC サーバをセットアップするには、次の条件を満たす必要があります。

- HCSC サーバをセットアップする実行環境のマシン上で次のプロセスが起動していること
 - 運用管理エージェント
 - Management Server
 - J2EE サーバ
 - PRF
 - Hitachi Web Server

運用管理エージェント、Management Server、J2EE サーバ、PRF の起動方法については、マニュアル「Cosminexus システム運用ガイド」を、Hitachi Web Server の起動方法については、マニュアル「Hitachi Web Server」をそれぞれ参照してください。

- HCSC サーバをセットアップする実行環境のマシンに、Cosminexus Reliable Messaging、DB Connector および DB クライアントがセットアップされ、起動していること
- 同一クラスタ内で、データベースおよび Cosminexus RM の使用有無が一致していること

- HCSC サーバ構成定義ファイルおよび HCSC サーバセットアップ定義ファイルが作成されていること
 HCSC サーバ構成定義ファイルの作成方法については、「2.3.1 HCSC サーバ構成定義ファイルを設定する」を、ファイルの内容の詳細については、「9. 定義ファイル」の「HCSC サーバ構成定義ファイル」を参照してください。
 HCSC サーバセットアップ定義ファイルの作成方法については、「2.3.2 HCSC サーバセットアップ定義ファイルを設定する」を、ファイルの内容の詳細については、「9. 定義ファイル」の「HCSC サーバセットアップ定義ファイル」を参照してください。
- セットアップする HCSC サーバとすでにセットアップされている HCSC サーバでクラスタを構成する場合、HCSC サーバ構成定義ファイルおよび HCSC サーバセットアップ定義ファイルで同じ設定にする必要のある項目が同じ設定になっていること
 HCSC サーバ構成定義ファイルおよび HCSC サーバセットアップ定義ファイルで、クラスタを構成する HCSC サーバ間で同じ設定にする必要のある項目については、ロードバランスクラスタ構成の場合は「2.5.1(1) 実行環境の構築」を、HA クラスタ構成の場合は「2.6.1(1) 実行環境（現用系・待機系）の構築」を参照してください。
- HCSC サーバをアンセットアップしたあとに再度セットアップする場合、J2EE サーバを再起動していること

(2) セットアップ方法

HCSC サーバをセットアップするには、運用環境で `cscsvsetup` コマンドを実行します。

`cscsvsetup` コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「`cscsvsetup` (HCSC サーバのセットアップ)」を参照してください。

セットアップする内容は、単独の HCSC サーバをセットアップするか、すでにセットアップされている HCSC サーバとクラスタを構成するようにセットアップするかによって異なります。

！ 注意事項

コマンド実行時に通信障害やタイムアウトが発生した場合、実行環境側で処理が完結している可能性があります。そのため、HCSC サーバのセットアップ情報を取得し、取得した情報に従って、再度 `cscsvsetup` コマンドを実行してください。HCSC サーバのセットアップ情報の取得方法については、「5.2.16 HCSC サーバのセットアップ情報を確認する」を参照してください。なお、HCSC サーバのセットアップ情報を取得する場合、`cscutil` コマンドに `-host` オプションを使用する必要があります。`cscutil` コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「`cscutil` (各種操作)」を参照してください。

3. システムのセットアップとアンセットアップ

! 注意事項

クラスタ名と HCSC サーバ名は大文字 / 小文字を区別しないため、一意な名前を設定してください。ただし、HCSC サーバセットアップ時に、クラスタ名を省略してセットアップすることはできません。

(a) 単独の HCSC サーバをセットアップする場合

-cluster オプションに、クラスタ名を指定します。ただし、この段階では、単独の HCSC サーバであるため、クラスタの構成にはなりません。ほかの HCSC サーバをセットアップするときに、ここで指定したクラスタ名を指定してセットアップすることで、クラスタを構成できます。

```
cscsvsetup -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名>
-cluster <クラスタ名> -propfile <HCSCサーバ構成定義ファイル名>
```

なお、クラスタ名を省略すると、-csc オプションに指定した HCSC サーバ名がクラスタ名として設定されます。

```
cscsvsetup -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名>
-propfile <HCSCサーバ構成定義ファイル名>
```

(b) セットアップ済みの HCSC サーバとクラスタを構成する場合

-cluster オプションには、HCSC サーバを追加するクラスタ名を指定します。

```
cscsvsetup -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名>
-cluster <HCSCサーバを追加するクラスタ名> -propfile <HCSCサーバ構成定義ファイル名>
```

(3) セットアップ情報の追加・変更

(2) で示したセットアップを、すでにセットアップした HCSC サーバに対して再度実施すると、セットアップした情報を追加・変更できます。

HCSC サーバのセットアップ情報の追加・変更を行う場合、HCSC サーバ、サービスアダプタ、ビジネスプロセス、およびユーザ定義受付がすべて停止している必要があります。

HCSC サーバ、サービスアダプタ、ビジネスプロセス、ユーザ定義受付の状態の確認方法については、それぞれ「5.2.17 HCSC サーバの情報を確認する」、「5.2.20 サービスアダプタの情報を確認する」、「5.2.21 ビジネスプロセスの情報を確認する」、「5.2.22 ユーザ定義受付の情報を確認する」を参照してください。

追加・変更できる情報を次に示します。

追加できる情報

- 標準受付の種別
同期 (Web サービス / SessionBean), および非同期 (MDB (WS-R) / MDB (DB キュー)) の標準受付を追加してセットアップできます。すでにセットアップした標準受付の種別の情報を変更または削除する場合, アンセットアップしたあと, 再度セットアップしてください。

変更できる情報

- 同期 (Web サービス) の標準受付の位置情報
同期 (Web サービス) の標準受付で使用する Web サーバの位置情報です。Web サーバの IP アドレス, ポート番号およびプロトコルを変更できます。
- 非同期 (MDB (WS-R)) の標準受付の位置情報
非同期 (MDB (WS-R)) の標準受付で使用する Web サーバの位置情報です。Web サーバの IP アドレス, ポート番号およびプロトコルを変更できます。
- 同期 (SessionBean) の標準受付の位置情報
同期 (SessionBean) の標準受付で使用する NameServer の位置情報です。NameServer の IP アドレスおよびポート番号を変更できます。
- Cosminexus Manager 位置情報
Cosminexus Manager にアクセスするための IP アドレスおよびポート番号を変更できます。

! 注意事項

上記の情報以外を追加または変更する場合, 一度 HCSC サーバをアンセットアップしてから, 再度セットアップする必要があります。HCSC サーバをアンセットアップしないまま上記の情報以外の情報を追加・変更してセットアップを実施した場合, 追加および変更は無視されます。

3.1.4 HCSC サーバの定義情報を設定する

HCSC サーバの定義情報の設定の前提条件, および設定方法について次に説明します。

(1) 前提条件

- HCSC サーバが停止状態または起動状態であること
HCSC サーバの状態の確認方法については, 「5.2.17 HCSC サーバの情報を確認する」を参照してください。
- HCSC サーバランタイム定義ファイルが作成されていること
HCSC サーバランタイム定義ファイルの作成方法については, 「2.3.4 HCSC サーバランタイム定義ファイルを設定する」を, ファイルの内容の詳細については, 「9. 定義ファイル」の「HCSC サーバランタイム定義ファイル」参照してください。

3. システムのセットアップとアンセットアップ

(2) 設定方法

HCSC サーバの定義情報を設定するには、運用環境で `cscsvconfig` コマンドを実行します。

`cscsvconfig` コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「`cscsvconfig` (HCSC サーバランタイムの定義)」を参照してください。

`cscsvconfig` コマンドの実行形式を次に示します。

クラスタ内の HCSC サーバに一括して定義を設定する場合

クラスタ名を指定して実行します。

`-cluster` オプションで指定したクラスタ内の HCSC サーバに、`-propfile` オプションで指定した定義ファイルの内容が設定されます。

```
cscsvconfig -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -cluster <クラスタ名>
-operation set -propfile <HCSCサーバランタイム定義ファイル名>
```

指定した HCSC サーバに定義を設定する場合

HCSC サーバ名を指定して実行します。

`-csc` オプションで指定した HCSC サーバに、`-propfile` オプションで指定した定義ファイルの内容が設定されます。

```
cscsvconfig -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名>
-operation set -propfile <HCSCサーバランタイム定義ファイル名>
```

! 注意事項

設定された定義情報は、HCSC サーバを再度起動したときに反映されます。なお、標準受付またはユーザ定義受付に関する定義情報は、標準受付またはユーザ定義受付の開始時に反映されます。

3.1.5 HCSC サーバの定義内容を確認する

HCSC サーバに設定されている定義内容の確認の前提条件、および確認方法について次に説明します。

(1) 前提条件

HCSC サーバが停止状態または起動状態である必要があります。

HCSC サーバの状態の確認方法については、「5.2.17 HCSC サーバの情報を確認する」を参照してください。

(2) 確認方法

HCSC サーバの定義内容を確認するには、運用環境で `cscsvconfig` コマンドを実行します。

`cscsvconfig` コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「`cscsvconfig` (HCSC サーバランタイムの定義)」を参照してください。

`cscsvconfig` コマンドの実行形式を次に示します。

```
cscsvconfig -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名>
-operation get
```

HCSC サーバに設定されている定義内容は、標準出力に出力されます。出力された内容は、必要に応じてファイルにリダイレクトします。

3.1.6 連携をセットアップする

連携をセットアップすると、複数の HCSC サーバおよびクラスタが相互に連携できるようになります。

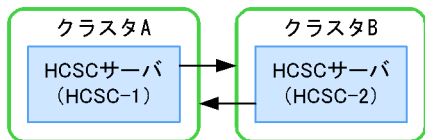
連携をセットアップする `cscconsetup` コマンドは、1 回の実行で一つの HCSC サーバ (連携元) から一つのクラスタ (連携先) への一方向の連携だけをセットアップします。なお、連携先が単独の HCSC サーバで、クラスタを構成していない場合でも、連携先として HCSC サーバのセットアップ時に設定されるクラスタ名称を指定します。

連携の対象と `cscconsetup` コマンドの実行の関係を次の図の例で示します。

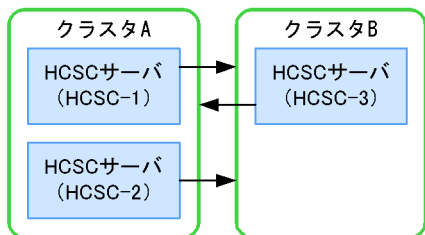
3. システムのセットアップとアンセットアップ

図 3-3 連携の対象とコマンドの実行の関係

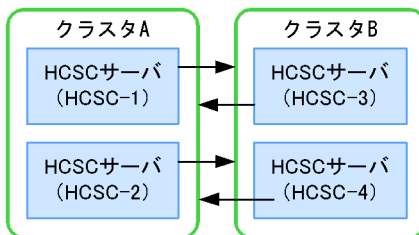
- 2クラスタ間の連携
(各クラスタのHCSCサーバ数=1)



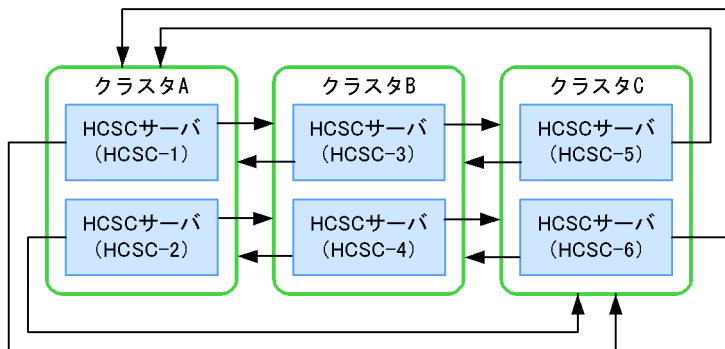
- 2クラスタ間の連携
(各クラスタのHCSCサーバ数=2 : 1)



- 2クラスタ間の連携
(各クラスタのHCSCサーバ数=2)



- 3クラスタ間の連携
(各クラスタのHCSCサーバ数=2)



(凡例)

→ : cscconsetupコマンドの実行

上記の図に示すように、連携をセットアップするには、連携の対象となる HCSC サーバおよびクラスタの数に応じて cscconsetup コマンドを実行する必要があります。

連携のセットアップの前提条件、およびセットアップ方法について次に説明します。

(1) 前提条件

連携をセットアップするには、次の条件を満たす必要があります。

- 連携元の HCSC サーバが起動状態であること
HCSC サーバの状態の確認方法については、「5.2.17 HCSC サーバの情報を確認する」を参照してください。
- 連携の状態が設定前の状態、または停止状態であること
連携の状態の確認方法については、「5.2.19 連携情報を確認する」を参照してください。
- 連携内で起動できるサービスアダプタおよびビジネスプロセスのサービス ID、ならびにユーザ定義受付の受付 ID が一意であること
- 連携セットアップ定義ファイルが作成されていること
連携セットアップ定義ファイルの作成方法については、「2.3.3 連携セットアップ定義ファイルを設定する」を、ファイルの内容の詳細については、「9. 定義ファイル」の「連携セットアップ定義ファイル」を参照してください。
- 連携の対象が二つの HCSC サーバで構成されるクラスタの場合、クラスタ内の二つの HCSC サーバのセットアップ情報が同一であること

(2) セットアップ方法

連携をセットアップするには、運用環境で `cscconsetup` コマンドを実行します。

`cscconsetup` コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「`cscconsetup` (連携のセットアップ)」を参照してください。

`cscconsetup` コマンドの実行形式を次に示します。

```
cscconsetup -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <連携元HCSCサーバ名> -connect <連携先クラスタ名> -propfile <連携セットアップ定義ファイル名>
```

連携元の HCSC サーバ名および連携先のクラスタ名を変えて複数回実行し、必要な連携をすべてセットアップします。

3.1.7 サービス情報を変更する

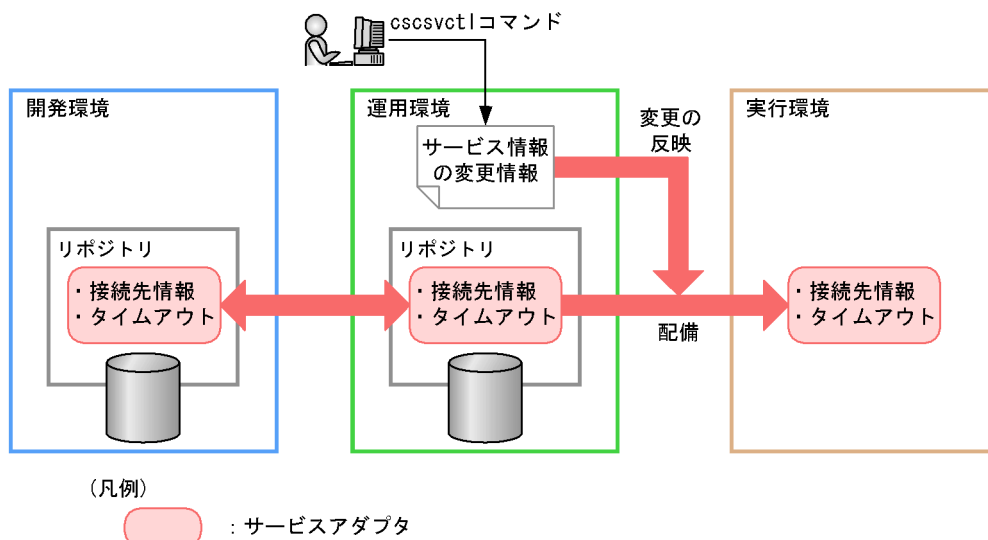
開発環境ではサービスアダプタ開発時に、サービスアダプタの接続先情報およびタイムアウト値を設定します。運用環境では、これらの設定値をサービス情報として環境に適した値に変更できます。

また、変更したサービス情報は、リポジトリには反映されません。変更したサービス情報は、運用環境に保持され、サービスアダプタを実行環境に配備するときに反映されます。そのため、開発環境とは独立して、サービス情報を管理できます。

それぞれの環境でのサービス情報の扱いを次の図に示します。

3. システムのセットアップとアンセットアップ

図 3-4 サービス情報を設定してからサービス情報を変更するまでの流れ



サービス情報を変更する前提条件，および変更方法について次に説明します。

(1) 前提条件

サービス情報を変更するには，次の条件を満たす必要があります。

- リポジトリを共有していないこと
- クラスタ内のすべての HCSC サーバで，サービス情報を変更するサービスアダプタが未配備状態であること

(2) 変更方法

サービス情報を変更するには，運用環境で `cscsvctl` コマンドを実行します。

`cscsvctl` コマンドの詳細については，「10. コマンド」の「`cscsvctl` (サービス情報の管理)」を参照してください。

`-getfile` オプションにサービス情報を出力するファイル名 (任意) を指定して実行します。

```
cscsvctl -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -getfile <サービス情報変更定義ファイル名>
```

取得したサービス情報変更定義ファイルに変更内容を定義します。

サービス情報変更定義ファイルの詳細については，「9. 定義ファイル」の「サービス情報変更定義ファイル」を参照してください。

-setfile オプションにサービス情報変更定義ファイルを指定して実行します。

```
cscsvctl -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -setfile <サービス情報変更定義ファイル名>
```

3.1.8 サービス情報を確認する

サービス情報を確認する前提条件、および確認方法について次に説明します。

(1) 前提条件

リポジトリを共有していないこと

(2) 確認方法

変更したサービス情報を確認するには、運用環境で cscsvcls コマンドを実行します。

cscsvcls コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscsvcls (サービス情報の表示)」を参照してください。

現在有効になっているサービス情報を確認する場合、オプションを指定しないで cscsvcls コマンドを実行します。

```
cscsvcls -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード>
```

変更したサービス情報および開発環境で設定したサービス情報を確認する場合、-detail オプションを指定して cscsvcls コマンドを実行します。

```
cscsvcls -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -detail
```

3.1.9 サービスアダプタを配備する

サービスアダプタを実行環境に配備する場合の前提条件、および配備方法について次に説明します。

(1) 前提条件

サービスアダプタを配備するには、次の条件を満たす必要があります。

- 配備先の実行環境の HCSC サーバが起動状態であること
HCSC サーバの状態の確認方法については、「5.2.17 HCSC サーバの情報を確認する」を参照してください。
- 連携を設定している場合、起動できるサービスアダプタのサービス名が連携する

3. システムのセットアップとアンセットアップ

HCSC サーバおよびクラスタ間で一意になっていること

- 次の場合には、配備前に HCSC サーバを再起動していること
 - 削除したサービスアダプタ (MDB (WS-R) / MDB (DB キュー)) のサービス ID と同じ名称のままで、配備するサービスアダプタのサービス部品の種類 (MDB (WS-R) / MDB (DB キュー)) を変更した場合
 - 削除したサービスアダプタ (MDB (WS-R)) のサービス ID と同じ名称のままで、配備するサービスアダプタのキュー情報 (JMS メッセージ種別, 最大メッセージ数, および転送キュー作成先 RD エリア) を変更した場合
 - 削除したサービスアダプタ (MDB (WS-R) / MDB (DB キュー)) のサービス ID と、大文字 / 小文字だけが異なるサービス ID のサービスアダプタを配備する場合

HCSC サーバを再起動しないで配備すると、新たに配備したサービスアダプタで定義されている情報が無視されたり、正常に動作しなかったりする場合があります。

(2) 配備方法

サービスアダプタを配備するには、運用環境で `cscscompodeploy` コマンドを実行します。

`cscscompodeploy` コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「`cscscompodeploy` (HCSC コンポーネントの配備)」を参照してください。

すべてのサービスアダプタを一括して配備するか、指定したサービスアダプタだけを配備するかによって実行形式が異なります。

! 注意事項

サービスアダプタを配備するとき、配備済みのサービスアダプタおよびビジネスプロセスのサービス ID, ならびにユーザ定義受付の受付 ID と大文字 / 小文字だけが異なるサービスアダプタのサービス ID は使用しないでください。このような名称を使用するとサービスアダプタが配備できません。

(a) すべてのサービスアダプタを一括して配備する場合

HCSC サーバまたはクラスタにすべてのサービスアダプタを一括して配備します。

サービスアダプタの配備先が単一の HCSC サーバか、クラスタを構成するすべての HCSC サーバかによって実行形式が異なります。

単一の HCSC サーバにすべてのサービスアダプタを配備する場合

HCSC サーバ名と `-all` オプションを指定して実行します。

`-csc` オプションで指定した HCSC サーバに、配備されていないサービスアダプタがすべて配備されます (配備されていないビジネスプロセスおよびユーザ定義受付も同時にすべて配備されます)。

```
cscscompodeploy -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名> -all
```

クラスタ内のすべての HCSC サーバにすべてのサービスアダプタを配備する場合
クラスタ名と `-all` オプションを指定して実行します。

`-cluster` オプションで指定したクラスタ内のすべての HCSC サーバに、配備されていないサービスアダプタがすべてに配備されます（配備されていないビジネスプロセスおよびユーザ定義受付も同時にすべて配備されます）。

```
cscscompodeploy -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -cluster <クラスタ名> -all
```

！ 注意事項

`-all` オプションを指定して実行し、サービスアダプタ、ビジネスプロセス、およびユーザ定義受付の配備が失敗した場合、未配備のサービスアダプタ、ビジネスプロセス、およびユーザ定義受付が存在しても無視してコマンドを終了します。コマンドを実行したあとは、`cscrepls` コマンドを利用して配備の状況を確認します。

`cscrepls` コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「`cscrepls`（リポジトリ情報の表示）」を参照してください。

(b) 指定したサービスアダプタだけを配備する場合

HCSC サーバまたはクラスタに、指定したサービスアダプタだけを配備します。

サービスアダプタの配備先が単一の HCSC サーバか、クラスタを構成するすべての HCSC サーバかによって実行形式が異なります。

指定したサービスアダプタを単一の HCSC サーバに配備する場合

HCSC サーバ名とサービスアダプタのサービス ID を指定して実行します。

`-csc` オプションで指定した HCSC サーバに、`-name` オプションで指定したサービスアダプタが配備されます。

```
cscscompodeploy -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名> -name <サービスアダプタのサービスID>
```

`cscscompodeploy` コマンドに指定する HCSC サーバ名およびサービスアダプタのサービス ID は、`cscrepls` コマンドで確認できます。`cscrepls` コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「`cscrepls`（リポジトリ情報の表示）」を参照してください。

3. システムのセットアップとアンセットアップ

指定したサービスアダプタをクラスタ内のすべての HCSC サーバに配備する場合
クラスタ名とサービスアダプタのサービス ID を指定して実行します。

-cluster オプションで指定したクラスタ内のすべての HCSC サーバに、指定した
サービスアダプタが配備されます。

```
csccompodeploy -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -cluster <クラスタ  
名> -name <サービスアダプタのサービスID>
```

3.1.10 ビジネスプロセスを配備する

ビジネスプロセスを実行環境に配備する場合の前提条件、および配備方法について次に
説明します。

(1) 前提条件

ビジネスプロセスを配備するには、次の条件を満たす必要があります。

- 配備先の実行環境の HCSC サーバが起動状態であること
HCSC サーバの状態の確認方法については、「5.2.17 HCSC サーバの情報を確認す
る」を参照してください。
- 連携を設定している場合、起動できるビジネスプロセスのサービス名が連携する
HCSC サーバおよびクラスタ間で一意であること

(2) 配備方法

ビジネスプロセスを配備するには、運用環境で csccompodeploy コマンドを実行します。

csccompodeploy コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「csccompodeploy
(HCSC コンポーネントの配備)」を参照してください。

すべてのビジネスプロセスを一括して配備するか、指定したビジネスプロセスだけを配
備するかによって実行形式が異なります。

! 注意事項

ビジネスプロセスを配備するとき、配備済みのサービスアダプタおよびビジネスプロセスの
サービス ID、ならびにユーザ定義受付の受付 ID と大文字 / 小文字だけが異なるビジネスプ
ロセスのサービス ID は使用しないでください。このような名称を使用するとビジネスプロ
セスが配備できません。

(a) すべてのビジネスプロセスを一括して配備する場合

HCSC サーバまたはクラスタにすべてのビジネスプロセスを一括して配備します。

ビジネスプロセスの配備先が単一の HCSC サーバか、クラスタを構成するすべての
HCSC サーバかによって実行形式が異なります。

単一の HCSC サーバにすべてのビジネスプロセスを配備する場合

HCSC サーバ名と `-all` オプションを指定して実行します。

`-csc` オプションで指定した HCSC サーバに、配備されていないビジネスプロセスがすべて配備されます（配備されていないサービスアダプタおよびユーザ定義受付も同時にすべて配備されます）。

```
cscscompodeploy -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名> -all
```

クラスタ内のすべての HCSC サーバにすべてのビジネスプロセスを配備する場合

クラスタ名と `-all` オプションを指定して実行します。

`-cluster` オプションで指定したクラスタ内のすべての HCSC サーバに、配備されていないビジネスプロセスがすべて配備されます（配備されていないサービスアダプタおよびユーザ定義受付も同時にすべて配備されます）。

```
cscscompodeploy -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -cluster <クラスタ名> -all
```

! 注意事項

`-all` オプションを指定して実行し、サービスアダプタ、ビジネスプロセス、およびユーザ定義受付の配備が失敗した場合、未配備のサービスアダプタ、ビジネスプロセス、およびユーザ定義受付が存在しても無視してコマンドを終了します。コマンドを実行したあとは、`cscrepls` コマンドを利用して配備の状況を確認します。

`cscrepls` コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「`cscrepls`（リポトリ情報の表示）」を参照してください。

(b) 指定したビジネスプロセスだけを配備する場合

HCSC サーバまたはクラスタに、指定したビジネスプロセスだけを配備します。

ビジネスプロセスの配備先が単一の HCSC サーバか、クラスタを構成するすべての HCSC サーバかによって実行形式が異なります。

指定したビジネスプロセスを単一の HCSC サーバに配備する場合

HCSC サーバ名とビジネスプロセスのサービス ID を指定して実行します。

`-csc` オプションで指定した HCSC サーバに、`-name` オプションで指定したビジネスプロセスが配備されます。

```
cscscompodeploy -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名> -name <ビジネスプロセスのサービスID>
```

`cscscompodeploy` コマンドに指定する HCSC サーバ名およびビジネスプロセスの

3. システムのセットアップとアンセットアップ

サービス ID は、`cscrepls` コマンドで確認できます。`cscrepls` コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「`cscrepls` (リポジトリ情報の表示)」を参照してください。

指定したビジネスプロセスをクラスタ内のすべての HCSC サーバに配備する場合
クラスタ名とビジネスプロセスのサービス ID を指定して実行します。

`-cluster` オプションで指定したクラスタ内のすべての HCSC サーバに、指定したビジネスプロセスが配備されます。

```
csccompodeploy -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -cluster <クラスタ名> -name <ビジネスプロセスのサービスID>
```

3.1.11 ユーザ定義受付を配備する

ユーザ定義受付を実行環境に配備する場合の前提条件、および配備方法について次に説明します。

(1) 前提条件

ユーザ定義受付を配備するには、次の条件を満たす必要があります。

- 配備先の実行環境の HCSC サーバが起動状態であること
HCSC サーバの状態の確認方法については、「5.2.17 HCSC サーバの情報を確認する」を参照してください。
- 連携を設定している場合、起動できるユーザ受付の受付 ID が連携する HCSC サーバおよびクラスタ間で一意になっていること

(2) 配備方法

ユーザ定義受付を配備するには、運用環境で `csccompodeploy` コマンドを実行します。

`csccompodeploy` コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「`csccompodeploy` (HCSC コンポーネントの配備)」を参照してください。

すべてのユーザ定義受付を一括して配備するか、指定したユーザ定義受付だけを配備するかによって実行形式が異なります。

! 注意事項

ユーザ定義受付を配備するとき、配備済みのサービスアダプタおよびビジネスプロセスのサービス ID、もしくはユーザ定義受付の受付 ID と大文字/小文字だけが異なるユーザ定義受付の受付 ID は使用しないでください。このような名称を使用するとユーザ定義受付が配備できません。

(a) すべてのユーザ定義受付を一括して配備する場合

HCSC サーバまたはクラスタにすべてのユーザ定義受付を一括して配備します。

ユーザ定義受付の配備先が単一の HCSC サーバか、クラスタを構成するすべての HCSC サーバかによって実行形式が異なります。

単一の HCSC サーバにすべてのユーザ定義受付を配備する場合

HCSC サーバ名と `-all` オプションを指定して実行します。

`-csc` オプションで指定した HCSC サーバに、配備されていないユーザ定義受付がすべて配備されます（配備されていないサービスアダプタおよびビジネスプロセスも同時にすべて配備されます）。

```
cscscompodeploy -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名> -all
```

クラスタ内のすべての HCSC サーバにすべてのユーザ定義受付を配備する場合

クラスタ名と `-all` オプションを指定して実行します。

`-cluster` オプションで指定したクラスタ内のすべての HCSC サーバに、配備されていないユーザ定義受付がすべて配備されます（配備されていないサービスアダプタおよびビジネスプロセスも同時にすべて配備されます）。

```
cscscompodeploy -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -cluster <クラスタ名> -all
```

! 注意事項

`-all` オプションを指定して実行し、サービスアダプタ、ビジネスプロセス、およびユーザ定義受付の配備が失敗した場合、未配備のサービスアダプタ、ビジネスプロセス、およびユーザ定義受付が存在しても無視してコマンドを終了します。コマンドを実行したあとには、`cscrepls` コマンドを利用して配備の状況を確認します。

`cscrepls` コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「`cscrepls`（リポトリ情報の表示）」を参照してください。

(b) 指定したユーザ定義受付だけを配備する場合

HCSC サーバまたはクラスタに、指定したユーザ定義受付だけを配備します。

ユーザ定義受付の配備先が単一の HCSC サーバか、クラスタを構成するすべての HCSC サーバかによって実行形式が異なります。

指定したユーザ定義受付を単一の HCSC サーバに配備する場合

HCSC サーバ名とユーザ定義受付の受付 ID を指定して実行します。

`-csc` オプションで指定した HCSC サーバに、`-name` オプションで指定したユーザ定義受付が配備されます。

3. システムのセットアップとアンセットアップ

```
csccompodeploy -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名> -name <ユーザ定義受付の受付ID>
```

csccompodeploy コマンドに指定する HCSC サーバ名およびユーザ定義受付の受付 ID は、cscrepls コマンドで確認できます。cscrepls コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscrepls (リポジトリ情報の表示)」を参照してください。

指定したユーザ定義受付をクラスタ内のすべての HCSC サーバに配備する場合、クラスタ名とユーザ定義受付の受付 ID を指定して実行します。

-cluster オプションで指定したクラスタ内のすべての HCSC サーバに、指定したユーザ定義受付が配備されます。

```
csccompodeploy -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -cluster <クラスタ名> -name <ユーザ定義受付の受付ID>
```

3.1.12 ユーザ定義受付の定義情報を設定する

次に示すユーザ定義受付の定義情報を設定します。

- 最大同時実行数
- 占有スレッド数
- 実行待ちキューのサイズ

ユーザ定義受付の定義情報を設定する前提条件、および設定方法について次に説明します。

! 注意事項

ユーザ定義受付およびユーザ定義受付を利用するビジネスプロセスを削除した場合、ここで設定した定義情報は無効となります。削除後に、ユーザ定義受付およびユーザ定義受付を利用するビジネスプロセスを再配備する場合、必ずユーザ定義受付の定義情報を設定し直してください。

(1) 前提条件

ユーザ定義受付の定義情報を設定するには、HCSC サーバが起動状態である必要があります。

HCSC サーバの状態の確認方法については、「5.2.17 HCSC サーバの情報を確認する」を参照してください。

(2) 設定方法

ユーザ定義受付の定義情報を設定するには、まずユーザ定義受付ランタイム定義ファイ

ルを作成します。ユーザ定義受付ランタイム定義ファイルのテンプレートファイルは、`cscurcptnconfig.properties` のファイル名で次のディレクトリに格納されています。

```
<Cosminexusのインストールディレクトリ>
>%CSC%config%manager%templates%cscurcptnconfig.properties
```

テンプレートファイルを任意の場所にコピーしたあと、定義情報を編集して、ユーザ定義受付ランタイム定義ファイルを作成します。ユーザ定義受付ランタイム定義ファイルの詳細については、「9. 定義ファイル」の「ユーザ定義受付ランタイム定義ファイル」を参照してください。

ユーザ定義受付ランタイム定義ファイルを作成したら、運用環境で `csccompoconfig` コマンドを実行して定義情報を設定します。設定した定義情報は、HCSC コンポーネントを再開始したときに反映されます。`csccompoconfig` コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「`csccompoconfig` (HCSC コンポーネントの定義)」を参照してください。

HCSC サーバに配備されているユーザ定義受付に定義情報を設定するか、クラスタ内の HCSC サーバに配備されているユーザ定義受付に定義情報を設定するかによって実行形式が異なります。

HCSC サーバに配備されているユーザ定義受付に定義情報を設定する場合

HCSC サーバ名、およびユーザ定義受付の受付 ID を指定して実行します。

指定した HCSC サーバ上のユーザ定義受付に、ユーザ定義受付ランタイム定義ファイルで指定した定義情報が設定されます。

```
csccompoconfig -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -operation set
-propfile <ユーザ定義受付ランタイム定義ファイル> -csc <HCSCサーバ名> -name <受付ID>
```

クラスタ内の HCSC サーバに配備されているユーザ定義受付に定義情報を設定する場合
クラスタ名、およびユーザ定義受付の受付 ID を指定して実行します。

指定したクラスタに配備されているユーザ定義受付に、ユーザ定義受付ランタイム定義ファイルで指定した定義情報が設定されます。

```
csccompoconfig -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -operation set
-propfile <ユーザ定義受付ランタイム定義ファイル> -cluster <クラスタ名> -name <受付ID>
```

3.1.13 ユーザ定義受付の定義情報を確認する

ユーザ定義受付の定義情報を確認する前提条件、および確認方法について次に説明します。

(1) 前提条件

ユーザ定義受付の定義情報を確認するには、HCSC サーバが起動状態である必要があります。

3. システムのセットアップとアンセットアップ

ます。

HCSC サーバの状態の確認方法については、「5.2.17 HCSC サーバの情報を確認する」を参照してください。

(2) 確認方法

設定したユーザ定義受付の定義情報を確認するには、運用環境で `-operation` オプションに `get` を、`-csc` オプションに HCSC サーバ名を、`-name` にユーザ定義受付の受付 ID を指定して、`csccompoconfig` コマンドを実行します。

`csccompoconfig` コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「`csccompoconfig` (HCSC コンポーネントの定義)」を参照してください。

`csccompoconfig` コマンドの実行形式を次に示します。

```
csccompoconfig -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -operation get  
-csc <HCSCサーバ名> -name <受付ID>
```

3.1.14 セットアップ後の内容を確認・変更する

HCSC サーバ、連携、サービスアダプタ、ビジネスプロセス、およびユーザ定義受付のセットアップ後の内容を確認する方法については、次の個所を参照してください。

HCSC サーバのセットアップ情報を確認する場合

「5.2.16 HCSC サーバのセットアップ情報を確認する」および「5.2.17 HCSC サーバの情報を確認する」を参照してください。

連携のセットアップ情報を確認する場合

「5.2.19 連携情報を確認する」を参照してください。

サービスアダプタの配備情報を確認する場合

「5.2.20 サービスアダプタの情報を確認する」を参照してください。

ビジネスプロセスの配備情報を確認する場合

「5.2.21 ビジネスプロセスの情報を確認する」を参照してください。

ユーザ定義受付の配備情報を確認する場合

「5.2.22 ユーザ定義受付の情報を確認する」を参照してください。

セットアップ情報を確認した結果、すでにセットアップした内容を変更したい場合は、一度アンセットアップしてから再度セットアップします。アンセットアップの方法については、「3.2 システムのアンセットアップ」を参照してください。

! 注意事項

HCSC サーバのセットアップ情報を追加・変更する場合、アンセットアップしないで追加変更できる内容があります。HCSC サーバの追加・変更セットアップの詳細については、「3.1.3(3) セットアップ情報の追加・変更」を参照してください。

3.1.15 データベースと Cosminexus RM の両方を使用しない場合のシステムのセットアップ

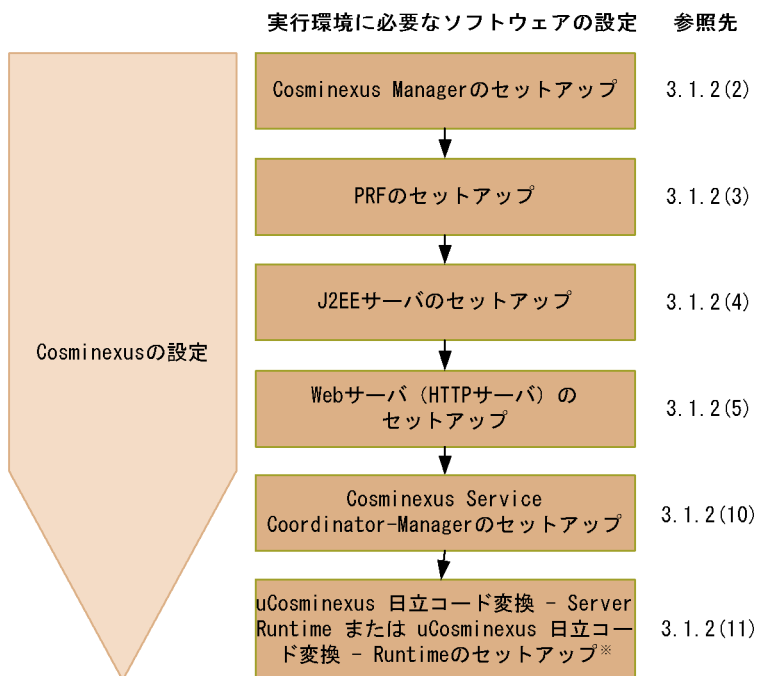
データベースと Cosminexus RM の両方を使用しない場合、実行環境に必要なソフトウェアの設定が、データベースと Cosminexus RM の両方を使用する場合と異なります。実行環境に必要なソフトウェアの設定以外は、データベースと Cosminexus RM の両方を使用する場合のセットアップと同じです。

(1) 実行環境に必要なソフトウェアの設定

データベースと Cosminexus RM の両方を使用しない場合の、実行環境に必要なソフトウェアの設定の流れについて、次の図に示します。それぞれの設定方法の詳細については、図の参照先に示す個所を参照してください。

3. システムのセットアップとアンセットアップ

図 3-5 実行環境に必要なソフトウェアの設定（データベースと Cosminexus RM の両方を使用しない場合）



注※ バイナリデータを扱う場合、およびデータ変換の値置換えファンクションを利用する場合にだけ設定します。

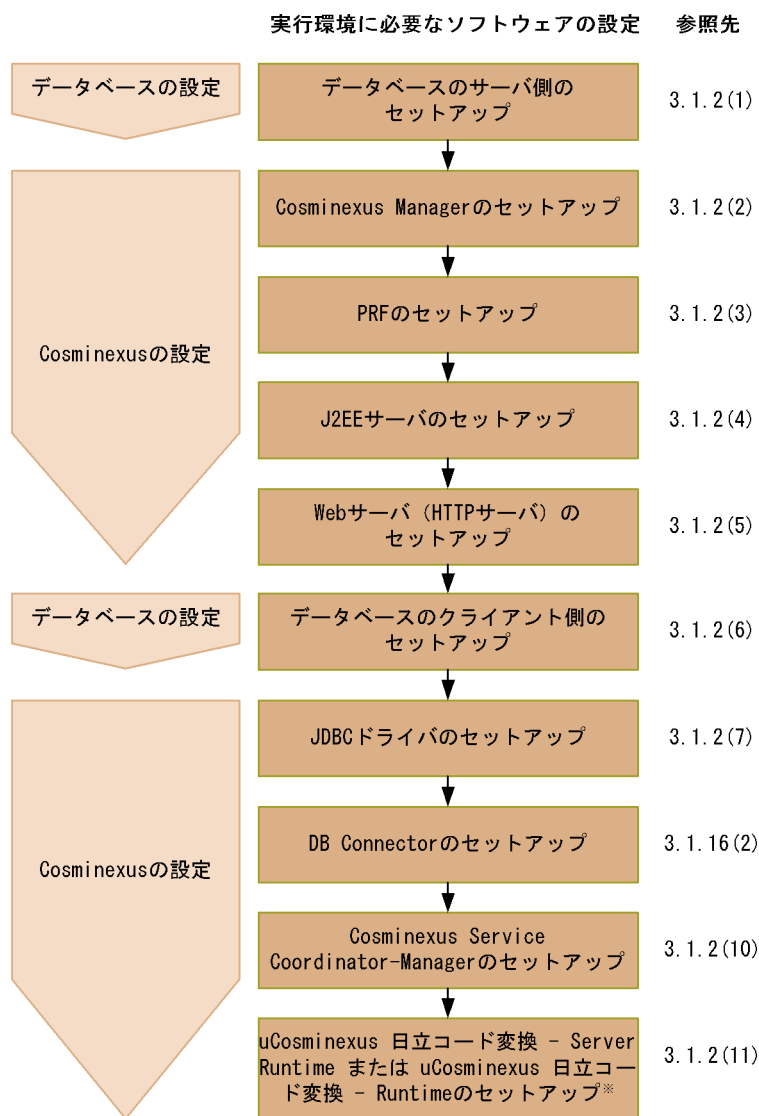
3.1.16 データベースを使用して Cosminexus RM を使用しない場合のシステムのセットアップ

データベースを使用して Cosminexus RM を使用しない場合、実行環境に必要なソフトウェアの設定が、データベースと Cosminexus RM の両方を使用する場合と異なります。実行環境に必要なソフトウェアの設定以外は、データベースと Cosminexus RM の両方を使用する場合のセットアップと同じです。

(1) 実行環境に必要なソフトウェアの設定

データベースを使用して Cosminexus RM を使用しない場合の、実行環境に必要なソフトウェアの設定の流れについて、次の図に示します。それぞれの設定方法の詳細については、図の参照先に示す個所を参照してください。

図 3-6 実行環境に必要なソフトウェアの設定（データベースを使用して Cosminexus RM を使用しない場合）



注※ バイナリデータを扱う場合、およびデータ変換の値置換えファンクションを利用する場合にだけ設定します。

（2）DB Connector のセットアップ

HCSC サーバは、データベースと接続するために DB Connector を利用します。処理のタイミングやテーブル種別に応じて、DB アクセスをトランザクション管理する場合と管理しない場合があるため、トランザクションサポート種別が XATransaction または LocalTransaction の DB Connector と、トランザクションサポート種別が

3. システムのセットアップとアンセットアップ

NoTransaction である DB Connector の、二つの DB Connector を準備する必要があります。

なお、トランザクションサポート種別が XATransaction または LocalTransaction の DB Connector は、処理性能を向上させるため、Cosminexus RM と連携できる DB Connector を利用します。

それぞれの DB Connector の表示名は、HCSC サーバセットアップ定義ファイルの「dbcon-xadisplayname」と「dbcon-nodisplayname」に指定します。HCSC サーバセットアップ定義ファイルの詳細については、「9. 定義ファイル」の「HCSC サーバセットアップ定義ファイル」を参照してください。

(a) DB Connector のインポート

インポートする DB Connector は、利用条件を考慮して選択する必要があります。インポートする RAR ファイルの選択方法を次の表に示します。

表 3-12 インポートする RAR ファイルの選択方法 (Cosminexus RM を使用しない場合)

HCSC サーバセットアップ定義ファイルのプロパティ	利用する DB	ライトトランザクション機能の利用の有無	
		利用する	利用しない
dbcon-xadisplayname	HiRDB (Version7 または Version8) 1	DBConnector_DABJ_CP.rar	DBConnector_DABJ_XA.rar
	HiRDB (Version8) 2	DBConnector_HiRDB_Type4_CP.rar	DBConnector_HiRDB_Type4_XA.rar
	Oracle	DBConnector_Oracle_CP.rar	DBConnector_Oracle_XA.rar
dbcon-nodisplayname	HiRDB (Version7 または Version8) 1	DBConnector_DABJ_CP.rar	
	HiRDB (Version8) 2	DBConnector_HiRDB_Type4_CP.rar	
	Oracle	DBConnector_Oracle_CP.rar	

注 1 JDBC ドライバに Cosminexus DABroker Library を利用する場合です。

注 2 JDBC ドライバに HiRDB Type4 JDBC Driver を利用する場合です。

DB Connector のインポート方法については、マニュアル「Cosminexus アプリケーション設定操作ガイド」のデータベースと接続するための設定に関する内容を参照してください。また、プロパティ定義については、マニュアル「Cosminexus リファレンス定義編」の Connector 属性ファイルに関する内容を参照してください。

ライトトランザクションについては、マニュアル「Cosminexus 機能解説」を参照してください。また、設定方法については、マニュアル「Cosminexus 運用管理操作ガイド」を参照してください。

また、DB アダプタを利用する場合は、DB アダプタが利用する DB Connector をインポートします。インポートする RAR ファイルの選択方法を次の表に示します。

表 3-13 インポートする RAR ファイルの選択方法 (DB アダプタを利用する場合)

利用する JDBC ドライバ	利用する DB	ライトトランザクション機能の利用の有無	
		利用する	利用しない
Cosminexus DABroker Library	HiRDB (Version7 または Version8)	DBConnector_DABJ_CP.rar	DBConnector_DABJ_XA.rar
	Oracle		
HiRDB Type4 JDBC Driver	HiRDB (Version8)	DBConnector_HiRDB_Type4_CP.rar	DBConnector_HiRDB_Type4_XA.rar
Oracle JDBC Thin Driver	Oracle	DBConnector_Oracle_CP.rar	DBConnector_Oracle_XA.rar

(b) プロパティの定義

DB Connector をインポートしたあと、マニュアル「Cosminexus リファレンス定義編」の Connector 属性ファイルに関する内容を参照して、プロパティを定義してください。ただし、次の表に示す内容をプロパティに設定する必要があります。

表 3-14 dbcon-xadisplyname に設定する DB Connector 属性ファイルの設定内容 (DABroker/Oracle)

設定項目	設定値
<display-name> タグ	DB Connector 表示名
<config-property> タグに設定する databaseName プロパティ	データベース名 ¹
<config-property> タグに設定する bufSize プロパティ	システムで利用する最大の電文長よりも大きな値 ²
<transaction-support> タグ	XATransaction ³

3. システムのセットアップとアンセットアップ

設定項目	設定値
	LocalTransaction ⁴

注 1

使用する DB Connector によって設定値が異なります。設定値については、マニュアル「Cosminexus リファレンス 定義編」の Connector 属性ファイルに関する内容を参照してください。また、データベースに接続するために必要な情報もあわせて設定してください。

注 2

使用する DB Connector が次の DB Connector で、LONGVARBINARY_Access プロパティに REAL を指定した場合に指定してください。

- ・DBConnector_DABJ_XA.rar
- ・DBConnector_DABJ_CP.rar

注 3

ライトトランザクション機能を利用しない場合に、次の DB Connector に対して指定してください。

- ・DBConnector_DABJ_XA.rar
- ・DBConnector_Oracle_XA.rar

注 4

ライトトランザクション機能を利用する場合に、次の DB Connector に対して指定してください。

- ・DBConnector_DABJ_CP.rar
- ・DBConnector_Oracle_CP.rar

表 3-15 dbcon-xadisplyname に設定する DB Connector 属性ファイルの設定内容 (HiRDB Type4)

設定項目	設定値
<display-name> タグ	DB Connector 表示名
<config-property> タグに設定する maxBinarySize プロパティ	システムで利用する最大の電文長よりも大きな値 ¹
<transaction-support> タグ	XATransaction ²
	LocalTransaction ³

注 1

LONGVARBINARY_Access プロパティに REAL を指定した場合に指定してください。また、必ず 0 以外の値を指定してください。

注 2

ライトトランザクション機能を利用しない場合に、次の DB Connector に対して指定してください。

- ・DBConnector_HiRDB_Type4_XA.rar

注 3

ライトトランザクション機能を利用する場合に、次の DB Connector に対して指定してください。

- ・DBCConnector_HiRDB_Type4_CP.rar

注意

データベースに接続するために必要な情報を設定してください。設定値については、マニュアル「Cosminexus リファレンス 定義編」の Connector 属性ファイルに関する内容を参照してください。

表 3-16 dbcon-nodisplayname に設定する DB Connector 属性ファイルの設定内容 (DABroker/Oracle)

設定項目	設定値
<display-name> タグ	DB Connector 表示名
<config-property> タグに設定する databaseName プロパティ	データベース名 ¹
<config-property> タグに設定する bufSize プロパティ	システムで利用する最大の電文長よりも大きな値 ²
<transaction-support> タグ	NoTransaction ³

注 1

使用するデータベースによって設定値が異なります。設定値については、マニュアル「Cosminexus リファレンス 定義編」の Connector 属性ファイルに関する内容を参照してください。また、データベースに接続するために必要な情報もあわせて設定してください。

注 2

使用する DB Connector が次の DB Connector で、LONGVARBINARY_Access プロパティに REAL を指定した場合に指定してください。

- ・DBCConnector_DABJ_CP.rar

注 3

使用する DB Connector が次の DB Connector に対して指定してください。

- ・DBCConnector_DABJ_CP.rar
- ・DBCConnector_Oracle_CP.rar

表 3-17 dbcon-nodisplayname に設定する DB Connector 属性ファイルの設定内容 (HiRDB Type4)

設定項目	設定値
<display-name> タグ	DB Connector 表示名
<config-property> タグに設定する maxBinarySize プロパティ	システムで利用する最大の電文長よりも大きな値 ¹
<transaction-support> タグ	NoTransaction ²

注 1

LONGVARBINARY_Access プロパティに REAL を指定した場合に指定してください。また、

3. システムのセットアップとアンセットアップ

必ず 0 以外の値を指定してください。

注 2

使用する DB Connector が次の DB Connector に対して指定してください。

・ DBConnector_HiRDB_Type4_CP.rar

注意

データベースに接続するために必要な情報を設定してください。設定値については、マニュアル「Cosminexus リファレンス 定義編」の Connector 属性ファイルに関する内容を参照してください。

表 3-18 DB アダプタを利用する場合に設定する Connector 属性ファイルの設定内容

設定項目	設定値
<display-name> タグ	DB Connector 表示名 ¹
<config-property> タグに設定する databaseName プロパティ	データベース名 ²
<transaction-support> タグ	XATransaction
	LocalTransaction

注 1

この値は、DB アダプタのアプリケーション統合属性ファイルの <linked-to> タグにも設定します。アプリケーション統合属性ファイルについては、マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド」のアプリケーション統合属性ファイルの作成に関する内容を参照してください。

注 2

使用する DB Connector によって設定値が異なります。設定値については、マニュアル「Cosminexus リファレンス 定義編」の Connector 属性ファイルに関する内容を参照してください。

3.2 システムのアンセットアップ

Cosminexus サービスプラットフォームを利用して、すでにセットアップされているシステムをアンセットアップする方法について説明します。

3.2.1 サービスアダプタを削除する

実行環境に配備されているサービスアダプタを削除する場合の前提条件、および削除方法について次に説明します。

(1) 前提条件

サービスアダプタを削除するには、次の条件を満たす必要があります。

- HCSC サーバが起動状態であること
HCSC サーバの状態の確認方法については、「5.2.17 HCSC サーバの情報を確認する」を参照してください。
- サービスアダプタが停止状態であること
サービスアダプタの状態の確認方法については、「5.2.20 サービスアダプタの情報を確認する」を参照してください。

(2) 削除方法

サービスアダプタを削除するには、運用環境で `csccompounddeploy` コマンドを実行します。

`csccompounddeploy` コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「`csccompounddeploy` (配備済みの HCSC コンポーネントの削除)」を参照してください。

すべてのサービスアダプタを一括して削除するか、指定したサービスアダプタだけを削除するかによって実行形式が異なります。

! 注意事項

サービスアダプタが削除できなかった場合、エラーになった原因を取り除いたあと、再度削除してください。

(a) すべてのサービスアダプタを一括して削除する場合

HCSC サーバまたはクラスタのすべてのサービスアダプタを一括して削除します。

単一の HCSC サーバからサービスアダプタを削除するか、クラスタを構成するすべての HCSC サーバからサービスアダプタを削除するかによって実行形式が異なります。

単一の HCSC サーバからすべてのサービスアダプタを削除する場合

HCSC サーバ名と `-all` オプションを指定して実行します。

3. システムのセットアップとアンセットアップ

-csc オプションで指定した HCSC サーバに配備されているサービスアダプタがすべて削除されます（削除されていないビジネスプロセスおよびユーザ定義受付も同時にすべて削除されます）。

```
csccompounddeploy -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名> -all
```

クラスタを構成するすべての HCSC サーバからすべてのサービスアダプタを削除する場合

クラスタ名と -all オプションを指定して実行します。

-cluster オプションで指定したクラスタ内のすべての HCSC サーバに配備されているサービスアダプタがすべて削除されます（削除されていないビジネスプロセスおよびユーザ定義受付も同時にすべて削除されます）。

```
csccompounddeploy -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -cluster <クラスタ名> -all
```

(b) 指定したサービスアダプタだけを削除する場合

HCSC サーバまたはクラスタに配備されているサービスアダプタのうち、指定したサービスアダプタだけを削除します。

単一の HCSC サーバからサービスアダプタを削除するか、クラスタを構成するすべての HCSC サーバからサービスアダプタを削除するかによって実行形式が異なります。

単一の HCSC サーバから指定したサービスアダプタだけを削除する場合

HCSC サーバ名とサービスアダプタのサービス ID を指定して実行します。

-csc オプションで指定した HCSC サーバに配備されているサービスアダプタのうち、-name オプションで指定したサービスアダプタが削除されます

```
csccompounddeploy -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名> -name <サービスアダプタのサービスID>
```

クラスタを構成するすべての HCSC サーバから指定したサービスアダプタだけを削除する場合

クラスタ名とサービスアダプタのサービス ID を指定して実行します。

-cluster オプションで指定したクラスタ内のすべての HCSC サーバに配備されているサービスアダプタのうち、指定したサービスアダプタだけが削除されます。

```
csccompounddeploy -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -cluster <クラス  
タ名> -name <サービスアダプタのサービスID>
```

! 注意事項

- 仕掛り中のリクエストがある場合、サービスアダプタは削除されません。
仕掛り中のリクエストを破棄して、サービスアダプタを強制的に削除する場合、`-force` オプションを指定して `csccompounddeploy` コマンドを実行します。
強制的に削除する場合の例を次に示します。
- HCSC サーバ「MyCSC」のすべてのサービスアダプタを強制的に削除する場合

```
csccompounddeploy -user admin -pass admin -csc MyCSC -all -force
```

- HCSC サーバ「MyCSC」のサービスアダプタ「Adapter1」を強制的に削除する場合

```
csccompounddeploy -user admin -pass admin -csc MyCSC -name Adapter1 -force
```

3.2.2 ビジネスプロセスを削除する

実行環境に配備されているビジネスプロセスを削除する場合の前提条件、および削除方法について次に説明します。

(1) 前提条件

ビジネスプロセスを削除するには、次の条件を満たす必要があります。

- HCSC サーバが起動状態であること
HCSC サーバの状態の確認方法については、「5.2.17 HCSC サーバの情報を確認する」を参照してください。
- ビジネスプロセスが停止状態であること
ビジネスプロセスの状態の確認方法については、「5.2.21 ビジネスプロセスの情報を確認する」を参照してください。

(2) 削除方法

ビジネスプロセスを削除するには、運用環境で `csccompounddeploy` コマンドを実行します。

3. システムのセットアップとアンセットアップ

csccompounddeploy コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「csccompounddeploy (配備済みの HCSC コンポーネントの削除)」を参照してください。

すべてのビジネスプロセスを一括して削除するか、指定したビジネスプロセスだけを削除するかによって実行形式が異なります。

! 注意事項

ビジネスプロセスが削除できなかった場合、エラーになった原因を取り除いたあと、再度削除してください。

(a) すべてのビジネスプロセスを一括して削除する場合

HCSC サーバまたはクラスタのすべてのビジネスプロセスを一括して削除します。

単一の HCSC サーバからビジネスプロセスを削除するか、クラスタを構成するすべての HCSC サーバからビジネスプロセスを削除するかによって実行形式が異なります。

単一の HCSC サーバからすべてのビジネスプロセスを削除する場合

HCSC サーバ名と `-all` オプションを指定して実行します。

`-csc` オプションで指定した HCSC サーバに配備されているビジネスプロセスがすべて削除されます (削除されていないサービスアダプタおよびユーザ定義受付も同時にすべて削除されます)。

```
csccompounddeploy -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名> -all
```

クラスタを構成するすべての HCSC サーバからすべてのビジネスプロセスを削除する場合

クラスタ名と `-all` オプションを指定して実行します。

`-cluster` オプションで指定したクラスタ内のすべての HCSC サーバに配備されているビジネスプロセスがすべて削除されます (削除されていないサービスアダプタおよびユーザ定義受付も同時にすべて削除されます)。

```
csccompounddeploy -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -cluster <クラスタ名> -all
```

(b) 指定したビジネスプロセスだけを削除する場合

HCSC サーバまたはクラスタに配備されているビジネスプロセスのうち、指定したビジネスプロセスだけを削除します。

単一の HCSC サーバからビジネスプロセスを削除するか、クラスタを構成するすべての HCSC サーバからビジネスプロセスを削除するかによって実行形式が異なります。

単一の HCSC サーバから指定したビジネスプロセスだけを削除する場合
 HCSC サーバ名とビジネスプロセスのサービス ID を指定して実行します。
 -csc オプションで指定した HCSC サーバに配備されているビジネスプロセスのうち、
 -name オプションで指定したビジネスプロセスが削除されます

```
csccompounddeploy -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名> -name <ビジネスプロセスのサービスID>
```

クラスタを構成するすべての HCSC サーバから指定したビジネスプロセスだけを削除する場合

クラスタ名とビジネスプロセスのサービス ID を指定して実行します。
 -cluster オプションで指定したクラスタ内のすべての HCSC サーバに配備されている
 ビジネスプロセスのうち、指定したビジネスプロセスだけが削除されます。

```
csccompounddeploy -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -cluster <クラスタ名> -name <ビジネスプロセスのサービスID>
```

3.2.3 ユーザ定義受付を削除する

実行環境に配備されているユーザ定義受付を削除する場合の前提条件、および削除方法について次に説明します。

(1) 前提条件

ユーザ定義受付を削除するには、次の条件を満たす必要があります。

- HCSC サーバが起動状態であること
 HCSC サーバの状態の確認方法については、「5.2.17 HCSC サーバの情報を確認する」を参照してください。
- ユーザ定義受付が停止状態であること
 ユーザ定義受付の状態の確認方法については、「5.2.22 ユーザ定義受付の情報を確認する」を参照してください。

(2) 削除方法

ユーザ定義受付を削除するには、運用環境で csccompounddeploy コマンドを実行します。

csccompounddeploy コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「csccompounddeploy (配備済みの HCSC コンポーネントの削除)」を参照してください。

すべてのユーザ定義受付を一括して削除するか、指定したユーザ定義受付だけを削除するかによって実行形式が異なります。

3. システムのセットアップとアンセットアップ

! 注意事項

ユーザ定義受付が削除できなかった場合、エラーになった原因を取り除いたあと、再度削除してください。

(a) すべてのユーザ定義受付を一括して削除する場合

HCSC サーバまたはクラスタのすべてのユーザ定義受付を一括して削除します。

単一の HCSC サーバからユーザ定義受付を削除するか、クラスタを構成するすべての HCSC サーバからユーザ定義受付を削除するかによって実行形式が異なります。

単一の HCSC サーバからすべてのユーザ定義受付を削除する場合

HCSC サーバ名と `-all` オプションを指定して実行します。

`-csc` オプションで指定した HCSC サーバに配備されているユーザ定義受付がすべて削除されます (削除されていないサービスアダプタおよびビジネスプロセスも同時にすべて削除されます)。

```
csccompounddeploy -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名> -all
```

クラスタを構成するすべての HCSC サーバからすべてのユーザ定義受付を削除する場合
クラスタ名と `-all` オプションを指定して実行します。

`-cluster` オプションで指定したクラスタ内のすべての HCSC サーバに配備されているユーザ定義受付がすべて削除されます (削除されていないサービスアダプタおよびビジネスプロセスも同時にすべて削除されます)。

```
csccompounddeploy -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -cluster <クラスタ名> -all
```

(b) 指定したユーザ定義受付だけを削除する場合

HCSC サーバまたはクラスタに配備されているユーザ定義受付のうち、指定したユーザ定義受付だけを削除します。

単一の HCSC サーバからユーザ定義受付を削除するか、クラスタを構成するすべての HCSC サーバからユーザ定義受付を削除するかによって実行形式が異なります。

単一の HCSC サーバから指定したユーザ定義受付だけを削除する場合

HCSC サーバ名とユーザ定義受付の受付 ID を指定して実行します。

`-csc` オプションで指定した HCSC サーバに配備されているユーザ定義受付のうち、`-name` オプションで指定したユーザ定義受付が削除されます


```
csccompounddeploy -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名> -name <ユーザ定義受付の受付ID>
```

クラスタを構成するすべての HCSC サーバから指定したユーザ定義受付だけを削除する場合

クラスタ名とユーザ定義受付の受付 ID を指定して実行します。

-cluster オプションで指定したクラスタ内のすべての HCSC サーバに配備されているユーザ定義受付のうち、指定したユーザ定義受付だけが削除されます。

```
csccompounddeploy -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -cluster <クラスタ名> -name <ユーザ定義受付の受付ID>
```

3.2.4 連携をアンセットアップする

連携のアンセットアップの前提条件、およびアンセットアップ方法について次に説明します。

(1) 前提条件

連携をアンセットアップするには、次の条件を満たす必要があります。

- 連携をアンセットアップする対象となる HCSC サーバが起動状態であること
HCSC サーバの状態の確認方法については、「5.2.17 HCSC サーバの情報を確認する」を参照してください。
- 連携受付が停止状態であること
連携受付の状態の確認方法については、「5.2.17 HCSC サーバの情報を確認する」を参照してください。
- 連携の状態が停止状態であること
連携の状態の確認方法については、「5.2.19 連携情報を確認する」を参照してください。

(2) アンセットアップ方法

連携をセットアップするには、運用環境で cscconunsetup コマンドを実行します。

! 注意事項

cscconunsetup コマンドは、1 回の実行で一つの HCSC サーバ（連携元）から一つのクラスタ（連携先）への一方向の連携だけをアンセットアップします。そのため、連携をアンセットアップするには、セットアップされている連携の数だけコマンドを実行する必要があります。

セットアップされている連携の数の考え方については、「3.1.6 連携をセットアップする」を参照してください。

3. システムのセットアップとアンセットアップ

cscconunsetup コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscconunsetup (連携のアンセットアップ)」を参照してください。

cscconunsetup コマンドの実行形式を次に示します。

```
cscconunsetup -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <連携元HCSCサーバ名> -connect <連携先クラスタ名>
```

cscconunsetup コマンドは、セットアップされているすべての連携に対して実行してください。

3.2.5 HCSC サーバをアンセットアップする

HCSC サーバをアンセットアップすると、セットアップされていた情報が解除されます。アンセットアップされた HCSC サーバが、ほかの HCSC サーバとクラスタを構成していた場合、クラスタから削除されます。

また、アンセットアップ時にアンセットアップ直前のリポジトリ情報がバックアップされます。バックアップは repository.zip のファイル名で次のディレクトリに格納されません。

```
<Cosminexusインストールディレクトリ>  
>%CSC%$pool¥manager¥unsetup_bk¥repository.zip
```

HCSC サーバのアンセットアップの前提条件、およびアンセットアップ方法について次に説明します。

(1) 前提条件

HCSC サーバをアンセットアップするには、次の条件を満たす必要があります。

- アンセットアップする HCSC サーバが停止状態であること
HCSC サーバの状態の確認方法については、「5.2.17 HCSC サーバの情報を確認する」を参照してください。
- アンセットアップする HCSC サーバの連携の状態が設定前状態であること
連携の状態の確認方法については、「5.2.19 連携情報を確認する」を参照してください。
- サービスアダプタ、ビジネスプロセス、およびユーザ定義受付がすべて配備前状態であること
サービスアダプタ、ビジネスプロセス、およびユーザ定義受付の状態の確認方法については、「5.2.20 サービスアダプタの情報を確認する」、「5.2.21 ビジネスプロセスの情報を確認する」、および「5.2.22 ユーザ定義受付の情報を確認する」を参照してください。

- バックアップファイル (<Cosminexus インストールディレクトリ
>¥CSC¥spool¥manager¥unsetup_bk¥repository.zip) にアクセスしていないこと
- ほかのコマンドを同時に実行していないこと
バックアップファイルにアクセスしている場合、HCSC サーバのアンセットアップに失敗することがあります。

(2) アンセットアップ方法

HCSC サーバをアンセットアップするには、運用環境で `cscsvunsetup` コマンドを実行します。

`cscsvunsetup` コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「`cscsvunsetup` (HCSC サーバのアンセットアップ)」を参照してください。

`cscsvunsetup` コマンドの実行形式を次に示します。

```
cscsvunsetup -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名>
```

! 注意事項

- クラスタを構成する HCSC サーバのそれぞれの標準受付の種別が異なる場合、設定されている標準受付の種別が少ない HCSC サーバを先にアンセットアップしてください。
- HCSC サーバがアンセットアップできなかった場合、エラーになった原因を取り除いたあと、再度アンセットアップしてください。
- HCSC サーバをアンセットアップした結果、リポジトリ内に構築されている HCSC サーバが存在しなくなった場合、ビジネスプロセスおよびサービスアダプタと合わせてリポジトリ情報が削除されます。削除前のビジネスプロセスおよびサービスアダプタを継続して開発する場合は、バックアップファイル (repository.zip) を HCSC 開発環境にインポートして開発を継続してください。

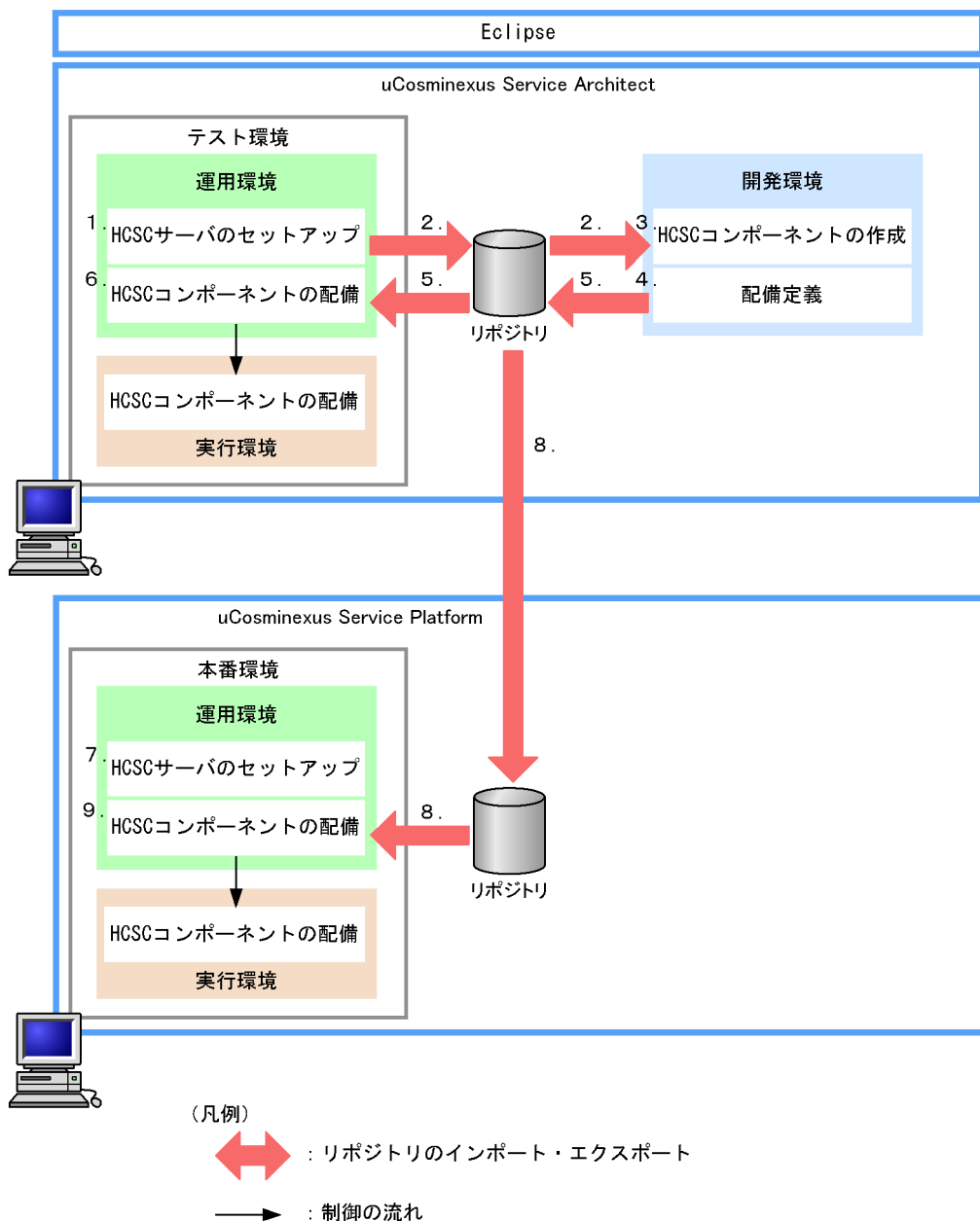
3.3 テスト環境から本番環境への移行手順

テスト環境から本番環境への移行手順を次に示します。

3.3.1 テスト環境と本番環境でデータベースと Cosminexus RM の使用有無が同じ場合の移行手順

テスト環境と本番環境で、データベースと Cosminexus RM の使用有無が同じ場合の移行手順を次に示します。移行の概要については、「1.1.5(1) テスト環境と本番環境でデータベースと Cosminexus RM の使用有無を同じ設定で構築した場合」を参照してください。

図 3-7 移行手順（テスト環境と本番環境でデータベースと Cosminexus RM の使用有無が同じ場合）



1. テスト環境の HCSC サーバをセットアップし、システムの構成を定義します。HCSC 簡易セットアップ機能を使うことで、HCSC サーバのセットアップや、システムの構成が定義できます。ただし、データベースを使用して Cosminexus RM を使用しない構成を構築する場合、HCSC 簡易セットアップ機能は使用できません。

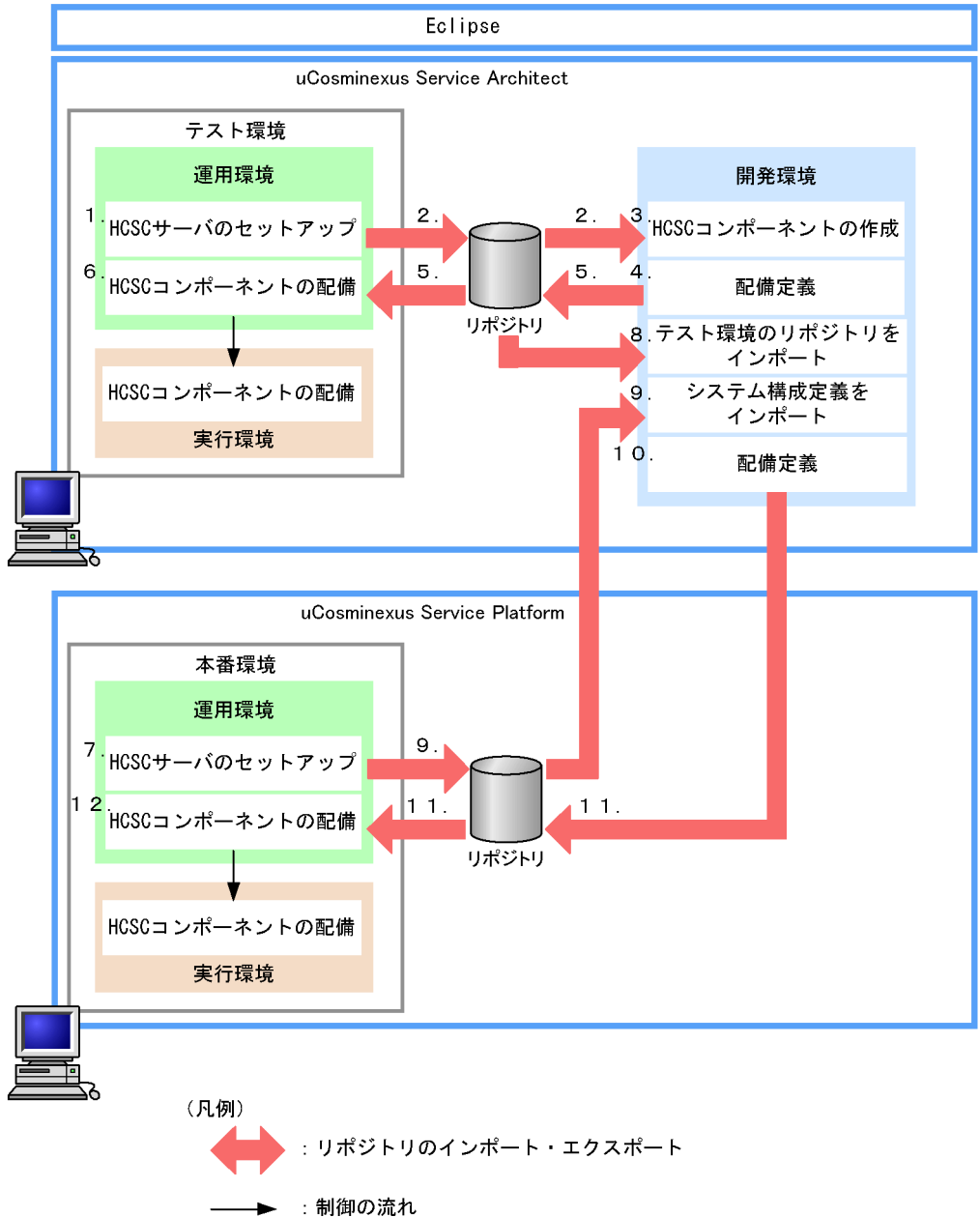
3. システムのセットアップとアンセットアップ

2. 運用環境からリポジトリをエクスポートし、テスト環境で定義したシステム構成定義を開発環境にインポートします。
3. 開発環境で、HCSC コンポーネントを作成します。
4. テスト環境で定義したシステム構成定義を基に、システム構成のどこに配備するかを定義し更新します（配備定義）。
5. 開発環境で定義した配備定義を含むリポジトリをエクスポートし、運用環境にインポートします。
6. 開発環境で定義した配備定義を基に、テスト環境に HCSC コンポーネントを配備します。
7. 本番環境の HCSC サーバをセットアップし、システムの構成を定義します。
テスト環境と本番環境で、データベースと Cosminexus RM の使用有無の設定を同じにします。
8. 開発環境で定義した配備定義を含むリポジトリをエクスポートし、運用環境にインポートします。
標準インポートを使用すると、HCSC サーバ名や IP アドレスなどが異なる場合でも、テスト環境のリポジトリをそのまま本番環境へ移行できます。
9. 開発環境で定義した配備定義を基に、本番環境に HCSC コンポーネントを配備します。

3.3.2 データベースと Cosminexus RM の両方を使用する環境から両方使用しない環境に移行する場合の移行手順

テスト環境では、データベースと Cosminexus RM の両方を使用して、本番環境では、データベースと Cosminexus RM の両方を使用しない場合の移行手順を次に示します。移行の概要については、「1.1.5(3) テスト環境と本番環境でデータベースと Cosminexus RM の使用有無を異なる設定で構築した（リポジトリを作成し直すとき）」を参照してください。

図 3-8 移行手順（データベースと Cosminexus RM の両方を使用する環境から両方使用しない環境に移行する場合）



1. テスト環境の HCSC サーバをセットアップし、システムの構成を定義します。HCSC 簡易セットアップ機能を使うことで、HCSC サーバのセットアップや、システムの構成が定義できます。HCSC 簡易セットアップ機能を使用して HCSC サーバをセットアップする場合、標準モデルを選択します。

3. システムのセットアップとアンセットアップ

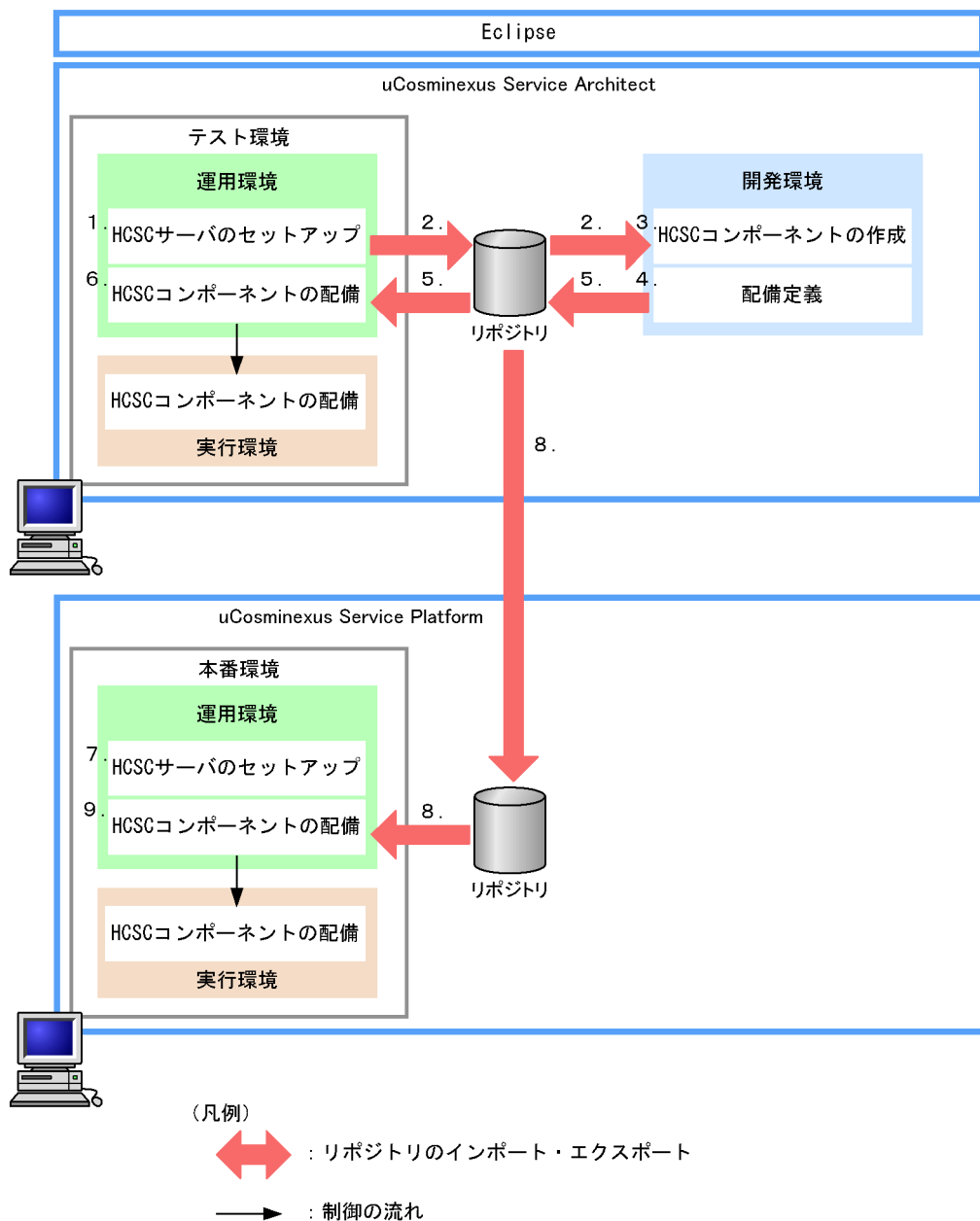
2. 運用環境からリポジトリをエクスポートし、テスト環境で定義したシステム構成定義を開発環境にインポートします。
3. 開発環境で、HCSC コンポーネントを作成します。
4. テスト環境で定義したシステム構成定義を基に、システム構成のどこに配備するかを定義し更新します（配備定義）。
このとき、配備定義の基になるシステム構成定義は、データベースと Cosminexus RM の両方を使用する設定になっています。
5. 開発環境で定義した配備定義を含むリポジトリをエクスポートし、運用環境にインポートします。
6. 開発環境で定義した配備定義を基に、テスト環境に HCSC コンポーネントを配備します。
7. 本番環境の HCSC サーバをセットアップし、システムの構成を定義します。
HCSC サーバセットアップ定義ファイルで、db-use プロパティに「OFF」を、rm-use プロパティに「OFF」を設定します。
8. テスト環境で定義したシステム構成定義およびサービス定義を開発環境にインポートします。
9. 本番環境の運用環境からリポジトリをエクスポートし、本番環境で定義したシステム構成定義を開発環境にインポートします。
10. 本番環境で定義したシステム構成定義を基に、システム構成のどこに配備するかを定義し更新します（配備定義）。
このとき、配備定義の基になるシステム構成定義は、データベースと Cosminexus RM の両方を使用しない設定になっています。
なお、非同期受付、非同期サービスアダプタ、および永続化ビジネスプロセスを配備定義した場合は、エラーになります。
11. 開発環境で定義した配備定義を含むリポジトリをエクスポートし、運用環境にインポートします。
テスト環境のリポジトリ（手順 8. でインポートしたリポジトリ）に対して、本番環境用のシステム構成定義を設定したリポジトリ（手順 9. でインポートしたリポジトリ）を、本番環境へ移行します。
12. 開発環境で定義した配備定義を基に、本番環境に HCSC コンポーネントを配備します。
本番環境では、データベースと Cosminexus RM の両方を使用しない構成で配備されます。

3.3.3 データベースと Cosminexus RM の両方を使用しない環境から両方使用する環境に移行する場合の移行手順

テスト環境では、データベースと Cosminexus RM の両方を使用しないで、本番環境では、データベースと Cosminexus RM の両方をする場合の移行手順を次に示します。移行の概要については、「1.1.5(2) テスト環境と本番環境でデータベースと Cosminexus RM の使用有無を異なる設定で構築した（リポジトリをそのまま移行できるとき）」を参

照してください。

図 3-9 移行手順（データベースと Cosminexus RM の両方を使用しない環境から両方使用する環境に移行する場合）



1. テスト環境の HCSC サーバをセットアップし、システムの構成を定義します。
HCSC 簡易セットアップ機能を使うことで、HCSC サーバのセットアップや、システムの構成が定義できます。HCSC 簡易セットアップ機能を使用して HCSC サーバを

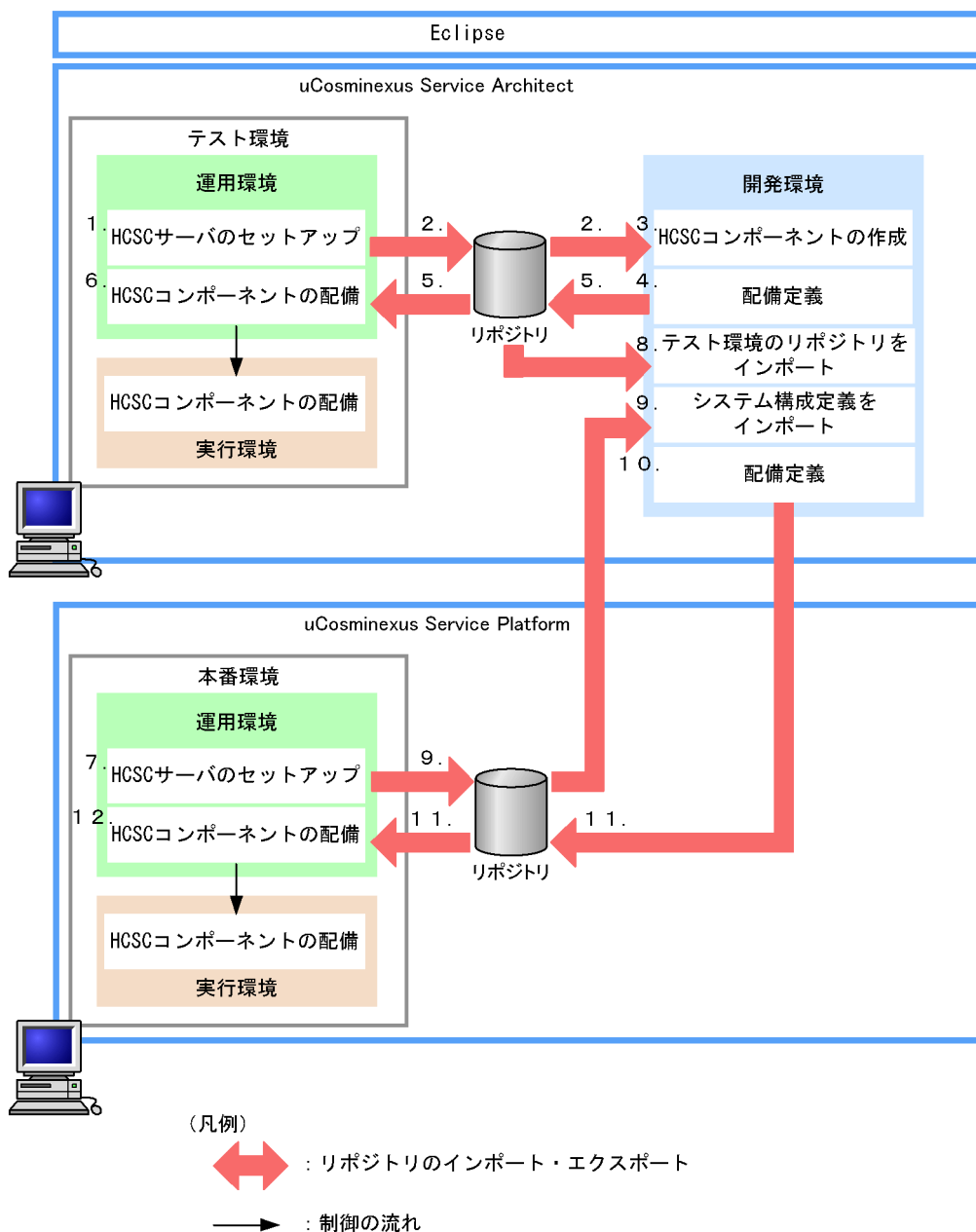
3. システムのセットアップとアンセットアップ

- セットアップする場合、ESB モデルを選択します。
2. 運用環境からリポジトリをエクスポートし、テスト環境で定義したシステム構成定義を開発環境にインポートします。
 3. 開発環境で、HCSC コンポーネントを作成します。
 4. テスト環境で定義したシステム構成定義を基に、システム構成のどこに配備するかを定義し更新します（配備定義）。
このとき、配備定義の基になるシステム構成定義は、データベースと Cosminexus RM の両方を使用しない設定になっています。
 5. 開発環境で定義した配備定義を含むリポジトリをエクスポートし、運用環境にインポートします。
 6. 開発環境で定義した配備定義を基に、テスト環境に HCSC コンポーネントを配備します。
 7. 本番環境の HCSC サーバをセットアップし、システムの構成を定義します。
HCSC サーバセットアップ定義ファイルで、db-use プロパティに「ON」を、rm-use プロパティに「ON」を設定します。
 8. 開発環境で定義した配備定義を含むリポジトリをエクスポートし、運用環境にインポートします。
標準インポートを使用すると、HCSC サーバ名や IP アドレスなどが異なる場合でも、テスト環境のリポジトリをそのまま本番環境へ移行できます。
 9. 開発環境で定義した配備定義を基に、本番環境に HCSC コンポーネントを配備します。
本番環境では、手順 7. で定義したシステム構成が優先されるため、データベースと Cosminexus RM の両方を使用する構成で配備されます。

3.3.4 データベースと Cosminexus RM の両方を使用する環境からデータベースを使用して Cosminexus RM を使用しない環境に移行する場合の移行手順

テスト環境では、データベースと Cosminexus RM の両方を使用して、本番環境では、データベースを使用して Cosminexus RM を使用しない場合の移行手順を次に示します。移行の概要については、「1.1.5(3) テスト環境と本番環境でデータベースと Cosminexus RM の使用有無を異なる設定で構築した（リポジトリを作成し直すとき）」を参照してください。

図 3-10 移行手順（データベースと Cosminexus RM の両方を使用する環境からデータベースを使用して Cosminexus RM を使用しない環境に移行する場合）



1. テスト環境の HCSC サーバをセットアップし、システムの構成を定義します。
HCSC 簡易セットアップ機能を使うことで、HCSC サーバのセットアップや、システムの構成が定義できます。HCSC 簡易セットアップ機能を使用して HCSC サーバをセットアップする場合、標準モデルを選択します。実行履歴を使用しない場合、ESB

3. システムのセットアップとアンセットアップ

モデルを選択することもできます。ESB モデルを選択する場合の移行手順については、「3.3.5 データベースと Cosminexus RM の両方を使用しない環境からデータベースを使用して Cosminexus RM を使用しない環境に移行する場合の移行手順」を参照してください。

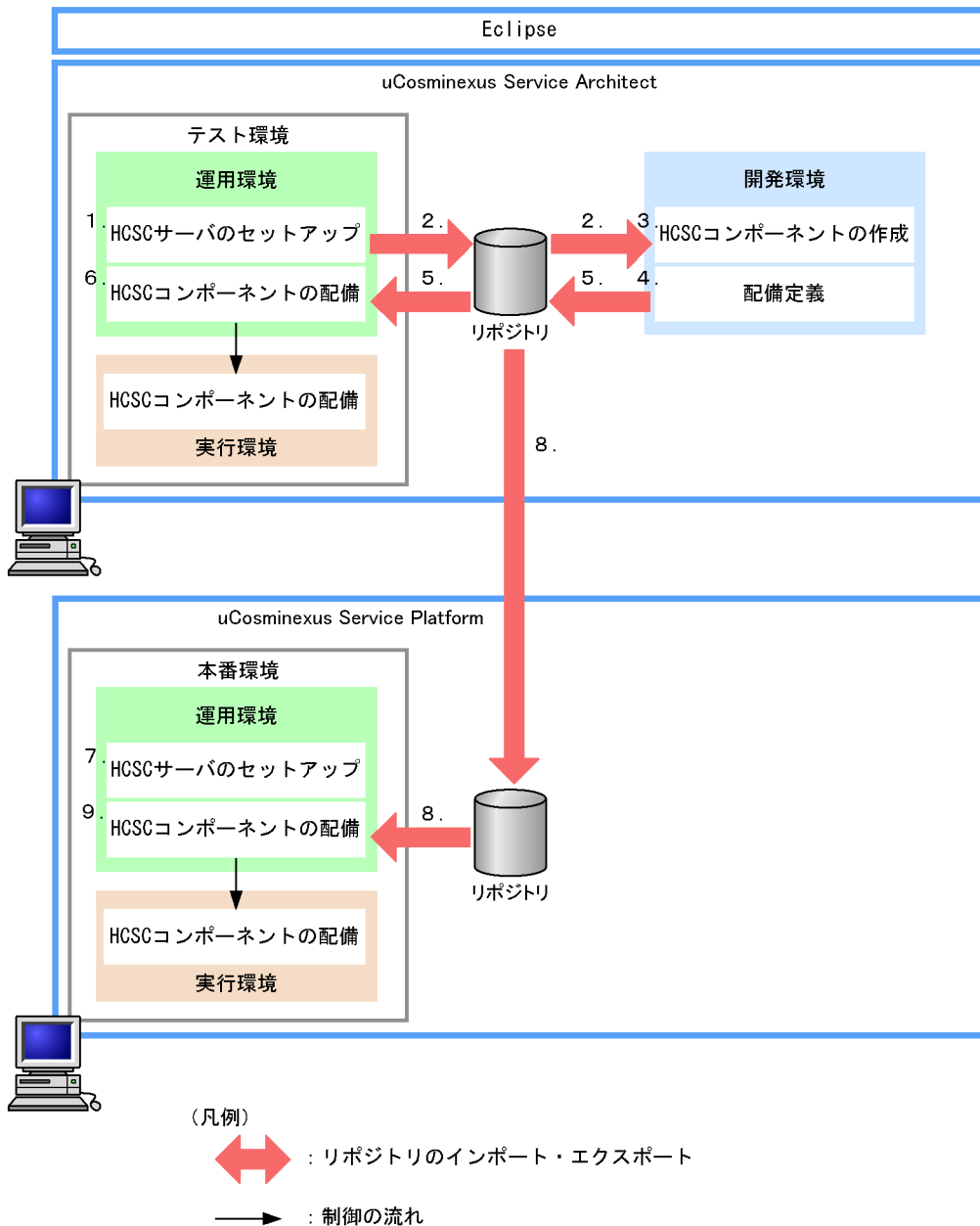
2. 運用環境からリポジトリをエクスポートし、テスト環境で定義したシステム構成定義を開発環境にインポートします。
3. 開発環境で、HCSC コンポーネントを作成します。
4. テスト環境で定義したシステム構成定義を基に、システム構成のどこに配備するかを定義し更新します（配備定義）。
このとき、配備定義の基になるシステム構成定義は、データベースと Cosminexus RM の両方を使用する設定になっています。
5. 開発環境で定義した配備定義を含むリポジトリをエクスポートし、運用環境にインポートします。
6. 開発環境で定義した配備定義を基に、テスト環境に HCSC コンポーネントを配備します。
7. 本番環境の HCSC サーバをセットアップし、システムの構成を定義します。
HCSC サーバセットアップ定義ファイルで、db-use プロパティに「ON」を、rm-use プロパティに「OFF」を設定します。
8. テスト環境で定義したシステム構成定義およびサービス定義を開発環境にインポートします。
9. 本番環境の運用環境からリポジトリをエクスポートし、本番環境で定義したシステム構成定義を開発環境にインポートします。
10. 本番環境で定義したシステム構成定義を基に、システム構成のどこに配備するかを定義し更新します（配備定義）。
このとき、配備定義の基になるシステム構成定義は、データベースを使用して Cosminexus RM を使用しない設定になっています。
なお、非同期受付、非同期サービスアダプタ、および永続化ビジネスプロセスを配備定義した場合は、エラーになります。
11. 開発環境で定義した配備定義を含むリポジトリをエクスポートし、運用環境にインポートします。
テスト環境のリポジトリ（手順 8. でインポートしたリポジトリ）に対して、本番環境用のシステム構成定義を設定したリポジトリ（手順 9. でインポートしたリポジトリ）を、本番環境へ移行します。
12. 開発環境で定義した配備定義を基に、本番環境に HCSC コンポーネントを配備します。
本番環境では、データベースを使用して Cosminexus RM を使用しない構成で配備されます。

3.3.5 データベースと Cosminexus RM の両方を使用しない環境からデータベースを使用して Cosminexus RM を使用しない環境に移行する場合の移行手順

テスト環境では、データベースと Cosminexus RM の両方を使用しないで、本番環境では、データベースを使用して Cosminexus RM を使用しない場合の移行手順を次に示します。移行の概要については、「1.1.5(2) テスト環境と本番環境でデータベースと Cosminexus RM の使用有無を異なる設定で構築した (リポジトリをそのまま移行できる時)」を参照してください。

3. システムのセットアップとアンセットアップ

図 3-11 移行手順 (データベースと Cosminexus RM の両方を使用しない環境からデータベースを使用して Cosminexus RM を使用しない環境に移行する場合)



1. テスト環境の HCSC サーバをセットアップし、システムの構成を定義します。HCSC 簡易セットアップ機能を使うことで、HCSC サーバのセットアップや、システムの構成が定義できます。HCSC 簡易セットアップ機能を使用して HCSC サーバをセットアップする場合、ESB モデルを選択します。

2. 運用環境からリポジトリをエクスポートし、テスト環境で定義したシステム構成定義を開発環境にインポートします。
3. 開発環境で、HCSC コンポーネントを作成します。
4. テスト環境で定義したシステム構成定義を基に、システム構成のどこに配備するかを定義し更新します（配備定義）。
このとき、配備定義の基になるシステム構成定義は、データベースと Cosminexus RM の両方を使用しない設定になっています。
5. 開発環境で定義した配備定義を含むリポジトリをエクスポートし、運用環境にインポートします。
6. 開発環境で定義した配備定義を基に、テスト環境に HCSC コンポーネントを配備します。
7. 本番環境の HCSC サーバをセットアップし、システムの構成を定義します。
HCSC サーバセットアップ定義ファイルで、db-use プロパティに「ON」を、rm-use プロパティに「OFF」を設定します。
8. 開発環境で定義した配備定義を含むリポジトリをエクスポートし、運用環境にインポートします。
標準インポートを使用すると、HCSC サーバ名や IP アドレスなどが異なる場合でも、テスト環境のリポジトリをそのまま本番環境へ移行できます。
9. 開発環境で定義した配備定義を基に、本番環境に HCSC コンポーネントを配備します。
本番環境では、手順 7. で定義したシステム構成が優先されるため、データベースを使用して Cosminexus RM を使用しない構成で配備されます。

4

リポジトリの管理

この章では、リポジトリの設定、エクスポートやインポート、およびリポジトリの情報の表示について説明します。

4.1 リポジトリの概要

4.2 リポジトリのエクスポート

4.3 リポジトリのインポート

4.4 リポジトリの情報の参照

4.5 リポジトリの差分情報の参照

4.1 リポジトリの概要

リポジトリとは、開発環境と運用環境の間で共有する情報を格納するディレクトリのことをいいます。

運用環境で作成したシステム構成情報を開発環境で使用したり、開発環境で作成した定義情報を運用環境で使用したりします。

(1) リポジトリの情報

リポジトリで共有する情報をリポジトリ情報といい、次のものがあります。

- システム構成
- 生成したアダプタやビジネスプロセス
- マッピング定義
- フォーマット定義
- 配備情報

(2) リポジトリとして使用するディレクトリ

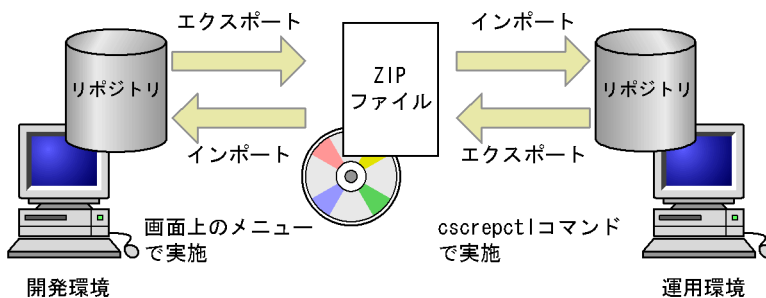
リポジトリは、uCosminexus Service Platform をインストールすると、標準で次のディレクトリに設定されます。

```
<Cosminexusのインストールディレクトリ>%CSC%repository
```

リポジトリとして設定するディレクトリを変更することもできます。変更する場合は、HCSC-Manager 定義ファイルで変更します。リポジトリとして設定するディレクトリの変更については、「2.4.1 カスタマイズする」を参照してください。

開発環境と運用環境で情報を共有するためには、媒体を経由して、リポジトリの情報を ZIP ファイル形式で媒体にエクスポート（保存）したり、その ZIP ファイル形式で保存された情報をリポジトリにインポート（読み込み）したりします。リポジトリのインポートとエクスポートを次の図に示します。

図 4-1 リポジトリのエクスポートとインポート



リポジトリの情報の保存については、「4.2 リポジトリのエクスポート」を、リポジトリの情報の展開については、「4.3 リポジトリのインポート」を参照してください。

! 注意事項

バージョン 07-60 以降では、開発環境と運用環境で同じリポジトリを共有できません。下位バージョンでリポジトリを共有していた場合、開発環境と運用環境で別々のリポジトリを用意して、移行してください。移行手順については、マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド」の下位バージョンで開発環境と運用環境のリポジトリを共有していた場合の移行手順を参照してください。

(3) リポジトリの排他

リポジトリの更新を伴う操作中は、リポジトリがロックされた状態になり、操作できない場合があります。ロックには、排他ロック、および共有ロックがあり、ロックの種類によって、実行できる操作が異なります。

- 排他ロック中は、排他ロックまたは共有ロックになる操作はできません。
- 共有ロック中は、同時にほかの共有ロックになる操作ができます。

ロックの種類と対象になる操作を次の表に示します。

表 4-1 ロックの種類と対象になる操作

ロックの種類	対象となる操作	説明
排他ロック	更新系コマンドでの操作	次のコマンドが対象となります。 <ul style="list-style-type: none"> • csccompodeploy コマンド • csccompoundeploy コマンド • cscconsetup コマンド • cscconunsetup コマンド • cscpasswd コマンド • cscprepctl コマンド • cscsvctl コマンド • cscsvsetup コマンド • cscsvunsetup コマンド
	開発環境の画面での操作	開発環境と運用環境でリポジトリを共有する場合、開発環境を起動していると、使用するリポジトリが同じで排他されるため、運用環境で画面またはコマンドでの操作ができません。開発環境の使用が終了してから操作してください。

4. リポジトリの管理

ロックの種類	対象となる操作	説明
共有ロック	参照系コマンドでの操作	次のコマンドが対象となります。 <ul style="list-style-type: none">• cscpidetele コマンド• cscpireexec コマンド• cscpiselect コマンド• cscrepdiff コマンド• cscrepls コマンド• cscstatus コマンド• cscsvcls コマンド• cscsvconfig コマンド• cscutil コマンド• cscrestinfo コマンド
	運用環境の画面での操作	-

(凡例)

- : 該当しません。

(4) 注意事項

- 異なるバージョンの開発環境で作成したリポジトリは使用することができません。
- リポジトリとして使用するディレクトリ以下にはアクセスしないようにしてください。アクセスした場合は、各種コマンドが失敗することがあります。

4.2 リポジトリのエクスポート

運用環境で作成した情報を、開発環境で使用する場合、`cscrepctl` コマンドを使用して、リポジトリ内の情報を ZIP ファイル形式でエクスポートします。作成した ZIP ファイルの内容は変更できません。

次のコマンドを入力します。

```
cscrepctl -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -export <ファイル名>
```

`cscrepctl` コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「`cscrepctl` (インポート/エクスポート)」を参照してください。

4.3 リポジトリのインポート

開発環境で作成した内容を、運用環境で使用する場合、`cscrepctl` コマンドを使用して、ZIP ファイル形式で保存されたリポジトリ情報をリポジトリにインポートします。

(1) インポート方法

次のコマンドを入力します。

```
cscrepctl -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -import <ファイル名>
```

インポートには、次の二つの方法があります。

標準インポート

通常は、標準インポートを使用します。現在の運用環境の HCSC サーバ構成情報に、別のリポジトリの HCSC コンポーネントをインポートします。

サーバチェックインポート

現在の運用環境のリポジトリ情報とインポートするリポジトリ情報で、HCSC サーバの構成情報が同じかどうかをチェックしたい場合に使用します。サーバチェックインポートを行う場合、`cscrepctl` コマンドに `-check` オプションを指定します。

また、ZIP ファイル形式で保存されたリポジトリ情報をリポジトリに展開するには、次の二つの方法があります。

差分展開

変更された HCSC コンポーネントだけを運用環境のリポジトリに展開します。変更されていない HCSC コンポーネントは、運用環境のリポジトリに展開されないで、現在ある運用環境のリポジトリの HCSC コンポーネントがそのまま残ります。

全体展開

変更されていない HCSC コンポーネントを含め、インポート対象の ZIP ファイルをすべて運用環境のリポジトリに展開します。全体展開を行う場合、`cscrepctl` コマンドに `-overwrite` オプションを指定します。

なお、次の場合はインポートできません。

1. HCSC サーバがセットアップされていない場合（標準インポートのとき）
2. 現在の運用環境のリポジトリ情報と、インポートするリポジトリ情報で、HCSC サーバの構成が異なる場合
3. 現在配備されているビジネスプロセスやアダプタが、インポートするリポジトリ情報では削除されている場合
4. 現在配備されているビジネスプロセスやアダプタが、インポートするリポジトリ情報では情報が更新されている場合

5. 現在の運用環境のリポジトリ情報と、インポートするリポジトリ情報で、データベースおよび Cosminexus RM を使用するかどうかの設定が異なる場合

3. および 4. の場合は、該当するビジネスプロセスやアダプタを実行環境から削除したあと、リポジトリをインポートしてください。

インポートする場合は、必ずリポジトリに設定したディレクトリ以下のディレクトリおよびファイルを参照していないことを確認してから、cscrepctl コマンドを実行してください。

cscrepctl コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscrepctl (インポート/エクスポート)」を参照してください。

注

現在の運用環境のリポジトリ情報と、インポートするリポジトリ情報で、データベースおよび Cosminexus RM を使用するかの設定が異なる場合でも、一部の場合同じについてはインポートできます。インポートできる場合とできない場合の設定を次の表に示します。

表 4-2 インポートできる場合とできない場合の設定

現在の運用環境のリポジトリ情報での設定	インポートするリポジトリ情報での設定		
	データベースと Cosminexus RM の両方を使用する	データベースと Cosminexus RM の両方を使用しない	データベースを使用して Cosminexus RM を使用しない
データベースと Cosminexus RM の両方を使用する		x	x
データベースと Cosminexus RM の両方を使用しない			x
データベースを使用して Cosminexus RM を使用しない			

(凡例)

- : インポートできます。
- x : インポートできません。

(2) インポート時の自動バックアップ

リポジトリをインポートする際に、インポート前のリポジトリ情報を ZIP ファイル形式で自動バックアップします。バックアップファイルは、cscimport.zip のファイル名で次のディレクトリに出力されます。

```
<Cosminexusインストールディレクトリ>¥CSC¥spool¥manager
```

4. リポジトリの管理

なお、バックアップファイルの出力先ディレクトリは、HCSC-Manager 定義ファイルの `cscmng.envbackup.dir` パラメタ、または `cscmng.envbackup.dir.import` パラメタで変更できます。

また、自動バックアップをするかどうかは、HCSC-Manager 定義ファイルの `cscmng.envbackup.autoget` パラメタ、または `cscmng.envbackup.autoget.off` パラメタで設定できます。

HCSC-Manager 定義ファイルの詳細については、「9. 定義ファイル」の「HCSC-Manager 定義ファイル」を参照してください。

また、バックアップファイルから運用環境を復旧する方法については、「7.9.3(2) 運用環境の復旧」を参照してください。

(3) バージョンアップ時のインポート

現在のリポジトリ情報よりも新しいバージョンのリポジトリ情報をインポートすると、インポート時にリポジトリが自動でバージョンアップされます。

なお、現在配備されているビジネスプロセスやアダプタが、インポートするリポジトリ情報では削除されている場合、バージョンアップ時のインポートでエラーが発生します。エラーが発生した場合、現在のリポジトリを運用環境からエクスポートして、開発環境にインポートします。そのあと、開発環境でバージョンアップしたリポジトリを開発環境からエクスポートして、運用環境にインポートしてください。

バージョンアップの詳細については、「付録 G 下位バージョンからのリポジトリの移行」を参照してください。

4.4 リポジトリの情報の参照

リポジトリ内の情報は、コマンドで確認できます。未配備のビジネスプロセスやアダプタを配備するときに、複数のビジネスプロセスやアダプタの配備に失敗した場合は後処理されないため、cscrepls コマンドを使用して配備状況を確認します。

次のコマンドを入力します。

```
cscrepls -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -repfile <エクスポートされたリポジトリZIPファイル名>
```

cscrepls コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscrepls (リポジトリ情報の表示)」を参照してください。

4.5 リポジトリの差分情報の参照

現在の運用環境のリポジトリ情報とエクスポートしたリポジトリ情報の差分は、コマンドで確認できます。追加，変更，および削除されたビジネスプロセスやアダプタの情報が確認できます。

次のコマンドを入力します。

```
cscrepdiff -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -repfile <エクスポートされたリポジトリZIPファイル名>
```

なお，次の場合はリポジトリ情報の差分を表示できません。

1. 現在の運用環境のリポジトリ情報と，差分表示の対象となるリポジトリ情報が，単一のクラスタ構成になっていない場合
2. 現在の運用環境のリポジトリ情報と，差分表示の対象となるリポジトリ情報で，データベースおよび Cosminexus RM を使用するかどうかの設定が異なる場合

cscrepdiff コマンドの詳細については，「10. コマンド」の「cscrepdiff (リポジトリ情報の差分の表示)」を参照してください。

注

現在の運用環境のリポジトリ情報と，差分表示の対象となるリポジトリ情報で，データベースおよび Cosminexus RM を使用するかの設定が異なる場合でも，一部の状況についてはリポジトリ情報の差分を表示できます。リポジトリ情報の差分を表示できる場合とできない場合の設定を次の表に示します。

表 4-3 リポジトリ情報の差分を表示できる場合とできない場合の設定

現在の運用環境のリポジトリ情報での設定	差分表示の対象となるリポジトリ情報での設定		
	データベースと Cosminexus RM の両方を使用する	データベースと Cosminexus RM の両方を使用しない	データベースを使用して Cosminexus RM を使用しない
データベースと Cosminexus RM の両方を使用する		×	×
データベースと Cosminexus RM の両方を使用しない			×
データベースを使用して Cosminexus RM を使用しない			

(凡例)

- ：差分を表示できます。
- ×：差分を表示できません。

5

システム運用

この章では、ログイン、ログアウト、および HCSC サーバの運用について説明します。

5.1 HCSC サーバのオペレーションをするための準備

5.2 HCSC サーバのオペレーション運用

5.3 クラスタ構成時の運用

5.4 HCSC サーバのサービス部品を呼び出す流れ

5.5 ビジネスプロセスを使った運用

5.6 標準プロトコル以外のシステムとの接続

5.1 HCSC サーバのオペレーションをするための準備

HCSC サーバの運用を開始するには、HCSC-Manager にログインする必要があります。ログインとログアウトの方法について、以降の項で説明します。

5.1.1 ログインする

HCSC サーバにログインする方法を次に示します。

(1) 画面の場合

運用環境の画面を利用して HCSC サーバにログインする手順を次に示します。

1. Eclipse を起動します。
2. メニューから [HCSC-Manager] - [ログイン] を選択します。
現在のパースペクティブが HCSC-Manager パースペクティブの場合 (ツリービューが表示されている場合), ユーザ ID とパスワードを入力するダイアログが表示されません。
現在のパースペクティブが HCSC-Manager パースペクティブではない場合 (ツリービューが表示されていない場合), パースペクティブを切り替えるかどうかを確認するダイアログが表示されます。パースペクティブを切り替える場合は [はい], 切り替えない場合は [いいえ] を選択します。そのあと、ユーザ ID とパスワードを入力するダイアログが表示されます。
3. ユーザ ID とパスワードを指定して、[OK] ボタンをクリックします。
ログインが正常に終了すると、サーバと HCSC コンポーネントの構成、状態がツリービューに表示されます。
ユーザ ID とパスワードは `cscpasswd` コマンドで設定、変更できます。ユーザ ID とパスワードの設定、変更の詳細については、「2.4.2 ユーザ権限を設定する」を参照してください。また、`cscpasswd` コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「`cscpasswd (ユーザの管理)`」を参照してください。

(2) コマンドの場合

あらかじめ、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルの次のパラメタに、ログインユーザ名およびログインパスワードを指定しておくと、HCSCManager のコマンド実行時にログインユーザ ID、ログインパスワードの指定が不要になります。

- `csc.all.user=HCSC-Manager ログインユーザ名`
- `csc.all.pass=HCSC-Manager ログインパスワード`

(3) ログイン時の注意事項

(a) リポジトリの更新を伴う次のコマンドの実行中は、これらのコマンドで使用するリポジトリが同じで排他されるため、画面またはコマンドでログインできません。コマンドの実行が終了してからログインしてください。

- csccompodeploy (HCSC コンポーネントの配備)
- csccompoundeploy (HCSC コンポーネントの削除)
- cscconsetup (連携のセットアップ)
- cscconunsetup (連携のアンセットアップ)
- cscenvrestore (HCSC-Manager 環境のリストア)
- cscpasswd (ユーザの管理)
- cscrepctl (インポート / エクスポート)
- cscsvctl (サービス情報の管理)
- cscsvsetup (HCSC サーバのセットアップ)
- cscsvunsetup (HCSC サーバのアンセットアップ)

(b) 開発環境と運用環境でリポジトリを共有する場合、開発環境を起動していると、使用するリポジトリが同じで排他されるため、運用環境で画面またはコマンドでログインできません。開発環境の使用が終了してからログインしてください。

5.1.2 ログアウトする

HCSC サーバからログアウトする方法を次に示します。

(1) 画面の場合

運用環境の画面を利用して HCSC サーバからログアウトする手順を次に示します。

1. メニューから [HCSC-Manager] - [ログアウト] を選択します。
ログアウトを確認するダイアログが表示されます。
2. [OK] ボタンをクリックします。
ログアウトが正常に終了すると、画面は初期状態に戻ります。

(2) コマンドの場合

HCSC-Manager のコマンドの終了時にログアウトできます。

5.2 HCSC サーバのオペレーション運用

Cosminexus サービスプラットフォームの運用環境を利用して、セットアップ済みのシステムを運用する方法について説明します。

5.2.1 運用の流れ

次に示す場合の運用の流れについて説明します。

- 運用する前の準備
- 運用を開始する場合
- 運用中にシステムを操作する場合
- 運用を終了する場合

それぞれの場合に必要な操作の前提条件や手順については、以降の項で説明します。

(1) 運用する前の準備

運用する前に、次の作業を実施することを推奨します。

論理サーバの登録

論理サーバの操作（HCSC サーバとの一括起動・停止、および状態の参照）をできるようにするため、HCSC-Manager 定義ファイルのパラメタを次のように変更します。

```
cscmng.server.<HCSCサーバ名>.system=論理サーバ名
```

リポジトリへのアクセスの制御

セキュリティを確保するため、リポジトリにアクセスしないようにします。リポジトリのルートディレクトリを変更していない場合は、次のリポジトリにアクセスしないようにします。

```
<Cosminexusインストールディレクトリ>%CSC%repository
```

リポジトリのルートディレクトリを変更した場合は、変更後のリポジトリにアクセス制御を実施してください。

バックアップ

運用時の障害に備えて、運用環境の情報をバックアップします。バックアップした情報を、運用環境とは別のマシンで管理することによって、障害発生後、運用環境を復旧できます。バックアップは `cscenvbackup` コマンドを実行します。

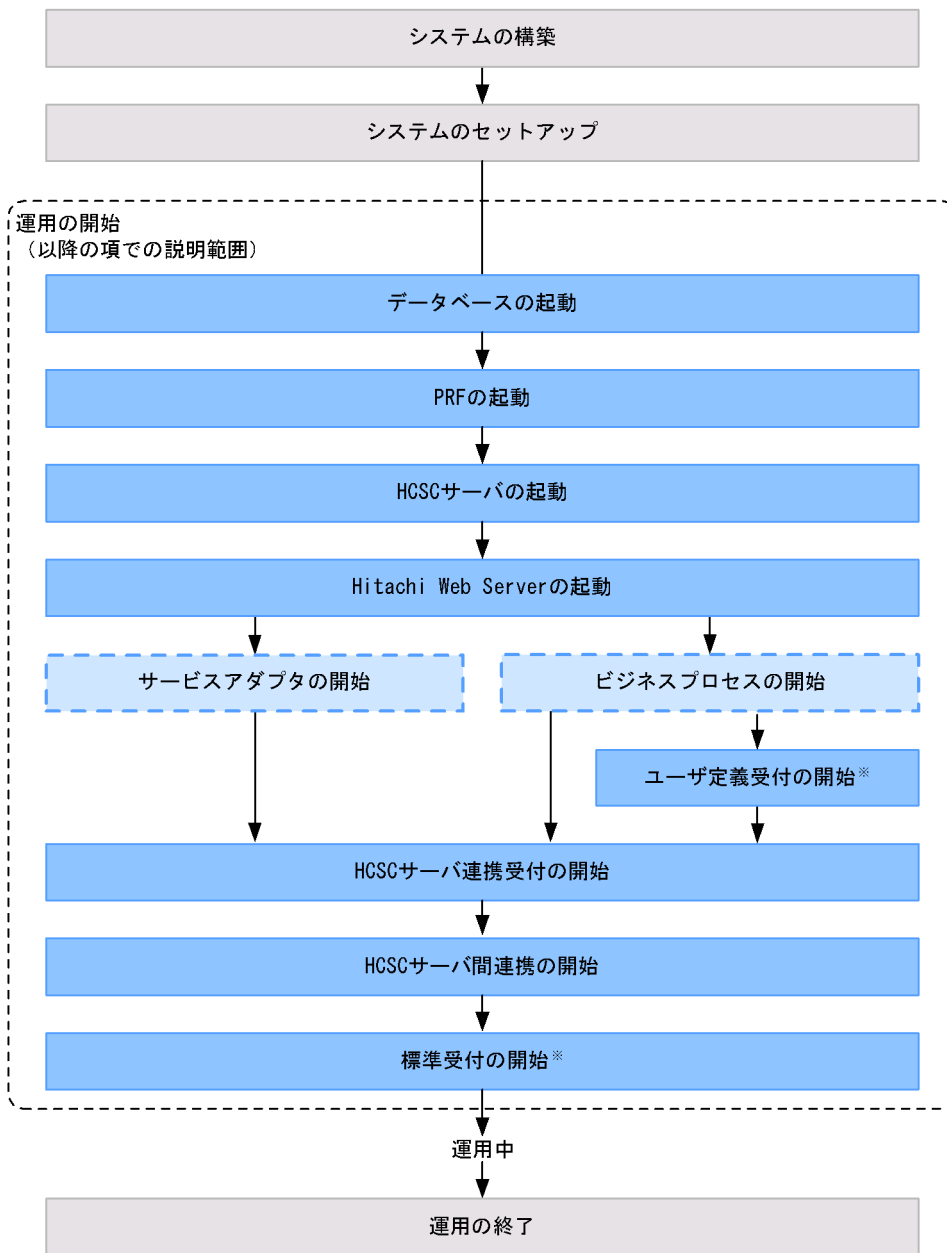
`cscenvbackup` コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「`cscenvbackup`（HCSC-Manager 環境のバックアップ）」を参照してください。

(2) 運用を開始する場合

システムを起動して運用を開始するには、次の図に示す流れに従って作業を実施する必要があります。

5. システム運用

図 5-1 運用を開始する場合の作業の流れ



(凡例)

- : 運用の開始で実施しない作業
- : 通常の運用で実施する作業
- : セットアップ直後の運用で実施する作業

注※ cscrcptstartコマンドを使用して、同時に開始することもできます。

(3) 運用中にシステムを操作する場合

システムの運用中、必要に応じて次の操作を実施できます。

状態・情報の参照

必要に応じて、各状態・情報を参照できます。参照できる状態・情報は次のとおりです。参照方法については、以降の項で説明します。

- データベースの状態
- PRF の状態
- Hitachi Web Server の状態 (Hitachi Web Server を使用する場合)
- Cosminexus Manager の状態
- HCSC サーバのセットアップ情報
- HCSC サーバの情報
- 連携情報
- サービスアダプタの情報
- ビジネスプロセスの情報
- ユーザ定義受付の情報

なお、次に示す実行環境の構成要素および HCSC サーバの状態は、定期的に確認する必要があります。

- データベースの起動状態
- PRF の起動状態
- Hitachi Web Server の起動状態 (Hitachi Web Server を使用する場合)
- Cosminexus Manager の起動状態
- HCSC サーバの起動状態および開始状態

定義や構成などの変更

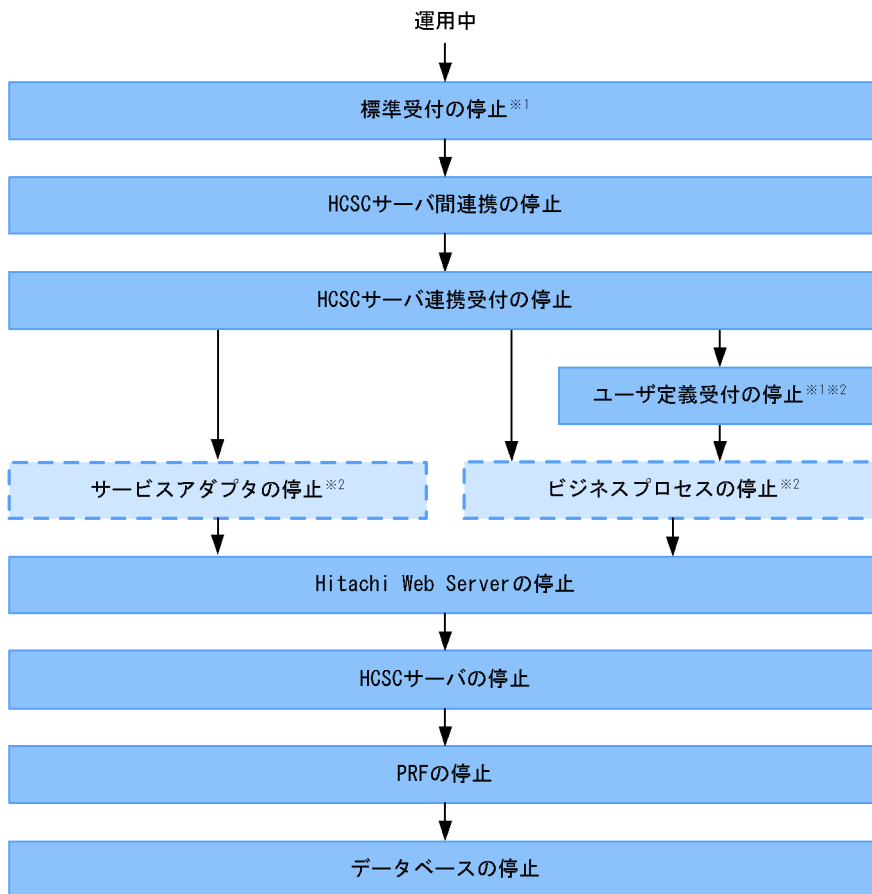
必要に応じて、次の定義や構成などを変更できます。変更方法については、以降の項で説明します。

- HCSC サーバの定義
- ユーザ定義受付の定義情報
- HCSC コンポーネントの構成
- サービス部品の接続先
- 流量制御値
- 通信タイムアウト値

(4) 運用を終了する場合

システムを停止して運用を終了するには、次の図に示す流れに従って作業を実施する必要があります。停止方法については、以降の項で説明します。

図 5-2 運用を終了する場合の作業の流れ



(凡例)

- : 通常の運用で実施する作業
- : 通常の運用で実施しない作業

注※1 cscriptnstopコマンドを使用して、同時に停止することもできます。
 注※2 サービス部品の実行要求を受け付けないようにする場合に実施します。

5.2.2 データベースを起動する

データベースの起動方法について次に説明します。

(1) 起動方法

データベースを起動する方法を次に示します。

(a) HiRDB の場合

HiRDB を起動するには、データベースサーバで `pdstart` コマンドを実行します。

`pdstart` コマンドの詳細については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」を参照してください。

(b) Oracle の場合

Oracle を起動する方法については、Oracle 社が発行するドキュメントを参照してください。

5.2.3 PRF を起動する

PRF を起動するには、運用環境で `cscsvstart` コマンドを実行します。`-logical` オプションに PRF の論理サーバ名を指定して実行します。

`cscsvstart` コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「`cscsvstart` (HCSC サーバの起動)」を参照してください。

`cscsvstart` コマンドの実行形式を次に示します。

```
cscsvstart -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名>
-logical <PRFの論理サーバ名>
```

5.2.4 HCSC サーバを起動する

HCSC サーバの起動の前提条件と起動方法について次に説明します。

(1) 起動方法

HCSC サーバを起動する方法を次に示します。

! 注意事項

HCSC サーバを起動するとき、HCSC サーバが起動できなかったり、サービスアダプタおよびビジネスプロセスが開始できなかったりすると、サービスアダプタおよびビジネスプロセスの状態、ならびにユーザ定義受付および標準受付の状態が停止状態になる場合があります。この場合、エラーになった原因を取り除いたあと、サービスアダプタおよびビジネスプロセスの開始操作、ならびにユーザ定義受付および標準受付の開始操作を行う必要があります。

サービスアダプタおよびビジネスプロセスの開始方法については、「5.2.6 サービスアダプタを開始する」、または「5.2.7 ビジネスプロセスを開始する」を、ユーザ定義受付および標準受付の開始方法については、「5.2.8 ユーザ定義受付を開始する」、および「5.2.11 標準受付を開始する」を参照してください。

5. システム運用

(a) 画面の場合

運用環境の画面を利用して HCSC サーバを起動する手順を次に示します。

1. ツリービュー上で、起動する HCSC サーバをダブルクリックします。
選択した HCSC サーバの情報がエディタエリアに表示されます。
2. エディタエリアで [稼働運用] タブを選択します。
稼働運用ページに、手順 1 で選択した HCSC サーバの稼働運用に関する情報が表示されます。
HCSC サーバの稼働運用ページの詳細については、「8.4 稼働運用ページ」を参照してください。
3. 稼働運用ページに表示された内容を確認し、「HCSC サーバ」の [起動] ボタンをクリックします。
HCSC サーバの起動を確認するダイアログが表示されます。
4. ダイアログに表示された内容を確認し、[OK] ボタンをクリックします。
HCSC サーバの起動処理が開始されます。起動処理中のログはコンソールビューに出力されます。
[キャンセル] ボタンをクリックした場合は、起動処理を実行しないで稼働運用ページに戻ります。
HCSC サーバの起動処理が完了すると、実行結果を示すダイアログが表示されます。
5. 実行結果を示すダイアログを確認します。

起動処理が成功した場合

[OK] ボタンをクリックして、稼働運用ページに戻ります。

稼働運用ページでは、HCSC サーバの稼働状態が「起動状態」になります。また、[起動] ボタンが非活性化し、[停止] ボタンが活性化します。

起動処理が失敗した場合

ダイアログにエラーの内容が表示されます。詳細情報に表示されるメッセージ ID を参照して対処してください。

(b) コマンドの場合

HCSC サーバを起動するには、運用環境で `cscsvstart` コマンドまたは `cscutil` コマンドを実行します。クラスタ内の HCSC サーバを一括して起動する場合、または論理サーバを起動する場合は、`cscsvstart` コマンドを実行します。

`cscsvstart` コマンドおよび `cscutil` コマンドは、次の場合に使用します。

- `cscsvstart` コマンド
該当するリポジトリが存在する運用環境で、HCSC サーバを起動する場合。
- `cscutil` コマンド
該当するリポジトリがなく、`cscutil` が使用できる環境（例えば、JP1 で直接運用している実行環境）で HCSC サーバを起動する場合。

cscsvstart コマンドの場合

運用環境で cscsvstart コマンドを実行します。

cscsvstart コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscsvstart (HCSC サーバの起動)」を参照してください。

cscsvstart コマンドの実行形式を次に示します。

クラスタ内の HCSC サーバを一括して起動する場合

クラスタ名を指定して実行します。-cluster オプションで指定したクラスタ内のすべての HCSC サーバが一括して起動されます (論理サーバは起動されません)。

```
cscsvstart -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -cluster <クラスタ名>
```

クラスタ内の HCSC サーバの起動と同時に論理サーバを起動する場合は、-system オプションを指定します。ただし、HCSC-Manager 定義ファイルに論理サーバを登録している必要があります。論理サーバの登録の詳細については、「5.2.1(1) 運用する前の準備」を参照してください。

```
cscsvstart -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -cluster <クラスタ名> -system
```

また、HCSC サーバは起動しないで指定した論理サーバだけを起動する場合は、-logical オプションを指定します。

```
cscsvstart -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -cluster <クラスタ名> -logical <論理サーバ名>
```

それぞれの HCSC サーバを一つずつ起動する場合

HCSC サーバ名を指定して実行します。-csc オプションで指定した HCSC サーバが起動されます (論理サーバは起動されません)。

```
cscsvstart -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名>
```

HCSC サーバの起動と同時に論理サーバを起動する場合は、-system オプションを指定します。

```
cscsvstart -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名> -system
```

5. システム運用

また、HCSC サーバは起動しないで指定した論理サーバだけを起動する場合は、`-logical` オプションを指定します。

```
cscsvstart -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名>
-logical <論理サーバ名>
```

cscutil コマンドの場合

運用環境で `cscutil` コマンドを実行します。`-target` オプションに `server` を、また `-operation` オプションに `start` を指定します。

`cscutil` コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「`cscutil` (各種操作)」を参照してください。

`cscutil` コマンドの実行形式は、プロパティ定義ファイルを使用するかどうかによって異なります。

プロパティ定義ファイルを使用しない場合

`-props` オプションに HCSC サーバ名および J2EE サーバ名を指定します。

```
cscutil -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -mng <Cosminexus Manager
名> -target server -operation start -props "CSCSrvName=<HCSCサーバ名>,
J2EESrvName=<J2EEサーバ名>"
```

`cscutil` コマンドに指定する `Cosminexus Manager` 名、HCSC サーバ名および J2EE サーバ名は、`cscrepls` コマンドで確認できます。`cscrepls` コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「`cscrepls` (リポジット情報の表示)」を参照してください。

プロパティ定義ファイルを使用する場合

`-profile` オプションにプロパティ定義ファイル名を指定します。プロパティ定義ファイルは、J2SE のプロパティファイル形式であらかじめ作成しておく必要があります。

```
cscutil -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -mng <Cosminexus Manager
名> -target server -operation start -profile <プロパティ定義ファイル名>
```

5.2.5 Hitachi Web Server を起動する

Hitachi Web Server を起動するには、運用環境で `cscsvstart` コマンドを実行します。

`-logical` オプションに Hitachi Web Server の論理サーバ名を指定して実行します。

`cscsvstart` コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「`cscsvstart` (HCSC サーバの起動)」を参照してください。

cscsvstart コマンドの実行形式を次に示します。

```
cscsvstart -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名>  
-logical <Hitachi Web Serverの論理サーバ名>
```

5.2.6 サービスアダプタを開始する

サービスアダプタの開始の前提条件と開始方法について次に説明します。

(1) 前提条件

サービスアダプタを開始するには、HCSC サーバが起動状態である必要があります。

HCSC サーバの状態の確認方法については、「5.2.17 HCSC サーバの情報を確認する」を参照してください。

(2) 開始方法

サービスアダプタを開始する方法を次に示します。

(a) 画面の場合

運用環境の画面を利用してサービスアダプタを開始する手順を次に示します。

1. ツリービュー上で、開始するサービスアダプタをダブルクリックします。
ダブルクリックしたサービスアダプタの情報がエディタエリアの稼働運用ページに表示されます。
サービスアダプタの稼働運用ページの詳細については、「8.4 稼働運用ページ」を参照してください。
2. 稼働運用ページに表示された内容を確認し、[開始] ボタンをクリックします。
サービスアダプタの開始を確認するダイアログが表示されます。
3. ダイアログに表示された内容を確認し、[OK] ボタンをクリックします。
サービスアダプタの開始処理が開始されます。開始処理中のログはコンソールビューに出力されます。
[キャンセル] ボタンをクリックした場合は、開始処理を実行しないで稼働運用ページに戻ります。
サービスアダプタの開始処理が完了すると、実行結果を示すダイアログが表示されます。
4. 実行結果を示すダイアログを確認します。

開始処理が成功した場合

[OK] ボタンをクリックして、稼働運用ページに戻ります。

稼働運用ページでは、サービスアダプタの状態が「開始状態」になります。また、[開始] ボタンが非活性化し、[停止] ボタンが活性化します。

5. システム運用

開始処理が失敗した場合

ダイアログにエラーの内容が表示されます。詳細情報に表示されるメッセージ ID を参照して対処してください。

(b) コマンドの場合

サービスアダプタを開始するには、運用環境で `csccompostart` コマンドまたは `cscutil` コマンドを実行します。

`csccompostart` コマンドおよび `cscutil` コマンドは、次の場合に使用します。

- `csccompostart` コマンド
該当するリポジトリが存在する運用環境で、サービスアダプタを開始する場合。
- `cscutil` コマンド
該当するリポジトリがなく、`cscutil` が使用できる環境（例えば、JP1 で直接運用している実行環境）でサービスアダプタを開始する場合。

`csccompostart` コマンドの場合

運用環境で `csccompostart` コマンドを実行します。

`csccompostart` コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「`csccompostart` (HCSC コンポーネントの開始)」を参照してください。

`csccompostart` コマンドの実行形式を次に示します。

クラスタ内のすべての HCSC サーバに配備されているサービスアダプタを一括して開始する場合（クラスタ単位）

クラスタ名と `-all` オプションを指定して実行します。

`-cluster` オプションで指定したクラスタ内のすべての HCSC サーバに配備されているサービスアダプタが一括して開始されます（開始されていないビジネスプロセスおよびユーザ定義受付も同時にすべて開始されます）。

```
csccompostart -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -cluster <クラスタ名> -all
```

ビジネスプロセスおよびユーザ定義受付を開始しないでサービスアダプタだけを開始する場合は、サービスアダプタのサービス ID を指定します。

```
csccompostart -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -cluster <クラスタ名> -name <サービスアダプタのサービスID>
```

HCSC サーバに配備されているサービスアダプタを一括して開始する場合（HCSC サーバ単位）

HCSC サーバ名と `-all` オプションを指定して実行します。

`-csc` オプションで指定した HCSC サーバに配備されているサービスアダプタが

開始されます（開始されていないビジネスプロセスおよびユーザ定義受付も同時にすべて開始されます）。

```
cscocompostart -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名>
-all
```

ビジネスプロセスおよびユーザ定義受付を開始しないでサービスアダプタだけを開始する場合は、サービスアダプタのサービス ID を指定します。

```
cscocompostart -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名>
-name <サービスアダプタのサービスID>
```

cscutil コマンドの場合

運用環境で cscutil コマンドを実行します。-target オプションに compo を、また -operation オプションに start を指定します。

cscutil コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscutil（各種操作）」を参照してください。

cscutil コマンドの実行形式は、プロパティ定義ファイルを使用するかどうかによって異なります。

プロパティ定義ファイルを使用しない場合

-props オプションにサービスアダプタのサービス ID、HCSC サーバ名、J2EE サーバ名および種別を指定します。

```
cscutil -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -mng <Cosminexus Manager
名> -target compo -operation start -props "AdapterName=<サービスアダプタのサービス
ID>, CSCSrvName=<HCSCサーバ名>, J2EESrvName=<J2EEサーバ名>,
ServiceKind=serviceAdapter"
```

cscutil コマンドに指定する Cosminexus Manager 名、サービスアダプタのサービス ID、HCSC サーバ名および J2EE サーバ名は、cscrepls コマンドで確認できます。cscrepls コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscrepls（リポジトリ情報の表示）」を参照してください。

プロパティ定義ファイルを使用する場合

-propfile オプションにプロパティ定義ファイル名を指定します。プロパティ定義ファイルは、J2SE のプロパティファイル形式であらかじめ作成しておく必要があります。

```
cscutil -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -mng <Cosminexus Manager
名> -target compo -operation start -propfile <プロパティ定義ファイル名>
```

5.2.7 ビジネスプロセスを開始する

ビジネスプロセスの開始の前提条件と開始方法について次に説明します。

(1) 前提条件

ビジネスプロセスを開始するには、HCSC サーバが起動状態である必要があります。

HCSC サーバの状態の確認方法については、「5.2.17 HCSC サーバの情報を確認する」を参照してください。

(2) 開始方法

ビジネスプロセスを開始する方法を次に示します。

(a) 画面の場合

運用環境の画面を利用してビジネスプロセスを開始する手順を次に示します。

1. ツリービュー上で、開始するビジネスプロセスをダブルクリックします。
ダブルクリックしたビジネスプロセスの情報がエディタエリアに表示されます。
2. エディタエリアで稼働運用ページを選択します。
手順 1 で選択したビジネスプロセスの稼働運用に関する情報が表示されます。
ビジネスプロセスの稼働運用ページの詳細については、「8.4 稼働運用ページ」を参照してください。
3. 稼働運用ページに表示された内容を確認し、[開始] ボタンをクリックします。
ビジネスプロセスの開始を確認するダイアログが表示されます。
4. ダイアログに表示された内容を確認し、[OK] ボタンをクリックします。
ビジネスプロセスの開始処理が開始されます。開始処理中のログはコンソールビューに出力されます。
[キャンセル] ボタンをクリックした場合は、開始処理を実行しないで稼働運用ページに戻ります。
ビジネスプロセスの開始処理が完了すると、実行結果を示すダイアログが表示されます。
5. 実行結果を示すダイアログを確認します。

開始処理が成功した場合

[OK] ボタンをクリックして、稼働運用ページに戻ります。

稼働運用ページでは、ビジネスプロセスの稼働状態が「開始状態」になります。
また、[開始] ボタンが非活性化し、[停止] ボタンが活性化します。

開始処理が失敗した場合

ダイアログにエラーの内容が表示されます。詳細情報に表示されるメッセージ ID を参照して対処してください。

(b) コマンドの場合

ビジネスプロセスを開始するには、運用環境で `csccompostart` コマンドまたは `cscutil` コマンドを実行します。

`csccompostart` コマンドおよび `cscutil` コマンドは、次の場合に使用します。

- `csccompostart` コマンド
該当するリポジトリが存在する運用環境で、ビジネスプロセスを開始する場合。
- `cscutil` コマンド
該当するリポジトリがなく、`cscutil` が使用できる環境（例えば、JP1 で直接運用している実行環境）でビジネスプロセスを開始する場合。

`csccompostart` コマンドの場合

運用環境で `csccompostart` コマンドを実行します。

`csccompostart` コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「`csccompostart` (HCSC コンポーネントの開始)」を参照してください。

`csccompostart` コマンドの実行形式を次に示します。

クラスタ内のすべての HCSC サーバに配備されているビジネスプロセスを一括して開始する場合（クラスタ単位）

クラスタ名と `-all` オプションを指定して実行します。

`-cluster` オプションで指定したクラスタ内のすべての HCSC サーバに配備されているビジネスプロセスが一括して開始されます（開始されていないサービスアダプタおよびユーザ定義受付も同時にすべて開始されます）。

```
csccompostart -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -cluster <クラスタ名> -all
```

サービスアダプタおよびユーザ定義受付を開始しないでビジネスプロセスだけを開始する場合は、ビジネスプロセスのサービス ID を指定します。

```
csccompostart -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -cluster <クラスタ名> -name <ビジネスプロセスのサービスID>
```

HCSC サーバに配備されているビジネスプロセスを一括して開始する場合（HCSC サーバ単位）

HCSC サーバ名と `-all` オプションを指定して実行します。

`-csc` オプションで指定した HCSC サーバに配備されているビジネスプロセスが開始されます（開始されていないサービスアダプタおよびユーザ定義受付も同時にすべて開始されます）。

5. システム運用

```
cscocompostart -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名>
-all
```

サービスアダプタおよびユーザ定義受付を開始しないでビジネスプロセスだけを開始する場合は、ビジネスプロセスのサービス ID を指定します。

```
cscocompostart -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名>
-name <ビジネスプロセスのサービスID>
```

cscutil コマンドの場合

運用環境で cscutil コマンドを実行します。-target オプションに compo を、また -operation オプションに start を指定します。

cscutil コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscutil (各種操作)」を参照してください。

cscutil コマンドの実行形式は、プロパティ定義ファイルを使用するかどうかによって異なります。

プロパティ定義ファイルを使用しない場合

-props オプションにビジネスプロセスのサービス ID、HCSC サーバ名、J2EE サーバ名および種別を指定します。

```
cscutil -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -mng <Cosminexus Manager
名> -target compo -operation start -props "AdapterName=<ビジネスプロセスのサービス
ID>, CSCSrvName=<HCSCサーバ名>, J2EESrvName=<J2EEサーバ名>, ServiceKind=bp"
```

cscutil コマンドに指定する Cosminexus Manager 名、ビジネスプロセスのサービス ID、HCSC サーバ名および J2EE サーバ名は、cscrepls コマンドで確認できます。cscrepls コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscrepls (リポジトリ情報の表示)」を参照してください。

プロパティ定義ファイルを使用する場合

-profile オプションにプロパティ定義ファイル名を指定します。プロパティ定義ファイルは、J2SE のプロパティファイル形式であらかじめ作成しておく必要があります。

```
cscutil -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -mng <Cosminexus Manager
名> -target compo -operation start -profile <プロパティ定義ファイル名>
```

5.2.8 ユーザ定義受付を開始する

ユーザ定義受付の開始の前提条件と開始方法について次に説明します。

(1) 前提条件

ユーザ定義受付を開始するには、次の条件を満たしている必要があります。

- HCSC サーバが起動状態であること。
- ユーザ定義受付が定義されているビジネスプロセスが開始状態であること。

HCSC サーバの状態の確認方法については、「5.2.17 HCSC サーバの情報を確認する」を参照してください。

(2) 開始方法

ユーザ定義受付を開始する方法を次に示します。

(a) 画面の場合

運用環境の画面を利用してユーザ定義受付を開始する手順を次に示します。

1. ツリービュー上で、開始するユーザ定義受付をダブルクリックします。
ダブルクリックしたユーザ定義受付の情報がエディタエリアの稼働運用ページに表示されます。
ユーザ定義受付の稼働運用ページの詳細については、「8.4 稼働運用ページ」を参照してください。
2. 稼働運用ページに表示された内容を確認し、[開始] ボタンをクリックします。
ユーザ定義受付の開始を確認するダイアログが表示されます。
3. ダイアログに表示された内容を確認し、[OK] ボタンをクリックします。
ユーザ定義受付の開始処理が開始されます。開始処理中のログはコンソールビューに出力されます。
[キャンセル] ボタンをクリックした場合は、開始処理を実行しないで稼働運用ページに戻ります。
ユーザ定義受付の開始処理が完了すると、実行結果を示すダイアログが表示されません。
4. 実行結果を示すダイアログを確認します。

開始処理が成功した場合

[OK] ボタンをクリックして、稼働運用ページに戻ります。
稼働運用ページでは、ユーザ定義受付の状態が「開始状態」になります。また、[開始] ボタンが非活性化し、[停止] ボタンが活性化します。

開始処理が失敗した場合

ダイアログにエラーの内容が表示されます。詳細情報に表示されるメッセージ ID を参照して対処してください。

5. システム運用

(b) コマンドの場合

ユーザ定義受付を開始するには、運用環境で `cscrcptnstart` コマンド、`csccompostart` コマンド、または `cscutil` コマンドを実行します。

`cscrcptnstart` コマンド、`csccompostart` コマンド、および `cscutil` コマンドは、次の場合に使用します。

- `cscrcptnstart` コマンド
 - ユーザ定義受付および標準受付を一括して開始する場合に使用します。
 - HCSC サーバに配備されているユーザ定義受付を一括して開始する場合に使用します。
クラスタ単位で一括して開始することもできます。なお、特定のユーザ定義受付だけを開始することはできません。
 - 該当するリポジトリが存在する運用環境で、ユーザ定義受付を開始する場合に使用します。
- `csccompostart` コマンド
 - サービスアダプタ、ビジネスプロセス、およびユーザ定義受付を一括して開始する場合に使用します。
ユーザ定義受付だけを一括で開始することはできません。
 - HCSC サーバに配備されている特定のユーザ定義受付を開始する場合に使用します。
クラスタ単位で特定のユーザ定義受付を開始することもできます。
 - 該当するリポジトリが存在する運用環境で、ユーザ定義受付を開始する場合に使用します。
- `cscutil` コマンド
該当するリポジトリがなく、`cscutil` が使用できる環境（例えば、JP1 で直接運用している実行環境）でユーザ定義受付を開始する場合に使用します。

`cscrcptnstart` コマンドの場合

運用環境で `cscrcptnstart` コマンドを実行します。

`cscrcptnstart` コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「`cscrcptnstart`（標準受付およびユーザ定義受付の開始）」を参照してください。

`cscrcptnstart` コマンドの実行形式を次に示します。

クラスタ内のすべての HCSC サーバに配備されているユーザ定義受付を一括して開始する場合（クラスタ単位）

クラスタ名を指定して実行します。

`-cluster` オプションで指定したクラスタ内のすべての HCSC サーバに配備されているユーザ定義受付が一括して開始されます（開始されていない標準受付も同時にすべて開始されます）。

```
cscrcptnstart -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -cluster <クラスタ名>
```

標準受付を開始しないでユーザ定義受付だけを開始する場合は、`-userdef` オプションを指定します。

```
cscrcptnstart -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -cluster <クラスタ名> -userdef
```

HCSC サーバに配備されているユーザ定義受付を一括して開始する場合（HCSC サーバ単位）

HCSC サーバ名を指定して実行します。

`-csc` オプションで指定した HCSC サーバに配備されているユーザ定義受付が開始されます（開始されていない標準受付も同時にすべて開始されます）。

```
cscrcptnstart -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名>
```

標準受付を開始しないでユーザ定義受付だけを開始する場合は、`-userdef` オプションを指定します。

```
cscrcptnstart -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名> -userdef
```

`cscocompostart` コマンドの場合

運用環境で `cscocompostart` コマンドを実行します。

`cscocompostart` コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「`cscocompostart`（HCSC コンポーネントの開始）」を参照してください。

`cscocompostart` コマンドの実行形式を次に示します。

クラスタ内のすべての HCSC サーバに配備されているユーザ定義受付を一括して開始する場合（クラスタ単位）

クラスタ名と `-all` オプションを指定して実行します。

`-cluster` オプションで指定したクラスタ内のすべての HCSC サーバに配備されているユーザ定義受付が一括して開始されます（開始されていないサービスアダプタおよびビジネスプロセスも同時にすべて開始されます）。

```
cscocompostart -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -cluster <クラスタ名> -all
```

5. システム運用

HCSC サーバに配備されているユーザ定義受付を一括して開始する場合（HCSC サーバ単位）

HCSC サーバ名と `-all` オプションを指定して実行します。

`-csc` オプションで指定した HCSC サーバに配備されているユーザ定義受付が開始されます（開始されていないサービスアダプタおよびビジネスプロセスも同時にすべて開始されます）。

```
csccompostart -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名> -all
```

クラスタ内のすべての HCSC サーバに配備されている特定のユーザ定義受付を開始する場合

クラスタ名とユーザ定義受付の受付 ID を指定して実行します。

```
csccompostart -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -cluster <クラスタ名> -name <ユーザ定義受付の受付ID>
```

HCSC サーバに配備されている特定のユーザ定義受付を開始する場合

HCSC サーバ名とユーザ定義受付の受付 ID を指定して実行します。

```
csccompostart -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名> -name <ユーザ定義受付の受付ID>
```

`cscutil` コマンドの場合

運用環境で `cscutil` コマンドを実行します。`-target` オプションに `compo_urecp` を、また `-operation` オプションに `start` を指定します。

`cscutil` コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「`cscutil`（各種操作）」を参照してください。

`cscutil` コマンドの実行形式は、プロパティ定義ファイルを使用するかどうかによって異なります。

プロパティ定義ファイルを使用しない場合

`-props` オプションに HCSC サーバ名および J2EE サーバ名を指定します。

```
cscutil -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -mng <Cosminexus Manager名> -target compo_urecp -operation start -props "CSCSrvName=<HCSCサーバ名>, J2EESrvName=<J2EEサーバ名>"
```

`cscutil` コマンドに指定する Cosminexus Manager 名、HCSC サーバ名および J2EE サーバ名は、`cscrepls` コマンドで確認できます。`cscrepls` コマンドの詳細

については、「10. コマンド」の「cscrepls (リポジトリ情報の表示)」を参照してください。

プロパティ定義ファイルを使用する場合

-propfile オプションにプロパティ定義ファイル名を指定します。プロパティ定義ファイルは、J2SE のプロパティファイル形式であらかじめ作成しておく必要があります。

```
cscutil -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -mng <Cosminexus Manager名> -target compo_urecp -operation start -propfile <プロパティ定義ファイル名>
```

5.2.9 連携受付を開始する

連携受付の開始の前提条件と開始方法について次に説明します。

(1) 前提条件

連携受付を開始するには、HCSC サーバが起動状態である必要があります。

HCSC サーバの状態の確認方法については、「5.2.17 HCSC サーバの情報を確認する」を参照してください。

(2) 開始方法

連携受付を開始する方法を次に示します。

(a) 画面の場合

運用環境の画面を利用して連携受付を開始する手順を次に示します。

1. ツリービュー上で、連携受付を開始する HCSC サーバをダブルクリックします。
ダブルクリックした HCSC サーバの情報がエディタエリアに表示されます。
2. エディタエリアで [稼働運用] タブを選択します。
稼働運用ページに、手順 1 で選択した HCSC サーバの稼働運用に関する情報が表示されます。
HCSC サーバの稼働運用ページの詳細については、「8.4 稼働運用ページ」を参照してください。
3. 稼働運用ページに表示された内容を確認し、「連携受付」の [開始] ボタンをクリックします。
連携受付の開始を確認するダイアログが表示されます。
4. ダイアログに表示された内容を確認し、[OK] ボタンをクリックします。
連携受付の開始処理が開始されます。開始処理中のログはコンソールビューに出力されます。
[キャンセル] ボタンをクリックした場合は、開始処理を実行しないで稼働運用ページに戻ります。

5. システム運用

連携受付の開始処理が完了すると、実行結果を示すダイアログが表示されます。

5. 実行結果を示すダイアログを確認します。

開始処理が成功した場合

[OK] ボタンをクリックして、稼働運用ページに戻ります。

稼働運用ページでは、連携受付の稼働状態が「開始状態」になります。また、[開始] ボタンが非活性化し、[通常停止] ボタンおよび [計画停止] ボタンが活性化します。

開始処理が失敗した場合

ダイアログにエラーの内容が表示されます。詳細情報に表示されるメッセージ ID を参照して対処してください。

(b) コマンドの場合

連携受付を開始するには、運用環境で `cscutil` コマンドを実行します。`-target` オプションに `connect_service` を、また `-operation` オプションに `start` を指定します。

`cscutil` コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「`cscutil` (各種操作)」を参照してください。

`cscutil` コマンドの実行形式は、プロパティ定義ファイルを使用するかどうかによって異なります。

プロパティ定義ファイルを使用しない場合

`-props` オプションに HCSC サーバ名および J2EE サーバ名を指定します。

```
cscutil -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -mng <Cosminexus Manager 名> -target connect_service -operation start -props "CSCSrvName=<HCSCサーバ名>,J2EESrvName=<J2EEサーバ名>"
```

`cscutil` コマンドに指定する Cosminexus Manager 名、HCSC サーバ名、および J2EE サーバ名は、`cscrepls` コマンドで確認できます。`cscrepls` コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「`cscrepls` (リポジトリ情報の表示)」を参照してください。

プロパティ定義ファイルを使用する場合

`-propfile` オプションにプロパティ定義ファイル名を指定します。プロパティ定義ファイルは、J2SE のプロパティファイル形式であらかじめ作成しておく必要があります。

```
cscutil -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -mng <Cosminexus Manager 名> -target connect_service -operation start -propfile <プロパティ定義ファイル名>
```

5.2.10 連携を開始する

連携の開始の前提条件と開始方法について次に説明します。

(1) 前提条件

連携を開始するには、次の条件を満たす必要があります。

- 連携が正しくセットアップされていること
連携は、連携対象の双方からセットアップされている必要があります。連携のセットアップ方法については、「3.1.6 連携をセットアップする」を参照してください。
- 連携元 HCSC サーバと連携先クラスタが起動状態であること
- 連携元 HCSC サーバと連携先クラスタの連携受付が開始状態であること
HCSC サーバおよび連携受付の状態の確認方法については、「5.2.17 HCSC サーバの情報を確認する」を参照してください。

(2) 開始方法

連携を開始する方法を次に示します。

! 注意事項

連携を開始する場合、連携対象の一方から開始処理を実施すると双方向の連携が開始されません。

(a) 画面の場合

運用環境の画面を利用して連携を開始する手順を次に示します。

1. ツリービュー上で、連携を開始する HCSC サーバをダブルクリックします。
ダブルクリックした HCSC サーバの情報がエディタエリアに表示されます。
2. エディタエリアで [稼働運用] タブを選択します。
稼働運用ページに、手順 1 で選択した HCSC サーバの連携に関する情報が表示されます。
HCSC サーバの稼働運用ページの詳細については、「8.4 稼働運用ページ」を参照してください。
3. 稼働運用ページ内の [サーバ間連携] タブを選択します。
4. 連携表示テーブルから開始するサーバ間連携を選択し、「サーバ間連携」の [開始] ボタンをクリックします。
連携の開始を確認するダイアログが表示されます。
5. ダイアログに表示された内容を確認し、[OK] ボタンをクリックします。
連携の開始処理が開始されます。開始処理中のログはコンソールビューに出力されます。
[キャンセル] ボタンをクリックした場合は、開始処理を実行しないで稼働運用ペー

5. システム運用

ジに戻ります。

連携の開始処理が完了すると、実行結果を示すダイアログが表示されます。

6. 実行結果を示すダイアログを確認します。

開始処理が成功した場合

[OK] ボタンをクリックして、稼働運用ページに戻ります。

稼働運用ページでは、連携の状態が「連携開始状態」になります。また、[開始] ボタンが非活性化し、[停止] ボタンが活性化します。

開始処理が失敗した場合

ダイアログにエラーの内容が表示されます。詳細情報に表示されるメッセージ ID を参照して対処してください。

(b) コマンドの場合

連携を開始するには、運用環境で cscutil コマンドを実行します。-target オプションに connect を、また -operation オプションに start を指定します。

cscutil コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscutil (各種操作)」を参照してください。

cscutil コマンドの実行形式は、プロパティ定義ファイルを使用するかどうかによって異なります。

プロパティ定義ファイルを使用しない場合

-props オプションに連携元 HCSC サーバ名および連携先クラスタ名を指定します。

```
cscutil -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -mng <Cosminexus Manager  
名> -target connect -operation start -props "CSCSrvName=<連携元HCSCサーバ名>,  
ConnectClusterName=<連携先クラスタ名>"
```

cscutil コマンドに指定する Cosminexus Manager 名、連携元 HCSC サーバ名および連携先クラスタ名は、cscrepls コマンドで確認できます。cscrepls コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscrepls (リポジトリ情報の表示)」を参照してください。

プロパティ定義ファイルを使用する場合

-propfile オプションにプロパティ定義ファイル名を指定します。プロパティ定義ファイルは、J2SE のプロパティファイル形式であらかじめ作成しておく必要があります。

```
cscutil -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -mng <Cosminexus Manager  
名> -target connect -operation start -propfile <プロパティ定義ファイル名>
```

5.2.11 標準受付を開始する

標準受付の開始の前提条件と開始方法について次に説明します。

(1) 前提条件

標準受付を開始するには、HCSC サーバが起動状態である必要があります。

HCSC サーバの状態の確認方法については、「5.2.17 HCSC サーバの情報を確認する」を参照してください。

(2) 開始方法

標準受付を開始する方法を次に示します。

！ 注意事項

標準受付が開始できなかった場合、エラーになった原因を取り除いたあと、標準受付を強制停止してください。標準受付を停止状態にしたあとで、再度標準受付を開始して運用を再開してください。標準受付を強制停止する方法については、「5.2.29 標準受付を停止する」を参照してください。

(a) 画面の場合

運用環境の画面を利用して標準受付を開始する手順を次に示します。

1. ツリービュー上で、標準受付を開始する HCSC サーバをダブルクリックします。
ダブルクリックした HCSC サーバの情報がエディタエリアに表示されます。
2. エディタエリアで [稼働運用] タブを選択します。
稼働運用ページに、手順 1 で選択した HCSC サーバの稼働運用に関する情報が表示されます。
HCSC サーバの稼働運用ページの詳細については、「8.4 稼働運用ページ」を参照してください。
3. 稼働運用ページに表示された内容を確認し、「標準受付」の [開始] ボタンをクリックします。
標準受付の開始を確認するダイアログが表示されます。
4. ダイアログに表示された内容を確認し、[OK] ボタンをクリックします。
標準受付の開始処理が開始されます。開始処理中のログはコンソールビューに出力されます。
[キャンセル] ボタンをクリックした場合は、開始処理を実行しないで稼働運用ページに戻ります。
標準受付の開始処理が完了すると、実行結果を示すダイアログが表示されます。
5. 実行結果を示すダイアログを確認します。

5. システム運用

開始処理が成功した場合

[OK] ボタンをクリックして、稼働運用ページに戻ります。

稼働運用ページでは、標準受付の稼働状態が「開始状態」になります。また、[開始] ボタンが非活性化し、[通常停止] ボタンおよび [計画停止] ボタンが活性化します。

開始処理が失敗した場合

ダイアログにエラーの内容が表示されます。詳細情報に表示されるメッセージ ID を参照して対処してください。

(b) コマンドの場合

標準受付を開始するには、運用環境で `cscrcptnstart` コマンドまたは `cscutil` コマンドを実行します。

`cscrcptnstart` コマンドおよび `cscutil` コマンドは、次の場合に使用します。

- `cscrcptnstart` コマンド
該当するリポジトリが存在する運用環境で、標準受付を開始する場合。
- `cscutil` コマンド
該当するリポジトリがなく、`cscutil` が使用できる環境（例えば、JP1 で直接運用している実行環境）で標準受付を開始する場合。

`cscrcptnstart` コマンドの場合

運用環境で `cscrcptnstart` コマンドを実行します。

`cscrcptnstart` コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「`cscrcptnstart`（標準受付およびユーザ定義受付の開始）」を参照してください。

`cscrcptnstart` コマンドの実行形式を次に示します。

クラスタ内のすべての HCSC サーバの標準受付を一括して開始する場合（クラスタ単位）

クラスタ名を指定して実行します。

`-cluster` オプションで指定したクラスタ内のすべての HCSC サーバの標準受付が一括して開始されます（開始されていないユーザ定義受付も同時にすべて開始されます）。

```
cscrcptnstart -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -cluster <クラスタ名>
```

ユーザ定義受付を開始しないで標準受付だけを開始する場合は、`-standard` オプションを指定します。

```
cscrcptnstart -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -cluster <クラスター名> -standard
```

HCSC サーバの標準受付を一括して開始する場合（HCSC サーバ単位）

HCSC サーバ名を指定して実行します。

-csc オプションで指定した HCSC サーバの標準受付が開始されます（開始されていないユーザ定義受付も同時にすべて開始されます）。

```
cscrcptnstart -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名>
```

ユーザ定義受付を開始しないで標準受付だけを開始する場合は、-standard オプションを指定します。

```
cscrcptnstart -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名> -standard
```

cscutil コマンドの場合

運用環境で cscutil コマンドを実行します。-target オプションに request_service を、また -operation オプションに start を指定します。

cscutil コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscutil（各種操作）」を参照してください。

cscutil コマンドの実行形式は、プロパティ定義ファイルを使用するかどうかによって異なります。

プロパティ定義ファイルを使用しない場合

-props オプションに HCSC サーバ名および J2EE サーバ名を指定します。

```
cscutil -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -mng <Cosminexus Manager名> -target request_service -operation start -props "CSCSrvName=<HCSCサーバ名>, J2EESrvName=<J2EEサーバ名>"
```

cscutil コマンドに指定する Cosminexus Manager 名、HCSC サーバ名および J2EE サーバ名は、cscrepls コマンドで確認できます。cscrepls コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscrepls（リポジトリ情報の表示）」を参照してください。

プロパティ定義ファイルを使用する場合

-propfile オプションにプロパティ定義ファイル名を指定します。プロパティ定義ファイルは、J2SE のプロパティファイル形式であらかじめ作成しておく必要

があります。

```
cscutil -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -mng <Cosminexus Manager  
名> -target request_service -operation start -propfile <プロパティ定義ファイル名>
```

5.2.12 データベースの状態を確認する

データベースの状態を参照する方法について次に説明します。

(1) 参照方法

データベースの状態を参照する方法を次に示します。

(a) HiRDB の場合

HiRDB の状態を参照するには、データベースサーバで `pdls` コマンドを実行します。

`pdls` コマンドの詳細については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」を参照してください。

(b) Oracle の場合

Oracle の状態を参照する方法については、Oracle 社が発行するドキュメントを参照してください。

5.2.13 PRF の状態を確認する

PRF の状態を参照する前提条件と参照方法について次に説明します。

(1) 前提条件

PRF の状態を参照するには、HCSC-Manager 定義ファイルに PRF が登録されている必要があります。詳細については、「5.2.1(1) 運用する前の準備」の論理サーバの登録についての内容を参照してください。

(2) 参照方法

PRF の状態を参照するには、運用環境で `cscstatus` コマンドを実行します。`-type` オプションに「system」を指定して実行します。

`cscstatus` コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「`cscstatus (状態表示)`」を参照してください。

`cscstatus` コマンドの実行形式を次に示します。


```
cscstatus -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名>
-type system
```

5.2.14 Hitachi Web Server の状態を確認する

Hitachi Web Server の状態を参照する前提条件と参照方法について次に説明します。

(1) 前提条件

Hitachi Web Server の状態を参照するには、HCSC-Manager 定義ファイルに Hitachi Web Server が登録されている必要があります。詳細については、「5.2.1(1) 運用する前の準備」の論理サーバの登録についての内容を参照してください。

(2) 参照方法

Hitachi Web Server の状態を参照するには、運用環境で cscstatus コマンドを実行します。-type オプションに「system」を指定して実行します。

cscstatus コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscstatus (状態表示)」を参照してください。

cscstatus コマンドの実行形式を次に示します。

```
cscstatus -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名>
-type system
```

5.2.15 Cosminexus Manager の状態を確認する

Cosminexus Manager には、Management Server と運用管理エージェントの二つのプロセスがあります。それぞれの状態を参照する方法について次に説明します。

(1) 参照方法

(a) Management Server の参照方法

Management Server の状態を参照するには、J2EE サーバ稼働マシンで mnngsvrutil コマンドを実行します。

mnngsvrutil コマンドの詳細については、マニュアル「Cosminexus リファレンス コマンド編」を参照してください。

(b) 運用管理エージェントの参照方法

運用管理エージェントの状態を参照するには、J2EE サーバ稼働マシンで adminagentcheck コマンドを実行します。

5. システム運用

adminagentcheck コマンドの詳細については、マニュアル「Cosminexus リファレンス コマンド編」を参照してください。

5.2.16 HCSC サーバのセットアップ情報を確認する

HCSC サーバのセットアップ情報を参照する前提条件と参照方法について次に説明します。

(1) 前提条件

HCSC サーバのセットアップ情報を参照するには、HCSC サーバが停止状態または起動状態である必要があります。

HCSC サーバの状態の確認方法については、「5.2.17 HCSC サーバの情報を確認する」を参照してください。

(2) 参照方法

HCSC サーバのセットアップ情報を参照するには、運用環境で cscutil コマンドを実行します。-target オプションに server を、また -operation オプションに get_setup_info を指定します。cscutil コマンドを実行すると、HCSC サーバセットアップ定義ファイルの内容が表示されます。

HCSC サーバセットアップ定義ファイルの詳細については、「9. 定義ファイル」の「HCSC サーバセットアップ定義ファイル」を参照してください。

また、cscutil コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscutil (各種操作)」を参照してください。

cscutil コマンドの実行形式は、プロパティ定義ファイルを使用するかどうかによって異なります。

プロパティ定義ファイルを使用しない場合

-props オプションに HCSC サーバ名を指定します。

```
cscutil -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -mng <Cosminexus Manager 名> -target server -operation get_setup_info -props "CSCSrvName=<HCSCサーバ名>"
```

cscutil コマンドに指定する Cosminexus Manager 名および HCSC サーバ名は、cscrepls コマンドで確認できます。cscrepls コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscrepls (リポトリ情報の表示)」を参照してください。

プロパティ定義ファイルを使用する場合

-profile オプションにプロパティ定義ファイル名を指定します。プロパティ定義ファイルは、J2SE のプロパティファイル形式であらかじめ作成しておく必要があります。

```
cscutil -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -mng <Cosminexus Manager
名> -target server -operation get_setup_info -propfile <プロパティ定義ファイル名>
```

5.2.17 HCSC サーバの情報を確認する

HCSC サーバの情報は、画面とコマンドで参照できる情報が異なります。参照できる情報の詳細については、「8. 運用環境で使用する画面」または「10. コマンド」の該当する画面、コマンドの内容を参照してください。

HCSC サーバの情報を参照する前提条件と参照方法について次に説明します。

(1) 前提条件

HCSC サーバの情報を参照するには、HCSC サーバが構築後である必要があります。

(2) 参照方法

HCSC サーバの情報を参照する方法を次に示します。

(a) 画面の場合

ツリービュー上で、情報を参照する HCSC サーバをダブルクリックします。ダブルクリックした HCSC サーバの情報は、エディタエリアに表示されます。エディタエリアの基本情報ページおよび稼働運用ページを表示して、HCSC サーバの情報を確認できます。

HCSC サーバの基本情報ページおよび稼働運用ページの詳細については、「8.2 基本情報ページ」および「8.4 稼働運用ページ」を参照してください。

なお、HCSC サーバの稼働状態については、ツリービューに表示されるアイコンで確認することもできます。表示されるアイコンの詳細については、「8.1 画面構成」を参照してください。

(b) コマンドの場合

HCSC サーバの情報を参照するには、cscstatus コマンド、csmlsstate コマンド、または cscutil コマンドを実行します。

cscstatus コマンドおよび cscutil コマンドは運用環境から、csmlsstate コマンドは実行環境から実行できます。各コマンドは、次の場合に使用します。

- cscstatus コマンド
HCSC サーバの動的情報（稼働状況）を参照する場合に使用します。
- csmlsstate コマンド
HCSC サーバの動的情報（稼働状況）、および静的情報（HCSC サーバランタイム定義ファイルで設定した定義情報）を参照する場合に使用します。
ユーザが設定した情報、または実際の動作に反映されている情報が定義情報として出

5. システム運用

力されます。ユーザが設定した情報は、HCSC サーバの起動時、または標準受付もしくはユーザ定義受付の開始時に実際の動作に反映されます。

次のどちらかの場合には、実際の動作に反映されていない定義情報が出力されます。

- HCSC サーバの起動中に定義情報を設定し、そのあと HCSC サーバを再起動しない場合
- 標準受付またはユーザ定義受付の開始中に定義情報を設定し、そのあと標準受付またはユーザ定義受付を再開しない場合
- cscutil コマンド

HCSC サーバの静的情報（HCSC サーバセットアップ定義ファイル、または HCSC サーバランタイム定義ファイルで設定した定義情報）を参照する場合に使用します。実際の動作に反映されている情報が定義情報として出力されます。ユーザが設定した情報は、HCSC サーバの起動時、または標準受付もしくはユーザ定義受付の開始時に反映されます。

次のどちらかの場合には、前回 HCSC サーバを起動したとき、または標準受付もしくはユーザ定義受付を開始したときに設定した情報が出力されます。

- HCSC サーバの起動中に定義情報を設定し、そのあと HCSC サーバを再起動しない場合
- 標準受付またはユーザ定義受付の開始中に定義情報を設定し、そのあと標準受付またはユーザ定義受付を再開しない場合

cscstatus コマンドの場合

運用環境で cscstatus コマンドを実行します。

cscstatus コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscstatus（状態表示）」を参照してください。

cscstatus コマンドの実行形式を次に示します。

すべての HCSC サーバの情報を参照する場合
オプションを指定しないで実行します。

```
cscstatus -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード>
```

特定の HCSC サーバの論理サーバの情報を参照する場合

-csc オプションと -type オプションを指定して実行します。-type オプションには「system」を指定します。

```
cscstatus -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名>  
-type system
```

特定の HCSC サーバの標準受付、およびユーザ定義受付の情報を参照する場合

-csc オプションと -type オプションを指定して実行します。-type オプションに

は「reception」を指定します。

```
cscstatus -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名>
-type reception
```

特定の HCSC サーバの HCSC コンポーネントの情報を参照する場合

-csc オプションと -type オプションを指定して実行します。-type オプションには「compo」を指定します。

```
cscstatus -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名>
-type compo
```

csmlsstate コマンドの場合

実行環境で csmlsstate コマンドを実行します。情報を参照する HCSC サーバの名称を指定して実行します。

csmlsstate コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「csmlsstate (HCSC サーバの状態の表示)」を参照してください。

csmlsstate コマンドの実行形式を次に示します。

ユーザが設定した情報を参照する場合

情報を参照する HCSC サーバの名称と -d オプションを指定して実行します。-d オプションには「prop」を指定します。

```
csmlsstate <HCSCサーバ名> -d prop
```

実際の動作に反映されている情報を参照する場合

情報を参照する HCSC サーバの名称と -d オプションを指定して実行します。-d オプションには「runtime」を指定します。

```
csmlsstate <HCSCサーバ名> -d runtime
```

cscutil コマンドの場合

運用環境で cscutil コマンドを実行します。-target オプションに server を、また -operation オプションに get_info を指定します。

cscutil コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscutil (各種操作)」を参照してください。

cscutil コマンドの実行形式は、プロパティ定義ファイルを使用するかどうかによっ

5. システム運用

て異なります。

プロパティ定義ファイルを使用しない場合

-props オプションに HCSC サーバ名を指定します。

```
cscutil -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -mng <Cosminexus Manager 名> -target server -operation get_info -props "CSCSrvName=<HCSCサーバ名>"
```

cscutil コマンドに指定する Cosminexus Manager 名および HCSC サーバ名は、cscrepls コマンドで確認できます。cscrepls コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscrepls (リポジトリ情報の表示)」を参照してください。

プロパティ定義ファイルを使用する場合

-propfile オプションにプロパティ定義ファイル名を指定します。プロパティ定義ファイルは、J2SE のプロパティファイル形式であらかじめ作成しておく必要があります。

```
cscutil -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -mng <Cosminexus Manager 名> -target server -operation get_info -propfile <プロパティ定義ファイル名>
```

コマンド実行時の出力情報

コマンド実行時の出力情報と意味を次の表に示します。なお、次の表に示す出力情報以外の出力情報はトラブルシューティング用の保守情報です。

表 5-1 HCSC サーバの情報を参照するコマンドの出力情報

出力される項目	出力される内容
server-status	HCSC サーバの状態が出力されます。 <ul style="list-style-type: none">• active (起動状態)• inactive (停止状態)• starting (起動処理中)• stopping (停止処理中)
request-service-status	標準受付の状態が出力されます。なお、HCSC サーバが停止している場合は、表示されません。 <ul style="list-style-type: none">• active (開始状態)• inactive (停止状態)• starting (開始処理中)• startfailed (開始失敗状態)• stopping (停止処理中)• stopfailed (停止失敗状態)

出力される項目	出力される内容
connect-service-status	<p>連携受付の状態が出力されます。なお、HCSC サーバが停止している場合は、表示されません。</p> <ul style="list-style-type: none"> • active (開始状態) • inactive (停止状態) • starting (開始処理中) • startfailed (開始失敗状態) • stopping (停止処理中) • stopfailed (停止失敗状態)

5.2.18 HCSC サーバのリソース稼働情報を確認する

HCSC サーバのリソース稼働情報に関する情報は、画面とコマンドで参照できます。画面とコマンドで参照できる情報は同じです。参照できる情報の詳細については、「8. 運用環境で使用する画面」または「10. コマンド」の該当する画面、コマンドの内容を参照してください。

リソースの稼働情報を確認することで、リソースが正常な範囲内で使用されているかをチェックできます。また、標準受付、ユーザ定義受付、および HCSC コンポーネントを停止する前に、これらを安全に停止できるかどうかをチェックできます。

稼働情報は、実行環境からデフォルト値では 60 秒ごとに HCSC サーバに通知されます。稼働情報が HCSC サーバに通知されると、画面およびコマンドで表示される情報が更新されます。稼働情報が HCSC サーバに通知される間隔を変更したい場合は、次に示すマニュアルを参照してください。

運用環境ポータルから変更する場合

マニュアル「Cosminexus 運用管理操作ガイド」の稼働情報監視の設定 (J2EE サーバ) に関する内容を参照してください。

Smart Composer 機能を使って変更する場合

マニュアル「Cosminexus システム構築ガイド」の稼働情報ファイルの取得とイベント発行の設定に関する内容を参照してください。

なお、リソース稼働情報は、統計情報として参照できます。リソース稼働情報の統計情報の参照方法については、「付録 E HCSC サーバのリソース稼働情報の統計情報」を参照してください。

HCSC サーバのリソース稼働情報を確認する際の前提条件と参照方法について次に説明します。

(1) 前提条件

HCSC サーバのリソース稼働情報を確認するには、HCSC サーバがセットアップ済みである必要があります。

HCSC サーバの状態の確認方法については、「5.2.17 HCSC サーバの情報を確認する」

5. システム運用

を参照してください。

(2) 参照方法

HCSC サーバのリソース稼働情報を確認する方法を次に示します。

(a) 画面の場合

ツリービュー上で、リソース稼働情報を確認する HCSC サーバをダブルクリックします。ダブルクリックした HCSC サーバの情報は、エディタエリアに表示されます。エディタエリアで [稼働確認] タブを選択します。HCSC サーバのリソース稼働情報に関する情報が表示されます。

HCSC サーバの稼働確認ページの詳細については、「8.5 稼働確認ページ」を参照してください。

(b) コマンドの場合

HCSC サーバのリソース稼働情報を確認するには、運用環境で `cscresinfo` コマンドを実行します。

`cscresinfo` コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「`cscresinfo` (リソース稼働情報の表示)」を参照してください。

5.2.19 連携情報を確認する

連携に関する情報は、画面とコマンドで参照できる情報が異なります。参照できる情報の詳細については、「8. 運用環境で使用する画面」または「10. コマンド」の該当する画面、コマンドの内容を参照してください。

連携情報の参照の前提条件と参照方法について次に説明します。

(1) 前提条件

連携情報を参照するには、連携元 HCSC サーバが起動状態である必要があります。

HCSC サーバの状態の確認方法については、「5.2.17 HCSC サーバの情報を確認する」を参照してください。

(2) 参照方法

連携情報を参照する方法を次に示します。

(a) 画面の場合

ツリービュー上で、連携元の HCSC サーバをダブルクリックします。ダブルクリックした HCSC サーバの情報は、エディタエリアに表示されます。エディタエリアの基本情報ページでは、連携先の HCSC サーバ名が参照できます。また、エディタエリアの稼働運用ページの [サーバ間連携] タブを表示すると、連携の状態を参照できます。

HCSC サーバの基本情報ページおよび稼働運用ページの詳細については、「8.2 基本情報ページ」および「8.4 稼働運用ページ」を参照してください。

(b) コマンドの場合

連携の情報を参照するには、運用環境で `cscutil` コマンドを実行します。`-target` オプションに `connect` を、また `-operation` オプションに `get_info` を指定します。

`cscutil` コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「`cscutil` (各種操作)」を参照してください。

`cscutil` コマンドの実行形式は、プロパティ定義ファイルを使用するかどうかによって異なります。

プロパティ定義ファイルを使用しない場合

`-props` オプションに連携元 HCSC サーバ名および連携先クラスタ名を指定します。

```
cscutil -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -mng <Cosminexus Manager 名> -target connect -operation get_info -props "CSCSrvName=<連携元HCSCサーバ名>, ConnectClusterName=<連携先クラスタ名>"
```

`cscutil` コマンドに指定する Cosminexus Manager 名、連携元 HCSC サーバ名および連携先クラスタ名は、`cscrepls` コマンドで確認できます。`cscrepls` コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「`cscrepls` (リポジトリ情報の表示)」を参照してください。

プロパティ定義ファイルを使用する場合

`-propfile` オプションにプロパティ定義ファイル名を指定します。プロパティ定義ファイルは、J2SE のプロパティファイル形式であらかじめ作成しておく必要があります。

```
cscutil -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -mng <Cosminexus Manager 名> -target connect -operation get_info -propfile <プロパティ定義ファイル名>
```

5.2.20 サービスアダプタの情報を確認する

サービスアダプタに関する情報は、画面とコマンドで参照できる情報が異なります。参照できる情報の詳細については、「8. 運用環境で使用する画面」または「10. コマンド」の該当する画面、コマンドの内容を参照してください。

サービスアダプタの情報を参照するための前提条件と参照方法について次に説明します。

(1) 前提条件

サービスアダプタの情報を参照するには、HCSC サーバが起動状態である必要があります。

5. システム運用

HCSC サーバの状態の確認方法については、「5.2.17 HCSC サーバの情報を確認する」を参照してください。

(2) 参照方法

サービスアダプタの情報を参照する方法を次に示します。

(a) 画面の場合

ツリービュー上で、サービスアダプタをダブルクリックします。ダブルクリックしたサービスアダプタの情報は、エディタエリアに表示されます。エディタエリアの稼働運用ページで、サービスアダプタの情報が参照できます。

サービスアダプタの稼働運用ページの詳細については、「8.4 稼働運用ページ」を参照してください。

なお、サービスアダプタの稼働状態については、ツリービューに表示されるアイコンで確認することもできます。表示されるアイコンの詳細については、「8.1 画面構成」を参照してください。

(b) コマンドの場合

サービスアダプタの情報を参照するには、`cscstatus` コマンド、`csmlslocation` コマンド、または `cscutil` コマンドを実行します。

`cscstatus` コマンドおよび `cscutil` コマンドは運用環境から、`csmlslocation` コマンドは実行環境から実行できます。各コマンドは、次の場合に使用します。

- `cscstatus` コマンド
サービスアダプタの動的情報（稼働状況）、サービスアダプタのサービス ID、および更新時間を参照する場合に使用します。
- `csmlslocation` コマンド
サービスアダプタの動的情報（稼働状況）、および静的情報（定義情報）を参照する場合に使用します。
- `cscutil` コマンド
サービスアダプタの静的情報（定義情報）を参照する場合に使用します。

`cscstatus` コマンドの場合

運用環境で `cscstatus` コマンドを実行します。`-csc` オプションと `-type` オプションを指定して実行します。`-type` オプションには「`compo`」を指定します。

`cscstatus` コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「`cscstatus`（状態表示）」を参照してください。

`cscstatus` コマンドの実行形式を次に示します。

```
cscstatus -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名>
-type compo
```

csmlslocation コマンドの場合

実行環境で csmlslocation コマンドを実行します。情報を参照するサービスアダプタが配備されている HCSC サーバの名称と、-k オプションに adp を指定して実行します。

csmlslocation コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「csmlslocation (サービスアダプタまたはビジネスプロセスの情報の表示)」を参照してください。csmlslocation コマンドの実行形式を次に示します。

```
csmlslocation <HCSCサーバ名> -k adp
```

なお、-k オプションの代わりに -all オプションを指定すると、HCSC サーバに登録されているすべての HCSC コンポーネント（およびサービスグループ）の情報を参照できます。

cscutil コマンドの場合

運用環境で cscutil コマンドを実行します。-target オプションに compo を、また -operation オプションに get_adapter_info を指定します。

cscutil コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscutil (各種操作)」を参照してください。

cscutil コマンドの実行形式は、プロパティ定義ファイルを使用するかどうかによって異なります。

プロパティ定義ファイルを使用しない場合

-props オプションに HCSC サーバ名およびサービスアダプタのサービス ID を指定します。

```
cscutil -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -mng <Cosminexus Manager
名> -target compo -operation get_adapter_info -props "CSCSrvName=<HCSCサーバ名>,
AdapterName=<サービスアダプタのサービスID>"
```


cscutil コマンドに指定する Cosminexus Manager 名、HCSC サーバ名およびサービスアダプタのサービス ID は、cscrepls コマンドで確認できます。

cscrepls コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscrepls (リポジット情報の表示)」を参照してください。

プロパティ定義ファイルを使用する場合

-propfile オプションにプロパティ定義ファイル名を指定します。プロパティ定義ファイルは、J2SE のプロパティファイル形式であらかじめ作成しておく必要があります。

```
cscutil -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -mng <Cosminexus Manager 名> -target compo -operation get_adapter_info -propfile <プロパティ定義ファイル名>
```

 注意事項

- 配備されていないサービスアダプタの情報を取得した場合、null という文字列が表示されます。
- サービスアダプタのサービス ID を指定しないで cscutil コマンドを実行すると、HCSC サーバが管理しているすべてのサービスアダプタの情報が出力されます。

コマンド実行時の出力情報

コマンド実行時の出力情報と意味を次の表に示します。なお、次の表に示す出力情報以外の出力情報はトラブルシューティング用の保守情報です。

表 5-2 サービスアダプタの情報を参照するコマンドの出力情報

出力される項目	出力される内容
serviceName.<通番>	サービス部品名が出力されます。
adapterName.<通番>	アダプタ識別名が出力されます。
cscServerName.<通番>	HCSC サーバ名が出力されます。
ownerClusterName.<通番>	クラスタ名が出力されます。
serviceKind.<通番>	HCSC コンポーネントの種別が出力されます。 サービスアダプタの場合「ServiceAdapter」が出力されます。
serviceProtocolKind.<通番>	サービス部品のプロトコルが出力されます。 <ul style="list-style-type: none"> • WebService (同期サービス (Web サービス) 呼び出し) • SessionBean (同期サービス (SessionBean) 呼び出し) • MDB_WSR (非同期サービス (MDB (WS-R)) 呼び出し) • MDB_DBQ (非同期サービス (MDB (DB キュー)) 呼び出し) • Custom (カスタムアダプタ)
serviceStatus.<通番>	サービスアダプタの状態が出力されます。 <ul style="list-style-type: none"> • active (開始状態) • inactive (停止状態) • starting (開始処理中) • startfailed (開始失敗) • stopping (停止処理中) • stopfailed (停止失敗) • deleting (削除処理中) • null (未配備状態)
entryTime.<通番>	サービスアダプタを配備した時刻が出力されます。

出力される項目	出力される内容
adapterQueueName.<通番>	キュー名称が表示されます。
modifiedTime.<通番>	サービスアダプタが更新された時刻（1970年1月1日00:00:00からの通算ミリ秒）が出力されます。
lcVersion.<通番>	ロケーションのバージョン番号が出力されます。
lcRevision.<通番>	ロケーションのリビジョン番号が出力されます。

注 サービスアダプタの種別がMDB (WS-R) またはMDB (DB キュー) の場合にだけ出力されます。

5.2.21 ビジネスプロセスの情報を確認する

ビジネスプロセスに関する情報は、画面とコマンドで参照できる情報が異なります。参照できる情報の詳細については、「8. 運用環境で使用する画面」または「10. コマンド」の該当する画面、コマンドの内容を参照してください。

ビジネスプロセスの情報を参照するための前提条件と参照方法について次に説明します。

(1) 前提条件

ビジネスプロセスの情報を参照するには、HCSC サーバが起動状態である必要があります。

HCSC サーバの状態の確認方法については、「5.2.17 HCSC サーバの情報を確認する」を参照してください。

(2) 参照方法

ビジネスプロセスの情報を参照する方法を次に示します。

(a) 画面の場合

ツリービュー上で、ビジネスプロセスをダブルクリックします。ダブルクリックしたビジネスプロセスの情報は、エディタエリアに表示されます。エディタエリアの稼働運用ページで、ビジネスプロセスの情報が参照できます。

ビジネスプロセスの稼働運用ページの詳細については、「8.4 稼働運用ページ」を参照してください。

なお、ビジネスプロセスの稼働状態については、ツリービューに表示されるアイコンで確認することもできます。表示されるアイコンの詳細については、「8.1 画面構成」を参照してください。

(b) コマンドの場合

ビジネスプロセスの情報を参照するには、cscstatus コマンド、csmlslocation コマンド、または cscutil コマンドを実行します。

5. システム運用

cscstatus コマンドおよび cscutil コマンドは運用環境から、csmlslocation コマンドは実行環境から実行できます。各コマンドは、次の場合に使用します。

- cscstatus コマンド
ビジネスプロセスの動的情報（稼働状況）、ビジネスプロセスのサービス ID、および更新時間を参照する場合に使用します。
- csmlslocation コマンド
ビジネスプロセスの動的情報（稼働状況）、および静的情報（定義情報）を参照する場合に使用します。
- cscutil コマンド
ビジネスプロセスの静的情報（定義情報）を参照する場合に使用します。

cscstatus コマンドの場合

運用環境で cscstatus コマンドを実行します。-csc オプションと -type オプションを指定して実行します。-type オプションには「compo」を指定します。

cscstatus コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscstatus（状態表示）」を参照してください。

cscstatus コマンドの実行形式を次に示します。

```
cscstatus -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名>
-type compo
```

csmlslocation コマンドの場合

実行環境で csmlslocation コマンドを実行します。情報を参照するビジネスプロセスが配備されている HCSC サーバの名称と、-k オプションに bp を指定して実行します。

csmlslocation コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「csmlslocation（サービスアダプタまたはビジネスプロセスの情報の表示）」を参照してください。

csmlslocation コマンドの実行形式を次に示します。

```
csmlslocation <HCSCサーバ名> -k bp
```

なお、-k オプションの代わりに -all オプションを指定すると、HCSC サーバに登録されているすべての HCSC コンポーネント（およびサービスグループ）の情報を参照できます。

cscutil コマンドの場合

運用環境で cscutil コマンドを実行します。-target オプションに compo を、また -operation オプションに get_bp_info を指定します。

cscutil コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscutil (各種操作)」を参照してください。

cscutil コマンドの実行形式は、プロパティ定義ファイルを使用するかどうかによって異なります。

プロパティ定義ファイルを使用しない場合

-props オプションに HCSC サーバ名およびビジネスプロセスのサービス ID を指定します。

```
cscutil -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -mng <Cosminexus Manager 名> -target compo -operation get_bp_info -props "CSCSrvName=<HCSCサーバ名>, AdapterName=<ビジネスプロセスのサービスID>"
```

cscutil コマンドに指定する Cosminexus Manager 名、HCSC サーバ名およびビジネスプロセスのサービス ID は、cscrepls コマンドで確認できます。

cscrepls コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscrepls (リポジット情報の表示)」を参照してください。

プロパティ定義ファイルを使用する場合

-propfile オプションにプロパティ定義ファイル名を指定します。プロパティ定義ファイルは、J2SE のプロパティファイル形式であらかじめ作成しておく必要があります。

```
cscutil -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -mng <Cosminexus Manager 名> -target compo -operation get_bp_info -propfile <プロパティ定義ファイル名>
```

! 注意事項

- 配備されていないビジネスプロセスの情報を取得した場合、null という文字列が表示されます。
- ビジネスプロセスのサービス ID を指定しないで cscutil コマンドを実行すると、HCSC サーバが管理しているすべてのビジネスプロセスの情報が出力されます。

コマンド実行時の出力情報

コマンド実行時の出力情報と意味を次の表に示します。なお、次の表に示す出力情報以外の出力情報はトラブルシューティング用の保守情報です。

表 5-3 ビジネスプロセスの情報を参照するコマンドの出力情報

出力される項目	出力される内容
serviceName.<通番>	サービス部品名が出力されます。

5. システム運用

出力される項目	出力される内容
adapterName.<通番>	ビジネスプロセスのサービス ID が出力されます。
cscServerName.<通番>	HCSC サーバ名が出力されます。
ownerClusterName.<通番>	クラスタ名が出力されます。
serviceKind.<通番>	HCSC コンポーネントの種別が出力されます。 ビジネスプロセスの場合「BusinessProcess」が出力されます。
serviceStatus.<通番>	ビジネスプロセスの状態が出力されます。 <ul style="list-style-type: none">• active (開始状態)• inactive (停止状態)• starting (開始処理中)• startfailed (開始失敗)• stopping (停止処理中)• stopfailed (停止失敗)• deleting (削除処理中)• null (未配備状態)
modifiedTime.<通番>	ビジネスプロセス更新された時刻 (1970 年 1 月 1 日 00:00:00 からの通算ミリ秒) が出力されます。
entryTime.<通番>	ビジネスプロセスを配備した時刻が出力されます。
lcVersion.<通番>	ロケーションのバージョン番号が出力されます。
lcRevision.<通番>	ロケーションのリビジョン番号が出力されます。

5.2.22 ユーザ定義受付の情報を確認する

ユーザ定義受付の情報を参照する前提条件と参照方法について次に説明します。

(1) 前提条件

ユーザ定義受付の情報を参照するには、HCSC サーバが起動状態である必要があります。

HCSC サーバの状態の確認方法については、「5.2.17 HCSC サーバの情報を確認する」を参照してください。

(2) 参照方法

ユーザ定義受付の情報を参照するには、`cscstatus` コマンド、`csmlsreception` コマンド、または `cscutil` コマンドを実行します。

`cscstatus` コマンドおよび `cscutil` コマンドは運用環境から、`csmlsreception` コマンドは実行環境から実行できます。各コマンドは、次の場合に使用します。

- `cscstatus` コマンド
ユーザ定義受付の動的情報 (稼働状況)、ユーザ定義受付の受付 ID、および更新時間を参照する場合に使用します。
- `csmlsreception` コマンド
ユーザ定義受付の動的情報 (稼働状況)、および静的情報 (ユーザ定義受付ランタイム

定義ファイルで設定した定義情報)を参照する場合に使用します。

ユーザが設定した情報、および実際の動作に反映されている情報が定義情報として出力されます。ユーザが設定した情報は、HCSC サーバの起動時、または標準受付もしくはユーザ定義受付の開始時に実際の動作に反映されます。

次のどちらかの場合には、実際の動作に反映されていない定義情報が出力されます。

- HCSC サーバの起動中に定義情報を設定し、そのあと HCSC サーバを再起動しない場合
 - 標準受付またはユーザ定義受付の開始中に定義情報を設定し、そのあと標準受付またはユーザ定義受付を再開しない場合
- cscutil コマンド

ユーザ定義受付の静的情報(ユーザ定義受付ランタイム定義ファイルで設定した定義情報)を参照する場合に使用します。

実際の動作に反映されている情報が定義情報として出力されます。ユーザが設定した情報は、HCSC サーバの起動時、または標準受付もしくはユーザ定義受付の開始時に反映されます。

次のどちらかの場合には、前回 HCSC サーバを起動したとき、または標準受付もしくはユーザ定義受付を開始したときに設定した情報が出力されます。

- HCSC サーバの起動中に定義情報を設定し、そのあと HCSC サーバを再起動しない場合
- 標準受付またはユーザ定義受付の開始中に定義情報を設定し、そのあと標準受付またはユーザ定義受付を再開しない場合

cscstatus コマンドの場合

運用環境で cscstatus コマンドを実行します。-csc オプションと -type オプションを指定して実行します。-type オプションには「compo」を指定します。

cscstatus コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscstatus (状態表示)」を参照してください。

cscstatus コマンドの実行形式を次に示します。

```
cscstatus -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名>
-type compo
```

csmlsreception コマンドの場合

実行環境で csmlsreception コマンドを実行します。

csmlsreception コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「csmlsreception (ユーザ定義受付の情報の表示)」を参照してください。

csmlsreception コマンドの実行形式を次に示します。

5. システム運用

すべてのユーザ定義受付の情報を参照する場合

-csc オプションと -all オプションを指定して実行します。

```
csmlsreception -csc <HCSCサーバ名> -all
```

特定のユーザ定義受付の情報を参照する場合

-csc オプションと -i オプションを指定して実行します。-i オプションにはユーザ定義受付の受付 ID を指定します。

```
csmlsreception -csc <HCSCサーバ名> -i <ユーザ定義受付の受付ID>
```

ユーザ定義受付に関連するサービス（ビジネスプロセス）の情報を参照する場合

-csc オプションと -s オプションを指定して実行します。-s オプションには関連するサービス名（ビジネスプロセスのサービス名）を指定します。

```
csmlsreception -csc <HCSCサーバ名> -s <関連するサービス名>
```

cscutil コマンドの場合

運用環境で cscutil コマンドを実行します。-target オプションに compo_urecp を、また -operation オプションに get_info を指定します。

cscutil コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscutil（各種操作）」を参照してください。

cscutil コマンドの実行形式は、プロパティ定義ファイルを使用するかどうかによって異なります。

プロパティ定義ファイルを使用しない場合

-props オプションに HCSC サーバ名を指定します。

```
cscutil -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -mng <Cosminexus Manager名> -target compo_urecp -operation get_info -props "CSCSrvName=<HCSCサーバ名>"
```

cscutil コマンドに指定する Cosminexus Manager 名および HCSC サーバ名は、cscrepls コマンドで確認できます。cscrepls コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscrepls（リポジトリ情報の表示）」を参照してください。

プロパティ定義ファイルを使用する場合

-profile オプションにプロパティ定義ファイル名を指定します。プロパティ定義ファイルは、J2SE のプロパティファイル形式であらかじめ作成しておく必要があります。

```
cscutil -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -mng <Cosminexus Manager
名> -target compo_urecp -operation get_info -propfile <プロパティ定義ファイル名>
```

! 注意事項

- 配備されていないユーザ定義受付の情報を取得した場合、null という文字列が表示されます。
- ユーザ定義受付の受付 ID を指定しないで cscutil コマンドを実行すると、HCSC サーバが管理しているすべてのユーザ定義受付の情報が出力されます。

コマンド実行時の出力情報

コマンド実行時の出力情報と意味を次の表に示します。なお、次の表に示す出力情報以外の出力情報はトラブルシューティング用の保守情報です。

表 5-4 ユーザ定義受付の情報を参照するコマンドの出力情報

出力される項目	出力される内容
receptionName.<通番>	ユーザ定義受付の受付名が出力されます。
receptionID.<通番>	ユーザ定義受付の受付 ID が出力されます。
cscServerName.<通番>	HCSC サーバ名が出力されます。
ownerClusterName.<通番>	クラスタ名が出力されます。
serviceName.<通番>	ユーザ定義受付に関連するサービス名が出力されます。
receptionKind.<通番>	ユーザ定義受付を利用している受付 (HCSC コンポーネント) の種類が出力されます。 <ul style="list-style-type: none"> • bp (ビジネスプロセス)
receptionProtocolKind.<通番>	ユーザ定義受付のプロトコルが出力されます。 <ul style="list-style-type: none"> • WebService (同期サービス (Web サービス) 呼び出し)
receptionStatus.<通番>	ユーザ定義受付の状態が出力されます。 <ul style="list-style-type: none"> • active (開始状態) • inactive (停止状態) • starting (開始処理中) • startfailed (開始失敗) • stopping (停止処理中) • stopfailed (停止失敗) • deleting (削除処理中)

5. システム運用

出力される項目	出力される内容
entryTime.<通番>	ユーザ定義受付が定義された時刻がYYYY/MM/DD hh:mm:ss.SSS形式で出力されます。 <ul style="list-style-type: none">• YYYY：西暦• MM：月• DD：日• hh：時• mm：分• ss：秒• SSS：ミリ秒
modifiedTime.<通番>	ユーザ定義受付が更新された時刻(1970年1月1日00:00:00からの通算ミリ秒)が出力されます。
lcVersion.<通番>	ロケーションバージョン番号が出力されます。
lcRevision.<通番>	ロケーションリビジョン番号が出力されます。
runtime.user-defined-reception-soap.threads.maximum.<通番>	ユーザ定義受付の最大同時実行数が出力されます。ユーザ定義受付ランタイム定義ファイルで最大同時実行数を設定していない場合は、デフォルト値(10)が出力されます。
runtime.user-defined-reception-soap.exclusive.threads.<通番>	ユーザ定義受付の占有スレッド数が出力されます。ユーザ定義受付ランタイム定義ファイルで占有スレッド数を設定していない場合は、デフォルト値(0)が出力されます。
runtime.user-defined-reception-soap.queue-size.<通番>	ユーザ定義受付の実行待ちキューサイズが出力されます。ユーザ定義受付ランタイム定義ファイルで実行待ちキューサイズを設定していない場合は、デフォルト値(8192)が出力されます。

5.2.23 HCSC サーバの定義を変更する

HCSC サーバの定義情報を変更する場合、HCSC サーバの定義情報を設定する場合と同じ方法で行います。HCSC サーバの定義情報を設定する方法の詳細については、「3.1.4 HCSC サーバの定義情報を設定する」を参照してください。

5.2.24 ユーザ定義受付の定義情報を変更する

ユーザ定義受付の定義情報を変更する前提条件と変更方法について次に説明します。

(1) 前提条件

ユーザ定義受付の定義情報を変更するには、HCSC サーバが起動状態である必要があります。

ます。

HCSC サーバの状態の確認方法については、「5.2.17 HCSC サーバの情報を確認する」を参照してください。

(2) 変更方法

ユーザ定義受付の定義情報を変更する手順を次に示します。

1. ユーザ定義受付の定義情報を確認します。
運用環境から確認する場合は `cscutil` コマンドを、実行環境から確認する場合は `csmlsreception` コマンドを実行します。
ユーザ定義受付の定義情報の確認方法については、「3.1.13 ユーザ定義受付の定義情報を確認する」を参照してください。
2. ユーザ定義受付を停止します。
ユーザ定義受付の停止方法については、「5.2.32 ユーザ定義受付を停止する」を参照してください。
3. ユーザ定義受付の定義情報を取得します。
`csccompoconfig` コマンドの `-operation` オプションに `get` を指定して、ユーザ定義受付の定義情報を取得します。
`csccompoconfig` コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「`csccompoconfig` (HCSC コンポーネントの定義)」を参照してください。
4. 取得したユーザ定義受付の定義情報を変更します。
ユーザ定義受付ランタイム定義ファイルのパラメタの値を変更し、ユーザ定義受付の定義情報を変更します。
ユーザ定義受付ランタイム定義ファイルの詳細については、「9. 定義ファイル」の「ユーザ定義受付ランタイム定義ファイル」を参照してください。
5. ユーザ定義受付の定義情報を設定します。
ユーザ定義受付の定義情報の設定方法については、「3.1.12 ユーザ定義受付の定義情報を設定する」を参照してください。
6. ユーザ定義受付の定義情報を確認します。
ユーザ定義受付の定義情報の確認方法については、「3.1.13 ユーザ定義受付の定義情報を確認する」を参照してください。
7. ユーザ定義受付を開始します。
ユーザ定義受付の開始方法については、「5.2.8 ユーザ定義受付を開始する」を参照してください。
8. ユーザ定義受付の情報を確認します。
運用環境から確認する場合は `cscutil` コマンドを、実行環境から確認する場合は `csmlsreception` コマンドを実行します。
ユーザ定義受付の定義情報の確認方法については、「3.1.13 ユーザ定義受付の定義情報を確認する」を参照してください。

5.2.25 HCSC コンポーネントの構成を変更する

開発環境で HCSC コンポーネントの定義を変更した場合、リポジトリを利用して変更した定義を運用環境に受け渡します。運用環境では、開発環境で変更した定義情報に従って、HCSC コンポーネントの構成を変更します。

HCSC コンポーネントの構成を変更する前提条件と変更方法について次に説明します。

(1) 前提条件

HCSC コンポーネントの構成を変更するには、次の条件を満たす必要があります。

- HCSC サーバが起動状態であること
HCSC サーバの状態の確認方法については、「5.2.17 HCSC サーバの情報を確認する」を参照してください。
- Management Server が起動状態であること
Management Server の状態の確認方法については、「5.2.15 Cosminexus Manager の状態を確認する」を参照してください。
- 運用管理エージェントが起動状態であること
運用管理エージェントの状態の確認方法については、「5.2.15 Cosminexus Manager の状態を確認する」を参照してください。
- データベースが起動状態であること
データベースの状態の確認方法については、「5.2.12 データベースの状態を確認する」を参照してください。

(2) 変更方法

HCSC コンポーネントの構成を変更する手順を次に示します。

1. リポジトリ情報の差分を確認します。
リポジトリ情報の差分の確認方法については、「4.5 リポジトリの差分情報の参照」を参照してください。
2. HCSC コンポーネントを停止します。
cscocompostop コマンドに `-cluster` オプションを指定して、クラスタ内のすべての HCSC サーバに配備されている HCSC コンポーネントを一括して停止します。
HCSC コンポーネントの停止方法については、「5.2.32 ユーザ定義受付を停止する」、「5.2.33 サービスアダプタを停止する」、および「5.2.34 ビジネスプロセスを停止する」を参照してください。
3. HCSC コンポーネントを削除します。
cscocompoundeploy コマンドに `-cluster` オプションを指定して、クラスタ内のすべての HCSC サーバに配備されている HCSC コンポーネントを一括して削除します。
HCSC コンポーネントの削除方法については、「3.2.1 サービスアダプタを削除する」、「3.2.2 ビジネスプロセスを削除する」、および「3.2.3 ユーザ定義受付を削除する」を参照してください。

4. リポジトリをインポートします。
リポジトリのインポート方法については、「4.3 リポジトリのインポート」を参照してください。
5. HCSC コンポーネントを配備します。
cscscompodeploy コマンドに `-cluster` オプションを指定して、クラスタ内のすべての HCSC サーバに、配備されていない HCSC コンポーネントを一括して配備します。
HCSC コンポーネントの配備方法については、「3.1.9 サービスアダプタを配備する」、「3.1.10 ビジネスプロセスを配備する」、および「3.1.11 ユーザ定義受付を配備する」を参照してください。
6. HCSC コンポーネントを開始します。
cscscompostart コマンドに `-cluster` オプションを指定して、クラスタ内のすべての HCSC サーバに配備されている HCSC コンポーネントを一括して開始します。
HCSC コンポーネントの開始方法については、「5.2.6 サービスアダプタを開始する」、「5.2.7 ビジネスプロセスを開始する」、および「5.2.8 ユーザ定義受付を開始する」を参照してください。

5.2.26 サービス部品の接続先を変更する

運用環境では、サービスアダプタの接続先情報を変更できます。

サービス部品の接続先を変更する前提条件と変更方法について次に説明します。

(1) 前提条件

サービス部品の接続先を変更するには、次の条件を満たす必要があります。

- HCSC サーバが起動状態であること
HCSC サーバの状態の確認方法については、「5.2.17 HCSC サーバの情報を確認する」を参照してください。

(2) 変更方法

サービス部品の接続先を変更する手順を次に示します。

1. サービスアダプタを停止します。
cscscompostop コマンドに `-cluster` オプションを指定して、クラスタ内のすべての HCSC サーバに配備されているサービスアダプタを一括して停止します。
サービスアダプタの停止方法については、「5.2.33 サービスアダプタを停止する」を参照してください。
2. サービスアダプタを削除します。
cscscompoundeploy コマンドに `-cluster` オプションを指定して、クラスタ内のすべての HCSC サーバに配備されているサービスアダプタを一括して削除します。
サービスアダプタの削除方法については、「3.2.1 サービスアダプタを削除する」を

5. システム運用

参照してください。

3. サービス情報を取得および更新し、サービスの接続先を変更します。
サービス情報の取得および更新方法については、「3.1.7 サービス情報を変更する」を参照してください。

なお、サービス部品の接続先を変更する場合、サービス情報の更新で、サービス情報変更定義ファイルの次のパラメタの値を変更してください。サービス情報変更定義ファイルの詳細については、「9. 定義ファイル」の「サービス情報変更定義ファイル」を参照してください。

Web サービス用サービスアダプタの場合

```
<クラスタ名>.<サービスID>.WebService.url=サービス部品の呼び出しに使用するURL
```

SessionBean 用サービスアダプタの場合

```
<クラスタ名>.<サービスID>.SessionBean.url=サービス部品の呼び出しに使用するURL  
<クラスタ名>.<サービスID>.SessionBean.lookupName=ルックアップ名
```

MDB (WS-R) 用サービスアダプタの場合

```
<クラスタ名>.<サービスID>.MDB_WSR.url=サービスアダプタのメッセージ送信先URL  
<クラスタ名>.<サービスID>.MDB_WSR.queue_name=サービス部品に関連づけられているキュー名
```

MDB (DB キュー) 用サービスアダプタの場合

```
<クラスタ名>.<サービスID>.MDB_DBQ.queue_name=サービス部品に関連づけられているキュー名
```

4. サービスアダプタを配備します。
csccompodeploy コマンドに `-cluster` オプションを指定して、クラスタ内のすべての HCSC サーバに、サービスアダプタを一括して配備します。
サービスアダプタの配備方法については、「3.1.9 サービスアダプタを配備する」を参照してください。
5. サービスアダプタを開始します。
csccompostart コマンドに `-cluster` オプションを指定して、クラスタ内のすべての HCSC サーバに配備されているサービスアダプタを一括して開始します。
サービスアダプタの開始方法については、「5.2.6 サービスアダプタを開始する」を参照してください。

5.2.27 流量制御値を変更する

運用環境では、標準受付（同期受付（Web サービス））およびユーザ定義受付の流量制御値を変更できます。

標準受付（同期受付（Web サービス））およびユーザ定義受付の流量制御値を変更する前提条件と変更方法について次に説明します。

（１）前提条件

標準受付（同期受付（Web サービス））およびユーザ定義受付の流量制御値を変更するには、次の条件を満たす必要があります。

- Management Server が起動状態であること
Management Server の状態の確認方法については、「5.2.15 Cosminexus Manager の状態を確認する」を参照してください。
- 運用管理エージェントが起動状態であること
運用管理エージェントの状態の確認方法については、「5.2.15 Cosminexus Manager の状態を確認する」を参照してください。

（２）変更方法

標準受付（同期受付（Web サービス））およびユーザ定義受付の流量制御値を変更する手順を次に示します。

（a）標準受付（同期受付（Web サービス））の流量制御値を変更する場合

標準受付（同期受付（Web サービス））の流量制御値を変更する手順を次に示します。

1. HCSC サーバランタイム定義ファイルを更新し、流量制御値を変更します。
流量制御値を変更する場合、HCSC サーバランタイム定義ファイルの次のプロパティの値を変更してください。HCSC サーバランタイム定義ファイルの詳細については、「9. 定義ファイル」の「HCSC サーバランタイム定義ファイル」を参照してください。

```
request-soap.instance.maximum=同期受付（Webサービス）最大同時実行数
request-soap.exclusive.threads=同期受付（Webサービス）占有スレッド数
request-soap.queue-size=同期受付（Webサービス）実行待ちキューのサイズ
```

2. HCSC サーバランタイム定義ファイルを設定します。
HCSC サーバランタイム定義ファイルの設定方法については、「3.1.4 HCSC サーバの定義情報を設定する」を参照してください。

！ 注意事項

設定した情報は、標準受付の開始時に反映されます。

(b) ユーザ定義受付の流量制御値を変更する場合

ユーザ定義受付の流量制御値の変更は、ユーザ定義受付の定義情報の変更と同じです。ユーザ定義受付の定義情報の変更方法については、「5.2.24 ユーザ定義受付の定義情報を変更する」を参照してください。

なお、流量制御値を変更する場合、ユーザ定義受付ランタイム定義ファイルの次のパラメタの値を変更してください。ユーザ定義受付ランタイム定義ファイルの詳細については、「9. 定義ファイル」の「ユーザ定義受付ランタイム定義ファイル」を参照してください。

```
user-defined-reception-soap.threads.maximum=最大同時実行数  
user-defined-reception-soap.exclusive.threads=占有スレッド数  
user-defined-reception-soap.queue-size=実行待ちキューサイズ
```

! 注意事項

設定した情報は、ユーザ定義受付の開始時に反映されます。

5.2.28 サービス部品呼び出しの通信タイムアウト値を変更する

運用環境では、Web サービス用のサービスアダプタ、および SessionBean 用のサービスアダプタのサービス部品呼び出しの通信タイムアウト値を変更できます。

Web サービス用のサービスアダプタ、および SessionBean 用のサービスアダプタのサービス部品呼び出しの通信タイムアウト値を変更する前提条件と変更方法について次に説明します。

(1) 前提条件

Web サービス用のサービスアダプタ、および SessionBean 用のサービスアダプタのサービス部品呼び出しの通信タイムアウト値を変更するには、次の条件を満たす必要があります。

- HCSC サーバが起動状態であること
HCSC サーバの状態の確認方法については、「5.2.17 HCSC サーバの情報を確認する」を参照してください。

(2) 変更方法

Web サービス用のサービスアダプタ、および SessionBean 用のサービスアダプタのサービス部品呼び出しの通信タイムアウト値を変更する手順を次に示します。

1. サービスアダプタを停止します。

cscocompostop コマンドに `-cluster` オプションを指定して、クラスタ内のすべての HCSC サーバに配備されているサービスアダプタを一括して停止します。

サービスアダプタの停止方法については、「5.2.33 サービスアダプタを停止する」を参照してください。

2. サービスアダプタを削除します。

cscocompoundeploy コマンドに `-cluster` オプションを指定して、クラスタ内のすべての HCSC サーバに配備されているサービスアダプタを一括して削除します。

サービスアダプタの削除方法については、「3.2.1 サービスアダプタを削除する」を参照してください。

3. サービス情報を取得および更新し、サービス呼び出しの通信タイムアウト値を変更します。

サービス情報の取得および更新方法については、「3.1.7 サービス情報を変更する」を参照してください。

なお、サービス部品呼び出しの通信タイムアウト値を変更する場合、サービス情報の更新で、サービス情報変更定義ファイルの次のパラメタの値を変更してください。サービス情報変更定義ファイルの詳細については、「9. 定義ファイル」の「サービス情報変更定義ファイル」を参照してください。

Web サービス用サービスアダプタの場合

```
<クラスタ名>.<サービスID>.WebService.c4web.application.socket_read_timeout=読み込みタイムアウト値
<クラスタ名>.<サービスID>.WebService.c4web.application.socket_connect_timeout=接続タイムアウト値
<クラスタ名>.<サービスID>.WebService.c4web.application.socket_write_timeout=書き込みタイムアウト値
```

SessionBean 用サービスアダプタの場合

```
<クラスタ名>.<サービスID>.SessionBean.c4web.application.ejb_j2ee_timeout=呼び出しタイムアウト値
```

4. サービスアダプタを配備します。

cscocompodeploy コマンドに `-cluster` オプションを指定して、クラスタ内のすべての HCSC サーバに、サービスアダプタを一括して配備します。

サービスアダプタの配備方法については、「3.1.9 サービスアダプタを配備する」を参照してください。

5. サービスアダプタを開始します。

cscocompostart コマンドに `-cluster` オプションを指定して、クラスタ内のすべての HCSC サーバに配備されているサービスアダプタを一括して開始します。

サービスアダプタの開始方法については、「5.2.6 サービスアダプタを開始する」を参照してください。

5.2.29 標準受付を停止する

標準受付の停止方法には、通常停止、計画停止および強制停止があります。

通常停止

同期受付の場合

仕掛かり中の実行要求を処理したあと、標準受付を停止します。

非同期受付の場合

サービスリクエストからの実行要求を受け付けない状態にして、仕掛かり中の実行要求を処理したあとに、標準受付を停止します。キュー内には、受け付けた実行要求が処理されないで残ります。

通常停止したあと、標準受付を再度開始すると、キュー内に残っていた実行要求から処理が開始されます。

通常停止したあとに HCSC サーバをアンセットアップした場合、キュー内に残っている実行要求は破棄されます。

計画停止

標準受付を停止したあとに HCSC サーバをアンセットアップする場合に利用する停止方法です。計画停止を実行すると、次のように標準受付が停止されます。

同期受付の場合

仕掛かり中の実行要求を処理したあと、標準受付を停止します。

非同期受付の場合

サービスリクエストからの実行要求を受け付けない状態にして、キュー内に残っている実行要求をすべて処理したあとに、標準受付を停止します。

強制停止

コマンドでだけ実行できます。ほかのコマンドの実行中や標準受付の停止失敗中でも強制的に停止できます。

標準受付の停止の前提条件と停止方法について次に説明します。

(1) 前提条件

標準受付を停止するには、次の条件を満たす必要があります。

- HCSC サーバが起動状態であること
- 標準受付が開始状態であること

HCSC サーバおよび標準受付の状態の確認方法については、「5.2.17 HCSC サーバの情報を確認する」を参照してください。

(2) 停止方法

標準受付を停止する方法を次に示します。

! 注意事項

標準受付が停止できなかった場合、エラーになった原因を取り除いたあと、標準受付を強制停止してください。標準受付を停止状態にしたあとで、再度標準受付を開始して運用を再開してください。標準受付を開始する方法については、「5.2.11 標準受付を開始する」を参照してください。

(a) 画面の場合

運用環境の画面を利用して標準受付を停止する手順を次に示します。

1. ツリービュー上で、標準受付を停止する HCSC サーバをダブルクリックします。
ダブルクリックした HCSC サーバの情報がエディタエリアに表示されます。
2. エディタエリアで [稼働運用] タブを選択します。
稼働運用ページに、手順 1 で選択した HCSC サーバの稼働運用に関する情報が表示されます。
HCSC サーバの稼働運用ページの詳細については、「8.4 稼働運用ページ」を参照してください。
3. 稼働運用ページに表示された内容を確認し、「標準受付」の [通常停止] ボタンまたは [計画停止] ボタンをクリックします。
標準受付の停止を確認するダイアログが表示されます。
4. ダイアログに表示された内容を確認し、[OK] ボタンをクリックします。
標準受付の停止処理が開始されます。停止処理中のログはコンソールビューに出力されます。
[キャンセル] ボタンをクリックした場合は、停止処理を実行しないで稼働運用ページに戻ります。
標準受付の停止処理が完了すると、実行結果を示すダイアログが表示されます。
5. 実行結果を示すダイアログを確認します。

停止処理が成功した場合

[OK] ボタンをクリックして、稼働運用ページに戻ります。

稼働運用ページでは、標準受付の稼働状態が「停止状態」になります。また、[通常停止] ボタンおよび [計画停止] ボタンが非活性化し、[開始] ボタンが活性化します。

停止処理が失敗した場合

ダイアログにエラーの内容が表示されます。詳細情報に表示されるメッセージ ID を参照して対処してください。

(b) コマンドの場合

標準受付を停止するには、運用環境で `cscrcptnstop` コマンドまたは `cscutil` コマンドを実行します。

`cscrcptnstop` コマンドおよび `cscutil` コマンドは、次の場合に使用します。

5. システム運用

- `cscrcptnstop` コマンド
該当するリポジトリが存在する運用環境で、標準受付を停止する場合。
- `cscutil` コマンド
該当するリポジトリがなく、`cscutil` が使用できる環境（例えば、JP1 で直接運用している実行環境）で標準受付を停止する場合。

`cscrcptnstop` コマンドの場合

運用環境で `cscrcptnstop` コマンドを実行します。

`cscrcptnstop` コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「`cscrcptnstop`（標準受付およびユーザ定義受付の停止）」を参照してください。

`cscrcptnstop` コマンドの実行形式を次に示します。

クラスタ内のすべての HCSC サーバの標準受付を一括して停止する場合（クラスタ単位）

クラスタ名を指定して実行します。

`-cluster` オプションで指定したクラスタ内のすべての HCSC サーバの標準受付が一括して停止されます（停止されていないユーザ定義受付も同時にすべて停止されます）。

```
cscrcptnstop -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -cluster <クラスタ名>
```

ユーザ定義受付を停止しないで標準受付だけを停止する場合は、`-standard` オプションを指定します。

```
cscrcptnstop -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -cluster <クラスタ名> -standard
```

HCSC サーバの標準受付を一括して停止する場合（HCSC サーバ単位）

HCSC サーバ名を指定して実行します。

`-csc` オプションで指定した HCSC サーバの標準受付が停止されます（停止されていないユーザ定義受付も同時にすべて停止されます）。

```
cscrcptnstop -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名>
```

ユーザ定義受付を停止しないで標準受付だけを停止する場合は、`-standard` オプションを指定します。

```
cscrcptnstop -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名> -standard
```

cscutil コマンドの場合

運用環境で cscutil コマンドを実行します。-target オプションに request_service を、また -operation オプションに stop を指定します。

cscutil コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscutil (各種操作)」を参照してください。

cscutil コマンドの実行形式は、プロパティ定義ファイルを使用するかどうかによって異なります。

プロパティ定義ファイルを使用しない場合

-props オプションに HCSC サーバ名、J2EE サーバ名および停止フラグを指定します。

```
cscutil -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -mng <Cosminexus Manager 名> -target request_service -operation stop -props "SCSrvName=<HCSCサーバ名>, J2EESrvName=<J2EEサーバ名>, ForceFlag=<停止フラグ>"
```

cscutil コマンドに指定する Cosminexus Manager 名、HCSC サーバ名および J2EE サーバ名は、cscrepls コマンドで確認できます。cscrepls コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscrepls (リポジトリ情報の表示)」を参照してください。

また、停止フラグには、通常停止、計画停止または強制停止のどれを実行するか指定します。停止フラグには、次のどれかを指定してください。

- 通常停止：NORMAL_OPTION
- 計画停止：WAIT_OPTION
- 強制停止：FORCE_OPTION

プロパティ定義ファイルを使用する場合

-propfile オプションにプロパティ定義ファイル名を指定します。プロパティ定義ファイルは、J2SE のプロパティファイル形式であらかじめ作成しておく必要があります。

```
cscutil -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -mng <Cosminexus Manager 名> -target request_service -operation stop -propfile <プロパティ定義ファイル名>
```

5.2.30 連携を停止する

連携の停止の前提条件と停止方法について次に説明します。

(1) 前提条件

連携を停止するには、次の条件を満たす必要があります。

- HCSC サーバが起動状態であること
- 連携受付が開始状態であること

5. システム運用

- 連携が開始状態であること

HCSC サーバおよび連携受付の状態の確認方法については、「5.2.17 HCSC サーバの情報を確認する」を参照してください。

連携の状態の確認方法については、「5.2.19 連携情報を確認する」を参照してください。

(2) 停止方法

連携を停止する方法を次に示します。

! 注意事項

連携を停止する場合、連携対象の一方から停止処理を実施すると双方向の連携が停止されません。

(a) 画面の場合

運用環境の画面を利用して連携を停止する手順を次に示します。

1. ツリービュー上で、連携を停止する HCSC サーバをダブルクリックします。
ダブルクリックした HCSC サーバの情報がエディタエリアに表示されます。
2. エディタエリアで [稼働運用] タブを選択します。
稼働運用ページに、手順 1 で選択した HCSC サーバの連携に関する情報が表示されます。
HCSC サーバの稼働運用ページの詳細については、「8.4 稼働運用ページ」を参照してください。
3. 稼働運用ページ内の [サーバ間連携] タブを選択します。
4. 連携表示テーブルから停止するサーバ間連携を選択し、「サーバ間連携」の [停止] ボタンをクリックします。
連携の停止を確認するダイアログが表示されます。
5. ダイアログに表示された内容を確認し、[OK] ボタンをクリックします。
連携の停止処理が開始されます。停止処理中のログはコンソールビューに出力されません。
[キャンセル] ボタンをクリックした場合は、停止処理を実行しないで稼働運用ページに戻ります。
連携の停止処理が完了すると、実行結果を示すダイアログが表示されます。
6. 実行結果を示すダイアログを確認します。

停止処理が成功した場合

[OK] ボタンをクリックして、稼働運用ページに戻ります。

稼働運用ページでは、連携の状態が「連携開始状態」になります。また、[停止] ボタンが非活性化し、[開始] ボタンが活性化します。

停止処理が失敗した場合

ダイアログにエラーの内容が表示されます。詳細情報に表示されるメッセージ ID を参照して対処してください。

(b) コマンドの場合

連携を停止するには、運用環境で `cscutil` コマンドを実行します。-target オプションに `connect` を、また -operation オプションに `stop` を指定します。

`cscutil` コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「`cscutil` (各種操作)」を参照してください。

`cscutil` コマンドの実行形式は、プロパティ定義ファイルを使用するかどうかによって異なります。

プロパティ定義ファイルを使用しない場合

-props オプションに連携元 HCSC サーバ名および連携先クラスタ名を指定します。

```
cscutil -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -mng <Cosminexus Manager 名> -target connect -operation stop -props "CSCSrvName=<連携元HCSCサーバ名>, ConnectClusterName=<連携先クラスタ名>"
```

`cscutil` コマンドに指定する `Cosminexus Manager` 名、連携元 HCSC サーバ名および連携先クラスタ名は、`cscrepls` コマンドで確認できます。`cscrepls` コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「`cscrepls` (リポジトリ情報の表示)」を参照してください。

プロパティ定義ファイルを使用する場合

-profile オプションにプロパティ定義ファイル名を指定します。プロパティ定義ファイルは、J2SE のプロパティファイル形式であらかじめ作成しておく必要があります。

```
cscutil -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -mng <Cosminexus Manager 名> -target connect -operation stop -profile <プロパティ定義ファイル名>
```

5.2.31 連携受付を停止する

連携受付の停止方法には、通常停止と計画停止があります。

通常停止**同期受付の場合**

仕掛かり中の実行要求を処理したあと、連携受付を停止します。

非同期受付の場合

サービスリクエストからの実行要求を受け付けない状態にして、仕掛かり中の実行要求を処理したあとに、連携受付を停止します。キュー内には、受け付け

5. システム運用

た実行要求が処理されないで残ります。

通常停止したあと、連携受付を再度開始すると、キュー内に残っていた実行要求から処理が開始されます。

通常停止したあとに HCSC サーバをアンセットアップした場合、キュー内に残っている実行要求は破棄されます。

計画停止

連携受付を停止したあとに HCSC サーバをアンセットアップする場合に利用する停止方法です。計画停止を実行すると、次のように連携受付が停止されます。

同期受付の場合

仕掛かり中の実行要求を処理したあと、連携受付を停止します。

非同期受付の場合

サービスリクエストからの実行要求を受け付けない状態にして、キュー内に残っている実行要求をすべて処理したあとに、連携受付を停止します。

連携受付の停止の前提条件と停止方法について次に説明します。

(1) 前提条件

連携受付を停止するには、次の条件を満たす必要があります。

- HCSC サーバが起動状態であること
- 連携受付が開始状態であること

HCSC サーバおよび連携受付の状態の確認方法については、「5.2.17 HCSC サーバの情報を確認する」を参照してください。

(2) 停止方法

連携受付を停止する方法を次に示します。

(a) 画面の場合

運用環境の画面を利用して連携受付を停止する手順を次に示します。

1. ツリービュー上で、連携受付を停止する HCSC サーバをダブルクリックします。
ダブルクリックした HCSC サーバの情報がエディタエリアに表示されます。
2. エディタエリアで稼働運用ページの [HCSC サーバ] タブを選択します。
手順 1 で選択した HCSC サーバの稼働運用に関する情報が表示されます。
HCSC サーバの稼働運用ページの詳細については、「8.4 稼働運用ページ」を参照してください。
3. 稼働運用ページに表示された内容を確認し、「連携受付」の [通常停止] ボタンまたは [計画停止] ボタンをクリックします。
連携受付の停止を確認するダイアログが表示されます。
4. ダイアログに表示された内容を確認し、[OK] ボタンをクリックします。

連携受付の停止処理が開始されます。停止処理中のログはコンソールビューに出力されます。

[キャンセル] ボタンをクリックした場合は、停止処理を実行しないで稼働運用ページに戻ります。

連携受付の停止処理が完了すると、実行結果を示すダイアログが表示されます。

5. 実行結果を示すダイアログを確認します。

停止処理が成功した場合

[OK] ボタンをクリックして、稼働運用ページに戻ります。

稼働運用ページでは、連携受付の稼働状態が「停止状態」になります。また、[通常停止] ボタンおよび [計画停止] ボタンが非活性化し、[開始] ボタンが活性化します。

停止処理が失敗した場合

ダイアログにエラーの内容が表示されます。詳細情報に表示されるメッセージ ID を参照して対処してください。

(b) コマンドの場合

連携受付を停止するには、運用環境で cscutil コマンドを実行します。-target オプションに connect_service を、また -operation オプションに stop を指定します。

cscutil コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscutil (各種操作)」を参照してください。

cscutil コマンドの実行形式は、プロパティ定義ファイルを使用するかどうかによって異なります。

プロパティ定義ファイルを使用しない場合

-props オプションに HCSC サーバ名および停止フラグを指定します。停止フラグには、通常停止と計画停止のどちらを実行するか指定します。

```
cscutil -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -mng <Cosminexus Manager名> -target connect_service -operation stop -props "CSCSrvName=<HCSCサーバ名>, OptionFlag=<停止フラグ>"
```

cscutil コマンドに指定する Cosminexus Manager 名および HCSC サーバ名は、cscrepls コマンドで確認できます。cscrepls コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscrepls (リポジトリ情報の表示)」を参照してください。

また、停止フラグには、通常停止またはオプション監視停止のどちらを実行するか指定します。停止フラグには、次のどちらかを指定してください。

- 通常停止：NORMAL_OPTION
- オプション監視停止：WAIT_OPTION

プロパティ定義ファイルを使用する場合

-propfile オプションにプロパティ定義ファイル名を指定します。プロパティ定義

ファイルは、J2SE のプロパティファイル形式であらかじめ作成しておく必要があります。

```
cscutil -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -mng <Cosminexus Manager  
名> -target connect_service -operation stop -propfile <プロパティ定義ファイル名>
```

5.2.32 ユーザ定義受付を停止する

ユーザ定義受付の停止の前提条件と停止方法について次に説明します。

(1) 前提条件

ユーザ定義受付を停止するには、次の条件を満たす必要があります。

- HCSC サーバが起動状態であること
HCSC サーバの状態の確認方法については、「5.2.17 HCSC サーバの情報を確認する」を参照してください。
- ユーザ定義受付が開始状態であること
ユーザ定義受付の確認方法については、「5.2.22 ユーザ定義受付の情報を確認する」を参照してください。

(2) 停止方法

ユーザ定義受付を停止するには、運用環境で `cscrcptnstop` コマンド、`csccompostop` コマンド、または `cscutil` コマンドを実行します。

`cscrcptnstop` コマンド、`csccompostop` コマンド、および `cscutil` コマンドは、次の場合に使用します。

- `cscrcptnstop` コマンド
 - ユーザ定義受付および標準受付を一括して停止する場合に使用します。
 - HCSC サーバに配備されているユーザ定義受付を一括して停止する場合に使用します。
 - クラスタ単位で一括して停止することもできます。なお、特定のユーザ定義受付だけを停止することはできません。
 - 該当するリポジトリが存在する運用環境で、ユーザ定義受付を停止する場合に使用します。
- `csccompostop` コマンド
 - サービスアダプタ、ビジネスプロセス、およびユーザ定義受付を一括して停止する場合に使用します。
 - ユーザ定義受付だけを一括で停止することはできません。
 - HCSC サーバに配備されている特定のユーザ定義受付を停止する場合に使用します。
 - クラスタ単位で特定のユーザ定義受付を停止することもできます。
 - 該当するリポジトリが存在する運用環境で、ユーザ定義受付を停止する場合に使用

します。

- cscutil コマンド

該当するリポジトリがなく、cscutil が使用できる環境（例えば、JP1 で直接運用している実行環境）でユーザ定義受付を停止する場合に使用します。

cscrcptnstop コマンドの場合

運用環境で cscrcptnstop コマンドを実行します。

cscrcptnstop コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscrcptnstop（標準受付およびユーザ定義受付の停止）」を参照してください。

cscrcptnstop コマンドの実行形式を次に示します。

クラスタ内のすべての HCSC サーバに配備されているユーザ定義受付を一括して停止する場合（クラスタ単位）

クラスタ名を指定して実行します。

-cluster オプションで指定したクラスタ内のすべての HCSC サーバに配備されているユーザ定義受付が一括して停止されます（停止されていない標準受付も同時にすべて停止されます）。

```
cscrcptnstop -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -cluster <クラスタ名>
```

標準受付を停止しないでユーザ定義受付だけを停止する場合は、-userdef オプションを指定します。

```
cscrcptnstop -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -cluster <クラスタ名> -userdef
```

HCSC サーバに配備されているユーザ定義受付を一括して停止する場合（HCSC サーバ単位）

HCSC サーバ名を指定して実行します。

-csc オプションで指定した HCSC サーバに配備されているユーザ定義受付が停止されます（停止されていない標準受付も同時にすべて停止されます）。

```
cscrcptnstop -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名>
```

標準受付を停止しないでユーザ定義受付だけを停止する場合は、-userdef オプションを指定します。

```
cscrcptnstop -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名> -userdef
```

5. システム運用

cscocompostop コマンドの場合

運用環境で cscocompostop コマンドを実行します。

cscocompostop コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscocompostop (HCSC コンポーネントの停止)」を参照してください。

cscocompostop コマンドの実行形式を次に示します。

クラスタ内のすべての HCSC サーバに配備されているユーザ定義受付を一括して停止する場合 (クラスタ単位)

クラスタ名と -all オプションを指定して実行します。

-cluster オプションで指定したクラスタ内のすべての HCSC サーバに配備されているユーザ定義受付が一括して停止されます (停止されていないサービスアダプタおよびビジネスプロセスも同時にすべて停止されます)。

```
cscocompostop -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -cluster <クラスタ名> -all
```

HCSC サーバに配備されているユーザ定義受付を一括して停止する場合 (HCSC サーバ単位)

HCSC サーバ名と -all オプションを指定して実行します。

-csc オプションで指定した HCSC サーバに配備されているユーザ定義受付が停止されます (停止されていないサービスアダプタおよびビジネスプロセスも同時にすべて停止されます)。

```
cscocompostop -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名> -all
```

クラスタ内のすべての HCSC サーバに配備されている特定のユーザ定義受付を停止する場合

クラスタ名とユーザ定義受付の受付 ID を指定して実行します。

```
cscocompostop -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -cluster <クラスタ名> -name <ユーザ定義受付の受付ID>
```

HCSC サーバに配備されている特定のユーザ定義受付を停止する場合

HCSC サーバ名とユーザ定義受付の受付 ID を指定して実行します。

```
cscocompostop -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名> -name <ユーザ定義受付の受付ID>
```

cscutil コマンドの場合

運用環境で cscutil コマンドを実行します。-target オプションに compo_urecp を、また -operation オプションに stop を指定します。

cscutil コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscutil (各種操作)」を参照してください。

cscutil コマンドの実行形式は、プロパティ定義ファイルを使用するかどうかによって異なります。

プロパティ定義ファイルを使用しない場合

-props オプションに HCSC サーバ名および J2EE サーバ名を指定します。

```
cscutil -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -mng <Cosminexus Manager
名> -target compo_urecp -operation stop -props "CSCSrvName=<HCSCサーバ名>,
J2EESrvName=<J2EEサーバ名>"
```

cscutil コマンドに指定する Cosminexus Manager 名、HCSC サーバ名および J2EE サーバ名は、cscrepls コマンドで確認できます。cscrepls コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscrepls (リポジトリ情報の表示)」を参照してください。

プロパティ定義ファイルを使用する場合

-propfile オプションにプロパティ定義ファイル名を指定します。プロパティ定義ファイルは、J2SE のプロパティファイル形式であらかじめ作成しておく必要があります。

```
cscutil -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -mng <Cosminexus Manager
名> -target compo_urecp -operation stop -propfile <プロパティ定義ファイル名>
```

5.2.33 サービスアダプタを停止する

サービスアダプタの停止の前提条件と停止方法について次に説明します。

(1) 前提条件

サービスアダプタを停止するには、次の条件を満たす必要があります。

- HCSC サーバが起動状態であること
HCSC サーバの状態の確認方法については、「5.2.17 HCSC サーバの情報を確認する」を参照してください。
- サービスアダプタが開始状態であること
サービスアダプタの状態の確認方法については、「5.2.20 サービスアダプタの情報を確認する」を参照してください。

(2) 停止方法

サービスアダプタを停止する方法を次に示します。

(a) 画面の場合

運用環境の画面を利用してサービスアダプタを停止する手順を次に示します。

1. ツリービュー上で、停止するサービスアダプタをダブルクリックします。
ダブルクリックしたサービスアダプタの情報がエディタエリアの稼働運用ページに表示されます。
サービスアダプタの稼働運用ページの詳細については、「8.4 稼働運用ページ」を参照してください。
2. 稼働運用ページに表示された内容を確認し、[停止] ボタンをクリックします。
サービスアダプタの停止を確認するダイアログが表示されます。
3. ダイアログに表示された内容を確認し、[OK] ボタンをクリックします。
サービスアダプタの停止処理が開始されます。停止処理中のログはコンソールビューに出力されます。
[キャンセル] ボタンをクリックした場合は、停止処理を実行しないで稼働運用ページに戻ります。
サービスアダプタの停止処理が完了すると、実行結果を示すダイアログが表示されます。
4. 実行結果を示すダイアログを確認します。

停止処理が成功した場合

[OK] ボタンをクリックして、稼働運用ページに戻ります。

稼働運用ページでは、サービスアダプタの状態が「停止状態」になります。また、[停止] ボタンが非活性化し、[開始] ボタンが活性化します。

停止処理が失敗した場合

ダイアログにエラーの内容が表示されます。詳細情報に表示されるメッセージ ID を参照して対処してください。

(b) コマンドの場合

サービスアダプタを停止するには、運用環境で `csccompostop` コマンドまたは `cscutil` コマンドを実行します。

`csccompostop` コマンドおよび `cscutil` コマンドは、次の場合に使用します。

- `csccompostop` コマンド
該当するリポジトリが存在する運用環境で、サービスアダプタを停止する場合。
- `cscutil` コマンド
該当するリポジトリがなく、`cscutil` が使用できる環境（例えば、JP1 で直接運用している実行環境）でサービスアダプタを停止する場合。

csccompostop コマンドの場合

運用環境で csccompostop コマンドを実行します。

csccompostop コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「csccompostop (HCSC コンポーネントの停止)」を参照してください。

csccompostop コマンドの実行形式を次に示します。

クラスタ内のすべての HCSC サーバに配備されているサービスアダプタを一括して停止する場合 (クラスタ単位)

クラスタ名と `-all` オプションを指定して実行します。

`-cluster` オプションで指定したクラスタ内のすべての HCSC サーバに配備されているサービスアダプタが一括して停止されます (停止されていないビジネスプロセスおよびユーザ定義受付も同時にすべて停止されます)。

```
csccompostop -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -cluster <クラスタ名> -all
```

ビジネスプロセスおよびユーザ定義受付を停止しないでユーザ定義受付だけを停止する場合は、サービスアダプタのサービス ID を指定します。

```
csccompostop -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -cluster <クラスタ名> -name <サービスアダプタのサービスID>
```

HCSC サーバに配備されているサービスアダプタを一括して停止する場合 (HCSC サーバ単位)

HCSC サーバ名と `-all` オプションを指定して実行します。

`-csc` オプションで指定した HCSC サーバに配備されているサービスアダプタが停止されます (停止されていないビジネスプロセスおよびユーザ定義受付も同時にすべて停止されます)。

```
csccompostop -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名> -all
```

ビジネスプロセスおよびユーザ定義受付を停止しないでサービスアダプタだけを停止する場合は、サービスアダプタのサービス ID を指定します。

```
csccompostop -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名> -name <サービスアダプタのサービスID>
```

cscutil コマンドの場合

運用環境で cscutil コマンドを実行します。 `-target` オプションに `compo` を、また

5. システム運用

-operation オプションに stop を指定します。

cscutil コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscutil (各種操作)」を参照してください。

cscutil コマンドの実行形式は、プロパティ定義ファイルを使用するかどうかによって異なります。

プロパティ定義ファイルを使用しない場合

-props オプションにサービスアダプタのサービス ID, HCSC サーバ名および J2EE サーバ名を指定します。

```
cscutil -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -mng <Cosminexus Manager 名> -target compo -operation stop -props "AdapterName=<サービスアダプタのサービス ID>, CSCSrvName=<HCSCサーバ名>, J2EESrvName=<J2EEサーバ名>"
```

cscutil コマンドに指定する Cosminexus Manager 名, サービスアダプタのサービス ID, HCSC サーバ名および J2EE サーバ名は, cscrepls コマンドで確認できます。cscrepls コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscrepls (リポジトリ情報の表示)」を参照してください。

プロパティ定義ファイルを使用する場合

-propfile オプションにプロパティ定義ファイル名を指定します。プロパティ定義ファイルは, J2SE のプロパティファイル形式であらかじめ作成しておく必要があります。

```
cscutil -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -mng <Cosminexus Manager 名> -target compo -operation stop -propfile <プロパティ定義ファイル名>
```

5.2.34 ビジネスプロセスを停止する

ビジネスプロセスの停止の前提条件と停止方法について次に説明します。

(1) 前提条件

ビジネスプロセスを停止するには, 次の条件を満たす必要があります。

- HCSC サーバが起動状態であること
HCSC サーバの状態の確認方法については、「5.2.17 HCSC サーバの情報を確認する」を参照してください。
- ビジネスプロセスが開始状態であること
ビジネスプロセスの状態の確認方法については、「5.2.21 ビジネスプロセスの情報を確認する」を参照してください。

(2) 停止方法

ビジネスプロセスを停止する方法を次に示します。

(a) 画面の場合

運用環境の画面を利用してビジネスプロセスを停止する手順を次に示します。

1. ツリービュー上で、停止するビジネスプロセスをダブルクリックします。
ダブルクリックしたビジネスプロセスの情報がエディタエリアに表示されます。
2. エディタエリアで稼働運用ページを選択します。
手順 1 で選択したビジネスプロセスの稼働運用に関する情報が表示されます。
ビジネスプロセスの稼働運用ページの詳細については、「8.4 稼働運用ページ」を参照してください。
3. 稼働運用ページに表示された内容を確認し、[停止] ボタンをクリックします。
ビジネスプロセスの停止を確認するダイアログが表示されます。
4. ダイアログに表示された内容を確認し、[OK] ボタンをクリックします。
ビジネスプロセスの停止処理が開始されます。停止処理中のログはコンソールビューに出力されます。
[キャンセル] ボタンをクリックした場合は、停止処理を実行しないで稼働運用ページに戻ります。
ビジネスプロセスの停止処理が完了すると、実行結果を示すダイアログが表示されます。
5. 実行結果を示すダイアログを確認します。

停止処理が成功した場合

[OK] ボタンをクリックして、稼働運用ページに戻ります。

稼働運用ページでは、ビジネスプロセスの稼働状態が「停止状態」になります。
また、[停止] ボタンが非活性化し、[開始] ボタンが活性化します。

停止処理が失敗した場合

ダイアログにエラーの内容が表示されます。詳細情報に表示されるメッセージ ID を参照して対処してください。

(b) コマンドの場合

ビジネスプロセスを停止するには、運用環境で `csccompostop` コマンドまたは `cscutil` コマンドを実行します。

`csccompostop` コマンドおよび `cscutil` コマンドは、次の場合に使用します。

- `csccompostop` コマンド
該当するリポジトリが存在する運用環境で、ビジネスプロセスを停止する場合。
- `cscutil` コマンド
該当するリポジトリがなく、`cscutil` が使用できる環境（例えば、JP1 で直接運用している実行環境）でビジネスプロセスを停止する場合。

`csccompostop` コマンドの場合

運用環境で `csccompostop` コマンドを実行します。

5. システム運用

csccompostop コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「csccompostop (HCSC コンポーネントの停止)」を参照してください。

csccompostop コマンドの実行形式を次に示します。

クラスタ内のすべての HCSC サーバに配備されているビジネスプロセスを一括して停止する場合 (クラスタ単位)

クラスタ名と `-all` オプションを指定して実行します。

`-cluster` オプションで指定したクラスタ内のすべての HCSC サーバに配備されているビジネスプロセスが一括して停止されます (停止されていないサービスアダプタおよびユーザ定義受付も同時にすべて停止されます)。

```
csccompostop -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -cluster <クラスタ名> -all
```

サービスアダプタおよびユーザ定義受付を停止しないでビジネスプロセスだけを停止する場合は、ビジネスプロセスのサービス ID を指定します。

```
csccompostop -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -cluster <クラスタ名> -name <ビジネスプロセスのサービスID>
```

HCSC サーバに配備されているビジネスプロセスを一括して停止する場合 (HCSC サーバ単位)

HCSC サーバ名と `-all` オプションを指定して実行します。

`-csc` オプションで指定した HCSC サーバに配備されているビジネスプロセスが停止されます (停止されていないサービスアダプタおよびユーザ定義受付も同時にすべて停止されます)。

```
csccompostop -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名> -all
```

サービスアダプタおよびユーザ定義受付を停止しないでビジネスプロセスだけを停止する場合は、ビジネスプロセスのサービス ID を指定します。

```
csccompostop -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名> -name <ビジネスプロセスのサービスID>
```

cscutil コマンドの場合

運用環境で cscutil コマンドを実行します。 `-target` オプションに `compo` を、また `-operation` オプションに `stop` を指定します。

cscutil コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscutil (各種操作)」を参

照してください。

cscutil コマンドの実行形式は、プロパティ定義ファイルを使用するかどうかによって異なります。

プロパティ定義ファイルを使用しない場合

-props オプションにビジネスプロセスのサービス ID、HCSC サーバ名および J2EE サーバ名を指定します。

```
cscutil -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -mng <Cosminexus Manager
名> -target compo -operation stop -props "AdapterName=<ビジネスプロセスのサービス
ID>, CSCSrvName=<HCSCサーバ名>, J2EESrvName=<J2EEサーバ名>"
```

cscutil コマンドに指定する Cosminexus Manager 名、ビジネスプロセスのサービス ID、HCSC サーバ名および J2EE サーバ名は、cscrepls コマンドで確認できます。cscrepls コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscrepls (リポジトリ情報の表示)」を参照してください。

プロパティ定義ファイルを使用する場合

-propfile オプションにプロパティ定義ファイル名を指定します。プロパティ定義ファイルは、J2SE のプロパティファイル形式であらかじめ作成しておく必要があります。

```
cscutil -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -mng <Cosminexus Manager
名> -target compo -operation stop -propfile <プロパティ定義ファイル名>
```

5.2.35 Hitachi Web Server を停止する

Hitachi Web Server を停止するには、運用環境で cscsvstop コマンドを実行します。

-logical オプションに Hitachi Web Server の論理サーバ名を指定して実行します。

cscsvstop コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscsvstop (HCSC サーバの停止)」を参照してください。

cscsvstop コマンドの実行形式を次に示します。

```
cscsvstop -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名>
-logical <Hitachi Web Serverの論理サーバ名>
```

5.2.36 HCSC サーバを停止する

HCSC サーバの停止の前提条件と停止方法について次に説明します。

(1) 前提条件

HCSC サーバを停止するには、次の条件を満たす必要があります。

- ユーザ定義受付および標準受付が停止状態であること
- 連携受付が停止状態であること

標準受付および連携受付の状態の確認方法については、「5.2.17 HCSC サーバの情報を確認する」を、ユーザ定義受付の状態の確認方法については、「5.2.22 ユーザ定義受付の情報を確認する」を参照してください。

なお、コマンドを利用して HCSC サーバを停止する場合、強制停止を実行できます。強制停止を実行すると、ほかのコマンドの実行中や、内部エラーが発生した場合でも強制的に HCSC サーバを停止できます。また、ユーザ定義受付、標準受付、および連携受付が起動していても HCSC サーバを停止できます。

(2) 停止方法

HCSC サーバを停止する方法を次に示します。

(a) 画面の場合

運用環境の画面を利用して HCSC サーバを停止する手順を次に示します。

1. ツリービュー上で、停止する HCSC サーバをダブルクリックします。
選択した HCSC サーバの情報がエディタエリアに表示されます。
2. エディタエリアで [稼働運用] タブを選択します。
稼働運用ページに、手順 1 で選択した HCSC サーバの稼働運用に関する情報が表示されます。
HCSC サーバの稼働運用ページの詳細については、「8.4 稼働運用ページ」を参照してください。
3. 稼働運用ページに表示された内容を確認し、「HCSC サーバ」の [停止] ボタンをクリックします。
HCSC サーバの停止を確認するダイアログが表示されます。
4. ダイアログに表示された内容を確認し、[OK] ボタンをクリックします。
HCSC サーバの停止処理が開始されます。停止処理中のログはコンソールビューに出力されます。
[キャンセル] ボタンをクリックした場合は、停止処理を実行しないで稼働運用ページに戻ります。
HCSC サーバの停止処理が完了すると、実行結果を示すダイアログが表示されます。
5. 実行結果を示すダイアログを確認します。

停止処理が成功した場合

[OK] ボタンをクリックして、稼働運用ページに戻ります。

稼働運用ページでは、HCSC サーバの稼働状態が「停止状態」になります。ま

た,[停止]ボタンが非活性化し,[起動]ボタンが活性化します。

停止処理が失敗した場合

ダイアログにエラーの内容が表示されます。詳細情報に表示されるメッセージIDを参照して対処してください。

(b) コマンドの場合

HCSC サーバを停止するには、運用環境で `cscsvstop` コマンドまたは `cscutil` コマンドを実行します。クラスタ内の HCSC サーバを一括して停止する場合、または論理サーバを停止する場合は、`cscsvstop` コマンドを実行します。

`cscsvstop` コマンドおよび `cscutil` コマンドは、次の場合に使用します。

- `cscsvstop` コマンド
該当するリポジトリが存在する運用環境で、HCSC サーバを停止する場合。
- `cscutil` コマンド
該当するリポジトリがなく、`cscutil` が使用できる環境（例えば、JP1 で直接運用している実行環境）で HCSC サーバを停止する場合。

`cscsvstop` コマンドの場合

運用環境で `cscsvstop` コマンドを実行します。

`cscsvstop` コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「`cscsvstop` (HCSC サーバの停止)」を参照してください。

`cscsvstop` コマンドの実行形式を次に示します。

クラスタ内の HCSC サーバを一括して停止する場合
クラスタ名を指定して実行します。

```
cscsvstop -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -cluster <クラスタ名>
```

クラスタ内の HCSC サーバの停止と同時に論理サーバを停止する場合は、`-system` オプションを指定します。ただし、HCSC-Manager 定義ファイルに論理サーバを登録している必要があります。論理サーバの登録の詳細については、「5.2.1(1) 運用する前の準備」を参照してください。

```
cscsvstop -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -cluster <クラスタ名>
-system
```

また、HCSC サーバは停止しないで指定した論理サーバだけを停止する場合は、`-logical` オプションを指定します。

```
cscsvstop -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -cluster <クラスタ名>
-logical <論理サーバ名>
```

5. システム運用

それぞれの HCSC サーバを個別に停止する場合

HCSC サーバ名を指定して実行します。

```
cscsvstop -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名>
```

HCSC サーバの停止と同時に論理サーバを停止する場合は、`-system` オプションを指定します。

```
cscsvstop -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名>
-system
```

また、HCSC サーバは停止しないで指定した論理サーバだけを停止する場合は、`-logical` オプションを指定します。

```
cscsvstop -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名>
-logical <論理サーバ名>
```

cscutil コマンドの場合

運用環境で `cscutil` コマンドを実行します。`-target` オプションに `server` を、また `-operation` オプションに `stop` を指定します。

`cscutil` コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「`cscutil` (各種操作)」を参照してください。

`cscutil` コマンドの実行形式は、プロパティ定義ファイルを使用するかどうかによって異なります。

プロパティ定義ファイルを使用しない場合

`-props` オプションに HCSC サーバ名、J2EE サーバ名および停止フラグを指定します。

```
cscutil -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -mng <Cosminexus Manager
名> -target server -operation stop -props "CSCSrvName=<HCSCサーバ名>,
J2EESrvName=<J2EEサーバ名>, ForceFlag=<停止フラグ>"
```

`cscutil` コマンドに指定する `Cosminexus Manager` 名、HCSC サーバ名および J2EE サーバ名は、`cscrepls` コマンドで確認できます。`cscrepls` コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「`cscrepls` (リポジトリ情報の表示)」を参照してください。

また、停止フラグには、通常停止または強制停止のどちらを実行するか指定します。停止フラグには、次のどれかを指定してください。

- 通常停止 : `false`

- 強制停止 : true

プロパティ定義ファイルを使用する場合

-propfile オプションにプロパティ定義ファイル名を指定します。プロパティ定義ファイルは、J2SE のプロパティファイル形式であらかじめ作成しておく必要があります。

```
cscutil -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -mng <Cosminexus Manager名> -target server -operation stop -propfile <プロパティ定義ファイル名>
```

5.2.37 PRF を停止する

PRF を停止するには、運用環境で cscsvstop コマンドを実行します。-logical オプションに PRF の論理サーバ名を指定して実行します。

cscsvstop コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscsvstop (HCSC サーバの停止)」を参照してください。

cscsvstop コマンドの実行形式を次に示します。

```
cscsvstop -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名> -logical <PRFの論理サーバ名>
```

5.2.38 データベースを停止する

データベースの停止方法について次に説明します。

(1) 停止方法

データベースを停止する方法を次に示します。

(a) HiRDB の場合

HiRDB を停止するには、データベースサーバで pdstop コマンドを実行します。

pdstop コマンドの詳細については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」を参照してください。

(b) Oracle の場合

Oracle を停止する方法については、Oracle 社が発行するドキュメントを参照してください。

5.3 クラスタ構成時の運用

クラスタ構成時の運用方法について、ロードバランスクラスタ構成の場合と HA クラスタ構成の場合とに分けて説明します。

5.3.1 ロードバランスクラスタ構成での運用

ロードバランスクラスタ構成での運用の開始および終了について説明します。また、運用中にロードバランスクラスタを構成する HCSC サーバを追加、変更、および削除する方法についても説明します。

(1) 運用の開始

環境構築とセットアップが終了したあと、ロードバランスクラスタ構成のシステムの運用を開始できます。運用を開始するには、次の作業を実施します。

1. 実行環境の構成要素の状態の確認

ロードバランスクラスタ構成のシステムの運用を開始するには、すべてのロードバランスクラスタ内で、次に示す実行環境の構成要素が開始状態である必要があります。

- 運用管理エージェント
- Management Server
- PRF
- スマートエージェント
- CTM (CTM を使用する場合) ¹
- J2EE サーバ ²
- HCSC サーバ ³
- Hitachi Web Server (Hitachi Web Server を使用する場合)

注 1

CTM ドメインマネージャおよび CTM デモンも開始状態である必要があります。

注 2

Cosminexus RM などのアプリケーションの状態を一致させておく必要があります。なお、Cosminexus RM のシステム名は、ロードバランスクラスタ内のそれぞれの HCSC サーバでユニーク名称を指定する必要があります。

注 3

配備されているサービスアダプタとビジネスプロセス、および標準受付の状態を一致させておく必要があります。

2. サービスリクエストへの送信制御

セットアップ時に、サービスリクエスト用のネットワークを切断するなどして、サービス部品の実行要求を受け付けられない状態にしたサービスリクエストを、ネットワークを接続するなどして、サービス部品の実行要求を受け付けられる状態にします。

(2) 運用の終了

ロードバランスクラスタ構成のシステムの運用を終了する場合、次の作業を実施します。

1. サービスリクエストへの送信制御
サービスリクエスト用のネットワークを切断するなどして、HCSC サーバでサービス部品の実行要求を受け付けられない状態にします。その際、現在処理中の実行要求がないことを確認してください。
2. 実行環境の構成要素の停止
次の順序で、すべてのロードバランスクラスタ内の実行環境の構成要素を停止します。
 - Hitachi Web Server (Hitachi Web Server を使用する場合)
 - HCSC サーバ
 - J2EE サーバ
 - CTM (CTM を使用する場合)
 - スマートエージェント
 - PRF
 - Management Server
 - 運用管理エージェント

(3) ロードバランスクラスタへの HCSC サーバの追加・削除

運用を停止しないで、ロードバランスクラスタを構成する HCSC サーバを追加および削除できます。汎用ロードバランサの場合は、動的に IP アドレスを追加および削除する機能があるときだけ、運用を停止しないで、HCSC サーバを追加および削除できます。

ロードバランスクラスタを構成する HCSC サーバを追加および削除する方法を次に示します。

(a) HCSC サーバの追加

1. 追加する HCSC サーバの実行環境をセットアップします。
実行環境のセットアップ方法については、「2.5.2(2) 実行環境のセットアップ」を参照してください。
また、HCSC サーバ構成定義ファイルおよび HCSC サーバセットアップ定義ファイルを設定する場合、次の値をロードバランスクラスタ内のすべての HCSC サーバで同じ設定にしてください。

HCSC サーバ構成定義ファイル

- クラスタ表示名
- クラスタ種別
- HCSC サーバが使用する J2EE サーバ名
- 呼び出し種別

HCSC サーバセットアップ定義ファイル

- rm-systemname プロパティおよび naming-service-hostname プロパティ以外のす

5. システム運用

すべてのプロパティ

なお、`rm-systemname` プロパティには、ロードバランスクラスタ内のそれぞれの HCSC サーバでユニークな `Cosminexus RM` システム名を指定してください。

`naming-service-hostname` プロパティには、それぞれの HCSC サーバをセットアップした J2EE サーバに設定されているネーミングサービスのホスト名称を指定してください。

2. HCSC サーバを起動します。
HCSC サーバの起動方法については、「5.2.4 HCSC サーバを起動する」を参照してください。
3. サービスアダプタを配備します。
サービスアダプタの配備方法については、「3.1.9 サービスアダプタを配備する」を参照してください。
4. ビジネスプロセスを配備します。
ビジネスプロセスの配備方法については、「3.1.10 ビジネスプロセスを配備する」を参照してください。
5. サービスアダプタを開始します。
サービスアダプタの開始方法については、「5.2.6 サービスアダプタを開始する」を参照してください。
6. ビジネスプロセスを開始します。
ビジネスプロセスの開始方法については、「5.2.7 ビジネスプロセスを開始する」を参照してください。
7. 標準受付を開始します。
標準受付の開始方法については、「5.2.11 標準受付を開始する」を参照してください。
8. ロードバランサを設定します。
追加する HCSC サーバに、動的にサービス部品の実行要求を送信するように設定します。
CTM を使用する場合、すべての HCSC サーバで CTM ドメインマネージャ名およびスマートエージェントのポート番号を同じ値に設定する必要があります。
汎用ロードバランサの設定方法については、使用する汎用ロードバランサのドキュメントを参照してください。

! 注意事項

CTM を使用する場合、追加する HCSC サーバの標準受付を開始した段階で、HCSC サーバにサービス部品の実行要求を振り分けます。

(b) HCSC サーバの削除

1. ロードバランサを設定します。

削除する HCSC サーバにサービス部品の実行要求を送信しないように設定します。その際、現在処理中の実行要求がすべて完了していることを確認してください。CTM を使用する場合、対象となる J2EE サーバにサービス部品の実行要求を送信するキューを閉塞します。CTM を使用する場合のキューの閉塞については、マニュアル「Cosminexus システム運用ガイド」の CTM を使用したサービスの閉塞（運用管理コマンド）に関する内容を参照してください。汎用ロードバランサの設定方法については、使用する汎用ロードバランサのドキュメントを参照してください。

2. 標準受付を停止します。
標準受付の停止方法については、「5.2.29 標準受付を停止する」を参照してください。
3. ビジネスプロセスを停止します。
ビジネスプロセスの停止方法については、「5.2.34 ビジネスプロセスを停止する」を参照してください。
4. サービスアダプタを停止します。
サービスアダプタの停止方法については、「5.2.33 サービスアダプタを停止する」を参照してください。
5. ビジネスプロセスを削除します。
ビジネスプロセスの削除方法については、「3.2.2 ビジネスプロセスを削除する」を参照してください。
6. サービスアダプタを削除します。
サービスアダプタの削除方法については、「3.2.1 サービスアダプタを削除する」を参照してください。
7. 削除する HCSC サーバを停止します。
HCSC サーバの停止方法については、「5.2.36 HCSC サーバを停止する」を参照してください。
8. HCSC サーバを削除します。
HCSC サーバの削除方法については、「3.2.5 HCSC サーバをアンセットアップする」を参照してください。

(4) ロードバランスクラスタへのサービスアダプタの追加・削除

すでに HCSC サーバに配備済みのサービスアダプタを停止しないで、新たなサービスアダプタを追加および削除できます。サービスアダプタを追加および削除する方法を次に示します。

(a) サービスアダプタの追加

1. ロードバランスクラスタを構成するすべての HCSC サーバに、追加するサービスアダプタを配備します。
サービスアダプタの配備方法については、「3.1.9 サービスアダプタを配備する」を

5. システム運用

参照してください。

2. 追加したサービスアダプタを開始します。
サービスアダプタの開始方法については、「5.2.6 サービスアダプタを開始する」を参照してください。
3. 追加したサービスアダプタを呼び出すように設定します。

! 注意事項

ロードバランスクラスタを構成するすべての HCSC サーバに、サービスアダプタを配備し開始してから、追加したサービスアダプタを呼び出すように設定してください。

(b) サービスアダプタの削除

1. 削除するサービスアダプタを呼び出さないように設定します。
2. 削除するサービスアダプタを停止します。
サービスアダプタの停止方法については、「5.2.33 サービスアダプタを停止する」を参照してください。
3. ロードバランスクラスタを構成するすべての HCSC サーバからサービスアダプタを削除します。
サービスアダプタの削除方法については、「3.2.1 サービスアダプタを削除する」を参照してください。

! 注意事項

削除するサービスアダプタを呼び出さないように設定してから、サービスアダプタを削除してください。

(5) ロードバランスクラスタへのビジネスプロセスの追加・削除

すでに HCSC サーバに配備済みのビジネスプロセスを停止しないで、新たなビジネスプロセスを追加および削除できます。ビジネスプロセスを追加および削除する方法を次に示します。

(a) ビジネスプロセスの追加

1. ロードバランスクラスタを構成するすべての HCSC サーバに、追加するビジネスプロセスを配備します。
ビジネスプロセスの配備方法については、「3.1.10 ビジネスプロセスを配備する」を参照してください。
2. 追加したビジネスプロセスを開始します。
ビジネスプロセスの開始方法については、「5.2.7 ビジネスプロセスを開始する」を参照してください。
3. 追加したビジネスプロセスを呼び出すように設定します。

! 注意事項

ロードバランスクラスタを構成するすべての HCSC サーバに、ビジネスプロセスを配備し開始してから、追加したビジネスプロセスを呼び出すように設定してください。

(b) ビジネスプロセスの削除

1. 削除するビジネスプロセスを呼び出さないように設定します。
2. 削除するビジネスプロセスを停止します。
ビジネスプロセスの停止方法については、「5.2.34 ビジネスプロセスを停止する」を参照してください。
3. ロードバランスクラスタを構成するすべての HCSC サーバからビジネスプロセスを削除します。
ビジネスプロセスの削除方法については、「3.2.2 ビジネスプロセスを削除する」を参照してください。

! 注意事項

削除するビジネスプロセスを呼び出さないように設定してから、ビジネスプロセスを削除してください。

(6) ロードバランスクラスタ構成でのサービスアダプタの変更

すでに HCSC サーバに配備済みのサービスアダプタを停止しないで、サービスアダプタを変更できます。サービスアダプタを変更する方法を次に示します。

1. 変更するサービスアダプタを呼び出さないように設定します。
2. 変更するサービスアダプタを停止します。
サービスアダプタの停止方法については、「5.2.33 サービスアダプタを停止する」を参照してください。
3. ロードバランスクラスタを構成するすべての HCSC サーバから変更するサービスアダプタを削除します。
サービスアダプタの削除方法については、「3.2.1 サービスアダプタを削除する」を参照してください。
4. 変更したサービスアダプタの情報が保存されたりリポジトリをインポートします。
インポートの方法については、「4.3 リポジトリのインポート」を参照してください。
5. ロードバランスクラスタを構成するすべての HCSC サーバに、変更したサービスアダプタを配備します。
サービスアダプタの配備方法については、「3.1.9 サービスアダプタを配備する」を参照してください。
6. 変更したサービスアダプタを開始します。

サービスアダプタの開始方法については、「5.2.6 サービスアダプタを開始する」を参照してください。

7. 変更したサービスアダプタを呼び出すように設定します。

! 注意事項

変更するサービスアダプタを呼び出さないように設定してから、サービスアダプタを変更してください。

(7) ロードバランスクラスタ構成でのビジネスプロセスの変更

すでに HCSC サーバに配備済みのビジネスプロセスを停止しないで、ビジネスプロセスを変更できます。ビジネスプロセスを変更する方法を次に示します。

1. 変更するビジネスプロセスを呼び出さないように設定します。
2. 変更するビジネスプロセスを停止します。
ビジネスプロセスの停止方法については、「5.2.34 ビジネスプロセスを停止する」を参照してください。
3. ロードバランスクラスタを構成するすべての HCSC サーバから変更するビジネスプロセスを削除します。
ビジネスプロセスの削除方法については、「3.2.2 ビジネスプロセスを削除する」を参照してください。
4. 変更したビジネスプロセスの情報が保存されたリポジトリをインポートします。
リポジトリのインポート方法については、「4.3 リポジトリのインポート」を参照してください。
5. ロードバランスクラスタを構成するすべての HCSC サーバにビジネスプロセスを配備します。
ビジネスプロセスの配備方法については、「3.1.10 ビジネスプロセスを配備する」を参照してください。
6. 変更したビジネスプロセスを開始します。
ビジネスプロセスの開始方法については、「5.2.7 ビジネスプロセスを開始する」を参照してください。
7. 変更したビジネスプロセスを呼び出すように設定します。

! 注意事項

変更するビジネスプロセスを呼び出さないように設定してから、ビジネスプロセスを変更してください。

(8) 障害に備えた HCSC サーバの準備

ロードバランスクラスタを構成している HCSC サーバの障害に備え、ロードバランスクラスタに余裕をもった台数の HCSC サーバを準備することを推奨します。詳細については、「7.9.2(1) ロードバランスクラスタ構成での障害と復旧」を参照してください。

5.3.2 HA クラスタ構成での運用

HA クラスタ構成での運用の開始と、運用中に現用系で障害が発生した場合の系の切り替え、および復旧の方法について説明します。

(1) 運用の開始

環境構築とセットアップが終了したあと、HA クラスタ構成のシステムの運用を開始できます。運用を開始するには、次の作業を実施します。

1. 現用系・待機系の構成要素の状態の確認

HA クラスタ構成のシステムの運用を開始するには、現用系・待機系の構成要素が次の表に示す状態である必要があります。

表 5-5 HA クラスタ構成の運用時の構成要素の状態

構成要素	状態	
	現用系	待機系
運用管理エージェント		-
Management Server		-
PRF		-
J2EE サーバ		-
HCSC サーバ		-
Hitachi Web Server		-

(凡例)

- : 起動しています。
- : 停止しています。

2. サービスリクエスト用のネットワークの接続

セットアップ時に切断したサービスリクエスト用のネットワークを接続します。サービスリクエスト用のネットワークを接続すると、現用系の HCSC サーバでサービス部品の実行要求が受け付けられる状態になります。

3. サービスリクエストへの送信制御

セットアップ時にサービス部品の実行要求を受け付けられない状態にしたサービスリクエストを、ネットワークを接続するなどして、サービス部品の実行要求を受け付けられる状態にします。

! 注意事項

HA クラスタ構成での運用中は、サービスアダプタおよびビジネスプロセスを起動または停止しないでください。また、標準受付を停止しないでください。

サービスアダプタおよびビジネスプロセスの起動・停止について

サービスアダプタおよびビジネスプロセスを起動または停止する場合、サービスリクエスト用のネットワークを切断するなどして、現用系と待機系でサービス部品の実行要求を受け付けられない状態にします。そのあと、現用系と待機系の両方で、同じサービスアダプタおよびビジネスプロセスの起動または停止をしてください。

HA クラスタ構成で系の切り替えが発生した場合、サービスアダプタおよびビジネスプロセスの状態は引き継がれません。そのため、稼働中の現用系で、あるサービスアダプタを停止し、その状態で系の切り替えが発生すると、現用系と待機系でサービスアダプタおよびビジネスプロセスの状態が不整合になります。

標準受付の停止について

標準受付を停止する場合、サービスリクエスト用のネットワークから切断するなどして、標準受付の状態に関係なく実行要求を受け付けられない状態にしてから、標準受付を停止してください。

HA クラスタ構成で系の切り替えが発生した場合、待機系では標準受付が起動されません。そのため、実行要求を一時的に受け付けないようにするために稼働中の現用系で標準受付を停止し、その状態で系の切り替えが発生すると、待機系で実行要求を受け付けてしまう場合があります。

画面の表示について

Cosminexus サービスプラットフォームの運用画面を起動したまま、HA クラスタに切り替えた場合、運用画面上に表示されている各種ステータスを正しく反映できません。

5.4 HCSC サーバのサービス部品を呼び出す流れ

Cosminexus サービスプラットフォームを使ってシステム構築や運用をする場合、サービスリクエストから HCSC サーバを経由してサービス部品を呼び出す流れを理解することで、より良いシステムが実現でき、SOA を適用することによる効果が得られます。

また、SOA を適用したシステム開発をする場合も、どのように運用されるのか理解した上で、サービス部品呼び出し処理やエラー時の処理を設計することが大切です。

ここでは、サービス部品を呼び出す基本的な流れや、Cosminexus サービスプラットフォームの実行環境の仕組みについて説明します。なお、開発環境の定義は、運用環境を通じて実行環境で動作しますが、ここでは運用環境の説明は省略しています。

5.4.1 サービス部品呼び出しの基本的な流れ

サービス部品を呼び出す流れには、プロトコルで共通な部分と、プロトコルごとに異なる部分があります。ここでは、プロトコルで共通するサービス部品を呼び出す基本的な流れについて説明します。

(1) 基本的な構造

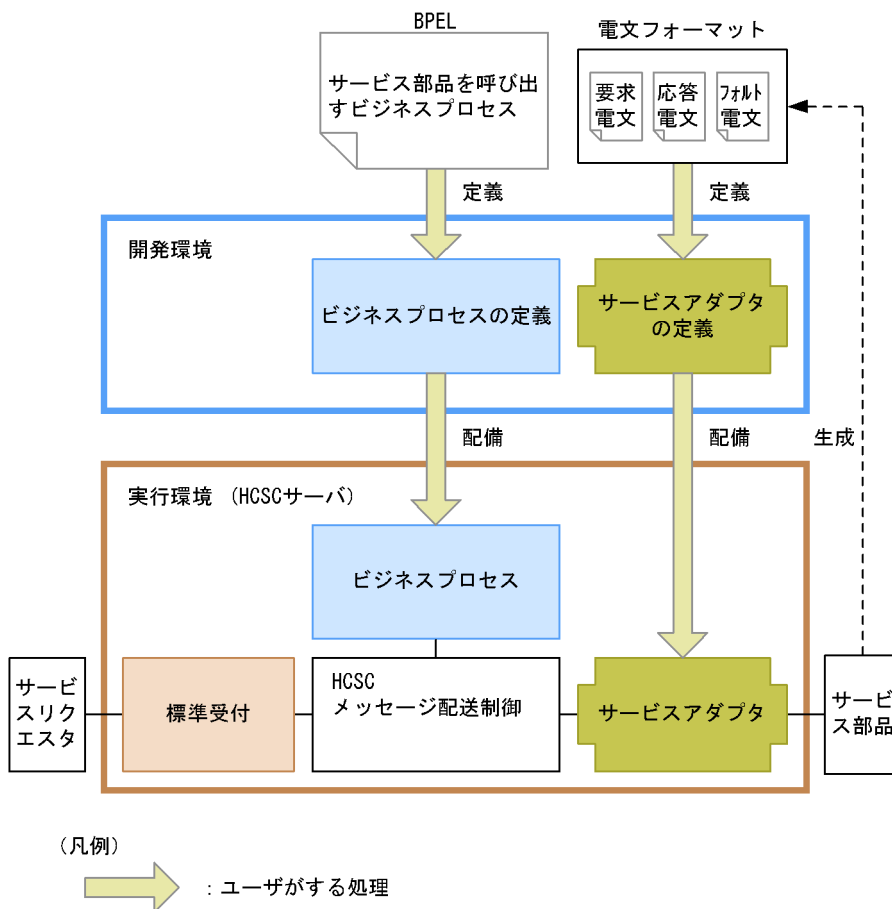
サービス部品を呼び出すためには、基本的にサービスリクエスト、受付、HCSC メッセージ配送制御、サービスアダプタ、およびサービス部品が必要です。受付は、サービス部品を呼び出すための要求を受け付けるところで、標準受付とユーザ定義受付があります。

標準受付とは、HCSC サーバが標準提供している、サービスリクエストからの要求電文を受け付けるための機能（インターフェース）です。ユーザ定義受付とは、開発環境でユーザが定義したものを HCSC サーバに配備してから、サービスリクエストからの実行要求を受け付けるための機能（インターフェース）で、ユーザが定義した任意のインターフェースで受け付けることができます。

(a) 標準受付の場合

標準受付を使用する場合の構造と開発の流れとの関係を次の図に示します。

図 5-3 標準受付を使用する場合の構造と開発の流れとの関係



サービス部品を呼び出すサービスリクエストと HCSC サーバ、およびサービス部品の関係は、次のようになっています。開発の流れに沿って、それぞれの関係を説明します。

- サービス部品側の開発の流れ

最初に呼び出すサービス部品を作成します。次に、呼び出すサービス部品に合わせた形式の電文フォーマットやビジネスプロセス定義 (BPEL) を作成し、開発環境で電文フォーマットからサービスアダプタを定義したり、ビジネスプロセスを定義したりします (ビジネスプロセスにも電文フォーマットを定義します)。呼び出すサービス部品に合わせた形式の電文フォーマットを作成する方法は、使用するプロトコル (SOAP, RMI-IIOP, WS-R, および JMS) によって異なります。定義したサービスアダプタやビジネスプロセスは実行環境 (HCSC サーバ) へ配備します。
- サービスリクエスト側の開発の流れ

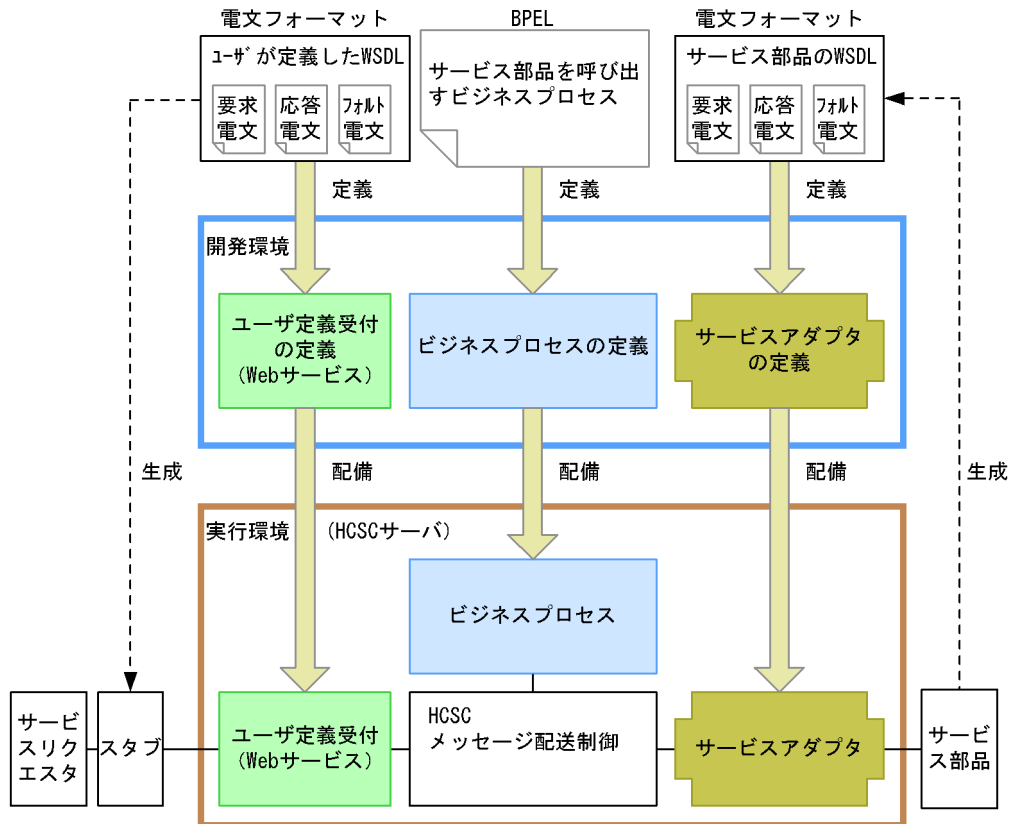
サービス部品の作成後、定義したサービスアダプタやビジネスプロセスを呼び出すサービスリクエストを作成します。サービスリクエストを作成する方法については、使用する標準受付のプロトコルによって異なります。

電文フォーマット、ビジネスプロセス定義（BPEL）、およびサービスリクエストの作成については、マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド」を参照してください。

(b) ユーザ定義受付の場合

ユーザ定義受付を使用する場合の構造と開発の流れとの関係を次の図に示します。

図 5-4 ユーザ定義受付を使用する場合の構造と開発の流れとの関係



SOAP 通信を使用する場合は、ユーザ定義受付を使用できます。サービス部品を呼び出すサービスリクエストと HCSC サーバ、およびサービス部品の関係は、次のようになっています。開発の流れに沿って、それぞれの関係を説明します。

• サービス部品側の開発の流れ

最初に呼び出すサービス部品を作成します。次に、呼び出すサービス部品に合わせた形式の電文フォーマットやビジネスプロセス定義（BPEL）を作成し、開発環境で電文フォーマットからサービスアダプタを定義したり、ビジネスプロセスを定義したり

5. システム運用

します（ビジネスプロセスにも電文フォーマットを定義します）。定義したサービスアダプタ、ビジネスプロセス、およびユーザ定義受付は実行環境（HCSC サーバ）へ配備します。

- 受付側の開発の流れ
サービス部品の作成後、呼び出すビジネスプロセスの電文フォーマットに合わせた WSDL を作成し、開発環境でユーザ定義受付を定義します。
- サービスリクエスタ側の開発の流れ
ユーザ定義受付の作成後、定義したユーザ定義受付を呼び出すサービスリクエスタを作成します。ユーザ定義受付を定義するときを使用した WSDL からスタブを生成し、スタブを呼び出すサービスリクエスタを作成します。

電文フォーマット、ビジネスプロセス定義（BPEL）、ユーザ定義受付、およびサービスリクエスタの作成については、マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム開発ガイド」を参照してください。

（2）サービス部品を呼び出す流れ

サービスリクエスタからサービス部品を呼び出す流れは、受付の種類と呼び出す HCSC コンポーネントの組み合わせによって動作が異なります。受付の種類と呼び出す HCSC コンポーネントの組み合わせを次に示します。

(a) 標準受付からサービスアダプタを直接呼び出す場合

(b) 標準受付からビジネスプロセスを呼び出す場合

(c) ユーザ定義受付からビジネスプロセスを呼び出す場合

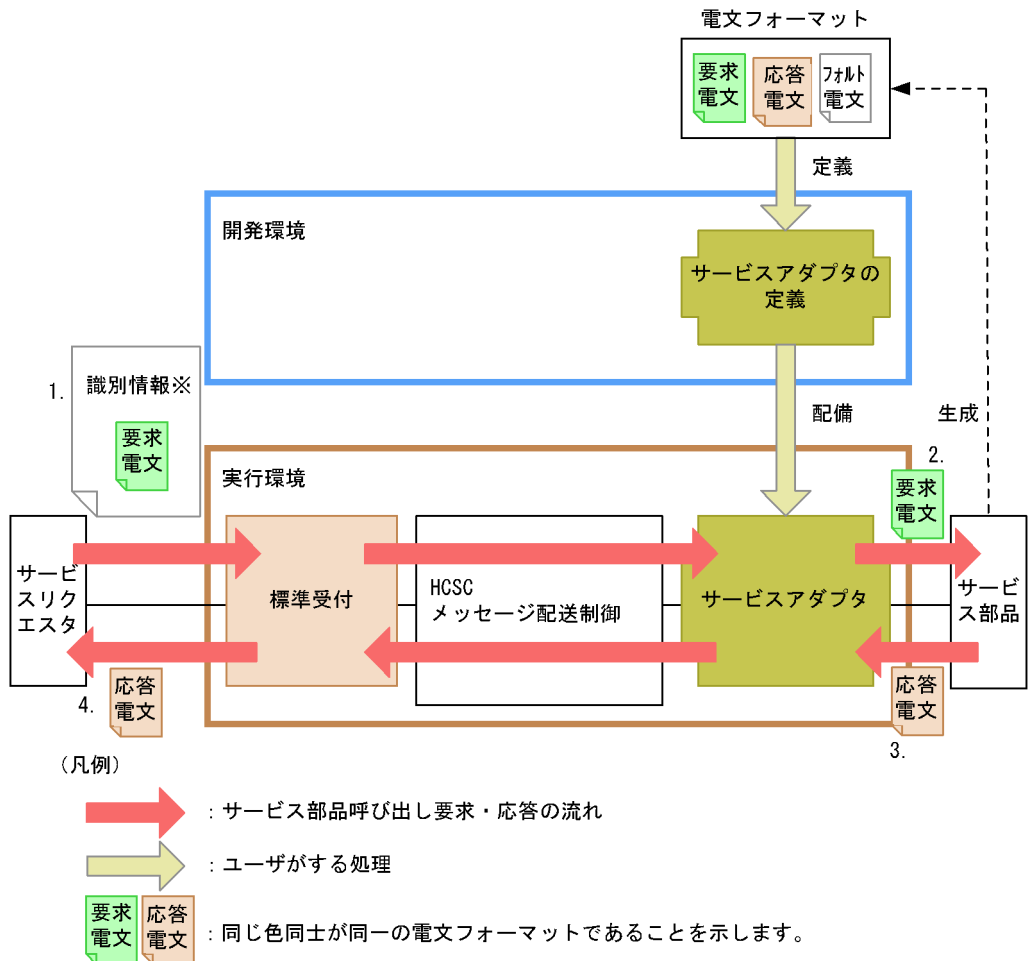
これらの場合について、次に説明します。エラー時の処理の流れについては「7. 障害対策」を参照してください。

(a) 標準受付からサービスアダプタを直接呼び出してサービス部品を実行する場合

標準受付からサービスアダプタを直接呼び出してサービス部品を実行する場合、サービスアダプタで定義したサービス名をサービスリクエスタで指定して実行します。実行すると、サービスアダプタで定義したサービス部品を呼び出します。

サービスアダプタを直接呼び出す場合の電文の流れを次の図に示します。

図 5-5 サービスアダプタを直接呼び出す場合の電文の流れ



注※ 識別情報とは、サービス名、クライアント相関IDなどです。

1. サービスリクエスタから標準受付に送信する要求電文は、開発環境でサービスアダプタを定義したときに設定した（サービス部品の形式に合わせた）電文フォーマットを使用します。そのため、サービスリクエスタ内で、サービスアダプタで定義した電文フォーマットに合わせた要求電文を作成し、作成した電文を標準受付のパラメタ（ユーザ電文のパラメタ）に設定して実行します。
2. サービスアダプタからサービス部品を呼び出します。呼び出すときは、サービスアダプタで定義した要求電文を使用します。このように、サービスリクエスタから送信する要求電文とサービス部品が受け取る要求電文は同一になります。なお、サービス部品の電文フォーマット以外の電文フォーマットでも、サービスアダプタでデータ変換定義をすれば、サービスリクエスタから要求できます。
3. サービス部品からサービスアダプタに応答電文を送信します。応答電文は、サービスアダプタで定義した応答電文と同じ電文フォーマットを使用します。

5. システム運用

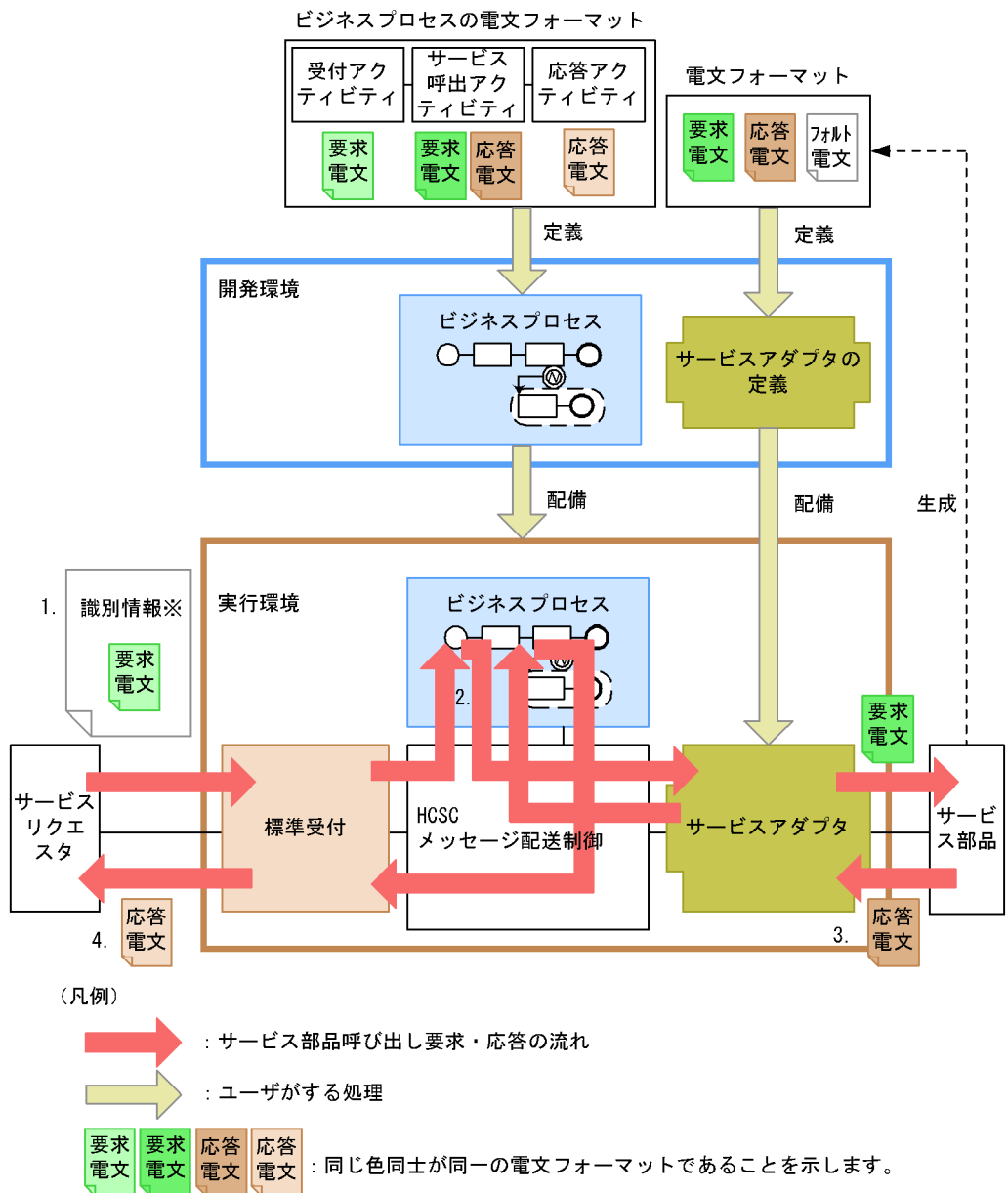
4. サービスリクエストへ応答します。応答には、サービスアダプタで定義した応答電文の電文フォーマットを使用します。このように、サービス部品から返す応答電文とサービスリクエストで受け取る応答電文は同一になります。

データ変換定義については、マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド」を参照してください。

(b) 標準受付からビジネスプロセスを呼び出してサービス部品を実行する場合

標準受付からビジネスプロセスを呼び出してサービス部品を実行する場合、ビジネスプロセスで定義したサービス名（ビジネスプロセス名）をサービスリクエストで指定して実行します。そして、ビジネスプロセスに定義したプロセスに従って、処理を実行します。プロセスはアクティビティから構成されています。その中の、サービス部品呼出アクティビティでは、定義されたサービスアダプタを呼び出して、サービスアダプタに定義されたサービス部品を実行します。ビジネスプロセスを呼び出す場合の電文の流れを次の図に示します。

図 5-6 ビジネスプロセスを呼び出す場合の電文の流れ



注※ 識別情報とは、サービス名、クライアント相関IDなどです。

1. サービスリクエスタ内で、ビジネスプロセスの受付アクティビティで定義した要求電文の電文フォーマットに合わせた要求電文を作成し、作成した電文を標準受付のパラメタ（ユーザ電文のパラメタ）に設定して実行します。サービスリクエスタで指定する要求電文は、ビジネスプロセスの受付アクティビティに定義した電文フォーマットを使用します。

5. システム運用

2. ビジネスプロセスからサービス部品を呼び出します。呼び出すときは、サービス呼出アクティビティで定義した要求電文を使用します。この要求電文の電文フォーマットは、呼び出すサービス部品のサービスアダプタで定義した要求電文の形式と同じである必要があります。なお、サービス部品の電文フォーマット以外の電文フォーマットでも、サービスアダプタでデータ変換定義をすれば、サービス呼出アクティビティから要求できます。
3. サービス部品からサービスアダプタに応答電文を送信します。応答電文は、ビジネスプロセスのサービス呼出アクティビティの応答電文と同じ電文フォーマットを定義します。
4. サービスリクエストへ応答します。応答には、ビジネスプロセスの応答アクティビティで定義した応答電文の電文フォーマットを使用します。

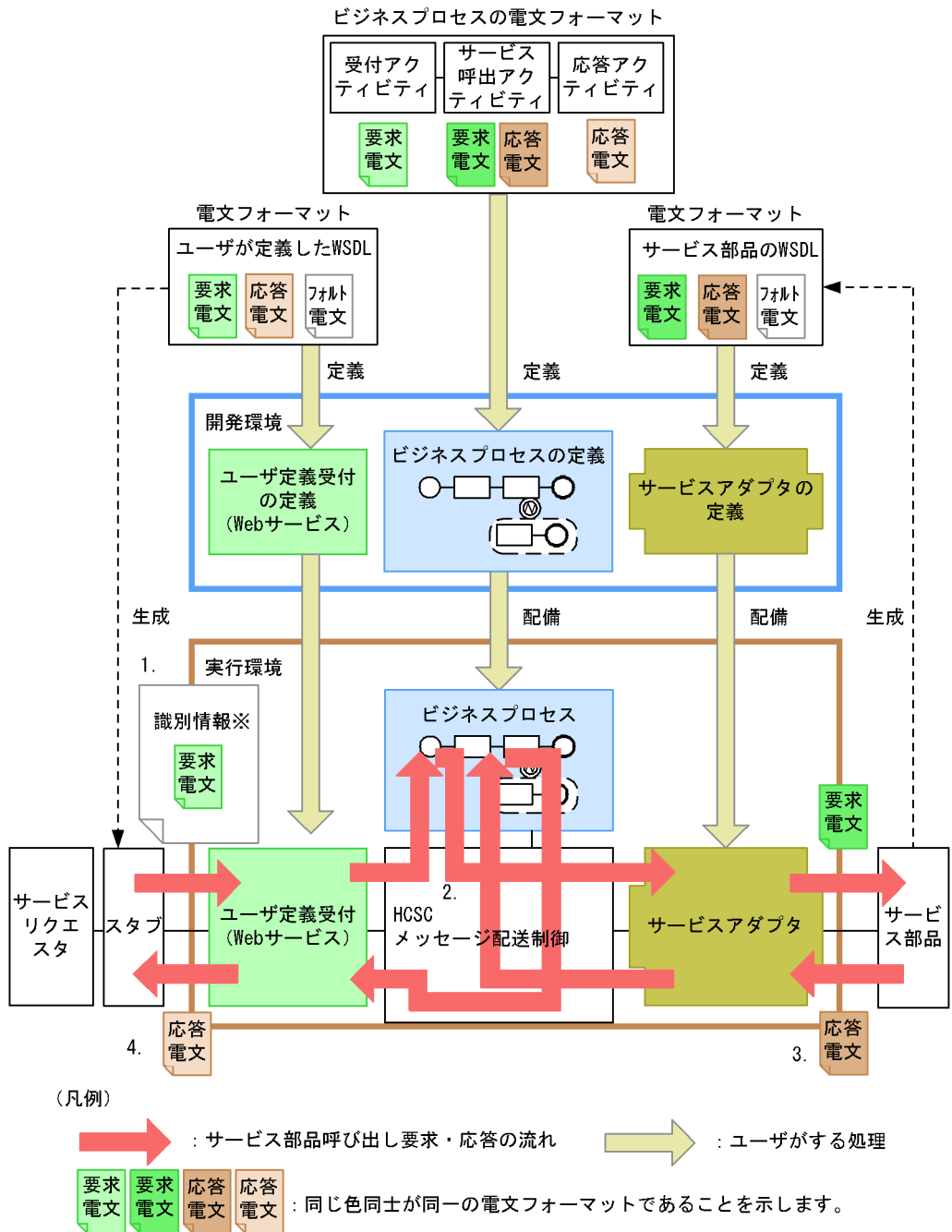
データ変換定義については、マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド」を参照してください。

(c) ユーザ定義受付からビジネスプロセスを呼び出してサービス部品を実行する場合

ユーザ定義受付は、ビジネスプロセスの呼び出しをする場合にだけ使用できます。サービスリクエストからは、HCSC サーバで定義したサービス名（ビジネスプロセス名）などは指定しないで、ユーザ定義受付に定義した WSDL を使用して要求します。ユーザ定義受付に定義した WSDL は、ビジネスプロセスの受付アクティビティに定義した電文フォーマットに形式を合わせます。

開発環境での定義に従ってユーザ定義受付からビジネスプロセスを呼び出し、ビジネスプロセスに定義したプロセスに従って、処理を実行します。サービス呼出アクティビティでは、定義されたサービスアダプタを呼び出し、サービスアダプタに定義されたサービス部品を実行します。ユーザ定義受付を使う場合の電文の流れを次の図に示します。

図 5-7 ユーザ定義受付を使う場合の電文の流れ



注※ 識別情報とは、サービス名、クライアント相関IDなどです。

1. サービスリクエストからの要求電文は、ビジネスプロセスの受付アクティビティに定義した電文フォーマットと同一のものになります。そのため、ビジネスプロセスの受

5. システム運用

付アクティビティに定義した電文フォーマットに合わせた形式の WSDL を開発環境のユーザ定義受付定義で設定する必要があります。サービスリクエストからユーザ定義受付を呼び出すときは、開発環境でユーザ定義受付に定義した WSDL を使用します。WSDL から WSDL2Java コマンドを使用してスタブを生成し、スタブを呼び出すようにサービスリクエストを実装します。

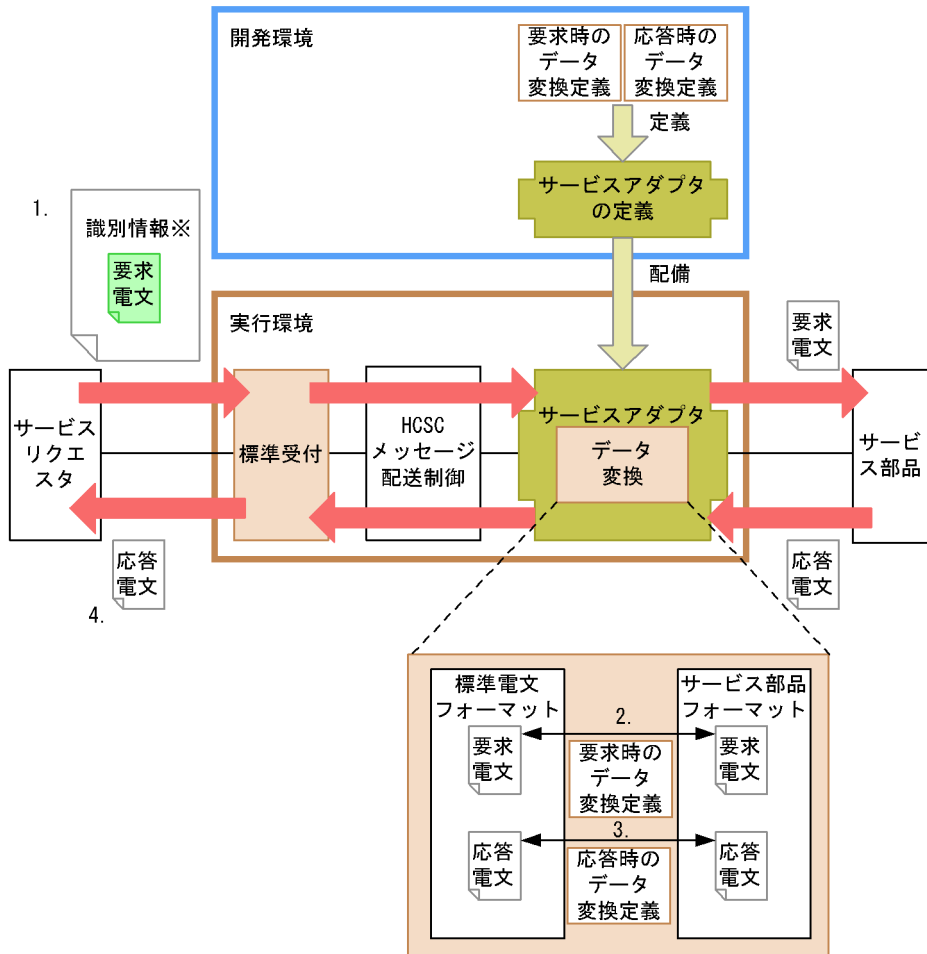
2. ビジネスプロセスからサービス部品を呼び出すときは、サービス呼出アクティビティで定義した要求電文を使用します。この要求電文の電文フォーマットは、呼び出すサービス部品のサービスアダプタで定義した要求電文の形式と同じである必要があります。
3. サービス部品からの応答電文もビジネスプロセスのサービス呼出アクティビティの応答電文で同じ電文フォーマットを定義します。なお、サービス部品の電文フォーマット以外の電文フォーマットでも、サービスアダプタでデータ変換定義をすれば、サービス呼出アクティビティから要求できます。
4. サービスリクエストへの応答は、ビジネスプロセスの応答アクティビティで定義した応答電文の電文フォーマットを使用します。この電文フォーマットは開発環境のユーザ定義受付定義で設定する WSDL の応答電文と同じ形式である必要があります。

データ変換定義については、マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド」を参照してください。




(3) サービス部品側と異なる電文フォーマットでサービス部品を呼び出す場合

サービス部品側の電文フォーマットと異なる電文でサービス部品を呼び出す場合、またはサービス部品側の電文フォーマットと異なる電文を応答として受信する場合は、開発環境で標準電文フォーマットを定義します。また、標準電文フォーマットとサービス部品電文フォーマットの変換ルールを定義したデータ変換定義は、開発環境で定義します。標準電文フォーマットの電文をサービス部品電文フォーマットの電文に変換することでサービス部品を呼び出せます。標準電文フォーマットとデータ変換定義の関係を次の図に示します。

図 5-8 標準電文フォーマットとデータ変換定義の関係



(凡例)

-  : サービス部品呼び出し要求・応答用の流れ
-  : ユーザがする処理
-  : データ変換処理

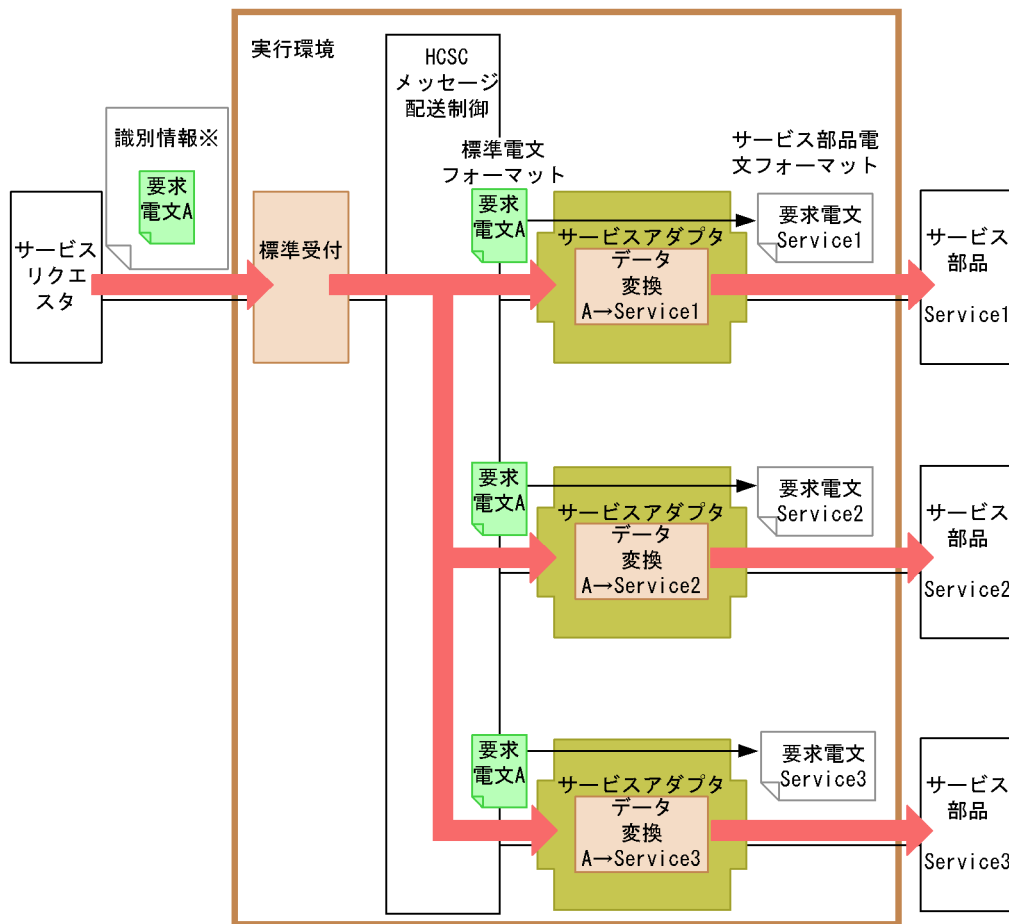
注※ 識別情報とは、サービス名、クライアント相関IDなどです。

1. サービスリクエスタからは、標準電文フォーマットの形式に合わせた電文フォーマットを要求電文に指定して、サービス部品の呼び出しを要求します。
2. サービスアダプタでは標準電文フォーマットからサービス部品電文フォーマットにデータを変換し、変換後の電文フォーマットでサービス部品を呼び出します。
3. サービス部品からの応答についても、サービスアダプタで、サービス部品電文フォーマットから標準電文フォーマットにデータを変換します。
4. サービスリクエスタに標準電文フォーマットを応答します。




5. システム運用

複数のサービスアダプタがある場合も、図 5-9 に示すように Service1 用のサービスアダプタ、Service2 用のサービスアダプタ、Service3 用のサービスアダプタで、それぞれに同一の標準電文フォーマット A と、それぞれのデータ変換定義を定義すると、サービスリクエスト側から要求するときに、要求時のサービス名（Service1 など）を変更すれば、同じ要求電文で要求できます。

図 5-9 複数のサービスアダプタで同一の標準電文フォーマットを定義した場合の流れ



(凡例)

-  : サービス部品呼び出し要求・応用の流れ
-  : データ変換処理
-  : 同じ色同士が同一の電文フォーマットであることを示します。

注※ 識別情報とは、サービス名、クライアント相関IDなどです。

標準電文フォーマット、サービス部品電文フォーマット、およびデータ変換定義について

では、マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド」を参照してください。

(4) サービス部品呼び出し処理で与えられる識別情報

HCSC サーバ内のサービス部品呼び出し要求とその流れを区別するために、各要求電文にメッセージ共通 ID とサービスリクエスト ID が割り当てられます。これらの ID は電文の実行履歴、メッセージログ、リクエストトレース、および性能解析トレースで出力されます。

メッセージ共通 ID とサービスリクエスト ID をたどることで、サービス部品呼び出しの処理の流れを追跡できます。電文の追跡については「7.7 サービス部品呼び出し要求時の障害対策」を参照してください。

なお、HCSC サーバに割り当てられる識別情報のほかに、ユーザが任意の値を設定できるクライアント関連 ID があります。

(a) 識別情報の種類

• メッセージ共通 ID

サービスリクエストからサービス部品呼び出し要求を受け取ったタイミングで自動的に割り当てられます。応答まで同じメッセージ共通 ID を使用します。

サービスリクエストからビジネスプロセスを呼び出す場合でも、ビジネスプロセス内の個々のサービス部品呼び出し処理を同一の処理として識別できます。メッセージ共通 ID の形式を次に示します。

```
csc_[サーバ名]_[受付時刻(ミリ秒)]_[通番]
```

注 末尾に与えられる通番は、「1」から順番に割り当てられる番号です。

(例) CSC_CSCServerName_2008-04-20_11:32:18.360_1

• サービスリクエスト ID

HCSC サーバ内の個別のサービス部品呼び出し処理ごとに割り当てられる識別情報です。

サービスリクエストからのサービス部品呼び出し要求を受け取ったタイミングだけでなく、ビジネスプロセスからのサービス部品呼び出し処理を実施するタイミングでも割り当てられます。サービスリクエスト ID の形式を次に示します。

```
msg_[サーバ名]_[受付種別]_[受付時刻(ミリ秒)]_[通番]
```

注 末尾に与えられる通番は、「1」から順番に割り当てられる番号です。

(例) MSG_CSCServerName_MDBWSR_2008-04-20_11:32:18.360_1

5. システム運用

- ビジネスプロセスインスタンス ID

ビジネスプロセスの個々のプロセスインスタンスを特定するための識別情報（プロセスインスタンスの識別子）です。サービスリクエストからビジネスプロセスの再実行を要求する場合や、プロセスインスタンスの実行履歴を削除するときに使用します。

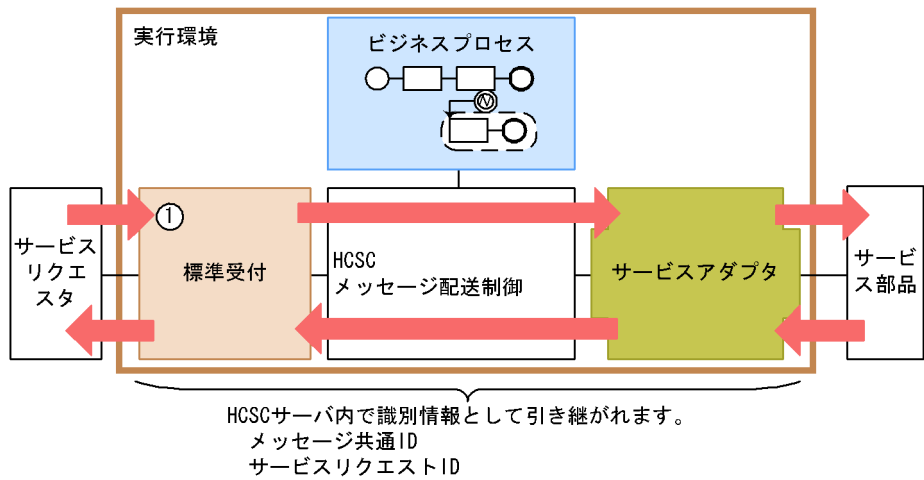
(b) 識別情報が割り当てられるタイミング

標準受付から直接サービスアダプタを呼び出す場合は、メッセージ共通 ID およびサービスリクエスト ID は、HCSC サーバ内で識別情報として引き継がれます。標準受付やユーザ定義受付からビジネスプロセスを経由してサービスアダプタを呼び出す場合は、メッセージ共通 ID は、HCSC サーバ内で識別情報として引き継がれます。しかし、サービスリクエスト ID は、サービス部品呼び出し処理ごとの識別情報として引き継がれます。また、ビジネスプロセスインスタンス ID は、ビジネスプロセスが最初に要求を受け付けるときに割り当てます。

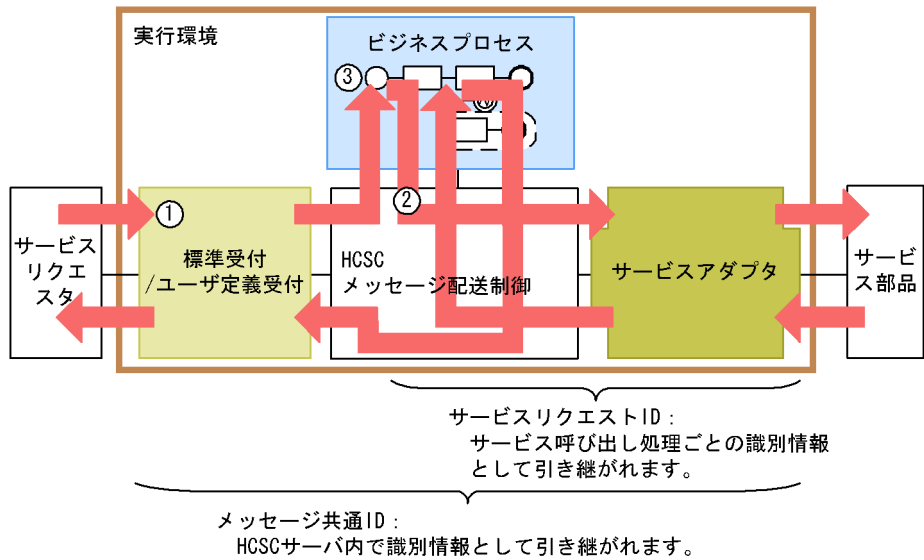
メッセージ共通 ID とサービスリクエスト ID が割り当てられるタイミングを次の図に示します。

図 5-10 識別情報割り当てのタイミング

- 標準受付から直接サービスアダプタを呼び出す場合



- ビジネスプロセスを呼び出す場合



(凡例)

→ : サービス部品呼び出し要求・応答の流れ

- ① : メッセージ共通ID, およびサービスリクエストIDの割り当て
- ② : サービスリクエストIDの割り当て
- ③ : ビジネスプロセスインスタンスIDの割り当て

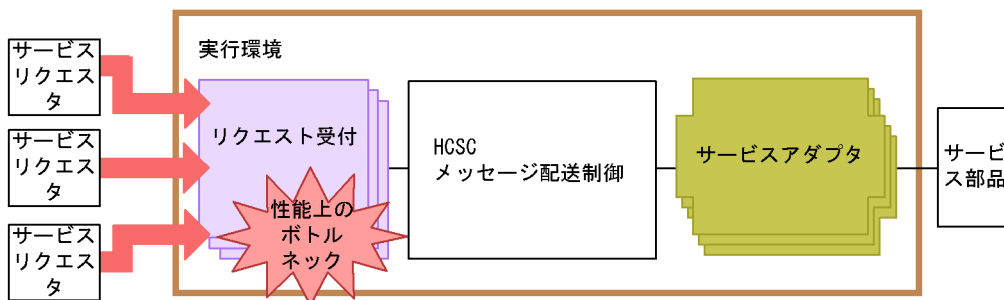
(5) サービス部品呼び出し処理の多重度

(a) HCSC サーバ内の多重度

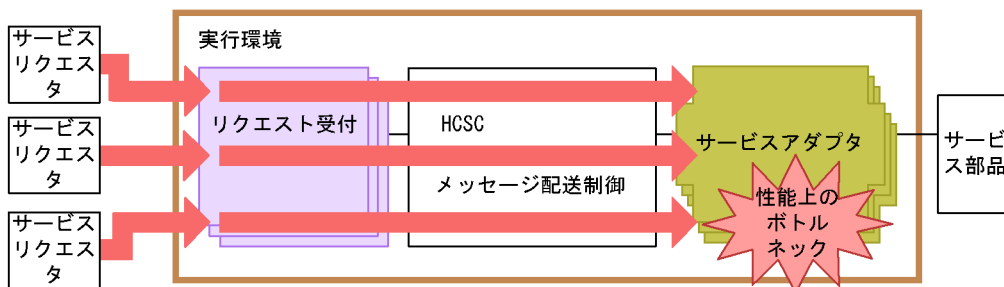
サービスリクエストからのサービス部品の呼び出し要求が同時に実行される場合があるため、これを考慮して、サービス部品呼び出し処理の多重度（同時に実行できる数）を設定する必要があります。多重度の設定が良くない場合、性能上のボトルネックになるおそれがあります。多重度の設定によってボトルネックになる例を次の図に示します。

図 5-11 多重度の設定によってボトルネックになる例

● リクエスト受付の多重度が小さい場合



● サービスアダプタの多重度が小さい場合



(凡例)


 : サービス部品呼び出し要求の流れ

図 5-11 に示すように、リクエスト受付（標準受付またはユーザ定義受付）の多重度が小さいと、一度にたくさん要求が来ても同時に処理ができないため、一度に実行できる処理が少なくなります。また、リクエスト受付の多重度を大きくしても、サービスアダプタで定義している多重度が小さいと、サービスアダプタで一度に実行できる処理が少ないため、サービスアダプタがボトルネックになり、意図した性能を得られなくなります。

多重度は、標準の同期受付（Web サービス）の場合は、スレッド数および最大同時実行数で設定します。標準の同期受付（SessionBean）の場合は、インスタンス数で設定します。HCSC サーバ内の多重度の設定について、表 5-6、表 5-7、および表 5-8 に示します。

表 5-6 標準受付の多重度を設定するプロパティ

定義ファイル	プロパティ	内容
HCSC サーバランタイム 定義ファイル	request-ejb.instance.minimum	標準の同期受付 (SessionBean) のインスタンス最小数
	request-ejb.instance.maximum	標準の同期受付 (SessionBean) のインスタンス最大数
	request-ejb.parallel.count	CTM がアプリケーションを呼び出すために用意するスレッド数
	request-soap.instance.minimum	標準の同期受付 (Web サービス) の最小同時実行数
	request-soap.instance.maximum	標準の同期受付 (Web サービス) の最大同時実行数
	request-jms.instance.maximum	標準の非同期受付 (MDB (WS-R)) のインスタンス最大数

表 5-7 ユーザ定義受付の多重度を設定するプロパティ

定義ファイル	プロパティ	内容
ユーザ定義受付ランタイム定義ファイル	user-defined-reception-soap.threads.maximum	最大同時実行数

表 5-8 サービスアダプタの多重度を設定する項目

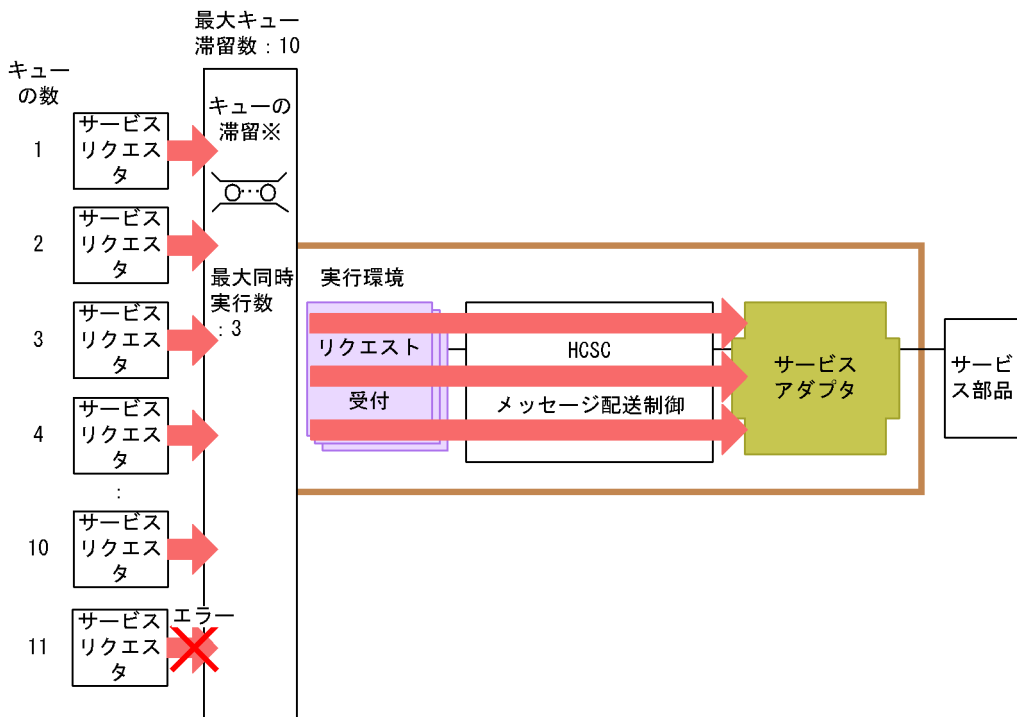
画面	内容
開発環境でのサービスアダプタ定義画面	最大インスタンス数

注 最大インスタンス数に 0 を指定した場合は、上限が設定されないで無制限になります。


Web サービス (SOAP 通信) の場合、同時実行数のほかに Web コンテナレベルでの最大キュー滞留数を設定できます。最大同時実行数と最大キュー滞留数を設定しておくことで、サービスリクエストからの要求を受けたときに、実際の処理をしないで処理を待たせておけるため、流量制御ができます。サービスリクエストからの要求と最大キュー滞留数の関係を次の図に示します。

5. システム運用

図 5-12 サービスリクエストからの要求と最大キュー滞留数の関係



(凡例)

 : サービス部品呼び出し要求の流れ

注※ Webサービスの実行待ちキューの滞留を示します。

例えば、図 5-12 に示すように、最大同時実行数を 3 とした場合、最大キュー滞留数を 10 にしておくと、同時にきたサービス部品呼び出し要求のうち、3 件までは同時に処理されます。同時実行数より多くのサービス部品呼び出し要求（4 件以上）がきた場合は、最大キュー滞留数（10 件）までは、処理待ちの状態となり、先に実行されている処理が終わり次第、順次処理が実行されます。

最大キュー滞留数の数が上限（10 件）まで達している場合に、さらにサービスリクエストからサービス部品呼び出し要求がきた場合は、要求は受け付けられないため、エラーとしてサービスリクエストに応答されます。

HCSC サーバ内の最大キュー滞留数は、表 5-9 および表 5-10 に示す定義ファイルのプロパティで設定します。

表 5-9 標準受付の最大キュー滞留数を設定するプロパティ

定義ファイル	プロパティ	内容
HCSC サーバランタイム定義ファイル	request-soap.queue-size	標準の同期受付（Web サービス）の実行待ちキューのサイズ

表 5-10 ユーザ定義受付の最大キュー滞留数を設定するプロパティ

定義ファイル	プロパティ	内容
ユーザ定義受付ランタイム定義ファイル	user-defined-reception-soap.queue-size	実行待ちキューサイズ

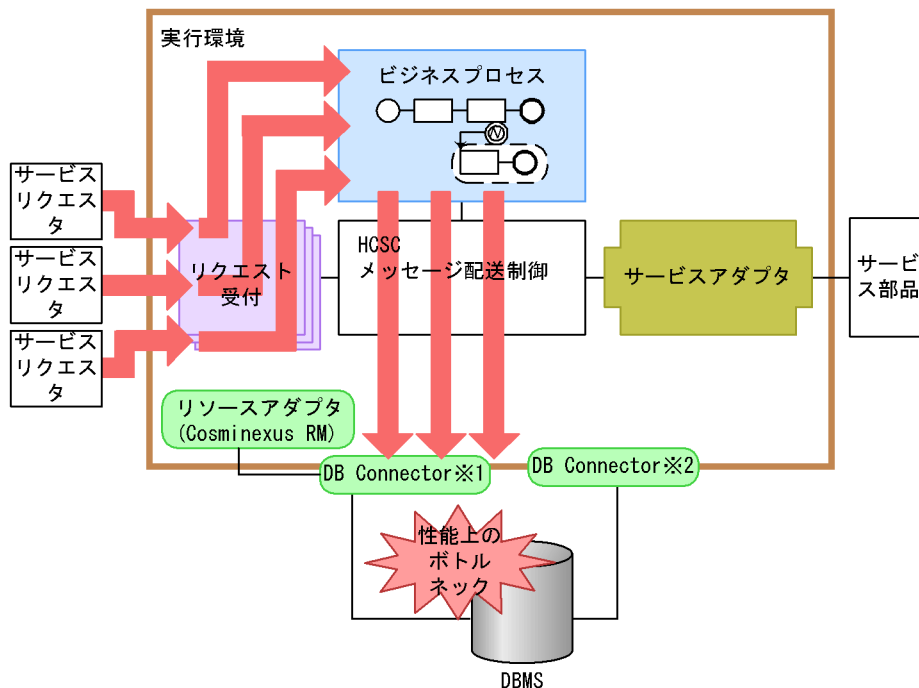
(b) データベースへのアクセスに関する多重度

永続化するビジネスプロセスを使用する（プロセスインスタンスの実行履歴を採取する場合）、非同期プロトコルを使用する場合、および電文の実行履歴を採取する場合は、HCSC サーバに設定する DB Connector の定義で、コネクションプール数を設定します。

- 永続化するビジネスプロセスを使用する場合

HCSC サーバに設定した二つの DB Connector のうち、HCSC サーバセットアップ定義ファイルの dbcon-xadisplayname プロパティに指定した DB Connector を使用します。リクエスト受付からビジネスプロセスを経由して、一度に多くの要求が来ても、DB Connector の部分でデータベースへの出力が一度にできなくなります。すると、性能上のボトルネックが発生して、その結果、ビジネスプロセスの同時実行処理性能が遅くなります。そのため、プロセスインスタンスの実行履歴を採取するときの多重度を設定する必要があります。永続化するビジネスプロセスを使用する場合のボトルネックを次の図に示します。

図 5-13 永続化するビジネスプロセスを使用する場合のボトルネック



(凡例)

➡ : サービス部品呼び出し要求の流れ

注※1 dbcon-xadisplanameプロパティに指定したLocalTransactionまたはXATransactionのDB Connectorです。

注※2 dbcon-noisplanameプロパティに指定したNoTransactionまたはXATransactionのDB Connectorです。

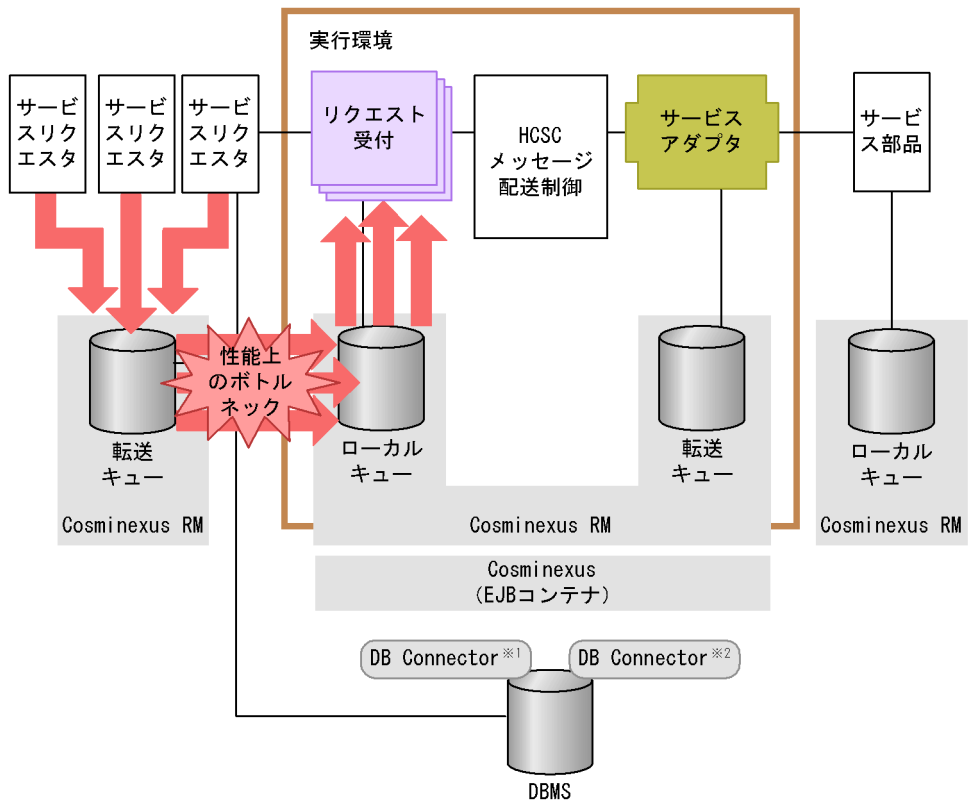
• 非同期プロトコルを使用する場合

HCSC サーバに設定した二つの DB Connector のうち、HCSC サーバセットアップ定義ファイルの dbcon-xadisplaname プロパティに指定した DB Connector は、非同期 (MDB (WS-R) または MDB (DB キュー)) の標準受付でキューからメッセージを取り出したり、非同期 (MDB (WS-R) または MDB (DB キュー)) のサービスアダプタでメッセージを送信したりするときにも使用します。そのため、プロセスインスタンスの実行履歴を採取するときの多重度に加えて、HCSC サーバがリクエスト受付のキューからメッセージを取り出すときや、サービスアダプタが転送キューにメッセージを送信するときの多重度も含めて、コネクションプール数を検討する必要があります。


キューに対して一度に多くの要求が来ても、Cosminexus RM のリソースアダプタが同時にメッセージの取り出し処理ができないで、性能上のボトルネックが発生します。また、サービスアダプタの多重度を大きくしていても、サービスアダプタがキューにメッセージを送信するときの同時実行数が少ないと、やはり性能上のボトルネックが

発生します。非同期プロトコルを使用する場合のボトルネックを次の図に示します。

図 5-14 非同期プロトコルを使用する場合のボトルネック



(凡例)

 : サービス部品呼び出し要求の流れ

注※1 LocalTransactionまたはXATransaction用のDB Connectorです。

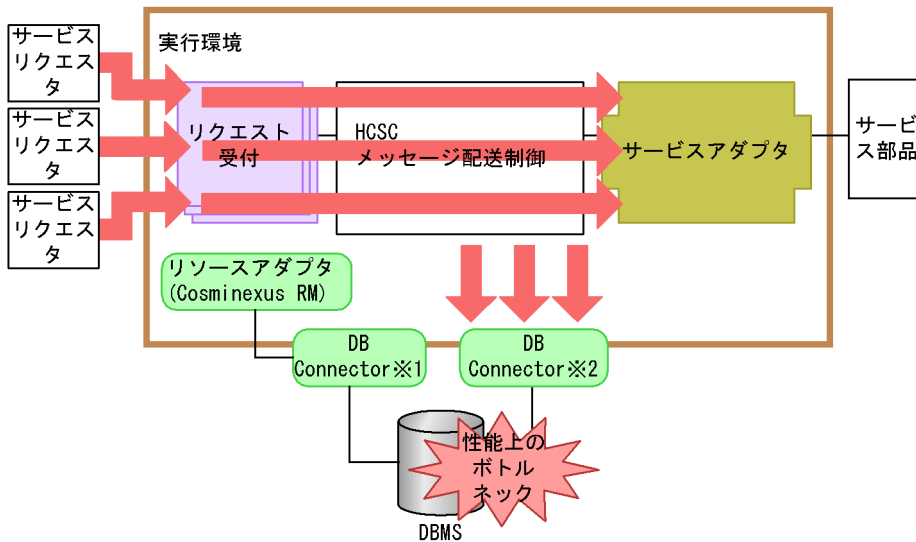
注※2 NoTransaction用のDB Connectorです。

- 電文の実行履歴を採取する場合


HCSC サーバに設定した二つの DB Connector のうち、HCSC サーバセットアップ定義ファイルの dbcon-nodisplayname プロパティに指定した DB Connector を使用します。リクエスト受付に一度に多くの要求が来ても、DB Connector の部分でデータベースへの出力が一度にできなくなるため、性能上のボトルネックが発生して、その結果、サービス部品呼び出しの同時実行処理性能が遅くなります。そのため、電文の実行履歴を採取するときの多重度を設定する必要があります。電文の実行履歴を採取する場合のボトルネックを次の図に示します。

5. システム運用

図 5-15 電文の実行履歴を採取する場合のボトルネック



(凡例)

 : サービス部品呼び出し要求の流れ

注※1 LocalTransactionまたはXATransaction用のConnectorです。
 注※2 NoTransaction用のConnectorです。

データベースへのアクセスに関する多重度は、次の表に示すように設定します。

表 5-11 DB Connector の多重度を設定するプロパティ

定義ファイル	プロパティ	内容
DB Connector (LocalTransaction または XATransaction) のセットアップ時に設定する属性ファイル	MinPoolSize	プールの最小値
	MaxPoolSize	プールの最大値
DB Connector (NoTransaction) のセットアップ時に設定する属性ファイル	MinPoolSize	プールの最小値
	MaxPoolSize	プールの最大値

注 1 プールの最大値を増やした場合、データベース側の同時接続数も変更する必要があるため、注意が必要です (HiRDB の場合、pd_max_users (HiRDB の最大接続数) となります)。

注 2 実行環境が使用する DB コネクション数の最大値については、「表 3-1 実行環境が使用する DB コネクションの数」を参照してください。

表 5-12 Cosminexus RM の多重度を設定するプロパティ

定義ファイル	プロパティ	内容
Cosminexus RM のセットアップ時に 設定する属性ファイル	MinPoolSize	プールの最小値
	MaxPoolSize	プールの最大値

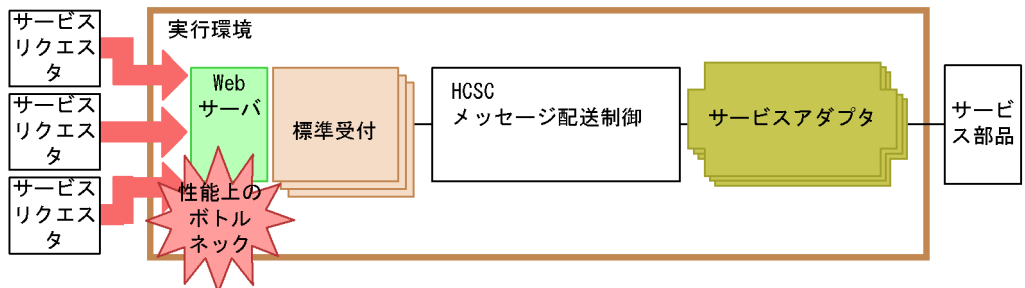
(c) Web サービス (SOAP 通信) に関する多重度

Web サービス (SOAP 通信) を使用する場合は、実行環境で設定している Web サーバ (HTTP サーバ) の同時実行スレッド数も関係します。


Web サービス (SOAP 通信) の標準受付やユーザ定義受付が複数ある場合、

各受付に設定した同時実行スレッド数の合計より、Web サーバに設定した全体の同時実行スレッド数が優先されます。そのため、Web サーバに設定した全体の同時実行スレッド数が、各受付に設定した同時実行スレッド数の合計より小さいと、一度に多くの要求が来ても同時に処理ができないため、性能上のボトルネックになることがあります。Web サービス (SOAP 通信) を使用する場合のボトルネックを次の図に示します。

図 5-16 Web サービス (SOAP 通信) を使用する場合のボトルネック



(凡例)

 : サービス部品呼び出し要求の流れ

Web サービス (SOAP 通信) に関する多重度は、次のように設定します。

Hitachi Web Server の場合

コンフィグファイルに指定できるディレクティブでのサーバの性能についての定義をします。

詳細については、マニュアル「Hitachi Web Server」を参照してください。

インプロセス HTTP サーバ機能の場合

運用管理ポータル の [論理サーバの環境設定] - [J2EE サーバ] - [J2EE サーバの論理サーバ名] - [HTTP サーバ] で次の内容を設定します。

- 同時実行スレッド数
- 初期スレッド数

5. システム運用

詳細については、マニュアル「Cosminexus システム構築ガイド」を参照してください。

なお、Web サーバ（HTTP サーバ）の同時実行スレッド数が十分な数を確保できない状況であっても、個々のリクエスト受付で必ず最低限の実行をする場合は、占有スレッド数を定義します。

占有スレッド数を定義した場合は、Web サーバ（HTTP サーバ）の同時実行スレッド数以上の要求が個別のリクエスト受付に来た場合でも、必ず指定した数だけは同時に実行されます。

ほかのリクエスト受付に要求が来ていない場合は、最大同時実行数まで同時に実行できます。

HCSC サーバ内の占有スレッド数は、表 5-13 および表 5-14 に示すように設定します。

表 5-13 標準受付の占有スレッド数を設定するプロパティ

定義ファイル	プロパティ	内容
HCSC サーバランタイム定義ファイル	request-soap.exclusive.threads	標準の同期受付（Web サービス）の占有スレッド数

表 5-14 ユーザ定義受付の占有スレッド数を設定するプロパティ

定義ファイル	プロパティ	内容
ユーザ定義受付ランタイム定義ファイル	user-defined-reception-soap.exclusive.threads	占有スレッド数

最大同時実行数と占有スレッド数の関係を次の図に示します。

図 5-17 最大同時実行数と占有スレッド数の関係

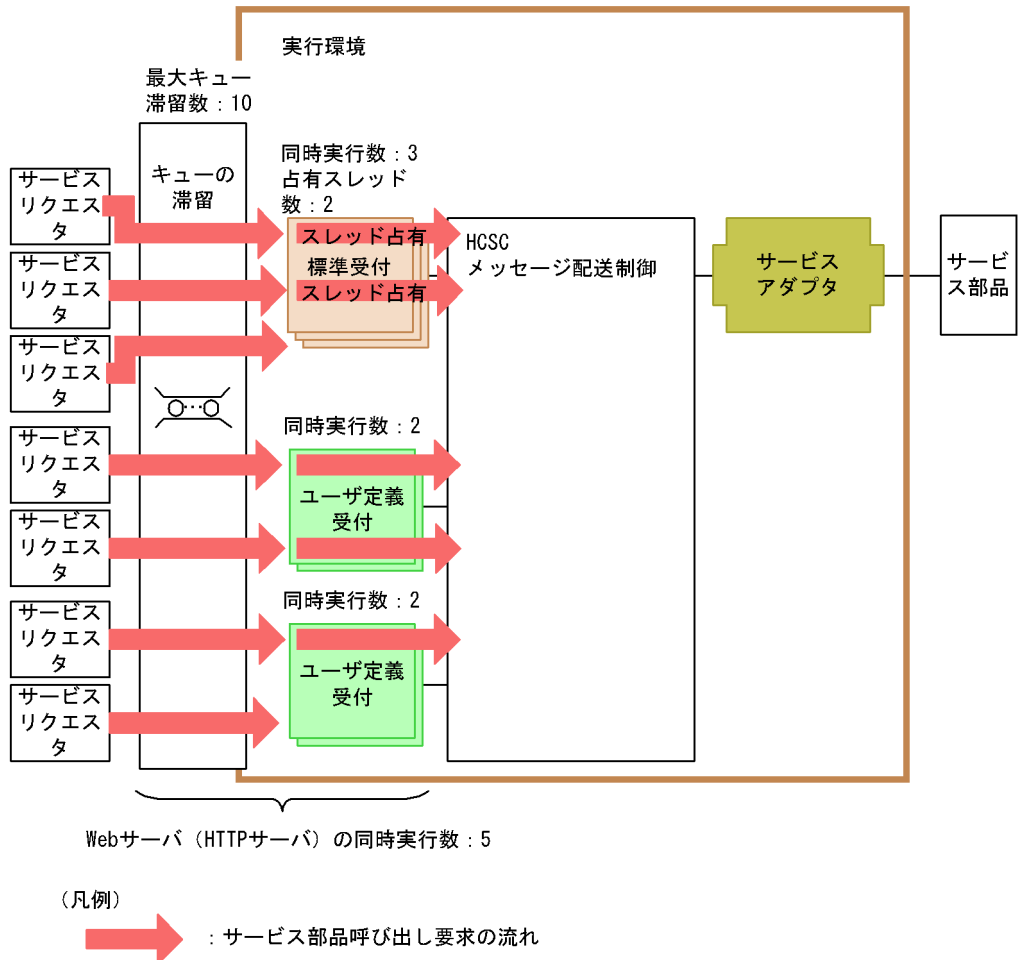


図 5-17 に示すように、標準受付、二つのユーザ定義受付、および Web サーバ（HTTP サーバ）を次のように設定した場合、標準受付は必ず二つのスレッドを占有します。

- 標準受付：最大キュー滞留数 10，同時実行数 3，占有スレッド数 2
- ユーザ定義受付：同時実行数 2
- Web サーバ（HTTP サーバ）：同時実行数 5

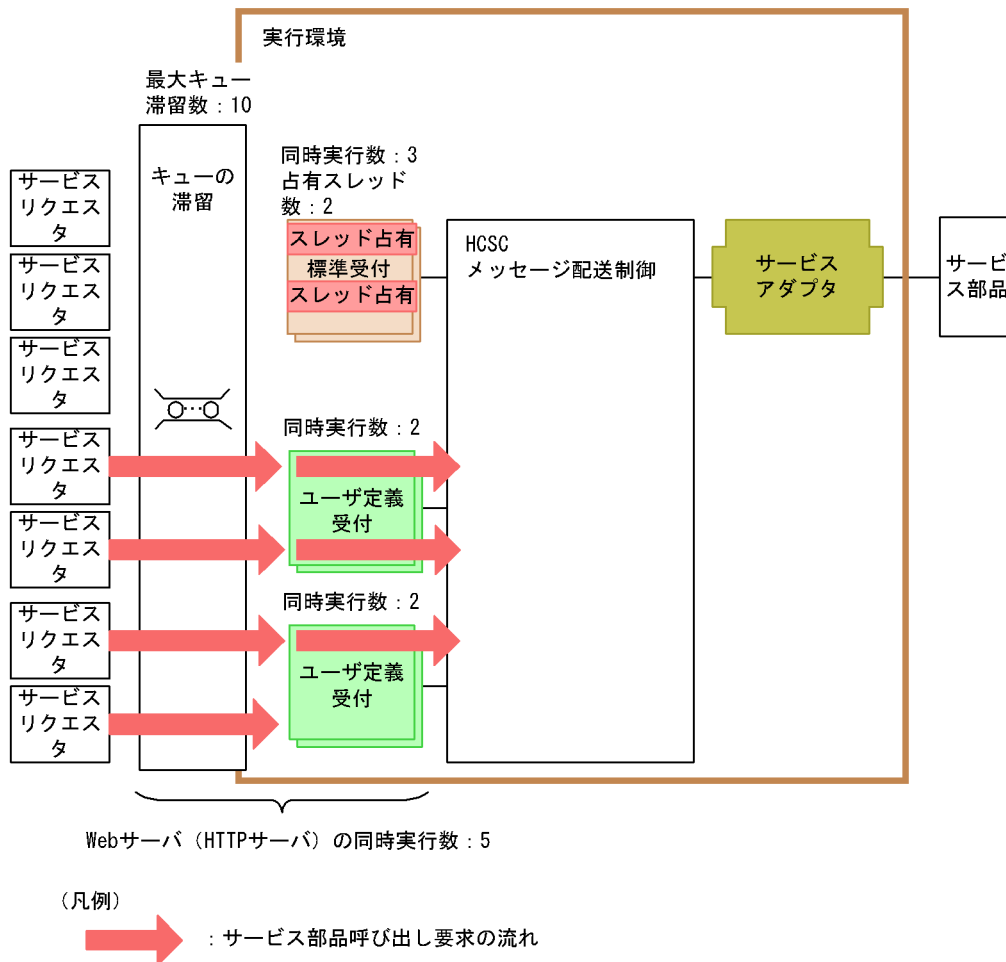
そのため、Web サーバ（HTTP サーバ）の同時実行数に指定した 5 件以上の要求が来ると、二つのスレッドは標準受付の実行のために使用され、残りの三つのスレッドを使ってユーザ定義受付が動作します。

ただし、最大キュー滞留数、標準受付の同時実行数、占有スレッド数、および Web サーバ（HTTP サーバ）の同時実行数が図 5-17 と同じ場合で、図 5-18 に示すように、占有スレッド数を指定した標準受付に要求が来ていないときでも、必ず二つはスレッドを占有して実行する状態になります。また、ほかのユーザ定義受付では、それぞれ同時実行

5. システム運用

数が2件で合計の同時実行数は4件になるはずですが、Webサーバ（HTTPサーバ）の同時実行数5件であるため、残り三つしか処理できなくなります。ほかのリクエスト受付の同時実行数が増えることはありません。

図 5-18 占有スレッド数を指定した受付に要求が来ない場合



(6) HCSC サーバに関連するタイマの設定

同期のサービス部品呼び出しの場合、応答が返って来ない場合のタイムアウト値を設定することで、無応答でハングアップすることを回避できます。

また、サービス部品での実際の処理に掛かる最大時間を考慮して、タイマを設定する必要があります。設定できるタイマについて次の図に示します。

図 5-19 設定できるタイマ

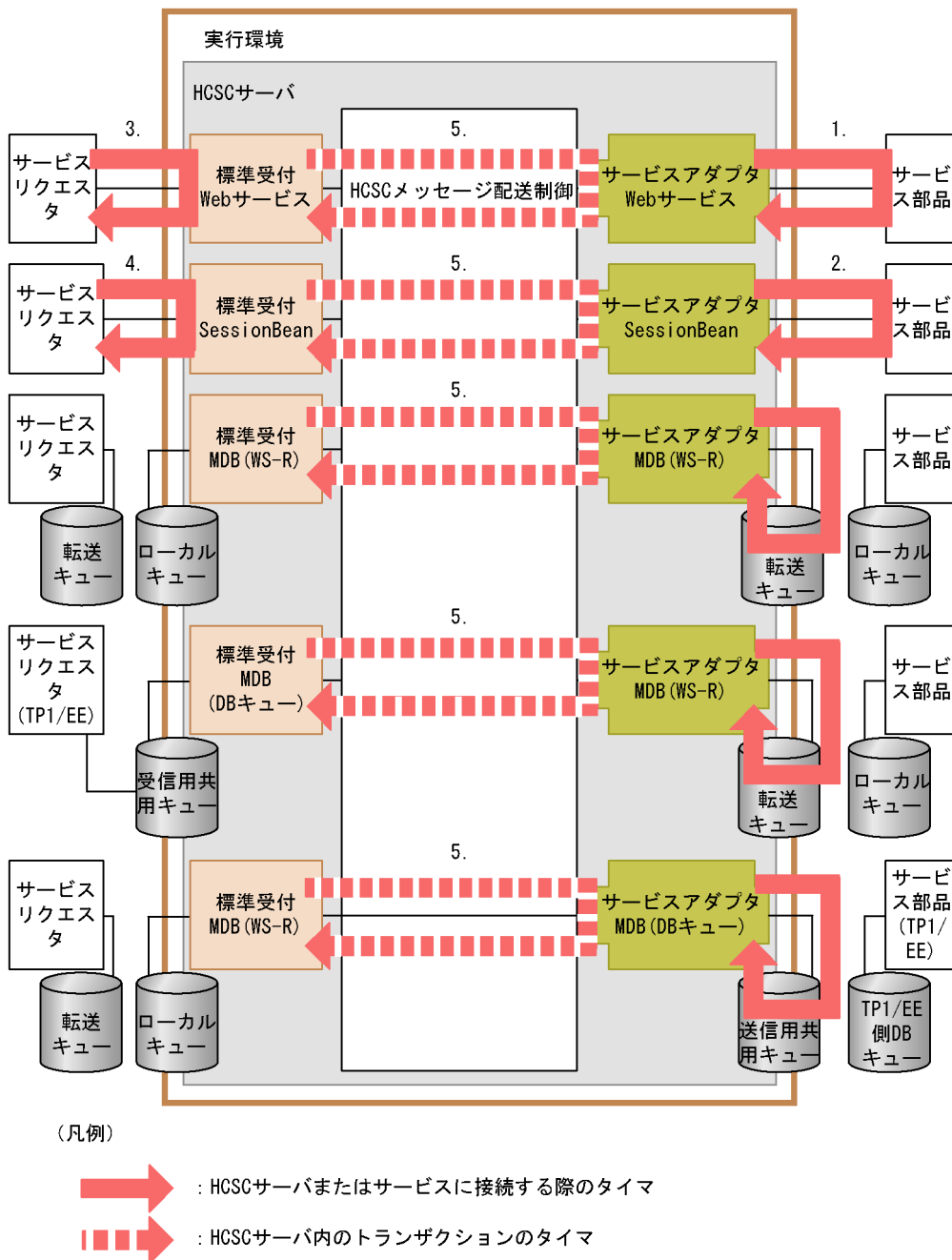


図 5-19 の各項番は次のタイマを示しています。

1. サービス部品に接続するときのタイマ (Web サービス)
2. サービス部品に接続するときのタイマ (SessionBean)

5. システム運用

3. HCSC サーバに接続するときのタイマ (Web サービス)
4. HCSC サーバに接続するときのタイマ (SessionBean)
5. HCSC サーバ内のトランザクションのタイマ

タイマは接続先やプロトコルによって設定方法が異なります。

(a) サービス部品に接続するときのタイマ (Web サービス)

サービス部品 (Web サービス) に接続する場合、書き込み、読み込み、および接続時のタイマを設定できます。

- 書き込み時のタイマ
HTTP および HTTPS (TCP/IP 通信) で使用するソケットに対する write (データ送信) 処理でのタイムアウト値を設定します。接続確立後のデータ送信が完了しない場合などで有効となります。
- 読み込み時のタイマ
HTTP および HTTPS (TCP/IP 通信) で使用するソケットに対する read (データ受信) 処理でのタイムアウト値を設定します。接続確立後のデータ受信が完了しない場合などで有効となります。
- 接続時のタイマ
HTTP および HTTPS (TCP/IP 通信) で使用するソケットに対する connect (ソケット接続) 処理でのタイムアウト値を設定します。接続確立時の要求に対する応答がない場合などで有効となります。

(i) タイムアウト値の設定

サービス部品に接続するときのタイマ (Web サービス) は、HCSC サーバ全体に設定したり、サービスアダプタ個別に設定したりできます。設定方法を次に示します。

- HCSC サーバ全体の設定
HCSC サーバ稼働マシンでの SOAP 通信基盤 (Cosminexus Web Services) のサーバ定義ファイルで定義します。サーバ定義ファイルの設定の詳細については、マニュアル「Cosminexus SOAP アプリケーション開発ガイド」を参照してください。

表 5-15 HCSC サーバ全体のタイマ (Web サービス) の設定

値	キー名称	デフォルト値 (秒)
サーバ兼クライアントのソケットの書き込みタイムアウト値	c4web.application.<識別子>.socket_write_timeout	60
サーバ兼クライアントのソケットの読み込みタイムアウト値	c4web.application.<識別子>.socket_read_timeout	300
サーバ兼クライアントのソケットの接続タイムアウト値	c4web.application.<識別子>.socket_connect_timeout	60

- サービスアダプタ個別の設定

開発環境で定義する場合，サービスアダプタ定義画面のクライアント定義ファイルに指定するファイルで設定します。クライアント定義ファイルの設定の詳細については，マニュアル「Cosminexus SOAP アプリケーション開発ガイド」を参照してください。

表 5-16 サービスアダプタ個別のタイマ（Web サービス）の設定

値	キー名称	デフォルト値 (秒)
クライアントのソケットの書き込みタイムアウト値	c4web.application.socket_write_timeout	60
クライアントのソケットの読み込みタイムアウト値	c4web.application.socket_read_timeout	300
クライアントのソケットの接続タイムアウト値	c4web.application.socket_connect_timeout	60

(ii) タイムアウト値の変更

すでに HCSC サーバに配備しているサービスアダプタに対して運用環境で定義する場合は，`cscsvctcl` コマンドを使用して，サービス部品呼び出しの通信タイムアウト値を変更します。変更方法の詳細については，「5.2.28 サービス部品呼び出しの通信タイムアウト値を変更する」を参照してください。コマンドの使い方については，「10. コマンド」の「`cscsvctcl` (サービス情報の管理)」を参照してください。

表 5-17 タイマ（Web サービス）の設定値の変更

値	キー名称
書き込みタイムアウト値	<クラスタ名>.<サービスID>.WebService.c4web.application.socket_write_timeout
読み込みタイムアウト値	<クラスタ名>.<サービスID>.WebService.c4web.application.socket_read_timeout
接続タイムアウト値	<クラスタ名>.<サービスID>.WebService.c4web.application.socket_connect_timeout

(b) サービス部品に接続するときのタイマ（SessionBean）

(i) タイムアウト値の設定

サービス部品に接続するときのタイマ（SessionBean）は，HCSC サーバ全体に設定したり，サービスアダプタ個別に設定したりできます。設定方法を次に示します。

- HCSC サーバ全体の設定

HCSC サーバ稼働マシンの Cosminexus で，EJB コンテナでタイムアウトを設定します。RMI-IIOP 通信のタイムアウトの詳細については，マニュアル

5. システム運用

「Cosminexus 機能解説」を参照してください。また、定義の詳細については、マニュアル「Cosminexus リファレンス 定義編」を参照してください。

表 5-18 HCSC サーバ全体のタイマ (SessionBean) の設定

値	設定するファイル	キー名称	デフォルト値 (秒)
RMI-IIOP 通信すべてに有効となるタイムアウト値	EJB クライアントアプリケーション用ユーザプロパティファイル (usrconf.properties)	ejbserver.rmi.request.timeout	0 (タイムアウトしません)
CORBA ネーミングサービス部品との通信でのタイムアウト値		ejbserver.jndi.request.timeout	0 (タイムアウトしません)

- サービスアダプタ個別の設定
開発環境で定義する場合、サービスアダプタ定義画面のクライアント定義ファイルに指定するファイルで設定します。クライアント定義ファイルの設定の詳細については、マニュアル「Cosminexus SOAP アプリケーション開発ガイド」を参照してください。

表 5-19 サービスアダプタ個別のタイマ (SessionBean) の設定

値	キー名称	デフォルト値 (秒)
呼び出しタイムアウト値	c4web.application.ejb_j2ee_timeout	0 (タイムアウトしません)

(ii) タイムアウト値の変更

すでに HCSC サーバに配備しているサービスアダプタに対して運用環境で定義する場合は、cscsvct1 コマンドを使用して、サービス部品呼び出しの通信タイムアウト値を変更します。変更方法の詳細については、「5.2.28 サービス部品呼び出しの通信タイムアウト値を変更する」を参照してください。コマンドの使い方については、「10. コマンド」の「cscsvct1 (サービス情報の管理)」を参照してください。

表 5-20 タイマ (SessionBean) の設定値の変更

値	キー名称
呼び出しタイムアウト値	<クラスタ名>.<サービス ID>.SessionBean.c4web.application.ejb_j2ee_timeout

(c) HCSC サーバに接続するときのタイマ (Web サービス)

HCSC サーバに接続するときのタイマ (Web サービス) は、サービスリクエスト稼働マ

シン側で設定します。サービスリクエストの稼働しているマシン全体に設定したり、サービスリクエスト個別に設定したりできます。サービスリクエスト稼働マシンで SOAP 通信基盤 (Cosminexus Web Services) を使用している場合の設定方法を次に示します。

- サービスリクエスト稼働マシン全体の設定
サービスリクエスト稼働マシンでの SOAP 通信基盤 (Cosminexus Web Services) のサーバ定義ファイルで定義します。設定内容は「(a) サービス部品に接続するときのタイマ (Web サービス)」の場合と同様です。サーバ定義ファイルの設定の詳細については、マニュアル「Cosminexus SOAP アプリケーション開発ガイド」を参照してください。
- サービスリクエスト個別の設定
作成するサービスリクエストごとに個別に設定する場合、サービスリクエストを実行するときに指定するクライアント定義ファイルで設定します。設定内容は「(a) サービス部品に接続するときのタイマ (Web サービス)」の場合と同様です。クライアント定義ファイルの設定の詳細については、マニュアル「Cosminexus SOAP アプリケーション開発ガイド」を参照してください。

(d) HCSC サーバに接続するときのタイマ (SessionBean)

HCSC サーバに接続するときのタイマ (SessionBean) は、サービスリクエストの稼働しているマシン全体に設定したり、サービスリクエスト個別に設定したりできます。設定方法を次に示します。

HCSC サーバに接続するときのタイマ (SessionBean) は、サービスリクエスト稼働マシン側で設定します。サービスリクエストの稼働しているマシン全体に設定したり、サービスリクエスト個別に設定したりできます。サービスリクエスト稼働マシンで Cosminexus を使用している場合の設定方法を次に示します。

- サービスリクエスト稼働マシン全体の設定
サービスリクエスト稼働マシンの Cosminexus で、EJB コンテナでタイムアウトを設定します。設定内容は「(b) サービス部品に接続するときのタイマ (SessionBean)」の場合と同様です。RMI-IIOP 通信のタイムアウトの詳細については、マニュアル「Cosminexus 機能解説」を参照してください。定義の詳細については、マニュアル「Cosminexus リファレンス 定義編」を参照してください。
- サービスリクエスト個別の設定
作成するサービスリクエストごとに個別に、create から remove までの API 通信のタイムアウト値を設定する場合、サービスリクエストのアプリケーション開発時に API (RequestTimeoutConfigFactory クラスおよび RequestTimeoutConfig クラスのメソッド) で設定します。

(e) HCSC サーバ内のトランザクションのタイマ

HCSC サーバ内のトランザクションのタイマは、HCSC サーバ全体で設定します。HCSC サーバ稼働マシンの Cosminexus で、EJB コンテナでタイムアウトを設定しま

5. システム運用

す。定義の詳細については、マニュアル「Cosminexus リファレンス 定義編」を参照してください。

表 5-21 HCSC サーバ内のトランザクションのタイマの設定

値	設定するファイル	キー名称	デフォルト値 (秒)
EJB クライアントで開始されるトランザクションのトランザクションタイムアウト値	EJB クライアントアプリケーション用ユーザプロパティファイル (usrconf.properties)	ejbserver.jta.TransactionManager.defaultTimeout	180

(f) タイマ設定時の注意事項

- サービス部品に接続するときのタイマと HCSC サーバに接続するときのタイマの関係
HCSC サーバに接続するときのタイマは、サービス部品に接続するときのタイマよりも大きい値を指定してください。
サービス部品呼び出しで時間が掛かり正常応答した場合でも、HCSC サーバに接続するときのタイマが先にタイムアウトし、処理が正常に完了しません。
なお、ビジネスプロセスを呼び出して、サービス部品を呼び出す場合は、複数のサービス部品を呼び出すことを考慮して、HCSC サーバに接続するときのタイマを設定する必要があります。
- サービス部品に接続するときのタイマとトランザクションのタイマの関係
トランザクションのタイマは、サービス部品に接続するときのタイマよりも大きい値を指定してください。
サービス部品呼び出しで時間が掛かり正常応答した場合でも、トランザクションがタイムアウトすると、トランザクションがロールバックします。

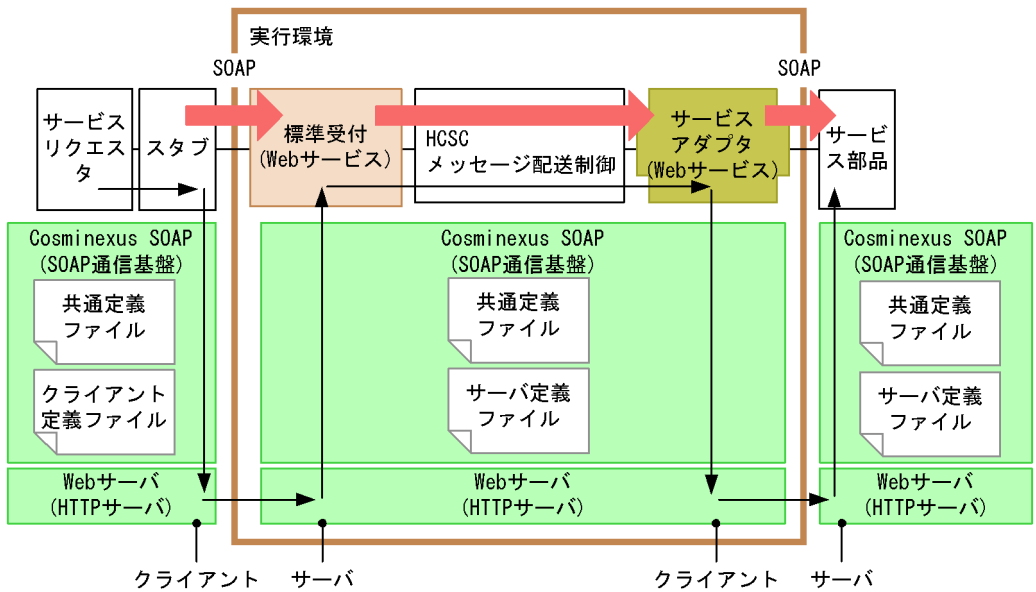
5.4.2 Web サービス (SOAP 通信) を使ったサービス呼び出し

(1) SOAP 通信基盤との関係



実行環境の HCSC サーバは、Cosminexus SOAP (SOAP 通信基盤) および Web サーバ (HTTP サーバ) 上で動作します。そのため、Web サービス (SOAP 通信) を使用する場合は、Cosminexus SOAP や Web サーバの設定が必要です。

サービスリクエストと HCSC サーバのリクエスト受付との関係は、クライアントとサーバの関係であり、HCSC サーバのサービスアダプタとサービス部品の関係もクライアントとサーバの関係になります。SOAP 通信基盤との関係を次の図に示します。

図 5-20 SOAP 通信基盤との関係



(凡例)

-  : サービス部品呼び出し要求の流れ
-  : 電文の流れ

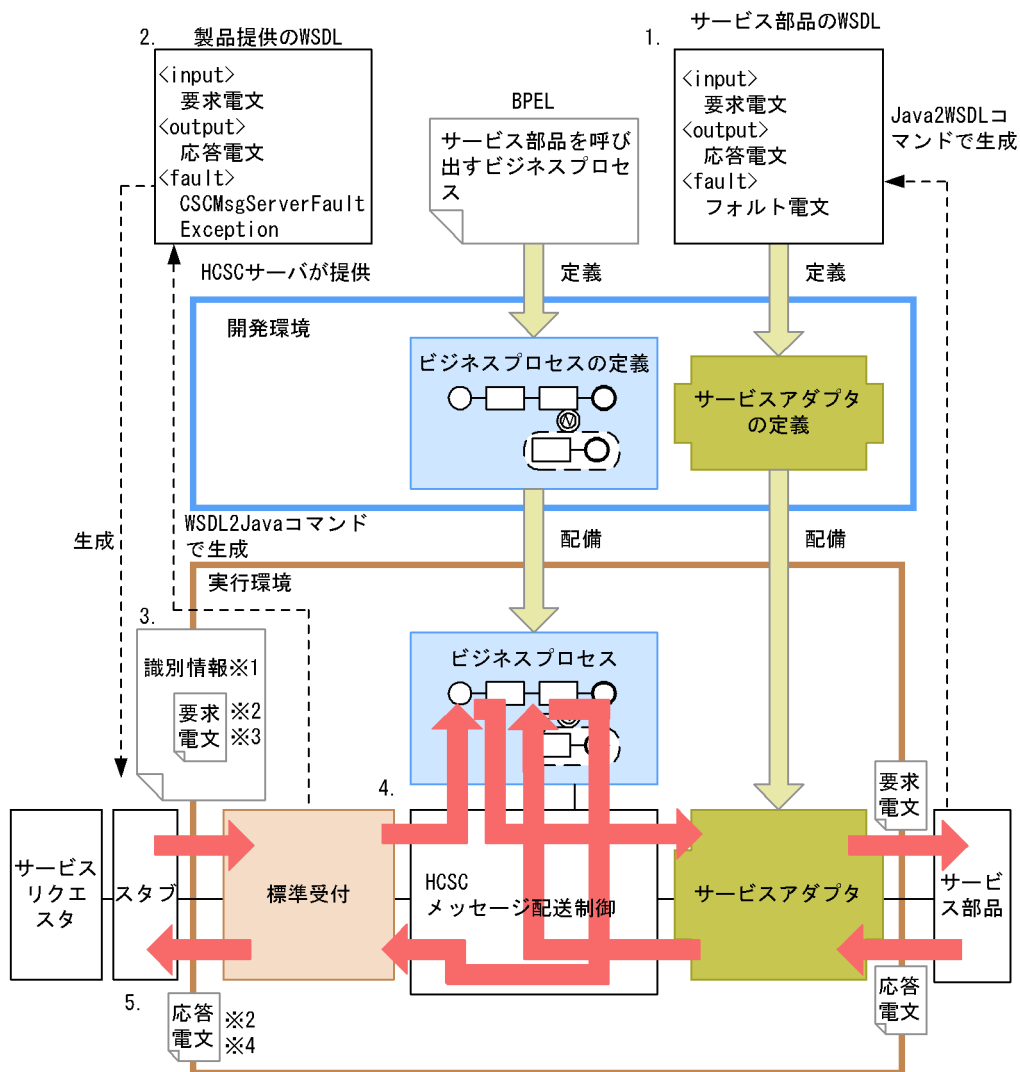
(2) サービス部品呼び出し時のユーザ電文と WSDL の関係

サービス部品呼び出し時のユーザ電文と WSDL の関係は、標準受付の場合とユーザ定義受付の場合とで異なります。

(a) 標準受付の場合

SOAP 通信時のユーザ電文と WSDL の関係 (標準受付) を次の図に示します。

図 5-21 SOAP 通信時のユーザ電文と WSDL の関係 (標準受付)



(凡例)

- ➡ : サービス部品呼び出し要求・応答の流れ
- ➡ : ユーザがする処理

- 注※1 識別情報とは、サービス名、クライアント関連IDなどです。
- 注※2 サービス部品のWSDLに定義されている要求電文または応答電文です。
- 注※3 ビジネスプロセスを呼び出す場合は、ビジネスプロセスの受付アクティビティに定義した要求電文です。
- 注※4 ビジネスプロセスを呼び出す場合は、ビジネスプロセスの応答アクティビティに定義した応答電文です。

1. サービスアダプタを定義するときは、サービス部品側の電文フォーマットとしてサービス部品の WSDL を定義します (サービス部品の WSDL には、要求電文、応答電文

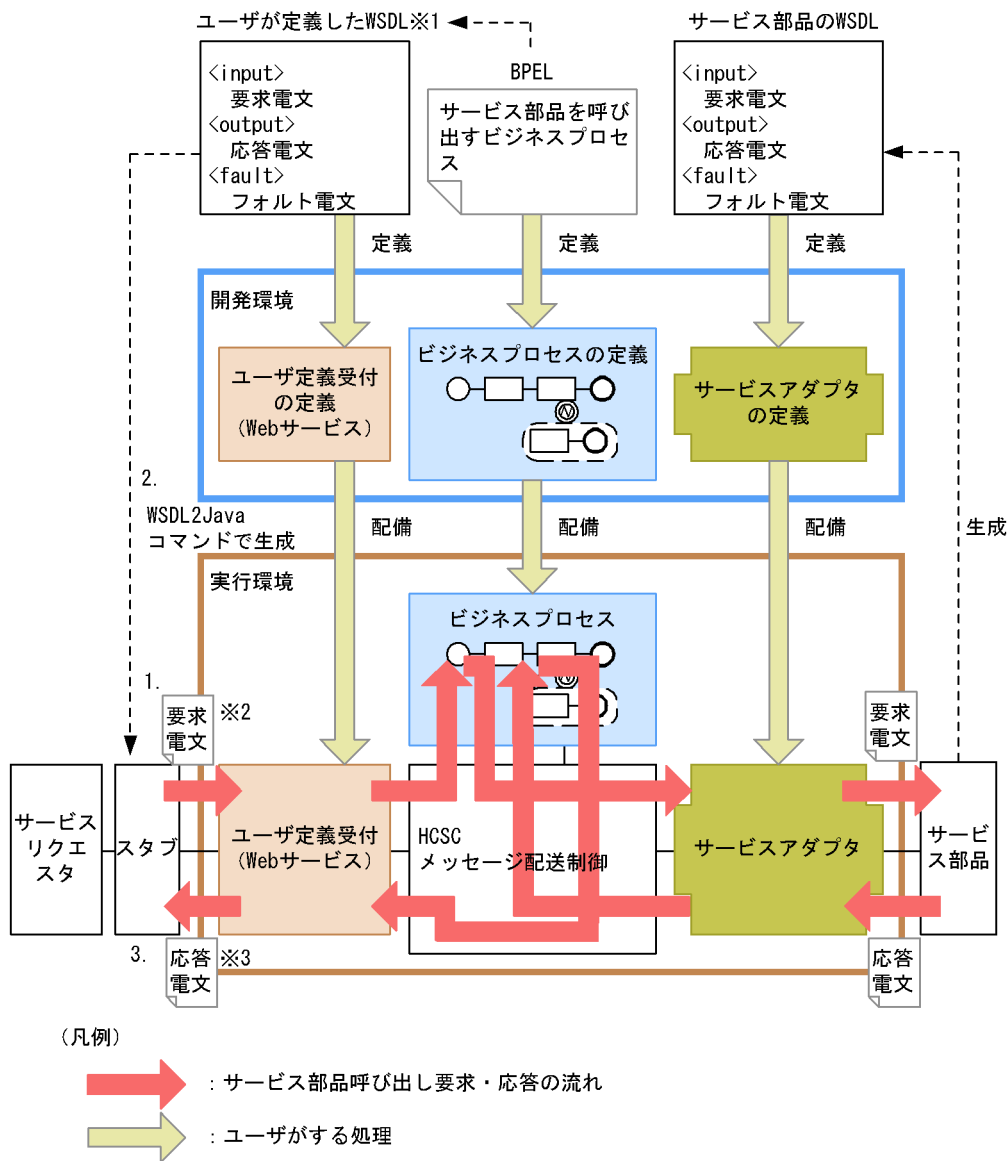
およびフォルト電文の形式が定義されています)。WSDLを作成するには、SOAP通信基盤が提供するJava2WSDLコマンドを使用します。

2. サービスリクエストから標準受付を呼び出してサービス部品を呼び出すときは、HCSCサーバが提供するWSDLを使用します。HCSCサーバが提供するWSDLを基にWSDL2Javaコマンドを使用してスタブを作成できます。
3. サービスリクエストから標準受付を呼び出すときは、サービス部品側の電文フォーマットに合わせた要求電文を事前に作成します。そして、HCSCサーバが提供するWSDLに定義されている標準受付のパラメタ(ユーザ電文のパラメタ)に設定して実行します。
4. サービスリクエストからビジネスプロセスを呼び出すときは、要求電文はビジネスプロセスの受付アクティビティに定義した電文フォーマットになります。サービスリクエスト内でビジネスプロセスの受付アクティビティで定義されている要求電文の電文フォーマットに合わせた電文を作成し、作成した電文を標準受付のパラメタ(ユーザ電文のパラメタ)に設定して実行します。
5. サービスリクエストへの応答は、サービスアダプタで定義した応答電文の電文フォーマットを使用します。

(b) ユーザ定義受付の場合

SOAP通信時のユーザ電文とWSDLの関係(ユーザ定義受付)を次の図に示します。

図 5-22 SOAP 通信時のユーザ電文と WSDL の関係 (ユーザ定義受付)



注※1 ビジネスプロセスの受付アクティビティや応答アクティビティに定義した形式に合わせた WSDL です。
 注※2 ユーザが定義した WSDL に定義されている要求電文です。
 注※3 ユーザが定義した WSDL に定義されている応答電文です。

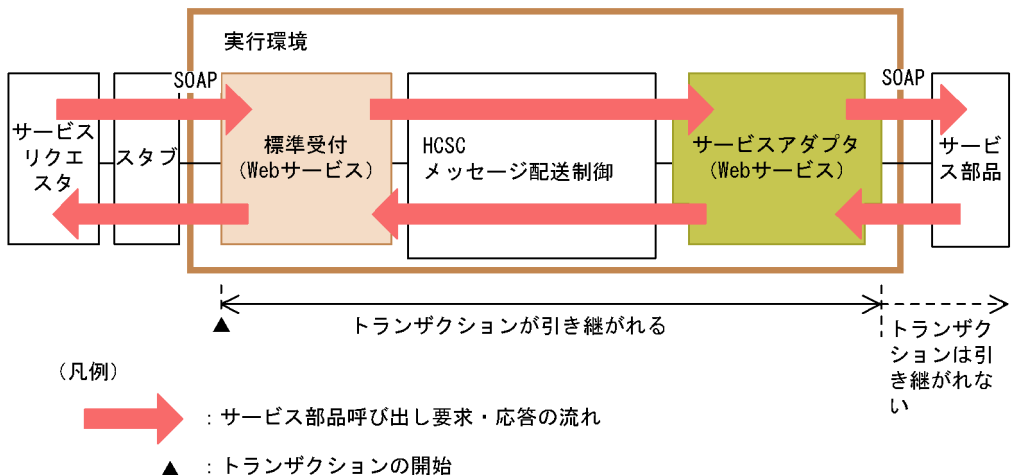
1. ユーザ定義受付の場合、サービスリクエスタで指定する要求電文は、ビジネスプロセスの受付アクティビティに定義した任意の電文フォーマットの形式で要求します (受付アクティビティに定義した電文フォーマットに合わせた WSDL を作成し、ユーザ定義受付に定義します)。

2. スタブは、ユーザが定義した WSDL を基に、SOAP 通信基盤が提供する WSDL2Java コマンドを使用して作成できます。標準受付の場合と異なり、サービスリクエスト側のプログラムで要求電文の XML を作成する必要はありません。サービスリクエストではスタブに要求を出すときに、それぞれのパラメータに値をセットして実行します（スタブの中で SOAP メッセージを作成します）。
3. サービスリクエストへの応答は、ビジネスプロセスの応答アクティビティで定義した応答電文の電文フォーマットで応答します（応答アクティビティに定義した電文フォーマットに合わせた WSDL を作成し、ユーザ定義受付に定義します）。

（3）Web サービス（SOAP 通信）の場合のトランザクション

Web サービス（SOAP 通信）の場合、HCSC サーバ内で管理しているトランザクションは、サービス側には引き継がれません。Web サービス（SOAP 通信）の場合のトランザクションを次の図に示します。

図 5-23 Web サービス（SOAP 通信）の場合のトランザクション



5.4.3 SessionBean を使ったサービス呼び出し

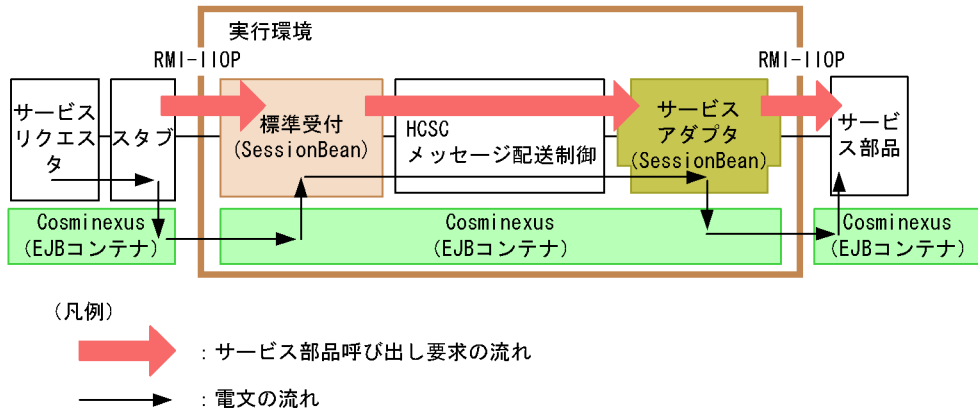
（1）Cosminexus（EJB コンテナ）との関係

実行環境の HCSC サーバは、Cosminexus の EJB コンテナ上で動作します。

HCSC サーバのリクエスト受付は、EJB（Stateless Session Bean）のリモートインターフェースとして提供され、RMI-IIOP で接続します。

HCSC サーバのサービスアダプタからは、EJB（Stateless Session Bean または Statefull Session Bean）で作成されたサービス部品が実行されます。Cosminexus（EJB コンテナ）との関係を次の図に示します。

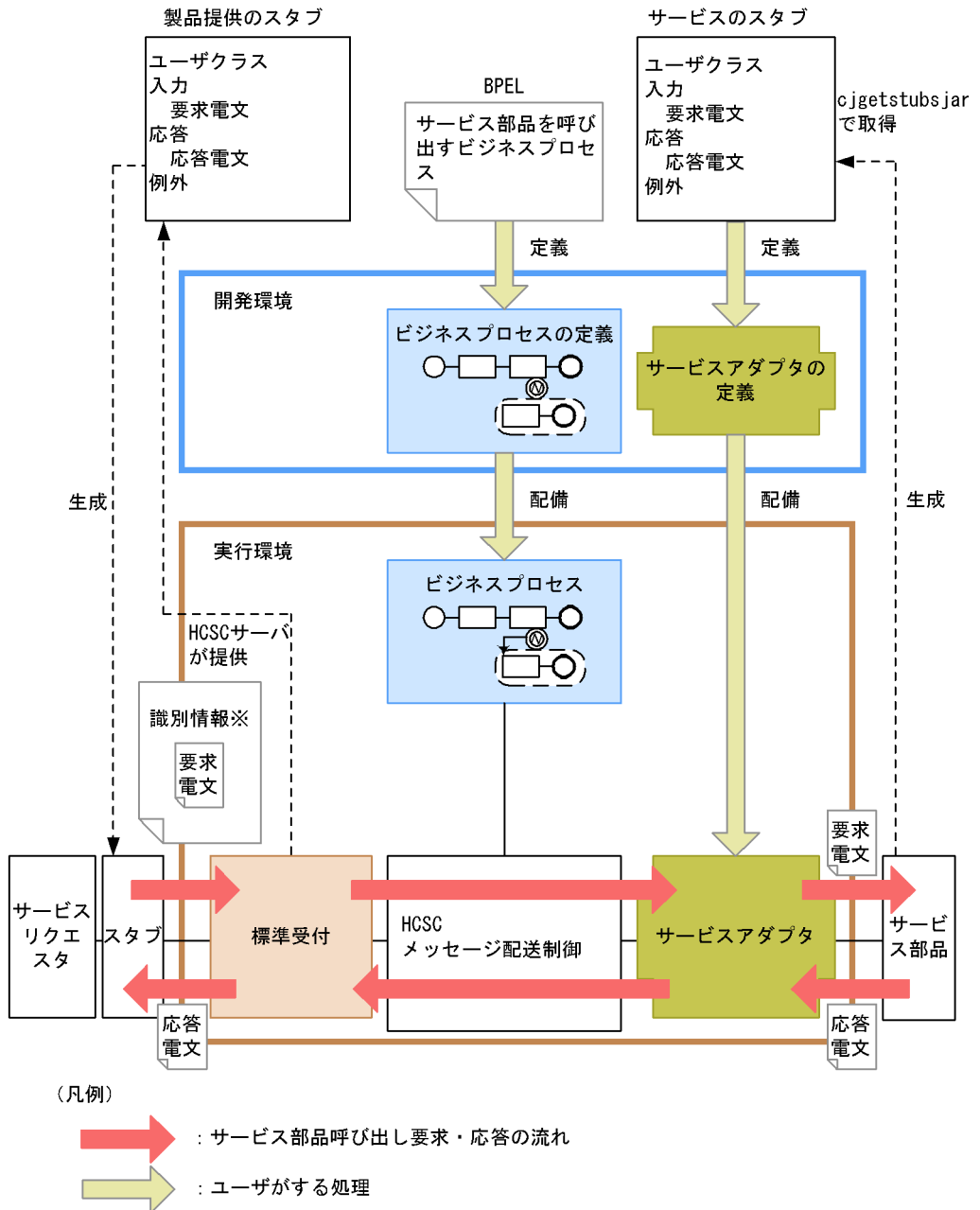
図 5-24 Cosminexus (EJB コンテナ) との関係



(2) サービス部品呼び出し時のユーザ電文とサービス部品のスタブとの関係

SessionBean 使用時のユーザ電文とスタブの関係を次の図に示します。

図 5-25 SessionBean 使用時のユーザ電文とスタブの関係



注※ 識別情報とは、サービス名、クライアント相関IDなどです。

サービスアダプタを定義するときは、サービス部品のスタブを定義します（サービス部品のスタブには、作成したサービス部品のユーザクラスが含まれています。また、要求電文、応答電文および例外の形式が定義されています）。

5. システム運用

サービス部品側の J2EE サーバに Cosminexus を使用している場合、サービス部品のスタブを取得するには、J2EE サーバの `cjgetstubsjar` コマンドを使用します。

サービスリクエストからサービス部品を呼び出すときは、製品提供のスタブを使用します。製品提供のスタブは、標準受付のインターフェースになっています。サービスリクエストから標準受付を呼び出すときには、サービス部品側の電文フォーマットに合わせた要求電文を事前に作成し、標準受付のパラメタ（ユーザ電文のパラメタ）に設定して実行します。

サービスリクエストからビジネスプロセスを呼び出すときは、要求電文はビジネスプロセスの受付アクティビティに定義した電文フォーマットになります。サービスリクエスト内で、ビジネスプロセスの受付アクティビティで定義されている要求電文の電文フォーマットに合わせた電文を作成し、作成した電文を標準受付のパラメタ（ユーザ電文のパラメタ）に設定して実行します。

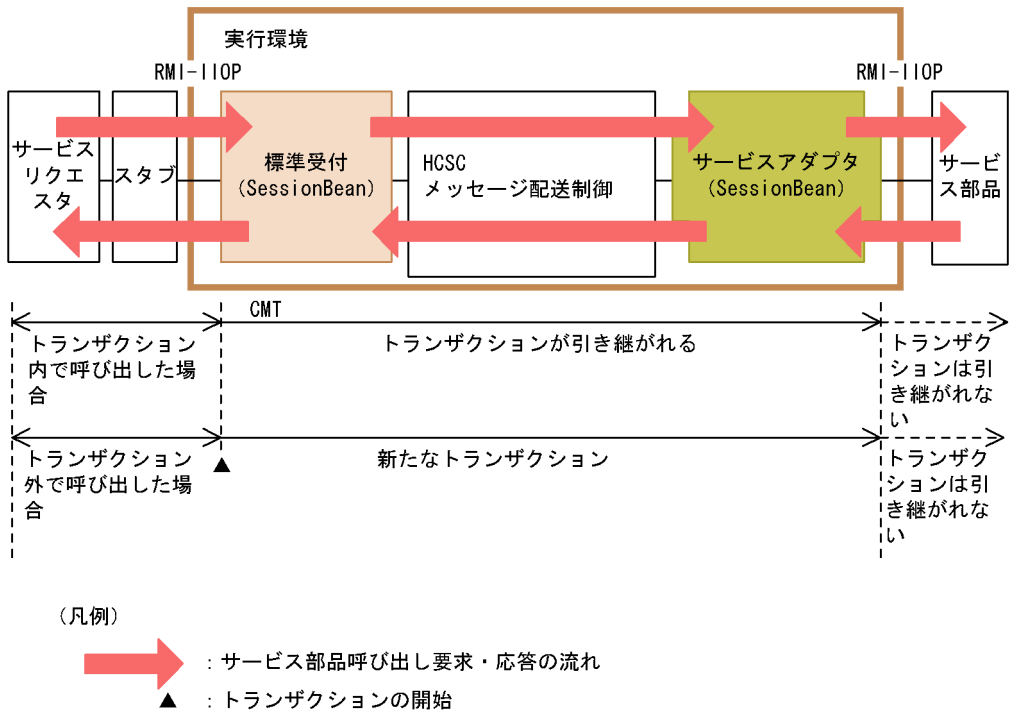
サービスリクエストへの応答は、サービスアダプタで定義した応答電文の電文フォーマットを使用します。

`cjgetstubsjar` コマンドの詳細については、マニュアル「Cosminexus リファレンス コマンド編」を参照してください。

(3) SessionBean 使用時のトランザクション

SessionBean 使用時のトランザクションを次の図に示します。

図 5-26 SessionBean 使用時のトランザクション



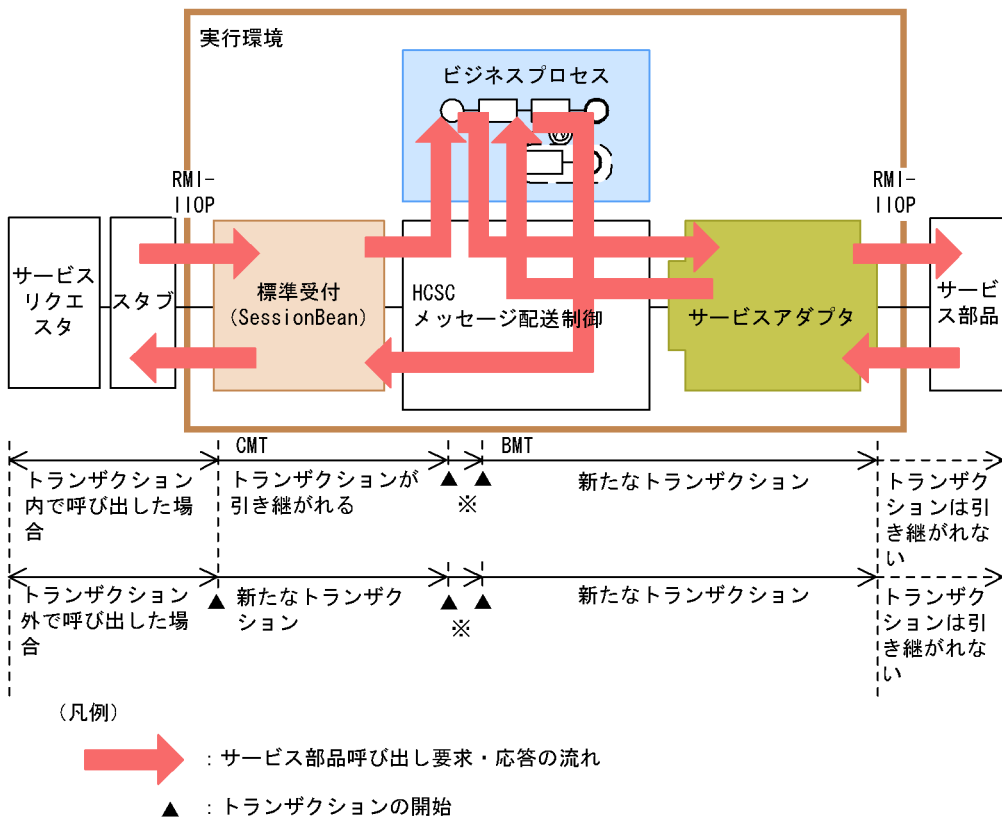
SessionBean 使用時，HCSC サーバ内は CMT (Container Managed Transaction) で動作します。また，標準受付のトランザクション属性は Required 属性です。そのため，サービスリクエスタがトランザクションスコープ内で HCSC サーバの標準受付を呼び出したとき，トランザクションコンテキストが HCSC サーバ側に引き継がれ，HCSC サーバ内の処理はサービスリクエスタ側のトランザクションスコープ内に入ります。また，サービスリクエスタがトランザクションスコープ外で HCSC サーバの標準受付を呼び出したとき，HCSC サーバ側で新しいトランザクションが開始されます。

なお，サービス部品のトランザクション属性は RequiresNew または NotSupported でなければなりません。そのため，トランザクションは，サービス部品側には引き継がれません。SessionBean を利用したサービス部品のトランザクション属性を指定できるかどうかについては，マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド」を参照してください。

ビジネスプロセスは BMT (Bean Managed Transaction) で動作します。ビジネスプロセス自体は新たなトランザクションで制御します。ビジネスプロセスを呼び出す場合は，ビジネスプロセスのサービス呼出アクティビティに定義したサービス部品呼び出し処理ごとに，新たなトランザクションで制御します。そのため，サービスリクエスタがトランザクションスコープ内で HCSC サーバの標準受付を呼び出したときでも，トランザクションはサービスアダプタまで引き継がれません。ビジネスプロセスを介した場合のトランザクションを次の図に示します。

5. システム運用

図 5-27 ビジネスプロセスを介した場合のトランザクション



注※：新たなトランザクション

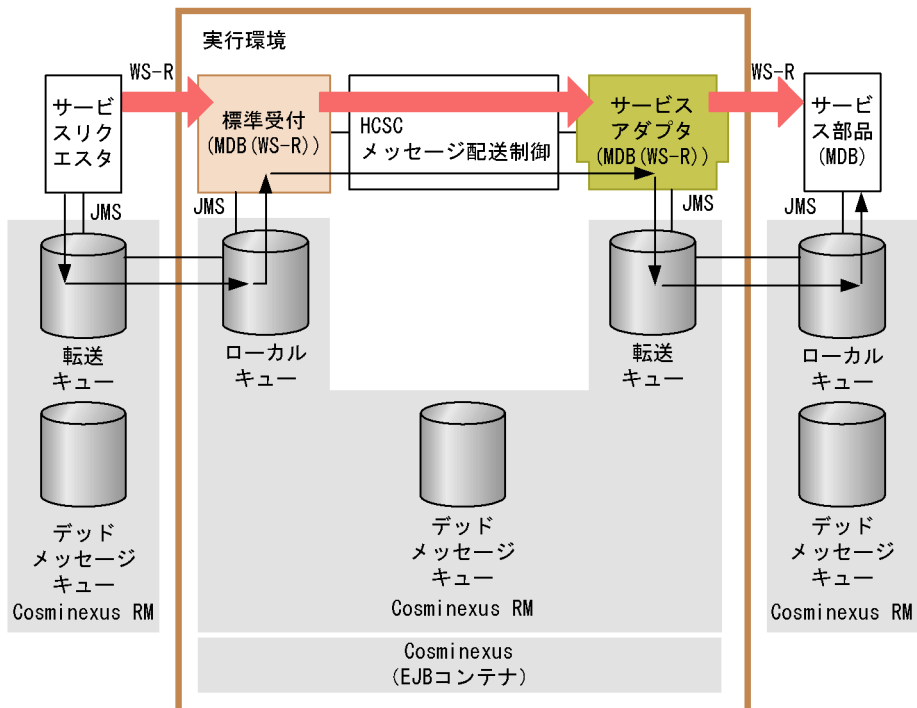
5.4.4 MDB (WS-R) を使ったサービス部品呼び出し

(1) Cosminexus RM との関係

非同期のサービス部品を呼び出すには、Cosminexus RM を使用します。また、サービスリクエスト側の転送キューと HCSC サーバ側のローカルキューの間、そして HCSC サーバ側の転送キューとサービス部品側のローカルキューの間は WS-R (WS-Reliability) を使用します。Cosminexus RM は、Cosminexus の EJB コンテナ上で動作します。

Cosminexus RM との関係を示す図に示します。

図 5-28 Cosminexus RM との関係



(凡例)

- ➡ : サービス部品呼び出し要求の流れ
 ➡ : 電文の流れ

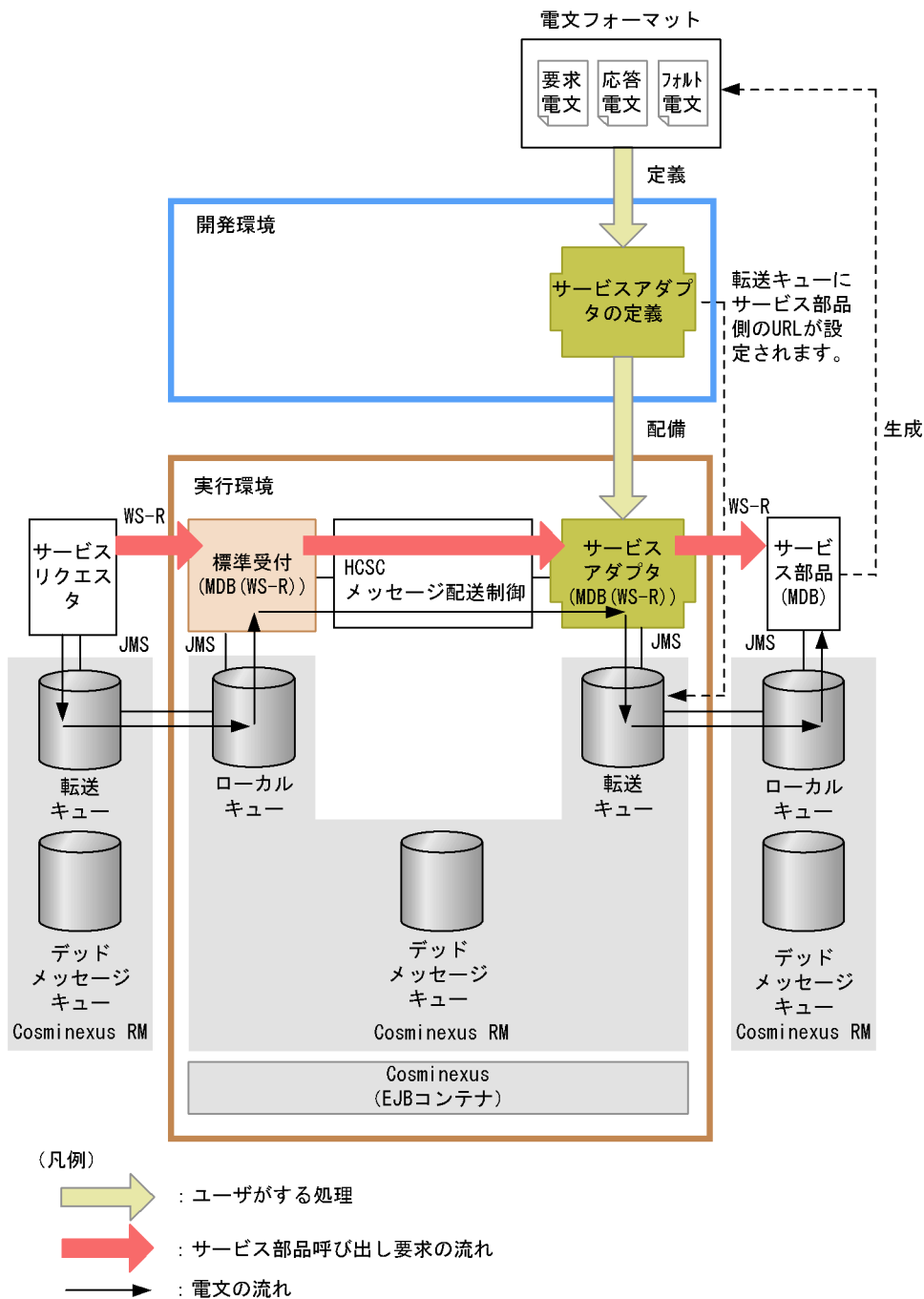
(2) サービス部品呼び出し時のメッセージの流れ

HCSC サーバの標準受付は、MDB (Message Driven Bean) で動作し、HCSC サーバ側のローカルキューを監視しています。HCSC サーバ側のローカルキューにメッセージが送信されると、標準受付はメッセージを取り出してサービス部品を呼び出します。

サービスリクエスト側の転送キューには、HCSC サーバのあて先アドレスおよび転送先のローカルキューのキュー名を設定します。サービスリクエストからは、サービスリクエスト側の転送キューに対して、JMS メッセージを送信して、HCSC サーバの標準受付を呼び出します。

サービス部品を呼び出すときには、サービスアダプタ側の転送キューに送信します。そして、転送キューは、開発環境のサービスアダプタ定義画面（基本画面のアドレスに指定した転送先のキュー名および詳細画面の宛先 URL）で定義したサービス部品側のローカルキューへ送信します。サービス部品を MDB で作成することで、サービス部品側のローカルキューに送信されたメッセージを取り出して処理できます。非同期 (MDB (WS-R)) の場合のあて先の指定を次の図に示します。

図 5-29 非同期 (MDB (WS-R)) の場合のあて先の指定



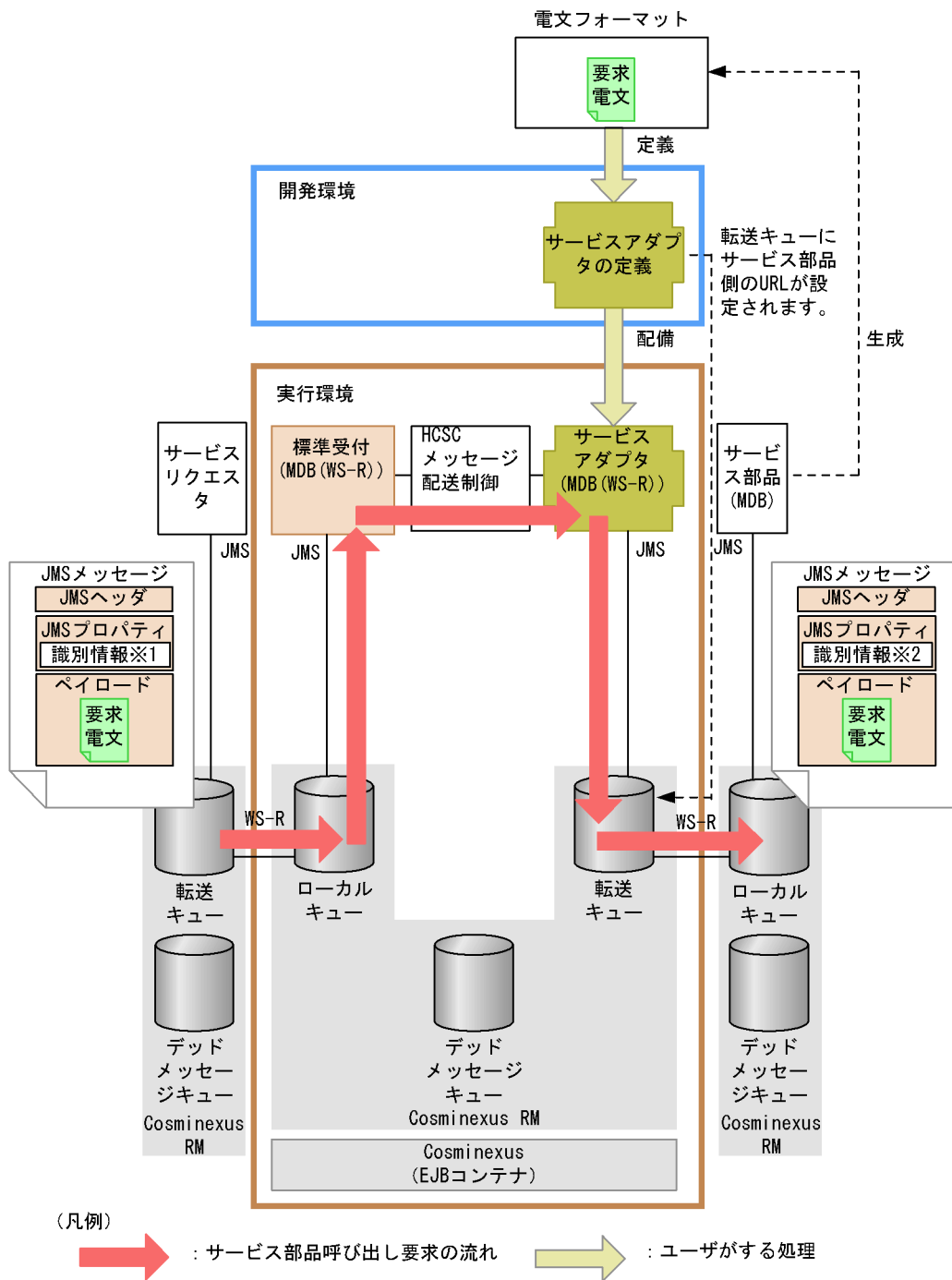
転送キューを作成したり，JMS メッセージを生成したりする手順については，マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド」を参照してください。

サービスリクエストからサービス部品を呼び出すときに転送キューに送信する JMS メッセージの形式は、標準受付のインターフェースになります。

JMS メッセージのペイロード（ヘッダを除いたデータ本体）に設定した内容が、ユーザ電文としてサービス部品に伝わります。そのため、サービスリクエストから標準受付を呼び出すときに、サービス部品側の電文フォーマットに合わせた要求電文を事前に作成し、ペイロードに設定してメッセージを送信します。非同期サービス部品呼び出し時のユーザ電文と JMS メッセージの関係を次の図に示します。

5. システム運用

図 5-30 非同期サービス部品呼び出し時のユーザ電文と JMS メッセージの関係

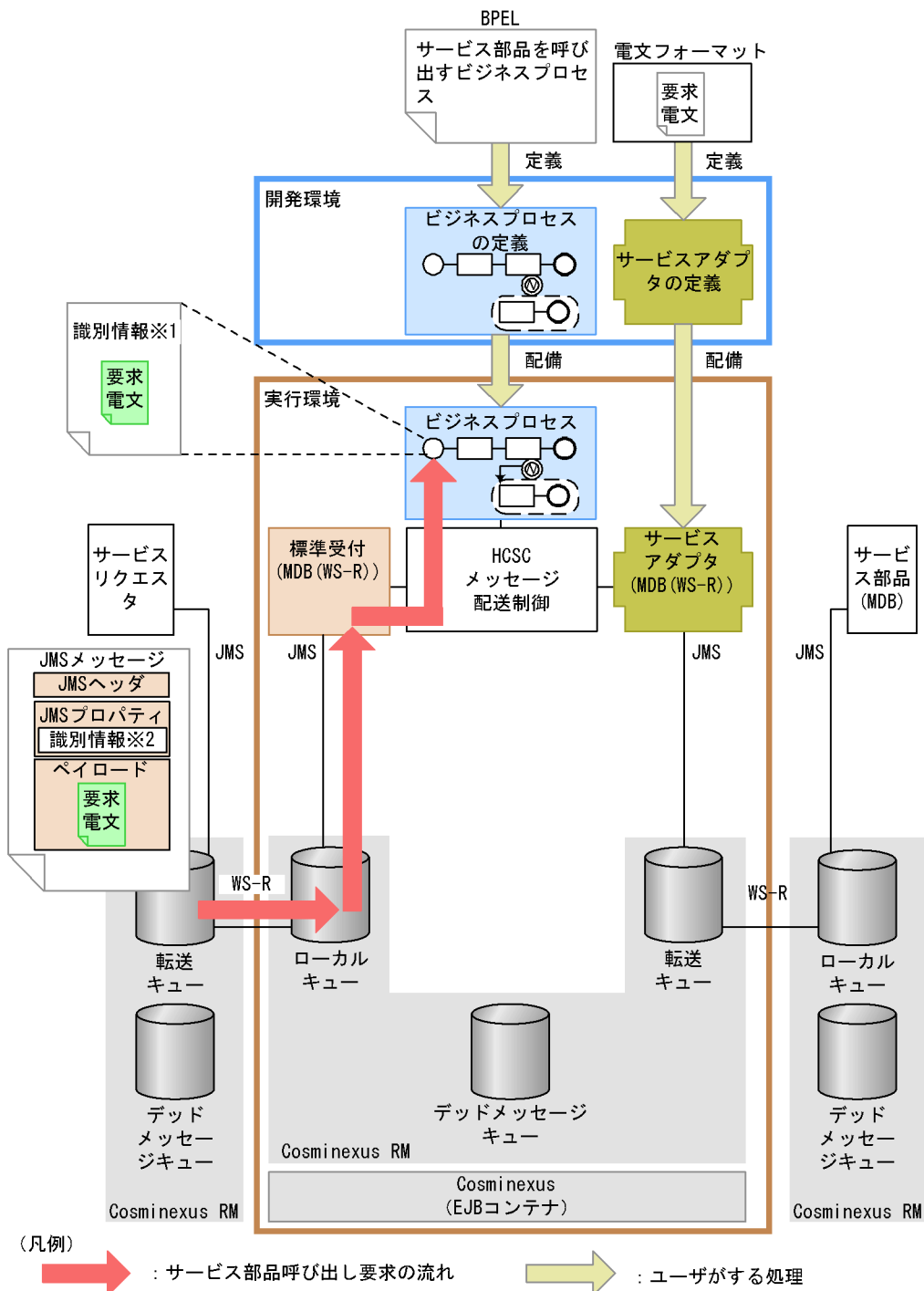


注※1 識別情報は、サービス名、クライアント相関ID、およびユーザ定義プロパティです。
 注※2 識別情報は、ユーザ定義プロパティです。

サービスリクエストからビジネスプロセスを呼び出すときは、要求電文はビジネスプロセスの受付アクティビティに定義した電文フォーマットになります。サービスリクエスト内でビジネスプロセスの受付アクティビティで定義されている要求電文の電文フォーマットに合わせた電文を作成し、ペイロードに設定してメッセージを送信します。ビジネスプロセスを呼び出す場合のユーザ電文と JMS メッセージの関係を次の図に示します。

5. システム運用

図 5-31 ビジネスプロセスを呼び出す場合のユーザ電文と JMS メッセージの関係



注※1 識別情報とは、サービス名、クライアント相関IDなどです。
 注※2 識別情報とは、サービス名、クライアント相関ID、およびユーザ定義プロパティです。

(3) 同期のサービス部品を呼び出す場合の応答電文の扱い

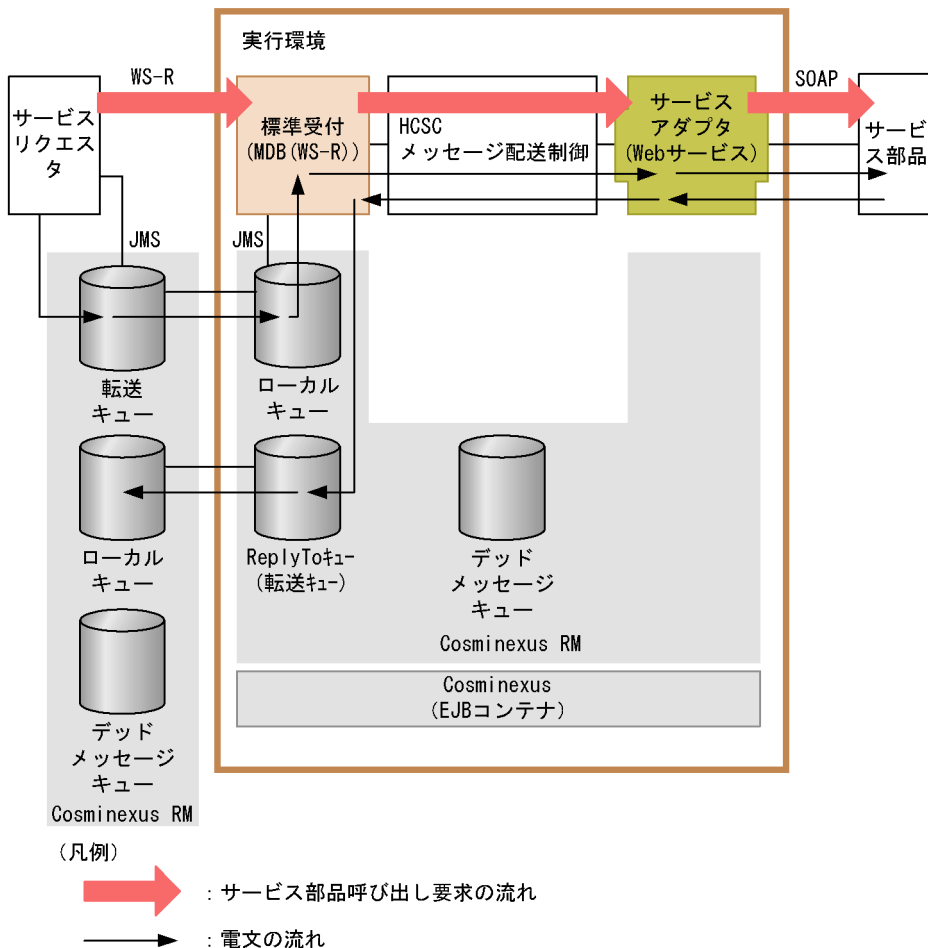
標準受付 (MDB (WS-R)) は、非同期の要求電文用の標準受付で、基本的にサービス部品からの応答がない場合に使用します。しかし、非同期受付 (MDB (WS-R)) から同期のサービス部品 (Web サービスまたは SessionBean など) やビジネスプロセスを要求した場合、同期のサービス部品から応答が返ることがあります。そのため、HCSC サーバでは応答を ReplyTo キューに送信する手段を提供しています。

ReplyTo キューを利用するには、HCSC サーバの環境構築時に HCSC サーバ側に転送キュー (ReplyTo キュー) を作成し、転送キューにサービスリクエスト側マシンのキュー間転送用 Web アプリケーションのあて先アドレスおよび転送先キュー名を指定しておきます。

サービスリクエストから標準受付に対してサービス部品の呼び出しを要求するとき、標準受付のパラメタに作成した転送キュー (ReplyTo キュー) のキュー名を指定すると、サービス部品からの応答が返ってきたときに、指定されたキューに JMS メッセージが送信されます。

転送キュー (ReplyTo キュー) に送信された JMS メッセージは、サービスリクエスト側のローカルキューに転送されるため、ローカルキューからメッセージを取り出すことで、サービスリクエストは、サービス部品からの応答電文を取得できます。同期サービス部品を呼び出した場合の応答の扱いを次の図に示します。

図 5-32 同期サービス部品を呼び出した場合の応答の扱い



応答を取り出す方法については、マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム開発ガイド」を参照してください。

同期サービス部品でも応答があるかどうかによって、表 5-22 に示すように ReplyTo キューへメッセージを送信するかどうか異なります。

なお、サービスリクエスタから ReplyTo キューのキュー名を指定していても、HCSC サーバ側に指定したキュー名のキューが作られていない場合は、ReplyTo キューにメッセージは送信できないため、サービス部品の呼び出し処理がエラーになります。

表 5-22 ReplyTo キューへメッセージを出力する場合

項番	ReplyTo キューへ出力する場合	応答電文の有無			
		応答電文がある場合	応答電文がない場合	サービス部品からのユーザ定義例外の場合	ユーザ定義例外以外のエラーの場合
1	呼び出し先のサービス部品が同期サービス部品の場合 (WebService, SessionBean およびカスタムアダプタなど)	ペイロードに 応答電文を設定して送信	ペイロードなしのメッセージを送信	ペイロードに 応答電文を設定して送信	x
2	呼び出し先のサービス部品が非同期サービス部品の場合 (MDB (WS-R) および MDB (DB キュー) など)	x	x	-	x
3	呼び出し先のサービス部品がビジネスプロセスの場合	ペイロードに 応答電文を設定して送信	ペイロードなしのメッセージを送信	ペイロードに 応答電文を設定して送信	x

(凡例)

- x : メッセージを送信しません。
- : 非同期のサービス部品からユーザ定義例外は存在しないため該当しません。

注 エラーの情報はログ・トレースに出力します。

サービスリクエストからの要求で ReplyTo キューのキュー名を指定していない場合、電文の実行履歴を採取している場合は、応答電文の内容は破棄されます (応答電文が破棄されると、KDEC00031-W メッセージが出力されます)。

また、サービスリクエスト側で相関関係を対応づけるために、サービスリクエストが指定した JMS プロパティが引き継がれます。引き継がれるヘッダおよびプロパティの詳細については、マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド」を参照してください。

(4) MDB (WS-R) 使用時のトランザクション

MDB (WS-R) の場合、サービスリクエストから HCSC サーバの間、そしてサービスアダプタからサービス部品の間は、異なるトランザクションになります。

(a) 非同期のサービスアダプタへメッセージを送信する場合

非同期 (MDB (WS-R)) の標準受付でサービス部品呼び出し要求を受け付け、非同期の (MDB (WS-R)) サービスアダプタへメッセージを送信する場合、標準受付でのローカルキューからのメッセージの取り出しとサービスアダプタでの転送キューへの送信は、一つのトランザクションで処理します。

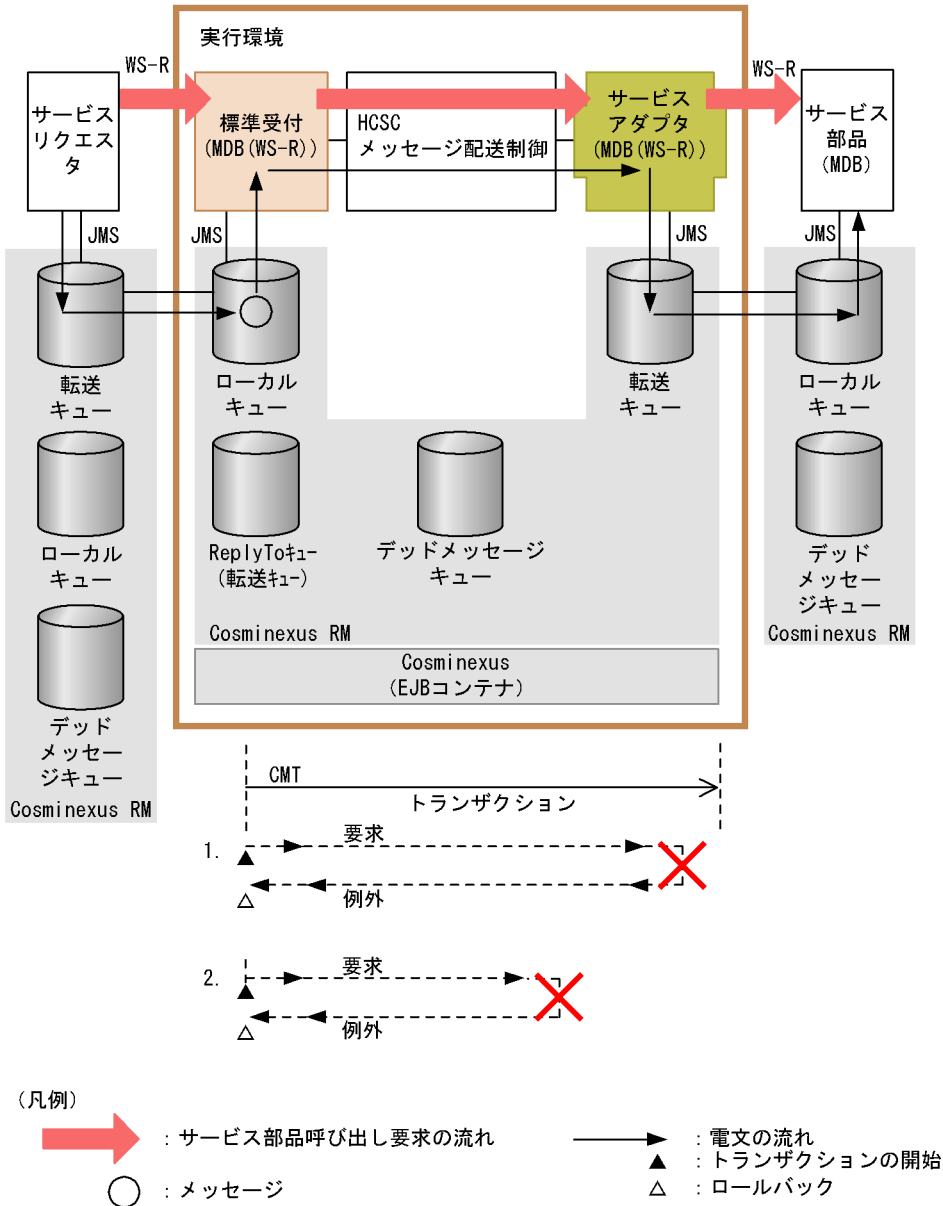
転送キューへのメッセージ送信が失敗した場合や、指定したサービスアダプタが起動し

5. システム運用

ていない場合など、何らかのエラーが発生した場合は、トランザクションをロールバックします。

ロールバックすると、標準受付で取り出したメッセージが復元され、再度ローカルキューからメッセージを取り出して、サービス部品を呼び出します。受付からサービス部品呼び出しまでが非同期の場合のトランザクションについて次の図に示します。

図 5-33 受付からサービス部品呼び出しまでが非同期の場合のトランザクション



エラーが発生したときの対処方法については、「7.7.3 MDB (WS-R) 実行時の障害対

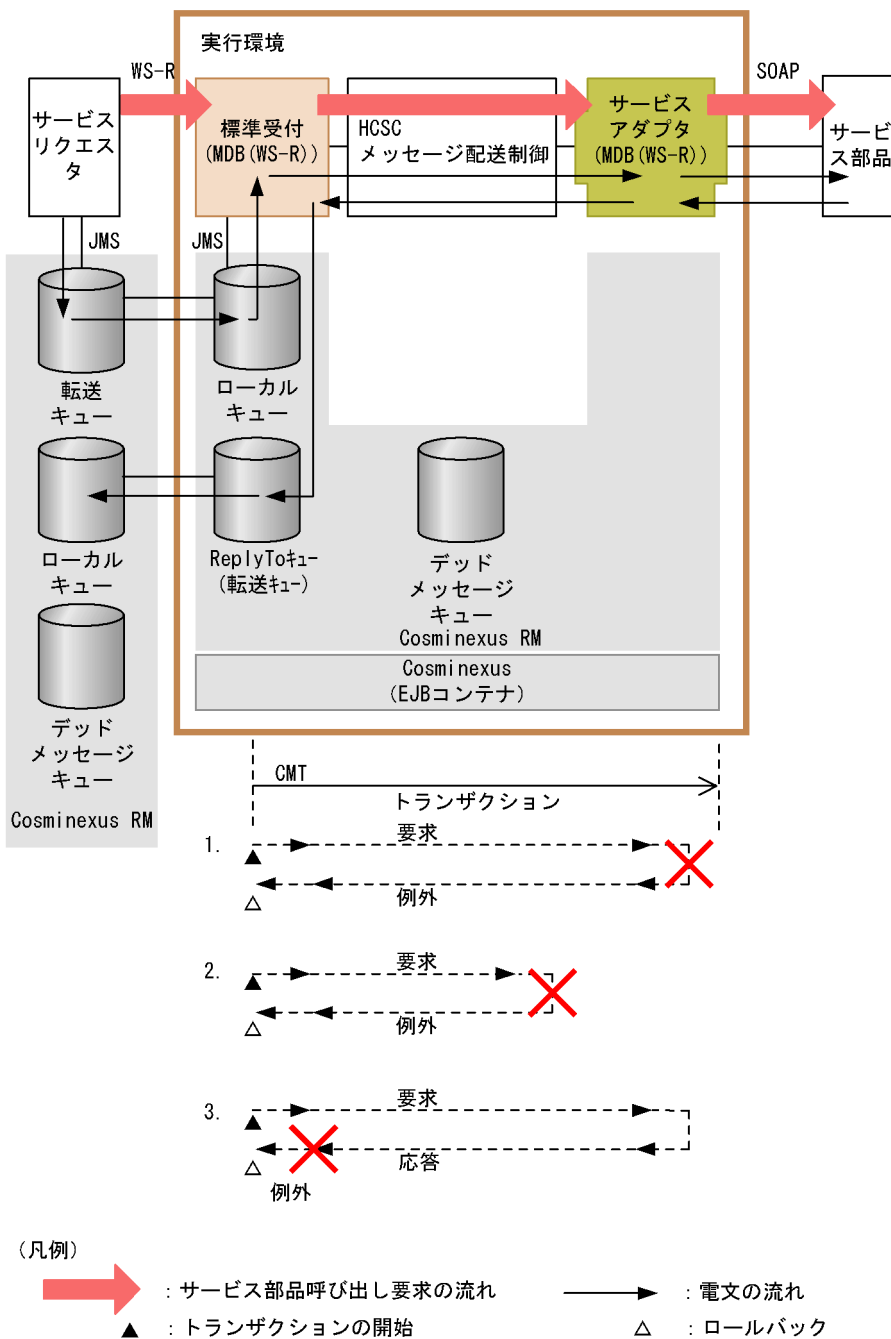
策」を参照してください。

(b) 同期のサービス部品アダプタへメッセージを送信する場合

非同期 (MDB (WS-R)) の標準受付でサービス部品呼び出し要求を受け付け、同期のサービスアダプタへメッセージを送信する場合、標準受付でのローカルキューからのメッセージの取り出しからサービスアダプタでのサービス部品呼び出し、および応答が返ってきて ReplyTo キューへメッセージを送信するまでを、一つのトランザクションで処理します。

転送キューへのメッセージの送信が失敗した場合や、指定したサービスアダプタが起動していない場合、ReplyTo キューへのメッセージ送信が失敗した場合など、何らかのエラーが発生した場合は、トランザクションをロールバックします。ロールバックすると、標準受付で取り出したメッセージが復元され、再度ローカルキューからメッセージを取り出して、サービス部品を呼び出します。受付が非同期であるがサービス部品が同期の場合のトランザクションについて次の図に示します。

図 5-34 受付が非同期であるがサービス部品が同期の場合のトランザクション



トランザクションが失敗すると、次のようになります。番号は、図 5-34 の番号と対応しています。

1. 転送キューへのメッセージの送信が失敗した場合

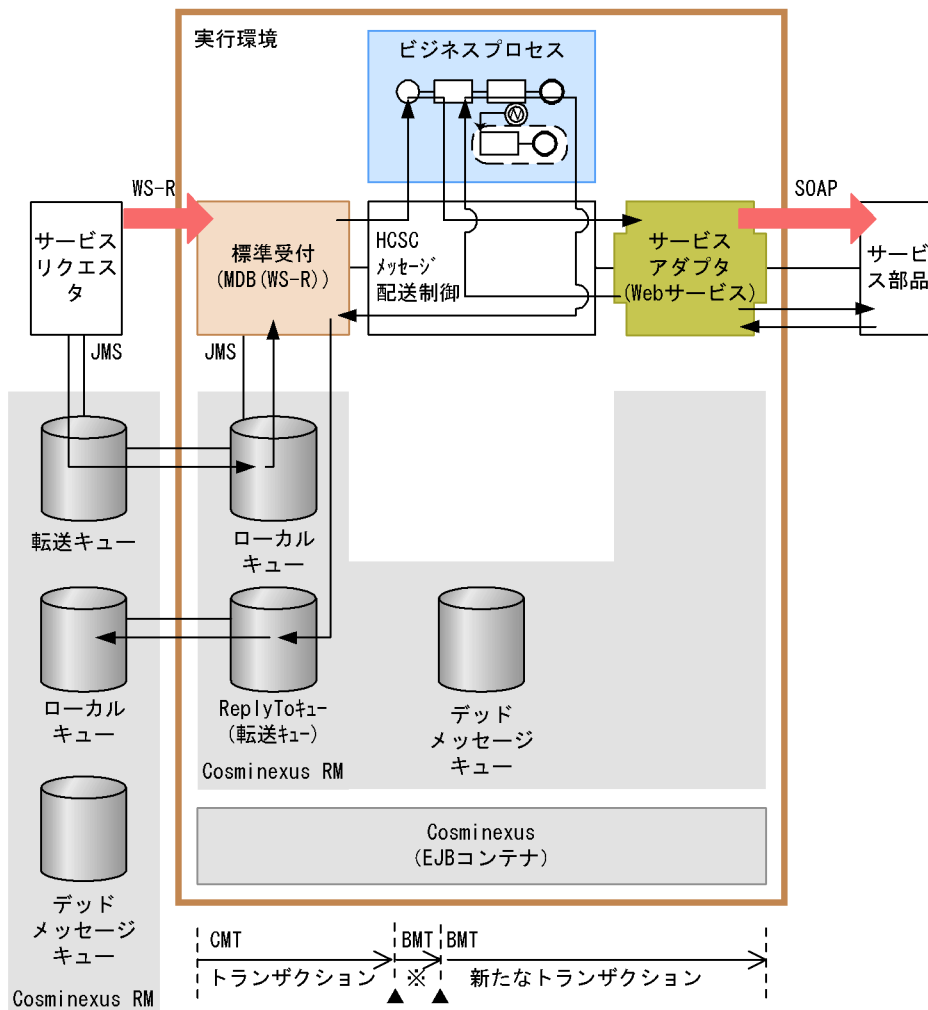
サービスアダプタから SOAP でのサービス部品呼び出しが失敗すると、ローカルキューにメッセージが戻り、再度標準受付でメッセージを取り出します。

2. 指定したサービスアダプタが起動していない場合
指定したサービスアダプタが起動していないと、ローカルキューにメッセージが戻り、再度標準受付でメッセージを取り出します。
3. ReplyTo キューへのメッセージ送信が失敗した場合
応答が返ってきて ReplyTo キューへのメッセージ送信が失敗すると、ローカルキューにメッセージが戻り、再度標準受付でメッセージを取り出します。

エラーが発生したときの対処方法については、「7.7.3 MDB (WS-R) 実行時の障害対策」を参照してください。

ビジネスプロセスは BMT (Bean Managed Transaction) で動作します。ビジネスプロセス自体は新たなトランザクションで制御します。ビジネスプロセスを呼び出す場合は、ビジネスプロセスのサービス呼出アクティビティに定義したサービス部品呼び出し処理ごとに、新たなトランザクションで制御します。ビジネスプロセスを介した場合のトランザクションについて次の図に示します。

図 5-35 ビジネスプロセスを介した場合のトランザクション



(凡例)

- ➔ : サービス部品呼び出し要求の流れ
- ➔ : 電文の流れ
- ▲ : トランザクションの開始

注※: 新たなトランザクション

(5) デッドメッセージキュー

HCSC サーバ稼働マシンでのサービス部品の呼び出しがロールバックして、ロールバックの回数(メッセージの配送回数)が最大値に達した場合や、配送回数に無制限の設定をしている場合、そのメッセージはデッドメッセージキューに遷移します。

エラーが発生したときにデッドメッセージキューに遷移する仕組みについては、「7.7.3 MDB (WS-R) 実行時の障害対策」を参照してください。

(6) MDB (WS-R) で使用するキューの名称と個数

HCSC サーバの実行環境上では、表 5-23 に示すキューを使用します。

表 5-23 MDB (WS-R) で使用するキューの名称と個数

項番	用途	説明	キューの種類	キューの名称	個数	備考
1	非同期受付 (MDB (WS-R)) 用	サービスリクエスト側の転送キューのあて先となるキュー。	ローカルキュー	<ul style="list-style-type: none"> 単独構成およびロードバランスクラスタの場合 CSC<HCSC サーバ名 >ACPT_RCVQ HA クラスタの場合 CSC<クラスタ名 >ACPT_RCVQ 	1	-
2	サービスアダプタ (MDB (WS-R)) 用	サービス部品側のローカルキューへ転送するキュー。	転送キュー	CSC_<クラスタ名 ><アダプタ名>	非同期 (MDB (WS-R)) サービスアダプタ数	-
3	デッドメッセージキュー	MDB (DB キュー) 用のデッドメッセージキューと共用。	ローカルキューまたは転送キュー	任意の名称	システムに 1 個	DB キューでのデッドメッセージキューと同一。
4	ReplyTo キュー	サービス部品呼び出しの応答を受け取る場合に使用。	ローカルキューまたは転送キュー	任意の名称	任意	-

(凡例)

- : 該当しません。

5.4.5 MDB (DB キュー) を使ったサービス部品呼び出し

(1) Cosminexus RM との関係

DB キューを使った非同期のサービス部品呼び出しでも、Cosminexus RM を使用します (通常は、TP1/EE と連携するために使用します。TP1/EE 側では DB キューという名前で呼びます)。

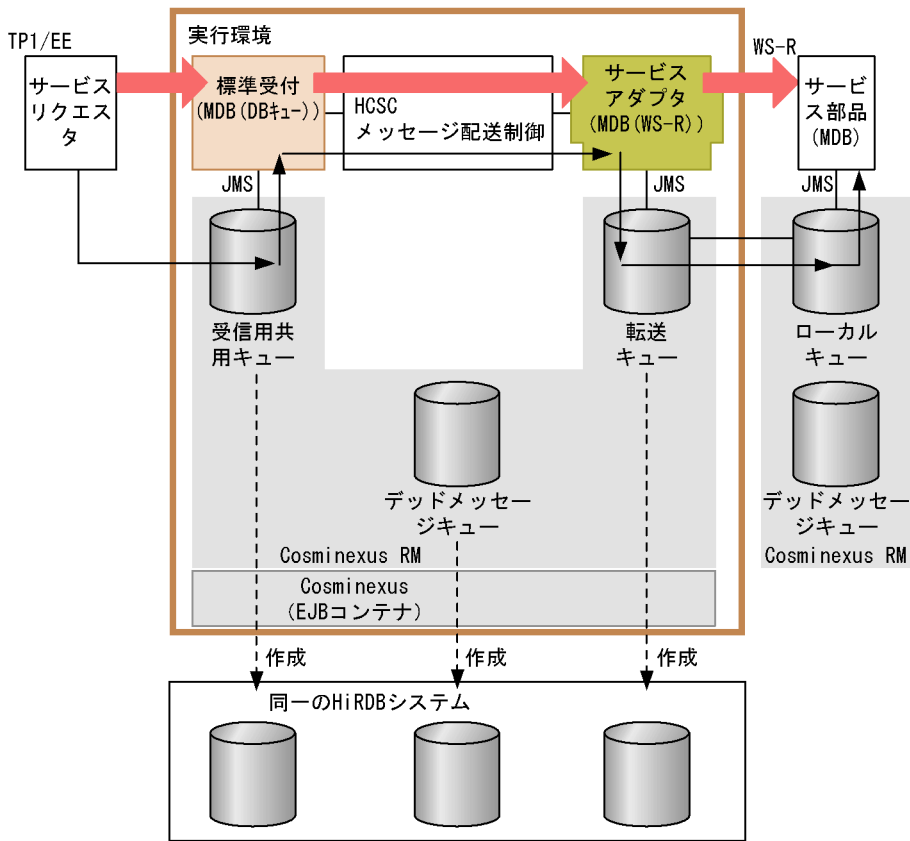
5. システム運用

サービスリクエスト側の TP1/EE とのインターフェースには受信用共用キューを、サービス部品側の TP1/EE とのインターフェースには送信用共用キューを使用します。

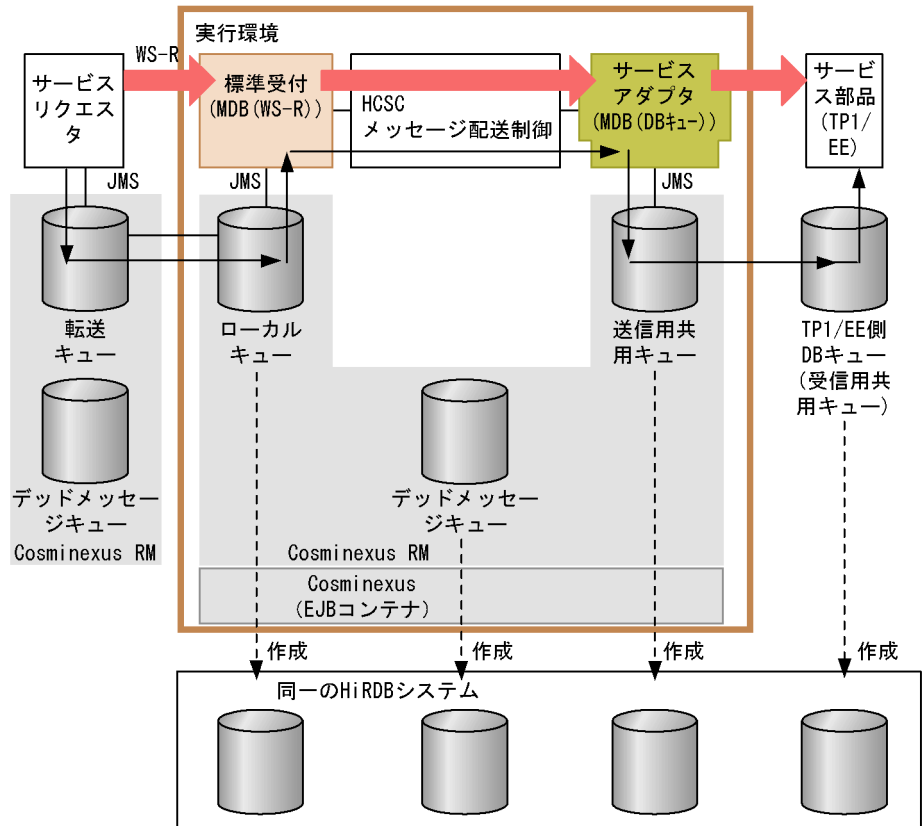
なお、非同期 (MDB (DB キュー)) の標準受付から、非同期 (MDB (DB キュー)) サービスアダプタを呼び出すことはできません。必ず異なるプロトコルのリクエスト受付またはサービスアダプタと組み合わせて使用する必要があります。Cosminexus RM との関係性を次の図に示します。

図 5-36 Cosminexus RM との関係

●サービスリクエスト側がTP1/EEの場合



● サービス部品側がTP1/EEの場合



(凡例)

- ➔ : サービス部品呼び出し要求の流れ
- ➔ : 電文の流れ
- ➔ : キューの作成

! 注意事項

実行環境内と HiRDB に別々のキューがそれぞれ作成されるわけではありません。データベース上のキューは同一のシステム上に作成されるため、実行環境内のキューと HiRDB のキューは同じものになります。TP1EE 側の DB キューも同様です。

(2) サービス部品呼び出し時のメッセージの流れ

HCSC サーバのリクエスト受付は、MDB (Message Driven Bean) で動作し、HCSC サーバ側の受信用共有キューを監視しています。HCSC サーバ側の受信用共有キューにメッセージが送信されると、メッセージを取り出してサービス部品を呼び出します。

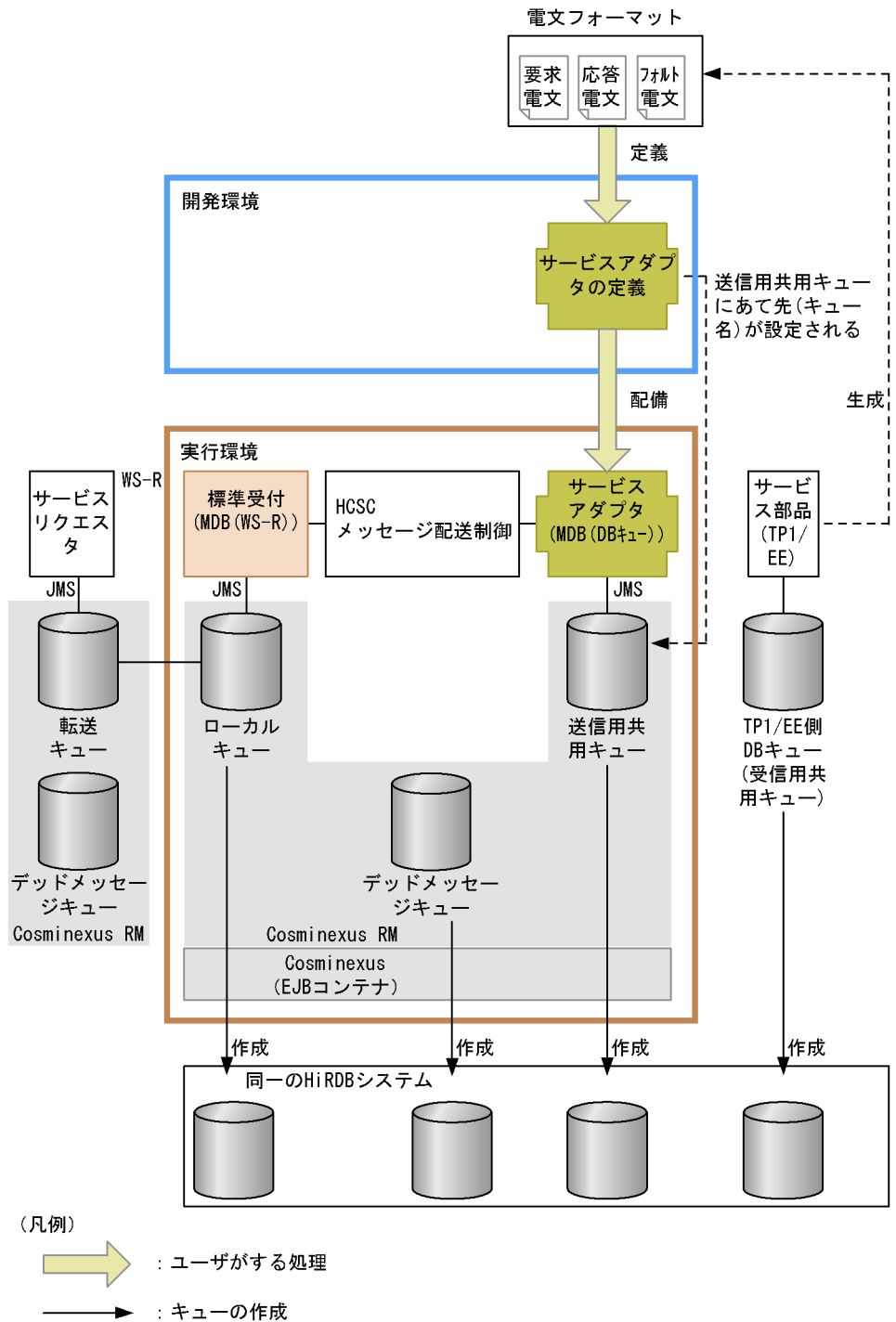
5. システム運用

TP1/EE 側のサービスリクエストからは、受信用共用キューがあるデータベースに対して、直接アクセスしてメッセージを送信します。

サービスリクエスト側の送信用共用キューには、あて先となるキュー名を設定します（開発環境のサービスアダプタ定義画面で設定します）。

あて先となる TP1/EE 側の DB キュー（受信用共用キュー）は、TP1/EE のコマンドを使用して作成します。なお、TP1/EE 側の DB キューは、送信用共用キューがある同一データベース内（同一の HiRDB システム内）に作成する必要があります。非同期（MDB（DB キュー））の場合のあて先の指定について次の図に示します。

図 5-37 非同期 (MDB (DB キュー)) の場合のあて先の指定



! 注意事項

実行環境内と HiRDB に別々のキューがそれぞれ作成されるわけではありません。データベース上のキューは同一のシステム上に作成されるため、実行環境内のキューと HiRDB のキューは同じものになります。TP1EE 側の DB キューも同様です。

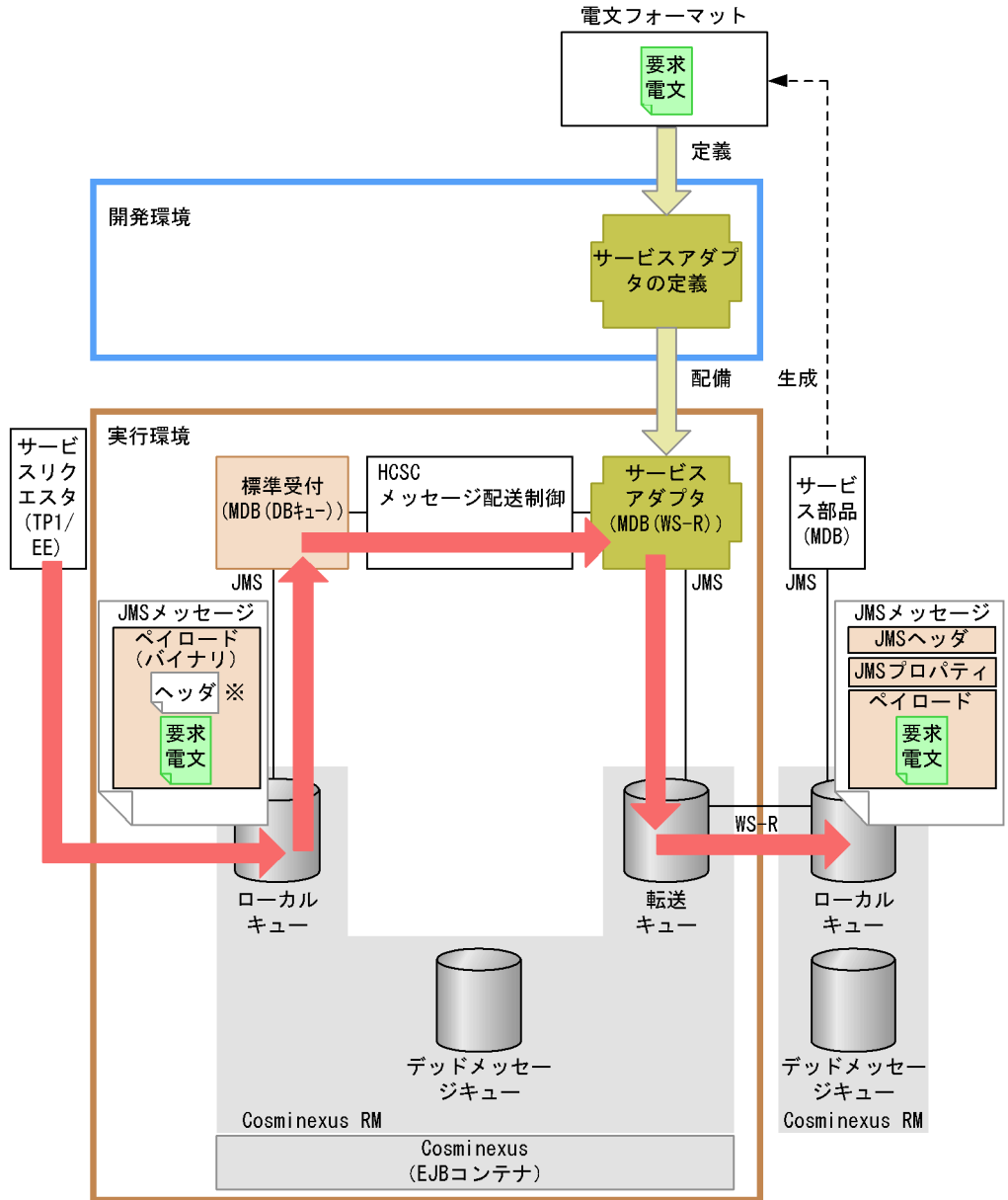
DB キューの作成の詳細については、マニュアル「TP1/Server Base Enterprise Option 使用の手引」の DB キューに関する内容を参照してください。

(a) TP1/EE からサービス部品を呼び出す場合



サービスリクエストからサービス部品を呼び出すときに、受信用共用キューに送信するメッセージの形式は、BytesMessage です。

呼び出すサービス名やクライアント相関 ID などのパラメタを設定した HCSC サーバ用 DB キューヘッダをバイナリ形式で作成し、そのあとに要求電文（バイナリ形式）を組み立てます。これによって、要求電文（バイナリ形式）の内容が、ユーザ電文としてサービス部品に伝わります。サービスリクエストから標準受付を呼び出すとき、サービス部品側の電文フォーマットに合わせた要求電文を事前に作成し、ペイロードに設定してメッセージを送信します。TP1/EE からサービス部品を呼び出すときのユーザ電文と電文フォーマットの関係は次の図に示します。

図 5-38 TP1/EE からサービス部品を呼び出すときのユーザ電文と電文フォーマットの関係



(凡例)

-  : サービス部品呼び出し要求の流れ
-  : ユーザがする処理

注※ HCSCサーバ用DBキューヘッダです。

5. システム運用

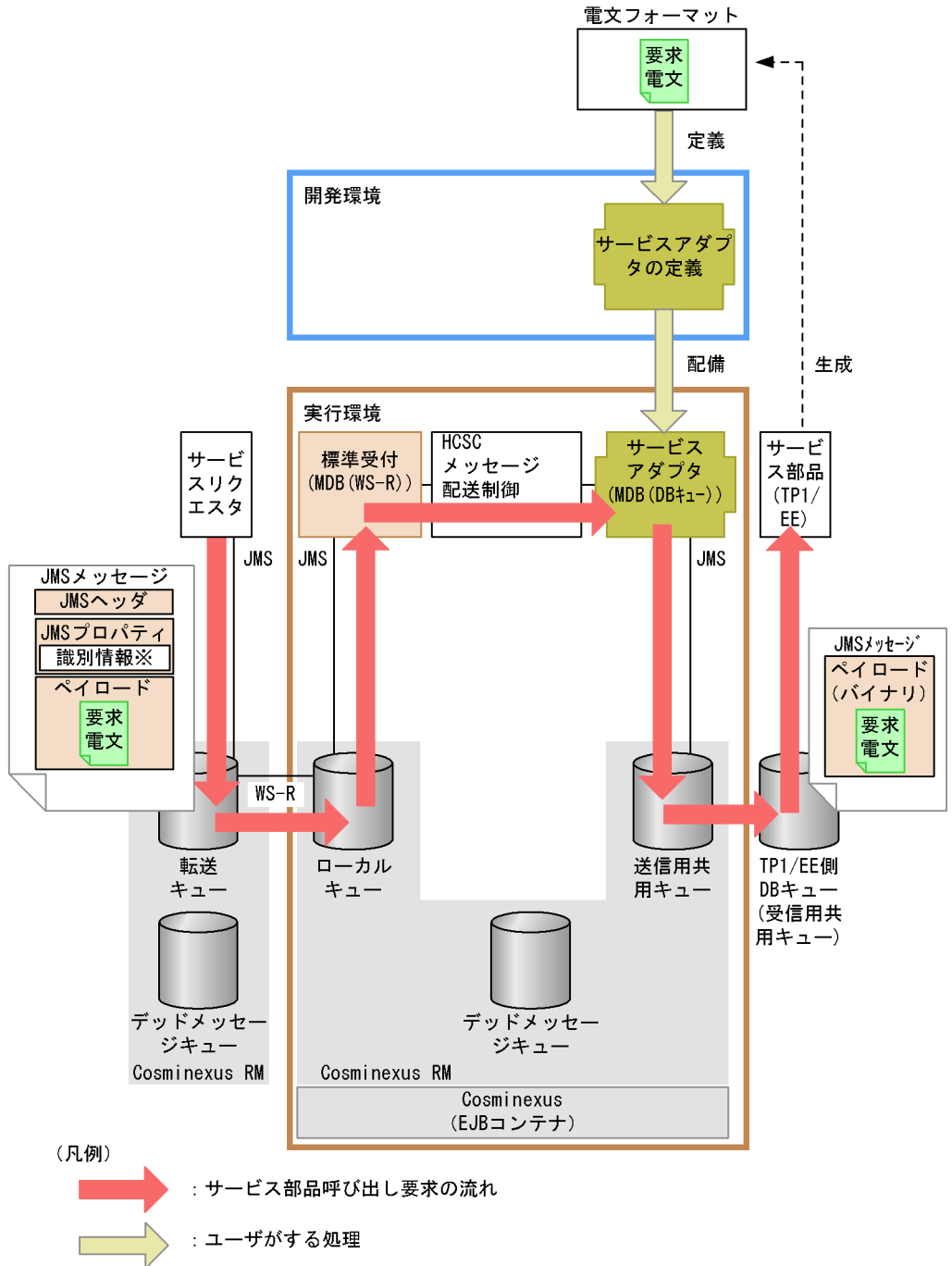
バイナリデータを作成する方法については、マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド」を参照してください。

(b) TP1/EE のサービス部品を呼び出す場合

サービスアダプタからサービス部品を呼び出すときに送信用共用キューに送信するメッセージの形式は、`BytesMessage` です。

サービスアダプタに定義した電文フォーマットに合わせた要求電文をバイナリ電文としてメッセージに設定します。TP1/EE のサービス部品を呼び出すときのユーザ電文と電文フォーマットの間係を次の図に示します。

図 5-39 TP1/EE のサービス部品を呼び出すときのユーザ電文と電文フォーマットの関係



(3) 同期のサービス部品を呼び出す場合の応答電文の扱い

標準の非同期受付 (MDB (DB キュー)) は、非同期の要求電文の標準受付で、基本的にサービス部品からの応答がない場合に使用します。しかし、非同期受付 (MDB (DB キュー)) から同期のサービス部品 (Web サービスまたは SessionBean など) やビジネスプロセスを要求した場合、同期のサービス部品から応答が返るときがあります。

そのため、HCSC サーバでは応答を ReplyTo キューに送信する手段を提供しています。

ReplyTo キューを利用するには、HCSC サーバの環境構築時に HCSC サーバ側に送信用共用キューを作成し、送信用共用キューに送信先のキュー名を指定しておきます。

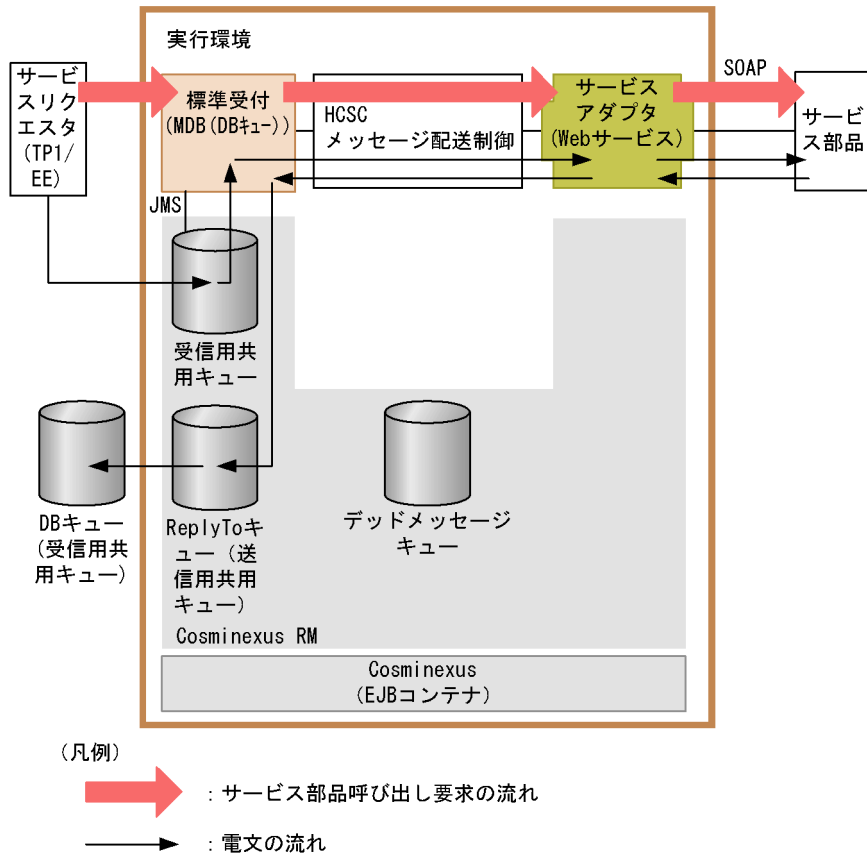
サービスリクエストから標準受付に対してサービス部品の呼び出しを要求する場合、標準受付のパラメタに作成した送信用共用キューのキュー名を指定すると、サービス部品からの応答が返ってきた際に指定されたキューに JMS メッセージが送信されます。

送信用共用キューからサービスリクエスト側の DB キュー (受信用共用キュー) にメッセージが転送されるため、DB キュー (受信用共用キュー) からメッセージを取り出すことで、サービス部品からの応答電文を取得できます。

応答を取り出す方法については、マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム開発ガイド」を参照してください。

同期サービス部品を呼び出した場合の応答の扱いを次の図に示します。

図 5-40 同期サービス部品を呼び出した場合の応答の扱い



ReplyTo キューへメッセージを出力するのは、次に示す場合です。

同期サービス部品でも応答があるかどうかによって、次のような形式で ReplyTo キューへメッセージを送信します。

なお、サービスリクエストから ReplyTo キューのキュー名を指定していても、HCSC サーバ側に指定したキュー名のキューが作成されていない場合は、ReplyTo キューにメッセージは送信できず、サービス部品呼び出し処理がエラーになります。

表 5-24 ReplyTo キューへメッセージを出力するケース

項番	ReplyTo キューへ出力するケース	応答電文の有無			
		応答電文がある場合	応答電文がない場合	サービス部品からのユーザ定義例外的場合	ユーザ定義例外以外のエラーの場合
1	呼び出し先のサービス部品が同期サービス部品の場合 (WebService, SessionBean およびカスタムアダプタなど)	ペイロードに応答電文を設定	ペイロードなしのメッセージ	ペイロードに応答電文を設定	×
2	呼び出し先のサービス部品が非同期サービス部品の場合 (MDB (WS-R) および MDB (DB キュー) など)	×	×	-	×
3	呼び出し先のサービス部品がビジネスプロセスの場合	ペイロードに応答電文を設定	ペイロードなしのメッセージ	ペイロードに応答電文を設定	×

(凡例)

× : メッセージを送信しません。

- : 非同期のサービス部品からユーザ定義例外は存在しないため該当しません。

注 エラーの情報はログ・トレースに出力します。

サービスリクエストからの要求で ReplyTo キューのキュー名を指定していない場合、および電文の実行履歴を採取している場合は、応答電文の内容は破棄されます (応答電文を破棄したことを示す KDECO0031-W メッセージが出力されます)。

なお、MDB (WS-R) の場合のように、JMS プロパティを引き継ぐことはできません。サービス部品呼び出しの相関関係を対応づける場合は、ユーザ電文内に相関関係を示す情報を埋め込みます。

(4) MDB (DB キュー) 使用時のトランザクション

MDB (DB キュー) の場合、サービスリクエストから HCSC サーバの間、そしてサービスアダプタからサービス部品の間は、異なるトランザクションになります。

標準受付でのローカルキューからのメッセージの取り出しとサービスアダプタでの転送キューへの送信は、一つのトランザクションで処理します。MDB (WS-R) の場合のトランザクションと同一です。

(5) デッドメッセージキュー

HCSC サーバ稼働マシンでのサービス部品の呼び出しをロールバックして、ロールバックの回数 (メッセージの配送回数) が最大値に達した場合や、配送回数に無制限の設定

をしている場合、そのメッセージはデッドメッセージキューに遷移します。

エラーが発生したときにデッドメッセージキューに遷移する仕組みについては、「7.7.3 MDB (WS-R) 実行時の障害対策」を参照してください。

(6) MDB (DB キュー) で使用するキューの名称と個数

HCSC サーバの実行環境上では、次の表に示すキューの名称と個数を使用します。DB (DB キュー) で使用するキューの名称と個数を次の表に示します。

表 5-25 DB (DB キュー) で使用するキューの名称と個数

項番	用途	説明	キューの種類	キューの名称	個数	備考
1	非同期受付 (MDB (DB キュー)) 用	サービスリクエスト側の TP1/EE システムから要求を受信するキュー。	受信用共用キュー	<ul style="list-style-type: none"> 単独構成およびロードバランスクラスタの場合 CSC<HCSC サーバ名 >ACPT_DBQ HA クラスタの場合 CSC< クラスタ名 >ACPT_DBQ 	1	-
2	サービスアダプタ (MDB (DB キュー)) 用	サービス部品側の DB キューへ転送するキュー。	送信用共用キュー	CSC_< クラスタ名 >< アダプタ名 >	非同期 (MDB (DB キュー)) サービスアダプタ数	-
3	デッドメッセージキュー	MDB (WS-R) 用のデッドメッセージキューと共用。	ローカルキューまたは転送キュー	任意の名称	システムに 1 個	WS-R でのデッドメッセージキューと同一
4	ReplyTo キュー	サービス部品呼び出しの応答を受け取る場合に使用。	送信用共用キュー	任意の名称	任意	-

(凡例)

- : 該当しません。

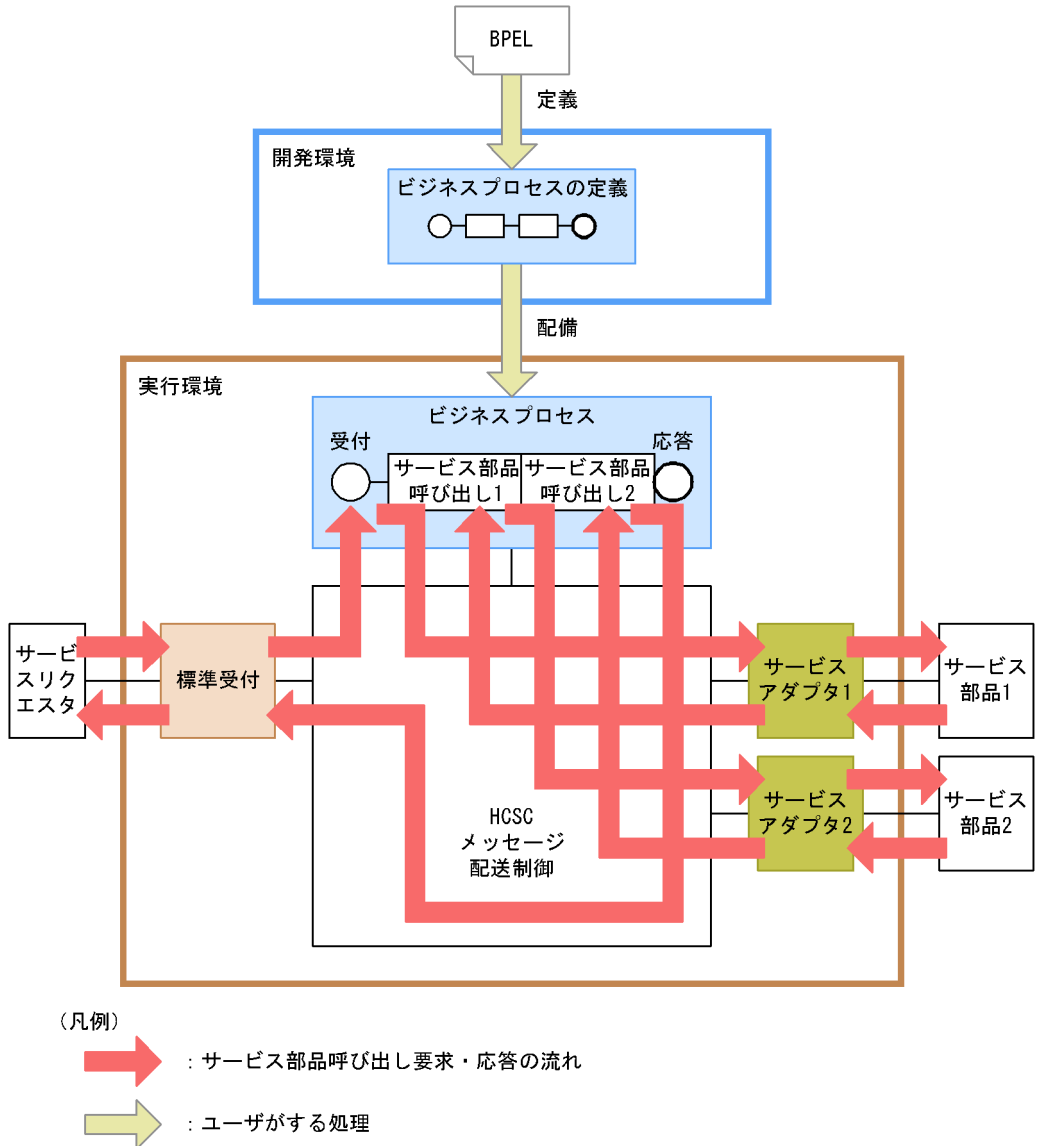
5.5 ビジネスプロセスを使った運用

5.5.1 ビジネスプロセスの仕組み

(1) ビジネスプロセスの処理の流れ

サービスリクエストからビジネスプロセスを呼び出すと、呼び出されたビジネスプロセスで定義された要素やアクティビティを一つ一つ実行することで、プロセスを実行します。ビジネスプロセスの定義は、開発環境で定義します。ビジネスプロセスの処理の流れを次の図に示します。

図 5-41 ビジネスプロセスの処理の流れ



(2) ビジネスプロセスの通信モデル

ビジネスプロセスは、同期と非同期の2種類の通信モデルがあります。

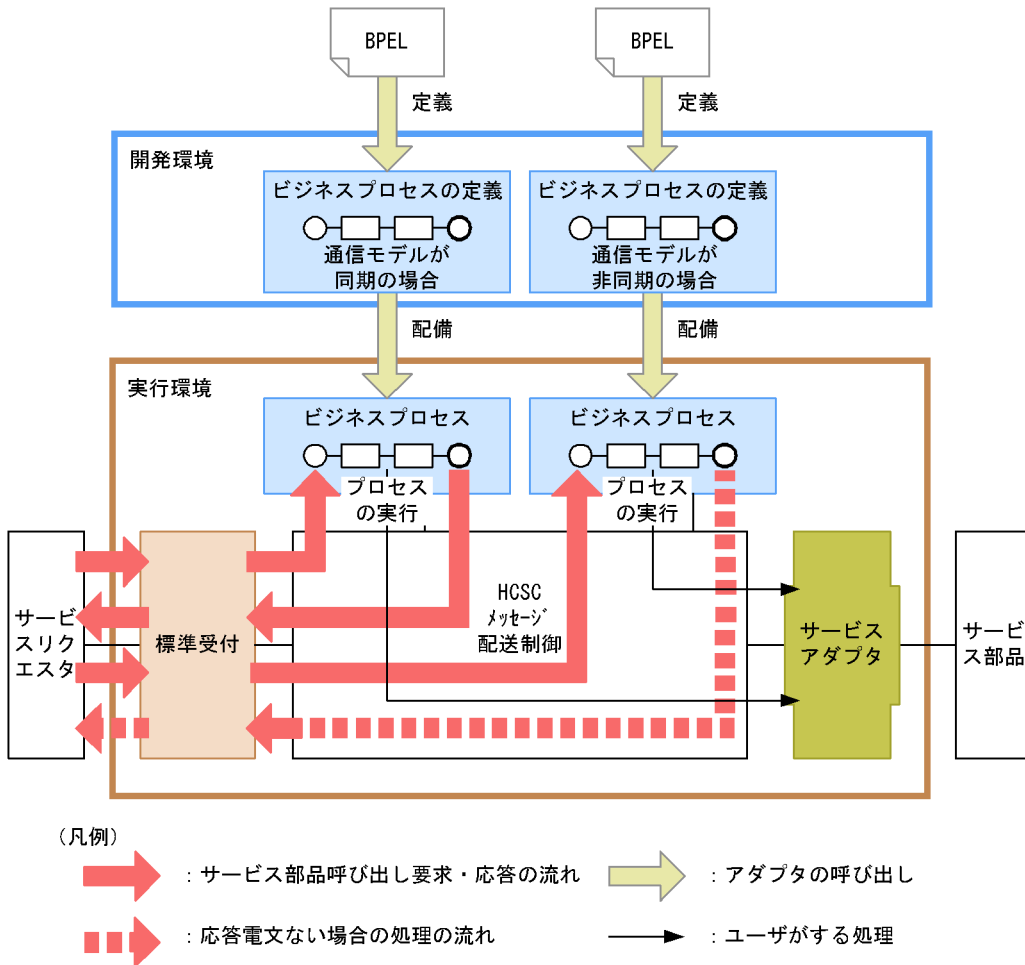
通信モデルが同期の場合、ビジネスプロセスを呼び出したサービスリクエストに対して、応答電文が返ります（応答電文は応答アクティビティに定義した電文フォーマットです）。

通信モデルが非同期の場合、ビジネスプロセスを呼び出したサービスリクエストに応答電文が返りません（処理だけがリターンします）。

5. システム運用

通信モデルは、開発環境でビジネスプロセス定義するときに、受付アクティビティのダイアログで定義します。ビジネスプロセスでの通信モデルの違いを次の図に示します。

図 5-42 ビジネスプロセスでの通信モデルの違い



受付アクティビティダイアログの詳細については、マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド」を参照してください。

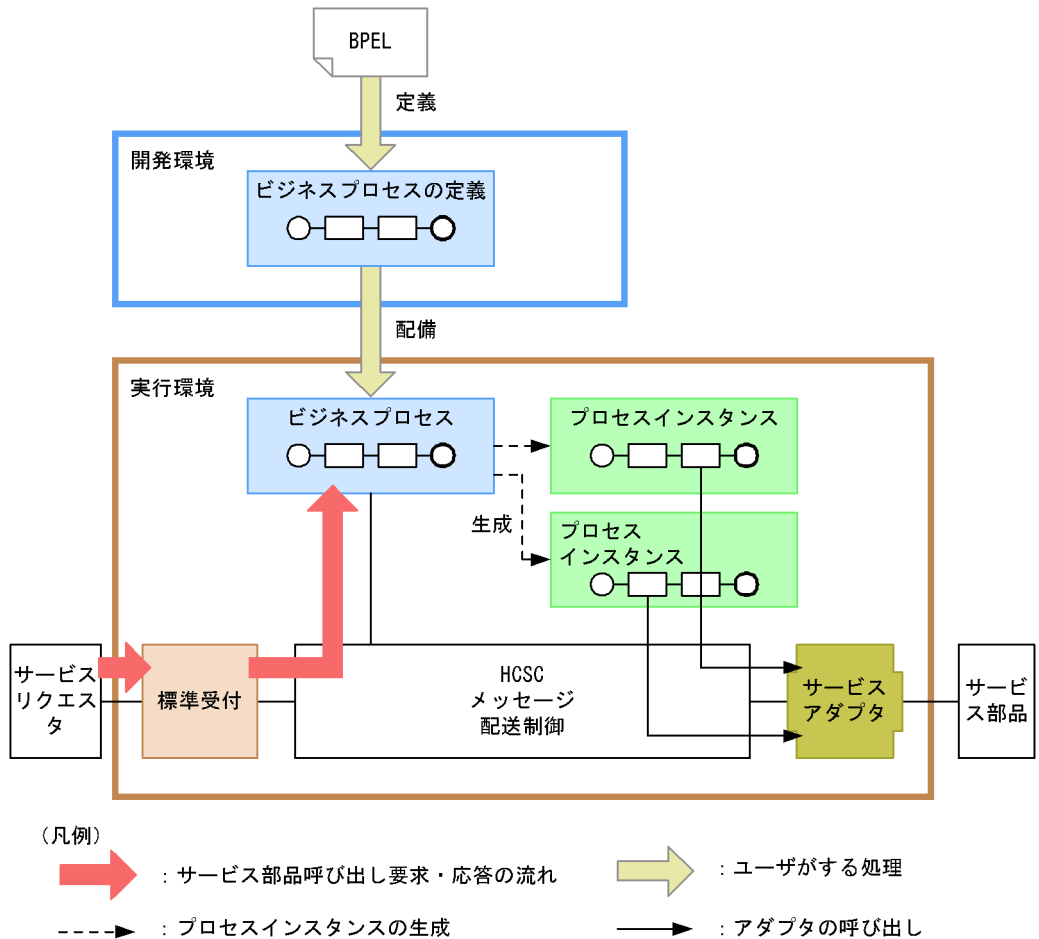
(3) プロセスインスタンス

ビジネスプロセスが最初に要求を受け付けるときには、プロセスインスタンスを生成します。プロセスインスタンスを生成するには、開発環境でビジネスプロセスを定義するとき、最初に要求を受け付ける受付アクティビティを定義する受付アクティビティダイアログでインスタンス生成を「yes」に設定します。

プロセスインスタンスを生成するビジネスプロセスの場合、ビジネスプロセスが要求を受け付けるたびにプロセスインスタンスを生成します。そのため、複数の要求が同時に

実行された場合でも、個々に独立してプロセスを実行します。ビジネスプロセスでのプロセスインスタンスの仕組みについて次の図に示します。

図 5-43 ビジネスプロセスでのプロセスインスタンスの仕組み



受付アクティビティダイアログの詳細については、マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド」を参照してください。

プロセスインスタンスの属性情報を次の表に示します。

表 5-26 プロセスインスタンスの属性情報

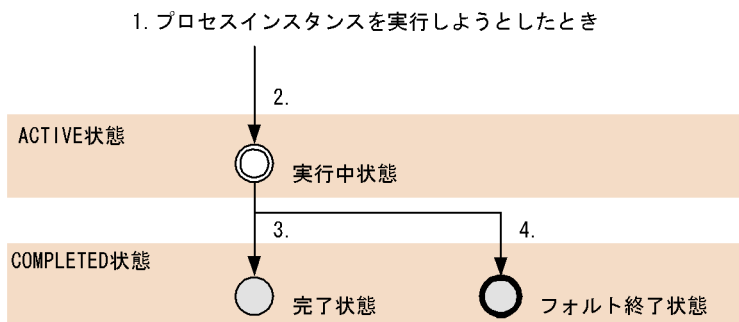
属性	説明
識別子	個々のプロセスインスタンスを特定するための識別子です。同一のビジネスプロセス定義（バージョンは異なる場合もある）内で一意な識別子です。

5. システム運用

属性	説明
ビジネスプロセス定義名	対象のプロセスインスタンスが所属するビジネスプロセスの定義名称です。サービスリクエストから呼び出すときのサービス名に相当します。
ビジネスプロセス定義バージョン	対象のプロセスインスタンスが所属するビジネスプロセス定義バージョンです。
状態	対象のプロセスインスタンスの状態です。
開始時刻	対象のプロセスインスタンスの開始時刻（GMT）です。 注 ACTIVE 状態に遷移した時刻
終了時刻	対象のプロセスインスタンスの終了時刻（GMT）です。 注 COMPLETED 状態に遷移した時刻

プロセスインスタンスの状態遷移を次の図に示します。

図 5-44 プロセスインスタンスの状態遷移



(凡例)

- : 実行中のプロセスインスタンス
- : 終了したプロセスインスタンス
- : フォルト状態のプロセスインスタンス
- : プロセスインスタンスの状態遷移

1. プロセスインスタンスを実行しようとしたとき。
2. プロセスインスタンスに所属するアクティビティを実行しようとしたとき。
3. プロセスインスタンスに所属するグローバルスコープが完了し、プロセスインスタンスが正常に終了したとき。
4. プロセス実行中にフォルトが発生し、グローバルスコープでもキャッチできないでプロセスインスタンスがフォルト終了したとき。

図 5-44 で示すプロセスインスタンスの状態を次の表に示します。

表 5-27 プロセスインスタンスの状態

	状態	説明
ACTIVE 状態	実行中状態 (Executing)	プロセスインスタンスが実行中の状態です。
COMPLETED 状態	完了状態 (Completed)	プロセスのグローバルスコープが完了して、プロセスインスタンスが完了した状態です。
	フォルト終了状態 (Faulted)	フォルトが発生し、グローバルスコープでもキャッチできないでプロセスインスタンスがフォルト終了した状態です。

(4) アクティビティ

アクティビティは、ビジネスプロセスの構成要素となる部品で、処理の構造を表現したものです。複数のアクティビティを連結して、ビジネスプロセスの処理フローを定義します。

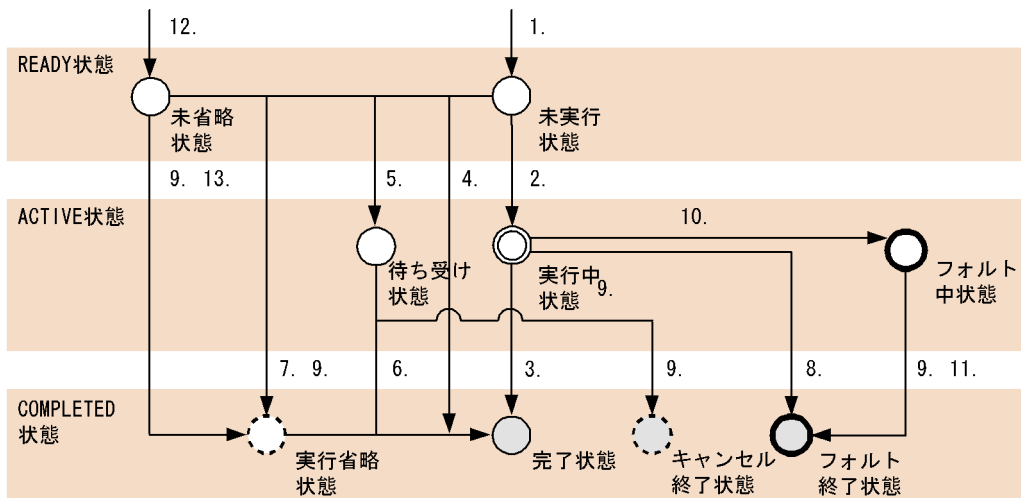
開発環境のビジネスプロセス定義画面でアクティビティを配置、連結して定義します。各アクティビティの属性情報を次の表に示します。

表 5-28 アクティビティの属性情報

属性	説明
プロセスインスタンス識別子	対象のアクティビティが所属するプロセスインスタンスの識別子です。
アクティビティ番号	アクティビティを識別するための番号です。アクティビティリストのインデクスに対応します。
ビジネスプロセス定義名	対象のアクティビティが所属するビジネスプロセスの定義名称です。サービスリクエストから呼び出すときのサービス名に相当します。
ビジネスプロセス定義バージョン	対象のアクティビティが所属するビジネスプロセス定義バージョンです。
アクティビティ定義名	対象のアクティビティのアクティビティ定義名称です。
アクティビティ種別	対象のアクティビティのアクティビティ種別です。
状態	対象のアクティビティの状態です。
開始時刻	対象のアクティビティの開始時刻 (GMT) です。 注 ACTIVE 状態に遷移した時刻
終了時刻	対象のアクティビティの終了時刻 (GMT) です。 注 COMPLETED 状態に遷移した時刻

アクティビティの状態遷移を次の図に示します。

図 5-45 アクティビティの状態遷移



(凡例)

- ◎ : 実行中のアクティビティインスタンス
- : 実行中以外の終了していないアクティビティインスタンス
- : 終了したアクティビティインスタンス
- (with dashed border) : 途中で存在しなくなったアクティビティインスタンス
- ◎ (with thick border) : フォルト状態のアクティビティインスタンス
- : アクティビティインスタンスの状態遷移

1. 新たなアクティビティのインスタンスが生成されたとき。
2. アクティビティインスタンスを実行しようとしたとき。
3. アクティビティインスタンスの実行が完了したとき。
4. アクティビティインスタンスを実行したが、実行中にならないで実行が完了したとき。
5. サービスリクエストからの要求を受信した受付以外の受付アクティビティインスタンスを実行しようとしたとき。
6. 待ち受け状態の受付アクティビティインスタンスがサービスリクエストからの要求を受けたとき。
7. target link が false で活性化されたとき。
8. アクティビティインスタンスの実行時にフォルトが発生したとき。
9. フォルトが発生し、アクティビティの実行がキャンセル処理を依頼されたとき。
10. フォルトが発生し、フォルトハンドラーでキャッチして対応するアクティビティインスタンスを実行中のとき。
11. フォルトが発生し、キャッチに対応するアクティビティインスタンスの実行が完了したとき。
12. 構造化アクティビティが実行省略された際に、内包するアクティビティを実行省略に

するとき。

13. 未省略状態のアクティビティの実行を省略するとき。

図 5-45 で示すアクティビティの状態を次の表に示します。

表 5-29 アクティビティの状態

	状態	説明
READY 状態	未実行状態 (Unexecution)	アクティビティインスタンスが未実行で、今後実行される可能性のある状態です。
	未省略状態 (Unomission)	アクティビティインスタンスが未実行で、今後実行省略される状態です。
ACTIVE 状態	実行中状態 (Executing)	アクティビティインスタンスが実行中の状態です。
	待ち受け状態 (Awaiting)	受付アクティビティのインスタンスが受け付けられる状態です。
	フォルト中状態 (Faulting)	アクティビティインスタンスが faultHandler でキャッチしたアクティビティを実行している状態です。
COMPLETED 状態	完了状態 (Completed)	アクティビティインスタンスが正常に実行され終了した状態です。
	キャンセル状態 (Canceled)	フォルトが発生しアクティビティインスタンスの実行がキャンセルされた状態です。
	フォルト終了状態 (Faulted)	アクティビティインスタンスの実行中にフォルトが発生して終了した状態です。
	実行省略状態 (Omitted)	アクティビティインスタンスの実行が省略された状態です。

各アクティビティの詳細については、マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド」を参照してください。

(5) 変数の種類と役割

ビジネスプロセスでは、メッセージに含まれる値や業務で使用する値を変数で保持できます。変数にはグローバル変数とローカル変数の 2 種類があり、開発環境のビジネスプロセス定義画面で定義します。変数の役割を次の表に示します。

表 5-30 変数の役割

変数	説明
グローバル変数	グローバル変数は、一つのプロセスインスタンス内であれば、どこからでも参照できます。また、プロセスが完了しても変数の値はデータベースに記録されているため、ビジネスプロセス全体の進行状況を分析できます。変数名は、プロセス内で一意にします。

変数	説明
ローカル変数	ローカル変数は、宣言したスコープ内で参照できます。宣言しているスコープが終了すると、変数の値もデータベースから削除されるため、プロセス実行中の条件判定など一時的に値を参照するために利用できます。変数名は、スコープ内で一意にします。スコープが異なれば同じ変数名を宣言できます。ただし、変数を参照する場合に、参照個所で最も内側に近いスコープで宣言された変数を参照します。

変数の定義については、マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド」を参照してください。

(6) 関連セットの役割

関連セットはサービスリクエストが送信するメッセージを一意的に識別するための文字列です。

一つのビジネスプロセスに対して、サービスリクエストからメッセージを受け取れるプロセスインスタンスが HCSC サーバ上に複数ある場合、HCSC サーバはメッセージに含まれる関連セットの値を利用してプロセスインスタンスを特定します。

サービスリクエストは関連セットを含めた要求電文を作成して、HCSC サーバに対してサービス部品の呼び出し（ビジネスプロセスの呼び出し）を要求します。ビジネスプロセスからの応答にも関連セットが含まれ、どの送信メッセージに対する結果かを識別できます。関連セットは開発環境のビジネスプロセス定義画面で定義します。

なお、関連セットは、ビジネスプロセスがサービス部品を呼び出すとき、およびビジネスプロセスがサービス部品から応答を受けたときにも、新たに関連セットを指定してメッセージを送信できます。

関連セットによるプロセスインスタンスの識別については、マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド」を参照してください。

5.5.2 永続化するビジネスプロセスと永続化しないビジネスプロセス

ビジネスプロセスには、データベースにプロセスの実行状態および実行履歴を永続化するビジネスプロセスと、永続化しないビジネスプロセスの2種類があります。永続化とは、プロセスの実行状態および実行履歴をデータベースに記録することです。

それぞれのビジネスプロセスの違いについて、次に説明します。

(1) 永続化するビジネスプロセス

永続化するビジネスプロセスは、プロセスの実行状態と実行履歴の記録があるため、障害が発生した場合に、プロセスの実行の進捗度がわかり、プロセスを再実行できます。開発環境でビジネスプロセスを追加するときに、永続化する設定にできます。

次に示す内容を実施する場合には、ビジネスプロセスを永続化に設定します。

プロセスインスタンスの実行履歴の管理

- コマンドによるプロセスインスタンスの実行履歴の取得
- 運用環境の画面によるプロセスインスタンスの実行履歴の取得

プロセスインスタンスの再実行

- コマンドによるプロセスインスタンスの再実行
- 運用環境の画面によるプロセスインスタンスの再実行
- サービスリクエスタ (SOAP 通信 /SessionBean) によるプロセスインスタンスの再実行

ビジネスプロセスを新規に追加する方法については、マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド」を参照してください。

(2) 永続化しないビジネスプロセス

永続化しないビジネスプロセスは、プロセスの実行状態と実行履歴の記録を採らないため、高性能を実現する必要があるビジネスプロセスの場合に設定します。開発環境でビジネスプロセスを追加するときに、永続化しない設定にできます。

ただし、永続化するビジネスプロセスではできることが、永続化しないビジネスプロセスではできないといった制約事項があります。永続化しないビジネスプロセスは、次の条件を満たす場合に定義できます。

1. 非同期の受付アクティビティを含まない。
2. 非同期のサービスアダプタに対して、サービスを呼び出すサービス呼出アクティビティを含まない。
3. 応答アクティビティよりあとにアクティビティ（分岐（終了）アクティビティおよび終了アクティビティを除く）が存在しない。

例を次に示します。

(例1)「スコープ」の中と外で「受付」と「応答」を使用する場合は、スコープ内の「応答1」のあとに、スコープ外の「受付2」を実行することになるため、永続化しないビジネスプロセスとして定義できません。



(例2)「並列処理」の中に「受付」と「応答」を使用する場合は、次に示すように、並列処理が必ず同時に実行して終了するとは限らないため、永続化しないビジネスプロセスとして定義できません。

- 「応答1」を実行したあとに「受付2」,「サービス呼出2」,または「応答2」のどれ

かを実行する。

- 「応答 2」を実行したあとに「受付 1」、「サービス呼出 1」、または「応答 1」のどれかを実行する。



(例 3) 「並列処理」の中に「サービス呼出」だけを使用する場合は、永続化しないビジネスプロセスとして定義できます。



(例 4) 「分岐」の中に「応答」を使用する場合は、「応答 1」と「応答 2」のどちらか一方だけを実行することになるため、永続化しないビジネスプロセスとして定義できます。



4. プロセスインスタンスの再実行を使用しない (障害発生時は、サービスリクエストからサービス呼び出し要求 (ビジネスプロセスの呼び出し) を再度実行する)。

ビジネスプロセスを新規に追加する方法については、マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド」を参照してください。

5.5.3 ビジネスプロセスの再実行

ビジネスプロセス実行中に、実行基盤のあるマシンが停止したり、サービス部品の呼び出しに失敗したりした場合、障害が発生して中断したプロセスインスタンスを再実行できます。プロセスインスタンスを再実行することで、ビジネスプロセスの内容が処理できます。

(1) 運用環境の画面からの再実行

運用環境の画面から、中断したプロセスインスタンスを一件ずつ再実行できます。

画面によるプロセスインスタンスの再実行の詳細については、「6.1.5 プロセスインスタンスを再実行する」を参照してください。

(2) コマンドからの再実行

コマンドを使用して、中断したプロセスインスタンスを一件ずつ再実行できます。

また、複数のプロセスインスタンスが同一のビジネスプロセス定義名である場合、複数のプロセスインスタンスを一括して再実行できます。プロセスインスタンスの実行履歴の一括再実行は、コマンドでだけ実行できます。

コマンドによるプロセスインスタンスの再実行の詳細については、「6.1.5 プロセスインスタンスを再実行する」を参照してください。

(3) サービスリクエストからの再実行 (SOAP 通信)

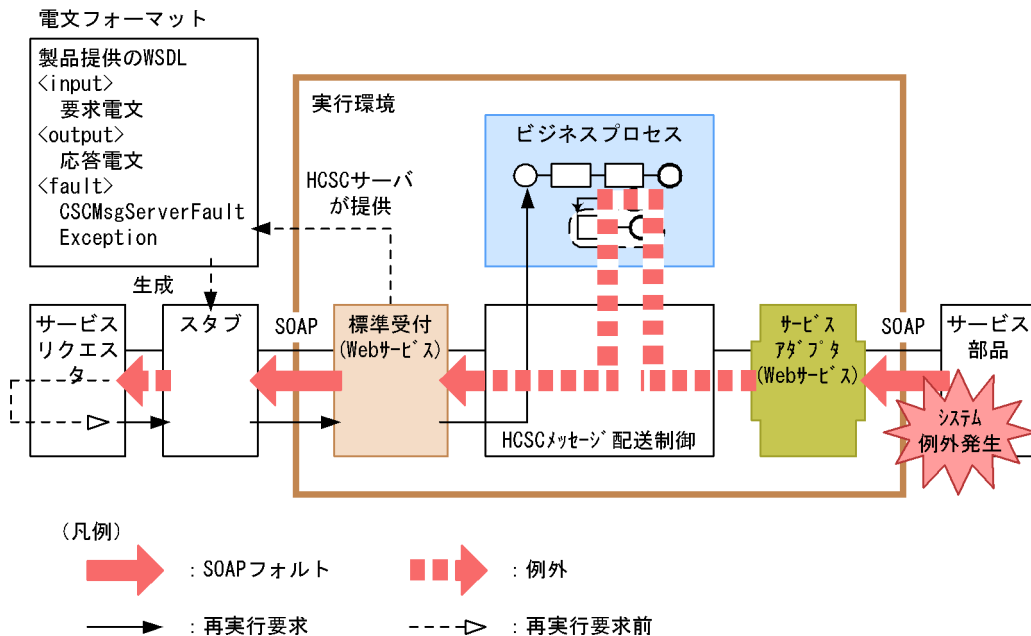
SOAP フォルトや例外になって中断したプロセスインスタンスは、システム運用管理者だけでなく、サービスリクエストからも再実行できます。

サービスリクエストから再実行するには、標準の同期受付 (Web サービス) に要求を出すサービスリクエストを作成します。

サービス部品の呼び出しがエラーになり、ビジネスプロセスインスタンス ID がエラー情報として返ってきた場合は、そのビジネスプロセスインスタンス ID を指定して再実行します。SOAP 通信でのサービスリクエストからの要求の再実行を次の図に示します。

5. システム運用

図 5-46 SOAP 通信でのサービスリクエスタからの要求の再実行



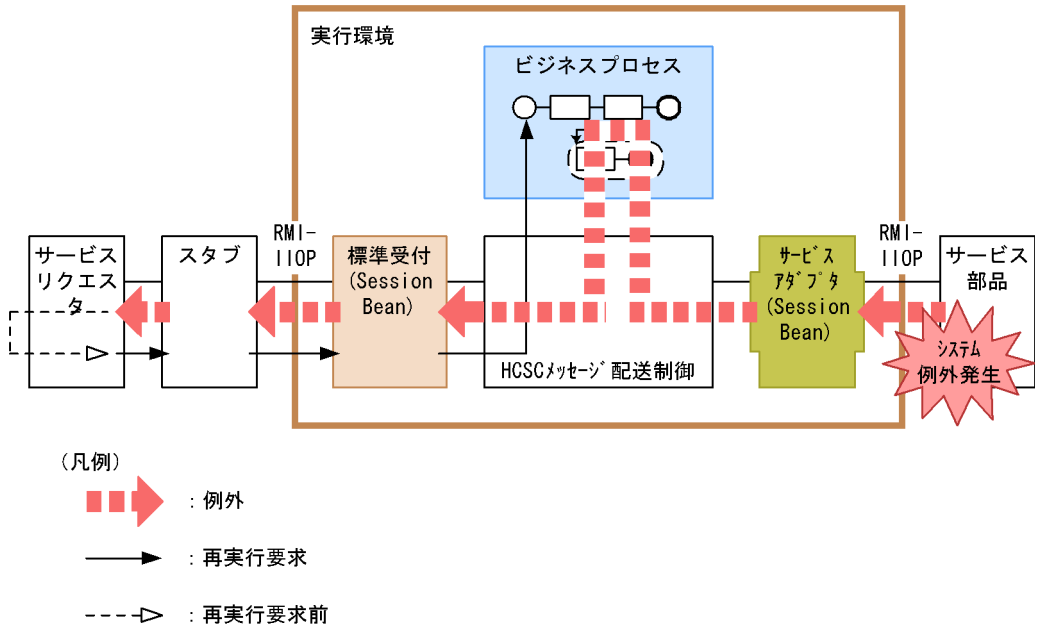
なお、ユーザ定義受付を使用してサービス部品を呼び出して再実行する場合、標準受付に対して再実行を要求するようなサービスリクエスタを作成する必要があります。ビジネスプロセスの再実行を要求するサービスリクエスタの作成については、マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド」を参照してください。

(4) サービスリクエスタからの再実行 (SessionBean)

標準の同期受付 (SessionBean) に要求を出すサービスリクエスタからも、ビジネスプロセスの再実行要求ができます。サービスリクエスタから再実行するには、標準の同期受付 (SessionBean) に要求を出すサービスリクエスタを作成します。

サービス部品呼び出しがエラーになり、ビジネスプロセスインスタンス ID が例外 (エラー情報) として返ってきた場合は、そのビジネスプロセスインスタンス ID を指定して再実行します。SessionBean でのサービスリクエスタからのビジネスプロセスの再実行を次の図に示します。

図 5-47 SessionBean でのサービスリクエストからのビジネスプロセスの再実行



ビジネスプロセスの再実行を要求するサービスリクエストの作成については、マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド」を参照してください。

5.6 標準プロトコル以外のシステムとの接続

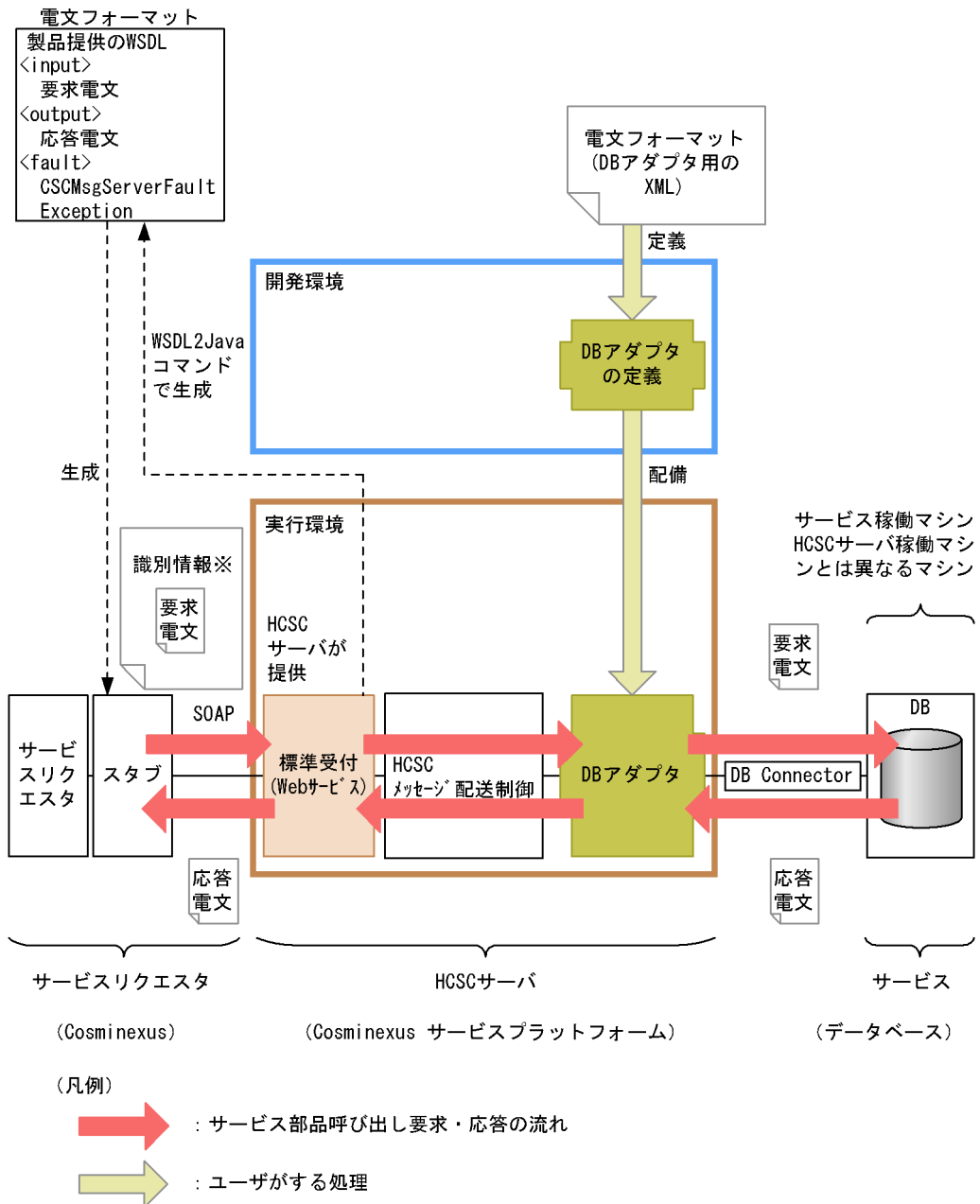
5.6.1 データベースとの接続

サービス部品としてデータベースを呼び出す場合には、DBアダプタを使用します。DBアダプタを使用する場合のデータベースのアクセスと設定について説明します。

(1) DBアダプタを使ったデータベースへのアクセス

DBアダプタは、サービスリクエストやビジネスプロセスからの要求を受けて、データベースに対して直接アクセスできます。DBアダプタは、開発環境で定義します。DBアダプタに対して要求するサービスリクエストからは、実行するSQL文を記述したXML文書を作成して、作成したXML電文を要求電文に設定して実行します。DBアダプタによるSQLの実行について次の図に示します。

図 5-48 DB アダプタによる SQL の実行



注※ 識別情報とは、サービス名、クライアント相関IDなどです。

DB アダプタを定義する手順、および DB アダプタに要求を出すサービスリクエストの作成については、マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド」を参照してください。

(2) DB アダプタが使用する DB Connector の設定

データベースにアクセスするには、HCSC サーバをセットアップするときに定義した DB Connector とは別に、サービス部品稼働マシン（データベースが稼働しているマシン）に対してアクセスする DB Connector を準備する必要があります。

DB アダプタが利用する DB Connector 用の RAR ファイルの選択方法、および DB アダプタを利用する場合に設定する Connector 属性ファイルの設定内容については、「3.1.2(8) DB Connector のセットアップ」を参照してください。

5.6.2 OpenTP1 との接続

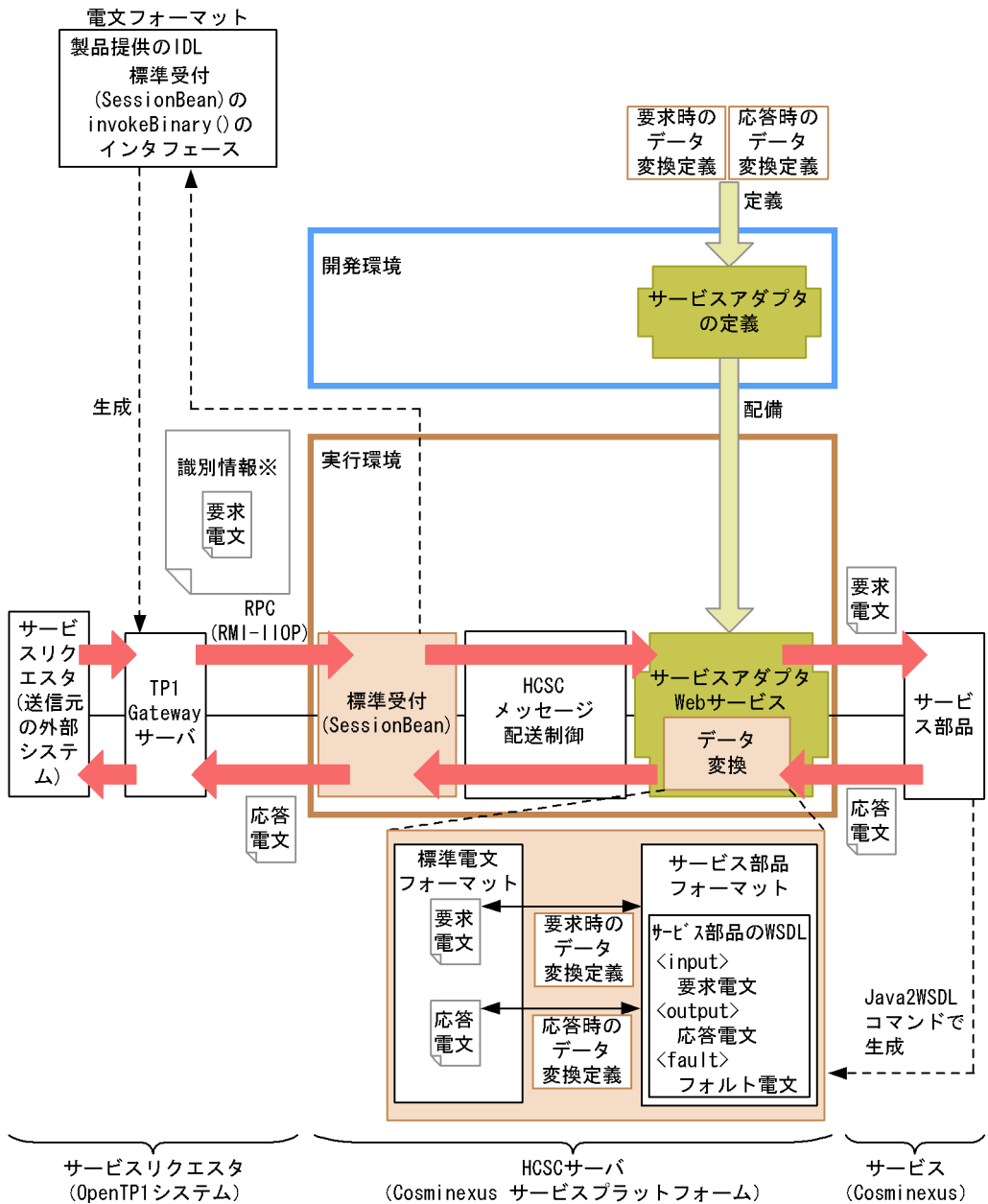
OpenTP1 などの既存システムのサービス部品を呼び出したり、OpenTP1 などの既存システムからサービス部品を呼び出したりできます。呼び出し方で接続のしかたが異なります。

(1) TP1 から同期の標準受付を使った HCSC サーバのサービス部品の呼び出し

Cosminexus サービスプラットフォームの実行環境で、OpenTP1 などの既存システムから、HCSC サーバを経由してサービス部品を呼び出す場合に uCosminexus TP1 Gateway を利用します。

uCosminexus TP1 Gateway では、HCSC サーバの標準受付（SessionBean）に合わせて IDL を作成して、これを基にスタブを作成します。これによって、同期応答型の送信ができます。OpenTP1 システムからのサービス部品の呼び出しを次の図に示します。

図 5-49 OpenTP1 システムからのサービス部品の呼び出し



(凡例)

- ➡ : サービス部品呼び出し要求・応答の流れ
- ➡ : ユーザがする処理
- ➡ : データ変換処理

注※ 識別情報とは、サービス名、クライアント相関IDなどです。

5. システム運用

詳細は、マニュアル「uCosminexus TP1 Gateway ユーザーズガイド」を参照してください。

(2) TP1 から非同期の標準受付を使った HCSC サーバのサービス部品の呼び出し

同期応答型の要求のほかに、非同期で OpenTP1 などの既存システムから、HCSC サーバを経由してサービス部品を呼び出せます。

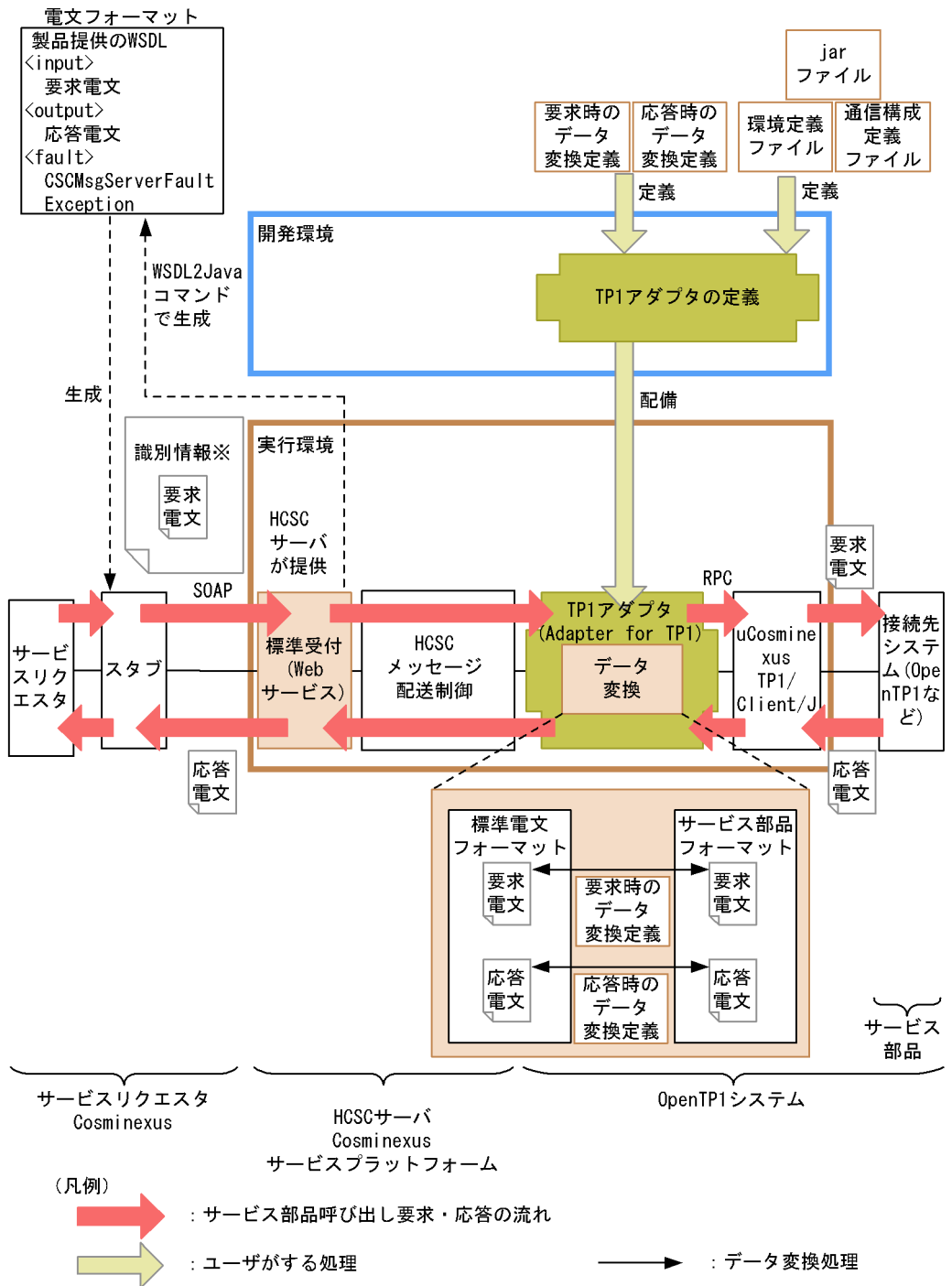
HCSC サーバの標準受付 (MDB (DB キュー)) に対して要求する非同期応答型の送信ができます。

詳細は、「5.4.5 MDB (DB キュー) を使ったサービス部品呼び出し」、およびマニュアル「uCosminexus TP1 Gateway ユーザーズガイド」を参照してください。

(3) HCSC サーバから TP1 アダプタを使った TP1 サービス部品の呼び出し

TP1 アダプタを使用することで、OpenTP1 を使用したシステムのサービス部品を呼び出せます。TP1 アダプタを運用するには、開発環境で設定して、カスタムアダプタパッケージファイルを作成 (パッケージング) し、実行環境へ配備することで利用できます。HCSC サーバからの OpenTP1 システムのサービス部品の呼び出しを次の図に示します。

図 5-50 HCSC サーバからの OpenTP1 システムのサービス部品の呼び出し



5. システム運用

開発環境で TP1 アダプタを作成する手順については、マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム TP1 アダプタ ユーザーズガイド」を参照してください。

開発環境での操作については、マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド」を参照してください。

実行環境への配備方法については、「3.1.9 サービスアダプタを配備する」を参照してください。

(4) HCSC サーバからの MDB (DB キュー) サービスアダプタを使った TP1 サービス部品の呼び出し

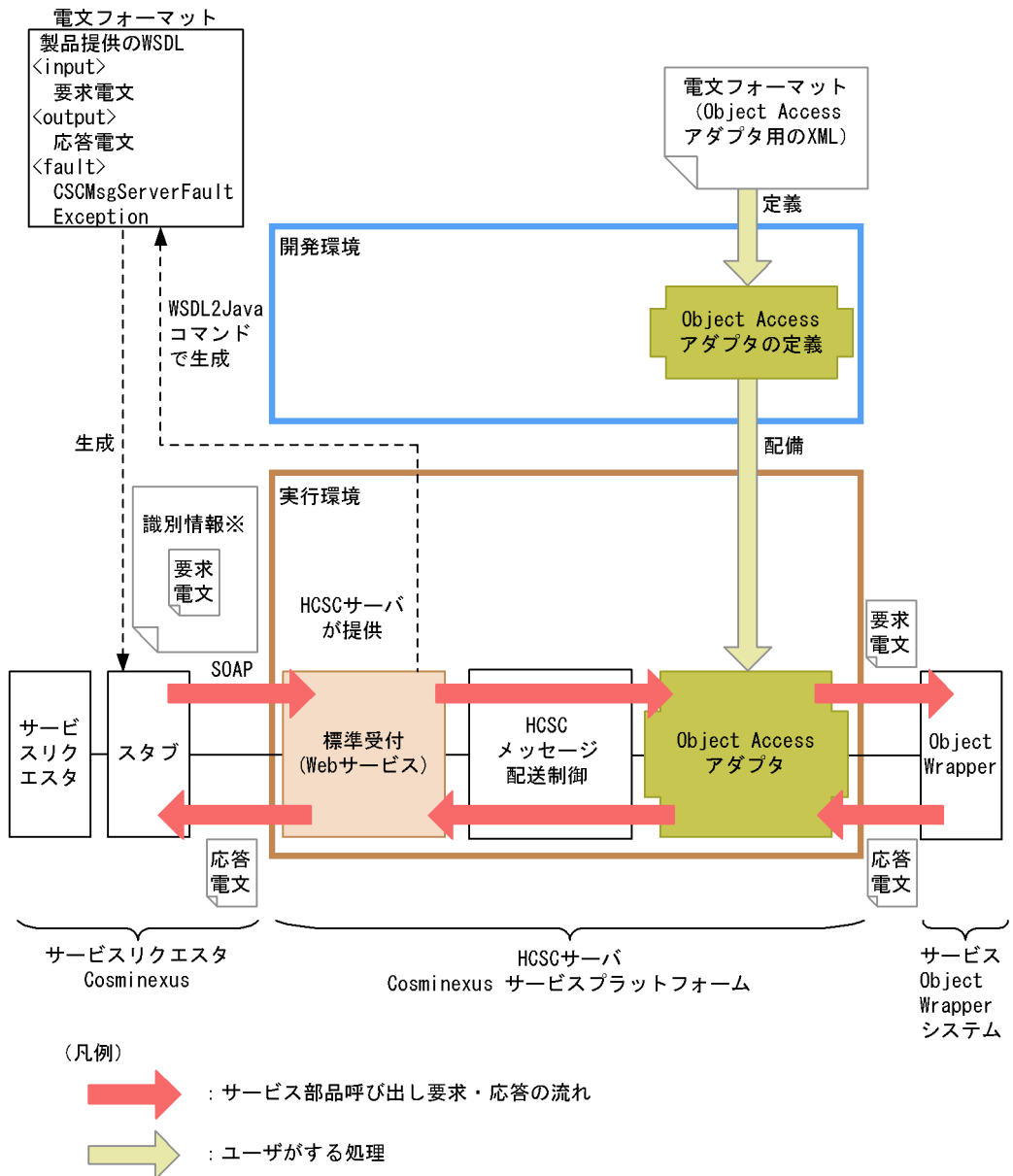
同期応答型のサービス部品呼び出しのほかに、非同期で HCSC サーバから、OpenTP1 システムのサービス部品を呼び出せます。非同期で HCSC サーバから、OpenTP1 システムのサービス部品を呼び出すには、HCSC サーバの非同期サービスアダプタ (MDB (DB キュー)) を実行します。

詳細は、「5.4.5 MDB (DB キュー) を使ったサービス部品呼び出し」を参照してください。

5.6.3 Object Wrapper システムとの接続

Object Access アダプタを使用することで、既存の TPBroker システム (Object Wrapper システム) のサービス部品を呼び出せます。HCSC サーバからの Object Wrapper システムのサービス部品の呼び出しを次の図に示します。

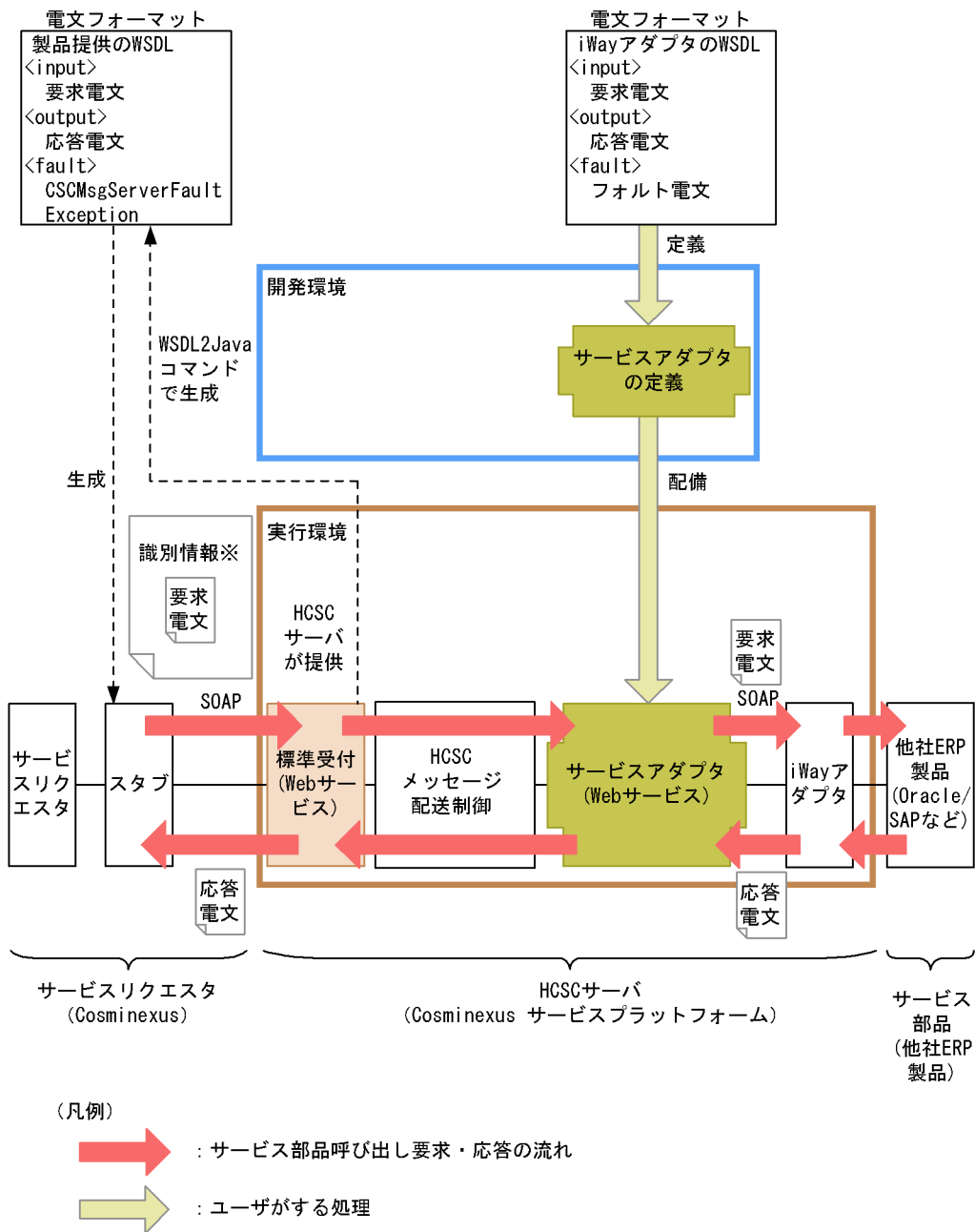
図 5-51 HCSC サーバからの Object Wrapper システムのサービス部品呼び出し



5.6.4 他社 ERP パッケージとの接続

iWay アダプタを使用することで、他社 ERP パッケージのサービス部品を呼び出せます。HCSC サーバからの他社 ERP パッケージのサービス部品の呼び出しを次の図に示します。

図 5-52 HCSC サーバからの他社 ERP パッケージのサービス部品の呼び出し

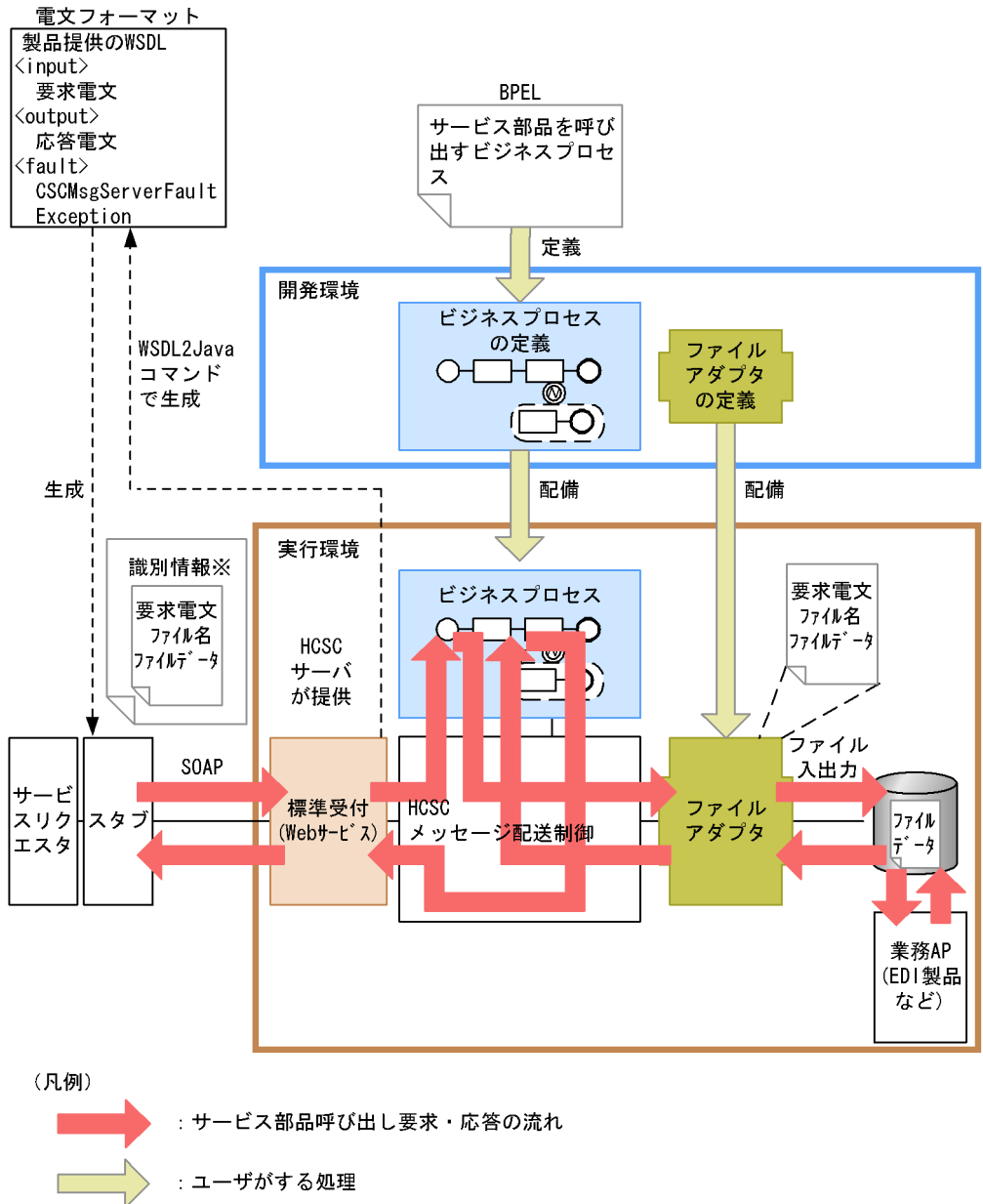


5.6.5 ファイルを扱うシステムとの接続

サービスリクエストやビジネスプロセスからの要求を受けて、HCSC サーバ上のローカ

ルディスクに対して直接ファイルの入出力ができます。ファイルアダプタは、開発環境で定義します。ファイルアダプタによるファイルアクセスの実行について、次の図に示します。

図 5-53 ファイルアダプタによるファイルアクセスの実行



注※ 識別情報とは、サービス名、クライアント相関IDなどです。

ファイルアダプタを定義する手順の詳細については、マニュアル「Cosminexus サービ

5. システム運用

「プラットフォーム ファイルアダプタ ユーザーズガイド」を参照してください。

6

実行履歴の管理

この章では、システム運用時のプロセスインスタンスの実行履歴や電文の実行履歴の管理方法について説明します。

6.1 プロセスインスタンスの実行履歴の管理

6.2 電文の実行履歴の管理

6.3 実行履歴情報テーブルの管理

6.1 プロセスインスタンスの実行履歴の管理

ビジネスプロセスのプロセスインスタンスの実行状況を履歴として、データベースに記録できます。これを永続化といいます。永続化すると、プロセスインスタンスの実行履歴の中から目的のプロセスインスタンスを特定して、その状態を確認したり、実行履歴を削除したり、プロセスインスタンスを再実行できます。次のような場合に使用できません。

- ビジネスプロセステスト支援の場合
ビジネスプロセス開発時にテスト実行したプロセスインスタンスの状態を確認して、ビジネスプロセスを改善できます。また、必要に応じてプロセスインスタンスの実行履歴を削除したり、プロセスインスタンスを再実行したりできます。
- エラー発生時の問い合わせ対応の場合
サービスリクエストからの要求に応じて、特定のプロセスインスタンスの状態を確認して、必要に応じてプロセスインスタンスの実行履歴を削除したり、プロセスインスタンスを再実行したりできます。

どのアクティビティがビジネスプロセスのどこの個所に該当するのかが確認するためには、あらかじめビジネスプロセスの開発者から、ビジネスプロセスのアクティビティ遷移図（ビジネスプロセス開発時の画面）を用意する必要があります。

プロセスインスタンスの実行履歴は、データベースおよび Cosminexus RM を利用する場合だけ管理できます。

6.1.1 プロセスインスタンスの実行履歴を利用する

(1) 実行履歴の利用

(a) エラー発生時の問い合わせ対応の場合

エラー発生時の問い合わせに対応する場合は、プロセスインスタンスの実行履歴を、次のように利用します。

1. BP 実行ログのエラーメッセージなどで、原因を特定し、解消します。
2. プロセスインスタンスの状態を確認します。

関連セットが存在しわかる場合

サービスリクエストの送信した要求電文の関連セットを検索条件にして、プロセスインスタンスを検索します。関連セットを検索条件にすると、一意に識別できます。

関連セットがわからない場合

プロセスインスタンスを開始した日時を要求電文から取得して検索、または目的のプロセスインスタンスの状態（実行中など）から検索します。

3. 検索結果からプロセスインスタンスの関連セット、変数、またはアクティビティの詳細情報を取得して、目的のプロセスインスタンスを特定します。

相関セットから検索した場合は、検索結果として表示される開始日時からもプロセスインスタンスを特定できます。

4. 状態に応じて、次の作業をします。

状態が実行中の場合

プロセスインスタンスを再実行するか、またはプロセスインスタンスの実行履歴を削除します。削除後、サービスリクエストに要求電文の再送信を依頼します。

プロセスインスタンスの情報がない（検索結果がない）場合

サービスリクエストに要求電文の再送信を依頼します。

- (b) ビジネスプロセステスト支援の場合

エラー発生時の問い合わせに対応する場合は、プロセスインスタンスの実行履歴を、次のように利用します。

1. 永続化されているビジネスプロセスのプロセスインスタンスの実行履歴を、相関セット、または日時や状態を条件として検索し、対象を絞り込みます。
2. 検索結果からプロセスインスタンスの相関セット、変数、またはアクティビティの詳細情報を取得して、目的のプロセスインスタンスを特定します。
3. 状態に応じて、次の作業をします。
 - 実行したプロセスインスタンスの状態の把握
 - 実行中状態のプロセスインスタンスの再実行
 - 不要なプロセスインスタンスの削除

次に、プロセスインスタンスの検索、情報や状態の参照、実行履歴の削除、およびプロセスインスタンスの再実行の方法について説明します。

(2) 画面を使用する場合の履歴管理ページの表示

プロセスインスタンスの実行履歴は、画面やコマンドを使って管理できます。

画面を使用してプロセスインスタンスの実行履歴を管理する場合は、履歴管理ページから確認できます。履歴管理ページの表示方法を次に示します。

1. ツリービューから、プロセスインスタンスの実行履歴を確認する対象となるビジネスプロセスを選択します。
2. エディタエリアで、[履歴管理]タブを選択します。
エディタエリアに履歴管理ページが表示されます。

6.1.2 プロセスインスタンスの実行履歴を検索する

プロセスインスタンスの実行履歴は、画面およびコマンドで検索できます。それぞれ条件を指定して、プロセスインスタンスの実行履歴を検索できます。画面およびコマンドで検索できる範囲が異なります。

6. 実行履歴の管理

画面による実行履歴の検索

次に示す条件で検索できます。

- 開始日時による検索
プロセスインスタンスの開始日時を指定して検索します。
- 相関セットによる検索
プロセスインスタンスを一意に特定する相関セットを指定して検索します。
- 状態による検索
プロセスインスタンスの状態（「実行中」、「完了」、または「フォルト終了」）を指定して検索します。

コマンドによる実行履歴の検索

次に示す条件で検索できます。

- プロセス概要情報（相関セットを使用した検索，相関セットを使用しない検索）
- アクティビティ情報
- リンク情報
- 相関セット情報
- 変数情報（string 変数情報，numeric 変数情報，boolean 変数情報，message 変数情報）
- メッセージ関連情報
- 実行履歴情報テーブル中の全実行履歴の情報
- 検索結果の行数

（1）開始日時を条件としてプロセスインスタンスの実行履歴を検索する

（a）画面による実行履歴の検索

プロセスインスタンスの実行履歴を開始日時で検索する手順を次に示します。

1. [日時/状態] タブをクリックします。
2. プロセスインスタンスの開始日時の [指定あり] ラジオボタンを選択します。
3. 開始日時の検索範囲について、年を西暦で入力し、月日時分秒をドロップダウンリストから選択します。
4. 検索結果のソート条件に該当するラジオボタンを選択します。
5. [検索] ボタンをクリックします。
検索結果フィールドに検索結果が表示されます。

（b）コマンドによる実行履歴の検索

プロセスインスタンスの実行履歴を開始日時で検索する手順を次に示します。

1. アクセスする HCSC サーバを決定します。
2. 次のコマンドを実行して検索します。

- where 句を直接指定する場合

```
cscpiselct -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名>
-where <where句> -table process -orderby <ソート条件>
```

注 列名 StartTime に対しての SQL 条件を指定します。

- where 句が記載されたファイルを使用する場合

```
cscpiselct -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名>
-wherefile <where句が記載されたファイル名> -table process -orderby <ソート条件>
-encoding <エンコーディング名>
```

注 列名 StartTime に対しての SQL 条件を指定します。

(例) 次の条件で、コマンドを入力して、プロセスインスタンスの実行履歴を検索します。

- ビジネスプロセス定義名：「XXXPurchaseRegisterService」
- 開始日時範囲：2006/03/06 00:00:00 ~ 2006/03/06 23:59:59
- アクセスする HCSC サーバ：MyCSC
- ソート条件：開始時刻の昇順

コマンド

```
cscpiselct -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc MyCSC -wherefile
sql_where.txt -table process -orderby "StartTime ASC"
```

sql_where.txt の内容

```
ProcessDefinitionName = 'XXXPurchaseRegisterService' AND StartTime BETWEEN
'2006-03-06 00:00:00' AND '2006-03-06 23:59:59'
```

出力結果

```
KEOS52019-I cscpiselct will now start.
KEOS52049-I Communication with the HCSC-Server, to search for process instances, will now start.
KEOS52050-I Communication with the HCSC-Server, to search for process instances, is complete.
ProcessID,ProcessDefinitionName,ProcessDefinitionVersion,State,StartTime,EndTime
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142479241203_780331597_2115,XXXPurchaseRegisterService,1,Executing,2006/03/16 03:20:41,
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142483557984_3078933052_2115,XXXPurchaseRegisterService,1,Executing,2006/03/16 04:32:38,
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142487499140_4208146897_143,XXXPurchaseRegisterService,1,Executing,2006/03/16 05:38:19,
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142487608812_5411906566_143,XXXPurchaseRegisterService,1,Executing,2006/03/16 05:40:08,
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142487779609_9625888178_143,XXXPurchaseRegisterService,1,Executing,2006/03/16 05:42:59,
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142488888531_551445385_143,XXXPurchaseRegisterService,1,Executing,2006/03/16 06:01:28,
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142489297390_120657163_143,XXXPurchaseRegisterService,1,Executing,2006/03/16 06:08:17,
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142489792984_4738604849_454,XXXPurchaseRegisterService,1,Executing,2006/03/16 06:16:33,
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142490547843_1453232172_498,XXXPurchaseRegisterService,1,Executing,2006/03/16 06:29:08,
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142490644484_72144231_498,XXXPurchaseRegisterService,1,Executing,2006/03/16 06:30:44,
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142490752608_9562695682_367,XXXPurchaseRegisterService,1,Executing,2006/03/16 06:32:32,
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142491533109_9890907910_588,XXXPurchaseRegisterService,1,Executing,2006/03/16 06:45:33,
KEOS52020-I cscpiselct ended normally.
```

6. 実行履歴の管理

cscpiselect コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscpiselect (プロセスインスタンスの検索)」を参照してください。

(2) 状態を条件としてプロセスインスタンスの実行履歴を検索する

(a) 画面による実行履歴の検索

プロセスインスタンスの実行履歴を状態で検索する手順を次に示します。

1. [日時/状態] タブをクリックします。
2. 検索するプロセスインスタンスの状態 (実行中, 完了, またはフォルト終了) に該当するチェックボックスをチェックします。
複数チェックした場合は, 条件のどれかに一致する状態が検索されます。
3. 検索結果のソート条件に該当するラジオボタンを選択します。
4. [検索] ボタンをクリックします。
検索結果フィールドに検索結果が表示されます。

(b) コマンドによる実行履歴の検索

プロセスインスタンスの実行履歴を状態で検索する手順を次に示します。

1. アクセスする HCSC サーバを決定します。
2. 次のコマンドを実行して検索します。
 - where 句を直接指定する場合

```
cscpiselect -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名>
-where <where句> 1 -table process -orderby <ソート条件> 2
```

注 1 列名 State に対しての SQL 条件を指定します。

注 2 列名 StartTime に対しての SQL 条件を指定します。

- where 句が記載されたファイルを使用する場合

```
cscpiselect -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名>
-wherefile <where句が記載されたファイル名> 1 -table process -orderby <ソート条件> 2
-encoding <エンコーディング名>
```

注 1 列名 State に対しての SQL 条件を指定します。

注 2 列名 StartTime に対しての SQL 条件を指定します。

(例) 次の条件で, コマンドを入力して, プロセスインスタンスの実行履歴を検索します。

- ビジネスプロセス定義名: 「XXXXPurchaseRegisterService」
- プロセスインスタンスの状態: 実行中
- アクセスする HCSC サーバ: MyCSC

- ソート条件：開始時刻の昇順

コマンド

```
cscpiselct -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc MyCSC -wherefile
sql_where.txt -table process -orderby "StartTime ASC"
```

sql_where.txt の内容

```
ProcessDefinitionName = 'XXXPurchaseRegisterService' AND State = 'Executing'
```

出力結果

```
KEOS52019-1 cscpiselct will now start.
KEOS52049-1 Communication with the HCSC-Server, to search for process instances, will now start.
KEOS52050-1 Communication with the HCSC-Server, to search for process instances, is complete.
ProcessID,ProcessDefinitionName,ProcessDefinitionVersion,State,StartTime,EndTime
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142479241203_780331587_2115,XXXPurchaseRegisterService,1,Executing,2006/03/16 03:20:41,
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142483557984_3078933052_2115,XXXPurchaseRegisterService,1,Executing,2006/03/16 04:32:38,
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142487499140_4208146897_143,XXXPurchaseRegisterService,1,Executing,2006/03/16 05:38:19,
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142487608812_5411906566_143,XXXPurchaseRegisterService,1,Executing,2006/03/16 05:40:08,
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142487779609_9625683179_143,XXXPurchaseRegisterService,1,Executing,2006/03/16 05:42:58,
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142488888531_551445385_143,XXXPurchaseRegisterService,1,Executing,2006/03/16 06:01:28,
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142489297390_120857163_143,XXXPurchaseRegisterService,1,Executing,2006/03/16 06:16:33,
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142490547843_1453232172_498,XXXPurchaseRegisterService,1,Executing,2006/03/16 06:29:06,
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142490644484_72144231_498,XXXPurchaseRegisterService,1,Executing,2006/03/16 06:30:44,
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142490752609_9562695682_367,XXXPurchaseRegisterService,1,Executing,2006/03/16 06:32:32,
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142491533109_9890907910_588,XXXPurchaseRegisterService,1,Executing,2006/03/16 06:45:33,
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142562230828_5395794598_143,XXXPurchaseRegisterService,1,Executing,2006/03/17 02:23:50,
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142565227250_7391875083_143,XXXPurchaseRegisterService,1,Executing,2006/03/17 03:13:47,
KEOS52020-1 cscpiselct ended normally.
```

cscpiselct コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscpiselct (プロセスインスタンスの検索)」を参照してください。

(3) 関連セットを条件としてプロセスインスタンスの実行履歴を検索する

(a) 画面による実行履歴の検索

プロセスインスタンスの実行履歴を関連セットで検索する手順を次に示します。

1. [関連セット] タブをクリックします。
2. 関連セット定義名、および関連セット値を入力します。必ず両方の内容を入力します。
3. [検索] ボタンをクリックします。
検索結果フィールドに検索結果が表示されます。

関連セット値の指定方法

関連セットは、電文に含まれる一つの部分または複数の部分を連結することによって構成できます。関連セットを永続化する場合、指定した一つの部分または複数の部分を関連セット値として扱います。関連セット値は、次の規則に従って構成され

6. 実行履歴の管理

ます。

- 部分が一つの場合
部分の値そのままです。
- 複数の部分がある場合
部分の値を「>」で連結します。

(例)

相関セット定義名「ABC」に、二つの部分 X, Y があり、それぞれの値が「100」、「300」である場合、相関セット値は「100>300」になります。

- 部分の値に「@」がある場合
@を二つ連続します。

(例)

相関セット定義名「ABC」に、部分 X があり、その値が「@200」である場合、相関セット値は「@@200」になります。

- 部分の値に「>」がある場合
「@G」に置換します。

(例)

相関セット定義名「ABC」に、部分 X があり、その値が「30>」である場合、相関セット値は「30@G」になります。

(b) コマンドによる実行履歴の検索

プロセスインスタンスの実行履歴を相関セットで検索する手順を次に示します。

1. アクセスする HCSC サーバを決定します。
2. 次のコマンドを実行して検索します。
 - where 句を直接指定する場合

```
cscpiseselect -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名>
-where <where句> -table process_set
```

注

相関セット定義名で検索する場合は、列名 CorrelationSetName に対して SQL 条件を指定します。相関セット値で検索する場合は、列名 CorrelationSetValue に対して SQL 条件を指定します。

- where 句が記載されたファイルを使用する場合

```
cscpiseselect -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名>
-wherefile <where句が記載されたファイル名> -table process_set -encoding <エンコーディング名>
```

注

相関セット定義名で検索する場合は、列名 CorrelationSetName に対して SQL 条件を指定しま

す。相関セット値で検索する場合は、列名 CorrelationSetValue に対して SQL 条件を指定します。

(例) 次の条件で、コマンドを入力して、プロセスインスタンスの実行履歴を検索します。

- ビジネスプロセス定義名：「XXXPurchaseRegisterService」
- 相関セット定義名：correlationSet1
- 相関セット値：XXX
- アクセスする HCSC サーバ：MyCSC

コマンド

```
cscpiselect -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc MyCSC -wherefile
sql_where.txt -table process_set
```

sql_where.txt の内容

```
C.ProcessDefinitionName = 'XXXPurchaseRegisterService' AND C.CorrelationSetName
= 'correlationSet1' AND C.CorrelationSetValue = 'XXX'
```

出力結果

```
KEOS52019-I cscpiselect will now start.
KEOS52049-I Communication with the HCSC-Server, to search for process instances, will now start.
KEOS52050-I Communication with the HCSC-Server, to search for process instances, is complete.
ProcessID, ProcessDefinitionName, ProcessDefinitionVersion, State, StartTime, EndTime
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142479241203_760331597_2115, XXXPurchaseRegisterService, 1, Execut
ing, 2006/03/16 03:20:41,
KEOS52020-I cscpiselect ended normally.
```

(例) 次の条件で、コマンドを入力して、プロセスインスタンスの実行履歴を検索します。

- ビジネスプロセス定義名：「XXXPurchaseRegisterService」
- 相関セット定義名：correlationSet1
- 相関セット値：xxx>yyy (プロパティが xxx と yyy)
- アクセスする HCSC サーバ：MyCSC

コマンド

```
cscpiselect -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc MyCSC -wherefile
sql_where.txt -table process_set
```

6. 実行履歴の管理

sql_where.txt の内容

```
C.ProcessDefinitionName = 'XXXPurchaseRegisterService' AND C.CorrelationSetName = 'correlationSet1' AND C.CorrelationSetValue = 'xxx>yyy'
```

出力結果

```
KEOS52019-I cscpiselect will now start.
KEOS52049-I Communication with the HCSC-Server, to search for process instances, will now start.
KEOS52050-I Communication with the HCSC-Server, to search for process instances, is complete.
ProcessID, ProcessDefinitionName, ProcessDefinitionVersion, State, StartTime, EndTime
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142479241203_760331597_2115, XXXPurchaseRegisterService, I, Executing, 2006/03/16 03:20:41,
KEOS52020-I cscpiselect ended normally.
```

cscpiselect コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscpiselect (プロセスインスタンスの検索)」を参照してください。

(4) 開始日時と状態を組み合わせて検索する

(a) 画面による実行履歴の検索

開始日時と状態を組み合わせて、検索条件として指定できます。

プロセスインスタンスの実行履歴を、開始日時と状態の組み合わせで検索する手順を次に示します。

1. [日時 / 状態] タブをクリックします。
2. プロセスインスタンスの開始日時の [指定あり] ラジオボタンを選択します。
3. 開始日時の検索範囲について、年を西暦で入力し、月日時分秒をドロップダウンリストから選択します。
4. 検索するプロセスインスタンスの状態 (実行中, 完了, またはフォルト終了) に該当するチェックボックスをチェックします。
複数チェックした場合は、条件のどれかに一致する状態が検索されます。
5. 検索結果のソート条件に該当するラジオボタンを選択します。
6. [検索] ボタンをクリックします。
検索結果フィールドに検索結果が表示されます。

(b) コマンドによる実行履歴の検索

プロセスインスタンスの実行履歴を、開始日時と状態の組み合わせで検索する手順を次に示します。

1. アクセスする HCSC サーバを決定します。
2. 次のコマンドを実行して検索します。

- where 句を直接指定する場合

```
cscpiselect -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名>
-where <where句> 1 -table process -orderby <ソート条件> 2
```

注 1 列名 StartTime および State に対しての SQL 条件を指定します。

注 2 列名 StartTime に対しての SQL 条件を指定します。

- where 句が記載されたファイルを使用する場合

```
cscpiselect -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名>
-wherefile <where句が記載されたファイル名> 1 -table process -orderby <ソート条件> 2
-encoding <エンコーディング名>
```

注 1 列名 StartTime および State に対しての SQL 条件を指定します。

注 2 列名 StartTime に対しての SQL 条件を指定します。

(例) 次の条件で、コマンドを入力して、プロセスインスタンスの実行履歴を検索します。

- ビジネスプロセス定義名：「XXXXPurchaseRegisterService」
- 開始日時範囲：2006/03/06 00:00:00 ~ 2006/03/06 23:59:59
- 状態：実行中
- アクセスする HCSC サーバ：MyCSC

コマンド

```
cscpiselect -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc MyCSC -wherefile
sql_where.txt -table process
```

sql_where.txt の内容

```
ProcessDefinitionName = 'XXXXPurchaseRegisterService' AND StartTime BETWEEN
'2006-03-06 00:00:00' AND '2006-03-06 23:59:59' AND State = 'Executing'
```

6. 実行履歴の管理

出力結果

```
KE0552019-I cscpiseselect will now start.
KE0552049-I Communication with the HCSC-Server, to search for process instances, will now start.
KE0552050-I Communication with the HCSC-Server, to search for process instances, is complete.
ProcessID,ProcessDefinitionName,ProcessDefinitionVersion,State,StartTime,EndTime
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142479241203_760331597_2115,XXXPurchaseRegisterService,1,Executing,2006/03/16 03:20:41,
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142483557984_3078933052_2115,XXXPurchaseRegisterService,1,Executing,2006/03/16 04:32:38,
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142487499140_4208146897_143,XXXPurchaseRegisterService,1,Executing,2006/03/16 05:38:19,
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142487608812_5411906566_143,XXXPurchaseRegisterService,1,Executing,2006/03/16 05:40:08,
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142487779609_9625888179_143,XXXPurchaseRegisterService,1,Executing,2006/03/16 05:42:59,
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142488888531_551445385_143,XXXPurchaseRegisterService,1,Executing,2006/03/16 06:01:28,
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142489297390_120657163_143,XXXPurchaseRegisterService,1,Executing,2006/03/16 06:08:17,
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142489792984_4738604849_454,XXXPurchaseRegisterService,1,Executing,2006/03/16 06:16:33,
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142490547843_1453232172_498,XXXPurchaseRegisterService,1,Executing,2006/03/16 06:29:08,
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142490644484_72144231_498,XXXPurchaseRegisterService,1,Executing,2006/03/16 06:30:44,
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142490752608_9562695662_367,XXXPurchaseRegisterService,1,Executing,2006/03/16 06:32:32,
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142491533109_9890907910_588,XXXPurchaseRegisterService,1,Executing,2006/03/16 06:45:33,
KE0552020-I cscpiseselect ended normally.
```

cscpiseselect コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscpiseselect (プロセスインスタンスの検索)」を参照してください。

(5) プロセスインスタンスの実行履歴を全件検索する

(a) 画面による実行履歴の検索

プロセスインスタンスの実行履歴を開始日時で検索する手順を次に示します。

1. [日時/状態] タブをクリックします。
2. プロセスインスタンスの開始日時の [指定なし] ラジオボタンを選択します。
3. プロセスインスタンスの状態 (実行中, 完了, またはフォルト終了) について, すべてのチェックボックスをチェックします。
4. 検索結果のソート条件に該当するラジオボタンを選択します。
5. [検索] ボタンをクリックします。
検索結果フィールドに検索結果が表示されます。

(b) コマンドによる実行履歴の検索

プロセスインスタンスの実行履歴を全件検索する手順を次に示します。

1. アクセスする HCSC サーバを決定します。
2. 次のコマンドを実行して検索します。

```
cscpiseselect -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名>
-table process
```

(例) 次の条件で, コマンドを入力して, プロセスインスタンスの実行履歴を検索します。

- ビジネスプロセス定義名: 指定なし (すべてのプロセスインスタンス)
- アクセスする HCSC サーバ: MyCSC

コマンド

```
cscpiselect -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc MyCSC -table process
```

出力結果

```
KE052019-1 cscpiselect will now start.
KE052049-1 Communication with the HCSC-Server, to search for process instances, will now start.
KE052050-1 Communication with the HCSC-Server, to search for process instances, is complete.
ProcessID,ProcessDefinitionName,ProcessDefinitionVersion,State,StartTime,EndTime
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142479241203_760331597_2115,XXXPurchaseRegisterService,1,Executing,2006/03/16 03:20:41,
MyServer_010209010042_YYYPurchaseRegisterService_1142479257656_4612370344_2115,YYYPurchaseRegisterService,1,Executing,2006/03/16 03:20:57,
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142483557984_3078933052_2115,XXXPurchaseRegisterService,1,Executing,2006/03/16 04:32:38,
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142487499140_4208146897_143,XXXPurchaseRegisterService,1,Executing,2006/03/16 05:38:19,
MyServer_010209010042_YYYPurchaseRegisterService_1142487551093_8228287945_143,YYYPurchaseRegisterService,1,Executing,2006/03/16 05:39:11,
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142487608812_5411906568_143,XXXPurchaseRegisterService,1,Executing,2006/03/16 05:40:08,
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142487779609_9625888179_143,XXXPurchaseRegisterService,1,Executing,2006/03/16 05:42:59,
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142488888531_551445385_143,XXXPurchaseRegisterService,1,Executing,2006/03/16 06:01:28,
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142489297990_120657163_143,XXXPurchaseRegisterService,1,Executing,2006/03/16 06:08:17,
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142489792984_4738604849_454,XXXPurchaseRegisterService,1,Executing,2006/03/16 06:16:33,
MyServer_010209010042_YYYPurchaseRegisterService_1142490236734_1157669219_497,YYYPurchaseRegisterService,1,Executing,2006/03/16 06:23:57,
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142490547943_1453232172_498,XXXPurchaseRegisterService,1,Executing,2006/03/16 06:29:08,
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142490644864_72144231_498,XXXPurchaseRegisterService,1,Executing,2006/03/16 06:30:44,
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142490752809_959295682_387,XXXPurchaseRegisterService,1,Executing,2006/03/16 06:32:32,
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142491533109_9890907910_588,XXXPurchaseRegisterService,1,Executing,2006/03/16 06:45:33,
MyServer_010209010042_OrderService_1142517277390_8769231431_143,OrderService,1,Executing,2006/03/16 13:54:37,
MyServer_010209010042_OrderService_1142518558887_5005550739_143,OrderService,1,Executing,2006/03/16 14:15:58,
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142562230828_5395794598_143,XXXPurchaseRegisterService,1,Executing,2006/03/17 02:23:50,
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142565227250_7391875083_143,XXXPurchaseRegisterService,1,Executing,2006/03/17 03:13:47,
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142567901468_4594691495_143,XXXPurchaseRegisterService,1,Completed,2006/03/17 03:58:21,2006/03/17 03:58:25,
MyServer_010209010042_YYYPurchaseRegisterService_1142568696062_4448967550_143,YYYPurchaseRegisterService,1,Completed,2006/03/17 04:11:36,2006/03/17 04:11:39
KE052020-1 cscpiselect ended normally.
```

cscpiselect コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscpiselect (プロセスインスタンスの検索)」を参照してください。

(6) 全実行履歴の CSV ファイルへの出力

過去の履歴として、定期的にプロセスインスタンスの実行履歴を検索し、HCSC サーバ単位に全情報を CSV ファイルに出力することで、保守資料としても使用できます。プロセスインスタンスの全実行履歴の CSV ファイルへの出力は、コマンドでだけ実行できます。

プロセスインスタンスの実行履歴を CSV ファイルへ出力する手順を次に示します。

1. アクセスする HCSC サーバを決定します。
2. 次のコマンドを実行して検索します。

```
cscpiselect -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名>
-detail -table {process | activity | link | set | string | numeric | boolean | message | relation}
```

注 どれか一つを指定します。

(例) 次の条件で、コマンドを入力して、プロセスインスタンスの実行履歴を一括して再実行します。

- HCSC サーバ単位で全情報を CSV ファイルに退避。

6. 実行履歴の管理

- アクセスする HCSC サーバ : MyCSC

コマンド

```
cscpiselect -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc MyCSC -detail
-table process > yyyyymmdd_process.csv
cscpiselect -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc MyCSC -detail
-table activity > yyyyymmdd_activity.csv
cscpiselect -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc MyCSC -detail
-table link > yyyyymmdd_link.csv
cscpiselect -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc MyCSC -detail
-table set > yyyyymmdd_set.csv
cscpiselect -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc MyCSC -detail
-table string > yyyyymmdd_string.csv
cscpiselect -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc MyCSC -detail
-table numeric > yyyyymmdd_numeric.csv
cscpiselect -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc MyCSC -detail
-table boolean > yyyyymmdd_boolean.csv
cscpiselect -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc MyCSC -detail
-table message > yyyyymmdd_message.csv
cscpiselect -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc MyCSC -detail
-table relation > yyyyymmdd_relation.csv
```

cscpiselect コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscpiselect (プロセスインスタンスの検索)」を参照してください。

(7) 画面よる検索結果を参照する

検索の結果は、検索結果フィールドに、総件数および一覧が表示されます。一覧は、一度に 20 件まで表示されます。

また、検索時との時間差によって、検索の結果、総件数と表示対象件数が異なる場合があります。例えば、総件数が 13 件で、表示対象件数が 60 件の場合などです。この場合は、表示対象の件数が 20 件を超えても、[次へ] ボタンが非活性の状態になり、21 件目以降を表示できなくなるため、再検索をする必要があります。

また、検索結果一覧の [前へ], [次へ] ボタンをクリックしたあとに、プロセスインスタンスの件数などが変化している場合があります。例えば、総件数が 45 件で、表示対象件数が 21 ~ 40 件を表示中に、[次へ] ボタンをクリックすると、総件数が 10 件になっている場合などです。この場合は、1 ~ 10 件が表示されます。

6.1.3 プロセスインスタンスの実行履歴の詳細情報を取得する

次に示すように目的に応じて、プロセスインスタンスの実行履歴の詳細情報を取得します。

- 関連セットの値からプロセスインスタンスを特定する場合
各プロセスインスタンスを一意に特定する関連セットの情報である、関連セット定義名および関連セット値の一覧を取得します。

- 変数値からプロセスインスタンスを特定する場合
各プロセスインスタンスが持つグローバル変数の情報である、変数定義名および変数値の一覧を取得します。
- プロセスインスタンスの実行状況を確認する場合
プロセスインスタンスについて、ビジネスプロセス内に定義された各アクティビティの状態を取得します。

(1) 相関セットの詳細情報の取得

(a) 画面による実行履歴の詳細情報の取得

プロセスインスタンスの実行履歴の詳細情報（相関セット情報）を取得する手順を次に示します。

1. プロセスインスタンスを検索します。
2. 検索結果一覧から情報を取得するプロセスインスタンスの実行履歴を選択します。
3. [相関セット情報] ボタンをクリックします。
詳細情報フィールドに詳細情報が表示されます。

(b) コマンドによる実行履歴の詳細情報の取得

プロセスインスタンスの実行履歴の詳細情報（相関セット情報）を取得する手順を次に示します。

1. アクセスする HCSC サーバを決定します。
2. 次のコマンドを実行して検索します。
 - where 句を直接指定する場合

```
cscpiselect -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名>
-where <where句> -table set
```

注 情報取得対象のプロセスインスタンスの条件を指定します。

- where 句が記載されたファイルを使用する場合

```
cscpiselect -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名>
-wherefile <where句が記載されたファイル名> -table set -encoding <エンコーディング名>
```

注 情報取得対象のプロセスインスタンスの条件を指定します。

(例) 次の条件で、コマンドを入力して、相関セット情報を取得します。

- 取得対象のプロセス ID :
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142479241203_76033
1597_2115
- アクセスする HCSC サーバ : MyCSC

6. 実行履歴の管理

コマンド

```
cscpiselect -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc MyCSC -wherefile sql_where.txt -table set
```

sql_where.txt の内容

```
ProcessID =  
'MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142479241203_760331597_2115'  
,
```

出力結果

```
KEOS52019-I cscpiselect will now start.  
KEOS52049-I Communication with the HCSC-Server, to search for process instances will now start.  
KEOS52050-I Communication with the HCSC-Server, to search for process instances is complete.  
ProcessID, CorrelationSetName, CorrelationSetValue  
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142479241203_760331597_2115, correlationI, XXX  
KEOS52020-I cscpiselect ended normally.
```

cscpiselect コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscpiselect (プロセスインスタンスの検索)」を参照してください。

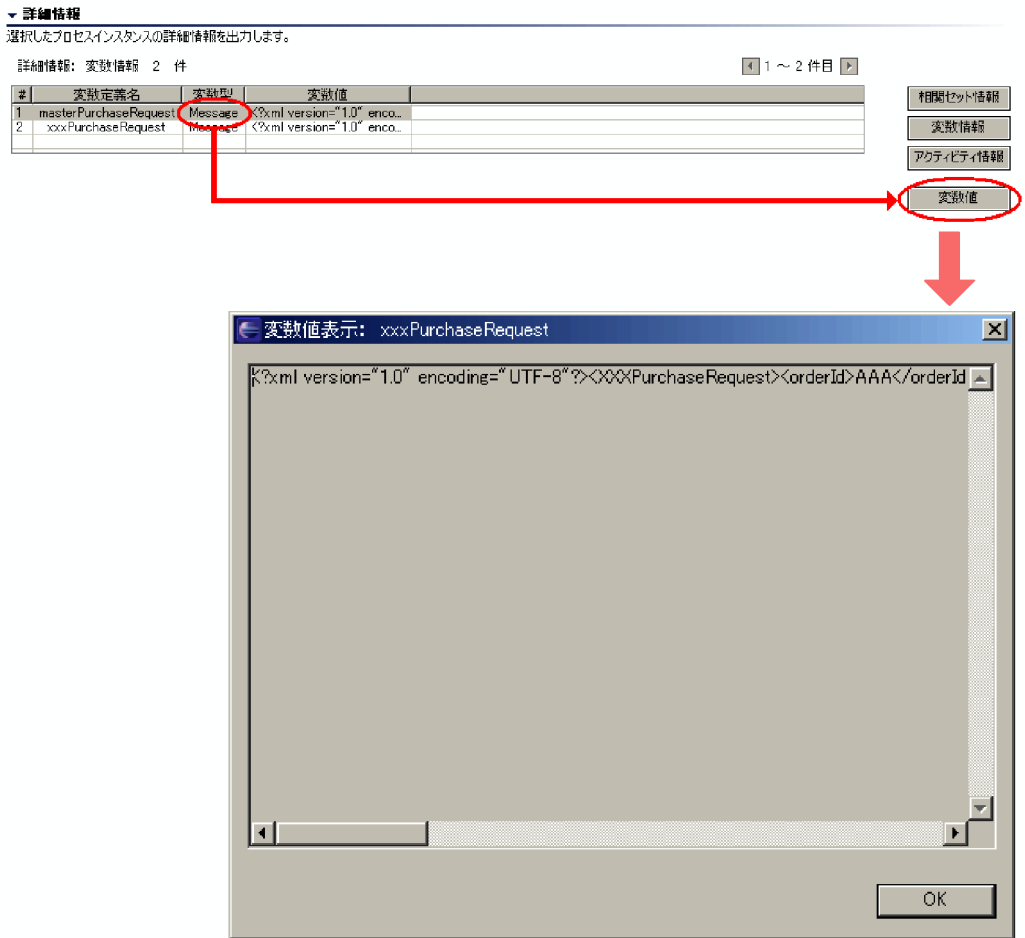
(2) 変数の詳細情報の取得

(a) 画面による実行履歴の詳細情報の取得

プロセスインスタンスの実行履歴の詳細情報 (変数情報) を取得する手順を次に示します。

1. プロセスインスタンスを検索します。
2. 検索結果一覧から情報を取得するプロセスインスタンスの実行履歴を選択します。
3. [変数情報] ボタンをクリックします。
詳細情報フィールドに詳細情報が表示されます。
4. 変数型が String または Message の場合、該当する変数を選択して [変数値表示] ボタンをクリックします。
次の図に示すように、別ウィンドウに変数値の詳細情報が表示されます。

図 6-1 変数情報の詳細表示画面



(b) コマンドによる実行履歴の詳細情報の取得

プロセスインスタンスの実行履歴の詳細情報（変数情報）を取得する手順を次に示します。

1. アクセスする HCSC サーバを決定します。
2. 次のコマンドを実行して検索します。
 - where 句を直接指定する場合

```
cscpiselect -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名>
-where <where句> 1 -table {string | numeric | boolean | message} 2
```

注 1 情報取得対象のプロセスインスタンスの条件を指定します。

注 2 どれか一つを指定します。

6. 実行履歴の管理

- where 句が記載されたファイルを使用する場合

```
cscpiselect -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名>
-wherefile <where句が記載されたファイル名> 1 -table {string|numeric|boolean|
message} 2 -encoding <エンコーディング名>
```

注 1 情報取得対象のプロセスインスタンスの条件を指定します。

注 2 どれか一つを指定します。

変数情報は、変数ごとに別テーブルになっているため、変数の型が不明な場合は、すべてのテーブルを検索してください。

(例) 次の条件で、コマンドを入力して、変数情報を取得します。

- 取得対象のプロセス ID :

MyServer_010209010042_YYYPurchaseRegisterService_1142490236734_11576
69219_497

- アクセスする HCSC サーバ : MyCSC

コマンド

- string 変数情報を表示する場合

```
cscpiselect -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc MyCSC -wherefile
sql_where.txt -table string
```

- numeric 変数情報を表示する場合

```
cscpiselect -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc MyCSC -wherefile
sql_where.txt -table numeric
```

- boolean 変数情報を表示する場合

```
cscpiselect -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc MyCSC -wherefile
sql_where.txt -table boolean
```

- message 変数情報を表示する場合

```
cscpiselect -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc MyCSC -wherefile
sql_where.txt -table message
```

sql_where.txt の内容

```
ProcessID =
'MyServer_010209010042_YYYPurchaseRegisterService_1142490236734_1157669219_497'
```

出力結果

- string 変数情報の場合

```
KEOS52019-I cscpiselect is started.
KEOS52049-I The communication to HCSC-Server for selecting process instance start.
KEOS52050-I The communication to HCSC-Server for selecting process instance finished normally.
ProcessID,VariableName,VariableValue
MyServer_010209010042_YYYPurchaseRegisterService_1142490236734_1157669219_497,orderId,MyOrder0001
16:32:42.404 KEOS52020-I cscpiselect was finished normally.
```

- numeric 変数情報の場合

```
KEOS52019-I cscpiselect is started.
KEOS52049-I The communication to HCSC-Server for selecting process instance start.
KEOS52050-I The communication to HCSC-Server for selecting process instance finished normally.
ProcessID,VariableName,VariableValue
MyServer_010209010042_YYYPurchaseRegisterService_1142490236734_1157669219_497,repeatCount,15
16:32:42.404 KEOS52020-I cscpiselect was finished normally.
```

- boolean 変数情報の場合

```
KEOS52019-I cscpiselect is started.
KEOS52049-I The communication to HCSC-Server for selecting process instance start.
KEOS52050-I The communication to HCSC-Server for selecting process instance finished normally.
ProcessID,VariableName,VariableValue
MyServer_010209010042_YYYPurchaseRegisterService_1142490236734_1157669219_497,isResult,true
16:32:42.404 KEOS52020-I cscpiselect was finished normally.
```

- message 変数情報の場合

```
KEOS52019-I cscpiselect will now start.
KEOS52049-I Communication with the HCSC-Server, to search for process instances, will now start.
KEOS52050-I Communication with the HCSC-Server, to search for process instances, is complete.
ProcessID,VariableName,
VariableValue
MyServer_010209010042_YYYPurchaseRegisterService_1142490236734_1157669219_497,masterPurchaseRequest,
xml version="1.0" encoding="UTF-8"?><Dbadapter><REGISTER<DBA_IN_DATA<val1>12345678</val1><val2>HJ1</val2><val3>0020001</val3><val4>HJ1</val4><val5>HJ1</val5><val6>プラスマディスプレイ</val6><val7>1</val7></DBA_IN_DATA</REGISTER</Dbadapter>
MyServer_010209010042_YYYPurchaseRegisterService_1142490236734_1157669219_497,yyyPurchaseRequest,
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<YYYPurchaseRequest
xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
xsi:noNamespaceSchemaLocation="YYYPurchaseRequest.xsd">
<orderId>12345678</orderId>
<orderName>HJ1 1部</orderName>
<companyCode>10020001</companyCode>
<productCode>HJ1-#08-P02005</productCode>
<productName>プラスマディスプレイ</productName>
<number>1</number>
</YYYPurchaseRequest>
KEOS52020-I cscpiselect ended normally.
```

cscpiselect コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscpiselect (プロセスイン

6. 実行履歴の管理

スタンスの検索)」を参照してください。

(3) アクティビティの詳細情報の取得

(a) 画面による実行履歴の詳細情報の取得

プロセスインスタンスの実行履歴の詳細情報（アクティビティ情報）を取得する手順を次に示します。

1. プロセスインスタンスを検索します。
2. 検索結果一覧から情報を取得するプロセスインスタンスの実行履歴を選択します。
3. [アクティビティ情報] ボタンをクリックします。
詳細情報フィールドに詳細情報が表示されます。

(b) コマンドによる実行履歴の詳細情報の取得

プロセスインスタンスの実行履歴の詳細情報（アクティビティ情報）を取得する手順を次に示します。

1. アクセスする HCSC サーバを決定します。
2. 次のコマンドを実行して検索します。
 - where 句を直接指定する場合

```
cscpiselect -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名>
-where <where句> -table activity
```

注 情報取得対象のプロセスインスタンスの条件を指定します。

- where 句が記載されたファイルを使用する場合

```
cscpiselect -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名>
-wherefile <where句が記載されたファイル名> -table activity -encoding <エンコーディング名>
```

注 情報取得対象のプロセスインスタンスの条件を指定します。

(例) 次の条件で、コマンドを入力して、アクティビティ情報を取得します。

- 取得対象のプロセス ID :
MyServer_010209010042_YYYYPurchaseRegisterService_1142568696062_44489
67550_143
- アクセスする HCSC サーバ : MyCSC

コマンド

```
cscpiselect -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc MyCSC -wherefile
sql_where.txt -table activity
```

sql_where.txt の内容

```
ProcessID =
'MyServer_010209010042_YYYPurchaseRegisterService_1142568696062_4448967550_143'
```

出力結果

```
KE0552019-I cscpiselct will now start.
KE0552049-I Communication with the H33C-Server, to search for process instances, will now start.
KE0552050-I Communication with the H33C-Server, to search for process instances, is complete.
ProcessID,ActivityNumber,ActivityDefintionName,ActivityKind,State,StartTime,EndTime
MyServer_010209010042_YYYPurchaseRegisterService_1142568696062_4448967550_143.0,@GLOBAL,SCOPE,Completed,2006/03/17 04:11:36,2006/03/17 04:11:39
MyServer_010209010042_YYYPurchaseRegisterService_1142568696062_4448967550_143.1,seal,SEQUENCE,Completed,2006/03/17 04:11:36,2006/03/17 04:11:39
MyServer_010209010042_YYYPurchaseRegisterService_1142568696062_4448967550_143.2,InsertPurchaseMaster,INVOKE,Completed,2006/03/17 04:11:36,2006/03/17 04:11:39
MyServer_010209010042_YYYPurchaseRegisterService_1142568696062_4448967550_143.3,CodeTransformation,JAVA,Completed,2006/03/17 04:11:36,2006/03/17 04:11:36
MyServer_010209010042_YYYPurchaseRegisterService_1142568696062_4448967550_143.4,CreateMaster,ASSIGN,Completed,2006/03/17 04:11:36,2006/03/17 04:11:36
MyServer_010209010042_YYYPurchaseRegisterService_1142568696062_4448967550_143.5,Receive,RECEIVE,Completed,2006/03/17 04:11:36,2006/03/17 04:11:36
KE0552020-I cscpiselct ended normally.
```

cscpiselct コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscpiselct (プロセスインスタンスの検索)」を参照してください。

6.1.4 プロセスインスタンスの実行履歴を削除する

リクエストを再送信する場合、またはテスト実行したプロセスインスタンスを削除する場合など、不要になったプロセスインスタンスの実行履歴を、一件ずつ削除できます。

また、プロセスインスタンスの実行履歴は、日々追加されていくため、定期的に情報を削除しないとデータベースの容量が圧迫されます。そこで、定期的に、管理者はデータベース上の実行履歴情報テーブルから、完了したプロセスインスタンスの実行履歴を削除する必要があります。日常運用では通常、バッチ化して、実行履歴を一括削除できます。

プロセスインスタンスの実行履歴の削除は、画面による方法とコマンドによる方法があります。

(1) 画面による実行履歴の削除

(a) 一件ずつ削除する場合

画面によってプロセスインスタンスの実行履歴を一件ずつ削除する手順を次に示します。

1. プロセスインスタンスを検索します。
2. 検索結果一覧から、プロセスインスタンスの状態を確認します。
3. 状態が「完了」であるプロセスインスタンスの詳細情報を取得して、プロセスインスタンスを特定します。
4. 検索結果一覧から、該当するプロセスインスタンスの実行履歴を選択します。

6. 実行履歴の管理

5. [履歴削除] ボタンをクリックします。
プロセスインスタンス実行履歴削除の実行確認ダイアログが表示されます。
「実行中」のプロセスインスタンスを含む場合は、実行中のプロセスインスタンスの実行履歴を削除するかどうかを確認するダイアログが表示されます。
6. [OK] ボタンをクリックします。
プロセスインスタンスの実行履歴が削除され、プロセスインスタンスの実行履歴削除の実行結果ダイアログが表示されます。
7. [OK] ボタンをクリックします。
検索結果一覧が更新されます。

(b) 一括して削除する場合

画面によってプロセスインスタンスの実行履歴を一括削除する手順を次に示します。

1. プロセスインスタンスを検索します。
2. 検索結果一覧から、プロセスインスタンスの状態を確認します。
3. 状態が「完了」であるプロセスインスタンスの詳細情報を取得して、プロセスインスタンスを特定します。
4. 検索結果一覧から、該当するプロセスインスタンスの実行履歴を選択します。
[Ctrl] キーまたは [Shift] キーを使用して、複数のプロセスインスタンスを選択します。
5. [履歴削除] ボタンをクリックします。
プロセスインスタンス実行履歴削除の実行確認ダイアログが表示されます。
「実行中」のプロセスインスタンスを含む場合は、実行中のプロセスインスタンスの実行履歴を削除するかどうかを確認するダイアログが表示されます。
6. [OK] ボタンをクリックします。
プロセスインスタンスの実行履歴が削除され、プロセスインスタンスの実行履歴削除の実行結果ダイアログが表示されます。
7. [OK] ボタンをクリックします。
検索結果一覧が更新されます。

! 注意事項

一括削除に失敗した場合、選択したプロセスインスタンスはまったく削除されません。

(2) コマンドによる実行履歴の削除

(a) 一件ずつ削除する場合

コマンドによってプロセスインスタンスの実行履歴を一件ずつ削除する手順を次に示します。

1. アクセスする HCSC サーバを決定します。

2. cscpiselect コマンドで、実行が完了したプロセスインスタンスを検索します。
3. 検索結果から、削除対象のプロセスインスタンスのプロセス ID を特定します。
4. 次のコマンドを実行して削除します。
 - where 句を指定する場合

```
cscpidelete -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名>
{-where <where句> 1 | -wherefile <where句が記載されたファイル名> 1} 2
```

注 1 削除対象のプロセスインスタンスの削除条件を指定します。

注 2 どちらか一つを指定します。

- ID のリストが記載されたファイルを指定する場合

```
cscpidelete -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名>
-idlist <IDのリストが記載されたファイル名>
```

(例) 次の条件で、コマンドを入力して、プロセスインスタンスの実行履歴を削除します。

- 削除対象のプロセス ID :
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142479241203_76033
1597_2115
- アクセスする HCSC サーバ : MyCSC

コマンド

- -wherefile オプションを指定した場合

```
cscpidelete -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc MyCSC -wherefile
delete_where.txt
```

delete_where.txt の内容

```
ProcessID =
'MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142479241203_760331597_2115
'
```

- -idlist オプションを指定した場合

```
cscpidelete -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc MyCSC -idlist
delete_id_list.txt
```

6. 実行履歴の管理

delete_id_list.txt の内容

```
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142479241203_760331597_2115
```

cscpidelete コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscpidelete (プロセスインスタンスの実行履歴の削除)」を参照してください。

(b) 一括して削除する場合

コマンドによるプロセスインスタンスの実行履歴の一括削除では、完了したプロセスインスタンスの実行履歴を削除する場合や、すべてのプロセスインスタンスの実行履歴を削除する場合があります。例えば、テストから本番への移行時などに、すべてのプロセスインスタンスの実行履歴を一括削除します。

コマンドによってプロセスインスタンスの実行履歴を一括削除する手順を次に示します。

完了したプロセスインスタンスの実行履歴を一括削除するとき

1. アクセスする HCSC サーバを決定します。
2. 次のコマンドを実行して、完了したプロセスインスタンスの実行履歴を削除します。

```
cscpidelete -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名>  
{ -where <where句> | -wherefile <where句が記載されたファイル名> }
```

注 どちらか一つを指定します。

(例) 次の条件で、コマンドを入力して、プロセスインスタンスの実行履歴を一括削除します。

- プロセスインスタンスの状態 : 「完了」
- アクセスする HCSC サーバ : MyCSC

コマンド

```
cscpidelete -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc MyCSC -wherefile  
delete_where.txt > yyyyymmdd_delete_result.txt
```

delete_where.txt の内容

```
State='Completed'
```

注 State='Completed' 以外の条件を指定すると、完了したプロセスインスタンス以外の削除条件で削除されるため、注意が必要です。

cscpidelete コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscpidelete (プロセスイ

ンスタンスの実行履歴の削除)」を参照してください。

すべてのプロセスインスタンスの実行履歴を一括削除するとき

1. アクセスする HCSC サーバを決定します。
2. 次のコマンドを実行して削除します。

```
cscpidetelete -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名>
-force
```

(例) 次の条件で、コマンドを入力して、すべてのプロセスインスタンスの実行履歴を一括削除します。

- アクセスする HCSC サーバ : MyCSC

コマンド

```
cscpidetelete -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc MyCSC -force >
yyyymmdd_delete_result.txt
```

cscpidetelete コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscpidetelete (プロセスインスタンスの実行履歴の削除)」を参照してください。

6.1.5 プロセスインスタンスを再実行する

ビジネスプロセス実行中に、実行基盤のあるマシンが停止したり、サービス部品の呼び出しに失敗したりなど障害が発生し中断したプロセスインスタンスを、一件ずつ再実行できます。

また、複数のプロセスインスタンスが同一のビジネスプロセス定義名である場合、複数のプロセスインスタンスを一括再実行できます。プロセスインスタンスの実行履歴の一括再実行は、コマンドでだけ実行できます。

なお、サービスリクエストから、ビジネスプロセスの再実行を要求して、ビジネスプロセスプロセスを再実行することもできます。サービスリクエストによるビジネスプロセスの再実行については、「5.5.3 ビジネスプロセスの再実行」を参照してください。

(1) 画面によるプロセスインスタンスの再実行

(a) 一件ずつ再実行する場合

画面によってプロセスインスタンスを一件ずつ再実行する手順を次に示します。

1. プロセスインスタンスを検索します。
検索結果一覧に検索結果が表示されます。
2. 検索結果一覧から、状態が「実行中」であるプロセスインスタンスを選択して、[アクティビティ情報] ボタンをクリックします。

6. 実行履歴の管理

詳細情報一覧にアクティビティ情報が表示されます。

3. 詳細情報一覧から、アクティビティ種別が「サービス呼出」、かつ、状態が「実行中」のアクティビティが含まれていることを確認します。
4. [再実行] ボタンをクリックします。
プロセスインスタンス再実行の実行確認ダイアログが表示されます。
5. [OK] ボタンをクリックします。
プロセスインスタンスが再実行され、プロセスインスタンス再実行の実行結果ダイアログが表示されます。
6. [OK] ボタンをクリックします。
検索結果一覧が更新されます。再実行に失敗した場合も、一覧は更新されます。

(b) 注意事項

HCSC サーバで処理中のプロセスインスタンスに対しては、再実行しないでください。再実行する場合は、HCSC サーバからの応答やメッセージログでエラーの内容を確認し、エラーの原因を取り除いてから、プロセスインスタンスを再実行してください。

(2) コマンドによるプロセスインスタンスの再実行

(a) 一件ずつ再実行する場合

コマンドによってプロセスインスタンスを一件ずつ再実行する手順を次に示します。

1. アクセスする HCSC サーバを決定します。
2. cscpiselect コマンドで、実行中のサービス呼出アクティビティを含むプロセスインスタンスを検索します。
3. 再実行対象のプロセスインスタンスのプロセス ID、およびビジネスプロセス定義名を特定します。
4. 次のコマンドを実行して再実行します。

```
cscpireexec -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名>
{-processid <プロセスID> | -processidfile <プロセスIDファイル名>}
{-processnamefile <ビジネスプロセス定義ファイル名> | -processname <ビジネスプロセス定義名>}
```

注 どちらか一つを指定します。

(例) 次の条件で、コマンドを入力して、プロセスインスタンスを再実行します。

- 取得対象のプロセス ID :
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142575786734_7018547949_143
- ビジネスプロセス定義名 : XXXPurchaseRegisterService
- アクセスする HCSC サーバ : MyCSC

コマンド

```
cscpireexec -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc MyCSC
-processidfile process_id.txt -processname "XXXPurchaseRegisterService"
```

process_id.txt の内容

```
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142575786734_7018547949_143
```

出力結果

```
KEOS52076-I cscpireexec will now start.
KEOS52040-I Communication with the HCSC-Server, to re-execute a process instance, will now start.
KEOS52041-I Communication with the HCSC-Server, to re-execute a process instance, is complete.
ProcessID,ProcessDefinitionName,Result,ErrorMessage
MyServer_010209010042_XXXPurchaseRegisterService_1142575786734_7018547949_143,XXXPurchaseRegisterService,Success,
KEOS52077-I cscpireexec ended normally.
```

cscpireexec コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscpireexec (プロセスインスタンスの再実行)」を参照してください。

(b) 一括して再実行する場合

コマンドによってプロセスインスタンスを一括再実行する手順を次に示します。

1. アクセスする HCSC サーバを決定します。
2. 再実行対象のプロセスインスタンスのビジネスプロセス定義名を特定します。
3. 次のコマンドを実行して再実行します。

```
cscpireexec -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名>
{ -processname <ビジネスプロセス定義名> | -processnamefile <ビジネスプロセス定義ファイル名> }
```

注 どちらか一つを指定します。

(例) 次の条件で、コマンドを入力して、プロセスインスタンスを一括して再実行します。

- ビジネスプロセス定義名 : XXXPurchaseRegisterService
- アクセスする HCSC サーバ : MyCSC

コマンド

```
cscpireexec -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc MyCSC
-processname "XXXPurchaseRegisterService"> yyyyymmdd_reexec_result.txt
```

6. 実行履歴の管理

cscpireexec コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「cscpireexec (プロセスインスタンスの再実行)」を参照してください。

(c) 注意事項

HCSC サーバで処理中のプロセスインスタンスに対しては、再実行しないでください。再実行する場合は、HCSC サーバからの応答やメッセージログでエラーの内容を確認し、エラーの原因を取り除いてから、プロセスインスタンスを再実行してください。

(3) 再実行のタイミング

画面やコマンドで実行履歴を検索してから再実行するまでの間に生じる時間差によって、検索結果に表示されたプロセスインスタンス実行履歴の状態と、実際のプロセスインスタンス実行履歴の状態が異なることがあります。この場合、「完了」、または「フォルト終了」状態のプロセスインスタンスに対して、再実行をしても、実際には、再実行は失敗し実施されません。そのため、できる限り最新の情報を取得して再実行を実施します。

(4) プロセスインスタンス再実行時の応答電文の出力

プロセスインスタンスを再実行した結果、成功した場合も SOAP フォルトの発生で失敗した場合も、プロセスインスタンスから応答電文を受け取ることがあります。このような場合、HCSC-Manager 定義ファイルに次に示す内容を設定して、応答電文をファイルに出力できます。

```
cscmng.pireexec.response.dir=応答電文格納ディレクトリ  
cscmng.pireexec.response.encoding=応答電文格納文字コード
```

HCSC-Manager 定義ファイルの作成については、「2.4.1(1) HCSC-Manager 定義ファイルの作成」を、HCSC-Manager 定義ファイルの詳細については、「9. 定義ファイル」の「HCSC-Manager 定義ファイル」を参照してください。

なお、プロセス ID は長い文字列 (最大 240 文字) になる可能性があります。応答電文出力ディレクトリに深いディレクトリ階層を設定すると、ファイルを生成できない場合があるため注意してください。再実行しても、応答電文ファイルが生成されない場合はメッセージが出力されます。

(5) SOAP フォルトの発生時の情報

プロセスインスタンスの再実行が SOAP フォルトの発生で失敗した場合、プロセスインスタンスから受け取る SOAP フォルト情報の種類と取り扱いを次に示します。

- フォルトコード：エラーメッセージに表示されます。
- フォルト文字列：エラーメッセージに表示されます。
- フォルト生成者：エラーメッセージに表示されます。
- フォルト詳細：再実行成功時の応答電文と同様に、応答電文格納用ディレクトリに

ファイル出力されます。ただし、出力エンコードは UTF-8 だけとなります。

6.2 電文の実行履歴の管理

電文の実行状況を履歴として、データベースに記録できます。これを永続化といいます。永続化できるのは、データベースを使用する場合だけです。永続化すると、コマンドで実行履歴の情報を表示でき、その情報からサービス部品の呼び出し頻度などの情報の把握、電文の配送経路や配送状態の確認、およびビジネスプロセスの各アクティビティのサービス部品の内容を確認できます。また、不要になった実行履歴は削除できます。

ここでは、電文の実行履歴の設定や利用方法について説明します。

6.2.1 電文の実行履歴の概要

電文の実行履歴は次の表に示すタイミングで採取します。

表 6-1 電文の実行履歴採取のタイミング

採取タイミング	説明	送信方向種別
サービス部品呼び出し要求時	サービスアダプタまたはビジネスプロセスを実行する前	Service Request Direction
サービス部品呼び出し応答時	標準受付またはユーザ定義受付で、サービス部品呼び出しの結果を返すとき	Service Response Direction
サービス部品呼び出し応答のエラー	サービス部品またはビジネスプロセスから返ってきたユーザ定義例外（フォルト）を返すとき	Service Fault
サービス部品呼び出しエラー	サービス部品からのユーザ定義例外以外の例外や、ビジネスプロセスまたは HCSC サーバ内でエラーを検知した際、例外情報を返すとき	Service Error

注 非同期のサービス部品を呼び出した場合は、応答電文はないため、非同期のサービス部品を呼び出すプログラムの処理が完了（リターン）するタイミングになります。

サービスアダプタを直接呼び出す場合と、ビジネスプロセスを呼び出す場合のそれぞれについて、電文の実行履歴を採取するタイミングを説明します。

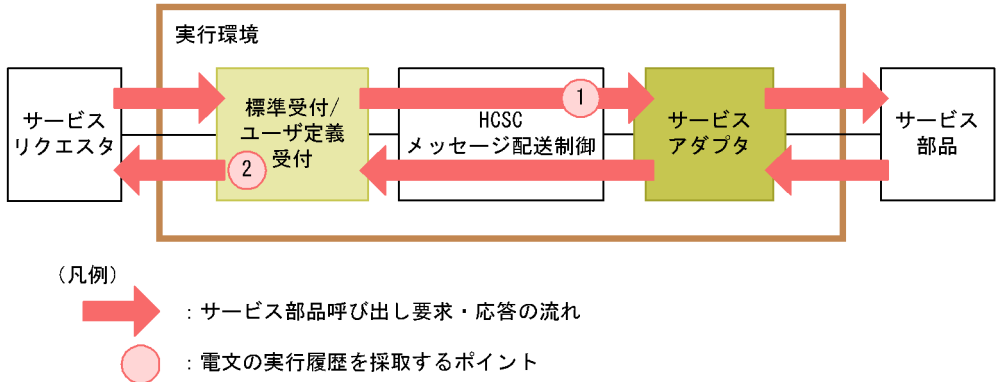
(1) サービスアダプタを直接呼び出す場合の電文の実行履歴を採取するタイミング

サービスアダプタを直接呼び出す場合は、エラーの有無やエラーの種類によって、電文の実行履歴を採取するタイミングが異なります。

(a) 正常応答する場合

サービスアダプタを直接呼び出して正常応答する場合の、電文の実行履歴を採取するタイミングを次の図に示します。

図 6-2 電文の実行履歴を採取するタイミング（サービスアダプタを直接呼び出して正常応答する場合）



次に示す番号は、図 6-2 の図中の番号に対応しています。

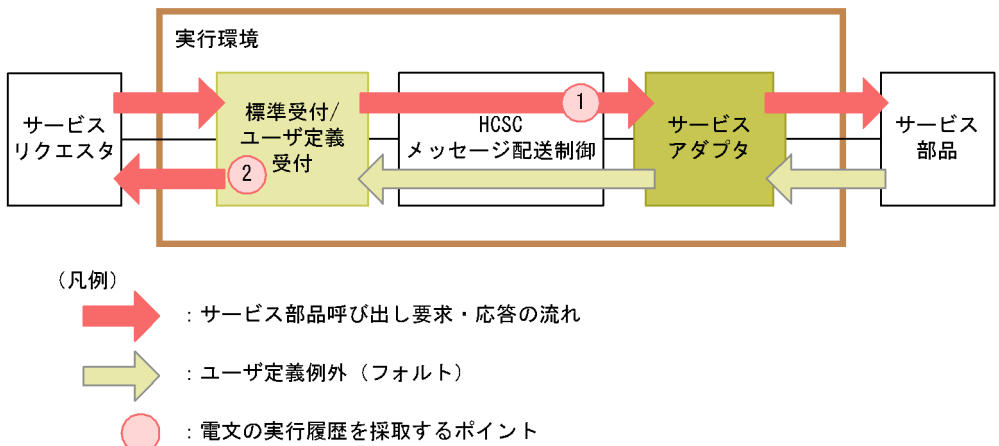
(1) サービスアダプタを呼び出す前に、電文の実行履歴を採取します。

(2) 標準受付またはユーザ定義受付で、サービスリクエスタにサービス部品呼び出しの結果を返すときに電文の実行履歴を採取します。

(b) サービス部品呼び出し応答がエラーになる場合

サービスアダプタを直接呼び出してサービス部品呼び出し応答がエラーになる場合の、電文の実行履歴を採取するタイミングを次の図に示します。

図 6-3 電文の実行履歴を採取するタイミング（サービスアダプタを直接呼び出してサービス部品呼び出し応答がエラーになる場合）



次に示す番号は、図 6-3 の図中の番号に対応しています。

(1) サービスアダプタを呼び出す前に、電文の実行履歴を採取します。

6. 実行履歴の管理

(2) サービス部品からユーザ定義例外（フォルト）が返ってきた場合は、標準受付またはユーザ定義受付で、サービスリクエストにサービス部品呼び出し応答の結果としてユーザ定義例外（フォルト）の情報を返すときに、実行履歴（サービス部品呼び出し応答エラー）を採取します。

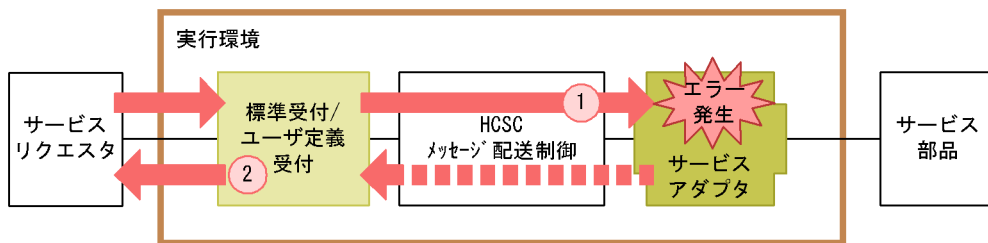
エラーの伝わり方についての詳細は、「7.7 サービス部品呼び出し要求時の障害対策」を参照してください。

(c) サービス部品呼び出しエラーの場合

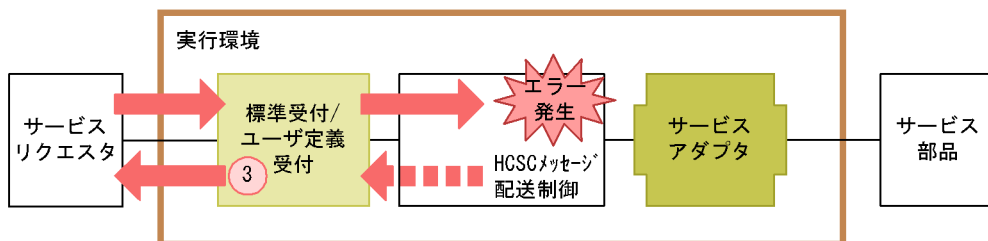
サービスアダプタを直接呼び出してエラーになる場合の、電文の実行履歴を採取するタイミングを次の図に示します。

図 6-4 電文の実行履歴を採取するタイミング（サービスアダプタを直接呼び出してエラーになる場合）

●サービスアダプタやサービス部品でエラーが発生した場合



●HGSCサーバ内でエラーを検知した場合



(凡例)

: サービス部品呼び出し要求・応答の流れ

: 例外

: 電文の実行履歴を採取するポイント

次に示す番号は、図 6-4 の図中の番号に対応しています。

サービスアダプタやサービス部品でエラーが発生した場合

(1) サービスアダプタを実行する前に、電文の実行履歴を採取します。

(2) サービスアダプタやサービス部品でエラーが発生した場合は、標準受付またはユーザ定義受付で、サービスリクエストにサービス部品呼び出し応答の結果として例外（エラー）の情報を返すときに、実行履歴（サービス部品呼び出しエラー）を採取します。

HCSC サーバ内でエラーを検知した場合

(3) 標準受付またはユーザ定義受付で、サービスリクエストにサービス部品呼び出し応答の結果として例外（エラー）の情報を返すときに、実行履歴（サービス部品呼び出しエラー）を採取します。

サービスアダプタが呼び出される前に、サービスアダプタが起動していないなどの理由で、HCSC サーバ内でエラーを検知した場合は、サービスアダプタを実行する前に、電文の実行履歴を採取しません。

エラーの伝わり方についての詳細は、「7.7 サービス部品呼び出し要求時の障害対策」を参照してください。

(2) ビジネスプロセスを呼び出す場合の電文の実行履歴を採取するタイミング

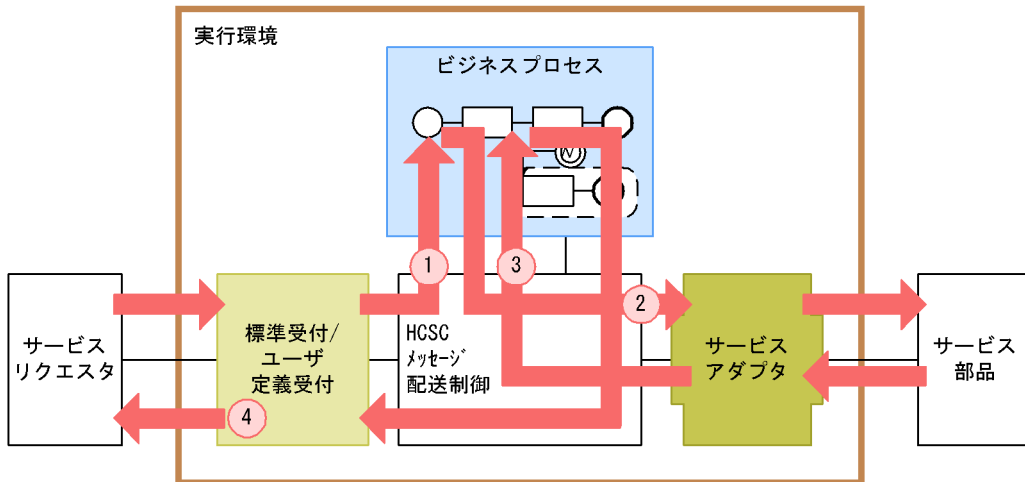
ビジネスプロセスを呼び出す場合は、エラーの有無やエラーの種類によって、電文の実行履歴を採取するタイミングが異なります。

(a) 正常応答する場合



ビジネスプロセスを呼び出して正常応答する場合の、電文の実行履歴を採取するタイミングを次の図に示します。

6. 実行履歴の管理

図 6-5 電文の実行履歴を採取するタイミング（ビジネスプロセスを呼び出して正常応答する場合）



(凡例)

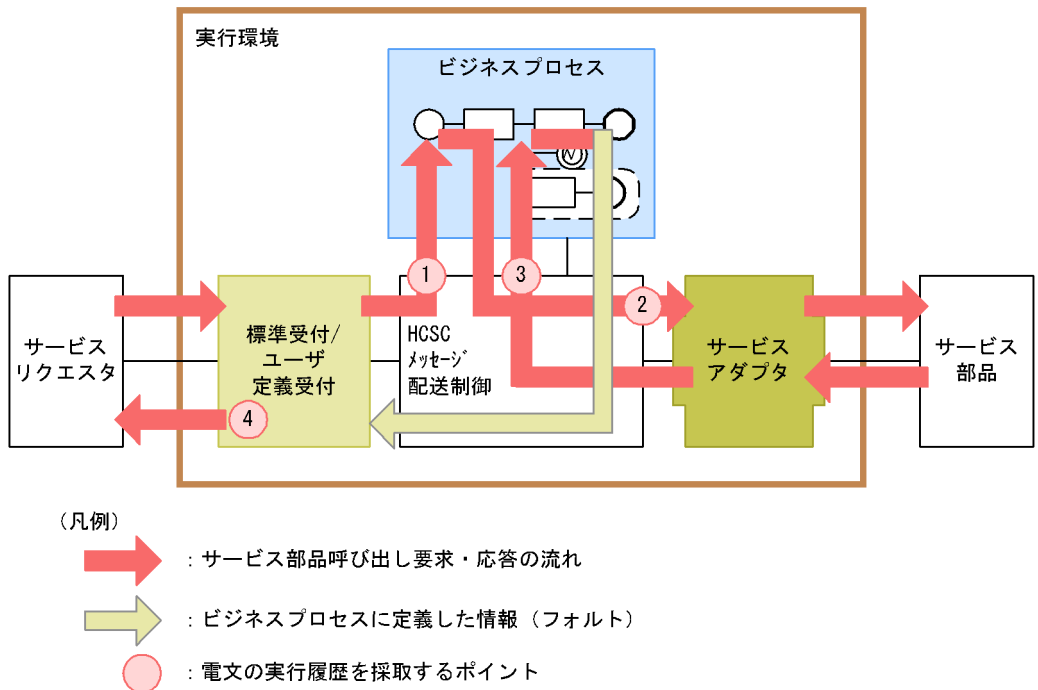
-  : サービス部品呼び出し要求・応答の流れ
-  : 電文の実行履歴を採取するポイント

次に示す番号は、図 6-5 の図中の番号に対応しています。

- (1) ビジネスプロセスを実行する前に、電文の実行履歴を採取します。
 - (2) サービスアダプタを実行する前に電文の実行履歴を採取します。ビジネスプロセスに定義したサービス呼出アクティビティからサービス部品を呼び出すたびに実行履歴を採取します。
 - (3) ビジネスプロセスへ応答を返すときに、電文の実行履歴を採取します。
 - (4) 標準受付やユーザー定義受付で、サービスリクエスタにビジネスプロセスからの応答を返すときに電文の実行履歴を採取します。
- (b) ビジネスプロセスでフォルトエラーになる場合

ビジネスプロセスを呼び出して、ビジネスプロセスでフォルト（ユーザー定義例外）が発生してエラーになる場合の、電文の実行履歴を採取するタイミングを次の図に示します。

図 6-6 電文の実行履歴を採取するタイミング（ビジネスプロセスを呼び出してビジネスプロセスでフォルトエラーになる場合）



次に示す番号は、図 6-6 の図中の番号に対応しています。

(1) ビジネスプロセスを実行する前に、電文の実行履歴を採取します。

(2) ビジネスプロセスに定義したサービス呼出アクティビティからサービスアダプタを実行する前に、電文の実行履歴を採取します。

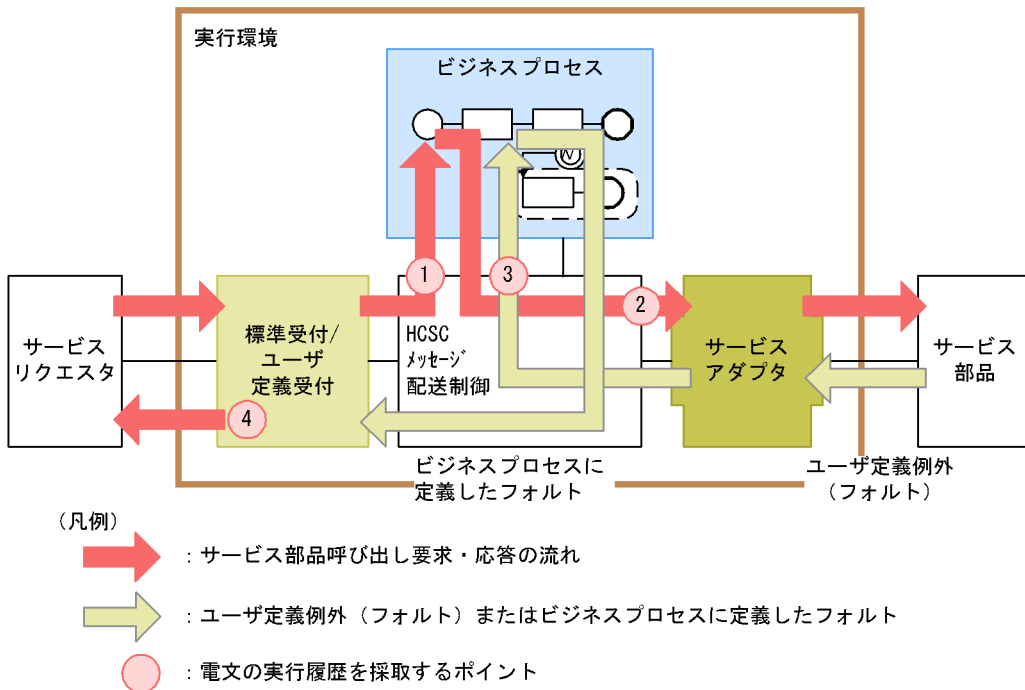
(3) サービス部品からの応答は正常なため、ビジネスプロセスへサービス部品呼び出し結果を返すときに、電文の実行履歴を採取します。

(4) サービス部品呼び出し結果の応答電文の内容から、ビジネスプロセスでフォルトと判断されると、標準受付またはユーザ定義受付で、サービスリクエスタに応答を返すときに、実行履歴（エラー（フォルト））を採取します。

(c) サービス部品でフォルトエラーになる場合

ビジネスプロセスを呼び出して、サービス部品でフォルト（ユーザ定義例外）が発生してエラーになる場合の、電文の実行履歴を採取するタイミングを次の図に示します。

図 6-7 電文の実行履歴を採取するタイミング（ビジネスプロセスを呼び出してサービス部品でフォルトエラーになる場合）



次に示す番号は、図 6-7 の図中の番号に対応しています。

- (1) ビジネスプロセスを実行する前に、電文の実行履歴を採取します。
- (2) ビジネスプロセスに定義したサービス呼出アクティビティでサービス部品を呼び出し、サービスアダプタを実行する前に、電文の実行履歴を採取します。
- (3) サービス部品からユーザ定義例外（フォルト）が返ってくるため、ビジネスプロセスへ応答を返すときに、実行履歴（サービス部品呼び出し応答エラー）を採取します。
- (4) サービス部品呼び出し結果の応答電文自体が、ビジネスプロセスでフォルトと判断されると、標準受付またはユーザ定義受付で、サービスリクエスタにサービス部品呼び出し結果を返すときに、実行履歴（エラー（フォルト））を採取します。

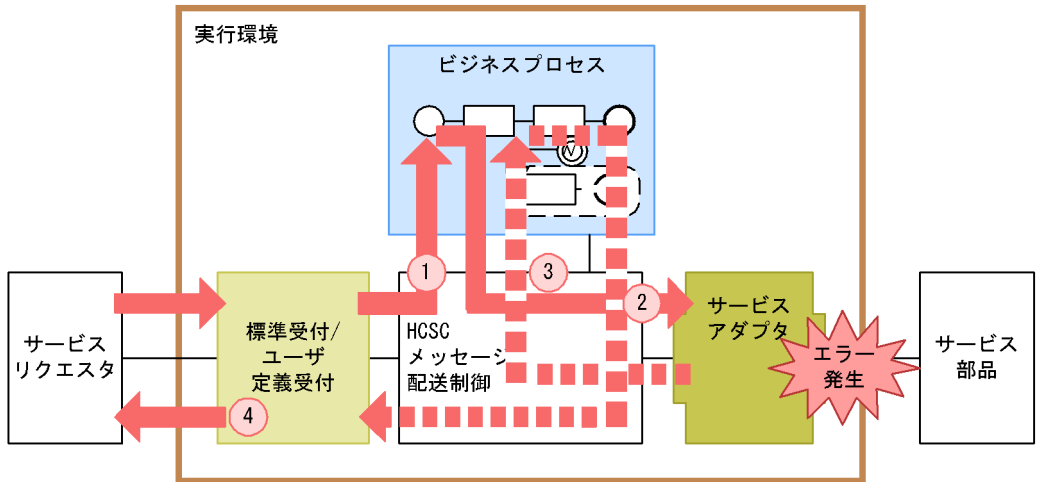
エラーの伝わり方についての詳細は、「7.7 サービス部品呼び出し要求時の障害対策」を参照してください。

(d) ビジネスプロセスからのサービス部品呼び出しエラーの場合

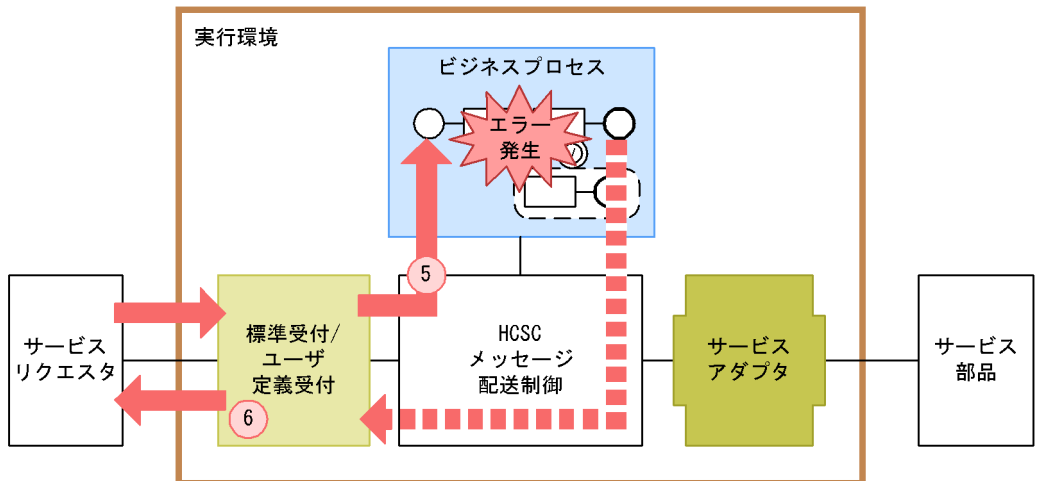
ビジネスプロセスを呼び出して、ビジネスプロセスからサービス部品呼び出しエラーになる場合の、電文の実行履歴を採取するタイミングを次の図に示します。

図 6-8 電文の実行履歴を採取するタイミング（ビジネスプロセスを呼び出してビジネスプロセスからサービス部品呼び出しエラーになる場合）


●サービスアダプタやサービスにエラーが発生した場合




●ビジネスプロセスにエラーが発生した場合



(凡例)

 : サービス部品呼び出し要求・応答の流れ

 : 例外

 : 電文の実行履歴を採取するポイント

次に示す番号は、図 6-8 の図中の番号に対応しています。

サービスアダプタやサービス部品にエラーが発生した場合

(1) ビジネスプロセスを実行する前に、電文の実行履歴を採取します。

6. 実行履歴の管理

(2) ビジネスプロセスに定義したサービス呼出アクティビティでサービス部品を呼び出し、サービスアダプタを実行する前に、電文の実行履歴を採取します。

(3) サービスアダプタやサービス部品でエラーが発生し、ビジネスプロセスへ応答を返すときに、実行履歴（サービス部品呼び出しエラー）を採取します。

(4) 標準受付やユーザ定義受付で、サービスリクエストにサービス部品呼び出し応答の結果として例外（エラーの情報）を返すときに、実行履歴（サービス部品呼び出しエラー）を採取します。

サービスアダプタが呼び出される前に、サービスアダプタが起動していないなどの理由で、HCSC サーバ内でエラーを検知した場合は、(1)のタイミングでは実行履歴を採取しないで、(4)のタイミングでだけ採取します。

ビジネスプロセスにエラーが発生した場合

(5) ビジネスプロセスを実行する前に、電文の実行履歴を採取します。

(6) ビジネスプロセスでエラーが発生して応答がエラーとなるため、標準受付またはユーザ定義受付で、サービスリクエストにサービス部品呼び出し結果として、例外（エラー）の情報を返すときに、電文の実行履歴（サービス部品呼び出しエラー）を採取します。

エラーの伝わり方についての詳細については、「7.7 サービス部品呼び出し要求時の障害対策」を参照してください。

6.2.2 データベースに取得する電文の実行履歴を設定する

電文の実行履歴を確認するには、電文の実行履歴としてデータベースに取得する情報を設定します。電文の実行履歴としてデータベースに取得する情報と設定方法を次に説明します。

(1) 電文データ以外の情報を取得する場合

(a) 取得する情報

電文データ（ユーザ電文）以外の情報をデータベースに取得します。電文データ以外の情報には、基本情報と基本情報以外の情報があります。取得する情報の詳細については、「10. コマンド」の「csmlshistory（電文の実行履歴情報の表示）」を参照してください。それぞれの情報を次に示します。

基本情報

- EntryCount：エントリ番号
- TimeStamp：実行履歴採取時刻
- ClusterName：サービス部品を呼び出した HCSC サーバのクラスタ名
- HistoryDirection：実行履歴採取方向
- HCSCCommonID：メッセージ共通 ID
- ServiceRequestID：サービスリクエスト ID
- RequestServiceName：サービスリクエストからの入力サービス部品名

- ServiceName：呼び出し先のサービス部品名
- ErrorCode：エラー情報
- Version：実行履歴情報コンテナのバージョン番号
- Revision：実行履歴情報コンテナのリビジョン番号

基本情報以外の情報

- HCSCServerName：受付 HCSC サーバ名
- ClientID：クライアント関連 ID
- JMSMessageID：JMS メッセージ ID
- JMSCorrelationID：JMS 関連識別子
- RequestType：サービスリクエスト種別
- RequestProtocolKind：リクエストのプロトコル種別
- ServiceKind：サービス部品の種別
- AdapterName：サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービス ID
- ServiceProtocolKind：サービスアダプタの種類
- ServiceOperationName：サービス部品のオペレーション名
- ConnectProtocolKind：連携プロトコル種別
- RequestUserTelegramType：ユーザ電文の種別
- ResponseUserTelegramType：ユーザへの応答電文の種別
- BPAActivity：ビジネスプロセス用アクティビティ番号
- BPPProcessID：ビジネスプロセス用プロセス
- BPPRequestType：ビジネスプロセス用要求タイプ
- ReplyToQueueName：応答用のキュー名
- RouteHistory：経路履歴情報

(b) 設定方法

基本情報および基本情報以外の情報のどちら場合も、HCSC サーバランタイム定義ファイルに次のプロパティを指定して、実行履歴を取得します。

```
historyrecord=ON
```

データベースを使用する構成で HCSC サーバをセットアップしている場合にだけ、ON を指定できます。

各プロパティの詳細については、「9. 定義ファイル」の「HCSC サーバランタイム定義ファイル」を参照してください。

(2) 電文データを含むすべての情報を取得する場合

(a) 取得する情報

すべての情報（基本情報、基本情報以外の情報、電文データ（ユーザ電文））をデータ

6. 実行履歴の管理

ベースに取得します。「6.2.2(1)(a) 取得する情報」で示した情報のほかに、次の情報を取得します。

- UserTelegram : ユーザ電文

ユーザ電文は、長さを指定して必要な分だけデータベースに取得することもできます。取得する情報の詳細については、「10. コマンド」の「csmshistory (電文の実行履歴情報の表示)」を参照してください。

(b) 設定方法

実行履歴の取得の有無を設定する場合

HCSC サーバランタイム定義ファイルに次のプロパティを指定して、実行履歴の取得有無を設定します。

```
historyrecord=ON  
historyrecord-data=ON
```

電文データ (ユーザ電文) の長さを設定する場合

電文データ (ユーザ電文) の長さを設定して取得する場合は、実行履歴の取得有無のほかに、HCSC サーバランタイム定義ファイルの次のプロパティに、取得する電文データの長さを指定します。

```
historyrecord-binarylength=<電文データの長さ>
```

すべての電文データ (ユーザ電文) を取得する場合

上限を決めないで、すべての電文データ (ユーザ電文) を取得する場合は、次のように指定します。

```
historyrecord-binarylength=FULL
```

各プロパティの詳細については、「9. 定義ファイル」の「HCSC サーバランタイム定義ファイル」を参照してください。

6.2.3 電文の実行履歴を利用する

電文の実行履歴は、次のように利用できます。

- サービス部品の呼び出し頻度などの情報を把握する場合

電文の実行履歴を確認して、どのサービス部品がどのくらいの頻度で呼び出されているのか、どのサービス部品がいつ呼び出されているのかなどの統計を調べることができます。

csmshistory コマンドを利用して電文の実行履歴を確認できます。

- 電文の配送経路や配送状態を確認する場合
電文の実行履歴の中から目的の電文を特定して、電文の配送経路や配送状態を確認できます。
csmlshistory コマンドを利用して電文の実行履歴を確認できます。目的の電文がほかの HCSC サーバに送信されている場合は、送信先の HCSC サーバの電文の実行履歴から、配送経路や配送状態を確認します。
- ビジネスプロセスの各アクティビティのサービス部品の内容を確認する場合
ビジネスプロセスで定義されているアクティビティのサービス部品の内容（サービス部品の呼び出し先、要求に対するユーザ電文の内容など）を確認できます。アクティビティのサービス部品の内容を確認することで、どのアクティビティまで処理が進んでいるのか、どのアクティビティでエラーになっているのかを調べることができます。csmlshistory コマンドを利用して確認できます。ただし、アクティビティのサービス部品の内容を確認するためには、アクティビティが定義されているビジネスプロセスが、どの HCSC サーバに配備されているかをあらかじめ把握しておく必要があります。なお、配備されている HCSC サーバが停止している場合でも、電文の実行履歴を確認できます。

(1) サービス部品の呼び出し頻度などの情報を把握する場合

サービス部品の呼び出し頻度などの情報を把握する場合は、電文の実行履歴を次のように利用します。

1. csmlshistory コマンドに条件を指定して、電文の実行履歴を検索します。
次に示す条件を一つ以上指定します。
 - 開始日時および終了日時
一定期間の電文を確認する場合に指定します。
 - クライアント関連 ID
サービスリクエストでクライアント関連 ID を指定している場合に指定できます。
 - サービスリクエストで受け付けた入力サービス名
 - 呼び出し先のサービス名
 - JMS メッセージ ID (JMS ヘッダの JMSMessageID の値)
非同期のサービス部品の呼び出しの場合に指定できます。
 - JMS 関連識別子 (JMS ヘッダの JMSCorrelationID の値)
非同期のサービス部品の呼び出しの場合に指定できます。
 - メッセージ共通 ID
 - サービスリクエスト ID
2. 検索結果から電文の詳細情報を確認します。
ServiceName で呼び出し先のサービス名を、TimeStamp で電文の実行履歴をデータベースに取得した時刻を確認します。検索結果の詳細については、「10. コマンド」の「csmlshistory (電文の実行履歴情報の表示)」の表示形式を参照してください。

(2) 電文の配送経路や配送状態を確認する場合

電文の配送経路や配送状態を確認する場合は、電文の実行履歴を次のように利用します。

6. 実行履歴の管理

1. 目的の電文を特定するために、`csmlshistory` コマンドに条件を指定して、電文の実行履歴を検索します。
次に示す条件を一つ以上指定します。
 - 開始日時および終了日時
一定期間の電文を確認する場合に指定します。
 - クライアント関連 ID
サービスリクエストでクライアント関連 ID を指定している場合に指定できます。
 - サービスリクエストで受け付けた入力サービス名
 - 呼び出し先のサービス名
 - JMS メッセージ ID (JMS ヘッダの `JMSMessageID` の値)
非同期のサービス部品の呼び出しの場合に指定できます。
 - JMS 関連識別子 (JMS ヘッダの `JMSCorrelationID` の値)
非同期のサービス部品の呼び出しの場合に指定できます。
2. 検索結果から電文の詳細情報を確認して、目的の電文を特定します。
目的の電文が特定できない場合は、検索条件や表示する情報を変更して、再検索します。表示する情報を変更して再検索する方法については、「6.2.4 電文の実行履歴を表示する」を参照してください。
3. 目的の電文の配送経路や配送状態を確認するために、`csmlshistory` コマンドを利用して、ほかの HCSC サーバの電文の実行履歴を検索します。
次に示す条件を一つ以上指定して、電文の実行履歴を検索します。
 - メッセージ共通 ID
 - サービスリクエスト ID
4. 検索結果から電文の詳細情報を確認します。
検索結果の `RouteHistory` で配送経路を、`ErrorCode` でエラー情報を確認します。
検索結果の詳細については、「10. コマンド」の「`csmlshistory` (電文の実行履歴情報の表示)」の表示形式を参照してください。

(3) ビジネスプロセスの各アクティビティのサービス部品の内容を確認する場合

ビジネスプロセスの各アクティビティのサービス部品の内容（サービス部品の呼び出し先、要求に対するユーザ電文の内容など）を確認したい場合は、電文の実行履歴を次のように利用します。

1. アクティビティが定義されているビジネスプロセスが、どの HCSC サーバに配備されているか確認します。
2. `csmlshistory` コマンドに条件を指定して、電文の実行履歴を検索します。
次に示す条件を一つ以上指定します。
検索条件
 - 開始日時および終了日時
一定期間の電文を確認する場合に指定します。

- クライアント関連 ID
サービスリクエストでクライアント関連 ID を指定している場合に指定できます。
- サービスリクエストで受け付けた入力サービス名
- 呼び出し先のサービス名
- JMS メッセージ ID (JMS ヘッダの JMSMessageID の値)
非同期のサービス部品の呼び出しの場合に指定できます。
- JMS 相関識別子 (JMS ヘッダの JMSCorrelationID の値)
非同期のサービス部品の呼び出しの場合に指定できます。
- メッセージ共通 ID
- サービスリクエスト ID

表示項目

検索結果には基本情報以外の情報も表示されるように設定します。設定方法については、「6.2.4 電文の実行履歴を表示する」を参照してください。

3. 検索結果から次の項目を確認して、目的のビジネスプロセスのアクティビティを特定します。
 - HistoryDirection：実行履歴採取方向
実行履歴採取方向には、送信方向 (ServiceRequestDirection) と応答方向 (ServiceResponseDirection) があります。
4. 目的のビジネスプロセスのアクティビティのサービス部品の内容を確認します。

検索結果の詳細については、「10. コマンド」の「csmlshistory (電文の実行履歴情報の表示)」の表示形式を参照してください。

6.2.4 電文の実行履歴を表示する

データベースに取得した電文の実行履歴を表示して、電文の実行履歴を確認します。電文の実行履歴で表示できる情報には、次の四つがあります。

- 基本情報
- 電文データ以外のすべての情報
- 電文データを含むすべての情報
- 履歴情報の件数

基本情報、電文データ以外のすべての情報、および電文データを含むすべての情報については、「6.2.2 データベースに取得する電文の実行履歴を設定する」を参照してください。

(1) 基本情報だけを表示する

基本情報だけを表示する手順を次に示します。

1. 実行履歴の情報を表示する HCSC サーバを決定します。
2. csmlshistory コマンドを実行して検索します。

6. 実行履歴の管理

-d オプションには「nml」を、-k オプションには「list」を指定します。

```
csmlshistory <HCSCサーバ名> -c <クライアント相関ID> 1 -m <メッセージ共通ID> 1 -i <サービスリクエストID> 1 -t <照会開始日時>,<照会終了日時> 1 -rs <サービスリクエストからの入力サービス名> 1 -s <サービス名> 1 -jm <JMSメッセージID> 1 -jc <JMS相関識別子> 1 -l {new|all} 2 -d nml -r <表示レコード数> -k list -u <DBユーザID> 3 -p <DBパスワード> 3
```

注 1

一つ以上指定します。

注 2

どちらか一つを指定します。

注 3

HCSC サーバが停止している場合で、データベースの設定で認証が必要なときだけ指定します。

(例) 次の条件で、コマンドを入力して、電文の実行履歴を検索します。

- HCSC サーバ名：MyCSC
- 照会開始日時：2006/08/29 08:00:00
- 照会終了日時：2006/08/29 12:00:00
- -l オプション：all (該当するすべての実行履歴情報を表示します)
- -d オプション：nml (基本情報だけを表示します)
- -k オプション：指定なし (-k オプションに「list」が仮定され、履歴情報の内容を表示します)

コマンド

```
csmlshistory MyCSC -t 20060829080000,20060829120000 -l all -d nml
```

出力結果

```

EntryCount : 1
TimeStamp : 2006/08/29 09:55:14.311
ClusterName : MyCSC
HistoryDirection : Service Request Direction
HCSCCommonID : CSC_MyCSC_2006-08-29_09:55:14.186_1
ServiceRequestID : MSG_MyCSC_SyncWS_2006-08-29_09:55:14.186_1
RequestServiceName : Web_echo_service
ServiceName : Web_echo_service
Version : 1
Revision : 0

EntryCount : 2
TimeStamp : 2006/08/29 09:55:16.139
ClusterName : MyCSC
HistoryDirection : Service Response Direction
HCSCCommonID : CSC_MyCSC_2006-08-29_09:55:14.186_1
ServiceRequestID : MSG_MyCSC_SyncWS_2006-08-29_09:55:14.186_1
RequestServiceName : Web_echo_service
ServiceName : Web_echo_service
Version : 1
Revision : 0

KDEC10409-I The HCSC command finished successfully.

```

(2) 電文データ以外のすべての情報を表示する

電文データ以外のすべての情報を表示する手順を次に示します。

1. 実行履歴の情報を表示する HCSC サーバを決定します。
2. csmlshistory コマンドを実行して検索します。
-d オプションには「ext」を、-k オプションには「list」を指定します。

```

csmlshistory <HCSCサーバ名> -c <クライアント関連ID> 1 -m <メッセージ共通ID> 1 -i <サービスリクエストID> 1 -t <照会開始日時>,<照会終了日時> 1 -rs <サービスリクエストからの入力サービス名> 1 -s <サービス名> 1 -jm <JMSメッセージID> 1 -jc <JMS関連識別子> 1 -l {new|all} 2 -d ext -r <表示レコード数> -k list -u <DBユーザID> 3 -p <DBパスワード> 3

```

注 1

一つ以上指定します。

注 2

どちらか一つを指定します。

注 3

HCSC サーバが停止している場合で、データベースの設定で認証が必要なときだけ指定します。

(例) 次の条件で、コマンドを入力して、電文の実行履歴を検索します。

- HCSC サーバ名 : MyCSC
- 照会開始日時 : 2006/08/29 08:00:00
- 照会終了日時 : 2006/08/29 12:00:00
- -l オプション : all (該当するすべての実行履歴情報を表示します)
- -d オプション : ext (電文データ以外のすべての情報を表示します)

6. 実行履歴の管理

- -k オプション：指定なし（-k オプションに「list」が仮定され、履歴情報の内容を表示します）

コマンド

```
csmlshistory MyCSC -t 20060829080000,20060829120000 -l all -d ext
```

出力結果

```

EntryCount : 1
TimeStamp : 2006/08/29 09:55:14.311
HCSCServerName : MyCSC
ClusterName : MyCSC
HistoryDirection : Service Request Direction
HCSCCommonID : CSC_MyCSC_2006-08-29_09:55:14.186_1
ServiceRequestID : MSG_MyCSC_SyncWS_2006-08-29_09:55:14.186_1
ClientID : clientid_sample
JMSMessageID : null
JMSCorrelationID : null
RequestType : ClientProgram
RequestProtocolKind : WebService
RequestServiceName : Web_echo_service
ServiceName : Web_echo_service
ServiceKind : ServiceAdapter
AdapterName : web_echo
ServiceProtocolKind : WebService
ServiceOperationName : echo
ConnectProtocolKind : null
RequestUserTelegramType : XML
ResponseUserTelegramType : null
BPActivity : null
BPPProcessID : null
BPRequestType : null
ReplyToQueueName : null
RouteHistory : MyCSC->web_echo
Version : 1
Revision : 0

EntryCount : 2
TimeStamp : 2006/08/29 09:55:16.139
HCSCServerName : MyCSC
ClusterName : MyCSC
HistoryDirection : Service Response Direction
HCSCCommonID : CSC_MyCSC_2006-08-29_09:55:14.186_1
ServiceRequestID : MSG_MyCSC_SyncWS_2006-08-29_09:55:14.186_1
ClientID : clientid_sample
JMSMessageID : null
JMSCorrelationID : null
RequestType : ClientProgram
RequestProtocolKind : WebService
RequestServiceName : Web_echo_service
ServiceName : Web_echo_service
ServiceKind : ServiceAdapter
AdapterName : web_echo
ServiceProtocolKind : WebService
ServiceOperationName : echo
ConnectProtocolKind : null
RequestUserTelegramType : XML
ResponseUserTelegramType : XML
BPActivity : null
BPPProcessID : null
BPRequestType : null
ReplyToQueueName : null
RouteHistory : MyCSC->web_echo
Version : 1
Revision : 0

KDEC10409-I The HCSC command finished successfully.

```

(3) 電文データを含むすべての情報を表示する

電文データを含むすべての情報を表示する手順を次に示します。

1. 実行履歴の情報を表示する HCSC サーバを決定します。
2. csmlshistory コマンドを実行して検索します。

6. 実行履歴の管理

-d オプションには「msg」を、-k オプションには「list」指定します。

```
csmlshistory <HCSCサーバ名> -c <クライアント相関ID> 1 -m <メッセージ共通ID> 1 -i <サービスリクエストID> 1 -t <照会開始日時>,<照会終了日時> 1 -rs <サービスリクエストからの入力サービス名> 1 -s <サービス名> 1 -jm <JMSメッセージID> 1 -jc <JMS相関識別子> 1 -l {new|all} 2 -d msg -ul <電文データ長> -r <表示レコード数> -k list -u <DBユーザID> 3 -p <DBパスワード> 3
```

注 1

一つ以上指定します。

注 2

どちらか一つを指定します。

注 3

HCSC サーバが停止している場合で、データベースの設定で認証が必要なときだけ指定します。

! 注意事項

HCSC サーバランタイム定義ファイルで「historyrecord-data=OFF」を指定した場合は、電文データの実行履歴をデータベースに取得しません。電文データを表示する場合は、「historyrecord-data=ON」を指定してください。

(例) 次の条件で、コマンドを入力して、電文の実行履歴を検索します。

- HCSC サーバ名：MyCSC
- 照会開始日時：2006/08/29 08:00:00
- 照会終了日時：2006/08/29 12:00:00
- -l オプション：all (該当するすべての実行履歴情報を表示します)
- -d オプション：msg (電文データを含むすべての情報を表示します)
- -k オプション：指定なし (-k オプションに「list」が仮定され、履歴情報の内容を表示します)

コマンド

```
csmlshistory MyCSC -t 20060829080000,20060829120000 -l all -d msg
```


出力結果

```

EntryCount : 1
TimeStamp : 2006/08/29 09:55:14.311
HCSCServerName : MyCSC
ClusterName : MyCSC
HistoryDirection : Service Request Direction
HCSCCommonID : CSC.MyCSC_2006-08-29_09:55:14.186_1
ServiceRequestID : MSG.MyCSC_SyncWS_2006-08-29_09:55:14.186_1
ClientID : clientid_sample
JMSMessageID : null
JMSCorrelationID : null
RequestType : ClientProgram
RequestProtocolKind : WebService
RequestServiceName : Web_echo_service
ServiceName : Web_echo_service
ServiceKind : ServiceAdapter
AdapterName : web_echo
ServiceProtocolKind : WebService
ServiceOperationName : echo
ConnectProtocolKind : null
RequestUserTelegramType : XML
ResponseUserTelegramType : null
BPActivity : null
BPPProcessID : null
BPRequestType : null
ReplyToQueueName : null
RouteHistory : MyCSC->web_echo
Version : 1
Revision : 0
UserTelegram :
00000000 3c3f786d 6c207665 7273696f 6e3d2231 | <?xml version="1
00000010 2e302220 656e636f 64696e67 3d225554 | .0" encoding="UT
00000020 462d3822 203f3e0a 3c656368 6f20786d | F-8" ?>.<echo xm
00000030 6c6e733d 22687474 703a2f2f 6563686f | ns="http://echo
00000040 2e776562 73657276 6963652e 74702220 | .webservice.tp"
00000050 3e0a093c 696e3020 786d6c6e 733d2222 | >.<in0 xmlns=""
00000060 3e48656c 6c6f2057 6f726c64 3c2f696e | >Hello World</in
00000070 303e0a3c 2f656368 6f3e0a | 0>.</echo>.
```

6. 実行履歴の管理

```
EntryCount : 2
TimeStamp : 2006/08/29 09:55:16.139
HCSCServerName : MyCSC
ClusterName : MyCSC
HistoryDirection : Service Response Direction
HCSCCommonID : CSC_MyCSC_2006-08-29_09:55:14.186_1
ServiceRequestID : MSG_MyCSC_SyncWS_2006-08-29_09:55:14.186_1
ClientID : clientid_sample
JMSMessageID : null
JMSCorrelationID : null
RequestType : ClientProgram
RequestProtocolKind : WebService
RequestServiceName : Web_echo_service
ServiceName : Web_echo_service
ServiceKind : ServiceAdapter
AdapterName : web_echo
ServiceProtocolKind : WebService
ServiceOperationName : echo
ConnectProtocolKind : null
RequestUserTelegramType : XML
ResponseUserTelegramType : XML
BPActivity : null
BPPProcessID : null
BPPRequestType : null
ReplyToQueueName : null
RouteHistory : MyCSC->web_echo
Version : 1
Revision : 0
UserTelegram :
00000000 3c3f786d 6c207665 7273696f 6e3d2231 | <?xml version="1 |
00000010 2e302220 656e636f 64696e67 3d225554 | .0" encoding="UT |
00000020 462d3822 3f3e3c65 63686f52 6573706f | F-8"?><echoRespo |
00000030 6e736520 786d6c6e 733d2268 7474703a | nse xmlns="http: |
00000040 2f2f6563 686f2e77 65627365 72766963 | //echo.webservic |
00000050 652e7470 223e3c65 63686f52 65747572 | e.tp"><echoRetur |
00000060 6e3e5265 73706f6e 7365205b 48656c6c | n>Response [Hell |
00000070 6f20576f 726c645d 3c2f6563 686f5265 | o World]</echoRe |
00000080 7475726e 3e3c2f65 63686f52 6573706f | turn></echoRespo |
00000090 6e73653e | nse> |
KDEC10409-I The HCSC command finished successfully.
```

(4) 履歴情報の件数を表示する

指定した検索条件を満たす履歴情報の件数を表示する手順を次に示します。

1. 実行履歴の情報を表示する HCSC サーバを決定します。
2. csmlshistory コマンドを実行して検索します。
-k オプションには、「count」を指定します。

```
csmlshistory <HCSCサーバ名> -c <クライアント相関ID> 1 -m <メッセージ共通ID> 1 -i <サー  
ビスリクエストID> 1 -t <照会開始日時>,<照会終了日時> 1 -rs <サービスリクエストからの入力  
サービス名> 1 -s <サービス名> 1 -jm <JMSメッセージID> 1 -jc <JMS相関識別子> 1 -l {new  
|all} 2 -k count -u <DBユーザID> 3 -p <DBパスワード> 3
```

注 1
一つ以上指定します。

注 2
どちらか一つを指定します。

注 3

HCSC サーバが停止している場合で、データベースの設定で認証が必要なときだけ指定します。

(例) 次の条件で、コマンドを入力して、電文の実行履歴を検索します。

- HCSC サーバ名 : MyCSC
- 照会開始日時 : 2006/08/29 08:00:00
- 照会終了日時 : 2006/08/29 12:00:00
- -l オプション : all (該当するすべての実行履歴情報を表示します)
- -d オプション : ext (電文データ以外のすべての情報を表示します)
- -k オプション : count (履歴情報の件数 (エントリ数) を表示します)

コマンド

```
csmshistory MyCSC -t 20060829080000,20060829120000 -l all -k count
```

出力結果

```
RecordCount : 2
KDEC10409-I The HCSC command finished successfully.
```

6.2.5 電文の実行履歴を削除する

電文の実行履歴は、日々追加されていくため、定期的に情報を削除しないとデータベースの容量が圧迫されます。そこで、定期的に、管理者はデータベース上の実行履歴情報テーブルから、電文の実行履歴を削除する必要があります。

電文の実行履歴は、電文を送信した HCSC サーバをあらかじめ把握してから、`csmdeletehistory` コマンドで削除できます。`csmdeletehistory` コマンドの詳細については、「10. コマンド」の「`csmdeletehistory` (電文の実行履歴情報テーブルのレコードの削除)」を参照してください。

(1) 日時を条件として実行履歴を削除する

次のコマンドを実行します。

```
csmdeletehistory <HCSCサーバ名> -t <削除開始日時> -u <DBユーザID> -p <DBパスワード>
```

注

HCSC サーバが停止している場合で、データベースの設定で認証が必要なときだけ指定します。

(2) 日数を条件として実行履歴を削除する

次のコマンドを実行します。

6. 実行履歴の管理

```
csmdelatehistory <HCSCサーバ名> -d <日数> -u <DBユーザID> -p <DBパスワード>
```

注

HCSC サーバが停止している場合で、データベースの設定で認証が必要なときだけ指定します。

(3) メッセージ共通 ID を条件として実行履歴を削除する

次のコマンドを実行します。

```
csmdelatehistory <HCSCサーバ名> -t <削除開始日時> 1 -d <日数> 1 -m <メッセージ共通ID>  
-u <DBユーザID> 2 -p <DBパスワード> 2
```

注 1

どちらか一方を指定します。

注 2

HCSC サーバが停止している場合で、データベースの設定で認証が必要なときだけ指定します。

(4) クライアント関連 ID を条件として実行履歴を削除する

次のコマンドを実行します。

```
csmdelatehistory <HCSCサーバ名> -t <削除開始日時> 1 -d <日数> 1 -c <クライアント関連  
ID> -u <DBユーザID> 2 -p <DBパスワード> 2
```

注 1

どちらか一方を指定します。

注 2

HCSC サーバが停止している場合で、データベースの設定で認証が必要なときだけ指定します。

(5) サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービス ID を条件として実行履歴を削除する

次のコマンドを実行します。

```
csmdelatehistory <HCSCサーバ名> -t <削除開始日時> 1 -d <日数> 1 -a <サービスアダプタ  
またはビジネスプロセスのサービスID> -u <DBユーザID> 2 -p <DBパスワード> 2
```

注 1

どちらか一方を指定します。

注 2

HCSC サーバが停止している場合で、データベースの設定で認証が必要なときだけ指定します。

(6) すべての実行履歴を削除する

次のコマンドを実行します。-d オプションには「0」を指定します。

```
csmdelatehistory <HCSCサーバ名> -d 0 -u <DBユーザID> -p <DBパスワード>
```

注

HCSC サーバが停止している場合で、データベースの設定で認証が必要なときだけ指定します。

6.3 実行履歴情報テーブルの管理

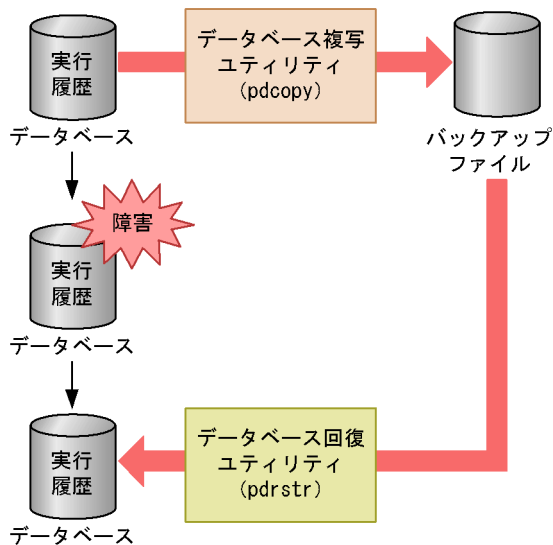
プロセスインスタンスや電文の実行履歴は、日々増大していくため、管理者はバックアップを取得したり、実行履歴情報テーブルのレコードを削除したりして管理する必要があります。

6.3.1 実行履歴情報テーブルのバックアップを取得する

(1) HiRDB を使ったバックアップの取得

HiRDB のデータベース複製ユーティリティ (pdcopy) を使用して、定期的に行履歴情報テーブルのバックアップを取得できます。また、データベース回復ユーティリティ (pdrstr) を使用してデータベースを回復できます。HiRDB のデータベース複製ユーティリティ (pdcopy) を使用したデータベースのバックアップと回復について、次の図に示します。

図 6-9 HiRDB を使ったデータベースのバックアップと回復



HiRDB を使ってバックアップを取得する場合は、HiRDB のデータベース複製ユーティリティ (pdcopy) の -M オプションでバックアップ取得モードを選択します。HCSC サーバが稼働中か停止中かで、選択するモードが異なります。

- HCSC サーバ稼働中

更新可能モード (s) を選択します。

更新可能モードを選択すると、バックアップ取得中に、バックアップ対象 RD エリアを参照および更新できます。

バックアップ取得時点には、バックアップ取得時点以降の任意の同期点へ回復できま

す。データベースを回復するには、バックアップおよびバックアップ取得直前のシンクポイントからのシステムログが必要です。

- HCSC サーバ停止中（メンテナンス中など）

参照可能モード（r）、または参照・更新不可能モード（x）を選択します。

参照可能モードを選択すると、バックアップ取得中に、バックアップ対象 RD エリアを参照だけできますが、更新はできません。

参照・更新不可能モードを選択すると、バックアップ取得中に、バックアップ対象 RD エリアの参照も更新もできません。バックアップを取得する前に、対象 RD エリアを HiRDB の `pdhold -c` コマンドで閉塞かつクローズ状態にする必要があります。これらのモードで取得したバックアップを使用すれば、データベースをバックアップ取得時点で回復できます。また、システムログを使用すれば、バックアップ取得時点以降の任意の同期点に回復できます。

HiRDB のデータベース複写ユティリティ（`pdcopy`）、データベース回復ユティリティ（`pdrstr`）、およびバックアップ取得モードについては、マニュアル「HiRDB 解説」を参照してください。

（2）Oracle を使ったバックアップの取得

Oracle の Recovery Manager（RMAN）機能を使用して、定期的に行履歴情報テーブルのバックアップを取得できます。前回のバックアップからの差分をバックアップできます。詳細については、製品が提供するマニュアルを参照してください。

6.3.2 実行履歴情報テーブルのバックアップ取得の運用

プロセスインスタンスや電文が実行されるたびに実行履歴は増え、データベースの容量は圧迫されます。HCSC サーバ稼働中に実行履歴情報テーブルのバックアップを取得する場合、バックアップ取得後も、実行履歴情報テーブル中のレコードは残ります。

そのため、テーブルのバックアップの取得、実行履歴の削除、およびデータベースのテーブルの再編成を定期的実施することによって、ディスク容量の枯渇、およびデータベースの増大に対処できます。手順を次に示します。

1. HiRDB のデータベース複写ユティリティ（`pdcopy`）を利用して、実行テーブルの差分バックアップを取得します。

2. 実行履歴を削除します。

プロセスインスタンスの実行履歴を削除する場合
`cscpidelete` コマンドを実行します。

電文の実行履歴を削除する場合
`csmdeleتهistory` コマンドを実行します。

3. HiRDB のデータベース再編成ユティリティ（`pdrorg`）を利用して、データベースのテーブルを再編成します。
実行履歴の追加や削除を繰り返すと、データの格納効率が悪くなり性能が低下しま

6. 実行履歴の管理

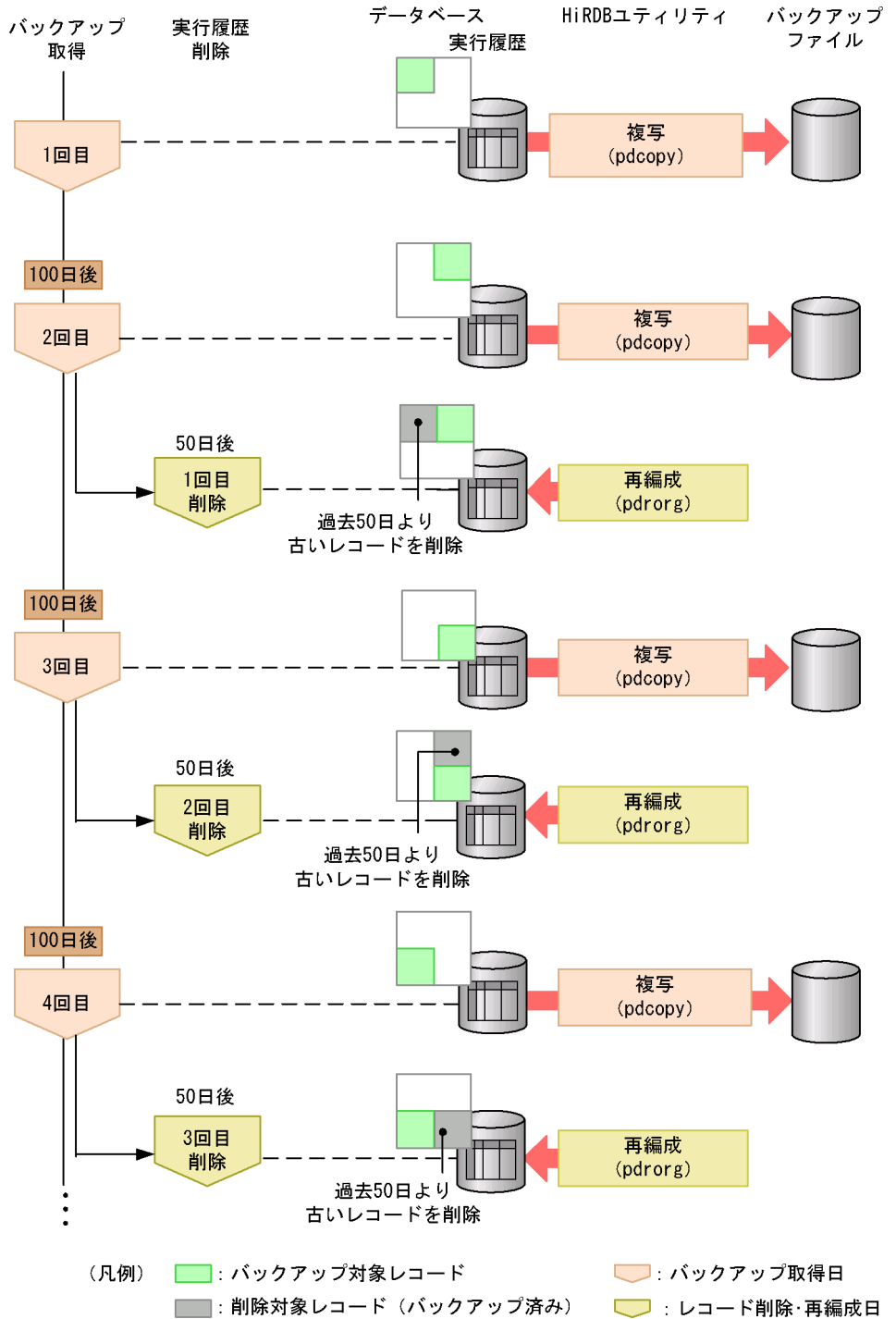
す。これを防ぐために、定期的に pdrorg コマンド（データベース再編成ユーティリティ）で表を再編成してください。なお、実行履歴情報テーブルにはインデクスが定義されているため、インデクスも再編成する必要があります。

HiRDB の表の再編成に関する詳細については、マニュアル「HiRDB システム運用ガイド」を、pdrorg コマンドの詳細については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」を参照してください。

定期的にバックアップ、および削除する間隔は、ユーザ業務の内容によって異なるため、運用管理者が対処する必要があります。

実行履歴情報テーブルのバックアップとレコード削除の運用例を次の図に示します。

図 6-10 実行履歴情報テーブルのバックアップとレコード削除の運用例



6. 実行履歴の管理

説明

1. 実行履歴情報テーブルのバックアップを取得します（1回目のバックアップ）。
2. 2回目のバックアップでは、1回目のバックアップ以降との差分のバックアップを取得します。
3. 実行履歴の検索コマンドで、削除対象となる、ある日時以前の履歴またはある状態のプロセスインスタンスや電文の実行履歴を検索します（例では、過去50日より古いレコードを検索します）。
4. バックアップ取得後、実行履歴削除コマンドで古いレコードを削除します（例では、過去50日より古いレコードを削除します）。
5. テーブルを再編成します。
6. 3回目のバックアップでは、2回目のバックアップ以降との差分のバックアップを取得します。
7. 実行履歴の検索コマンドで、削除対象となる、ある日時以前の履歴またはある状態のプロセスインスタンスや電文の実行履歴を検索します（例では、過去50日より古いレコードを検索します）。
8. バックアップ取得後、実行履歴削除コマンドで古いレコードを削除します（例では、過去50日より古いレコードを削除します）。
9. テーブルを再編成します。
10. 4回目のバックアップでは、3回目のバックアップ以降との差分のバックアップを取得します。
11. 実行履歴の検索コマンドで、削除対象となる、ある日時以前の履歴やある状態のプロセスインスタンスや電文を検索します（例では、過去50日より古いレコードを検索します）。
12. バックアップ取得後、実行履歴削除コマンドで古いレコードを削除します（例では、過去50日より古いレコードを削除します）。

7

障害対策

この章では、システム構築や運用時に発生する障害に対して取得できる情報の種類、および障害の対処方法などについて説明します。

なお、UNIX 環境の場合は、ディレクトリ表記中の "≠" を "/" に読み換えてください。

7.1 障害対策の流れ

7.2 障害調査のために必要な情報

7.3 障害情報の取得

7.4 障害情報の種類

7.5 システムのセットアップまたはアンセットアップ時の障害対策

7.6 オペレーション実行時の障害対策

7.7 サービス部品呼び出し要求時の障害対策

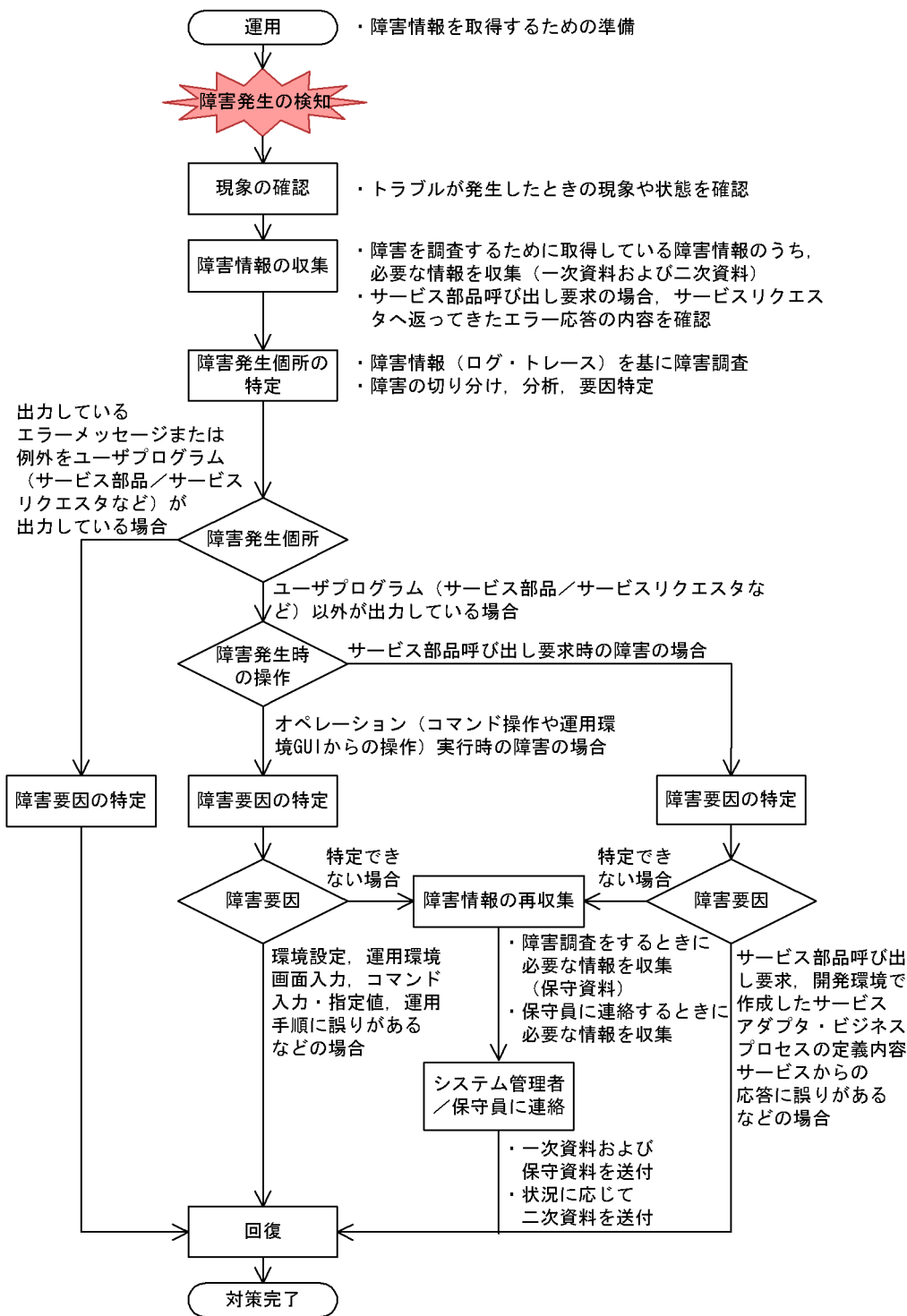
7.8 障害発生時の自動運用

7.9 HCSC サーバ障害発生後の回復方法

7.1 障害対策の流れ

簡易構築中に障害が発生し環境構築に失敗した場合、次の図に示す手順で障害要因を特定してください。

図 7-1 障害対策の流れ



7. 障害対策

各手順の説明を次に説明します。

(a) 現象の確認

障害解析のために、どのような環境でどのような現象が発生したのか状況を確認します。

確認する項目については、「7.2 障害調査のために必要な情報」を参照してください。

(b) 障害情報の収集

障害を調査するために取得している障害情報（ログやトレースなど）のうち、必要な障害情報（一次資料および二次資料）を集めます。一次資料は障害を調査する上で一次判別のために使用し、二次資料は一次判別で判明した障害の内容に応じて使用する障害情報です。

必要な資料については、「7.2 障害調査のために必要な情報」を参照してください。また、障害情報の取得方法については、「7.3 障害情報の取得」を参照してください。障害情報の種類によって、必ず取得されるものと、取得の設定が必要なものとがあるため注意してください。

(c) 障害発生個所の特定

収集した障害情報の内容を確認して障害を調査し、障害発生個所を特定します。障害調査の結果、サービスリクエストやサービス部品などのユーザプログラムがエラーメッセージや例外を出力している場合は、システム開発者に確認し、障害要因の特定および回復をする必要があります。

それ以外の場合、最初に、サービス部品呼び出し要求時の障害であるか、オペレーション（コマンド操作や運用環境の画面からの操作）実行時の障害であるか、行った操作を基に要因を切り分けます。

HCSC サーバ、および HCSC-Manager が出力するログおよびトレースの見方（出力形式）については、「7.4 障害情報の種類」を参照してください。それ以外の前提製品が出力する障害情報については、各製品のマニュアルを参照してください。

(d) 障害要因の特定

障害発生個所や障害発生時の操作によって、障害が発生した要因（原因）を特定します。

(e) 障害情報の再収集

障害要因を特定できない場合、システム管理者または保守員への連絡に必要な保守情報を収集します。詳細については「7.2 障害調査のために必要な情報」を参照してください。

(f) システム管理者または保守員に連絡

システム管理者または保守員に連絡し、一次資料および保守資料を送付します。また、発生した障害などの状況に応じて二次資料を送付します。

(g) 回復

障害が発生した要因（原因）を取り除き，正常な動作となるよう回復させて，運用を再開します。

7.2 障害調査のために必要な情報

ここでは、障害発生時の状況調査のために必要な資料の種類を示します。

障害を調査するときに必要な情報

取得が必要な資料は、発生した障害の種別によって異なります。ここでは、Cosminexus サービスプラットフォームで想定される障害の種別と、それに応じて取得が必要な資料の一覧を示します。

システム管理者または保守員に連絡するときに必要な情報

障害の内容によっては、システム管理者または保守員に連絡する必要があります。保守員とは、ご購入契約に基づくお問い合わせ窓口のことです。

保守員に連絡するときは、障害を調査するときに必要な情報のほかに、資料の取得が必要になる場合があります。

7.2.1 障害を調査するときに必要な情報

(1) 現象の確認

障害が発生した場合、最初にどのような環境でどのような現象が発生したのか状況を確認、整理します。障害発生時に確認する項目を次の表に示します。

表 7-1 障害発生時に確認する項目

項番	確認する項目	障害を検知したマシン					
		HCSC サーバ 稼働マ シン	運用環 境稼働 マシン	サービ スリク エスタ 稼働マ シン	サービ ス部品 稼働マ シン	デー タベ ース 稼働マ シン	
1	基本事項	障害の発生時期	いつ（いつから）障害が発生したのかを確認してください。				
2		障害発生直前に実行した操作	どのような操作をしたときに障害が発生したのかを確認してください。				
3		障害を検知したマシン	どのマシンで障害を検知したのかを確認してください。 1. HCSC サーバ稼働マシン 2. 運用環境稼働マシン 3. サービスリクエスタ稼働マシン 4. サービス部品稼働マシン 5. データベース稼働マシン				
4		障害内容	どのような現象が発生したのかを、具体的に挙げてください。				
5	動作環境	uCosminexus Service Platform のバージョン		-	-	-	-

項番	確認する項目	障害を検知したマシン				
		HCSCサーバ稼働マシン	運用環境稼働マシン	サービススリクエスタ稼働マシン	サービス部品稼働マシン	データベース稼働マシン
6	uCosminexus Service Platform または uCosminexus Operator のバージョン	-		-	-	-
7	J2EE サーバ製品名とバージョン	-	-			-
8	データベース製品名とバージョン	-	-	-	-	
9	OSの種類とバージョン					
10	プロセッサ数					
11	メモリ					
12	仮想メモリ					
13	Java バージョン					
14	パッチの適用状況					
15	再現性	再現性	再現性があるかどうかを確認してください。			
16		発生頻度	再現性がある場合、どのくらいの頻度で障害が発生するかを確認してください。			
17	構成変更	発生時の変更有無	該当する障害が発生するようになる前に、コーディングや環境などを変更したかどうかを確認してください。			
18		変更個所の内容	変更した場合、変更内容を具体的に挙げてください。			

(凡例)

- : 確認が必要
- : 確認は不要

(2) 収集する障害情報

Cosminexus サービスプラットフォームのシステムでは、調査に必要な資料として、障害の種別ごとに表 7-2 に示す情報が必要です。

なお、障害情報を取得するためには、あらかじめ設定が必要なものがあるため注意してください。障害情報の取得の詳細については「7.3 障害情報の取得」を参照してください。

7. 障害対策

い。また、取得した障害情報が出力される場所については、「7.3 障害情報の取得」および「7.4 障害情報の種類」を参照してください。

障害情報の取得を設定していない情報については、障害調査や問い合わせのときに必要となる情報ではありませんが、障害調査の状況に応じて取得が必要になることがあります。障害調査に必要な情報は、障害の発生個所によって異なります。

表 7-2 障害調査のために取得している情報

項番	取得する情報		障害種別			
			ユーザプログラムがエラーメッセージや例外を出力している場合	サービス部品呼び出し要求時の障害の場合	オペレーション（コマンド操作や運用環境の画面からの操作）実行時の障害の場合	
1	Cosminexus サービスプラットフォームの資料	メッセージログ				
2		リクエストトレース			-	
3		性能解析トレース	-		-	
4		定義情報	HCSC サーバ構成定義ファイル	-		
5			HCSC サーバセットアップ定義ファイル	-		
6			HCSC サーバランタイム定義ファイル	-		
7			HCSC-Manager 定義ファイル	-		
8			HCSC-Manager コマンド共通定義ファイル	-		
9			HCSC-Messaging コマンド共通定義ファイル	-		
10			サービス情報変更定義ファイル	-		
11			ユーザ定義受付ランタイム定義ファイル	-		
12			SOAP Fault 動作定義ファイル	-		
13	Cosminexus の資料		J2EE サーバ、リダイレクタ、サーバ管理コマンドのログ			
14		運用管理エージェント、運用監視エージェント、Management Server のログ（統合ログ）				

項番	取得する情報		障害種別			
			ユーザプログラムがエラーメッセージや例外を出力している場合	サービス部品呼び出し要求時の障害の場合	オペレーション(コマンド操作や運用環境の画面からの操作)実行時の障害の場合	
15		Cosminexus DABroker Library のログ				
16		DB Connector のログ (リソースアダプタの稼働ログ)				
17		EJB クライアントアプリケーションのログ			-	
18		ユーザログ			-	
19	定義情報	Cosminexus Component Container の設定ファイル				
20		Cosminexus Manager の設定ファイル				
21		dbcon-xadisplayname に設定した DB Connector の属性情報				
22		dbcon-nodisplayname に設定した DB Connector の属性情報				
23	Cosminexus RM の資料	開始停止メッセージログ	-			
24		Cosminexus 用メッセージログ				
25		メソッドトレース				
26		回線トレース				
27		定義情報	Cosminexus RM コンフィグレーションプロパティの設定情報			
28	Cosminexus SOAP の資料	トレース			-	
29		アプリケーションログ			-	
30		定義情報	Cosminexus SOAP 共通定義ファイル			-
31			Cosminexus SOAP サーバ定義ファイル			-
32		Hitachi Web Server のログおよびトレース			-	

7. 障害対策

項番	取得する情報		障害種別		
			ユーザプログラムがエラーメッセージや例外を出力している場合	サービス部品呼び出し要求時の障害の場合	オペレーション（コマンド操作や運用環境の画面からの操作）実行時の障害の場合
33	データベースの障害情報	HiRDB を使用している場合	HiRDB のログ（HiRDB の定義情報を含む）	-	
34			HiRDB クライアントのログおよびトレース	-	
35			HiRDB Type4 JDBC ドライバの Exception ログおよびトレース	-	
36		Oracle を使用している場合	Oracle のログ	-	
37			Oracle Thin Driver のログ	-	
38		JavaVM の障害情報	JavaVM 出力メッセージログ		-
39	JavaVM のスレッドダンプ		-		
40	JavaVM のガーベージコレクションのログ		-		

（凡例）

- ：一次資料
- ：二次資料
- ：不要

7.2.2 システム管理者または保守員に連絡するときに必要な情報

障害発生時で次に示す場合は、システム管理者または保守員に連絡する必要があります。

- 出力されたエラーメッセージの対処に「保守員に連絡してください。」とある場合
- 調査しても障害の要因がわからない場合
- エラーメッセージの内容や書かれている対処方法に従って対処しても解決できない場合

システム管理者または保守員に連絡するために必要な情報は、「7.2.1 障害を調査するときに必要な情報」で示す情報以外に、障害の種別ごとに表 7-3 に示す情報が必要です。障害情報の取得を設定していない情報については、障害調査や問い合わせのときに必要

ではありませんが、障害調査の状況に応じて取得が必要になることがあります。システム管理者または保守員に連絡するために必要な情報は、障害の発生個所によって異なります。

Cosminexus が出力するログのディレクトリのデフォルトは、<Cosminexus インストールディレクトリ>¥CC¥server¥public¥ejb¥<J2EE サーバ名>¥logs です。以降、「Cosminexus ログ出力ディレクトリ」と表記します。なお、Cosminexus が出力するログのディレクトリは、usrconf.cfg (J2EE サーバ用オプション定義ファイル) の ejb.server.log.directory キーで変更できます。

表 7-3 システム管理者または保守員に連絡するために必要な情報

項番	取得する情報		障害種別			
			ユーザプログラムがエラーメッセージや例外を出力している場合	サービス部品呼び出し要求時の障害の場合	オペレーション(コマンド操作や運用環境の画面からの操作)実行時の障害の場合	
1	Cosminexus サービスプラットフォームのフォームの資料	例外ログ				
2		メンテナンスログ	-	-		
3		インストールログ	-	-		
4		メソッドトレース				
5		保守情報	HCSC サーバリポジトリ情報	-		
6			HCSC-Manager の保守情報			
7			HCSC サーバ保持情報			
8	Cosminexus の資料	保守用ログ ¹				
9	Cosminexus SOAP の資料	保守用ログ ²				
10	JavaVM の障害情報	メモリダンプ				

(凡例)

: 必要

- : 不要

注 1 Cosminexus の保守用ログについては、マニュアル「Cosminexus システム運用ガイド」を参照してください。

注 2 Cosminexus SOAP の保守用ログは、<Cosminexus ログ出力ディレクトリ>¥WS¥maintenance に出力されます。このほか、マニュアル「Cosminexus SOAP アプリケーション開発ガイド」を参照して、ログ以外の障害発生時に取得する情報を取得してください。

7.3 障害情報の取得

7.3.1 Cosminexus サービスプラットフォームが出力するログやトレースの取得方法

Cosminexus サービスプラットフォームが出力するメッセージログ、トレース、および各種情報の取得方法について説明します。Cosminexus サービスプラットフォームが出力する障害情報の種類については、「7.4 障害情報の種類」を参照してください。

(1) メッセージログの取得方法

メッセージログは必ず出力されます。

なお、メッセージログを出力するファイルのサイズ、および面数は、必要に応じて変更できます。メッセージログの詳細については、「7.4.1 メッセージログ」を参照してください。

(a) HCSC-Manager のログ

HCSC-Manager 定義ファイルで次のパラメタを指定します。

- `cscmng.log.message.filesize` = メッセージログファイルサイズ
- `cscmng.log.message.filenum` = メッセージログファイル面数

HCSC-Manager 定義ファイルの詳細については、「9. 定義ファイル」の「HCSC-Manager 定義ファイル」を参照してください。

(b) Cosminexus の統合メッセージログ

統合メッセージログは、`manager.cfg` (Manager ログ設定ファイル) でファイルのサイズ、および面数を指定します。`manager.cfg` の詳細については、マニュアル「Cosminexus リファレンス 定義編」を参照してください。

(c) Cosminexus の J2EE サーバの稼働ログ

J2EE サーバの稼働ログは、`usrconf.properties` (J2EE サーバ用ユーザプロパティファイル) でファイルのサイズ、および面数を指定します。`usrconf.properties` の詳細については、マニュアル「Cosminexus リファレンス 定義編」を参照してください。

(2) リクエストトレースの取得方法

リクエストトレースを取得する際には、HCSC サーバランタイム定義ファイルの次のプロパティで採取の有無を指定します。

また、出力先パスやファイルのサイズ、およびファイル面数を変更できます。

- `requesttrace` = リクエストトレースの採取の有無 (ON を指定します)

- requesttrace-filepath = リクエストトレースの出力先パス
- requesttrace-filesize = リクエストトレースサイズ
- requesttrace-filenum = リクエストトレース面数

リクエストトレースの詳細については、「7.4.2 リクエストトレース」を参照してください。

(3) 性能解析トレースの取得方法

性能解析トレースファイルの取得方法および出力先は、Cosminexus 全体で共通です。性能解析トレースの詳細については、「7.4.3 性能解析トレース」を参照してください。また、性能解析トレースファイルの取得方法および出力先については、マニュアル「Cosminexus システム運用ガイド」を参照してください。

(4) そのほかの定義情報の取得方法

障害を調査するために Cosminexus サービスプラットフォームに設定した定義が必要になる場合があります。Cosminexus サービスプラットフォームの定義ファイルを次の表に示します。定義の詳細については、「9. 定義ファイル」を参照してください。

表 7-4 Cosminexus サービスプラットフォームの定義ファイル

定義ファイル	説明
HCSC サーバ構成定義ファイル	HCSC サーバの環境作成で、HCSC サーバのセットアップコマンドに指定したファイル
HCSC サーバセットアップ定義ファイル	
HCSC サーバランタイム定義ファイル	HCSC サーバランタイムの定義コマンドに指定したファイル
HCSC-Manager 定義ファイル	<Cosminexus インストールディレクトリ>%CSC%config%manager%cscmng.properties に指定したファイル
HCSC-Manager コマンド共通定義ファイル	<Cosminexus インストールディレクトリ>%CSC%config%manager%csccmd.properties に指定したファイル
HCSC-Messaging コマンド共通定義ファイル	<Cosminexus インストールディレクトリ>%CSC%config%msg%cmdconf.bat に指定したファイル
サービス情報変更定義ファイル	サービス情報の管理コマンドの -getfile パラメタに指定したファイル
ユーザ定義受付ランタイム定義ファイル	HCSC コンポーネントの定義コマンドの -propfile パラメタに指定したファイル
SOAP Fault 動作定義ファイル	ランタイム定義ファイルの soapfault-targetnamespace-filepath プロパティに指定したファイル

(5) 保守情報の取得方法

システム管理者または保守員に連絡するときに必要な保守情報の取得方法を説明します。

7. 障害対策

保守用ログおよびトレースについては、「7.4.4 保守用ログおよびトレース」を参照してください。

(a) 例外ログ

例外ログは必ず出力されます。なお、出力されるファイルのサイズ、および面数は、変更できます。

• HCSC-Manager の例外ログ

HCSC-Manager 定義ファイルで次のパラメタを指定します。

- `cscmng.log.exception.filesize` = 例外ログファイルサイズ
- `cscmng.log.exception.filenum` = 例外ログファイル面数

HCSC-Manager 定義ファイルの詳細については、「9. 定義ファイル」の「HCSC-Manager 定義ファイル」を参照してください。

• Cosminexus の障害発生時の例外情報

J2EE サーバの例外ログは、`usrconf.properties` (J2EE サーバ用ユーザプロパティファイル) でファイルのサイズ、および面数を指定します。`usrconf.properties` の詳細については、マニュアル「Cosminexus リファレンス 定義編」を参照してください。

(b) メンテナンスログ

メンテナンスログは必ず出力されます。メンテナンスログは、出力されるファイルのサイズ、および面数を変更できます。

HCSC-Manager 定義ファイルの次のパラメタを指定します。

- `cscmng.log.maintenance.filesize` = メンテナンスログファイルサイズ
- `cscmng.log.maintenance.filenum` = メンテナンスログファイル面数

HCSC-Manager 定義ファイルの詳細については、「9. 定義ファイル」の「HCSC-Manager 定義ファイル」を参照してください。

(c) インストールログ

必ず出力されます。

(d) メソッドトレース

メソッドトレースは必ず出力されます。メソッドトレースは、出力される出力先やファイルのサイズ、面数、および出力レベルを決める必要があります。HCSC サーバランタイム定義ファイルの次のプロパティを指定します。

HCSC サーバランタイム定義ファイルの次のプロパティを指定します。

- `methodtrace-filepath` = メソッドトレースの出力先パス
- `methodtrace-filesize` = メソッドトレースファイルサイズ
- `methodtrace-filenum` = メソッドトレースファイル面数

- methodtrace-level = メソッドトレースの出力レベル

HCSC サーバランタイム定義ファイルの詳細については、「9. 定義ファイル」の「HCSC サーバランタイム定義ファイル」を参照してください。

(e) 保守情報

障害を調査するために必要となる保守情報を次の表に示します。

表 7-5 保守情報

保守情報	対象データの出力先
HCSC サーバリポジトリ情報	<Cosminexus インストールディレクトリ >¥CSC¥repository 配下のすべてのファイルおよびディレクトリ
HCSC-Manager の保守情報	<Cosminexus インストールディレクトリ >¥CSC¥config¥manager 配下のすべてのファイルおよびディレクトリ
HCSC サーバ保持情報	<Cosminexus インストールディレクトリ >¥CSC¥spool 配下のすべてのファイルおよびディレクトリ
	<Cosminexus インストールディレクトリ >¥CSC¥system 配下のすべてのファイルおよびディレクトリ
	HCSC サーバセットアップ定義ファイルの hcscserver-data-filepath プロパティで指定したフォルダ配下のすべてのファイルおよびディレクトリ (hcscserver-data-filepath プロパティを指定しなかった場合は、<Cosminexus インストールディレクトリ >¥CSC¥spool¥msg¥ 配下のすべてのファイルおよびディレクトリ)

注 データベースを使用しない構成で HCSC サーバをセットアップした場合に必要となります。

7.3.2 Cosminexus サービスプラットフォーム以外の前提製品が出力する障害情報の取得方法

主な前提製品の取得方法の概略を説明します。Cosminexus サービスプラットフォーム以外の前提製品が出力する障害情報の詳細については、各製品のマニュアルを参照してください。

Cosminexus サービスプラットフォーム以外の前提製品が出力する障害情報のうち、Cosminexus が出力するログのディレクトリのデフォルトは、<Cosminexus インストールディレクトリ >¥CC¥server¥public¥ejb¥<J2EE サーバ名 >¥logs です。以降、「Cosminexus ログ出力ディレクトリ」と表記します。なお、Cosminexus が出力するログのディレクトリは、usrconf.cfg (J2EE サーバ用オプション定義ファイル) の ejb.server.log.directory キーで変更できます。

(1) Cosminexus が出力する障害情報の取得方法

(a) ログ

障害が発生した際、Cosminexus サービスプラットフォームが出力するログやトレースで障害要因の特定が困難な場合は、次に示す Cosminexus が出力する障害情報が必要になります。

- J2EE サーバ、リダイレクタ、サーバ管理コマンドのログ
- 運用管理エージェント、運用監視エージェント、Management Server のログ
- Cosminexus DABroker Library のログ
- DB Connector のログ
- EJB クライアントアプリケーションのログ
- ユーザログ
- 保守用ログ

Cosminexus が出力する障害情報は、次のコマンドを使って一括して取得できます（手で取得できます）。なお、一括して取得した場合、Cosminexus サービスプラットフォームが出力するログやトレースと一部重複する情報もあります。

- snapshotlog コマンド
- mngsvrutil コマンド（サブコマンドに collect snapshot を指定）

コマンドの詳細については、マニュアル「Cosminexus リファレンス コマンド編」を参照してください。また、Cosminexus が出力する障害情報の取得方法の詳細については、マニュアル「Cosminexus システム運用ガイド」を参照してください。

(b) 運用開始前に準備が必要な Cosminexus の障害情報

コマンドを使って一括取得する場合、取得する障害情報の種類（Path）をあらかじめ定義しておく必要があります。メールなどで早急に送付する一次送付資料と、別途送付する二次送付資料のそれぞれを指定します。詳細は、マニュアル「Cosminexus システム運用ガイド」を参照してください。

(c) 障害調査のために必要な設定情報

障害を調査するために Cosminexus に設定した定義が必要になる場合があります。Cosminexus サービスプラットフォーム以外の定義ファイルを次の表に示します。定義の詳細については、マニュアル「Cosminexus リファレンス 定義編」を参照してください。

表 7-6 Cosminexus サービスプラットフォーム以外の定義ファイル

定義ファイル	説明
Cosminexus Component Container の設定ファイル	<Cosminexus インストールディレクトリ>¥CC¥server¥usrconf¥ejb¥<J2EE サーバ名>¥ディレクトリ配下のすべてのファイルおよびディレクトリ

定義ファイル	説明
Cosminexus Manager の設定ファイル	<Cosminexus インストールディレクトリ>¥manager¥config¥ディレクトリ配下のすべてのファイルおよびディレクトリ
dbcon-xadisplayname に設定した DB Connector の属性情報	「3.1.2(8) DB Connector のセットアップ」で設定した定義ファイル
dbcon-nodisplayname に設定した DB Connector の属性情報	

(2) Cosminexus RM が出力する障害情報の取得方法

次に示す受付やサービスアダプタを使用している場合は、Cosminexus RM が出力する障害情報を取得することで障害要因の特定ができます。

- 非同期 (MDB (WS-R)) の標準受付
- 非同期 (MDB (DB キュー)) の標準受付
- サービスアダプタ (MDB (WS-R))
- サービスアダプタ (MDB (DB キュー))

Cosminexus RM が出力する障害情報の取得方法の詳細については、マニュアル「Cosminexus Reliable Messaging」を参照してください。

(a) Cosminexus RM が出力するメッセージ

Cosminexus RM が出力するメッセージは、次のログに出力されます。ログには、開始停止メッセージログと Cosminexus 用メッセージログの 2 種類があります。Cosminexus RM が出力するメッセージを次の表に示します。

表 7-7 Cosminexus RM が出力するメッセージ

定義ファイル	説明	ファイル名
開始停止メッセージログ	開始や停止についての情報、およびユーザが指定したプロパティの値。 <Cosminexus ログ出力ディレクトリ>¥connectors¥	<Cosminexus RM の表示名><面番号>.log
Cosminexus 用メッセージログ	Cosminexus RM の開始、停止および動作中の情報。 <Cosminexus ログ出力ディレクトリ>	メッセージログは、Cosminexus サービスプラットフォームが出力するメッセージログと同一のファイルに出力されます。

(b) HCSC サーバと Cosminexus RM のトレースとの関係

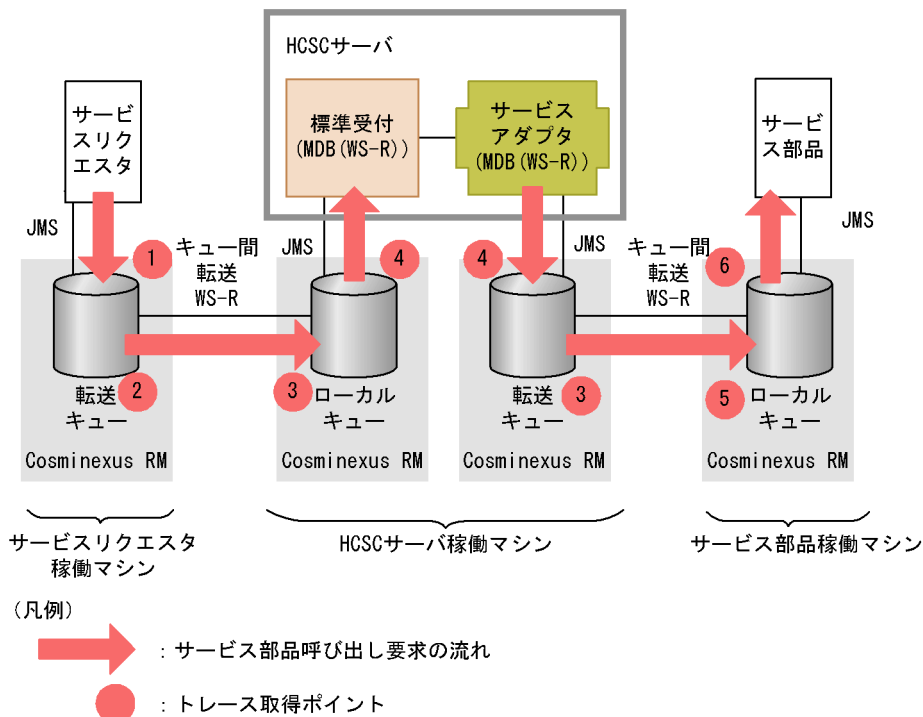
HCSC サーバと Cosminexus RM のトレースとの関係は、ローカルキューや転送キューを使用する場合と、共用キューを使用する場合とで異なります。

ローカルキューや転送キューを使用する場合

7. 障害対策

Cosminexus RM のトレースには、メソッドトレースと回線トレースの 2 種類があります。メソッドトレースは、エラー情報（例外発生原因）およびメソッドの入口情報、出口情報、デバッグ情報を出力します。回線トレースは、キュー間転送でやり取りされる電文の情報を出力します。ローカルキューや転送キューを使用する場合のトレース取得ポイントを次の図に示します。

図 7-2 ローカルキューや転送キューを使用する場合のトレース取得ポイント



トレース取得ポイントとファイル名の関係を次の表に示します。表の「図中の番号」は、図 7-2 中の番号と対応しています。

表 7-8 トレース取得ポイントとファイル名の関係

図中の番号	取得ポイント	トレース			
		種類	出力マシン	出力先	ファイル名
1	サービスリクエストから転送キューに要求を出すとき	メソッドトレース	サービスリクエスト稼働マシン側	<Cosminexus ログ出力ディレクトリ>¥RM¥maintenance	mtd_<サービスリクエスト側 Cosminexus RM のディスプレイ名>_<数字>.log

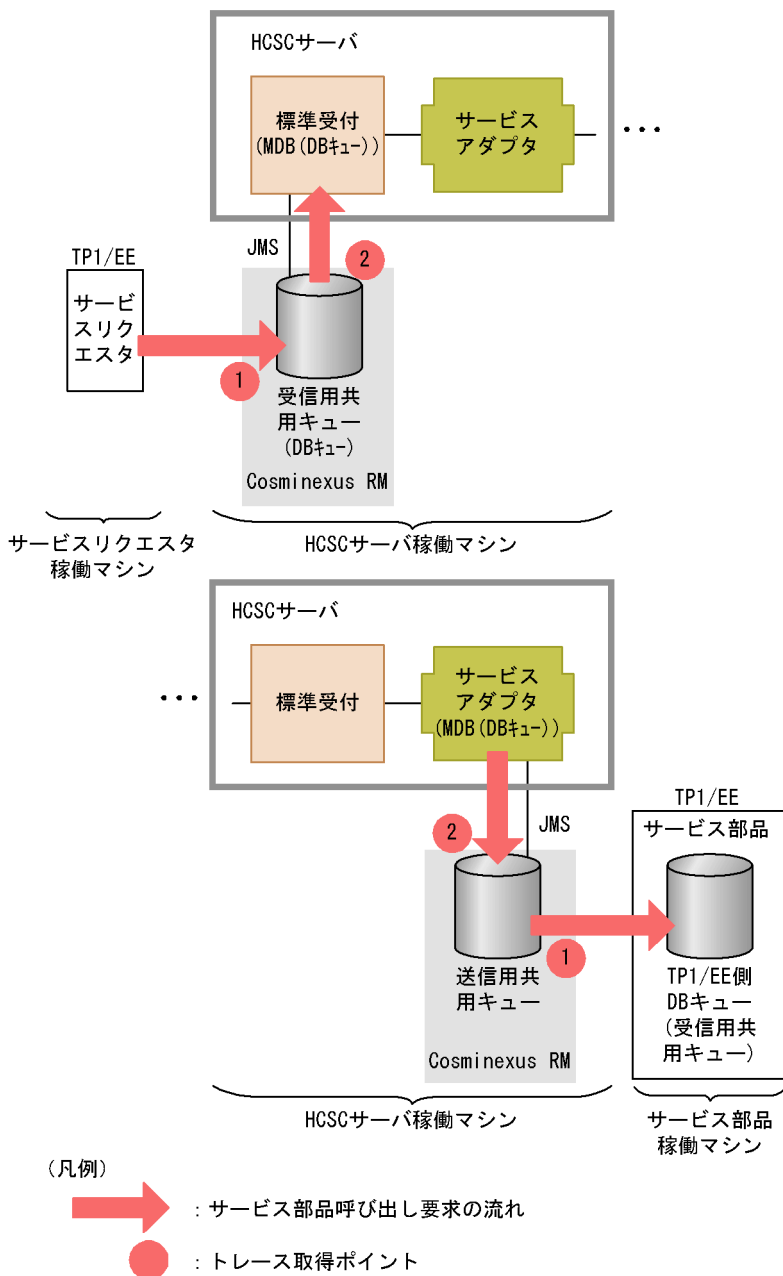
図中の 番号	取得ポイント	トレース			
		種類	出力マシン	出力先	ファイル名
2	サービスリクエスト側の転送キューからHCSCサーバ側のローカルキューに転送するとき	回線トレース		<Cosminexus ログ出力ディレクトリ >¥RM¥maintenance	lin_<サービスリクエスト側 Cosminexus RMのディスプレイ名>_<数字>.log
3	サービスリクエスト側の転送キューからHCSCサーバ側のローカルキューへの転送を受け取るとき、またはHCSCサーバ側の転送キューからサービス部品側のローカルキューに転送するとき	回線トレース	HCSCサーバ稼働マシン側	<Cosminexus ログ出力ディレクトリ >¥RM¥maintenance	lin_<HCSCサーバ側 Cosminexus RMのディスプレイ名>_<数字>.log
4	HCSCサーバがローカルキューからメッセージを取り出すとき、またはサービスアダプタから転送キューに要求を出すとき	メソッドトレース		<Cosminexus ログ出力ディレクトリ >¥RM¥maintenance	mtd_<HCSCサーバ側 Cosminexus RMのディスプレイ名>_<数字>.log
5	HCSCサーバ側の転送キューからサービス部品側のローカルキューへの転送を受け取るとき	回線トレース	サービス部品稼働マシン側	<Cosminexus ログ出力ディレクトリ >¥RM¥maintenance	lin_<サービス部品側 Cosminexus RMのディスプレイ名>_<数字>.log
6	サービス部品がローカルキューからメッセージを取り出すとき	メソッドトレース		<Cosminexus ログ出力ディレクトリ >¥RM¥maintenance	mtd_<サービス部品側 Cosminexus RMのディスプレイ名>_<数字>.log

共用キューを使用する場合

Cosminexus RMのトレースには、メソッドトレースと共用キューイベントトレースの2種類があります。メソッドトレースは、エラー情報（例外発生原因）およびメソッドの入口情報、出口情報、デバッグ情報を出力します。共用キューイベントトレースは、共用キューにメッセージが格納されたことを表すイベントの情報を出力します。共用キューを使用する場合のトレース取得ポイントを次の図に示します。

7. 障害対策

図 7-3 共用キューを使用する場合のトレース取得ポイント



トレース取得ポイントとファイル名の関係を次の表に示します。表の「図中の番号」は、図 7-3 中の番号と対応しています。

表 7-9 トレース取得ポイントとファイル名の関係

図中の 番号	取得ポイント	トレース			
		種類	出力マシン	出力先	ファイル名
1	サービスリクエスト側から HCSC サーバ側の受信用共用キューへメッセージが格納されたとき、または HCSC サーバのサービスアダプタから送信用共用キューへメッセージが格納されたとき	共用 キューイ ベントト レース	HCSC サー バ稼働マシ ン側	<Cosminexus ログ出力 ディレクトリ >¥RM¥maintenance	shq_<HCSC サーバ側 Cosminexus RM のディス ブレイ名 >_< 数字 >.log
2	HCSC サーバがローカルキューからメッセージを取り出すとき、またはサービスアダプタから転送キューに要求を出すとき	メソッド トレース		<Cosminexus ログ出力 ディレクトリ >¥RM¥maintenance	mtd_<HCSC サーバ側 Cosminexus RM のディス ブレイ名 >_< 数字 >.log

(c) 運用開始前に準備が必要な RM のトレース

メソッドトレースや回線トレースの出力レベルを変更して、出力する情報の種類を変更する場合は、HCSC サーバ起動前の Cosminexus RM の設定で変更する必要があります。Cosminexus RM のコンフィグレーションプロパティの RMMMethodTraceLevel および RMLineTraceLevel で変更します。

(d) 障害調査のために必要な設定情報

障害を調査するために Cosminexus RM のコンフィグレーションプロパティに対して設定している情報が必要になる場合があります。障害調査に必要な Cosminexus RM の定義ファイルを次の表に示します。定義ファイルの詳細については、マニュアル「Cosminexus Reliable Messaging」を参照してください。

表 7-10 障害調査に必要な Cosminexus RM の定義ファイル

定義ファイル	説明
Cosminexus RM コンフィグレーションプロパティの設定情報	「3.1.2(9) Cosminexus Reliable Messaging のセットアップ」で設定した定義ファイル

(3) Cosminexus SOAP が出力する障害情報の取得方法

同期 (Web サービス) の標準受付, またはサービスアダプタ (Web サービス) を使用している場合は, Cosminexus SOAP が出力する障害情報を取得することで障害要因を特定できます。また, サービスリクエストから HCSC サーバを呼び出すときの SOAP メッセージや, HCSC サーバのサービスアダプタからサービス部品を呼び出すときの SOAP メッセージの電文形式を確認することで, 送受信するユーザ電文に誤りがある場合の障害要因を特定できます。Cosminexus SOAP が出力する障害情報の取得方法の詳細については, マニュアル「Cosminexus SOAP アプリケーション開発ガイド」を参照してください。

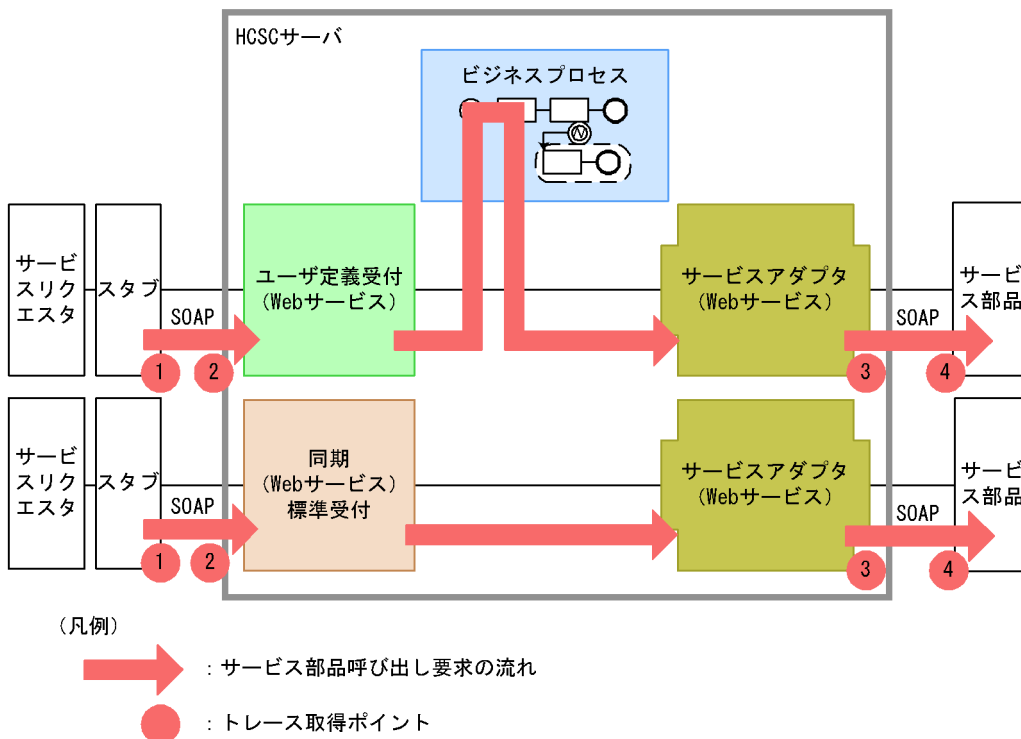
(a) HCSC サーバと SOAP のトレースやアプリケーションログの関係

HCSC サーバの構成で, 取得ポイントと SOAP のトレースやアプリケーションログのファイル名との関係を説明します。Web サービスの受付からサービスアダプタ (Web サービス) を呼び出す場合と, Web サービス以外の受付からサービスアダプタ (Web サービス) を呼び出す場合とで異なります。

同期 (Web サービス) の標準受付またはユーザ定義受付 (Web サービス) からサービスアダプタ (Web サービス) を呼び出す場合

同期 (Web サービス) の標準受付からサービスアダプタ (Web サービス) を呼び出す場合や, ユーザ定義受付 (Web サービス) からサービスアダプタ (Web サービス) を呼び出す場合は, 次のような名称で SOAP のトレースやアプリケーションログが出力されます。途中にビジネスプロセスを経由している場合も同様の名称で出力されます。SOAP トレースやアプリケーションログの取得ポイントを次の図に示します。

図 7-4 SOAP トレースやアプリケーションログの取得ポイント（Web サービスの受付からサービスアダプタ（Web サービス）を呼び出す場合）



トレース取得ポイントとファイル名の関係を次の表に示します。表の「図中の番号」は、図 7-4 中の番号と対応しています。

表 7-11 トレース取得ポイントとファイル名の関係（Web サービスの受付からサービスアダプタ（Web サービス）を呼び出す場合）

図中の番号	取得ポイント	ファイル名	
		トレース ¹	アプリケーションログ ¹
1 2	サービスリクエストから要求を出したとき（送信）、およびサービスリクエストへ応答が返ってきたとき（受信）の SOAP 通信のトレース	サービスリクエスト側のクライアント定義ファイルで設定した名称。 「< 上記名称 >-j2ee-<J2EEサーバ名 >-< 数字 >.log」	サービスリクエスト側のクライアント定義ファイルで設定した名称。 「< 上記名称 >-j2ee-<J2EEサーバ名 >-aplog-< 数字 >.log」

7. 障害対策

図中の番号	取得ポイント	ファイル名	
		トレース ¹	アプリケーションログ ¹
2	サービスリクエストから要求を HCSC サーバのリクエスト受付で受け取ったとき（受信）、および HCSC サーバから応答を返したとき（送信）の SOAP 通信のトレース	<ul style="list-style-type: none"> 同期（Web サービス）標準受付の場合 「< クラスタ名 >-j2ee-< J2EE サーバ名 >-< 数字 >.log」 ユーザ定義受付（Web サービス）の場合 「< 受付 ID>-j2ee-< J2EE サーバ名 >-< 数字 >.log」 	<ul style="list-style-type: none"> 同期（Web サービス）標準受付の場合 「< クラスタ名 >-j2ee-< J2EE サーバ名 >-aplog-< 数字 >.log」 ユーザ定義受付（Web サービス）の場合 「< 受付 ID>-j2ee-< J2EE サーバ名 >-aplog-< 数字 >.log」
3	HCSC サーバのサービスアダプタから要求を出したとき（送信）、およびサービスアダプタへ応答が返ってきたとき（受信）の SOAP 通信のトレース	図中の番号 2 と同じトレースファイルに出力します。	図中の番号 2 と同じアプリケーションログファイルに出力します。
4 ²	HCSC サーバのサービスアダプタからの要求をサービス部品側で受け取ったとき（受信）、およびサービス部品側から応答を返したとき（送信）の SOAP 通信のトレース	サービス部品側のサーバ定義ファイルで設定 ³ した名称。 「< 上記名称 >-j2ee-< J2EE サーバ名 >-< 数字 >.log」	サービス部品側のサーバ定義ファイルで設定 ³ した名称。 「< 上記名称 >-j2ee-< J2EE サーバ名 >-aplog-< 数字 >.log」

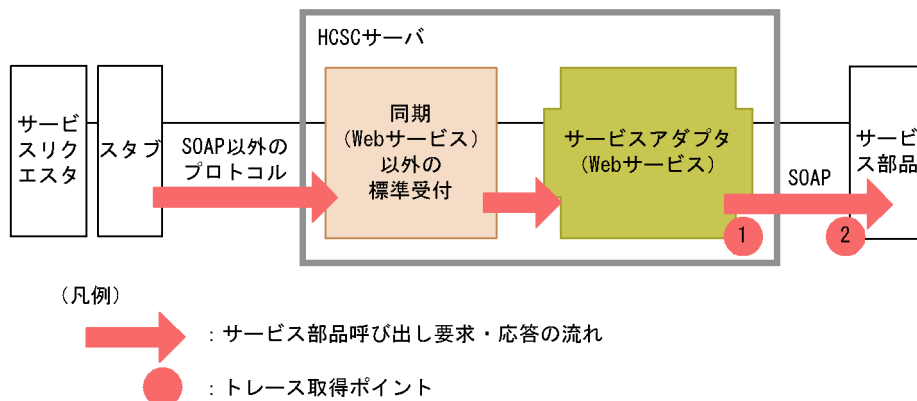
注 1 トレースおよびアプリケーションログの出力先は、各稼働マシン上の <Cosminexus ログ出力ディレクトリ>¥WS¥ です。

注 2 サービスリクエスト側稼働マシン、またはサービス部品稼働マシンで Cosminexus が提供している SOAP 通信基盤を使用している場合に取得できます。

注 3 サーバ定義ファイル（c4websv.cfg）でトレースファイルやアプリケーションログのプレフィクス（c4web.logger.<識別子>.log_file_prefix）に設定した名称です。

Web サービス以外の受付からサービスアダプタ（Web サービス）を呼び出す場合同期（Web サービス）の標準受付やユーザ定義受付（Web サービス）以外のリクエスト受付からサービスアダプタ（Web サービス）を呼び出す場合は、次のような名称で SOAP トレースやアプリケーションログが出力されます。SOAP トレースやアプリケーションログの取得ポイントを次の図に示します。

図 7-5 SOAP トレースやアプリケーションログの取得ポイント（Web サービス以外の受付からサービスアダプタ（Web サービス）を呼び出す場合）



トレース取得ポイントとファイル名の関係を次の表に示します。表の「図中の番号」は、図 7-5 中の番号と対応しています。

表 7-12 トレース取得ポイントとファイル名の関係（Web サービス以外の受付からサービスアダプタ（Web サービス）を呼び出す場合）

図中の番号	取得ポイント	ファイル名	
		トレース ¹	アプリケーションログ ¹
1	HCSC サーバのサービスアダプタから要求を出したとき（送信）、およびサービスアダプタへ応答が返ってきたとき（受信）の SOAP 通信のトレース	「< サービス ID>-j2ee-<J2EE サーバ名>-< 数字 >.log」 ³	「< サービス ID>-j2ee-<J2EE サーバ名>-aplog-< 数字 >.log」 ³
2 ²	HCSC サーバのサービスアダプタからの要求をサービス部品側で受け取ったとき（受信）、およびサービス部品側から応答を返したとき（送信）の SOAP 通信のトレース	サービス部品側のサーバ定義ファイルで設定 ⁴ した名称。 「< 上記名称 >-j2ee-<J2EE サーバ名>-< 数字 >.log」	サービス部品側のサーバ定義ファイルで設定 ⁴ した名称。 「< 上記名称 >-j2ee-<J2EE サーバ名>-aplog-< 数字 >.log」

注 1 トレースおよびアプリケーションログの出力先は、各稼働マシン上の <Cosminexus ログ出力ディレクトリ>¥WS¥ です。

注 2 サービス部品稼働マシンで Cosminexus が提供している SOAP 通信基盤を使用している場合に取得できます。

注 3 サービスアダプタ定義画面で設定したクライアント定義ファイルにトレースファイル、アプリケーションログのプレフィックスを指定していても、その値は有効になりません。サービス ID が一意なプレフィックスとして割り当てられます。

注 4 サーバ定義ファイル（c4websv.cfg）でトレースファイルやアプリケーションログのプレ

7. 障害対策

フィクス (c4web.logger.<識別子>.log_file_prefix) に設定した名称です。

(b) 運用開始前に準備が必要な SOAP のトレースやアプリケーションログ

SOAP メッセージのログを取得する場合、サービスリクエストから HCSC サーバを呼び出すときの SOAP メッセージや、HCSC サーバのサービスアダプタからサービス部品を呼び出すときの SOAP メッセージの電文形式を確認することで、送受信するユーザ電文に誤りがある場合の障害要因を特定できます。HCSC サーバが稼働するマシンの共通定義ファイル (c4webcom.cfg) に設定します。HCSC サーバが稼働するマシンの共通定義ファイルへの設定を次の表に示します。共通定義ファイルの作成については、マニュアル「Cosminexus SOAP アプリケーション開発ガイド」を参照してください。

表 7-13 HCSC サーバが稼働するマシンの共通定義ファイルへの設定

設定項目	キー名称	設定値 (デフォルト)	説明
アプリケーション ログ出力の重要度	c4web.logger.aplog_level	WARN	SOAP メッセージのログを採取する (SOAP メッセージの電文形式を確認する) 場合、INFO を指定してください。HCSC サーバ起動前にあらかじめ設定する必要があります。

(c) 障害調査のために必要な設定情報

障害を調査するために Cosminexus SOAP の設定情報が必要になる場合があります。Cosminexus SOAP の定義ファイルを次の表に示します。定義ファイルの詳細については、マニュアル「Cosminexus SOAP アプリケーション開発ガイド」を参照してください。

表 7-14 Cosminexus SOAP の定義ファイル

定義ファイル	説明	ファイルの格納場所	ファイル名
サーバ定義ファイル	HCSC サーバ稼働マシンのリクエスト受付での SOAP 通信の動作を制御します	HCSC サーバ稼働マシンの次のフォルダ Windows の場合 <Cosminexus インストールディレクトリ>\¥c4web¥conf その他の OS の場合 /opt/Cosminexus/c4web/conf	c4websv.cfg
共通定義ファイル	HCSC サーバ稼働マシンのリクエスト受付およびサービスアダプタに共通の SOAP 通信の動作を制御します	HCSC サーバ稼働マシンの次のフォルダ Windows の場合 <Cosminexus インストールディレクトリ>\¥c4web¥conf その他の OS の場合 /opt/Cosminexus/c4web/conf	c4webcom.cfg

(4) Hitachi Web Server が出力する障害情報の取得方法

Hitachi Web Server を使用して運用する場合、Hitachi Web Server が出力する障害情報が必要な場合があります。Hitachi Web Server が出力する障害情報の取得方法の詳細は、マニュアル「Hitachi Web Server」を参照してください。

(5) データベースが出力する障害情報の取得方法

障害の要因がデータベースにある場合、データベースの障害情報を確認することで、障害要因を特定できます。データベースの障害情報には、サーバ側とクライアント側の情報があります。HCSC サーバ稼働マシンのデータベース（クライアント側）とデータベース（サーバ側）の関係を次の図に示します。

図 7-6 HCSC サーバ稼働マシンのデータベース（クライアント側）とデータベース（サーバ側）の関係

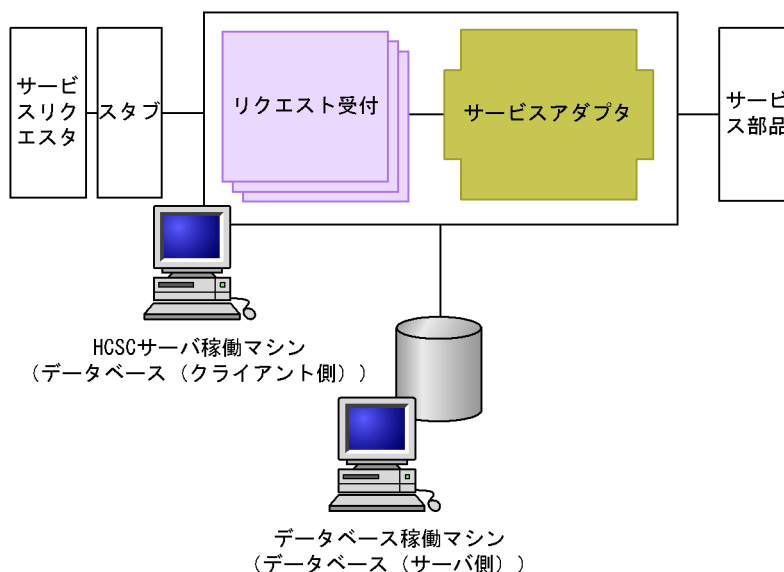


表 7-15 データベースのサーバ側とクライアント側の障害情報

使用しているデータベース	サーバ/クライアント	障害情報	備考
HiRDB を使用している場合	サーバ側の障害情報	HiRDB のログ %PDDIR%\¥\$POOL 配下のファイルすべて	-
	定義情報	HiRDB の定義情報 %PDCONFPATH% 配下のファイルすべて	-

7. 障害対策

使用しているデータベース	サーバ/クライアント	障害情報	備考
	クライアント側の障害情報	<ul style="list-style-type: none"> • HiRDB クライアントの SQL トレースファイルおよびエラーログファイル環境変数 PDCLTPATH で指定したディレクトリ（環境変数 PDCLTPATH を省略した場合は、次のディレクトリに出力されます。 %PDDIR%\\$pool¥hubspool¥ 外部サーバ名 ¥） • HiRDB クライアントの SQL トレース環境変数 PDSQLTRACE で指定したファイルサイズ（環境変数 PDCLTPATH を省略した場合は、SQL トレースは出力されません）。 • HiRDB Type4 JDBC ドライバの Exception トレースログ環境変数 PDJDBFILEDIR で指定したディレクトリ（環境変数 PDJDBFILEDIR を省略した場合は、次のディレクトリに出力されます。 <Cosminexus インストールディレクトリ>¥CC¥server¥usrconf¥ejb¥<J2EE サーバ名>¥<J2EE サーバ名>excX.trc 	<p>HiRDB Type4 JDBC ドライバの場合、OS の環境変数や HiRDB.ini に記載しても有効になりません。使用する DB Connector の属性定義 Environment Variables に次に示すようにセミコロンでつないで指定してください。</p> <p>(例)</p> <ul style="list-style-type: none"> • PQLTRACE=0;PDCLTPATH=c:¥tm p <p>Exception トレースログについては、DABroker を使用している場合は取得されません。</p>
Oracle を使用している場合	サーバ側の障害情報	Oracle のログ	-
	クライアント側の障害情報	Oracle Thin Driver のログ	-

(凡例)

- : 該当しません。

HiRDB を使用する場合は、マニュアル「スケーラブルデータベースサーバ HiRDB Version 8 システム運用ガイド」を参照してください。Oracle を使用する場合は、Oracle 社が発行するドキュメントを参照してください。

(6) JavaVM の情報の取得方法

(a) JavaVM 出力メッセージログ

JavaVM でクラッシュが発生した場合、JavaVM はデバッグ情報を標準出力とエラーリポートファイルに出力します。詳細については、マニュアル「Cosminexus システム運用ガイド」を参照してください。エラーリポートファイルの出力先および出力ファイル名は次のとおりです。

Windows の場合

```
<Cosminexusインストールディレクトリ>%CC%server%usrconf%ejb%<J2EEサーバ名>
>%hs_err_pid<サーバプロセスのプロセスID>.log
```

UNIX の場合

```
<Cosminexusインストールディレクトリ>/CC/server/usrconf/ejb/<J2EEサーバ名>/
hs_err_pid<サーバプロセスのプロセスID>.log
```

(b) JavaVM のスレッドダンプ

JavaVM の稼働情報やスレッドのスタック状態が出力されます。詳細については、マニュアル「Cosminexus システム運用ガイド」を参照してください。出力先は次のとおりです。

Windows の場合

```
<Cosminexusインストールディレクトリ>%CC%server%usrconf%ejb%<J2EEサーバ名>
>%javacore*.txt
```

UNIX の場合

```
<Cosminexusインストールディレクトリ>/CC/server/usrconf/ejb/<J2EEサーバ名>/
javacore*.txt
```

(c) JavaVM のガーベージコレクションログ

JavaVM のガーベージコレクションの活動状態が出力されます。詳細については、マニュアル「Cosminexus システム運用ガイド」を参照してください。

(d) メモリダンプ

システムで障害が発生したときに、システム管理者または保守員が障害を解析するために使用します。詳細については、マニュアル「Cosminexus システム運用ガイド」を参照してください。

7.3.3 トレースファイルの見積もり

トレースファイルは、次に示すような電文の件数、およびトレースを保管する日数を基

7. 障害対策

に、総ファイルサイズを算出します。

- 1日あたりに受信する電文（単位：件）
- トレース情報を保存する期間（単位：日）

算出した総ファイルサイズから、トレースファイルサイズやトレース面数を見積もります。トレースファイルサイズやトレース面数は HCSC サーバランタイム定義ファイルで設定します。HCSC サーバランタイム定義ファイルの詳細については、「9. 定義ファイル」の「HCSC サーバランタイム定義ファイル」を参照してください。なお、関連する前提製品の各マニュアルを参照して、見積もりをしてください。

7.3.4 ログおよびトレース取得時の注意事項

性能解析トレース以外のすべてのログ、トレースでは、次に示す禁止事項および注意事項があります。

(1) 注意事項

(a) ファイルの編集はできません。

(b) テキストビューワやエディタに、ロックするオプションがある場合は、使用できません。ファイルをロックした場合、トレースが出力されなくなる可能性があります。

(c) ファイルのアクセス権限は変更できません。

手動でアクセス権限を設定する必要がある場合には、適切なアクセス権限を設定してください。適切なアクセス権限が与えられていない場合、トレースを出力できなくなります。

(d) ファイルの更新時刻は変更できません。

ファイルの更新時刻を変更した場合、出力先ファイルが変わる可能性があります。

(e) トレース出力中に、ファイルを名称変更したり、削除したりしないでください。

管理ファイルの情報を基に出力先ファイルを決められますが、管理ファイルがない場合、および管理ファイルが破壊されている場合には、ファイルの更新時刻を基に判定されます。ファイルの名称変更、または削除は、すべてのトレース出力プロセスを停止してから実行してください。

(2) HCSC-Manager のログにおける注意事項

(a) メッセージ末尾の改行コードは、プラットフォームに関係なく「CR+LF」になりません。

(b) 例外ログ、およびメンテナンスログの場合は、さらに次に示す注意事項があります。

- ファイルサイズ / 面数 / モードオプションの変更を有効にするためには、ファイルの削除が必要な場合があります。ファイルを削除する場合には、トレース出力プロセスを停止してください。

- 出力したトレースファイルは、最初の EOF 文字（0x1A）が現れるまでが有効なデータです。EOF 文字以降のデータについては、一切保証されません。最初の EOF 文字以降にも EOF 文字が現れる可能性があるため、注意が必要です。
- トレースを出力してもファイルの更新時刻の更新は保証されません。ファイルの更新時刻を基に、トレースが出力されたかどうかを判定できません。トレース出力終了時にはファイルの更新時刻が更新されます。

7.4 障害情報の種類

運用時に障害が発生した場合は、障害対策に必要な情報が、ログとしてログファイルに出力されたり、トレースとしてトレースファイルに出力されたりします。ここでは HCSC サーバや HCSC-Manager などの Cosminexus サービスプラットフォームが出力するログやトレースの種類について説明します。

7.4.1 メッセージログ

HCSC サーバを操作するときのインフォメーション情報や障害時のエラー情報、および稼働中の HCSC サーバのインフォメーション情報や障害時のエラー情報をメッセージログとして取得します。これによって、障害の発生を検知したり、障害要因を解析したりできます。

Cosminexus サービスプラットフォームのメッセージログは、次に示すログに出力されます。

- HCSC-Manager のログ
- Cosminexus の統合メッセージログ
- Cosminexus の J2EE サーバの稼働ログ

(1) メッセージログで出力される内容

次に示すメッセージを出力します。メッセージログの内容の詳細については、「11. メッセージ」を参照してください。

(a) HCSC-Manager のログ

HCSC-Manager が出力するメッセージを取得します。

(b) Cosminexus の統合メッセージログ

運用管理エージェント、運用監視エージェント、および Management Server などが出力するメッセージ取得します。

(c) Cosminexus の J2EE サーバの稼働ログ

稼働している J2EE サーバが出力するメッセージ取得します。J2EE サーバ上で稼働している HCSC サーバが出力するメッセージもこのログに出力します。

(2) メッセージログの取得方法

メッセージログは必ず出力されます。詳細については、「7.3.1 Cosminexus サービスプラットフォームが出力するログやトレースの取得方法」を参照してください。

(3) メッセージログの出力先

メッセージログの出力先およびログファイル名を次の表に示します。

表 7-16 メッセージログの出力先およびファイル名

メッセージログファイルの出力先パス	ログファイル名
HCSC-Manager 定義ファイルの cscmng.log.dir パラメタで指定したパス ¹	message< 面数 >.log
Cosminexus の統合メッセージログの出力先に指定されたパス ²	mngmessage< 面数 >.log
Cosminexus の J2EE サーバの稼働ログの出力先に指定されたパス ³	cjmessage< 面数 >.log

注 1 HCSC-Manager 定義ファイルの詳細については、「9. 定義ファイル」の「HCSC-Manager 定義ファイル」を参照してください。

注 2 Cosminexus の統合メッセージログの出力先は、manager.cfg (Manager ログ設定ファイル) で指定します。デフォルト値は、次に示すとおりです。

```
<Cosminexusインストールディレクトリ>%manager%log
```

manager.cfg の詳細については、マニュアル「Cosminexus リファレンス 定義編」を参照してください。

注 3 Cosminexus の J2EE サーバの稼働ログの出力先は、usrconf.cfg (J2EE サーバ用オプション定義ファイル) の ejb.server.log.directory キーで指定します。デフォルトの出力先は、<Cosminexus のインストールディレクトリ>%CC%server%public%ejb%<J2EE サーバ名>%logs です。

usrconf.cfg の詳細については、マニュアル「Cosminexus リファレンス 定義編」を参照してください。

7.4.2 リクエストトレース

HCSC サーバのメッセージング基盤では、次の内容をリクエストトレースとして取得できます。

- リクエスト受付で受け付けたサービス部品呼び出し要求または応答の結果
- ビジネスプロセスを呼び出した時の要求または応答の結果
- サービスアダプタからサービス部品を呼び出したときの要求または応答の結果

リクエストトレースは、リクエストの障害要因の解析に使用します。

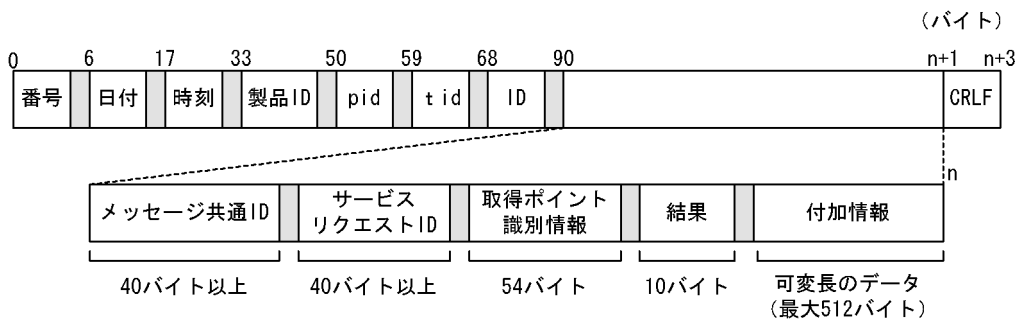
(1) リクエストトレースの出力形式と出力される内容

(a) 出力形式

リクエストトレースの出力形式を次の図に示します。

7. 障害対策

図 7-7 リクエストトレースの出力形式



(凡例) : 空白を示します。

(b) 出力される内容

リクエストトレースに出力される内容を次の表に示します。

表 7-17 リクエストトレースに出力される内容

項目	内容
番号	トレースレコードの出力通番が表示されます。
日付	トレースレコードの取得日付 (yyyy/mm/dd 形式) が出力されます。
時刻	トレースレコードの取得時刻 (hh:mm:ss.sss 形式) が、ローカル時刻でミリ秒単位に出力されます。
製品 ID	製品を特定するための識別子メッセージング基盤を示す「 CSCMSG 」が出力されます。
pid	プロセスを識別するための ID が出力されます。
tid	スレッドを識別するための ID が出力されます。
ID	表示されません。
メッセージ共通 ID	リクエスト識別情報 (親 ID) が出力されます。
サービスリクエスト ID	リクエスト識別情報 (子 ID) が出力されます。

項目	内容
取得ポイント識別情報	<p>取得位置</p> <p>トレースの取得ポイント情報（取得位置）が出力されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • RCP：標準受付 • URCP：ユーザ定義受付 • SVSND：サーバ間転送（送信） • SVRCV：サーバ間転送（受信） • BPRCP：ビジネスプロセスリクエスト受付 • BPREQ：ビジネスプロセス呼び出し • SVC：サービス部品呼び出し（アダプタ内） • SVCGP：サービスグループ呼び出し
	<p>プロトコル種別</p> <p>トレースの取得ポイント情報（プロトコル種別）が出力されます。ただし、取得位置が BPRCP、BPREQ、または SVCGP の場合は、表示されません。</p> <ul style="list-style-type: none"> • SOAP：SOAP • EJB：EJB（RMI-IIOP） • WSR：MDB（非同期メッセージング） • DBQ：MDB（非同期メッセージング） • CUSTM：カスタムアダプタ
	<p>詳細位置</p> <p>トレースの取得ポイント情報（詳細位置）が出力されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • IN：受付 • OUT：応答 • CAL：呼び出し（他コンポーネント） • RET：応答受信（他コンポーネント） • WRN：例外
	<p>名称</p> <p>トレースの取得ポイント情報（名称）が出力されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • サーバ名 • サービスアダプタのサービス ID • ビジネスプロセスのサービス ID • サービスグループ名
	<p>アダプタ種別</p> <p>トレースの取得ポイント情報（アダプタ種別）が出力されます。ただし、名称がサーバ名またはサービスグループ名の場合は表示されません。</p> <ul style="list-style-type: none"> • SVA：サービスアダプタ • BP：ビジネスプロセス
結果	<p>応答結果種別が出力されます。ただし、詳細位置が IN または CAL の場合は、表示されません。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 正常終了：NORMAL • 異常終了：ERROR
付加情報	<p>応答結果の付加情報が出力されます。</p>
CRLF	<p>レコード終端符号が出力されます。</p>

（2）リクエストトレースの取得ポイント

リクエストトレースの取得ポイントには、次に示す場合があります、それぞれで取得ポイントが異なります。

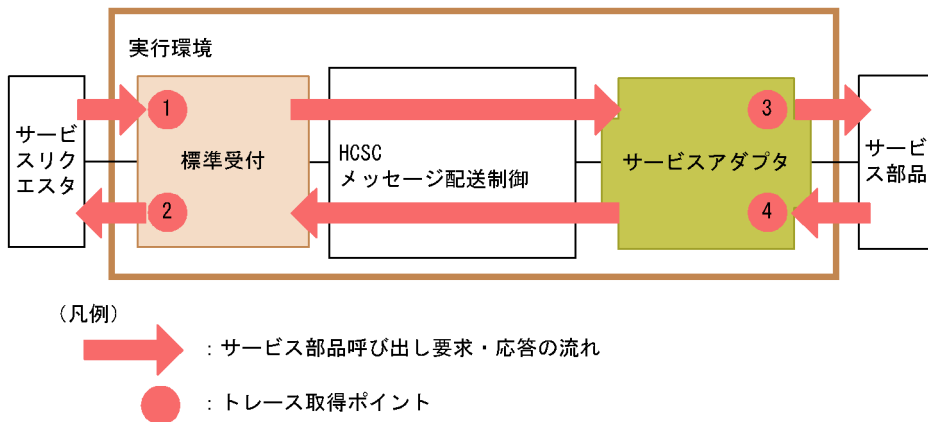
- 単体サービス実行時
- ビジネスプロセスサービス実行時

7. 障害対策

(a) 単体サービス実行時

単体サービス実行時のリクエストトレースのトレース取得ポイントを次の図に示します。

図 7-8 リクエストトレースの取得ポイント（単体サービス実行時）



トレース取得ポイントを次の表に示します。表の「図中の番号」は、図 7-8 中の番号と対応しています。

表 7-18 リクエストトレース取得ポイント（単体サービス実行時）

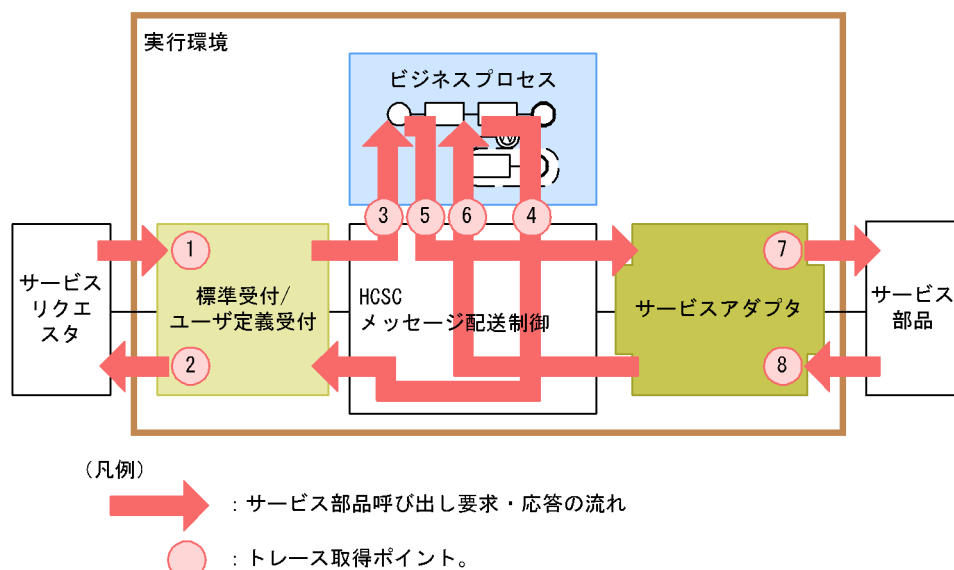
図中の番号	トレース取得ポイント
1	標準受付（Web サービス）の入口
2	標準受付（Web サービス）の出口
1	標準受付（SessionBean）の入口
2	標準受付（SessionBean）の出口
1	標準受付（MDB（WS-R））の入口
2	標準受付（MDB（WS-R））の出口
1	標準受付（MDB（DB キュー））の入口
2	標準受付（MDB（DB キュー））の出口
3	サービスアダプタ（Web サービス）のサービス部品呼び出し口
4	サービスアダプタ（Web サービス）のサービス部品応答受信口
3	サービスアダプタ（SessionBean）のサービス部品呼び出し口
4	サービスアダプタ（SessionBean）のサービス部品応答受信口
3	サービスアダプタ（MDB（WS-R））のサービス部品呼び出し口
4	サービスアダプタ（MDB（WS-R））のサービス部品応答受信口
3	サービスアダプタ（MDB（DB キュー））のサービス部品呼び出し口
4	サービスアダプタ（MDB（DB キュー））のサービス部品応答受信口

図中の番号	トレース取得ポイント
3	サービスアダプタ (CUSTOM) のサービス部品呼び出し口
4	サービスアダプタ (CUSTOM) のサービス部品応答受信口

(b) ビジネスプロセスサービス実行時

ビジネスプロセスサービス実行時のリクエストトレースのトレース取得ポイントを次の図に示します。

図 7-9 リクエストトレースの取得ポイント (ビジネスプロセスサービス実行時)



トレース取得ポイントを次の表に示します。表の「図中の番号」は、図 7-9 中の番号と対応しています。

表 7-19 リクエストトレース取得ポイント (ビジネスプロセスサービス実行時)

図中の番号	トレース取得ポイント
1	標準受付 (Web サービス) の入口
2	標準受付 (Web サービス) の出口
1	標準受付 (SessionBean) の入口
2	標準受付 (SessionBean) の出口
1	標準受付 (MDB (WS-R)) の入口
2	標準受付 (MDB (WS-R)) の出口
1	標準受付 (MDB (DB キュー)) の入口
2	標準受付 (MDB (DB キュー)) の出口

7. 障害対策

図中の番号	トレース取得ポイント
7	サービスアダプタ (Web サービス) のサービス部品呼び出し口
8	サービスアダプタ (Web サービス) のサービス部品応答受信口
7	サービスアダプタ (SessionBean) のサービス部品呼び出し口
8	サービスアダプタ (SessionBean) のサービス部品応答受信口
7	サービスアダプタ (MDB (WS-R)) のサービス部品呼び出し口
8	サービスアダプタ (MDB (WS-R)) のサービス部品応答受信口
7	サービスアダプタ (MDB (DB キュー)) のサービス部品呼び出し口
8	サービスアダプタ (MDB (DB キュー)) のサービス部品応答受信口
7	サービスアダプタ (CUSTOM) のサービス部品呼び出し口
8	サービスアダプタ (CUSTOM) のサービス部品応答受信口
3	ビジネスプロセスサービスの呼び出し口
4	ビジネスプロセスサービスの応答受信口
5	ビジネスプロセス受付の入口
6	ビジネスプロセス受付の出口

(3) リクエストトレースの取得方法

リクエストトレースを取得するには設定が必要です。詳細については「7.3.1 Cosminexus サービスプラットフォームが出力するログやトレースの取得方法」を参照してください。

(4) リクエストトレースの出力先

リクエストトレースの出力先およびトレースファイル名を次の表に示します。

表 7-20 リクエストトレースの出力先およびファイル名

トレースファイルの出力先パス	トレースファイル名
HCSC サーバランタイム定義ファイルの requesttrace-filepath プロパティで指定したパス	escmsgreq_<HCSC サーバ名>_<面数>.log

なお、指定したパスが存在しない場合、またはパスが誤っていた場合は、省略値の出力先にトレースが出力されます。

7.4.3 性能解析トレース

性能解析トレース (PRF トレース) は、Cosminexus システムの性能解析をするためのトレース情報で、それを CSV 形式で編集出力したテキストファイルが性能解析トレースファイルです。性能解析トレースは、J2EE アプリケーションを含めた、システム全体の性能ボトルネックを解析するための情報が出力されます。システムの性能ネックや性能

トラブルシュートに使用します。性能解析トレース機能については、マニュアル「Cosminexus 機能解説」を参照してください。

(1) 性能解析トレースファイルの出力形式と出力される内容

(a) 出力形式

性能解析トレースファイルに出力される形式は、Cosminexus の性能解析トレースと同様です。性能解析トレースファイルの詳細については、マニュアル「Cosminexus 機能解説」を参照してください。

(b) 出力される内容

HCSC サーバ（メッセージング基盤）の場合

性能解析トレースファイルに出力される内容を次の表に示します。

表 7-21 性能解析トレースファイルに出力される内容（メッセージング基盤）

項目	内容	
イベント ID	取得ポイントのイベント ID が出力されます。 詳細については、次の個所を参照してください。 <ul style="list-style-type: none"> 「表 7-24 性能解析トレース取得ポイント（単体サービス実行時）」 「表 7-25 性能解析トレース取得ポイント（ビジネスプロセスサービス実行時）」 「表 7-26 性能解析トレース取得ポイント（DB アクセス実行時）」 	
リターンコード	取得ポイント種別が出力されます。 <ul style="list-style-type: none"> 0：正常終了 1：異常終了 	
インターフェース名	クラス名が出力されます。	
オペレーション名	メソッド名が出力されます。	
オブ シ ョ ン 情 報	メッセージ共通 ID	リクエスト識別情報（親 ID）が出力されます。
	サービスリクエスト ID	リクエスト識別情報（子 ID）が出力されます。
	付加情報	出力元固有の付加情報が出力されます。

HCSC サーバ（ビジネスプロセス基盤）の場合

性能解析トレースファイルに出力される内容を次の表に示します。

表 7-22 性能解析トレースファイルに出力される内容（ビジネスプロセス基盤）

項目	内容
イベント ID	取得ポイントのイベント ID が出力されます。 詳細は、「表 7-28 性能解析トレース取得ポイント（ビジネスプロセス基盤）」を参照してください。

7. 障害対策

項目	内容
リターンコード	取得ポイント種別が出力されます。 <ul style="list-style-type: none"> • 0：正常終了 • 1：異常終了
インターフェース名	次の名称のどれかが出力されます。 <ul style="list-style-type: none"> • ビジネスプロセス定義名 • Java クラス名 • Data Transform • サービス名 詳細は、「表 7-28 性能解析トレース取得ポイント（ビジネスプロセス基盤）」を参照してください。
オペレーション名	出力されません。
オプション情報	オプション情報が出力されます。 詳細は、「表 7-28 性能解析トレース取得ポイント（ビジネスプロセス基盤）」を参照してください。

HCSC サーバ（DB アダプタ連携基盤）の場合

性能解析トレースファイルに出力される内容を次の表に示します。

表 7-23 性能解析トレースファイルに出力される内容（DB アダプタ連携基盤）

項目	内容	
イベント ID	取得ポイントのイベント ID が出力されます。 詳細については、次の個所を参照してください。 <ul style="list-style-type: none"> • 「表 7-29 性能解析トレース取得ポイント（DB アダプタ起動時）」 • 「表 7-30 性能解析トレース取得ポイント（DB アダプタサービス実行時）」 	
リターンコード	取得ポイント種別が出力されます。 <ul style="list-style-type: none"> • 0：正常終了 • 1：異常終了 	
インターフェース名	クラス名が出力されます。 パッケージ名は表示されません。	
オペレーション名	メソッド名が出力されます。	
オプション情報	メッセージ共通 ID	リクエスト識別情報（親 ID）が出力されます。 情報を設定していない場合は null になります。
	サービスリクエスト ID	リクエスト識別情報（子 ID）が出力されます。 情報を設定していない場合は null になります。
	付加情報	個別情報が出力されます。

（2）性能解析トレースの取得ポイント

（a）HCSC サーバ（メッセージング基盤）の場合

性能解析トレースファイルのトレース取得ポイントは、次に示す場合があり、それぞれで取得ポイントが異なります。

- 単体サービス実行時
- ビジネスプロセスサービス実行時
- DB アクセス実行時

単体サービス実行時

単体サービス実行時性能解析トレースのトレース取得ポイントを次の図に示します。

図 7-10 性能解析トレースの取得ポイント（単体サービス実行時）



(凡例)



: サービス部品呼び出し要求・応答の流れ



: トレース取得ポイントを示します。性能解析トレース取得レベルは「標準」です。

イベント ID, トレース取得ポイント, および性能解析トレース取得レベルを次の表に示します。表の「図中の番号」は, 図 7-10 中の番号と対応しています。

表 7-24 性能解析トレース取得ポイント（単体サービス実行時）

イベント ID	図中の番号	トレース取得ポイント	レベル
0x9800	1	標準受付 (Web サービス) の入口	A
0x9801	2	標準受付 (Web サービス) の出口	A
0x9802	1	標準受付 (SessionBean) の入口	A
0x9803	2	標準受付 (SessionBean) の出口	A
0x9804	1	標準受付 (MDB (WS-R)) の入口	A
0x9805	2	標準受付 (MDB (WS-R)) の出口	A
0x9806	1	標準受付 (MDB (DB キュー)) の入口	A
0x9807	2	標準受付 (MDB (DB キュー)) の出口	A
0x9810	3	サービスアダプタ (Web サービス) のサービス部品呼び出し口	A
0x9811	4	サービスアダプタ (Web サービス) のサービス部品応答受信口	A
0x9812	3	サービスアダプタ (SessionBean) のサービス部品呼び出し口	A

7. 障害対策

イベント ID	図中の番号	トレース取得ポイント	レベル
0x9813	4	サービスアダプタ (SessionBean) のサービス部品応答受信口	A
0x9814	3	サービスアダプタ (MDB (WS-R)) のサービス部品呼び出し口	A
0x9815	4	サービスアダプタ (MDB (WS-R)) のサービス部品応答受信口	A
0x9816	3	サービスアダプタ (MDB (DB キュー)) のサービス部品呼び出し口	A
0x9817	4	サービスアダプタ (MDB (DB キュー)) のサービス部品応答受信口	A
0x9818	3	サービスアダプタ (CUSTOM) のサービス部品呼び出し口	A
0x9819	4	サービスアダプタ (CUSTOM) のサービス部品応答受信口	A

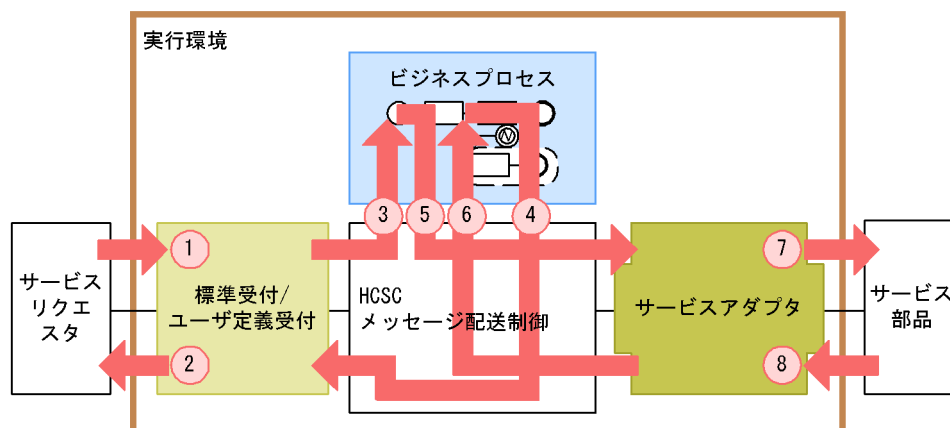
(凡例)

A : 標準

ビジネスプロセスサービス実行時

ビジネスプロセスサービス実行時の性能解析トレースのトレース取得ポイントを次の図に示します。

図 7-11 性能解析トレースの取得ポイント (ビジネスプロセスサービス実行時)



(凡例)

➡ : サービス部品呼び出し要求・応答の流れ

● : トレース取得ポイントを示します。性能解析トレース取得レベルは「標準」です。

イベント ID, トレース取得ポイント, および性能解析トレース取得レベルを次の表に示します。表の「図中の番号」は, 図 7-11 中の番号と対応しています。

表 7-25 性能解析トレース取得ポイント（ビジネスプロセスサービス実行時）

イベント ID	図中の番号	トレース取得ポイント	レベル
0x9800	1	標準受付（Web サービス）の入口	A
0x9801	2	標準受付（Web サービス）の出口	A
0x9802	1	標準受付（SessionBean）の入口	A
0x9803	2	標準受付（SessionBean）の出口	A
0x9804	1	標準受付（MDB（WS-R））の入口	A
0x9805	2	標準受付（MDB（WS-R））の出口	A
0x9806	1	標準受付（MDB（DB キュー））の入口	A
0x9807	2	標準受付（MDB（DB キュー））の出口	A
0x9808	1	ユーザ定義受付の入口	A
0x9809	2	ユーザ定義受付の出口	A
0x9810	7	サービスアダプタ（Web サービス）のサービス部品呼び出し口	A
0x9811	8	サービスアダプタ（Web サービス）のサービス部品応答受信口	A
0x9812	7	サービスアダプタ（SessionBean）のサービス部品呼び出し口	A
0x9813	8	サービスアダプタ（SessionBean）のサービス部品応答受信口	A
0x9814	7	サービスアダプタ（MDB（WS-R））のサービス部品呼び出し口	A
0x9815	8	サービスアダプタ（MDB（WS-R））のサービス部品応答受信口	A
0x9816	7	サービスアダプタ（MDB（DB キュー））のサービス部品呼び出し口	A
0x9817	8	サービスアダプタ（MDB（DB キュー））のサービス部品応答受信口	A
0x9818	7	サービスアダプタ（CUSTOM）のサービス部品呼び出し口	A
0x9819	8	サービスアダプタ（CUSTOM）のサービス部品応答受信口	A
0x9840	3	ビジネスプロセスサービスの呼び出し口	A
0x9841	4	ビジネスプロセスサービスの応答受信口	A
0x9842	5	ビジネスプロセス受付の入口	A
0x9843	6	ビジネスプロセス受付の出口	A

（凡例）

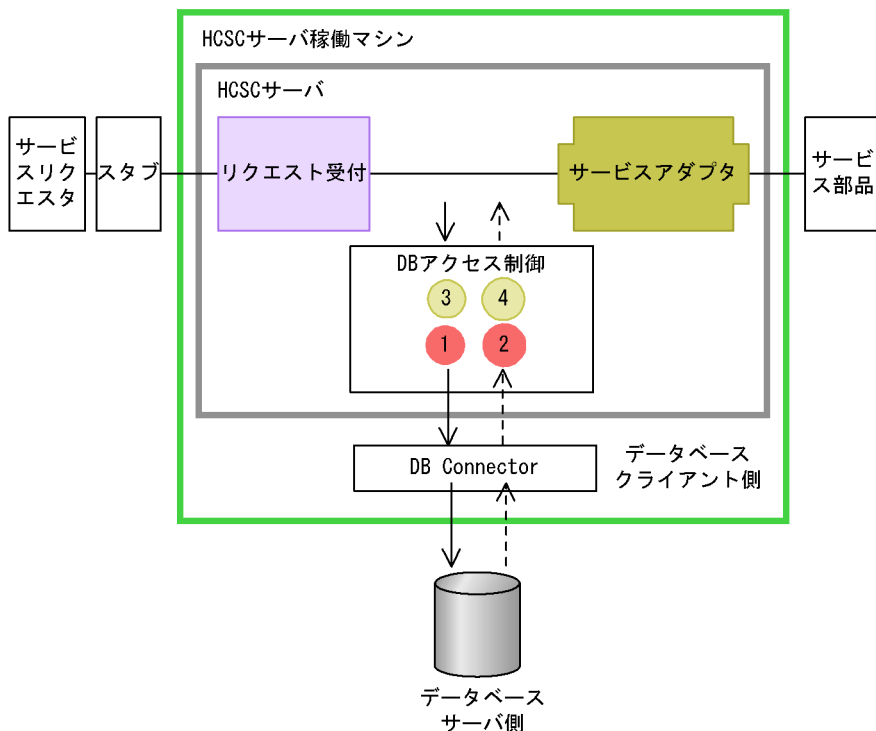
A：標準

7. 障害対策

DB アクセス実行時

HCSC サーバが、コマンドや電文の実行履歴を採取時にデータベースにアクセスするときの性能解析トレースの取得ポイントを次の図に示します。

図 7-12 性能解析トレースの取得ポイント (DB アクセス実行時)



(凡例)

- (Red circle) : トレース取得ポイントを示します。性能解析トレース取得レベルは「標準」です。
- (Yellow circle) : トレース取得ポイントを示します。性能解析トレース取得レベルは「詳細」です。

イベント ID, トレース取得ポイント, および性能解析トレース取得レベルを次の表に示します。表の「図中の番号」は、図 7-12 中の番号と対応しています。

表 7-26 性能解析トレース取得ポイント (DB アクセス実行時)

イベント ID	図中の番号	トレース取得ポイント	レベル
0x9850	1	DB コネクタ呼び出し口	A
0x9851	2	DB コネクタ応答受信口	A
0x9852	3	DB コネクタ実行履歴呼び出し口	B
0x9853	4	DB コネクタ実行履歴応答受信口	B

(凡例)

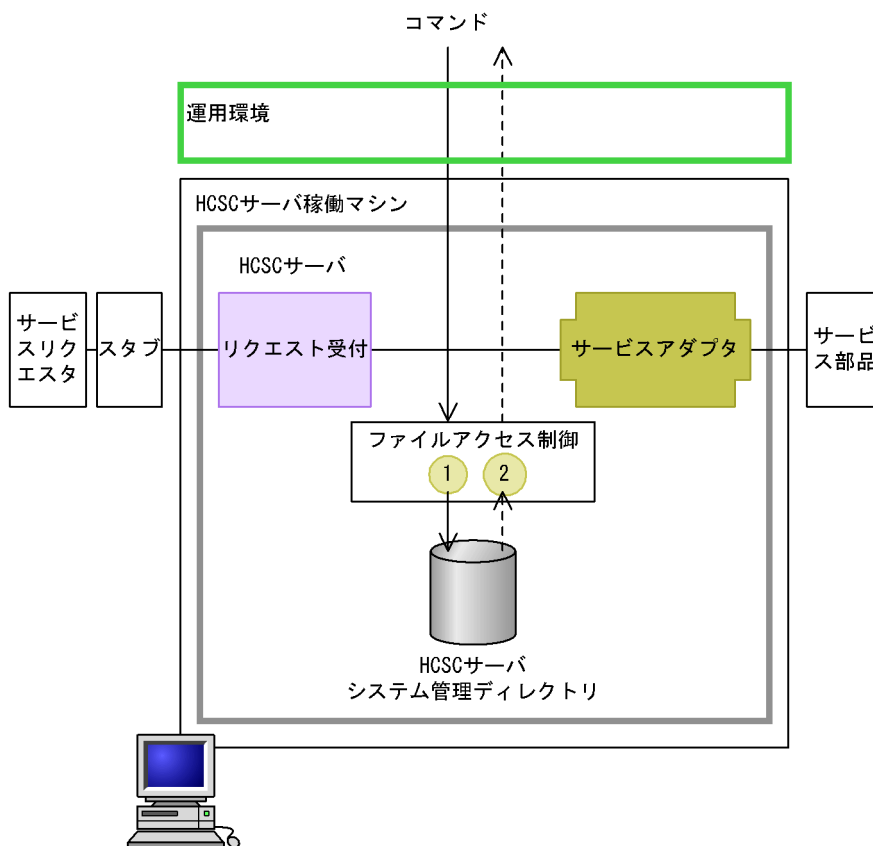
A : 標準

B: 詳細

ファイルアクセス実行時

データベースを使用しない構成で HCSC サーバをセットアップした場合、コマンド処理時に、データベースの代わりにファイルにアクセスします。このファイルアクセスするときの性能解析トレースを取得します。ファイルアクセスでの取得ポイントを次の図に示します。

図 7-13 性能解析トレースの取得ポイント（ファイルアクセス実行時）



(凡例)

→ : コマンドの入力

---> : 処理結果

● : トレース取得ポイントを示します。性能解析トレース取得レベルは「詳細」です。

イベント ID、トレース取得ポイント、および性能解析トレース取得レベルを次の表に示します。表の「図中の番号」は、図 7-13 中の番号と対応しています。

7. 障害対策

表 7-27 性能解析トレース取得ポイント（ファイルアクセス実行時）

イベント ID	図中の番号	トレース取得ポイント	レベル
0x9854	1	ファイルアクセス呼び出し口（ファイルオープン前）	B
0x9855	2	ファイルアクセス応答受信口（ファイルクローズ後）	B

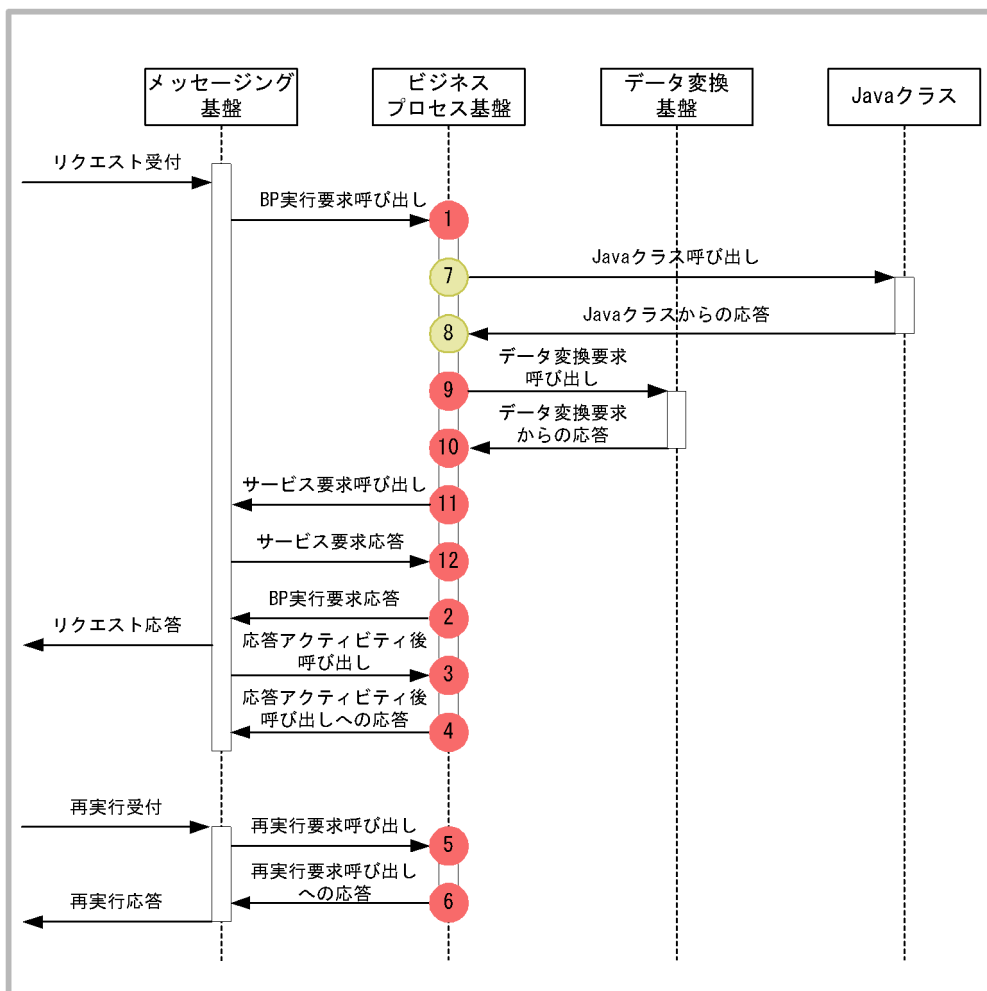
（凡例）

B：詳細

（b）HCSC サーバ（ビジネスプロセス基盤）の場合

性能解析のトレース取得ポイントを次の図に示します。

図 7-14 性能解析トレースのトレース取得ポイント（ビジネスプロセス基盤）



- (凡例) ● : トレース取得ポイントを示します。PRFトレース取得レベルは「標準」です。
 ● : トレース取得ポイントを示します。PRFトレース取得レベルは「詳細」です。

イベント ID, トレース取得ポイント, および性能解析トレース取得レベルを次の表に示します。表の「図中の番号」は, 図 7-14 中の番号と対応しています。

表 7-28 性能解析トレース取得ポイント（ビジネスプロセス基盤）

イベント ID	図中の番号	トレース取得ポイント	レベル	インターフェース名	オプション情報
0x9900	1	メッセージング基盤からのビジネスプロセス実行要求呼び出し	A	ビジネスプロセス定義名	・メッセージ共通 ID

7. 障害対策

イベント ID	図中の番号	トレース取得ポイント	レベル	インターフェース名	オプション情報
0x9901	2	メッセージング基盤へのビジネスプロセス実行要求応答	A	ビジネスプロセス定義名	<ul style="list-style-type: none"> メッセージ共通 ID フォルト名 (異常時)
0x9902	3	メッセージング基盤からの応答アクティビティ後呼び出し	A	ビジネスプロセス定義名	<ul style="list-style-type: none"> メッセージ共通 ID
0x9903	4	メッセージング基盤からの応答アクティビティ後呼び出しへの応答	A	ビジネスプロセス定義名	<ul style="list-style-type: none"> メッセージ共通 ID フォルト名 (異常時)
0x9904	5	メッセージング基盤からの再実行要求呼び出し	A	ビジネスプロセス定義名	<ul style="list-style-type: none"> メッセージ共通 ID
0x9905	6	メッセージング基盤からの再実行要求呼び出しへの応答	A	ビジネスプロセス定義名	<ul style="list-style-type: none"> メッセージ共通 ID フォルト名 (異常時)
0x9906	7	ユーザ作成の Java クラス呼び出し	B	Java クラス名	なし
0x9907	8	ユーザ作成の Java クラスからの応答	B	Java クラス名	<ul style="list-style-type: none"> フォルト名 (異常時)
0x9908	9	データ変換要求呼び出し	A	"Data Transform"	なし
0x9909	10	データ変換要求からの応答	A	"Data Transform"	<ul style="list-style-type: none"> フォルト名 (異常時)
0x9910	11	メッセージング基盤へのサービス部品要求呼び出し	A	サービス名	<ul style="list-style-type: none"> メッセージ共通 ID 親スレッドのハッシュコード (並列実行時)
0x9911	12	メッセージング基盤からのサービス部品要求応答	A	サービス名	<ul style="list-style-type: none"> メッセージ共通 ID 親スレッドのハッシュコード (並列実行時) フォルト名 (異常時)

(凡例)

A : 標準

B : 詳細

注 表に含まれないイベント ID (0x9A00 ~ 0x9AFF) は、データ変換基盤から発行されたものです。

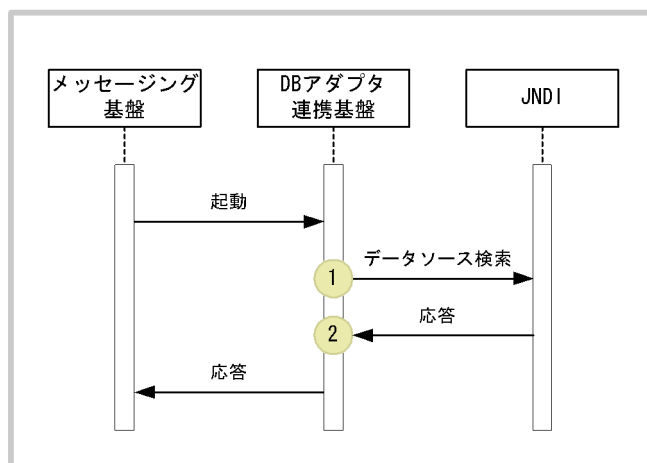
(c) HCSC サーバ (DB アダプタ連携基盤) の場合

起動時とサービス部品実行時で、性能解析トレースのトレース取得ポイントが異なります。

起動時

起動時の性能解析トレースのトレース取得ポイントを次の図に示します。

図 7-15 性能解析トレースのトレース取得ポイント (DB アダプタ起動時)



(凡例) ● : トレース取得ポイントを示します。PRFトレース取得レベルは「詳細」です。

イベント ID, トレース取得ポイント, および性能解析トレース取得レベルを次の表に示します。表の「図中の番号」は、図 7-15 中の番号と対応しています。

表 7-29 性能解析トレース取得ポイント (DB アダプタ起動時)

イベント ID	図中の番号	トレース取得ポイント	レベル
0x9B60	1	データソース検索直前	B
0x9B61	2	データソース検索直後	B
0x9B62		B	

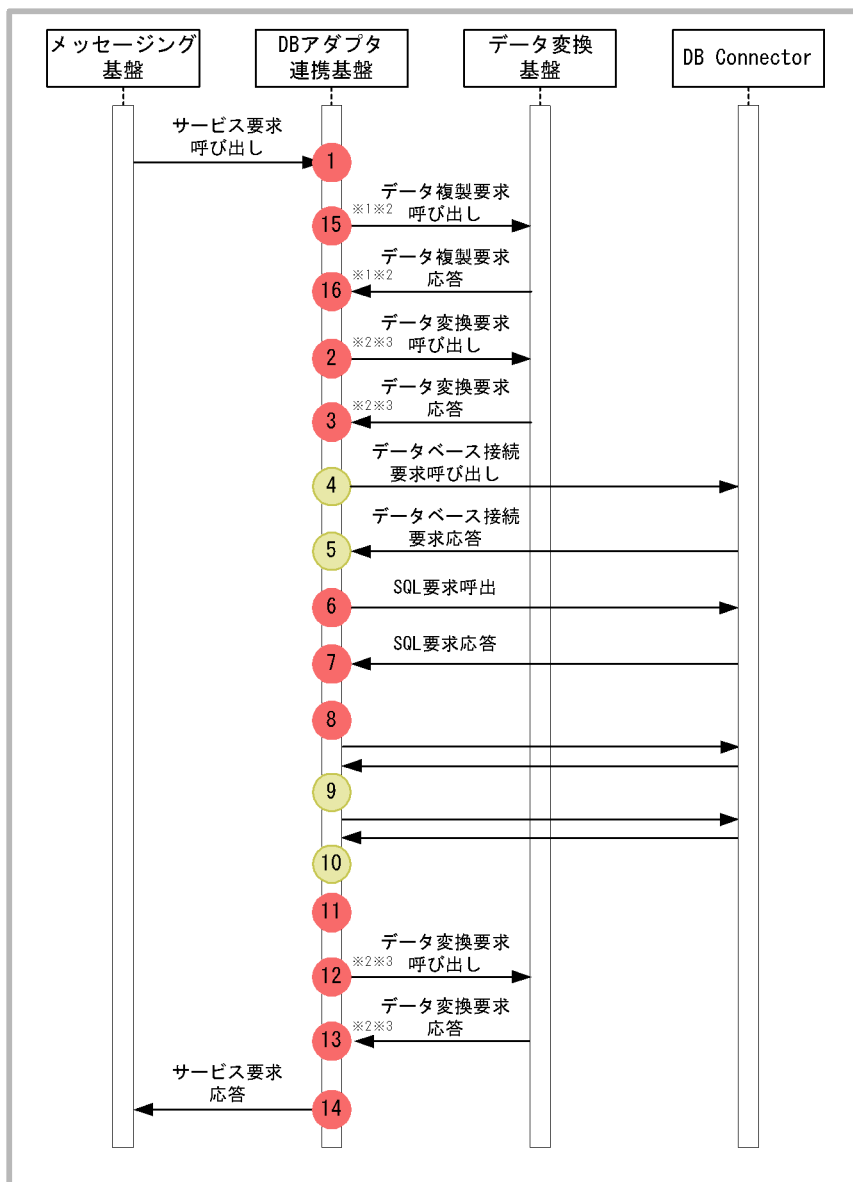
(凡例)

B: 詳細

サービス部品実行時

サービス部品実行時の性能解析トレースのトレース取得ポイントを次の図に示します。

図 7-16 性能解析トレースのトレース取得ポイント (DB アダプタサービス実行時)



- (凡例)
- (Red) : トレース取得ポイントを示します。PRFトレース取得レベルは「標準」です。
 - (Yellow) : トレース取得ポイントを示します。PRFトレース取得レベルは「詳細」です。

注※1 データ変換定義がない場合のトレース取得ポイントを示します。
 注※2 標準電文の電文種別がバイナリ電文のデータ変換定義がある場合のトレース取得ポイントを示します。
 注※3 標準電文の電文種別がXML電文のデータ変換定義がある場合のトレース取得ポイントを示します。

イベント ID, トレース取得ポイント, および性能解析トレース取得レベルを次の表

に示します。表の「図中の番号」は、図 7-16 中の番号と対応しています。

表 7-30 性能解析トレース取得ポイント (DB アダプタサービス実行時)

イベント ID	図中の番号	トレース取得ポイント	レベル
0x9B00	1	メッセージング基盤からのサービス部品要求呼び出し直後	A
0x9B01	14	メッセージング基盤からのサービス部品要求応答直前	A
0x9B02			A
0x9B20	2 ^{1 2} , 12 _{1 2}	データ変換要求呼び出し直前	A
0x9B21	3 ^{1 2} , 13 _{1 2}	データ変換要求応答直後	A
0x9B22			A
0x9B23	15 ^{2 3}	データ複製要求呼び出し直前	A
0x9B24	16 ^{2 3}	データ複製要求応答直後	A
0x9B25			A
0x9B63	4	データベース接続要求呼び出し直前	B
0x9B64	5	データベース接続要求応答直後	B
0x9B65			B
0x9B66	6	SQL 要求呼び出し直前	A
0x9B67	7	SQL 要求応答直後	A
0x9B68			A
0x9B69	6	SQL 要求呼び出し直前	A
0x9B6A	7	SQL 要求応答直後	A
0x9B6B			A
0x9B6C	6	SQL 要求呼び出し直前	A
0x9B6D	7	SQL 要求応答直後	A
0x9B6E			A
0x9B40	8	SQL (SELECT) 実行結果格納処理直前	A
0x9B41	11	SQL (SELECT) 実行結果格納処理直後	A
0x9B42			A
0x9B43	9	SQL (SELECT) 実行結果取得処理直前	B
0x9B44	10	SQL (SELECT) 実行結果取得処理直後	B
0x9B45			B

(凡例)

A: 標準

7. 障害対策

B：詳細

注 表に含まれないイベント ID (0x9A00 ~ 0x9AFF) は、データ変換基盤から発行されたものです。

注 1 標準電文の種別が XML 電文のデータ変換定義がある場合のトレース取得ポイントを示します。

注 2 標準電文の種別がバイナリ電文のデータ変換定義がある場合のトレース取得ポイントを示します。

注 3 データ変換定義がない場合のトレース取得ポイントを示します。

(3) 性能解析トレースの取得方法と出力先

性能解析トレースを取得するには設定が必要です。詳細については、「7.3.1 Cosminexus サービスプラットフォームが出力するログやトレースの取得方法」およびマニュアル「Cosminexus システム運用ガイド」を参照してください。

7.4.4 保守用ログおよびトレース

障害調査に必要な情報として、保守用のログおよびトレースを採取します。

(1) 例外ログ

HCSC サーバを操作するときの障害時の内部エラー情報、および HCSC サーバの障害時の内部エラー情報を例外ログとして取得します。例外ログは、保守員が障害解析用に使用します。Cosminexus サービスプラットフォームの例外ログは、HCSC-Manager のログ、および Cosminexus の J2EE サーバの障害発生時の例外情報に出力されます。

(a) 例外ログで出力される内容

- HCSC-Manager の例外ログ
HCSC-Manager 内部の例外情報を取得します。
- Cosminexus の障害発生時の例外情報
HCSC サーバで障害が発生したときの内部の例外情報を取得します。

(b) 例外ログの出力先

例外ログの出力先およびログファイル名を次の表に示します。

表 7-31 例外ログの出力先およびファイル名

例外ログファイルの出力先パス	ログファイル名
HCSC-Manager 定義ファイルの cscmng.log.dir パラメータで指定したパス	exception< 面数 >.log
Cosminexus の J2EE サーバの例外ログ (障害発生時の例外情報) の出力先に指定されたパス	cjexception< 面数 >.log

HCSC-Manager 定義ファイルの詳細については、「9. 定義ファイル」の

「HCSC-Manager 定義ファイル」を参照してください。

Cosminexus の J2EE サーバの例外ログ（障害発生時の例外情報）の出力先は，usrconf.cfg（J2EE サーバ用オプション定義ファイル）で指定します。デフォルトの出力先は，<Cosminexus のインストールディレクトリ>¥CC¥server¥public¥ejb¥<J2EE サーバ名>¥logs です。

usrconf.cfg の詳細については，マニュアル「Cosminexus リファレンス 定義編」を参照してください

（2）メンテナンスログ

HCSC-Manager 内部の保守情報をメンテナンスログとして取得できます。HCSC-Manager と外部要素（Cosminexus Manager，HCSC 管理 MBean，リポジトリ）との通信トレース，電文ログとしても使用されます。保守員が障害解析用に使用します。

（a）メンテナンスログで出力される内容

HCSC-Manager 内部の保守情報を取得します。

（b）メンテナンスログの出力先

メンテナンスログの出力先およびログファイル名を次の表に示します。

表 7-32 メンテナンスログの出力先およびファイル名

メンテナンスログファイルの出力先パス	ログファイル名
HCSC-Manager 定義ファイルの cscmng.log.dir パラメタで指定したパス	maintenance< 面数 >.log

（3）インストールログ

Windows の場合，HCSC-Manager 内部のインストール情報をインストールログとして取得できます。保守員が障害解析用に使用します。

（a）インストールログで出力される内容

HCSC-Manager 内部のインストール情報を取得します。

（b）インストールログの出力先

次に示すディレクトリのファイルに出力されます。

<Cosminexus インストールディレクトリ>¥CSC¥log¥manager¥install.log

（4）メソッドトレース

HCSC サーバで障害が発生し，原因の究明が困難な場合に，必要な情報をメソッドトレースとして取得できます。保守員が障害解析のために使用します。

7. 障害対策

(a) メソッドトレースで出力される内容

- HCSC サーバ (メッセージング基盤) の場合
HCSC サーバ (メッセージング基盤) 内部の保守情報を取得します。
- HCSC サーバ (ビジネスプロセス基盤) の場合
HCSC サーバ (ビジネスプロセス基盤) 内部の保守情報を取得します。
ビジネスプロセス基盤には、ビジネスプロセス実行時のトレースとプロセスインスタンス関連のコマンド実行時のトレースがあります。ここでは、ビジネスプロセス実行時のトレースについて説明します。
プロセスインスタンス関連のコマンド実行時のトレースは Cosminexus Manager で出力されるトレースと同様です。詳細については、マニュアル「Cosminexus システム運用ガイド」を参照してください。
- HCSC サーバ (DB アダプタ連携基盤) の場合
HCSC サーバ (DB アダプタ連携基盤) 内部の保守情報を取得します。

(b) メソッドトレースの出力先

メソッドトレースの出力先およびトレースファイル名を次の表に示します。メッセージング基盤、ビジネスプロセス基盤、および DB アダプタ連携基盤で共通の設定です。

表 7-33 メソッドトレースファイルの出力先およびファイル名

トレースファイルの出力先パス	トレースファイル名
HCSC サーバランタイム定義ファイルの methodtrace-filepath プロパティで指定した パス	cscmsgmtd_<HCSC サーバ名>_<面数>.log
	cscbpmt_<HCSC サーバ名>_<面数>.log
	cscdbamtd_<HCSC サーバ名>_<面数>.log

なお、指定したパスが存在しない場合、またはパスが誤っていた場合は、省略値の出力先にトレースが出力されません。

7.5 システムのセットアップまたはアンセットアップ時の障害対策

7.5.1 実行環境に必要なソフトウェアの設定での障害調査

セットアップなどの環境設定をするなどシステム操作をしているときに障害が発生した場合の調査方法を説明します。ログの詳細については、「7.3 障害情報の取得」を参照してください。

(1) データベースの操作中にエラーが発生した場合

HiRDB の場合、HiRDB のログ (pdlog(n)) に出力されているエラーメッセージを調査します。Oracle の場合は、Oracle 社が発行するドキュメントを参照してください。

(2) Cosminexus Manager の操作中にエラーが発生した場合

Cosminexus Management Server や Cosminexus Management Server-Administration Agent の起動に失敗するなどの障害が発生した場合、Cosminexus が出力する障害情報 (運用管理エージェント、運用監視エージェント、Management Server のログ) に出力されているエラーメッセージを調査します。

(3) Cosminexus Component Container (J2EE サーバ、または Cosminexus Component Container) の操作中にエラーが発生した場合

J2EE サーバの操作をしている場合は、Cosminexus が出力する障害情報 (J2EE サーバ、リダイレクタ、サーバ管理コマンドのログ) に出力されているエラーメッセージを調査します。

(4) Cosminexus RM の操作中にエラーが発生した場合

まず、メッセージログに出力されているエラーメッセージを調査します。また、Cosminexus RM の開始停止メッセージログ、メソッドトレースを調査します。

メッセージの中に「HRM-xxxxx」という障害コードが出力されている場合は、マニュアル「Cosminexus Reliable Messaging」を参照して、対処してください。

障害を調査するために Cosminexus RM がコンフィグレーションプロパティに対して設定している情報が必要になる場合があります。また、Cosminexus RM に関連づけている DB Connector に設定している情報が必要になる場合もあります。これらの設定内容を再度確認して調査し、対処します。

7. 障害対策

(5) DB Connector の操作中にエラーが発生した場合

まず、メッセージログに出力されているエラーメッセージを調査します。また、障害が発生した DB Connector (リソースアダプタ) の稼働ログを参照して調査します。

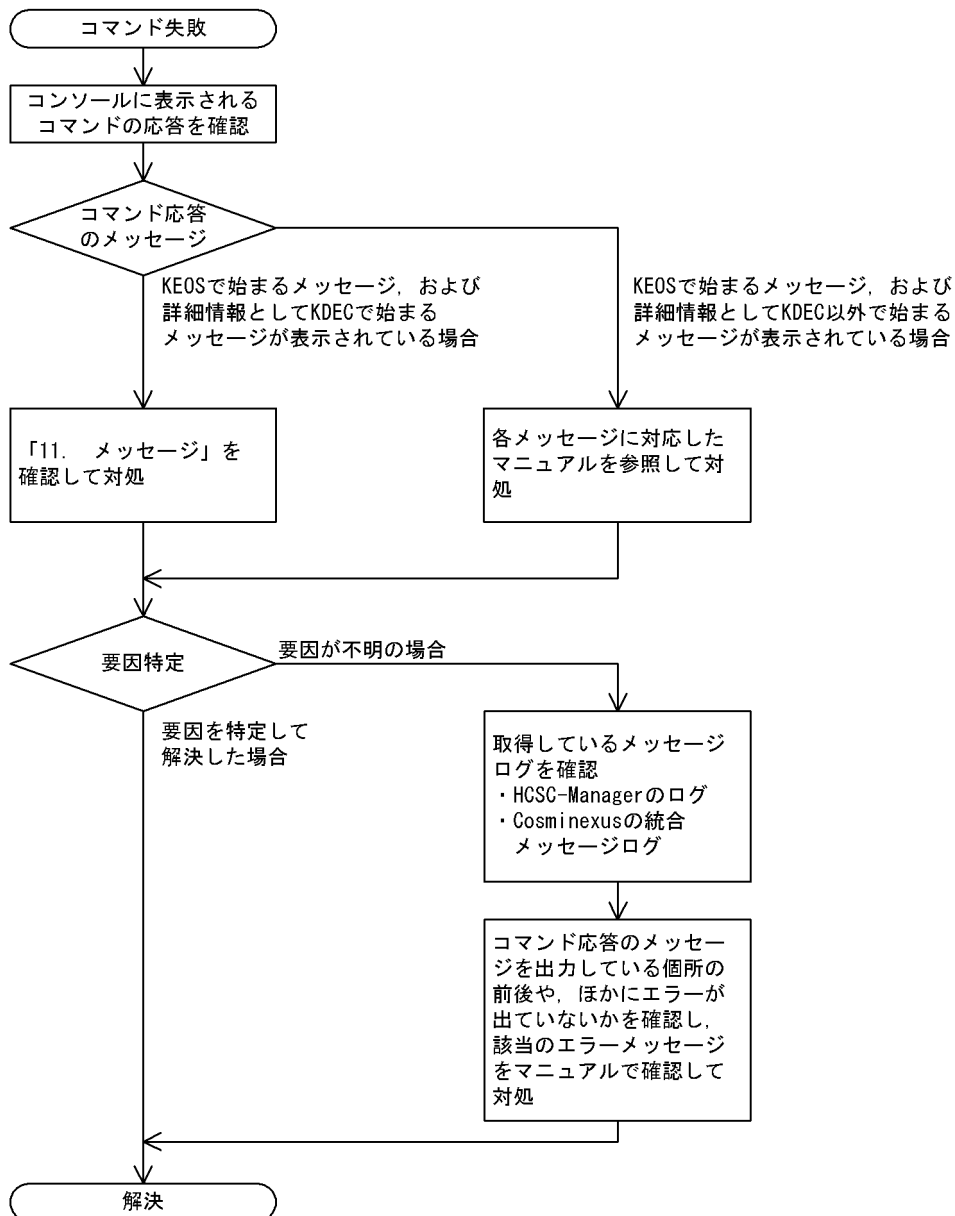
障害を調査するために DB Connector に設定している情報が必要になる場合があります。これらの設定内容を再度確認して調査し、対処します。

7.5.2 セットアップまたはアンセットアップ時の障害調査

(1) ログの見方および障害の切り分け方法

セットアップまたはアンセットアップを実行しているときに、障害が発生したときの障害の調査手順について次の図に示します。

図 7-17 障害の調査手順（セットアップまたはアンセットアップ時）



セットアップまたはアンセットアップでエラーが発生した場合，最初にコマンドの応答でコンソールに出力されるメッセージを確認します。

KEOSで始まるメッセージ（HCSC-Managerに関するメッセージ）の詳細情報としてKDECで始まるメッセージが含まれている場合，「11. メッセージ」を確認して，対処します。

KEOSで始まるメッセージ（HCSC-Managerに関するメッセージ）の詳細情報として，



7. 障害対策

KDEC 以外で始まるメッセージが含まれている場合、各メッセージに対応したマニュアルを参照して対処します（例えば、KDJE メッセージが含まれている場合は、マニュアル「Cosminexus メッセージ 1」を参照します）。具体例を次に示します。

コマンド応答のメッセージ

```
KEOS52085-I cscsvsetup will now start.
KEOS50043-I Setup of the HCSC-Server will now start. (cluster name = MyCSC HCSC-Server name
= MyCSC , initial setup = true)
KEOS50007-E An exception occurred during the operation. (Cosminexus Manager name = MyMNG,
object name = jp.co.Hitachi.soft.csc.msg:type=CSCMsgServerBuilder, operation = setup,
details = The connection to the J2EE server failed. (name = MyServer) ErrorCode=KDEC10010-E)
KEOS52087-E cscsvsetup ended abnormally.
```

(凡例)

-  : エラーメッセージ
-  : 詳細情報

詳細情報の
エラーコード
(メッセージ)

エラーメッセージの中に、詳細情報として別のメッセージが出力されます。

要因が特定できない場合は、取得しているメッセージログを参照します。セットアップまたはアンセットアップ実行時に参照する障害情報は、次のメッセージログです。詳細については、「7.4.1 メッセージログ」を参照してください。

- HCSC-Manager のログ
- Cosminexus の統合メッセージログ

障害が発生した原因は、コマンド実行以前の環境設定やシステムの状態でエラーとなることもあるため、コマンド応答のメッセージを出力している個所の前後を確認し、ほかにエラーメッセージが出ていないか確認して対策します。

なお、メッセージログの内容を確認するときに、コンソールに出力されたメッセージが重複して出力されていることもあるため、適宜実行時間を確認します。

(2) 代表的な障害とその対処方法

ここでは、セットアップまたはアンセットアップ実行での代表的な障害とその対処方法について説明します。代表的な障害とその対処方法を次の表に示します。

表 7-34 代表的な障害とその対処方法（セットアップまたはアンセットアップ時の障害調査）

手順（流れ）	代表的な障害	考えられる要因	対策	参照先	
実行環境に必要なソフトウェアの設定	データベースのサーバ側のセットアップ	権限の設定ができない	データベース定義ユーティリティ (pddef), SQL Executer のパスが設定されていません。	データベース定義ユーティリティ (pddef), SQL Executer のパスを設定します。	-
	Cosminexus Manager のセットアップ	Cosminexus Manager が起動しない	mserver.properties の書式が誤っています。	mserver.properties を見直します。	3.1.21
			mserver.cfg の書式が誤っています。	mserver.cfg を見直します。	
	Management Server と運用管理エージェントが自動起動しない	Management Server と運用管理エージェントを自動起動するように設定されていません。	Management Server と運用管理エージェントを自動起動するように設定します。	-	
	運用管理エージェントが起動しない	adminagent.cfg の書式が誤っています。	adminagent.cfg を見直します。	-	
	MBean の起動確認で、KEOS27010-I メッセージが出力されない	Cosminexus インストールディレクトリ >¥manager¥mbean-plugins 配下に、定義ファイルおよび jar が存在しません。	<Cosminexus インストールディレクトリ >¥CSC¥mbean-plugins 配下のファイルを、<Cosminexus インストールディレクトリ >¥manager¥mbean-plugins にコピーします。	3.1.21	
PRF のセットアップ	-	-	-	-	
J2EE サーバのセットアップ	J2EE サーバが起動しない	J2EE サーバのシステム環境変数が正しく設定されていません。	J2EE サーバのシステム環境変数を見直します。	-	

7. 障害対策

手順（流れ）	代表的な障害	考えられる要因	対策	参照先
Hitachi Web Server の セットアップ	-	-	-	-
データベースのクライアント側のセットアップ	-	-	-	-
JDBC ドライバのセットアップ	-	-	-	-
DB Connector の セットアップ	DB Connector の cjstartrar や cjtestres 実行時にエラーが発生する	DB 関連の問題です。 <ul style="list-style-type: none"> • HiRDB 未起動 • HiRDB のコネクション不足 • HiRDB のホスト名や IP アドレス、ポート番号の誤り • HiRDB のユーザ名やパスワードの誤り 	<ul style="list-style-type: none"> • HiRDB が起動しているかどうか確認します。 • HiRDB のコネクション不足の場合は、次のどちらかを実施します。 (1) %PDDIR%\¥CONF¥pdsys の pd_max_users を 50 程度に変更します。 (2) DB Connector の定義や Cosminexus RM のコンフィグレーションプロパティの MinPoolSize を小さくします。 • DB Connector の定義を参照し、ホスト名や IP アドレス、ポート番号に誤りがないか確認します。 • HiRDB のユーザ名やパスワードの誤りがないか確認します。 	-
	UNIX/Linux 環境で、DB Connector に対して cjstartrar や cjtestres 実行時にエラーが発生する KDJE37360-E KDJE48516-E （理由で javax.resource.ResourceException: KDJE50018-E）	Linux の場合は LD_LIBRARY_PATH, AIX の場合は LIBPATH に次のパスが設定されていません。 (1) DABroker のパス /opt/DABroker/lib (2) HiRDB クライアント製品のパス /opt/HiRDB/client/lib (3) HiRDB サーバ製品のパス \$PDDIR/client/lib	Linux の場合は LD_LIBRARY_PATH, AIX の場合は LIBPATH に左記のパスを設定します。 なお、(1) は DABroker 経由で接続する場合に必要です。 (2) と (3) は HiRDB に接続するときに、PP のインストール状況に応じて、どちらか一方を設定します。	3.1. 2 1

手順（流れ）	代表的な障害	考えられる要因	対策	参照先
Cosminexus RM のセットアップ	DB Connector の cjstartrrar や cjtestres 実行時にエラーが発生する	DB 関連の問題です。 <ul style="list-style-type: none"> • HiRDB 未起動 • HiRDB のコネクション不足 • HiRDB のホスト名や IP アドレス, ポート番号の誤り • HiRDB のユーザ名やパスワードの誤り。 	<ul style="list-style-type: none"> • HiRDB が起動しているかどうか確認します。 • HiRDB のコネクション不足の場合は, 次のどちらかを実施します。 (1) %PDDIR%\¥CONF¥\¥pdsys の pd_max_users を 50 程度に変更します。 (2) DB Connector の定義や CosmiRM のコンフィグレーションプロパティの MinPoolSize を小さくします。 • DB Connector の定義を参照し, ホスト名や IP アドレス, ポート番号, ユーザ名やパスワードに誤りがないか確認します。 	3.1. 2 1
	Cosminexus RM の起動, または J2EE サーバの起動時に, KDJE48213-W が出力される	Cosminexus RM のコンフィグレーションプロパティに指定しているキュー定義ファイルの記述が誤っています。	Cosminexus サービスプラットフォームの 07-50 を利用している場合, Cosminexus RM のコンフィグレーションプロパティの QueueConfigFileName は指定不要です。	3.1. 2 1
Cosminexus Service Coordinator-Manager のセットアップ	-	-	-	-
uCosminexus 日立コード変換 - Server Runtime または uCosminexus 日立コード変換 - Runtime のセットアップ	-	-	-	-
HCSC サーバのセットアップ	HCSC サーバのセットアップ時に次のエラーが発生する KEOS27105-E	Management Server が起動していません。	Management Server が起動しているか確認します。 また, Management Server が自動起動になっているか確認します。	-

7. 障害対策

手順（流れ）	代表的な障害	考えられる要因	対策	参照先
	<p>HCSC サーバのセットアップ時に次のエラーが発生する KEOS50007-E（詳細コードで KDEC10011-E） KEOS27040-E</p>	<p>運用管理エージェントが起動していません。</p>	<p>運用管理エージェントが起動しているか確認します。 また、運用管理エージェントが自動起動になっているか確認します。 起動している場合、Management Server の設定ファイルの内容を確認し、Management Server を再起動します。</p>	-
	<p>HCSC サーバのセットアップ時に次のエラーが発生する KEOS50007-E（詳細コードで KDEC05001-E および KFPA11723-E）</p>	<p>HiRDB がダウンしています。</p>	<p>HiRDB サーバを起動します。起動できない場合は、マニュアル「スケーラブルデータベースサーバ HiRDB Version 8 メッセージ」を参照して対処します。</p>	-
	<p>HCSC サーバのセットアップ時に次のエラーが発生する KEOS50007-E（詳細コードで KDEC05012-E）</p>	<p>HiRDB Type4 JDBC Driver または Oracle JDBC Thin Driver の設定が漏れています。</p>	<p>次の三つのファイルに、ドライバの jar ファイルのクラスパスを設定します。 (1) Management Server 用オプション定義ファイル (mserver.cfg) で、web.add.class.path を設定します。 (2) J2EE サーバのユーザ定義ファイル (usrconf.cfg) で、add.class.path を設定します。 (3) HCSC-Messaging コマンド共通定義ファイル (cmdconf.bat または cmdconf) で、HCSC_ADDCLASSPATH を設定します。</p>	-
	<p>HCSC サーバのセットアップ時に次のエラーが発生する KEOS50007-E（詳細コードで KDEC10013-E）</p>	<p>リソースアダプタの Cosminexus RM が起動していません。</p>	<p>Cosminexus RM を起動します。</p>	-

手順（流れ）	代表的な障害	考えられる要因	対策	参照先
	HCSC サーバのセットアップ時に次のエラーが発生する KEOS50007-E（詳細コードで KDEC10010-E）	J2EE サーバが起動していません。	見直します。 ²	-
	HCSC サーバのセットアップ時に次のエラーが発生する KEOS50004-E（詳細コードで KEOS27105）	運用管理エージェントが正常に動作していません。または、作成した J2EE サーバが、Cosminexus Manager の管理下にありません。	見直します。 ² 見直し内容に該当しない場合、作成した J2EE サーバが、Cosminexus Manager の管理下にないことがあります。Cosminexus Manager で管理できるように設定します。 ³ 読み込んだ J2EE サーバの設定については、一とおり正しく設定されているか確認して、設定が変わっている箇所は、元の設定に変更します。その後、画面内の「適用」ボタンをクリックします。すべての見直しが完了したあとに、画面右上の「設定情報の配布」をクリックして、設定を有効にします。 なお、Cosminexus Manager で J2EE サーバを管理する場合は、論理パフォーマンストレーサの設定が必要になります。また、「基本情報」の次に示す設定が読み込み後は必ず「しない」（使用しない）になります。そのため、必要に応じて変更してください。 <ul style="list-style-type: none"> • 運用監視エージェントの設定 • Management イベント発行機能の設定 • 起動オプションの設定 	-
HCSC サーバの定義情報を設定	-	-	-	-

7. 障害対策

手順（流れ）	代表的な障害	考えられる要因	対策	参照先
HCSC サーバの起動	HCSC サーバ起動に失敗するログの中に「KDJE37356-E The communication timeout occurred.」が含まれている	DB Connector の属性の maxBinarySize と LONGVARIABLE_ACCESS_SIZE が共に 0 になっています。	どちら一方、または両方を変更します。 <ul style="list-style-type: none"> DBConnector の属性の maxBinarySize に 0 以外（例：64000）を設定します。 LONGVARIABLE_ACCESS_SIZE に 0 以外（例：64）を設定します。 	-
	KEOS50007-E が発生してコマンドが失敗 HCSC 稼働マシンのメッセージログに次のメッセージが出力される KDJE50012-E または KFDJ02005-E	HCSC サーバセットアップ定義ファイルの dbcon-nodisplayname に指定した DB Connector が、<transaction-support> に NoTransaction 以外を定義した DB Connector です。	二つの DB Connector を準備していない場合は、DB Connector を二つセットアップします。DB Connector の属性ファイルを取得し、<transaction-support> に NoTransaction を指定し、設定します。HCSC サーバセットアップ定義ファイルに正しく DB Connector が設定されていることを確認して、再度 HCSC サーバをセットアップします。	3.1.2 1
サービスアダプタ / ビジネスプロセス / ユーザ定義受付の配備	KEOS50007-E が発生してコマンドが失敗。HCSC 稼働マシンのメッセージログに次のメッセージが出力される KDJE50012-E または KFDJ02005-E	HCSC サーバセットアップ定義ファイルの dbcon-nodisplayname に指定した DB Connector が、<transaction-support> に NoTransaction 以外を定義した DB Connector です。	二つの DB Connector を準備していない場合は、DB Connector を二つセットアップします。DB Connector の属性ファイルを取得し、<transaction-support> に NoTransaction を指定し、設定します。HCSC サーバセットアップ定義ファイルに正しく DB Connector が設定されていることを確認して、再度 HCSC サーバをセットアップします。	3.1.2 1
ユーザ定義受付の定義情報を設定	-	-	-	-

（凡例）

- : 該当しません。

注 1 詳細は「3.1.2 実行環境に必要なソフトウェアの設定」を参照してください。

注 2 次の観点で見直します。

- ・ 該当 J2EE サーバの稼働ホストで、運用管理エージェントが起動しているか。
- ・ 起動している運用管理エージェントのポート番号と、構成定義でホストに定義した運用管理エージェントのポート番号は一致しているか。

- ・構成定義で定義したホストと通信できるか。
- ・運用管理エージェントのプロパティで、アクセスしている Cosminexus Management Server の稼働ホストは接続が許可されているか。
- ・ Management Server と運用管理エージェントの Cosminexus のバージョンが一致しているか。
- ・ Management Server と運用管理エージェントの Cosminexus のエディションが異なる場合、接続できるエディション関係か。
- ・ Manager のリモート管理機能が指定の「ホスト名(または IP アドレス):ポート番号」で起動されているか。

注 3 次の手順で、作成した J2EE サーバが Cosminexus Manager で管理できるように設定します。

1. 運用管理ポータル「論理サーバの環境設定」で「論理 J2EE サーバ」配下にある J2EE サーバ名を選択し、設定画面を表示させます。
2. 表示したメニューのタブ「読み込み」をクリックします。「サーバの設定読み込み」画面が表示されます。
3. 「接続先ホストから設定を読み込みます」を選択し、「読み込み」ボタンをクリックします。
4. 画面右上の「運用管理ポータル」をクリックします。いったんトップページに戻ります。
5. 「論理サーバの起動/停止」をクリックします。起動させる J2EE サーバが起動できるか確認します。

7.5.3 HCSC サーバのセットアップおよびアンセットアップ時の回復方法

HCSC サーバのセットアップに失敗後、再セットアップができない、または HCSC サーバのアンセットアップを繰り返してもアンセットアップが完了しない場合は、次のように対処してください。

手順

1. 次のコマンドを実行して、リポジトリ情報を削除します。

```
cscsvunsetup -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名> -ignore
```

リポジトリ情報を削除後、アプリケーションの削除が必要な場合は、手順 2. ~ 手順 5. を実行してください。アプリケーションの削除が不要な場合は、手順 5. を実行してください。

2. 次のコマンドを実行して、削除の対象となる HCSC のアプリケーションの名称を確認します。

```
cscapputil -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -host <IPアドレス>:<port番号> -j2ee <J2EEサーバ名> -operation list
```

7. 障害対策

削除の対象となる HCSC のアプリケーションを次に示します。

表 7-35 削除の対象となる HCSC のアプリケーション（HCSC サーバのセットアップおよびアンセットアップの障害時）

項目	アプリケーション名	共有
HCSC サーバアプリケーション	CSCMessaging	×
	CSCMsgSyncServiceDelivery	×
	CSCMsgSyncServiceDeliveryWS	×
	CSCMsgAsyncServiceDelivery	×
	CSCMsgAsyncServiceDeliveryDBQ	×

（凡例）

×：リソースをクラスタ内で共有しないことを示します。

- 次のコマンドを実行して、削除の対象となる HCSC のアプリケーションを停止します。

```
cscapputil -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -host <IPアドレス>
>:<port番号> -j2ee <J2EEサーバ名> -app <アプリケーション名> -operation stop
```

- 次のコマンドを実行して、HCSC のアプリケーションを削除します。

```
cscapputil -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -host <IPアドレス>
>:<port番号> -j2ee <J2EEサーバ名> -app <アプリケーション名> -operation delete
```

- 削除できないリソース（データベーステーブル、インデクス、またはビュー表）がある場合、次に示す表を参考に削除します。
ただし、クラスタ内で共有するリソースについては、クラスタ内で最後の HCSC サーバをアンセットアップする場合にだけ削除してください。
また、各リソースがすでに削除されている場合、または作成されていない場合もあるため、存在しない場合は削除する必要はありません。

表 7-36 HCSC サーバが使用するリソース

項番	項目	リソース名	種別	共有
1	データベース テーブル、イン デクス、ビュー 表	CSCMSG_S<HCSC サーバ名>_CSC_PERSIST	T	×
2		CSCMSG_C<クラスタ名>_CSC_CONNECT	T	
3		CSCMSG_S<HCSC サーバ名>_LC_DIRECTORY	T	×
4		CSCMSG_S<HCSC サーバ名>_LC_BPFORMAT	T	×

項番	項目	リソース名	種別	共有
5		CSCMSG_S<HCSC サーバ名>_RT_RULE	T	×
6		CSCMSG_S<HCSC サーバ名>_CV_MAPPING	T	×
7		CSCMSG_S<HCSC サーバ名>_CV_FORMAT	T	×
8		CSCMSG_C<クラスタ名>_EXECHISTORY	T	
9		CSCMSG_C<クラスタ名>_EXECHISTORY_I	I	
10		CSCBP_<クラスタ名>_PROCESS	T	
11		CSCBP_<クラスタ名>_PROCESS_IDX1	I	
12		CSCBP_<クラスタ名>_PROCESS_IDX2	I	
13		CSCBP_<クラスタ名>_PROCESS_IDX3	I	
14		CSCBP_<クラスタ名>_ACTIVITY	T	
15		CSCBP_<クラスタ名>_ACTIVITY_IDX	I	
16		CSCBP_<クラスタ名>_LINK	T	
17		CSCBP_<クラスタ名>_LINK_IDX	I	
18		CSCBP_<クラスタ名>_CORRELATIONSET	T	
19		CSCBP_<クラスタ名>_CORREL_IDX1	I	
20		CSCBP_<クラスタ名>_CORREL_IDX2	I	
21		CSCBP_<クラスタ名>_STR_VARIABLE	T	
22		CSCBP_<クラスタ名>_STR_VAR_IDX	I	
23		CSCBP_<クラスタ名>_NUM_VARIABLE	T	
24		CSCBP_<クラスタ名>_NUM_VAR_IDX	I	
25		CSCBP_<クラスタ名>_BOOL_VARIABLE	T	
26		CSCBP_<クラスタ名>_BOOL_VAR_IDX	I	
27		CSCBP_<クラスタ名>_MSG_VARIABLE	T	
28		CSCBP_<クラスタ名>_MSG_VAR_IDX	I	
29		CSCBP_<クラスタ名>_MSG_RELATION	T	
30		CSCBP_<クラスタ名>_MSG_REL_IDX1	I	
31		CSCBP_<クラスタ名>_MSG_REL_IDX2	I	
32		CSCBP_<クラスタ名>_MSG_REL_IDX3	I	
33		CSCBP_<クラスタ名>_V_ACTIVITY	V	
34		CSCBP_<クラスタ名>_V_LINK	V	
35		CSCBP_<クラスタ名>_V_STR_VARIABLE	V	
36		CSCBP_<クラスタ名>_V_NUM_VARIABLE	V	
37		CSCBP_<クラスタ名>_V_BOOL_VARIABLE	V	

7. 障害対策

項番	項目	リソース名	種別	共有	
38		CSCBP_<クラスタ名>_V_MSG_VARIABLE	V		
39	リクエスト受付 キュー	クラスタ種別が LBの場合	CSC<HCSC サーバ名 >ACPT_RCVQ	Q	×
40			CSC<HCSC サーバ名>ACPT_DBQ	Q	×
41		クラスタ種別が HAの場合	CSC<クラスタ名>ACPT_RCVQ	Q	
42			CSC<クラスタ名>ACPT_DBQ	Q	
43	HCSC サーバー 時ファイル	ServerProperties_<HCSC サーバ名>	F	×	
44		ServerSetup_<HCSC サーバ名>	F	×	
45		ReceptionProperties_dbq_<HCSC サーバ名>	F	×	
46		ReceptionProperties_ejb_<HCSC サーバ名>	F	×	
47		ReceptionProperties_jms_<HCSC サーバ名>	F	×	
48		ReceptionProperties_soap_<HCSC サーバ名>	F	×	
49		UserReceptionProperties_<HCSC サーバ名>_<受付 ID>	F	×	
50		ServerProperties_<HCSC サーバ名>.old	F	×	
51		ServerSetup_<HCSC サーバ名>.old	F	×	
52		ReceptionProperties_dbq_<HCSC サーバ名>.old	F	×	
53		ReceptionProperties_ejb_<HCSC サーバ名>.old	F	×	
54		ReceptionProperties_jms_<HCSC サーバ名>.old	F	×	
55		ReceptionProperties_soap_<HCSC サーバ名>.old	F	×	
56		UserReceptionProperties_<HCSC サーバ名>_<受付 ID>.old	F	×	
57		ServerPropertiesAct_<HCSC サーバ名>	F	×	
58		ReceptionPropertiesAct_dbq_<HCSC サーバ名>	F	×	
59	ReceptionPropertiesAct_ejb_<HCSC サーバ名>	F	×		
60	ReceptionPropertiesAct_jms_<HCSC サーバ名>	F	×		
61	ReceptionPropertiesAct_soap_<HCSC サーバ名>	F	×		
62	UserReceptionPropertiesAct_<HCSC サーバ名>_<受付 ID>	F	×		
63	ServerPropertiesAct_<HCSC サーバ名>.old	F	×		
64	ReceptionPropertiesAct_dbq_<HCSC サーバ名>.old	F	×		
65	ReceptionPropertiesAct_ejb_<HCSC サーバ名>.old	F	×		
66	ReceptionPropertiesAct_jms_<HCSC サーバ名>.old	F	×		

項番	項目	リソース名	種別	共有
67		ReceptionPropertiesAct_soap_<HCSC サーバ名 >.old	F	×
68		UserReceptionPropertiesAct_<HCSC サーバ名 >_<受付 ID>.old	F	×
69		_cscmsg_cnfrqdbq_<HCSC サーバ名 >.xml	F	×
70		_cscmsg_cnfrqejb_<HCSC サーバ名 >.xml	F	×
71		_cscmsg_cnfrqjms_<HCSC サーバ名 >.xml	F	×
72		_cscmsg_cnfrqsorp_<HCSC サーバ名 >.xml	F	×
73		_cscmsg_cnfrq_<HCSC サーバ名 >_<受付 ID>.xml	F	×
74		inf	F2	×

(凡例)

I : インデクスであることを示します。 ¹

T : データベーステーブルであることを示します。 ¹

V : ビュー表であることを示します。 ¹

Q : Cosminexus RM のキューであることを示します。 ²

F : HCSC サーバ一時ファイルであることを示します。 ³

F2 : HCSC サーバのシステム管理情報を保存する出力先のディレクトリであることを示します。 ⁴

：リソースをクラスタ内で共有することを示します。

× : リソースをクラスタ内で共有しないことを示します。

- : 該当しません。

注 1 データベーステーブル, インデクスおよびビュー表は SQL 命令 (DROP) を実行して削除してください。

注 2 Cosminexus RM のキューは, hrmstop コマンドを実行して管理状態へ移行したあと, hrmdelque コマンドを実行して削除してください。詳細は, マニュアル「Cosminexus Reliable Messaging」を参照してください。

注 3 HCSC サーバ一時ファイルは, 「<Cosminexus インストールディレクトリ>¥CSC¥system¥msg」にあるファイルを削除してください。

注 4 HCSC サーバセットアップ定義ファイルの hscserver-data-filepath プロパティに指定したディレクトリにあるリソースを削除してください。hscserver-data-filepath プロパティにディレクトリを指定していない場合は, hscserver-data-filepath プロパティのデフォルトのディレクトリにあるリソースを削除してください。

! 注意事項

- J2EE サーバ上の HCSC サーバを削除する場合には、`cscapputil` コマンドを使用します。Cosminexus の J2EE サーバのコマンドでは削除できません。
- `cscapputil` コマンドは、障害を回復する場合にだけ使用してください。通常運用時や構築時には、このコマンドを使用しないでください。
- `cscapputil` コマンドで、アプリケーションを削除した場合、サービスプラットフォームのシステムを破壊するおそれがあります。そのため、十分に注意して運用してください。

7.5.4 HCSC コンポーネントの配備および削除時の回復方法

サービスアダプタ、ビジネスプロセス、およびユーザ定義受付の配備に失敗後、再配備ができない、またはサービスアダプタ、ビジネスプロセス、およびユーザ定義受付の削除を繰り返しても削除が完了しない場合は、次のように対処してください。

1. `csccompounddeploy` コマンドに `-ignore` オプションを指定して実行し、リポジトリ情報を削除します。

```
csccompounddeploy -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名> -ignore
```

リポジトリ情報を削除後に、アプリケーションの削除が必要な場合は、手順 2. ~ 手順 5. を実行してください。アプリケーションの削除が不要な場合は、手順 5. を実行してください。

2. 次のコマンドを実行して、削除の対象となる HCSC のアプリケーションの名称を確認します。

```
cscapputil -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -mng <Cosminexus Manager名称> -j2ee <J2EEサーバ名> -operation list
```

削除の対象となる HCSC のアプリケーションを次に示します。

表 7-37 削除の対象となる HCSC のアプリケーション (HCSC コンポーネントの配備および削除の障害時)

項目	アプリケーション名	共有
HCSC コンポーネント (サービスアダプタおよびビジネスプロセス) のアプリケーション	<サービス ID>	×
HCSC コンポーネント (ユーザ定義受付) のアプリケーション	<受付 ID>	×

(凡例)

× : リソースをクラスタ内で共有しないことを示します。

3. 次のコマンドを実行して、削除の対象となる HCSC コンポーネントを停止します。

```
cscapputil -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -mng <Cosminexus
Manager名称> -j2ee <J2EEサーバ名> -app <アプリケーション名> -operation stop
```

4. 次のコマンドを実行して、HCSC コンポーネントを削除します。

```
cscapputil -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -mng <Cosminexus
Manager名称> -j2ee <J2EEサーバ名> -app <アプリケーション名> -operation delete
```

5. 削除できないリソース（キュー）がある場合、表 7-38 を参考に削除します。
ただし、クラスタ内で共有するリソースについては、クラスタ内で最後のサービスアダプタまたはビジネスプロセスを削除する場合にだけ削除してください。
6. HCSC サーバを再起動します。

表 7-38 HCSC サーバ（サービスアダプタ、ビジネスプロセス）が使用するリソース

項番	項目	リソース名	種別	共有
1	データベーステーブル	CSCMSG_S<HCSC サーバ名>_LC_DIRECTORY テーブルの SERVICE_NAME の列に、次のどれ かが格納された行 ・ 削除対象のサービスアダプタのサービス名 ・ 削除対象のビジネスプロセス名 ・ 削除対象のユーザ定義受付は次の形式 :Reception_<削除対象のユーザ定義受付の受付 ID>:<削除対象のユーザ定義受付の受付名>	T	×
2	アダプタのキュー	CSC_<クラスタ名><サービス ID>	Q	
3	MDB (WS-R) アダプタ のキューあて先	CSC<サービス ID>	U	
4	HCSC サーバ一時ファイル	UserReceptionProperties_<HCSC サーバ名>_< 受付 ID>	F	×
5		UserReceptionProperties_<HCSC サーバ名>_< 受付 ID>.old	F	×
6		UserReceptionPropertiesAct_<HCSC サーバ名 >_<受付 ID>.old	F	×
7		_cscmsg_cnfrq_<HCSC サーバ名>_<受付 ID>.xml	F	×
8		IAdapterName	F2	×
9		IServiceKind	F2	×
10	IServiceName	F2	×	
11		R<数字> 1	F2	×

7. 障害対策

(凡例)

T : データベーステーブルであることを示します。 ²

Q : Cosminexus RM のキューであることを示します。 ³

U : Cosminexus RM の転送キューに設定するあて先であることを示します。 ⁴

F : HCSC サーバ一時ファイルであることを示します。 ⁵

F2 : HCSC サーバ一時ファイルであることを示します。 ⁶

: リソースをクラスタ内で共有することを示します。

x : リソースをクラスタ内で共有しないことを示します。

注 1 ファイル内の SERVICE_NAME の行に、次のどれかが格納されたファイルです。

- ・削除対象のサービスアダプタのサービス名
- ・削除対象のビジネスプロセス名
- ・削除対象のユーザ定義受付は次の形式

:Reception_<削除対象のユーザ定義受付の受付 ID>:<削除対象のユーザ定義受付の受付名

>

注 2 データベーステーブルの行は、SQL 命令の DELETE を実行して一行ずつ削除してください。

注 3 Cosminexus RM のキューは、hrmstop コマンドを実行して管理状態へ移行したあと、hrmdelque コマンドを実行して削除してください。詳細は、マニュアル「Cosminexus Reliable Messaging」を参照してください。

注 4 Cosminexus RM の転送キューに設定するあて先は、hrmstop コマンドを実行して管理状態へ移行したあと、hrmdeladdr コマンドを実行して削除してください。詳細は、マニュアル「Cosminexus Reliable Messaging」を参照してください。

注 5 ファイルを削除したい場合は、「<Cosminexus インストールディレクトリ>CSC¥system¥msg」にあるファイルを削除してください。

注 6 ファイルを削除したい場合は、HCSC サーバセットアップ定義ファイルの hcscserver-data-filepath プロパティに指定した、「<hcscserver-data-filepath で指定したディレクトリ>¥inf¥LC_DIRECTORY」ディレクトリにあるリソース（ファイル）を削除してください。hcscserver-data-filepath プロパティにディレクトリを指定していない場合は、「<hcscserver-data-filepath のデフォルトのディレクトリ>¥inf¥LC_DIRECTORY」ディレクトリにあるリソース（ファイル）を削除してください。

! 注意事項

- ・ J2EE サーバ上の HCSC コンポーネントを削除する場合には、cscapputil コマンドを使用します。Cosminexus の J2EE サーバのコマンドでは削除できません。
- ・ cscapputil コマンドは、障害を回復する場合にだけ使用してください。通常運用時や構築時には、このコマンドを使用しないでください。
- ・ cscapputil コマンドで、アプリケーションを削除した場合、サービスプラットフォームのシステムを破壊するおそれがあります。そのため、十分に注意して運用してください。

7.6 オペレーション実行時の障害対策

7.6.1 コマンド操作や運用環境の画面操作での障害調査

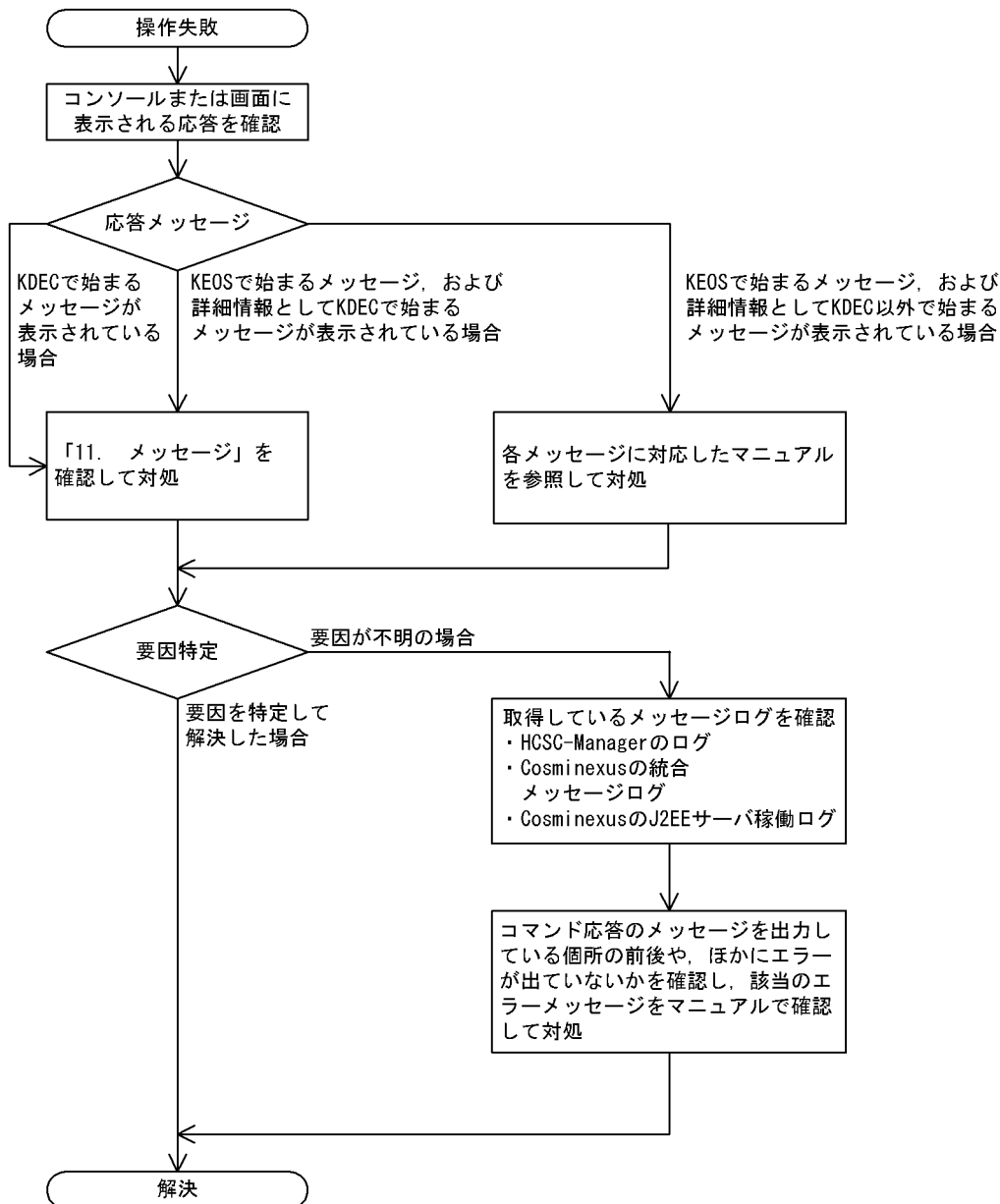
障害が発生した場合、コンソールまたは運用環境の画面に表示されるメッセージを確認して障害を調査します。運用環境の画面が操作できなくなった場合は、画面が正常な状態になるよう対処します。

(1) ログの見方および障害の切り分け方法

コマンド操作や運用環境の画面操作をしているときに、障害が発生したときの障害の調査手順について次の図に示します。

7. 障害対策

図 7-18 障害の調査手順（コマンド操作や運用環境の画面操作での障害調査）



コマンド操作や運用環境の画面操作でエラーが発生した場合、最初にコマンドの応答でコンソールに出力されるメッセージを確認します。

KDECで始まるメッセージの場合や、KEOSで始まるメッセージ（HGSC-Managerに関するメッセージ）の詳細情報としてKDECで始まるメッセージが含まれている場合、「11. メッセージ」を確認して、対処します。

KEOS で始まるメッセージ (HCSC-Manager に関するメッセージ) の詳細情報として、KDEC 以外で始まるメッセージが含まれている場合、各メッセージに対応したマニュアルを参照して対処します (例えば、KDJE メッセージが含まれている場合は、マニュアル「Cosminexus メッセージ 1」を参照します)。具体例を次に示します。

コマンド応答のメッセージの例

エラーメッセージ	失敗の理由
<pre>KDEC10410-E The HCSC command failed. (message = KDEC10044-E An attempt to access the database table has failed. (error code = KDEC05003-E, error message = An attempt to retrieve database information has failed. (information ID = 60, table name = CSCMSG_CMyCSC_EXECHISTORY, reason = KFPA11723-E Communication error occurred, reason=NETWORK [PrdbResultSet.next] [HiRDB_CONNECTION_ID(sds01:13:4348)], SQL state = R0000, error code = -723)))</pre>	<pre>(error code = KDEC05003-E, error message = An attempt to retrieve database information has failed. (information ID = 60, table name = CSCMSG_CMyCSC_EXECHISTORY, reason = KFPA11723-E Communication error occurred, reason=NETWORK [PrdbResultSet.next] [HiRDB_CONNECTION_ID(sds01:13:4348)], SQL state = R0000, error code = -723)))</pre>

(凡例)

- : 失敗の理由に対応するエラーメッセージ
- : 詳細情報

エラーメッセージ中に詳細情報のエラーメッセージが含まれる形式で出力されます。

要因が特定できない場合は、取得しているメッセージログを参照します。セットアップまたはアンセットアップ実行時に参照する障害情報は、次のメッセージログです。詳細については、「7.4.1 メッセージログ」を参照してください。

- HCSC-Manager のログ
- Cosminexus の統合メッセージログ
- Cosminexus の J2EE サーバ稼働ログ

障害が発生した原因は、コマンド実行以前の環境設定やシステムの状態でエラーとなることもあるため、コマンド応答のメッセージを出力している個所の前後を確認し、ほかにエラーメッセージが出ていないかを確認して、対策します。

なお、メッセージログの内容を確認するとき、コンソールに出力されたメッセージが重複して出力されていることもありますので、適宜実行時間を確認してください。

(2) 代表的な障害とその対処方法

ここでは、セットアップまたはアンセットアップ実行での代表的な障害とその対処方法について説明します。代表的な障害とその対処方法を次の表に示します。

表 7-39 代表的な障害とその対処方法（コマンド操作や運用環境の画面操作での障害調査）

操作	代表的な障害	考えられる要因	対策	参照先
Type4 ドライバ利用時の csm コマンド実行	HCSC サーバが未起動状態で csm コマンドを実行すると次のエラーが発生する KDEC10410-E (KDEC10044-E) KDEC10044-E の詳細で , (error code = KDEC05012-E, error message = Database access initialization, before HCSC server startup, failed because loading of the JDBC driver failed. (JDBC name = JP.co.Hitachi.soft.HiRDB. JDBC.HiRDBDriver))	次のどれかのディレクトリの設定漏れです。 <Cosminexus インストールディレクトリ> >%CSC%\config\msg\cmdconf.bat <Cosminexus インストールディレクトリ>/ CSC/config/msg/ cmdconf <Cosminexus インストールディレクトリ> >CSC/config/msg/ cmdconf	cmdconf (cmdconf.bat) の HCSC_ADDCL ASSPATH に HIRDB Type4 JDBC ドライバの jar ファイル (pdjdbc2.jar) のパスを指定します。	「9. 定義 ファイル」 の 「HCSC-M essaging コ マンド共通 定義ファイ ル」
Oracle 利用時の csm コマンド実行	HCSC サーバが未起動状態で csm コマンドを実行すると次のエラーが発生する KDEC10410-E (KDEC10044-E) KDEC10044-E の詳細で , (error code = KDEC05012-E, error message = Database access initialization, before HCSC server startup, failed because loading of the JDBC driver failed. (JDBC name = oracle.jdbc.driver.Oracle Driver))	次のどれかのディレクトリの設定漏れです。 <Cosminexus インストールディレクトリ> >%CSC%\config\msg\cmdconf.bat <Cosminexus インストールディレクトリ>/ CSC/config/msg/ cmdconf <Cosminexus インストールディレクトリ> >CSC/config/msg/ cmdconf	cmdconf (cmdconf.bat) の HCSC_ADDCL ASSPATH に Oracle Thin ドライバの jar ファイル (ojdbc14.jar) の パスを指定します。	「9. 定義 ファイル」 の 「HCSC-M essaging コ マンド共通 定義ファイ ル」

操作	代表的な障害	考えられる要因	対策	参照先
HCSC サーバが未起動の状態 で csm コマンド実行	HCSC サーバが未起動状態で csm コマンドを実行すると次のエラーが発生する KDEC10410-E (KDEC10044-E) KDEC10044-E の詳細で、 (error code = KDEC05001-E, error message = An attempt to open a connection to the database has failed. (reason = KFPA11724-E Environment definition error, variable=PDUSER, reason=NO VALUE[PrdbConnection, PrdbConnection], SQL state = R0000, error code = -724))	csm コマンドのオプションで DB のユーザ名とパスワードを指定していません。	csm コマンドのオプションで DB のユーザ名とパスワードを指定します。 HCSC サーバオフライン時は、DB のユーザ名とパスワードを必ず指定します。	「10. コマンド」
csm コマンド実行	csm コマンドが失敗し、データベース (HiRDB) のログおよびトレースで KFPA11912-E メッセージ (排他制御のための作業領域が不足) が発生している	排他制御のための作業領域が不足しています。	HiRDB のシステム定義の次のオペランドの指定値を増やして、HiRDB を再起動します。 <ul style="list-style-type: none"> pd_max_access_tables pd_lck_pool_size pd_fes_lck_pool_size 	マニュアル 「HiRDB システム定義」

(3) 運用環境の画面が操作できなくなった場合の対処方法

運用環境の画面が操作できなくなった場合の対処方法について次に示します。

(a) 画面からの操作を失敗してボタンをクリックできなくなった場合

次の手順で対処します。

- ダイアログまたは画面コンソールに出力されたエラーの原因を調査して対処します。
- 次のどちらかの操作をします。
 - [HCSC-Manager] メニューから [最新の情報に更新] を実行
 - エディタを閉じて再度表示
- 手順 1. , 2. の操作で復旧しない場合は、次のどちらかの操作をします。
 - エラーとなった操作をコマンドで実行
 - 失敗した操作と対となる操作 (開始で失敗した場合は停止) をコマンドで実行

7. 障害対策

(b) Eclipse 画面が「応答なし」になった場合

次の手順で対処します。

1. Eclipse 画面の [閉じる] ボタンをクリックして、強制的に画面を閉じます。
ボタンで閉じられない場合は、[タスクマネージャ] の [アプリケーション] タグから Eclipse または MyEclipse のタスクを終了します。
2. エラーの原因を調査して対処します。
3. Eclipse 画面を起動し、HCSC-Manager にログイン後、エラーとなった操作を再実行します。

! 注意事項

上記に示す対処をした場合、運用環境と同一の Eclipse で編集中の内容も失われます。運用環境の画面を操作する場合は、Eclipse で編集中の内容を、あらかじめ保存または終了してください。

7.7 サービス部品呼び出し要求時の障害対策

サービスリクエストからサービス部品を呼び出すときに障害が発生すると、サービスリクエストにエラーがリターンします。ここでは、エラーが発生した個所からサービスリクエストまでどのように伝わるか、また検知したエラーの要因をどのように切り分けるかについて説明します。なお、開発環境の定義は、運用環境を通じて実行環境で動作しますが、ここでは運用環境の説明は省略しています。

7.7.1 Web サービス（SOAP 通信）実行時の障害対策

SOAP 通信の場合、サービスリクエストからサービス部品を呼び出すときに、障害が発生すると、サービスリクエストにエラーがリターンします。

（1）SOAP 通信でのエラーの伝わり方

サービスリクエストから標準受付を使用してサービス部品を呼び出す場合と、サービスリクエストからユーザ定義受付を使用してサービス部品を呼び出す場合とで、エラーの伝わり方が異なります。それぞれのエラーの伝わり方を説明します。

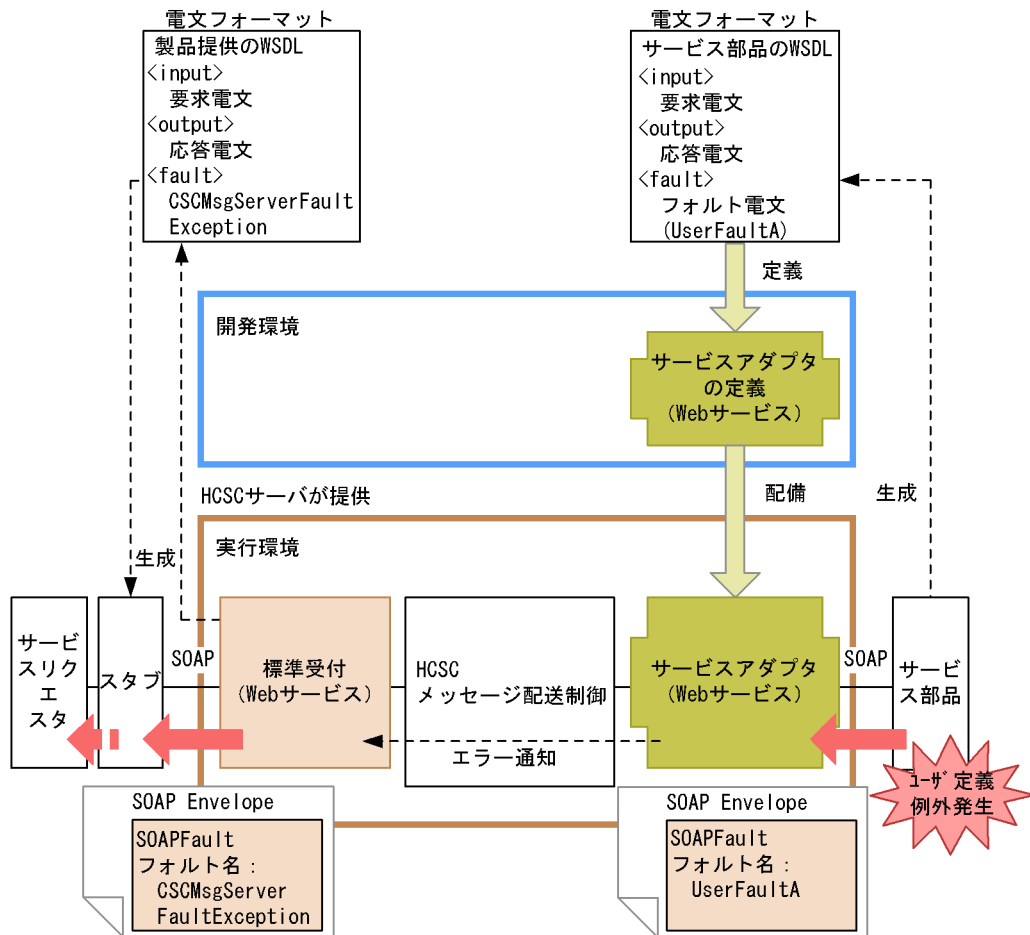
（a）標準受付の場合

エラーの伝わり方は、エラーの種類やビジネスプロセスの有無によって異なります。

サービス部品からユーザ定義例外のエラーがリターンした場合（ビジネスプロセスを使用しないとき）

サービス部品からユーザ定義例外のエラーがリターンした場合でビジネスプロセスを使用しないときの SOAP 通信でのエラーの伝わり方を次の図に示します。

図 7-19 サービス部品からユーザ定義例外のエラーがリターンした場合（ビジネスプロセスを使用しないとき）の SOAP 通信でのエラーの伝わり方

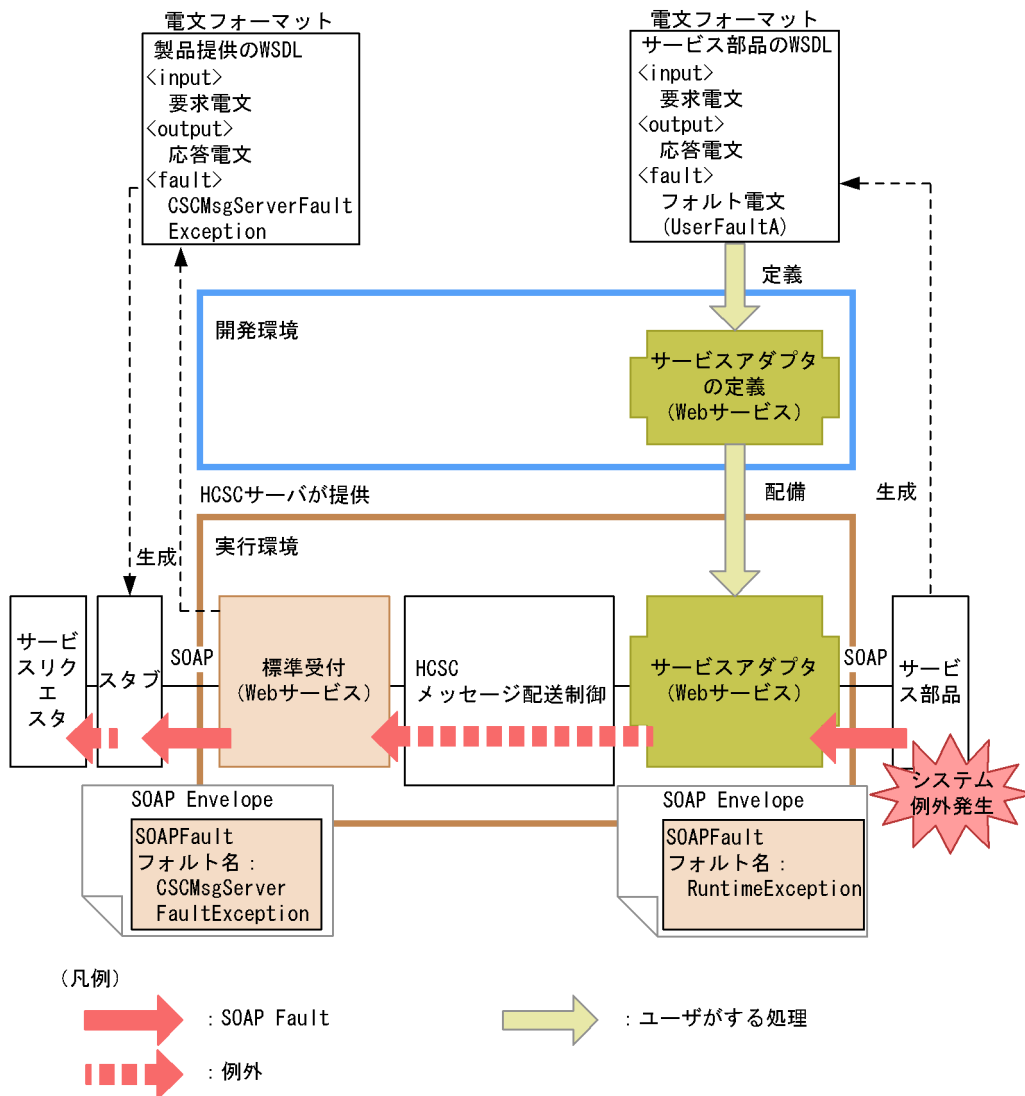


サービス部品で例外をスローするコーディングをしている場合、サービス部品の WSDL にはユーザ定義例外が定義されます。サービスリクエストが使用する WSDL は HCSC サーバが提供する WSDL です。サービス部品でユーザ定義例外が発生すると、サービスリクエストは、HCSC サーバがリターンする CSCMsgServerFaultException で例外をキャッチできます。キャッチした例外オブジェクトの getter を使用することで、発生した例外名やフォルト情報（エラーの詳細）を取得できます。CSCMsgServerFaultException の詳細については、マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド」を参照してください。

サービス部品からユーザ定義例外以外のエラーがリターンした場合（ビジネスプロセスを使用しないとき）

サービス部品からユーザ定義例外以外のエラーがリターンした場合でビジネスプロセスを使用しないときの SOAP 通信でのエラーの伝わり方を次の図に示します。

図 7-20 サービス部品からユーザ定義例外以外のエラーがリターンした場合（ビジネスプロセスを使用しないとき）の SOAP 通信でのエラーの伝わり方



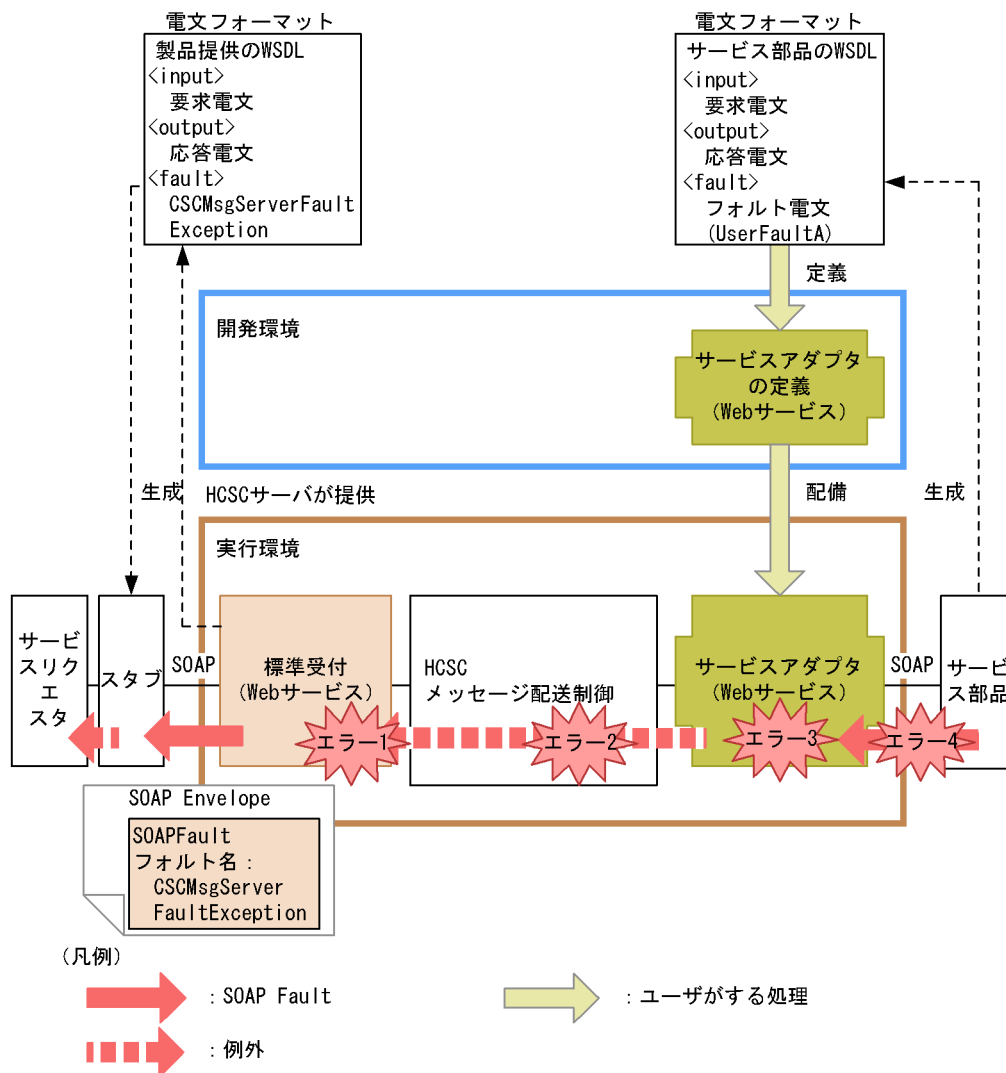
サービス部品で想定外の例外（システム例外）が発生した場合，RuntimeExceptionとしてSOAPメッセージが伝わります。サービスリクエストスタブは，HCSCサーバがリターンする CSCMsgServerFaultException で例外をキャッチできます。キャッチした例外オブジェクトの getter を使用することで，発生したフォルト情報（エラーの

7. 障害対策

詳細)を取得できます。CSCMsgServerFaultExceptionの詳細については、マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド」を参照してください。

HCSC サーバからエラーがリターンした場合(ビジネスプロセスを使用しないとき)
 HCSC サーバからエラーがリターンした場合でビジネスプロセスを使用しないときの SOAP 通信でのエラーの伝わり方を次の図に示します。

図 7-21 HCSC サーバからエラーがリターンした場合(ビジネスプロセスを使用しないとき)の SOAP 通信でのエラーの伝わり方



図中の各エラーには、次に示すケースが該当します。

- エラー 1: 要求パラメータ不正, 指定文字コード不正, 各種フォーマット不正など。
- エラー 2: あて先 (ロケーション) が見つからない, アダプタが停止しているな

ど。

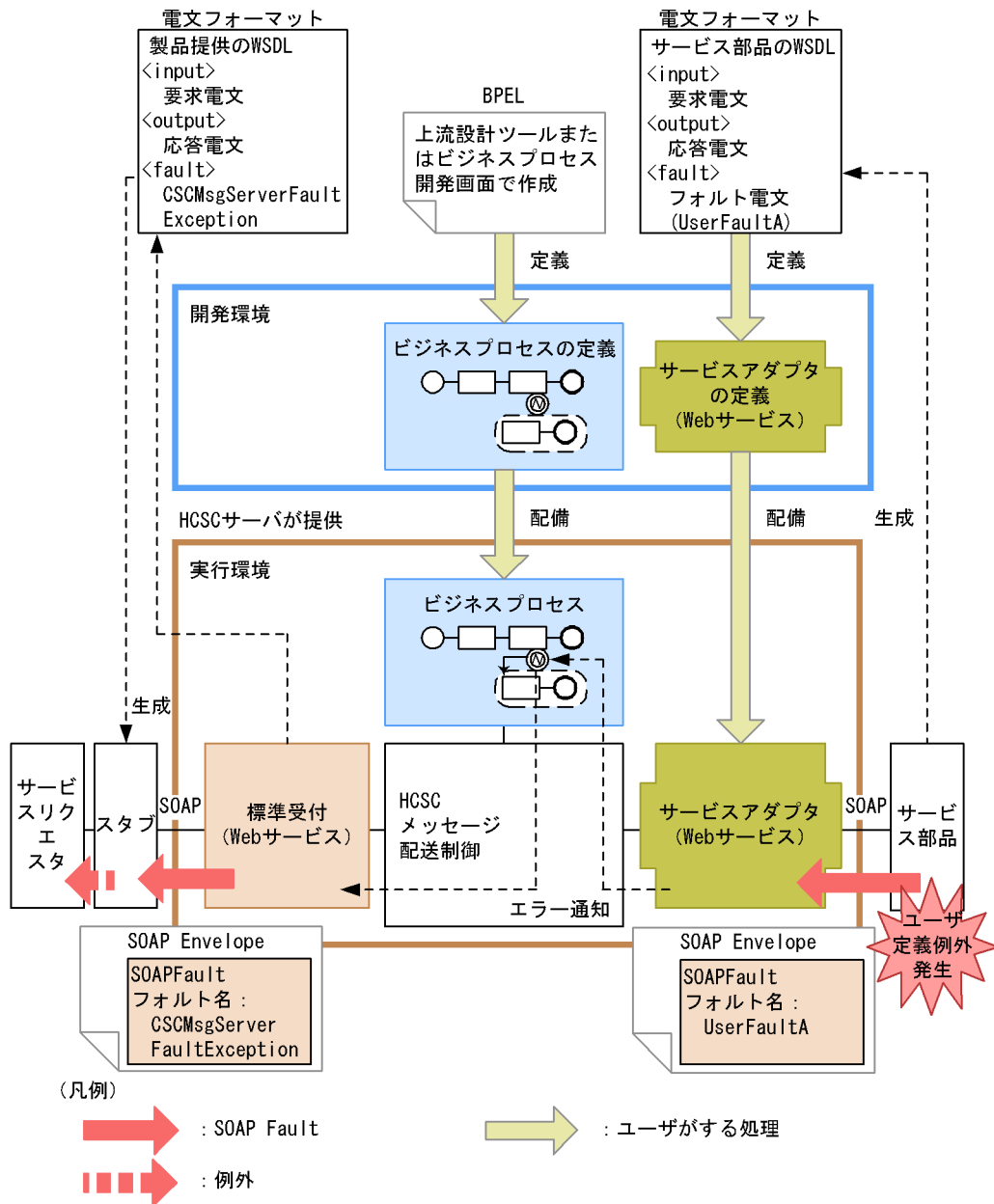
- エラー 3：データ変換に失敗したなど。
- エラー 4：あて先不正，サービス部品が停止，通信障害など

HCSC サーバで図中のエラー 1～エラー 4 のどれかを検知した場合，発生したエラーをサービスリクエストにリターンします。サービスリクエストは，HCSC サーバがリターンする `CSCMsgServerFaultException` で例外をキャッチできます。キャッチした例外オブジェクトの `getter` を使用することで，発生したフォルト情報（エラーの詳細）を取得できます。`CSCMsgServerFaultException` の詳細については，マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド」を参照してください。

サービス部品からユーザ定義例外のエラーがリターンした場合（ビジネスプロセスを使用するとき）

サービス部品からユーザ定義例外のエラーがリターンした場合でビジネスプロセスを使用するときの SOAP 通信でのエラーの伝わり方を次の図に示します。

図 7-22 サービス部品からユーザ定義例外のエラーがリターンした場合（ビジネスプロセスを使用するとき）の SOAP 通信でのエラーの伝わり方



サービス部品でユーザ定義例外が発生すると、そのエラーは、一度ビジネスプロセスでキャッチしてユーザ例外処理をします。サービスリクエストスタブは、HCSCサーバがリターンする CSCMsgServerFaultException で例外をキャッチできます。キャッチした例外オブジェクトの getter を使用することで、発生した例外名やフォルト情報（エラーの詳細）を取得できます。ビジネスプロセスでフォルト名を定義するこ

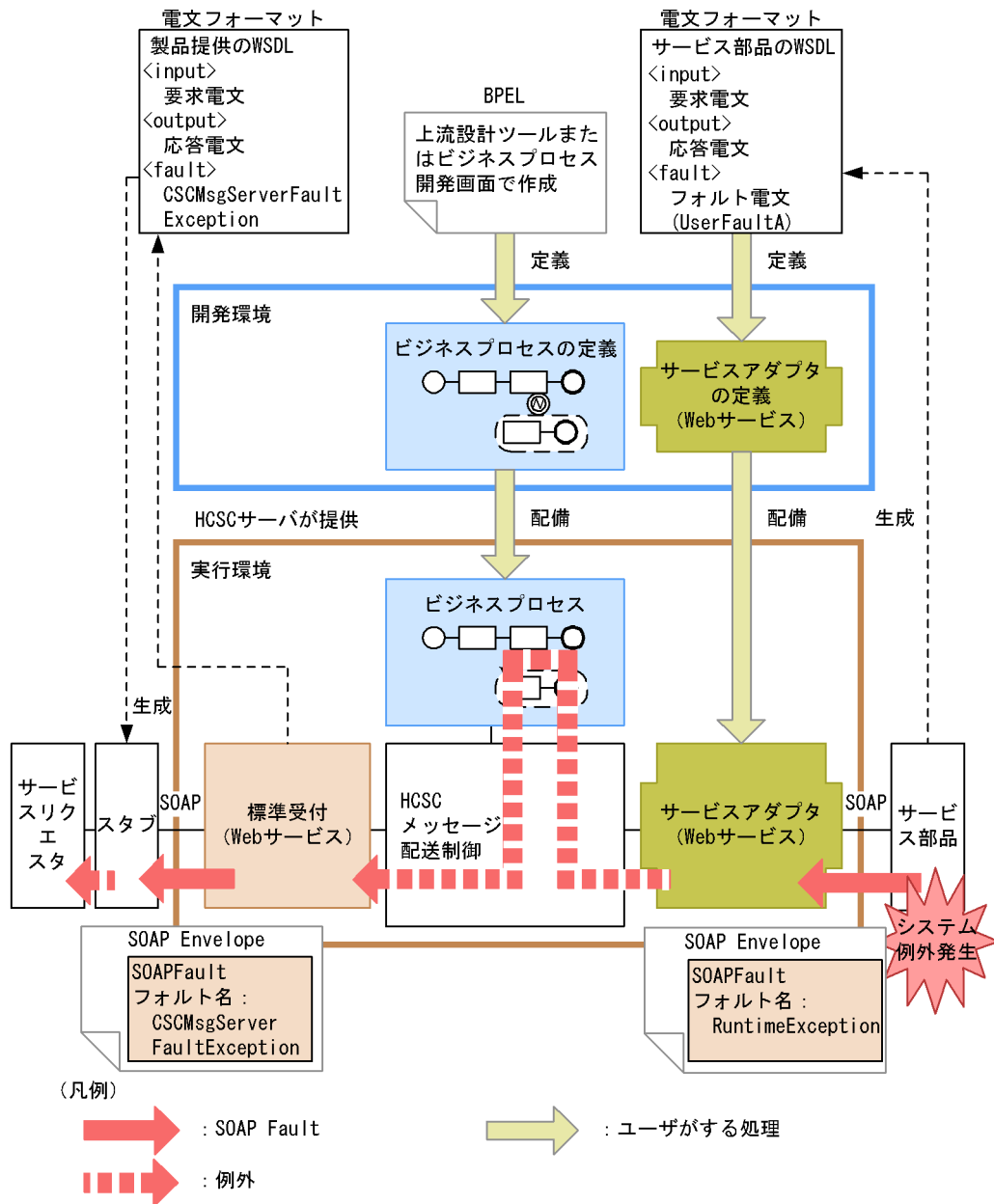
とで、サービスリクエストで発生した例外が切り分けやすくなります。

CSCMsgServerFaultException の詳細については、マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド」を参照してください。

サービス部品からユーザ定義例外以外のエラーがリターンした場合（ビジネスプロセスを使用するとき）

サービス部品からユーザ定義例外以外のエラーがリターンした場合でビジネスプロセスを使用するときの SOAP 通信でのエラーの伝わり方を次の図に示します。

図 7-23 サービス部品からユーザ定義例外以外のエラーがリターンした場合（ビジネスプロセスを使用するとき）の SOAP 通信でのエラーの伝わり方



サービス部品で想定外の例外（システム例外）が発生した場合、RuntimeExceptionとしてSOAPメッセージが伝わり、一度ビジネスプロセスでキャッチします。ビジネスプロセスでは例外として処理して、標準受付にスローします。サービスリクエストは、HCSCサーバがリターンするCSCMsgServerFaultExceptionで例外をキャッチできます。キャッチした例外オブジェクトのgetterを使用することで、発

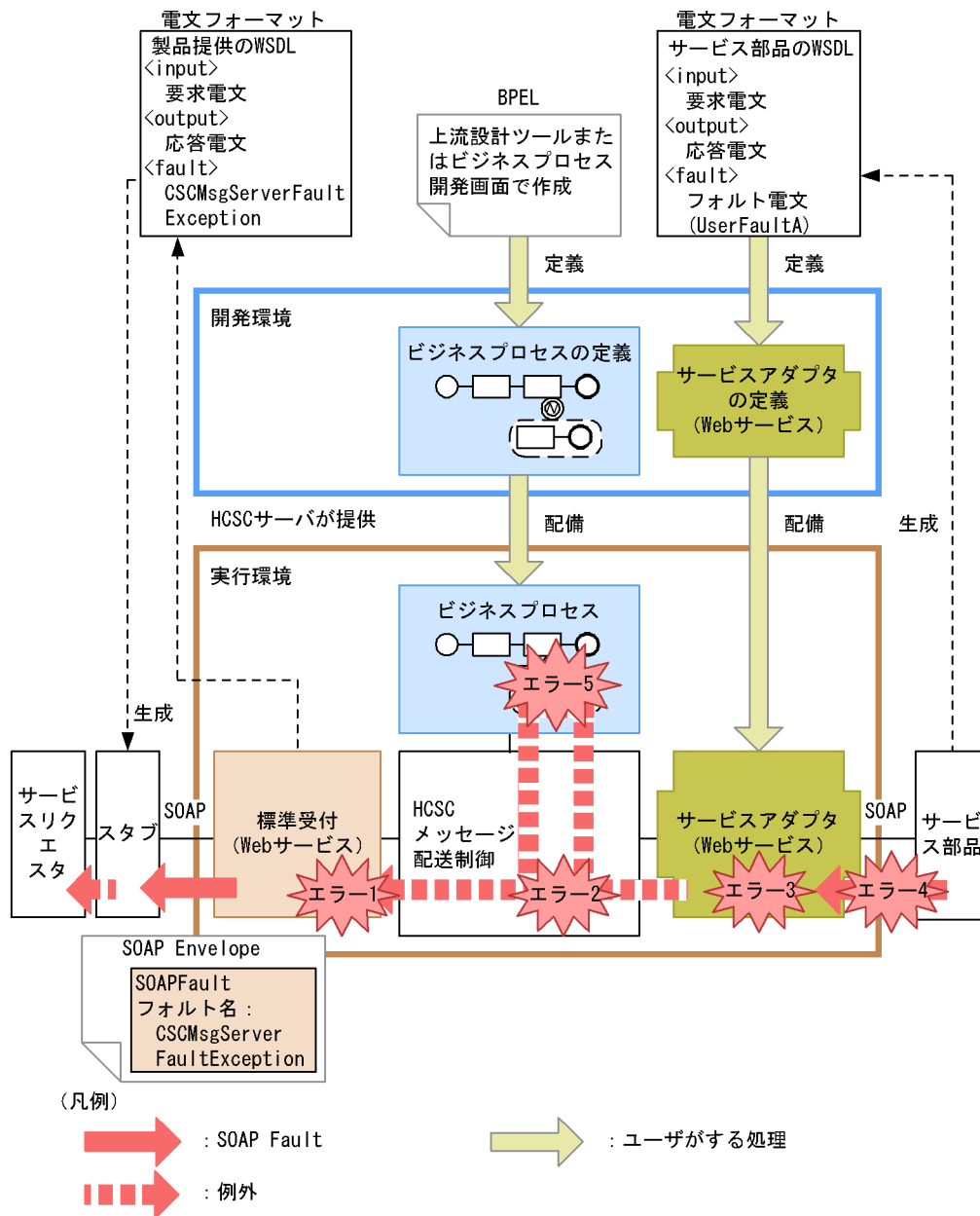
生じたフォルト情報（エラーの詳細）を取得できます。

CSCMsgServerFaultException の詳細については、マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド」を参照してください。

HCSC サーバからエラーがリターンした場合（ビジネスプロセスを使用するとき）

HCSC サーバからエラーがリターンした場合でビジネスプロセスを使用するときの SOAP 通信でのエラーの伝わり方を次の図に示します。

図 7-24 HCSC サーバからエラーがリターンした場合（ビジネスプロセスを使用するとき）の SOAP 通信でのエラーの伝わり方



図中の各エラーには，次に示すケースが該当します。

- エラー 1：要求パラメタ不正，指定文字コード不正，各種フォーマット不正など。
- エラー 2：あて先（ロケーション）が見つからない，アダプタが停止しているなど。
- エラー 3：データ変換に失敗したなど。

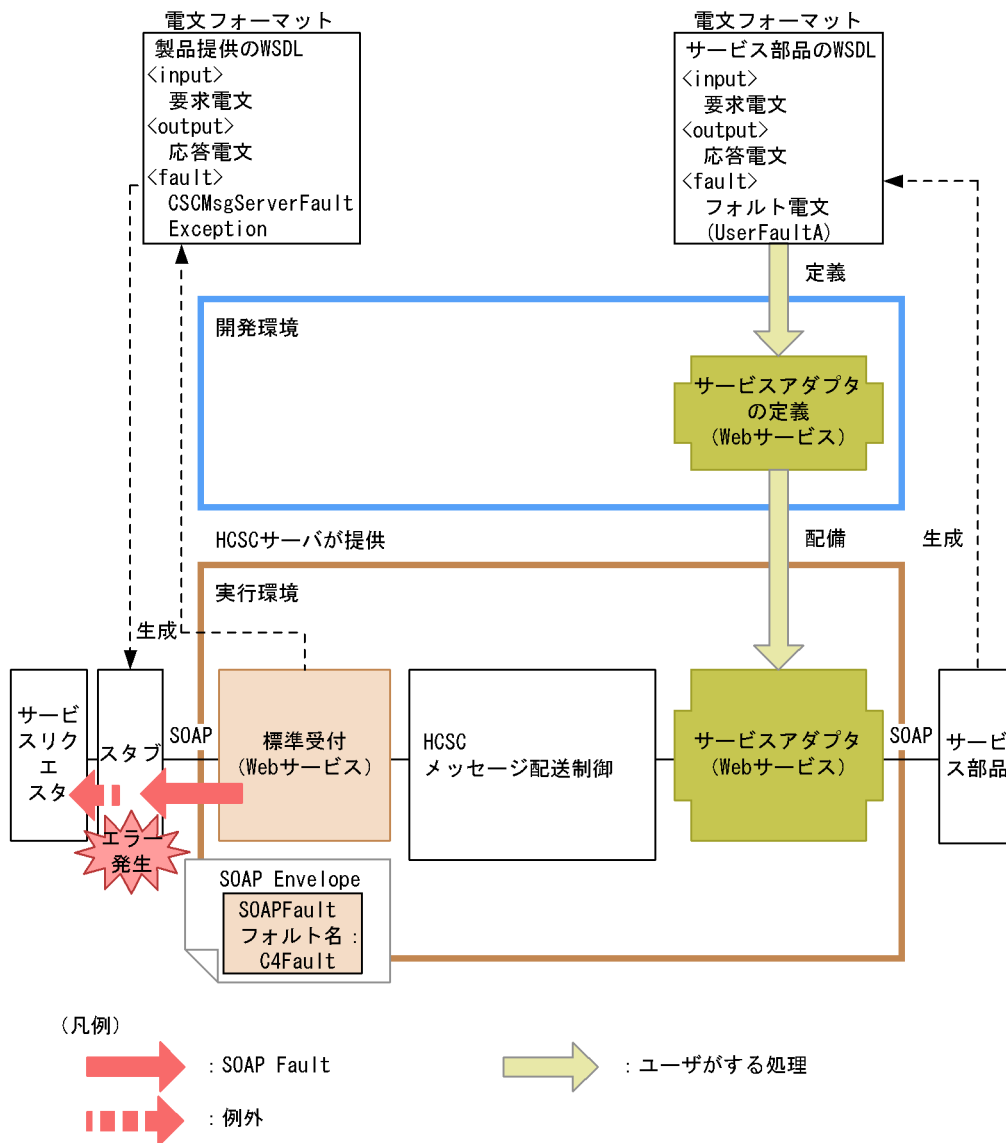
- エラー 4：あて先不正，サービス部品が停止，通信障害など
- エラー 5：ビジネスプロセス処理上での例外エラーなど。

HCSC サーバで図中のエラー 1 ~ エラー 5 のどれかを検知した場合，発生したエラーをサービスリクエストにリターンします。サービスリクエストは，HCSC サーバがリターンする `CSCMsgServerFaultException` で例外をキャッチできます。キャッチした例外オブジェクトの `getter` を使用することで，発生したフォルト情報（エラーの詳細）を取得できます。`CSCMsgServerFaultException` の詳細については，マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド」を参照してください。

サービスリクエストでエラーを検知した場合

サービスリクエストでエラーを検知した場合の SOAP 通信でのエラーの伝わり方を次の図に示します。

図 7-25 サービスリクエストでエラーを検知した場合の SOAP 通信でのエラーの伝わり方 (標準受付の場合)



サービスリクエストから HCSC サーバを呼び出せなかった場合や、サービス部品の呼び出しは完了したが何らかの原因で HCSC サーバからサービスリクエストへの応答が返らなかった場合などは、サービスリクエスト側 (クライアント側) の SOAP 通信基盤がエラーをリターンします。サービスリクエストは、Cosminexus SOAP 通信基盤がスローする C4Fault で例外をキャッチできます。キャッチした例外オブジェクトの getter を使用することで、発生したフォルト情報 (エラーの詳細) を取得できます。C4Fault の詳細については、マニュアル「Cosminexus SOAP アプリケーション開発ガイド」を参照してください。

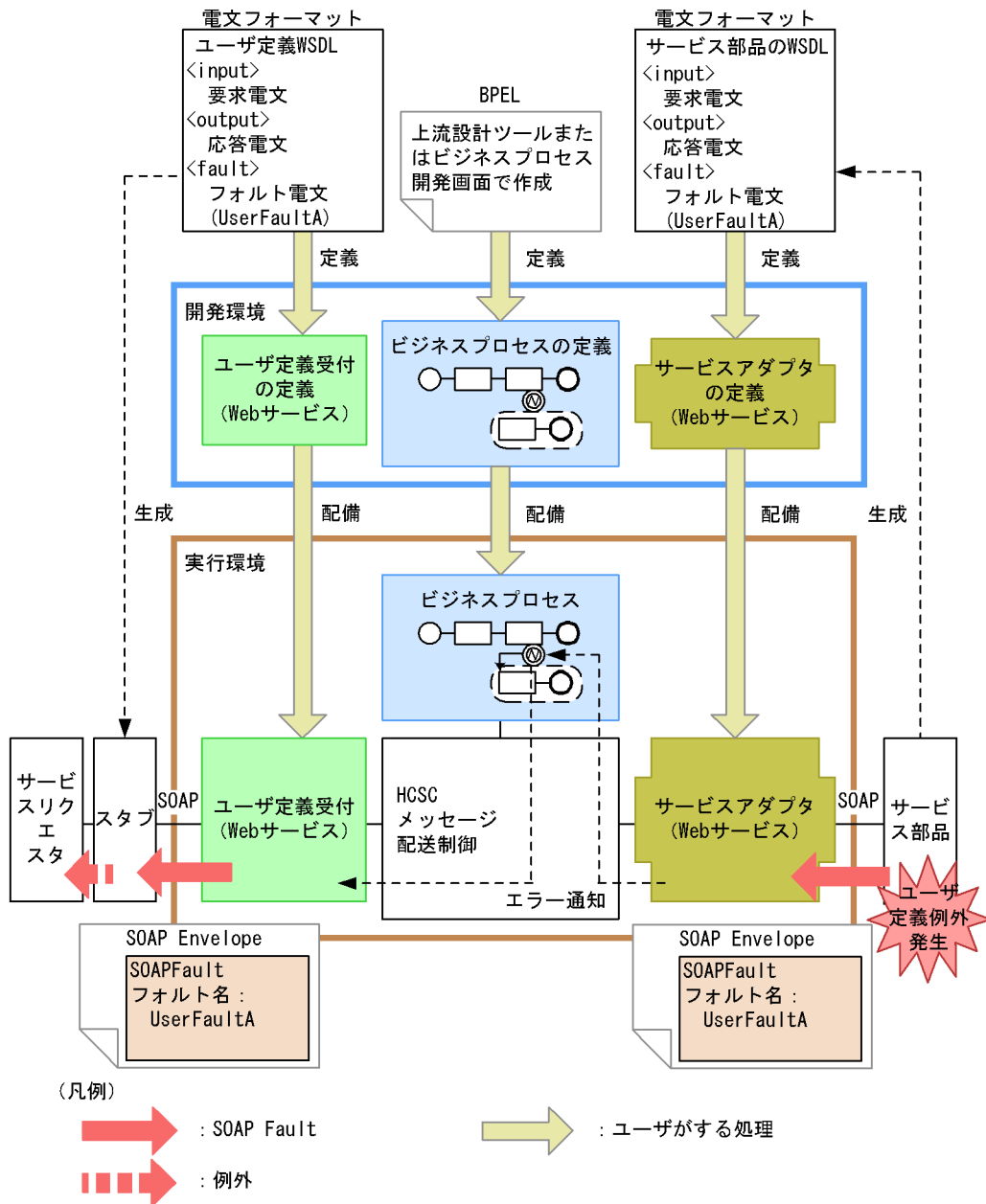
(b) ユーザ定義受付の場合

エラーの伝わり方は、エラーの種類やビジネスプロセスの有無によって異なります。

サービス部品からユーザ定義例外のエラーがリターンした場合（ビジネスプロセスを使用するとき）

サービス部品からユーザ定義例外のエラーがリターンした場合でビジネスプロセスを使用するときの SOAP 通信でのエラーの伝わり方を次の図に示します。

図 7-26 サービス部品からユーザ定義例外のエラーがリターンした場合（ビジネスプロセスを使用するとき）の SOAP 通信でのエラーの伝わり方



サービス部品で例外をスローするコーディングをしている場合、サービス部品の WSDL にはユーザ定義例外が定義されます。ビジネスプロセスで、サービス部品で発生したユーザ定義例外をキャッチし、そのままフォルトとしてサービスリクエストに応答を返すようなプロセスにしている場合、ユーザ定義受付に定義する WSDL にも同様のユーザ定義例外を定義する必要があります。これによって、サービスリ

クエスタは、サービス部品がリターンする SOAP Fault と同名の例外でキャッチできます。キャッチした例外オブジェクトを解析するための情報は、サービス部品側のプログラムで作成する必要があります。

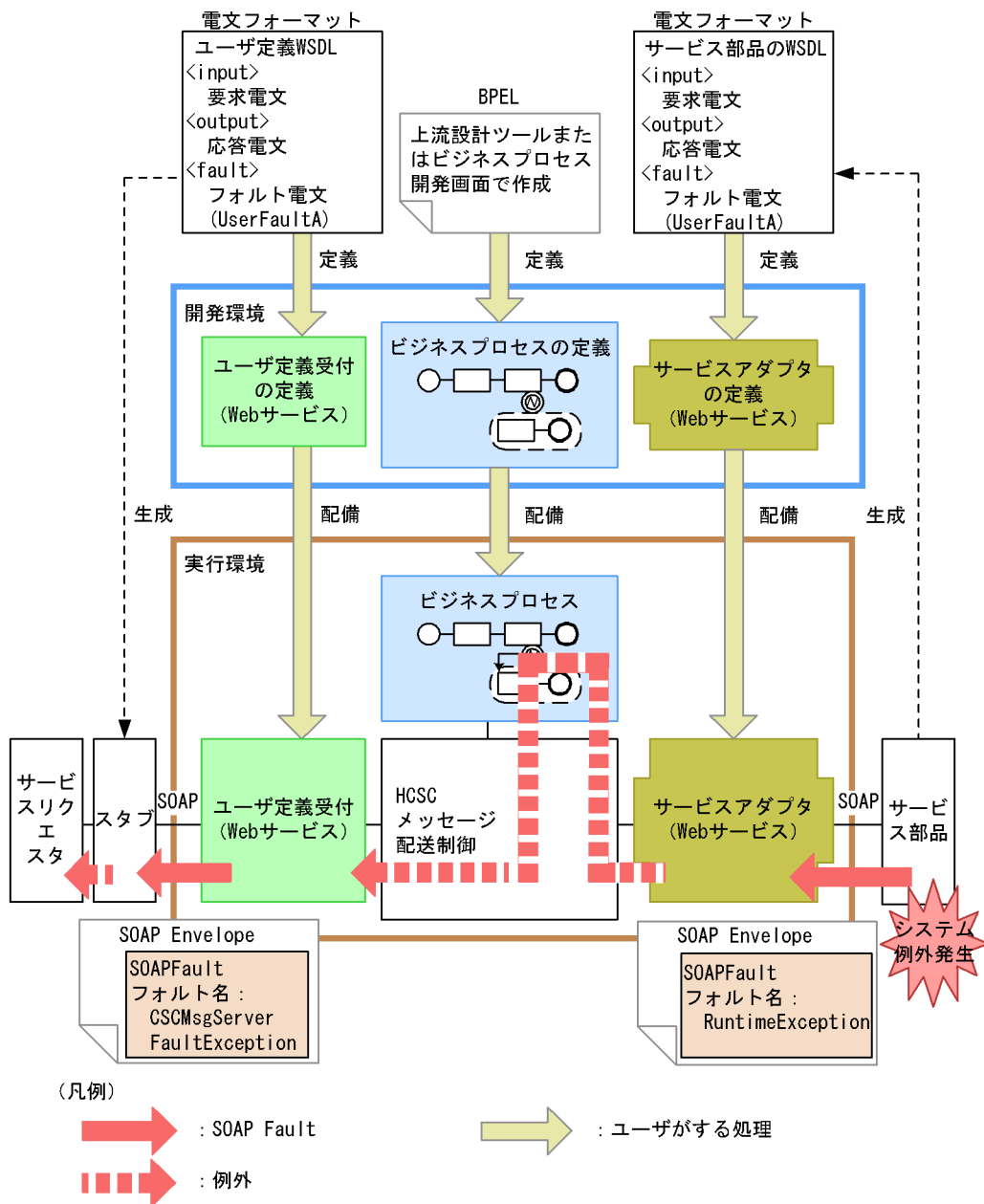
なお、ビジネスプロセスでフォルト名を定義することで、サービスリクエストで発生した例外が切り分けやすくなります。

ユーザ定義受付（Web サービス）に要求を出すサービスリクエストでエラー情報を取得する方法については、マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド」を参照してください。

サービス部品からユーザ定義例外以外のエラーがリターンした場合（ビジネスプロセスを使用するとき）

サービス部品からユーザ定義例外以外のエラーがリターンした場合でビジネスプロセスを使用するときの SOAP 通信でのエラーの伝わり方を次の図に示します。

図 7-27 サービス部品からユーザ定義例外以外のエラーがリターンした場合（ビジネスプロセスを使用するとき）の SOAP 通信でのエラーの伝わり方

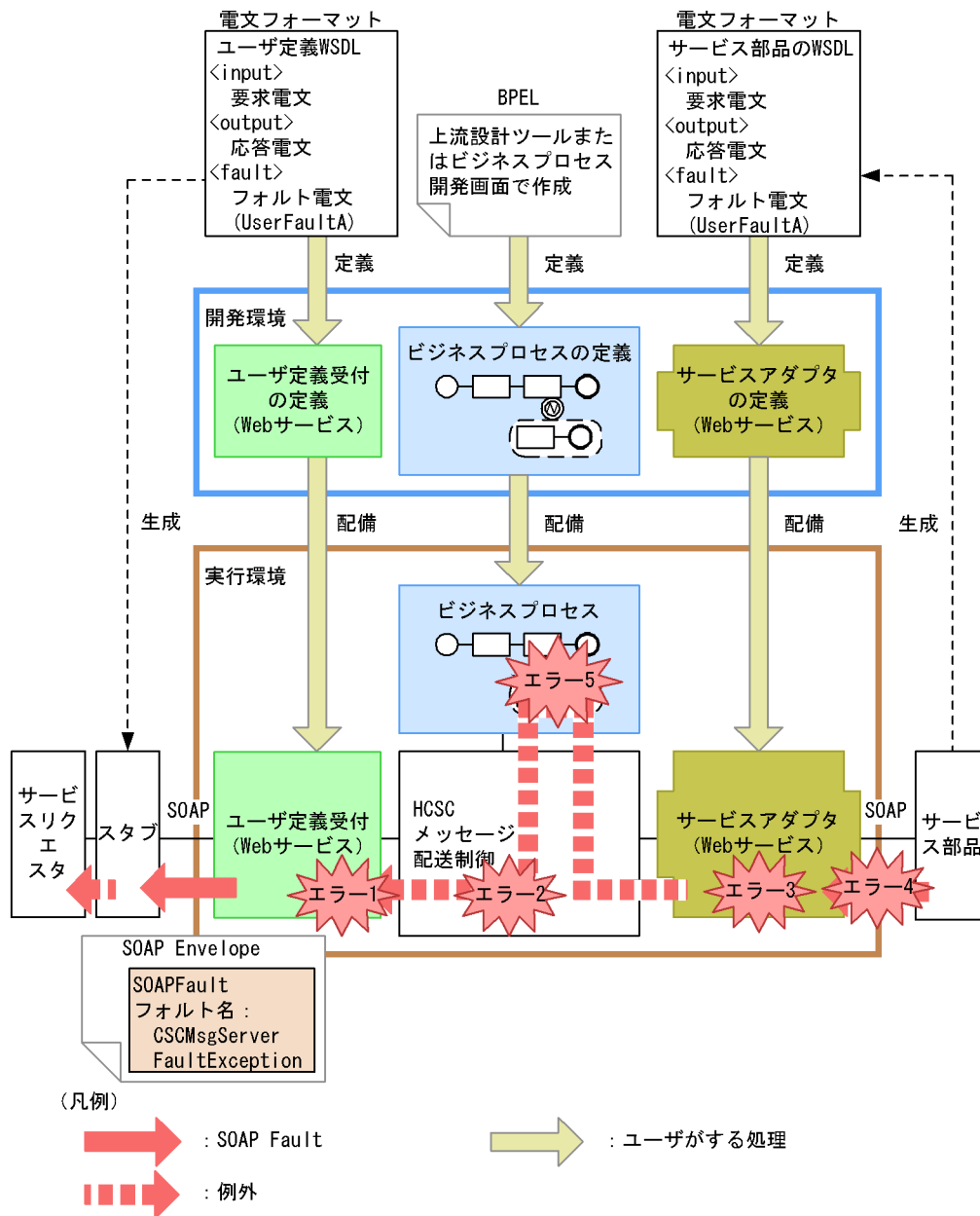


サービス部品で想定外の例外（システム例外）が発生した場合、RuntimeExceptionとしてSOAPメッセージが伝わり、一度ビジネスプロセスでキャッチします。ビジネスプロセスでは例外として処理し、ユーザ定義受付にスローします。HCSCサーバはCSCMsgServerFaultExceptionのSOAP Faultでリターンしますが、サービスリクエストスタブが使用するWSDLにはCSCMsgServerFaultExceptionが

定義されていないため、Cosminexus SOAP 通信基盤が提供する C4Fault で例外をキャッチします。キャッチした例外オブジェクトの getter を使用することで、発生したフォルト情報（エラーの詳細）を取得できます。C4Fault の詳細については、マニュアル「Cosminexus SOAP アプリケーション開発ガイド」を参照してください。

HCSC サーバからエラーがリターンした場合（ビジネスプロセスを使用するとき）
HCSC サーバからエラーがリターンした場合でビジネスプロセスを使用するときの SOAP 通信でのエラーの伝わり方を次の図に示します。

図 7-28 HCSC サーバからエラーがリターンした場合（ビジネスプロセスを使用するとき）の SOAP 通信でのエラーの伝わり方



図中の各エラーには、次に示すケースが該当します。

- エラー 1：指定文字コード不正、各種フォーマット不正など。
- エラー 2：あて先（ロケーション）が見つからない、アダプタが停止しているなど。
- エラー 3：データ変換に失敗したなど。

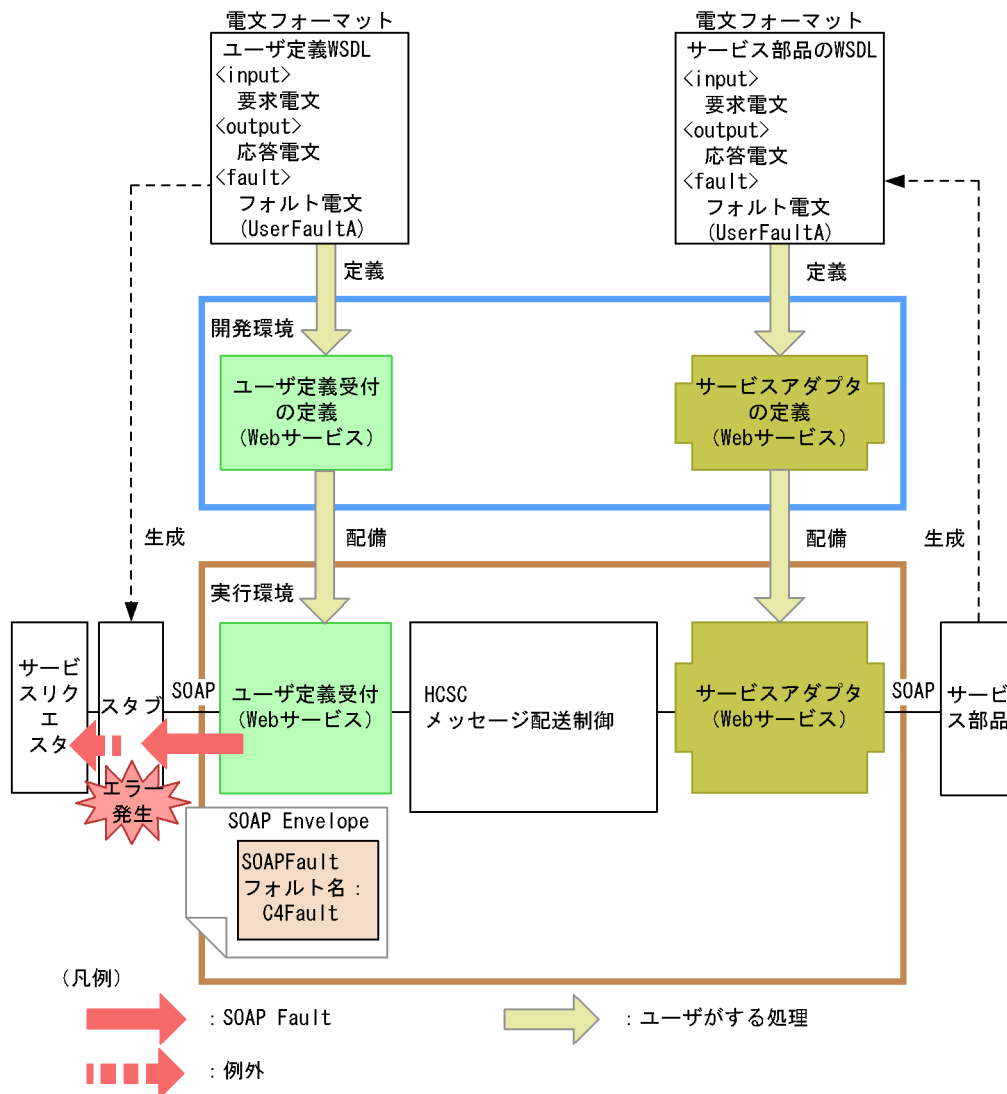
- エラー 4：あて先不正，サービス部品が停止，通信障害など
- エラー 5：ビジネスプロセス処理上での例外エラーなど。

HCSC サーバで図中のエラー 1 ~ エラー 5 のどれかを検知した場合，発生したエラーをサービスリクエストにリターンします。HCSC サーバは CSCMsgServerFaultException の SOAP Fault でリターンしますが，サービスリクエストが使用する WSDL には CSCMsgServerFaultException が定義されていないため，Cosminexus SOAP 通信基盤が提供する C4Fault で例外をキャッチします。キャッチした例外オブジェクトの getter を使用することで，発生したフォルト情報（エラーの詳細）を取得できます。C4Fault の詳細については，マニュアル「Cosminexus SOAP アプリケーション開発ガイド」を参照してください。

サービスリクエストでエラーを検知した場合

サービスリクエストでエラーを検知した場合の SOAP 通信でのエラーの伝わり方を次の図に示します。

図 7-29 サービスリクエストでエラーを検知した場合の SOAP 通信でのエラーの伝わり方 (ユーザ定義受付の場合)



あて先不正, HCSC サーバが停止, 通信障害などで, サービスリクエストから HCSC サーバを呼び出せなかった場合や, サービス部品の呼び出しは完了したが何らかの原因で HCSC サーバからサービスリクエストへの応答が返らなかった場合などでは, サービスリクエスト側 (クライアント側) の SOAP 通信基盤がエラーをリターンします。サービスリクエストは, Cosminexus SOAP 通信基盤がスローする C4Fault で例外をキャッチできます。キャッチした例外オブジェクトの getter を使用することで, 発生したフォルト情報 (エラーの詳細) を取得できます。C4Fault の詳細については, マニュアル「Cosminexus SOAP アプリケーション開発ガイド」を参照してください。

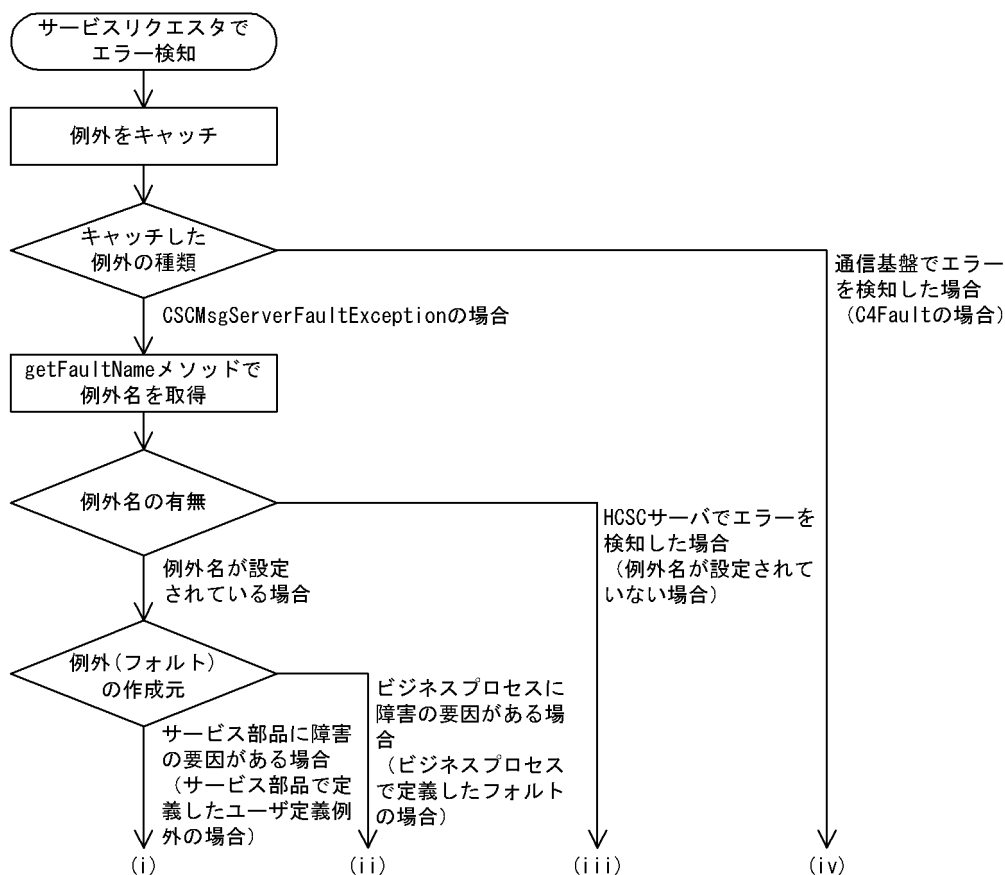
(2) 問題発生個所の切り分け方

標準受付の場合とユーザ定義受付の場合とで問題発生個所の切り分け方が異なります。なお、SOAP による通信ができない場合の問題発生個所の切り分けについては、マニュアル「Cosminexus SOAP アプリケーション開発ガイド」を参照してください。

(a) 標準受付の場合

サービスリクエストから標準受付（Web サービス）を使用してサービス部品を呼び出した場合の問題発生個所の切り分け方について次の図に示します。

図 7-30 問題発生個所の切り分け方（サービスリクエストから標準受付（Web サービス）を使用してサービス部品を呼び出した場合）



(i) サービス部品に障害の要因がある場合（サービス部品で定義したユーザ定義例外の場合）

サービス部品に障害の要因があるおそれがあります。次のメソッドを使用してサービス部品が返した SOAP Fault の内容を取得できます。

- `getCscmsgFaultCode` : FaultCode 情報を取得します。

7. 障害対策

- getCscmsgFaultString : FaultString 情報を取得します。
- getCscmsgFaultActor : FaultActor 情報を取得します。
- getCscmsgFaultDetail : FaultDetail 情報を取得します。

要因は、次の観点で調査してください。

- サービスリクエスタから要求したユーザ電文
- サービス部品稼働マシン
- サービス部品のプログラム

サービス部品の呼び出しを再送するかどうかは、HCSC サーバを介したサービスリクエスタとサービス部品間（エンドツーエンド）の取り決めとなります。

(ii) ビジネスプロセスに障害の要因がある場合（ビジネスプロセスで定義したフォルトの場合）

ビジネスプロセスで実行したアクティビティの処理に障害の要因があるおそれがあります（サービス呼出アクティビティの場合、呼び出したサービス部品に障害の要因があるおそれがあります）。

次のメソッドを使用してビジネスプロセスまたはサービス部品が返した SOAP Fault の内容を取得できます。

- getCscmsgFaultCode : FaultCode 情報を取得します。
- getCscmsgFaultString : FaultString 情報を取得します。
- getCscmsgFaultActor : FaultActor 情報を取得します。
- getCscmsgFaultDetail : FaultDetail 情報を取得します。

要因は、次の観点で調査してください。

- サービスリクエスタから要求したユーザ電文
- サービス部品稼働マシン
- サービス部品のプログラム
- ビジネスプロセスの定義内容

サービス部品の呼び出しを再送するかどうかは、HCSC サーバを介したサービスリクエスタとサービス部品間（エンドツーエンド）の取り決めとなります。

また、ビジネスプロセスをどのようなプロセスに設計したかによって、再送（ビジネスプロセスの再実行）をするかどうかサービスリクエスタを含むシステム設計する必要があります。

(iii) HCSC サーバでエラーを検知した場合（例外名が設定されていない場合）

次のメソッドを使用してエラーの内容を取得できます。取得したエラーコードおよびエラーメッセージの対策に従って対処します。

- getErrorMessage : HCSC サーバ内で検知したエラーのエラーメッセージを取得します。
- getErrorCode : HCSC サーバ内で検知したエラーのエラーコードを取得します。

また、Cosminexus サービスプラットフォームが出力するメッセージログも参照して、調査します。

要因は、次の観点で調査してください。

- サービスリクエストから要求した引数の内容
- HCSC サーバの設定または状態
- サービスアダプタの定義内容
- ビジネスプロセスの定義内容
- サービスリクエストから要求したユーザ電文
- サービス部品稼働マシン
- サービス部品のプログラム
- ネットワークの状態

次に示す処理が常に実行されているかを確認することで、問題発生箇所を絞り込みます。

1. サービスアダプタ（クライアント）から SOAP メッセージが正しく出力されているか。
2. SOAP メッセージはサービス部品稼働マシン（サーバ）の SOAP エンジンに届いているか。
3. サービス部品稼働マシン（サーバ）のサービス部品でメッセージが処理できているか。
4. サービス部品稼働マシン（サーバ）のサービス部品からの返信用 SOAP メッセージは正しく出力されているか。
5. サービス部品稼働マシン（サーバ）のサービス部品からの返信用 SOAP メッセージはサービスアダプタ（クライアント）の SOAP エンジンに届いているか。

確認するときは Cosminexus SOAP が出力する障害情報を参照します。障害情報の取得方法については、「7.3.2(3) Cosminexus SOAP が出力する障害情報の取得方法」を参照してください。Cosminexus SOAP が出力する障害情報の形式については、マニュアル「Cosminexus SOAP アプリケーション開発ガイド」を参照してください。

なお、Cosminexus SOAP が出力するアプリケーションログを取得することで、サービスアダプタとサービス部品間で送受信している電文データを確認できます。ただし、サービス部品呼び出しの処理性能に影響するため、テストやデバッグ環境での使用を推奨します。

サービス部品の呼び出しを再送するかどうかは、エラーの内容によって異なります。一時的な障害の場合は、再送を試みることで成功することがありますが、次に示すエラーの場合は、再送を試みてもエラーとなります。

- サービスリクエストから要求した引数の内容が誤っている場合
- HCSC サーバの設定に誤りがある場合
- サービスアダプタやビジネスプロセスの定義に誤りがある場合
- サービスリクエストから要求したユーザ電文に誤りがある場合など

(iv) 通信基盤でエラーを検知した場合（C4Fault の場合）

Cosminexus SOAP 通信基盤が提供する C4Fault からエラーの内容を取得できます。取得したエラーコードおよびエラーメッセージの対策に従って対処します。

C4Fault の詳細については、マニュアル「Cosminexus SOAP アプリケーション開

7. 障害対策

発ガイド」を参照してください。

要因は、次の観点で調査してください。

- サービスリクエストで使用している WSDL
- サービスリクエスト稼働マシンの SOAP 通信基盤の設定または状態
- HCSC サーバの設定または状態
- ネットワークの状態

次に示す処理が常に行われているかを確認することで、問題発生箇所を絞り込みます。

1. サービスリクエスト（クライアント）から SOAP メッセージが正しく出力されているか。
 2. SOAP メッセージは HCSC サーバ稼働マシン（サーバ）の SOAP エンジンに届いているか。
 3. HCSC サーバ稼働マシン（サーバ）のサービス部品からの返信用 SOAP メッセージは正しく出力されているか。
 4. HCSC サービス稼働マシン（サーバ）のサービス部品からの返信用 SOAP メッセージはサービスリクエスト（クライアント）の SOAP エンジンに届いているか。
- 確認するときは Cosminexus SOAP が出力する障害情報を参照します。障害情報の取得方法については、「7.3.2(3) Cosminexus SOAP が出力する障害情報の取得方法」を参照してください。Cosminexus SOAP が出力する障害情報の形式については、マニュアル「Cosminexus SOAP アプリケーション開発ガイド」を参照してください。

なお、Cosminexus SOAP が出力するアプリケーションログを取得することで、サービスリクエストと HCSC サーバ間で送受信している電文データを確認できます。ただし、サービス部品呼び出しの処理性能に影響するため、テストやデバッグ環境での使用を推奨します。

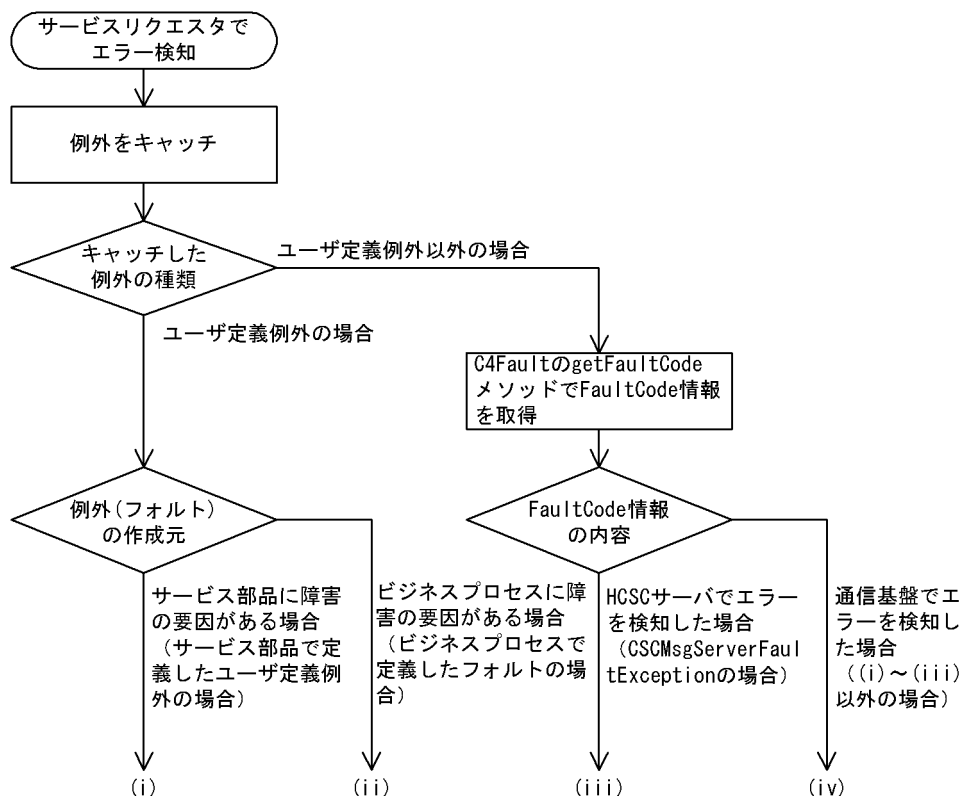
サービス部品の呼び出しを再送するかどうかは、エラーの内容によって異なります。一時的な障害の場合は、再送を試みることで成功することがありますが、次に示すエラーの場合は、再送を試みてもエラーとなります。

- サービスリクエストで使用している WSDL が誤っている場合
- サービスリクエスト稼働マシンの SOAP 通信基盤の設定に誤りがある場合
- HCSC サーバの設定に誤りがある場合

(b) ユーザ定義受付の場合

サービスリクエストからユーザ定義受付（Web サービス）を使用してサービス部品呼び出した場合の問題発生箇所の切り分け方について次の図に示します。

図 7-31 問題発生個所の切り分け方（サービスリクエストからユーザ定義受付（Web サービス）を使用してサービス部品呼び出した場合）



(i) サービス部品に障害の要因がある場合（サービス部品で定義したユーザ定義例外の場合）

サービス部品に障害の要因があるおそれがあります。エラーの情報は、サービス部品で定義した内容になります（キャッチした例外オブジェクトの解析するための情報は、サービス部品側のプログラムで作成する必要があります）。

要因は、次の観点で調査してください。

- サービスリクエストから要求したユーザ電文
- サービス部品稼働マシン
- サービス部品のプログラム

サービス部品の呼び出しを再送するかどうかは、HCSCサーバを介したサービスリクエストとサービス部品間（エンドツーエンド）の取り決めとなります。

(ii) ビジネスプロセスに障害の要因がある場合（ビジネスプロセスで定義したフォルトの場合）

ビジネスプロセスで実行したアクティビティの処理に障害の要因があるおそれがあります（サービス呼出アクティビティの場合、呼び出したサービス部品に障害の要

7. 障害対策

因があるおそれがあります)。

エラーの情報は、ビジネスプロセスで定義したフォルトの内容になります(キャッチした例外オブジェクトを解析するための情報は、ビジネスプロセスを定義するときに設定しておく必要があります)。

要因は、次の観点で調査してください。

- サービスリクエスタから要求したユーザ電文
- サービス部品稼働マシン
- サービス部品のプログラム
- ビジネスプロセスの定義内容

サービス部品の呼び出しを再送するかどうかは、HCSC サーバを介したサービスリクエスタとサービス部品間(エンドツーエンド)の取り決めとなります。

また、ビジネスプロセスの設計内容によっても、再送(ビジネスプロセスの再実行)するかどうかシステム設計する必要があります。

(iii)HCSC サーバでエラーを検知した場合(CSCMsgServerFaultExceptionの場合)

Cosminexus SOAP 通信基盤が提供する C4Fault からエラーの内容を取得できます。取得したエラーコードおよびエラーメッセージの対策に従って対処します。サービスリクエスタで C4Fault からエラー情報を取得するときの実装方法については、マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド」を参照してください。C4Faultの詳細については、マニュアル「Cosminexus SOAP アプリケーション開発ガイド」を参照してください。また、Cosminexus サービスプラットフォームが出力するメッセージログも参照して、調査します。

要因は、次の観点で調査してください。

- サービスリクエスタから要求した引数の内容
- HCSC サーバの設定または状態
- サービスアダプタの定義内容
- ビジネスプロセスの定義内容
- サービスリクエスタから要求したユーザ電文
- サービス部品稼働マシン
- サービス部品のプログラム
- ネットワークの状態

次に示す処理が常に実行されているかを確認することで、問題発生箇所を絞り込みます。

1. サービスアダプタ(クライアント)から SOAP メッセージが正しく出力されているか。
2. SOAP メッセージはサービス部品稼働マシン(サーバ)の SOAP エンジンに届いているか。
3. サービス部品稼働マシン(サーバ)のサービス部品でメッセージが処理できているか。
4. サービス部品稼働マシン(サーバ)のサービス部品からの返信用 SOAP メッセージ

ジは正しく出力されているか。

5. サービス部品稼働マシン（サーバ）のサービス部品からの返信用 SOAP メッセージはサービスアダプタ（クライアント）の SOAP エンジンに届いているか。

確認するときは Cosminexus SOAP が出力する障害情報を参照します。障害情報の取得方法については、「7.3.2(3) Cosminexus SOAP が出力する障害情報の取得方法」を参照してください。Cosminexus SOAP が出力する障害情報の形式については、マニュアル「Cosminexus SOAP アプリケーション開発ガイド」を参照してください。

なお、Cosminexus SOAP が出力するアプリケーションログを取得することで、サービスアダプタとサービス部品間で送受信している電文データを確認できます。ただし、サービス部品呼び出しの処理性能に影響するため、テストやデバッグ環境での使用を推奨します。

サービス部品の呼び出しを再送するかどうかは、エラーの内容によって異なります。一時的な障害の場合は、再送を試みることで成功することがありますが、次に示すエラーの場合は、再送を試みてもエラーとなります。

- サービスリクエストから要求した引数の内容が誤っている場合
- HCSC サーバの設定に誤りがある場合
- サービスアダプタやビジネスプロセスの定義に誤りがある場合
- サービスリクエストから要求したユーザ電文に誤りがある場合など

(iv) 通信基盤でエラーを検知した場合（(i)～(iii)以外の場合）

Cosminexus SOAP 通信基盤が提供する C4Fault からエラーの内容を取得できます。取得したエラーコードおよびエラーメッセージの対策に従って対処してください。サービスリクエストで C4Fault からエラー情報を取得する際の実装方法については、マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド」を参照してください。C4Fault の詳細については、マニュアル「Cosminexus SOAP アプリケーション開発ガイド」を参照してください。また、Cosminexus サービスプラットフォームが出力するメッセージログも参照して、調査します。

要因は、次の観点で調査してください。

- サービスリクエストで使用している WSDL
- サービスリクエスト稼働マシンの SOAP 通信基盤の設定または状態
- HCSC サーバの設定または状態
- ネットワークの状態

次に示す処理が常に行われているかを確認することで、問題発生箇所を絞り込みます。

1. サービスリクエスト（クライアント）から SOAP メッセージが正しく出力されているか。
2. SOAP メッセージは HCSC サーバ稼働マシン（サーバ）の SOAP エンジンに届いているか。
3. HCSC サーバ稼働マシン（サーバ）のサービス部品からの返信用 SOAP メッセージ

7. 障害対策

ジは正しく出力されているか。

4. HCSC サービス稼働マシン（サーバ）のサービス部品からの返信用 SOAP メッセージはサービスリクエスト（クライアント）の SOAP エンジンに届いているか。確認するときは Cosminexus SOAP が出力する障害情報を参照します。障害情報の取得方法については、「7.3.2(3) Cosminexus SOAP が出力する障害情報の取得方法」を参照してください。

Cosminexus SOAP が出力する障害情報の形式については、マニュアル「Cosminexus SOAP アプリケーション開発ガイド」を参照してください。

なお、Cosminexus SOAP が出力するアプリケーションログを取得することで、サービスリクエストと HCSC サーバ間で送受信している電文データを確認できます。ただし、サービス部品呼び出しの処理性能に影響するため、テストやデバッグ環境での使用を推奨します。

サービス部品の呼び出しを再送するかどうかは、エラーの内容によって異なります。一時的な障害の場合は、再送を試みることで成功することがありますが、次に示すエラーの場合は、再送を試みてもエラーとなります。

- サービスリクエストで使用している WSDL が誤っている場合
- サービスリクエスト稼働マシンの SOAP 通信基盤の設定に誤りがある場合
- HCSC サーバの設定に誤りがある場合など

(3) HCSC サーバから応答する SOAP Fault の内容

HCSC サーバから応答する SOAP Fault（SOAP メッセージ）について、どの要素に何の情報が設定されるかを次の表に示します。

エラーのケースの番号は「(2) 問題発生個所の切り分け方」で示す番号に相当します。

表 7-40 HCSC サーバから応答する SOAP Fault の内容

HCSC サーバから応答する SOAP Fault			エラーのケース	
SOAP Fault 要素	SOAPFault 名称	フォルト名	標準受付の (i), (ii) の場合	標準受付の (iii), ユーザ定義受付の (iii) の場合
faultcode	Fault コード	-	SOAP エンジンに依存する値です。message part のメッセージ型属性が参照する QName です。	
faultstring	Fault 文字列	-	SOAP エンジンに依存する値です。Cosminexus SOAP 通信基盤では、KDCCP00015-E を出力します。	
faultactor	Fault 生成者	-	SOAP エンジンに依存する値です。Cosminexus SOAP 通信基盤では、値はありません。	

HCSC サーバから応答する SOAP Fault			エラーのケース	
SOAP Fault 要素	SOAPFault 名称	フォルト名	標準受付の (i), (ii) の場合	標準受付の (iii), ユーザ定義受付の (iii) の場合
detail	Fault 詳細	errorMessage	次に示すエラーの内容です。 <ul style="list-style-type: none"> • HCSC サーバ内で検知したエラー • サービス部品, ビジネスプロセス, およびカスタムアダプタからのエラー 	
		errorCode	次に示す例外の内容に対応するエラーコードです。 <ul style="list-style-type: none"> • HCSC サーバ内で検知したエラー • サービス部品, ビジネスプロセス, およびカスタムアダプタからのエラー 	
		processInstanceID	ビジネスプロセスのインスタンス ID の情報です。ビジネスプロセスでエラーが発生した場合に値が設定されます。	
		cscmsgFaultCode	サービス部品 (Web サービス), ビジネスプロセス, またはカスタムアダプタからの FaultCode 情報です。	値はありません。
		cscmsgFaultString	サービス部品 (Web サービス), ビジネスプロセス, またはカスタムアダプタからの FaultString 情報です。	値はありません。
		cscmsgFaultActor	サービス部品 (Web サービス), ビジネスプロセス, またはカスタムアダプタからの FaultActor 情報です。	値はありません。
		cscmsgFaultDetail	サービス部品 (Web サービス), ビジネスプロセス, またはカスタムアダプタからの Detail 情報です。	値はありません。

7. 障害対策

HCSC サーバから応答する SOAP Fault			エラーのケース	
SOAP Fault 要素	SOAPFault 名称	フォルト名	標準受付の (i), (ii) の場合	標準受付の (iii), ユーザ定義受付の (iii) の場合
		faultName	サービス部品 (Web サービスまたは SessionBean) または ビジネスプロセスからのフォルト名 (例外名) 情報です。次の場合に値が設定されます。 <ul style="list-style-type: none"> サービス部品 (Web サービスまたは SessionBean) からのユーザ定義例外の SOAP Fault の場合 ビジネスプロセスからのフォルトの場合 	値はありません。

(凡例)

- : 該当しません。

注 1 ユーザ定義受付の (i), (ii) の場合は, ユーザ定義例外の SOAP Fault となります。

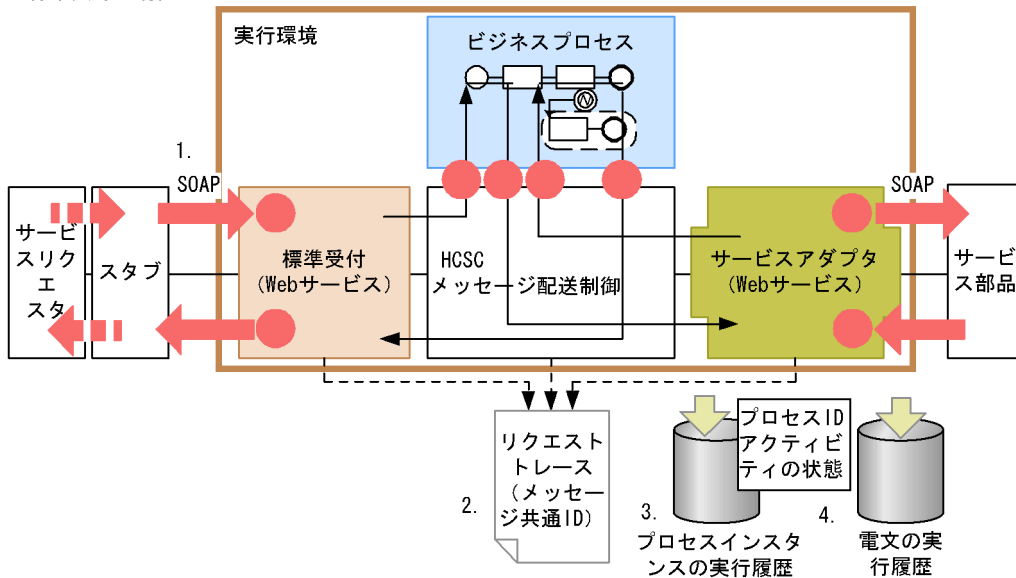
注 2 標準受付の (iv), またはユーザ定義受付の (iv) の場合は, サービスリクエスタ側の Cosminexus SOAP 通信基盤からエラー通知します。

(4) そのほかの障害要因の特定方法 (サービス部品呼び出し要求の実行履歴の追跡)

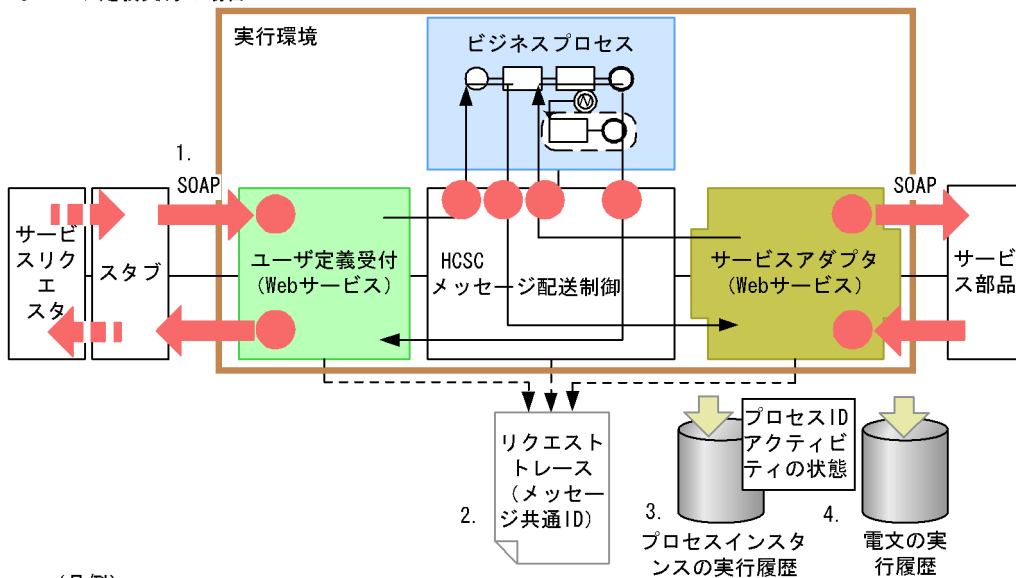
ビジネスプロセスを使用する場合には, サービスリクエスタへ応答した例外およびエラーメッセージから問題発生個所を切り分ける方法のほかに, サービスリクエスタ側で設定したクライアント関連 ID や, ビジネスプロセスの関連セットを基に問題発生個所を特定する方法があります。ここでは, ビジネスプロセスを使用する場合に, クライアント関連 ID や, ビジネスプロセスの関連セットを基にしてサービス部品呼び出し要求の実行履歴を追跡する手順について説明します。サービス部品呼び出し要求の実行履歴の追跡を次の図に示します。

図 7-32 サービス部品呼び出し要求の実行履歴の追跡 (Web サービスの場合)

●標準受付の場合



●ユーザ定義受付の場合



(凡例)

- : SOAPメッセージ
- : スタブとのインタフェース
- : 実行履歴の出力
- : 電文の流れ
- : リクエストトレースの収集
- : リクエストトレース取得ポイント

実行履歴の追跡の基本的な流れは次のようになります。

7. 障害対策

1. 要求時に、受付ごとに次の指定をします。
 - 標準受付の場合
要求時のパラメタにクライアント関連 ID を指定、または要求電文に関連セットを指定します。
 - ユーザ定義受付の場合
要求電文に関連セットを指定します。
2. エラーが発生したときのメッセージ共通 ID を取得することで、障害が発生したビジネスプロセスのインスタンスを特定します。
3. データベースに出力されているプロセスインスタンスの実行履歴を検索し、メッセージ共通 ID と対応したビジネスプロセスのプロセス ID を取得します。
プロセス ID を使ってアクティビティの状態を知ることができ、それによってどこの処理で止まっているのかや、どこまで処理が進んでいるのかがわかります。
4. メッセージ共通 ID を使って、電文の実行履歴からユーザ電文を取得します。
電文の内容を確認でき、障害調査の原因究明に役立ちます。

サービス部品呼び出し要求の実行履歴を追跡するには、主に次の二つの方法があります。

(a) サービスリクエストから指定したクライアント関連 ID からたどる方法

(b) ユーザ電文に指定したビジネスプロセスの関連セットからたどる方法

(a) サービスリクエストから指定したクライアント関連 ID からたどる方法

サービスリクエストから指定したクライアント関連 ID からたどる手順を次に示します。

1. クライアント関連 ID を調査します。
クライアント関連 ID は、サービス部品呼び出しを要求するサービスリクエスト側のプログラムで、要求時（呼び出し時）に設定する情報です。サービスリクエストからの要求電文と、HCSC サーバで管理している実行履歴や、ログおよびトレースとを対応づけるために使用します。そのため、HCSC サーバに送信した要求ごとに異なる ID を指定することを推奨します（サービスリクエスト作成時に指定が必要です）。
サービス部品呼び出し要求の実行履歴を追跡する場合、サービスリクエスト側の要求者からシステム管理者に障害調査を依頼するとき、クライアント関連 ID を伝え、システム管理者はその情報を基に実行履歴を追跡します。

サービスリクエストでのクライアント関連 ID を指定するコーディングの例を次に示します。ここでは、標準受付（Web サービス）を呼び出すときの引数に、クライアント関連 ID ("ClientID0001") を設定しています。


```

:
《省略》
:
CSCMsgSyncServiceDeliveryWSImplServiceLocator locator = new CSCMsgSyncServiceDeliveryWSImplServiceLocator();
CSCMsgSyncServiceDeliveryWSImpl ws = null;
try {
    ws = locator.getCSCMsgSyncServiceDeliveryWSImpl();
} catch (ServiceException e) {
    e.printStackTrace();
    return;
}

// サービスのメソッドの呼び出し
String result = ws.invokeXML(
    serviceName, // サービス名
    "ClientID0001", // クライアント関連ID
    null, // リクエストフォーマットID
    null, // レスポンスフォーマットID
    operationName, // オペレーション名
    userData); // ユーザ電文

```

クライアント関連ID

2. クライアント関連IDを基にリクエストトレースを調査し、エラーが発生したときのメッセージ共通IDを取得します。メッセージ共通IDによって、障害が発生したビジネスプロセスのインスタンスを特定できます。

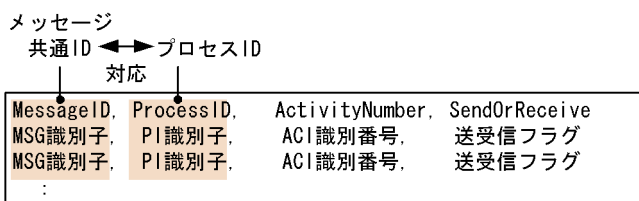
なお、クライアント関連IDは重複しているおそれがあります。そのため、適宜実行時刻やビジネスプロセス名（サービス名）を取得しておくことで、該当箇所を特定します。

リクエストトレースの例を次に示します。リクエストトレースの"message"列にクライアント関連IDやビジネスプロセス名（サービス名）があり、先頭にメッセージ共通IDが出力されています。

7. 障害対策

クライアント 相関 ID	メッセージ 共通 ID	対応
yyyy/mm/dd hh:mm:ss.sss pid tld message-id	message (LANG=ja)	
8624 2007/03/09 09:42:48.653 CSCMSG 00193779 00455CF0	CSC_MyCSC_2007-04-01_09:42:48.621_1	MSG_MyCSC_SyncWS_2007-04-01_09:42:48.621_1 RCP , SOAP , IN , Service Name=BP001, Client ID=ClientID0001
8888 2007/03/09 09:42:48.746 CSCMSG 00193779 00455CF0	CSC_MyCSC_2007-04-01_09:42:48.621_1	MSG_MyCSC_SyncWS_2007-04-01_09:42:48.621_1 BPREQ, , CAL , , BP Service Name=BP001, BP Process ID=null, BP Request Type=null
9610 2007/03/09 09:42:49.012 CSCMSG 00193779 00455CF0	CSC_MyCSC_2007-04-01_09:42:48.621_1	MSG_MyCSC_SyncBP_2007-04-01_09:42:49.012_2 BPRCP, , IN , MyCSC , Service Name=WebService001
9932 2007/03/09 09:42:49.340 CSCMSG 00193779 00455CF0	CSC_MyCSC_2007-04-01_09:42:48.621_1	MSG_MyCSC_SyncBP_2007-04-01_09:42:49.012_2 SVC , SOAP , CAL , web_undef , SVA Service Name=WebService001, Client ID=ClientID0001, Adapter Name=web_undef
0949 2007/03/09 09:42:49.543 CSCMSG 00193779 00455CF0	CSC_MyCSC_2007-04-01_09:42:48.621_1	MSG_MyCSC_SyncBP_2007-04-01_09:42:49.012_2 SVC , SOAP , RET , web_undef , SVA ERROR Service Name=WebService001, Client ID=ClientID0001, Adapter Name=web_undef
1418 2007/03/09 09:42:49.606 CSCMSG 00193779 00455CF0	CSC_MyCSC_2007-04-01_09:42:48.621_1	MSG_MyCSC_SyncBP_2007-04-01_09:42:49.012_2 BPRCP, , OUT , MyCSC , ERROR Service Name=WebService001, Exception=jp.co.Hitachi.soft.csc.msg.message.reception.CSCMsgServiceUserException
1730 2007/03/09 09:42:49.746 CSCMSG 00193779 00455CF0	CSC_MyCSC_2007-04-01_09:42:48.621_1	MSG_MyCSC_SyncWS_2007-04-01_09:42:48.621_1 BPREQ, , RET , , BP ERROR Service Name=BP001, BP Process ID=null, BP Request Type=null, Exception=jp.co.Hitachi.soft.csc.msg.adapter.CSCBpProcessException
2209 2007/03/09 09:42:49.825 CSCMSG 00193779 00455CF0	CSC_MyCSC_2007-04-01_09:42:48.621_1	MSG_MyCSC_SyncWS_2007-04-01_09:42:48.621_1 RCP , SOAP , OUT , , ERROR Service Name=BP001, Client ID=ClientID0001, Exception=jp.co.Hitachi.soft.csc.msg.message.reception.ejb.CSCMsgServerFaultException

- 取得したメッセージ共通 ID を基に、プロセスインスタンスの実行履歴を参照してビジネスプロセスのプロセス ID を取得します。プロセス ID を取得するには、プロセスインスタンスの検索 (cscpiselect) コマンドを使用します。
cscpiselect コマンドでは、開始日時とビジネスプロセス名 (サービス名) を条件に、プロセスインスタンスの実行履歴を検索します。
また、-table オプションに "relation" を指定し、検索条件 (where 句) に SQL 条件を指定して、該当するメッセージ関連情報を表示します。



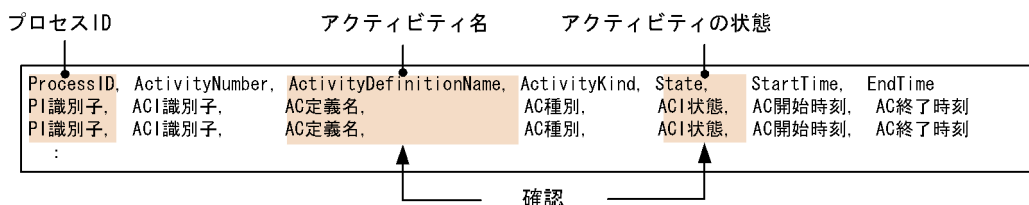
cscpiseselect コマンドの使い方については「6.1.2 プロセスインスタンスの実行履歴を検索する」を、コマンドの文法については「10. コマンド」の「cscpiseselect (プロセスインスタンスの検索)」を参照してください。

- 取得したプロセス ID を基に、プロセスインスタンスの実行履歴を参照して、ビジネスプロセスのアクティビティとその状態を取得します。アクティビティの情報を取得するには、プロセスインスタンスの検索 (cscpiseselect) コマンドを使用します。

cscpiseselect コマンドでは、開始日時とビジネスプロセス名 (サービス名) を条件に、プロセスインスタンスの実行履歴を検索します。

また、-table オプションに "activity" を指定し、検索条件 (where 句) に SQL 条件を指定して、該当するアクティビティ情報を表示します。

状態が "Executing" となっている個所が現在実行中のアクティビティです。状態を確認することで、どのアクティビティで止まっているかがわかります。



cscpiseselect コマンドの使い方については「6.1.2 プロセスインスタンスの実行履歴を検索する」を、コマンドの文法については「10. コマンド」の「cscpiseselect (プロセスインスタンスの検索)」を参照してください。

- 電文の実行履歴を採取する設定をし、さらに電文の実行履歴の電文データ (ユーザ電文) を採取する設定をしている場合、ユーザ電文の内容を確認できます。

実行履歴の採取については、HCSC サーバランタイム定義で設定します。詳細は「9.

定義ファイル」の「HCSC サーバランタイム定義ファイル」を参照してください。

電文の実行履歴を取得するには、電文の実行履歴情報の表示 (csmshistory) コマンドを使用します。

csmshistory コマンドでは、メッセージ共通 ID を条件として電文の実行履歴を検索します (クライアント関連 ID や日時から検索することもできます)。

csmshistory コマンドの使い方については「6.2.3 電文の実行履歴を利用する」を、コマンドの文法については「10. コマンド」の「csmshistory (電文の実行履歴情報の表示)」を参照してください。

(b) ユーザ電文に指定したビジネスプロセスの関連セットからたどる方法

ユーザ電文に指定したビジネスプロセスの関連セットからたどる手順を次に示します。

1. 関連セットを調査します。

関連セットは、サービス部品呼び出しを要求するサービスリクエスト側のプログラムで、要求時のユーザ電文に設定する情報です。サービスリクエストから HCSC サーバを介してサービス部品に送信する要求電文を一意に識別するために利用する文字列です。

HCSC サーバからの応答は、関連セットを含んだ応答電文をサービスリクエストに返信します。その結果、サービスリクエストは受信した応答電文が、どの要求電文に対する応答であるのかを一意に識別できます。

関連セットを使用するには、開発環境でのビジネスプロセス定義時に定義する必要があります。詳細については、マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム開発ガイド」を参照してください。

サービス部品呼び出し要求の実行履歴を追跡する場合、サービスリクエスト側の要求者からシステム管理者に障害調査を依頼するときに、関連セットと要求したビジネスプロセス名（サービス名）を伝え、システム管理者はその情報を基に実行履歴を追跡します。

サービスリクエスト利用者が関連セットの値をとらえていない場合は、HCSC サーバにインポートしたりポジトリを開発環境で参照して、該当のビジネスプロセスの関連セットを調査する必要があります。関連セットの調査方法は次のとおりです。

1. ビジネスプロセス定義画面の [変数・関連セット] アイコンをダブルクリックします。

変数・関連セット一覧ダイアログが表示されます。

2. 変数・関連セット一覧ダイアログの「表示」ボタンをクリックします。

変数の表示ダイアログが表示されます。

3. ユーザ電文と変数表示ダイアログの XML スキーマを突き合わせて、関連セットへのパスを取得します。

4. 変数・関連セット一覧ダイアログを使って、パス名から変数名や部分名を取得し、変数・関連セット一覧ダイアログから同じ変数名や部分名を持つ関連セットを探して関連セット名を取得します。

2. 取得した関連セットを基に、プロセスインスタンスの実行履歴を参照して、ビジネスプロセスのプロセス ID を取得します。プロセス ID を取得するには、プロセスインスタンスの検索（cscpiselect）コマンドを使用します。

cscpiselect コマンドでは、関連セットを条件としてプロセスインスタンスの実行履歴を検索します。

また、-table オプションに "process_set" を指定し、検索条件（where 句）に SQL 条件を指定し、該当するプロセス概要情報を表示します。

相関セットをキーに検索した結果

プロセスID

ProcessID,	ProcessDefinitionName,	ProcessDefinitionVersion,	State,	StartTime,	EndTime
PI識別子,	ビジネスプロセス定義名,	ビジネスプロセス定義バージョン,	PI状態,	PI開始時刻,	PI終了時刻
PI識別子,	ビジネスプロセス定義名,	ビジネスプロセス定義バージョン,	PI状態,	PI開始時刻,	PI終了時刻
:					

cscpiseselect コマンドの使い方については「6.1.2 プロセスインスタンスの実行履歴を検索する」を、コマンドの文法については「10. コマンド」の「cscpiseselect (プロセスインスタンスの検索)」を参照してください。

- 取得したプロセスIDを基に、プロセスインスタンスの実行履歴を参照して、ビジネスプロセスのアクティビティとその状態を取得します。アクティビティの情報を取得するには、プロセスインスタンスの検索 (cscpiseselect) コマンドを使用します。

cscpiseselect コマンドでは、開始日時とビジネスプロセス名 (サービス名) を条件としてプロセスインスタンスの実行履歴を検索します。

また、-table オプションに "activity" を指定し、検索条件に該当するアクティビティ情報を表示します。

状態が "Executing" となっている個所が現在実行中のアクティビティです。状態を確認することで、どのアクティビティで止まっているかがわかります。

プロセスID	アクティビティ名	アクティビティの状態				
ProcessID,	ActivityNumber,	ActivityDefinitionName,	ActivityKind,	State,	StartTime,	EndTime
PI識別子,	ACI識別子,	AC定義名,	AC種別,	ACI状態,	AC開始時刻,	AC終了時刻
PI識別子,	ACI識別子,	AC定義名,	AC種別,	ACI状態,	AC開始時刻,	AC終了時刻
:						

確認

cscpiseselect コマンドの使い方については「6.1.2 プロセスインスタンスの実行履歴を検索する」を、コマンドの文法については「10. コマンド」の「cscpiseselect (プロセスインスタンスの検索)」を参照してください。

7.7.2 SessionBean 実行時の障害対策

(1) SessionBean での通信でのエラーの伝わり方

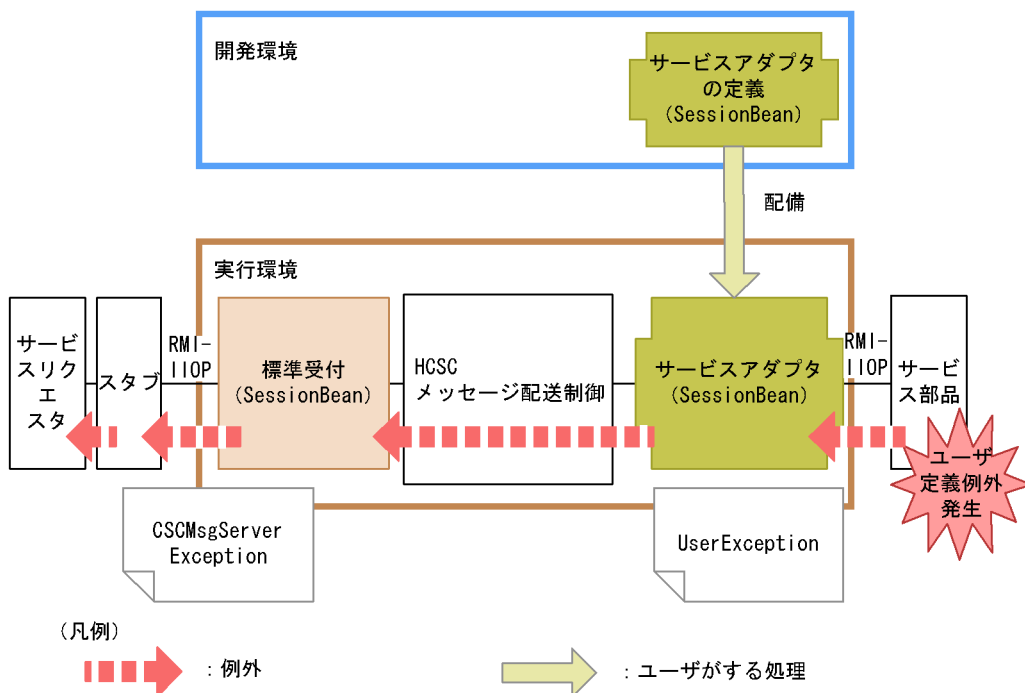
サービスリクエストから標準受付を使用してサービス部品を呼び出す場合のエラーの伝わり方を説明します。エラーの伝わり方は、エラーの種類やビジネスプロセスの有無によって異なります。

サービス部品からユーザ定義例外のエラーがリターンした場合 (ビジネスプロセスを使用しないとき)

サービス部品からユーザ定義例外のエラーがリターンした場合でビジネスプロセスを使用しないときの SessionBean での通信でのエラーの伝わり方を次の図に示しま

す。

図 7-33 サービス部品からユーザ定義例外のエラーがリターンした場合（ビジネスプロセスを使用しないとき）の SessionBean での通信でのエラーの伝わり方

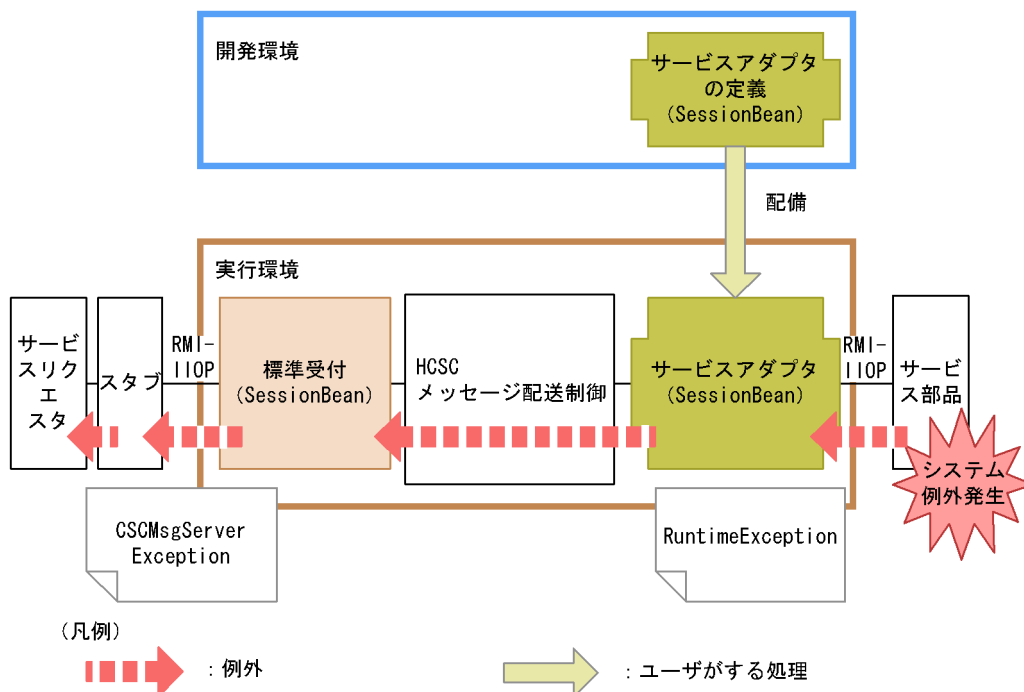


サービス部品で発生した例外は、そのまま例外として HCSC サーバに伝わります。例外をキャッチした HCSC サーバはサービスリクエストに対して CSCMsgServerException をスローします。キャッチした例外オブジェクトの getter を使用することで、発生した例外名や例外の内容（エラーの詳細）を取得できます。CSCMsgServerException の詳細については、マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド」を参照してください。

サービス部品からユーザ定義例外以外のエラーがリターンした場合（ビジネスプロセスを使用しないとき）

サービス部品からユーザ定義例外以外のエラーがリターンした場合でビジネスプロセスを使用しないときの SessionBean での通信でのエラーの伝わり方を次の図に示します。

図 7-34 サービス部品からユーザ定義例外以外のエラーがリターンした場合（ビジネスプロセスを使用しないとき）の SessionBean での通信でのエラーの伝わり方

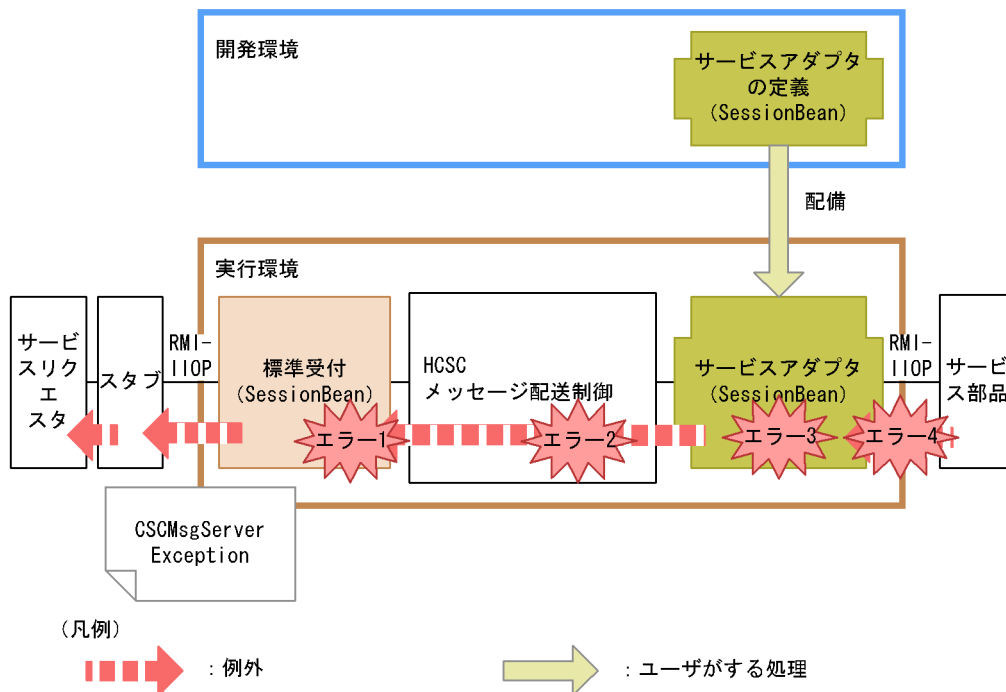


サービス部品で想定外の例外が発生した場合，RuntimeException（システム例外）として HCSC サーバに伝わります。例外をキャッチした HCSC サーバはサービスリクエストに対して CSCMsgServerException をスローします。キャッチした例外オブジェクトの getter を使用することで，発生した例外の内容（エラーの詳細）を取得できます。CSCMsgServerException の詳細については，マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド」を参照してください。

HCSC サーバからエラーがリターンした場合（ビジネスプロセスを使用しないとき）
 HCSC サーバからエラーがリターンした場合でビジネスプロセスを使用しないときの SessionBean での通信でのエラーの伝わり方を次の図に示します。

7. 障害対策

図 7-35 HCSC サーバからエラーがリターンした場合（ビジネスプロセスを使用しないとき）の SessionBean での通信でのエラーの伝わり方



図中の各エラーには、次に示すケースが該当します。

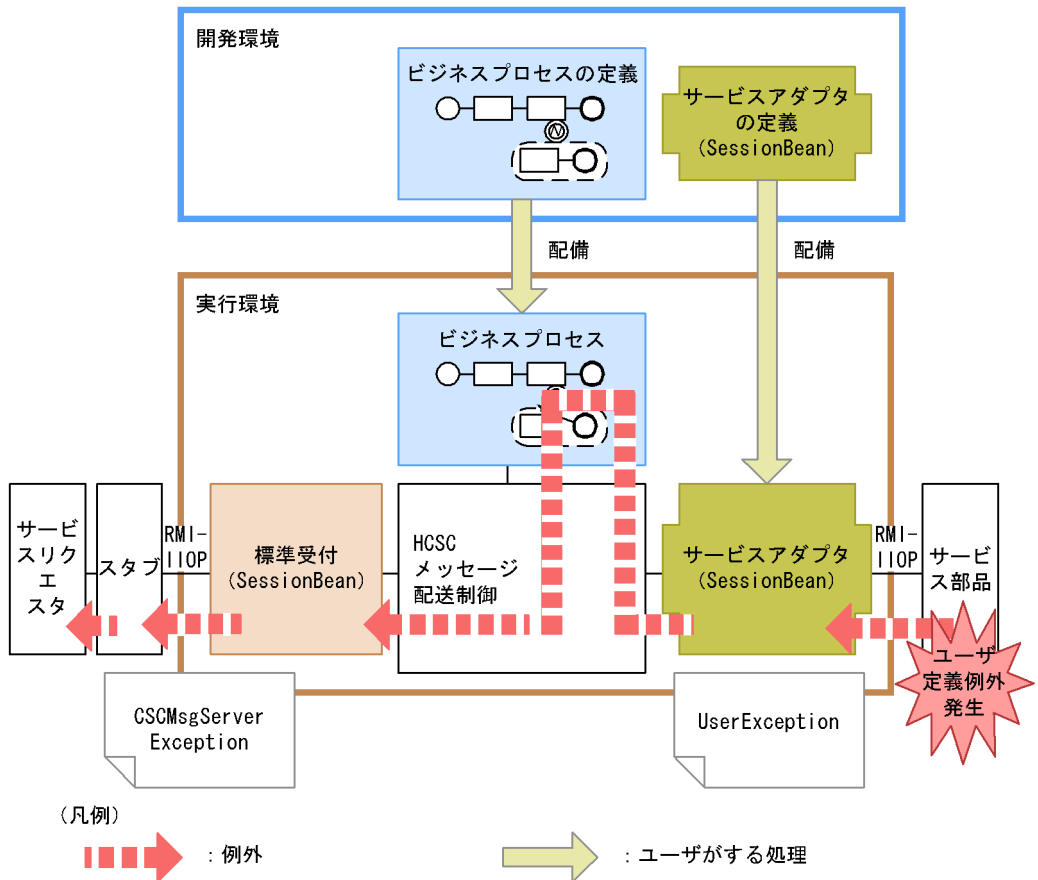
- エラー 1：要求パラメタ不正など。
- エラー 2：あて先（ロケーション）が見つからない，アダプタが停止しているなど。
- エラー 3：データ変換に失敗したなど。
- エラー 4：あて先不正，サービス部品が停止，通信障害など

HCSC サーバで図中のエラー 1～エラー 4 のどれかを検知した場合，発生したエラーの情報を CSCMsgServerException でサービスリクエストスタブにスローします。サービスリクエストスタブは，キャッチした例外オブジェクトの getter を使用することで，発生した例外の内容（エラーの詳細）を取得できます。CSCMsgServerException の詳細については，マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド」を参照してください。

サービス部品からユーザ定義例外のエラーがリターンした場合（ビジネスプロセスを使用するとき）

サービス部品からユーザ定義例外のエラーがリターンした場合でビジネスプロセスを使用するときの SessionBean での通信でのエラーの伝わり方を次の図に示します。

図 7-36 サービス部品からユーザ定義例外のエラーがリターンした場合（ビジネスプロセスを使用するとき）の SessionBean での通信でのエラーの伝わり方

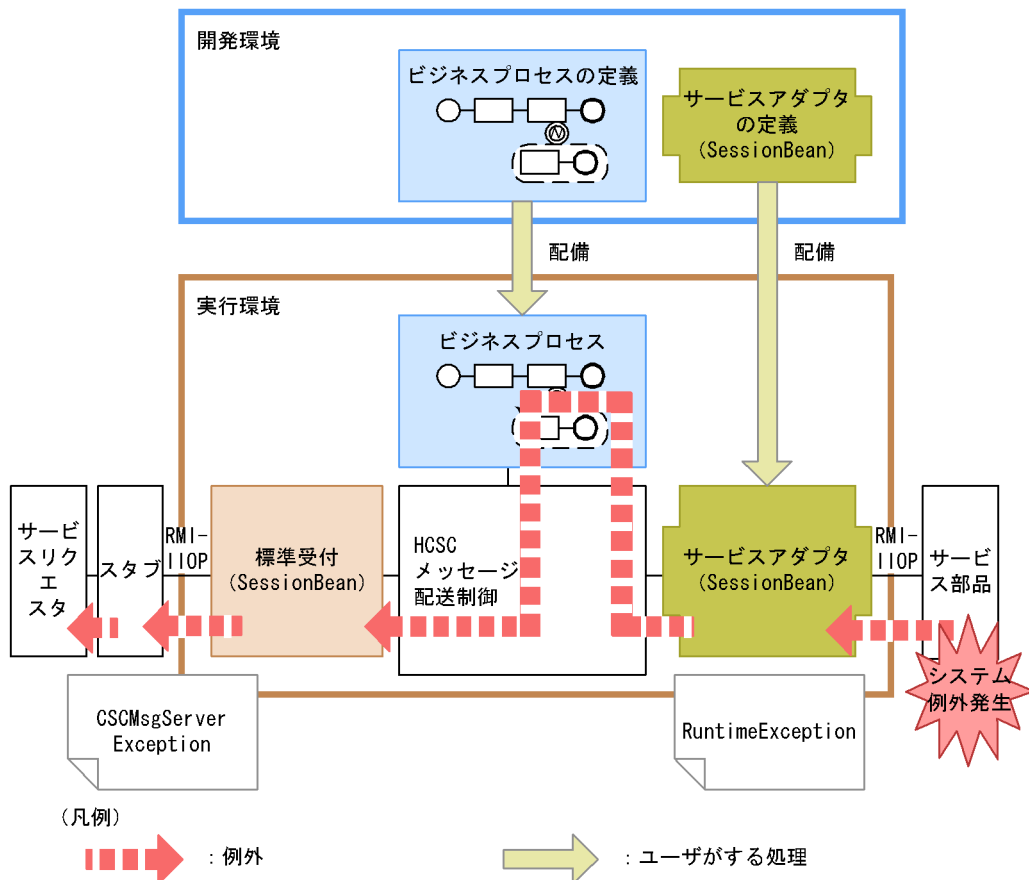


サービス部品でユーザ定義例外が発生すると、そのエラーは、一度ビジネスプロセスでキャッチします。ビジネスプロセスでサービス部品が失敗したことを示す例外に変換し、例外を伝えます。その後、サービスリクエストに対して CSCMsgServerException をスローします。キャッチした例外オブジェクトの getter を使用することで、発生した例外の内容（エラーの詳細）を取得できます。CSCMsgServerException の詳細については、マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド」を参照してください。

サービス部品からユーザ定義例外以外のエラーがリターンした場合（ビジネスプロセスを使用するとき）

サービス部品からユーザ定義例外以外のエラーがリターンした場合でビジネスプロセスを使用するときの SessionBean での通信でのエラーの伝わり方を次の図に示します。

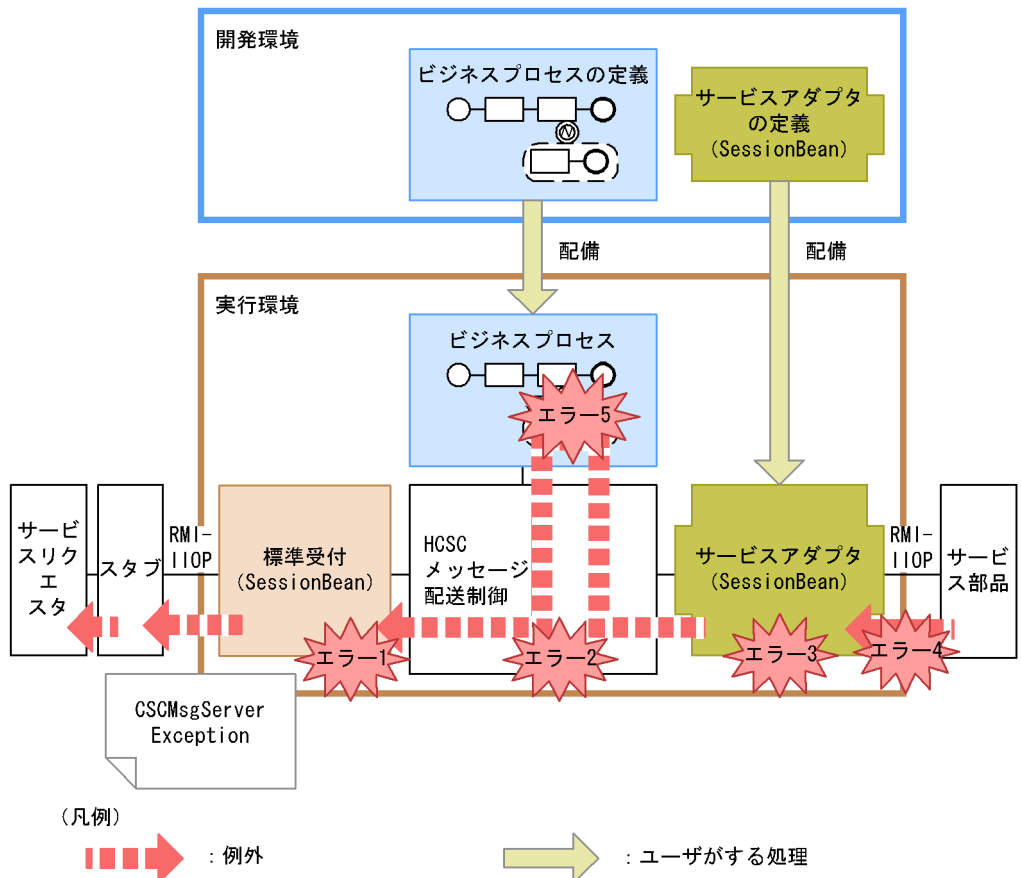
図 7-37 サービス部品からユーザ定義例外以外のエラーがリターンした場合（ビジネスプロセスを使用するとき）の SessionBean での通信でのエラーの伝わり方



サービス部品で想定外の例外が発生した場合、そのエラーは一度ビジネスプロセスでキャッチします。ビジネスプロセスでサービス部品が失敗したことを示す例外に変換し、例外を伝えます。その後、サービスリクエストに対して CSCMsgServerException をスローします。キャッチした例外オブジェクトの getter を使用することで、発生した例外の内容（エラーの詳細）を取得できます。CSCMsgServerException の詳細については、マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド」を参照してください。

HCSC サーバからエラーがリターンした場合（ビジネスプロセスを使用するとき）
 HCSC サーバからエラーがリターンした場合でビジネスプロセスを使用するときの SessionBean での通信でのエラーの伝わり方を次の図に示します。

図 7-38 HCSC サーバからエラーがリターンした場合（ビジネスプロセスを使用するとき）の SessionBean での通信でのエラーの伝わり方



図中の各エラーには、次に示すケースが該当します。

- エラー 1：要求パラメタ不正など。
- エラー 2：あて先（ロケーション）が見つからない，アダプタが停止しているなど。
- エラー 3：データ変換に失敗したなど。
- エラー 4：あて先不正，サービス部品が停止，通信障害など
- エラー 5：ビジネスプロセス処理上での例外エラーなど。

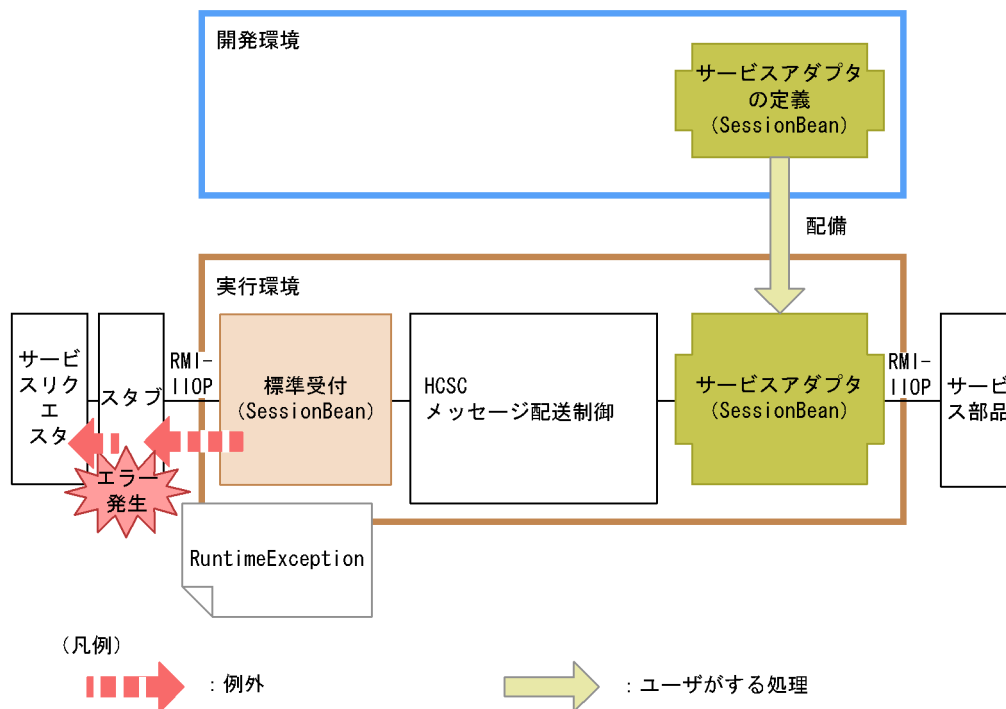
HCSC サーバで図中のエラー 1～エラー 5 のどれかを検知した場合，発生したエラーの情報を CSCMsgServerException でサービスリクエストにスローします。サービスリクエストは，キャッチした例外オブジェクトの getter を使用することで，発生した例外の内容（エラーの詳細）を取得できます。CSCMsgServerException の詳細については，マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド」を参照してください。

7. 障害対策

サービスリクエストでエラーを検知した場合

サービスリクエストでエラーを検知した場合の SessionBean での通信でのエラーの伝わり方を次の図に示します。

図 7-39 サービスリクエストでエラーを検知した場合の SessionBean での通信でのエラーの伝わり方

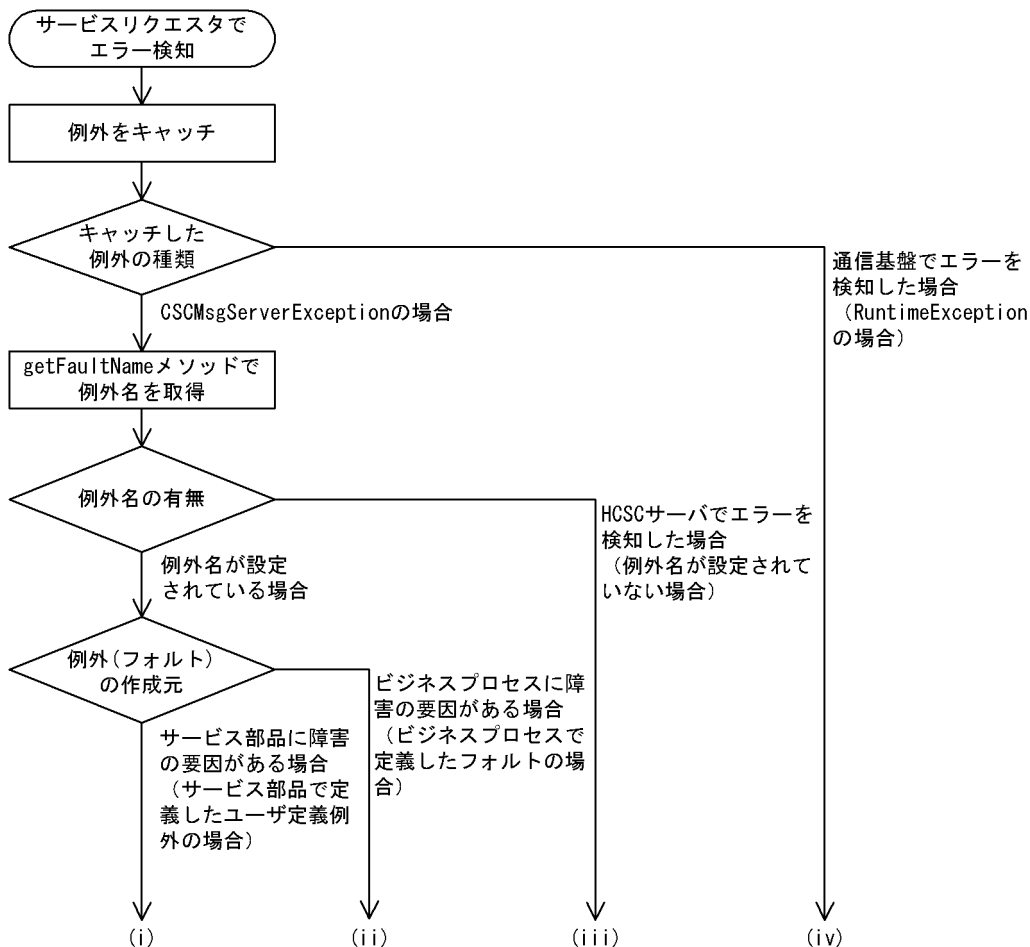


サービスリクエストから HCSC サーバを呼び出せなかった場合や、サービス部品の呼び出しは完了したが何らかの原因で HCSC サーバからサービスリクエストへの応答が返らなかった場合などは、サービスリクエスト側（クライアント側）のスタブ（J2EE コンテナ）がエラーをリターンします。サービスリクエストは RuntimeException で例外をキャッチできます。キャッチした例外オブジェクトの getter を使用することで、発生したフォルト情報（エラーの詳細）を取得できます。

（2）問題発生個所の切り分け方

サービスリクエストから標準受付（SessionBean）を使用してサービス部品を呼び出した場合の問題発生個所の切り分け方について説明します。問題発生個所の切り分け方を次の図に示します。

図 7-40 問題発生個所の切り分け方（サービスリクエストから標準受付（SessionBean）を使用してサービス部品を呼び出した場合）



(i) サービス部品に障害の要因がある場合（サービス部品で定義したユーザ定義例外の場合）

サービス部品に障害の要因があるおそれがあります。次のメソッドを使用してサービス部品が返した例外の内容を取得できます。

- getMessage : サービス部品からの例外の内容を取得します。
- getErrorCode : サービス部品からの例外の内容に対応するエラーコードを取得します。

要因は、次の観点で調査してください。

- サービスリクエストから要求したユーザ電文
- サービス部品稼働マシン
- サービス部品のプログラム

サービス部品の呼び出しを再送するかどうかは、HCSCサーバを介したサービスリ

7. 障害対策

クエスタとサービス部品間（エンドツーエンド）の取り決めとなります。

(ii) ビジネスプロセスに障害の要因がある場合（ビジネスプロセスで定義したフォルトの場合）

ビジネスプロセスで実行したアクティビティの処理に障害の要因があるおそれがあります（サービス呼出アクティビティの場合、呼び出したサービス部品に障害の要因があるおそれがあります）。次のメソッドを使用してビジネスプロセスが返したフォルトの内容を取得できます。

- `getErrorMessage`：ビジネスプロセスからの例外の内容を取得します。
- `getErrorCode`：ビジネスプロセスからの例外の内容に対応するエラーコードを取得します。
- `getCscmsgFaultCode`：`FaultCode` 情報を取得します。
- `getCscmsgFaultString`：`FaultString` 情報を取得します。
- `getCscmsgFaultActor`：`FaultActor` 情報を取得します。
- `getCscmsgFaultDetail`：`FaultDetail` 情報を取得します。

要因は、次の観点で調査してください。

- サービスリクエスタから要求したユーザ電文
- サービス部品稼働マシン
- サービス部品のプログラム
- ビジネスプロセスの定義内容

サービス部品の呼び出しを再送するかどうかは、HCSC サーバを介したサービスリクエスタとサービス部品間（エンドツーエンド）の取り決めとなります。

また、ビジネスプロセスの設計内容によっても、再送（ビジネスプロセスの再実行）するかどうかシステム設計する必要があります。

(iii) HCSC サーバでエラーを検知した場合（例外名が設定されていない場合）

次のメソッドを使用してエラーの内容を取得できます。取得したエラーコードおよびエラーメッセージの対策に従って対処します。

- `getErrorMessage`：HCSC サーバ内で検知したエラーのエラーメッセージを取得します。
- `getErrorCode`：HCSC サーバ内で検知したエラーのエラーコードを取得します。

また、Cosminexus サービスプラットフォームが出力するメッセージログも参照して、調査します。

要因は、次の観点で調査してください。

- サービスリクエスタから要求した引数の内容
- HCSC サーバの設定または状態
- サービスアダプタの定義内容
- ビジネスプロセスの定義内容
- サービスリクエスタから要求したユーザ電文
- サービス部品稼働マシン
- サービス部品のプログラム
- ネットワークの状態

サービス部品呼び出しを再送するかどうかは、エラーの内容によって異なります。一時的な障害の場合は、再送を試みることで成功することがありますが、次に示すエラーの場合は、再送を試みてもエラーとなります。

- サービスリクエストから要求した引数の内容が誤っている場合
- HCSC サーバの設定に誤りがある場合
- サービスアダプタやビジネスプロセスの定義に誤りがある場合
- サービスリクエストから要求したユーザ電文に誤りがある場合など

(iv) 通信基盤でエラーを検知した場合 (RuntimeException の場合)

RuntimeException からエラーの内容を取得できます。取得した例外のエラー情報を基に対処してください。

要因は、次の観点で調査してください。

- サービスリクエストで使用しているスタブ
- サービスリクエスト稼働マシンの J2EE コンテナの設定または状態
- HCSC サーバの設定または状態
- ネットワークの状態

サービス部品の呼び出しを再送するかどうかは、エラーの内容によって異なります。一時的な障害の場合は、再送を試みることで成功することがありますが、次に示すエラーの場合は、再送を試みてもエラーとなります。

- サービスリクエストで使用しているスタブが誤っている場合
- サービスリクエスト稼働マシンの J2EE コンテナの設定に誤りがある場合
- HCSC サーバの設定に誤りがある場合

(3) HCSC サーバから応答する例外の内容

HCSC サーバから応答する SOAP Fault (SOAP メッセージ) について、どの要素に何の情報設定されるかを示します。HCSC サーバから応答する例外の内容を次の表に示します。エラーのケースの番号は「(2) 問題発生個所の切り分け方」で示す番号に相当します。

表 7-41 HCSC サーバから応答する例外の内容

HCSC サーバから応答する CSCMsgServerException	エラーのケース		
	フォルト名	(ii) の場合	(i), (iii) の場合
errorMessage		次に示すエラーの内容です。 <ul style="list-style-type: none"> • HCSC サーバ内で検知したエラー • サービス部品、ビジネスプロセス、およびカスタムアダプタからのエラー 	
errorCode		次に示す例外の内容に対応するエラーコードです。 <ul style="list-style-type: none"> • HCSC サーバ内で検知したエラー • サービス部品、ビジネスプロセス、およびカスタムアダプタからのエラー 	

7. 障害対策

HCSC サーバから応答する CSCMsgServerException	エラーのケース		
	フォルト名	(ii) の場合	(i), (iii) の場合
processInstanceID		ビジネスプロセスのインスタンス ID の情報です。ビジネスプロセスでエラーが発生した場合に値が設定されます。	
cscmsgFaultCode		サービス部品 (Web サービス), ビジネスプロセス, またはカスタムアダプタからの FaultCode 情報です。	値はありません。
cscmsgFaultString		サービス部品 (Web サービス), ビジネスプロセス, またはカスタムアダプタからの FaultString 情報です。	値はありません。
cscmsgFaultActor		サービス部品 (Web サービス), ビジネスプロセス, またはカスタムアダプタからの FaultActor 情報です。	値はありません。
cscmsgFaultDetail		サービス部品 (Web サービス), ビジネスプロセス, またはカスタムアダプタからの Detail 情報です。	値はありません。
faultName		サービス部品 (Web サービス または SessionBean) または ビジネスプロセスからのフォルト名 (例外名) 情報です。次の場合に値が設定されます。 <ul style="list-style-type: none"> サービス部品 (Web サービス または SessionBean) からのユーザ定義例外の SOAP Fault の場合 ビジネスプロセスからのフォルトの場合 	値はありません。

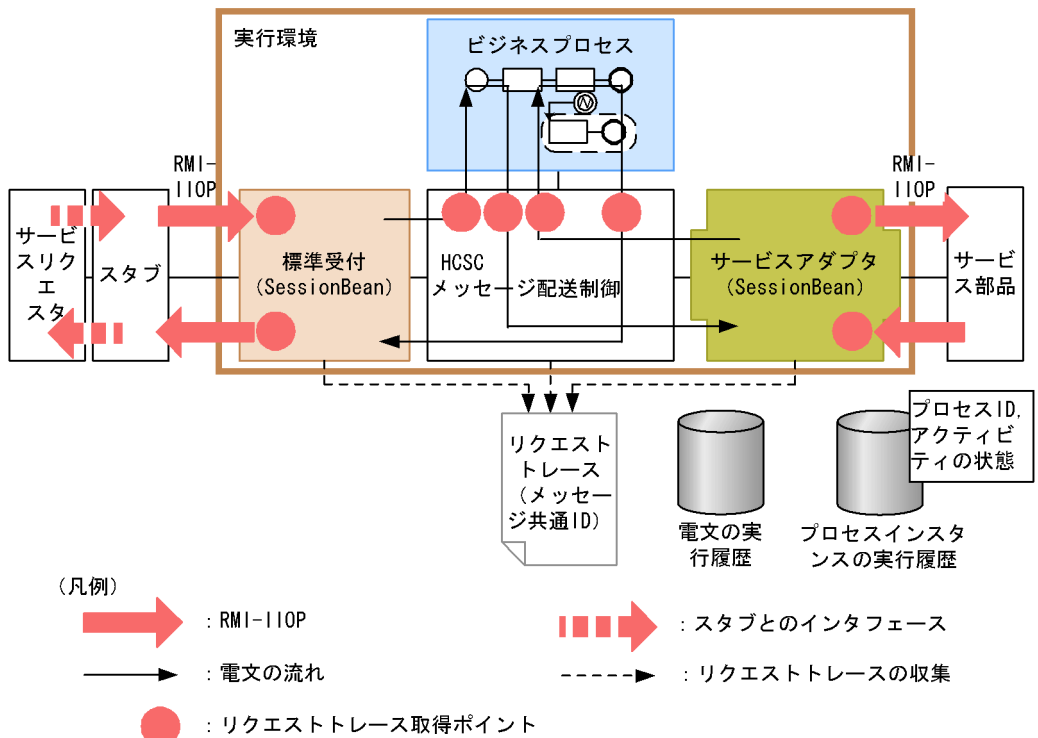
注 1 (iv) の場合は, サービスリクエスト側のスタブ (J2EE コンテナ) から RuntimeException をスローします。

注 2 標準受付 (SessionBean) からサービスアダプタ (Web サービス) のサービス部品を呼び出した場合, (ii) の場合と同様に Fault 情報が設定されます。

(4) そのほかの障害要因の特定方法 (サービス部品呼び出し要求の実行履歴の追跡)

サービスリクエストへ応答した例外およびエラーメッセージから問題発生個所を切り分ける方法のほかに, サービスリクエスト側で設定したクライアント関連 ID や, ビジネスプロセスの関連セットを基に問題発生個所を特定する方法があります。サービス部品呼び出し要求の実行履歴の追跡を次の図に示します。

図 7-41 サービス部品呼び出し要求の実行履歴の追跡 (SessionBean の場合)



特定方法やビジネスプロセスを使用する場合の手順については、Web サービス (SOAP 通信) の場合の手順と同様です。詳細については、「7.7.1 Web サービス (SOAP 通信) 実行時の障害対策」を参照してください。

ここでは、SessionBean の場合にだけ該当する手順について説明します。

(a) サービスリクエストから指定したクライアント関連 ID からたどる方法

サービスリクエストから指定したクライアント関連 ID からたどる手順を次に示します。

1. クライアント関連 ID を調査します。
2. メッセージ共通 ID を取得します。
3. ビジネスプロセスのプロセス ID を取得します。
4. アクティビティの状態を取得します。
5. ユーザ電文を確認します。
詳細については、「7.7.1 Web サービス (SOAP 通信) 実行時の障害対策」を参照してください。
6. 性能解析トレースを使ってさらに調査し、問題が発生した個所をより細かく特定できます。また、性能解析トレースのスレッド ID をたどることで、サービス部品稼働マシンのログとの対応を確認できます。次のように確認します。
 1. メッセージ共通 ID と一致する文字列を含む行を検索します。

7. 障害対策

HCSC サーバのリクエスト受付の入口で「ASCII」列に出力されているため、そこが最初に検索されます。

2. 検索で一致した行のスレッド ID を確認して、そのスレッド ID をたどってエラー発生個所を調査します。

RMI-IIOP 呼び出しによってスレッド ID が変化しますが、「Root AP CommonNo」列によってつながりがわかります。

3. 「Rc (リターンコード)」列の値が 0 以外の個所がエラー個所です。

4. エラー個所が見つかったらその前後の処理内容を確認して原因を調査します。

5. さらに調べたい場合は、Cosminexus が出力する障害情報である J2EE サーバ、リダイレクタ、サーバ管理コマンドのログを使って、エラー発生個所のスレッド ID をたどります。

図 7-42 性能解析トレースの例

Thread (hashcode)	Event	Time	msec/usec/nsec	Rc	RootAP	CommNo.	INT
OPR			ASGI1				
7644 (14732323)	0x8603	22:46:55	625/000/000	0	0x0000000000000000		
HITACHI_EJB/SERV*rvicDeliveryEJB							
7644 (14732323)	0x8e03	22:46:55	625/000/000	0	0x0000000000002c4a		
7644 (14732323)	0x8e04	22:46:55	625/000/000	0	0x0000000000002c4a		
7644 (14732323)	0x8604	22:46:55	687/000/000	0	0x0000000000000000		
HITACHI_EJB/SERV*rvicDeliveryEJB							
7644 (14732323)	0x8e01	22:46:55	703/000/000	0	0x0000000000002c4b	jp.co.Hitachi.so*viceDeliveryHome	
create							
7644 (14732323)	0x8e03	22:46:55	703/000/000	0	0x0000000000002c4b		
6312 (223675)	0x8e05	22:46:55	703/000/000	0	0x0000000000002c4b		
6312 (223675)	0x8401	22:46:55	703/000/000	0	0x0000000000002c4b	jp.co.Hitachi.so*rvicDeliveryEJB	
create(0)							
6312 (223675)	0x8402	22:46:55	703/000/000	0	0x0000000000002c4b	jp.co.Hitachi.so*rvicDeliveryEJB	
create(0)							
6312 (223675)	0x8e06	22:46:55	703/000/000	0	0x0000000000002c4b		
7644 (14732323)	0x8e04	22:46:55	703/000/000	0	0x0000000000002c4b		
7644 (14732323)	0x8e02	22:46:55	718/000/000	0	0x0000000000002c4b	jp.co.Hitachi.so*viceDeliveryHome	
create							
7644 (14732323)	0x8e01	22:46:55	718/000/000	0	0x0000000000002c4c	jp.co.Hitachi.so*cServiceDelivery	
invokeXML							
7644 (14732323)	0x8e03	22:46:55	718/000/000	0	0x0000000000002c4c		
7428 (488146)	0x8e05	22:46:55	718/000/000	0	0x0000000000002c4c		
<省略>							
(3)							
7428 (488146)	0x9802	22:46:55	734/000/000	0	0x0000000000002c4c	jp.co.Hitachi.so*rvicDeliveryEJB	
invokeXML							
(4)							
GSG_MyGSG_2006-09-02_22:46:55_734_1							
MSG_MyGSG_SyncEJB_2006-09-02_22:46:55_734_1							
Service Name=BP001, Client ID=ClientID001..							
<省略>							
(6)							
7428 (488146)	0x9840	22:46:55	812/000/000	0	0x0000000000002c4c	jp.co.Hitachi.so*ageDelivererImpl	
exeAdapter							
GSG_MyGSG_2006-09-02_22:46:55_734_1							
MSG_MyGSG_SyncEJB_2006-09-02_22:46:55_734_1							
Service Name=BP001, BP Process ID=null, BP Request Type=null.							
7428 (488146)	0x8e01	22:46:55	812/000/000	0	0x0000000000002c4c	jp.co.Hitachi.so*sgServiceAdapter	
invoke							
7428 (488146)	0x8e03	22:46:55	812/000/000	0	0x0000000000002c4c		
7428 (488146)	0x8405	22:46:55	812/000/000	0	0x0000000000002c4c	jp.co.Hitachi.so*sageReceiverBean	
invoke(1)							
7428 (488146)	(7) 0x9900	22:46:55	828/000/000	0	0x0000000000002c4c	BP001	
GSG_MyGSG_2006-09-02_22:46:55_734_1							
7428 (488146)	0x8813	22:46:55	828/000/000	0	0x0000000000002c4c		
<省略>							
(8)							
7428 (488146)	0x9a31	22:46:55	906/000/000	0	0x0000000000002c4c	jp.co.Hitachi.so*ommonDataFactory	
createCommonData							
null null							
Data Type=ByteArray, logicalName=Input.							
7428 (488146)	(8) 0x9908	22:46:55	906/000/000	0	0x0000000000002c4c	Data Transform	
7428 (488146)	0x9a56	22:46:55	906/000/000	0	0x0000000000002c4c	jp.co.Hitachi.so*ansformerFactory	
createCSCTransformerWithCache							
null null							
name=BP0012trans/csctransl.xsl1157203951484.							
<省略>							
(9)							
7428 (488146)	0x9a41	22:46:55	921/000/000	0	0x0000000000002c4c	jp.co.Hitachi.so*t.CSCTransformer	
transform							
null null							
Input -> EchoInput							
7428 (488146)	(9) 0x9909	22:46:55	921/000/000	0	0x0000000000002c4c	Data Transform	
7428 (488146)	0x9a04	22:46:55	921/000/000	0	0x0000000000002c4c	jp.co.Hitachi.so*sc.dt.CommonData	
getValue							
null null							
logicalName=Input, xpathstr=/input/forSwitch..							
<省略>							
(10)							
7428 (488146)	0x8610	22:46:56	531/000/000	0	0x0000000000002c4c		
java:comp/env/CscServerName							
.....D..P.....8							
7428 (488146)	0x9910	22:46:56	531/000/000	0	0x0000000000002c4c	SB5	
GSG_MyGSG_2006-09-02_22:46:55_734_1							
7428 (488146)	(11) 0x9842	22:46:56	531/000/000	0	0x0000000000002c4c	jp.co.Hitachi.so*cReceptionBpImpl	
invoke							
GSG_MyGSG_2006-09-02_22:46:55_734_1							
MSG_MyGSG_SyncBP_2006-09-02_22:46:56_531_1							
Service Name=SB5, BP Process ID=null, BP Request Type=null..							
7428 (488146)	0x860f	22:46:56	531/000/000	0	0x0000000000002c4c		
*bc/CSCMsgNoTransactionDataSource							

(2) エラー発生箇所を検索します。

検索で一致した行のスレッドIDを見ます。

7. 障害対策

```

<省略>
:
7428 (488146) 0x9a01 22:46:56 656/000/000 0 0x00000000000002c4c jp.co.Hitachi.so*sc.dt.CommonData
getData
7428 (488146) (12) 0x9812 22:46:56 656/000/000 0 0x00000000000002c4c jp.co.Hitachi.so*MsgEJBConverter
invoke
GSG_MyGSG_2006-09-02_22:46:55.734_1 MSG_MyGSG_SyncBP_2006-09-02_22:46:56.531_1
Name=SBS, Client ID=ClientID001, Adapter Name=23...
7428 (488146) 0x8603 22:46:56 656/000/000 0 0x00000000000002c4c
HITACHI_EJB/SERV*/EJB/echo/MyEcho
7428 (488146) 0x8604 22:46:56 656/000/000 0 0x00000000000002c4c
(13) HITACHI_EJB/SERV*/EJB/echo/MyEcho .....D.P.....
7428 (488146) 0x8e01 22:46:56 656/000/000 0 0x00000000000002c4c tp.ejbservice.ec*hoEJBServiceHome
create
7428 (488146) 0x8e03 22:46:56 656/000/000 0 0x00000000000002c4c
5768 (6021288) 0x8e05 22:46:56 656/000/000 0 0x00000000000002c4c
5768 (6021288) 0x8401 22:46:56 656/000/000 0 0x00000000000002c4c tp.ejbservice.ec*choEJBServiceEJB
create(0)
5768 (6021288) 0x8402 22:46:56 656/000/000 0 0x00000000000002c4c tp.ejbservice.ec*choEJBServiceEJB
create(0)
.....D.P.....
5768 (6021288) 0x8e06 22:46:56 656/000/000 0 0x00000000000002c4c
7428 (488146) 0x8e04 22:46:56 656/000/000 0 0x00000000000002c4c
7428 (488146) 0x8e02 22:46:56 656/000/000 0 0x00000000000002c4c tp.ejbservice.ec*hoEJBServiceHome
create
7428 (488146) 0x8e01 22:46:56 671/000/000 0 0x00000000000002c4c tp.ejbservice.ec*o.EchoEJBService
echo
7428 (488146) 0x8e03 22:46:56 671/000/000 0 0x00000000000002c4c
5840 (6381337) 0x8e05 22:46:56 671/000/000 0 0x00000000000002c4c
5840 (6381337) (14) 0x8405 22:46:56 671/000/000 0 0x00000000000002c4c tp.ejbservice.ec*choEJBServiceEJB
echo(1)
5840 (6381337) (15) 0x8406 22:47:01 687/000/000 (16) 0x00000000000002c4c tp.ejbservice.ec*choEJBServiceEJB
echo(1)
.....D.P..... = class java.lang.InterruptedExce...
5840 (6381337) 0x8e06 22:47:01 687/000/000 0x1 0x00000000000002c4c
7428 (488146) 0x8e04 22:47:01 687/000/000 0x1 0x00000000000002c4c
7428 (488146) 0x8e02 22:47:01 687/000/000 0x1 0x00000000000002c4c
java.rmi.UnexpectedException: Unexpected User Exception: IDL:java/lang/InterruptedEx:1.0
7428 (488146) 0x8e03 22:47:01 718/000/000 0 0x00000000000002c4c
5768 (6021288) 0x8e05 22:47:01 718/000/000 0 0x00000000000002c4c
5768 (6021288) 0x8405 22:47:01 718/000/000 0 0x00000000000002c4c tp.ejbservice.ec*choEJBServiceEJB
remove(0)
5768 (6021288) 0x8406 22:47:01 718/000/000 0 0x00000000000002c4c tp.ejbservice.ec*choEJBServiceEJB
remove(0)
.....D.U.....
5768 (6021288) 0x8e06 22:47:01 718/000/000 0 0x00000000000002c4c
7428 (488146) 0x8e04 22:47:01 718/000/000 0 0x00000000000002c4c
:
<省略>
:

```

図 7-42 の図中の番号は次の内容を示します。

- (1) メッセージ共通 ID と一致する文字列を含む行です。共通の ID が与えられているためつながりがわかります。
- (2) RMI 呼び出しで複数のスレッドにわたるため、番号が変化しています。
- (3) 検索で一致したスレッド番号です。
- (4) スレッド番号 (項番 3) のスレッド ID です。
- (5) 標準受付 (SessionBean) の入口です。
- (6) ビジネスプロセスの呼び出し口です。
- (7) メッセージング基盤からのビジネスプロセス実行要求呼び出しです。
- (8) データ変換要求の呼び出しです。
- (9) データ変換要求からの応答です。
- (10) メッセージング基盤へのビジネスプロセスからのサービス部品要求の呼び出しです。
- (11) ビジネスプロセス受付の入口です。
- (12) サービスアダプタ (SessionBean) のサービス部品呼び出し口です。

(13)HCSC サーバ稼働マシンからサービス部品稼働マシンの呼び出しです。

(14)EJB コンテナリクエスト直後

(15)EJB コンテナレスポンス直前

(16) エラー発生

この例では、図 7-42 で示した (13) で、サービス部品の RMI を呼び出し、そのあと EJB コンテナがリクエストを受信した直後にエラーが発生していることがわかります (性能解析トレースの採取レベルは「通常」と「詳細」の二つありますが、図 7-42 は「通常」で採取した場合のトレースです)。

サービス部品稼働マシンが Cosminexus Application Server を使用している場合は、エラーが起きた個所のスレッド ID とサービス部品稼働マシン側の障害情報を突き合わせることで、さらに調査できます。

なお、性能解析トレースのスレッド ID は 10 進数ですが、Cosminexus が出力する障害情報は 16 進数表現なので、個別にスレッド ID を 16 進数に直す必要があるため注意してください。

サービスアダプタからのサービス部品呼び出しについては、SessionBean の呼び出しによってスレッド ID が変化しますが、Root AP CommonNo 列によってつながりがわかります。性能解析トレースファイルの利用方法の詳細については、マニュアル「Cosminexus システム運用ガイド」を参照してください。

(b) ユーザ電文に指定したビジネスプロセスの関連セットからたどる方法

ユーザ電文に指定したビジネスプロセスの関連セットからたどる手順を次に示します。

1. 関連セットを調査します。
2. ビジネスプロセスのプロセス ID を取得します。
3. アクティビティの状態を取得します。

詳細については、「7.7.1 Web サービス (SOAP 通信) 実行時の障害対策」を参照してください。

7.7.3 MDB (WS-R) 実行時の障害対策

(1) MDB (WS-R) でのエラーの伝わり方

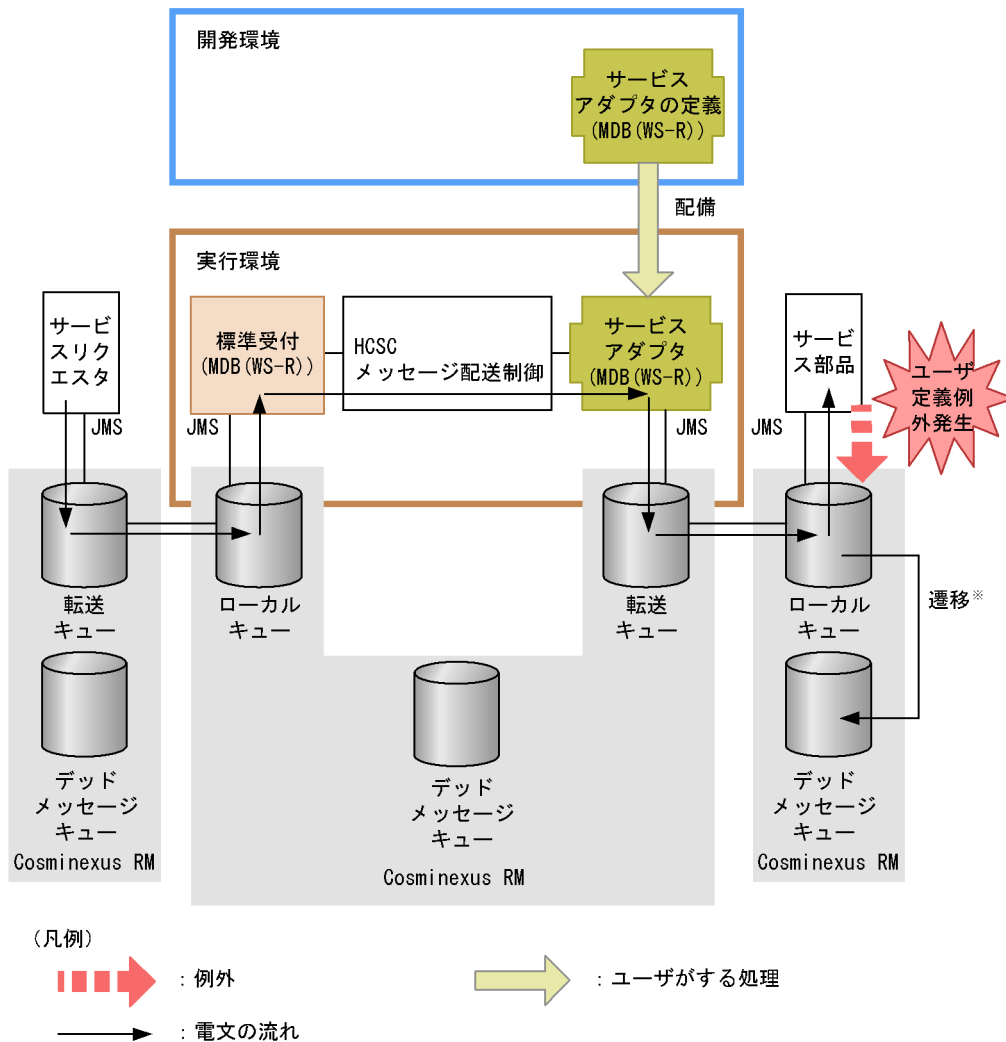
MDB (WS-R) でのサービス部品呼び出しでは、サービスリクエストと HCSC サーバの間、HCSC サーバとサービス部品の間でエラーは伝わりません。検知できる障害の種類と、ログおよびトレースの出力先を説明します。

サービス部品でユーザ定義例外のエラーが発生した場合

サービス部品でユーザ定義例外のエラーが発生した場合の MDB (WS-R) でのエラーの伝わり方を次の図に示します。

7. 障害対策

図 7-43 サービス部品でユーザ定義例外のエラーが発生した場合の MDB (WS-R) でのエラーの伝わり方



注※ 配送回数の最大値に達した場合、または有効期限に達した場合に遷移します。

サービス部品で発生した例外は、サービス部品稼働マシン上の Cosminexus RM でエラー処理します。サービス部品稼働マシン上の Cosminexus RM はローカルキューからメッセージの取り出しに失敗したことを示すメッセージをサービス部品稼働マシン上のログに出力します。

なお、ユーザ定義例外（アプリケーション例外）の場合、ロールバックして再度サービス部品でメッセージを取り出すかどうかは、サービス部品稼働マシン側の Cosminexus RM の設定やサービス部品プログラムの作成に依存します。

サービス部品稼働マシン上のメッセージの取り出しでロールバックして、ロールバックの回数（メッセージの配送回数）が最大値に達した場合や、メッセージが有

効期限に達した場合、そのメッセージはデッドメッセージキューに移動します。ただし、次の場合はメッセージが削除されます。

- デッドメッセージキューの設定をしていない場合
- 配送回数に無制限の設定をしている場合
- デッドメッセージキューのメッセージ数が超過した場合
- データベースに障害が発生した場合

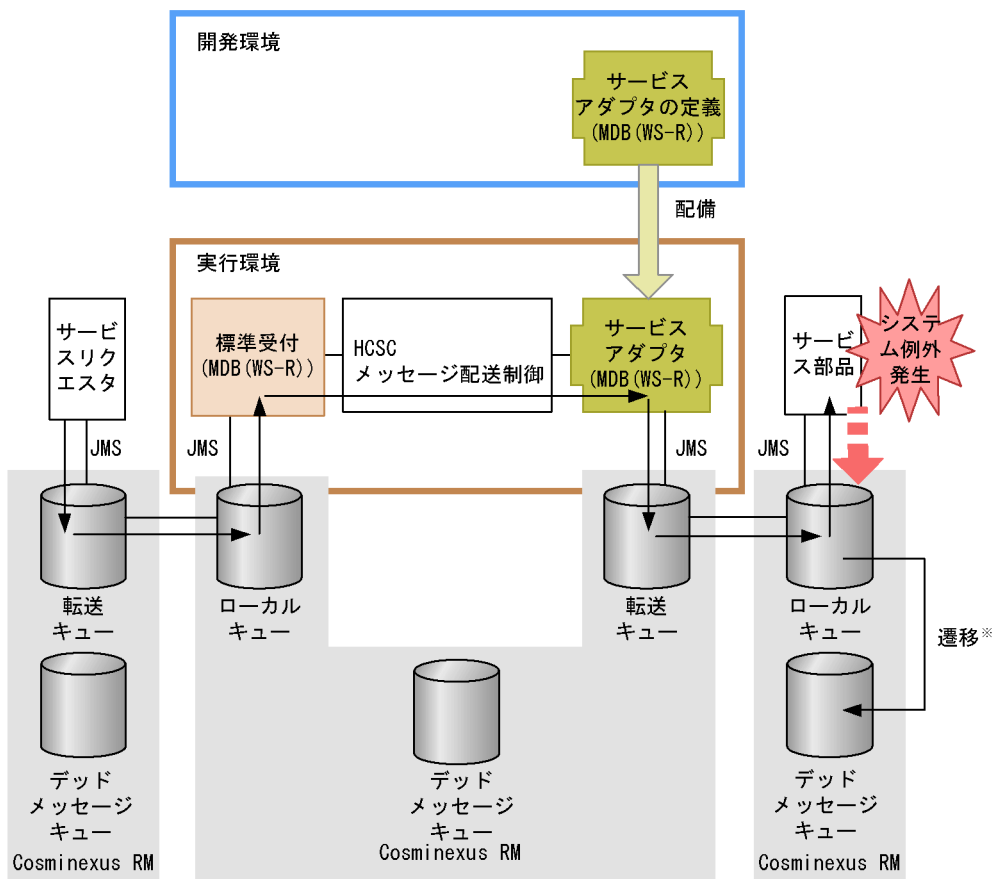
Cosminexus RM の詳細については、マニュアル「Cosminexus Reliable Messaging」を参照してください。

サービス部品でユーザ定義例外以外のエラーが発生した場合

サービス部品でユーザ定義例外以外のエラーが発生した場合の MDB (WS-R) でのエラーの伝わり方を次の図に示します。

7. 障害対策

図 7-44 サービス部品でユーザ定義例外以外のエラーが発生した場合の MDB (WS-R) でのエラーの伝わり方



(凡例)

- : 例外
- : ユーザがする処理
- : 電文の流れ

注※ 配送回数の最大値に達した場合、または有効期限に達した場合に遷移します。

サービス部品で発生した例外は、サービス部品稼働マシン上の Cosminexus RM でエラー処理します。Cosminexus RM はローカルキューからメッセージの取り出しに失敗したことを示すメッセージをサービス部品稼働マシン上のログに出力します。なお、システム例外の場合、サービス部品側でロールバックして、再度サービス部品でメッセージの取り出しを試みます。サービス部品稼働マシン上のメッセージの取り出しでロールバックして、ロールバックの回数（メッセージの配送回数）が最大値に達した場合や、メッセージが有効期限に達した場合、そのメッセージはデッドメッセージキューに移動します。ただし、次の場合はメッセージが削除されます。

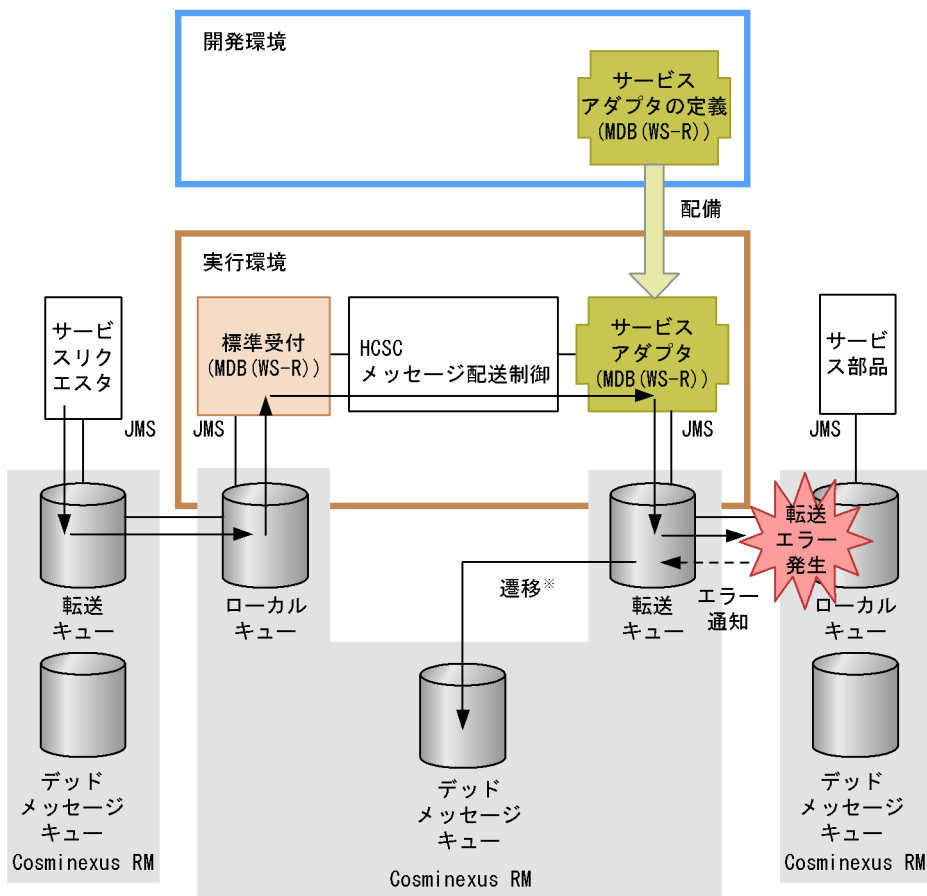
- デッドメッセージキューの設定をしていない場合
- 配送回数に無制限の設定をしている場合
- デッドメッセージキューのメッセージ数が超過した場合
- データベースに障害が発生した場合

Cosminexus RM の詳細については、マニュアル「Cosminexus Reliable Messaging」を参照してください。

HCSC サーバ稼働マシンからサービス部品稼働マシンへの転送でエラーが発生した場合
HCSC サーバ稼働マシンからサービス部品稼働マシンへの転送でエラーが発生した場合の MDB (WS-R) でのエラーの伝わり方を次の図に示します。

7. 障害対策

図 7-45 HCSC サーバ稼働マシンからサービス部品稼働マシンへの転送でエラーが発生した場合の MDB (WS-R) でのエラーの伝わり方



(凡例) ➡ : ユーザがする処理 ➡ : 電文の流れ

注※ 配送回数の最大値に達した場合、または有効期限に達した場合に遷移します。

HCSC サーバ稼働マシンからサービス部品稼働マシンへのメッセージの転送に失敗した場合、HCSC サーバ側の Cosminexus RM でエラー処理をします。Cosminexus RM はメッセージの転送に失敗したことを示すメッセージを HCSC サーバ稼働マシン上のログに出力します。

なお、メッセージの転送でエラーを検知した場合、HCSC サーバ側でロールバックして再度転送を試みます。

HCSC サーバ稼働マシンからの転送でロールバックして、ロールバックの回数(メッセージの配送回数)が最大値に達した場合や、配送回数に無制限の設定をしている場合、そのメッセージはデッドメッセージキューに移動します。デッドメッセージキュー名を設定していない場合やデッドメッセージキューを作成していない

場合は、無限にサービス部品を呼び出す処理が再実行されるため、必ずデッドメッセージキュー名やデッドメッセージキューを設定してください。

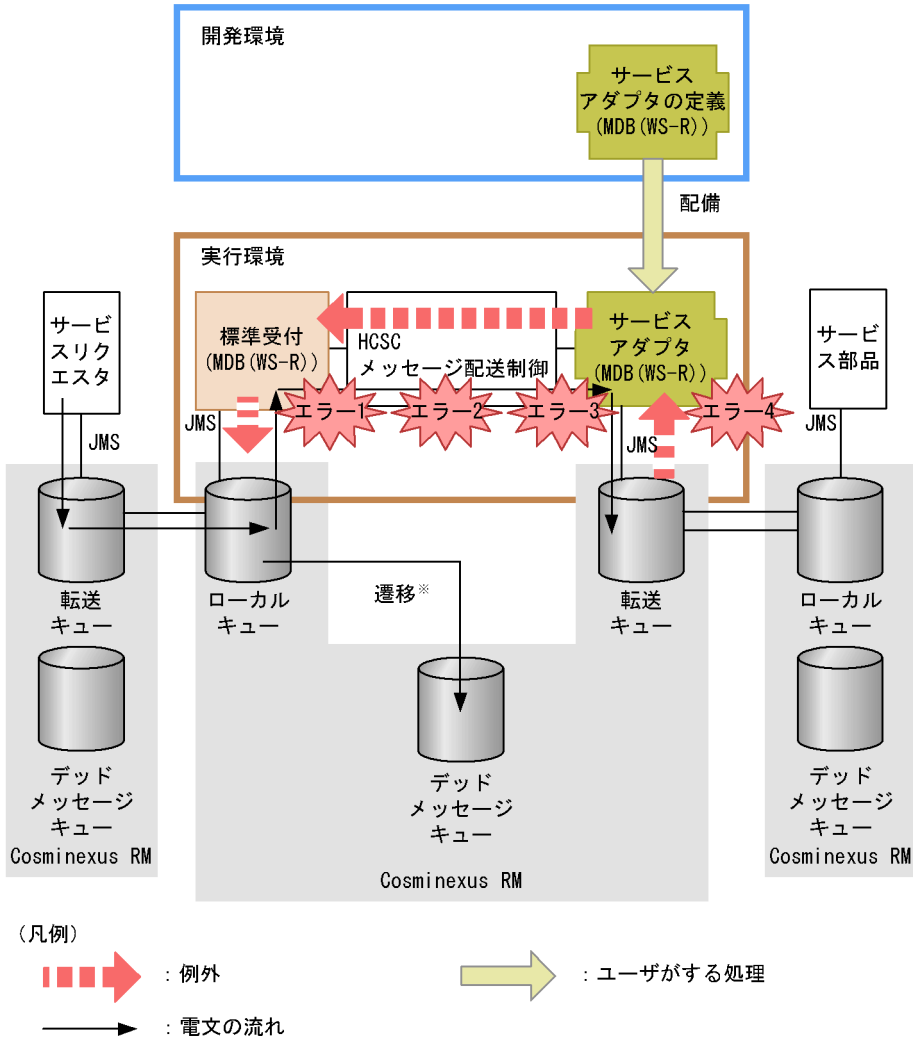
Cosminexus RM のセットアップについては、「3.1.2 実行環境に必要なソフトウェアの設定」を参照してください。Cosminexus RM のキュー間転送での障害時の動作の詳細については、マニュアル「Cosminexus Reliable Messaging」を参照してください。

HCSC サーバからエラーが発生した場合

HCSC サーバからエラーが発生した場合の MDB (WS-R) でのエラーの伝わり方を次の図に示します。

7. 障害対策

図 7-46 HCSC サーバからエラーが発生した場合の MDB (WS-R) でのエラーの伝わり方



注※ 配送回数の最大値に達した場合、または有効期限に達した場合に移行します。

図中の各エラーには、次に示すケースが該当します。

- エラー 1: 要求パラメタ不正など。
- エラー 2: あて先 (ロケーション) が見つからない, アダプタが停止しているなど。
- エラー 3: データ変換に失敗したなど。
- エラー 4: メッセージ送信失敗など

HCSC サーバで図中のエラー 1 ~ エラー 4 のどれかを検知した場合, HCSC サーバ稼働マシン上の Cosminexus RM でエラー処理します。発生したエラーのメッセー

ジをメッセージログに出力します。また、Cosminexus RM はローカルキューからメッセージの取り出しに失敗したことを示すメッセージを HCSC サーバ稼働マシン上のログに出力します。

なお、HCSC サーバでエラーを検知した場合、HCSC サーバ側でロールバックをして、再度サービス部品でメッセージの取り出し（サービス部品呼び出し）を試みます。HCSC サーバ稼働マシン上のメッセージの取り出しでロールバックして、ロールバックの回数（メッセージの配送回数）が最大値に達した場合、そのメッセージはデッドメッセージキューに移動します。デッドメッセージキュー名を設定していない場合やデッドメッセージキューを作成していない場合は、無限にサービス部品を呼び出す処理が再実行されるため、必ずデッドメッセージキュー名やデッドメッセージキューを設定してください。

Cosminexus RM のセットアップについては、「3.1.2 実行環境に必要なソフトウェアの設定」を参照してください。

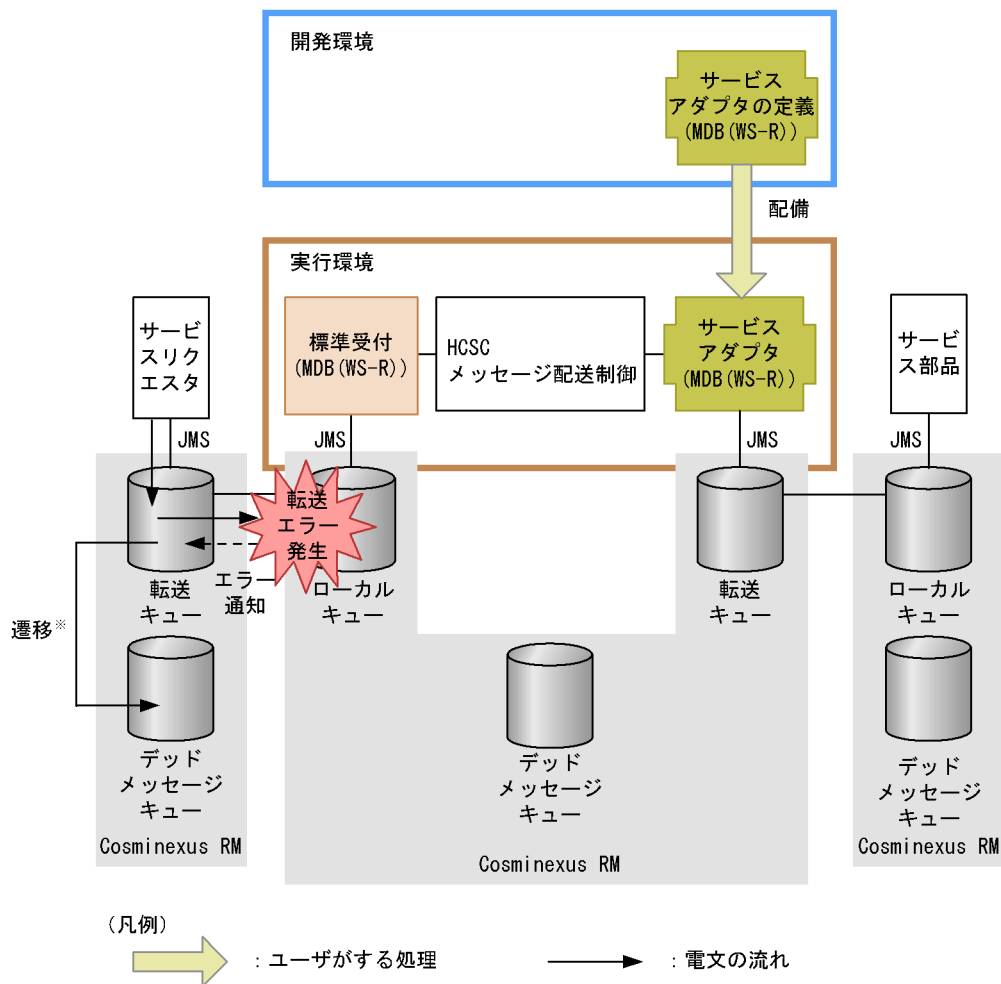
Cosminexus RM の詳細については、マニュアル「Cosminexus Reliable Messaging」を参照してください。

サービスリクエスト稼働マシンから HCSC サーバ稼働マシンへの転送でエラーが発生した場合

サービスリクエスト稼働マシンから HCSC サーバ稼働マシンへの転送でエラーが発生した場合の MDB (WS-R) でのエラーの伝わり方を次の図に示します。

7. 障害対策

図 7-47 サービスリクエスト稼働マシンから HCSC サーバ稼働マシンへの転送でエラーが発生した場合の MDB (WS-R) でのエラーの伝わり方



注※ 配送回数の最大値に達した場合、または有効期限に達した場合に遷移します。

サービスリクエスト稼働マシンから HCSC サーバ稼働マシンへのメッセージの転送に失敗した場合、サービスリクエスト側の Cosminexus RM でエラー処理します。Cosminexus RM はメッセージの転送に失敗したことを示すメッセージをサービスリクエスト稼働マシン上のログに出力します。

なお、メッセージの転送でエラーを検知した場合、サービスリクエスト側でロールバックして、再度転送を試みます。

サービスリクエスト稼働マシンからの転送でロールバックして、ロールバックの回数（メッセージの配送回数）が最大値に達した場合や、メッセージが有効期限に達した場合、そのメッセージはデッドメッセージキューに移動します。ただし、次の場合は、メッセージは削除されます

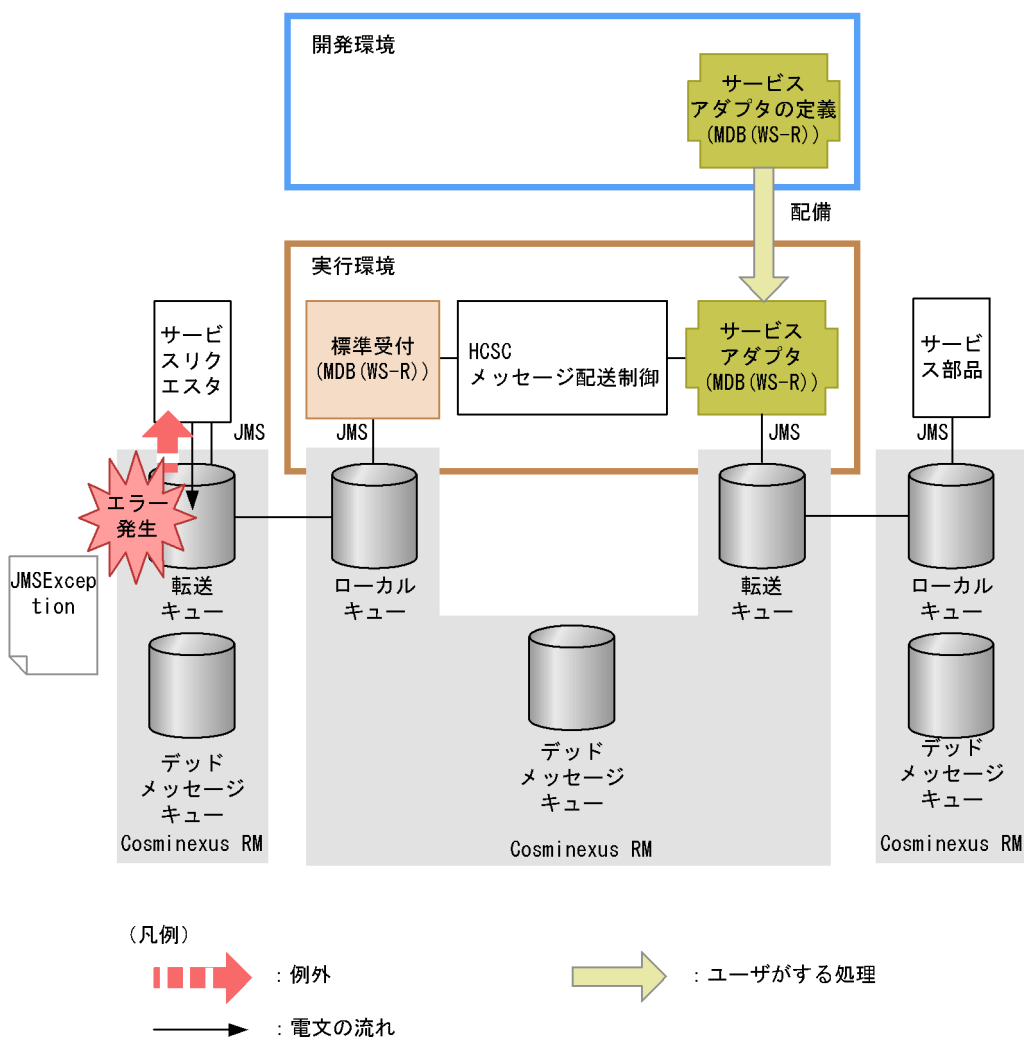
- デッドメッセージキューの設定をしていない場合
- 配送回数に無制限の設定をしている場合
- デッドメッセージキューのメッセージ数が超過した場合
- データベースに障害が発生した場合

Cosminexus RM のキュー間転送での障害時の動作の詳細については、マニュアル「Cosminexus Reliable Messaging」を参照してください。

サービスリクエストでエラーを検知した場合

サービスリクエストでエラーを検知した場合の MDB (WS-R) でのエラーの伝わり方を次の図に示します。

図 7-48 サービスリクエストでエラーを検知した場合の MDB (WS-R) でのエラーの伝わり方



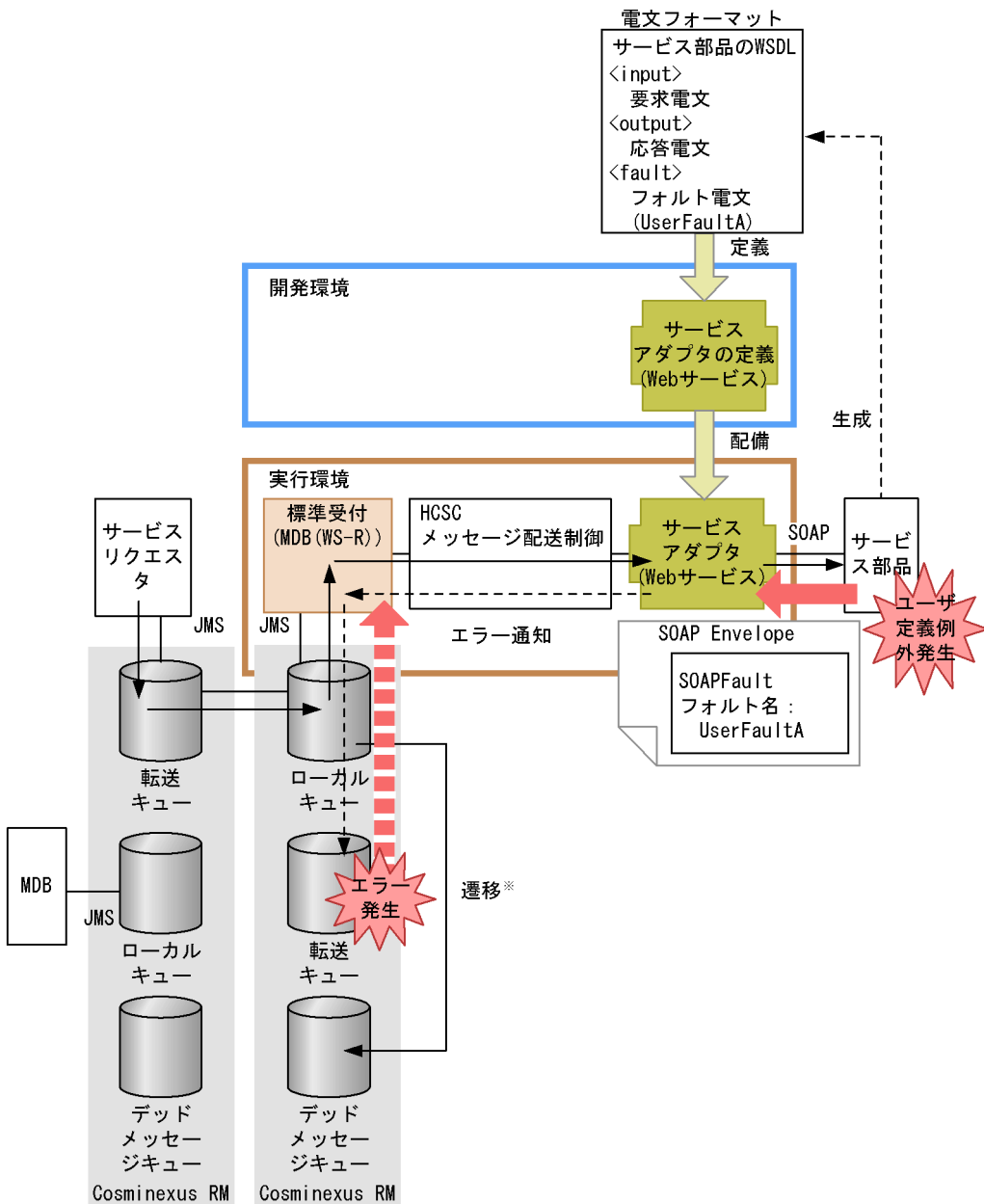
7. 障害対策

サービスリクエストから転送キューへメッセージの送信ができなかった場合、サービスリクエストへ例外 (JMSEException) がスローされます。サービスリクエストは、例外をキャッチし、キャッチした例外オブジェクトの getter を使用することで、発生したエラーの詳細を取得できます。サービスリクエスト稼働マシンからのメッセージ送信失敗の場合は、デッドメッセージキューに移動しません。Cosminexus RM および JMS の詳細については、マニュアル「Cosminexus Reliable Messaging」を参照してください。

同期のサービス部品を呼び出してユーザ定義例外のエラーが発生した場合

同期のサービス部品を呼び出してユーザ定義例外のエラーが発生した場合の MDB (WS-R) でのエラーの伝わり方を次の図に示します。

図 7-49 同期のサービス部品を呼び出してユーザ定義例外のエラーが発生した場合の MDB (WS-R) でのエラーの伝わり方



(凡例)

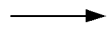


: SOAP Fault

: 例外



: ユーザがする処理



: 電文の流れ

注※ 配送回数の最大値に達した場合、または有効期限に達した場合に移行します。

7. 障害対策

非同期 (MDB (WS-R)) の標準受付に対してサービス部品を呼び出すときに ReplyTo キューを指定して、非同期 (MDB (WS-R)) の標準受付から同期のサービスアダプタ (Web サービス) のサービス部品を呼び出します。このとき、サービス部品側でユーザ定義例外が発生すると、エラー情報のメッセージが ReplyTo キュー (転送キュー) に送信されます。

転送キューの送信先をサービスリクエスト側のローカルキューに指定しておくことで、そこからメッセージを取り出すことで、エラーの内容を取得できます。

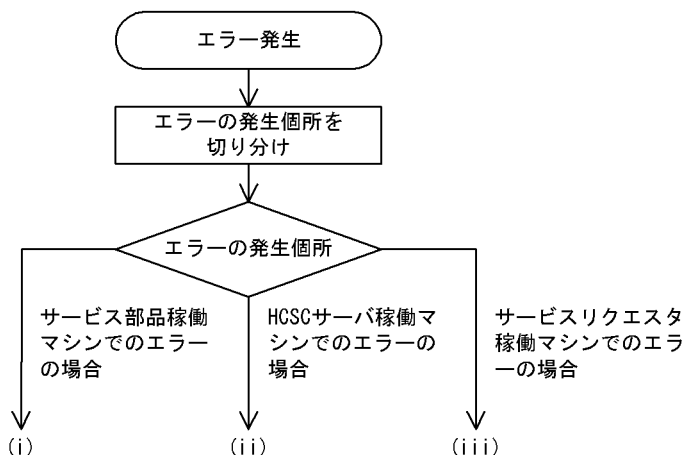
ReplyTo キュー (転送キュー) はあらかじめ作成して準備しておく必要がありますが、ReplyTo キューの設定をしていない場合や、ReplyTo キューのメッセージ数が超過し、ReplyTo キューへの送信が失敗した場合、HCSC サーバ内で処理がロールバックし、標準受付のローカルキューからメッセージが再送されます (サービス部品側の処理 (トランザクション) はロールバックしません)。

ロールバックの回数 (メッセージの配送回数) が最大値に達した場合、そのメッセージはデッドメッセージキューに移動します。デッドメッセージキュー名を設定していない場合、およびデッドメッセージキューを作成していない場合、無限にサービス部品を呼び出す処理が再実行されるため、必ずデッドメッセージキュー名やデッドメッセージキューを設定してください。

(2) 問題発生個所の切り分け方

サービスリクエストから標準受付 (MDB (WS-R)) を使用して、サービス部品を呼び出した場合の問題発生個所の切り分け方について説明します。切り分け方を次の図に示します。

図 7-50 問題発生個所の切り分け方 (サービス部品を呼び出した場合)



(i) サービス部品稼働マシンでのエラーの場合

サービス部品稼働マシン側の Cosminexus RM が出力する障害情報を参照して、障害を調査します。サービス部品のプログラムでエラー情報を出力している場合は、Cosminexus のユーザログを参照します。

要因は、次の観点で調査してください。

- サービスリクエストから要求したユーザ電文
- サービス部品稼働マシン
- サービス部品稼働マシンの Cosminexus RM の設定
- サービス部品のプログラム

(ii) HCSC サーバ稼働マシンでのエラーの場合

HCSC サーバ稼働マシン側のメッセージログ、または HCSC サーバ稼働マシン側の Cosminexus RM が出力する障害情報を参照して、障害を調査します。

要因は、次の観点で調査してください。

- サービスリクエストから要求した引数の内容
- HCSC サーバの設定または状態
- HCSC サーバの Cosminexus RM の設定
- サービスアダプタの定義内容
- ビジネスプロセスの定義内容
- サービスリクエストから要求したユーザ電文
- ネットワークの状態

(iii) サービスリクエスト稼働マシンでのエラーの場合

サービスリクエストがキャッチした例外からエラーの内容を取得できます。取得した例外のエラー情報を基に対処します。または、サービスリクエスト稼働マシン側の Cosminexus RM が出力する障害情報を参照して、障害を調査します。

要因は、次の観点で調査してください。

- サービスリクエスト稼働マシンの J2EE コンテナの設定または状態
- サービスリクエスト稼働マシンの Cosminexus RM の設定
- ネットワークの状態

(3) そのほかの障害要因の特定方法（サービス部品呼び出し要求の実行履歴の追跡）

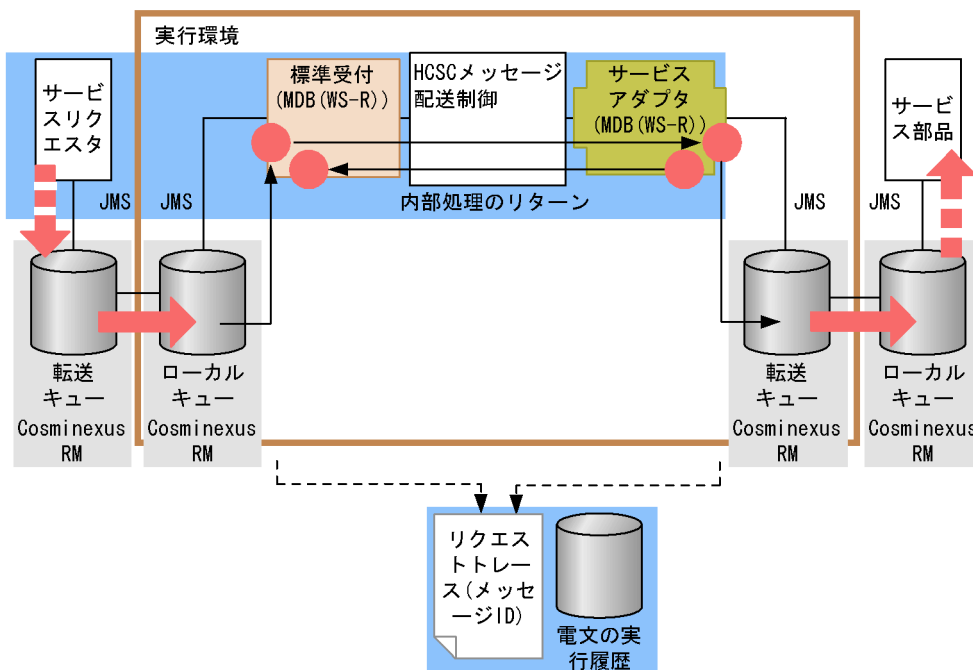
サービスリクエストから指定した情報や、HCSC サーバからの情報を基に、サービス部品呼び出しの処理がどこまで進んだか実行履歴を追跡できます。ここでは、実行履歴を追跡するために必要な情報（ID）について説明します。

(a) クライアント関連 ID

クライアント関連 ID は、サービス部品呼び出しを要求するサービスリクエスト側のプログラムで、要求時に設定する情報です。サービスリクエストからの要求電文と、HCSC サーバで管理している実行履歴やログおよびトレースとを対応づけるために使用します。そのため、HCSC サーバに送信した要求ごとに異なる ID を指定することを推奨します。ID はサービスリクエスト開発時に指定します。クライアント関連 ID が引き継がれる範囲を次の図に示します。

7. 障害対策

図 7-51 クライアント関連 ID が引き継がれる範囲 (MDB (WS-R) 実行時)



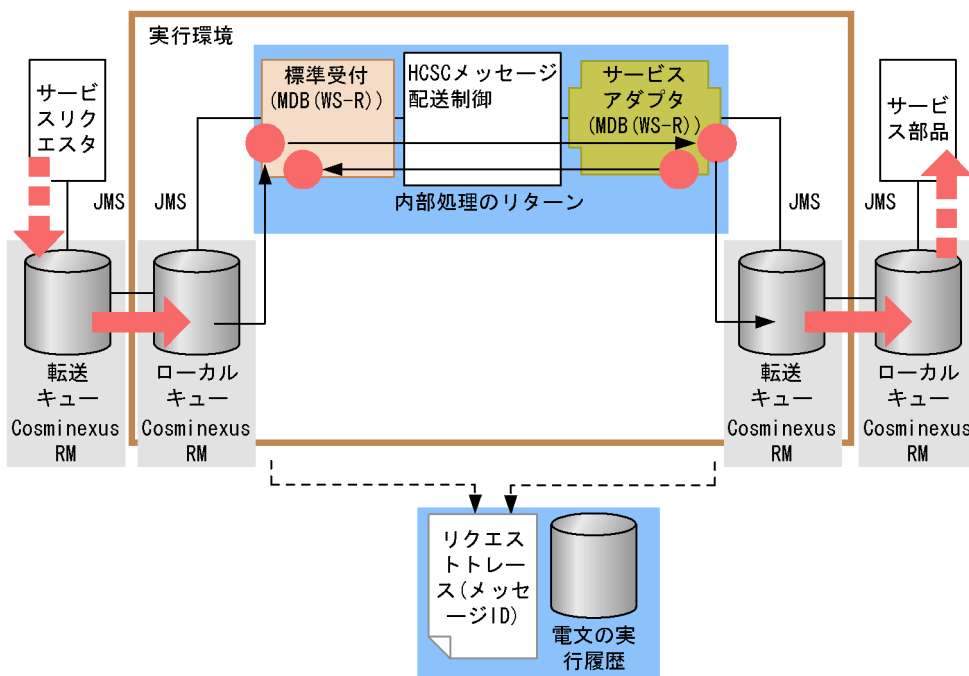
(凡例)

- : WS-R
- : JMSとのインターフェース
- : クライアント関連IDが引き継がれる範囲
- : 電文の流れ
- : リクエストトレースの収集
- : リクエストトレース取得ポイント

(b) メッセージ共通 ID

HCSC サーバが付与する ID です。HCSC サーバ内のログやトレース、電文の実行履歴情報を識別するために使用します。メッセージ共通 ID が引き継がれる範囲を次の図に示します。

図 7-52 メッセージ共通 ID が引き継がれる範囲 (MDB (WS-R) 実行時)



(凡例)

: WS-R

: 電文の流れ

: JMSとのインターフェース

: リクエストトレースの収集

: メッセージ共通IDが引き継がれる範囲

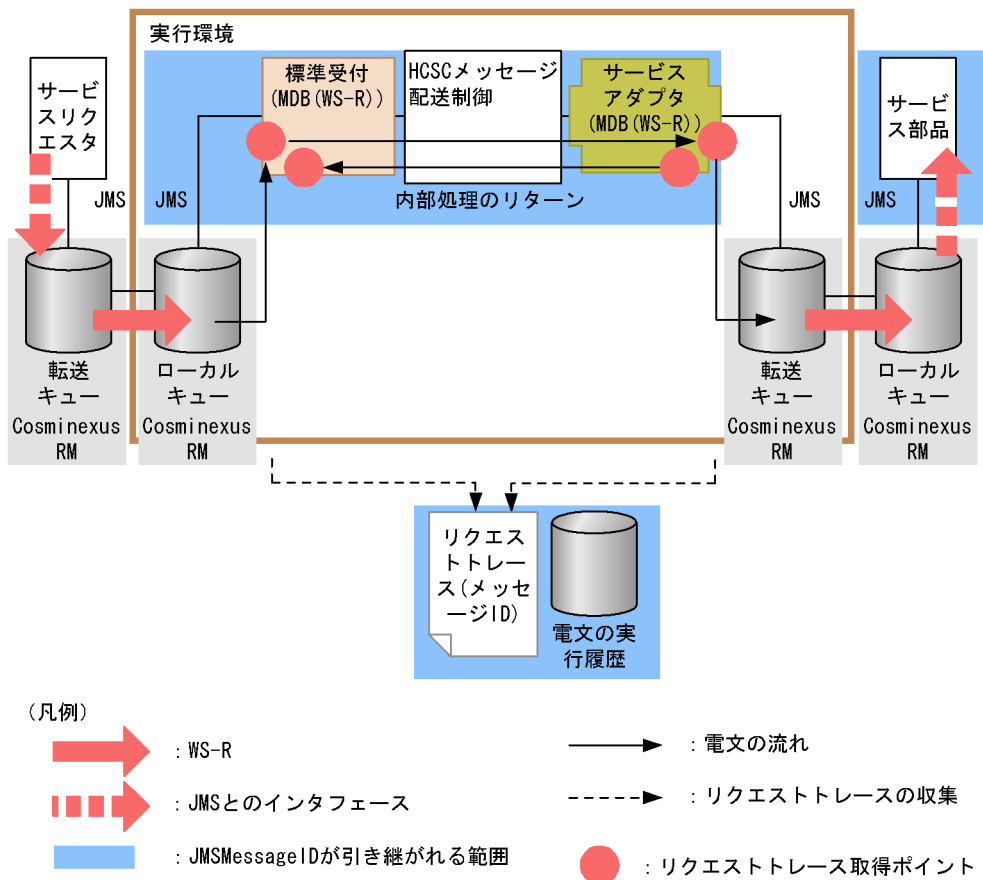
: リクエストトレース取得ポイント

(c) JMSMessageID

Cosminexus RM が付与する ID です。HCSC サーバ内のログやトレース，電文の実行履歴に出力します。JMSMessageID が引き継がれる範囲を次の図に示します。

7. 障害対策

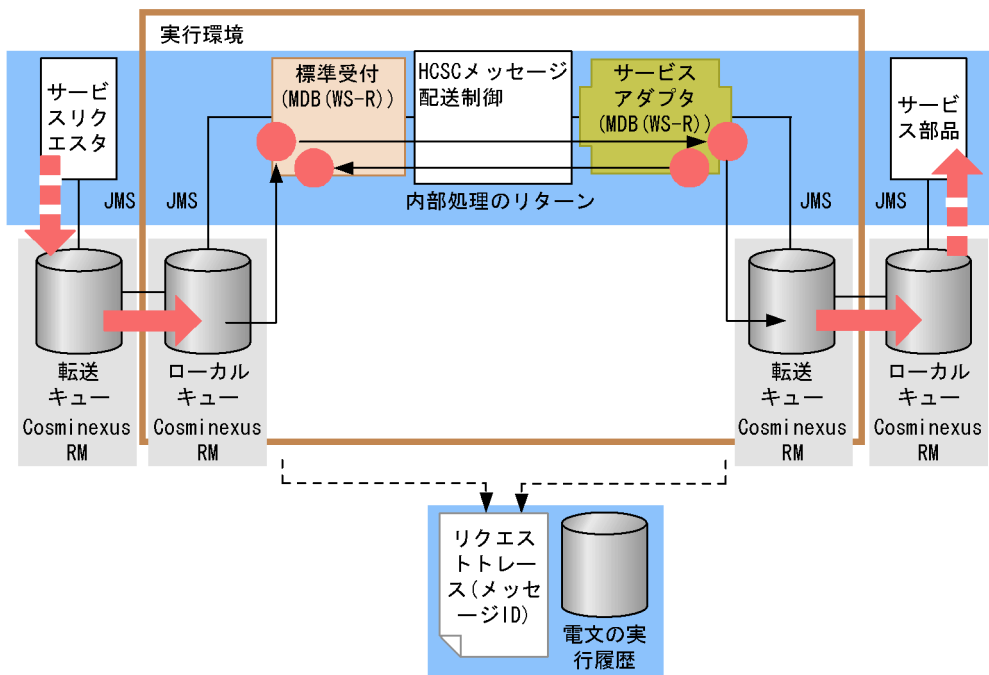
図 7-53 JMSMessageID が引き継がれる範囲 (MDB (WS-R) 実行時)





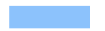



(d) JMSCorrelationID およびユーザ固有の JMS プロパティ

サービス部品の呼び出し要求時に、サービスリクエストに JMSCorrelationID およびユーザ固有の JMS プロパティを設定すると、その値がサービス部品側のキューまで引き継がれます。サービス部品側のプログラムで取得することで、メッセージを一意に関連づけられます。JMSCorrelationID およびユーザ固有の JMS プロパティが引き継がれる範囲を次の図に示します。

図 7-54 JMSCorrelationID およびユーザ固有の JMS プロパティが引き継がれる範囲
(MDB (WS-R) 実行時)



(凡例)

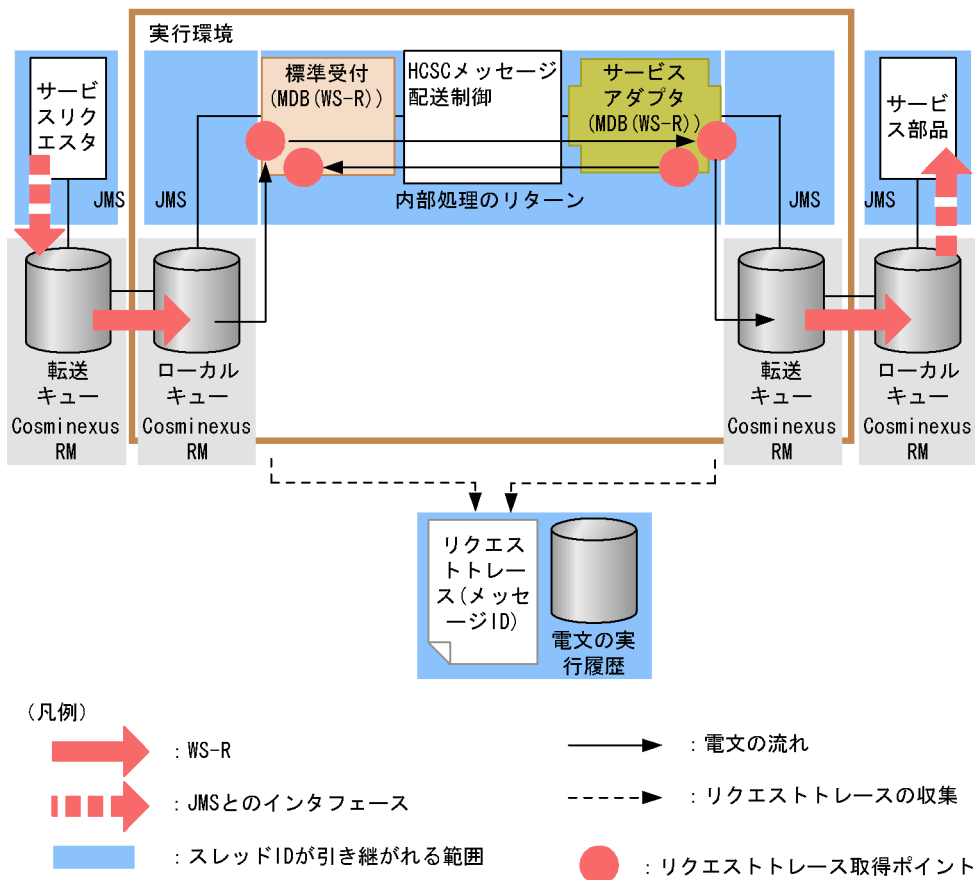
-  : WS-R
-  : JMSとのインターフェース
-  : JMSCorrelationIDおよびユーザ固有のJMSプロパティが引き継がれる範囲
-  : リクエストトレース取得ポイント
-  : 電文の流れ
-  : リクエストトレースの収集

(e) スレッド ID

J2EE コンテナによって処理するスレッドごとに与えられる ID です。スレッド ID が引き継がれる範囲を次の図に示します。

7. 障害対策

図 7-55 スレッド ID が引き継がれる範囲 (MDB (WS-R) 実行時)



7.7.4 MDB (DB キュー) 実行時の障害対策

(1) MDB (DB キュー) でのエラーの伝わり方

MDB (DB キュー) でのサービス部品呼び出しでは、サービスリクエストと HCSC サーバの間、HCSC サーバとサービス部品の間でエラーは伝わりません。検知できる障害の種類と、ログおよびトレースの出力先を次に説明します。

なお、非同期の標準受付 (MDB (DB キュー)) からサービスアダプタ (MDB (DB キュー)) へのサービス部品呼び出しはできません。そのため、サービス部品側が DB キューの場合、またはサービスリクエスト側が DB キューの場合とに分けて説明します。

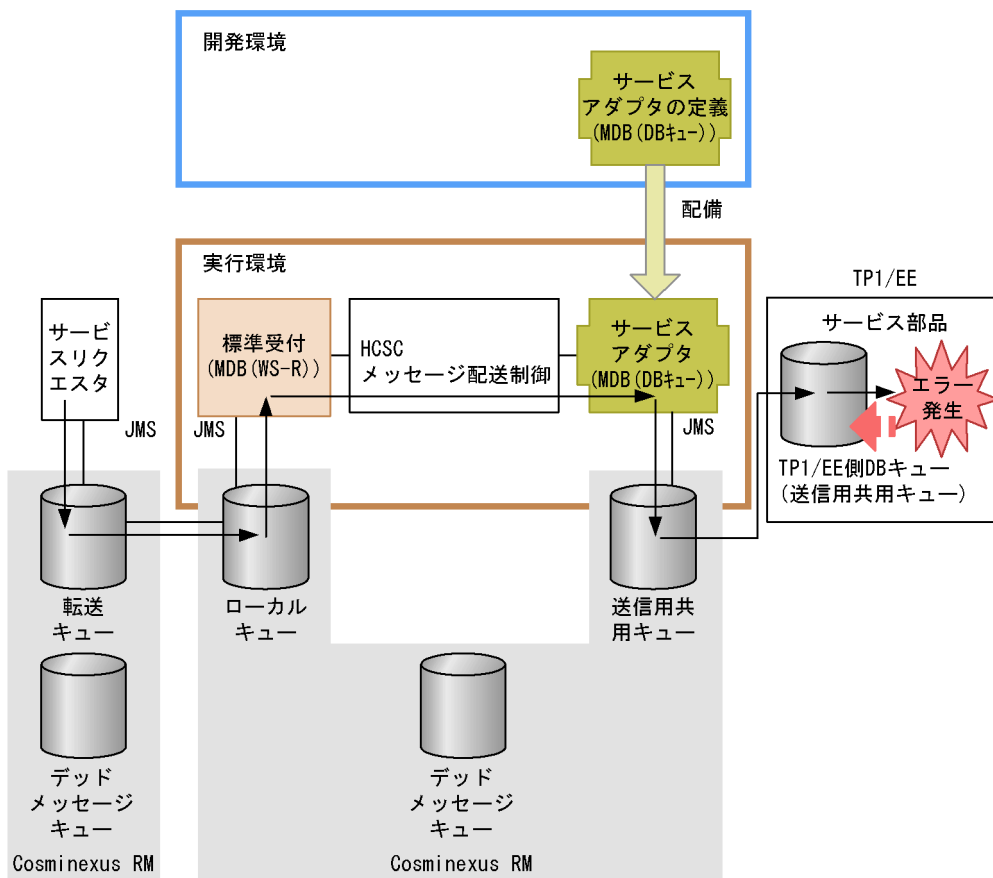
(a) DB キューがサービス部品側にある場合

サービス部品でエラーが発生した場合

サービス部品で発生したエラーは、HCSC サーバおよびサービスリクエストへエラー情報として伝わりません。エラーの情報はサービス部品稼働マシン側に出力さ

れます。サービス部品でエラーが発生した場合のエラーの伝わり方を次の図に示します。

図 7-56 サービス部品でエラーが発生した場合のエラーの伝わり方



(凡例)



: 例外



: ユーザがする処理

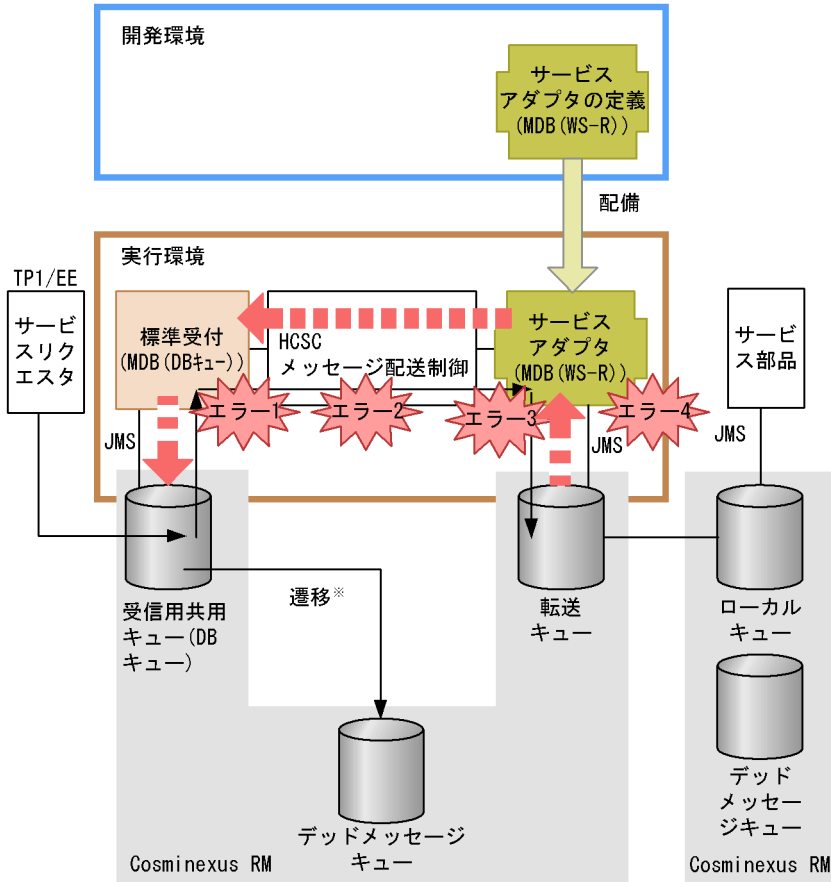
—————▶ : 電文の流れ

(b) DB キューがサービスリクエスト側にある場合

HCSC サーバからエラーが発生した場合

HCSC サーバからエラーが発生した場合のエラーの伝わり方を次の図に示します。

図 7-57 HCSC サーバからエラーが発生した場合のエラーの伝わり方



(凡例)

- : 例外
- : ユーザがする処理
- : 電文の流れ

注※ 配送回数の最大値に達した場合、または有効期限に達した場合に遷移します。

図中の各エラーには、次に示すケースが該当します。

- エラー 1: 要求パラメタ不正など。
- エラー 2: あて先 (ロケーション) が見つからない, アダプタが停止しているなど。
- エラー 3: データ変換に失敗したなど。
- エラー 4: メッセージ送信失敗など

HCSC サーバで図中のエラー 1 ~ エラー 4 のどれかを検知した場合, HCSC サーバ稼働マシン上の Cosminexus RM にエラーを伝え, 発生したエラーのメッセージをメッセージログに出力します。また, Cosminexus

RM は、ローカルキューからメッセージの取り出しに失敗したことを示すメッセージを HCSC サーバ稼働マシン上のログに出力します。

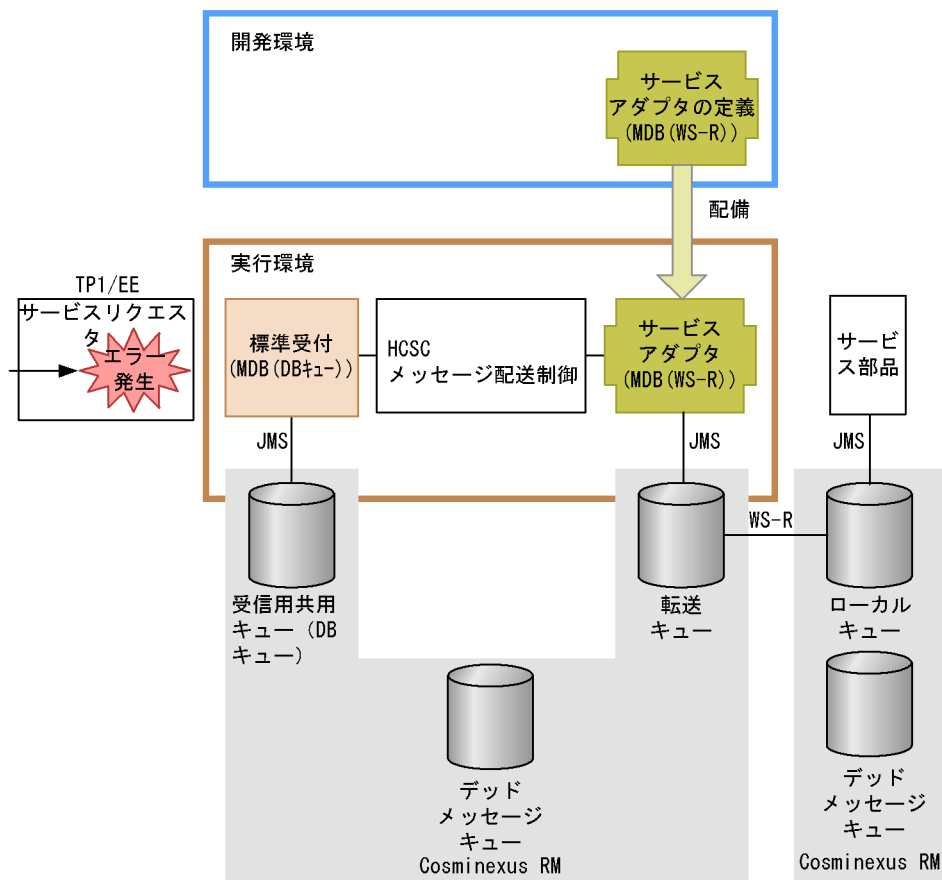
なお、HCSC サーバでエラーを検知した場合、HCSC サーバ側でロールバックして再度サービス部品でメッセージの取り出し（サービス部品呼び出し）を試みます。HCSC サーバ稼働マシン上のメッセージの取り出しでロールバックして、ロールバックの回数（メッセージの配送回数）が最大値に達した場合、そのメッセージはデッドメッセージキューに移動します。デッドメッセージキュー名を設定していない場合、およびデッドメッセージキューを作成していない場合は、無限にサービス部品を呼び出す処理が再実行されるため、必ずデッドメッセージキュー名やデッドメッセージキューを設定してください。

Cosminexus RM のセットアップについては、「3.1.2 実行環境に必要なソフトウェアの設定」を参照してください。Cosminexus RM の詳細については、マニュアル「Cosminexus Reliable Messaging」を参照してください。

サービスリクエストでエラーを検知した場合

サービスリクエストでエラーを検知した場合のエラーの伝わり方を次の図に示します。

図 7-58 サービスリクエストでエラーを検知した場合のエラーの伝わり方



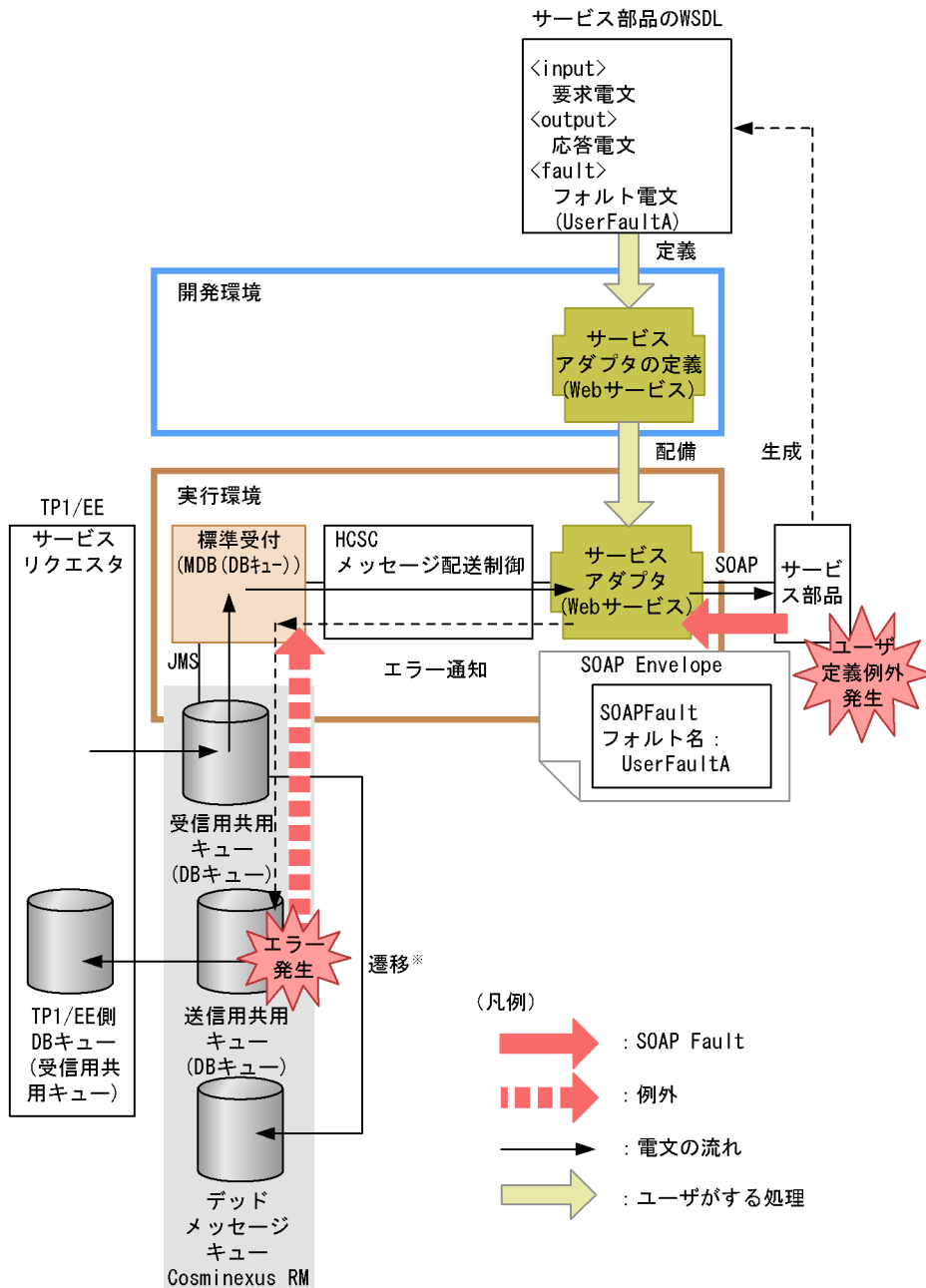
(凡例)

➡ : ユーザがする処理 ➡ : 電文の流れ

サービスリクエストが DB キューにメッセージをキューイングしたときに発生したエラーは、サービスリクエスト稼働マシン側に出力されます。

同期のサービス部品を呼び出してユーザ定義例外のエラーが発生した場合
同期のサービス部品を呼び出してユーザ定義例外のエラーが発生した場合のエラーの伝わり方を次の図に示します。

図 7-59 同期のサービス部品を呼び出してユーザ定義例外のエラーが発生した場合のエラーの伝わり方



注※ 配送回数の最大値に達した場合、または有効期限に達した場合に遷移します。

非同期 (MDB (DB キュー)) の標準受付に対してサービス部品を呼び出しすときに ReplyTo キューを指定して、非同期 (MDB (DB キュー)) の標準受付から同期の

7. 障害対策

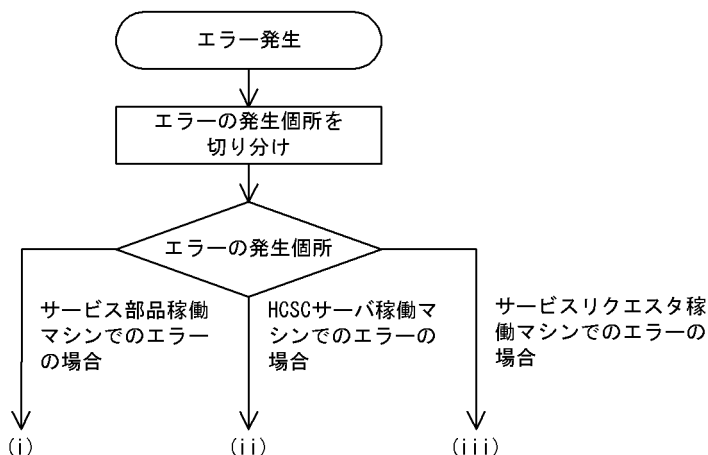
サービスアダプタ（Web サービス）のサービス部品を呼び出します。このとき、サービス部品側でユーザ定義例外が発生すると、エラー情報のメッセージが ReplyTo キュー（送信用共用キュー）に送信されます。送信用共用キューの送信先をサービスリクエスト側の DB キューに指定しておくこと、そこからメッセージを取り出すことで、エラーの内容を取得できます。

ReplyTo キュー（送信用共用キュー）はあらかじめ作成して準備しておく必要がありますが、ReplyTo キューの設定をしていない場合や、ReplyTo キューのメッセージ数が超過し、ReplyTo キューへの送信が失敗した場合、HCSC サーバ内で処理がロールバックして、標準受付の受信用共用キューからメッセージが再送されます（ただし、サービス部品側の処理（トランザクション）はロールバックしません）。ロールバックの回数（メッセージの配達回数）が最大値に達した場合、そのメッセージはデッドメッセージキューに移動します。デッドメッセージキュー名を設定していない場合、およびデッドメッセージキューを作成していない場合は、無限にサービス部品を呼び出す処理が再実行されるため、必ずデッドメッセージキュー名やデッドメッセージキュー設定してください。

（2）問題発生個所の切り分け方

サービスリクエストから標準受付（MDB（DB キュー））を使用して、サービス部品を呼び出した場合の問題発生個所の切り分け方について説明します。問題発生個所の切り分けの流れを次の図に示します。

図 7-60 問題発生個所の切り分けの流れ（サービスリクエストから標準受付（MDB（DB キュー））を使用して、サービス部品を呼び出した場合）



(i) サービス部品稼働マシンでのエラーの場合

サービス部品稼働マシン側に出力する障害情報から、障害を調査します。要因は、次の観点で調査してください。

- サービスリクエストから要求したユーザ電文
- サービス部品稼働マシンの状態

- サービス部品稼働マシンの設定
- サービス部品のプログラム

(ii) HCSC サーバ稼働マシンでのエラーの場合

HCSC サーバ稼働マシン側のメッセージログ，または HCSC サーバ稼働マシン側の Cosminexus RM が出力する障害情報を参照して，障害を調査します。

要因は，次の観点で調査してください。

- サービスリクエスタから要求したバイナリデータの内容
- サービスリクエスタから要求したバイナリデータの形式
- HCSC サーバの設定または状態
- HCSC サーバの Cosminexus RM の設定
- サービスアダプタの定義内容
- ビジネスプロセスの定義内容
- サービスリクエスタから要求したユーザ電文
- ネットワークの状態

(iii) サービスリクエスタ稼働マシンでのエラーの場合

サービスリクエスタ稼働マシン側に出力する障害情報から，障害を調査します。

要因は，次の観点で調査してください。

- サービスリクエスタから要求したユーザ電文
- サービスリクエスタ稼働マシンの状態
- サービスリクエスタ稼働マシンの設定
- サービスリクエスタのプログラム

(3) そのほかの障害要因の特定方法（サービス部品呼び出し要求の実行履歴の追跡）

サービスリクエスタから指定した情報や，HCSC サーバからの情報を基に，サービス部品呼び出しの処理がどこまで進んだか実行履歴を追跡できます。ここでは，実行履歴を追跡するために必要な情報（ID）について説明します。

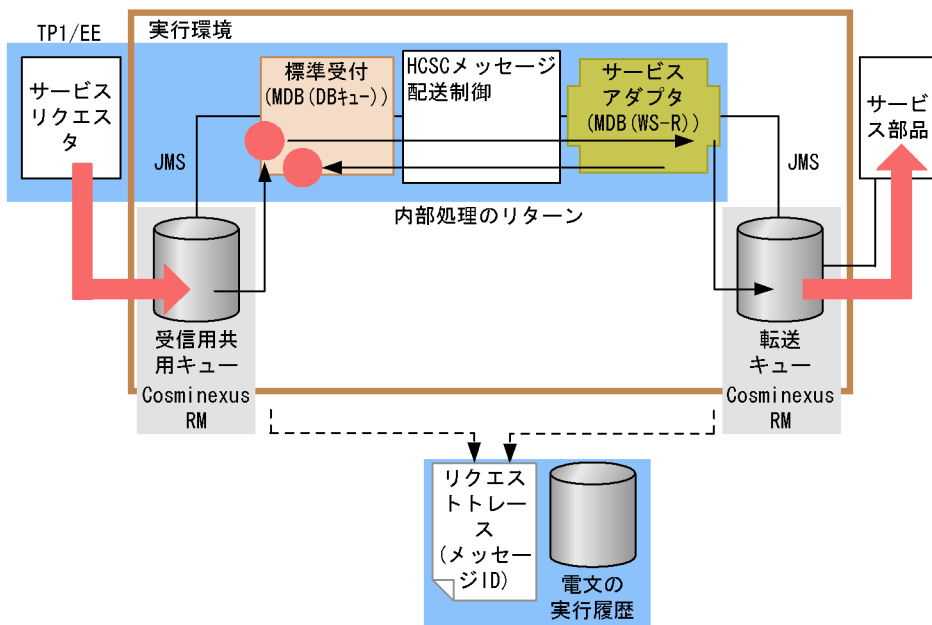
(a) クライアント関連 ID

クライアント関連 ID は，サービス部品呼び出し要求を行うサービスリクエスタ側のプログラムで，要求時に設定する情報です。サービスリクエスタからの要求電文と，HCSC サーバで管理している実行履歴やログおよびトレースとを対応づけるために使用します。そのため，HCSC サーバに送信した要求ごとに異なる ID を指定することを推奨します（サービスリクエスタ作成時に指定が必要です）。クライアント関連 ID が引き継がれる範囲を次の図に示します。

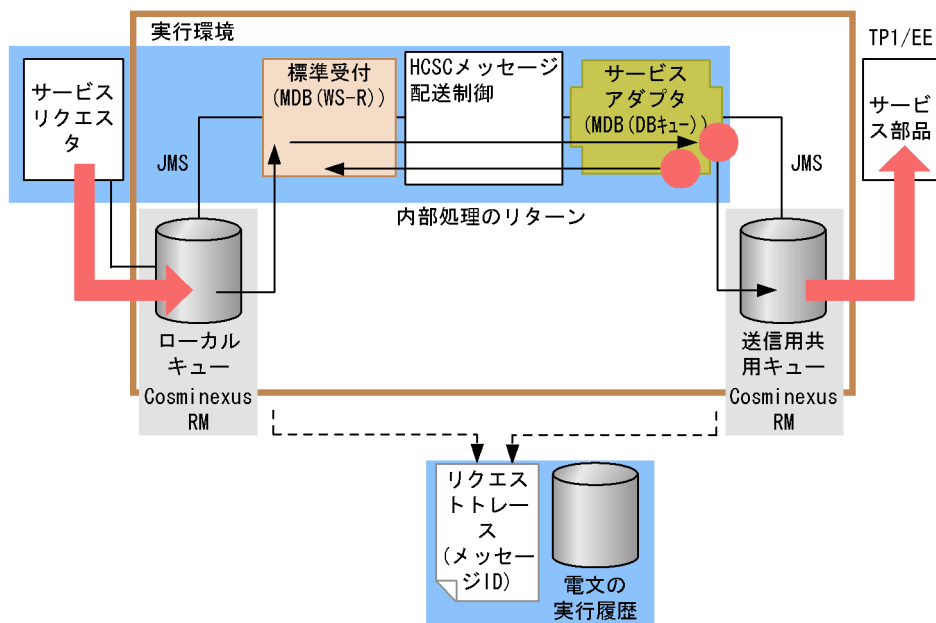
7. 障害対策

図 7-61 クライアント関連 ID が引き継がれる範囲 (MDB (DB キュー) 実行時)

● サービスリクエスト側がDBキューの場合



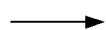
●サービス側がDBキューの場合



(凡例)



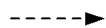
: TP1/EE側の処理



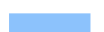
: 電文の流れ



: リクエストトレース取得ポイント



: リクエストトレースの収集



: クライアント相関IDが引き継がれる範囲

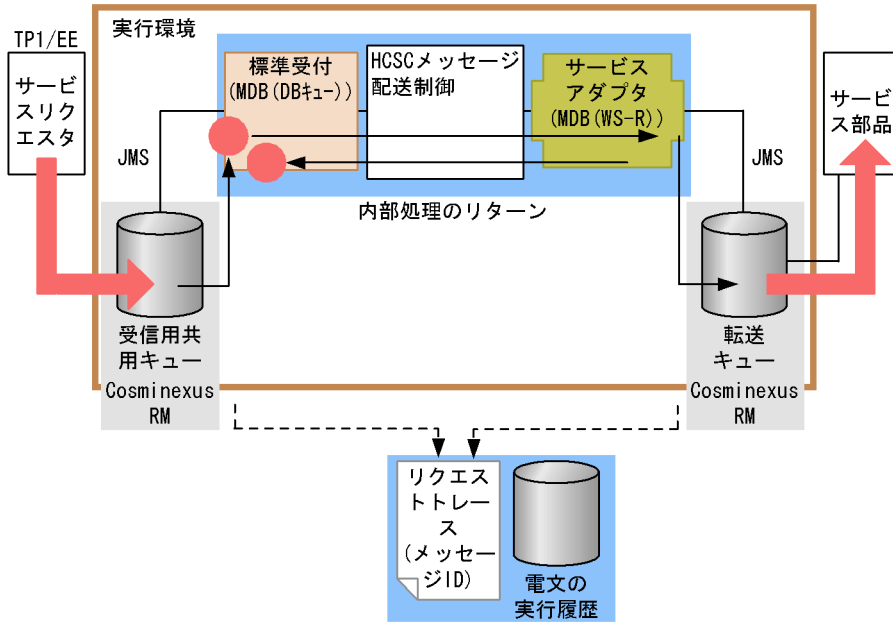
(b) メッセージ共通 ID

HCSC サーバが付与する ID です。HCSC サーバ内のログやトレース、電文の実行履歴情報を識別するために使用します。メッセージ共通 ID が引き継がれる範囲を次の図に示します。

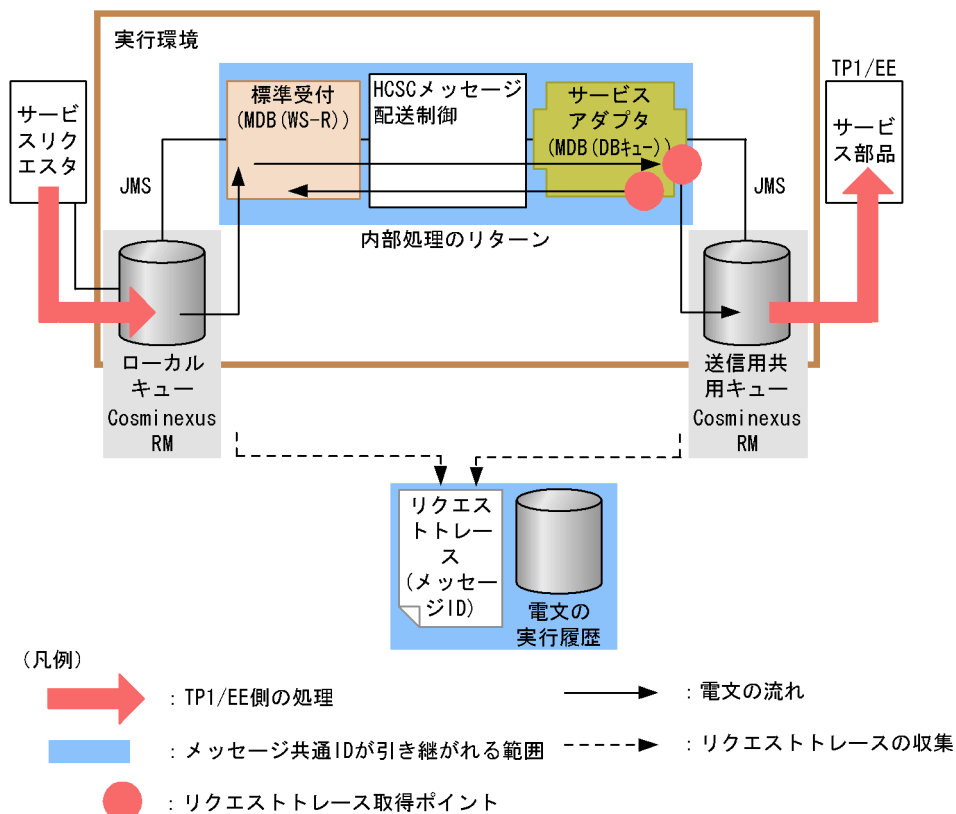
7. 障害対策

図 7-62 メッセージ共通 ID が引き継がれる範囲 (MDB (DB キュー) 実行時)

●標準受付がDBキューの場合



● サービスアダプタがDBキューの場合



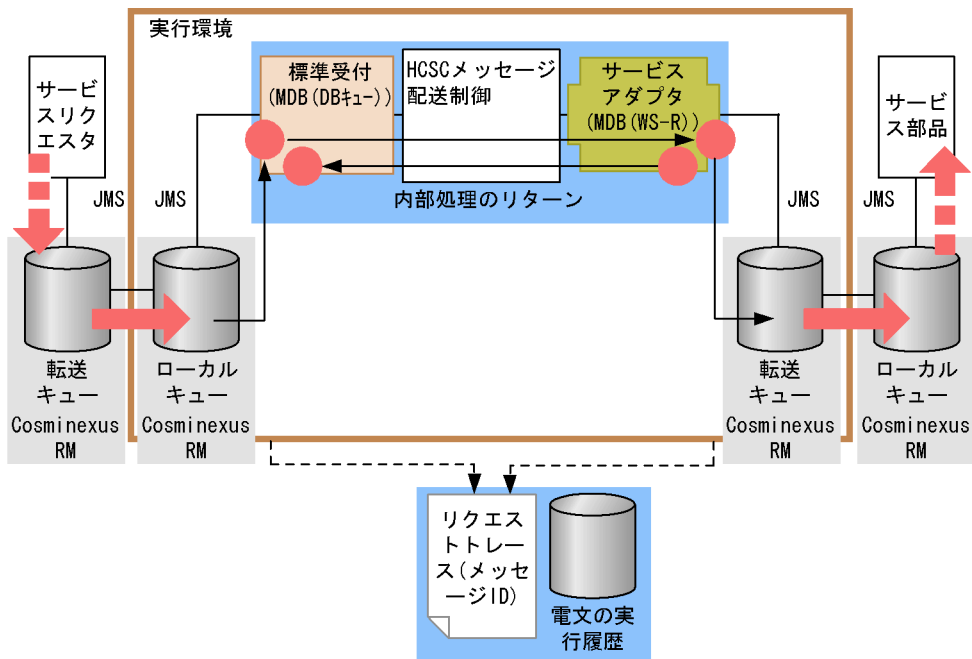
(c) JMSMessageID

Cosminexus RM が付与する ID です。HCSG サーバ内のログやトレース，電文の実行履歴に出力します。JMSMessageID が引き継がれる範囲を次の図に示します。

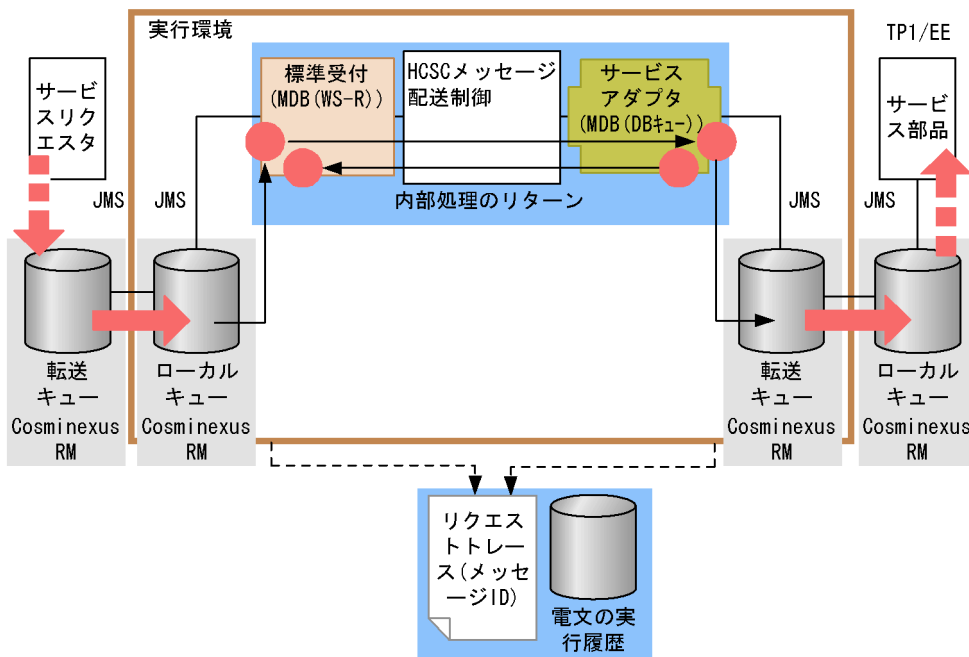
7. 障害対策

図 7-63 JMSMessageID が引き継がれる範囲 (MDB (DB キュー) 実行時)

●標準受付がDBキューの場合



●サービスアダプタがDBキューの場合



(凡例)

- ➡ : WS-R ———▶ : 電文の流れ - - - - -▶ : リクエストトレースの収集
⋮➡ : JMSとのインターフェース ● : リクエストトレース取得ポイント
 : JMSMessageIDが引き継がれる範囲

注 JMSCorrelationID やユーザ固有のプロパティなどの情報は引き継がれません。

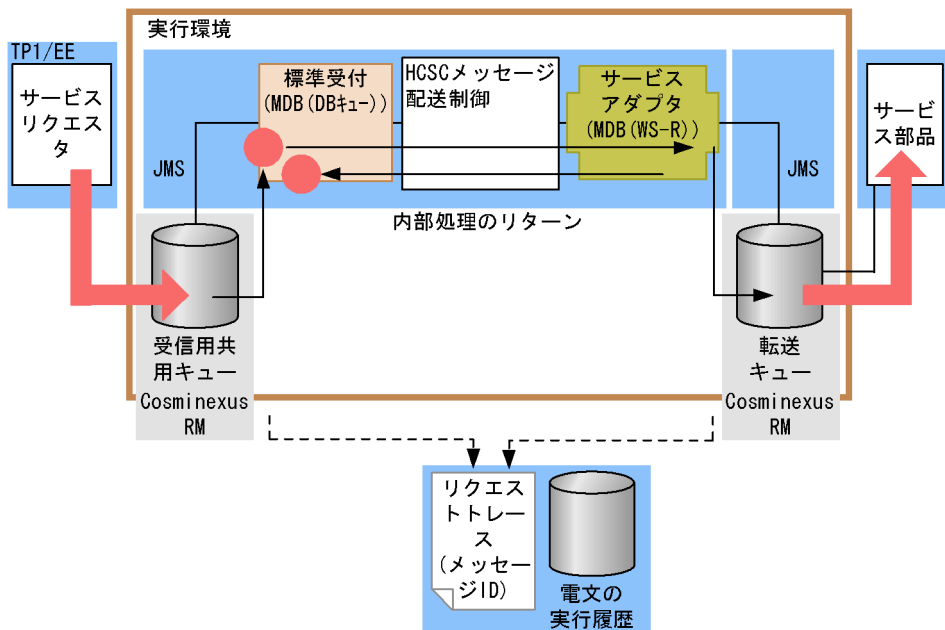
(d) スレッド ID

J2EE コンテナによって処理するスレッドごとに与えられる ID です。スレッド ID が引き継がれる範囲を次の図に示します。

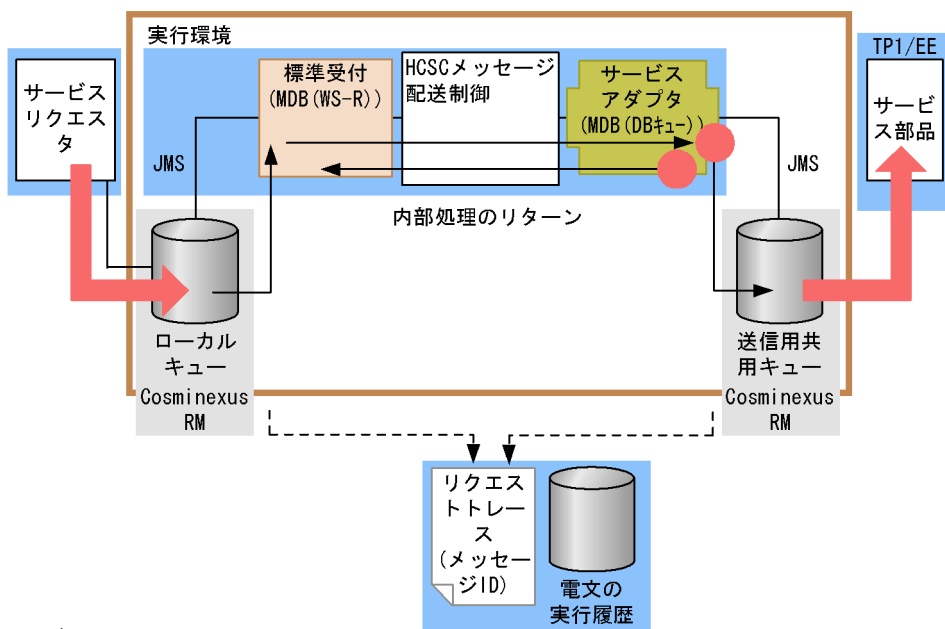
7. 障害対策

図 7-64 スレッド ID が引き継がれる範囲 (MDB (DB キュー) 実行時)

●サービスリクエスト側がDBキューの場合



●サービス側がDBキューの場合



(凡例)

- ➡ : TP1/EE側の処理
- : 電文の流れ
- ▶ : リクエストトレースの収集
- : リクエストトレース取得ポイント
- : スレッドIDが引き継がれる範囲

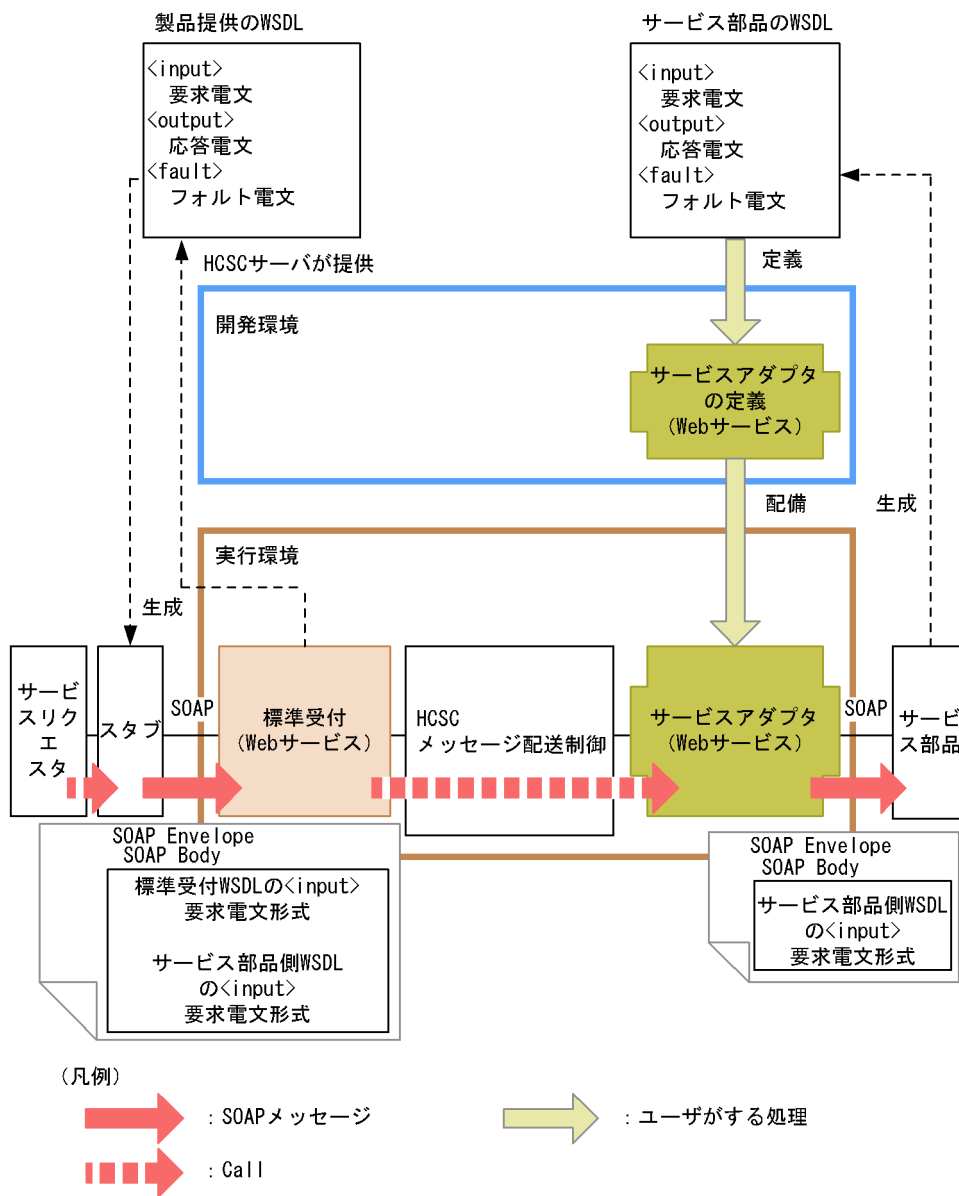
注 サービス部品側のプログラムと関連づける場合は、ユーザ電文に関連づけのための情報を埋め込む必要があります。

7.7.5 ユーザ電文に誤りがある場合の障害対策

(1) ユーザ電文に誤りがある場合のエラー

標準受付からサービスアダプタのサービス部品を直接呼び出す場合、サービス部品側で要求するユーザ電文（XML 文書）をサービスリクエストで作成する必要があります。そのため、サービスリクエストで作成する XML に誤りがあると、正しくサービス部品を呼び出せません。SOAP 通信での SOAP メッセージとユーザ電文の関係を次の図に示します。

図 7-65 SOAP 通信での SOAP メッセージとユーザ電文の関係



ユーザ電文に誤りがある（フォーマット定義の形式と異なる電文を実行した）場合，サービスアダプタのプロトコルの違いによって，エラーの内容が異なります。

また，電文の形式によっては，サービスアダプタでエラーとならないでサービス部品で例外になったり，サービス部品でエラーにならないで想定していない応答が返ったりすることがあります。

(a) Web サービス (SOAP 通信) 実行時にユーザ電文不正でエラーになる場合

サービスアダプタ (Web サービス) から呼び出せるサービス部品の仕様は、マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド」の Web サービスを利用したサービス部品の適用範囲で示す適用範囲を満たしている必要があります。適用範囲以外のサービス部品の場合、動作の保障ができません。

(b) SessionBean 実行時にユーザ電文不正でエラーになる場合

サービスアダプタ (SessionBean) から呼び出せるサービス部品の仕様は、マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド」の SessionBean を利用したサービス部品の適用範囲で示す適用範囲を満たしている必要があります。適用範囲以外のサービス部品の場合、動作の保障ができません。

(c) MDB (WS-R/DB キュー) 実行時にユーザ電文不正でエラーになる場合

サービスリクエストから要求したユーザ電文に誤りがある場合、MDB (WS-R/DB キュー) のサービスアダプタではエラーになりません。開発環境で定義するときにスキーマを定義しますが、通常、このスキーマで定義した形式でないユーザ電文でも、非同期キューに送信されます。サービス部品側でユーザ電文を受け取って検証するよう作成している場合は、サービス部品側でエラーを検知します。

(2) サービスアダプタでの電文の検証方法

サービスアダプタに指定したフォーマット定義 (XML スキーマ) とユーザ電文 (XML 文書) が、XML スキーマの仕様に従い、妥当かどうか検証できます。

サービスアダプタでの電文の検証機能を使用するには、HCSC サーバランタイム定義ファイルの telegram-validation プロパティで設定します。HCSC サーバランタイム定義ファイルの詳細については、「9. 定義ファイル」の「HCSC サーバランタイム定義ファイル」を参照してください。

! 注意事項

- 電文の検証機能を使用する場合、妥当性をチェックするため、サービス部品呼び出しの処理性能に影響があります。そのため、テストやデバッグ環境での使用を推奨します。
- 定義したフォーマット定義に対して妥当でない電文であるにもかかわらず、サービス部品呼び出しに成功していた電文の場合、電文の検証機能を使用することで、この機能によって妥当な形式でないと判断されると、サービスアダプタでエラーとなります。

電文の検証機能は、HCSC サーバ全体の次の表に示すアダプタで有効となります。サービスアダプタごとには設定できません。また、サービス部品を呼び出す要求電文、または応答電文に対して有効となります。

7. 障害対策

表 7-42 電文の検証機能が有効になるアダプタ

アダプタ種別	プロトコル種類	方向	データ変換定義のパターン	検証するフォーマット定義	電文種類	検証機能の有効
サービスアダプタ	Web サービス, SessionBean, MDB (WS-R), MDB (DB キュー)	要求	データ変換なし	サービス部品電文	XML	
					バイナリ	× ¹
			標準 - サービス部品でデータ変換	標準電文	XML	
					バイナリ	× ¹
			サービス部品電文	サービス部品電文	XML	
					バイナリ	× ¹
		応答	データ変換なし	サービス部品電文	XML	
					バイナリ	× ¹
			サービス部品 - 標準でデータ変換	標準電文	XML	
					バイナリ	× ¹
			サービス部品電文	サービス部品電文	XML	
					バイナリ	× ¹
フォルト	データ変換なし	×	XML	×		
DB アダプタ		要求	データ変換なし	サービス部品電文	XML	× ²
					バイナリ	×
			標準 - サービス部品でデータ変換	標準電文	XML	×
		応答	データ変換なし	サービス部品電文	XML	× ²
					バイナリ	×
			サービス部品 - 標準でデータ変換	標準電文	XML	×
			バイナリ	×		

アダプタ種別	プロトコル種類	方向	データ変換定義のパターン	検証するフォーマット定義	電文種類	検証機能の有効
				サービス部品電文	XML	× ²
TP1 アダプタ		要求	データ変換なし	サービス部品電文	バイナリ	× ¹
			標準 - サービス部品でデータ変換	標準電文	XML	
				バイナリ	× ¹	
		サービス部品電文	バイナリ	× ¹		
		応答	データ変換なし	サービス部品電文	バイナリ	× ¹
			サービス部品 - 標準でデータ変換	標準電文	XML	
				バイナリ	× ¹	
		サービス部品電文	バイナリ	× ¹		
		Object Access アダプタ		要求	データ変換なし	サービス部品電文
標準 - サービス部品でデータ変換	標準電文				XML	
	バイナリ				× ¹	
サービス部品電文	XML					
応答	データ変換なし			サービス部品電文	XML	
	サービス部品 - 標準でデータ変換			標準電文	XML	
				バイナリ	× ¹	
サービス部品電文	XML					
ファイルアダプタ				要求	データ変換なし	サービス部品電文
		バイナリ	× ¹			
		標準 - サービス部品でデータ変換	標準電文	XML		
			バイナリ	× ¹		

7. 障害対策

アダプタ種別	プロトコル種類	方向	データ変換定義のパターン	検証するフォーマット定義	電文種類	検証機能の有効	
		応答	データ変換なし	サービス部品電文	XML		
					バイナリ	× ¹	
				サービス部品電文	XML		
					バイナリ	× ¹	
				サービス部品 - 標準でデータ変換	標準電文	XML	
					バイナリ	× ¹	
				サービス部品電文	XML		
					バイナリ	× ¹	
iWay アダプタ		要求	データ変換なし	サービス部品電文	XML	×	
		応答	データ変換なし	サービス部品電文	XML	×	

(凡例)

：検証機能が有効になります。

×：検証機能が無効になります。

要求：サービスアダプタからサービス部品へ向かうことを示します。

応答：サービス部品からサービスアダプタへ向かうことを示します。

フォルト：エラー時にサービス部品からサービスアダプタへ向かうことを示します。

注 1 バイナリ電文のサービス部品呼び出し時は、設定したフォーマット定義を基に DOM に変換 (パース処理) しています。そのため、バイナリ電文でフォーマット定義に対して妥当でない電文を送付した場合、例外が発生し、次のメッセージが表示されます。

KDEC05504-E An attempt to specify format definition settings has failed. (information1 = 保守情報, information2 = 保守情報)

フォーマット定義の設定に失敗しました。

注 2 DB アダプタは、telegram-validation プロパティ以外の機能で、電文形式を検証します。

例えば、サービスアダプタで、要求時に、「リクエスト (バイナリ) - 標準 (XML) - サービス部品 (バイナリ)」の変換をした場合、要求電文に対して次の流れで変換と検証をします。

1. 要求電文をリクエストのフォーマット定義に対して検証します (バイナリ電文の機能が OFF の場合も同様です)。
2. 1. が妥当であった場合、リクエストの電文の形式から標準電文の形式に変換します。
3. 変換後の電文を標準電文のフォーマット定義に対して検証します。
4. 2. が妥当であった場合、標準電文の形式からサービス部品電文の形式に変換します。
5. 変換後の電文をサービス部品電文のフォーマット定義に対して検証します (バイナリ

電文の機能が OFF の場合も同様です)。

6. 4. が妥当であった場合、サービス部品を呼び出します。

7.7.6 システム全体の障害での障害調査

(1) プロセスハングアップ

サービスリクエストからのサービス部品呼び出し要求や、コマンド要求の応答が返ってこない場合、HCSC サーバ (J2EE サーバ) のプロセスがハングアップしているおそれがあります。プロセスハングアップ時の調査の流れについて説明します。

(a) サービスリクエストからのサービス部品呼び出し要求の場合

サービスリクエストからのサービス部品呼び出し要求の場合の、プロセスハングアップ時の調査手順を次に示します。

1. サービス部品呼び出し要求の処理がどこまで完了していて、どこでハングアップしているかを調査します。サービス部品呼び出し処理の実行履歴の追跡は、プロトコルごとに異なります。
各プロトコルでの要求実行時の障害対策については、「7.7.1 Web サービス (SOAP 通信) 実行時の障害対策」、「7.7.2 SessionBean 実行時の障害対策」、「7.7.3 MDB (WS-R) 実行時の障害対策」、および「7.7.4 MDB (DB キュー) 実行時の障害対策」を参照してください。
2. サービス部品呼び出し要求がどこまで処理されているか調査した結果を参考に、サービスリクエスト稼働マシン、HCSC サーバ稼働マシン、サービス部品稼働マシン、およびデータベース稼働マシンについて、該当プロセスの CPU 利用率をそれぞれ調査します。
CPU 利用率が 100% に近い状態の場合、無限ループや再起呼び出しに陥っているおそれがあります。
CPU 利用率が 0% に近い状態の場合、バックプロセスからの応答が返ってこないケースや、デッドロックなどのおそれがあります。
3. Cosminexus サービスプラットフォームのメッセージログや、Cosminexus の「J2EE サーバ、リダイレクタ、サーバ管理コマンドのログ」を確認して、不正なエラーが出ていないかどうかを調査します。
4. 性能解析トレースを取得し、解析します。処理に時間が掛かっている個所を特定することで、ハングアップが起きている個所を特定できます。
5. スレッドダンプを複数回取得して、時系列で観察し、それぞれのスレッドダンプで tid の同じスレッドのスタックトレースを比較調査します。

(b) コマンド要求の場合

コマンド要求の場合の、プロセスハングアップ時の調査手順を次に示します。

7. 障害対策

1. コマンド要求の場合、運用環境稼働マシン、HCSC サーバ稼働マシン、およびデータベース稼働マシンについて、該当プロセスの CPU 利用率をそれぞれ調査します。CPU 利用率が 100% に近い状態の場合、無限ループや再起呼び出しに陥っているおそれがあります。CPU 利用率が 0% に近い状態の場合、バックプロセスからの応答が返ってこないケースや、デッドロックなどのおそれがあります。
2. Cosminexus サービスプラットフォームのメッセージログや、Cosminexus の「J2EE サーバ、リダイレクタ、サーバ管理コマンドのログ」、および「運用管理エージェント、運用監視エージェント、Management Server のログ」を確認して、不正なエラーが出ていないかどうかを調査します。
3. スレッドダンプを複数回取得して、時系列で観察し、それぞれのスレッドダンプで tid の同じスレッドのスタックトレースを比較調査します。

(2) プロセススローダウン

サービスリクエストからのサービス部品呼び出し要求のスループットやレスポンスタイムがスローダウンしてきた場合の調査の流れについて説明します。

1. 性能解析トレースで、実行時間の長い個所を割り出します。
性能解析トレースを取得、解析し、処理に時間が掛かっている個所を特定することで、スローダウンが起きている個所を特定できます。

(3) タイムアウト

サービスリクエストからのサービス部品呼び出し要求や、コマンド要求の応答でタイムアウトが発生した場合の流れについて説明します。

(a) サービスリクエストからのサービス部品呼び出し要求の場合

サービスリクエストからのサービス部品呼び出し要求の場合の、タイムアウト時の調査手順を次に示します。

1. タイムアウトが発生した場合、エラーメッセージが出力されるので、これを調査します。
2. タイムアウトのエラーメッセージのほかにエラーメッセージが出ていないかどうか、Cosminexus サービスプラットフォームのメッセージログや、Cosminexus の「J2EE サーバ、リダイレクタ、サーバ管理コマンドのログ」を確認して調査します。
3. サービス部品呼び出し要求処理がどこまで完了していて、どこでハングアップしているかを調査します。サービス部品呼び出し処理の実行履歴の追跡は、プロトコルごとに異なります。

各プロトコルでの要求実行時の障害対策については「7.7.1 Web サービス (SOAP 通信) 実行時の障害対策」、「7.7.2 SessionBean 実行時の障害対策」、「7.7.3 MDB (WS-R) 実行時の障害対策」、および「7.7.4 MDB (DB キュー) 実行時の障害対策」を参照してください。

4. リクエストトレースまたは性能解析トレースを調査します。
サービス部品呼び出し要求がどこまで行われているか調査した結果を参考に、処理に時間が掛かっている個所を特定することで、タイムアウトが発生した原因を究明できます。

(b) コマンド要求の場合

コマンド要求の場合の、タイムアウト時の調査手順を次に示します。

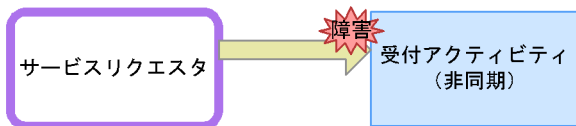
1. タイムアウトが発生した場合、エラーメッセージが出力されるので、これを調査します。
2. タイムアウトのエラーメッセージのほかにエラーメッセージが出ていないかどうか、Cosminexus サービスプラットフォームのメッセージログや、Cosminexus の「J2EE サーバ、リダイレクタ、サーバ管理コマンドのログ」、および「運用管理エージェント、運用監視エージェント、Management Server のログ」を確認して、不正なエラーが出ていないかどうか調査します。

7.7.7 ビジネスプロセス実行時の障害対策

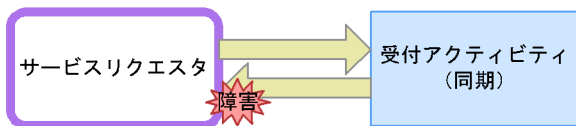
ビジネスプロセス実行時には、次の図に示す障害が発生する場合があります。これらの障害時の対処方法について説明します。

図 7-66 ビジネスプロセス実行時の障害

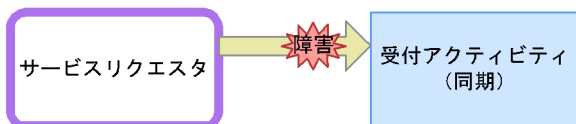
(1) 非同期受信の失敗



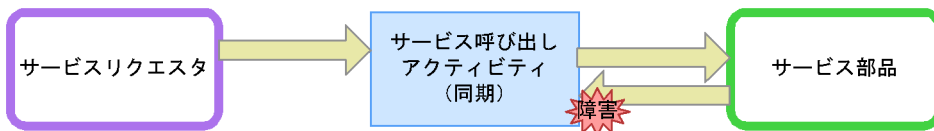
(2) 同期受信時のエラー



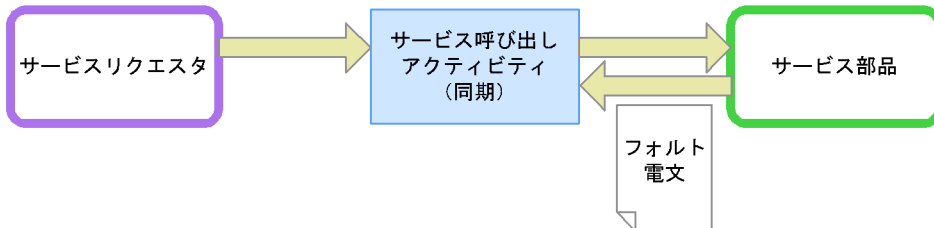
(3) 同期受信時のタイムアウト



(4) サービス部品への同期送信時のエラー



(5) サービス部品への同期送信時のフォルト



(1) 非同期受信の失敗

サービスリクエスタから非同期の受付アクティビティに対して電文を送信したときに、エラーが発生した場合、HCSC サーバでは電文を受け付けていない状態となります。この場合の対処方法を次に示します。

対処方法

1. エラーの要因を取り除きます。
2. サービスリクエスタから、同一の電文を再送信します。

(2) 同期受信時のエラー

サービスリクエスタから同期の受付アクティビティに対して電文を送信したときに、エ

ラーになった場合の対処方法を次に示します。

対処方法

1. エラーメッセージを参照します。
2. エラーの原因を取り除きます（エラーの種類によっては必要です）。
3. サービスリクエストから電文を再送信します。

（3）同期受信時のタイムアウト

サービスリクエストから同期の受付アクティビティに対して電文を送信したときに、タイムアウトが発生した場合の対処方法を次に示します。

対処方法

サービスリクエストから送信した電文が実行できているかどうか不明なため、メッセージログにエラーメッセージが出力されているかどうかを確認します。

エラーメッセージが出力されている場合

1. エラーメッセージが出力されている場合は、エラーメッセージに対応した対処を実施します。

エラーメッセージが出力されていない場合

1. 該当電文の相関セットから、プロセスインスタンスの状態を `cscpiselect` コマンドで確認します。
2. プロセスインスタンスの状態が実行中のままの場合は、次のどちらかを実施します。
 - ・プロセスインスタンスを `cscpireexec` コマンドで再実行します。
 - ・プロセスインスタンスの実行履歴を `cscpidelete` コマンドで削除して、サービスリクエストから同一電文を再送信します。
 プロセスインスタンスの状態を取得できない場合は、該当電文の受信が失敗しているため、サービスリクエストから同一の電文を再送信します。

（4）サービス部品への同期送信時のエラー

HCSC サーバがサービス部品に対して同期の呼び出しを実行したときに、エラーまたはタイムアウトを検知した場合、該当するサービス部品呼び出しアクティビティが実行中の状態のままとなり、プロセスインスタンスの実行が停止します。この場合の対処方法を次に示します。

対処方法

1. 障害情報に従って、サービス部品のエラー原因を取り除きます。
2. `cscpireexec` コマンドでプロセスインスタンスを再実行して、サービス部品を再呼び出しします。このとき、サービス部品に対して同一メッセージの2回目の呼び出しが行われるため、サービス部品側で重複チェックを実施して2回目の呼び出しを矛盾なく処理できる必要があります。

(5) サービス部品への同期送信時のフォルト

HCSC サーバがサービス部品に対して同期呼び出しを実行したときに、サービス部品がフォルト電文を応答した場合の対処方法を次に示します。

対処方法

- フォルトコネクションを定義している場合
定義したフォルトコネクションに従って、処理が実行されます。
- フォルトコネクションを定義していない場合
プロセスインスタンスがフォルト終了状態となり、プロセスインスタンスの実行が停止します。サービス部品がフォルトを応答しないような電文を再送信します。

7.8 障害発生時の自動運用

障害発生時に自動運用できるようにするための機能について記述します。

7.8.1 JP1 連携機能を使用した障害の監視

(1) JP1 によるメッセージの監視

Cosminexus サービスプラットフォームでは、発生した障害のメッセージを JP1 イベントとして JP1 に通知します。これによって、出力するエラーメッセージを収集し、JP1 の統合コンソールで集中的に監視できます。

また、JP1 側で特定の JP1 イベント（エラーメッセージ）の受信を契機として、自動的にコマンドを実行して、障害の発生をシステム管理者へ通知する運用や、回復のためにコマンドを実行するなど、システム運用を自動化できます。

JP1 の統合コンソールで監視するための設定については、「2.7 JP1 連携機能を使用する場合の環境構築」を参照してください。メッセージマッピングファイルについては、マニュアル「Cosminexus リファレンス 定義編」を参照してください。

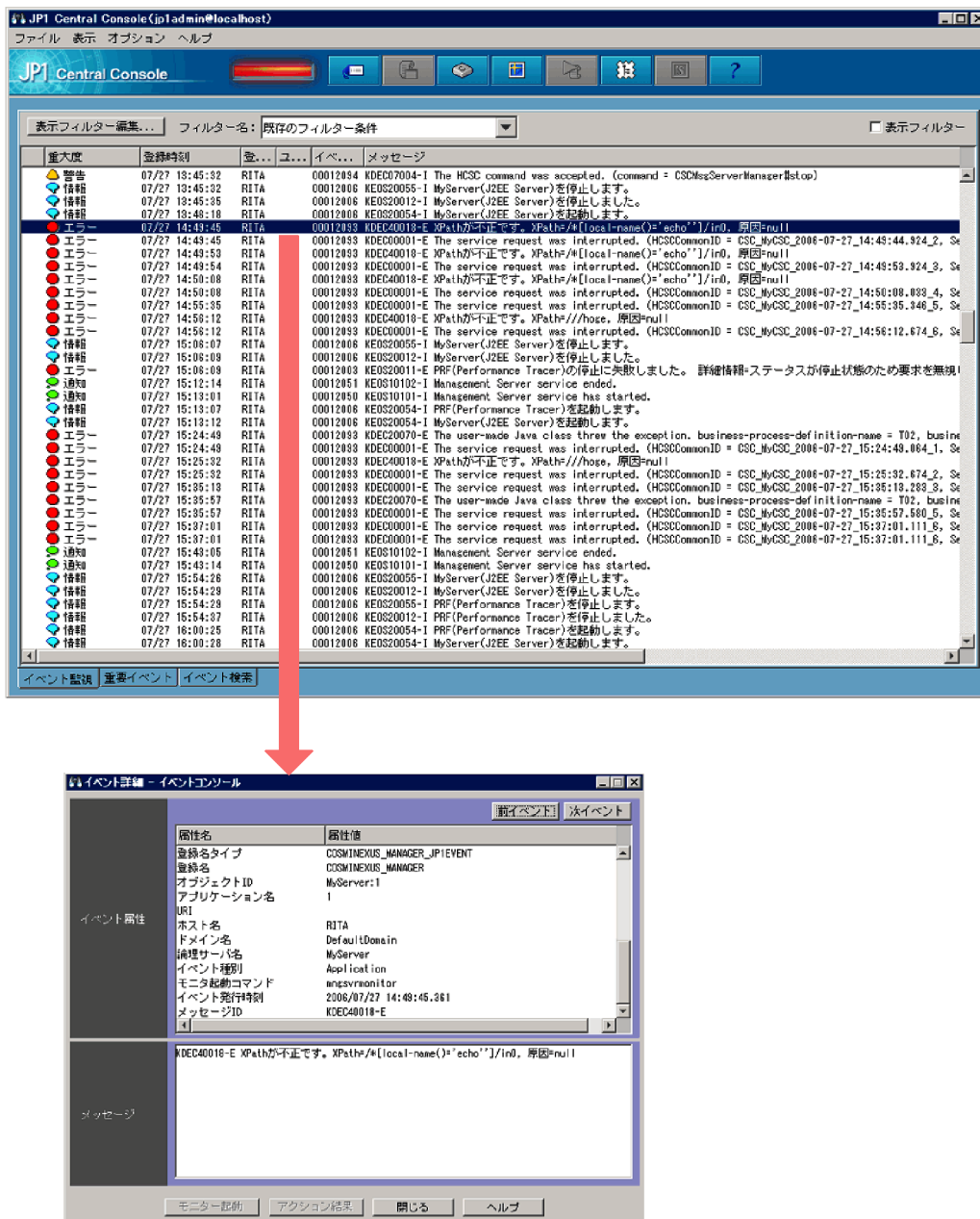
(2) JP1 イベントの確認方法

JP1 イベントの詳細情報は、JP1 の統合コンソールから確認します。統合コンソールで詳細を表示したい JP1 イベントを、ダブルクリックまたは右クリックから [イベント詳細表示] を選択すると、JP1 イベントの詳細情報が表示されます。統合コンソールの表示方法については、マニュアル「JP1/Integrated Management - Manager システム構築・運用ガイド」を参照してください。

統合コンソールと JP1 イベントの詳細情報の表示例を次の図に示します。

7. 障害対策

図 7-67 統合コンソールと JP1 イベントの詳細情報の表示例



7.8.2 Cosminexus サービスプラットフォームから通知する JP1 イベントの詳細情報

ここでは、JP1 イベントの詳細情報のうち、Cosminexus サービスプラットフォーム特

有の値について説明します。

(1) イベント ID

発行アプリケーションプログラムや事象の内容を表す値です。重大度によって、次の表に示す値が表示されます。

表 7-43 重大度とイベント ID

重大度	イベント ID
Error	0x00012093
Warning	0x00012094
Information	0x00012096

(2) 重大度

JP1 イベントの緊急性を表します。緊急性の高い順に、次の値が表示されます。

1. Error : エラー
2. Warning : 警告
3. Information : 情報

(3) オブジェクト ID

「<論理サーバ名> : <J2EE アプリケーション名>」が表示されます。

論理サーバ名

Cosminexus サービスプラットフォーム構築時に設定した J2EE サーバ名が表示されます。

J2EE アプリケーション名

メッセージ発行元の J2EE アプリケーション名が特定できた場合、J2EE アプリケーション名が表示されます。J2EE アプリケーション名から、Cosminexus サービスプラットフォームの障害発生個所が特定できます。J2EE アプリケーション名と Cosminexus サービスプラットフォームの障害発生個所を次の表に示します。

表 7-44 J2EE アプリケーション名と Cosminexus サービスプラットフォームの障害発生個所

J2EE アプリケーション名	障害発生個所
CSCMessaging	実行環境 (運用制御)
CSCMsgAsyncServiceDelivery	実行環境 (標準の非同期受付 (MDB (WS-R)))
CSCMsgAsyncServiceDeliveryDBQ	実行環境 (標準の非同期受付 (MDB (DB キュー)))
CSCMsgSyncServiceDelivery	実行環境 (標準の同期受付 (SessionBean))

7. 障害対策

J2EE アプリケーション名	障害発生箇所
CSCMsgSyncServiceDeliveryWS	実行環境（標準の同期受付（Web サービス））
サービス ID	該当するビジネスプロセスまたはサービスアダプタ

（4）メッセージ ID

JP1 イベントとして発行された Cosminexus サービスプラットフォームのメッセージ ID が表示されます。KDEC から始まるメッセージ ID が表示されます。

7.9 HCSC サーバ障害発生後の回復方法

7.9.1 HCSC サーバのシステム運用ができなくなった場合の回復方法

HCSC サーバで障害が発生し、システムの運用ができない場合は、次のように対処してください。

(1) 復旧に必要な情報

HCSC サーバの復旧に必要な情報を次に示します。

- 運用環境のリポジトリ情報
障害発生時の運用環境のリポジトリ情報です。
- HCSC サーバ構成定義ファイル
HCSC サーバのセットアップ時に、`cscsvsetup` コマンドの `-propfile` オプションで設定した情報です。
- HCSC サーバセットアップ定義ファイル
HCSC サーバのセットアップ時に、前提となる情報です。
- HCSC サーバランタイム定義ファイル
`cscsvconfig` コマンドの `-propfile` オプションで設定した情報です。

(2) 復旧手順

1. `cscsreptl` コマンドを実行して、リポジトリをエクスポートし、現在のリポジトリ情報をバックアップします。

```
cscsreptl -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -export <ファイル名>
```

2. `cscsvunsetup` コマンドを実行して、障害が発生した HCSC サーバをアンセットアップします。

```
cscsvunsetup -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <アンセットアップするHCSCサーバ名>
```

`cscsvunsetup` コマンドを実行してエラーが発生する場合は、手順 3. を実施してください。エラーが発生しない場合は、手順 4. を実施してください。

3. 障害の内容に応じてコマンドを実行します。
 - HCSC サーバのあるマシンとの間で通信障害が発生する場合
`cscsvunsetup` コマンドを実行して、障害が発生した HCSC サーバをアンセットアップします。

7. 障害対策

```
cscsvunsetup -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <アンセットアップするHCSCサーバ名> -ignore
```

- リポジトリまたはシステム構成定義でバージョン不一致が発生する場合
リポジトリルート配下を手動で削除してください。
4. 不要なリソースが残っているかどうかを確認し、不要なリソースが残っている場合は手動で削除します。
不要なリソースの確認については、「7.5.3 HCSC サーバのセットアップおよびアンセットアップ時の回復方法」を参照してください。
 5. cscsvsetup コマンドを実行して、HCSC サーバをセットアップします。
cscsvsetup コマンドの `-profile` オプションには、障害が発生した HCSC サーバで設定した HCSC サーバ構成定義ファイルを指定してください。

```
cscsvsetup -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名> -cluster <クラスタ名> -profile <HCSCサーバ構成定義ファイル名>
```

6. cscrepctl コマンドを実行して、手順 1 でバックアップしたリポジトリ情報をインポートします。

```
cscrepctl -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -import <ファイル名>
```

7. 必要に応じて csccompodeploy コマンドを実行して、ビジネスプロセスやサービスアダプタを配備します。
 - ビジネスプロセスを配備する場合

```
csccompodeploy -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名> -name <ビジネスプロセスのサービスID>
```

- サービスアダプタを配備する場合

```
csccompodeploy -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名> -name <サービスアダプタのサービスID>
```

7.9.2 クラスタ構成時の回復方法

クラスタ構成時に障害が発生した場合の対処方法について、ロードバランスクラスタ構成の場合と HA クラスタ構成の場合とに分けて説明します。

(1) ロードバランスクラスタ構成での障害と復旧

ロードバランスクラスタを構成している HCSC サーバの障害に備え、ロードバランスクラスタに余裕を持った HCSC サーバの台数を準備することで、障害が発生してもロードバランスクラスタで稼働している HCSC サーバの負荷を一定に保つことができます。

! 注意事項

標準の非同期受付 (MDB (WS-R) / MDB (DB キュー)) の受付キューは、HCSC サーバごとに用意します。したがって、ロードバランスクラスタ構成で障害が発生した場合、標準の非同期受付 (MDB (WS-R) / MDB (DB キュー)) の受付キューに滞留している電文は送信できません。

(a) 障害が発生した HCSC サーバの切り離し

ロードバランスクラスタを構成している HCSC サーバで障害が発生した場合、障害が発生した HCSC サーバをロードバランスクラスタから切り離します。切り離したあと、HCSC サーバの障害を取り除いて、サービス部品の実行要求を受け付けられる状態にします。障害を取り除いた HCSC サーバをロードバランスクラスタ内で稼働させることで復旧します。

(b) 障害が発生した HCSC サーバの復旧

障害が発生した HCSC サーバの切り離しと復旧手順について次に示します。

1. 障害が発生した場合、障害が発生した HCSC サーバにサービス部品の実行要求を送信しないよう、ロードバランサを設定します。
ロードバランサを設定することで、HCSC サーバへのサービス部品の実行要求を制御します。設定方法は、各ロードバランサの仕様によって異なります。
2. CTM を使用している場合、キューを閉塞します。
キューの閉塞方法については、マニュアル「Cosminexus システム運用ガイド」の CTM を使用したサービスの閉塞 (運用管理コマンド) に関する内容を参照してください。
3. 障害が発生した HCSC サーバから障害を取り除き、サービス部品の実行要求を受け付けられる状態にします。
4. CTM を使用している場合、キューの閉塞を解除します。
キューの閉塞を解除する方法については、マニュアル「Cosminexus システム運用ガイド」の CTM を使用したサービスの閉塞 (運用管理コマンド) に関する内容を参照してください。
5. 障害を取り除いた HCSC サーバにサービス部品の実行要求を送信するよう、ロードバランサを設定します。
設定方法は、各ロードバランサの仕様によって異なります。

(2) HA クラスタ構成での障害と復旧

現用系に障害が発生した場合、クラスタソフトウェアによって、処理は待機系に切り替えられます。待機系への切り替え後、現用系の障害を取り除いて、現用系での運用を再開させます。

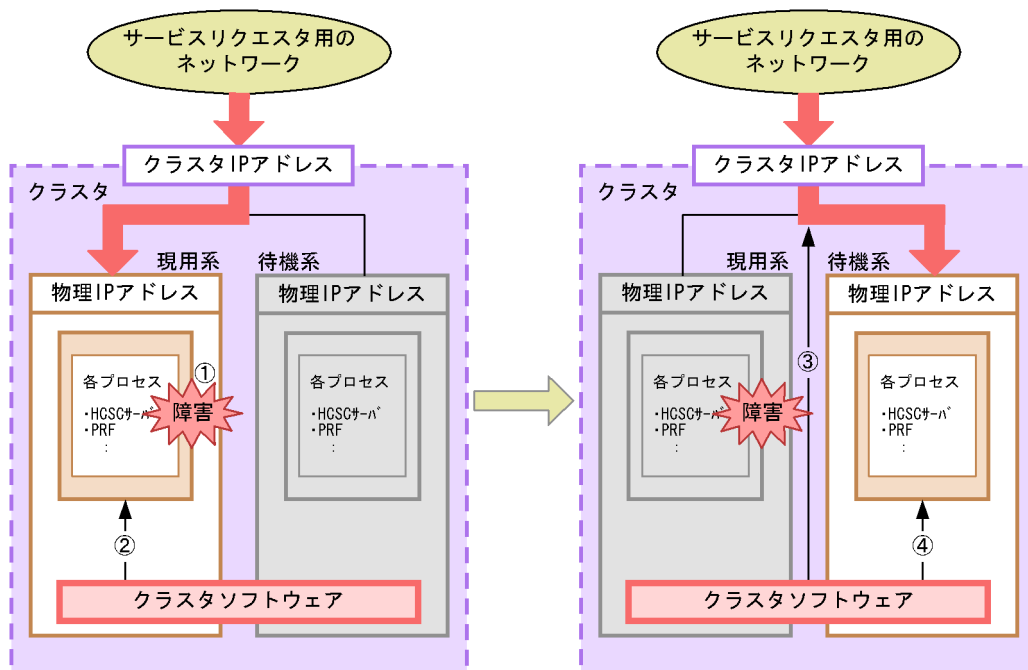
! 注意事項

現用系に障害が発生し、待機系に運用が切り替わった場合、現用系の障害を取り除いて、現用系での運用に戻す必要があります。待機系をそのまま現用系として利用し、障害が発生した系の障害を取り除いて待機系として利用することはできません。

(a) 系の切り替え

現用系に障害が発生し、クラスタソフトで待機系に処理が切り替わるときの動作を次の図に示します。

図 7-68 障害発生時の待機系への切り替え (HA クラスタ)



- ① 現用系で障害が発生し、プロセスがダウンします。
- ② クラスタソフトウェアが、現用系の障害を検知します。
- ③ クラスタソフトウェアが、現用系へのネットワークを切断し、待機系へ接続を切り替えます。
- ④ クラスタソフトウェアが、必要なプロセスを起動・開始するスクリプトを実行します。

(b) 現用系の復旧

現用系に障害が発生し、待機系に運用が切り替わった場合、現用系の障害を取り除いて、現用系での運用に戻す必要があります。

現用系の障害を取り除いて、運用を現用系に戻す手順について次に示します。

1. 現用系および待機系をサービスリクエスト用のネットワークから切断するなどして、サービスリクエストからの実行要求を受け付けない状態にします。
2. 待機系の標準受付およびユーザ定義受付を停止します。
標準受付の停止方法については、「5.2.29 標準受付を停止する」を参照してください。
ユーザ定義受付の停止方法については、「5.2.32 ユーザ定義受付を停止する」を参照してください。
3. 待機系の HCSC サーバを停止します。

7. 障害対策

HCSC サーバの停止方法については、「5.2.36 HCSC サーバを停止する」を参照してください。

4. 現用系の HCSC サーバの障害を回復します。
障害情報の採取方法および障害の回復方法については、「7. 障害対策」を参照してください。
5. 現用系の HCSC サーバを起動します。
HCSC サーバの起動方法については、「5.2.4 HCSC サーバを起動する」を参照してください。
6. 現用系の標準受付およびユーザ定義受付を開始します。
標準受付の開始方法については、「5.2.11 標準受付を開始する」を参照してください。
ユーザ定義受付の開始方法については、「5.2.8 ユーザ定義受付を開始する」を参照してください。
7. 現用系および待機系をサービスリクエスト用のネットワークに接続するなどして、現用系でサービスリクエストからの実行要求を受け付けられる状態にして運用を再開します。

7.9.3 運用環境のバックアップと復旧

運用環境に発生した障害を復旧する場合や、システムの規模の拡大に伴う運用マシンの移行などで環境を移行する場合に、環境の復旧に必要なファイルをバックアップできます。

(1) 運用環境のバックアップ

次に示す `cscenvbackup` コマンドを実行して、運用環境の復旧に必要な最新のファイルをバックアップします。

```
cscenvbackup -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -backupdir <バックアップファイル出力先ディレクトリ>
```

HCSC-Manager 定義ファイルに、バックアップファイル出力先ディレクトリを指定している場合は、次に示す `cscenvbackup` コマンドを実行します。

```
cscenvbackup -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード>
```

参考

運用環境バックアップファイルは、自動バックアップの場合にも取得できます。自動バックアップ時に取得される運用環境バックアップファイルは、次のところにあります。

- HCSC-Manager 定義ファイル (cscmng.propertes) に指定した環境バックアップファイルの出力先
- <Cosminexus インストールディレクトリ>¥CSC¥spool¥manager (HCSC-Manager 定義ファイル (cscmng.propertes) に出力先の指定がない場合)

取得した運用環境バックアップファイルは、次のコマンドを実行して、バックアップファイル内のリポジトリ情報を確認できます。

```
cscrcpls -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -envbackfile <運用環境バックアップファイル名>
```

(2) 運用環境の復旧

運用環境は、cscenvrestore コマンドを使用して、運用環境バックアップファイルから復旧できます。

参考

cscenvrestore コマンドによる復旧は、運用環境を実行環境と異なるマシンに構築している場合などに適しています。

! 注意事項

cscenvrestore コマンドで復旧できるのは、運用環境だけです。実行環境はこのコマンドでは復旧できません。実行環境を復旧するには、次に示す項の手順に従い、環境のリポジトリ情報やリソースを取り除いてから、実行環境を再構築してください。

- 7.5.3 HCSC サーバのセットアップおよびアンセットアップ時の回復方法
- 7.5.4 HCSC コンポーネントの配備および削除時の回復方法

(a) ディスク障害から復旧する場合の手順

手順を次に示します。

1. HCSC サーバを構築したマシンを用意します。HCSC サーバのディスクを交換するか、または必要に応じて PP をインストールします。
2. 取得済みの運用環境バックアップファイルを復旧するマシンが認識できるところに格納します。
3. cscrcpls コマンドを実行して、運用環境バックアップファイルの復旧する環境を確認

7. 障害対策

します。

```
cscrepls -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -envbackfile <運用環境バックアップファイル名>
```

4. cscenvrestore コマンドを実行して、運用環境バックアップファイルを使用し、環境を復旧します。

```
cscenvrestore -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -restorefile <運用環境のバックアップファイル名>
```

(b) 運用マシンを移行する場合の手順

手順を次に示します。

1. 必要に応じて、cscenvbackup コマンドで復旧前の運用環境のバックアップファイルを取得します。
cscenvrestore コマンドで運用環境を復旧させた場合、復旧前の運用環境は破棄されます。環境バックアップファイルは、自動バックアップ時と復旧直前とで内容が異なる場合があります。
2. 移行前とは異なる、HCSC サーバを構築したマシンを用意します。
3. 取得済みの運用環境バックアップファイルを、移行後のマシンが認識できる場所に格納します。
4. cscrepls コマンドを実行して、運用環境バックアップファイルの復旧する環境を確認します。

```
cscrepls -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -envbackfile <運用環境バックアップファイル名>
```

5. cscenvrestore コマンドを実行して、運用環境バックアップファイルを使用し、環境を復旧します。

```
cscenvrestore -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -restorefile <運用環境のバックアップファイル名>
```

! 注意事項

cscenvbackup コマンドまたは cscrepctl コマンド (-import オプション) を実行して取得した環境バックアップには、HCSC-Manager 定義ファイル (cscmng.properties) が格納されています。しかし、cscenvrestore コマンドで運用環境を復旧したときには、復旧先の HCSC-Manager 定義ファイルを有効とし、環境バックアップに含まれる HCSC-Manager 定義ファイルは、別名 (cscmng_backup.properties) で復旧します。cscmng_backup.properties は、参考資料として活用してください。また、不要であれば、削除しても問題ありません。

(c) 復旧時の自動バックアップ

cscenvrestore コマンドを使用して、運用環境バックアップファイルから復旧する場合、復旧前の環境を自動でバックアップします。誤った運用環境バックアップファイルから環境を復旧してしまった場合に、この復旧時の自動バックアップファイルを使用することで、復旧前の環境に戻すことができます。

復旧時のバックアップファイルは、cscenvrestore_1.zip のファイル名で次のディレクトリに出力されます。

```
<Cosminexusインストールディレクトリ>%csc%¥spool¥manager
```

なお、バックアップファイルの出力先ディレクトリは、HCSC-Manager 定義ファイルの cscmng.envbackup.dir パラメタ、または cscmng.envbackup.dir.envrestore パラメタで変更できます。出力先ディレクトリに古いバックアップファイルが存在している場合は、復旧が成功したあとに、古いバックアップファイルが削除されます。

また、復旧時に自動バックアップをするかどうかは、HCSC-Manager 定義ファイルの cscmng.envbackup.autoget パラメタ、または cscmng.envbackup.autoget.off パラメタで設定できます。

HCSC-Manager 定義ファイルの詳細については、「9. 定義ファイル」の「HCSC-Manager 定義ファイル」を参照してください。

7.9.4 デッドロックが発生した場合の回復方法

HCSC サーバ上のプロセスでデッドロックが発生した場合、次の方法で HCSC サーバを回復します。

(1) HCSC サーバへのサービス部品呼び出し要求が応答しなくなった場合

HCSC サーバへのサービス部品呼び出し要求が応答しなくなった場合の調査手順を次に示します。

1. cjlistthread コマンドを使用してスレッド情報を確認します。

7. 障害対策

2. `cjstopthread` コマンドを使用して、不正なスレッドを削除します。
3. スレッドを削除できない場合は `cscsvstop` コマンドの `-force` オプションを指定して HCSC サーバを強制停止してください。
CSC-Manager の運用環境画面からは操作できないため、注意してください。
4. HCSC サーバの強制停止を行い停止が完了したら、`cscsvstart` コマンドを使用して HCSC サーバを再起動します。

`cjstopthread` コマンドおよび `cjlistthread` コマンドの使い方の詳細については、マニュアル「Cosminexus リファレンス コマンド編」を参照してください。スレッドの状態など、実行状態の確認方法については、マニュアル「Cosminexus システム運用ガイド」を参照してください。`cscsvstop` コマンドおよび `cscsvstart` コマンドの使い方の詳細については、「10. コマンド」の「`cscsvstop` (HCSC サーバの停止)」および「`cscsvstart` (HCSC サーバの起動)」を参照してください。

(2) HCSC コンポーネントや標準受付を停止できなくなった場合

HCSC コンポーネントや標準受付を停止できなくなった場合の調査手順を次に示します。

1. スレッドを削除できない場合は、`cscsvstop` コマンドの `-force` オプションを指定して HCSC サーバを強制停止します。
CSC-Manager の運用環境画面からは操作できないため注意してください。
2. HCSC サーバを強制停止して停止が完了したら、`cscsvstart` コマンドを使用して HCSC サーバを再起動します。
3. `csmlslocation` コマンドや `cscstatus` コマンドを使用して、HCSC コンポーネントや標準受付の状態を確認します。
停止失敗状態 (`stopfailed`) になっている場合は、HCSC コンポーネントの場合は `esccompostop` コマンドを入力して HCSC コンポーネントの停止を試みてください。
標準受付の場合は、`cscrcptnstop` コマンドに `-stopfg force` を指定して強制停止を試みてください。
状態が停止状態 (`inactive`) になれば、それぞれの起動コマンドを入力することで復旧します。

各コマンドの使い方の詳細については、「10. コマンド」の該当するコマンドを参照してください。

8

運用環境で使用する画面

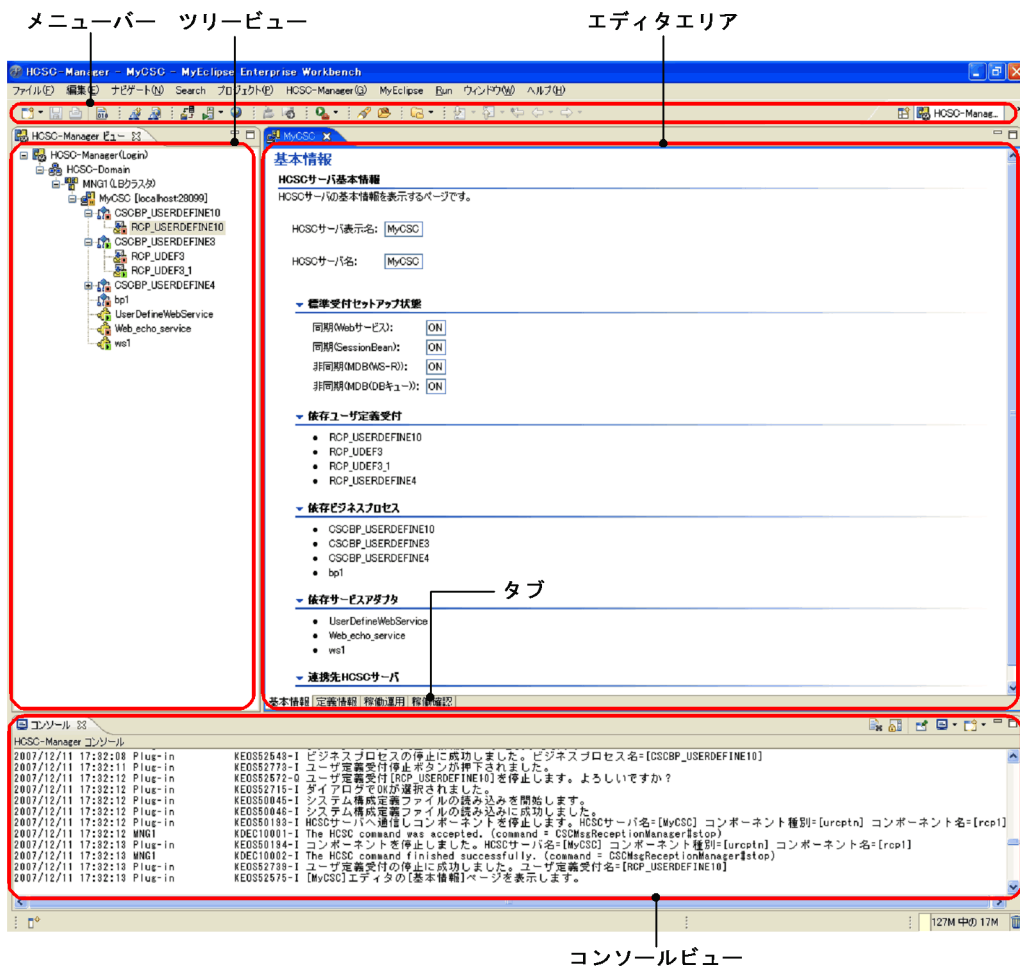
この章では、Cosminexus サービスプラットフォームの運用環境で使用する画面について説明します。

-
- 8.1 画面構成
 - 8.2 基本情報ページ
 - 8.3 定義情報ページ
 - 8.4 稼働運用ページ
 - 8.5 稼働確認ページ
 - 8.6 履歴管理ページ
-

8.1 画面構成

運用環境での画面構成について説明します。

図 8-1 運用環境での画面構成



メニューバー

Eclipse のメニューバーです。運用環境の固有メニューは [HCSC-Manager] です。

ツリービュー

HCSC-Manager が管理しているシステム構成、および管理対象（アダプタやビジネスプロセス）の状態がアイコンで表示されます。ツリービューでは、管理対象を示すアイコンに、その状態を表すアイコンを組み合わせる表示します。ツリービューで表示されるアイコンを次の表に示します。

表 8-1 ツリービューで表示されるアイコン

分類	アイコン / 状態	説明
アイコン		HCSC-Manager を示します。
		HCSC-Domain を示します。
		ロードバランスクラスタまたは HA クラスタを示します。
		HCSC サーバを示します。
		ビジネスプロセスを示します。
		サービスアダプタまたは DB アダプタを示します。
		ユーザ定義受付を示します。
状態		次のどちらかを示します。 <ul style="list-style-type: none"> HCSC サーバの起動状態 サービスアダプタまたは DB アダプタの開始状態
		停止状態を示します。
		閉塞状態を示します。
		配備前状態を示します。
		取得失敗を示します。

ツリービューで管理対象を選択して右クリックすると、コンテキストメニューが表示され、管理対象に対する操作ができるようになります。

エディタエリア

ツリービューに表示される管理対象の情報を表示したり、操作したりするためのエディタです。エディタの種類を次に示します。

表 8-2 エディタの種類

エディタ名	ページ名	機能
HCSC サーバエディタ	基本情報ページ	HCSC サーバの基本情報を表示します。
	定義情報ページ	HCSC サーバの定義情報を表示します。
	稼働運用ページ	HCSC サーバの稼働運用操作を実行します。
	稼働確認ページ	HCSC サーバのリソースの稼働情報を確認します。
ビジネスプロセスエディタ	基本情報ページ	ビジネスプロセスの基本情報を表示します。
	稼働運用ページ	ビジネスプロセスの稼働運用操作を実行します。
	履歴管理ページ	プロセスインスタンスの実行履歴を管理します。

8. 運用環境で使用する画面

エディタ名	ページ名	機能
サービスアダプタエディタ	基本情報ページ	サービスアダプタの基本情報を表示します。
	稼働運用ページ	サービスアダプタの稼働運用を実行します。
ユーザ定義受付エディタ	基本情報ページ	ユーザ定義受付の基本情報を表示します。
	定義情報ページ	ユーザ定義受付の定義情報を表示します。
	稼働運用ページ	ユーザ定義受付の稼働運用操作を実行します。

タブ

エディタごとに、表 8-2 に示すページに切り替わります。

コンソールビュー

ログを出力する領域です。

コンソールビューには、次の形式で出力されます。

yyyy/mm/dd hh:mm:ss アプリケーション名 メッセージ ID メッセージ本文

アプリケーション名には、次のように表示されます。

- 画面操作のログの場合：「Plug-in」
- Cosminexus Manager からのログの場合：セットアップ時に指定した
Cosminexus Manager 名

出力されるメッセージが 64KB を超える場合は、古いメッセージから 4KB ほど行単位で削除されます。

ショートカット

ツリービューやダイアログなどで、[Alt] キーを押したまま「(G)」などのアンダーバー付きの文字と同じキーを押すと、管理対象を選択できます。

8.2 基本情報ページ

基本情報ページには、HCSC-Manager が管理している対象の現在の基本情報が表示されます。これらの情報は、設定内容を確認するために利用できます。

各管理対象の基本情報ページは、ツリービューから管理対象を選択し、エディタエリアで [基本情報] タブを選択すると表示されます。

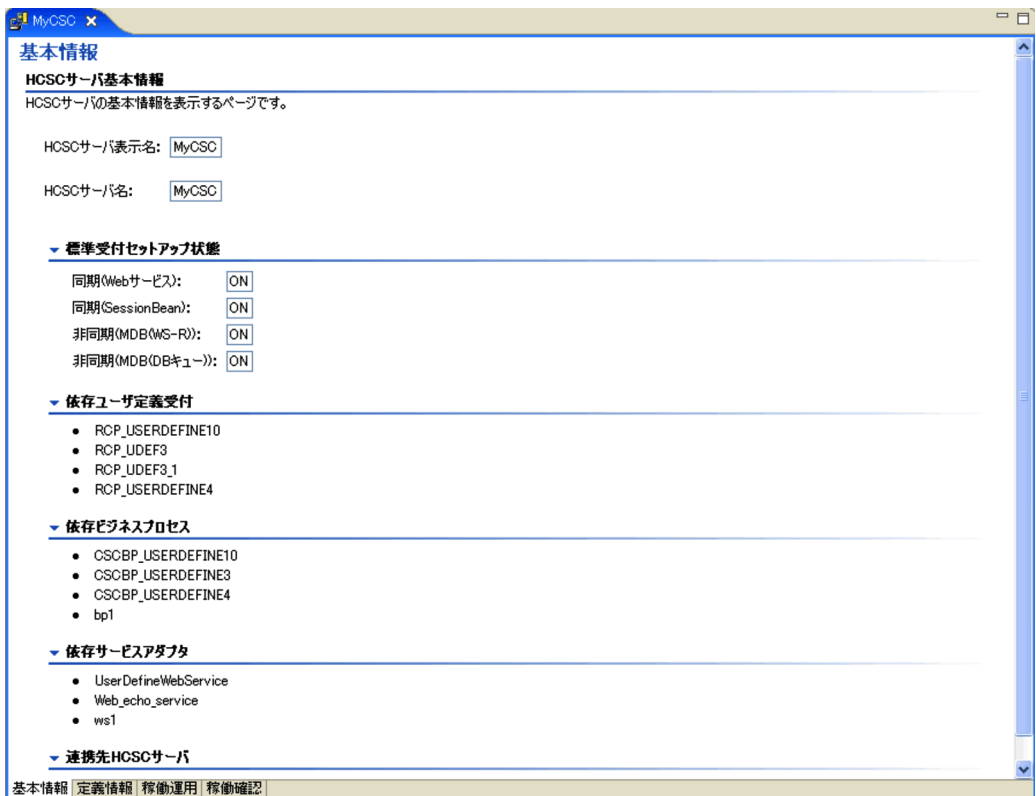
基本情報ページについて、管理対象ごとに説明します。

(1) HCSC サーバ基本情報

HCSC サーバの基本情報ページには、HCSC サーバの構築時の情報が表示されます。また、HCSC サーバ連携の設定をしている場合は、HCSC サーバ連携構築時の基本情報も表示されます。これらの情報で、HCSC サーバ、および HCSC サーバの連携をセットアップしたあとの設定内容を確認できます。

HCSC サーバの基本情報ページの画面および表示される項目を次に示します。

図 8-2 HCSC サーバの基本情報ページ



8. 運用環境で使用する画面

HCSC サーバ表示名

HCSC サーバの表示名が表示されます。HCSC サーバの表示名が指定されていない場合は、HCSC サーバの名称が表示されます。

HCSC サーバ名

HCSC サーバの名称が表示されます。

標準受付セットアップ状態

次の項目について、セットアップしているかどうかが表示されます。セットアップしている場合は「ON」、セットアップしていない場合は「OFF」、基本情報の取得に失敗した場合は「取得失敗」が表示されます。

- 同期 (Web サービス)
- 同期 (SessionBean)
- 非同期 (MDB (WS-R))
- 非同期 (MDB (DB キュー))

依存ユーザ定義受付

HCSC サーバに依存しているユーザ定義受付の名称が表示されます。

依存ビジネスプロセス

HCSC サーバに依存しているビジネスプロセスのサービス名が表示されます。

依存サービスアダプタ

HCSC サーバに依存しているサービスアダプタのサービス名が表示されます。

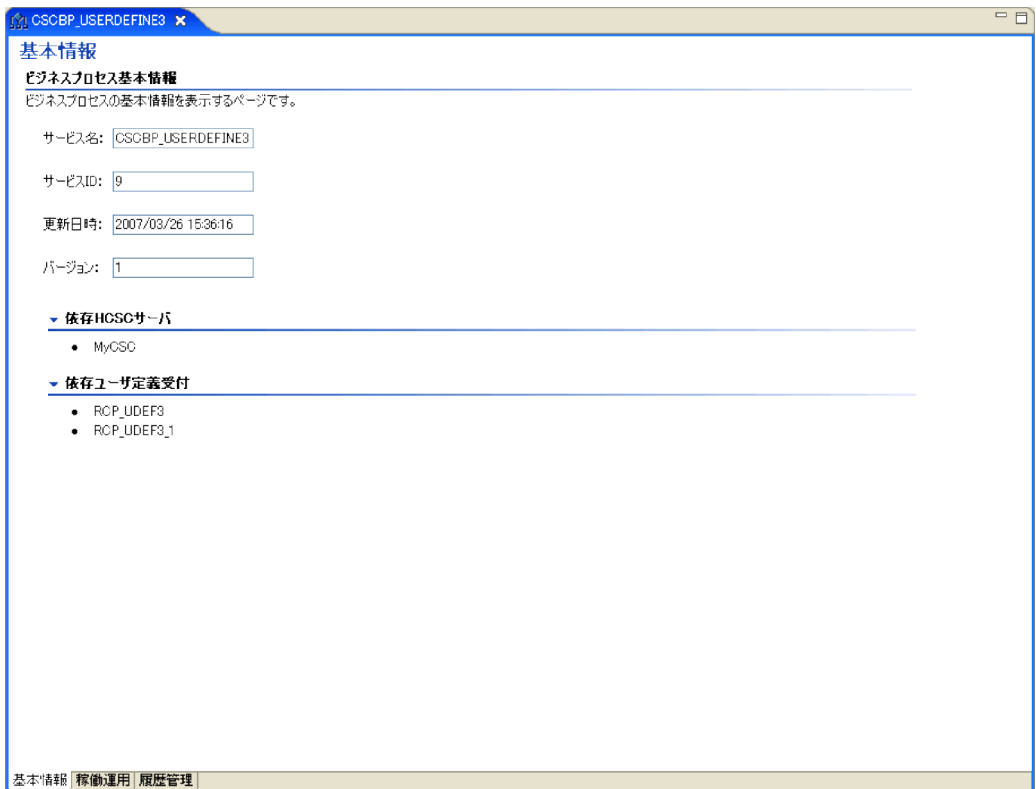
連携先 HCSC サーバ

連携をセットアップした HCSC サーバの名称が表示されます。

(2) ビジネスプロセス基本情報

ビジネスプロセス基本情報ページには、ビジネスプロセスの基本情報が表示され、ビジネスプロセスの設定内容を確認できます。ビジネスプロセスの基本情報ページの画面および表示される項目を次に示します。

図 8-3 ビジネスプロセスの基本情報ページ

**サービス名**

ビジネスプロセス定義名またはサービス名が表示されます。

サービス ID

ビジネスプロセスのサービス ID が表示されます。

更新日時

配備済みビジネスプロセスが更新された日時が表示されます。基本情報の取得に失敗した場合は「取得失敗」、ビジネスプロセスの配備前は「-」が表示されます。

バージョン

ビジネスプロセスのバージョンが表示されます。

依存 HCSC サーバ

依存している HCSC サーバの表示名が表示されます。

依存ユーザ定義受付

依存しているユーザ定義受付の名称が表示されます。

8. 運用環境で使用する画面

(3) サービスアダプタ基本情報

サービスアダプタ基本情報ページには、サービスアダプタの基本情報が表示され、サービスアダプタの設定内容を確認できます。サービスアダプタの基本情報ページの画面および表示される項目を次に示します。

図 8-4 サービスアダプタの基本情報ページ（サービス種別が Web サービスの場合）

The screenshot shows a web browser window titled 'UserDefineWebService'. The page content is as follows:

基本情報
サービスアダプタ基本情報
サービスアダプタの基本情報を表示するページです。

サービス名:

サービスID:

サービス種別:

送信元キュー名:

更新日時:

▼ サービス情報

URL:

接続タイムアウト[秒]:

読み込みタイムアウト[秒]:

書き込みタイムアウト[秒]:

▼ 依存HCSCサーバ

- MyCSC

At the bottom of the browser window, there are tabs for '基本情報' and '稼働運用'.

サービス名

サービスアダプタのサービス名が表示されます。

サービス ID

サービスアダプタのサービス ID が表示されます。

サービス種別

サービスアダプタのサービス種別が表示されます。次の種別のうち、どれかが表示されます。

- Web サービス
- SessionBean
- MDB (WS-R)
- MDB (DB キュー)
- カスタム

送信元キュー名

非同期のアダプタの場合に、サービスアダプタが利用するキュー名が表示されます。サービスアダプタの配備前は「-」が表示されます。

更新日時

配備済みサービスアダプタが更新された日時が表示されます。基本情報の取得に失敗した場合は「取得失敗」、サービスアダプタの配備前は「-」が表示されます。

サービス情報

サービス種別に応じた情報が表示されます。

サービスアダプタをインポートしていない場合（デバック環境でリポジトリを共有している場合）は、何も表示されません。

サービス種別と対応するサービス情報を次の表に示します。

表 8-3 サービス種別に対応するサービス情報の表示項目

サービス種別	サービス情報	
	項目	意味
Web サービス	URL	Web サービスの URL が表示されます。
	接続タイムアウト [秒]	サービス部品呼び出し時のソケットの接続タイムアウト値が表示されます。
	読み込みタイムアウト [秒]	サービス部品呼び出し時のソケットの読み込みタイムアウト値が表示されます。
	書き込みタイムアウト [秒]	サービス部品呼び出し時のソケットの書き込みタイムアウト値が表示されます。
SessionBean	URL	ネーミングサービスの URL が表示されます。
	ルックアップ名	JNDI 名前空間に登録されている、呼び出すサービス部品の名称が表示されます。
	EJB 呼出しタイムアウト	サービス部品呼び出し時のビジネスメソッド呼び出しのタイムアウト値が表示されます。
MDB (WS-R)	送信先キュー名	サービスアダプタがメッセージを送信するキュー名が表示されます。
	呼出し設定	リモートホストのサービス部品に接続するか、ローカルホストのサービス部品に接続するかが表示されます。リモートホストのサービス部品に接続する場合は、「リモート呼出し」が表示されます。ローカルホストのサービス部品に接続する場合は、「ローカル呼出し」が表示されません。
	URL	サービスアダプタが使用する転送キューのメッセージ転送先の URL が表示されます。[呼出し設定] が「ローカル呼出し」の場合は、何も表示されません。

8. 運用環境で使用する画面

サービス種別	サービス情報	
	項目	意味
	最大メッセージ数	サービスアダプタが使用する転送キューが保持できるメッセージの最大数が表示されます。[呼出し設定]が「ローカル呼出し」の場合は、何も表示されません。
	順序保証	サービスアダプタが使用する転送キューがメッセージを正しい順序で転送することを保証するかどうかが表示されます。次のどちらかが表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> • ON 保証します。 • OFF 保証しません。 [呼出し設定]が「ローカル呼出し」の場合は、何も表示されません。
	転送キュー作成先 RD エリア	サービスアダプタが使用する転送キューの作成先の RD エリア名が表示されます。[呼出し設定]が「ローカル呼出し」の場合は、何も表示されません。
MDB (DB キュー)	送信先キュー名	サービス部品に関連づけられるキュー名が表示されます。

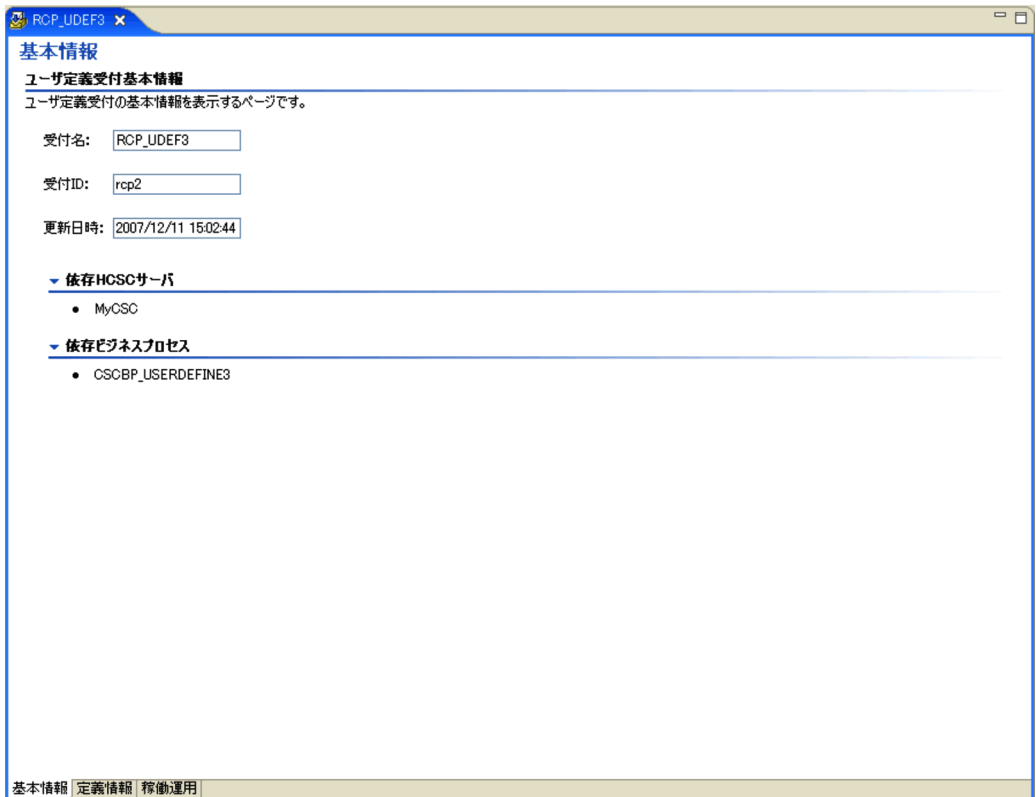
依存 HCSC サーバ

依存している HCSC サーバの表示名が表示されます。

(4) ユーザ定義受付基本情報

ユーザ定義受付基本情報ページには、ユーザ定義受付の基本情報が表示され、ユーザ定義受付の設定内容を確認できます。ユーザ定義受付の基本情報ページの画面および表示される項目を次に示します。

図 8-5 ユーザ定義受付の基本情報ページ

**受付名**

ユーザ定義受付の受付名が表示されます。

受付 ID

ユーザ定義受付の受付 ID が表示されます。

更新日時

ユーザ定義受付が更新された日時が表示されます。基本情報の取得に失敗した場合は「取得失敗」、ユーザ定義受付の配備前は「-」が表示されます。

依存 HCSC サーバ

依存している HCSC サーバの表示名が表示されます。

依存ビジネスプロセス

依存しているビジネスプロセスのサービス名が表示されます。

8.3 定義情報ページ

定義情報ページには、管理対象に設定され、実行環境で反映済みの定義情報が表示されます。これらの情報は、HCSC サーバの構築後も変更できます。

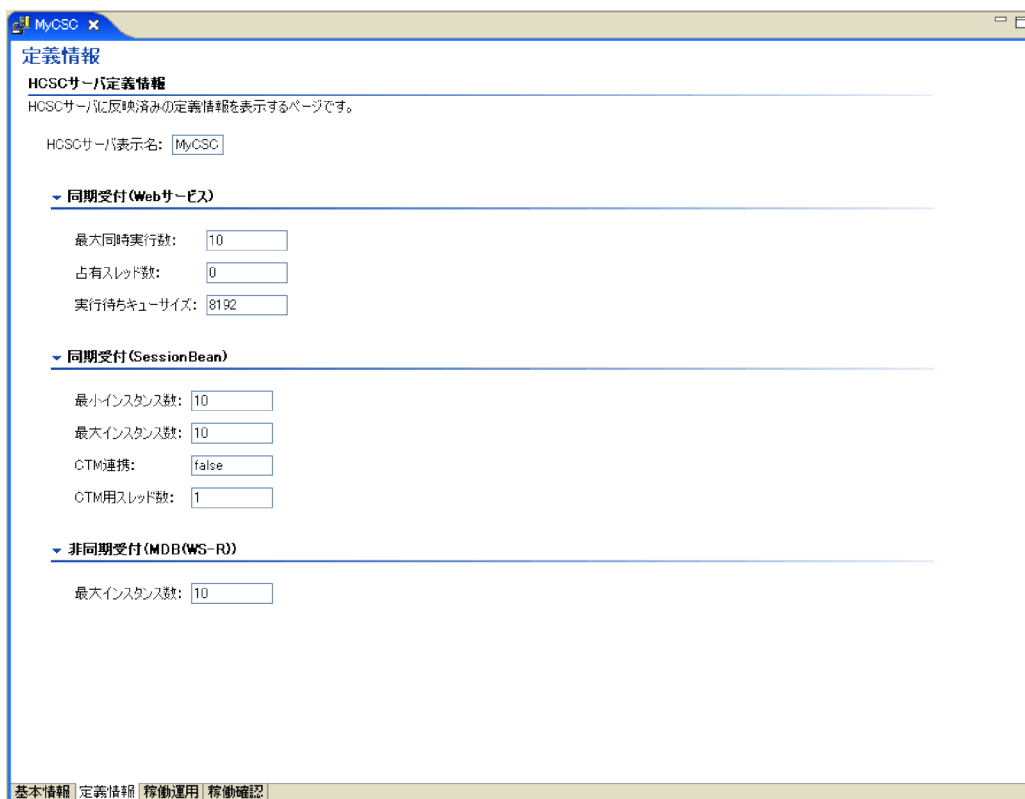
各管理対象の定義情報ページは、ツリービューから管理対象を選択し、エディタエリアで [定義情報] タブを選択すると表示されます。また、変更後の定義情報を画面に表示させるには、ほかのページに切り替えてから再度、定義情報ページを開いてください。

定義情報ページについて、管理対象ごとに説明します。

(1) HCSC サーバ定義情報

HCSC サーバの定義情報ページの画面および表示される項目を次に示します。

図 8-6 HCSC サーバの定義情報ページ



HCSC サーバ表示名

HCSC サーバの表示名が表示されます。

同期受付 (Web サービス)

次の情報が表示されます。定義情報の取得に失敗した場合は「取得失敗」が表示さ

れます。この受付がセットアップされていない場合は「-」が表示されます。

最大同時実行数

同期受付（Web サービス）の最大同時実行数が表示されます。

占有スレッド数

同期受付（Web サービス）の占有スレッド数が表示されます。

実行待ちキューサイズ

同期受付（Web サービス）の実行待ちキューサイズが表示されます。

同期受付（SessionBean）

次の情報が表示されます。定義情報の取得に失敗した場合は「取得失敗」が表示されます。この受付がセットアップされていない場合は「-」が表示されます。

最小インスタンス数

同期受付（SessionBean）の最小インスタンス数が表示されます。

最大インスタンス数

同期受付（SessionBean）の最大インスタンス数が表示されます。

CTM 連携

CTM 連携をしているかどうかが表示されます。

CTM 用スレッド数

CTM がアプリケーションを呼び出すために用意するスレッド数が表示され
ます。

非同期受付（MDB（WS-R））

次の情報が表示されます。定義情報の取得に失敗した場合は「取得失敗」が表示
されます。この受付がセットアップされていない場合は「-」が表示されます。

最大インスタンス数

非同期受付（MDB（WS-R））の最大インスタンス数が表示されます。

（2）ユーザ定義受付定義情報

ユーザ定義受付の定義情報ページの画面および表示される項目を次に示します。

8. 運用環境で使用する画面

図 8-7 ユーザ定義受付の定義情報ページ

定義情報

ユーザ定義受付定義情報

ユーザ定義受付の定義情報を表示するページです。

受付名: RCP_UDEF3

最大同時実行数: 10

占有スレッド数: 0

実行待ちキューサイズ: 8192

基本情報 定義情報 稼働運用

情報の取得に失敗した場合は、[受付名] 以外の各項目に「取得失敗」が表示されます。
ユーザ定義受付の配備前は、[受付名] 以外の各項目に「-」が表示されます。

受付名

ユーザ定義受付の名称が表示されます。

最大同時実行数

ユーザ定義受付に定義されている最大同時実行数が表示されます。

占有スレッド数

ユーザ定義受付に定義されている占有スレッド数が表示されます。

実行待ちキューサイズ

ユーザ定義受付に定義されている実行待ちキューサイズが表示されます。

8.4 稼働運用ページ

稼働運用ページは、ツリービューから管理対象を選択し、エディタエリアで [稼働運用] タブを選択すると表示されます。稼働運用ページでは、HCSC サーバ、標準受付、および連携受付の運用操作を実行します。HCSC サーバ、サービスアダプタ、ビジネスプロセスまたはユーザ定義受付で表示される内容が異なります。

稼働運用ページについて、管理対象ごとに説明します。

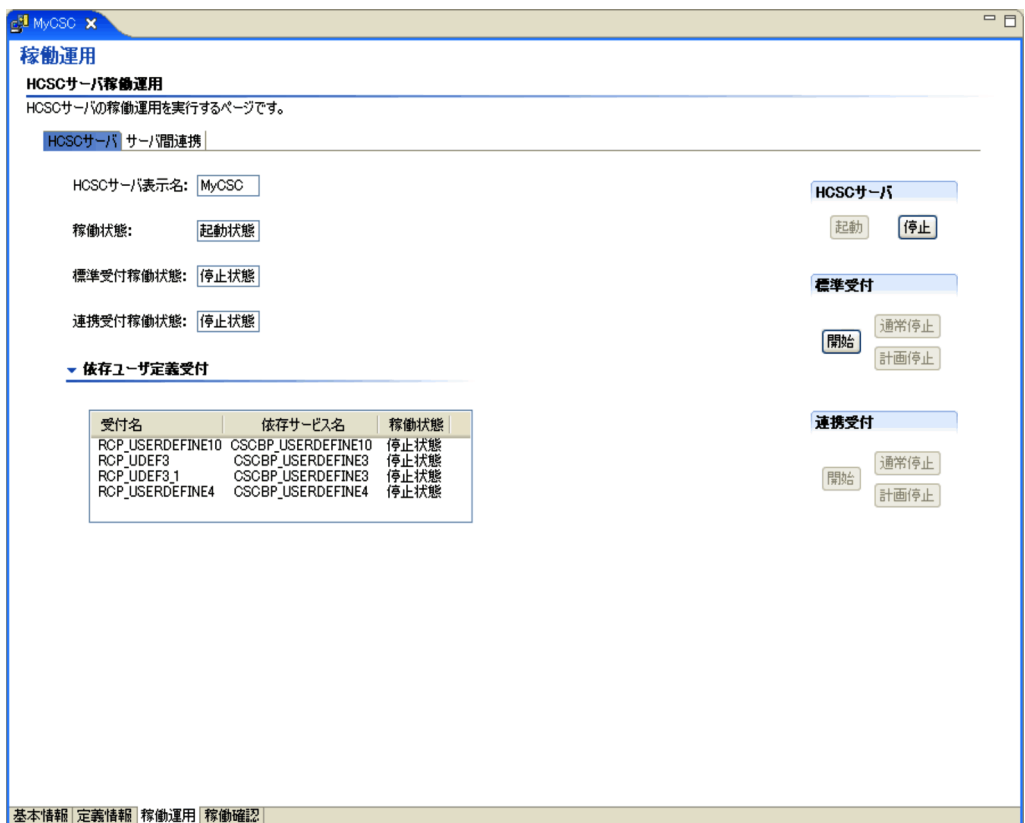
(1) HCSC サーバ稼働運用

HCSC サーバの場合、稼働運用ページは、[HCSC サーバ] タブおよび [サーバ間連携] タブで分けられます。

(a) [HCSC サーバ] タブ

このタブでは、HCSC サーバ、標準受付、および連携受付の運用操作を実行します。[HCSC サーバ] タブを選択した画面および表示される項目を次に示します。

図 8-8 稼働運用ページ ([HCSC サーバ] タブ)



8. 運用環境で使用する画面

HCSC サーバ表示名

この画面で操作する HCSC サーバの表示名が表示されます。

稼働状態

HCSC サーバの稼働状態が表示されます。次のどれかが表示されます。

- 停止状態
- 起動状態
- 停止中
- 起動中
- 取得失敗

HCSC サーバを起動または停止した場合以外でも、実行環境からの通知で状態が変更される場合があります。

標準受付稼働状態

標準受付の稼働状態が表示されます。次のどれかが表示されます。

- 停止状態
- 開始状態
- 停止中
- 開始中
- 停止失敗
- 開始失敗
- 取得失敗

標準受付を開始または停止した場合以外でも、実行環境からの通知で状態が変更される場合があります。

連携受付稼働状態

連携受付の稼働状態が表示されます。次のどれかが表示されます。

- 停止状態
- 開始状態
- 停止中
- 開始中
- 停止失敗
- 開始失敗
- 取得失敗

連携受付を開始または停止した場合以外でも、実行環境からの通知で状態が変更される場合があります。

依存ユーザ定義受付

HCSC サーバに依存しているユーザ定義受付の稼働状態が一覧に表示されます。

受付名

依存しているユーザ定義受付の名称が表示されます。

依存サービス名

ユーザ定義受付が依存しているサービス名が表示されます。

稼働状態

依存しているユーザ定義受付の稼働状態が表示されます。次のどれかが表示されます。

- 停止状態
- 開始状態
- 停止中
- 開始中
- 停止失敗
- 開始失敗
- 取得失敗

HCSC サーバ

[起動] ボタン

HCSC サーバを起動します。

[停止] ボタン

HCSC サーバを停止します。

標準受付

[開始] ボタン

標準受付を開始します。

[通常停止] ボタン

標準受付を停止します。通常の運用で標準受付を停止する場合に利用します。

[計画停止] ボタン

標準受付を停止します。HCSC サーバをアンセットアップする場合に利用します。

連携受付

[開始] ボタン

連携受付を開始します。

[通常停止] ボタン

連携受付を停止します。通常の運用で連携受付を停止する場合に利用します。

[計画停止] ボタン

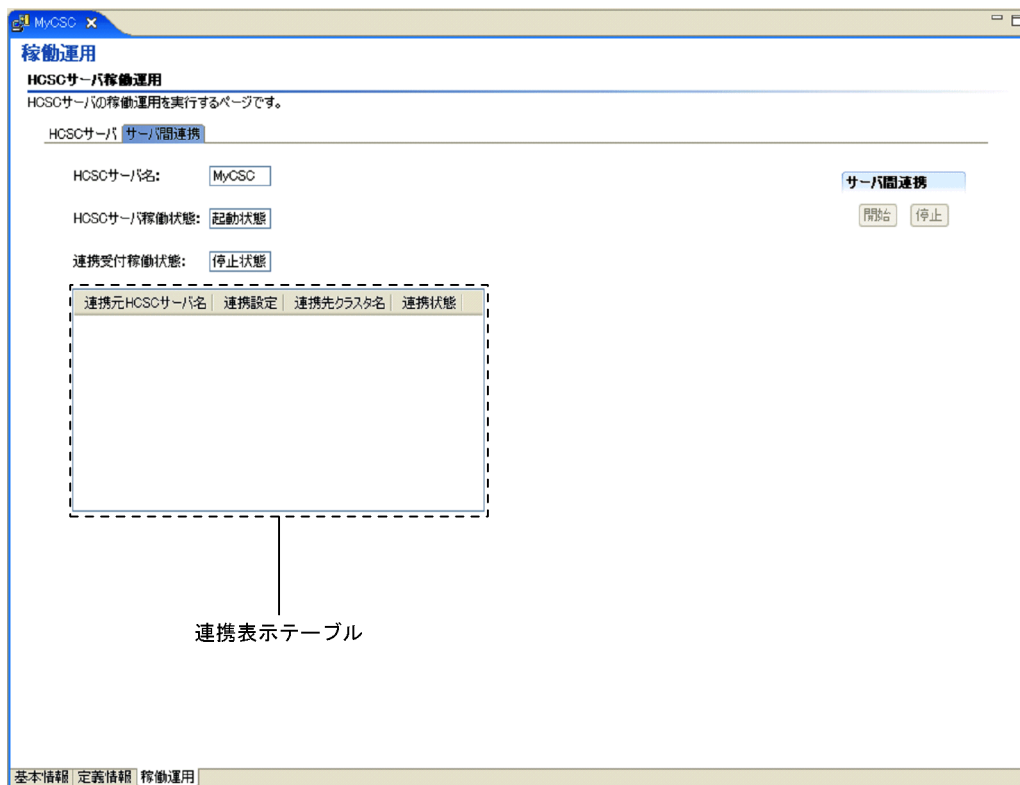
連携受付を停止します。HCSC サーバをアンセットアップする場合に利用します。

(b) [サーバ間連携] タブ

このタブでは、各サーバ間の連携運用操作を実行します。[サーバ間連携] タブを選択した画面および表示される項目を次に示します。

8. 運用環境で使用する画面

図 8-9 稼働運用ページ ([サーバ間連携] タブ)



HCSC サーバ名

この画面で操作する HCSC サーバの名称が表示されます。

HCSC サーバ稼働状態

HCSC サーバの稼働状態が表示されます。次のどれかが表示されます。

- 停止状態
- 起動状態
- 停止中
- 起動中
- 取得失敗

サーバ間連携を開始または停止した場合以外でも、実行環境からの通知で状態が変更される場合があります。

連携受付稼働状態

連携受付の稼働状態が表示されます。次のどれかが表示されます。

- 停止状態
- 開始状態
- 停止中
- 開始中

- 停止失敗
- 開始失敗
- 取得失敗

サーバ間連携を開始または停止した場合以外でも、実行環境からの通知で状態が変更される場合があります。

連携表示テーブル

連携元 HCSC サーバ名

連携元の HCSC サーバの名称が表示されます。

連携設定

連携の設定状態が表示されます。

右方向への矢印が表示されている場合、連携の設定待ちの状態（連携先からの連携がセットアップされていない状態）です。

双方向への矢印が表示されている場合、連携が設定済みの状態（連携先からの連携もセットアップされている状態）です。

連携先クラスタ名

連携先のクラスタの名称が表示されます。

連携状態

連携の状態が表示されます。次のどれかが表示されます。

- 開始状態
- 停止状態
- 連携設定待ち状態

サーバ間連携

[開始] ボタン

連携表示テーブルで選択した HCSC サーバ間の連携を開始します。

[停止] ボタン

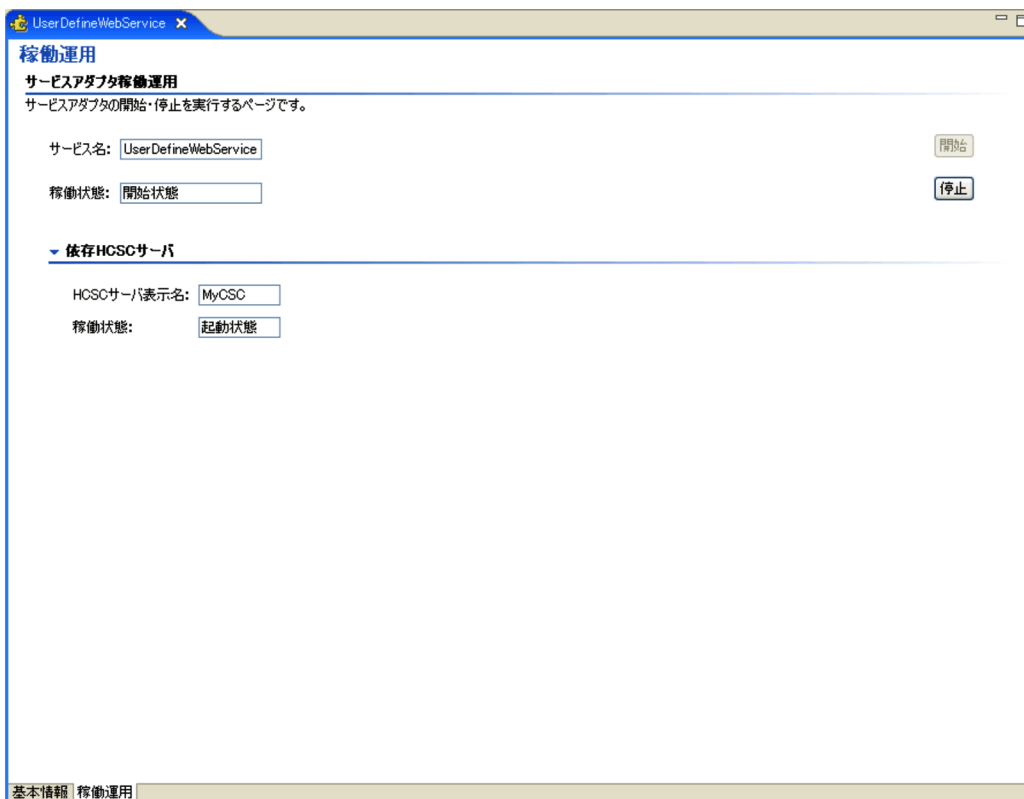
連携表示テーブルで選択した HCSC サーバ間の連携を停止します。

(2) サービスアダプタ稼働運用

サービスアダプタ稼働運用ページの画面および表示される項目を次に示します。

8. 運用環境で使用する画面

図 8-10 サービスアダプタの稼働運用ページ



サービス名

この画面で操作するサービスアダプタのサービス名が表示されます。

稼働状態

サービスアダプタの稼働状態が表示されます。次のどれかが表示されます。

- 停止状態
- 開始状態
- 停止中
- 開始中
- 停止失敗
- 開始失敗
- 取得失敗
- 配備前状態

サービスアダプタを開始または停止した場合以外でも、実行環境からの通知で状態が変更される場合があります。

依存 HCSC サーバ

依存している HCSC サーバの情報が表示されます。

HCSC サーバ表示名

依存している HCSC サーバの表示名が表示されます。

稼働状態

サービスアダプタが配備されている HCSC サーバの稼働状態が表示されます。

次のどれかが表示されます。

- 停止状態
- 起動状態
- 停止中
- 起動中
- 取得失敗

サービスアダプタを開始または停止した場合以外でも、実行環境からの通知で状態が変更される場合があります。

[開始] ボタン

サービスアダプタを開始します。

[停止] ボタン

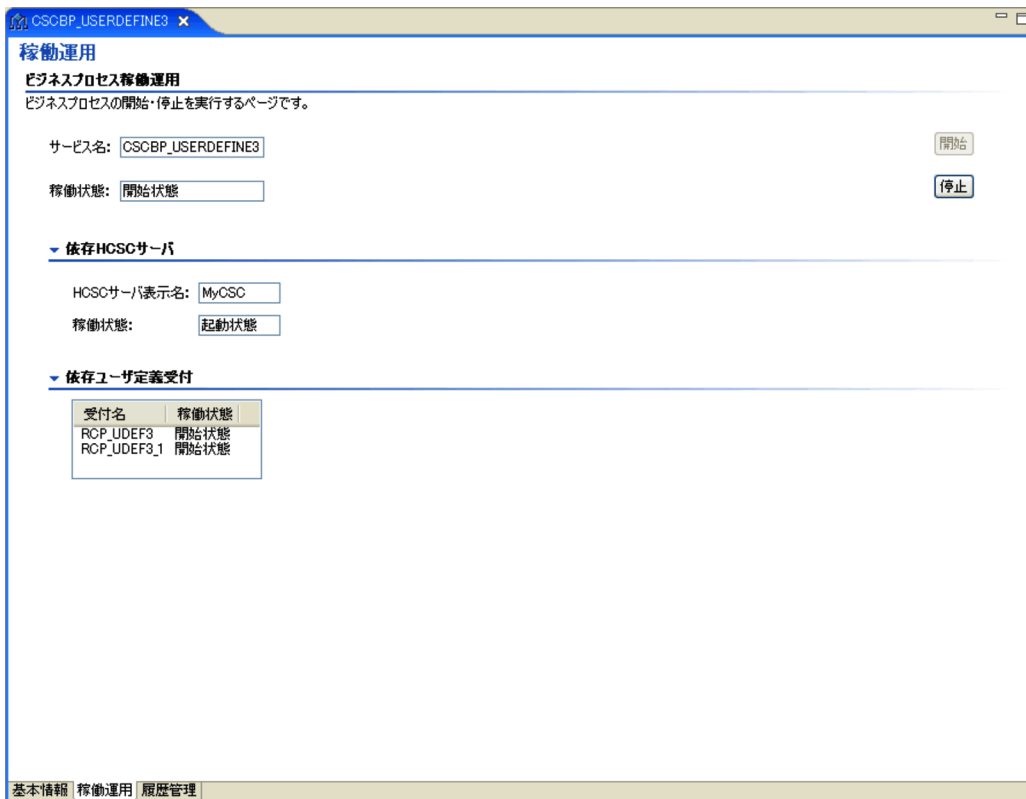
サービスアダプタを停止します。

(3) ビジネスプロセス稼働運用

ビジネスプロセス稼働運用ページの画面および表示される項目を次に示します。

8. 運用環境で使用する画面

図 8-11 ビジネスプロセスの稼働運用ページ



サービス名

この画面で操作するビジネスプロセスのサービス名が表示されます。

稼働状態

ビジネスプロセスの稼働状態が表示されます。次のどれかが表示されます。

- 停止状態
- 開始状態
- 停止中
- 開始中
- 停止失敗
- 開始失敗
- 取得失敗
- 配備前状態

ビジネスプロセスを開始または停止した場合以外でも、実行環境からの通知で状態が変更される場合があります。

依存 HSCC サーバ

依存している HSCC サーバの情報が表示されます。

HCSC サーバ表示名

依存している HCSC サーバの表示名が表示されます。

稼働状態

ビジネスプロセスが配備されている HCSC サーバの稼働状態が表示されます。

次のどれかが表示されます。

- 停止状態
- 起動状態
- 停止中
- 起動中
- 取得失敗

ビジネスプロセスを開始または停止した場合以外でも、実行環境からの通知で状態が変更される場合があります。

依存ユーザ定義受付

依存しているユーザ定義受付の情報が表示されます。

受付名

ユーザ定義受付の受付名が表示されます。定義されているユーザ定義受付の分だけ表示されます。

稼働状態

ユーザ定義受付の稼働状態が表示されます。定義されているユーザ定義受付の分だけ表示されます。次のどれかが表示されます。

- 停止状態
- 開始状態
- 停止中
- 開始中
- 取得失敗
- 配備前状態

ビジネスプロセスを開始または停止した場合以外でも、実行環境からの通知で状態が変更される場合があります。

[開始] ボタン

ビジネスプロセスを開始します。

[停止] ボタン

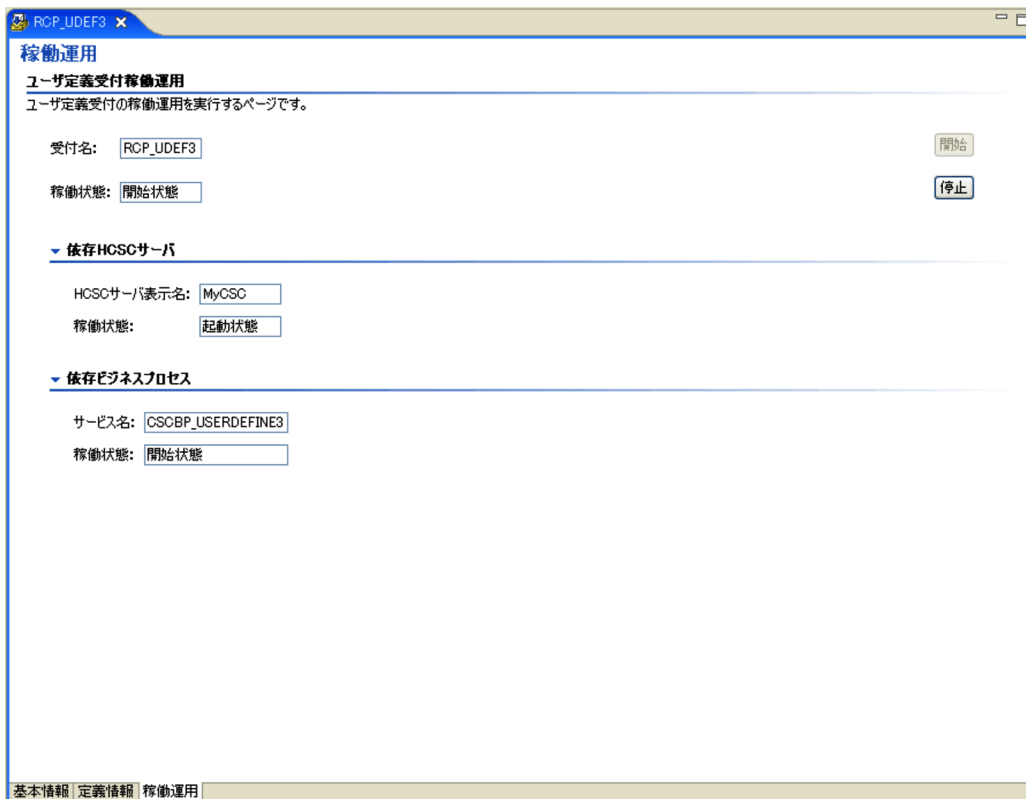
ビジネスプロセスを停止します。

(4) ユーザ定義受付稼働運用

ユーザ定義受付稼働運用ページの画面および表示される項目を次に示します。

8. 運用環境で使用する画面

図 8-12 ユーザ定義受付の稼働運用ページ



受付名

この画面で操作するユーザ定義受付の受付名が表示されます。

稼働状態

ユーザ定義受付の稼働状態が表示されます。次のどれかが表示されます。

- 停止状態
- 開始状態
- 停止中
- 開始中
- 停止失敗
- 開始失敗
- 取得失敗
- 配備前状態

ユーザ定義受付を開始または停止した場合以外でも、実行環境からの通知で状態が変更される場合があります。

依存 HCSC サーバ

依存している HCSC サーバの情報が表示されます。

HCSC サーバ表示名

依存している HCSC サーバの表示名が表示されます。

稼働状態

ユーザ定義受付が配備されている HCSC サーバの稼働状態が表示されます。次のどれかが表示されます。

- 停止状態
- 起動状態
- 停止中
- 起動中
- 取得失敗

ユーザ定義受付を開始または停止した場合以外でも、実行環境からの通知で状態が変更される場合があります。

依存ビジネスプロセス

依存しているビジネスプロセスの情報が表示されます。

サービス名

依存するビジネスプロセスのサービス名が表示されます。

稼働状態

ビジネスプロセスの稼働状態が表示されます。次のどれかが表示されます。

- 停止状態
- 開始状態
- 停止中
- 開始中
- 停止失敗
- 開始失敗
- 取得失敗
- 配備前状態

ユーザ定義受付を開始または停止した場合以外でも、実行環境からの通知で状態が変更される場合があります。

[開始] ボタン

ユーザ定義受付を開始します。

[停止] ボタン

ユーザ定義受付を停止します。

8.5 稼働確認ページ

稼働確認ページには、HCSC サーバのリソースの稼働情報が表示されます。稼働確認ページは、エディタエリアで [稼働確認] タブを選択すると表示されます。

稼働確認ページの画面および表示される項目を次に示します。

図 8-13 稼働確認ページ

稼働確認

HCSCサーバ稼働確認

HCSCサーバのリソース稼働情報を確認するページです。

HCSCサーバ表示名: MyCSC

HCSCサーバ稼働状態: 起動状態

稼働情報通知: ON

稼働情報収集時刻: 2007/12/11 15:16:59

JavaVMヒープサイズ[MB]: 94 / 1014

稼働情報通知: ON OFF

▼ DBコネクション数

リソースアダプタ名	コネクション数
Cosminexus_Reliable_Messaging	0 / 10
DB_Connector_for_HiRDB_Type4	0 / 10
DB_Connector_for_HiRDB_Type4_Cosminexus_RM	NA / NA

▼ 受付

受付名	稼働状態	サービス名	キュー滞留数	実行数
標準受付(Webサービス)	開始状態	-	0 / 8192	0 / 10
RCP_USERDEFINE10	開始状態	CSCBP_USERDEFINE10	0 / 8192	0 / 10
RCP_UDEF3	開始状態	CSCBP_USERDEFINE3	0 / 8192	0 / 10
RCP_UDEF3_1	開始状態	CSCBP_USERDEFINE3	0 / 8192	0 / 10
RCP_USERDEFINE4	開始状態	CSCBP_USERDEFINE4	0 / 8192	0 / 10

▼ 依存ビジネスプロセス

サービス名	稼働状態	実行数
CSCBP_USERDEFINE10	開始状態	0 / NA
CSCBP_USERDEFINE3	開始状態	0 / NA
CSCBP_USERDEFINE4	開始状態	0 / NA
bp1	開始状態	0 / NA

▼ 依存サービスアダプタ

サービス名	稼働状態	実行数
[UserDefineWebService	開始状態	0 / NA
Web_echo_service	開始状態	0 / NA
ws1	開始状態	0 / NA

基本情報 定義情報 稼働運用 稼働確認

HCSC サーバ表示名

HCSC サーバの表示名が表示されます。

HCSC サーバ稼働状態

HCSC サーバの稼働状態が表示されます。次のどれかが表示されます。

- 停止状態
- 起動状態
- 停止中
- 起動中
- 取得失敗

稼働情報通知

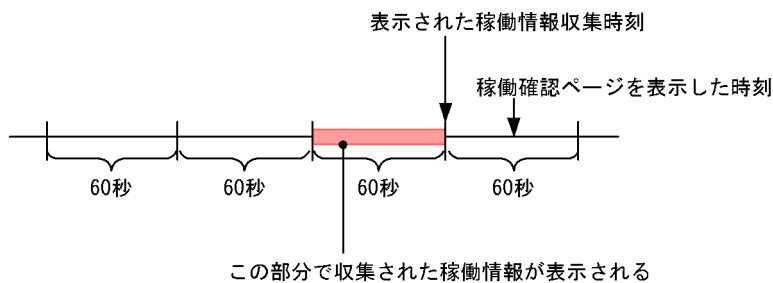
実行環境から HCSC サーバに稼働情報を通知するかどうかが表示されます。稼働情報を通知する場合は「ON」が、稼働情報を通知しない場合は「OFF」が表示されます。

稼働情報収集時刻

稼働情報が収集された時刻が表示されます。HCSC サーバが起動状態以外の場合は「-」が表示されます。稼働情報の取得に失敗した場合は「取得失敗」が表示されます。

稼働情報は次の図に示すように、表示された稼働情報収集時刻の直前の 60 秒間（デフォルト）に収集された情報になります。

図 8-14 稼働情報収集時刻と収集された稼働情報の関係



Java VM ヒープサイズ [MB]

HCSC サーバの Java VM ヒープサイズが表示されます。「収集した Java VM ヒープサイズの最大値 / Java VM ヒープサイズの上限值」の形式で表示されます。

小数点以下は切り捨てられ、整数で表示されます。HCSC サーバが起動状態以外の場合は「-」が表示されます。稼働情報の取得に失敗した場合は「取得失敗」が表示されます。

なお、Java VM の `-Xmx` オプションで指定した値から Survivor 領域の一つ分のサイズを除いた値が表示されます。

DB コネクション数

J2EE サーバ上で稼働しているすべてのリソースアダプタの情報が表示されます。

HCSC サーバが起動状態以外の場合、情報が表示されません。稼働情報の取得に失敗した場合は「取得失敗」が表示されます。

8. 運用環境で使用する画面

リソースアダプタ名

リソースアダプタの表示名が表示されます。

コネクション数

HCSC サーバの DB コネクション数が表示されます。「収集した DB コネクション数の最大値 / DB コネクション数の上限値」の形式で表示されます。DB コネクション数の上限値には、1 ~ 2,147,483,647 の範囲で指定した値が表示されます。DB コネクション数の上限値に「-1」(無制限)を指定した場合は、「収集した DB コネクション数の最大値 / NA」の形式で表示されます。「NA」は無制限であることを示します。また、次の場合は、「NA / NA」(無効値)が表示されます。

- DB コネクション数の上限値に「0」を指定した場合
- 該当のリソースアダプタがルートリソースアダプタ、または Cosminexus RM 連携用 DB コネクタの場合

受付

標準受付またはユーザ定義受付の情報が表示されます。標準受付の場合、標準受付がセットアップされていないときは、情報が表示されません。

受付名

標準受付の受付名、またはユーザ定義受付の受付名が表示されます。標準受付の場合は、「標準受付 (Web サービス)」が表示されます。ユーザ定義受付の場合は、ユーザが定義した受付名が表示されます。

稼働状態

標準受付またはユーザ定義受付の稼働状態が表示されます。次のどれかが表示されます。

- 停止状態
- 開始状態
- 停止中
- 開始中
- 停止失敗
- 開始失敗
- 取得失敗

HCSC サーバが起動状態以外の場合は「-」が表示されます。ユーザ定義受付の場合、ユーザ定義受付が配備前状態のときは「配備前状態」が表示されます。

サービス名

依存しているビジネスプロセスやサービスアダプタのサービス名が表示されます。標準受付の場合は、常に「-」が表示されます。

キュー滞留数

標準受付またはユーザ定義受付のキュー滞留数が表示されます。「収集したキュー滞留数の最大値 / キュー滞留数の上限値」の形式で表示されます。標準受付またはユーザ定義受付のキュー滞留数には、0 ~ 2,147,483,647 の範囲で値が

表示されます。HCSC サーバが起動状態以外の場合や、該当する受付が停止状態の場合は「-」が表示されます。ユーザ定義受付の場合、配備前状態のときは「-」が表示されます。稼働情報の取得に失敗した場合は「取得失敗」が表示されます。

実行数

標準受付またはユーザ定義受付の実行数が表示されます。「収集した実行数の最大値 / 実行数の上限値」の形式で表示されます。標準受付またはユーザ定義受付の実行数には、1 ~ 1,024 の範囲で値が表示されます。HCSC サーバが起動状態以外の場合や、該当する受付が停止状態の場合は「-」が表示されます。ユーザ定義受付の場合、配備前状態のときは「-」が表示されます。稼働情報の取得に失敗した場合は「取得失敗」が表示されます。

依存ビジネスプロセス

HCSC サーバに依存しているビジネスプロセスの情報が表示されます。

サービス名

依存するビジネスプロセスのサービス名が表示されます。

稼働状態

ビジネスプロセスの稼働状態が表示されます。次のどれかが表示されます。

- 停止状態
- 開始状態
- 停止中
- 開始中
- 停止失敗
- 開始失敗
- 取得失敗
- 配備前状態

HCSC サーバが起動状態以外の場合は「-」が表示されます。

実行数

ビジネスプロセスの実行数が表示されます。「収集した実行数の最大値 / NA」の形式で表示されます。「NA」は無制限であることを示します。収集した実行数の最大値には、0 ~ 2,147,483,647 の範囲で値が表示されます。HCSC サーバが起動状態以外の場合や、ビジネスプロセスが配備前状態、または停止状態の場合は「-」が表示されます。稼働情報の取得に失敗した場合は「取得失敗」が表示されます。

依存サービスアダプタ

HCSC サーバに依存しているサービスアダプタの情報が表示されます。

サービス名

サービスアダプタのサービス名が表示されます。

稼働状態

サービスアダプタの稼働状態が表示されます。次のどれかが表示されます。

8. 運用環境で使用する画面

- 停止状態
- 開始状態
- 停止中
- 開始中
- 停止失敗
- 開始失敗
- 取得失敗
- 配備前状態

HCSC サーバが起動状態以外の場合は「-」が表示されます。

実行数

サービスアダプタの実行数が表示されます。「収集した実行数の最大値 / 実行数の上限値」の形式で表示されます。「実行数の上限値」には「NA」が表示される場合もあります。「NA」は無制限であることを示します。収集した実行数の最大値には、0 ~ 2,147,483,647 の範囲で値が表示されます。HCSC サーバが起動状態以外の場合や、サービスアダプタが配備前状態、または停止状態の場合は「-」が表示されます。稼働情報の取得に失敗した場合は「取得失敗」が表示されます。

稼働情報通知

[ON] ボタン

実行環境からの稼働情報の通知を開始します。

[OFF] ボタン

実行環境からの稼働情報の通知を停止します。

8.6 履歴管理ページ

履歴管理ページは、ツリービューから管理対象のビジネスプロセスを選択し、[履歴管理]タブを選択すると表示されます。履歴管理ページでは、プロセスインスタンスの実行履歴の検索、削除、再実行、および詳細情報を取得できます。履歴管理ページの構成について説明します。

図 8-15 履歴管理ページの構成

The screenshot shows the '履歴管理' (History Management) page for the process 'GSCBP_USERDEFINES'. The page is structured as follows:

- 検索条件タブ (Search Condition Tab):** Includes '日時・状態検索' (Date/Status Search) and '関連セット検索' (Related Set Search).
- 検索条件フィールド (Search Condition Fields):** Contains date pickers for '指定あり' (Specified) and '指定なし' (Not specified) with time selection. It also has checkboxes for 'プロセスインスタンスの状態' (Process Instance Status) such as '実行中' (In Progress), '完了' (Completed), and 'フェルト終了' (Cancelled).
- 検索結果フィールド (Search Result Fields):** Displays a table with one result:

#	ビジネスプロセス定義名	ビジネスプロセスバージョン	状態	開始日時	終了日時
1	GSCBP_USERDEFINES	1	実行中	2007/04/18 14:18:33	
- 詳細情報フィールド (Detailed Information Fields):** Displays a table with one detailed record:

#	実装定義名	実装型	実装値
1	input1	Message	<echo!_1 xmlns="http://userdefine...

- ・ 検索条件タブ
日時 / 条件検索または関連セット検索を切り替えます。
- ・ 検索条件フィールド
検索条件の選択, 入力, または検索をします。
- ・ 検索結果フィールド
検索結果の表示, 実行履歴の削除, または実行履歴の再実行をします。
- ・ 詳細情報フィールド
検索結果から詳細情報の選択, または表示をします。

8. 運用環境で使用する画面

(1) 検索条件フィールド

(a) 日時 / 条件検索

図 8-16 検索条件フィールド (日時 / 条件検索)

[日時 / 状態] タブ

検索条件として日時や状態からプロセスインスタンスを検索する画面を選択するタブです。

・プロセスインスタンスの開始日時

プロセスインスタンスの開始日時を指定してプロセスインスタンスを検索する場合に使用します。

[指定あり] ラジオボタン

プロセスインスタンスの開始日時を指定してプロセスインスタンスを検索する場合に選択します。

[指定なし] ラジオボタン

プロセスインスタンスの開始日時を指定しないでプロセスインスタンスを検索する場合に選択します。

日時条件開始入力フィールド

検索範囲の開始日時を入力します。指定した日時は、稼働しているマシンのタイムゾーンの日時として扱われます。

年

検索範囲の開始年を西暦で指定します。4けたの整数を半角で入力します。入力できる範囲は1970～9999です。

月

検索範囲の開始月をドロップダウンリストから選択します。選択できる範囲は1～12です。

日

検索範囲の開始日をドロップダウンリストから選択します。選択できる範囲は1～31です。

時

検索範囲の開始時間をドロップダウンリストから選択します。選択できる範囲は0～23です。

分

検索範囲の開始分をドロップダウンリストから選択します。選択できる範囲は0～59です。

秒

検索範囲の開始秒をドロップダウンリストから選択します。選択できる範囲は0～59です。

日時条件終了入力フィールド

検索範囲の終了日時を入力します。

年, 月, 日, 時, 分, および秒については, 日時条件開始入力フィールドと同様です。

・プロセスインスタンスの状態

プロセスインスタンスの状態を指定してプロセスインスタンスを検索する場合にチェックします。複数の状態を選択して, どれかの状態の場合を検索することもできます。

[実行中] チェックボックス

実行中のプロセスインスタンスを検索する場合にチェックします。

[完了] チェックボックス

プロセスのグローバルスコープが完了したプロセスインスタンスを検索する場合にチェックします。

[フォルト終了] チェックボックス

フォルトが発生し, グローバルスコープでもキャッチできないで, フォルト終了したプロセスインスタンスを検索する場合にチェックします。

・ソート条件

検索結果の表示順序を指定します。

[開始日時の昇順] ラジオボタン

検索結果を開始日時の昇順で表示する場合に選択します。

[開始日時の降順] ラジオボタン

検索結果を開始日時の降順で表示する場合に選択します。

[指定なし] ラジオボタン

ソート条件を指定しないで検索結果を表示する場合に選択します。

・[検索] ボタン

指定した条件で検索が実行されます。

・[リセット] ボタン

選択しているタブに入力した検索条件が初期値に戻ります。

8. 運用環境で使用する画面

(b) 相関セット検索

図 8-17 [相関セット] タブ選択時の検索条件フィールド

日時・状態検索	相関セット検索
相関セット定義名:	<input type="text" value="correlationSet"/>
相関セット値:	<input type="text" value="user01"/>

[相関セット] タブ

検索条件として相関セットからプロセスインスタンスを検索する画面を選択するタブです。「相関セット定義名」および「相関セット値」の両方に入力が必要です。

相関セット定義名

検索する相関セット定義名を半角の英数字で入力します。

相関セット値

検索する相関セット値を半角の英数字で入力します。

(2) 検索結果フィールド

検索結果件数

検索結果の総数が表示されます。

表示件数範囲

検索結果一覧に表示している検索結果の範囲について、検索結果の上位から何件目であるかの範囲が表示されます。

[<] ボタン

検索結果の前の最大 20 件が表示されます。

[>] ボタン

検索結果の次の最大 20 件が表示されます。

検索結果一覧

検索条件に該当した検索対象が表示されます。一度に表示できる件数は 20 件までです。

#

検索結果件数に対応した番号が表示されます。

ビジネスプロセス定義名

ビジネスプロセスの定義名が表示されます。

ビジネスプロセスバージョン

ビジネスプロセスのバージョンが表示されます。

状態

プロセスインスタンスの状態が表示されます。

開始日時

プロセスインスタンスの実行を開始した日時が表示されます。検索条件で指定

したときと同様に「yyyy/mm/dd hh:mm:ss」の形式で表示されます。開始していない場合は表示されません。

終了日時

プロセスインスタンスの実行を終了した日時が表示されます。検索条件で指定したときと同様に「yyyy/mm/dd hh:mm:ss」の形式で表示されます。終了していない場合は表示されません。

[履歴削除] ボタン

検索結果から選択した、ある一つのプロセスインスタンスの実行履歴が削除されます。

[再実行] ボタン

検索結果から選択した、ある一つのプロセスインスタンスが再実行されます。

(3) 詳細情報フィールド

(a) 関連セット情報

詳細情報件数

検索結果一覧で選択したプロセスインスタンスの詳細情報の総件数、および詳細情報の種別（関連セット情報、変数情報、またはアクティビティ情報）が表示されます。

表示件数範囲

詳細情報一覧に表示している検索結果の範囲を、検索結果の上位から何件目であるかの範囲が表示されます。

[<] ボタン

検索結果の前の最大 20 件が表示されます。

[>] ボタン

検索結果の次の最大 20 件が表示されます。

詳細情報一覧

詳細情報の種別（関連セット情報、変数情報、またはアクティビティ情報）で選択した項目に対応した詳細情報が表示されます。一度に表示できる件数は 20 件までです。

図 8-18 詳細情報一覧（関連セット情報）

#	関連セット定義名	関連セット値
1	correlationSet	user01

8. 運用環境で使用する画面

図 8-19 詳細情報一覧（変数情報）

#	変数定義名	変数型	変数値
1	input1	Message	<echo1_1 xmlns="http://userdefine...

図 8-20 詳細情報一覧（アクティビティ情報）

#	アクティビティ定義名	アクティビティ種別	状態	開始日時	終了日時
1	@GLOBAL	スコープ	実行中	2007/04/18 14:13:33	
2	並列処理開始1	並列処理	実行中	2007/04/18 14:13:33	
3	サービス呼出1	サービス呼出	実行中	2007/04/18 14:13:34	
4	seq2	順次処理	実行中	2007/04/18 14:13:34	
5	受付1	受付	完了	2007/04/18 14:13:34	2007/04/18 14:13:34
6	応答1	応答	未実行		
7	seq3	順次処理	未実行		

#

詳細情報件数に対応した番号が表示されます。

相関セット定義名

[相関セット情報] ボタンをクリックした場合に相関セット定義名が表示されます。相関セット定義名の昇順で表示されます。

相関セット値

[相関セット情報] ボタンをクリックした場合に相関セット値が表示されます。

変数定義名

[変数情報] ボタンをクリックした場合に変数定義名が表示されます。変数定義名の昇順で表示されます。

変数型

[変数情報] ボタンをクリックした場合に変数のデータ型 (Boolean , Numeric , String , または Message) が表示されます。

変数値

[変数情報] ボタンをクリックした場合に変数値が表示されます。変数型によって次の内容が表示されます。

Boolean : 真偽値として、「1」(真)または「0」(偽)が表示されます。

Numeric : 数値 (64 ビット浮動小数) が表示されます。

String : 文字列が表示されます。

Message : 電文 (XML) が表示されます。

アクティビティ定義名

[アクティビティ情報] ボタンをクリックした場合に、アクティビティ定義名が表示されます。開始日時の昇順で表示されます。また、開始日時が空欄の項目は後ろに配置されます。

アクティビティ種別

[アクティビティ情報] ボタンをクリックした場合に、次に示すアクティビティの種別が表示されます。

表 8-4 アクティビティの種別

名称	説明
受付	サービスリクエストが送信した要求電文を受信します。
応答	同期受信をした際に、プロセスの実行結果をサービスリクエストに応答します。
サービス部品呼出	要求電文をサービス部品に送信します。
代入	変数へ代入します。
スコープ	アクティビティの有効範囲を定めます。 グローバルスコープ名は、「@GLOBAL」となります。
順次処理	アクティビティを定義した順番に実行します。 順次処理アクティビティは、保持しているアクティビティの最後のアクティビティが完了したときに、完了となります。
並列処理	定義したアクティビティを同時に実行します。 ビジネスプロセス開発時の並列処理開始アクティビティと並列処理終了アクティビティは、並列処理アクティビティとして表示されます。並列処理アクティビティは、保持するすべてのアクティビティが完了したときに、完了となります。
分岐	定義した選択条件によって実行するアクティビティを選択します。 ビジネスプロセス開発時の分岐開始アクティビティと分岐終了アクティビティは、分岐アクティビティとして表示されます。分岐アクティビティは、分岐条件によって選択されたアクティビティが完了したときに、完了となります。
繰り返し	定義した繰り返し条件が真である場合、アクティビティの実行を繰り返します。
java 呼出	決められたインターフェースに従って java プログラムを呼び出します。
無操作	何もしない動作を表します。
フォルト送出	上位のスコープアクティビティに、ユーザ定義のフォルトを通知します。

状態

[アクティビティ情報] ボタンをクリックした場合に、次に示すアクティビティの状態が表示されます。

表 8-5 アクティビティの状態

名称	説明
未実行	アクティビティインスタンスが未実行で、今後実行される可能性のある状態を示します。
未省略	アクティビティインスタンスが未実行で、今後実行が省略される状態を示します。
実行中	アクティビティインスタンスが、実行中の状態を示します。

8. 運用環境で使用する画面

名称	説明
待ち受け	受付アクティビティインスタンスが、受け付けのできる状態を示します。
フォルト中	スコープアクティビティインスタンスにフォルトが発生しキャッチしたアクティビティを実行している状態を示します。
完了	アクティビティインスタンスが正常に実行され終了した状態を示します。
キャンセル	フォルトが発生しアクティビティインスタンスの実行がキャンセルされた状態を示します。
フォルト終了	アクティビティインスタンスの実行中にフォルトが発生して終了した状態を示します。
実行省略	アクティビティインスタンスの実行が省略され終了した状態を示します。

開始日時

[アクティビティ情報] ボタンをクリックした場合に、アクティビティの開始日時が検索条件フィールドの形式と同様に表示されます。

終了日時

[アクティビティ情報] ボタンをクリックした場合に、アクティビティの終了日時が検索条件フィールドの形式と同様に表示されます。

[関連セット情報] ボタン

検索結果一覧で選択したプロセスインスタンスについて、関連セットの詳細情報が表示されます。関連セット情報は、関連セット定義名で昇順にソートされます。

[変数情報] ボタン

検索結果一覧で選択したプロセスインスタンスについて、変数の詳細情報が表示されます。変数情報は、変数定義名で昇順にソートされます。

[アクティビティ情報] ボタン

検索結果一覧で選択したプロセスインスタンスについて、アクティビティの詳細情報が表示されます。アクティビティ情報は、開始日時で昇順にソートされます。なお、開始日時が空欄（未実行）の項目は後ろに並びます。

[変数値] ボタン

詳細情報一覧に表示された変数情報のデータ型が String、または Message 型の場合に、変数値の内容を別ウィンドウに表示できます。

9

定義ファイル

この章では、Cosminexus サービスプラットフォームの運用環境および実行環境で使用する定義ファイルの文法について説明します。

定義ファイルの種類

定義ファイルの入力形式

定義ファイルの文法の記述形式

定義ファイルの種類

定義ファイルの種類を次に示します。

表 9-1 定義ファイル一覧

ファイル名	概要
HCSC-Manager コマンド共通定義ファイル	各コマンドのオプションのデフォルト値を定義できません。
HCSC-Messaging コマンド共通定義ファイル	HCSC-Messaging コマンドの動作に必要な情報を設定します。
HCSC サーバ構成定義ファイル	HCSC サーバの構成定義情報を設定します。
HCSC サーバセットアップ定義ファイル	HCSC サーバのセットアップ時に設定できる内容を設定します。
連携セットアップ定義ファイル	セットアップ後の HCSC サーバの連携セットアップ情報を定義できます。
HCSC サーバランタイム定義ファイル	セットアップ後の HCSC サーバの定義情報を HCSC-Manager から設定します。
HCSC-Manager 定義ファイル	HCSC-Manager の動作に必要な情報を設定します。
サービス情報変更定義ファイル	サービスアダプタのサービス情報の変更を設定します。
ユーザ定義受付ランタイム定義ファイル	ユーザ定義受付 (Web サービス) の情報を設定します。
SOAP Fault 動作定義ファイル	targetNamespace の URI を設定します。

定義ファイルの入力形式

表 9-1 に示す定義ファイルは、次の入力形式で作成または編集します。

HCSC サーバ構成定義ファイルの入力形式

HCSC サーバ構成定義ファイルは、XML 形式のファイルです。XML の仕様に従って作成または編集します。

その他の定義ファイルの入力形式

HCSC サーバ構成定義ファイル以外の定義ファイルは、次に示す Java のプロパティファイル形式で作成または編集します。

形式

定義ファイルの入力形式を次に示します。

```
<キー名称> = <値>  
#<コメント>
```

各項目について説明します。なお、各項目は、ISO-8859-1 文字エンコーディングを使用してください。

キー名称

定義するキー名称を指定します。

値

定義する値がある場合に指定します。改行までを値とするため、値の後ろには、空白やコメントなどの文字列は指定できません。

コメント

行頭に「#」を記述した場合、その行はコメントとして扱われます。

定義ファイルの文法の記述形式

このマニュアルでは、定義ファイル 0 の文法の記述形式について、次の形式で説明します。なお、すべてのファイルを次の形式で説明しているわけではありません。また、各ファイルの固有情報を記載している場合があります。

形式

ファイルの記述形式を示します。

機能

ファイルの機能について説明します。

DTD

ファイルの DTD について説明します。

ファイルの格納先

ファイルの格納先を示します。

設定できる要素

ファイルの中で指定できる XML の要素について説明します。

設定できるパラメタ

ファイルの中で指定できるパラメタについて説明します。

設定できるプロパティ

ファイルの中で指定できるプロパティについて説明します。

記述例

ファイルの内容の記述例を示します。

使用方法

ファイルの使用方法について説明します。

注意事項

ファイルを設定または使用する際の注意事項を説明します。

HCSC-Manager コマンド共通定義ファイル

形式

J2SE のプロパティファイル形式です。

```
csc.all.<コマンド引数名>=値  
csc.<コマンド識別子>.<コマンド引数名>=値
```

機能

各コマンドのオプションのデフォルト値を設定します。設定ファイルの変更後、次回コマンドの発行時に更新情報が反映されます。この定義ファイルおよびコマンドの両方でオプションの値を指定した場合、コマンドの指定が有効になります。

この定義ファイルには、ユーザ ID やパスワードなどの情報が含まれるため、適切にファイルパーミッションを設定してください。

ファイルの格納先

```
<Cosminexus>のインストールディレクトリ  
>%CSC%config¥manager¥csccmd.properties
```

設定できるパラメタ

```
csc.all.< コマンド引数名 >= 値
```

すべてのコマンドに共通する引数のデフォルト値を指定します。コマンド引数名はハイフン (-) を除いた値を指定してください。値がない場合は値の指定は不要です。

(指定例 1)

すべてのコマンドの -user オプションに、指定値「admin」を仮定する場合
csc.all.user=admin

(指定例 2)

すべてのコマンドに、-all オプションが指定されていると仮定する場合
csc.all.all=

```
csc.< コマンド識別子 >.< コマンド引数名 >= 値
```

コマンド識別子に対応したコマンドのデフォルト引数を定義します。コマンド識別子はコマンド名から "csc" を除いた値を指定してください。コマンド引数名はハイフン (-) を除いた値を指定してください。値がない場合は値の指定は不要です。

9. 定義ファイル

HCSC-Manager コマンド共通定義ファイル

(指定例 1)

cscpiselect コマンドの `-csc` オプションに、指定値「MyCSC」を仮定する場合
`csc.piselect.csc=MyCSC`

(指定例 2)

cscsvstart コマンドに、`-system` オプションが指定されていると仮定する場合
`csc.svstart.system=`

注意事項

次の例に示すように、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルの指定内容と、コマンド引数の指定に矛盾がある場合、コマンド引数が不正になります。

HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルの内容

```
csc.all.user=AAA  
csc.all.pass=BBB  
csc.repctl.autoexport=
```

コマンド入力例

```
> cscrepctl -import repository.zip
```

この例では、`cscrepctl` コマンドで、`-import` オプションと `-autoexport` オプションの両方が指定されています。そのため、コマンド引数の不正でエラーとなります。

HCSC-Messaging コマンド共通定義ファイル

形式

Windows の場合

```
@echo off
set HCSC_ADDCLASSPATH=<HiRDB Type4 JDBC Driver または Oracle JDBC Thin
Driverのパス>
```

UNIX の場合

```
#!/bin/sh
HCSC_ADDCLASSPATH=<HiRDB Type4 JDBC Driver または Oracle JDBC Thin Driver
のパス>
```

機能

HCSC-Messaging コマンド (csm で始まるコマンド) の動作に必要な情報を設定します。

ファイルの格納先

Windows の場合

<Cosminexusのインストールディレクトリ>%CSC%config%msg%cmdconf.bat

UNIX の場合

/opt/Cosminexus/CSC/config/msg/cmdconf

設定できるパラメタ

HCSC_ADDCLASSPATH

各データベースのドライバのファイル名を絶対パスで指定します。

- HiRDB の場合
HiRDB Type4 JDBC Driver を使用するとき , HiRDB Type4 JDBC Driver (pjjdbc2.jar) のファイル名を絶対パスで指定します。
- Oracle の場合
Oracle JDBC Thin Driver (ojdbc14.jar) のファイル名を絶対パスで指定します。

上記以外の場合は環境変数の定義だけを指定して , 値は指定しないでください。

9. 定義ファイル

HCSC-Messaging コマンド共通定義ファイル

! 注意事項

環境変数として、HCSC_ADDCLASSPATH 以外を設定しないでください。

記述例

HCSC-Messaging コマンド共通定義ファイルの記述例を次に示します。

Windows の場合

```
@echo off
set HCSC_ADDCLASSPATH=C:\win32app\hitachi\hirdb_s\CLIENT\UTL\pdjdbc2.jar
```

UNIX の場合

```
#!/bin/sh
HCSC_ADDCLASSPATH=/opt/HirDB_S/client/lib/pdjdbc2.jar
```

HCSC サーバ構成定義ファイル

形式

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
<!DOCTYPE csc-setup-definition SYSTEM "cscsvsetup_1_3.dtd">
<!-- All Rights Reserved. Copyright (C) 2006, 2008, Hitachi, Ltd. -->
<csc-setup-definition>
  <cluster>
    <name>クラスタ名</name>
    <type>クラスタ種別</type>
  </cluster>
  <cosminexus-manager>
    <!-- Cosminexus Manager Definition -->
    <name>Cosminexus manager名</name>
    <ip-address>Cosminexus managerのIPアドレス</ip-address>
    <port>Cosminexus managerのポート番号</port>
    <id>Management Serverの管理ユーザID</id>
    <password>Management Serverの管理ユーザパスワード</password>
  </cosminexus-manager>
  <csc-server>
    <!-- HCSC-Server Definition -->
    <name>HCSCサーバ名</name>
    <id>HCSCサーバが使用するデータベースのユーザID</id>
    <password>HCSCサーバが使用するデータベースのパスワード</password>
    <j2ee-server-name>HCSCサーバが使用するJ2EEサーバ名</j2ee-server-name>
    <setup-properties>HCSCサーバセットアップ定義ファイル名</setup-properties>
  </csc-server>
  </cosminexus-manager>
  <reception>
    <soap-reception>
      <!-- WebServer Definition -->
      <ip-address>WebサーバのIPアドレス</ip-address>
      <port>Webサーバのポート番号</port>
      <protocol>プロトコル種別</protocol>
    </soap-reception>
    <jms-reception>
      <!-- WebServer Definition-->
      <ip-address>WebサーバのIPアドレス</ip-address>
      <port>Webサーバのポート番号</port>
      <protocol>プロトコル種別 (http or https)</protocol>
      <rm-service-context-root>RMのサービスコンテキストルート</
rm-service-context-root>
      <rm-service-name>RMのサービス名</rm-service-name>
    </jms-reception>
    <jms-physical-reception>
      <!-- WebServer Definition-->
      <ip-address>WebサーバのIPアドレス</ip-address>
      <port>Webサーバのポート番号</port>
      <protocol>プロトコル種別</protocol>
      <rm-service-context-root>RMのサービスコンテキストルート</
rm-service-context-root>
      <rm-service-name>RMのサービス名</rm-service-name>
    </jms-physical-reception>
    <ejb-reception>
      <!-- NameServer Definition-->
      <ip-address>NameServerのIPアドレス</ip-address>
      <port>NameServerのポート番号</port>
    </ejb-reception>
  </reception>
</csc-setup-definition>
```

9. 定義ファイル

HCSC サーバ構成定義ファイル

機能

HCSC サーバの構成情報を設定します。

DTD

```
<!ELEMENT csc-setup-definition (cluster?,cosminexus-manager,reception?)>
<!ELEMENT cluster (name?,display-name?,type?)>
<!ELEMENT name (#PCDATA)>
<!ELEMENT display-name (#PCDATA)>
<!ELEMENT type (#PCDATA)>
<!ELEMENT cosminexus-manager
(name,display-name?,ip-address,port,id,password?,csc-server)>
<!ELEMENT ip-address (#PCDATA)>
<!ELEMENT port (#PCDATA)>
<!ELEMENT id (#PCDATA)>
<!ELEMENT password (#PCDATA)>
<!ELEMENT csc-server
(name?,display-name?,id?,password?,j2ee-server-name,setup-properties)>
<!ELEMENT j2ee-server-name (#PCDATA)>
<!ELEMENT setup-properties (#PCDATA)>
<!ELEMENT reception
(soap-reception?,jms-reception?,jms-physical-reception?,ejb-reception?)>
<!ELEMENT soap-reception (ip-address?,port,protocol)>
<!ELEMENT protocol (#PCDATA)>
<!ELEMENT jms-reception
(ip-address?,port,protocol,rm-service-context-root,rm-service-name?)>
<!ELEMENT rm-service-context-root (#PCDATA)>
<!ELEMENT rm-service-name (#PCDATA)>
<!ELEMENT jms-physical-reception
(ip-address?,port,protocol,rm-service-context-root,rm-service-name?)>
<!ELEMENT ejb-reception (ip-address?,port)>
```

ファイルの格納先

```
<Cosminexusのインストールディレクトリ>
>%CSC%config¥manager¥templates¥cscsvsetup.xml
```

設定できる要素

(1) cluster の定義

cluster タグは省略できます。

name クラスタ名 ~ <半角英数字とアンダーライン(_) > ((1 - 8 文字))

クラスタ名を指定します。このタグを設定することで、cscsvsetup コマンドの -cluster を省略できます。

type クラスタ種別 ~ <<LB>>

クラスタ種別として、次のどちらかを指定します。ロードバランスクラスタ構成の場合は、省略できます。なお、必ず大文字で指定してください。

- LB
ロードバランスクラスタ構成の場合に指定します。
- HA

HA クラスタ構成の場合に指定します。

(2) cosminexus-manager の定義

name Cosminexus manager 名 ~ <半角英数字とアンダーライン (_) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager が Cosminexus Manager を認識するための HCSC-Manager 独自の識別名を指定します。HCSC-Manager で Cosminexus Manager (ホスト) 単位に一意になる識別名を指定します。

ip-address Cosminexus manager の IP アドレス ~ ((1 文字以上))

Management Server が起動している IP アドレスを指定します。2 回目以降設定を変えて再セットアップすると、値が上書きされます。

port Cosminexus manager のポート番号 ~ ((1 - 65535))

Cosminexus Manager のリモート管理機能への接続ポート番号を指定します。

com.cosminexus.mngsvr.management.port の値を指定します。指定がない場合は、28099 を指定します。2 回目以降設定を変えて再セットアップすると、値が上書きされません。

id Management Server の管理ユーザ ID ~ ((1 文字以上))

Management Server の管理ユーザ ID を指定します。

password Management Server の管理ユーザパスワード ~ ((1 文字以上))

Management Server の管理ユーザパスワードを指定します。このタグは省略できます。省略した場合、パスワードの指定がないとみなされます。

(3) csc-server の定義

name HCSC サーバ名 ~ <半角英数字とアンダーライン (_) > ((1 - 8 文字))

HCSC サーバ名を指定します。このタグを設定することで、cscsvsetup コマンドの -csc を省略できます。

id HCSC サーバが使用するデータベースのユーザ ID ~ ((1 文字以上))

HCSC サーバが使用するデータベースのユーザ ID を指定します。文字列の最大値および指定できる文字は、使用するデータベースに依存します。データベースを使用する場合は、必ず設定します。データベースを使用しない場合は、省略できます。

password HCSC サーバが使用するデータベースのパスワード

HCSC サーバが使用するデータベースのパスワードを指定します。文字列の最大値および指定できる文字は、使用するデータベースに依存します。データベースを使用する場合は、必ず設定します。データベースを使用しない場合は、省略できます。

9. 定義ファイル

HCSC サーバ構成定義ファイル

`j2ee-server-name` HCSC サーバが使用する J2EE サーバ名 ~ ((1 文字以上))

HCSC サーバをセットアップする J2EE サーバ名を指定します。

`setup-properties` HCSC サーバセットアップ定義ファイル名

HCSC サーバセットアップ定義ファイル名を相対パス, または絶対パスで指定します。

(4) `soap-reception` の定義

同期サービス (Web サービス) 呼び出しをする場合に指定します。同期サービス (Web サービス) 呼び出しをしない場合は, `soap-reception` タグを省略してください。

`ip-address` Web サーバの IP アドレス ~ <<Cosminexus manager と同じ IP アドレス >>

Web サーバが起動している IP アドレスを指定します。受付の IP アドレスと Management Server の IP アドレスが同じ場合は, 省略できます。2 回目以降設定を変えて再セットアップすると, 値が上書きされます。

`port` Web サーバのポート番号 ~ ((1 - 65535))

Web サーバの受付ポート番号を指定します。2 回目以降設定を変えて再セットアップすると, 値が上書きされます。

`protocol` プロトコル種別

Web サーバの受付プロトコルとして, 次のどちらかを指定します。2 回目以降設定を変えて再セットアップすると, 値が上書きされます。

- `http`
HTTP で受け付けられます。
- `https`
HTTPS で受け付けられます。

(5) `jms-reception` の定義

クラスタ種別が HA クラスタで, 非同期サービス (MDB (WS-R)) 呼び出しをする場合に指定します。非同期サービス (MDB (WS-R)) 呼び出しをしない場合は, `jms-reception` タグを省略してください。クラスタ種別がロードバランスクラスタの場合は, 値を指定しても無視されます。

`ip-address` Web サーバの IP アドレス ~ <<Cosminexus manager と同じ IP アドレス >>

Web サーバが起動している IP アドレスを指定します。受付の IP アドレスと Management Server の IP アドレスが同じ場合は, 省略できます。2 回目以降設定を変えて再セットアップすると, 値が上書きされます。

port Web サーバのポート番号 ~ ((1 - 65535))

Web サーバの受付ポート番号を指定します。2 回目以降設定を変えて再セットアップすると、値が上書きされます。

protocol プロトコル種別

Web サーバの受付プロトコルとして、次のどちらかを指定します。2 回目以降設定を変えて再セットアップすると、値が上書きされます。

- http
HTTP で受け付けられます。
- https
HTTPS で受け付けられます。

rm-service-context-root RM のサービスコンテキストルート ~ ((1 文字以上))

Cosminexus RM のサービスコンテキストルート名を指定します。2 回目以降設定を変えて再セットアップすると、値が上書きされます。

rm-service-name RM のサービス名 ~ ((1 文字以上))<<services/HRMReceiver>>

Cosminexus RM のサービス名として、services/HRMReceiver を指定します。2 回目以降設定を変えて再セットアップすると、値が上書きされます。

(6) jms-physical-reception の定義

クラスタ種別がロードバランスクラスタで、非同期サービス (MDB (WS-R)) 呼び出しをする場合に指定します。非同期サービス (MDB (WS-R)) 呼び出しをしない場合は、jms-physical-reception タグを省略してください。クラスタ種別が HA クラスタの場合は、値を指定しても無視されます。

ip-address Web サーバの IP アドレス ~ <<Cosminexus manager と同じ IP アドレス >>

Web サーバが起動している IP アドレスを指定します。受付の IP アドレスと Management Server の IP アドレスが同じ場合は、省略できます。2 回目以降設定を変えて再セットアップすると、値が上書きされます。

port Web サーバのポート番号 ~ ((1 - 65535))

Web サーバの受付ポート番号を指定します。2 回目以降設定を変えて再セットアップすると、値が上書きされます。

protocol プロトコル種別

Web サーバの受付プロトコルとして、次のどちらかを指定します。2 回目以降設定を変えて再セットアップすると、値が上書きされます。

9. 定義ファイル

HCSC サーバ構成定義ファイル

- http
HTTP で受け付けられます。
- https
HTTPS で受け付けられます。

rm-service-context-root RM のサービスコンテキストルート ~ ((1 文字以上))

Cosminexus RM のサービスコンテキストルート名を指定します。2 回目以降設定を変えて再セットアップすると、値が上書きされます。

rm-service-name RM のサービス名 ~ ((1 文字以上))<<services/HRMReceiver>>

Cosminexus RM のサービス名として、services/HRMReceiver を指定します。2 回目以降設定を変えて再セットアップすると、値が上書きされます。

(7) ejb-reception の定義

SessionBean を呼び出す場合に指定します。SessionBean を呼び出さない場合は、ejb-reception タグを省略してください。

ip-address NameServer の IP アドレス ~ ((1 文字以上))<<Cosminexus manager と同じ IP アドレス>>

ネームサーバが起動している IP アドレスを指定します。受付の IP アドレスと Management Server IP アドレスが同じ場合は、省略できます。2 回目以降設定を変えて再セットアップすると、値が上書きされます。

port NameServer のポート番号 ~ ((1 - 65535))

ネームサーバの受付ポート番号を指定します。2 回目以降設定を変えて再セットアップすると、値が上書きされます。

記述例

HCSC サーバ構成定義ファイルの記述例を次に示します。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
<!DOCTYPE csc-setup-definition SYSTEM "cscsvsetup_1_2.dtd">
<!-- All Rights Reserved. Copyright (C) 2006, Hitachi, Ltd. -->
<csc-setup-definition>
  <cluster>
    <name>LBクラスタ</name>
    <type>LB</type>
  </cluster>
  <cosminexus-manager>
    <!-- Cosminexus Manager Definition -->
    <name>MNG1</name>
    <ip-address>10.209.114.162</ip-address>
    <port>28099</port>
    <id>admin</id>
    <password>admin</password>
  <csc-server>
    <!-- HCSC-Server Definition -->
    <id>admin</id>
    <password>admin</password>
    <j2ee-server-name>LBServer</j2ee-server-name>
    <setup-properties>cscsvsetup.properties</setup-properties>
  </csc-server>
</cosminexus-manager>
  <reception>
    <soap-reception>
      <!-- WebServer Definition -->
      <ip-address>10.209.15.197</ip-address>
      <port>80</port>
      <protocol>http</protocol>
    </soap-reception>
    <jms-physical-reception>
      <!-- WebServer Definition -->
      <ip-address>10.209.114.162</ip-address>
      <port>80</port>
      <protocol>http</protocol>
      <rm-service-context-root>uCosminexusRM</rm-service-context-root>
    </jms-physical-reception>
    <ejb-reception>
      <!-- NameServer Definition -->
      <ip-address>10.209.114.9</ip-address>
      <port>900</port>
    </ejb-reception>
  </reception>
</csc-setup-definition>
```

使用方法

cscsvsetup コマンドの -profile オプションの引数に HCSC サーバ構成定義ファイルを指定します。詳細については、「3.1.3 HCSC サーバをセットアップする」を参照してください。

HCSC サーバセットアップ定義ファイル

形式

```
[ db-use={ON|OFF} ]
[ rm-use={ON|OFF} ]
[ hcscserver-data-filepath=HCSCサーバのシステム管理情報を保存する出力先のパス ]

request-ejb={ON|OFF}
request-soap={ON|OFF}
request-jms={ON|OFF}
[ request-jms.maxmessage=標準の非同期受付 (MDB (WS-R)) のキューの最大メッセージ数 ]
request-dbq={ON|OFF}
[ request-dbq.maxmessage=標準の非同期受付 (MDB (DBキュー)) のキューの最大メッセージ数 ]
[ request-jms-rdarea=標準の非同期受付 (MDB (WS-R)) のRDエリア名 ]
[ request-dbq-rdarea=標準の非同期受付 (MDB (DBキュー)) のRDエリア名 ]
[ request-dbq-maxlen=標準の非同期受付 (MDB (DBキュー)) の最大メッセージ長 ]

[ request-userdef-soap={ON|OFF} ]

[ naming-service-hostname=ネーミングサービスのホスト名 ]
[ naming-service-port=ネーミングサービスのポート番号 ]

[ rm-systemname=Cosminexus RMのシステム名 ]
[ rm-displayname=Cosminexus RMの表示名 ]

[ dbcon-xadisplayname=XATransactionまたはLocalTransaction用DB Connectorの表示名 ]
[ dbcon-nodisplayname=NoTransaction用DB Connectorの表示名 ]

[ transreq-maxmessage=HCSCサーバ間転送受信キューの最大メッセージ数 ]
[ transreq-jms-rdarea=HCSCサーバ間転送受信キューのRDエリア名 ]

[ dbtype={HIRDB|ORACLE9I|ORACLE10G} ]
[ jdbc-type={DBPSV|HIRDB-TYPE4|ORACLE-THIN} ]
[ jdbc-url=JDBC用データベースURL ]
[ jdbc-dbhostname=データベースのホスト名 ]
[ jdbc-dbconnectinfo=データベースの接続情報 ]
[ db-character-sets={ASCII | Shift_JIS | UTF-8 | EUC-JP} ]

[ cscserverinfo-tbl-area=HCSC基本情報テーブル領域 ]
[ server-trans-tbl-area=連携HCSC用テーブル領域 ]
[ location-tbl-area=ロケーション用テーブル領域 ]
[ routing-tbl-area=ルーティング用テーブル領域 ]
[ cv-tbl-area=データ変換用テーブル領域 ]

[ exehistory-tbl-area=実行履歴情報テーブル領域 ]
[ exehistory-idx-area=実行履歴情報テーブルのインデックスを格納する領域 ]
[ process-tbl-area=ビジネスプロセス基盤用PROCESSテーブルを格納する領域 ]
[ process-idx-area=ビジネスプロセス基盤用PROCESSテーブルのインデックスを格納する領域 ]
[ activity-tbl-area=ビジネスプロセス基盤用ACTIVITYテーブルを格納する領域 ]
[ activity-idx-area=ビジネスプロセス基盤用ACTIVITYテーブルのインデックスを格納する領域 ]
[ link-tbl-area=ビジネスプロセス基盤用LINKテーブルを格納する領域 ]
[ link-idx-area=ビジネスプロセス基盤用LINKテーブルのインデックスを格納する領域 ]
```

```
[ correlationset-tbl-area=ビジネスプロセス基盤用CORRELATIONSETテーブルを格納する領域 ]  
[ correlationset-idx-area=ビジネスプロセス基盤用CORRELATIONSETテーブルのインデックスを格納する領域 ]  
[ string-variable-tbl-area=ビジネスプロセス基盤用STRING-VARIABLEテーブルを格納する領域 ]  
[ string-variable-idx-area=ビジネスプロセス基盤用STRING-VARIABLEテーブルのインデックスを格納する領域 ]  
[ numeric-variable-tbl-area=ビジネスプロセス基盤用NUMERIC-VARIABLEテーブルを格納する領域 ]  
[ numeric-variable-idx-area=ビジネスプロセス基盤用NUMERIC-VARIABLEテーブルのインデックスを格納する領域 ]  
[ boolean-variable-tbl-area=ビジネスプロセス基盤用BOOLEAN-VARIABLEテーブルを格納する領域 ]  
[ boolean-variable-idx-area=ビジネスプロセス基盤用BOOLEAN-VARIABLEテーブルのインデックスを格納する領域 ]  
[ message-variable-tbl-area=ビジネスプロセス基盤用MESSAGE-VARIABLEテーブルを格納する領域 ]  
[ message-variable-idx-area=ビジネスプロセス基盤用MESSAGE-VARIABLEテーブルのインデックスを格納する領域 ]  
[ message-variable-val-area=ビジネスプロセス基盤用MESSAGE-VARIABLEテーブルのVariableValue列を格納する領域 ]  
[ message-relation-tbl-area=ビジネスプロセス基盤用MESSAGE-RELATIONテーブルを格納する領域 ]  
[ message-relation-idx-area=ビジネスプロセス基盤用MESSAGE-RELATIONテーブルのインデックスを格納する領域 ]  
[ sql-scriptfilename=SQLスクリプトファイルパス ]  
  
[ soap-client-def=Cosminexus SOAPクライアント定義ファイル名 ]  
  
[ csctrans-jms.instance.maximum=サーバ間転送 ( JMS受信 ) プール内のインスタンス最大数 ]
```

機能

HCSC サーバのセットアップ時に設定できる内容を設定します。

ファイルの格納先

```
<Cosminexusのインストールディレクトリ  
>¥CSC¥config¥manager¥templates¥cscsvsetup.properties
```

設定できるプロパティ

(1) セットアップ構成関連

db-use={ON | OFF} ~ <<ON>>

HCSC サーバでデータベースを使用するかどうかを指定します。

- ON
データベースを使用します。
- OFF
データベースを使用しません。

9. 定義ファイル

HCSC サーバセットアップ定義ファイル

rm-use={ON | OFF} ~ <<ON>>

HCSC サーバで Cosminexus RM を使用するかどうかを指定します。db-use プロパティで OFF を指定した場合、このプロパティに ON を指定するとエラーになります。

- ON
Cosminexus RM を使用します。
- OFF
Cosminexus RM を使用しません。

hcsctserver-data-filepath=HCSC サーバのシステム管理情報を保存する出力先のパス ~ <最大 100 バイトの文字列><<Cosminexus インストールディレクトリ>¥CSC¥\$pool¥msg>>

HCSC サーバのシステム管理情報を保存する出力先を絶対パスで指定します。ディレクトリ区切りは「/」または「¥¥」を使用します。存在しないディレクトリを指定した場合、および指定した文字列が 100 バイトを超える場合はエラーになります。そのため、<Cosminexus インストールディレクトリ> が 84 バイトを超える場合は、このプロパティを明示的に指定してください。なお、指定できる長さのバイトは、ISO-8859-1 でデコードしたあとの長さになります。

(2) 標準受付関連

request-ejb={ON | OFF}

標準の同期受付 (SessionBean) を使用するかどうかを指定します。

- ON
標準の同期受付 (SessionBean) を使用します。
- OFF
標準の同期受付 (SessionBean) を使用しません。

次に示す場合は、ON を指定してください。

- サービスリクエストから SessionBean を使用してサービス部品を呼び出す場合
- 運用環境の画面上でプロセスインスタンスを再実行する場合
- cscpireexec コマンドを使用してプロセスインスタンスを再実行する場合

request-soap={ON | OFF}

標準の同期受付 (Web サービス) を使用するかどうかを指定します。

- ON
標準の同期受付 (Web サービス) を使用します。
- OFF
標準の同期受付 (Web サービス) を使用しません。

サービスリクエストから Web サービスを使用してサービス部品を呼び出す場合は、ON

を指定してください。

request-jms={ON | OFF}

標準の非同期受付 (MDB (WS-R)) を使用するかどうかを指定します。rm-use プロパティで OFF を指定した場合、このプロパティに ON を指定するとエラーになります。

- ON
標準の非同期受付 (MDB (WS-R)) を使用します。
- OFF
標準の非同期受付 (MDB (WS-R)) を使用しません。

次に示す場合は、ON を指定してください。

- サービスリクエストから MDB (WS-R) を使用してサービス部品を呼び出す場合
- 配備するビジネスプロセスで応答アクティビティを実行したあとに、基本アクティビティ (受付、サービス呼出、Java 呼出、データ変換、代入、無操作、フォルト送出) を実行するようなビジネスプロセスを定義した場合

request-jms.maxmessage= 標準の非同期受付 (MDB (WS-R)) のキューの最大メッセージ数 ~ <数字> ((1 - 65535))<<1024>>

標準の非同期受付 (MDB (WS-R)) の受付キュー作成時の最大メッセージ数を指定します。Cosminexus RM での設定値に依存します。request-jms プロパティで ON を指定した場合だけ有効になります。

request-dbq={ON | OFF}

標準の非同期受付 (MDB (DB キュー)) を使用するかどうかを指定します。rm-use プロパティで OFF を指定した場合、このプロパティに ON を指定するとエラーになります。

- ON
標準の非同期受付 (MDB (DB キュー)) を使用します。
- OFF
標準の非同期受付 (MDB (DB キュー)) を使用しません。

サービスリクエストから (MDB (DB キュー)) を使用してサービス部品を呼び出す場合は、ON を指定してください。

request-dbq.maxmessage= 標準の非同期受付 (MDB (DB キュー)) のキューの最大メッセージ数 ~ <数字> ((1 - 65535))<<1024>>

標準の非同期受付 (MDB (DB キュー)) の受付キュー作成時の最大メッセージ数を指定します。Cosminexus RM での設定値に依存します。request-dbq プロパティで ON を指定した場合だけ有効になります。

9. 定義ファイル

HCSC サーバセットアップ定義ファイル

request-jms-rdarea= 標準の非同期受付 (MDB (WS-R)) の RD エリア名 ~ <先頭が英数字の英数字, 空白, およびアンダーライン (_) > ((1 - 30 文字))

標準の非同期受付 (MDB (WS-R)) の RD エリア名を指定します。データベースに Oracle を使用している場合は無効になります。Cosminexus RM での設定値に依存しません。

request-dbq-rdarea= 標準の非同期受付 (MDB (DB キュー)) の RD エリア名 ~ <先頭が英数字の英数字, 空白, およびアンダーライン (_) > ((1 - 30 文字))

標準の非同期受付 (MDB (DB キュー)) の RD エリア名を指定します。データベースに Oracle を使用している場合は無効になります。Cosminexus RM での設定値に依存しません。

request-dbq-maxlen= 標準の非同期受付 (MDB (DB キュー)) の最大メッセージ長 ~ <数字> ((1000 - 1048576))<<33000>>

標準の非同期受付 (MDB (DB キュー)) の最大メッセージ長をバイト単位で指定します。Cosminexus RM での指定値に依存します。

(3) ユーザ定義受付関連

request-userdef-soap={ON | OFF} ~ <<OFF>>

ユーザ定義受付を使用するかどうかを指定します。

- ON
ユーザ定義受付を使用します。
- OFF
ユーザ定義受付を使用しません。

! 注意事項

OFF の場合でもユーザ定義受付を配備・実行できます。ただし、OFF の場合、開発環境でユーザ定義受付を定義するとき、サービスリクエストからの要求先 Web サービスのアドレスが表示されないので注意してください。

(4) J2EE 関連

naming-service-hostname= ネーミングサービスのホスト名 ~ <文字列> <<localhost 名 >>

ネーミングサービスのホスト名を指定します。Cosminexus で指定した名称に依存しません。このプロパティの指定を省略した場合、cscsvsetup コマンドによって自動的にホスト名が設定されます。

naming-service-port= ネーミングサービスのポート番号 ~ <数字> ((1 - 65535))<<900>>

ネーミングサービスのポート番号を指定します。Cosminexus での設定値に依存します。このプロパティの指定を省略した場合、cscsvsetup コマンドによって自動的にポート番号が設定されます。

(5)Cosminexus RM 関連

rm-systemname=Cosminexus RM のシステム名 ~ <先頭が英字の大文字英字または数字> ((1 - 3 文字))

HCSC サーバが使用する Cosminexus RM の RM システム名を指定します。Cosminexus で指定した名称に依存します。rm-use プロパティで ON を指定した場合は、必ず指定します。rm-use プロパティで OFF を指定した場合、このプロパティを指定するとエラーになります。

rm-displayname=Cosminexus RM の表示名 ~ <英数字およびアンダーライン (_) >

HCSC サーバが使用する Cosminexus RM (リソースアダプタ) の表示名をサニタイズ (半角英数字以外をアンダーライン (_) に変更) した値を指定します。Cosminexus での名称に依存します。rm-use プロパティで ON を指定した場合は、必ず指定します。rm-use プロパティで OFF を指定した場合、このプロパティを指定するとエラーになります。

(6)DB コネクタ関連

dbcon-xadisplayname=XATransaction または LocalTransaction 用 DB Connector の表示名 ~ <英数字およびアンダーライン (_) >

HCSC サーバが使用する XATransaction 用、または LocalTransaction 用の DB Connector の表示名をサニタイズ (半角英数字以外をアンダーライン (_) に変更) した値を指定します。Cosminexus での名称に依存します。db-use プロパティで ON を指定した場合は、必ず指定します。db-use プロパティで OFF を指定した場合、このプロパティを指定するとエラーになります。

dbcon-nodisplayname=NoTransaction 用 DB Connector の表示名

HCSC サーバが使用する NoTransaction 用 DB Connector の表示名をサニタイズ (半角英数字以外をアンダーライン (_) に変更) した値を指定します。Cosminexus での名称に依存します。db-use プロパティで ON を指定した場合は、必ず指定します。db-use プロパティで OFF を指定した場合、このプロパティを指定するとエラーになります。

9. 定義ファイル

HCSC サーバセットアップ定義ファイル

(7) 転送キュー関連

transreq-maxmessage=HCSC サーバ間転送受信キューの最大メッセージ数 ~ <数字>
((1 - 65535))<<1024>>

HCSC サーバの HCSC サーバ間転送受信キュー作成時の最大メッセージ数を指定し
ます。Cosminexus RM での設定値に依存します。

transreq-jms-rdarea=HCSC サーバ間転送受信キューの RD エリア名 ~ <先頭が英字の
英数字, 空白, およびアンダーライン (_) > ((1 - 30 文字))

HCSC サーバのサーバ間転送受信キュー作成時の RD エリア名を指定します。デー
タベースに, Oracle を使用している場合は無効になります。Cosminexus RM での設定値
に依存します。

(8) データベース関連

dbtype={HIRDB | ORACLE9I | ORACLE10G}

HCSC サーバで使用するデータベース種別を指定します。db-use プロパティで ON を指
定した場合は, 必ず指定します。db-use プロパティで OFF を指定した場合, このプロ
パティを指定するとエラーになります。

- HIRDB
使用するデータベースとして HiRDB を使用します。
- ORACLE9I
使用するデータベースとして Oracle9i を使用します。
- ORACLE10G
使用するデータベースとして Oracle10g を使用します。

jdbc-type={DBPSV | HIRDB-TYPE4 | ORACLE-THIN}

HCSC サーバオフライン時に使用する JDBC ドライバの種別を指定します。db-use プロ
パティで ON を指定した場合は, 必ず指定します。db-use プロパティで OFF を指定し
た場合, このプロパティを指定するとエラーになります。

- DBPSV
Cosminexus DABroker Library の JdbcDbpsvDriver を使用します。DBPSV を指定
した場合は, 必ず jdbc-dbhostname プロパティ, および jdbc-dbconnectinfo プロパ
ティを指定します。Cosminexus DABroker Library を使用して Oracle へのデー
タベースにはアクセスできません。
- HIRDB-TYPE4
HiRDB Version8 (TYPE4 JDBC) を使用します。HIRDB-TYPE4 を指定した場
合は, 必ず jdbc-dbhostname プロパティ, および jdbc-dbconnectinfo プロパティを指定
します。
- ORACLE-THIN

Oracle JDBC Thin Driver を使用します。dbtype プロパティで、使用するデータベース種別に ORACLE9I または ORACLE10G を指定した場合は、必ず指定します。また、ORACLE-THIN を指定した場合は、必ず jdbc-url プロパティを指定します。

jdbc-url=JDBC 用データベース URL ~ <文字列>

HCSC サーバオフライン時に使用する JDBC ドライバごとに対応した接続設定情報として、Driver.connect メソッドで接続する際に指定する、接続先のデータベースの URL を指定します。jdbc-type プロパティで、JDBC ドライバ種別に ORACLE-THIN を指定した場合は必ず指定します。

- jdbc-type プロパティに DBPSV を指定した場合
jdbc-url プロパティの指定は無効になります。
- jdbc-type プロパティに HIRDB-TYPE4 を指定した場合
jdbc-url プロパティの指定は無効になります。
- jdbc-type プロパティに ORACLE-THIN を指定した場合
Oracle JDBC Thin Driver がデータベースに接続する際に使用する URL を指定します。「jdbc:oracle:thin:@」より後ろの部分指定します。URL の形式については、Oracle のマニュアルを参照してください。データベースに接続する際に使用するユーザ名とパスワードを含む URL は指定しないでください。なお、データベースに接続する際のユーザ名とパスワードは、HCSC サーバ構成定義ファイルで指定します。

jdbc-dbhostname= データベースのホスト名 ~ <文字列> ((最大 2086 文字))

HCSC サーバオフライン時に HCSC サーバが使用する HiRDB のホスト名または IP アドレスを指定します。jdbc-type プロパティで、JDBC ドライバ種別に DBPSV および HIRDB-TYPE4 を指定した場合は必ず指定します。jdbc-type プロパティに ORACLE-THIN を指定した場合、jdbc-dbhostname プロパティの指定は無効になります。

jdbc-dbconnectinfo= データベースの接続情報 ~ <英数字>

HCSC サーバオフライン時に使用する接続情報（ポート番号、または環境変数グループ名）を指定します。ディレクトリ区切りは「/」または「¥¥」を使用します。DABroker または HiRDB の設定値に依存します。jdbc-type プロパティで、JDBC ドライバ種別に DBPSV および HIRDB-TYPE4 を指定した場合は必ず指定します。

- jdbc-type プロパティに DBPSV を指定した場合
HiRDB システムのポート番号、または HiRDB クライアントの環境変数グループ名を指定します。環境変数グループ名を指定する場合、必ず先頭の @DABENVGRP を含めて指定します。
- jdbc-type プロパティに HIRDB-TYPE4 を指定した場合
HiRDB システムのポート番号、または HiRDB クライアントの環境変数グループファイル名を指定します。環境変数グループファイル名を指定する場合、必ず先頭の

9. 定義ファイル

HCSC サーバセットアップ定義ファイル

@HIRDBENVGRP= 指定に続けて、環境変数グループファイル名を絶対パス名で指定します。

- jdbc-type プロパティに ORACLE-THIN を指定した場合
jdbc-dbcconnectinfo プロパティの指定は無効になります。

db-character-sets={ASCII | Shift_JIS | UTF-8 | EUC-JP}

使用するデータベースで指定した文字コード種別を指定します。

コマンド受付 (MBean) や標準受付で入力チェックの際に「XML スキーマ定義の NCName」の長さ (データベースに入れることができる文字列のバイト数) を、指定された文字コードに変換してチェックするために使用します。

db-use プロパティで ON を指定した場合は、必ず指定します。データベースを使用しない場合は、このプロパティの指定を省略できます。db-use プロパティで OFF を指定した場合で、このプロパティを指定しなかったときは、UTF-8 に変換してチェックします。

- ASCII
使用するデータベースで指定した文字コード種別が ASCII の場合に指定します。
- Shift_JIS
使用するデータベースで指定した文字コード種別が Shift_JIS の場合に指定します。
- UTF-8
使用するデータベースで指定した文字コード種別が UTF-8 の場合に指定します。
- EUC-JP
使用するデータベースで指定した文字コード種別が EUC-JP の場合に指定します。

(9) データベースの RD エリア (表領域) 情報

cscserverinfo-tbl-area=HCSC 基本情報テーブル領域 ~ <文字列, RD エリア名の場合 : 先頭が英字の英数字と空白> ((RD エリア名の場合 : 1 - 30 文字))

HCSC 基本情報テーブルを作成するテーブル領域を指定します。使用するデータベースの種類によって、指定する値が異なります。

- HiRDB の場合
RD エリア名を指定します。
- Oracle の場合
表領域を指定します。

このプロパティの指定を省略した場合、使用するデータベースに従ってテーブル領域が決定されます。

server-trans-tbl-area= 連携 HCSC 用テーブル領域 ~ <文字列, RD エリア名の場合 : 先頭が英字の英数字と空白> ((RD エリア名の場合 : 1 - 30 文字))

連携 HCSC ディレクトリを作成するテーブル領域を指定します。使用するデータベースの種類によって、指定する値が異なります。

- HiRDB の場合
RD エリア名を指定します。
- Oracle の場合
表領域を指定します。

このプロパティの指定を省略した場合、使用するデータベースに従ってテーブル領域が決定されます。

location-tbl-area= ロケーション用テーブル領域 ~ <文字列, RD エリア名の場合: 先頭が英字の英数字と空白> ((RD エリア名の場合: 1 - 30 文字))

ロケーションディレクトリを作成するテーブル領域を指定します。使用するデータベースの種類によって、指定する値が異なります。

- HiRDB の場合
RD エリア名を指定します。
- Oracle の場合
表領域を指定します。

このプロパティの指定を省略した場合、使用するデータベースに従ってテーブル領域が決定されます。

routing-tbl-area= ルーティング用テーブル領域 ~ <文字列, RD エリア名の場合: 先頭が英字の英数字と空白> ((RD エリア名の場合: 1 - 30 文字))

ルーティングディレクトリを作成するテーブル領域を指定します。使用するデータベースの種類によって、指定する値が異なります。

- HiRDB の場合
RD エリア名を指定します。
- Oracle の場合
表領域を指定します。

このプロパティの指定を省略した場合、使用するデータベースに従ってテーブル領域が決定されます。

cv-tbl-area= データ変換用テーブル領域 ~ <文字列, RD エリア名の場合: 先頭が英字の英数字と空白> ((RD エリア名の場合: 1 - 30 文字))

データ変換ディレクトリを作成するテーブル領域を指定します。使用するデータベースの種類によって、指定する値が異なります。

- HiRDB の場合
RD エリア名を指定します。
- Oracle の場合
表領域を指定します。

このプロパティの指定を省略した場合、使用するデータベースに従ってテーブル領域が

決定されます。

exehistory-tbl-area= 実行履歴情報テーブル領域 ~ <文字列, RD エリア名の場合: 先頭が英字の英数字と空白> ((RD エリア名の場合: 1 - 30 文字))

実行履歴情報テーブルを作成するテーブル領域を指定します。使用するデータベースの種類によって、指定する値が異なります。

- HiRDB の場合
RD エリア名を指定します。
- Oracle の場合
表領域を指定します。

このプロパティの指定を省略した場合、使用するデータベースに従ってテーブル領域が決定されます。

exehistory-idx-area= 実行履歴情報テーブルのインデックスを格納する領域 ~ <文字列, RD エリア名の場合: 先頭が英字の英数字と空白> ((RD エリア名の場合: 1 - 30 文字))

実行履歴情報テーブルのインデックスを作成する領域を指定します。使用するデータベースの種類によって、指定する値が異なります。

- HiRDB の場合
RD エリア名を指定します。
- Oracle の場合
表領域を指定します。

このプロパティの指定を省略した場合、使用するデータベースに従ってインデックス領域が決定されます。

process-tbl-area= ビジネスプロセス基盤用 PROCESS テーブルを格納する領域 ~ <文字列, RD エリア名の場合: 先頭が英字の英数字と空白> ((RD エリア名の場合: 1 - 30 文字))

ビジネスプロセス基盤用 PROCESS テーブルを作成する領域を指定します。使用するデータベースの種類によって、指定する値が異なります。

- HiRDB の場合
RD エリア名を指定します。
- Oracle の場合
表領域を指定します。

このプロパティの指定を省略した場合、使用するデータベースに従ってテーブル領域が決定されます。

process-idx-area= ビジネスプロセス基盤用 PROCESS テーブルのインデクスを格納する領域 ~ <文字列, RD エリア名の場合: 先頭が英字の英数字と空白> ((RD エリア名の場合: 1 - 30 文字))

ビジネスプロセス基盤用 PROCESS テーブルのインデクスを作成する領域を指定します。使用するデータベースの種類によって、指定する値が異なります。

- HiRDB の場合
RD エリア名を指定します。
- Oracle の場合
表領域を指定します。

このプロパティの指定を省略した場合、使用するデータベースに従ってインデクス領域が決定されます。

activity-tbl-area= ビジネスプロセス基盤用 ACTIVITY テーブルを格納する領域 ~ <文字列, RD エリア名の場合: 先頭が英字の英数字と空白> ((RD エリア名の場合: 1 - 30 文字))

ビジネスプロセス基盤用 ACTIVITY テーブルを作成する領域を指定します。使用するデータベースの種類によって、指定する値が異なります。

- HiRDB の場合
RD エリア名を指定します。
- Oracle の場合
表領域を指定します。

このプロパティの指定を省略した場合、使用するデータベースに従ってテーブル領域が決定されます。

activity-idx-area= ビジネスプロセス基盤用 ACTIVITY テーブルのインデクスを格納する領域 ~ <文字列, RD エリア名の場合: 先頭が英字の英数字と空白> ((RD エリア名の場合: 1 - 30 文字))

ビジネスプロセス基盤用 ACTIVITY テーブルのインデクスを作成する領域を指定します。使用するデータベースの種類によって、指定する値が異なります。

- HiRDB の場合
RD エリア名を指定します。
- Oracle の場合
表領域を指定します。

このプロパティの指定を省略した場合、使用するデータベースに従ってインデクス領域が決定されます。

9. 定義ファイル

HCSC サーバセットアップ定義ファイル

link-tbl-area= ビジネスプロセス基盤用 LINK テーブルを格納する領域 ~ <文字列, RD エリア名の場合: 先頭が英字の英数字と空白> ((RD エリア名の場合: 1 - 30 文字))

ビジネスプロセス基盤用 LINK テーブルを作成する領域を指定します。使用するデータベースの種類によって、指定する値が異なります。

- HiRDB の場合
RD エリア名を指定します。
- Oracle の場合
表領域を指定します。

このプロパティの指定を省略した場合、使用するデータベースに従ってテーブル領域が決定されます。

link-idx-area= ビジネスプロセス基盤用 LINK テーブルのインデックスを格納する領域 ~ <文字列, RD エリア名の場合: 先頭が英字の英数字と空白> ((RD エリア名の場合: 1 - 30 文字))

ビジネスプロセス基盤用 LINK テーブルのインデックスを作成する領域を指定します。使用するデータベースの種類によって、指定する値が異なります。

- HiRDB の場合
RD エリア名を指定します。
- Oracle の場合
表領域を指定します。

このプロパティの指定を省略した場合、使用するデータベースに従ってインデックス領域が決定されます。

correlationset-tbl-area= ビジネスプロセス基盤用 CORRELATIONSET テーブルを格納する領域 ~ <文字列, RD エリア名の場合: 先頭が英字の英数字と空白> ((RD エリア名の場合: 1 - 30 文字))

ビジネスプロセス基盤用 CORRELATIONSET テーブルを作成する領域を指定します。使用するデータベースの種類によって、指定する値が異なります。

- HiRDB の場合
RD エリア名を指定します。
- Oracle の場合
表領域を指定します。

このプロパティの指定を省略した場合、使用するデータベースに従ってテーブル領域が決定されます。

correlationset-idx-area= ビジネスプロセス基盤用 CORRELATIONSET テーブルのインデクスを格納する領域 ~ <文字列, RD エリア名の場合: 先頭が英字の英数字と空白> ((RD エリア名の場合: 1 - 30 文字))

ビジネスプロセス基盤用 CORRELATIONSET テーブルのインデクスを作成する領域を指定します。使用するデータベースの種類によって、指定する値が異なります。

- HiRDB の場合
RD エリア名を指定します。
- Oracle の場合
表領域を指定します。

このプロパティの指定を省略した場合、使用するデータベースに従ってインデクス領域が決定されます。

string-variable-tbl-area= ビジネスプロセス基盤用 STRING-VARIABLE テーブルを格納する領域 ~ <文字列, RD エリア名の場合: 先頭が英字の英数字と空白> ((RD エリア名の場合: 1 - 30 文字))

ビジネスプロセス基盤用 STRING-VARIABLE テーブルを作成する領域を指定します。使用するデータベースの種類によって、指定する値が異なります。

- HiRDB の場合
RD エリア名を指定します。
- Oracle の場合
表領域を指定します。

このプロパティの指定を省略した場合、使用するデータベースに従ってテーブル領域が決定されます。

string-variable-idx-area= ビジネスプロセス基盤用 STRING-VARIABLE テーブルのインデクスを格納する領域 ~ <文字列, RD エリア名の場合: 先頭が英字の英数字と空白> ((RD エリア名の場合: 1 - 30 文字))

ビジネスプロセス基盤用 STRING-VARIABLE テーブルのインデクスを作成する領域を指定します。使用するデータベースの種類によって、指定する値が異なります。

- HiRDB の場合
RD エリア名を指定します。
- Oracle の場合
表領域を指定します。

このプロパティの指定を省略した場合、使用するデータベースに従ってインデクス領域が決定されます。

9. 定義ファイル

HCSC サーバセットアップ定義ファイル

numeric-variable-tbl-area= ビジネスプロセス基盤用 NUMERIC-VARIABLE テーブルを格納する領域 ~ <文字列, RD エリア名の場合: 先頭が英字の英数字と空白> ((RD エリア名の場合: 1 - 30 文字))

ビジネスプロセス基盤用 NUMERIC-VARIABLE テーブルを作成する領域を指定します。使用するデータベースの種類によって、指定する値が異なります。

- HiRDB の場合
RD エリア名を指定します。
- Oracle の場合
表領域を指定します。

このプロパティの指定を省略した場合、使用するデータベースに従ってテーブル領域が決定されます。

numeric-variable-idx-area= ビジネスプロセス基盤用 NUMERIC-VARIABLE テーブルのインデックスを格納する領域 ~ <文字列, RD エリア名の場合: 先頭が英字の英数字と空白> ((RD エリア名の場合: 1 - 30 文字))

ビジネスプロセス基盤用 NUMERIC-VARIABLE テーブルのインデックスを作成する領域を指定します。使用するデータベースの種類によって、指定する値が異なります。

- HiRDB の場合
RD エリア名を指定します。
- Oracle の場合
表領域を指定します。

このプロパティの指定を省略した場合、使用するデータベースに従ってインデックス領域が決定されます。

boolean-variable-tbl-area= ビジネスプロセス基盤用 BOOLEAN-VARIABLE テーブルを格納する領域 ~ <文字列, RD エリア名の場合: 先頭が英字の英数字と空白> ((RD エリア名の場合: 1 - 30 文字))

ビジネスプロセス基盤用 BOOLEAN-VARIABLE テーブルを作成する領域を指定します。使用するデータベースの種類によって、指定する値が異なります。

- HiRDB の場合
RD エリア名を指定します。
- Oracle の場合
表領域を指定します。

このプロパティの指定を省略した場合、使用するデータベースに従ってテーブル領域が決定されます。

boolean-variable-idx-area= ビジネスプロセス基盤用 BOOLEAN-VARIABLE テーブルのインデックスを格納する領域 ~ <文字列, RD エリア名の場合: 先頭が英字の英数字と空白 > ((RD エリア名の場合: 1 - 30 文字))

ビジネスプロセス基盤用 BOOLEAN-VARIABLE テーブルのインデックスを作成する領域を指定します。使用するデータベースの種類によって、指定する値が異なります。

- HiRDB の場合
RD エリア名を指定します。
- Oracle の場合
表領域を指定します。

このプロパティの指定を省略した場合、使用するデータベースに従ってインデックス領域が決定されます。

message-variable-tbl-area= ビジネスプロセス基盤用 MESSAGE-VARIABLE テーブルを格納する領域 ~ <文字列, RD エリア名の場合: 先頭が英字の英数字と空白 > ((RD エリア名の場合: 1 - 30 文字))

ビジネスプロセス基盤用 MESSAGE-VARIABLE テーブルを作成する領域を指定します。使用するデータベースの種類によって、指定する値が異なります。

- HiRDB の場合
RD エリア名を指定します。
- Oracle の場合
表領域を指定します。

このプロパティの指定を省略した場合、使用するデータベースに従ってテーブル領域が決定されます。

message-variable-idx-area= ビジネスプロセス基盤用 MESSAGE-VARIABLE テーブルのインデックスを格納する領域 ~ <文字列, RD エリア名の場合: 先頭が英字の英数字と空白 > ((RD エリア名の場合: 1 - 30 文字))

ビジネスプロセス基盤用 MESSAGE-VARIABLE テーブルのインデックスを作成する領域を指定します。使用するデータベースの種類によって、指定する値が異なります。

- HiRDB の場合
RD エリア名を指定します。
- Oracle の場合
表領域を指定します。

このプロパティの指定を省略した場合、使用するデータベースに従ってインデックス領域が決定されます。

9. 定義ファイル

HCSC サーバセットアップ定義ファイル

message-variable-val-area= ビジネスプロセス基盤用 MESSAGE-VARIABLE テーブルの VariableValue 列を格納する領域 ~ <文字列, RD エリア名の場合: 先頭が英字の英数字と空白> ((RD エリア名の場合: 1 - 30 文字))

ビジネスプロセス基盤用 MESSAGE-VARIABLE テーブルの VariableValue 列を作成する領域を指定します。

- HiRDB の場合
指定は不要です。このプロパティを指定しても無効となります。
- Oracle の場合
表領域を指定します。

このプロパティの指定を省略した場合, 使用するデータベースに従ってテーブル領域が決定されます。

message-relation-tbl-area= ビジネスプロセス基盤用 MESSAGE-RELATION テーブルを格納する領域 ~ <文字列, RD エリア名の場合: 先頭が英字の英数字と空白> ((RD エリア名の場合: 1 - 30 文字))

ビジネスプロセス基盤用 MESSAGE-RELATION テーブルを作成する領域を指定します。使用するデータベースの種類によって, 指定する値が異なります。

- HiRDB の場合
RD エリア名を指定します。
- Oracle の場合
表領域を指定します。

このプロパティの指定を省略した場合, 使用するデータベースに従ってテーブル領域が決定されます。

message-relation-idx-area= ビジネスプロセス基盤用 MESSAGE-RELATION テーブルのインデックスを格納する領域 ~ <文字列, RD エリア名の場合: 先頭が英字の英数字と空白> ((RD エリア名の場合: 1 - 30 文字))

ビジネスプロセス基盤用 MESSAGE-RELATION テーブルのインデックスを作成する領域を指定します。使用するデータベースの種類によって, 指定する値が異なります。

- HiRDB の場合
RD エリア名を指定します。
- Oracle の場合
表領域を指定します。

このプロパティの指定を省略した場合, 使用するデータベースに従ってインデックス領域が決定されます。

sql-scriptfilename=SQL スクリプトファイルパス ~ <文字列>

データベース作成用の SQL スクリプトファイルパスを絶対パスで指定します。ディレク

トリ区切りは「/」または「¥¥」を使用します。

このプロパティはオプション機能です。このプロパティでユーザ SQL ファイルを指定する場合、SQL ファイルの TABLE 名、INDEX 名、VIEW 名を誤らないようにしてください。誤ったものを指定すると動作は保障されません。また、HCSC サーバのアンセットアップ時には、SQL ファイルの内容に関係なく、HCSC サーバが使用するテーブル式が削除されます。ただし、HA クラスタ内で共有できるテーブルについては、クラスタ内で最後の HCSC サーバをアンセットアップする場合にだけ削除します。HCSC サーバが使用するテーブル式については、「表 7-36 HCSC サーバが使用するリソース」を参照してください。

また、SQL スクリプトファイルの設定については、「付録 D SQL スクリプトファイルの設定」を参照してください。

なお、このプロパティを指定した場合、次に示すプロパティは無効になります。

cscserverinfo-tbl-area	correlationset-tbl-area
server-trans-tbl-area	correlationset-idx-area
location-tbl-area	string-variable-tbl-area
routing-tbl-area	string-variable-idx-area
cv-tbl-area	numeric-variable-tbl-area
exehistory-tbl-area	numeric-variable-idx-area
exehistory-idx-area	boolean-variable-tbl-area
process-tbl-area	boolean-variable-idx-area
process-idx-area	message-variable-tbl-area
activity-tbl-area	message-variable-idx-area
activity-idx-area	message-variable-val-area
link-tbl-area	message-relation-tbl-area
link-idx-area	message-relation-idx-area

(10) クライアント定義ファイル

soap-client-def=Cosminexus SOAP クライアント定義ファイル名 ~ <文字列>

HCSC サーバ間転送で使用する Cosminexus SOAP クライアント定義ファイルのファイル名を絶対パスで指定します。ディレクトリ区切りは「/」または「¥¥」を使用します。

(11) サーバ間転送関連

csctrans-jms.instance.maximum= サーバ間転送 (JMS 受信) プール内のインスタンス最大数 ~ <数字> ((1 - 1024))<<10>>

プール内のサーバ間転送 (JMS 受信) インスタンス最大数を指定します。Cosminexus RM での設定値に依存します。

9. 定義ファイル

HCSC サーバセットアップ定義ファイル

記述例

HiRDB を使用した場合の例を次に示します。

```
db-use=ON
rm-use=ON
request-ejb=ON
request-soap=ON
request-jms=ON
request-dbq=OFF
rm-systemname=RM
rm-displayname=Cosminexus_Reliable_Messaging
dbcon-xadisplayname=DB_Connector_for_HiRDB_Type4_Cosminexus_RM
dbcon-nodisplayname=DB_Connector_for_HiRDB_Type4
dbtype=HIRDB
jdbc-type=HIRDB-TYPE4
jdbc-dbhostname=localhost
jdbc-dbconnectinfo=22200
db-character-sets=Shift_JIS
cscserverinfo-tbl-area=RDDATA1
server-trans-tbl-area=RDDATA1
location-tbl-area=RDDATA1
routing-tbl-area=RDDATA1
cv-tbl-area=RDDATA1
exehistory-tbl-area=RDDATA2
exehistory-idx-area=RDINDX2
process-tbl-area=RDDATA1
process-idx-area=RDINDX1
activity-tbl-area=RDDATA1
activity-idx-area=RDINDX1
link-tbl-area=RDDATA1
link-idx-area=RDINDX1
correlationset-tbl-area=RDDATA1
correlationset-idx-area=RDINDX1
string-variable-tbl-area=RDDATA3
string-variable-idx-area=RDINDX3
numeric-variable-tbl-area=RDDATA3
numeric-variable-idx-area=RDINDX3
boolean-variable-tbl-area=RDDATA3
boolean-variable-idx-area=RDINDX3
message-variable-tbl-area=RDDATA3
message-variable-idx-area=RDINDX3
message-relation-tbl-area=RDDATA4
message-relation-idx-area=RDINDX4
```

使用方法

HCSC サーバ構成定義ファイルの要素 `setup-properties` に HCSC サーバセットアップ定義ファイルを指定します。

注意事項

同じプロパティを複数指定した場合は、動作は保証されません。

連携セットアップ定義ファイル

形式

```
SyncTransKind={EJB | SOAP}  
TransQueURL=転送先のキュー間転送用WebアプリケーションのURL  
TransQueUserID=転送キュー作成用ベーシック認証ユーザID  
TransQuePassword=転送キュー作成用ベーシック認証パスワード  
TransQueQosInfo={exactly_once | in_order}  
TransQueMaxMessage=転送キューのメッセージ最大数  
WebURL=SOAP転送用宛先URL  
WebUserID=SOAP転送用Webサービスベーシック認証ユーザID  
WebPassword=SOAP転送用Webサービスベーシック認証パスワード  
RMRdArea=転送キュー作成用RDエリア名  
FirstSetup={true | false}  
ConnectJ2eeServerName=連携先クラスタのJ2EEサーバ名  
NamingServiceHostName=連携先クラスタのネーミングサービスホスト名  
NamingServicePort=連携先クラスタのネーミングサービスポート番号
```

機能

HCSC サーバセットアップ後の HCSC サーバの連携セットアップ情報を指定します。

ファイルの格納先

```
<Cosminexusのインストールディレクトリ  
>%CSC%\config\manager\templates\cscconsetup.properties
```

設定できるプロパティ

SyncTransKind={EJB | SOAP}

通信手段オプションフラグを指定します。

- EJB
通信手段が EJB の場合に指定します。
- SOAP
通信手段が SOAP の場合に指定します。

TransQueURL= 転送先のキュー間転送用 Web アプリケーションの URL

転送先のキュー間転送用 Web アプリケーションの URL を、次に示す形式で指定します。
サービス名（固定）は含みません。

http://< ホスト名 >:< ポート番号 >:< コンテキストルート > または

https://< ホスト名 >:< ポート番号 >:< コンテキストルート >

TransQueUserID= 転送キュー作成用ベーシック認証ユーザ ID

転送キューを作成用のベーシック認証に使用するユーザ ID を指定します。

9. 定義ファイル 連携セットアップ定義ファイル

TransQuePassword= 転送キュー作成用ベーシック認証パスワード

転送キューを作成用のベーシック認証に使用するパスワードを指定します。

TransQueQosInfo={exactly_once | in_order} ~ <<exactly_once>>

連携用の転送キュー使用時の QoS の種別を指定します。

- exactly_once
配送を保証する場合、および重複を防止する場合に指定します。
- in_order
順序を保証する場合に指定します。

設定値については、マニュアル「Cosminexus Reliable Messaging」の「キュー間転送の QoS」を参照してください。

TransQueMaxMessage= 転送キューのメッセージ最大数 ~ <数字> ((1 - 65535))<<1024>>

転送キューのメッセージ最大数を指定します。

WebURL=SOAP 転送用宛先 URL

SOAP 転送用宛先の URL を次の形式で指定します。コンテキストルートは含んでいません。

http://<ホスト名>:<ポート番号> または

https://<ホスト名>:<ポート番号>

WebUserID=SOAP 転送用 Web サービスベーシック認証ユーザ ID

SOAP 転送用の Web サービスのベーシック認証に使用するユーザ ID を指定します。

WebPassword=SOAP 転送用 Web サービスベーシック認証パスワード

SOAP 転送用の Web サービスのベーシック認証に使用するパスワードを指定します。

RMRdArea= 転送キュー作成用 RD エリア名

転送キュー作成用の RD エリア名を指定します。

FirstSetup={true | false} ~ <<true>>

連携先クラスタ情報を追加するサーバの種別を指定するかどうかを指定します。

- true
連携先クラスタ情報を追加するサーバの種別を指定します。
- false
連携先クラスタ情報を追加するサーバの種別を指定しません。

ConnectJ2eeServerName= 連携先クラスタの J2EE サーバ名

連携先クラスタの J2EE サーバ名を指定します。

NamingServiceHostName= 連携先クラスタのネーミングサービスホスト名

連携先クラスタのネーミングサービスホスト名を指定します。

NamingServicePort= 連携先クラスタのネーミングサービスポート番号

連携先クラスタのネーミングサービスポート番号を指定します。

記述例

```
SyncTransKind=SOAP
TransQueURL=http://Hsrv3:700/Transque
TransQueUserID=tquser01
TransQuePassword=tqpass01
TransQueQosInfo=exactly_once
TransQueMaxMessage=10
WebURL=http://Hsrv1:2605
WebUserID=wuser01
WebPassword=wpass01
RMRdArea=trasque
FirstSetup=true
ConnectJ2eeServerName=honkan_J2EESV
NamingServiceHostName=NHsrv1
NamingServicePort=2806
```

使用方法

cscconsetup コマンドの -profile オプションの引数に連携セットアップ定義ファイルを指定します。詳細については、「3.1.6 連携をセットアップする」を参照してください。

HCSC サーバランタイム定義ファイル

形式

```
[ historyrecord={ON | OFF} ]
[ historyrecord-data={ON | OFF} ]
[ historyrecord-binarylength={FULL | 電文データの長さ} ]

[ methodtrace-filepath=メソッドトレース出力先パス ]
[ requesttrace-filepath=リクエストトレース出力先パス ]
[ methodtrace-filenum=メソッドトレース面数 ]
[ requesttrace-filenum=リクエストトレース面数 ]
[ methodtrace-filesize=メソッドトレースファイルサイズ ]
[ requesttrace-filesize=リクエストトレースファイルサイズ ]
[ methodtrace-level={1 | 2 | 3 | 4 | 5} ]
[ requesttrace={ON | OFF} ]
[ bptrace-level={0 | 10 | 20 | 30} ]
[ bptrace-filenum=BPトレースの面数 ]
[ bptrace-filesize=BPトレースのサイズ ]

[ dab-bufsize=DABrokerからの受信データのバッファ長 ]
[ jdbc-bufsize=JDBCで取り扱うバッファ長 ]
[ jdbc-longvarbinary={REAL | LOCATOR} ]
[ jdbc-longvarbinary-access-size=HiRDBに一度に要求するデータの長さ ]
[ jdbc-maxbinarysize=取得するデータの最大長 ]
[ jdbc-longvarbinary-truncerror={TRUE | FALSE} ]

[ request-ejb.instance.minimum=標準の同期受付 (SessionBean) のインスタンス最小数 ]
[ request-ejb.instance.maximum=標準の同期受付 (SessionBean) のインスタンス最大数 ]
[ request-ejb.ctm={true | false} ]
[ request-ejb.parallel.count=CTMがアプリケーションを呼び出すために用意するスレッド数 ]
[ request-ejb.optional.name=標準の同期受付 (SessionBean) の別名 ]
[ request-soap.instance.minimum=標準の同期受付 (Webサービス) の最小同時実行数 ]
[ request-soap.instance.maximum=標準の同期受付 (Webサービス) の最大同時実行数 ]
[ request-soap.exclusive.threads=標準の同期受付 (Webサービス) の占有スレッド数 ]
[ request-soap.queue-size=標準の同期受付 (Webサービス) の実行待ちキューのサイズ ]
[ request-jms.instance.maximum=標準の非同期受付 (MDB (WS-R)) のインスタンス最大数 ]
[ receptionstop-monitor-timer=受付終了タイムアウト時間 ]

[ soapfault-targetnamespace-filepath=SOAP Fault動作定義ファイルの絶対パス ]

[ xmltelegram-maxcache-num=XML電文をキャッシュできる数 ]
[ telegram-validation={ON | OFF} ]

[ cscserver-connect-timeout=タイムアウト値 ]
```

機能

セットアップ後の HCSC サーバの定義情報を HCSC-Manager から設定します。

ファイルの格納先

<Cosminexusのインストールディレクトリ

>¥CSC¥config¥manager¥templates¥cscsvconfig.properties

設定できるプロパティ

(1) 実行履歴管理

historyrecord={ON | OFF} ~ <<OFF>>

電文の実行履歴を採取するかどうかを指定します。HCSC サーバセットアップ定義ファイルの db-use プロパティで OFF を指定した場合に、このプロパティで ON を指定するとエラーになります。

- ON
採取します。
- OFF
採取しません。

historyrecord-data={ON | OFF} ~ <<OFF>>

電文の実行履歴の電文データ（ユーザ電文）を採取するかどうかを指定します。historyrecord プロパティで ON を指定した場合だけ有効になります。

- ON
採取します。
- OFF
採取しません。

historyrecord-binarylength={FULL | 電文データの長さ} ~ <英大文字または数字> ((0 - 2147483639))<<0>>

採取する電文データ（ユーザ電文）の長さを指定します。historyrecord プロパティおよび historyrecord-data プロパティで ON を指定した場合だけ有効になります。

- FULL
電文データすべてを採取します。最大 2,147,483,639 バイトの電文データを取得します。
- 電文データの長さ
指定した長さの電文データを採取します。0 ~ 2,147,483,639 バイトの長さを指定します。

(2) ログトレース

methodtrace-filepath= メソッドトレース出力先パス ~ <文字列（2 バイト文字含む）および空白> <<<Cosminexus ログ出力ディレクトリ>¥csc¥maintenance>>

メッセージング基盤、およびビジネスプロセス基盤のメソッドトレースの出力先パスを絶対パスで指定します。ディレクトリ区切りは「/」または「¥¥」を使用します。存在しないディレクトリを指定した場合は、省略値が使用されます。省略値は Cosminexus の

9. 定義ファイル
HCSC サーバランタイム定義ファイル

設定値に依存します。

requesttrace-filepath= リクエストトレース出力先パス ~ <文字列(2バイト文字含む)および空白> <<<Cosminexus ログ出力ディレクトリ>¥csc>>

リクエストトレースの出力先パスを絶対パスで指定します。ディレクトリ区切りは「/」または「¥¥」を使用します。存在しないディレクトリを指定した場合は、省略値が使用されます。省略値は Cosminexus の設定値に依存します。

methodtrace-filenum= メソッドトレース面数 ~ <数字> ((1 - 16))<<8>>

メソッドトレースの最大面数を指定します。

requesttrace-filenum= リクエストトレース面数 ~ <数字> ((1 - 16))<<4>>

リクエストトレースの最大面数を指定します。

methodtrace-filesize= メソッドトレースファイルサイズ ~ <数字> ((4096 - 2147483647))<<2097152>>

メソッドトレースファイルの1面当たりの最大サイズをバイト単位で指定します。

requesttrace-filesize= リクエストトレースファイルサイズ ~ <数字> ((4096 - 2147483647))<<2097152>>

リクエストトレースファイルの1面当たりの最大サイズをバイト単位で指定します。

methodtrace-level={1 | 2 | 3 | 4 | 5} ~ <<3>>

メソッドトレースの出力レベルを指定します。出力情報と出力レベルを次の表に示します。

出力情報	出力レベル				
	1	2	3	4	5
エラー情報(例外発生原因)					
標準受付メソッドの入口/出口情報(クラス名, メソッド名, 引数, 戻り値)	x				
外部(BPなど)のインターフェースの入口/出口情報(クラス名, メソッド名, 引数, 戻り値)	x	x			
コンポーネント内インターフェースの入口/出口情報(クラス名, メソッド名, 引数, 戻り値)	x	x	x		
デバッグ情報(処理の分岐などの情報)	x	x	x	x	

(凡例)

: 出力されます。

x: 出力されません。

注 DBアダプタの場合は該当しません。

requesttrace={ON | OFF} ~ <<ON>>

リクエストトレースを採取するかどうかを指定します。

- ON
採取します。
- OFF
採取しません。

bptrace-level={0 | 10 | 20 | 30} ~ <<10>>

ビジネスプロセス基盤のメソッドトレースの出力レベルを指定します。

bptrace-filenum=BP トレースの面数 ~ <数字> ((1 - 16))<<16>>

ビジネスプロセス基盤のメソッドトレースの面数を指定します。

bptrace-filesize=BP トレースのサイズ ~ <数字> ((4096 - 2147483647))<<2097152>>

ビジネスプロセス基盤のメソッドトレースのサイズをバイト単位で指定します。

(3)DB 情報

dab-bufsize=DABroker からの受信データのバッファ長 ~ <数字> ((10 - 16000))

HCSC サーバのオフライン時、データベースに格納されている電文の実行履歴情報を表示する場合に、Cosminexus DABroker Library からの受信データを格納するためのバッファ長をキロバイト単位で指定します。HCSC サーバセットアップ定義ファイルの jdbc-type プロパティに DBPSV を指定した場合にだけ有効になります。

次の場合は、表示データ長に 10 を加えた値を指定します。

- 電文の実行履歴を管理し、かつデータ長が 15,990 キロバイト以下のユーザ電文を採取している場合で、実行履歴情報を表示するときの電文データ長オプションで 1 ~ 65535 の値を指定しているとき
- 電文の実行履歴を管理し、かつデータ長が 15,990 キロバイトより大きいユーザ電文を採取している場合で、実行履歴情報を表示するときの電文データ長オプションで 1 ~ 65535 の値を指定しているとき
- 実行履歴情報の表示に際し、電文データ長オプションで 0 (上限値なし) を指定している場合で、採取されているユーザ電文の長さの上限がわかっている場合

次の場合は、このプロパティに 16000 を指定し、さらに jdbc-longvarbinary プロパティに LOCATOR を指定します。

- 実行履歴情報を表示するときの電文データ長オプションの指定が 0 (上限値なし) の場合

次の場合は、このプロパティの指定を省略できます。省略時は、DABroker の省略時の

9. 定義ファイル

HCSC サーバランタイム定義ファイル

動作に依存します (Driver.connect メソッドに指定する BUF_SIZE の値)。

- 電文の実行履歴を管理しない場合
- ユーザ電文を採取しない場合

`jdbc-bufsize=JDBC` で取り扱うバッファ長 ~ <数字> ((16 - 512))

HCSC サーバのオフライン時に、データベースに格納されている電文の実行履歴情報を表示するときの JDBC で取り扱うバッファ長をメガバイト単位で指定します。実行履歴情報を表示する際の電文データ長オプションで 0 (上限値なし) を指定している場合は、採取データ長に合わせて指定します。HCSC サーバセットアップ定義ファイルの `jdbc-type` プロパティに `DBPSV` を指定し、かつ `dbc-longvarbinary` プロパティで `LOCATOR` を指定した場合にだけ、有効になります。

次の場合は、このプロパティの指定を省略できます。省略時は、`DABroker` の省略時の動作に依存します (Driver.connect メソッドに指定する ROW_SIZE の値)。

- 電文の実行履歴を管理しない場合
- ユーザ電文を採取しない場合
- 電文の実行履歴を管理し、かつデータ長が 16,384 キロバイト以下のユーザ電文を採取している場合
- 電文の実行履歴を管理し、かつデータ長が 16,384 キロバイトより大きいユーザ電文を採取している場合で、実行履歴情報を表示するときの電文データ長オプションで 1 ~ 65535 の値を指定しているとき。

`jdbc-longvarbinary={REAL | LOCATOR}` ~ <<REAL>>

HCSC サーバのオフライン時に、データベースに格納されている電文の実行履歴情報を表示するときに指定します。HCSC サーバセットアップ定義ファイルの `jdbc-type` プロパティに `DBPSV` または `HIRDB-TYPE4` を指定した場合にだけ、有効になります。

• REAL

次の場合に指定します。

`jdbc-type` プロパティに `DBPSV` を指定した場合

1. 電文の実行履歴を管理しない場合
2. ユーザ電文を採取しない場合
3. 電文の実行履歴を管理し、かつデータ長が 16,000 キロバイト以下のユーザ電文を採取している場合で、`dab-bufsize` プロパティで表示データ長や採取データ長より大きい値を指定したとき

`jdbc-type` プロパティに `HIRDB-TYPE4` を指定した場合

1. 電文の実行履歴を管理しない場合
2. ユーザ電文を採取しない場合
3. 電文の実行履歴を管理し、かつ `jdbc-maxbinarysize` プロパティで指定したデータ長以下のユーザ電文を採取している場合

• LOCATOR

次の場合に指定します。

jdbc-type プロパティに DBPSV を指定した場合

1. 上記 REAL の jdbc-type プロパティに DBPSV を指定した場合の項番 3 に該当しない場合
2. 電文の実行履歴を管理し、かつデータ長が 16,000 キロバイトより大きいユーザ電文を採取している場合で、さらに電文の実行履歴情報を表示するコマンドの電文データ長オプションで 0 (上限値なし) を指定しているとき

jdbc-type プロパティに HIRDB-TYPE4 を指定した場合

1. 電文の実行履歴を管理し、かつ jdbc-maxbinarysize プロパティで指定したデータ長より大きいユーザ電文を採取している場合
次に示すデータ長でデータを分割して、データを取得します。
jdbc-longvarbinary-access-size プロパティで指定した値 × 1024 (単位: バイト)

jdbc-longvarbinary-access-size=HIRDB に一度に要求するデータの長さ ~ <数字> ((0 - 2097151))

HCSC サーバのオフライン時、データベースに格納されている電文の実行履歴情報を表示する場合に、HiRDB に一度に要求するデータの長さをキロバイト単位で指定します。jdbc-type プロパティに HIRDB-TYPE4 を指定し、jdbc-longvarbinary プロパティに LOCATOR を指定した場合にだけ、有効になります。省略時は、HiRDB Type4 JDBC Driver の省略時の動作に依存します (DriverManager#getConnection メソッドに指定する HiRDB_for_Java_LONGVARBINARY_ACCESS_SIZE の値)。

指定するデータの長さは、データベースに格納されている電文の実行履歴情報で、表示するユーザ電文の長さに応じて指定します。ユーザ電文は、次に示すデータ長でデータを分割して取得できます。

jdbc-longvarbinary-access-size プロパティで指定した値 × 1024 (単位: バイト)

0 を指定した場合は、データ全体を一度に要求します。ただし、定義長とメモリの設定によってメモリ不足が発生するおそれがあるため、注意する必要があります。

jdbc-maxbinarysize= 取得するデータの最大長 ~ <数字> ((1 - 2147483647))<<64000>>

HCSC サーバのオフライン時、データベースに格納されている電文の実行履歴情報を表示する場合に、取得するデータの最大長をバイト単位で指定します。jdbc-type プロパティに HIRDB-TYPE4 を指定し、jdbc-longvarbinary プロパティに REAL を指定した場合にだけ、有効になります。

取得するデータの最大長は、電文の実行履歴で採取するユーザ電文の長さ (historyrecord-binarylength プロパティで指定) に応じて指定します。なお、取得対象のデータが jdbc-maxbinarysize プロパティで指定した値より大きい場合は、指定した値

9. 定義ファイル HCSC サーバランタイム定義ファイル

までのデータしか取得できません。

`jdbc-longvarbinary-truncerror={TRUE | FALSE}`

HCSC サーバのオフライン時、データベースに格納されている電文の実行履歴情報を表示する場合に、取得対象のデータが取得データの最大長を超えてしまい、すべてのデータを取得できないとき、エラーにするかどうかを指定できます。jdbctype プロパティに `HiRDB-TYPE4` を指定した場合にだけ、有効になります。省略時は、HiRDB Type4 JDBC Driver の省略時の動作に依存します (`DriverManager#getConnection` メソッドに指定する `HiRDB_for_Java_LONGVARBINARY_TRUNCERROR` の値)。

- TRUE
最大長を超えてしまい、すべてのデータを取得できないとき、エラーにします。
- FALSE
最大長を超えてしまい、すべてのデータを取得できないとき、エラーにしません。

(4) 標準受付関連

`request-ejb.instance.minimum` = 標準の同期受付 (`SessionBean`) インスタンス最小数
~ <数字> ((0, または 1 - `request-ejb.instance.maximum` プロパティでの設定値))<<`request-ejb.instance.maximum` プロパティでの設定値 >>

プール内の標準の同期受付 (`SessionBean`) のインスタンス最小数を指定します。HCSC サーバセットアップ定義ファイルの `request-ejb` プロパティで ON を指定している場合だけ有効になります。

`request-ejb.instance.maximum` = 標準の同期受付 (`SessionBean`) インスタンス最大数
~ <数字> ((1 - 1024))<<10>>

プール内の標準の同期受付 (`SessionBean`) のインスタンス最大数を指定します。HCSC サーバセットアップ定義ファイルの `request-ejb` プロパティで ON を指定している場合だけ有効になります。

CTM を使用している場合で CTM の同時実行数を動的に変更するときは、127 以上を指定してください。

`request-ejb.ctm`={true | false} ~ <<false>>

CTM 連携をするかどうかを指定します。HCSC サーバセットアップ定義ファイルの `request-ejb` プロパティで ON を指定している場合だけ有効になります。

- true
CTM 連携をします。
- false
CTM 連携をしません。

request-ejb.parallel.count=CTM がアプリケーションを呼び出すために用意するスレッド数 ~ <数字> ((1 - 127))<<1>>

CTM がアプリケーションを呼び出すために用意するスレッド数を指定します。

request-ejb.ctm プロパティで true を指定している場合だけ有効になります。なお、request-ejb.instance.maximum プロパティで指定した値以下の値を指定してください。

request-ejb.optional.name= 標準の同期受付 (SessionBean) の別名 ~ <英数字, アンダーライン (_), ピリオド (.), およびスラッシュ (/)> ((1 文字列長 255))

標準の同期受付 (SessionBean) の別名を指定します。このプロパティは、JavaVM のシステムプロパティで ejbserver.cui.optionalname.enabled が true に設定されている場合だけ有効になります。ejbserver.cui.optionalname.enabled については、マニュアル「Cosminexus リファレンス 定義編」を参照してください。なお、次の名前を指定した場合、リクエスト受付の起動に失敗します。

- 次の値と重複した名前 (起動状態のもの)
 - サービスアダプタのサービス ID
 - ビジネスプロセスのサービス ID
 - ユーザ定義受付の受付 ID
 - そのほか、J2EE アプリケーションの optional-name の指定値など
- "HITACHI_EJB" で始まる名前
- 名前の先頭または末尾に、スラッシュ (/) またはピリオド (.) を指定した名前
- スラッシュ (/) だけ、またはピリオド (.) だけの名前
- スラッシュ (/) が連続している名前
- スラッシュ (/) およびピリオド (.) が連続している名前

また、文字列の前後に空白または改行がある場合は、取り除かれて設定されます。文字列の途中で空白、改行がある場合はエラーになります。

request-soap.instance.minimum= 標準の同期受付 (Web サービス) 最小同時実行数 ~ <数字> ((0, または 1 - request-soap.instance.maximum プロパティでの設定値))<<request-soap.instance.maximum プロパティでの設定値>>

プール内の標準の同期受付 (Web サービス) の最小同時実行数を指定します。HCSC サーバセットアップ定義ファイルの request-soap プロパティで ON を指定している場合だけ有効になります。

request-soap.instance.maximum= 標準の同期受付 (Web サービス) 最大同時実行数 ~ <数字> ((1 - 1024))<<10>>

プール内の標準の同期受付 (Web サービス) の最大同時実行数を指定します。HCSC サーバセットアップ定義ファイルの request-soap プロパティで ON を指定している場合だけ有効になります。

9. 定義ファイル

HCSC サーバランタイム定義ファイル

request-soap.exclusive.threads= 標準の同期受付 (Web サービス) 占有スレッド数 ~
<数字> ((0 - 1024))<<0>>

プール内の標準の同期受付 (Web サービス) の占有スレッド数を指定します。最大同時実行数 (request-soap.instance.maximum) を超えない範囲で値を指定してください。0 を指定した場合、スレッドは占有されません。

なお、この指定値は WAR の属性 thread-control-exclusive-threads に設定されます。このため、Web コンテナ全体の最大同時実行スレッド数や最大接続数などの値を考慮して指定する必要があります。

request-soap.queue-size= 標準の同期受付 (Web サービス) 実行待ちキューのサイズ
~ <数字> ((0 - 2147483647))<<8192>>

プール内の標準の同期受付 (Web サービス) の実行待ちキューのサイズを指定します。

request-jms.instance.maximum= 標準の非同期受付 (MDB (WS-R)) インスタンス最大数 ~ <数字> ((1 - 1024))<<10>>

プール内の標準の非同期受付 (MDB (WS-R)) のインスタンス最大数を指定します。HCSC サーバセットアップ定義ファイルの request-jms プロパティで ON を指定している場合だけ有効になります。

receptionstop-monitor-timer= 受付終了タイムアウト時間 ~ <数字> ((0 - 600))<<0>>

標準受付、および HCSC サーバ転送用受付サービス停止処理のタイムアウト時間を秒単位で指定します。0 を指定した場合は、タイムアウトしません。

(5) サービスアダプタ関連

soapfault-targetnamespace-filepath=SOAP Fault 動作定義ファイルの絶対パス ~ <文字列>
>

SOAP Fault 動作定義ファイルを絶対パスで指定します。ディレクトリ区切りは「/」または「¥¥」を使用します。このプロパティは、Web サービスのサービスアダプタで、Web サービスからの SOAP Fault をすべてユーザ定義例外として扱う場合に指定します。

(6) データ変換関連

xmltelegram-maxcache-num=XML 電文をキャッシュできる数 ~ <数字> ((0 - 2147483647))<<0>>

XML 電文オブジェクトをキャッシュできる数を指定します。キャッシュされた XML 電文オブジェクトが再利用されることによって、同じ形式の XML 電文の処理時間を短縮できます。XML 電文が再利用されるためには、次に示す値以上の数を指定します。

(アダプタ・ビジネスプロセスのデータ変換設定数) + (ビジネスプロセスのパス操作設定数)

0 を指定した場合は、キャッシュされません。

なお、要素数の少ない XML 電文の場合、処理時間が遅くなることがあります。

telegram-validation={ON | OFF} ~ <<OFF>>

指定した電文フォーマットに対して、送受信する電文が適切かどうかを検証します (データ検証機能)。ON を指定した場合、HCSC サーバの処理性能に影響があるため、テスト環境やデバック環境で指定することをお勧めします。

- ON
検証します。
- OFF
検証しません。

データ検証機能については、マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 概説」を参照してください。

(7) 実行タイム監視

cscserver-connect-timeout= タイムアウト値 ~ <数字> ((0 - 86400))<<600>>

サーバ間連携の呼び出しを監視するためのタイムアウト値を秒単位で指定します。サービス実行監視タイムより大きな値を設定します。0 を指定した場合は、タイムアウトしません。

記述例

サンプルファイルを次に示します。

9. 定義ファイル

HCSC サーバランタイム定義ファイル

```
historyrecord=ON
historyrecord-data=ON
historyrecord-binarylength=FULL
methodtrace-filepath=c:¥¥TMP
requesttrace-filepath=c:¥¥TMP
methodtrace-filenum=8
requesttrace-filenum=4
methodtrace-filesize=2097152
requesttrace-filesize=2097152
methodtrace-level=3
requesttrace=ON
bptrace-level=10
bptrace-filenum=16
bptrace-filesize=2097152
dab-bufsize=64
jdbc-bufsize=16
jdbc-longvarbinary=REAL
jdbc-maxbinarysize=64000
jdbc-longvarbinary-truncerror=TRUE
request-ejb.instance.minimum=10
request-ejb.instance.maximum=10
request-ejb.ctm=false
request-ejb.parallel.count=1
request-soap.instance.minimum=10
request-soap.instance.maximum=10
request-jms.instance.maximum=10
receptionstop-monitor-timer=0
cscserver-connect-timeout=600
```

使用方法

cscsvconfig コマンドの `-propfile` オプションの引数に HCSC サーバランタイム定義ファイルを指定します。詳細については、「3.1.4 HCSC サーバの定義情報を設定する」を参照してください。

ユーザ定義受付ランタイム定義ファイル

形式

```
user-defined-reception-soap.threads.maximum=最大同時実行数  
user-defined-reception-soap.exclusive.threads=占有スレッド数  
user-defined-reception-soap.queue-size=実行待ちキューサイズ
```

機能

ユーザ定義受付の情報を設定します。

ファイルの格納先

```
<Cosminexusのインストールディレクトリ  
>%CSC%config%manager%templates%cscurcptnconfig.properties
```

設定できるパラメタ

user-defined-reception-soap.threads.maximum= 最大同時実行数 ~ <数字> ((1 - 1024))<<10>>

ユーザ定義受付の最大同時実行数を指定します。占有スレッド数以上の値を指定する必要があります。

user-defined-reception-soap.exclusive.threads= 占有スレッド数 ~ <数字> ((0 - 1024))<<0>>

ユーザ定義受付の占有スレッド数を指定します。最大実行数を超えない範囲で値を指定する必要があります。0を指定した場合、スレッドは占有されません。

なお、この指定値は WAR の属性 thread-control-exclusive-threads に設定されます。このため、Web コンテナ全体の最大同時実行スレッド数や最大接続数などの値を考慮して指定する必要があります。

user-defined-reception-soap.queue-size= 実行待ちキューサイズ ~ <数字> ((0 - 2147483647))<<8192>>

ユーザ定義受付の実行待ちキューのサイズを指定します。

使用方法

ユーザ定義受付ランタイム定義ファイルは、csccompoconfig コマンドの -propfile オプションの引数に指定します。詳細については、「3.1.12 ユーザ定義受付の定義情報を設定する」を参照してください。

HCSC-Manager 定義ファイル

形式

```
cscmng.repository.root=リポジトリのルートディレクトリパス  
cscmng.log.dir=ログ出力先ディレクトリパス  
cscmng.log.<チャンネル名>.filesize=ログファイルサイズ  
cscmng.log.<チャンネル名>.filenum=ログファイル面数  
  
cscmng.manager.<マネージャ識別名>.timeout=タイムアウト値  
  
cscmng.pireexec.response.dir=応答電文格納ディレクトリパス  
cscmng.pireexec.response.encoding=応答電文格納文字コード  
  
cscmng.server.<HCSCサーバ名>.system=論理サーバ名  
  
cscmng.repctl.export.dir=エクスポートファイルの出力先ディレクトリパス  
  
cscmng.envbackup.dir=環境バックアップの出力先ディレクトリパス  
cscmng.envbackup.dir.envrestore=リストア前の環境バックアップの出力先ディレクトリ  
パス  
cscmng.envbackup.dir.import=インポート前の環境バックアップの出力先ディレクトリパ  
ス  
cscmng.envbackup.autoget={ON | OFF}  
cscmng.envbackup.autoget.off={envrestore | import | envrestore,import}
```

機能

HCSC-Manager の動作に必要なとなる情報を設定します。

ファイルの格納先

```
<Cosminexusのインストールディレクトリ  
>¥CSC¥config¥manager¥cscmng.properties
```

設定できるパラメタ

(1) リポジトリ設定

```
cscmng.repository.root= リポジトリのルートディレクトリパス ~ <最大 100 バイトの  
文字列 ><<Cosminexus インストールディレクトリ >¥CSC¥repository>>
```

リポジトリのルートディレクトリを絶対パスで指定します。ディレクトリ区切りは「/」
または「¥¥」を使用します。相対パスを指定した場合、エラーになる場合があります。
存在しないディレクトリを指定した場合、および指定した文字列が 100 バイトを超える
場合はエラーになります。そのため、<Cosminexus インストールディレクトリ> が 84
バイトを超える場合は、このプロパティを明示的に指定してください。

(2) ログ設定

cscmng.log.dir= ログ出力先ディレクトリパス ~ <最大 100 バイトの文字列
><<Cosminexus インストールディレクトリ>¥CSC¥log¥manager>>

ログ出力先ディレクトリを絶対パスで指定します。ディレクトリ区切りは「/」または「¥¥」を使用します。相対パスを指定した場合、エラーになる場合があります。存在しないディレクトリを指定した場合、および指定した文字列が 100 バイトを超える場合はエラーになります。そのため、<Cosminexus インストールディレクトリ> が 84 バイトを超える場合は、このプロパティを明示的に指定してください。

cscmng.log.<チャンネル名>.filesize= ログファイルサイズ ~ <数字> ((4096 - 16777216))<<1048576>> チャンネルが maintenance の場合は <数字> ((4096 - 16777216))<<4194304>>

ログファイル一つ当たりの上限サイズをバイト単位で指定します。不正な値を指定した場合は、省略値が指定されます。チャンネル名には、次のどれか一つを指定します。

- message : メッセージログ
- exception : 例外ログ
- maintenance : メンテナンスログ

cscmng.log.<チャンネル名>.filenum= ログファイル面数 ~ <数字> ((1 - 16))<<2>>

ログファイル面数を指定します。不正な値を指定した場合は、省略値が指定されます。チャンネル名には、次のどれか一つを指定します。

- message : メッセージログ
- exception : 例外ログ
- maintenance : メンテナンスログ

(3) Cosminexus-manager 設定

cscmng.manager. <マネージャ識別名>.timeout= タイムアウト値 ~ <数字> ((0 - 86400))<<0>>

Cosminexus manager との接続の読み込みタイムアウトを秒単位で指定します。0 を指定した場合はタイムアウトしません。不正な値を指定した場合は、省略値が指定されません。マネージャ識別名は HCSC サーバ構成定義ファイルに指定した Cosminexus Manager 名を設定してください。

(4) プロセスインスタンス再実行設定

cscmng.pireexec.response.dir= 応答電文格納ディレクトリパス ((1 - 100 バイト))

プロセスインスタンス再実行で応答電文を受け取った場合の応答電文格納ディレクトリを絶対パスで指定します。ディレクトリ区切りは「/」または「¥¥」を使用します。相対パスを指定した場合、エラーになる場合があります。指定しない場合は、応答電文が格

納されません。存在しないパスを指定した場合、エラーになります。また、パスを含むファイル長が OS の MAX_PATH を超える場合はファイルを作成できません。

`cscmng.pireexec.response.encoding= 応答電文格納文字コード ~ <<UTF-8>>`

応答電文格納時の出力文字コードを、JavaVM がサポートしているエンコーディング名で指定します。存在しない文字コードを指定した場合、省略値が指定されます。

(5)HCSC サーバ運用設定

`cscmng.server.<HCSC サーバ名 >.system= 論理サーバ名`

HCSC システムの管理下におく論理サーバを指定します。管理下におくと、論理サーバの各種運用（HCSC サーバとの一括起動・停止、および状態の参照）ができるようになります。

論理サーバ名は、「論理サーバ名, 論理サーバ名, ...」のようにコンマ(,)区切りで指定します。コンマ前後の半角スペースやタブ文字は無視されます。論理サーバの起動停止順序は、Cosminexus Manager で設定した順序になります。HCSC サーバも同時に起動する場合は、J2EE サーバの起動順序になります。

(指定例)

HCSC サーバ (MyHCSC) 上に、論理パフォーマンスストレサ (MyPRF), および
論理 Web サーバ (MyWeb) を同時に起動停止する場合

`cscmng.server.MyCSC.system=MyPRF,MyWeb`

(6) リポジトリエクスポート

`cscmng.repctl.export.dir= エクスポートファイルの出力先ディレクトリパス ~ ((1 - 100 バイト))`

`cscrepctl` コマンドでリポジトリをエクスポートする場合、エクスポートファイルの出力先ディレクトリを指定します。

(7) 環境バックアップ

`cscmng.envbackup.dir= 環境バックアップの出力先ディレクトリパス ~ ((1 - 100 バイト))<<カレントディレクトリ>>`

`cscenvbackup` コマンドで環境をバックアップする場合、環境バックアップファイルの出力先ディレクトリを指定します。

`cscmng.envbackup.dir.envrestore= リストア前の環境バックアップの出力先ディレクトリパス ~ ((1 - 100 バイト))`

`cscenvrestore` コマンドで環境をリストアする場合、リストア前の環境バックアップファイルの出力先ディレクトリを指定します。このパラメタの指定は、`cscmng.envbackup.dir` パラメタの指定よりも優先されます。このパラメタを省略した場合、リストア前の環境バックアップファイルは、`cscmng.envbackup.dir` パラメタで指定

したディレクトリに出力されます。cscmng.envbackup.dir パラメタも省略した場合は、次のディレクトリに出力されます。

```
<Cosminexusインストールディレクトリ>¥CSC¥spool¥manager¥
```

cscmng.envbackup.dir.import= インポート前の環境バックアップの出力先ディレクトリパス ~ ((1 - 100 バイト))

cscrepctl コマンドで -import オプションを指定してリポジトリをインポートする場合、インポート前の環境バックアップファイルの出力先ディレクトリを指定します。このパラメタの指定は、cscmng.envbackup.dir パラメタの指定よりも優先されます。このパラメタを省略した場合、インポート前の環境バックアップファイルは、cscmng.envbackup.dir パラメタで指定したディレクトリに出力されます。cscmng.envbackup.dir パラメタも省略した場合は、次のディレクトリに出力されます。

```
<Cosminexusインストールディレクトリ>¥CSC¥spool¥manager
```

cscmng.envbackup.autoget={ON | OFF} ~ <<ON>>

自動でバックアップするかどうかを指定します。

- ON
自動でバックアップします。
- OFF
自動でバックアップしません。

cscmng.envbackup.autoget.off={envrestore | import | envrestore,import}

環境をリストアする際、またはリポジトリをインポートする際に、自動バックアップをしない場合に指定します。環境のリストア、およびリポジトリのインポートの両方で自動バックアップをしない場合は、envrestore と import をコンマ(,)区切りで指定します。コンマ前後のスペース文字は無視されます。

- envrestore
cscenvrestore コマンドを実行して環境をリストアした場合に、自動バックアップをしません。
- import
cscrepctl コマンドで -import オプションを指定してリポジトリをインポートした場合に、自動バックアップをしません。

(指定例)

- 環境をリストアする際に自動バックアップをしない場合
cscmng.envbackup.autoget.off=envrestore
- リポジトリをインポートする際に自動バックアップをしない場合
cscmng.envbackup.autoget.off=import

- 環境をリストアする際、およびリポジトリをインポートする際に自動バックアップをしない場合
`cscmng.envbackup.autoget.off=envrestore,import`

ポイント

`cscmng.envbackup.autoget` パラメタと `cscmng.envbackup.autoget.off` パラメタの指定の組み合わせによって、環境をリストアする際、またはリポジトリをインポートする際に、自動バックアップをするかどうか異なります。`cscmng.envbackup.autoget` パラメタと `cscmng.envbackup.autoget.off` パラメタの関係を次の表に示します。

表 9-2 `cscmng.envbackup.autoget` パラメタと `cscmng.envbackup.autoget.off` パラメタの関係

<code>cscmng.envbackup.autoget</code> パラメタの指定	<code>cscmng.envbackup.autoget.off</code> パラメタの指定	環境のリストア時	リポジトリのインポート時
なし	なし		
なし	<code>envrestore</code>	×	
なし	<code>import</code>		×
なし	<code>envrestore,import</code>	×	×
ON	なし		
ON	<code>envrestore</code>	×	
ON	<code>import</code>		×
ON	<code>envrestore,import</code>	×	×
OFF	なし	×	×
OFF	<code>envrestore</code>	×	×
OFF	<code>import</code>	×	×
OFF	<code>envrestore,import</code>	×	×

(凡例)

- : 自動バックアップをします。
- × : 自動バックアップをしません。

記述例

```
cscmng.repository.root=C:/Program Files/Hitachi/Cosminexus/CSC/  
repository  
  
cscmng.log.dir=C:/Program Files/Hitachi/Cosminexus/CSC/log/manager  
cscmng.log.message.filesize=1048576  
cscmng.log.message.filenum=2  
cscmng.log.exception.filesize=1048576  
cscmng.log.exception.filenum=2  
cscmng.log.maintenance.filesize=4194304  
cscmng.log.maintenance.filenum=2  
  
cscmng.manager.node1.timeout=180  
cscmng.manager.node2.timeout=180  
  
cscmng.pireexec.response.dir=C:/TMP  
cscmng.pireexec.response.encoding=UTF-8  
  
cscmng.server.MyCSC.system=MyPRF, MyWeb  
  
cscmng.repctl.export.dir=C:/TMP/autoexport  
  
cscmng.envbackup.dir=C:/TMP/enbackup  
cscmng.envbackup.dir.envrestore=C:/TMP/envrestore  
cscmng.envbackup.dir.import=C:/TMP/import  
cscmng.envbackup.autoget=ON  
cscmng.envbackup.autoget.off=envrestore
```

サービス情報変更定義ファイル

形式

次の (1) ~ (4) に示す情報が、キーの昇順でソートされて出力されます。

(1) Web サービス用サービスアダプタのサービス情報

```
<クラスタ名>.<サービスID>.WebService.url=サービス部品の呼び出しに使用するURL  
<クラスタ名>.<サービスID>.WebService.c4web.application.socket_read_timeout=  
読み込みタイムアウト値  
<クラスタ名>.<サービス  
ID>.WebService.c4web.application.socket_connect_timeout=接続タイムアウト値  
<クラスタ名>.<サービス  
ID>.WebService.c4web.application.socket_write_timeout=書き込みタイムアウト  
値
```

(2) SessionBean 用サービスアダプタのサービス情報

```
<クラスタ名>.<サービスID>.SessionBean.url=サービス部品の呼び出しに使用するURL  
<クラスタ名>.<サービスID>.SessionBean.lookup_Name=ルックアップ名  
<クラスタ名>.<サービスID>.SessionBean.c4web.application.ejb_j2ee_timeout=呼  
び出しタイムアウト値
```

(3) MDB (WS-R) 用サービスアダプタのサービス情報

```
<クラスタ名>.<サービスID>.MDB_WSR.queue_name=サービスアダプタがメッセージを送信す  
るキュー名  
<クラスタ名>.<サービスID>.MDB_WSR.local_call={true | false}  
<クラスタ名>.<サービスID>.MDB_WSR.url=転送先のキュー間転送用Webアプリケーションの  
URL  
<クラスタ名>.<サービスID>.MDB_WSR.max_message_num=転送キューが保持できるメッセ  
ージの最大数  
<クラスタ名>.<サービスID>.MDB_WSR.qos_in_order={true | false}  
<クラスタ名>.<サービスID>.MDB_WSR.rdarea_name=転送キュー作成先RDエリア名
```

(4) MDB (DB キュー) 用サービスアダプタのサービス情報

```
<クラスタ名>.<サービスID>.MDB_DBQ.queue_name=サービス部品に関連づけられている  
キュー名
```

機能

サービスアダプタのサービス情報の変更を設定します。

ファイルの格納先

cscsvctl コマンドの `-getfile` オプションに指定したパスに格納されます。

設定できるパラメタ

(1)Web サービス用サービスアダプタのサービス情報

< クラスタ名 >.< サービス ID >.WebService.url= サービス部品の呼び出しに使用する URL
サービス部品の呼び出しに使用する URL を指定します。

< クラスタ名 >.< サービス ID >.WebService.c4web.application.socket_read_timeout= 読み込みタイムアウト値

サービスアダプタのソケットの読み込みタイムアウト値（単位：秒）を指定します。指定する値については、マニュアル「Cosminexus SOAP アプリケーション開発ガイド」のクライアント定義ファイルの設定に関する内容の「c4web.application.socket_read_timeout」の説明を参照してください。

< クラスタ名 >.< サービス ID >.WebService.c4web.application.socket_connect_timeout= 接続タイムアウト値

サービスアダプタのソケットの接続タイムアウト値（単位：秒）を指定します。指定する値については、マニュアル「Cosminexus SOAP アプリケーション開発ガイド」のクライアント定義ファイルの設定に関する内容の「c4web.application.socket_connect_timeout」の説明を参照してください。

< クラスタ名 >.< サービス ID >.WebService.c4web.application.socket_write_timeout= 書き込みタイムアウト値

サービスアダプタのソケットの書き込みタイムアウト値（単位：秒）を指定します。指定する値については、マニュアル「Cosminexus SOAP アプリケーション開発ガイド」のクライアント定義ファイルの設定に関する内容の「c4web.application.socket_write_timeout」の説明を参照してください。

(2)SessionBean 用サービスアダプタのサービス情報

< クラスタ名 >.< サービス ID >.SessionBean.url= サービス部品の呼び出しに使用する URL

サービス部品の呼び出しに使用する URL を指定します。

< クラスタ名 >.< サービス ID >.SessionBean.lookup_Name= ルックアップ名

サービス部品の呼び出しに使用するルックアップ名を指定します。

9. 定義ファイル サービス情報変更定義ファイル

< クラスタ名 >.< サービス ID >.SessionBean.c4web.application.ejb_j2ee_timeout= 呼び出しタイムアウト値

サービス部品の呼び出しタイムアウト値（単位：秒）を指定します。指定する値については、マニュアル「Cosminexus SOAP アプリケーション開発ガイド」のクライアント定義ファイルの設定に関する内容の「c4web.application.ejb_j2ee_timeout」の説明を参照してください。

(3)MDB (WS-R) 用サービスアダプタのサービス情報

< クラスタ名 >.< サービス ID >.MDB_WSR.queue_name= サービスアダプタがメッセージを送信するキュー名

サービスアダプタがメッセージを送信するキュー名を指定します。

< クラスタ名 >.< サービス ID >.MDB_WSR.local_call={true | false}

サービスアダプタがローカルホスト、またはリモートホストのどちらのサービス部品に接続するかを指定します。

- true
ローカルホストのサービス部品に接続します。
- false
リモートホストのサービス部品に接続します。

サービス情報変更定義ファイルで設定するパラメタに、すべて正しい値を指定している場合だけ、local_call の値を true から false へ変更できます。なお、local_call の値は、false から true へ変更しないでください。

< クラスタ名 >.< サービス ID >.MDB_WSR.url= 転送先のキュー間転送用 Web アプリケーションの URL

サービスアダプタが使用する転送キューのメッセージ転送先を指定します。メッセージ転送先には、転送先のキュー間転送用 Web アプリケーションの URL を指定します。local_call パラメタが false の場合だけ有効になります。

< クラスタ名 >.< サービス ID >.MDB_WSR.max_message_num= 転送キューが保持できるメッセージの最大数 ~ < 数字 >((1 - 65535))

サービスアダプタが使用する転送キューが保持できるメッセージの最大数を指定します。local_call パラメタが false の場合だけ有効になります。

< クラスタ名 >.< サービス ID >.MDB_WSR.qos_in_order={true | false}

サービスアダプタが使用する転送キューがメッセージを正しい順序で転送することを保証するかどうかを指定します。local_call パラメタが false の場合だけ有効になります。

- true
保証します。

- false
保証しません。

<クラスタ名>.<サービス ID>.MDB_WSR.rdarea_name= 転送キュー作成先 RD エリア名 ~ <半角英数字, アンダーライン (_) および半角スペース () >((30 バイト以内))

サービスアダプタが使用する転送キューの作成先の RD エリア名を指定します。

local_call パラメタが false の場合だけ有効になります。なお, ALL は指定しないでください。

(4)MDB (DB キュー) 用サービスアダプタのサービス情報

<クラスタ名>.<サービス ID>.MDB_DBQ.queue_name= サービス部品に関連づけられているキュー名

サービス部品に関連づけられているキュー名を指定します。

使用方法

- cscsvctl コマンドの -getfile オプションにファイル名を指定してサービス情報変更定義ファイルを取得します。取得したファイルに変更内容を定義し, cscsvctl コマンドの -setfile オプションにファイル名を指定して設定します。
- 運用環境で変更していないサービス情報は, パラメタの先頭にコメントを表す「#」が付けられています。サービス情報を変更する場合, 該当するパラメタに付けられている「#」を削除してください。
- 運用環境での変更を無効にする場合 (開発環境の設定値を有効にする場合) は, パラメタの先頭にコメントを表す「#」を付けてください。

SOAP Fault 動作定義ファイル

形式

```
[ targetNamespaceのURI ]  
[ targetNamespaceのURI ]  
:
```

機能

targetNamespace の URI を設定します。targetNamespace の URI は、アダプタが Web サービスから SOAP Fault を受け取った場合に、Fault として扱うかどうかの判別をするために使用されます。設定された内容は HCSC サーバの起動後に有効となります。

指定方法

- targetNamespace の URI を改行で区切って指定します。アダプタの作成に使用する WDSL の targetNamespace の記述をそのまま指定してください。
- targetNamespace に使用できる文字は、ISO-8859-1 文字エンコーディングでの次に示す文字です。
 - 英数字
 - 感嘆符 (!)
 - ダブルクォーテーション (")
 - 番号記号 (#)
 - ドル記号 (\$)
 - パーセント (%)
 - アンパサンド (&)
 - アポストロフィ (')
 - 始め小括弧 (())
 - 終わり小括弧 ())
 - 正符号 (+)
 - コンマ (,)
 - ハイフン (-)
 - ピリオド (.)
 - スラッシュ (/)
 - コロン (:)
 - セミコロン (;)
 - 左アングルブラケット (<)
 - 右アングルブラケット (>)
 - 等号 (=)
 - クエスチョンマーク (?)

- 単価記号 (@)
 - 始め角括弧 ([)
 - 終わり角括弧 (])
 - 円マーク (¥)
 - アクサンシルコンフлекс (^)
 - アンダーライン (_)
 - アクサングラフ (˘)
 - 始め波括弧 ({)
 - 終わり波括弧 (})
 - パイプライン (|)
 - 波ダッシュ (~)
- 行頭に「#」を記述した場合はコメントと扱われます。
 - 空行は無視されます。また、行頭および行末の半角スペースとタブも無視されます。

不正な定義がある場合の動作

「指定方法」に示すルールに合わない定義がある場合（ただし、ISO-8859-1 文字エンコーディングの条件に合っていない場合は除く）は、HCSC サーバの起動に失敗します。

次の場合、サービス部品から SOAP Fault が返ってきたときに、正常に動作しないことがあるため注意してください。

- 誤った targetNamespace を指定した場合
- WSDL の targetNamespace として使用できない文字を指定した場合
- 指定した文字エンコーディング以外を使用した場合

注

アダプタの作成に使用する WSDL の targetNamespace の記述をそのまま記述してください。「http://www.hitachi.com/」と、「http://w%77w.hitachi.com/」は URI としては同義ですが、別の URI として認識されます。

記述例

```
http://dictionary.com
urn:sample.co.jp:xmlns:wSDL:2007-06
```


10 コマンド

この章では、Cosminexus サービスプラットフォームの運用環境および実行環境で使用するコマンドの文法について説明します。

コマンドの種類

コマンドの入力形式

コマンドの文法の記述形式

コマンドの種類

Cosminexus Service Platform で使用するコマンドには、2種類あります。それぞれのコマンドは、コマンドが格納されるディレクトリが異なります。

- csc で始まるコマンド
運用環境から実行するコマンドです。HCSC サーバの構築，基本運用，およびリポジトリやユーザの管理ができます。なお，一部のコマンドは，Management Server と通信して HCSC サーバを管理します。そのため，コマンドを強制停止しても処理は継続されることがあります。
- csm で始まるコマンド
実行環境から実行するコマンドです。実行環境の状況の確認，および電文の実行履歴の管理ができます。

Windows Vista 上で HCSC サーバを動作させる場合，管理者特権でコマンドを実行してください。

使用するデータベースが HiRDB で JDBC ドライバが HiRDB Type4 JDBC Driver の場合は，HCSC-Messaging コマンド共通定義ファイルに HiRDB Type4 JDBC Driver のパスを指定してください。

使用するデータベースが Oracle の場合は，HCSC-Messaging コマンド共通定義ファイルに Oracle Thin ドライバのパスを指定してください。

！ 注意事項

Cosminexus Service Platform で使用するコマンドは管理者権限のあるユーザで実行してください。なお，UNIX の場合の Cosminexus Service Coordinator の管理者の変更方法については，「付録 A Cosminexus Service Coordinator 管理者の変更方法」を参照してください。

コマンドの一覧

Cosminexus Service Platform で使用するコマンドの一覧を，次の表に示します。

表 10-1 Cosminexus Service Platform で使用するコマンドの一覧

環境	機能の分類		コマンド	説明	処理の分類
	大分類	小分類			
運用環境	管理系	ユーザ管理	cscpasswd	指定された条件に従ってユーザ情報を変更します。	A

環境	機能の分類		コマンド	説明	処理の分類	
	大分類	小分類				
	リポジトリ管理		cscreprls	リポジトリ情報を標準出力に出力します。	C	
			cscreprdiff	現在のリポジトリ情報とエクスポートしたリポジトリ情報の差分を標準出力に表示します。	C	
			cscreprctl	リポジトリ内の情報を ZIP 形式ファイルに出力したり, ZIP 形式で保存された情報をリポジトリに展開したりします。	A	
	サービス管理		cscsvcls	サービス情報を標準出力に出力します。また, cscsvctl コマンドの引数に指定する値を調べます。	C	
			cscsvctl	サービス情報変更定義ファイルを出力または入力します。また, アダプタに関するサービス情報を変更します。	A	
	環境管理		cscenvbackup	HCSC-Manager 環境の復元に必要なファイルをバックアップします。	C	
			cscenvrestore	HCSC-Manager 環境のバックアップファイルを利用して環境を復元します。	A	
	構築系	サーバ構築		cscsvsetup	HCSC サーバのセットアップをします。	A
				cscsvunsetup	HCSC サーバのアンセットアップをします。	A
				cscconsetup	HCSC サーバ間連携のセットアップをします。	A
				cscconunsetup	HCSC サーバ間連携のアンセットアップをします。	A
	HCSC コンポーネントの構築		csccompodeploy	HCSC コンポーネントを配備します。	A	
			csccompounddeploy	配備済みの HCSC コンポーネントを削除します。	A	
		サーバ定義設定, 取得	cscsvconfig (-set オプション)	HCSC サーバの定義情報を更新します。	B	

10. コマンド
コマンドの種類

環境	機能の分類		コマンド	説明	処理の分類	
	大分類	小分類				
			cscsvconfig (-get オプション)	HCSC サーバの定義情報を取得します。	C	
		HCSC コン ポーネ ント定 義設定, 取得		cscscompoconfig (-set オプション)	ユーザ定義受付の定義情報を更新します。	B
				cscscompoconfig (-get オプション)	ユーザ定義受付の定義情報を取得します。	C
	運用系	サーバ 運用		cscsvstart	HCSC サーバを起動します。	B
				cscsvstop	HCSC サーバを停止します。	B
	HCSC コン ポーネ ント運 用		cscscompostart	HCSC コンポーネントを開始します。	B	
			cscscompostop	HCSC コンポーネントを停止します。	B	
	標準受 付およ びユー ザ定義 受付の 運用		cscrcptnstart	標準受付およびユーザ定義受付を開始します。	B	
			cscrcptnstop	標準受付およびユーザ定義受付を停止します。	B	
	状態確 認		cscstatus	HCSC サーバ、標準受付、および HCSC コンポーネントの状態を表示します	C	
	稼働確 認		cscresinfo	HCSC サーバのリソースの稼働情報を表示します。	C	
	汎用		cscutil	次に示す操作をします。 <ul style="list-style-type: none"> • HCSC サーバの起動と停止 • HCSC コンポーネントの開始と停止 • 標準受付の開始と停止 • 連携受付の開始と停止 • HCSC サーバ間連携の開始と停止 • HCSC サーバセットアップ情報, HCSC サーバ情報, および HCSC サーバ間連携情報の取得 • HCSC コンポーネントの情報取得 	D	

環境	機能の分類		コマンド	説明	処理の分類
	大分類	小分類			
			cscpiselect	指定された条件に従ってビジネスプロセス情報を検索し CSV または TSV 形式で出力します。	C
			cscpidelete	指定された条件に従ってビジネスプロセスの実行履歴を削除します。	C
			cscpireexec	指定された条件に従って実行中のビジネスプロセスを再実行します。	C
			cscapputil	HCSC サーバが管理しているアプリケーションを操作します。	C
	ツール	バージョンアップ	cscenvupdate	指定した実行環境の HCSC サーバをバージョンアップします。	A
実行環境	実行履歴管理		csmdeletehistory	電文の実行履歴情報テーブル中のレコードを削除します。	C
	情報表示		csmlshistory	電文の実行履歴の情報を表示します。	C
			csmlslocation	配備したサービスアダプタまたはビジネスプロセスの情報を表示します。	C
			csmlsreception	配備したユーザ定義受付の情報を表示します。	C
			csmlsstate	HCSC サーバの状態および設定情報の一覧を表示します。	C

(凡例)

- A: リポジトリ更新コマンド (実行時にリポジトリが更新されるコマンド) です。
- B: サーバ更新コマンド (実行時に HCSC サーバの情報または状態が更新されるコマンド) です。
- C: 参照コマンド (実行時に情報を参照するだけのコマンド) です。HCSC サーバやリポジトリは更新されません。
- D: オプションによって、サーバ更新コマンドか参照コマンドかが異なります。

コマンドの同時実行について

コマンドを実行するとき、ほかの操作が実行中の場合、コマンドが実行できない場合があります。ほかの操作を実行中の場合にコマンドが実行できるかどうかを次の表に示します。

表 10-2 ほかの操作が実行中のコマンドの実行可否

実行するコマンド	現在実行中の操作，または現在の状態				
サーバ更新コマンド	リポジトリ更新コマンド実行中	サーバ更新コマンド実行中	参照コマンド実行中	画面へログインしている状態	画面からの操作中 (更新系)

10. コマンド コマンドの種類

実行するコマンド	現在実行中の操作，または現在の状態				
リポジトリ更新コマンド	x	x	x	x	x
サーバ更新コマンド	x	x			x
参照コマンド	x	x			x

(凡例)

：コマンドが実行できます。

x：コマンドは実行できません。

注

escutil コマンドには，サーバ更新コマンドの機能（HCSC サーバの起動，停止など）と，参照コマンドの機能（HCSC サーバ情報の取得など）があります。

ほかの操作が実行中の場合に escutil コマンドを実行するときは，実行する機能（オプションの指定）によって，実行の可否が異なります。

コマンドの入力形式

形式

コマンドの入力形式を次に示します。

コマンド名 [オプション...]

各項目について説明します。なお、コマンドプロンプトを「\$」、コマンド名を「cmd」と表記します。

コマンド名

実行するコマンドのファイル名を指定します。

空白を含むパスを指定してコマンドを実行する場合、パス全体を " " で囲む必要があります。

- 誤った指定例：\$ C:\Program Files\Hitachi\Cosminexus\CC\server\bin\cmd
- 正しい指定例：\$ "C:\Program Files\Hitachi\Cosminexus\CC\server\bin\cmd"

引数

引数には、オプションも含まれます。オプションの入力形式および指定規則を次に示します。

オプションの入力形式

オプションは、ハイフン (-) で始まる文字列です。オプションの入力形式には、オプション引数を指定しない形式と、1 個のオプション引数を指定する形式があります。

オプション引数を指定しない形式

\$ cmd - オプションフラグ

1 個のオプション引数を指定する形式

\$ cmd - オプションフラグ オプション引数

(凡例)

- オプションフラグ
1 文字の半角英数字です。大文字と小文字が区別されます。
- オプション引数
オプションフラグに対する引数です。

オプションの指定規則

- オプションフラグは、一つのハイフン (-) にまとめて指定できません。
誤った指定例：\$ cmd -abc
正しい指定例：\$ cmd -a -b -c

10. コマンド

コマンドの入力形式

- オプション引数を必要とするオプションフラグのオプション引数は、省略できません。
- オプションフラグとオプション引数の間には、スペースまたはタブが必要です。
誤った指定例：`$ cmd -afile`
正しい指定例：`$ cmd -a file`
- 同じオプションフラグは、複数指定できません。
誤った指定例：`$ cmd -a 1 -a 2`
- オプション引数に空白を含む場合、オプション引数全体を `"` で囲む必要があります。
誤った指定例：`$ cmd -a file 1`
正しい指定例：`$ cmd -a "file 1"`
- オプション引数に特殊文字（エスケープ文字）を含む場合、特殊文字を `"` で囲む必要があります。
誤った指定例：`$ cmd -a xyz;12`
正しい指定例：`$ cmd -a "xyz;12"`

オプションの優先順位

各コマンドのオプションの幾つかは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルに記述すると省略できます。HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルとコマンド引数の指定は、次のように異なります。

- HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルとコマンド引数の両方に指定がある場合
コマンド引数に指定した方が有効となります。
- HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルとコマンド引数の両方に記述がない場合
異常終了します。

また、オプションの指定順序はありません。例 1 と例 2 は、同一のコマンドとして扱われます。

例 1：`$ cmd -a file -b option`

例 2：`$ cmd -b option -a file`

HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルの詳細については、「9. 定義ファイル」の「HCSC-Manager コマンド共通定義ファイル」を参照してください。

コマンドの文法の記述形式

このマニュアルでは、コマンドの文法について次の形式で説明します。なお、各コマンドは、アルファベットの順に説明します。

形式

コマンドの入力形式を示します。

機能

コマンドの機能について説明します。

引数

コマンドの引数およびオプションについて説明します。

入力例

コマンドの入力例を示します。

表示形式

コマンドの出力形式を示します。

表示例

コマンドの表示例を示します。

戻り値

コマンドの戻り値について示します。

注意事項

コマンドを実行する上での全体的な注意事項について説明します。

注

すべてのコマンドで上記の項目をすべて説明しているわけではありません。また、上記以外に、各コマンドの固有情報を記載している場合があります。

cscapputil (アプリケーションの操作)

形式

```
cscapputil [-h]
            -user <ログインユーザID>
            -pass <ログインパスワード>
            { -mng <Cosminexus Manager名>
              | -host <IPアドレス>:<ポート番号>
                -mnguser <管理ユーザID> [-mngpass <管理ユーザパスワード>] }
            -operation { start | stop | delete }
            -j2ee <J2EEサーバ名> -app <アプリケーション名>
              | -operation list -j2ee <J2EEサーバ名>
```

機能

HCSC サーバが管理しているアプリケーションを操作します。

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~ <半角英数字およびアンダーライン (<_>) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~ <半角英数字およびアンダーライン (<_>) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-mng <Cosminexus Manager 名> ~ <半角英数字およびアンダーライン (<_>) > ((1 - 16 文字))

Management Server を識別するための名称 (Cosminexus Manager 名) を指定します。

-host <ホスト名または IP アドレス>:<ポート番号> ~ <ホスト名または IP アドレス : 文字列, ポート番号 : 数字> ((文字列 : 1 文字以上, ポート番号 : 1 - 65535))

Manager リモート管理機能のホスト名 (または IP アドレス) とポート番号を「:」で連結して指定します。IP アドレス、ポート番号ともに省略できません。

-mnguser <管理ユーザ ID> ~ ((1 文字以上))

Management Server の管理ユーザ ID を指定します。

-mngpass <管理ユーザパスワード> ~ ((1 文字以上))

Management Server の管理ユーザパスワードを指定します。パスワードがない場合は指定しません。

-operation { start | stop | delete }

指定したアプリケーションの操作を指定します。

- start
アプリケーションを開始します。
- stop
アプリケーションを停止します。
- delete
アプリケーションを削除します。
- list
アプリケーションを表示します。

-j2ee <J2EE サーバ名> ~ ((1 文字以上))

J2EE サーバの論理名を指定します。

-app <アプリケーション名> ~ ((1 文字以上))

アプリケーション名称を指定します。

-operation に list を指定した場合、このオプションは省略できます。指定した場合、値は無視されます。

入力例

(1)J2EE サーバ名称 MyServer 上にあるアプリケーション HCSCMessaging を開始する場合

```
cscapputil -user admin -pass admin -host localhost:28099  
-mnguser admin -j2ee MyServer -app HCSCMessaging -operation  
start
```

(2)J2EE サーバ名称 MyServer 上にあるアプリケーション HCSCMessaging を停止する場合

```
cscapputil -user admin -pass admin -host localhost:28099  
-mnguser admin -j2ee MyServer -app HCSCMessaging -operation stop
```

10. コマンド

cscapputil (アプリケーションの操作)

(3)J2EE サーバ名称 MyServer 上にあるアプリケーション HCSCMessaging を削除する場合

```
cscapputil -user admin -pass admin -host localhost:28099  
-mnguser admin -j2ee MyServer -app HCSCMessaging -operation  
delete
```

(4)J2EE サーバ上にあるアプリケーションを表示する場合

```
cscapputil -user admin -pass admin -host localhost:28099  
-mnguser admin -j2ee MyServer -operation list
```

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

このコマンドでアプリケーションを削除した場合、HCSC システムが正常に動作しなくなるおそれがあります。そのため、十分に注意して運用してください。

cscscompoconfig (HCSC コンポーネントの定義)

形式

```
cscscompoconfig [-h]
                 -user <ログインユーザID>
                 -pass <ログインパスワード>
                 {-operation get -csc <HCSCサーバ名>
                  | -operation set -propfile <ユーザ定義受付ランタイム定義ファイル>
                 }
                 {-csc <HCSCサーバ名> | -cluster <クラスタ名>}
                 -name <受付ID>
```

機能

ユーザ定義受付の定義情報の取得および変更をします。

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-operation {get | set}

このコマンドの動作を指定します。指定した値の大文字、小文字は区別されます。

- get
指定したユーザ定義受付に設定されている定義を標準出力に出力します。
- set
-propfile で指定したファイルの内容を指定したユーザ定義受付に反映します。

10. コマンド

cscocompoconfig (HCSC コンポーネントの定義)

-propfile <ユーザ定義受付ランタイム定義ファイル> ~ ((1 - 200 バイト))

ユーザ定義受付に定義する定義一覧を記載したファイル名を指定します。相対パス、または絶対パスで指定します。-operation に set を指定したときに有効になります。

-csc <HCSC サーバ名> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 8 文字))

HCSC サーバ名を指定します。

-cluster <クラスタ名> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 8 文字))<<-csc オプションで指定したサーバ名 >>

クラスタ名を指定します。-operation に set を指定したときに有効になります。また、クラスタ種別が HA のときに -cluster を指定するとエラーになります。

-name <受付 ID> ~ <英数字, アンダーライン (_) > ((1 - 8 文字))

ユーザ定義受付の受付 ID を指定します。

出力形式

-operation get を指定した場合の出力形式を示します。

```
user-defined-reception-soap.instance.maximum=20
user-defined-reception-soap.queue-size=1000
user-defined-reception-soap.exclusive.threads=2
```

入力例

(1) ユーザ定義受付の受付 ID URECP1 の定義を取得する場合

```
cscocompoconfig -user admin -pass admin -operation get -csc MyCSC
-name URECP1
```

(2) クラスタ名 MyUnit に配備されているすべてのユーザ定義受付の受付 ID URECP1 の定義を設定する場合

```
cscocompoconfig -user admin -pass admin -operation set -propfile
cscurcptnconfig.properties -cluster MyUnit -name URECP1
```

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
2	通信タイムアウトが発生しました。
3	排他エラーが発生しました。

戻り値	意味
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- このコマンドは、ユーザ定義受付を配備したあとに実行してください。配備する前のユーザ定義受付に対して実行した場合はエラーになります。
- デフォルト値から変更していない値は出力されません。
- ユーザ定義受付を削除したときに、そのユーザ定義受付に設定した値は無効になります。

csccompodeploy (HCSC コンポーネントの配備)

形式

```
csccompodeploy [-h]
                 -user <ログインユーザID>
                 -pass <ログインパスワード>
                 {-csc <HCSCサーバ名> | -cluster <クラスタ名>}
                 {-name <サービスID | 受付ID> | -all}
```

機能

セットアップ済みの HCSC サーバに、HCSC コンポーネントを配備します。

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-csc <HCSC サーバ名> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 8 文字))

HCSC コンポーネントを配備する HCSC サーバ名を指定します。

-cluster <クラスタ名> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 8 文字))

HCSC コンポーネントを一括配備するクラスタ名を指定します。なお、クラスタ種別が HA のときに -cluster を指定するとエラーになります。

-name <サービス ID | 受付 ID> ~ ((1 文字以上))

配備する HCSC コンポーネントのサービス ID または受付 ID を指定します。

-all

未配備の HCSC コンポーネントをすべて配備します。-csc と同時に指定した場合は、その HCSC サーバ内で未配備の HCSC コンポーネントをすべて配備します。-cluster と同時に指定した場合は、そのクラスタ内で未配備の HCSC コンポーネントをすべて配備します。

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
2	通信タイムアウトが発生しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

csccompostart (HCSC コンポーネントの開始)

形式

```
csccompostart [-h]
               -user <ログインユーザID>
               -pass <ログインパスワード>
               { -csc <HCSCサーバ名> | -cluster <クラスタ名> }
               { -name <サービスID | 受付ID> | -all }
```

機能

HCSC コンポーネントを開始します。

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-csc <HCSC サーバ名> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 8 文字))

開始する HCSC コンポーネントの HCSC サーバ名を指定します。

-cluster <クラスタ名> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 8 文字))

HCSC コンポーネントを一括開始するクラスタ名を指定します。クラスタ種別が HA のときに -cluster を指定するとエラーになります。

-name <サービス ID | 受付 ID> ~ ((1 文字以上))

開始する HCSC コンポーネントのサービス ID または受付 ID を指定します。-cluster と同時に指定した場合は、クラスタ内の同じサービス ID の HCSC コンポーネントをすべて開始します。

-all

指定範囲内で停止中の HCSC コンポーネントをすべて開始します。-csc と同時に指定した場合は、指定した HCSC サーバ内で停止中のすべての HCSC コンポーネントを開始します。-cluster と同時に指定した場合は、指定したクラスタ内で停止中のすべての HCSC コンポーネントを開始します。

入力例

(1)HCSC サーバ MyCSC 下にある BP1 を開始する場合

```
cscscompostart -user admin -pass admin -csc MyCSC -name BP1
```

(2)HCSC サーバ MyCSC 下にあるすべての HCSC コンポーネントを一括開始する場合

```
cscscompostart -user admin -pass admin -csc MyCSC -all
```

(3)MyUnit クラスタ下にある HCSC サーバごとに BP1 を一括開始する場合

```
cscscompostart -user admin -pass admin -cluster MyUnit -name BP1
```

(4)MyUnit クラスタ下にあるすべての HCSC コンポーネントを一括開始する場合

```
cscscompostart -user admin -pass admin -cluster MyUnit -all
```

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
2	通信タイムアウトが発生しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- このコマンドは停止状態の HCSC コンポーネントに対して実行してください。
- コマンド実行時に HCSC サーバは起動している必要があります。
- -cluster や -all を指定してエラーになった場合、結果を cscstatus コマンドで確認し、障害要因を取り除いたあとに、再度コマンドを実行してください。

csccompostop (HCSC コンポーネントの停止)

形式

```
csccompostop [-h]
               -user <ログインユーザID>
               -pass <ログインパスワード>
               {-csc <HCSCサーバ名> | -cluster <クラスタ名>}
               {-name <サービスID | 受付ID> | -all}
```

機能

HCSC コンポーネントを停止します。

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-csc <HCSC サーバ名> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 8 文字))

停止する HCSC コンポーネントの HCSC サーバ名を指定します。

-cluster <クラスタ名> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 8 文字))

HCSC コンポーネントを一括停止するクラスタ名を指定します。クラスタ種別が HA のときに -cluster を指定するとエラーになります。

-name <サービス ID | 受付 ID> ~ ((1 文字以上))

停止する HCSC コンポーネントのサービス ID または受付 ID を指定します。-cluster と同時に指定した場合は、クラスタ内の同じサービス ID の HCSC コンポーネントをすべて停止します。

-all

指定範囲内で開始中の HCSC コンポーネントをすべて停止します。-csc と同時に指定した場合は、その HCSC サーバ内で開始中のすべての HCSC コンポーネントを停止します。-cluster と同時に指定した場合は、そのクラスタ内で開始中のすべての HCSC コンポーネントを停止します。

入力例

(1)HCSC サーバ MyCSC 下にある BP1 を停止する場合

```
cscocompostop -user admin -pass admin -csc MyCSC -name BP1
```

(2)HCSC サーバ MyCSC 下にあるすべての HCSC コンポーネントを一括停止する場合

```
cscocompostop -user admin -pass admin -csc MyCSC -all
```

(3)MyUnit クラスタ下にある HCSC サーバごとに BP1 を一括停止する場合

```
cscrcptnstop -user admin -pass admin -cluster MyUnit -name BP1
```

(4)MyUnit クラスタ下にあるすべての HCSC コンポーネントを一括停止する場合

```
cscrcptnstop -user admin -pass admin -cluster MyUnit -all
```

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
2	通信タイムアウトが発生しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- このコマンドは開始状態の HCSC コンポーネントに対して実行してください。
- コマンド実行時に HCSC サーバは起動している必要があります。
- -cluster や -all を指定してエラーになった場合、結果を cscstatus コマンドで確認し、障害要因を取り除いたあとに、再度コマンドを実行してください。

csccompounddeploy (配備済みの HCSC コンポーネントの削除)

形式

```
csccompounddeploy [-h]
                  -user <ログインユーザID>
                  -pass <ログインパスワード>
                  { -csc <HCSCサーバ名> | -cluster <クラスタ名> }
                  { -name <サービスID | 受付ID> | -all }
                  [-force]
                  [-ignore]
```

機能

実行環境に配備した HCSC コンポーネントを削除します。

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-csc <HCSC サーバ名> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 8 文字))

実行環境から削除する HCSC コンポーネントが属している HCSC サーバ名を指定します。

-cluster <クラスタ名> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 8 文字))

HCSC コンポーネントを一括削除するクラスタ名を指定します。なお、クラスタ種別が HA のときに -cluster を指定するとエラーになります。

-name < サービス ID | 受付 ID > ~ ((1 文字以上))

実行環境から削除する HCSC コンポーネントのサービス ID または受付 ID を指定します。

-all

配備した HCSC コンポーネントをすべて削除します。-csc と同時に指定した場合は、その HCSC サーバ内に配備された HCSC コンポーネントをすべて削除します。-cluster と同時に指定した場合は、そのクラスタ内に配備された HCSC コンポーネントをすべて削除します。

-force

配備したサービスアダプタを強制削除します。このオプションは、サービスアダプタに対して有効です。ビジネスプロセスおよびユーザ定義受付に対してこのオプションを指定しても、削除されません。なお、削除するサービスアダプタが非同期 (MDB (WS-R)) の場合、転送キューにメッセージが残っていてもサービスアダプタを削除します。

-ignore

実行環境へ配備した HCSC コンポーネントの削除に失敗した場合にも、リポジトリの情報を更新する場合に指定します。ハードディスク障害やアンセットアップ時の通信障害による実行環境とリポジトリ環境の不整合を調整するために使用します。

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
2	通信タイムアウトが発生しました。
3	排他エラーが発生しました。
4	仕掛かっている電文があるため、アダプタの削除に失敗しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

cscconsetup (連携のセットアップ)

形式

```
cscconsetup [-h]
             -user <ログインユーザID>
             -pass <ログインパスワード>
             -csc <連携元HCSCサーバ名>
             -connect <連携先クラスタ名>
             -propfile <連携セットアップ定義ファイル名>
```

機能

HCSC サーバとクラスタ間の連携のセットアップをします。

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-csc <連携元 HCSC サーバ名> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 8 文字))

セットアップする連携元 HCSC サーバ名を指定します。

-connect <連携先クラスタ名> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 8 文字))

セットアップする連携先クラスタ名を指定します。HCSC サーバセットアップ時にクラスタ名を指定しない場合は、必ず HCSC サーバ名を指定してください。

-propfile <連携セットアップ定義ファイル名> ~ ((1 - 200 バイト))

連携セットアップ定義ファイル名を絶対パス、または相対パスで指定します。

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
2	通信タイムアウトが発生しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

cscconunsetup (連携のアンセットアップ)

形式

```
cscconunsetup [-h]
               -user <ログインユーザID>
               -pass <ログインパスワード>
               -csc <連携元HCSCサーバ名>
               -connect <連携先クラスタ名>
               [-ignore]
```

機能

HCSC サーバとクラスタ間の連携のアンセットアップをします。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-csc <連携元 HCSC サーバ名> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 8 文字))

アンセットアップする連携元 HCSC サーバ名を指定します。

-connect <連携先クラスタ名> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 8 文字))

アンセットアップする連携先クラスタ名を指定します。

-ignore

実行環境側の連携のアンセットアップに失敗した場合にも、リポジトリの情報を更新する場合に指定します。ハードディスク障害やアンセットアップ時の通信障害による実行環境とリポジトリ環境の不整合を調整するために使用します。

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
2	通信タイムアウトが発生しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

cscenvbackup (HCSC-Manager 環境のバックアップ)

形式

```
cscenvbackup [-h]
               -user <ログインユーザID>
               -pass <ログインパスワード>
               [-backupdir <バックアップファイル出力先ディレクトリ>]
```

機能

HCSC-Manager 環境で発生した障害の復旧やスケールアップなどの環境移行をするために、HCSC-Manager 環境の復元に必要なファイルをバックアップします。バックアップファイル名は、次の形式で付与されます。

```
cscmngBKaaabbbcccd_YYYYMMDDhhmmss.zip
```

cscmngBK :

HCSC-Manager 環境のバックアップファイルであることを示します。

aaabbbcccd :

コマンドを実行したマシンの IP アドレスを示します。

YYYYMMDDhhmmss :

バックアップした時間を示します。

YYYY : 西暦, MM : 月, DD : 日, hh : 時, mm : 分, ss : 秒

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~ <半角英数字およびアンダーライン (<_>) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~ <半角英数字およびアンダーライン (<_>) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-backupdir < バックアップファイル出力先ディレクトリ > ((1 - 100 バイト))

HCSC-Manager 環境のバックアップファイルの出力先ディレクトリを指定します。

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

cscrepdiff コマンドで現在のシステム構成情報との比較はできません。

cscenvrestore (HCSC-Manager 環境のリストア)

形式

```
cscenvrestore [-h]
               -user <ログインユーザID>
               -pass <ログインパスワード>
               -restorefile <HCSC-Manager動作環境のバックアップファイル名>
```

機能

次に示す HCSC-Manager 環境のバックアップファイルを利用して環境を復元します。

- リポジトリインポート成功時に自動的に取得したバックアップファイル
- cscenvbackup コマンドで取得したバックアップファイル

これら以外のファイルから環境を復元することはできません。

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-restorefile <HCSC-Manager 動作環境のバックアップファイル名> ~ ((1 - 200 バイト))

復元する HCSC-Manager 動作環境のバックアップファイル名を指定します。デフォルトはリポジトリインポート成功時に自動取得したバックアップファイルです。

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

HCSC サーバ環境に合った HCSC-Manager 環境のバックアップファイルで復元してください。

cscenvupdate (実行環境のバージョンアップ)

形式

```
cscenvupdate [-h]
              -csc <HCSCサーバ名>
              [-force]
```

機能

指定した実行環境の HCSC サーバをバージョンアップします。HCSC サーバ名は、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-csc <HCSC サーバ名> ~ <半角英数字およびアンダーライン (<_>) > ((1 - 8 文字))

バージョンアップする HCSC サーバ名を指定します。

-force

cscenvupdate コマンドを実行中ではないが、エラーとなる場合に、仕掛り中のバージョンアップを実行します。

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

cscpasswd (ユーザの管理)

形式

```
cscpasswd [-h]
           -user <ログインユーザID>
           -pass <ログインパスワード>
           {-print
            | -cscmnguser <変更後のユーザID>
            | -cscmngpass <変更後のパスワード>
            | -mng <Cosminexus Manager名>
            | -mnguser <変更後のユーザID>
            | [-mngpass <変更後のパスワード>]
            | -csc <HCSCサーバ名>
            | -cscuser <変更後のユーザID>
            | -cscpass <変更後のパスワード>}
```

機能

指定された条件に従ってユーザ情報を変更します。変更した情報は、コマンド正常終了後、次の画面でのログイン時、または次のコマンド起動時に反映されます。

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~ <半角英数字およびアンダーライン (<_>) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~ <半角英数字およびアンダーライン (<_>) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-print

HCSC-Manager が管理している HCSC-Manager のユーザ ID、Cosminexus Manager へアクセスするユーザ ID、および HCSC サーバが使用するデータベースへアクセスするユーザ ID を表示します。

10. コマンド

cscpasswd (ユーザの管理)

`-cscmnguser <変更後のユーザ ID> ~ <半角英数字およびアンダーライン (<_>) > ((1 - 16 文字))`

HCSC-Manager の変更後のユーザ ID を指定します。

`-cscmngpass <変更後のパスワード> ~ <半角英数字およびアンダーライン (<_>) > ((1 - 16 文字))`

変更後の HCSC-Manager のユーザ ID に対するパスワードを指定します。

`-mng <Cosminexus Manager 名> ~ <半角英数字およびアンダーライン (<_>) > ((1 - 16 文字))`

Cosminexus Manager セットアップ時に入力した Cosminexus Manager 名を指定します。Cosminexus Manager ヘログイン時のユーザ情報を変更する場合に指定します。HCSC サーバ構成定義ファイルで指定した Cosminexus Manager 名を指定してください。

`-mnguser <変更後のユーザ ID> ~ ((1 文字以上))`

変更後の Cosminexus Manager のユーザ ID を指定します。

`-mngpass <変更後のパスワード> ~ ((1 文字以上))`

変更後の Cosminexus Manager のユーザ ID に対するパスワードを指定します。変更する Cosminexus Manager のユーザ ID にパスワードを設定している場合にだけ、このオプションを指定します。

`-csc <HCSC サーバ名> ~ <半角英数字およびアンダーライン (<_>) > ((1 - 8 文字))`

HCSC サーバのセットアップ時に入力した HCSC サーバ名を指定します。HCSC サーバへログイン時のユーザ情報を変更する場合に指定します。

`-cscuser <変更するユーザ ID> ~ ((1 文字以上))`

HCSC サーバが使用するデータベースのユーザ ID を指定します。

`-cscpass <変更するパスワード> ~ ((1 文字以上))`

変更する HCSC サーバが使用するデータベースのユーザ ID に対するパスワードを指定します。

入力例

(1)HCSC-Manager のユーザ ID を user1 に、パスワードを password に変更する場合

```
cscpasswd -user admin -pass admin -cscmnguser user1 -cscmngpass password
```

(2)Cosmienxus Manager 名が MyMNG のユーザ ID を admin に、パスワードを admin に変更する場合

```
cscpasswd -user admin -pass admin -mng MyMNG -mnguser admin  
-mngpass admin
```

(3)HCSC サーバ名が MyCSC のユーザ ID を server1 に、パスワードを password に変更する場合

```
cscpasswd -user admin -pass admin -csc MyCSC -cscuser server1  
-cscpass password
```

(4)HCSC-Manager のユーザ情報を表示する場合

```
cscpasswd -user admin -pass admin -print
```

表示形式

(1) ユーザ情報 (-print 指定時)

```
HCSC-Manager:HCSC-ManagerのユーザID  
+ Cosminexus Manager名:Cosminexus Manager名に対応するユーザID  
  HCSCサーバ名:HCSCサーバ名に対応するユーザID  
  HCSCサーバ名:HCSCサーバ名に対応するユーザID  
  :  
+ Cosminexus Manager名:Cosminexus Manager名に対応するユーザID  
  HCSCサーバ名:HCSCサーバ名に対応するユーザID  
  :
```

注 データベースにユーザ ID を設定していない場合、HCSC サーバ名に対応するユーザ ID が表示されません。

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

HCSC-Manager のユーザ ID、パスワードを忘れた場合、次に示すコマンドを入力すると、HCSC-Manager のユーザを初期化できます。

```
cscpasswd -clean
```

初期化後は、ユーザ ID とパスワードに共に「admin」が仮定されます。初期化したあと

10. コマンド

cscpasswd (ユーザの管理)

は、必ずユーザ ID とパスワードを変更してください。

cscpidelete (プロセスインスタンスの実行履歴の削除)

形式

```
cscpidelete [-h]
            -user <ログインユーザID>
            -pass <ログインパスワード>
            -csc <HCSCサーバ名>
            { -where <where句>
              | -idlist <プロセスインスタンスの識別子のリストが
                  記載されたファイル名>
              | -wherefile <where句が記載されたファイル名>
              | -force }
            [-encoding <エンコーディング名>]
```

機能

セットアップ後の HCSC サーバに対して、指定された条件に従ってプロセスインスタンスの実行履歴を削除します。

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user < ログインユーザ ID > ~ < 半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass < ログインパスワード > ~ < 半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-csc < HCSC サーバ名 > ~ < 半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 8 文字))

SQL を実行する HCSC サーバ名を指定します。

-where < where 句 > ~ ((1 文字以上))

削除対象となるプロセスインスタンスのプロセス概要情報を検索するための where 句を指定します。where 句に記載できる内容については、使用しているデータベースの SQL

10. コマンド

cscpidelete (プロセスインスタンスの実行履歴の削除)

リファレンスマニュアルを参照してください。

なお、where 句には、テーブル名の指定およびコメント行の追加はできません。where 句の設定で、正しい例と誤った例を次に示します。

設定例 1：テーブル名を指定した場合

正しい例：State='Completed'
誤った例：P.State='Completed'

設定例 2：コメント行を追加した場合

正しい例：State='Completed' AND
ProcessDefinitionName like 'BP%'
誤った例：State='1' AND
process.ProcessDefinitionName like 'BP%'

-idlist < プロセスインスタンスの識別子のリストが記載されたファイル名 > ~ ((1 - 200 バイト))

プロセスインスタンスの識別子のリストが記載されたファイル名を指定します。プロセスインスタンスの識別子のリストは、改行区切り (「¥r¥n」または「¥n」) で記載します。ファイルパスは、絶対パス、または相対パスで指定します。一つの改行の先頭と終端の空白文字は削除します。設定例を次に示します。

設定例

ProcessID が「11111」、「44444」、「77777」のビジネスプロセスを削除する場合
(改行コードは「¥n」で表示しています)。

```
11111¥n
44444¥n
77777¥n
```

-wherefile <where 句が記載されたファイル名 > ~ ((1 - 200 バイト))

where 句が記載されたファイル名を絶対パス、または相対パスで指定します。指定されたファイル内容に改行コードをスペースに置き換えて、プロセス概要情報を検索し、該当するプロセスインスタンスの実行履歴を削除します。

-force

データベース内の全プロセスインスタンスの情報を削除します。

-encoding <エンコーディング名 > ~ ((1 文字以上)) <<JavaVM のデフォルトエンコーディング >>

wherefile オプションや idlist オプションで指定した入力ファイルのエンコーディング名を指定します。次のエンコーディング名を指定できます。

- UTF-8
- US-ASCII
- ISO-8859-1

- JavaVM がサポートしているエンコーディング名

入力例

(1) 全情報を削除する場合

```
cscpidelete -user admin -pass admin -csc MyCSC -force
```

(2) ステータスが「未実行」のプロセスをすべて削除する場合

```
cscpidelete -user admin -pass admin -where "State='Unexecution'"
```

(3) ProcessID が「11111」、「22222」、および「33333」のプロセスを削除する場合

- where 句が記載されたファイルで指定する場合

```
cscpidelete -user admin -pass admin -wherefile delete_where.txt
-csc MyCSC
```

delete_where.txtの中身

```
ProcessID='11111' OR ProcessID='22222' OR ProcessID='33333'
```

- プロセスインスタンスの識別子のリストを改行区切りで作成したファイルで指定する場合

```
cscpidelete -user admin -pass admin -idlist idlist.txt -csc MyCSC
```

idlist.txtの中身

```
11111
22222
33333
```

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
2	通信タイムアウトが発生しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- このコマンドは SQL の where 句をオプションに指定します。そのため、使用するユーザ ID およびパスワードを定期的に変更するなどして、第三者に不当にコマンドを実行されないようにしてください。
- 100 件以上のプロセスインスタンスを削除対象として指定し、101 件目以降の削除で

10. コマンド

cscpidelete (プロセスインスタンスの実行履歴の削除)

例外が発生した場合、削除対象となっていた前 100 件のプロセスインスタンスは削除済みの状態になります。その場合、前 100 件の削除済みの情報は、エラーメッセージの詳細情報として表示されます。

- データベースと Cosminexus RM を使用する場合だけ、このコマンドを使用できます。

cscpireexec (プロセスインスタンスの再実行)

形式

```
cscpireexec [-h]
             -user <ログインユーザID>
             -pass <ログインパスワード>
             -csc <HCSCサーバ名>
             { -processname <ビジネスプロセス定義名>
               | -processnamefile <ビジネスプロセス定義ファイル名> }
             [{ -processid <プロセスインスタンスの識別子>
               | -processidfile <プロセスインスタンスの識別子を記載した
                               ファイル名> }]
             [-encoding <エンコーディング名>]
```

機能

指定された条件に従って中断したプロセスインスタンスを再実行します。実行中の状態にあるプロセスインスタンスが対象になります。

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user < ログインユーザ ID > ~ < 半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass < ログインパスワード > ~ < 半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-csc < HCSC サーバ名 > ~ < 半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 8 文字))

再実行する HCSC サーバ名を指定します。

-processname < ビジネスプロセス定義名 > ~ < XML スキーマの NCName 型の文字列 > ((データベースの文字コードで 64 バイト以内))

実行するプロセスのビジネスプロセス定義名を指定します。

10. コマンド

cscpireexec (プロセスインスタンスの再実行)

`-processnamefile < ビジネスプロセス定義ファイル名 > ~ ((1 - 200 バイト))`

再実行するプロセスのビジネスプロセス定義ファイル名を絶対パス、または相対パスで指定します。ファイルはビジネスプロセス定義名だけを指定します。ビジネスプロセス定義ファイルの内容が読み込まれ、前後の空白、タブ、および改行が削除され再実行するプロセスインスタンスの識別子となります。

`-processid < プロセスインスタンスの識別子 > ~ ((1 - 240 バイト以内))`

再実行するプロセスのプロセスインスタンスの識別子を指定します。このオプションと `-processidfile` オプションを指定していない場合は、`-processname` オプション、または `-processnamefile` オプションで指定したビジネスプロセス定義名の中断したプロセスがすべて再実行されます。

プロセスインスタンスの識別子は長い文字列 (最大 240 文字) になる可能性があります。応答電文出力ディレクトリに深いディレクトリ階層を設定すると、ファイルを生成できない場合があるため注意してください。再実行しても、応答電文ファイルが生成されない場合はメッセージが出力されます。

`-processidfile < プロセスインスタンスの識別子を記載したファイル名 > ~ ((1 - 200 バイト))`

再実行するプロセスのプロセスインスタンスの識別子をファイルに記載し、ファイル名を絶対パス、または相対パスで指定します。プロセスインスタンスの識別子を記載したファイルにはプロセスインスタンスの識別子だけを指定します。コマンド実行時に、プロセスインスタンスの識別子を記載したファイルの内容が読み込まれ、前後の空白、タブ、および改行が削除され再実行するプロセスインスタンスの識別子となります。このオプションと `-processid` オプションを指定していない場合は、`-processname` オプション、または `-processnamefile` オプションで指定したビジネスプロセス定義名の実行中状態で中断したプロセスがすべて再実行されます。

`-encoding < エンコーディング名 > ~ <<JavaVM のデフォルトエンコーディング >> ((1 文字以上))`

`processidfile` オプションや `processnamefile` オプションで指定した入力ファイルのエンコーディング名を指定します。次のエンコーディング名を指定できます。

- UTF-8
- US-ASCII
- ISO-8859-1
- JavaVM がサポートしているエンコーディング名

入力例

(1) プロセスインスタンスの識別子が「11111」、ビジネスプロセス定義名が「PC 貸し出し」のプロセスインスタンスを再実行する場合

```
cscpireexec -user admin -pass admin -processidfile
process_id.txt -csc MyCSC -processnamefile processname.txt
```

process_id.txt の中身 : 11111

processname.txt の中身 : PC 貸し出し

(2) ビジネスプロセス定義名が「PC 貸し出し」のサービス部品を一括再実行する場合

```
cscpireexec -user admin -pass admin -csc MyCSC -processname "PC
貸し出し"
```

表示形式

```
ProcessID, ProcessDefinitionName, Result, ErrorMessage
PI識別子, ビジネスプロセス定義名, 呼び出し結果, エラー情報
PI識別子, ビジネスプロセス定義名, 呼び出し結果, エラー情報
:
```

説明

表示項目	内容	説明	備考
ProcessID	PI 識別子	プロセスインスタンスの識別子を示します。	CSCBP_< クラスタ名 >_PROCESS
ProcessDefinitionName	ビジネスプロセス定義名	ビジネスプロセス定義名を示します。	テーブルの 1 レコードの情報を示します。情報の詳細については、「付録 C.1(1)(a)」の「CSCBP_< クラスタ名 >_PROCESS
Result	呼び出し結果	呼び出し結果を示します。次のどちらかが表示されます。 Success : 呼び出しが正常終了 Failure : 呼び出しが失敗	テーブル」を参照してください。
ErrorMessage	エラー情報	エラー情報を示します。Result 欄 (呼び出し結果) の内容によって、次のように表示されます。 Success : 「 ” ” Failure : エラー情報	

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
2	通信タイムアウトが発生しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

10. コマンド

cscpireexec (プロセスインスタンスの再実行)

注意事項

データベースと Cosminexus RM を使用する場合だけ、このコマンドを使用できます。

cscpiselect (プロセスインスタンスの検索)

形式

```
cscpiselect [-h]
            -user <ログインユーザID>
            -pass <ログインパスワード>
            -csc <HCSCサーバ名>
            -table
                {process | activity | link | set | string | numeric | boolean
                 | message | relation | process_set}
            [-detail]
            [-separator {comma | tab}]
            [{-count | -orderby <ソート条件>}]
            [{-where <where句> | -wherefile <where句が記載されたファイル
名>}]
            [-encoding <エンコーディング名>]
```

機能

セットアップ後の HCSC サーバに対して、指定された条件に従ってビジネスプロセス情報を検索し、CSV または TSV 形式で出力します。

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-csc <HCSC サーバ名> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 8 文字))

SQL を実行する HCSC サーバ名を指定します。

-table {process | activity | link | set | string | numeric | boolean | message | relation | process_set}

検索するテーブルを指定します。

10. コマンド

cscpiselect (プロセスインスタンスの検索)

このオプションに `process_set` を指定した場合、内部でプロセス概要情報と関連セット情報を連結して検索します。そのため、検索条件にプロセス情報のカラムを指定する場合は、`where` 句に「P」を、関連セット情報のカラムを指定する場合は、「C」を付けてください。このオプションに `process_set` 以外を指定した場合は、`where` 句にテーブル名の指定は不要です。`where` 句に記載できる内容については、使用しているデータベースのSQLリファレンスマニュアルを参照してください。

- `process`

指定した検索条件に該当するプロセスの概要情報を表示します。

なお、`where` 句には、テーブル名の指定およびコメント行の追加はできません。

`where` 句の設定で、正しい例と誤った例を次に示します。

設定例 1：テーブル名を指定した場合

正しい例：`Status='Completed'`

誤った例：`P.Status='Completed'`

設定例 2：コメント行を追加した場合

誤った例：`Status='Completed' AND
ProcessDefinitionName like 'BP%'`

- `activity`

検索条件に該当するアクティビティ情報を表示します。

- `link`

検索条件に該当するリンク情報を表示します。

- `set`

検索条件に該当する関連セット情報を表示します。

- `string`

検索条件に該当する `string` 変数情報を表示します。

- `numeric`

検索条件に該当する `numeric` 変数情報を表示します。

- `boolean`

検索条件に該当する `boolean` 変数情報を表示します。

- `message`

検索条件に該当する `message` 変数情報を表示します。

- `relation`

検索条件に該当するメッセージ関連情報を表示します。

- `process_set`

検索条件に該当するプロセス概要情報を関連セット情報から検索し表示します。なお、`where` 句には、テーブル名を指定してください。`where` 句の設定で、正しい例と誤った例を次に示します。

設定例：テーブル名を指定しなかった場合

正しい例：`P.State='Completed'`

正しい例：`P.State='Completed' AND
C.ProcessDefinitionName like 'BP%'`

誤った例 : State='Completed'

-detail

テーブルの全情報を出力する場合に指定します。

-separator {comma | tab} ~ <<comma>>

情報を区切るセパレータを指定します。

-count

検索結果の行数だけが出力されます。このオプションは、検索結果のデータが大量にある場合に、検索件数だけを知るときに使用します (SQL 文の count(*) に相当します)。

-orderby <ソート条件> ~ ((1 文字以上))

データをソートする条件を指定します。SQL 文の order by 句に相当します。-count オプションと同時に指定できません。order by 句に記載できる内容については、使用しているデータベースの SQL リファレンスマニュアルを参照してください。-orderby オプションを指定しない場合は、order by 句の指定がないと仮定されます。

-where <where 句> ~ ((1 文字以上))

where 句を指定します。where 句に記載できる内容については、使用しているデータベースの SQL リファレンスマニュアルを参照してください。-where オプションおよび -wherefile オプションを指定しない場合は、where 句の指定がないと仮定されます。

-wherefile <where 句が記載されたファイル名> ~ ((1 - 200 バイト))

where 句が記載されたファイル名を絶対パス、または相対パスで指定します。指定されたファイルの内容に改行コードをスペースに置き換えて、SQL が実行されます。記載できる内容については、使用しているデータベースの SQL リファレンスマニュアルを参照してください。-where オプションおよび -wherefile オプションを指定しない場合は、where 句の指定がないと仮定されます。

-encoding <エンコーディング名> ~ <<JavaVM のデフォルトエンコーディング>> ((1 文字以上))

-wherefile オプションで指定した入力ファイルのエンコーディング名を指定します。次のエンコーディング名を指定できます。

- UTF-8
- US-ASCII
- ISO-8859-1
- JavaVM がサポートしているエンコーディング名

10. コマンド

cscpiselect (プロセスインスタンスの検索)

入力例

(1) プロセスの概要情報の全情報を出力する場合

```
cscpiselect -user admin -pass admin -csc MyCSC -table process
```

(2) 相関セット定義名が rentalNumber で、相関セット値が 100 であるプロセスの概要情報の全情報を出力する場合

```
cscpiselect -user admin -pass admin -wherefile sql_where.txt  
-csc MyCSC -table process_set
```

sql_where.txtの内容

```
C.CorrelationSetName = 'rentalNumber' AND C.CorrelationSetValue  
= '100'
```

(3) アクティビティ情報からビジネスプロセス定義名が「BP」で始まる文字列の行数を表示する場合

```
cscpiselect -user admin -pass admin -count -wherefile  
sql_where.txt -csc MyCSC -table activity
```

sql_where.txtの内容

```
ProcessDefinitionName like 'BP%'
```

(4) リンク情報を全件検索する場合

```
cscpiselect -user admin -pass admin -csc MyCSC -table link
```

(5) 相関セット情報を全件検索する場合

```
cscpiselect -user admin -pass admin -csc MyCSC -table set
```

(6) String 変数情報を ProcessID = '11111' である条件で検索する場合

```
cscpiselect -user admin -pass admin -wherefile sql_where.txt  
-csc MyCSC -table string
```

sql_where.txtの内容

```
ProcessID = '11111'
```

(7) numeric 変数情報を ProcessID = '11111' , かつ、ビジネスプロセス定義名が「BP」で始まる条件で検索する場合

```
cscpiselect -user admin -pass admin -wherefile sql_where.txt  
-csc MyCSC -table numeric
```

sql_where.txtの内容

```
ProcessID = '11111' AND ProcessDefinitionName like 'BP%'
```

(8)boolean 変数情報を ProcessID = '11111' , かつ定義値が 0 である条件で検索する場合

```
cscpiselect -user admin -pass admin -where "ProcessID = '11111'  
AND VariableValue = 0" -csc MyCSC -table boolean
```

(9)message 変数情報を ProcessID = '11111' , かつ変数定義名に ABC が含まれる条件で検索し , 検索結果を ProcessID の降順で並べる場合

```
cscpiselect -user admin -pass admin -wherefile sql_where.txt  
-orderby "ProcessID DESC"-csc MyCSC -table message
```

sql_where.txtの内容

```
ProcessID = '11111' AND VariableName like '%ABC%'
```

表示形式

(1) プロセス概要情報 (process 指定時 , process_set 指定時)

- -detail 未指定時

```
ProcessID, ProcessDefinitionName, ProcessDefinitionVersion, State, StartTime, EndTime  
PI識別子, ビジネスプロセス定義名, ビジネスプロセス定義バージョン, PI状態, PI開始時刻, PI終了時刻  
PI識別子, ビジネスプロセス定義名, ビジネスプロセス定義バージョン, PI状態, PI開始時刻, PI終了時刻  
:
```

注 ProcessID (PI 識別子) から EndTime (PI 終了時刻) までは改行されないで表示されます。

- -detail 指定時

```
ProcessID, ProcessDefinitionName, ProcessDefinitionVersion, State, StartTime, EndTime, ChangeCount  
PI識別子, ビジネスプロセス定義名, ビジネスプロセス定義バージョン, PI状態, PI開始時刻, PI終了時刻, 更新回数  
PI識別子, ビジネスプロセス定義名, ビジネスプロセス定義バージョン, PI状態, PI開始時刻, PI終了時刻, 更新回数  
:
```

注 ProcessID (PI 識別子) から ChangeCount (更新回数) までは改行されないで表示されます。

10. コマンド

cscpiselect (プロセスインスタンスの検索)

説明

表示項目	内容	説明	備考
ProcessID	PI 識別子	プロセスインスタンスの識別子を示します。	CSCBP_<クラスタ名>_PROCESS テーブルの 1 レコードの情報を示します。情報の詳細については、「付録 C.1(1)(a)」の「CSCBP_<クラスタ名>_PROCESS テーブル」を参照してください。
ProcessDefinitionName	ビジネスプロセス定義名	ビジネスプロセス定義名を示します。	
ProcessDefinitionVersion	ビジネスプロセス定義バージョン	ビジネスプロセス定義バージョンを示します。	
State	PI 状態	プロセスインスタンスの状態を示します。	
StartTime	PI 開始時刻	プロセスインスタンスの開始時刻 (GMT) を示します。 java.text.SimpleDateFormat で定義されているフォーマットに、YYYY/MM/DD hh:mm:ss の形式で出力されます。 <ul style="list-style-type: none"> • YYYY : 西暦 • MM : 月 • DD : 日 • hh : 時 • mm : 分 • ss : 秒 	
EndTime	PI 終了時刻	プロセスインスタンスの終了時刻 (GMT) を示します。 ava.text.SimpleDateFormat で定義されているフォーマットに、YYYY/MM/DD hh:mm:ss の形式で出力されます。 <ul style="list-style-type: none"> • YYYY : 西暦 • MM : 月 • DD : 日 • hh : 時 • mm : 分 • ss : 秒 	
ChangeCount	更新回数	データの更新回数を示します。	

(2) アクティビティ情報 (activity 指定時)

- -detail 未指定時

```
ProcessID,ActivityNumber,ActivityDefinitionName,ActivityKind,State,StartTime,EndTime
PI識別子,ACI識別子,AC定義名,AC種別,ACI状態,AC開始時刻,AC終了時刻
PI識別子,ACI識別子,AC定義名,AC種別,ACI状態,AC開始時刻,AC終了時刻
:
```

注 ProcessID (PI 識別子) から EndTime (AC 終了時刻) までは改行されないで表示されます。

- -detail 指定時

```
ProcessID,ActivityNumber,ProcessDefinitionName,
ProcessDefinitionVersion,ActivityDefinitionName,ActivityKind,
ParentNumber,ScopeNumber,RepeatNumber,State,
FirstChildNumber,LastChildNumber,StartTime,EndTime
PI識別子,ACI識別子,ビジネスプロセス定義名,
ビジネスプロセス定義バージョン,AC定義名,AC種別
親ACI識別番号,所属SCI識別番号,所属RP識別番号,ACI状態,
先頭の子ACI識別番号,最後の子ACI識別番号,AC開始時刻,AC終了時刻
:
```

注 ProcessID (PI 識別子) から EndTime (AC 終了時刻) までは改行されないで表示されます。

説明

表示項目	内容	説明	備考
ProcessID	PI 識別子	プロセスインスタンスの識別子を示します。	CSCBP_< クラスタ名 >_ACTIVITY テーブルの 1 レコードの情報を見ます。情報の詳細については、「付録 C.1(1)(a)」の「CSCBP_< クラスタ名 >_ACTIVITY テーブル」を参照してください。
ActivityNumber	ACI 識別子	アクティビティインスタンスの識別番号を見ます。プロセスインスタンス内で一意の値です。	
ProcessDefinitionName	ビジネスプロセス定義名	ビジネスプロセス定義名を見ます。	
ProcessDefinitionVersion	ビジネスプロセス定義バージョン	ビジネスプロセス定義バージョンを見ます。	
ActivityDefinitionName	AC 定義名	アクティビティ定義名を見ます。	
ActivityKind	AC 種別	アクティビティ種別を見ます。	
ParentNumber	親 ACI 識別番号	親アクティビティインスタンスの識別番号を見ます。	
ScopeNumber	所属 SCI 識別番号	所属するスコープインスタンスの識別番号を見ます。	
RepeatNumber	所属 RP 識別番号	所属する繰り返し処理の識別番号を見ます。	
State	ACI 状態	アクティビティインスタンスの状態を見ます。	
FirstChildNumber	先頭の子 ACI 識別番号	先頭の子アクティビティインスタンスの識別番号を見ます。	
LastChildNumber	最後の子 ACI 識別番号	最後の子アクティビティインスタンスの識別番号を見ます。	

10. コマンド

cscpiselect (プロセスインスタンスの検索)

表示項目	内容	説明	備考
StartTime	AC 開始時刻	アクティビティの開始時刻 (GMT) を示します。 java.text.SimpleDateFormat で定義されているフォーマットに, YYYY/MM/DD hh:mm:ss の形式で出力されます。 • YYYY : 西暦 • MM : 月 • DD : 日 • hh : 時 • mm : 分 • ss : 秒	
EndTime	AC 終了時刻	アクティビティの終了時刻 (GMT) を示します。 java.text.SimpleDateFormat で定義されているフォーマットに, YYYY/MM/DD hh:mm:ss の形式で出力されます。 • YYYY : 西暦 • MM : 月 • DD : 日 • hh : 時 • mm : 分 • ss : 秒	

(3) リンク情報 (link 指定時)

- -detail 未指定時

```
ProcessID, LinkDefinitionName, State
PI識別子, リンク定義名, リンク状態
PI識別子, リンク定義名, リンク状態
:
```

- -detail 指定時

```
ProcessID, ProcessDefinitionName, ProcessDefinitionVersion,
LinkDefinitionName, RepeatNumber, State
PI識別子, ビジネスプロセス定義名, ビジネスプロセス定義バージョン,
リンク定義名, 所属RP識別番号, リンク状態
:
```

注 ProcessID (PI 識別子) から State (リンク状態) までは改行されないで表示されます。

説明

表示項目	内容	説明	備考
ProcessID	PI 識別子	プロセスインスタンスの識別子を示します。	CSCBP_< クラスタ名 >_LINK テーブルの 1 レコードの情報を示します。情報の詳細については、「付録 C.1(1)(a)」の「CSCBP_< クラスタ名 >_LINK テーブル」を参照してください。
ProcessDefinitionName	ビジネスプロセス定義名	ビジネスプロセス定義名を示します。	
ProcessDefinitionVersion	ビジネスプロセス定義バージョン	ビジネスプロセス定義バージョンを示します。	
LinkDefinitionName	リンク定義名	リンク定義名を示します。	
RepeatNumber	所属 RP 識別番号	所属する繰り返し処理の識別番号を示します。	
State	リンク状態	リンクの状態 (真偽値) を示します。	

(4) 関連セット情報 (set 指定時)

- -detail 未指定時

```
ProcessID, CorrelationSetName, CorrelationSetValue
PI識別子, 関連セット定義名, 関連セット値
PI識別子, 関連セット定義名, 関連セット値
:
```

- -detail 指定時

```
ProcessID, ProcessDefinitionName, ProcessDefinitionVersion, ScopeDefinitionName,
ScopeNumber, CorrelationSetName, CorrelationSetValue, State
PI識別子, ビジネスプロセス定義名, ビジネスプロセス定義バージョン, SC定義名,
SCI識別番号, 関連セット定義名, 関連セット値, 関連セット有効性
PI識別子, ビジネスプロセス定義名, ビジネスプロセス定義バージョン, SC定義名,
SCI識別番号, 関連セット定義名, 関連セット値, 関連セット有効性
:
```

注 ProcessID (PI 識別子) から State (関連セット有効性) までは改行されないで表示されます。

10. コマンド

cscpiselect (プロセスインスタンスの検索)

説明

表示項目	内容	説明	備考
ProcessID	PI 識別子	プロセスインスタンスの識別子を示します。	CSCBP_< クラスタ名 >_CORRELATIONSET テーブルの 1 レコードの情報を示します。情報の詳細については、「付録 C.1(1)(a)」の「CSCBP_< クラスタ名 >_CORRELATIONSET テーブル」を参照してください。
ProcessDefinitionName	ビジネスプロセス定義名	ビジネスプロセス定義名を示します。	
ProcessDefinitionVersion	ビジネスプロセス定義バージョン	ビジネスプロセス定義バージョンを示します。	
ScopeDefinitionName	SC 定義名	スコープ定義名を示します。	
ScopeNumber	SCI 識別番号	スコープインスタンスの識別番号を示します。	
CorrelationSetName	相関セット定義名	相関セット定義名を示します。	
CorrelationSetValue	相関セット値	相関セット値を示します。文字列化および連結され格納されます。	
State	相関セット有効性	相関セットの有効性 (真偽値) を示します。	

(5)string 変数情報 (string 指定時)

- -detail 未指定時

```
ProcessID,VariableName,VariableValue
PI識別子,変数定義名,変数値
PI識別子,変数定義名,変数値
:
```

- -detail 指定時

```
ProcessID,ProcessDefinitionName,ProcessDefinitionVersion,
ScopeDefinitionName,ScopeNumber,VariableName,VariableValue
PI識別子,ビジネスプロセス定義名,ビジネスプロセス定義バージョン,
SC定義名,SCI識別番号,変数定義名,変数値
PI識別子,ビジネスプロセス定義名,ビジネスプロセス定義バージョン,
SC定義名,SCI識別番号,変数定義名,変数値
:
```

注 ProcessID (PI 識別子) から VariableValue (変数値) までは改行されないで表示されます。

説明

表示項目	内容	説明	備考
ProcessID	PI 識別子	プロセスインスタンスの識別子を示します。	CSCBP_< クラスタ名 >_STRING_VARIABLE テーブルの 1 レコードの情報 情報を示します。 情報の詳細については、「付録 C.1(1)(b)」の「CSCBP_< クラスタ名 >_STR_VARIABLE テーブル」を参照してください。
ProcessDefinitionName	ビジネスプロセス定義名	ビジネスプロセス定義名を示します。	
ProcessDefinitionVersion	ビジネスプロセス定義バージョン	ビジネスプロセス定義バージョンを示します。	
ScopeDefinitionName	SC 定義名	スコープ定義名を示します。	
ScopeNumber	SCI 識別番号	スコープインスタンスの識別番号を示します。	
VariableName	変数定義名	変数定義名を示します。	
VariableValue	変数値	変数値を示します。	

(6)numeric 変数情報 (numeric 指定時)

- -detail 未指定時

```
ProcessID,VariableName,VariableValue
PI識別子,変数定義名,変数値
PI識別子,変数定義名,変数値
:
```

- -detail 指定時

```
ProcessID,ProcessDefinitionName,ProcessDefinitionVersion,
ScopeDefinitionName,ScopeNumber,VariableName,VariableValue
PI識別子,ビジネスプロセス定義名,ビジネスプロセス定義バージョン,
SC定義名,SCI識別番号,変数定義名,変数値
PI識別子,ビジネスプロセス定義名,ビジネスプロセス定義バージョン,
SC定義名,SCI識別番号,変数定義名,変数値
:
```

注 ProcessID (PI 識別子) から VariableValue (変数値) までは改行されないで表示されます。

10. コマンド

cscpiselect (プロセスインスタンスの検索)

説明

表示項目	内容	説明	備考
ProcessID	PI 識別子	プロセスインスタンスの識別子を示します。	CSCBP_<クラスタ名>_NUMERIC_VARIABLE テーブルの1レコードの情報を示します。情報の詳細については、「付録 C.1(1)(b)」の「CSCBP_<クラスタ名>_NUM_VARIABLE テーブル」を参照してください。
ProcessDefinitionName	ビジネスプロセス定義名	ビジネスプロセス定義名を示します。	
ProcessDefinitionVersion	ビジネスプロセス定義バージョン	ビジネスプロセス定義バージョンを示します。	
ScopeDefinitionName	SC 定義名	スコープ定義名を示します。	
ScopeNumber	SCI 識別番号	スコープインスタンスの識別番号を示します。	
VariableName	変数定義名	変数定義名を示します。	
VariableValue	変数値	変数値を示します。	

(7)boolean 変数情報 (boolean 指定時)

- -detail 未指定時

```
ProcessID, VariableName, VariableValue
PI識別子, 変数定義名, 変数値
PI識別子, 変数定義名, 変数値
:
```

- -detail 指定時

```
ProcessID, ProcessDefinitionName, ProcessDefinitionVersion,
ScopeDefinitionName, ScopeNumber, VariableName, VariableValue
PI識別子, ビジネスプロセス定義名, ビジネスプロセス定義バージョン,
SC定義名, SCI識別番号, 変数定義名, 変数値
PI識別子, ビジネスプロセス定義名, ビジネスプロセス定義バージョン,
SC定義名, SCI識別番号, 変数定義名, 変数値
:
```

注 ProcessID (PI 識別子) から VariableValue (変数値) までは改行されないで表示されます。

説明

表示項目	内容	説明	備考
ProcessID	PI 識別子	プロセスインスタンスの識別子を示します。	CSCBP_<クラスタ名>_BOOLEAN_VARIABLE テーブルの 1レコードの情報を示します。情報の詳細については、「付録 C.1(1)(b)」の「CSCBP_<クラスタ名>_BOOL_VARIABLE テーブル」を参照してください。
ProcessDefinitionName	ビジネスプロセス定義名	ビジネスプロセス定義名を示します。	
ProcessDefinitionVersion	ビジネスプロセス定義バージョン	ビジネスプロセス定義バージョンを示します。	
ScopeDefinitionName	SC 定義名	スコープ定義名を示します。	
ScopeNumber	SCI 識別番号	スコープインスタンスの識別番号を示します。	
VariableName	変数定義名	変数定義名を示します。	
VariableValue	変数値	変数値を示します。	

(8)message 変数情報 (message 指定時)

- -detail 未指定時

```
ProcessID, VariableName,
VariableValue
PI識別子, 変数定義名,
変数値
PI識別子, 変数定義名,
変数値
:
```

注 ProcessID (PI 識別子) から VariableName (変数定義名) までは改行されないで表示され、VariableValue (変数値) は次行に表示されます。

- -detail 指定時

```
ProcessID, ProcessDefinitionName, ProcessDefinitionVersion,
ScopeDefinitionName, ScopeNumber, VariableName,
VariableValue
PI識別子, ビジネスプロセス定義名, ビジネスプロセス定義バージョン,
SC定義名, SCI識別番号, 変数定義名,
変数値
PI識別子, ビジネスプロセス定義名, ビジネスプロセス定義バージョン,
SC定義名, SCI識別番号, 変数定義名,
変数値
:
```

10. コマンド

cscpiselect (プロセスインスタンスの検索)

注 ProcessID (PI 識別子) から VariableName (変数定義名) までは改行されないで表示され、VariableValue (変数値) は次行に表示されます。

説明

表示項目	内容	説明	備考
ProcessID	PI 識別子	プロセスインスタンスの識別子を示します。	CSCBP_<クラスタ名>_MESSAGE_VARIABLE テーブルの1レコードの情報を示します。情報の詳細については、「付録 C.1(1)(b)」の「CSCBP_<クラスタ名>_MSG_VARIABLE テーブル」を参照してください。
ProcessDefinitionName	ビジネスプロセス定義名	ビジネスプロセス定義名を示します。	
ProcessDefinitionVersion	ビジネスプロセス定義バージョン	ビジネスプロセス定義バージョンを示します。	
ScopeDefinitionName	SC 定義名	スコープ定義名を示します。	
ScopeNumber	SCI 識別番号	スコープインスタンスの識別番号を示します。	
VariableName	変数定義名	変数定義名を示します。	
VariableValue	変数値	変数値を示します。	

(9) メッセージ関連情報 (relation 指定時)

- -detail 未指定時

```
MessageID, ProcessID, ActivityNumber, SendOrReceive
MSG識別子, PI識別子, ACI識別番号, 送受信フラグ
MSG識別子, PI識別子, ACI識別番号, 送受信フラグ
:
```

- -detail 指定時

```
MessageID, ProcessID, ActivityNumber, SendOrReceive, AsynchronousMessagingID
MSG識別子, PI識別子, ACI識別番号, 送受信フラグ, ID
MSG識別子, PI識別子, ACI識別番号, 送受信フラグ, ID
:
```

注 MessageID (MSG 識別子) から AsynchronousMessagingID (ID) までは改行されないで表示されます。

説明

表示項目	内容	説明	備考
MessageID	MSG 識別子	メッセージの識別子を示します。	CSCBP_<クラスタ名>_MESSAGE_RELATION テーブルの1レコードの情報を示します。情報の詳細については、「付録 C.1(1)(c)」の「CSCBP_<クラスタ名>_MSG_RELATION テーブル」を参照してください。
ProcessID	PI 識別子	プロセスインスタンスの識別子を示します。	
ActivityNumber	ACI 識別番号	アクティビティインスタンスの識別番号を示します。	
SendOrReceive	送受信フラグ	メッセージの送受信フラグを示します。	
AsynchronousMessagingID	ID	非同期メッセージングの ID を示します。	

(10) カウント表示

```
KEOS52029-I: row count is 行のカウント数
```

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
2	通信タイムアウトが発生しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- コメント行などは記載しないでください。
- このコマンドは SQL の where 句をオプションに指定します。そのため、使用するユーザ ID およびパスワードを定期的に変更するなどして、第三者に不当にコマンドを実行されないようにしてください。
- データベースと Cosminexus RM を使用する場合だけ、このコマンドを使用できます。

cscrcptnstart (標準受付およびユーザ定義受付の開始)

形式

```
cscrcptnstart [-h]
               -user <ログインユーザID>
               -pass <ログインパスワード>
               {-csc <HCSCサーバ名> | -cluster <クラスタ名>}
               [{-standard | -userdef}]
```

機能

標準受付およびユーザ定義受付を開始します。

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~ <半角英数字およびアンダーライン (<_>) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~ <半角英数字およびアンダーライン (<_>) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-csc <HCSC サーバ名> ~ <半角英数字およびアンダーライン (<_>) > ((1 - 8 文字))

標準受付およびユーザ定義受付を開始する HCSC サーバ名を指定します。

-cluster <クラスタ名> ~ <半角英数字およびアンダーライン (<_>) > ((1 - 8 文字))

標準受付およびユーザ定義受付を一括開始するクラスタ名を指定します。クラスタ種別が HA のときに -cluster を指定するとエラーになります。

-standard

標準受付だけを起動します。-standard, -userdef とともに指定しない場合は、標準受付およびユーザ定義受付をすべて起動します。

-userdef

ユーザ定義受付をすべて起動します。個別のユーザ定義受付を起動する場合は、
csccompostart コマンドで起動してください。-standard、-userdef とともに指定しない場
合は、標準受付およびユーザ定義受付をすべて起動します。

入力例

(1)HCSC サーバ MyCSC の標準受付およびユーザ定義受付を開始する場合

```
cscrcptnstart -user admin -pass admin -csc MyCSC
```

(2)MyUnit クラスタ下にある HCSC サーバごとに標準受付を一括開始する場合

```
cscrcptnstart -user admin -pass admin -cluster MyUnit -standard
```

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
2	通信タイムアウトが発生しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- このコマンドは停止状態の受付に対して実行してください。
- コマンド実行時に HCSC サーバは起動している必要があります。
- -cluster を指定してエラーになった場合、結果を cscstatus コマンドで確認し、障害要
因を取り除いたあとに、再度コマンドを実行してください。

cscrcptnstop (標準受付およびユーザ定義受付の停止)

形式

```
cscrcptnstop [-h]
              -user <ログインユーザID>
              -pass <ログインパスワード>
              {-csc <HCSCサーバ名> | -cluster <クラスタ名>}
              [{-standard | -userdef}]
              [-stopfg {normal | wait | force}]
```

機能

標準受付およびユーザ定義受付を停止します。

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~ <半角英数字およびアンダーライン (<_>) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~ <半角英数字およびアンダーライン (<_>) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-csc <HCSC サーバ名> ~ <半角英数字およびアンダーライン (<_>) > ((1 - 8 文字))

受付を停止する HCSC サーバ名を指定します。

-cluster <クラスタ名> ~ <半角英数字およびアンダーライン (<_>) > ((1 - 8 文字))

標準受付およびユーザ定義受付を一括停止するクラスタ名を指定します。クラスタ種別が HA のときに -cluster を指定するとエラーになります。

-standard

標準受付だけを停止します。-standard、-userdef とともに指定しない場合は、標準受付およびユーザ定義受付をすべて停止します。

-userdef

ユーザ定義受付をすべて停止します。個別のユーザ定義受付を停止する場合は、`csccompostop` コマンドで停止してください。-standard, -userdef とともに指定しない場合は、標準受付およびユーザ定義受付をすべて停止します。

-stopfg {normal | wait | force}

標準受付の停止オプションを指定します。-userdef オプションを指定した場合、この定義は無視されます。デフォルトは normal です。

- normal
通常停止の場合に指定します。
- wait
計画停止の場合に指定します。
- force
強制停止の場合に指定します。

入力例

(1)HCSC サーバ MyCSC の標準受付およびユーザ定義受付を停止する場合

```
cscrcptnstop -user admin -pass admin -csc MyCSC
```

(2)MyUnit クラスタ下にある HCSC サーバごとに標準受付およびユーザ定義受付を一括停止する場合

```
cscrcptnstop -user admin -pass admin -cluster MyUnit
```

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
2	通信タイムアウトが発生しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- このコマンドは開始状態の受付に対して実行してください。
- コマンド実行時に HCSC サーバは起動している必要があります。
- -cluster を指定してエラーになった場合、結果を `cscstatus` コマンドで確認し、障害要因を取り除いたあとに、再度コマンドを実行してください。

cscrepctl (インポート/エクスポート)

形式

```
cscrepctl [-h]
          -user <ログインユーザID>
          -pass <ログインパスワード>
          { -import <ファイル名> [-overwrite] [-check]
            | -export <ファイル名>
            | -autoexport }
```

機能

リポジトリ内の情報を ZIP 形式ファイルに出力したり, ZIP 形式で保存された情報をリポジトリに展開したりします。

ログインユーザ ID などの必須オプションは, HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで, このコマンドでの指定を省略できます。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は, ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~ <半角英数字およびアンダーライン (<_>) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~ <半角英数字およびアンダーライン (<_>) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-import <ファイル名> ~ ((1 - 200 バイト))

展開する ZIP 形式ファイルを絶対パス, または相対パスで指定します。

-overwrite

インポート時に HCSC コンポーネントを運用環境のリポジトリに展開します。このオプションは, -import 指定時に有効になります。

-check

現在の運用環境のリポジトリ情報とインポートするリポジトリ情報で, HCSC サーバの構成情報が同じかどうかをチェックします。HCSC サーバの構成情報が異なる場合は,

エラーになります。このオプションは、`-import` 指定時に有効になります。なお、標準インポートの場合は、このオプションを指定しないでください。

`-export <ファイル名> ~ ((1 - 200 バイト))`

出力する ZIP 形式ファイルのファイル名を絶対パス、または相対パスで指定します。指定したファイルまでのディレクトリがない場合、異常終了になります。指定したファイルがすでにある場合、上書きされます。指定したファイルの拡張子を「.zip」にしなかった場合は、「.zip」が付けられます。

`-autoexport`

ZIP ファイルをデフォルトファイル名で出力する場合に指定します。デフォルトファイル名は、次の形式で付与されます。

`aaabbbcccddd_YYYYMMDDhhmmss.zip`

`aaabbbcccddd` :

コマンドを実行したマシンの IP アドレスを示します。

`YYYYMMDDhhmmss` :

バックアップした時間を示します。

YYYY : 西暦, MM : 月, DD : 日, hh : 時, mm : 分, ss : 秒

出力先は `cscmng.properties` (HCSC-Manager 定義ファイル) に指定できます。出力先を指定しなかった場合はカレントディレクトリに出力されます。

なお、`-import` オプションおよび `-export` オプションと同時に指定することはできません。

入力例

(1) `repository.zip` の内容をリポジトリに展開する場合

```
cscreptcl -user admin -pass admin -import repository.zip
```

(2) カレントディレクトリにリポジトリ情報を収集した `repository.zip` を出力する場合

```
cscreptcl -user admin -pass admin -export repository.zip
```

(3) デフォルトファイル名で出力する場合

```
cscreptcl -user admin -pass admin -autoexport
```

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。

10. コマンド

cscreptl (インポート/エクスポート)

戻り値	意味
1	コマンドが異常終了しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- 運用環境にログイン中の場合は、このコマンドを実行できません。
- インポートする場合は、必ずリポジトリに設定したディレクトリ以下のディレクトリおよびファイルを参照していないことを確認してから、cscreptl コマンドを実行してください。
- 現在の運用環境のリポジトリ情報とインポートするリポジトリ情報で、データベースおよび Cosminexus RM を使用するかどうかの設定が異なる場合、インポート時にエラーになります。

cscrepdiff (リポジトリ情報の差分の表示)

形式

```
cscrepdiff [-h]
            -user <ログインユーザID>
            -pass <ログインパスワード>
            -repfile <エクスポートされたリポジトリZIPファイル名>
            [-check]
```

機能

現在の運用環境のリポジトリ情報とエクスポートしたリポジトリ情報との HCSC コンポーネントの差分を標準出力に表示します。このコマンドは、次に示すリポジトリ情報の項目が同じ場合、同じ HCSC コンポーネントと見なして差分を表示します。

- サービスアダプタのサービス ID
- ビジネスプロセスのサービス ID
- ユーザ定義受付の受付 ID

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user< ログインユーザ ID> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_)> ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass < ログインパスワード> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_)> ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-repfile < エクスポートされたリポジトリ ZIP ファイル名> ~ ((1 - 200 バイト))

エクスポートされた差分表示の対象となる ZIP ファイル名を絶対パス、または相対パスで指定します。

-check

現在の運用環境のリポジトリ情報とインポートするリポジトリ情報で、HCSC サーバの構成情報が同じかどうかをチェックします。HCSC サーバの構成情報が異なる場合は、

10. コマンド

cscrepdiff (リポジトリ情報の差分の表示)

エラーになります。なお、標準インポートの場合は、このオプションを指定しないでください。

表示形式

表示形式の記号の意味は次のとおりです。

<: 現在のリポジトリ情報に存在する HCSC コンポーネント

>: 指定した ZIP ファイルのリポジトリ情報に存在する HCSC コンポーネント

(1) すべての項目で変更がある場合

```
KEOS52129-I cscrepdiff will now start.
Command Edit Time: コマンド発行時間
[BusinessProcess]
change:
<クラスタ名/ビジネスプロセスのサービスID 更新時間*
} 更新された
>クラスタ名/ビジネスプロセスのサービスID 更新時間*
} ビジネスプロセス
delete:
} 削除された
<クラスタ名/ビジネスプロセスのサービスID 更新時間*
} ビジネスプロセス
add:
} 追加された
>クラスタ名/ビジネスプロセスのサービスID 更新時間*
} ビジネスプロセス

[ServiceAdapter]
change:
<クラスタ名/サービスアダプタのサービスID 更新時間*
} 更新された
>クラスタ名/サービスアダプタのサービスID 更新時間*
} サービスアダプタ
delete:
} 削除された
<クラスタ名/サービスアダプタのサービスID 更新時間*
} サービスアダプタ
add:
} 追加された
>クラスタ名/サービスアダプタのサービスID 更新時間*
} サービスアダプタ

[UserDefinedReception]
change:
< クラスタ名/ユーザ定義受付の受付ID 更新時間*
} 更新された
> クラスタ名/ユーザ定義受付の受付ID 更新時間*
} ユーザ定義受付
delete:
} 削除された
< クラスタ名/ユーザ定義受付の受付ID 更新時間*
} ユーザ定義受付
add:
} 追加された
> クラスタ名/ユーザ定義受付の受付ID 更新時間*
} ユーザ定義受付
KEOS52130-I cscrepdiff ended normally.
```

注※ 開発環境でHCSCコンポーネントをパッケージングした時間です。したがって、開発環境のマシンの時間に依存します。

(2) ビジネスプロセスだけ変更がある場合

```

KEOS52129-l cscrepdiff will now start.
Command Edit Time: コマンド発行時間
[BusinessProcess]
change:
<クラスタ名/ビジネスプロセスのサービスID 更新時間*
>クラスタ名/ビジネスプロセスのサービスID 更新時間*
KEOS52130-l cscrepdiff ended normally.
  
```

} 更新された
ビジネスプロセス

注※ 開発環境でHCSCコンポーネントをパッケージングした時間です。したがって、開発環境のマシンの時間に依存します。

(3) 変更がない場合

```

KEOS52129-l cscrepdiff will now start.
Command Edit Time: コマンド発行時間
KEOS52130-l cscrepdiff ended normally.
  
```

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

現在の運用環境のリポジトリ情報とインポートするリポジトリ情報で、データベースおよび Cosminexus RM を使用するかどうかの設定が異なる場合、インポート時にエラーになります。

cscrepls (リポジトリ情報の表示)

形式

```
cscrepls [-h]
         -user <ログインユーザID>
         -pass <ログインパスワード>
         [{-repfile <エクスポートされたリポジトリZIPファイル名>
           | -envbackfile <HCSC-Manager環境バックアップファイル名>}]
         [{-csc <HCSCサーバ名> | -oldtype }]
```

機能

リポジトリ情報を標準出力に出力します。また、cscutil コマンドの引数に指定する値を確認できます。

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-repfile <エクスポートされたリポジトリ ZIP ファイル名> ~ ((1 - 200 バイト))
<<HCSC-Manager 定義ファイルの cscmng.repository.root パラメタに設定されているリポジトリの内容 >>

エクスポートされたリポジトリ ZIP ファイル名を絶対パス、または相対パスで指定します。エクスポートされたリポジトリファイルの中を参照し、構成情報が出力されます。

-envbackfile とは同時に指定できません。

-envbackfile <HCSC-Manager 環境バックアップファイル名> ~ ((1 - 200 バイト))
<<HCSC-Manager 定義ファイルの cscmng.repository.root パラメタに設定されているリ
ポジトリの内容 >>

HCSC-Manager 環境バックアップファイル名を絶対パス, または相対パスで指定しま
す。エクスポートされたリポジトリファイルの中を参照し, 構成情報が出力されます。

-repfile とは同時に指定できません。

-csc <HCSC サーバ名> ~ <半角英数字およびアンダーライン (<_>) > ((1 - 16 文字))

指定した HCSC サーバ情報だけが出力されます。

-oldtype

バージョン 07-20 以前の情報が出力されます。

表示形式

(1)-csc オプションで HCSC サーバを指定しない場合

```
Command Edit Time:コマンド発行時間
Domain (name:ドメイン名)

- Cluster (name:クラスタ名)
  cluster-display-name:クラスタ表示名
  cluster-type:クラスタ種別
  db-use=データベースの使用有無
  rm-use=Cosminexus RMの使用有無

- HCSC-Server (CSCSrvName.:HCSCサーバ名)
  display-name:HCSCサーバ表示名
  J2EESrvName:J2EEサーバ名
  Cosminexus Manager (Cosminexus Manager名, Cosminexus ManagerのホストIPアドレ
ス:Cosminexus Managerのポート番号)
  ->ConnectClusterName:連携先クラスタ名

- BusinessProcess (ServiceID:ビジネスプロセスのサービスID)
  ServiceName:ビジネスプロセス表示名
  deployed:ビジネスプロセス配備状態
  modified-time:ビジネスプロセスが更新された時間

- UserDefinedReception (ReceptionID:ユーザ定義受付の受付ID)
  ReceptionName:受付名
  deployed:受付配備状態
  modified-time:ユーザ定義受付が更新された時間

- BusinessProcess (ServiceID:ビジネスプロセスのサービスID)
  ServiceName:ビジネスプロセス表示名
  deployed:ビジネスプロセス配備状態
  modified-time:ビジネスプロセスが更新された時間

- UserDefinedReception (ReceptionID:ユーザ定義受付の受付ID)
  ReceptionName:受付名
  deployed:受付配備状態
  modified-time:ユーザ定義受付が更新された時間
```

10. コマンド

cscrcpls (リポジトリ情報の表示)

- ServiceAdapter (ServiceID: サービスアダプタのサービスID)
ServiceName: アダプタ表示名
deployed: アダプタ配備状態
modified-time: サービスアダプタが更新された時間
- UserDefinedReception (ReceptionID: ユーザ定義受付の受付ID)
ReceptionName: 受付名
deployed: 受付配備状態
modified-time: ユーザ定義受付が更新された時間
- ServiceAdapter (ServiceID: サービスアダプタのサービスID)
ServiceName: アダプタ表示名
deployed: アダプタ配備状態
modified-time: サービスアダプタが更新された時間
- HCSC-Server (CSCSrvName: HCSCサーバ名)
display-name: HCSCサーバ表示名
J2EESrvName: J2EEサーバ名
Cosminexus Manager (Cosminexus Manager名, Cosminexus ManagerのホストIPアドレス: Cosminexus Managerのポート番号)
->ConnectClusterName: 連携先クラスタ名
- BusinessProcess (ServiceID: ビジネスプロセスのサービスID)
ServiceName: ビジネスプロセス表示名
deployed: ビジネスプロセス配備状態
modified-time: ビジネスプロセスが更新された時間
- UserDefinedReception (ReceptionID: ユーザ定義受付の受付ID)
ReceptionName: 受付名
deployed: 受付配備状態
modified-time: ユーザ定義受付が更新された時間
- BusinessProcess (ServiceID: ビジネスプロセスのサービスID)
ServiceName: ビジネスプロセス表示名
deployed: ビジネスプロセス配備状態
modified-time: ビジネスプロセスが更新された時間
- UserDefinedReception (ReceptionID: ユーザ定義受付の受付ID)
ReceptionName: 受付名
deployed: 受付配備状態
modified-time: ユーザ定義受付が更新された時間
- Cluster (name: クラスタ名)
cluster-display-name: クラスタ表示名
cluster-type: クラスタ種別
db-use=データベースの使用有無
rm-use=Cosminexus RMの使用有無
- HCSC-Server (CSCSrvName: HCSCサーバ名)
display-name: HCSCサーバ表示名
J2EESrvName: J2EEサーバ名
Cosminexus Manager (Cosminexus Manager名, Cosminexus ManagerのホストIPアドレス: Cosminexus Managerのポート番号)
->ConnectClusterName: 連携先クラスタ名
- BusinessProcess (ServiceID: ビジネスプロセスのサービスID)
ServiceName: ビジネスプロセス表示名
deployed: ビジネスプロセス配備状態
modified-time: ビジネスプロセスが更新された時間
- UserDefinedReception (ReceptionID: ユーザ定義受付の受付ID)
ReceptionName: 受付名
deployed: 受付配備状態
modified-time: ユーザ定義受付が更新された時間

- BusinessProcess (ServiceID:ビジネスプロセスのサービスID)
ServiceName: ビジネスプロセス表示名
deployed: ビジネスプロセス配備状態
modified-time: ビジネスプロセスが更新された時間
- UserDefinedReception (ReceptionID: ユーザ定義受付の受付ID)
ReceptionName: 受付名
deployed: 受付配備状態
modified-time: ユーザ定義受付が更新された時間
- ServiceAdapter (ServiceID: サービスアダプタのサービスID)
ServiceName: アダプタ表示名
deployed: アダプタ配備状態
modified-time: サービスアダプタが更新された時間
- UserDefinedReception (ReceptionID: ユーザ定義受付の受付ID)
ReceptionName: 受付名
deployed: 受付配備状態
modified-time: ユーザ定義受付が更新された時間
- ServiceAdapter (ServiceID: サービスアダプタのサービスID)
ServiceName: アダプタ表示名
deployed: アダプタ配備状態
modified-time: サービスアダプタが更新された時間

(2)-csc オプションで HCSC サーバを指定した場合

```
Command Edit Time: コマンド発行時間
Domain (name: ドメイン名)
- Cluster (name: クラスタ名)
  cluster-display-name: クラスタ表示名
  cluster-type: クラスタ種別
  db-use= データベースの使用有無
  rm-use=Cosminexus RMの使用有無
- HCSC-Server (CSCSrvName.: HCSCサーバ名)
  display-name: HCSCサーバ表示名
  J2EESrvName: J2EEサーバ名
  Cosminexus Manager (Cosminexus Manager名, Cosminexus ManagerのホストIPアドレス: Cosminexus Managerのポート番号)
  ->ConnectClusterName: 連携先クラスタ名
- BusinessProcess (ServiceID: ビジネスプロセスのサービスID)
  ServiceName: ビジネスプロセス表示名
  deployed: ビジネスプロセス配備状態
  modified-time: ビジネスプロセスが更新された時間
- UserDefinedReception (ReceptionID: ユーザ定義受付の受付ID)
  ReceptionName: 受付名
  deployed: 受付配備状態
  modified-time: ユーザ定義受付が更新された時間
- BusinessProcess (ServiceID: ビジネスプロセスのサービスID)
  ServiceName: ビジネスプロセス表示名
  deployed: ビジネスプロセス配備状態
  modified-time: ビジネスプロセスが更新された時間
- UserDefinedReception (ReceptionID: ユーザ定義受付の受付ID)
  ReceptionName: 受付名
  deployed: 受付配備状態
  modified-time: ユーザ定義受付が更新された時間
```

10. コマンド

cscsrepls (リポジトリ情報の表示)

- ServiceAdapter (ServiceID: サービスアダプタのサービスID)
ServiceName: アダプタ表示名
deployed: アダプタ配備状態
modified-time: サービスアダプタが更新された時間
- UserDefinedReception (ReceptionID: ユーザ定義受付の受付ID)
ReceptionName: 受付名
deployed: 受付配備状態
modified-time: ユーザ定義受付が更新された時間
- ServiceAdapter (ServiceID: サービスアダプタのサービスID)
ServiceName: アダプタ表示名
deployed: アダプタ配備状態
modified-time: サービスアダプタが更新された時間

(3)-oldtype オプションを指定した場合

```
Command Edit Time: コマンド発行時間
Domain (name: ドメイン名)
- Cosminexus Manager (name: Cosminexus Manager 名)
  display-name: Cosminexus Manager 表示名
  management-ip: Cosminexus Manager のホストIPアドレス
  port: Cosminexus Manager のポート番号
- HCSC-Server (CSCSrvName: :HCSCサーバ名)
  display-name: HCSCサーバ表示名
  cluster-name: クラスタ名
  cluster-display-name: クラスタ表示名
  cluster-type: クラスタ種別
  J2EESrvName: J2EEサーバ名
- SessionBean
  Url: 同期サービス (SessionBean) 呼び出し時に使用するURL
  LookupName: 同期サービス (SessionBean) 呼び出し時に使用するルックアップ名
- WebService
  Url: 同期サービス (Webサービス) 呼び出し時に使用するURL
- MDB (WS-R)
  Url: 非同期サービス (MDB (WS-R)) 呼び出し時に使用するURL
- MDB (DBQueue)
  Name: DBキュー名
  ->ConnectClusterName: 連携先クラスタ名
- BusinessProcess (ServiceID: ビジネスプロセスのサービスID)
  ServiceName: ビジネスプロセス表示名
  deployed: ビジネスプロセス配備状態
  modified-time: ビジネスプロセスが更新された時間
- UserDefinedReception (ReceptionID: ユーザ定義受付の受付ID)
  ReceptionName: 受付名
  deployed: 受付配備状態
  modified-time: ユーザ定義受付が更新された時間
```

```
- BusinessProcess (ServiceID: ビジネスプロセスのサービスID)
  ServiceName: ビジネスプロセス表示名
  deployed: ビジネスプロセス配備状態
  modified-time: ビジネスプロセスが更新された時間
- UserDefinedReception (ReceptionID: ユーザ定義受付の受付ID)
  ReceptionName: 受付名
  deployed: 受付配備状態
  modified-time: ユーザ定義受付が更新された時間
- ServiceAdapter (ServiceID: サービスアダプタのサービスID)
  ServiceName: アダプタ表示名
  deployed: アダプタ配備状態
  modified-time: サービスアダプタが更新された時間
- UserDefinedReception (ReceptionID: ユーザ定義受付の受付ID)
  ReceptionName: 受付名
  deployed: 受付配備状態
  modified-time: ユーザ定義受付が更新された時間
- ServiceAdapter (ServiceID: サービスアダプタのサービスID)
  ServiceName: アダプタ表示名
  deployed: アダプタ配備状態
  modified-time: サービスアダプタが更新された時間

- HCSC-Server (CSCSrvName: HCSCサーバ名)
  display-name: HCSCサーバ表示名
  cluster-name: クラスタ名
  cluster-display-name: クラスタ表示名
  cluster-type: クラスタ種別
  J2EESrvName: J2EEサーバ名
- SessionBean
  Url: 同期サービス (SessionBean) 呼び出し時に使用するURL
  LookupName: 同期サービス (SessionBean) 呼び出し時に使用するルックアップ名

-WebService
  Url: 同期サービス (Webサービス) 呼び出し時に使用するURL
- MDB (WS-R)
  Url: 非同期サービス (MDB (WS-R)) 呼び出し時に使用するURL
- MDB (DBQueue)
  Name: DBキュー名
  ->ConnectClusterName: 連携先クラスタ名
- BusinessProcess (ServiceID: ビジネスプロセスのサービスID)
  ServiceName: ビジネスプロセス表示名
  deployed: ビジネスプロセス配備状態
  modified-time: ビジネスプロセスが更新された時間
- UserDefinedReception (ReceptionID: ユーザ定義受付の受付ID)
  ReceptionName: 受付名
  deployed: 受付配備状態
  modified-time: ユーザ定義受付が更新された時間

- BusinessProcess (ServiceID: ビジネスプロセスのサービスID)
  ServiceName: ビジネスプロセス表示名
  deployed: ビジネスプロセス配備状態
  modified-time: ビジネスプロセスが更新された時間
- UserDefinedReception (ReceptionID: ユーザ定義受付の受付ID)
  ReceptionName: 受付名
  deployed: 受付配備状態
  modified-time: ユーザ定義受付が更新された時間
```

10. コマンド

cscsrepls (リポジトリ情報の表示)

```
- Cosminexus Manager (name:Cosminexus Manager名)
  display-name:Cosminexus Manager表示名
  management-ip:Cosminexus ManagerのホストIPアドレス
  port:Cosminexus Managerのポート番号
- HCSC-Server (CSCSrvName::HCSCサーバ名)
  display-name:HCSCサーバ表示名
  cluster-name:クラスタ名
  cluster-display-name:クラスタ表示名
  cluster-type:クラスタ種別
  J2EESrvName:J2EEサーバ名
- SessionBean
  Url:同期サービス (SessionBean) 呼び出し時に使用するURL
  LookupName:同期サービス (SessionBean) 呼び出し時に使用するルックアップ名

- Webservice
  Url:同期サービス (Webサービス) 呼び出し時に使用するURL
- MDB (WS-R)
  Url:非同期サービス (MDB (WS-R) ) 呼び出し時に使用するURL
- MDB (DBQueue)
  Name:DBキュー名
  ->ConnectClusterName:連携先クラスタ名

- BusinessProcess (ServiceID:ビジネスプロセスのサービスID)
  ServiceName:ビジネスプロセス表示名
  deployed:ビジネスプロセス配備状態
  modified-time:ビジネスプロセスが更新された時間
- UserDefinedReception (ReceptionID:ユーザ定義受付の受付ID)
  ReceptionName:受付名
  deployed:受付配備状態
  modified-time:ユーザ定義受付が更新された時間

- BusinessProcess (ServiceID:ビジネスプロセスのサービスID)
  ServiceName:ビジネスプロセス表示名
  deployed:ビジネスプロセス配備状態
  modified-time:ビジネスプロセスが更新された時間
- UserDefinedReception (ReceptionID:ユーザ定義受付の受付ID)
  ReceptionName:受付名
  deployed:受付配備状態
  modified-time:ユーザ定義受付が更新された時間

- HCSC-Server (CSCSrvName::HCSCサーバ名)
  display-name:HCSCサーバ表示名
  cluster-name:クラスタ名
  cluster-display-name:クラスタ表示名
  cluster-type:クラスタ種別
  J2EESrvName:J2EEサーバ名
- SessionBean
  Url:同期サービス (SessionBean) 呼び出し時に使用するURL
  LookupName:同期サービス (SessionBean) 呼び出し時に使用するルックアップ名

- Webservice
  Url:同期サービス (Webサービス) 呼び出し時に使用するURL
- MDB (WS-R)
  Url:非同期サービス (MDB (WS-R) ) 呼び出し時に使用するURL
- MDB (DBQueue)
  Name:DBキュー名
  ->ConnectClusterName:連携先クラスタ名
```



```

- BusinessProcess (ServiceID:ビジネスプロセスのサービスID)
  ServiceName:ビジネスプロセス表示名
  deployed:ビジネスプロセス配備状態
  modified-time:ビジネスプロセスが更新された時間
- BusinessProcess (ServiceID:ビジネスプロセスのサービスID)
  ServiceName:ビジネスプロセス表示名
  deployed:ビジネスプロセス配備状態
  modified-time:ビジネスプロセスが更新された時間
- UserDefinedReception (ReceptionID:ユーザ定義受付の受付ID)
  ReceptionName:受付名
  deployed:受付配備状態
  modified-time:ユーザ定義受付が更新された時間

```

説明 ((1)-csc オプションで HCSC サーバを指定しない場合、および (2)-csc オプションで HCSC サーバを指定した場合)

表示項目	説明
Command Edit Time	コマンド発行時間を示します。 java.text.SimpleDateFormat で定義されているフォーマットに、YYYY/MM/DD hh:mm:ss.SSS の形式で出力されます。 <ul style="list-style-type: none"> • YYYY : 西暦 • MM : 月 • DD : 日 • hh : 時 • mm : 分 • ss : 秒 • SSS : ミリ秒
Domain (name)	ドメイン名を示します。
Cluster (name)	クラスタ名を示します。
cluster-display-name	クラスタ表示名を示します。
cluster-type	クラスタ種別を示します。次のどちらかが表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> • LB : ロードバランスクラスタ • HA : HA クラスタ
db-use	データベースを使用しているかどうかを示します。次のどちらかが表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> • ON : 使用しています。 • OFF : 使用していません。
rm-use	Cosminexus RM を使用しているかどうかを示します。次のどちらかが表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> • ON : 使用しています。 • OFF : 使用していません。
HCSCServer (CSCSrvName)	HCSC サーバ名を示します。
display-name	HCSC サーバ表示名を示します。
J2EESrvName	J2EE サーバ名を示します。

10. コマンド

cscrepls (リポジトリ情報の表示)

表示項目	説明
Cosminexus Manager (name , ip : port)	次の情報が表示されます。 <ul style="list-style-type: none">• Cosminexus Manager 名• Cosminexus Manager のホスト IP アドレス• Cosminexus Manager のポート番号
ConnectClusterName	連携クラスタ名を示します。
BusinessProcess (ServiceID)	ビジネスプロセスのサービス ID を示します。
ServiceAdapter (ServiceID)	サービスアダプタのサービス ID を示します。
ServiceName	ビジネスプロセス表示名、またはサービスアダプタ表示名を示します。
UserDefinedReception (ReceptionID)	ユーザ定義受付の受付 ID を示します。
ReceptionName	ユーザ定義受付の受付名を示します。
deployed	ビジネスプロセス、サービスアダプタ、またはユーザ定義受付が配備されているかどうかを示します。次のどちらかが表示されます。 <ul style="list-style-type: none">• true : 配備されています。• false : 配備されていません。
modified-time	ビジネスプロセス、サービスアダプタ、またはユーザ定義受付が更新された時間を示します。 java.text.SimpleDateFormat で定義されているフォーマットに、YYYY/MM/DD hh:mm:ss の形式で出力されます。 <ul style="list-style-type: none">• YYYY : 西暦• MM : 月• DD : 日• hh : 時• mm : 分• ss : 秒 なお、更新時刻は開発環境でパッケージングした時間です。

注

次の条件の両方に当てはまる場合、文字化けが発生するおそれがあります。

- HCSC サーバ表示名、クラスタ表示名、またはユーザ電文に次の文字を使用している。
 - 基本多言語面 (BMP) 以外の文字
 - Unicode のコードポイント U+10000 ~ U+10FFFF の範囲の文字
 - UTF-16 エンコーディングにおけるサロゲート・ペアで表される文字
- Windows Vista 以外の OS でこのコマンドを使用している。

説明 ((3)-oldtype オプションを指定した場合)

表示項目	説明
Command Edit Time	コマンド発行時間を示します。 コマンド発行時間を示します。 java.text.SimpleDateFormat で定義されているフォーマットに、YYYY/MM/DD hh:mm:ss.SSS の形式で出力され ます。 <ul style="list-style-type: none"> • YYYY : 西暦 • MM : 月 • DD : 日 • hh : 時 • mm : 分 • ss : 秒 • SSS : ミリ秒
Domain (name)	ドメイン名を示します。
Cosminexus Manager (name)	Cosminexus Manager 名を示します。
display-name	次のどれかが表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> • Cosminexus Manager 表示名 • HCSC サーバ表示名 • ビジネスプロセス表示名 • サービスアダプタ表示名
management-ip	Cosminexus Manager のホスト IP アドレスを示します。
port	Cosminexus Manager のポート番号を示します。
HCSCServer (CSCSrvName)	HCSC サーバ名を示します。
cluster-name	クラスタ名を示します。
cluster-display-name	クラスタ表示名を示します。
cluster-type	クラスタ種別を示します。次のどちらかが表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> • LB : ロードバランスクラスタ • HA : HA クラスタ
J2EESrvName	J2EE サーバ名を示します。
Url	次のどれかが表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> • SessionBean の場合 : 同期サービス (SessionBean) 呼び出し時に使用する URL • WebService の場合 : 同期サービス (Web サービス) 呼び出し時に使用する URL • MDB (WS-R) の場合 : 非同期サービス (MDB (WS-R)) 呼び出し時に使用する URL
LookupName	同期サービス (SessionBean) 呼び出し時に使用するルックアップ名を示します。
Name	DB キュー名を示します。
ConnectClusterName	連携クラスタ名を示します。
BusinessProcess (ServiceID)	ビジネスプロセスのサービス ID を示します。

10. コマンド

cscrepls (リポジトリ情報の表示)

表示項目	説明
deployed	ビジネスプロセス,またはサービスアダプタが配備されているかどうかを示します。次のどちらかが表示されます。 <ul style="list-style-type: none">• true : 配備されています。• false : 配備されていません。
modified-time	ビジネスプロセス,またはサービスアダプタが更新された時間を示します。 java.text.SimpleDateFormat で定義されているフォーマットに, YYYY/MM/DD hh:mm:ss の形式で出力されます。 <ul style="list-style-type: none">• YYYY : 西暦• MM : 月• DD : 日• hh : 時• mm : 分• ss : 秒 なお, 更新時刻は開発環境でパッケージングした時間です。
ServiceAdapter (ServiceID)	サービスアダプタのサービス ID を示します。

注

次の条件の両方に当てはまる場合, 文字化けが発生するおそれがあります。

- HCSC サーバ表示名, クラスタ表示名, またはユーザ電文に次の文字を使用している。
 - 基本多言語面 (BMP) 以外の文字
 - Unicode のコードポイント U+10000 ~ U+10FFFF の範囲の文字
 - UTF-16 エンコーディングにおけるサロゲート・ペアで表される文字
 - Windows Vista 以外の OS でこのコマンドを使用している。

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

-repfile 指定時は, 次の情報は出力されません。

- 片方向の連携セットアップしかしていない場合の連携先クラスタ名
- ビジネスプロセスの配備状態, およびサービスアダプタの配備状態
- 同期サービス (SessionBean) 呼び出し時に使用する URL, 同期サービス (Web サービス) 呼び出し時に使用する URL, 非同期サービス (MDB (WS-R)) 呼び出し時に使用する URL, および DB キュー名

- クラスタ種別

注

サービス部品呼び出し時に使用する URL, および DB キュー名は, -oldtype 指定時
に出力されます。

cscresinfo (リソース稼働情報の表示)

形式

```
cscresinfo [-h]
            -user <ログインユーザID>
            -pass <ログインパスワード>
            -csc <HCSCサーバ名>
```

機能

HCSC サーバのリソースの稼働情報を表示します。開始しているリソースアダプタ、標準受付、および HCSC コンポーネントの稼働情報だけが表示されます。HCSC サーバが起動していない場合、稼働情報は表示されません。

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~ <半角英数字およびアンダーライン (<_>) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~ <半角英数字およびアンダーライン (<_>) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-csc <HCSC サーバ名> ~ <半角英数字およびアンダーライン (<_>) > ((1 - 8 文字))

稼働情報を表示したい HCSC サーバ名を指定します。

出力形式

(1)HCSC サーバが起動状態の場合で、標準受付および HCSC コンポーネントが開始状態のとき

```
Information Get Time : 稼働情報収集時刻
[HCSC-Server]
<クラスタ名>.<HCSCサーバ名>:active
  JavaVM Heap Size(MB)          Java VMヒープサイズ最大値 / Java VMヒープサイズ上限値

[DBConnector]
リソースアダプタ名 DBコネクション数最大値 / DBコネクション数上限値

[StandardReception]
受付種別
  queue      キュー滞留数最大値 / キュー滞留数上限値
  instance   実行数の最大値 / 実行数の上限値

[UserDefinedReception]
ユーザ定義受付の受付ID
  queue      キュー滞留数最大値 / キュー滞留数上限値
  instance   実行数の最大値 / 実行数の上限値

[BusinessProcess]
ビジネスプロセスのサービスID   実行数の最大値 / 実行数の上限値

[ServiceAdapter]
サービスアダプタのサービスID   実行数の最大値 / 実行数の上限値
```

(2)HCSC サーバが起動状態の場合で、標準受付および HCSC コンポーネントがすべて開始状態以外のとき

```
Information Get Time : 稼働情報収集時刻
[HCSC-Server]
<クラスタ名>.<HCSCサーバ名>:active
  JavaVM Heap Size(MB)          Java VMヒープサイズ最大値 / Java VMヒープサイズ上限値

[DBConnector]
リソースアダプタ名 DBコネクション数最大値 / DBコネクション数上限値

[StandardReception]

[UserDefinedReception]

[BusinessProcess]

[ServiceAdapter]
```

注 見出しだけが表示されます。

(3)HCSC サーバが起動状態以外の場合

```
[HCSC-Server]
<クラスタ名>.<HCSCサーバ名>:HCSCサーバ稼働状態
```

10. コマンド

cscresinfo (リソース稼働情報の表示)

注 active 以外が表示されます。

説明

表示項目	説明
稼働情報収集時刻	稼働情報を収集した時刻を示します。java.text.SimpleDateFormat で定義されているフォーマットに、YYYY/MM/DD hh:mm:ss の形式で出力されます。 <ul style="list-style-type: none"> • YYYY：西暦 • MM：月 • DD：日 • hh：時 • mm：分 • ss：秒
クラスタ名	クラスタ名を示します。
HCSC サーバ名	HCSC サーバ名を示します。
Java VM ヒープサイズ最大値 ¹	Java VM ヒープサイズの最大値 (単位: MB) を示します。稼働情報の取得に失敗した場合、または稼働情報が未取得 ² の場合、「-」が表示されます。
Java VM ヒープサイズ上限値	Java VM ヒープサイズの上限値 (単位: MB) を示します。稼働情報の取得に失敗した場合、または稼働情報が未取得 ² の場合、「-」が表示されます。なお、Java VM の -Xmx オプションで指定した値から Survivor 領域の一つ分のサイズを除いた値が表示されます。
リソースアダプタ名	リソースアダプタ名を示します。
DB コネクション数最大値 ¹	DB コネクションの最大値を示します。また、次の場合は DB コネクション上限値と合わせて「NA/NA」(無効値)が表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> • 該当のリソースアダプタが、ルートリソースアダプタ、または Cosminexus RM 連携用 DB コネクタ • コネクションプールの上限値が 0 に設定されている場合
DB コネクション数上限値	DB コネクションの上限値を示します。DB コネクション上限値だけ「NA」と表示される場合は、無制限を示します。DB コネクション最大値と合わせて「NA/NA」と表示される場合については、「DB コネクション最大値」の説明を参照してください。
受付種別	標準受付の受付種別を示します。「WebService」が表示されます。
キュー滞留数最大値 ¹	キュー滞留数の最大値を示します。稼働情報の取得に失敗した場合、または稼働情報が未取得 ³ の場合、「-」が表示されます。
キュー滞留数上限値	キュー滞留数の上限値を示します。稼働情報の取得に失敗した場合、または稼働情報が未取得 ³ の場合、「-」が表示されます。
実行数の最大値 ¹	実行数の最大値を示します。稼働情報の取得に失敗した場合、または稼働情報が未取得 ³ の場合、標準出力に「-」が出力されます。
実行数の上限値	実行数の上限値を示します。「NA」と表示される場合は、無制限を示します。稼働情報の取得に失敗した場合、または稼働情報が未取得 ³ の場合、「-」が表示されます。
ユーザ定義受付の受付 ID	ユーザ定義受付の受付 ID を示します。

表示項目	説明
ビジネスプロセスのサービス ID	ビジネスプロセスのサービス ID を示します。
サービスアダプタのサービス ID	サービスアダプタのサービス ID を示します。
HCSC サーバ稼働状態	HCSC サーバの稼働状態を示します。次のどれかが表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> • active : 起動状態 • inactive : 停止状態 • startfailed : 起動失敗 • stopfailed : 停止失敗 • starting : 起動中 • stopping : 停止中 • unknown : 取得失敗

注 1 最大値は、収集した 60 秒間のデータのうち最大となった値を示します。

注 2 HCSC サーバが起動してから稼働情報が収集されるまで (デフォルトでは 60 秒間) に、コマンドを実行した場合に未取得になります。

注 3 対象となる受付、または HCSC コンポーネントが開始してから稼働情報が収集されるまで (デフォルトでは 60 秒間) に、コマンドを実行した場合に未取得になります。

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

cscstatus (状態表示)

形式

```
cscstatus [-h]
          -user <ログインユーザID>
          -pass <ログインパスワード>
          [-csc <HCSCサーバ名>
          -type {system | reception | compo}]
```

機能

HCSC サーバ、標準受付、および HCSC コンポーネントの状態を表示します。

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~ <半角英数字およびアンダーライン (<_>) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~ <半角英数字およびアンダーライン (<_>) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-csc <HCSC サーバ名> ~ <半角英数字およびアンダーライン (<_>) > ((1 - 8 文字))

標準受付または HCSC コンポーネントの状態を表示したい HCSC サーバ名を指定します。このオプションを指定した場合、必ず -type オプションを指定してください。このオプションを省略した場合、すべての HCSC サーバの状態が表示されます。

-type {system | reception | compo}

状態を表示する標準受付または HCSC コンポーネントの種類を指定します。

- system
HCSC サーバと、HCSC サーバが管理する論理サーバの状態 (PRF の状態) を表示する場合に指定します。
- reception
標準受付およびユーザ定義受付の状態を表示する場合に指定します。

- compo
HCSC コンポーネントの状態を表示する場合に指定します。

表示形式

(1)HCSC サーバの状態

```
Command Edit Time:コマンド発行時間
HCSCサーバの状態 HCSCサーバ名
```

説明

表示項目	説明
HCSC サーバの状態	HCSC サーバの状態を示します。次のどれかが表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> • active : 開始状態 • inactive : 停止状態 • starting : 起動処理中 • startfailed : 起動失敗状態 • stopping : 停止処理中 • stopfailed : 停止失敗状態 • unknown : 取得失敗
HCSC サーバ名	HCSC サーバ名を示します。次の形式で表示されます。 <クラスタ名>.<HCSC サーバ名>

(2)HCSC サーバが管理する論理サーバの状態 (-csc 指定時)

- -type system 指定時

```
Command Edit Time:コマンド発行時間
HCSCサーバの状態 HCSCサーバ名
論理サーバの稼働状態 論理サーバ名
```

説明

表示項目	説明
HCSC サーバの状態	HCSC サーバの状態を示します。次のどれかが表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> • active : 開始状態 • inactive : 停止状態 • starting : 起動処理中 • startfailed : 起動失敗状態 • stopping : 停止処理中 • stopfailed : 停止失敗状態 • unknown : 取得失敗

10. コマンド

cscstatus (状態表示)

表示項目	説明
論理サーバの稼働状態	<p>論理サーバの状態を示します。次のどれかが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • active: 開始状態 • inactive: 停止状態 • starting: 起動処理中 • stopping: 停止処理中 • abnormal ended: 異常停止 • recovering: 回復中 • communication error: 通信障害 • auto stopping: 自動停止中 • auto restarting: 自動再起動中 • force stopping: 強制停止中 • planned stopping: 計画停止中

(3) 標準受付およびユーザ定義受付の状態 (-csc 指定時)

- -type reception 指定時

<p>Command Edit Time: コマンド発行時間 標準受付の状態 reception ユーザ定義受付の状態</p>

説明

表示項目	説明
標準受付の状態	<p>標準受付の状態を示します。次のどれかが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • active: 開始状態 • inactive: 停止状態 • starting: 起動処理中 • startfailed: 起動失敗状態 • stopping: 停止処理中 • stopfailed: 停止失敗状態 • unknown: 取得失敗
ユーザ定義受付の状態	<p>ユーザ定義受付の状態を示します。次のどれかが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • active: 開始状態 • inactive: 停止状態 • starting: 起動処理中 • startfailed: 起動失敗状態 • stopping: 停止処理中 • stopfailed: 停止失敗状態 • deleting: 削除処理中 • undeployed: 配備前 • unknown: 取得失敗

(4)HCSC コンポーネントの状態 (-csc 指定時)

- -type compo 指定時

```
Command Edit Time:コマンド発行時間
ビジネスプロセスの状態 ビジネスプロセスのサービスID 更新時間

サービスアダプタの状態 サービスアダプタのサービスID 更新時間

ユーザ定義受付の状態 ユーザ定義受付の受付ID 更新時間
```

注 開発環境で HCSC コンポーネントをパッケージングした時間です。したがって、開発環境のマシンの時間に依存します。

説明

表示項目	説明
<ul style="list-style-type: none"> • ビジネスプロセスの状態 • サービスアダプタの状態 • ユーザ定義受付の状態 	<p>ビジネスプロセス，サービスアダプタ，およびユーザ定義受付の状態を示します。次のどれかが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • active：開始状態 • inactive：停止状態 • starting：起動処理中 • startfailed：起動失敗状態 • stopping：停止処理中 • stopfailed：停止失敗状態 • deleting：削除処理中 • undeployed：配備前 • unknown：取得失敗

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

cscsvctl (サービス情報の管理)

形式

```
cscsvctl [-h]
          -user <ログインユーザID>
          -pass <ログインパスワード>
          {-getfile <サービス情報変更定義ファイル名>
           | -setfile <サービス情報変更定義ファイル名>
           | -cluster <クラスタ名>
          -name <サービスアダプタのサービスID>
          -props <プロパティ>}
```

機能

cscsvctl コマンドには、次に示す機能があります。

- サービス情報変更定義ファイルを出力する機能 (-getfile オプションを使用)
- サービス情報変更定義ファイルを入力し、サービス情報の変更を設定する機能 (-setfile オプションを使用)
- サービス情報変更定義ファイルを使用せずに、サービス情報の変更を設定する機能 (-cluster, -name, および -props オプションを使用)

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~ <半角英数字およびアンダーライン (<_>) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~ <半角英数字およびアンダーライン (<_>) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-getfile <サービス情報変更定義ファイル名> ((1 - 200 バイト))

出力するサービス情報変更定義ファイル名を指定します。絶対パスまたは相対パスで指定します。指定したファイルまでのディレクトリがない場合、異常終了します。指定したファイルがすでにある場合、上書きされます。指定したファイル名と同名のディレクトリがある場合は、異常終了します。

`-setfile < サービス情報変更定義ファイル名 > ((1 - 200 バイト))`

入力するサービス情報変更定義ファイル名を指定します。絶対パスまたは相対パスで指定します。指定したファイルがない場合、異常終了します。

`-cluster < クラスタ名 > ~ < 半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 8 文字))`

サービス情報を変更するサービスアダプタがあるクラスタ名を指定します。

`-name < サービスアダプタのサービス ID > ~ ((1 文字以上))`

サービス情報を変更するサービスアダプタのサービス ID を指定します。

`-props < プロパティ > ~ ((0 文字以上))`

操作対象に渡す情報を `<key>=<value>` 形式で指定します。`<key>` はサービス情報表示コマンド (`cscsvcls`) で表示されるキー名を使用します。指定値はダブルクォーテーション (`"`) で囲みます。また、`-name` オプションで指定したアダプタに関するサービス情報であれば複数指定できます。複数指定する場合、指定値をコンマ (`,`) で区切ります (例 : `-props "a=b,c=d"`)。なお、サービス情報表示コマンド (`cscsvcls`) で確認した `LocalCall` の値が `false` の場合は `true` へ変更しないでください。

入力例

(1) サービス情報変更定義ファイルを出力する場合

```
cscsvccctl -getfile service_info.txt
```

(2) サービス情報変更定義ファイルを入力し、サービス情報の変更を設定する場合

```
cscsvccctl -setfile service_info.txt
```

(3) サービス情報変更定義ファイルを使用せずに、サービス情報の変更を設定する場合

```
cscsvccctl -cluster MyUnit -name adapter1 -props
"Url=aaa,ReadTimeout=60"
```

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

10. コマンド

cscsvcttl (サービス情報の管理)

注意事項

-setfile や -name オプションで指定したサービスアダプタが配備中 (HCSC サーバがクラスタ構成の場合, クラスタ内の HCSC サーバが配備中) の場合, エラーになります。

cscsvcls (サービス情報の表示)

形式

```
cscsvcls [-h]
         -user <ログインユーザID>
         -pass <ログインパスワード>
         [-detail]
```

機能

サービス情報を標準出力に出力します。また、cscsvctl コマンドの引数に指定する値を調べます。

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-detail

開発時に設定した値を表示する場合に指定します。

出力形式

-detail を指定しない場合

```
Command Edit Time:コマンド発行時間
Cluster(name: クラスタ名)
- ServiceAdapter(ServiceID: サービスアダプタのサービスID, ServiceType: サービスアダプタ種別)
  属性名: 値
- ServiceAdapter(ServiceID: サービスアダプタのサービスID, ServiceType: サービスアダプタ種別)
  属性名: 値
```

10. コマンド

cscsvcls (サービス情報の表示)

-detail を指定する場合

```

Command Edit Time:コマンド発行時間
Cluster(name: クラスタ名)
- ServiceAdapter(ServiceID: サービスアダプタのサービスID, ServiceType: サービスアダプタ種別)
  属性名(def): 開発時に設定した値
  属性名(set): 値
- ServiceAdapter(ServiceID: サービスアダプタのサービスID, ServiceType: サービスアダプタ種別)
  属性名(def): 開発時に設定した値
  属性名(set): 値
    
```

説明

表示項目	説明
Command Edit Time	コマンド発行時間を示します。 java.text.SimpleDateFormat で定義されているフォーマットに、 YYYY/MM/DD hh:mm:ss.SSS 形式で表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> • YYYY: 西暦 • MM: 月 • DD: 日 • hh: 時 • mm: 分 • ss: 秒 • SSS: ミリ秒
Cluster (name)	クラスタ名を示します。
ServiceAdapter (ServiceID)	サービスアダプタのサービス ID を示します。
ServiceType	サービスアダプタ種別を示します。次のどれかが出力されます。 <ul style="list-style-type: none"> • SessionBean: 同期 (SessionBean) • WebService: 同期 (Web サービス) • MDB_WSR: 非同期 (MDB (WS-R)) • MDB_DBQ: 非同期 (MDB (DB キュー))
属性名	現在有効なサービス情報が出力されます。
属性名 (def)	サービス情報変更定義に設定されているサービス情報が出力されます。
属性名 (set)	開発時に設定したサービス情報が出力されます。

サービス情報の出力形式を次の表に示します。

表 10-3 サービス情報の出力形式

サービスアダプタ種別	出力形式 (出力順)	サービス情報変更定義ファイルの相当する属性
WebService	ConnectTimeout	c4web.application.socket_connect_timeout
	ReadTimeout	c4web.application.socket_read_timeout
	WriteTimeout	c4web.application.socket_write_timeout

サービスアダプタ種別	出力形式 (出力順)	サービス情報変更定義ファイルの相当する属性
	Url	url
SessionBean	Timeout	c4web.application.ejb_j2ee_timeout
	LookupName	lookupName
	Url	url
MDB_WSR	LocalCall	local_call
	QueueName	queue_name
	Url	url
	MaxMessageNum	max_message_num
	QosInOrder	qos_in_order
	RdAreaName	rdarea_name
MDB_DBQ	QueueName	queue_name

注 設定されていない場合は、空白が表示されます。

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

cscsvconfig (HCSC サーバランタイムの定義)

形式

```
cscsvconfig [-h]
             -user <ログインユーザID>
             -pass <ログインパスワード>
             {-operation get -csc <HCSCサーバ名>
              | -operation set -propfile <HCSCサーバランタイム定義ファイル名>
              {-csc <HCSCサーバ名> | -cluster <クラスタ名>}}
```

機能

サーバセットアップ後の HCSC サーバに対して、定義情報の取得や変更をします。

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-operation {get | set}

このコマンドの操作を指定します。

- get
指定した HCSC サーバに設定されている定義が標準出力に出力されます。
- set
-propfile オプションで指定したファイルの内容を、指定した HCSC サーバに反映されます。

-csc <HCSC サーバ名> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 8 文字))

定義情報の取得や変更の対象となる HCSC サーバ名を指定します。

-propfile <HCSC サーバランタイム定義ファイル名> ~ ((1 - 200 バイト))

HCSC サーバに定義する定義一覧を記載したファイル名を相対パス、または絶対パスで指定します。このオプションは、-operation オプションで set を指定したときに有効になります。

-cluster <クラスタ名> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 8 文字))

HCSC サーバ定義を一括更新するクラスタ名を指定します。-operation で set を指定したときに有効になります。ただし、クラスタ種別が HA のときにこのオプションを指定した場合はエラーになります。

入力例

(1)HCSC サーバ名 MyCSC の定義を取得する場合

```
cscsvconfig -user admin -pass admin -csc MyCSC -operation get
```

(2)HCSC サーバ名 MyCSC の定義を設定する場合

```
cscsvconfig -user admin -pass admin -csc MyCSC -operation set  
-propfile config.properties
```

(3)MyUnit クラスタに存在するすべての HCSC サーバの定義を変更する場合

```
cscsvconfig -user admin -pass admin -cluster MyUnit -operation  
set -propfile config.properties
```

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
2	通信タイムアウトが発生しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

cscsvsetup (HCSC サーバのセットアップ)

形式

```
cscsvsetup [-h]
            -user <ログインユーザID>
            -pass <ログインパスワード>
            [-csc <HCSCサーバ名>]
            [-cluster <クラスタ名>]
            -propfile <HCSCサーバ構成定義ファイル名>
```

機能

HCSC サーバのセットアップをします。

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-csc <HCSC サーバ名> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 8 文字))

セットアップする HCSC サーバ名を指定します。セットアップ済みの HCSC サーバ名と大文字、小文字だけが異なる HCSC サーバ名を使用しないでください。使用すると、データベーステーブル名やキュー名が重複してセットアップが失敗することがあります。このオプションの指定を省略した場合、HCSC サーバ構成定義ファイルに指定した HCSC サーバ名が仮定されます。

-cluster <クラスタ名> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 8 文字))<<-csc オプションで指定したサーバ名>>

セットアップする HCSC サーバが属するクラスタ名を指定します。クラスタ間で一意になるクラスタ名を指定します。セットアップ済みのクラスタ名と大文字、小文字だけが

異なるクラスタ名を使用しないでください。使用すると、データベーステーブル名やキュー名が重複してセットアップが失敗することがあります。このオプションの指定を省略した場合、HCSC サーバ構成定義ファイルに指定したクラスタ名が仮定されます。

-propfile <HCSC サーバ構成定義ファイル名> ~ ((1 - 200 バイト))

HCSC サーバ構成定義ファイル名を相対パス、または絶対パスで指定します。

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
2	通信タイムアウトが発生しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- 追加セットアップをする場合は、HCSC サーバ、各ビジネスプロセス、および各サーバアダプタが停止してからコマンドを実行してください。停止していない場合はエラーになります。
- 同じクラスタ内では、データベースおよび Cosminexus RM を使用するかどうかの設定を一致させてください。

cscsvstart (HCSC サーバの起動)

形式

```
cscsvstart [-h]
            -user <ログインユーザID>
            -pass <ログインパスワード>
            { -csc <HCSCサーバ名> | -cluster <クラスタ名> }
            [ { -logical <論理サーバ名> | -system } ]
```

機能

HCSC サーバ、または論理サーバを起動します。

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-csc <HCSC サーバ名> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 8 文字))

起動する HCSC サーバ名を指定します。

-cluster <クラスタ名> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 8 文字))

HCSC サーバを一括起動するクラスタ名を指定します。クラスタ種別が HA のときに -cluster を指定するとエラーになります。

-logical <論理サーバ名> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 128 文字))

起動する論理サーバ名を指定します。このオプションで設定した論理サーバの種類とその動作を次の表に示します。なお、このオプションを指定した場合、HCSC サーバは起動しません。

表 10-4 -logical オプションに指定した論理サーバの種類とその動作 (起動時)

項番	指定した論理サーバの種類	動作
1	PRF	PRF を起動します。
2	スマートエージェント	スマートエージェントを起動します。
3	CTM ドメインマネージャ	CTM ドメインマネージャを起動します。
4	CTM デーモン	CTM デーモンを起動します。
5	J2EE サーバ	J2EE アプリケーションを起動しないで J2EE サーバを起動します。
6	Web サーバ	Web サーバを起動します。

注 HCSC サーバが起動していない状態でコマンドを実行します。

-system

HCSC サーバの起動と同時に、HCSC-Manager 定義ファイルの cscmng.server.<HCSC サーバ名>.system で定義した論理サーバを起動します。

入力例

(1)HCSC サーバ MyCSC を起動する場合

```
cscsvstart -user admin -pass admin -csc MyCSC
```

(2)MyUnit クラスタ下にある HCSC サーバを一括起動する場合

```
cscsvstart -user admin -pass admin -cluster MyUnit
```

(3)MyUnit クラスタ下にある HCSC サーバを論理サーバと同時に一括起動する場合

```
cscsvstart -user admin -pass admin -cluster MyUnit -system
```

(4)MyUnit クラスタ下にある論理サーバ名 PRF を一括起動する場合

```
cscsvstart -user admin -pass admin -cluster MyUnit -logical PRF
```

(5)J2EE アプリケーションを起動しないで、HCSC サーバ MyCSC にある J2EE サーバ MyServer を起動する場合

```
cscsvstart -user admin -pass admin -csc MyCSC -logical MyServer
```

10. コマンド

cscsvstart (HCSC サーバの起動)

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
2	通信タイムアウトが発生しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- このコマンドは、セットアップ済みで、かつ停止済みの HCSC サーバに対して実行してください。
- このコマンドは起動状態の HCSC サーバに対して実行してもエラーになりません。
- `-cluster` を指定してエラーになった場合、結果を `cscstatus` コマンドで確認し、障害要因を取り除いたあとに、再度コマンドを実行してください。

cscsvstop (HCSC サーバの停止)

形式

```
cscsvstop [-h]
           -user <ログインユーザID>
           -pass <ログインパスワード>
           {-csc <HCSCサーバ名> | -cluster <クラスタ名>}
           [{-logical <論理サーバ名> | -system}]
           [-force]
```

機能

HCSC サーバを停止します。

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-csc <HCSC サーバ名> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 8 文字))

停止する HCSC サーバ名を指定します。

-cluster <クラスタ名> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 8 文字))

HCSC サーバを一括停止するクラスタ名を指定します。クラスタ種別が HA のときに -cluster を指定するとエラーになります。

-logical <論理サーバ名> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 128 文字))

停止する論理サーバ名を指定します。このオプションで設定した論理サーバの種類とその動作を次の表に示します。なお、このオプションを指定した場合、HCSC サーバは停

10. コマンド

cscsvstop (HCSC サーバの停止)

止しません。また、`-force` は無効になります。

表 10-5 `-logical` オプションに指定した論理サーバの種類とその動作 (停止時)

項番	指定した論理サーバの種類	動作
1	PRF	PRF を停止します。
2	スマートエージェント	スマートエージェントを停止します。
3	CTM ドメインマネージャ	CTM ドメインマネージャを停止します。
4	CTM デーモン	CTM デーモンを停止します。
5	J2EE サーバ	J2EE サーバを停止します。
6	Web サーバ	Web サーバを停止します。

注 HCSC サーバが起動していない状態でコマンドを実行します。

`-system`

HCSC サーバの停止と同時に、HCSC-Manager 定義ファイルの `cscmng.server.<HCSC サーバ名>.system` で定義した論理サーバを停止します。

`-force`

強制停止をします。MBean 側のステータスを初期化します。

入力例

(1)HCSC サーバ MyCSC を停止する場合

```
cscsvstop -user admin -pass admin -csc MyCSC
```

(2)MyUnit クラスタ下にある HCSC サーバを一括強制停止する場合

```
cscsvstop -user admin -pass admin -cluster MyUnit -force
```

(3)MyUnit クラスタ下にある HCSC サーバを論理サーバと同時に一括停止する場合

```
cscsvstop -user admin -pass admin -cluster MyUnit -system
```

(4)MyUnit クラスタ下にある論理サーバ名 PRF を一括停止する場合

```
cscsvstop -user admin -pass admin -cluster MyUnit -logical PRF
```

(5)HCSC サーバ MyCSC にある J2EE サーバ MyServer を停止する場合

```
cscsvstop -user admin -pass admin -csc MyCSC -logical MyServer
```

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
2	通信タイムアウトが発生しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- このコマンドは、起動状態の HCSC サーバに対して実行してください。
- `-cluster` を指定してエラーになった場合、結果を `cscstatus` コマンドで確認し、障害要因を取り除いたあとに、再度コマンドを実行してください。

cscsvunsetup (HCSC サーバのアンセットアップ)

形式

```
cscsvunsetup [-h]
               -user <ログインユーザID>
               -pass <ログインパスワード>
               -csc <HCSCサーバ名>
               [-ignore]
```

機能

HCSC サーバのアンセットアップをします。

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-csc <HCSC サーバ名> ~ <半角英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 8 文字))

アンセットアップする HCSC サーバ名を指定します。

-ignore

実行環境側のアンセットアップに失敗した場合もリポジトリの情報を更新する場合に指定します。ハードディスク障害やアンセットアップ時の通信障害などによる実行環境とリポジトリ環境の不整合を調整するために使用します。HCSC コンポーネントが配備されていた場合は、リポジトリの情報は更新されません。HCSC コンポーネントの情報を削除する場合は、csccompounddeploy コマンドで -ignore オプションを指定して削除してください。

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
2	通信タイムアウトが発生しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

HCSC サーバを停止後、各 HCSC コンポーネント、および HCSC サーバ間連携が未配備、または未セットアップ状態にしてからこのコマンドを実行してください。HCSC サーバが起動しているときや、各 HCSC コンポーネント、および HCSC サーバ間連携が配備状態、またはセットアップ状態の場合はエラーになります。

cscutil (各種操作)

形式

```
cscutil [-h]
        -user <ログインユーザID>
        -pass <ログインパスワード>
        { -mng <Cosminexus Manager名>
          | -host <IPアドレス>:<ポート番号> -mnguser <管理ユーザID>
            [-mngpass <管理ユーザパスワード>] }
        -target {server | compo | compo_urecp | request_service
                 | connect_service | connect}
        -operation {start | stop | get_setup_info | get_info
                    | get_bp_info | get_adapter_info | set_info | delete_info}
        { -props <プロパティ> | -propfile <プロパティファイル名> }
        [-binary <ファイル名>]
```

機能

次に示す操作ができます。

- HCSC サーバの起動
- ビジネスプロセス・サービスアダプタの開始
- 標準受付の開始
- ユーザ定義受付の開始
- 連携受付の開始
- 連携の開始
- HCSC サーバセットアップの情報取得
- HCSC サーバの情報取得
- 連携の情報取得
- ビジネスプロセスの情報取得
- サービスアダプタの情報取得
- ユーザ定義受付の情報取得
- 連携の停止
- 連携受付の停止
- 標準受付の停止
- ユーザ定義受付の停止
- ビジネスプロセス・サービスアダプタの停止
- HCSC サーバの停止

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~ <半角英数字およびアンダーライン (<_>) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~ <半角英数字およびアンダーライン (<_>) > ((1 - 16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-mng <Cosminexus Manager 名> ~ <半角英数字およびアンダーライン (<_>) > ((1 - 16 文字))

Cosminexus Manager のマネージャ識別名を指定します。HCSC サーバ構成定義ファイルで指定した Cosminexus Manager 名を指定してください。

-host <ホスト名または IP アドレス> : <ポート番号> ~ <ホスト名または IP アドレス : 文字列, ポート番号 : 数字> ((文字列 : 1 文字以上, ポート番号 : 1 - 65535))

Manager リモート管理機能のホスト名 (または IP アドレス) とポート番号を「:」で連結して指定します。IP アドレス, ポート番号ともに省略はできません。

-mnguser <管理ユーザ ID> ~ ((1 文字以上))

Cosminexus Manager の管理ユーザ ID を指定します。

-mngpass <管理ユーザパスワード> ~ ((1 文字以上))

Cosminexus Manager の管理ユーザ ID に対するパスワードを指定します。変更する Cosminexus Manager のユーザ ID にパスワードを設定している場合だけ、このオプションを指定できます。

-target {server | compo | compo_urecp | request_service | connect_service | connect}

実行する操作対象を指定します。

- server
実行する操作対象が、HCSC サーバの場合に指定します。
- compo
実行する操作対象が、ビジネスプロセスまたはアダプタの場合に指定します。
- compo_urecp

10. コマンド

cscutil (各種操作)

実行する操作対象が、ユーザ定義受付の場合に指定します。

- request_service

実行する操作対象が、標準受付の場合に指定します。

- connect_service

実行する操作対象が、HCSC サーバ連携受付の場合に指定します。

- connect

実行する操作対象が、連携の場合に指定します。

-operation {start | stop | get_setup_info | get_info | get_bp_info | get_adapter_info}

実行する操作を指定します。

- start

指定した操作対象を開始する場合に指定します。

- stop

指定した操作対象を停止する場合に指定します。

- get_setup_info

指定した HCSC サーバのセットアップ情報を取得する場合に指定します。

- get_info

指定した HCSC サーバや連携の情報を取得する場合に指定します。

- get_bp_info

指定したビジネスプロセスの情報を取得する場合に指定します。

- get_adapter_info

指定したアダプタの情報を取得する場合に指定します。

-target オプションと -operation オプションの値によって実施できる操作を次の表に示します。

表 10-6 -target オプションと -operation オプションの値によって実施できる操作

-target オプション	-operation オプション	操作内容
server	start	HCSC サーバの起動
compo	start	ビジネスプロセスの開始
compo	start	アダプタの開始
request_service	start	標準受付の開始
connect_service	start	HCSC サーバ連携受付の開始
connect	start	HCSC サーバ連携の開始
connect	stop	HCSC サーバ連携の停止
connect_service	stop	HCSC サーバ連携受付の停止
request_service	stop	標準受付の停止
compo	stop	アダプタの停止
compo	stop	ビジネスプロセスの停止

-target オプション	-operation オプション	操作内容
server	stop	HCSC サーバの停止
server	get_setup_info	HCSC サーバのセットアップ情報取得
server	get_info	HCSC サーバの情報取得
connect	get_info	HCSC サーバ連携の情報取得
compo	get_bp_info	ビジネスプロセスの情報取得
compo	get_adapter_info	アダプタの情報取得
compo_urecp	get_info	ユーザ定義受付の情報取得
compo_urecp	start	ユーザ定義受付の開始
compo_urecp	stop	ユーザ定義受付の停止

-props <プロパティ> ~ ((0 文字以上))

指定した操作対象やオペレーションに指定する引数を「<キー値>=<指定値>」の形式で指定します。指定値はダブルクォーテーション(“)で囲みます。

ただし、キー値および指定値には、次に示す文字を指定できません。指定すると、動作が不定となります。

- ダブルクォーテーション(“)
- 等号(=)
- コンマ(,)

また、複数指定する場合、各引数はコンマ(,)で区切ります。

(例) -props "J2EESrvName=HCSC サーバをセットアップした J2EE サーバ名, CSCSrvName= 起動する HCSC サーバ名"

表 10-7 操作対象や操作に対する -props オプションへ指定するプロパティ

操作内容	-target	-operation	-props で指定するプロパティ
HCSC サーバの起動	server	start	<ul style="list-style-type: none"> • J2EESrvName=HCSC サーバをセットアップした J2EE サーバ名 • CSCSrvName= 起動する HCSC サーバ名
ビジネスプロセスの開始	compo	start	<ul style="list-style-type: none"> • AdapterName= 起動するビジネスプロセスのサービス ID • ServiceKind= アダプタ種別 bp: ビジネスプロセス • J2EESrvName= アダプタを起動する J2EE サーバ名 • CSCSrvName= アダプタを起動する HCSC サーバ名

10. コマンド
cscutil (各種操作)

操作内容	-target	-operation	-props で指定するプロパティ
アダプタの開始	compo	start	<ul style="list-style-type: none"> • AdapterName= 起動するサービスアダプタのサービス ID • ServiceKind= アダプタ種別 serviceAdapter : サービスアダプタ • J2EESrvName= アダプタを起動する J2EE サーバ名 • CSCSrvName= アダプタを起動する HCSC サーバ名
標準受付の開始	request_service	start	<ul style="list-style-type: none"> • J2EESrvName=HCSC サーバが起動している J2EE サーバ名 • CSCSrvName= リクエスト受付ができる HCSC サーバ名
HCSC サーバ連携受付の開始	connect_service	start	<ul style="list-style-type: none"> • J2EESrvName=J2EE サーバ名 • CSCSrvName= 連携受付を開始する連携元 HCSC サーバ名
HCSC サーバ連携の開始	connect	start	<ul style="list-style-type: none"> • CSCSrvName= 連携元 HCSC サーバ名 • ConnectClusterName= 連携先クラスタ名
HCSC サーバ連携の停止	connect	stop	<ul style="list-style-type: none"> • CSCSrvName= 対象 HCSC サーバ名 • ConnectClusterName= 連携を終了する連携先クラスタ名
HCSC サーバ連携受付の停止	connect_service	stop	<ul style="list-style-type: none"> • J2EESrvName= インポートする J2EE サーバ名 • CSCSrvName= 連携受付を停止する連携元 HCSC サーバ名 • OptionFlag= 停止モード NORMAL_OPTION : 通常停止 WAIT_OPTION : オプション監視停止
標準受付の停止	request_service	stop	<ul style="list-style-type: none"> • J2EESrvName= インポートする J2EE サーバ名 • CSCSrvName= リクエスト抑止する HCSC サーバ名 • ForceFlag= 強制停止フラグ NORMAL_OPTION : 通常停止 WAIT_OPTION : 計画停止 FORCE_OPTION : 強制停止
アダプタの停止	compo	stop	<ul style="list-style-type: none"> • J2EESrvName= アダプタを停止する J2EE サーバ名 • CSCSrvName= アダプタを停止する HCSC サーバ名 • AdapterName= 停止するサービスアダプタのサービス ID

操作内容	-target	-operation	-props で指定するプロパティ
ビジネスプロセスの停止	compo	stop	<ul style="list-style-type: none"> • J2EESrvName= アダプタを停止する J2EE サーバ名 • CSCSrvName= アダプタを停止する HCSC サーバ名 • AdapterName= 停止するビジネスプロセスのサービス ID
HCSC サーバの停止	server	stop	<ul style="list-style-type: none"> • J2EESrvName=HCSC サーバをセットアップした J2EE サーバ名 • CSCSrvName= 停止する HCSC サーバ名, • ForceFlag= 強制停止フラグ false : 通常停止 true : 強制停止
HCSC サーバのセットアップ情報取得	server	get_setup_info	<ul style="list-style-type: none"> • CSCSrvName=HCSC サーバ名
HCSC サーバの情報取得	server	get_info	<ul style="list-style-type: none"> • CSCSrvName= 状態表示する HCSC サーバ名
HCSC サーバ連携の情報取得	connect	get_info	<ul style="list-style-type: none"> • CSCSrvName= 連携状態を表示する連携元 HCSC サーバ名 • ConnectClusterName= 連携先のクラスタ名
ビジネスプロセスの情報取得	compo	get_bp_info	<ul style="list-style-type: none"> • CSCSrvName=HCSC サーバ名 • AdapterName= ビジネスプロセスのサービス ID
アダプタの情報取得	compo	get_adapter_info	<ul style="list-style-type: none"> • CSCSrvName=HCSC サーバ名 • AdapterName= サービスアダプタのサービス ID
ユーザ定義受付の情報取得	compo_urecp	get_info	<ul style="list-style-type: none"> • CSCSrvName= ユーザ定義受付の情報を取得する HCSC サーバ名
ユーザ定義受付の開始	compo_urecp	start	<ul style="list-style-type: none"> • CSCSrvName= ユーザ定義受付を開始する HCSC サーバ名 • J2EESrvName= ユーザ定義受付を開始する J2EE サーバ名
ユーザ定義受付の停止	compo_urecp	stop	<ul style="list-style-type: none"> • CSCSrvName= ユーザ定義受付を停止する HCSC サーバ名 • J2EESrvName= ユーザ定義受付を停止する J2EE サーバ名

-propfile <プロパティファイル名> ~ ((1 - 200 バイト))

引数を記述したプロパティファイル名を絶対パス, または相対パスで指定します。J2SE のプロパティファイル形式で指定します。

10. コマンド

cscutil (各種操作)

-binary <ファイル名> ~ ((1 - 200 バイト))

バイナリ形式のファイル名を絶対パス、または相対パスで指定します。このオプションは将来使用するために定義されているオプションです。

入力例

(1) HCSC サーバ MyCSC を起動する場合

```
cscutil -user admin -pass admin -mng MyMNG -target server  
-operation start -props "CSCSrvName=MyCSC, J2EESrvName=MyServer"
```

(2) プロパティファイル cscutil.properties を使用して、HCSC サーバ MyCSC を起動する場合

```
cscutil -user admin -pass admin -host 10.209.13.165:9001  
-mnguser admin -mngpass admin -target server -operation start  
-propfile cscutil.properties
```

cscutil.properties の中身

```
CSCSrvName=MyCSC  
J2EESrvName=MyServer
```

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
2	通信タイムアウトが発生しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

cscutil コマンドを実行する場合、参照機能 (HCSC サーバ情報の参照など) は、複数同時に実行できます。

運用機能 (HCSC サーバの起動やサービスアダプタの停止など) を複数同時に実行できません。

csmdeletehistory (電文の実行履歴情報テーブルのレコードの削除)

形式

```
csmdeletehistory [<HCSCサーバ名>]
                  {-t <削除開始日時> | -d <日数>}
                  [{ -m <メッセージ共通ID>
                    | -c <クライアント関連ID>
                    | -a <サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービスID> } ]
                  [-u <DBユーザID> [-p <DBパスワード>]]
```

機能

データベースを使用する構成で HCSC サーバをセットアップした場合、電文の実行履歴情報テーブル中のレコードを削除します。削除したい日時または日数と削除対象（メッセージ共通 ID、クライアント関連 ID、またはサービスアダプタもしくはビジネスプロセスのサービス ID）を組み合わせて指定できます。HCSC サーバが停止している場合でも削除できます。

引数

<HCSC サーバ名> ~ <英数字およびアンダーライン (<_>) > ((1 - 8 文字))

自 HCSC サーバ名を指定します。CSM_SV_NAME 環境変数に HCSC サーバ名を設定すると、このオプションの指定を省略できます。

-t <削除開始日時> ~ <半角数字>

指定した日時より以前の実行履歴レコードを削除します。なお、利用できる日時の形式は次の形式です。また、日時には存在するものを指定してください。

- 削除開始日時：YYYYMMDDhhmmss の形式で指定してください。

YYYY：西暦 (1970 - YYYY)

MM：月 (01 - MM - 12)

DD：日 (01 - DD - 31)

hh：時 (00 - hh - 23)

mm：分 (00 - mm - 59)

ss：秒 (00 - ss - 59)

-d <日数> ~ <整数> ((0 - 365))

指定した日数より以前の実行履歴レコードを削除します。日数を日単位で指定してください。0 を指定した場合、削除対象のすべての実行履歴を削除します。

10. コマンド

csmdeletehistory (電文の実行履歴情報テーブルのレコードの削除)

-m <メッセージ共通 ID> ~ <英数字および記号, コロン (:), およびピリオド (.)>
((1 - 75 文字))

指定したメッセージ共通 ID に合致する実行履歴レコードを削除します。

-c <クライアント関連 ID> ~ <英数字および記号> ((1 - 255 文字))

指定したクライアント関連 ID に合致する実行履歴レコードを削除します。

-a <サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービス ID> ~ <英数字およびアン
ダースライン (<_>) > ((1 - 8 文字))

指定したサービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービス ID に合致する実行履歴レ
コードを削除します。

-u <DB ユーザ ID>

HCSC サーバで使用しているデータベースのユーザ ID を指定します。HCSC サーバが
起動している場合は、このオプションを指定しても無効になります。HCSC サーバが停
止している場合は、必ずこのオプションを指定します。ただし、次の条件を満たす場合
は、このオプションを省略できます。

- HCSC サーバセットアップ定義ファイルのデータベースの接続情報
(jdbc-dbconnectinfo) に環境変数グループを指定している場合
- jdbc-dbconnectinfo に指定した環境変数グループで PDUSER (認可識別子およびパス
ワード) を設定している場合

また、HCSC サーバが停止している場合でも、データベースの設定で認証が必要ないと
きは、このオプションを指定しないでください。

-p <DB パスワード >

HCSC サーバで使用しているデータベースのパスワードを指定します。HCSC サーバが
起動している場合は、このオプションを指定しても無効になります。HCSC サーバが停
止している場合は、必ずこのオプションを指定します。ただし、次の条件を満たす場合
は、このオプションを省略できます。

- HCSC サーバセットアップ定義ファイルのデータベースの接続情報
(jdbc-dbconnectinfo) に環境変数グループを指定している場合
- jdbc-dbconnectinfo に指定した環境変数グループで PDUSER (認可識別子およびパス
ワード) を設定している場合

また、HCSC サーバが停止している場合でも、データベースの設定で認証が必要ないと
きは、このオプションを指定しないでください。

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- 入力形式を間違えた場合はエラーになります。
- データベースを使用しない構成で HCSC サーバをセットアップした場合、このコマンドは使用できません。

csmlshistory (電文の実行履歴情報の表示)

形式

```
csmlshistory [<HCSCサーバ名>]
             [-c <クライアント関連ID>]
             [-m <メッセージ共通ID>]
             [-i <サービスリクエストID>]
             [-t <照会開始日時>, <照会終了日時>]
             [-rs <サービスリクエストからの入力サービス名>]
             [-s <サービス名>]
             [-jm <JMSメッセージID>]
             [-jc <JMS関連識別子>]
             [-l {new | all}]
             [-d {nml | ext | msg}]
             [-ul <電文データ長>]
             [-r <表示レコード数>]
             [-k {list | count}]
             [-u <DBユーザID> [-p <DBパスワード>]]
```

注 一つ以上指定します。すべてを省略することはできません。

機能

データベースを使用する構成で HCSC サーバをセットアップした場合、電文の実行履歴の情報を表示します。HCSC サーバが停止している場合でも表示できます。

引数

<HCSC サーバ名> ~ <英数字およびアンダーライン (<_>) > ((1 - 8 文字))

自 HCSC サーバ名を指定します。CSM_SV_NAME 環境変数に HCSC サーバ名を設定すると、このオプションの指定を省略できます。

-c <クライアント関連 ID> ~ <英数字および記号> ((1 - 255 文字))

クライアント関連 ID で検索する場合に指定します。

-m <メッセージ共通 ID> ~ <英数字および記号, コロン (:), およびピリオド (<.>) > ((1 - 75 文字))

メッセージ共通 ID で検索する場合に指定します。

-i <サービスリクエスト ID> ~ <英数字および記号, コロン (:), およびピリオド (<.>) > ((1 - 84 文字))

サービスリクエスト ID で検索する場合に指定します。

-t < 照会開始日時 > , < 照会終了日時 > ~ < 半角数字 >

開始日時, 終了日時で検索する場合に指定します。照会開始日時と照会終了日時の間のコンマ (,) の前後に余分なスペースを指定しないでください。なお, 利用できる日時の形式は次の形式です。また, 日時には存在するものを指定してください。

- 照会開始日時: YYYYMMDDhhmmss の形式で指定してください。
- 照会終了日時: YYYYMMDDhhmmss の形式で指定してください。

YYYY: 西暦 (1970 YYYY)

MM: 月 (01 MM 12)

DD: 日 (01 DD 31)

hh: 時 (00 hh 23)

mm: 分 (00 mm 59)

ss: 秒 (00 ss 59)

-rs < サービスリクエストからの入力サービス名 > ~ < XML スキーマの NCName 型の文字列 > ((1 - 64 バイト))

サービスリクエストの入力サービス名で検索する場合に指定します。

-s < サービス名 > ~ < XML スキーマの NCName 型の文字列 > ((1 - 64 バイト))

呼び出し先のサービス名で検索する場合に指定します。

-jm < JMS メッセージ ID > ~ < 英数字および記号, コロン (:), およびピリオド (.) > ((1 - 255 文字))

JMS ヘッダの JMSMessageID の値で検索する場合に指定します。

-jc < JMS 関連識別子 > ~ < 文字列 > ((1 - 255 文字))

JMS ヘッダの JMSCorrelationID の値で検索する場合に指定します。

-l {new | all} ~ <<new>>

実行履歴情報の検索方法を指定します。

- new
HCSC メッセージ共通 ID とサービスリクエスト ID が一致する実行履歴情報のうち, 最新の実行履歴情報だけを表示します。例えば, あるリクエストによって実行履歴に送信履歴と応答履歴が格納された場合, 応答履歴だけが表示されます。
- all
該当するすべての実行履歴情報を表示します。重複した情報も含めて表示します。

-d {nml | ext | msg} ~ <<nml>>

実行履歴の表示方法を指定します。

- nml

10. コマンド

csmlshistory (電文の実行履歴情報の表示)

基本情報だけを表示します。

- ext
電文データを除くすべての情報を表示します。
- msg
電文データを含むすべての情報を表示します。

`-ul <電文データ長> ~ ((0 - 65535 バイト)) <<1024>>`

出力する電文データ (ユーザ電文) の上限値を指定します。このオプションは `-d` オプションに `msg` を指定したときだけ有効になります。また、`0` を指定した場合は上限値がなくなります。

`-r <表示レコード数> ~ <整数> ((1 - 1000)) <<100>>`

表示するレコード数を指定します。該当するレコード数が指定値より小さい場合は、該当するレコード数だけ表示します。

`-k {list | count} <<list>>`

指定した条件を満たす履歴情報について、内容を表示するか、またはエントリ数を表示するかを指定します。

- list
履歴情報の内容を表示します。該当する情報が存在しない場合、情報は表示されません。
- count
履歴情報のエントリ数を表示します。count を指定した場合は、`-d` オプション、`-ul` オプション、および `-r` オプションの値は無効になります。

`-u <DB ユーザ ID>`

HCSC サーバで使用しているデータベースのユーザ ID を指定します。HCSC サーバが起動している場合は、このオプションを指定しても無効になります。HCSC サーバが停止している場合は、必ずこのオプションを指定します。ただし、次の条件を満たす場合は、このオプションを省略できます。

- HCSC サーバセットアップ定義ファイルのデータベースの接続情報 (`jdbc-dbconnectinfo`) に環境変数グループを指定している場合
- `jdbc-dbconnectinfo` に指定した環境変数グループで `PDUSER` (認可識別子およびパスワード) を設定している場合

また、HCSC サーバが停止している場合でも、データベースの設定で認証が必要ないときは、このオプションを指定しないでください。

`-p <DB パスワード>`

HCSC サーバで使用しているデータベースのパスワードを指定します。HCSC サーバが起動している場合は、このオプションを指定しても無効になります。HCSC サーバが停

止している場合は、必ずこのオプションを指定します。ただし、次の条件を満たす場合は、このオプションを省略できます。

- HCSC サーバセットアップ定義ファイルのデータベースの接続情報 (jdbc-dbconnectinfo) に環境変数グループを指定している場合
- jdbc-dbconnectinfo に指定した環境変数グループで PDUSER (認可識別子およびパスワード) を設定している場合

また、HCSC サーバが停止している場合でも、データベースの設定で認証が必要ないときは、このオプションを指定しないでください。

表示形式

(1) 実行履歴情報の内容 (-k list 指定時)

```
EntryCount : エントリ番号  
TimeStamp : 実行履歴採取時刻  
HCSCServerName : 受付HCSCサーバ名  
ClusterName : サービス部品を呼び出したHCSCサーバのクラスタ名  
HistoryDirection : 実行履歴採取方向  
HCSCCommonID : メッセージ共通ID  
ServiceRequestID : サービスリクエストID  
ClientID : クライアント関連ID  
JMSMessageID : JMSメッセージID  
JMSCorrelationID : JMS関連識別子  
RequestType : サービスリクエスト種別  
RequestProtocolKind : リクエストのプロトコル種別  
RequestServiceName : サービスリクエストからの入力サービス名  
ServiceName : 呼び出し先のサービス名  
ServiceKind : サービスの種別  
AdapterName : サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービスID  
ServiceProtocolKind : サービスアダプタの種類  
ServiceOperationName : サービス部品のオペレーション名  
ConnectProtocolKind : 連携プロトコル種別  
RequestUserTelegramType : ユーザ電文の種別  
ResponseUserTelegramType : ユーザへの応答電文の種別  
BPActivity : ビジネスプロセス用アクティビティ番号  
BPProcessID : ビジネスプロセス用プロセスID  
BPRequestType : ビジネスプロセス用要求タイプ  
ReplyToQueueName : 応答用のキュー名  
RouteHistory : 経路履歴情報  
ErrorCode : エラー情報  
Version : 実行履歴情報コンテナのバージョン番号  
Revision : 実行履歴情報コンテナのリビジョン番号  
UserTelegram : ユーザ電文
```

注 表示するエントリが複数ある場合、エントリごとに改行で区切ります。

10. コマンド

csmlshistory (電文の実行履歴情報の表示)

説明

表示項目	説明	-d オプションを設定した場合に表示される情報		
		基本情報 (nmlを指定)	電文データ 以外の情報 (extを指定)	電文データ を含むすべての情報 (msgを指定)
EntryCount	エントリ番号を示します。			
TimeStamp	実行履歴採取時刻を示します。 java.text.SimpleDateFormat で定義されているフォーマットに、YYYY/MM/DD hh:mm:ss.SSS の形式で表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> • YYYY：西暦 • MM：月 • DD：日 • hh：時 • mm：分 • ss：秒 • SSS：ミリ秒 			
HCSCServerName	受付 HCSC サーバ名を示します。	x		
ClusterName	サービス部品を呼び出した HCSC サーバのクラスタ名を示します。			
HistoryDirection	実行履歴採取方向を示します。次のどれかが表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> • Service Request Direction：送信方向 送信方向には次の二つの場合があります。 <ul style="list-style-type: none"> ・ サービスリクエスト メッセージング基盤 ビジネスプロセス ・ ビジネスプロセス メッセージング基盤 サービス部品 • Service Response Direction：応答方向 応答方向には次の二つの場合があります。 <ul style="list-style-type: none"> ・ ビジネスプロセス メッセージング基盤 サービスリクエスト ・ サービス部品 メッセージング基盤 ビジネスプロセス • Service Error：サービス部品呼び出しエラー • Service Fault：サービス部品またはアダプタからのフォルト 			
HCSCCommonID	メッセージ共通 ID を示します。			
ServiceRequestID	サービスリクエスト ID を示します。			

表示項目	説明	-d オプションを設定した場合に表示される情報		
		基本情報 (nml を指定)	電文データ 以外の情報 (ext を指定)	電文データ を含む すべての情報 (msg を指定)
ClientID	クライアント関連 ID を示します。	×		
JMSMessageID	JMS メッセージ ID を示します。	×		
JMSCorrelationID	JMS 関連識別子を示します。	×		
RequestType	サービスリクエスト種別を示します。次のどれかが表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> ClientProgram : クライアントプログラム BusinessProcess : ビジネスプロセス ConnectHCSCServer : 連携 HCSC サーバ 	×		
RequestProtocolKind	リクエストのプロトコル種別を示します。次のどれかが表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> WebService : 同期 (Web サービス) SessionBean : 同期 (SessionBean) MDB_WSR : 非同期 (MDB (WS-R)) MDB_DBQ : 非同期 (MDB (DB キュー)) BusinessProcess : ビジネスプロセス 	×		
RequestServiceName	サービスリクエストからの入力サービス名を示します。			
ServiceName	呼び出し先のサービス名を示します。			
ServiceKind	サービス部品の種別を示します。次のどれかが表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> ServiceAdapter : サービスアダプタ (単体サービス部品) BusinessProcess : ビジネスプロセス 	×		
AdapterName	サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービス ID を示します。	×		
ServiceProtocolKind	サービスアダプタの種類を示します。次のどれかが表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> WebService : 同期 (Web サービス) SessionBean : 同期 (SessionBean) MDB_WSR : 非同期 (MDB (WS-R)) MDB_DBQ : 非同期 (MDB (DB キュー)) Custom : カスタムアダプタ 	×		
ServiceOperationName	サービス部品のオペレーション名を示します。	×		

10. コマンド

csmlshistory (電文の実行履歴情報の表示)

表示項目	説明	-d オプションを設定した場合に表示される情報		
		基本情報 (nml を指定)	電文 データ 以外の 情報 (extを 指定)	電文 データ を含む すべての 情報 (msg を指定)
ConnectProtocolKind	<p>連携プロトコル種別を示します。次のどれかが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WebService : 同期 (Web サービス) • SessionBean : 同期 (SessionBean) • MDB_WSR : 非同期 (MDB (WS-R)) 	×		
RequestUserTelegramType	<p>ユーザ電文の種別を示します。次のどれかが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • XML : XML 電文 • BINARY : バイナリ電文 	×		
ResponseUserTelegramType	<p>ユーザへの応答電文の種別を示します。次のどれかが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • XML : XML 電文 • BINARY : バイナリ電文 	×		
BPActivity	<p>ビジネスプロセス用アクティビティ番号を示します。ビジネスプロセスのアクティビティインスタンスを識別するための番号です。</p>	×		
BPPProcessID	<p>ビジネスプロセス用プロセス ID を示します。</p>	×		
BPRequestType	<p>ビジネスプロセス用要求タイプを示します。</p>	×		
ReplyToQueueName	<p>応答用のキュー名を示します。</p>	×		
RouteHistory	<p>経路履歴情報を示します。HCSC サーバ名またはサービスアダプタのサービス ID を「->」でつなげた文字列で表示されます。</p>	×		
ErrorCode	<p>エラー情報を示します。</p> <p>HistoryKindDirection=Service Error の場合、次のどれかのエラー理由とエラーコードが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • HCSC サーバ内で検出したエラーのエラー理由 • ビジネスプロセス基盤でのロールバック発生理由 • 電文の二重配信理由 			
Version	<p>実行履歴情報コンテナのバージョン番号を示します。</p>			
Revision	<p>実行履歴情報コンテナのリビジョン番号を示します。</p>			
UserTelegram	<p>ユーザ電文を示します。</p>	×	×	

(凡例)

- : 表示されます
- x : 表示されません

注

HistoryKindDirection=Service Fault の場合、サービス部品やカスタムアダプタからのフォルト情報や SOAP フォルト情報の内容が、次の XML 形式で表示されます。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<cscmsgerror>
<errorcode>エラーコード</errorcode>
<errorstring>エラー情報</errorstring>
<processinstanceID/>
<errordetail>
<cscmsgcode>フォルト情報のFaultCode</cscmsgcode>
<cscmsgstring>フォルト情報のFaultString</cscmsgstring>
<cscmsgactor>フォルト情報のFaultActor</cscmsgactor>
<cscmsgdetail>フォルト情報のDetail</cscmsgdetail>
<exceptionName>フォルト名 ( 例外名 ) </exceptionName>
</errordetail>
</cscmsgerror>
```

(2) 実行履歴情報のエントリ数 (-k count 指定時)

```
RecordCount : レコード数
```

説明

表示項目	説明
RecordCount	レコード数を示します。履歴参照条件に該当したレコードの数が表示されます。

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- 入力形式を間違えた場合はエラーになります。
- データベースを使用しない構成で HCSC サーバをセットアップした場合、このコマンドは使用できません。

csmlslocation (サービスアダプタまたはビジネスプロセスの情報の表示)

形式

```
csmlslocation [<HCSCサーバ名>]
               { {-a <サービスID> | -t <サービス名>}
                 | -k {adp | bp | sg}
                 | -all }
               [ {-l | -r} ]
               [-u <DBユーザID> [-p <DBパスワード>]]
```

機能

配備したサービスアダプタまたはビジネスプロセスの情報を表示します。HCSC サーバが停止している場合でも表示できます。

引数

<HCSC サーバ名> ~ <英数字およびアンダーライン (<_>) > ((1 - 8 文字))

自 HCSC サーバ名を指定します。CSM_SV_NAME 環境変数に HCSC サーバ名を設定すると、このオプションの指定を省略できます。

-a <サービス ID> ~ <英数字およびアンダーライン (<_>) > ((8 文字以内))

情報を表示するサービスアダプタのサービス ID、またはビジネスプロセスのサービス ID を指定します。このオプションを指定した場合に該当する情報が存在しないときは、エラーになります。

-t <サービス名> ~ <XML スキーマの NCName 型の文字列 > ((1 - 64 バイト))

情報を表示するサービス名 (アダプタのサービス名、ビジネスプロセス名) を指定します。このオプションを指定した場合に該当する情報が存在しないときは、エラーになります。

-k {adp | bp | sg}

情報一覧を絞り込む種別を指定します。このオプションを指定した場合に該当する情報が存在しないときは、エラーになります。

- adp
サービスアダプタの情報を表示します。
- bp
ビジネスプロセスの情報を表示します。
- sg
サービスグループの情報を表示します。

-all

HCSC サーバに登録されているすべてのサービスアダプタまたはビジネスプロセスの一覧を表示します。このオプションを指定した場合に該当する情報が存在しないときは、情報は表示されません。

-l

自 HCSC サーバに配備されているサービスアダプタまたはビジネスプロセスの情報を表示します。-k オプションで adp または bp を指定した場合、および -all オプションを指定した場合にだけ有効になります。なお、-a オプション、-t オプション、および -k オプションで sg をあわせて指定した場合は無効になります。

-r

自 HCSC サーバと連携しているサービスアダプタまたはビジネスプロセスの情報を表示します。-k オプションで adp または bp を指定した場合、および -all オプションを指定した場合にだけ有効になります。なお、-a オプション、-t オプション、および -k オプションで sg オプションをあわせて指定した場合は無効になります。

-u <DB ユーザ ID>

HCSC サーバで使用しているデータベースのユーザ ID を指定します。次の場合は、このオプションを指定しても無効になります。

- HCSC サーバが起動している場合
- データベースを使用しない構成で HCSC サーバをセットアップした場合

HCSC サーバが停止している場合は、必ずこのオプションを指定します。ただし、次の場合は、このオプションを省略できます。

- HCSC サーバセットアップ定義ファイルのデータベースの接続情報 (jdbc-dbconnectinfo) に環境変数グループを指定し、jdbc-dbconnectinfo に指定した環境変数グループで PDUSER (認可識別子およびパスワード) を設定している場合
- データベースを使用しない構成で HCSC サーバをセットアップした場合

また、HCSC サーバが停止している場合でも、データベースの設定で認証が必要ないときは、このオプションを指定しないでください。

-p <DB パスワード>

HCSC サーバで使用しているデータベースのパスワードを指定します。次の場合は、このオプションを指定しても無効になります。

- HCSC サーバが起動している場合
- データベースを使用しない構成で HCSC サーバをセットアップした場合

HCSC サーバが停止している場合は、必ずこのオプションを指定します。ただし、次の

10. コマンド

csmlslocation (サービスアダプタまたはビジネスプロセスの情報の表示)

場合は、このオプションを省略できます。

- HCSC サーバセットアップ定義ファイルのデータベースの接続情報
(jdbc-dbconnectinfo) に環境変数グループを指定し、jdbc-dbconnectinfo に指定した環境変数グループで PDUSER (認可識別子およびパスワード) を設定している場合
- データベースを使用しない構成で HCSC サーバをセットアップした場合

また、HCSC サーバが停止している場合でも、データベースの設定で認証が必要ないときは、このオプションを指定しないでください。

表示形式

```
HCSCServerName : HCSCサーバ名
ClusterName : クラスタ名
ServiceName : サービスアダプタまたはビジネスプロセス名
ServiceKind : サービスアダプタまたはビジネスプロセスの種類
AdapterName : サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービスID
ServiceProtocolKind : サービスアダプタの種類
ServiceStatus : サービスアダプタまたはビジネスプロセスの状態
EntryTime : サービスアダプタまたはビジネスプロセスの配備時刻
AdapterLocalCall : ローカルキュー使用指定
BPOperationName : ビジネスプロセスのオペレーション名
BPRequestFormatID : ビジネスプロセスの要求電文フォーマットID
BPResponseFormatID : ビジネスプロセスの応答電文フォーマットID
ModifiedTime : サービスアダプタまたはビジネスプロセスの更新時刻
Version : ロケーションのバージョン番号
Revision : ロケーションのリビジョン番号
```

注 表示するエントリが複数ある場合、エントリごとに改行で区切ります。

説明

表示項目	説明
HCSCServerName	情報を取得した HCSC サーバ名を示します。
ClusterName	サービスアダプタまたはビジネスプロセスが配備されているクラスタ名を示します。
ServiceName	サービスアダプタまたはビジネスプロセス名を示します。 ServiceKind で示される種別によって、次のどれかが表示されます。 <ul style="list-style-type: none">• ServiceKind が ServiceAdapter の場合：サービスアダプタのサービス名• ServiceKind が BusinessProcess の場合：ビジネスプロセスのサービス名
ServiceKind	サービスアダプタまたはビジネスプロセスの種別を示します。次のどれかが表示されます。 <ul style="list-style-type: none">• ServiceAdapter : サービスアダプタ• BusinessProcess : ビジネスプロセス
AdapterName	サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービス ID を示します。

表示項目	説明
ServiceProtocolKind	<p>サービスアダプタの種類を示します。次のどれかが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WebService：同期 (Web サービス) • SessionBean：同期 (SessionBean) • MDB_WSR：非同期 (MDB (WS-R)) • MDB_DBQ：非同期 (MDB (DB キュー)) • Custom：カスタムアダプタ <p>ServiceKind がビジネスプロセスの場合は表示されません。</p>
ServiceStatus	<p>サービスアダプタまたはビジネスプロセスの状態を示します。次のどれかが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • active：起動状態 • inactive：停止状態 • starting：起動処理中 • startfailed：起動失敗状態 • stopping：停止処理中 • stopfailed：停止失敗状態 • deleting：削除処理中
EntryTime	<p>サービスアダプタまたはビジネスプロセスを配備した時間を示します。java.text.SimpleDateFormat で定義されているフォーマットに、YYYY/MM/DD hh:mm:ss.SSS の形式で表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • YYYY：西暦 • MM：月 • DD：日 • hh：時 • mm：分 • ss：秒 • SSS：ミリ秒
AdapterLocalCall	<p>ローカルキューを使用するかどうかを示します。ServiceProtocolKind が非同期 (MDB (DB キュー)) の場合だけ次のどちらかが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • true：ローカルキューを使用します • false：ローカルキューを使用しません
BPOperationName	<p>ビジネスプロセスのオペレーション名を示します。ServiceKind がサービスアダプタの場合は表示されません。</p>
BPRequestFormatID	<p>ビジネスプロセスの要求電文フォーマット ID を示します。ServiceKind がサービスアダプタの場合は表示されません。</p>
BPResponseFormatID	<p>ビジネスプロセスの応答電文フォーマット ID を示します。ServiceKind がサービスアダプタの場合は表示されません。</p>

10. コマンド

csmlslocation (サービスアダプタまたはビジネスプロセスの情報の表示)

表示項目	説明
ModifiedTime	サービスアダプタまたはビジネスプロセスの更新時刻を示します。 java.text.SimpleDateFormat で定義されているフォーマットに、 YYYY/MM/DD hh:mm:ss.SSS の形式で表示されます。 <ul style="list-style-type: none">• YYYY : 西暦• MM : 月• DD : 日• hh : 時• mm : 分• ss : 秒• SSS : ミリ秒 なお、更新時刻は開発環境でパッケージングした時間です。
Version	ロケーションのバージョン番号を示します。
Revision	ロケーションのリビジョン番号を示します。

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- 入力形式を間違えた場合はエラーになります。
- 取得した情報が null 値の場合、非表示ではなく、"null" と表示されます。
- HCSC サーバが停止状態のときにこのコマンドを実行すると、HCSCServerName および ClusterName に "null" と表示されます。

csmlsreception (ユーザ定義受付の情報の表示)

形式

```
csmlsreception [<HCSCサーバ名>]
                -i <受付ID>
                  | -s <関連するサービス名>
                  | -all
                [-u <DBユーザID> [-p <DBパスワード>]]
```

機能

配備したユーザ定義受付の情報を表示します。このコマンドは HCSC サーバが停止している状態でも実行できます。

引数

<HCSC サーバ名> ~ <英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 8 文字))

HCSC サーバ名を指定します。CSM_SV_NAME 環境変数に HCSC サーバ名を設定した場合、このオプションの指定を省略できます。

-i <受付 ID> ~ <英数字およびアンダーライン (_) > ((8 文字以内))

情報を表示するユーザ定義受付の受付 ID を指定します。

-s <関連するサービス名> ~ <XMLschema の NCName 文字> ((1 - 64 バイト))

情報を表示するユーザ定義受付に関連するサービス名 (ビジネスプロセスのサービス ID) を指定します。

-all

HCSC サーバに登録されているすべてのユーザ定義受付の一覧を表示します。このオプションを指定した場合に該当する情報が存在しないときは、情報は表示されません。

-u <DB ユーザ ID>

HCSC サーバで使用しているデータベースのユーザ ID を指定します。次の場合は、このオプションを指定しても無効になります。

- HCSC サーバが起動している場合
- データベースを使用しない構成で HCSC サーバをセットアップした場合

HCSC サーバが停止している場合は、必ずこのオプションを指定します。ただし、次の場合は、このオプションを省略できます。

- HCSC サーバセットアップ定義ファイルのデータベースの接続情報 (jdbc-dbconnectinfo) に環境変数グループを指定し、jdbc-dbconnectinfo に指定した

10. コマンド

csmlsreception (ユーザ定義受付の情報の表示)

環境変数グループで PDUSER (認可識別子およびパスワード) を設定している場合

- データベースを使用しない構成で HCSC サーバをセットアップした場合

また、HCSC サーバが停止している場合でも、データベースの設定で認証が必要ないときは、このオプションを指定しないでください。

-p <DB パスワード >

HCSC サーバで使用しているデータベースのパスワードを指定します。次の場合は、このオプションを指定しても無効になります。

- HCSC サーバが起動している場合
- データベースを使用しない構成で HCSC サーバをセットアップした場合

HCSC サーバが停止している場合は、必ずこのオプションを指定します。ただし、次の場合は、このオプションを省略できます。

- HCSC サーバセットアップ定義ファイルのデータベースの接続情報
(jdbc-dbconnectinfo) に環境変数グループを指定し、jdbc-dbconnectinfo に指定した環境変数グループで PDUSER (認可識別子およびパスワード) を設定している場合
- データベースを使用しない構成で HCSC サーバをセットアップした場合

また、HCSC サーバが停止している場合でも、データベースの設定で認証が必要ないときは、このオプションを指定しないでください。

表示形式

```
*** User defined reception information ***
HCSCServerName : HCSCサーバ名
ClusterName : クラスタ名
ReceptionID : 受付ID
ReceptionName : 受付名
ServiceName : 関連するサービス名
ReceptionKind : 受付の種類
ReceptionProtocolKind : 受付のプロトコル種別
EntryTime : 受付定義追加時刻
ModifiedTime : 受付更新時刻
Version : ロケーションのバージョン番号
Revision : ロケーションのリビジョン番号
*** User defined reception status ***
ReceptionStatus : 受付の状態
*** User defined reception runtime value ***
現在反映されているユーザ定義受付ランタイム定義プロパティ名=設定値
```

注 表示するエントリが複数ある場合、エントリごとに改行で区切ります。

説明

表示項目	説明
HCSCServerName	情報を取得した HCSC サーバ名が表示されます。
ClusterName	ユーザ定義受付を所有しているクラスタ名が表示されます。

表示項目	説明
ReceptionID	HCSC サーバ内で管理しているユーザ定義受付の受付 ID が表示されます。
ReceptionName	配備されているユーザ定義受付の受付名が表示されます。
ServiceName	配備されているユーザ定義受付に関連するビジネスプロセスのサービス名が表示されます。
ReceptionKind	配備されているユーザ定義受付の種別が表示されます。 BusinessProcess : ビジネスプロセス
ReceptionProtocolKind	配備されているユーザ定義受付のプロトコルが表示されます。 WebService : 同期 (Web サービス)
EntryTime	配備されているユーザ定義受付を配備した時間が YYYY/MM/DD hh:mm:ss.SSS の形式で表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> • YYYY : 西暦 • MM : 月 • DD : 日 • hh : 時 • mm : 分 • ss : 秒 • SSS : ミリ秒
ModifiedTime	配備されているユーザ定義受付の定義更新時刻が YYYY/MM/DD hh:mm:ss.SSS の形式で表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> • YYYY : 西暦 • MM : 月 • DD : 日 • hh : 時 • mm : 分 • ss : 秒 • SSS : ミリ秒
Version	ロケーションのバージョン番号が表示されます。
Revision	ロケーションのリビジョン番号が表示されます。
ReceptionStatus	配備されているユーザ定義受付の状態が表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> • active : 起動状態 • inactive : 停止状態 • starting : 起動処理中 • startfailed : 起動失敗状態 • stopping : 停止処理中 • stopfailed : 停止失敗状態 • deleting : 削除処理中
現在反映されているユーザ定義受付ランタイム定義プロパティ	現在反映されているユーザ定義受付ランタイム定義のプロパティの値が表示されます。 ユーザ定義受付ランタイム定義のプロパティについては、「9. 定義ファイル」の「ユーザ定義受付ランタイム定義ファイル」を参照してください。

10. コマンド

csmlsreception (ユーザ定義受付の情報の表示)

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- 取得した情報が null 値の場合、値に "null" と表示されます。
- HCSC サーバが停止状態のときにこのコマンドを実行すると、HCSCServerName および ClusterName は "null" と表示されます。
- 失敗時の動作を次に示します。
 - 入力形式が誤りの場合はコマンドエラーになります。
 - -i, -s を指定した場合に該当する情報がない場合は、コマンドエラーになります。

csmlsstate (HCSC サーバの状態の表示)

形式

```
csmlsstate [<HCSCサーバ名>]
           [-d {prop | runtime}]
```

機能

自 HCSC サーバの状態および設定情報の一覧を表示します。HCSC サーバが停止している場合でも表示できます。

引数

<HCSC サーバ名> ~ <英数字およびアンダーライン (_) > ((1 - 8 文字))

自 HCSC サーバ名を指定します。CSM_SV_NAME 環境変数に HCSC サーバ名を設定すると、このオプションの指定を省略できます。

-d {prop | runtime}

表示する種別を指定します。

- prop
定義した HCSC サーバランタイム定義ファイルのプロパティの情報を表示します。
- runtime
現在反映されている HCSC サーバランタイム定義ファイルのプロパティの値を表示します。

表示形式

(1) 定義した設定情報を表示する場合 (-d 未指定および -d prop 指定時)

```
*** HCSC server status ***
ServerStatus : HCSCサーバの状態
RequestServiceStatus : 標準受付の状態
ConnectServiceStatus : HCSC連携受付の状態
JMSReceptorQueueName : JMSリクエストの受付キュー名
DBQReceptorQueueName : DBキューリクエストの受付キュー名
HCSCTableVersion : HCSCテーブルのバージョン
HCSCTableRevision : HCSCテーブルのリビジョン
*** HCSC server runtime properties ***
HCSCサーバランタイム定義ファイルのプロパティ名=設定値
:
```

10. コマンド

csmlsstate (HCSC サーバの状態の表示)

(2) 現在反映されている設定情報を表示する場合 (-d runtime 指定時)

```

*** HCSC server status ***
ServerStatus : HCSCサーバの状態
RequestServiceStatus : 標準受付の状態
ConnectServiceStatus : HCSC連携受付の状態
JMSReceptorQueueName : JMSリクエストの受付キュー名
DBQReceptorQueueName : DBキューリクエストの受付キュー名
HCSCTableVersion : HCSCテーブルのバージョン
HCSCTableRevision : HCSCテーブルのリビジョン
*** HCSC server runtime value ***
現在反映されているHCSCサーバランタイム定義ファイルのプロパティ名=設定値
:
    
```

説明

表示項目	説明
ServerStatus	<p>HCSC サーバの状態を示します。次のどれかが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • active : 起動状態 • inactive : 停止状態 • starting : 起動処理中 • stopping : 停止処理中 <p>なお、HCSC サーバが停止している場合、HCSC サーバの起動に失敗した場合、および停止に失敗した場合は、「inactive」が表示されます。</p>
RequestServiceStatus	<p>HCSC サーバの標準受付の状態を示します。次のどれかが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • active : 起動状態 • inactive : 停止状態 • starting : 起動処理中 • startfailed : 起動失敗状態 • stopping : 停止処理中 • stopfailed : 停止失敗状態 <p>なお、HCSC サーバが停止している場合は、「null」が表示されます。</p>
ConnectServiceStatus	<p>HCSC サーバ連携受付の状態を示します。次のどれかが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • active : 起動状態 • inactive : 停止状態 • starting : 起動処理中 • startfailed : 起動失敗状態 • stopping : 停止処理中 • stopfailed : 停止失敗状態 <p>なお、HCSC サーバが停止している場合は、「null」が表示されます。</p>
JMSReceptorQueueName	<p>JMS のリクエスト受付キュー名を示します。 JMS のリクエスト受付がセットアップされていない場合は、「null」が表示されます。</p>

表示項目	説明
DBQReceptorQueueName	DB キューのリクエスト受付キュー名を示します。 DB キューのリクエスト受付がセットアップされていない場合は、「null」が表示されます。
HCSCTableVersion	HCSC テーブルのバージョンを示します。
HCSCTableRevision	HCSC テーブルのリビジョンを示します。
HCSC サーバランタイム定義ファイルのプロパティ名	HCSC サーバランタイム定義ファイルで設定したプロパティの情報が表示されます。 HCSC サーバランタイム定義ファイルについては、「9. 定義ファイル」の「HCSC サーバランタイム定義ファイル」を参照してください。
現在反映されている HCSC サーバランタイム定義ファイルのプロパティ名	現在反映されている HCSC サーバランタイム定義ファイルのプロパティの情報が表示されます。 HCSC サーバランタイム定義ファイルについては、「9. 定義ファイル」の「HCSC サーバランタイム定義ファイル」を参照してください。

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- 次の場合はエラーになります。
 - 入力形式を間違えた場合
 - HCSC サーバがセットアップされていない場合
- 現在反映されている HCSC サーバランタイム定義ファイルのプロパティで、デフォルト値がないプロパティが省略されている場合、空文字 ("") が仮定されます。
- HCSC サーバが停止している場合、HCSC サーバの状態には「inactive」、HCSC サーバの標準受付の状態および HCSC サーバ連携受付の状態には「null」が表示されます。
- HCSC サーバの起動に失敗した場合 (または停止に失敗した場合)、HCSC サーバの状態には、「inactive」が表示します。

11 メッセージ

この章では、Cosminexus サービスプラットフォームで出力されるメッセージについて説明します。

11.1 メッセージの種類と形式

11.2 KDEC00001 ~ KDEC19999 のメッセージ

11.3 KDEC20000 ~ KDEC39999 のメッセージ

11.4 KDEC40000 ~ KDEC59999 のメッセージ

11.5 KDEC60000 ~ KDEC79999 のメッセージ

11.6 KEOS50000 ~ KEOS59999 のメッセージ

11.1 メッセージの種類と形式

11.1.1 メッセージの種類

Cosminexus サービスプラットフォームのメッセージには、次の種類があります。

表 11-1 メッセージの種類

分類	メッセージの種類
メッセージング基盤に関するメッセージ	KDEC00001 ~ KDEC19999 のメッセージ
ビジネスプロセス基盤に関するメッセージ	KDEC20000 ~ KDEC39999 のメッセージ
データ変換基盤に関するメッセージ	KDEC40000 ~ KDEC59999 のメッセージ
DB アダプタ連携基盤に関するメッセージ	KDEC60000 ~ KDEC79999 のメッセージ
HSCS-Manager に関するメッセージ	KEOS50000 ~ KEOS59999 のメッセージ

11.1.2 メッセージの形式

このマニュアルでのメッセージの記述形式について説明します。

このマニュアルでのメッセージの記述形式を次に示します。

XXXXnnnnn-Y

メッセージテキスト

メッセージの説明

(S)

Cosminexus サービスプラットフォームの動作

(O)

ユーザの処置

対策

メッセージを出力させないための対策、またはユーザの処置に対する補足事項

なお、「(S)」、「(O)」、および「対策」はメッセージによって記述しないものもあります。

XXXX

メッセージを出力した環境（実行環境、または運用環境）を示す ID（プリフィックス）を表します。プリフィックスは英字 4 文字で示します。

nnnnn

メッセージを出力したプログラムで管理するメッセージ番号を表します。それぞれのメッセージには、5 けたの固有の番号が付いています。

Y

メッセージのレベルを表します。メッセージのレベルは英字 1 文字で示します。
メッセージのレベルを示す文字とその意味を次に示します。

E (Error)

エラーレベルのトラブルが発生したことを通知するメッセージです。
このメッセージが出力されたときは、処理を中断します。

W (Warning)

警告レベルのトラブルが発生したことを通知するメッセージです。
メッセージが出力されたあとも処理を続行します。

I (Information)

システムの動作を通知するメッセージです。
メッセージが出力されたあとも処理を続行します。

Q (Question)

出力したメッセージに対して、ユーザの応答を通知するメッセージです。
このメッセージが出力されたときは、ユーザの応答を待ちます。

メッセージテキスト

Cosminexus サービスプラットフォームが出力したメッセージテキストを示します。

メッセージの説明

メッセージテキストに対する補足説明を示します。

(S)

Cosminexus サービスプラットフォームの動作を示します。

(O)

ユーザの処置を示します。なお、「保守員に連絡してください」とは、購入時の契約に基づいて、システム管理者が弊社問い合わせ窓口へ連絡することを示します。

対策

メッセージを出力させないための対策、またはユーザの処置に対する補足事項を示します。

11.2 KDEC00001 ~ KDEC19999 のメッセージ

11.2.1 KDEC00001 ~ KDEC00500

KDEC00001-E

The service request was interrupted. (HCSCCommonID = HCSC メッセージ共通 ID, ServiceRequestID = サービスリクエスト ID)

サービス部品呼び出し要求処理は失敗しました。

(S)

サービス部品サービス呼び出し要求を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、このメッセージの前に出力されているエラーメッセージを参照して、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度サービス部品呼び出し要求を実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC00002-E

There is an error in the service, or an error occurred when calling the service.

サービス部品からエラーが応答されました。または、サービス部品の呼び出しでエラーが発生しました。

(S)

リクエスト処理を中断します。

(O)

サービスリクエストに回答された SOAP エンベロープの Fault メッセージ、例外内の Fault メッセージ、または非同期受付の場合に設定した ReplyTo キューのメッセージ内の Fault メッセージを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC00003-E

There is an error in the business process, or an error occurred when calling the business process.

ビジネスプロセスからエラーが応答されました。または、ビジネスプロセスの呼び出しでエラーが発生しました。

(S)

リクエスト処理を中断します。

(O)

サービスリクエストに応答された SOAP エンベロープの Fault メッセージ、例外内の Fault メッセージ、または非同期受付の場合に設定した ReplyTo キューのメッセージ内の Fault メッセージを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC00005-E

The HCSC server request was interrupted. (request = 問い合わせ内容, information = 問い合わせ詳細情報)

HCSC サーバへの問い合わせ要求は失敗しました。

問い合わせ内容

- getServiceInfo : 稼働状態確認機能

問い合わせ詳細情報

- 問い合わせ内容が getServiceInfo の場合 : サービスリクエストから指定されたパラメタの情報を出力します。

(S)

HCSC サーバへの問い合わせ要求を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、このメッセージの前に出力されているエラーメッセージを参照して、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度 HCSC サーバへの問い合わせ要求を実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC00010-E

The specified parameter is invalid. (parameter = パラメタ名)

指定されたパラメタは有効な文字列ではありません。

(S)

リクエスト処理を中断します。

(O)

パラメタに指定した文字列の内容を見直してください。

KDEC00011-E

A required parameter has not been specified. (parameter = パラメタ名)

必須のパラメタが指定されていません。

(S)

リクエスト処理を中断します。

11. メッセージ

(O)

必須のパラメタの指定内容を見直してください。

KDEC00012-E

The length of the specified parameter is invalid. (parameter = パラメタ名)

指定されたパラメタの長さが不正です。

(S)

リクエスト処理を中断します。

(O)

パラメタに指定した文字列の長さを見直してください。

KDEC00013-E

The same parameter has been specified more than once. (parameter = パラメタ名)

同じパラメタが複数回指定されています。

(S)

リクエスト処理を中断します。

(O)

パラメタを複数指定していないか見直してください。

KDEC00014-E

The specified parameter is invalid. (parameter = パラメタ名)

誤ったパラメタが指定されています。

(S)

リクエスト処理を中断します。

(O)

パラメタに指定した内容を見直してください。

KDEC00016-E

The specified parameter value is outside the valid range. (parameter = パラメタ名)

指定されたパラメタの値が設定範囲外です。

(S)

リクエスト処理を中断します。

(O)

パラメタに指定した数値の範囲を見直してください。

KDEC00018-E

The specified parameter differs from the telegram type. (parameter = パラメタ名)

指定されたパラメタの電文タイプは、不正な電文のタイプです。

(S)

リクエスト処理を中断します。

(O)

パラメタに指定した内容を見直してください。非同期リクエスト受付 (MDB(WS-R)) の場合は、パラメタの電文タイプに指定した値と、キューのメッセージ種別が合っているか見直してください。

KDEC00019-E

The specified JMS property is invalid. (property = プロパティ名, JMSMessageID = JMSMessageID)

指定されたプロパティは不正です。

(S)

リクエスト処理を中断します。

(O)

非同期リクエスト受付 (MDB(WS-R)) のキューに指定したプロパティの内容、または型を見直してください。なお、このメッセージは破棄してください。

KDEC00020-E

The specified message type is invalid. (JMSMessageID = JMSMessageID)

指定されたメッセージタイプは不正です。

(S)

リクエスト処理を中断します。

(O)

非同期リクエスト受付のキューに指定したメッセージ種別を見直してください。なお、このメッセージは破棄してください。

KDEC00021-E

The header part of the DBQueue message has an invalid format. (information = 詳細情報)

非同期リクエスト受付 (DB キュー) で、DB キューメッセージのヘッダ部分の形式が不正です。

(S)

リクエスト処理を中断します。

(O)

DB キューメッセージのヘッダ部分 (バイナリデータ) の形式を見直して、再度サーブス部品呼び出し要求を実行してください。なお、このメッセージは破棄してください。

KDEC00022-E

The telegram is not an XML schema.

電文は XML スキーマではありません。

(S)

リクエスト処理を中断します。

(O)

指定した電文を見直してください。また、サービス部品からの応答の電文を見直してください。障害要因が運用上の問題であった場合は障害要因を取り除いて再度実行してください。なお、このメッセージは破棄してください。

KDEC00023-E

The specified option is invalid. (option = オプション名)

誤ったオプションが指定されています。

(S)

リクエスト処理を中断します。

(O)

DB キューメッセージのヘッダ部分 (バイナリデータ) に指定している内容を見直してください。なお、このメッセージは破棄してください。

KDEC00024-E

Sending the message to the ReplyToQueue failed because an exception was caught. (exception = 例外名, error message = 例外詳細メッセージ)

例外をキャッチしたため、ReplyTo キューにメッセージを送信できませんでした。

(S)

ReplyTo キューへの応答送信を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC00025-E

Closing the queue used for sending failed because an exception was caught. (exception = 例外名, error message = 例外詳細メッセージ)

例外をキャッチしたため、送信用キューをクローズできませんでした。

(S)

ReplyTo キューへの応答送信を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運

用上の問題であった場合は再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC00026-E

Making the error message for the service requester failed because an exception was caught.

(exception = 例外名, error message = 例外詳細メッセージ)

例外をキャッチしたため、サービスリクエストへ応答するエラーメッセージを作成できませんでした。

(S)

サービスリクエストへの応答を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC00027-E

Making the error message for the service requester failed because the fault message is invalid.

Fault メッセージの設定者情報が不正な値のため、サービスリクエスト用のエラーメッセージを作成できませんでした。

(S)

サービスリクエストへの応答を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC00028-E

The detailed information of the fault message is not an XML schema.

Fault メッセージに関する詳細情報が XML スキーマではありません。

(S)

サービスリクエストへの応答を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC00029-E

A database access error occurred when the execution history was output. (information = 出力タイミング, HCSCCommonID = HCSC メッセージ共通 ID)

11. メッセージ

実行履歴の出力でエラーが発生しました。

(S)

リクエスト処理を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC00030-E

The execution history could not be output because information in the data container was invalid. (information = 出力タイミング, HCSCCommonID = HCSC メッセージ共通 ID)

データコンテナ内の情報に不正な値があったため、実行履歴情報を出力できませんでした。

(S)

リクエスト処理を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC00031-W

At the asynchronous request receptor, the response telegram was scrapped because the queue name for ReplyTo was not specified.

非同期標準受付で、ReplyTo 用キュー名が指定されていなかったため、応答電文を破棄しました。

(S)

処理を終了します。

KDEC00032-E

The specified JMSMessage payload is invalid. (JMSException = 例外詳細メッセージ)

指定された JMS メッセージのペイロードが不正です。または JMSException をキャッチしたため処理を続行することができませんでした。

(S)

リクエスト処理を中断します。

(O)

非同期リクエスト受付のキューに指定した電文を見直してください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC00033-E

The length of the telegram in the DBQueue is invalid. (information = 詳細情報)

非同期リクエスト受付 (DB キュー) のキュー指定した電文の長さが不正です。

(S)

リクエスト処理を中断します。

(O)

非同期リクエスト受付 (DB キュー) のキューに指定した電文の長さを見直してください。

KDEC00034-E

The message could not be sent because a RemoteException was caught. (error message = 例外詳細メッセージ)

RemoteException をキャッチしたため、メッセージを送信できませんでした。

(S)

リクエスト処理を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC00035-E

The message could not be sent because an exception was caught. (exception = 例外名, error message = 例外詳細メッセージ)

例外をキャッチしたため、メッセージを送信できませんでした。

(S)

リクエスト処理を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC00036-E

Service requests cannot be accepted because the request receptor status is incorrect. (status = リクエスト受付状態)

リクエスト受付の状態が不正なため、サービス部品のリクエストを受け付けられません。

リクエスト受付状態

- 1: 起動処理中
- 3: 起動失敗状態

11. メッセージ

- 4：停止状態
- 5：停止処理中
- 6：停止失敗状態

(S)

リクエスト処理を中断します。

(O)

リクエスト受付の状態を確認してください。

KDEC00037-E

The asynchronous WS-R service request was interrupted. (ClientID = クライアント ID, JMSMessageID = JMSMessageID)

非同期 WS-R のリクエストが中断されました。

(S)

非同期受付 (WS-R) のリクエスト処理を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC00038-E

The asynchronous DBQueue service request was interrupted. (ClientID = クライアント ID, JMSMessageID = JMS_HITACHI_ShqMessageID)

非同期 DB キューのリクエストが中断されました。

(S)

非同期受付 (DB キュー) のリクエスト処理を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC00039-E

Initialization of the User reception service adapter failed. (reception name = 受付名, reception ID = 受付 ID, information = 詳細情報)

ユーザ定義受付の初期化に失敗しました。

(S)

ユーザ定義受付の起動を中断します。

(O)

ユーザ定義受付の起動に失敗しました。Information がメッセージ ID の場合は、そ

の ID が指しているエラーメッセージをログファイルから参照して、そのエラーログの原因を特定してください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。Information が例外名、または障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC00040-E

An attempt to read the file has failed. (reception name = 受付名, reception ID = 受付 ID, file name = ファイル名, information = 詳細情報)

ファイルの読み込みに失敗しました。

(S)

ユーザ定義受付の起動を中断します。

(O)

ユーザ定義受付の構成を見直し、file name で指定されたファイルが含まれているか見直してください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC00041-E

A value in the definition file is invalid. (reception name = 受付名, reception ID = 受付 ID, parameter = パラメタ名)

ユーザ定義受付における定義ファイルに指定されている値が不正です。

(S)

ユーザ定義受付の起動を中断します。

(O)

ユーザ定義受付を作成したときに入力した情報を確認してください。情報を修正した場合、ユーザ定義受付を再作成してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC00042-E

The specified operation was not found. (reception name = 受付名, reception ID = 受付 ID, operation name = オペレーション名, namespace = 名前空間)

指定されたオペレーションがありません。

(S)

リクエスト処理を中断します。

(O)

ユーザ定義受付に対して要求した SOAP メッセージの形式について、正しいオペレーション名、および名前空間で要求しているか確認してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC00043-E

The telegram format is not supported. (reception name = 受付名, reception ID = 受付 ID, operation name = オペレーション名, namespace = 名前空間)

電文が未サポートの電文形式です。

(S)

リクエスト処理を中断します。

(O)

ユーザ定義受付に対して要求した SOAP メッセージの形式について、正しい形式で要求しているか確認してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC00044-W

An exception occurred but processing will continue. (reception name = 受付名, reception ID = 受付 ID, information1 = 例外名, information2 = 例外から取得したメッセージ)

リクエスト受付で例外が発生しましたが処理を続行します。

(S)

処理を続行します。

(O)

例外名、例外から取得したメッセージから原因が特定できる場合は、その対処方法に従ってください。ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

11.2.2 KDEC00501 ~ KDEC01000

KDEC00501-E

An error occurred during generation of the history writer.

実行履歴制御の生成でエラーが発生しました。

(S)

リクエスト処理を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC00502-E

An error occurred during a service location search. (HCSCCommonID = HCSC メッセージ共通 ID)

サービス部品のロケーション情報検索でエラーが発生しました。

(S)

リクエスト処理を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC00503-E

An error occurred in the service routing. (HCSCCommonID = HCSC メッセージ共通 ID)

サービス部品のルーティングでエラーが発生しました。

(S)

リクエスト処理を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC00504-E

An error occurred during generation of the service adapter. (adapter name = サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービス ID, HCSCCommonID = HCSC メッセージ共通 ID)

サービスアダプタまたはビジネスプロセスの生成でエラーが発生しました。

(S)

リクエスト処理を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC00505-E

An error occurred during output of the history writer. (information1 = 出力タイミング, information2 = 転送先, HCSCCommonID = HCSC メッセージ共通 ID)

実行履歴の出力でエラーが発生しました。

出力タイミング

- before : 実行前
- after : 実行後

転送先

- adapter : アダプタの実行
- multicast : 同報通知の実行

(S)

リクエスト処理を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC00506-E

An error occurred during execution of the service adapter. (adapter name = サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービス ID, HCSCCommonID = HCSC メッセージ共通 ID)

サービスアダプタまたはビジネスプロセスの実行でエラーが発生しました。

(S)

リクエスト処理を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC00508-E

An error occurred during monitoring of the asynchronous queue. (type = キューのタイプ, queue name = キュー名)

非同期キューの監視でエラーが発生しました。

キューのタイプ

- reception : 標準受付用キュー

(S)

次のキュー監視処理を続行します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC00509-I

Monitoring of the asynchronous queue will now start. (type = キューのタイプ, timer = 監視タイムアウト時間)

非同期キューの監視処理を開始しました。

キューのタイプ

- reception : リクエスト受付用キュー

(S)

処理を続行します。

KDEC00510-I

Monitoring of the asynchronous queue ended. (type = キューのタイプ , result = 終了結果)

非同期キューの監視処理が終了しました。

キューのタイプ

- reception : 標準受付用キュー

終了結果

- no wait : 監視処理なし
- normal : 正常終了
- timeout : 監視タイムアウト
- cancel : キャンセルによる終了
- create QueueConnection error : キューコネクションの生成失敗

(S)

処理を終了します。

KDEC00511-I

Cancellation of monitoring of the asynchronous queue ended. (type = キューのタイプ , result = キューの状態)

非同期キューの監視処理のキャンセルコマンドが終了しました。

キューのタイプ

- reception : 標準受付用キュー

キューの状態

- canceled : キャンセル完了
- cancel processing : キャンセル処理中
- timeout processing : 監視タイムアウト処理中
- already stopped : 停止済み
- no wait : 監視していない

(S)

処理を終了します。

KDEC00512-E

An error occurred during cancellation of monitoring of the asynchronous queue. (type = キューのタイプ)

非同期キュー監視処理のキャンセル処理で障害が発生しました。

キューのタイプ

- reception : 標準受付用キュー

(S)

処理を終了します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC00513-W

Processing will continue though an InterruptedException occurred in the monitoring of the asynchronous queue. (type = キューのタイプ)

非同期キューの監視処理で InterruptedException が発生しましたが、監視処理を続けます。

キューのタイプ

- reception : 標準受付用キュー

(S)

処理を続行します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC00514-E

An exception occurred. (information = 詳細情報)

例外が発生しました。

詳細情報

- create Queue connection : キュー接続の生成
- close Queue connection : キュー接続のクローズ
- ejb remove : EJB オブジェクトの解放

(S)

処理を終了します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC00515-E

A RemoteException occurred. (adapter name = サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービス ID, HCSCCommonID = HCSC メッセージ共通 ID)

RemoteException が発生しました。

(S)

リクエスト処理を中断します

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC00516-E

A service request from the DBQueue receptor to the DBQueue adapter cannot be executed.

DB キュー標準受付から DB キューアダプタへサービス部品要求することはできません。

(S)

処理を終了します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC00517-E

A value in the definition file is invalid. (adapter name = サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービス ID, operation name = オペレーション名, parameter = パラメタ名)

定義ファイルの値が不正です。

オペレーション名

- 情報がオペレーションごとになっている場合：オペレーション名
- 情報がオペレーションごとになっていない場合：null

(S)

データ変換処理、およびサービス部品呼び出しを中断します。

(O)

ビジネスプロセスを作成したときに入力した情報を確認してください。呼び出したサービス（ビジネスプロセス）の情報を確認してください。情報を修正した場合は、ビジネスプロセスを再作成してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC00518-E

The message formats conflict. (adapter name = サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービス ID, source FormatID = 比較元フォーマット ID, source message type = 比較元メッセージタイプ, destination FormatID = 比較先フォーマット ID, destination message type = 比較先メッセージタイプ)

メッセージの形式が一致しません。

比較元メッセージタイプ

- XML : XML 電文
- Binary : Binary 電文
- NONE : 電文なし
- UNKNOWN (値): 想定外の電文形式

比較先メッセージタイプ

- XML : XML 電文
- Binary : Binary 電文
- NONE : 電文なし
- UNKNOWN (値): 想定外の電文形式

(S)

データ変換処理, およびサービス部品呼び出しを中断します。

(O)

呼び出したビジネスプロセスの情報の電文フォーマット ID を確認してください。
データ変換定義, データフォーマット定義を確認してください。障害となった要因
が運用上の問題でない場合は, ログ・トレースを採取し, 保守員に連絡してくだ
さい。

KDEC00519-E

The specified data transform definition does not exist. (source FormatID = 変換前フォーマット ID, destination FormatID = 変換後フォーマット ID)

指定されたデータ変換定義は存在しません。

(S)

データ変換処理, およびサービス部品呼び出しを中断します。

(O)

データ変換定義, データフォーマット定義を確認してください。障害となった要因
が運用上の問題でない場合は, ログ・トレースを採取し, 保守員に連絡してくだ
さい。

KDEC00520-E

An attempt to transform the data failed. (adapter name = サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービス ID, source FormatID = 変換前フォーマット ID, source message type = 変換前メッセージタイプ, destination FormatID = 変換後フォーマット ID, destination message type = 変換後メッセージタイプ)

データ変換に失敗しました。

変換前メッセージタイプ

- XML : XML 電文
- Binary : Binary 電文

- NONE : 電文なし
- UNKNOWN (値): 想定外の電文形式

変換後メッセージタイプ

- XML : XML 電文
- Binary : Binary 電文
- NONE : 電文なし
- UNKNOWN (値): 想定外の電文形式

(S)

データ変換処理, およびサービス部品呼び出しを中断します。

(O)

呼び出したサービス部品の情報の電文フォーマット ID を確認してください。データ変換定義, データフォーマット定義を確認してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は, ログ・トレースを採取し, 保守員に連絡してください。

KDEC00521-E

An error occurred during execution of the multicast. (request service name = リクエストからの入力サービス名, service name = エラーが発生したサービス名)

同報通知の実行中にエラーが発生しました。

(S)

該当サービス部品に対する処理を中断し, 同報通知処理を続行します。

(O)

メッセージログファイルを参照し, 障害要因を取り除いてください。障害となった要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は, ログ・トレースを採取し, 保守員に連絡してください。

KDEC00522-E

The service group status is not running. (service name = サービス名, HCSCCommonID = HCSCメッセージ共通 ID)

サービスグループが起動していません。

(S)

該当サービス部品に対する処理を中断し, 同報通知処理を続行します。

(O)

該当サービス部品に対するサービスグループを起動してください。またはリクエスト要求時に指定したサービス名を確認して, 再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は, ログ・トレースを採取し, 保守員に連絡してください。

KDEC00523-W

The number of started threads is not the same as the specified number of threads. (specified thread number = 指定したスレッド数, started thread number = 開始されたスレッド数)

指定したスレッド数と異なる数のスレッドが開始されました。

(S)

開始されたスレッド数のまま、処理を続行します。

(O)

メモリが不足しているおそれがあります。空きメモリを増やしたあと、HCSC サーバを再起動してください。問題が解決しない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC00524-E

An unexpected exception occurred during parallel-multicast calling. (service group name = サービスグループ名, information = 保守情報)

同報通知の並行呼び出し中に、予期しない例外が発生しました。

(S)

同報通知処理を中断します。

(O)

ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC00525-E

An error occurred during generation of the message deliverer. (information = 保守情報)

配送制御の生成でエラーが発生しました。

(S)

HCSC サーバの起動処理を中断します。

(O)

HCSC サーバランタイム定義ファイルに指定した、同報通知の並行呼び出しのスレッド数を見直して正しい値を指定してください。

指定した値に問題がない場合は、メモリが不足しているおそれがあります。空きメモリを増やしたあと、HCSC サーバを再起動してください。問題が解決しない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC00526-E

An error occurred during the rollback of a transaction. (request service name = リクエストからの入力サービス名, service name = エラーが発生したサービス名, information = 保守情報)

同報通知の並行呼び出しで、個々のサービスの呼び出しに対するトランザクションのロールバック中にエラーが発生しました。

(S)

該当サービスに対する処理を中断し、同報通知処理を続行します。

(O)

Cosminexus のトランザクションに関する設定を見直して、HCSC サーバを再起動してください。問題が解決しない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC00527-E

An unexpected exception occurred during parallel-multicast calling. (service group name = サービスグループ名, request service name = サービス名)

同報通知の並行呼び出し中に、予期しない例外が発生しました。

(S)

該当サービスに対する処理を中断し、同報通知処理を続行します。

(O)

サービス名に表示されているサービス呼び出しに関するログ・トレースを確認して、障害の要因を取り除いてください。障害の要因が運用上の問題であった場合は、再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

11.2.3 KDEC01001 ~ KDEC01500

KDEC01001-E

The service was not found in the location information. (service name = サービス名, HCSCCommonID = HCSC メッセージ共通 ID)

サービス部品がロケーション情報内に見つかりません。

(S)

リクエスト処理を中断します。

(O)

サービス (サービスアダプタ, ビジネスプロセスまたはサービスグループ) を配備・起動してください。またはリクエスト要求時に指定したサービス名を確認して、再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC01002-E

The adapter status is not running. (adapter name = サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービス ID, service name = サービス名, HCSCCommonID = HCSC メッセージ共通 ID)

サービスアダプタまたはビジネスプロセスが起動していません。

11. メッセージ

(S)

リクエスト処理を中断します。

(O)

サービス（サービスアダプタまたはビジネスプロセス）を起動してください。またはリクエスト要求時に指定したサービス名を確認して、再度実行してください。障害要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC01003-E

The adapter status is not stopping. (adapter name = サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービス ID, service name = サービス名)

サービスアダプタまたはビジネスプロセスが停止していません。

(S)

処理を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC01004-E

The service has already been registered in the location information. (service name = サービス名)

サービス部品はロケーション情報にすでに登録されています。

(S)

処理を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC01005-E

The adapter was not found in the location information. (cluster name = クラスタ名, adapter name = サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービス ID)

サービスアダプタまたはビジネスプロセスがロケーション情報で見つかりません。

(S)

処理を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC01006-E

Database access based on the location failed.

ロケーションによるデータベースアクセスは失敗しました。

(S)

ロケーション管理の起動処理を中断します。

(O)

データベースへのアクセスで障害が発生しています。メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC01007-E

Database access failed. (information = 操作種別)

データベースのアクセスに失敗しました。

操作種別

- UPDATE : 更新
- INSERT : 登録
- SELECT : 参照
- DELETE : 削除

(S)

処理を中断します。

(O)

データベースアクセスで障害が発生しています。メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC01008-E

An invalid value is specified for the location information. (information = 項目)

ロケーション情報に不正な値が指定されています。

(S)

処理を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC01009-E

Location information required for the service type is not specified. (service type = サービス部品種類, information = 項目)

サービス部品種類に必要なロケーション情報が指定されていません。

(S)

処理を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC01011-E

Location information for the same service name exists in the entered data. (service name = サービス名)

同じサービス名のロケーション情報が入力データ内に存在しています。

(S)

処理を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC01012-I

There is no inquiry information.

照会情報がありません。

(S)

処理を続行します。

KDEC01013-E

Location information for the service name is registered more than once. (service name = サービス名)

サービス名のロケーション情報が複数登録されています。

(S)

処理を中断します。

(O)

データベースを使用する場合、メッセージログファイルを参照し、障害が発生していないかを確認してください。データベースを使用しない場合、メッセージログファイルや OS の障害情報を参照し、障害が発生していないかを確認してください。

障害が発生している場合は、障害に対して対策を行ってください。障害要因が運用上の問題であった場合は、再度実行してください。障害要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC01015-W

Adapter creation failed because the location information and adapter status are incorrect. (adapter name = サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービス ID)

ロケーション情報と、サービスアダプタまたはビジネスプロセスの状態が不正なため、サービスアダプタまたはビジネスプロセスの生成に失敗しました。

(S)

処理を継続します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC01016-E

The service was not found in the location information. (service name = サービス名)

サービス部品がロケーション情報内に見つかりません。

(S)

処理を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC01017-E

Location information is invalid.

ロケーション情報が不正です。

(S)

処理を中断します。

(O)

データベースを使用する場合、メッセージログファイルを参照し、データベースに障害が発生していないかを確認してください。データベースを使用しない場合、メッセージログファイルや OS の障害情報を参照し、ファイルの入出力に関する障害などが発生していないかを確認してください。障害が発生している場合は、それぞれの障害に対して対策を行い、HCSC サーバを再起動してください。問題が解決しない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC01018-E

The service group status is not running. (service group name = サービスグループ名, HCSCCommonID = HCSC メッセージ共通 ID)

サービスグループが起動していません。

(S)

リクエスト処理を中断します。

(O)

サービスグループを起動してください。またはリクエスト要求時に指定したサービスグループ名を確認して、再度実行してください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC01019-E

The reception was not found in the reception information. (reception name = 受付名, reception ID = 受付 ID)

リクエスト受付がロケーション情報内に見つかりません。

(S)

リクエスト処理を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC01020-E

The reception information for the same reception name already exists in the entered data. (reception name = 受付名, reception ID = 受付 ID)

同じ受付名、および受付 ID のリクエスト受付情報が入力データ内に存在しています。

(S)

処理を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC01021-E

The reception has already been registered in the reception information. (reception name = 受付名, reception ID = 受付 ID)

リクエスト受付はロケーション情報にすでに登録されています。

(S)

処理を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC01022-E

The reception was not found in the reception information. (reception ID = 受付 ID)

受付 ID がロケーション情報で見つかりません。

(S)

処理を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC01023-E

The reception has not stopped. (reception name = 受付名, reception ID = 受付 ID)

リクエスト受付が停止していません。

(S)

処理を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC01024-E

The reception name of the reception corresponding to the service is registered more than once.

(reception name = 受付名, reception ID = 受付 ID)

サービス部品に対応するリクエスト受付の受付名が二つ以上存在しています。

(S)

処理を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC01025-E

An attempt to access location information has failed.

ロケーション情報のアクセスに失敗しました。

(S)

ロケーション管理の起動処理を中断します。

(O)

メッセージログファイルや OS の障害情報を参照し、ファイルの入出力に関する障害が発生していないかを確認してください。障害が発生している場合は、障害に対して対策を行い、HCSC サーバを再起動してください。問題が解決しない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC01026-E

An attempt to access location information has failed. (information = 操作種別)

ロケーション情報の操作に失敗しました。

操作種別

- UPDATE : 更新
- INSERT : 登録
- SELECT : 参照
- DELETE : 削除

(S)

処理を中断します。

(O)

メッセージログファイルや OS の障害情報を参照し、ファイルの入出力に関する障害が発生していないかを確認してください。障害が発生している場合は、障害に対して対策を行い、HCSC サーバを再起動してください。問題が解決しない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

11.2.4 KDEC01501 ~ KDEC02000

KDEC01501-E

An error was detected in the routing information. (service group name = サービスグループ名)

ルーティング情報の不正を検知しました。

(S)

処理を中断します。

(O)

データベースを使用する場合、メッセージログファイルを参照し、データベースに障害が発生していないかを確認してください。データベースを使用しない場合、メッセージログファイルや OS の障害情報を参照し、ファイルの入出力に関する障

害などが発生していないかを確認してください。障害が発生している場合は、それぞれの障害に対して対策を行い、HCSC サーバを再起動してください。問題が解決しない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC01502-E

An error occurred during initialization of environment for parsing the routing definition XML.

ルーティング定義 XML の解析環境の生成でエラーが発生しました。

(S)

処理を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください、障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC01503-E

The service cannot be determined from the routing. (service group name = サービスグループ名)

ルーティングによってサービス部品を決定することができません。

(S)

リクエスト処理を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC01504-E

An exception occurred in the rule class. (class name = 例外が発生した実装クラス名(標準提供の場合は表示名), rule kind = ルール種別 (Standard))

ルール実装クラスで例外が発生しました。

(S)

リクエスト処理を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC01505-E

An error occurred during checking of the routing definition. (information = エラーを検知したタグ名, またはエラー内容)

ルーティング定義の妥当性チェックでエラーが発生しました。

エラー内容

- There is too much service group nesting. : サービスグループのネスト数オーバー
- RuleType and RuleOrder combination. : ルール属性指定順が不正
- The file data length is invalid. : ルーティング定義 XML の長さ不正 (入力が null , またはサイズが 0)
- A different type of service group is nested. (ServiceGroupName = < サービスグループ名 >) : < サービスグループ名 > は異なるサービスグループのネストです
- All services tries to be deleted. : すべてのサービス部品が削除されようとした

(S)

処理を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC01506-E

The rule class was not found. (class name = 例外が発生した実装クラス名 (標準提供の場合は表示名) , rule kind = ルール種別 (Standard))

ルール実装クラスが見つかりません。

(S)

リクエスト処理を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC01507-E

The service group was not found. (service group name = サービスグループ名)

サービスグループが見つかりません。

(S)

処理を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC01508-E

The service group already exists. (service group name = サービスグループ名)

サービスグループがすでに存在します。

(S)

処理を中断します。

(O)

ロケーション情報を確認し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC01509-E

A database access error occurred. (service group name = サービスグループ名, information1 = 操作種別, information2 = データベース種別)

ルーティング制御によってデータベースのアクセスでエラーが発生しました。

操作種別

- INSERT : 登録
- DELETE : 削除
- UPDATE : 更新

データベース種別

- Location : ロケーションデータベース
- Routing : ルーティングデータベース

(S)

処理を中断します。

(O)

データベースのアクセスで障害が発生しています。メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC01510-E

The service group was not found in the location information. (service group name = サービスグループ名)

サービスグループがロケーション情報内に見つかりません。

(S)

処理を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害となった要因が運用上の問

題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC01511-E

The service group is running. (service group name = サービスグループ名)

サービスグループが起動状態です。

(S)

処理を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC01512-E

The service group has stopped. (service group name = サービスグループ名)

サービスグループが停止状態です。

(S)

処理を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC01513-E

An IO error occurred. (information = 詳細情報)

ルーティング制御で IO エラーが発生しました。

(S)

処理を中断します。

(O)

ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC01514-E

An error occurred in the environment for parsing the routing definition XML. (exception = 例外名, error message = 例外詳細メッセージ)

ルーティング定義 XML の解析環境でエラーが発生しました。

例外詳細メッセージ

KECX で始まるメッセージの場合は、ルーティング定義 XML に誤りがあることがあります。

(S)

処理を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。KECX で始まるメッセージの場合は、マニュアル「Cosminexus XML Processor ユーザーズガイド」を参照してください。KECX06025-E メッセージ、および KECX06028-E メッセージの場合は、不正と表示されているタグを見直してください。

KDEC01515-E

An information error was detected. (service group name = サービスグループ名, information1 = 操作種別, information2 = 情報種別)

サービスグループ定義の情報の不正を検知しました。

操作種別

- DELETE : 削除

データベース種別

- Routing : ルーティング情報

(S)

処理を継続します。

(O)

データベースを使用する場合、メッセージログファイルを参照し、データベースに障害が発生していないかを確認してください。データベースを使用しない場合、メッセージログファイルや OS の障害情報を参照し、ファイルの入出力に関する障害が発生していないかを確認してください。障害が発生している場合は、それぞれの障害に対して対策を行い、HCSC サーバを再起動してください。問題が解決しない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC01516-E

The rule class result is invalid. (class name = 例外が発生した実装クラス名 (標準提供の場合は表示名), rule kind = ルール種別 (Standard), input = 入力配列数または null, output = 出力配列数または null)

ルール実装クラスの応答が不正です。

(S)

リクエスト処理を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運

用上の問題であった場合は再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC01517-E

The type of specified service group is invalid. (service group name = サービスグループ名, service group type = サービスグループ種別)

指定されたサービスグループの種別が不正です。

サービスグループ種別

- Rule : ルーティングルール
- Multicast : 同報通知

(S)

処理を中断します。

(O)

指定した種別のサービスグループで操作できない処理をしているおそれがあります。サービスグループの種別と処理内容を確認してください。

KDEC01518-E

The specified service already exists in the service group. (service group name = サービスグループ名, service name = サービス名)

指定されたサービスはすでにサービスグループの中に存在します。

(S)

処理を中断します。

(O)

指定したサービスグループ名に存在しないサービス名を指定し、再度実行してください。

KDEC01519-E

The specified service was not found in the service group. (service group name = サービスグループ名, service name = サービス名)

指定されたサービスはサービスグループの中に存在しません。

(S)

処理を中断します。

(O)

指定したサービスグループ名に存在するサービス名を指定し、再度実行してください。

KDEC01520-W

The service group has stopped because of an invalid parameter. (service group name = サービスグループ名, parameter = パラメタ名)

パラメタが不正なため、サービスグループを停止しました。

(S)

処理を継続します。

(O)

サービスグループの種別に同報通知の並行呼び出しが設定されているサービスグループを開始した状態で、HCSC サーバランタイム定義ファイルの multicast-parallel-thread-count プロパティの値を 0 に変更したおそれがあります。サービスグループの種別とプロパティの値を確認して、HCSC サーバランタイム定義ファイルの multicast-parallel-thread-count プロパティの値を修正し、HCSC サーバを再起動してください。

KDEC01521-E

The service group could not start because of an invalid parameter. (service group name = サービスグループ名, parameter = パラメタ名)

パラメタが不正なため、サービスグループを開始できません。

(S)

処理を中断します。

(O)

HCSC サーバランタイム定義ファイルの multicast-parallel-thread-count プロパティに 0 を指定した場合、サービスグループの種別に同報通知の並行呼び出しが設定されているサービスグループは開始できません。サービスグループの種別とプロパティの値を確認して、HCSC サーバランタイム定義ファイルの multicast-parallel-thread-count プロパティの値を修正してください。そのあと、HCSC サーバを再起動して、コマンドを再度実行してください。

KDEC01522-E

A data access error occurred. (service group name = サービスグループ名, information1 = 操作種別, information2 = データベース種別)

ルーティング制御によるデータのアクセスでエラーが発生しました。

操作種別

- UPDATE : 更新
- INSERT : 登録
- DELETE : 削除

情報種別

- Location : ロケーション情報

11. メッセージ

- Routing : ルーティング情報

(S)

処理を中断します。

(O)

メッセージログファイルや OS の障害情報を参照し、ファイルの入出力に関する障害などが発生していないかを確認してください。障害が発生している場合は、障害に対して対策を行い、HCSC サーバを再起動してください。問題が解決しない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

11.2.5 KDEC02001 ~ KDEC02500

KDEC02001-E

Database access based on the execution history failed.

実行履歴によるデータベースのアクセスは失敗しました。

(S)

実行履歴情報の採取、照会、または削除処理を中断します。

(O)

データベースアクセスで障害が発生しています。メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC02002-W

An attempt to obtain the execution history has failed. (information = 実行履歴の項目)

実行履歴情報取得に失敗しました。

(S)

処理を続行します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC02003-E

The execution history could not be inserted into the database.

実行履歴情報を、データベースに追加できません。

(S)

実行履歴の採取処理を中断します。

(O)

データベースアクセスで障害が発生しています。メッセージログファイルを参照し、

障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC02004-E

The execution history could not be fetched from the database.

実行履歴情報を、データベースから照会できません。

(S)

実行履歴の照会処理を中断します。

(O)

データベースアクセスで障害が発生しています。メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC02005-E

The execution history could not be deleted from the database.

実行履歴情報を、データベースから削除できません。

(S)

実行履歴の削除処理を中断します。

(O)

データベースアクセスで障害が発生しています。メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

11.2.6 KDEC02501 ~ KDEC03000

KDEC02501-E

A service call was interrupted by a data operation error. (adapter name = サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービス ID, HCSCCommonID = HCSC メッセージ共通 ID, ServiceRequestID = サービスリクエスト ID, information = 原因となったエラーのメッセージ ID)

電文のデータ操作エラーのため、サービス部品呼び出しを中断しました。

(S)

サービス部品呼び出しを中断します。

(O)

サービス部品呼び出しでエラーが発生しています。メッセージ ID が指しているエラーメッセージをログファイルから参照して、そのエラーログの原因を特定してください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害と

11. メッセージ

なった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC02502-E

A service call was interrupted by an invalid parameter. (adapter name = サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービス ID, HCSCCommonID = HCSC メッセージ共通 ID,

ServiceRequestID = サービスリクエスト ID, information = 原因となったエラーのメッセージ ID)
アダプタ定義、またはリクエストからの引数が不正なため、サービス部品呼び出しを中断しました。

(S)

サービス部品呼び出しを中断します。

(O)

サービス部品呼び出しでエラーが発生しています。メッセージ ID が指しているエラーメッセージをログファイルから参照して、そのエラーログの原因を特定してください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC02503-E

A service call was interrupted by an exception in internal processing. (adapter name = サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービス ID, HCSCCommonID = HCSC メッセージ共通 ID,

ServiceRequestID = サービスリクエスト ID, information = 原因となったエラーのメッセージ ID)
内部処理で例外が発生したため、サービス部品呼び出しを中断しました。

(S)

サービス部品呼び出しを中断します。

(O)

サービス部品呼び出しでエラーが発生しています。メッセージ ID が指しているエラーメッセージをログファイルから参照して、そのエラーログの原因を特定してください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC02504-E

A service call was interrupted by an unexpected error. (adapter name = サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービス ID, HCSCCommonID = HCSC メッセージ共通 ID,

ServiceRequestID = サービスリクエスト ID, information1 = 原因となった例外名, information2 = 詳細情報)

想定外エラーのため、サービス部品呼び出しを中断しました。

原因となった例外名

- 例外が発生した場合：原因となった例外名
- 例外が発生しなかった場合：null

詳細情報

- 例外が発生した場合：例外から取得したメッセージ
- 例外が発生しなかった場合：詳細情報

(S)

サービス部品呼び出しを中断します。

(O)

ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC02511-E

Initialization of the service adapter failed. (adapter name = サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービス ID, information = 原因となったエラーのメッセージ ID, または例外名)

サービスアダプタの初期化に失敗しました。

(S)

サービスアダプタの起動に失敗します。
サービス部品呼び出しを中断します。

(O)

アダプタの起動に失敗しました。Information がメッセージ ID の場合は、その ID が指しているエラーメッセージをログファイルから参照して、そのエラーログの原因を特定してください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。Information が例外名、または障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC02512-E

An attempt to obtain the service adapter name has failed. (information = サービスアダプタまたはビジネスプロセスのルックアップ名)

サービスアダプタまたはビジネスプロセスのルックアップ名の取得に失敗しました。

(S)

サービスアダプタの起動に失敗します。

(O)

ネーミングサーバの設定を見直してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC02513-E

An attempt to read the file has failed. (adapter name = サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービス ID, file name = ファイル名, information = 詳細情報)

ファイルの読み込みに失敗しました。

11. メッセージ

(S)

サービスアダプタの起動に失敗します。
サービス呼び出しを中断します。

(O)

アダプタの構成を見直し、File name で指定されたファイルが含まれているか見直してください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC02514-E

A value in the definition file is invalid. (adapter name = サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービス ID, operation name = オペレーション名, parameter = パラメタ名)
定義ファイルの値が不正です。

オペレーション名

- 情報がオペレーションごとになっている場合：オペレーション名
- 情報がオペレーションごとになっていない場合：null

(S)

サービスアダプタの起動に失敗します。

(O)

サービスアダプタを作成したときに入力した情報を確認してください。呼び出したサービス部品の情報を確認してください。情報を修正した場合、アダプタを再作成してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC02515-E

A value in the WSDL file is invalid. (adapter name = サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービス ID, operation name = オペレーション名, parameter = パラメタ名)
WSDL ファイルの値が不正です。

オペレーション名

- 情報がオペレーションごとになっている場合：オペレーション名
- 情報がオペレーションごとになっていない場合：null

(S)

サービスアダプタの起動に失敗します。

(O)

呼び出したサービス部品の情報を確認してください。情報を修正した場合、アダプタを再作成してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC02516-E

The specified operation was not found. (adapter name = サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービス ID, operation name = オペレーション名)

指定されたオペレーションがありません。

(S)

サービス部品呼び出しを中断します。

(O)

呼び出したオペレーション情報を確認して再度実行します。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC02517-E

An attempt to transform the data failed. (adapter name = サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービス ID, source FormatID = 変換前フォーマット ID, source message type = 変換前メッセージタイプ, destination FormatID = 変換後フォーマット ID, destination message type = 変換後メッセージタイプ)

データ変換に失敗しました。

変換前メッセージタイプ

- XML : XML 電文
- Binary : バイナリ電文
- NONE : 電文なし
- UNKNOWN (値) : 想定外の電文形式

変換後メッセージタイプ

- XML : XML 電文
- Binary : バイナリ電文
- NONE : 電文なし
- UNKNOWN (値) : 想定外の電文形式

(S)

サービス部品呼び出しを中断します。

(O)

呼び出したサービス部品の情報の電文フォーマット ID を確認してください。データ変換定義、データフォーマット定義を確認してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC02518-E

The message formats conflict. (adapter name = サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービス ID, source FormatID = 比較元フォーマット ID, source message type = 比較元メッセージタイプ, destination FormatID = 比較先フォーマット ID, destination message type = 比較先メッセージタイプ)

11. メッセージ

メッセージの形式が一致しません。

比較元メッセージタイプ

- XML : XML 電文
- Binary : バイナリ電文
- NONE : 電文なし
- UNKNOWN (値): 想定外の電文形式

比較先メッセージタイプ

- XML : XML 電文
- Binary : バイナリ電文
- NONE : 電文なし
- UNKNOWN (値): 想定外の電文形式

(S)

サービス部品呼び出しを中断します。

(O)

呼び出したサービス部品の情報の電文フォーマット ID およびメッセージタイプを確認してください。または、呼び出したサービス部品が、要求電文がないことを許可しないサービス部品である可能性があるため、サービス部品の種類と要求電文を見直してください。データ変換をする場合は、データ変換定義、データフォーマット定義を確認してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC02519-W

An exception occurred but processing will continue. (adapter name = サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービス ID, information1 = 例外名, information2 = 例外から取得したメッセージ)

アダプタで例外が発生しましたが処理を続行します。

(S)

処理を続行します。

(O)

例外名、例外から取得したメッセージから原因が特定できる場合は、その対処方法に従ってください。ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC02520-E

The specified data transform definition does not exist. (adapter name = サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービス ID, source FormatID = 変換前フォーマット ID, destination FormatID = 変換後フォーマット ID)

指定されたデータ変換定義は存在しません。

(S)

サービス部品呼び出しを中断します。

(O)

アダプタを作成した際に指定したフォーマット定義, およびデータ変換定義を確認してください。必要なフォーマット定義, データ変換定義が指定されていなかった場合, データ変換定義を入力し, アダプタを再作成してください。データ変換定義, データフォーマット定義を確認してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は, ログ・トレースを採取し, 保守員に連絡してください。

KDEC02521-E

The adapter state is invalid. (adapter name = サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービス ID, information = 詳細情報)

アダプタで状態不正が発生しました。

(S)

サービスアダプタの起動に失敗します。

サービス部品呼び出しを中断します。

(O)

アダプタを再起動してください。ログ・トレースを採取し, 保守員に連絡してください。

KDEC02523-E

An unsupported data conversion was executed. (adapter name = サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービス ID, source FormatID = 比較元フォーマット ID, source message type = 比較元メッセージタイプ, destination FormatID = 比較先フォーマット ID, destination message type = 比較先メッセージタイプ)

サポートされていないデータ変換が実行されました。

比較元メッセージタイプ

- XML : XML 電文
- Binary : バイナリ電文
- NONE : 電文なし
- UNKNOWN (値): 想定外の電文形式

比較先メッセージタイプ

- XML : XML 電文
- Binary : バイナリ電文
- NONE : 電文なし
- UNKNOWN (値): 想定外の電文形式

(S)

サービス部品呼び出しを中断します。

11. メッセージ

(O)

アダプタでサポートしているデータ変換を確認してください。アダプタを作成した際に指定したフォーマット定義、およびデータ変換定義を確認してください。必要なフォーマット定義、データ変換定義が指定されていなかった場合、データ変換定義を入力し、アダプタを再作成してください。データ変換ディレクトリのデータ変換定義、データフォーマット定義を確認してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC02524-E

An attempt to validate a message has failed. (adapter name = アダプタ名, FormatID = 電文フォーマット ID)

電文の検証に失敗しました。

(S)

サービス呼び出しを中断します。

(O)

電文フォーマット ID に対応する電文フォーマット定義の検証が失敗しています。送受信する際のユーザ電文が誤っていたり、定義したフォーマット定義が誤っていたりする場合があります。メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。

11.2.7 KDEC03001 ~ KDEC03500

KDEC03001-E

A service call was interrupted because a SOAP access error was detected. (adapter name = サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービス ID, HCSCCommonID = HCSC メッセージ共通 ID, ServiceRequestID = サービスリクエスト ID, information = 例外から取得したメッセージ)

SOAP の通信エラーを検知したため、サービス部品呼び出しを中断しました。

(S)

サービス部品呼び出しを中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。次に示す運用上の問題であった場合は再度実行してください。

- サービス部品が起動しているか確認してください。
- アダプタ生成時に指定したサービス情報が正しいか確認してください。
- メッセージログファイルに SOAP のエラー情報が出力されていないか確認してください。

障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC03002-E

A service call was interrupted because an EJB access error was detected. (adapter name = サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービス ID, HCSCCommonID = HCSC メッセージ共通 ID, ServiceRequestID = サービスリクエスト ID, information = 例外から取得したメッセージ)

EJB 呼び出しでエラーを検知したため、サービス部品呼び出しを中断しました。

(S)

サービス部品呼び出しを中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。次に示す運用上の問題であった場合は再度実行してください。

- サービス部品が起動しているか確認してください。
- アダプタ生成時に指定したサービス情報が正しいか確認してください。
- メッセージログファイルに EJB のエラー情報が出力されていないか確認してください。

障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC03003-E

A service call was interrupted because an error was detected during asynchronous message sending. (adapter name = サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービス ID, HCSCCommonID = HCSC メッセージ共通 ID, ServiceRequestID = サービスリクエスト ID, information = 例外から取得したメッセージ)

非同期メッセージ送信時にエラーを検知したため、サービス部品呼び出しを中断しました。

(S)

サービス部品呼び出しを中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。次に示す運用上の問題であった場合は再度実行してください。

- キューが存在するか確認してください。
- キュー属性が正しいか確認してください。
- メッセージログファイルに CosminexusRM のエラー情報が出力されていないか確認してください。

障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC03005-E

A service call was interrupted because a custom service access error was detected. (adapter name = サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービス ID, HCSCCommonID = HCSC メッセージ

11. メッセージ

ジ共通 ID, ServiceRequestID = サービスリクエスト ID, error message = カスタムアダプタ開発者が設定したエラーメッセージ, code = カスタムアダプタ開発者が設定したエラーコード)

カスタムアダプタ開発者が実装したカスタムプロトコルコンバータからの例外を検知したため、サービス部品呼び出しを中断しました。

カスタムアダプタ開発者が設定したエラーメッセージ

- 設定されている場合：カスタムアダプタ開発者が設定したエラーメッセージ
- 設定されていない場合：null

カスタムアダプタ開発者が設定したエラーコード

- 設定されている場合：カスタムアダプタ開発者が設定したエラーコード
- 設定されていない場合：null

(S)

サービス部品呼び出しを中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。エラーメッセージとエラーコードを参照し、カスタムアダプタのマニュアルに従って対処してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC03006-E

An undefined error occurred while the web service was executing. (fault code = 受信した SOAP フォルトの faultcode の値, fault string = 受信した SOAP フォルトの faultstring の値, fault actor = 受信した SOAP フォルトの faultactor の値)

Web サービスの実行中に未定義の例外が発生しました。

(S)

処理を続行します。

(O)

Web サービスの実行中にユーザ未定義の障害が発生しました。サービス部品の仕様を見直すか、Web サービスに送信した電文を見直して再度実行してください。

KDEC03011-E

The service is not supported. (adapter name = サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービス ID, operation name = オペレーション名, parameter = 項目)

未サポートのサービスです。

オペレーション名

- 情報がオペレーションごとになっている場合：オペレーション名
- 情報がオペレーションごとになっていない場合：null

項目

- encode-style : SOAP のエンコードスタイル (Web サービスまたは Session Bean)

- binding-style : SOAP のバインディングスタイル (Web サービスまたは Session Bean)
- Attachement : SOAP の添付ファイルの数 (Web サービス)
- content-type : SOAP の添付ファイルのコンテンツタイプ (Web サービス)
- message-type : メッセージタイプ
- namespace : 名前空間修飾 (Web サービスまたは Session Bean)

(S)

サービス部品呼び出しを中断します。

(O)

HCSC がサポートするサービスを確認してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC03012-E

The telegram format is not supported. (adapter name = サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービス ID, telegram type = 電文形式)

電文が未サポートの電文形式です。

電文形式

- XML : XML 電文
- Binary : バイナリ電文
- NONE : 電文なし
- UNKNOWN (値) : 想定外の電文形式

(S)

サービス部品呼び出しを中断します。

(O)

サービス部品に送信する電文の形式を確認し、再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC03013-E

An attempt to make a telegram failed because an exception occurred. (adapter name = サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービス ID, information = 原因となった例外)

例外が発生したため、電文生成に失敗しました。

(S)

サービス部品呼び出しを中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC03014-W

An exception occurred in the protocol converter but processing will continue. (adapter name = サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービス ID, information1 = 例外名, information2 = 例外から取得したメッセージ)

アダプタで例外が発生しましたが処理を続行します。

(S)

処理を続行します。

(O)

例外名, 例外から取得したメッセージから原因が特定できる場合は, その対処方法に従ってください。ログ・トレースを採取し, 保守員に連絡してください。

KDEC03015-E

An initialization error occurred in the protocol converter. (adapter name = サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービス ID, information = 原因となった例外名)

プロトコルコンバータで初期化エラーが発生しました。

(S)

サービスアダプタのデプロイが失敗します。

サービス部品呼び出しを中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し, 障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は, ログ・トレースを採取し, 保守員に連絡してください。

KDEC03016-E

The message type set in the custom adapter is invalid. (adapter name = サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービス ID, message type = メッセージ形式)

カスタムアダプタで設定されたメッセージタイプが不正です。

メッセージ形式

- XML : XML 電文
- Binary : バイナリ電文
- NONE : 電文なし
- UNKNOWN (値): 想定外の電文形式

(S)

サービス部品呼び出しを中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し, 障害要因を取り除いてください。

- カスタムアダプタの情報を確認し, カスタムプロトコルコンバータが想定した情報と異なっている場合は修正し, アダプタを再作成してください。

- 指定したメッセージ形式をアダプタのメッセージ形式に合わせて再度実行してください。

障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC03017-E

The message has already been stored. (adapter name = サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービス ID)

カスタムプロトコルコンバータでメッセージコンテナにメッセージを設定しようとしたが、すでにメッセージが設定されていました。

(S)

サービス部品呼び出しを中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。

- カスタムアダプタ開発者は、実装したカスタムプロトコルコンバータ処理を見直してください。
- アダプタを再作成してください。

障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC03018-E

The message is invalid. (adapter name = サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービス ID, information = 原因となったエラーコード)

カスタムプロトコルコンバータでメッセージコンテナに不正なメッセージが設定されました。

(S)

サービス部品呼び出しを中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。

- カスタムアダプタ開発者は、実装したカスタムプロトコルコンバータ処理を見直してください。
- アダプタを再作成してください。
- メッセージを確認して再度実行してください。

障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC03019-E

An unsupported data conversion is defined. (adapter name = サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービス ID, operation name = オペレーション名, standard FormatID = 標準フォーマット ID, service FormatID = サービスフォーマット ID)

サポートされていないデータ変換が定義されています。

(S)

サービスアダプタのデプロイが失敗します。
サービス部品呼び出しを中断します。

(O)

アダプタでサポートしているデータ変換を確認してください。アダプタを作成した際に指定したフォーマット定義、およびデータ変換定義を確認してください。必要なフォーマット定義、データ変換定義が指定されていなかった場合、データ変換定義を入力し、アダプタを再作成してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC03020-E

The custom converter class name is not defined. (adapter name = サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービス ID)

カスタムコンバータのクラス名が定義されていません。

(S)

サービスアダプタのデプロイが失敗します。

(O)

カスタムアダプタ開発 Frame Work 用のプロパティファイル (framework_properties.xml) にユーザ実装のクラス名を定義してください。
アダプタを再作成してください。
障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC03021-E

An unexpected exception occurred during custom adaptor processing. (adapter name = カスタムアダプタのサービス ID, HCSCCommonID = HCSC メッセージ共通 ID, ServiceRequestID = サービスリクエスト ID, information1 = 原因となった例外名またはエラー名, information2 = 詳細情報 (例外またはエラーから取得したメッセージ))

カスタムアダプタの処理中に予期しない例外が発生しました。

(S)

サービス呼び出しを中断します。

(O)

ログ・トレースを採取し、カスタムアダプタのサービス ID に表示されているカスタ

ムアダプタの Java 実装を開発者に連絡してください。カスタムアダプタが製品から提供されているアダプタの場合は、保守員に連絡してください。

11.2.8 KDEC04501 ~ KDEC05000

KDEC04501-E

An attempt to read the HCSC server settings file has failed. (file name = ファイル名)

HCSC サーバの設定情報ファイルの読み込みに失敗しました。

(S)

処理を中断します。

(O)

file name で表示されたファイルが存在するか、または読み込めるファイルが確認してください。

KDEC04502-E

The HCSC server name is invalid. (name = HCSC サーバ名)

HCSC サーバ名が不正です。

(S)

処理を中断します。

(O)

正しい HCSC サーバ名称をコマンドに指定してください。

KDEC04503-E

The contents of the HCSC server settings file are invalid. (file name = HCSC サーバの設定情報ファイル名, parameter = パラメタ名)

HCSC サーバの設定情報ファイルの内容が不正です。

(S)

処理を中断します。

(O)

file name に示す設定情報ファイル名に指定した設定内容を確認し、修正してから再度実行してください。

KDEC04504-E

The HCSC server initialization failed.

HCSC サーバの初期化処理に失敗しました。

(S)

HCSC サーバの起動を中断します。

11. メッセージ

HCSC サーバを再起動する場合は、HCSC サーバの起動をリトライすることがあります。
再び HCSC サーバの初期化処理に失敗した場合は、再度このメッセージが出力されます。

(O)

メッセージログファイルを参照して、障害原因を取り除いてから再度実行してください。

KDEC04505-E

Initialization of the HCSC server failed. (cause = 詳細原因)

HCSC サーバの初期化に失敗しました。

(S)

サーバの起動を中止します。

(O)

詳細原因に従い障害要因を取り除いてから再度実行してください。

KDEC04506-E

The HCSC server is not running. (status = HCSC サーバ状態)

HCSC サーバが起動していません。

HCSC サーバ状態

- 1：起動処理中
- 2：起動状態
- 4：停止状態
- 5：停止処理中

(S)

処理を中断します。

(O)

HCSC サーバの状態を確認してください。

KDEC04510-E

The reception is not terminating. (status = 標準受付状態)

標準受付の状態は停止処理中ではありません。

標準受付状態

- 1：起動処理中
- 2：起動状態
- 3：起動失敗状態
- 4：停止状態
- 5：停止処理中

- 6 : 停止失敗状態

(S)

処理を中断します。

(O)

標準受付の状態を確認してください。

KDEC04511-E

The reception has not stopped. (status = 標準受付状態)

標準受付は停止していません。

標準受付状態

- 1 : 起動処理中
- 2 : 起動状態
- 3 : 起動失敗状態
- 4 : 停止状態
- 5 : 停止処理中
- 6 : 停止失敗状態

(S)

処理を中断します。

(O)

標準受付の状態を確認してください。なお CSC サーバを停止する際は、リクエスト受付を停止する必要があります。

KDEC04512-E

The reception is not starting. (status = 標準受付状態)

標準受付は開始していません。

標準受付状態

- 1 : 起動処理中
- 2 : 起動状態
- 3 : 起動失敗状態
- 4 : 停止状態
- 5 : 停止処理中
- 6 : 停止失敗状態

(S)

処理を中断します。

(O)

標準受付の状態を確認してください。またはリクエスト受付の開始処理の完了を待ってから再実行してください。

KDEC04513-E

The reception is not terminating.

ユーザ定義受付は停止処理中ではありません。

(S)

処理を中断します。

(O)

ユーザ定義受付の状態を確認してください。

KDEC04514-E

The reception has not stopped.

ユーザ定義受付は停止していません。

(S)

処理を中断します。

(O)

ユーザ定義受付の状態を確認してください。なお CSC サーバを停止する際は、すべてのユーザ定義受付を停止する必要があります。

KDEC04515-E

The reception is not starting.

ユーザ定義受付は開始していません。

(S)

処理を中断します。

(O)

ユーザ定義受付の状態を確認してください。またはリクエスト受付の開始処理の完了を待ってから再実行してください。

KDEC04516-E

The specified content is invalid. (file name = ファイル名 , information = 詳細情報)

ファイル名で指定されたファイルの内容が不正です。

(S)

処理を中断します。

(O)

ファイル名で表示したファイルに定義した内容を確認してください。エラーを検出したファイル名が SOAP Fault 動作定義ファイルの場合、定義の内容を見直してください。

KDEC04517-E

An attempt to change the HCSC status failed because DB access failed. (type = 更新に失敗した状態種別, status = 更新失敗後の状態)

DB アクセスの失敗によって、HCSC サーバの状態 (HCSC サーバ、またはリクエスト受付) の更新に失敗しました。

更新に失敗した状態種別

- 1: HCSC サーバ状態
- 2: リクエスト受付状態

更新失敗後の状態

- 1: 起動処理中
- 2: 起動状態
- 3: 起動失敗状態
- 4: 停止状態
- 5: 停止処理中
- 6: 停止失敗状態

(S)

処理を継続します。

(O)

メッセージログの DB アクセス障害エラーを参照して障害要因を取り除いてください。障害を取り除いたあと、次の操作をして状態を回復してください。

HCSC サーバ起動または停止時の失敗の場合

HCSC サーバを強制停止してください。

標準受付開始または停止時の失敗の場合

標準受付を強制停止してください。

KDEC04518-E

The HCSC server cannot be accessed because it is now terminating.

HCSC サーバが停止処理中のため、状態を参照できません。

(S)

処理を中断します。

(O)

HCSC サーバの停止処理が終了してから再度実行してください。

KDEC04519-E

The HCSC server cannot be stopped because other commands are executing.

ほかのコマンドが処理を実行しているため、HCSC サーバは停止できません。

11. メッセージ

(S)

処理を中断します。

(O)

状態表示などのコマンド処理実行中に HCSC サーバ停止コマンドは実行できません。しばらくしてほかのコマンド処理の終了を待ってから再度実行してください。

KDEC04520-E

The HCSC server table version is invalid. (table version = テーブルバージョン番号, table revision = テーブルリビジョン番号)

HCSC サーバのテーブルバージョンは無効です。

(S)

処理を中断します。

(O)

HCSC サーバのテーブルバージョンを確認し、不正な場合には再セットアップを実行してください。

KDEC04601-I

The HCSC server has started.

HCSC サーバアプリケーションの起動処理（初期化処理）が完了しました。

(S)

HCSC サーバアプリケーションの開始処理を継続します。

KDEC04602-I

The HCSC server has terminated.

HCSC サーバアプリケーションの終了処理が完了しました。

(S)

HCSC サーバアプリケーションの停止処理を継続します。

KDEC04603-I

The reception has terminated.

HCSC サーバアプリケーションのリクエスト受付の終了処理が完了しました。

(S)

HCSC サーバアプリケーション標準受付の停止処理を継続します。

KDEC04604-I

The reception has started.

HCSC サーバアプリケーションのリクエスト受付の起動処理（初期化処理）が完了しま

した。

(S)

HCSC サーバアプリケーション標準受付の開始処理を継続します。

KDEC04605-I

Termination (message monitoring) of the reception was canceled.

リクエスト受付の停止処理（メッセージ監視）をキャンセルしました。

(S)

HCSC サーバアプリケーション標準受付の停止処理を継続します。

KDEC04609-E

An attempt to change the HCSC server status has failed. (type = 更新に失敗した状態種別, status = 更新失敗後の状態)

HCSC サーバの状態（HCSC サーバ, またはリクエスト受付）の更新に失敗しました。

更新に失敗した状態種別

- 1: HCSC サーバ状態
- 2: リクエスト受付状態

更新失敗後の状態

- 1: 開始処理中
- 2: 開始
- 3: 開始失敗
- 4: 停止
- 5: 停止処理中
- 6: 停止失敗

(S)

処理を継続します。

(O)

データへのアクセスで障害が発生しています。メッセージログファイルを参照し、障害を取り除いたあと、状態を回復するために、次に示す作業を実施してください。

HCSC サーバの起動時または停止時に、状態の更新に失敗した場合
HCSC サーバを強制停止してください。

リクエスト受付の開始時または停止時に、状態の更新に失敗した場合
リクエスト受付を強制停止してください。

11.2.9 KDEC05001 ~ KDEC05500

KDEC05001-E

An attempt to open a connection to the database has failed. (reason = 例外の説明, SQL state = 例外を識別するコード, error code = SQLException オブジェクトのベンダー固有の例外コード)

データベースへのコネクション接続に失敗しました。

SQLException オブジェクトのベンダー固有の例外コード

例外の詳細については、各データベースのエラー情報を参照してください。

(S)

データベースへのコネクション接続を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。HCSC サーバセットアップ定義ファイルの DB Connector の指定内容、指定した DB Connector の設定内容、使用している JDBC ドライバの設定内容、およびデータベースに関する設定を見直して、障害要因を特定してください。

障害要因が KDJE50012-E または KFDJ02005-E の場合は、DB Connector の属性に設定している <transaction-support> の値が NoTransaction であること、および HCSC サーバセットアップ定義ファイルのプロパティ (dbcon-nodisplayname) に NoTransaction の DB Connector が指定されていることを確認してください。

障害要因が運用上の問題であった場合は、再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC05002-E

An attempt to close a connection to the database has failed. (reason = 例外の説明, SQL state = 例外を識別するコード, error code = SQLException オブジェクトのベンダー固有の例外コード)

データベースとのコネクション解放に失敗しました。

SQLException オブジェクトのベンダー固有の例外コード

例外の詳細については、各データベースのエラー情報を参照してください。

(S)

データベースとのコネクション解放を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。HCSC サーバセットアップ定義ファイルの DB Connector の指定内容、指定した DB Connector の設定内容、使用している JDBC ドライバの設定内容、およびデータベースに関する設定を見直して、障害要因を特定してください。

障害要因が運用上の問題であった場合は、再度実行してください。

障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員

に連絡してください。

KDEC05003-E

An attempt to retrieve database information has failed. (information ID = 情報種別 ID, table name = テーブル名, reason = 例外の説明, SQL state = 例外を識別するコード, error code = SQLException オブジェクトのベンダー固有の例外コード)

データベースの情報の照会に失敗しました。

情報種別 ID

- 10 : HCSC 基本情報
- 30 : ロケーション情報
- 41 : ルーティングルールセット (ルールセット定義) 情報
- 51 : データ変換ユティリティ (データ変換定義) 情報
- 52 : データ変換ユティリティ (フォーマット定義) 情報
- 60 : 実行履歴情報

SQLException オブジェクトのベンダー固有の例外コード

例外の詳細については、各データベースのエラー情報を参照してください。

(S)

処理を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。HCSC サーバセットアップ定義ファイルの DB Connector の指定内容、指定した DB Connector の設定内容、使用している JDBC ドライバの設定内容、およびデータベースに関する設定を見直して、障害要因を特定してください。

障害要因が運用上の問題であった場合は、再度実行してください。

障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC05004-E

An attempt to update database information has failed. (information ID = 情報種別 ID, table name = テーブル名, reason = 例外の説明, SQL state = 例外を識別するコード, error code = SQLException オブジェクトのベンダー固有の例外コード)

データベースの情報の更新に失敗しました。

情報種別 ID

- 10 : HCSC 基本情報
- 30 : ロケーション情報
- 41 : ルーティングルールセット (ルールセット定義) 情報
- 51 : データ変換ユティリティ (データ変換定義) 情報
- 52 : データ変換ユティリティ (フォーマット定義) 情報

- 60：実行履歴情報

SQLException オブジェクトのベンダー固有の例外コード

例外の詳細については、各データベースのエラー情報を参照してください。

(S)

処理を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。HCSC サーバセットアップ定義ファイルの DB Connector の指定内容、指定した DB Connector の設定内容、使用している JDBC ドライバの設定内容、およびデータベースに関する設定を見直して、障害要因を特定してください。

障害要因が運用上の問題であった場合は、再度実行してください。

障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC05005-E

An attempt to delete database information has failed. (information ID = 情報種別 ID, table name = テーブル名, reason = 例外の説明, SQL state = 例外を識別するコード, error code =

SQLException オブジェクトのベンダー固有の例外コード)

データベースの情報の削除に失敗しました。

情報種別 ID

- 10：HCSC 基本情報
- 30：ロケーション情報
- 41：ルーティングルールセット（ルールセット定義）情報
- 51：データ変換ユティリティ（データ変換定義）情報
- 52：データ変換ユティリティ（フォーマット定義）情報
- 60：実行履歴情報

SQLException オブジェクトのベンダー固有の例外コード

例外の詳細については、各データベースのエラー情報を参照してください

(S)

処理を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。HCSC サーバセットアップ定義ファイルの DB Connector の指定内容、指定した DB Connector の設定内容、使用している JDBC ドライバの設定内容、およびデータベースに関する設定を見直して、障害要因を特定してください。

障害要因が運用上の問題であった場合は、再度実行してください。

障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC05006-E

An attempt to insert database information has failed. (information ID = 情報種別 ID, table name = テーブル名, reason = 例外の説明, SQL state = 例外を識別するコード, error code = SQLException オブジェクトのベンダー固有の例外コード)

データベースの情報の追加に失敗しました。

情報種別 ID

- 10 : HCSC 基本情報
- 30 : ロケーション情報
- 41 : ルーティングルールセット (ルールセット定義) 情報
- 51 : データ変換ユティリティ (データ変換定義) 情報
- 52 : データ変換ユティリティ (フォーマット定義) 情報
- 60 : 実行履歴情報

SQLException オブジェクトのベンダー固有の例外コード

例外の詳細については、各データベースのエラー情報を参照してください。

(S)

処理を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。HCSC サーバセットアップ定義ファイルの DB Connector の指定内容、指定した DB Connector の設定内容、使用している JDBC ドライバの設定内容、およびデータベースに関する設定を見直して、障害要因を特定してください。

障害要因が KDJE50012-E または KFDJ02005-E の場合は、DB Connector の属性に設定している <transaction-support> の値が NoTransaction であること、および HCSC サーバセットアップ定義ファイルのプロパティ (dbcon-nodisplayname) に NoTransaction の DB Connector が指定されていることを確認してください。

障害要因が運用上の問題であった場合は、再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC05008-E

An attempt to execute an SQL statement has failed. (reason = 例外の説明, SQL state = 例外を識別するコード, error code = SQLException オブジェクトのベンダー固有の例外コード)

データベースへの SQL 命令の実行に失敗しました。

SQLException オブジェクトのベンダー固有の例外コード

例外の詳細については、各データベースのエラー情報を参照してください。

(S)

処理を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は、再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC05009-E

An error occurred during rollback of a transaction. (reason = 例外の説明, SQL state = 例外を識別するコード, error code = SQLException オブジェクトのベンダー固有の例外コード)

トランザクションのロールバック処理でエラーが発生しました。

SQLException オブジェクトのベンダー固有の例外コード

例外の詳細については、各データベースのエラー情報を参照してください。

(S)

処理を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は、再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC05010-W

There is a contradiction in information in the database. (information ID = 情報種別 ID, maintenance information = 矛盾が起きているテーブルの保守情報)

データベース内の情報で矛盾を検知しました。

情報種別 ID

- 10: HCSC 基本情報
- 30: ロケーション情報
- 41: ルーティングルールセット (ルールセット定義) 情報
- 51: データ変換ユティリティ (データ変換定義) 情報
- 52: データ変換ユティリティ (フォーマット定義) 情報
- 60: 実行履歴情報

(S)

処理を続行します。

(O)

メッセージログファイルの参照、およびログ・トレースを採取し、障害要因を取り除いてください。

KDEC05011-E

Database access initialization failed because of an invalid parameter. (parameter = HCSC サーバプロパティのパラメタ名, value = HCSC サーバプロパティのパラメタ値)

パラメタ不正によって、HCSC サーバ未起動時のデータベースアクセス初期化処理に失敗しました。

(S)

データベースへのコネクション接続を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は、再度 HCSC サーバの再セットアップを実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC05012-E

Database access initialization, before HCSC server startup, failed because loading of the JDBC driver failed. (JDBC name = JDBC ドライバ名)

JDBC ドライバのロード失敗によって、HCSC サーバ未起動時のデータベースアクセス初期化処理に失敗しました。

(S)

データベースへのコネクション接続を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は、再度 HCSC サーバの再セットアップを実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC05013-E

Database access initialization, at HCSC server startup, failed because the attempt to obtain the data source failed. (DataSource name = データソース名)

データソースの取得失敗によって、HCSC サーバ起動時のデータベースアクセス初期化処理に失敗しました。

(S)

データベースへのコネクション接続を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は、再度 J2EE サーバの再セットアップを実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC05014-E

Database access initialization, before HCSC server startup, failed because a required parameter was not specified. (parameter = HCSC サーバプロパティのパラメタ名)

11. メッセージ

必須のパラメタが指定されていないため、HCSC サーバ未起動時のデータベースアクセス初期化処理に失敗しました。

(S)

データベースへのコネクション接続を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は、再度 HCSC サーバの再セットアップを実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC05101-E

An attempt to setup system management information has failed. (error code = 障害コード, error message = エラーメッセージ)

システム管理情報のセットアップに失敗しました。

(S)

処理を中断します。

(O)

障害コードに表示されたメッセージに対応する対策をしたあと、再度システム管理情報をセットアップしてください。

KDEC05102-E

An attempt to initialize system management information has failed. (error code = 障害コード, error message = エラーメッセージ)

システム管理情報の初期化に失敗しました。

(S)

処理を中断します。

(O)

障害コードに表示されたメッセージに対応する対策をしたあと、再度 HCSC サーバを起動してください。

KDEC05103-E

An attempt to perform unsetup of system management information has failed. (error code = 障害コード, error message = エラーメッセージ)

システム管理情報のアンセットアップに失敗しました。

(S)

処理を中断します。

(O)

障害コードに表示されたメッセージに対応する対策をしたあと、再度システム管理

情報をアンセットアップしてください。

KDEC05104-E

An attempt to retrieve system management information has failed. (information ID = 情報種別 ID, error code = 障害コード, error message = エラーメッセージ)

情報種別 ID に表示されているシステム管理情報の参照に失敗しました。

情報種別 ID

- 10 : HCSC 基本情報
- 30 : ロケーション情報
- 41 : ルーティングルールセット (ルールセット定義) 情報
- 51 : データ変換ユティリティ (データ変換定義) 情報
- 52 : データ変換ユティリティ (フォーマット定義) 情報
- 60 : 実行履歴情報

(S)

処理を中断します。

(O)

障害コードに表示されたメッセージに対応する対策をしたあと、再度操作を実行してください。

KDEC05105-E

An attempt to update system management information has failed. (information ID = 情報種別 ID, error code = 障害コード, error message = エラーメッセージ)

情報種別 ID に表示されているシステム管理情報の更新に失敗しました。

情報種別 ID

- 10 : HCSC 基本情報
- 30 : ロケーション情報
- 41 : ルーティングルールセット (ルールセット定義) 情報
- 51 : データ変換ユティリティ (データ変換定義) 情報
- 52 : データ変換ユティリティ (フォーマット定義) 情報
- 60 : 実行履歴情報

(S)

処理を中断します。

(O)

障害コードに表示されたメッセージに対応する対策をしたあと、再度操作を実行してください。

KDEC05106-E

An attempt to delete system management information has failed. (information ID = 情報種別 ID, error code = 障害コード, error message = エラーメッセージ)

情報種別 ID に表示されているシステム管理情報の削除に失敗しました。

情報種別 ID

- 10 : HCSC 基本情報
- 30 : ロケーション情報
- 41 : ルーティングルールセット (ルールセット定義) 情報
- 51 : データ変換ユティリティ (データ変換定義) 情報
- 52 : データ変換ユティリティ (フォーマット定義) 情報
- 60 : 実行履歴情報

(S)

処理を中断します。

(O)

障害コードに表示されたメッセージに対応する対策をしたあと, 再度操作を実行してください。

KDEC05107-E

An attempt to insert system management information has failed. (information ID = 情報種別 ID, error code = 障害コード, error message = エラーメッセージ)

情報種別 ID に表示されているシステム管理情報の追加に失敗しました。

情報種別 ID

- 10 : HCSC 基本情報
- 30 : ロケーション情報
- 41 : ルーティングルールセット (ルールセット定義) 情報
- 51 : データ変換ユティリティ (データ変換定義) 情報
- 52 : データ変換ユティリティ (フォーマット定義) 情報
- 60 : 実行履歴情報

(S)

処理を中断します。

(O)

障害コードに表示されたメッセージに対応する対策を実行したあと, 再度操作を実行してください。

KDEC05108-W

There is a contradiction in system management information. (information ID = 情報種別 ID, maintenance information = 矛盾が起きているシステム管理情報の保守情報)

情報種別 ID に表示されているシステム管理情報内の内容で矛盾を検知しました。

情報種別 ID

- 10 : HCSC 基本情報
- 30 : ロケーション情報
- 41 : ルーティングルールセット (ルールセット定義) 情報
- 51 : データ変換ユティリティ (データ変換定義) 情報
- 52 : データ変換ユティリティ (フォーマット定義) 情報
- 60 : 実行履歴情報

(S)

処理を続行します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害が発生していないかを確認してください。障害が発生している場合は、障害に対して対策を行い、HCSC サーバを再起動してください。問題が解決しない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC05201-E

The specified directory does not exist. (directory name = 指定したディレクトリ名)

HCSC サーバのシステム管理情報を保存する出力先パスに指定したディレクトリが存在しません。

(S)

処理を中断します。

(O)

HCSC サーバセットアップ定義ファイルの `hcscserver-data-filepath` プロパティに指定した内容を確認してください。指定した内容が正しい場合は、指定したディレクトリが存在するか、または指定したディレクトリの構造が正しいかどうかを確認してください。問題が解決したら、再度 HCSC サーバのセットアップを実行してください。問題が解決しない場合は、ログ・トレース、および HCSC サーバセットアップ定義ファイルの `hcscserver-data-filepath` プロパティに指定したディレクトリを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC05202-E

The structure of the specified directory is invalid. (directory name = 指定したディレクトリ名)

HCSC サーバのシステム管理情報を保存する出力先パスに指定したディレクトリ内に、同一 HCSC サーバ名の情報が存在しています。

(S)

処理を中断します。

(O)

HCSC サーバセットアップ定義ファイルの `hcscserver-data-filepath` プロパティに指定した内容を確認してください。指定した内容が正しい場合は、指定したディレクトリの構造を確認し、不正なディレクトリが存在していないことを確認してください。HCSC サーバをセットアップする前に、すでに同じ HCSC サーバ名のディレクトリが作られている場合は、すでに存在しているファイルを退避させたあと、これらのファイルを削除してください。問題を解決したら、再度 HCSC サーバのセットアップを実行してください。問題が解決しない場合は、ログ・トレース、および HCSC サーバセットアップ定義ファイルの `hcscserver-data-filepath` プロパティに指定したディレクトリを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC05203-E

An attempt to perform a file or directory operation has failed. (name = ファイル名またはディレクトリ名, operation = 操作)

ファイルまたはディレクトリの操作に失敗しました。

操作

- 作成 : create
- 削除 : delete
- 参照 : read
- 更新 : write

(S)

処理を中断します。

(O)

表示されているファイルまたはディレクトリを確認してください。また、ファイルまたはディレクトリのアクセス権限を確認してください。

該当するファイルまたはディレクトリを再度操作しても問題が解決しない場合は、ログ・トレース、および HCSC サーバセットアップ定義ファイルの `hcscserver-data-filepath` プロパティに指定したディレクトリを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC05204-E

The record file is invalid. (file name = ファイルパス)

レコードファイルが不正です。

(S)

処理を中断します。

(O)

HCSC サーバを再起動して、再度操作を実行してください。問題が解決しない場合は、ログ・トレース、および HCSC サーバセットアップ定義ファイルの `hcscserver-data-filepath` プロパティに指定したディレクトリを採取し、保守員に連

絡してください。

KDEC05205-E

The index file is invalid. (file name = ファイルパス)

インデックスファイルが不正です。

(S)

処理を中断します。

(O)

HCSC サーバを再起動して、再度操作を実行してください。問題が解決しない場合は、ログ・トレース、および HCSC サーバセットアップ定義ファイルの `hcscserver-data-filepath` プロパティに指定したディレクトリを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC05206-E

An attempt to rename a file or directory failed. (source name = 変更前ファイルパス, destination name = 変更先ファイルパス)

ファイルまたはディレクトリのリネームに失敗しました。

(S)

処理を中断します。

(O)

変更前ファイルパスに表示されているファイルまたはディレクトリのアクセス権限を確認してください。変更先ファイルパスに表示されているファイルまたはディレクトリが存在する場合は、該当するファイルまたはディレクトリを退避させたあと、このファイルまたはディレクトリを削除してください。そのあと、HCSC サーバを再起動して、再度操作を実行してください。問題が解決しない場合は、ログ・トレース、および HCSC サーバセットアップ定義ファイルの `hcscserver-data-filepath` プロパティに指定したディレクトリを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC05207-E

The file or directory does not exist. (name = ファイルパス)

ファイルまたはディレクトリが存在しません。

(S)

処理を中断します。

(O)

HCSC サーバを再起動して、再度操作を実行してください。問題が解決しない場合は、ログ・トレース、および HCSC サーバセットアップ定義ファイルの `hcscserver-data-filepath` プロパティに指定したディレクトリを採取し、保守員に連

絡してください。

KDEC05208-E

The file or directory already exists. (name = ファイルパス)

ファイルまたはディレクトリがすでに存在します。

(S)

処理を中断します。

(O)

ファイルパスに表示されているファイルまたはディレクトリが存在する場合、該当するファイルまたはディレクトリを退避したあと、このファイルまたはディレクトリを削除してください。そのあと、HCSC サーバを再起動して、再度操作を実行してください。問題が解決しない場合は、ログ・トレース、および HCSC サーバセットアップ定義ファイルの `hscserver-data-filepath` プロパティに指定したディレクトリを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC05209-E

The specified name is not a file. (name = ファイルパス)

指定された名称がファイルではありません。

(S)

処理を中断します。

(O)

HCSC サーバを再起動して、再度操作を実行してください。問題が解決しない場合は、ログ・トレース、および HCSC サーバセットアップ定義ファイルの `hscserver-data-filepath` プロパティに指定したディレクトリを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC05210-E

The specified name is not a directory. (name = ファイルパス)

指定された名称がディレクトリではありません。

(S)

処理を中断します。

(O)

HCSC サーバを再起動して、再度操作を実行してください。問題が解決しない場合は、ログ・トレース、および HCSC サーバセットアップ定義ファイルの `hscserver-data-filepath` プロパティに指定したディレクトリを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC05211-E

An attempt to obtain a lock has failed.

ロックの確保に失敗しました。

(S)

処理を中断します。

(O)

HCSC サーバに対するほかの操作が完了していない場合があります。ほかの操作が完了したあと、再度操作を実行してください。問題が解決しない場合は、HCSC サーバを再起動してから、再度操作を実行してください。HCSC サーバを再起動しても問題が解決しない場合は、ログ・トレース、および HCSC サーバセットアップ定義ファイルの `hcscserver-data-filepath` プロパティに指定したディレクトリを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC05212-E

A security exception occurred.

セキュリティ例外が発生しました。

(S)

処理を中断します。

(O)

Cosminexus のセキュリティポリシーファイルの内容を確認し、`hcscserver-data-filepath` プロパティに指定したディレクトリが読み書き可能であることを確認してください。そのあと、HCSC サーバを再起動して、再度操作を実行してください。問題が解決しない場合は、ログ・トレース、および HCSC サーバセットアップ定義ファイルの `hcscserver-data-filepath` プロパティに指定したディレクトリを採取し、保守員に連絡してください。

11.2.10 KDEC05501 ~ KDEC06000

KDEC05501-E

An attempt to specify telegram settings has failed. (telegram type = 電文種別)

電文の設定に失敗しました。

電文種別

- XML : XML 電文
- BINARY : バイナリ電文
- DOM : DOM
- NODE_VALUE : 部分要素
- SUB_TREE : 部分木

11. メッセージ

(S)

処理を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、このメッセージの前後に出ているメッセージの対処方法に従って対処してください。

KDEC05502-E

An attempt to obtain a telegram has failed. (telegram type = 電文種別)

電文の取得に失敗しました。

電文種別

- XML : XML 電文
- BINARY : バイナリ電文
- DOM : DOM
- NODE_VALUE : 部分要素
- SUB_TREE : 部分木
- COMMON : 内部的な共通データ

(S)

処理を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、このメッセージの前後に出ているメッセージの対処方法に従って対処してください。

KDEC05503-W

An exception occurred during checking of the telegram format. (exception = 例外名)

電文フォーマットの妥当性チェックで例外を検知しました。

例外名

- CSCDataTransformException : 電文がフォーマット定義と不一致

(S)

処理を継続します。

(O)

電文がフォーマット定義に沿っているかどうかを確認してください。電文がフォーマット定義に沿っている場合は、メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC05504-E

An attempt to specify format definition settings has failed. (information1 = 保守情報, information2 = 保守情報)

フォーマット定義の設定に失敗しました。

(S)

処理を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、このメッセージの前後に出ているメッセージの対処方法に従って対処してください。

KDEC05505-E

An attempt to copy a telegram failed because an exception occurred. (exception = 例外名)

例外を検知したため電文の複製に失敗しました。

(S)

処理を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、このメッセージの前後に出力されているメッセージの対処方法に従って対処してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC05506-E

An exception occurred during checking of the telegram format. (exception = 例外名)

電文フォーマットの妥当性チェックで例外を検知しました。

(S)

処理を中断します。

(O)

電文がフォーマット定義に沿っているかどうかを確認してください。電文がフォーマット定義に沿っている場合は、メッセージログファイルを参照し、障害の要因を取り除いてください。障害となった要因が運用上の問題であった場合は、再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

11.2.11 KDEC06001 ~ KDEC06500

KDEC06001-E

Startup processing failed because the definition file could not be read.

定義ファイルの読み込みに失敗したため開始処理に失敗しました。

11. メッセージ

(S)

開始処理を中断します。

(O)

メッセージログファイルを確認し、このメッセージの前に出ているログメッセージに従って対処してください。

KDEC06002-E

An attempt to access a database has failed. (definition type = 定義種別, access type = アクセス種別)

データベースのアクセスに失敗しました。

定義種別

- FORMAT : フォーマット定義
- TRANSFORM : データ変換定義

アクセス種別

- INSERT : 追加
- DELETE : 削除

(S)

処理を中断します。

(O)

データベースへのアクセスに障害が発生しています。メッセージログファイルを参照し、障害の要因を取り除いてください。障害の要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害の要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC06003-E

The specified FormatID is invalid. (FormatID = フォーマット ID)

指定されたフォーマット ID が不正です。

フォーマット ID

- フォーマット ID がある場合 : フォーマット ID
- フォーマット ID が空の場合 : null

(S)

処理を中断します。

(O)

指定した ID を見直して再度実行してください。

KDEC06004-E

The format definition file corresponding to the specified FormatID does not exist. (FormatID = フォーマット ID)

指定されたフォーマット ID に対応するフォーマット定義ファイルは存在しません。

(S)

処理を中断します。

(O)

指定した ID を見直して再度実行してください。

KDEC06005-E

The data transform definition corresponding to the specified FormatID does not exist. (source FormatID = 変換前フォーマット ID, destination FormatID = 変換後フォーマット ID)

指定されたフォーマット ID に対応するデータ変換定義ファイルは存在しません。

(S)

処理を中断します。

(O)

指定した ID を見直して再度実行してください。

KDEC06006-E

The format definition file corresponding to the specified FormatID already exists. (FormatID = フォーマット ID)

指定されたフォーマット ID に対応するフォーマット定義ファイルがすでに存在します。

(S)

処理を中断します。

(O)

指定した ID を見直して再度実行してください。

KDEC06007-E

The data transform definition file corresponding to the specified FormatID already exists. (source FormatID = 変換前フォーマット ID, destination FormatID = 変換後フォーマット ID)

指定されたフォーマット ID に対応するデータ変換定義ファイルがすでに存在します。

(S)

処理を中断します。

(O)

指定した ID を見直して再度実行してください。

KDEC06008-E

Data transformation failed. (information1 = 保守情報, information2 = 保守情報, information3 = 保守情報)

データ変換に失敗しました。

(S)

処理を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、このメッセージの前後に出ているメッセージの対処方法に従って対処してください。

KDEC06009-E

An internal contradiction was detected while deleting information.

情報の削除で内部矛盾を検知しました。

(S)

処理を中断します。

(O)

データベースを使用する場合、メッセージログファイルを参照し、データベースに障害が発生していないかを確認してください。データベースを使用しない場合、メッセージログファイルや OS の障害情報を参照し、ファイルの入出力に関する障害などが発生していないかを確認してください。障害が発生している場合は、それぞれの障害に対して対策を行い、HCSC サーバを再起動してください。問題が解決しない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC06010-E

The format definition file corresponding to the specified FormatID already exists. (FormatID = フォーマット ID, information = 詳細情報)

指定されたフォーマット ID に対応するフォーマット定義ファイルはすでに存在していません。

(S)

処理を中断します。

(O)

指定した ID または詳細情報の値を見直して再度実行してください。

KDEC06011-E

The format definition file of a different FormatType already exists for the specified FormatID. (FormatID = フォーマット ID, specified FormatType = 指定されたフォーマット定義のタイプ, existing FormatType = 存在するフォーマット定義のタイプ)

指定されたフォーマット ID で異なるフォーマットタイプのフォーマット定義ファイルは

すでに存在します。

指定されたフォーマット定義のタイプ

- XML
- BINARY

存在するフォーマット定義のタイプ

- XML
- BINARY

(S)

処理を中断します。

(O)

指定した ID またはフォーマット定義のタイプを見直して再度実行してください。

KDEC06012-E

The format definition file corresponding to the specified FormatID does not exist. (FormatID = フォーマット ID, information = 詳細情報)

指定されたフォーマット ID に対応するフォーマット定義ファイルは存在しません。

(S)

処理を中断します。

(O)

指定した ID または詳細情報の値を見直して再度実行してください。

KDEC06013-W

The format definition file corresponding to the specified FormatID is being used with other Business Process. (FormatID = フォーマット ID)

指定されたフォーマット ID に対応するフォーマット定義ファイルはほかのビジネスプロセスで使用しています。

(S)

フォーマット定義の削除処理を中断します。

(O)

指定した ID の値を見直して再度実行してください。また、フォーマット定義を使用しているすべてのビジネスプロセスが必要ない場合は、すべてのビジネスプロセスを削除してください。

KDEC06014-E

An attempt to access a data has failed. (definition type = 定義種別, access type = アクセス種別)

データのアクセスに失敗しました。

操作種別

11. メッセージ

- FORMAT : フォーマット定義
- TRANSFORM : データ変換定義

アクセス種別

- INSERT : 追加
- DELETE : 削除

(S)

処理を中断します。

(O)

メッセージログファイルを確認し、このメッセージの前に出力されたログメッセージに従って対処してください。

11.2.12 KDEC06501 ~ KDEC07000

KDEC06501-W

The specified trace output path is invalid. (trace path = トレースパス, trace type = トレースの種類)

指定したトレース出力先が不正です。

トレースの種類

- method trace : メソッドトレース
- request trace : リクエストトレース

(S)

トレース出力先を指定している場合

デフォルトの出力先にトレースを出力し、処理を継続します。

トレース出力先を指定していない場合

デフォルトのディレクトリを作成し、処理を継続します。

(O)

トレース出力先を指定している場合

HCSC サーバランタイム定義ファイルのトレース出力先を正しく指定してください。

トレース出力先を指定していない場合

対処の必要はありません。

KDEC06502-W

The trace output path cannot be accessed. (trace path = トレースパス, trace type = トレースの種類, cause = 発生した例外の詳細)

トレースの出力先にアクセスできません。

トレースの種類

- method trace : メソッドトレース
- request trace : リクエストトレース

(S)

デフォルトの出力先にトレース出力し、処理を継続します。

(O)

トレース出力先のセキュリティ属性を見直してください。

KDEC06504-E

The message file was not found.

メッセージファイルが見つかりません。

(S)

開始処理を中断します。

(O)

ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC06505-W

Initialization of the method trace failed. (cause = 発生詳細原因, information = 発生した場所)

メソッドトレースの初期化に失敗しました。

(S)

メソッドトレースを出力しない状態で処理を継続します。

(O)

障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC06506-W

Initialization of the request trace failed. (cause = 発生詳細原因, information = 発生した場所)

リクエストトレースの初期化に失敗しました。

(S)

リクエストトレースを出力しない状態で処理を継続します。

(O)

障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC06507-W

Closing the trace failed. (cause = 発生詳細原因, information = 発生した場所)

トレースの終了処理に失敗しました。

11. メッセージ

(S)

終了処理を継続します。

(O)

障害要因が運用上の問題でないか確認してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC06509-W

The method trace is unavailable because the default method trace output path could not be obtained. (information = 発生した例外の詳細)

デフォルトのメソッドトレース出力先を得られないため、メソッドトレースが出力できません。

(S)

メソッドトレースを出力しない状態で処理を継続します。

(O)

Cosminexus のログ出力先のセキュリティ属性を見直してください。または、ほかの出力先を指定してください。

KDEC06510-W

The request trace is unavailable because the default request trace output path could not be obtained. (information = 発生した例外の詳細)

デフォルトのリクエストトレース出力先を得られないため、リクエストトレースが出力できません。

(S)

リクエストトレースを出力しない状態で処理を継続します。

(O)

Cosminexus のログ出力先のセキュリティ属性を見直してください。または、ほかの出力先を指定してください。

11.2.13 KDEC07001 ~ KDEC07500

KDEC07001-E

An invalid command request was received. (information = デバッグ情報)

不正な要求を受け取りました。

(S)

処理を中断します。

(O)

ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC07002-E

A specified command parameter is invalid. (command = コマンド種別, parameter = 不正パラメタ種別)

コマンドのパラメタが不正です。

コマンド種別

HCSC サーバへの要求を識別するための文字列が表示されます。

(S)

処理を中断します。

(O)

障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC07003-E

An unexpected exception occurred during command processing. (exception = 例外種別, message = 例外メッセージ)

コマンド処理中に予期しない例外が発生しました。

(S)

処理を中断します。

(O)

ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC07004-I

The HCSC command was accepted. (command = コマンド種別)

コマンドを受け付けました。

コマンド種別

HCSC サーバへの要求を識別するための文字列が表示されます。

(S)

処理を継続します。

KDEC07005-I

The HCSC command finished successfully. (command = コマンド種別)

コマンド処理が完了しました。

コマンド種別

HCSC サーバへの要求を識別するための文字列が表示されます。

(S)

処理を継続します。

KDEC07006-E

The HCSC command failed. (command = コマンド種別)

コマンド処理が失敗しました。

コマンド種別

HCSC サーバへの要求を識別するための文字列が表示されます。

(S)

処理を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

11.2.14 KDEC10001 ~ KDEC10500

KDEC10001-I

The HCSC command was accepted. (command = コマンド種別)

コマンドを受け付けました。

コマンド種別

HCSC サーバの「MBean 名 # オペレーション名」が表示されます。

(S)

処理を継続します。

KDEC10002-I

The HCSC command finished successfully. (command = コマンド種別)

コマンド処理が完了しました。

コマンド種別

HCSC サーバの「MBean 名 # オペレーション名」が表示されます。

(S)

処理を継続します。

KDEC10003-E

The HCSC command failed. (command = コマンド種別)

コマンド処理が失敗しました。

コマンド種別

HCSC サーバの「MBean 名 # オペレーション名」が表示されます。

(S)

処理を中断します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC10004-E

A specified command parameter is invalid. (command = コマンド種別, parameter = 不正パラメータ種別)

コマンドのパラメータが不正です。

コマンド種別

HCSC サーバのコマンド名または HCSC サーバの「MBean 名 # オペレーション名」が表示されます。

(S)

処理を中断します。

(O)

指定したパラメータを確認して、再度実行してください。

KDEC10005-E

File access failed. (file name = ファイル名)

ファイルアクセスに失敗しました。

(S)

処理を中断します。

(O)

[ファイル名] のファイルを確認してください。

KDEC10006-E

The command cannot execute because another HCSC command is executing. (command = 本コマンドのコマンド種別)

ほかの HCSC コマンドが実行中のため、コマンドが実行できません。または、同一の HCSC サーバに対して、運用環境（画面）からの操作や HCSC コマンドを同時に実行しようとしているため、処理を実行できません。

本コマンドのコマンド種別

HCSC サーバの「MBean 名 # オペレーション名」が表示されます。

(S)

処理を中断します。

(O)

ほかのコマンドが終了してから、再度コマンドを実行してください。または、ほかの操作が終了してから、再度操作してください。

KDEC10007-E

The command cannot execute because the HCSC server is starting. (command = コマンド種別)
HCSC サーバが起動しているため、コマンドが実行できません。

コマンド種別

HCSC サーバの「MBean 名 # オペレーション名」が表示されます。

(S)

処理を中断します。

(O)

HCSC サーバを停止して、再度コマンドを実行してください。

KDEC10008-E

The command cannot execute because the adapter and business process of the HCSC server has not been deleted. (command = コマンド種別)

削除されていないアダプタやビジネスプロセスがあるために、HCSC サーバのアンセットアップに失敗しました。

コマンド種別

HCSC サーバの「MBean 名 # オペレーション名」が表示されます。

(S)

処理を中断します。

(O)

アダプタまたはビジネスプロセスを削除して、再度コマンドを実行してください。

KDEC10009-W

Part of the processing failed but the command continued. For details, please check the message log. (command = コマンド種別)

一部の処理に失敗しましたが、コマンドを続行しました。詳細はメッセージログを参照してください。

コマンド種別

HCSC サーバの「MBean 名 # オペレーション名」が表示されます。

(S)

処理を継続します。

(O)

メッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いて再度実行してください。

KDEC10010-E

The connection to the J2EE server failed. (name = J2EE サーバ名)

J2EE サーバのとの接続に失敗しました。

(S)

処理を中断します。

(O)

J2EE サーバの状態を確認してください。

KDEC10011-E

A command issued to the J2EE server failed. (command = コマンド種別 , error message = エラーメッセージ)

J2EE サーバへ発行したコマンドが失敗しました。

コマンド種別

表示する文字と J2EE サーバのコマンドの対応を次の表に示します。

表示する文字	対応する J2EE サーバのコマンド
start	cjstartsv
stop	cjstopsv
deleteApp	cjdeleteapp
getAppProp	cjgetappprop
importApp	cjimportapp
listApp	cjlistapp
setAppProp	cjsetappprop
startApp	cjstartapp
stopApp	cjstopapp
getAttribute(State)	- (J2EE サーバの状態採取)

(S)

処理を中断します。

(O)

J2EE サーバのメッセージログファイルを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC10012-E

A command issued to Cosminexus Reliable Messaging failed. (system name = Cosminexus Reliable Messaging のシステム名 , command = コマンド種別 , name = キュー名またはキューの宛先名 , error code = 障害コード , error message = エラーメッセージ)

Cosminexus Reliable Messaging へ発行したコマンドが失敗しました。

11. メッセージ

コマンド種別

CosminexusRM のコマンド名が表示されます。

(S)

処理を中断します。

(O)

次に示す表のコマンド種別および障害コードに従って対処してください。

項番	コマンド種別	障害コード	要因	対処方法
1	共通	HRM-0082 2	内部エラーが発生しました。	この障害の発生前後に出力されたメッセージを参照し、該当する障害要因を取り除いてください。障害要因を取り除けない場合は Cosminexus Reliable Messaging のログ・トレースを採取の上、保守員に連絡してください。
2		HRM-0120 1	メソッドの引数の値が null でした。	ログ・トレースを採取の上、保守員に連絡してください。
3		HRM-0120 2	メソッドの引数の値が不正でした。	ログ・トレースを採取の上、保守員に連絡してください。
4		HRM-0120 3	サポートされていないコマンドを実行しました。	ログ・トレースを採取の上、保守員に連絡してください。
5		HRM-0120 4	CommandAdapter がクローズ状態だったため、メソッドの実行に失敗しました。	この障害の発生前後に出力されたメッセージを参照し、該当する障害要因を取り除いてください。障害要因を取り除けない場合は Cosminexus Reliable Messaging のログ・トレースを採取の上、保守員に連絡してください。
6		HRM-2001 0	コマンドオプションに指定した値が不正です。	この障害の発生前後に出力されたメッセージを参照し、該当する障害要因を取り除いてください。障害要因を取り除けない場合は Cosminexus Reliable Messaging のログ・トレースを採取の上、保守員に連絡してください。
7		HRM-2001 1	コマンドの形式が不正です。	ログ・トレースを採取の上、保守員に連絡してください。
8		HRM-2001 2	コマンドが失敗しました。	メッセージログファイルを参照し、障害要因を表すメッセージを特定したあと、そのメッセージの対処方法に従ってください。障害要因を取り除いたあと、再度コマンドを実行してください。

項番	コマンド種別	障害コード	要因	対処方法
9	hrmmkque	HRM-2000 0	指定したキュー名の文字数が上限の 20 文字を超えています。	ログ・トレースを採取の上、保守員に連絡してください。
10		HRM-2000 1	指定したキュー名に不正な文字が含まれています。	ログ・トレースを採取の上、保守員に連絡してください。
11		HRM-2000 2	指定したキュー名はすでに存在しています。	HCSC が使用する下記キュー名のキューがすでに存在しないか確認してください。 <ul style="list-style-type: none"> • CSC<クラスタ名><サービス ID> • CSC<クラスタ名>ACPT_RCVQ • CSC<クラスタ名>ACPT_DBQ • CSC<クラスタ名>TRNS_RCVQ • CSC<クラスタ名><連携先クラスタ名>
12		HRM-2000 6	システム状態が不正です。	Cosminexus Reliable Messaging のシステムの状態が発行したコマンドを実行できる状態であるか確認し、必要に応じて Cosminexus Reliable Messaging のシステムの状態を変更したあと、再度コマンドを実行してください。
13		HRM-2003 6	指定した宛先名の宛先は存在しません。	ログ・トレースを採取の上、保守員に連絡してください。
14		HRM-2003 7	キュー間転送機能が無効となり、使用できない状態です。	Cosminexus Reliable Messaging のコンフィグプロパティ RMTRConnectFlag に true を指定し、Cosminexus RM を再起動したあとで再度コマンドを実行してください。

11. メッセージ

項番	コマンド種別	障害コード	要因	対処方法
15		HRM-2006 0	MANAGED_STATE 以外のシステム状態で、RMDeadMessageQueueName と同じキュー名を指定したため、キュー作成に失敗しました。	Cosminexus Reliable Messaging の RMDeadMessageQueueName が HCSC の使用する次に示すキュー名と一致することが無いか確認してください。 <ul style="list-style-type: none"> • CSC<クラスタ名><アダプタ名> • CSC<クラスタ名>ACPT_RCVQ • CSC<クラスタ名>ACPT_DBQ • CSC<クラスタ名>TRNS_RCVQ • CSC<クラスタ名><連携先クラスタ名>
16		HRM-2006 1	削除したキューと同名かつ異なる種類のキューを作成しようとしたためキュー作成に失敗しました。	Cosminexus Reliable Messaging を再起動したあと、コマンドを再度実行してください。
17		HRM-2006 2	削除したキューと同名かつ異なるキューモードのキューを作成しようとしたためキュー作成に失敗しました。	Cosminexus Reliable Messaging を再起動したあと、コマンドを再度実行してください。
18		HRM-2006 3	削除したキューと同名の受信用共用キューを作成する場合、異なる値の最大メッセージ長でキューを作成しようとしたため、キュー作成に失敗しました。	Cosminexus Reliable Messaging を再起動したあと、コマンドを再度実行してください。
19		HRM-2006 4	受信用共用キューがサポートしていないバージョンであるため、共用キューの作成に失敗しました。	ログ・トレースを採取の上、保守員に連絡してください。
20		HRM-2006 5	データベースアクセス時にエラーが発生したため、共用キューの作成に失敗しました。	要因としてデータベースの停止、対応する受信用共用キューが削除されている、などが考えられます。障害要因を取り除いたあと、コマンドを再度実行してください。
21		HRM-2010 0	指定したディスプレイ名はすでに存在しています。	指定したキューのディスプレイ名の値を見直し、コマンドを再度実行してください。
22	hrmdelque	HRM-2000 0	指定したキュー名の文字数が上限の 20 文字を超えています。	ログ・トレースを採取の上、保守員に連絡してください。
23		HRM-2000 1	指定したキュー名に不正な文字が含まれています。	ログ・トレースを採取の上、保守員に連絡してください。
24		HRM-2000 3	指定したキュー名のキューは存在しません。	再度削除する契機で出力されるため、問題ありません。

項番	コマンド種別	障害コード	要因	対処方法
25		HRM-2000 6	システム状態が不正です。	Cosminexus Reliable Messaging のシステムの状態が発行したコマンドを実行できる状態であるか確認し、必要に応じて Cosminexus Reliable Messaging のシステムの状態を変更したあと、再度コマンドを実行してください。
26		HRM-2000 9	指定したキューにはメッセージが登録されているため、キューの属性変更および削除はできません。	メッセージが送信されるまで待つからアダプタを削除するか、またはアダプタを強制削除してください。
27		HRM-2003 5	キューの構成を変更できない状態です。	ログ・トレースを採取の上、保守員に連絡してください。
28		HRM-2003 7	キュー間転送機能が無効となり、使用できない状態です。	Cosminexus Reliable Messaging のコンフィグプロパティ RMTRConnectFlag に true を指定し、Cosminexus RM を再起動したあとで再度コマンドを実行してください。
29		HRM-2005 9	キューを監視している Message-driven Bean が存在するため、キュー削除に失敗しました。	ログ・トレースを採取の上、保守員に連絡してください。
30		HRM-2006 6	キューが抑止していないまたは閉塞状態ではないため、キュー削除に失敗しました。	ログ・トレースを採取の上、保守員に連絡してください。
31		HRM-2006 7	キューに対するトランザクションが実行状態のため、キュー削除に失敗しました。	キューに対するトランザクションの決着を待ち、コマンドを再度実行してください。
32		HRM-2006 8	Cosminexus Reliable Messaging 起動直後の MANAGED_STATE 以外のシステム状態で、RMDeadMessageQueueName と同じキュー名を指定したため、キュー削除に失敗しました。	ログ・トレースを採取の上、保守員に連絡してください。
33		HRM-2007 2	キューの種類が不明による閉塞状態のため、キュー削除に失敗しました。	ログ・トレースを採取の上、保守員に連絡してください。

11. メッセージ

項番	コマンド種別	障害コード	要因	対処方法
34	hrmmkaddr	HRM-2000 6	システム状態が不正です。	Cosminexus Reliable Messaging のシステムの状態が発行したコマンドを実行できる状態であるか確認し、必要に応じて Cosminexus Reliable Messaging のシステムの状態を変更したあと、再度コマンドを実行してください。
35		HRM-2003 7	キュー間転送機能が無効となり、使用できない状態です。	Cosminexus Reliable Messaging のコンフィグプロパティ RMTRConnectFlag に true を指定し、Cosminexus RM を再起動したあとで再度コマンドを実行してください。
36		HRM-2003 8	指定した宛先名はすでに存在しています。	name で表示される宛先名がすでに存在するか確認してください。ユーザが作成した宛先名が HCSC の使用する次に示す宛名と一致することが無いか確認してください。 • CSC<サービス ID>
37	hrmdeladdr	HRM-2000 6	システム状態が不正です。	Cosminexus Reliable Messaging のシステムの状態が発行したコマンドを実行できる状態であるか確認し、必要に応じて Cosminexus Reliable Messaging のシステムの状態を変更したあと、再度コマンドを実行してください。
38		HRM-2003 6	指定した名称の宛先名は存在しません。	再度削除する契機で出力されるため、問題ありません。
39		HRM-2003 7	キュー間転送機能が無効となり、使用できない状態です。	Cosminexus Reliable Messaging のコンフィグプロパティ RMTRConnectFlag に true を指定し、Cosminexus RM を再起動したあとで再度コマンドを実行してください。
40		HRM-2003 9	指定した宛先はキューで参照しているため削除できません。	再度コマンドを実行してください。コマンドの再投入で回復しない場合はログ・トレースを採取の上、保守員に連絡してください。
41	hrmstartque	HRM-2000 0	指定したキュー名の文字数が上限の 20 文字を超えています。	ログ・トレースを採取の上、保守員に連絡してください。

項番	コマンド種別	障害コード	要因	対処方法
42		HRM-2000 1	指定したキュー名に不正な文字が含まれています。	ログ・トレースを採取の上、保守員に連絡してください。
43		HRM-2000 3	指定したキュー名のキューは存在しません。	ログ・トレースを採取の上、保守員に連絡してください。
44		HRM-2000 6	システム状態が不正です。	Cosminexus Reliable Messaging のシステムの状態が発行したコマンドを実行できる状態であるか確認し、必要に応じて Cosminexus Reliable Messaging のシステムの状態を変更したあと、再度コマンドを実行してください。
45		HRM-2000 7	指定したキューは閉塞状態であるため、コマンドを実行できません。	ログ・トレースを採取の上、保守員に連絡してください。
46		HRM-2003 7	キュー間転送機能が無効となり、使用できない状態です。	Cosminexus Reliable Messaging のコンフィグプロパティ RMTRConnectFlag に true を指定し、Cosminexus RM を再起動したあとで再度コマンドを実行してください。
47	hrmstopque	HRM-2000 0	指定したキュー名の文字数が上限の 20 文字を超えています。	ログ・トレースを採取の上、保守員に連絡してください。
48		HRM-2000 1	指定したキュー名に不正な文字が含まれています。	ログ・トレースを採取の上、保守員に連絡してください。
49		HRM-2000 3	指定したキュー名のキューは存在しません。	アダプタの削除、HCSC サーバのアンセットアップで出力された場合は問題ありません。その他の場合はログ・トレースを採取の上、保守員に連絡してください。
50		HRM-2000 6	システム状態が不正です。	Cosminexus Reliable Messaging のシステムの状態が発行したコマンドを実行できる状態であるか確認し、必要に応じて Cosminexus Reliable Messaging のシステムの状態を変更したあと、再度コマンドを実行してください。
51		HRM-2000 7	指定したキューは閉塞状態であるため、コマンドを実行できません。	ログ・トレースを採取の上、保守員に連絡してください。

11. メッセージ

項番	コマンド種別	障害コード	要因	対処方法
52		HRM-2003 7	キュー間転送機能が無効となり、使用できない状態です。	Cosminexus Reliable Messaging のコンフィグプロパティ RMTRConnectFlag に true を指定し、Cosminexus RM を再起動したあとで再度コマンドを実行してください。
53		HRM-2004 1	指定したキューの種別が不正です。	ログ・トレースを採取の上、保守員に連絡してください。

KDEC10013-E

An attempt to connect to Cosminexus Reliable Messaging has failed. (system name = Cosminexus Reliable Messaging のシステム名, exception = 例外種別, message = エラーメッセージ)

Cosminexus Reliable Messaging への接続が失敗しました。

(S)

処理を中断します。

(O)

Cosminexus Reliable Messaging および J2EE サーバの状態を確認してください。

KDEC10014-E

An unexpected exception occurred. (exception = 例外種別, message = エラーメッセージ)

予期しない例外が発生しました。

(S)

処理を中断します。

(O)

ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC10015-E

An attempt to connect to a HCSC J2EE application has failed. (name = HCSC サーバ名, exception = 例外種別, message = エラーメッセージ)

HCSC サーバへのコマンド要求が失敗しました。

(S)

処理を中断します。

(O)

HCSC サーバの状態を cmslsstate コマンドで確認してください。

KDEC10016-E

The command cannot execute because the HCSC server is not running. (command = コマンド種別)

HCSC サーバが起動していないため、コマンドまたは運用環境（画面）からの操作が実行できません。

コマンド種別

HCSC サーバの「MBean 名 # オペレーション名」が表示されます。

(S)

処理を中断します。

(O)

HCSC サーバを起動して、再度コマンドを実行するか、または再度操作してください。

KDEC10017-E

The queue cannot be deleted because a message remains in the queue. (name = キュー名)

キュー内にメッセージが残っているため、キューの削除に失敗しました。

(S)

処理を中断します。

(O)

メッセージが送信されるまで待ってからアダプタを削除するか、またはアダプタを強制削除してください。

KDEC10020-E

A parameter of the setup file is invalid. (parameter = パラメタ識別子)

HCSC サーバのセットアップ定義ファイルの内容が不正です。

(S)

処理を中断します。

(O)

ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC10021-E

The length of the parameter string is invalid. (parameter = パラメタ識別子, length = 文字列長)

パラメタで指定した文字列の長さが不正です。

(S)

処理を中断します。

(O)

正しいパラメタを指定して、再度実行してください。

KDEC10022-E

The specified parameter is outside the valid range. (parameter = パラメタ識別子)

パラメタで指定した指定値が範囲外です。

(S)

処理を中断します。

(O)

正しいパラメタを指定して、再度実行してください。

KDEC10023-E

The stipulated file in the adapter configuration was not found. (adapter name = サービスアダプタ
またはビジネスプロセスのサービス ID, file name = ファイル名)

サービスアダプタまたはビジネスプロセスの構成内に規定のファイルが見つかりません。

(S)

処理を中断します。

(O)

サービスアダプタまたはビジネスプロセスを再作成してください。

KDEC10024-E

A parameter of the adapter definition file was not found. (adapter name = サービスアダプタまたは
ビジネスプロセスのサービス ID, file name = ファイル名, parameter = パラメタ識別子)

サービス ID のサービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービスアダプタ定義ファイルの
パラメタが見つかりません。

(S)

処理を中断します。

(O)

サービスアダプタまたはビジネスプロセスを再作成してください。

KDEC10025-E

The length of a parameter of the adapter definition file is invalid. (adapter name = サービスアダプ
タまたはビジネスプロセスのサービス ID, file name = ファイル名, parameter = パラメタ識別子)

サービス ID のサービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービスアダプタ定義ファイルの
パラメタ値の長さが不正です。

(S)

処理を中断します。

(O)

サービスアダプタまたはビジネスプロセスを再作成してください。

KDEC10026-E

A parameter value of the adapter definition file is invalid. (adapter name = サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービス ID, file name = ファイル名, parameter = パラメタ識別子)

サービス ID のサービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービスアダプタ定義ファイルのパラメタ値が不正です。

(S)

処理を中断します。

(O)

サービスアダプタまたはビジネスプロセスを再作成してください。

KDEC10027-I

The HCSC command finished successfully. (command = コマンド種別, delete num = 削除実行履歴数)

コマンド処理が完了しました。

コマンド種別

HCSC サーバのコマンド名, または HCSC サーバの「MBean 名# オペレーション名」が表示されます。

(S)

処理を継続します。

KDEC10028-E

A setting in the Cosminexus usrconf.properties file is invalid. (parameter = プロパティキー)

Cosminexus の usrconf.properties (J2EE サーバ用ユーザプロパティファイル) 設定が不正です。

(S)

処理を中断します。

(O)

Cosminexus の usrconf.properties (J2EE サーバ用ユーザプロパティファイル) 設定を確認してください。メッセージログで出力されたプロパティキーの値を確認して再度実行してください。

KDEC10029-E

The specified adapter is already in place. (adapter name = サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービス ID)

指定したサービスアダプタまたはビジネスプロセスは配備済みです。

(S)

処理を中断します。

(O)

サービスアダプタまたはビジネスプロセス削除後に再度実行してください。

KDEC10030-W

The specified adapter has already been deleted. (adapter name = サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービス ID)

指定したサービスアダプタまたはビジネスプロセスはすでに削除されています。

(S)

処理を続行します。

KDEC10031-E

The application attributes file is invalid. (application name = アプリケーション名, type = ファイルタイプ, error message = エラーメッセージ)

属性ファイルが不正です。

ファイルタイプ

- 1 : getAppProp にて取得したファイル
- 2 : アダプタ内定義ファイル
- 3 : HCSC サーバ用 system ファイル
- 4 : リクエスト受付用 system ファイル
- 5 : ユーザ定義受付内定義ファイル

(S)

処理を中断します。

(O)

カスタムアダプタの場合、アダプタの cscadapter_property.xml を確認してください。カスタムアダプタ以外の場合はログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC10033-E

The adapter cannot be deleted because it is starting. (adapter name = サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービス ID)

サービスアダプタまたはビジネスプロセスが起動中のため、サービスアダプタまたはビジネスプロセスの削除に失敗しました。

(S)

処理を中断します。

(O)

サービスアダプタまたはビジネスプロセス停止後に再度実行してください。

KDEC10034-W

The queue has already been deleted. (queue name = キュー名)
サービスアダプタの転送キューはすでに削除されています。

(S)

処理を続行します。

KDEC10035-E

The combination of specified parameters is invalid. (command = コマンド種別, parameter = パラメタ識別子)

パラメタ指定の組み合わせが不正です。

コマンド種別

HCSC サーバの「MBean 名 # オペレーション名」が表示されます。

(S)

処理を中断します。

(O)

正しいパラメタを指定して、再度実行してください。

KDEC10036-E

This HCSC command is not supported. (command = コマンド種別)
未サポートのコマンドです。

コマンド種別

HCSC サーバの「MBean 名 # オペレーション名」が表示されます。

(S)

処理を中断します。

KDEC10037-E

The specified adapter was not found. (adapter name = サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービス ID)

指定したサービスアダプタまたはビジネスプロセスは配備されていません。

(S)

処理を中断します。

(O)

サービス ID のサービスアダプタまたはビジネスプロセスが配備されているか確認してください。

KDEC10038-E

An attempt to import an adapter has failed. (adapter name = サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービス ID, location = ロケーション情報の有無, application = アプリケーション有無)
サービスアダプタまたはビジネスプロセスのインポートに失敗しました。

ロケーション情報の有無

- found : ロケーション情報あり
- not found : ロケーション情報なし

アプリケーション有無

- found : アプリケーション配備済み
- not found : アプリケーション未配備

(S)

処理を中断します。

(O)

ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC10039-E

Command execution failed because the adapter is waiting for input from another HCSC command. (adapter name = サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービス ID, status = サービスアダプタまたはビジネスプロセスの状態)

サービスアダプタまたはビジネスプロセスの状態がほかのコマンド再入力待ちのため、コマンドまたは運用環境（画面）からの操作の処理に失敗しました。

サービスアダプタまたはビジネスプロセスの状態

- starting : 起動処理中
- startfailed : 起動失敗
- stopping : 停止処理中
- stopfailed : 停止失敗
- deleting : 削除処理中

(S)

処理を中断します。

(O)

サービスアダプタまたはビジネスプロセスの状態に対応したコマンドを再入力してください。

- starting/startfailed : サービスアダプタまたはビジネスプロセス起動, サービスアダプタまたはビジネスプロセス停止
- stopping/stopfailed : サービスアダプタまたはビジネスプロセス停止
- deleting : サービスアダプタまたはビジネスプロセス削除

KDEC10040-E

The specified HCSC server was not found. (name = 指定した HCSC サーバ名)

指定した HCSC サーバが見つかりません。

(S)

処理を中断します。

(O)

コマンドに指定した HCSC サーバ名が正しいか確認してください。コマンドに指定した HCSC サーバ名が正しい場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC10041-E

An attempt to create a database table has failed. (parameter = 生成失敗時の SQL, message = 例外メッセージ)

データベースのテーブル生成に失敗しました。

(S)

処理を中断します。

(O)

例外メッセージを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は、再度 HCSC サーバの再セットアップを実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC10042-W

An attempt to delete a database table has failed. (parameter = 削除失敗時の SQL, message = 例外メッセージ)

データベースのテーブル削除に失敗しました。

(S)

処理を継続しますが、データベースの障害要因によって処理を中断することがあります。

(O)

データベースのテーブルが削除されているか確認して、必要なら再度実行してください。

KDEC10043-W

An attempt to release the asynchronous request receptor queue has failed. (request receptor type = キューの抑止解除に失敗した標準受付の種類)

非同期標準受付のキューの抑止解除に失敗しました。

キューの抑止解除に失敗した標準受付の種類

11. メッセージ

- JMS : JMS 標準受付
- DBQ : DB キュー標準受付
- JMS/DBQ : JMS 標準受付と DB キュー標準受付

(S)

キューの抑止解除に失敗した標準受付以外の標準受付は処理を継続します。キューの抑止解除に失敗した標準受付では、キューへのリクエストを受け付けない状態となり、キュー内に送信済みのリクエストはそのまま滞留します。

(O)

前後で出力されているログメッセージを参照し、キューの抑止解除に失敗した原因を取り除いた後、一度、標準受付を停止してから再開してください。または、Cosminexus Reliable Messaging のコマンドで標準受付のキューの抑止を解除してください。

KDEC10044-E

An attempt to access the database table has failed. (error code = 障害コード , error message = エラーメッセージ)

データベーステーブルへのアクセスに失敗しました。

(S)

処理を中断します。

(O)

データベースへのアクセスで障害が発生しています。メッセージログファイルを参照し、障害の要因を取り除いてください。障害の要因が運用上の問題であった場合は、再度実行してください。障害の要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC10045-E

The specified SQL script file is invalid.

指定した SQL スクリプトファイルの内容が不正です。

(S)

処理を中断します。

(O)

HCSC サーバのセットアップ定義ファイルに指定した SQL スクリプトファイルの内容を確認してください。

KDEC10046-E

An attempt to access the HCSC server runtime information file has failed.

HCSC サーバのランタイム定義ファイルのアクセスに失敗しました。

(S)

処理を中断します。

(O)

HCSC サーバで障害が発生している可能性があります。メッセージログファイルを確認してください。障害が発生している場合は、メッセージを参照し障害要因を取り除き、HCSC サーバの定義情報を再度設定してください。再設定しても回復しない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC10047-E

A server with the same name but different capitalization has already been set up. (name = セットアップされている HCSC サーバ名)

大文字・小文字だけが異なる HCSC サーバがセットアップされています。

(S)

処理を中断します。

(O)

セットアップする HCSC サーバ名を確認してください。

KDEC10048-W

The adapter status change was detected. (adapter name = サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービス ID, location status = ロケーションテーブルのサービスアダプタまたはビジネスプロセス状態, application status = サービスアダプタまたはビジネスプロセスアプリケーションの状態)

サービスアダプタまたはビジネスプロセスの状態変化を検出しました。

ロケーションテーブルのサービスアダプタまたはビジネスプロセス状態

- active : 起動状態
- inactive : 停止状態
- starting : 起動処理中
- startfailed : 起動失敗
- stopping : 停止処理中
- stopfailed : 停止失敗
- deleting : 削除処理中

サービスアダプタまたはビジネスプロセスアプリケーションの状態

詳細については、マニュアル「Cosminexus リファレンス コマンド編」を参照してください。

(S)

処理を続行します。

(O)

サービスアダプタまたはビジネスプロセスの状態を確認してください。

KDEC10049-W

The request receptor status change was detected. (receptor status = リクエスト受付, application name = 状態変化を検出したリクエスト受付のアプリケーション名, application status = 状態変化を検出したリクエスト受付アプリケーションの状態)

リクエスト受付の状態変化を検出しました。

リクエスト受付の状態

- active : 開始状態
- inactive : 停止状態
- starting : 開始処理中
- startfailed : 開始失敗
- stopping : 停止処理中
- stopfailed : 停止失敗

状態変化を検出したリクエスト受付アプリケーションの状態

詳細については、マニュアル「Cosminexus リファレンス コマンド編」を参照してください。

(S)

処理を続行します。

(O)

リクエスト受付の状態を確認してください。

KDEC10050-W

An attempt to access a database has failed. (information = 詳細情報)

データベースのアクセスに失敗しました。

(S)

処理を続行します。

(O)

データベースの状態を確認してください。

KDEC10051-E

The command cannot execute because another HCSC command is executing.

ほかの HCSC コマンドが実行中のため、コマンドが実行できません。または、同一の HCSC サーバに対して、運用環境（画面）からの操作や、HCSC コマンドを同時に実行しようとしているため、処理を実行できません。

(S)

処理を中断します。

(O)

ほかのコマンドが終了してから、再度コマンドを実行してください。または、ほかの操作が終了してから、再度操作してください。

KDEC10052-E

The stipulated file in the reception configuration was not found. (reception ID = 受付 ID, file name = ファイル名)

ユーザ定義受付の構成内に規定のファイルが見つかりません。

(S)

処理を中断します。

(O)

ユーザ定義受付を再作成してください。

KDEC10053-E

A parameter of the reception definition file was not found. (reception ID = 受付 ID, file name = ファイル名, parameter = パラメタ識別子)

ユーザ定義受付の受付定義ファイルのパラメタが見つかりません。

(S)

処理を中断します。

(O)

ユーザ定義受付を作成する際に指定したパラメタの値を見直して、ユーザ定義受付を再作成してください。

KDEC10054-E

The length of a parameter of the reception definition file is invalid. (reception ID = 受付 ID, file name = ファイル名, parameter = パラメタ識別子)

ユーザ定義受付の受付定義ファイルのパラメタ値の長さが不正です。

(S)

処理を中断します。

(O)

ユーザ定義受付を作成する際に指定したパラメタの値を見直して、ユーザ定義受付を再作成してください。

KDEC10055-E

A parameter value of the reception definition file is invalid. (reception ID = 受付 ID, file name = ファイル名, parameter = パラメタ識別子)

ユーザ定義受付の受付定義ファイルのパラメタ値が不正です。

(S)

処理を中断します。

(O)

ユーザ定義受付を作成する際に指定したパラメタの値を見直して、ユーザ定義受付を再作成してください。

KDEC10056-W

The user defined reception started, but the called service did not start. (reception ID = 受付 ID, service name = ユーザ定義受付から呼び出すサービス名)

ユーザ定義受付の起動は成功しましたが、ユーザ定義受付から呼び出すサービス部品が起動していません。

(S)

処理を続行します。

(O)

ユーザ定義受付に関連づけられている呼び出すサービス (サービスアダプタ / ビジネスプロセス / サービスグループ) の状態を確認して、サービスを起動してください。

KDEC10057-E

The specified reception is already in place. (reception ID = 受付 ID)

指定したユーザ定義受付はすでに配備されています。

(S)

処理を中断します。

(O)

ユーザ定義受付削除後に再度実行してください。

KDEC10058-W

The specified reception has already been deleted. (reception ID = 受付 ID)

指定したユーザ定義受付はすでに削除されています。

(S)

処理を続行します。

KDEC10059-E

The same value is specified in the parameter. (command = コマンド種別, parameter = 不正パラメタ)

パラメタに同じ値を指定しています。

コマンド種別

HCSC サーバのコマンド名または HCSC サーバの「MBean 名 # オペレーション名」が表示されます。

不正パラメタ

パラメタの < 通番 > は出力しません。

(S)

処理を中断します。

(O)

パラメタの値を確認して、再度実行してください。

KDEC10060-E

An attempt to import a reception has failed. (reception ID = 受付 ID, location = ロケーション情報の有無, application = アプリケーション有無)

ユーザ定義受付のインポートに失敗しました。

ロケーション情報の有無

- found : ロケーション情報あり
- not found : ロケーション情報なし

アプリケーション有無

- found : アプリケーション配備済み
- not found : アプリケーション未配備

(S)

処理を中断します。

(O)

ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC10061-E

The reception cannot be deleted because it is starting. (reception ID = 受付 ID)

ユーザ定義受付が起動中のため、ユーザ定義受付の削除に失敗しました。

(S)

処理を中断します。

(O)

ユーザ定義受付停止後に再度実行してください。

KDEC10062-E

Command execution failed because the reception is waiting for input from another HCSC command. (reception ID = 受付 ID, status = ユーザ定義受付の状態)

ユーザ定義受付の状態がほかのコマンド再入力待ちのため、コマンドの処理に失敗しました。

ユーザ定義受付の状態

- starting : 起動処理中
- startfailed : 起動失敗
- stopping : 停止処理中
- stopfailed : 停止失敗
- deleting : 削除処理中

(S)

処理を中断します。

(O)

ユーザ定義受付の状態に対応したコマンドを再入力してください。

- starting/startfailed : ユーザ定義受付起動, ユーザ定義受付停止
- stopping/stopfailed : ユーザ定義受付停止
- deleting : ユーザ定義受付削除

KDEC10063-E

The specified reception was not found. (reception ID = 受付 ID)

指定したユーザ定義受付は配備されていません。

(S)

処理を中断します。

(O)

[受付 ID] のユーザ定義受付が配備されているか確認してください。

KDEC10064-W

The reception status change was detected. (reception ID = 受付 ID, location status = ロケーション
テーブルのユーザ定義受付状態, application status = J2EE アプリケーションの状態)

ユーザ定義受付の状態変化を検出しました。

ロケーションテーブルのユーザ定義受付状態

- active : 起動状態
- inactive : 停止状態
- starting : 起動処理中
- startfailed : 起動失敗
- stopping : 停止処理中
- stopfailed : 停止失敗
- deleting : 削除処理中

J2EE アプリケーションの状態

詳細については、マニュアル「Cosminexus リファレンス」を参照してください。

(S)

処理を続行します。

(O)

ユーザ定義受付の状態を確認してください。

KDEC10065-E

The command cannot execute because the reception of the HCSC server has not been deleted.
(command = コマンド種別)

削除されていないユーザ定義受付があるため、HCSC サーバのアンセットアップに失敗しました。

コマンド種別

HCSC サーバの「MBean 名 # オペレーション名」が表示されます。

(S)

処理を中断します。

(O)

ユーザ定義受付を削除して、再度コマンドを実行してください。

KDEC10066-W

An exception occurred during checking of the component status. (error code = 障害コード , error message = エラーメッセージ)

コンポーネントの状態チェックでエラーが発生しました。

(S)

処理を続行します。

(O)

サービスアダプタまたはビジネスプロセス、リクエスト受付、ユーザ定義受付の状態を確認してください。

KDEC10067-W

An exception occurred during update of the adapter status. (adapter name = サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービス ID, error code = 障害コード , error message = エラーメッセージ)

サービスアダプタまたはビジネスプロセスの状態更新でエラーが発生しました。

(S)

処理を続行します。

(O)

サービスアダプタまたはビジネスプロセスの状態を確認してください。

KDEC10068-W

An exception occurred during update of the request receptor status. (error code = 障害コード , error message = エラーメッセージ)

リクエスト受付の状態更新でエラーが発生しました。

(S)

処理を続行します。

(O)

リクエスト受付の状態を確認してください。

KDEC10069-W

An exception occurred during update of the reception status. (reception ID = 受付 ID, error code = 障害コード, error message = エラーメッセージ)

ユーザ定義受付の状態更新でエラーが発生しました。

(S)

処理を続行します。

(O)

ユーザ定義受付の状態を確認してください。

KDEC10070-E

A communication error with the administration agent occurred. (command = コマンド種別, error message = エラーメッセージ)

運用管理エージェントとの通信時にエラーが発生しました。

コマンド種別

表示する文字と J2EE サーバのコマンドの対応を次の表に示します。

表示する文字	対応する J2EE サーバのコマンド
start	cjstartsv
stop	cjstopsv
deleteApp	cjdeleteapp
getAppProp	cjgetappprop
importApp	cjimportapp
listApp	cjlistapp
setAppProp	cjsetappprop
startApp	cjstartapp
stopApp	cjstopapp
getAttribute(State)	- (J2EE サーバの状態採取)

(S)

処理を中断します。

(O)

運用管理エージェントが起動していることを確認してください。停止している場合は、Management Server, および運用管理エージェントを再起動してください。再起動しても障害が回復しない場合は、保守員に連絡してください。

KDEC10071-E

A data access error occurred. (error code = 障害コード, error message = エラーメッセージ)

データへのアクセスでエラーが発生しました。

(S)

処理を中断します。

(O)

エラーメッセージを参照し、障害の要因を取り除いてください。障害となった要因が運用上の問題であった場合は、再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC10072-E

This command cannot be used. (command = コマンド種別, reason = 理由)

理由に表示されている構成でセットアップを行っているため、このコマンドを使用することはできません。

コマンド種別

HCSC サーバの「MBean 名 # オペレーション名」が表示されます。

理由

- database is not used : データベースを使用しない構成

(S)

処理を中断します。

(O)

理由に表示されている構成で HCSC サーバがセットアップされているため、入力したコマンドは使用できません。

KDEC10073-E

The combination of specified parameters is invalid. (parameter1 = プロパティ 1, value1 = プロパティ 1 の値, parameter2 = プロパティ 2, value2 = プロパティ 2 の値)

HCSC サーバセットアップ定義ファイル, または HCSC サーバランタイム定義ファイルに指定したプロパティと値の組み合わせが不正です。

(S)

処理を中断します。

(O)

HCSC サーバセットアップ定義ファイル, または HCSC サーバランタイム定義ファイルに指定した内容を見直して、指定するとエラーになる組み合わせでプロパティと値を定義していないかを確認してください。そのあと、再度 HCSC サーバのセットアップを実行してください。問題が解決しない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC10074-E

A required parameter has not been specified. (parameter = プロパティ)

HCSC サーバセットアップ定義ファイルで必須のプロパティを指定していません。

11. メッセージ

(S)

処理を中断します。

(O)

HCSC サーバセットアップ定義ファイルに指定した内容を見直して、指定する必要のあるプロパティをすべて定義しているかどうかを確認してください。問題が解決したら、再度 HCSC サーバのセットアップを実行してください。問題が解決しない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC10075-E

A parameter value is not specified. (parameter = プロパティ)

HCSC サーバのセットアップ定義ファイルのプロパティに値を指定していません。

(S)

処理を中断します。

(O)

HCSC サーバセットアップ定義ファイルに指定した内容を見直して、プロパティに値を指定しているかどうかを確認してください。問題が解決したら、再度 HCSC サーバのセットアップを実行してください。問題が解決しない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC10400-E

The command syntax is invalid.

コマンドの使用方法に誤りがあります。

(S)

コマンドが異常終了します。

(O)

コマンドのパラメータを見直して、再度実行してください。

KDEC10401-I

Usage: csmlsstate [<HCSCServerName>] [-d {prop|runtime}]

csmlsstate コマンドの使用方法です。

(S)

コマンドの応答が返ります。

(O)

コマンドの引数および値を確認して、再度コマンドを実行してください。

KDEC10403-I

Usage: csmlslocation [<HCSCServerName>] {-a <AdapterName> | -t <ServiceName> | -k {adp|bp|sg} | -all} [{-l | -r}] [-u <DBUserID> [-p <DBPassword>]]

csmlslocation コマンドの使用方法です。

(S)

コマンドの応答が返ります。

(O)

コマンドの引数および値を確認して、再度コマンドを実行してください。

KDEC10407-I

Usage:

Format1: csmlshistory [<HCSCServerName>] -c <ClientID> [-m <HCSCCommonID>] [-i <ServiceRequestID>] [-t <StartTime>,<EndTime>] [-rs <RequestServiceName>] [-s <ServiceName>] [-jm <JMSMessageID>] [-jc <JMSCorrelationID>] [-l {new|all}] [-d {nm|ext|msg}] [-ul <UserTelegramLength>] [-r <RecordCount>] [-k {list|count}] [-u <DBUserID>] [-p <DBPassword>]]

Format2: csmlshistory [<HCSCServerName>] [-c <ClientID>] -m <HCSCCommonID> [-i <ServiceRequestID>] [-t <StartTime>,<EndTime>] [-rs <RequestServiceName>] [-s <ServiceName>] [-jm <JMSMessageID>] [-jc <JMSCorrelationID>] [-l {new|all}] [-d {nm|ext|msg}] [-ul <UserTelegramLength>] [-r <RecordCount>] [-k {list|count}] [-u <DBUserID>] [-p <DBPassword>]]

Format3: csmlshistory [<HCSCServerName>] [-c <ClientID>] [-m <HCSCCommonID>] -i <ServiceRequestID> [-t <StartTime>,<EndTime>] [-rs <RequestServiceName>] [-s <ServiceName>] [-jm <JMSMessageID>] [-jc <JMSCorrelationID>] [-l {new|all}] [-d {nm|ext|msg}] [-ul <UserTelegramLength>] [-r <RecordCount>] [-k {list|count}] [-u <DBUserID>] [-p <DBPassword>]]

Format4: csmlshistory [<HCSCServerName>] [-c <ClientID>] [-m <HCSCCommonID>] [-i <ServiceRequestID>] -t <StartTime>,<EndTime> [-rs <RequestServiceName>] [-s <ServiceName>] [-jm <JMSMessageID>] [-jc <JMSCorrelationID>] [-l {new|all}] [-d {nm|ext|msg}] [-ul <UserTelegramLength>] [-r <RecordCount>] [-k {list|count}] [-u <DBUserID>] [-p <DBPassword>]]

Format5: csmlshistory [<HCSCServerName>] [-c <ClientID>] [-m <HCSCCommonID>] [-i <ServiceRequestID>] [-t <StartTime>,<EndTime>] -rs <RequestServiceName> [-s <ServiceName>] [-jm <JMSMessageID>] [-jc <JMSCorrelationID>] [-l {new|all}] [-d {nm|ext|msg}] [-ul <UserTelegramLength>] [-r <RecordCount>] [-k {list|count}] [-u <DBUserID>] [-p <DBPassword>]]

Format6: csmlshistory [<HCSCServerName>] [-c <ClientID>] [-m <HCSCCommonID>] [-i <ServiceRequestID>] [-t <StartTime>,<EndTime>] [-rs <RequestServiceName>] -s <ServiceName> [-jm <JMSMessageID>] [-jc <JMSCorrelationID>] [-l {new|all}] [-d {nm|ext|msg}] [-ul <UserTelegramLength>] [-r <RecordCount>] [-k {list|count}] [-u <DBUserID>] [-p <DBPassword>]]

Format7: csmlshistory [<HCSCServerName>] [-c <ClientID>] [-m <HCSCCommonID>] [-i <ServiceRequestID>] [-t <StartTime>,<EndTime>] [-rs <RequestServiceName>] [-s

11. メッセージ

```
<ServiceName> -jm <JMSMessageID> [-jc <JMSCorrelationID>] [-l {new|all}] [-d {nm|ext|msg}]  
[-ul <UserTelegramLength>] [-r <RecordCount>] [-k {list|count}] [-u <DBUserID> [-p  
<DBPassword>]]
```

```
Format8: csmshistory [<HCSCServerName>] [-c <ClientID>] [-m <HCSCCommonID>] [-i  
<ServiceRequestID>] [-t <StartTime>,<EndTime>] [-rs <RequestServiceName>] [-s  
<ServiceName>] [-jm <JMSMessageID>] [-jc <JMSCorrelationID>] [-l {new|all}] [-d {nm|ext|msg}]  
[-ul <UserTelegramLength>] [-r <RecordCount>] [-k {list|count}] [-u <DBUserID> [-p  
<DBPassword>]]
```

csmshistory コマンドの使用方法です。

(S)

コマンドをエラー終了します。

(O)

コマンドの引数および値を確認して、再度コマンドを実行してください。

KDEC10408-I

```
Usage: csmdeletehistory [<HCSCServerName>] {-t <Time> | -d <Days>} [{-m <HCSCCommonID>  
|-c <ClientID> | -a <AdapterName>}] [-u <DBUserID> [-p <DBPassword>]]
```

csmdeletehistory コマンドの使用方法です。

(S)

コマンドをエラー終了します。

(O)

コマンドの引数および値を確認して、再度コマンドを実行してください。

KDEC10409-I

The HCSC command finished successfully.

コマンド処理が完了しました。

(S)

処理を継続します。

KDEC10410-E

The HCSC command failed. (message = エラーメッセージ)

コマンド処理が失敗しました。

(S)

処理を中断します。

(O)

エラーメッセージを参照し、障害要因を取り除いてください。障害要因が運用上の問題であった場合は、再度実行してください。障害となった要因が運用上の問題でない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC10411-I

Usage: csmlsreception [<HCSCServerName>] {-i <ReceptionID> | -s <ServiceName> | -all} [-u <DBUserID> [-p <DBPassword>]]

csmlsreception コマンドの使用方法です。

(S)

コマンドの応答が返ります。

(O)

コマンドの引数および値を確認して、再度コマンドを実行してください。

11.2.15 KDEC10501 ~ KDEC11000

KDEC10501-E

The command cannot be executed because you do not have administrator privileges.

管理者特権がないため、コマンドを実行できません。

(S)

処理を中断します。

(O)

管理者として実行したコマンドプロンプト上で、再度コマンドを実行してください。

KDEC10502-E

An error occurred while the permissions were being checked.

権限の判定中にエラーが発生しました。

(S)

処理を中断します。

(O)

メモリが不足しているおそれがあります。空きメモリを増やしたあと、再度コマンドを実行してください。問題が解決しない場合は、保守員に連絡してください。

11.2.16 KDEC19901 ~ KDEC19999

KDEC19901-E

An internal error occurred. (class = 内部エラーが発生したクラス名 (パッケージ名を含む), method = 内部エラーが発生したメソッド名, information = 保守情報)

内部エラーが発生しました。

(S)

処理を中断します。

11. メッセージ

(O)

ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC19902-W

A message assembly error occurred. (information = 保守情報)

ログメッセージ出力時のメッセージの組み立て処理中に内部エラーが発生しました。

(S)

処理を継続します (出力しようとしたメッセージの出力後の処理に従います)。

(O)

ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC19903-E

The Cosminexus installation directory was not found.

Cosminexus のインストールディレクトリの取得に失敗しました。

(S)

処理を中断します。

(O)

システム環境変数 COSMINEXUS_HOME が設定されているか確認してください。
環境変数 COSMINEXUS_HOME が設定されている場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

11.3 KDEC20000 ~ KDEC39999 のメッセージ

11.3.1 KDEC20000 ~ KDEC34999

KDEC20000-E

An attempt to resolve the data source has failed. cause = エラーの要因コード

次のどれかの要因が考えられます。

- javax.sql.DataSource オブジェクトの解決に失敗。
- 要因コードが “ NAME ” の場合は、名前解決での失敗。
- 要因コードが “ CLASS ” の場合は、オブジェクト型の不正。

(O)

指定された名前コンテキストに、適切な javax.sql.DataSource オブジェクトを登録するよう、環境設定を見直してください。

KDEC20001-E

An error occurred in the DBMS. details = DBMS のエラーメッセージ

DBMS でエラーが発生しました。

(O)

DBMS のエラーメッセージ、システムログ、および DBMS 関連のエラー情報を参照して対処してください。

KDEC20002-E

A correlation set is duplicated. business-process-definition-name = ビジネスプロセス定義名, business-process-definition-version = ビジネスプロセス定義バージョン, scope-name = スコープ名, correlation-set-name = 相関セット名, correlation-set-value = 相関セット値

相関セットの重複が検知されました。

(O)

相関セットが重複しないよう、ビジネスプロセス定義、またはメッセージ本文を見直してください。

KDEC20003-E

The value is outside the valid range. kind = 値種別コード, business-process-definition-name = ビジネスプロセス定義名, business-process-definition-version = ビジネスプロセス定義バージョン, scope-name = スコープ名, name = 相関セット名または変数名, value = 相関セット値または変数値, details = DBMS のエラーメッセージ

11. メッセージ

相関セット値または変数値が有効範囲を超えています。

値種別コード

- 相関セットの場合：CORRELATIONSET
- 変数の場合：VARIABLE

相関セットまたは変数値

- メッセージ型変数の場合：バイト長
- 上記以外の場合：値

(O)

相関セット値または変数値が有効範囲を超えないよう、ビジネスプロセス定義または電文データを見直してください。

KDEC20004-E

An attempt to load the definition file has failed. business-process-definition-name = ビジネスプロセス定義名, business-process-definition-version = ビジネスプロセス定義バージョン, file-name = 定義ファイル名

次のどちらかの要因が考えられます。

- ファイルがない。
- 読み込み権限がない。

(O)

指示されたファイル名を見直して、開発環境でビジネスプロセス EAR ファイルを作成し直してください。

KDEC20005-E

The definition file cannot be parsed. details = 詳細情報

次のどちらかの要因が考えられます。

- XML パーサが使用できない。
- ビジネスプロセス定義 / データ定義ファイルが読み込めない。

(O)

Cosminexus の構成を見直してください。

開発環境でビジネスプロセス EAR ファイルを作成し直してください。

KDEC20006-E

The contents of the definition file are incorrect. business-process-definition-name = ビジネスプロセス定義名, business-process-definition-version = ビジネスプロセス定義バージョン, file-name = 定義ファイル名, line-number = 行番号, details = 詳細情報

定義ファイルの内容が誤っています。

(O)

指示されたファイル名の内容を見直して、開発環境でビジネスプロセス EAR ファイ

ルを作成し直してください。
 行番号は、要素を終了する行 (</invoke> など) を示します。
 属性値などを見直す場合は、要素を開始する行 (<invoke> など) も見直してください。

KDEC20007-E

Evaluation of the expression failed. business-process-definition-name = ビジネスプロセス定義名 , business-process-definition-version = ビジネスプロセス定義バージョン , expression = 式 , details = 詳細情報

XPath 式が不適切です。

(O)

指示された XPath 式を見直してください。

KDEC20008-E

Evaluation of the function failed. business-process-definition-name = ビジネスプロセス定義名 , business-process-definition-version = ビジネスプロセス定義バージョン , function = 拡張関数名 , details = 詳細情報

次のどちらかの要因が考えられます。

- 不適切な拡張関数が指定された。
- 不適切な引数が指定された。

(O)

指示された拡張関数を見直してください。

KDEC20009-E

The message catalog could not be loaded.

メッセージの書かれたリソースファイルが読み込めませんでした。

(O)

Cosminexus Service Coordinator を再インストールしてください。

KDEC20010-E

The message explaining the problem could not be obtained. message-ID = 取得できなかったメッセージの ID

ID で示される事象が発生しましたが、対応するメッセージが取得できませんでした。

(O)

ID で示されるメッセージの対処に従ってください。

KDEC20012-W

An attempt to start trace output has failed. cause = エラー理由

11. メッセージ

トレース出力を開始できませんでした。

(O)

エラー理由を基に要因を取り除いてください。

KDEC20013-E

An error occurred during access to the message container. details = 詳細情報
メッセージコンテナへのアクセスに失敗しました。

(O)

このメッセージ以前に出力されているエラー情報を参照してください。

KDEC20014-E

Parsing of the resource adapter failed.lookup-name = リソースアダプタの lookup 名 , cause = 要因

次のどちらかの要因が考えられます。

- 要因コードが “ NAME ” の場合は、名前解決での失敗。
- 要因コードが “ CLASS ” の場合は、オブジェクト型の不正。

(O)

リソースアダプタの設定が正しいか確認してください。

KDEC20015-E

A JMS exception occurred. business-process-definition-name = ビジネスプロセス定義名 ,
business-process-definition-version = ビジネスプロセス定義バージョン , activity-name = アクティビティ名 , message = JMS の障害メッセージ , code = JMS の障害コード
JMS 処理中にエラーが発生しました。

(O)

JMS (uCosminexus Reliable Messaging) の環境設定または運用が正しいか確認してください。

KDEC20016-E

The specified JMS control variable is invalid. business-process-definition-name = ビジネスプロセス定義名 , business-process-definition-version = ビジネスプロセス定義バージョン , activity-name = アクティビティ名 , JMS-control-variable-key = JMS 制御変数の名前 , JMS-control-variable-type = JMS 制御変数の型名 , details = 詳細情報
未サポートの JMS 制御変数名を指定したか、JMS 制御変数が設定されていません。

(O)

詳細情報を基に、次の対処をしてください。

- NotSupportedKey の場合
ビジネスプロセス定義の JMS 制御変数の名前を見直してください。

- NotFound の場合
ビジネスプロセス定義の JMS 制御変数の名前を見直してください。正しい場合は、定義した JMS 制御変数を設定しているか確認してください。
- VariableNull の場合
ビジネスプロセス定義の JMS 制御変数の名前とタイプを見直してください。正しい場合は、定義した JMS 制御変数を設定しているか確認してください。

KDEC20017-E

The specified value cannot be substituted for the variable. business-process-definition-name = ビジネスプロセス定義名, business-process-definition-version = ビジネスプロセス定義バージョン, activity-name = アクティビティ名, from-name = 代入元 JMS 制御変数または変数の名前, from-type = 代入元 JMS 制御変数または変数の型名, from-scope-name = 代入元 JMS 制御変数または変数の所属するスコープ名, to-name = 代入先 JMS 制御変数または変数の名前, to-type = 代入先 JMS 制御変数または変数の型名, to-scope-name = 代入先 JMS 制御変数または変数の所属するスコープ名

格納できない値を JMS 制御変数, または変数に代入しようとした。

(O)

代入先変数の型が代入元変数の値を格納できる型であるか, ビジネスプロセス定義を見直してください。または, 代入先変数に格納できない値を使用していないか確認してください。

KDEC20018-E

The variable type was not convertible for substitution. business-process-definition-name = ビジネスプロセス定義名, business-process-definition-version = ビジネスプロセス定義バージョン, activity-name = アクティビティ名, from-name = 代入元 JMS 制御変数または変数の名前, from-type = 代入元 JMS 制御変数または変数の型名, from-scope-name = 代入元 JMS 制御変数または変数の所属するスコープ名, to-name = 代入先 JMS 制御変数または変数の名前, to-type = 代入先 JMS 制御変数または変数の型名, to-scope-name = 代入先 JMS 制御変数または変数の所属するスコープ名

代入元と代入先の JMS 制御変数または変数の型変換ができません。

(O)

代入元と代入先で型変換できる型の変数を指定しているかビジネスプロセス定義を見直してください。

KDEC20023-E

A service call failed. business-process-definition-name = ビジネスプロセス定義名, business-process-definition-version = ビジネスプロセス定義バージョン, process-instance-ID = プロセスインスタンス識別子, invoke-activity-name = invoke アクティビティ名, service-name = サービス名, details = 詳細情報

サービス部品の呼び出しでエラーが発生しました。

(O)

このメッセージ以前に出力されているエラー情報を参照してください。

KDEC20024-E

An executed 'while' activity exceeded the specified loop limit frequency.

business-process-definition-name = ビジネスプロセス定義名,

business-process-definition-version = ビジネスプロセス定義バージョン, while-activity-name = while アクティビティ名

loopLimit 属性に指定した回数を超えて while アクティビティ内のアクティビティが実行されました。loopLimit 属性の値が小さ過ぎるか、condition 属性の評価式が正しくありません。

(O)

loopLimit 属性の値を大きくするか、condition 属性の評価式を見直してください。condition 属性が変数を参照している場合は、変数の値に影響するほかのアクティビティや電文も見直してください。

KDEC20025-E

A message telegram was received by a 'receive' activity that did not have the waiting-to-receive status.

business-process-definition-name = ビジネスプロセス定義名,

business-process-definition-version = ビジネスプロセス定義バージョン, receive-activity-name = receive アクティビティ名

待ち受け状態になっていない receive アクティビティで電文を受信しました。次のおそれがあります。

- sequence アクティビティ内で receive アクティビティの順序が正しくない。
- receive アクティビティの source 要素の transitionCondition 属性に指定した評価式が正しくない。
- 電文の到着順序が正しくない。

(O)

要因に記述してある観点でビジネスプロセス定義を見直すか、電文を発信しているサービスリクエストを見直してください。

KDEC20026-E

A 'reply' activity was executed without the service requester in a waiting-for-response state.

business-process-definition-name = ビジネスプロセス定義名,

business-process-definition-version = ビジネスプロセス定義バージョン, reply-activity-name = reply アクティビティ名, reply-activity-operation-name = reply アクティビティのオペレーション名

サービスリクエストが応答を待っていない状態で、reply アクティビティが実行されまし

た。次のようなおそれがあります。

- receive アクティビティの ex:synchronize 属性が yes であるべきところが no になっている。
- reply アクティビティの位置が正しくない。

(O)

要因に記述してある観点でビジネスプロセス定義を見直してください。

KDEC20027-E

A business process definition contains a contradiction. business-process-definition-name = ビジネスプロセス定義名, business-process-definition-version = ビジネスプロセス定義バージョン, element-kind = 矛盾が発見された要素の種類, element-information = 矛盾が発見された要素の情報, details = 詳細情報

ビジネスプロセス定義またはデータ定義に実行できない矛盾が見つかりました。次のようなおそれがあります。

- ビジネスプロセス定義に実行継続ができない変更をし、変更前に生成したビジネスプロセスインスタンスに対する要求を実行した。
- ビジネスプロセス定義を開発環境が提供する以外の方法で作成または変更した。
- ビジネスプロセス定義が壊れている。

(O)

保守員に連絡してください。

KDEC20028-E

A fault was not handled by any 'catch' and 'catchAll' element. business-process-definition-name = ビジネスプロセス定義名, business-process-definition-version = ビジネスプロセス定義バージョン, fault-information = フォルトの情報, activity-name = フォルトが発生したアクティビティ名

フォルトは catch および catchAll 要素で処理されませんでした。次のおそれがあります。

- invoke, java, または scope 要素の, catch または catchAll 要素が不足している。
- invoke 要素で呼び出したサービスプロバイダが不正なフォルトを返した。

(O)

要因に記述している観点でビジネスプロセス定義を見直すか、サービスプロバイダを見直してください。

KDEC20029-E

A Java class having the specified name was not found. business-process-definition-name = ビジネスプロセス定義名, business-process-definition-version = ビジネスプロセス定義バージョン, java-activity-name = java アクティビティ名, java-class-name = ユーザクラス名, details = 詳細情報

指定された名前の Java クラスが見つかりませんでした。次のようなおそれがあります。

- ビジネスプロセス定義を開発環境が提供する以外の方法で作成または変更した。

11. メッセージ

- ビジネスプロセス定義が壊れている。
- 実行環境のリソースが不足している。

(O)

保守員に連絡してください。

KDEC20030-E

The user-made Java class returned an unallocatable value. business-process-definition-name = ビジネスプロセス定義名, business-process-definition-version = ビジネスプロセス定義バージョン, java-activity-name = java アクティビティ名, java-class-name = ユーザクラス名, output-variable = 出力変数名, scope-name = スコープ名

ユーザ作成 Java クラスが、割り当てられない型の値を戻しました。次のようなおそれがあります。

- ユーザ作成の Java クラスが、ビジネスプロセス基盤がサポートしない型の Object 値を戻している。
- ビジネスプロセス定義の java アクティビティの outputVariable の型が、ユーザ作成 Java クラスの戻り値のタイプと一致していない。

(O)

ビジネスプロセス定義の java アクティビティの指定と作成した Java クラスを見直し、Java クラスの戻り値がビジネスプロセス定義に指定した変数に格納できる型になるようにしてください。

KDEC20031-E

The user-made Java class returned an unexpected exception. business-process-definition-name = ビジネスプロセス定義名, business-process-definition-version = ビジネスプロセス定義バージョン, java-activity-name = java アクティビティ名, java-class-name = ユーザクラス名, cause-exception = 原因例外名

ユーザ作成 Java クラスが予期しない例外を返しました。次のようなおそれがあります。

- ユーザ作成 Java クラスが、CSBUserException 以外の例外を返した。

(O)

ユーザ作成 Java クラスの例外処理を見直し、CSBUserException 以外の例外は返さないようにしてください。

KDEC20032-E

Assignment between the specified types is not supported. business-process-definition-name = ビジネスプロセス定義名, business-process-definition-version = ビジネスプロセス定義バージョン, assign-activity-name = assign アクティビティ名, details = エラー詳細

サポートしない型間のアサイン処理が指定されました。

(O)

<from> と <to> に指定した属性の組み合わせを見直してください。

KDEC20033-E

A business process definition suitable for starting the business process was not found.

business-process-definition-name = ビジネスプロセス定義名,

business-process-definition-version = ビジネスプロセス定義バージョン

ビジネスプロセスを開始するための適切なビジネスプロセス定義が見つかりませんでした。次のようなおそれがあります。

- ビジネスプロセス定義にビジネスプロセス定義を開発環境が提供する以外の方法で作成または変更した。
- ビジネスプロセス定義が壊れている。

(O)

保守員に連絡してください。

KDEC20034-E

An invalid type of request was specified for the business process base.

business-process-definition-name = ビジネスプロセス定義名

ビジネスプロセス基盤に対して不正な要求タイプが指定されました。次のようなおそれがあります。

- ビジネスプロセス基盤に対して要求を送信するアプリケーションに不適切なものを使用しているおそれがある。

(O)

要求タイプに適切な値が指定されているか確認してください。また、プロセスインスタンスを再実行する場合は、文字列「RECOVER」を指定してください。

KDEC20035-E

Processing cannot continue because initialization failed. details = 原因の詳細

ビジネスプロセス基盤の初期化に失敗しているため処理を続行できません。次のようなおそれがあります。

- 環境の不正によって初期化に失敗した。

(O)

先に出力されている障害情報を基に対策をします。
問題が解決しない場合は、保守員に連絡してください。

KDEC20036-E

Data conversion failed. business-process-definition-name = ビジネスプロセス定義名,

business-process-definition-version = ビジネスプロセス定義バージョン, conversion-file-name = データ変換定義ファイル名

11. メッセージ

アサインアクティビティに定義したデータ変換が失敗しました。

(O)

このメッセージより先に出力されたデータ変換に関するメッセージを参照し、対処してください。

KDEC20037-E

The process instance was deleted during execution of the process.

business-process-definition-name = ビジネスプロセス定義名,

business-process-definition-version = ビジネスプロセス定義バージョン, process-instance-ID = プロセスインスタンス識別子

プロセス実行中にプロセスインスタンスが削除されました。

(O)

新しいプロセスインスタンスを生成して実行するようにメッセージを再送してください。

KDEC20038-I

The same message was called twice. JMS-message-ID = 非同期メッセージ ID

同じメッセージが二重に呼び出されました。

(O)

先に受信したメッセージでプロセスを実行していますので、特に対処の必要はありません。

KDEC20039-E

A process instance of the specified correlation set was not found.

business-process-definition-name = ビジネスプロセス定義名,

business-process-definition-version = ビジネスプロセス定義バージョン, correlation-set-name = 相関セット名, correlation-set-value = 相関セット値, scope-name = 相関セットが所属するスコープ名

指定した相関セットのプロセスインスタンスが見つかりません。

(O)

メッセージを見直して、存在するプロセスインスタンスの相関セットを指定してください。

KDEC20040-E

The 'receive' activity of the specified operation name was not found.

business-process-definition-name = ビジネスプロセス定義名,

business-process-definition-version = ビジネスプロセス定義バージョン, operation-name = オペレーション名

指定したオペレーション名の receive アクティビティが見つかりません。

(O)

メッセージを見直して、存在する receive アクティビティのオペレーション名を指定してください。

KDEC20041-E

Execution processing could not reach the 'receive' activity of the specified operation name.

business-process-definition-name = ビジネスプロセス定義名,

business-process-definition-version = ビジネスプロセス定義バージョン, operation-name = オペレーション名

指定したオペレーション名の receive アクティビティに実行処理が到達できません。

(O)

ビジネスプロセス定義を見直して、receive アクティビティに実行処理が到達できるようなビジネスプロセス定義に修正してください。

KDEC20042-E

Execution processing could not reach the 'reply' activity corresponding to the 'receive' activity.

business-process-definition-name = ビジネスプロセス定義名,

business-process-definition-version = ビジネスプロセス定義バージョン, receive-activity-name = receive アクティビティ名, receive-activity-operation-name = receive アクティビティのオペレーション名

receive アクティビティに対応する reply アクティビティに実行処理が到達できません。

(O)

ビジネスプロセス定義を見直して、reply アクティビティに実行処理が到達できるようなビジネスプロセス定義に修正してください。

KDEC20043-E

An attempt was made to execute a basic activity before the 'receive' activity.

business-process-definition-name = ビジネスプロセス定義名,

business-process-definition-version = ビジネスプロセス定義バージョン, activity-name = 実行しようとしたアクティビティ名

receive アクティビティを実行するよりも前に、基本アクティビティを実行しようとした。

(O)

ビジネスプロセス定義を見直して、receive アクティビティが最初に行われるようなビジネスプロセス定義に修正してください。

KDEC20044-E

The 'receive' activity cannot be received because the specified correlation set is invalid.

business-process-definition-name = ビジネスプロセス定義名,

11. メッセージ

business-process-definition-version = ビジネスプロセス定義バージョン, process-instance-ID = プロセスインスタンス識別子, correlation-set-name = 相関セット名, scope-name = 相関セットが所属するスコープ名

指定した相関セットが無効になっているので, receive アクティビティで受け付けられません。

(O)

有効な相関セットを指定してメッセージを送信してください。

KDEC20045-E

The specified correlation set value is invalid. business-process-definition-name = ビジネスプロセス定義名, business-process-definition-version = ビジネスプロセス定義バージョン, process-instance-ID = プロセスインスタンス識別子, correlation-set-name = 相関セット名, scope-name = 相関セットが所属するスコープ名

指定された相関セットの値が不正です。

次の要因のどれかが考えられます。

- 相関セット値が null の場合
- 相関セットを構成するプロパティ値に null を含む場合
- 相関セットを構成するすべてのプロパティが空文字となる場合

(O)

正しい相関セットの値を指定して, メッセージを送信してください。

送信した電文のネームスペースと XPath で指定したネームスペースが異なる場合, 相関セット値が取得できないため注意してください。

KDEC20046-E

An exception occurred at the start of a transaction. business-process-definition-name = ビジネスプロセス定義名, details = 詳細例外情報

トランザクションを開始する際に例外が発生しました。

(O)

詳細例外情報に従って, トランザクションマネージャまたはリソースマネージャのエラー要因を取り除いてください。

KDEC20047-E

An exception occurred at the start of a transaction. business-process-definition-name = ビジネスプロセス定義名, business-process-definition-version = ビジネスプロセス定義バージョン, process-instance-ID = プロセスインスタンス識別子, details = 詳細例外情報

トランザクションを開始する際に例外が発生しました。

(O)

詳細例外情報に従って, トランザクションマネージャまたはリソースマネージャのエラー要因を取り除いてください。

KDEC20048-E

An exception occurred at the commit of a transaction. business-process-definition-name = ビジネスプロセス定義名, business-process-definition-version = ビジネスプロセス定義バージョン, process-instance-ID = プロセスインスタンス識別子, details = 詳細例外情報

トランザクションをコミットする際に例外が発生しました。

(O)

詳細例外情報に従って、トランザクションマネージャまたはリソースマネージャのエラー要因を取り除いてください。

KDEC20049-E

An exception occurred at the rollback of a transaction. business-process-definition-name = ビジネスプロセス定義名, business-process-definition-version = ビジネスプロセス定義バージョン, process-instance-ID = プロセスインスタンス識別子, details = 詳細例外情報

トランザクションをロールバックする際に例外が発生しました。

(O)

詳細例外情報に従って、トランザクションマネージャまたはリソースマネージャのエラー要因を取り除いてください。

KDEC20051-E

An error occurred at access to a message telegram. business-process-definition-name = ビジネスプロセス定義名, business-process-definition-version = ビジネスプロセス定義バージョン, variable-name = 変数名, scope-name = 変数が所属するスコープ名, details = 詳細情報

メッセージ電文にアクセスする際にエラーが発生しました。

(O)

このメッセージ以前に出力されているエラー情報を参照してください。

KDEC20052-E

An attempt was made to load the value of an un-initialized variable.

business-process-definition-name ビジネスプロセス定義名, business-process-definition-version = ビジネスプロセス定義バージョン, variable-name = 変数名, scope-name = 変数が所属するスコープ名

初期化されていない変数の値を読み取ろうとしました。

(O)

ビジネスプロセス定義を見直して、初期化されていない変数の値を読み取らないように、ビジネスプロセス定義を修正してください。

KDEC20053-E

An attempt was made to substitute a string that cannot be converted to a numeric value.

business-process-definition-name = ビジネスプロセス定義名,
business-process-definition-version = ビジネスプロセス定義バージョン, to-variable-name = 代入先の変数の名前, to-variable-type = 代入先の変数の型名, to-variable-scope-name = 代入先の変数の所属するスコープ名, details = 詳細情報

変数に数値を代入する際に、数値に変換できない文字列を代入しようとしてしました。

(O)

数値に変換できるメッセージを代入できるように、メッセージ電文を修正してください。

KDEC20054-E

The type of variable cannot be converted. business-process-definition-name = ビジネスプロセス定義名, business-process-definition-version = ビジネスプロセス定義バージョン, from-variable-name = 代入元の変数の名前, from-variable-type = 代入元の変数の型名, from-variable-scope-name = 代入元の変数の所属するスコープ名, to-variable-name = 代入先の変数の名前, to-variable-type = 代入先の変数の型名, to-variable-scope-name = 代入先の変数の所属するスコープ名

変数に変数を代入する際に、変換できない型の変数を代入しようとしてしました。

(O)

ビジネスプロセス定義を見直して、変換できる型の変数を代入するように、ビジネスプロセス定義を修正してください。

KDEC20055-E

The operation names between the 'receive' activity and the 'reply' activity do not match.

business-process-definition-name = ビジネスプロセス定義名,
business-process-definition-version = ビジネスプロセス定義バージョン, receive-activity-name = receive アクティビティ名, receive-activity-operation-name = receive アクティビティのオペレーション名, reply-activity-name = reply アクティビティ名, reply-activity-operation-name = reply アクティビティのオペレーション名

receive アクティビティのオペレーション名と、応答しようとする reply アクティビティのオペレーション名が一致していません。

(O)

ビジネスプロセス定義を見直して、receive アクティビティのオペレーション名に一致する reply アクティビティに到達できるように、ビジネスプロセス定義を修正してください。

KDEC20056-E

The maximum number of activity instances that can be generated in one process instance was exceeded. business-process-definition-name = ビジネスプロセス定義名,
business-process-definition-version = ビジネスプロセス定義バージョン, process-instance-ID = プロセスインスタンス識別子, activity-name = アクティビティ名

一つのプロセスインスタンスで生成できるアクティビティインスタンスの最大値を超えました。

(O)

該当プロセスインスタンスは削除し、一つのプロセスインスタンスが生成できるアクティビティインスタンスの最大数を超えないように、ビジネスプロセス定義を修正してください。

KDEC20057-E

Execution is not possible because the process has completed. business-process-definition-name = ビジネスプロセス定義名, business-process-definition-version = ビジネスプロセス定義バージョン, process-instance-ID = プロセスインスタンス識別子

プロセスの状態が完了しているので、実行できません。

(O)

完了していないプロセスに対して、要求を送信してください。

KDEC20058-E

An attempt to load properties has failed. details = 詳細情報

プロパティの読み込みに失敗しました。

(O)

HCSC サーバが開始していないおそれがあります。HCSC サーバの状態を確認し、HCSC サーバを開始してください。

KDEC20059-E

An attempt to start log output has failed.

ログ出力を開始できませんでした。

(O)

Cosminexus の構成を見直してください。

KDEC20060-E

An attempt was made to overwrite a value already set in the correlation set.

business-process-definition-name = ビジネスプロセス定義名,

business-process-definition-version = ビジネスプロセス定義バージョン, process-instance-ID =

11. メッセージ

プロセスインスタンス識別子, correlation-set-name = 相関セット名, scope-name = 相関セットが所属するスコープ名

すでに値が設定されている相関セットに値を上書きしようとしてしました。

(O)

ビジネスプロセス定義を見直して、相関セットに値を上書きしないようにビジネスプロセス定義を修正してください。

KDEC20061-E

An error occurred during access to a message telegram, during correlation set processing.

business-process-definition-name = ビジネスプロセス定義名,

business-process-definition-version = ビジネスプロセス定義バージョン, activity-name = アクティビティ名, correlation-set-name = 相関セット名, details = 詳細情報

相関セットの処理中に、メッセージ電文へのアクセスでエラーが発生しました。

(O)

このメッセージ以前に出力されているエラー情報を参照してください。

KDEC20062-E

A correlation set value does not match a telegram information value.

business-process-definition-name = ビジネスプロセス定義名,

business-process-definition-version = ビジネスプロセス定義バージョン, process-instance-ID = プロセスインスタンス識別子, correlation-set-name = 相関セット名, scope-name = 相関セットが所属するスコープ名

電文の相関セット用情報値が、プロセスインスタンスごとに作成した相関セット値と異なります。次のようなおそれがあります。

- 電文内の相関セット値をサービスリクエストで変更した。

(O)

上記の観点で、電文を発信しているサービスリクエストを見直してください。

KDEC20063-E

A request message in the message container is invalid. business-process-definition-name = ビジネスプロセス定義名, business-process-definition-version = ビジネスプロセス定義バージョン, element-kind = 不正が発見された要素の種類, element-information = 不正が発見された要素の名前, details = 詳細情報

変数属性が定義されているにもかかわらず、リクエストから送られてきたメッセージが空でした。

(O)

メッセージまたはメッセージを送るプログラムを見直して、正しくメッセージを送信するようにしてください。

KDEC20064-E

After a 'reply' activity, the process cannot be executed in the non-persistent mode.

business-process-definition-name = ビジネスプロセス定義名,

business-process-definition-version = ビジネスプロセス定義バージョン, activity-name = アクティビティ名

永続化フラグが " no " であるビジネスプロセス定義では, reply 後に実行するアクティビティが存在します。

(O)

永続化フラグが " no " であるビジネスプロセス定義では, reply 後にアクティビティを実行できません。ビジネスプロセス定義を見直して, reply 後にアクティビティを実行しないように修正してください。

KDEC20065-E

An attempt was made to load the value of an un-initialized correlation set.

business-process-definition-name = ビジネスプロセス定義名,

business-process-definition-version = ビジネスプロセス定義バージョン, correlation-set-name = 相関セット名, scope-name = 相関セットが所属するスコープ名

初期化されていない相関セットの値を読み取ろうとしました。

(O)

ビジネスプロセス定義を見直して, 初期化されていない相関セットの値を読み取らないように, ビジネスプロセス定義を修正してください。

KDEC20066-E

The process instance of the specified correlation set exists, but the 'receive' activity of the specified

operation name has completed. business-process-definition-name = ビジネスプロセス定義名,

business-process-definition-version = ビジネスプロセス定義バージョン, process-instance-ID = プロセスインスタンス識別子, receive-activity-name = receive アクティビティ名,

operation-name = オペレーション名

指定した相関セットのプロセスインスタンスが存在し, かつ指定したオペレーション名の receive アクティビティが完了しています。

(O)

メッセージ本文で指定した相関セット, またはビジネスプロセス定義を見直して, メッセージまたはビジネスプロセス定義を修正してください。

KDEC20067-E

The 'invoke' activity has already completed. business-process-definition-name = ビジネスプロセス

定義名, business-process-definition-version = ビジネスプロセス定義バージョン,

process-instance-ID = プロセスインスタンス識別子, invoke-activity-name = invoke アクティビティ名

11. メッセージ

すでに完了している invoke アクティビティを実行しようとした。次のようなおそれがあります。

- invoke アクティビティ内でサービス部品呼び出しの最中に、プロセス再実行ユティリティを実行した。

(O)

HCSC サーバで処理中のプロセスインスタンスに対して、プロセスインスタンスの再実行をしようとしたおそれがあります。次の点を見直して、必要に応じて、プロセスインスタンスを再実行してください。

- 再実行対象のプロセスが処理中でないか
- 完了していないサービス呼出アクティビティがあるか
- プロセス ID に正しい再実行対象のプロセスを指定しているか

KDEC20068-E

An exception occurred. details = 詳細情報 (例外クラス名)

例外が発生しました。

(O)

保守員に連絡してください。

KDEC20069-I

The evaluation result of the XPath query is an empty string. business-process-definition-name = ビジネスプロセス定義名, business-process-definition-version = ビジネスプロセス定義バージョン, XPath-query = XPath クエリ

XPath クエリの評価結果が空文字です。

(O)

XPath クエリの評価結果が空文字であることが、意図した動作が確認してください。

KDEC20070-E

The user-made Java class threw an exception. business-process-definition-name = ビジネスプロセス定義名, business-process-definition-version = ビジネスプロセス定義バージョン, process-instance-ID = プロセスインスタンス識別子, java-activity-name = java アクティビティ名, details = 詳細情報

ユーザ作成 Java クラスが例外を送出しました。

(O)

例外の原因を取り除いて、プロセスを再実行してください。

KDEC20071-E

The combination of the specified process instance ID and the specified process definition name is invalid. process-instance-ID = プロセスインスタンス識別子, expected

business-process-definition-name = 期待するビジネスプロセス定義名, specified

business-process-definition-name = 指定されたビジネスプロセス定義名

プロセス再実行時に指定したプロセスインスタンス識別子に対応するビジネスプロセス定義名が不正です。

(O)

正しいビジネスプロセス定義名を指定してください。

11.3.2 KDEC35000 ~ KDEC39999

KDEC35000-E

A database access error occurred. HCSC-cluster-name = HCSC クラスタ名, table-kind = テーブル種別, operation-type = オペレーション種別, SQL-message = SQL エラーメッセージ,

SQL-state = SQL 状態コード, SQL-error-code = SQL エラーコード

DBMS でエラーが発生しました。次のようなおそれがあります。

- 指定した HCSC クラスタ名, プロセス情報検索条件の不正
- DBMS 障害

テーブル種別

- PROCESS : PROCESS テーブル
- ACTIVITY : ACITIVITY テーブル / ACITIVITY テーブルビュー
- CORRELATIONSET : CORRELATIONSET テーブル
- LINK : LINK テーブル / LINK ビュー
- BOOL_VARIABLE : BOOL_VARIABLE テーブル / BOOL_VARIABLE ビュー
- STR_VARIABLE : STR_VARIABLE テーブル / STR_VARIABLE ビュー
- NUM_VARIABLE : NUM_VARIABLE テーブル / NUM_VARIABLE ビュー
- MSG_VARIABLE : MSG_VARIABLE テーブル / MSG_VARIABLE ビュー
- MSG_RELATION : MSG_RELATION テーブル

オペレーション種別

- INFO : プロセス情報取得
- INFO_PID : プロセスインスタンス識別子取得
- INFO_JOIN : 相関セット情報からのプロセス情報取得
- COUNT : プロセス情報該当件数取得
- COUNT_JOIN : 相関セット情報からのプロセス情報該当件数取得
- DELETE : プロセス情報削除

(O)

指定した HCSC クラスタ名, プロセス情報検索条件を見直してください。

メッセージ型変数の検索条件として, 変数の値を指定することはできません。

DBMS のエラーメッセージ, システムログ, および DBMS 関連のエラー情報を参照して対処してください。

KDEC35001-E

Process deletion did not complete because a database access error occurred. HCSC-cluster-name = HCSC クラスタ名, number of the target process instances to be deleted = プロセス削除対象のプロセスインスタンス総件数, number of the deleted process instances = 削除されたプロセスインスタンス件数, SQL-message = SQL エラーメッセージ, SQL-state = SQL 状態コード, SQL-error-code = SQL エラーコード

DBMS でエラーが発生しました。

(O)

DBMS のエラーメッセージ, システムログおよび DBMS 関連のエラー情報を参照して対処してください。

KDEC35002-E

An attempt to connect to the database has failed. JDBC-type = JDBC ドライバ種別, JDBC-url = データベースに接続するためのデータベース URL, SQL-message = SQL エラーメッセージ, SQL-state = SQL 状態コード, SQL-error-code = SQL エラーコード

DBMS への接続に失敗しました。

(O)

データベース URL が誤っていないか見直してください。

DBMS が起動され接続できる状態になっているか見直してください。

DBMS のエラーメッセージ, システムログおよび DBMS 関連のエラー情報を参照して対処してください。

KDEC35003-E

Initialization of the JDBC driver failed. JDBC-type = JDBC ドライバ種別

JDBC ドライバのロードに失敗しました。

(O)

JDBC ドライバ種別が正しいか見直してください。

JDBC ドライバへの CLASSPATH 環境変数, および JDBC ドライバが必要とする環境変数が正しく設定されているか見直してください。

KDEC35004-E

A property value is invalid. property-name = 設定項目のプロパティキー, value = 指定されたプロパティキーの値

設定されたプロパティの値が不正です。

(O)

設定を見直して, 示された設定項目を有効な値に設定し直してください。

KDEC35005-E

A parameter value is invalid. argument = 誤りのある引数の名称, value = 指定された引数の値
指定された引数の値が不正です。

誤りのある引数の名称

- HCSC-server-name : HCSC サーバ名
- business-process-definition-name : ビジネスプロセス定義名
- process-instance-ID : プロセスインスタンス識別子

(O)

示された指定項目を有効な値に設定し直してください。

KDEC35006-E

An executable process was not found. HCSC-cluster-name = HCSC クラスタ名,
business-process-definition-name = ビジネスプロセス定義名
再実行する必要があるプロセスが見つかりませんでした。

(O)

再実行する必要があるプロセスの HCSC クラスタ名, ビジネスプロセス定義名に誤りがないか見直してください。

KDEC35007-E

An error occurred in process re-execution. J2EE-server-name = J2EE サーバ名,
HCSC-cluster-name = HCSC クラスタ名, business-process-definition-name = ビジネスプロセス
定義名, process-instance-ID = プロセスインスタンス識別子, cause = エラーメッセージ
プロセスの再実行に失敗しました。

(O)

J2EE サーバ名, HCSC クラスタ名, ビジネスプロセス定義名, およびプロセス
インスタンス識別子が正しいか見直してください。
エラーメッセージを基にプロセスが呼び出しできる状態にあるか見直してください。
HCSC サーバの同期リクエストサービス (EJB) が起動されていることを確認して
ください。
失敗の要因となった J2EE サーバのログを確認し, エラーの要因を取り除いてくだ
さい。

KDEC35008-E

The message catalog could not be loaded.

メッセージの書かれたリソースファイルが読み込めませんでした。

(O)

Cosminexus Service Coordinator を再インストールしてください。

KDEC35009-E

The message explaining the problem could not be obtained. message-ID = 取得できなかったメッセージの ID

ID で示される事象が発生しましたが、対応するメッセージが取得できませんでした。

(O)

ID で示されるメッセージの対処に従ってください。

KDEC35011-W

An attempt to start trace output has failed.

トレース出力を開始できませんでした。

(O)

Cosminexus の構成を見直してください。

KDEC35012-E

An attempt to start log output has failed.

ログを開始できませんでした。

(O)

Cosminexus の構成を見直してください。

KDEC35013-E

An attempt to load properties has failed. HCSC-server-name = HCSC サーバ名, cause = エラー理由

プロパティの読み込みに失敗しました。

(O)

HCSC サーバ名が正しいか見直してください。

エラー理由を基に要因を取り除いてください。

KDEC35014-I

Number of deleted process instances = 削除されたプロセス件数, HCSC-cluster-name = HCSC クラスタ名

指定された HCSC クラスタの表示件数のプロセスが削除されました。

11.4 KDEC40000 ~ KDEC59999 のメッセージ

KDEC40000-E

CommonData オブジェクト内にデータが存在しません。

データ変換基盤が期待するデータを見つけることができません。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

保守員に連絡してください。

KDEC40001-E

メソッドトレース出力オブジェクトが設定されていません。

メソッドトレースログ出力機能を利用することができません。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

保守員に連絡してください。

KDEC40002-E

Schema オブジェクトの生成に失敗しました。原因 = 原因となる例外のメッセージ

XML Schema の読み込み時に例外が発生しました。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

XML Schema が正しいことを確認してください。

KDEC40003-E

Transformer オブジェクトの生成に失敗しました。原因 = 原因となる例外のメッセージ

データ変換機能の初期化時に例外が発生しました。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

XSLT スタイルシートが正しいことを確認してください。

KDEC40004-E

XML Schema がないため検証できません。

XML Schema がないため検証できません。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

保守員に連絡してください。

KDEC40005-E

XML のバイト配列の生成に失敗しました。原因 = 原因となる例外のメッセージ

XML のバイト配列生成時に例外が発生しました。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

保守員に連絡してください。

KDEC40006-E

XML のバイト配列生成時に利用する Transformer オブジェクトの設定が正しくありません。原因 = 原因となる例外のメッセージ

DOM から XML のバイト配列に変換する機能の初期化時に例外が発生しました。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

保守員に連絡してください。

KDEC40007-E

XML のバイト配列を含む出力ストリームが不正です。原因 = 原因となる例外のメッセージ

DOM から XML のバイト配列に変換する時に例外が発生しました。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

保守員に連絡してください。

KDEC40008-E

XML のパース時にエラーが発生しました。原因 = 原因となる例外のメッセージ

XML のバイト配列から DOM への変換時に例外が発生しました。

- (S) メッセージを表示して、処理を続行します。
- (O) メッセージ電文である XML が正しいことを確認してください。

KDEC40009-E

XML パーサの設定が正しくありません。原因 = 原因となる例外のメッセージ
XML のバイト配列から DOM へ変換する機能の初期化時に例外が発生しました。

- (S) メッセージを表示して、処理を続行します。
- (O) 保守員に連絡してください。

KDEC40010-E

XML の検証でエラーが発生しました。原因 = 原因となる例外のメッセージ
XML の検証時に例外が発生しました。

- (S) メッセージを表示して、処理を続行します。
- (O) XML Schema およびメッセージ電文である XML が正しいことを確認してください。

KDEC40011-E

データ変換に失敗しました。原因 = 原因となる例外のメッセージ
データ変換時に例外が発生しました。

- (S) メッセージを表示して、処理を続行します。
- (O) 保守員に連絡してください。

KDEC40012-E

データ変換の結果を含む出力ストリームが不正です。原因 = 原因となる例外のメッセージ
データ変換結果の出力時に例外が発生しました。

- (S) メッセージを表示して、処理を続行します。
- (O) 保守員に連絡してください。

KDEC40013-E

メソッドの引数が不正です。変数名 = 変数名

メソッドの引数に想定されていない値が渡されました。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

保守員に連絡してください。

KDEC40014-E

CommonData オブジェクトに名前が含まれていないため、変換を実行できません。

N:1 変換実行時に変換元データの名前が指定されていないため、変換を実行できません。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

保守員に連絡してください。

KDEC40015-E

データハンドラがありません。

データハンドラが設定されていない状態で、データハンドラが必要な処理を実行しました。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

保守員に連絡してください。

KDEC40016-E

XPath で指定された部分が見つかりません。XPath= XPath

データ中に XPath で指定された部分が見つかりません。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

XPath が正しいことと、メッセージ電文である XML の内容が正しいことを確認してください。

KDEC40018-E

XPath が不正です。XPath= XPath, 原因 = 原因となる例外のメッセージ

XPath の解析時に例外が発生しました。

- (S) メッセージを表示して、処理を続行します。
- (O) XPath が正しいことを確認してください。

KDEC40019-E

指定された複数の CommonData オブジェクトに名前が重複しているものが含まれているため、変換を実行できません。

N:1 変換で、変換元データとして同じ名前を指定したデータが渡されました。

- (S) メッセージを表示して、処理を続行します。
- (O) 保守員に連絡してください。

KDEC40020-E

PRF トレース出力オブジェクトが設定されていません。

PRF トレース出力機能を利用することができません。

- (S) メッセージを表示して、処理を続行します。
- (O) 保守員に連絡してください。

KDEC40021-E

XPath で指定されたノードの種類が、属性、要素、テキストのどれでもありません。XPath=XPath

値取得元として指定した XPath が指す先のデータが属性、要素、テキストのどれでもありません。

- (S) メッセージを表示して、処理を続行します。
- (O) XPath が指す先が属性、要素、テキストのどれかでなければなりません。XPath を確認してください。

KDEC40022-E

XPath で指定されたノードの種類が要素ではありません。XPath=XPath

部分木の取得元、追加先として指定した XPath が指す先のデータが要素ではありません。

11. メッセージ

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

XPath が指す先が要素でなければなりません。XPath を確認してください。

KDEC40023-E

解析結果オブジェクトの生成に失敗しました。logicalname = loginname, 原因 = 原因となる例外のメッセージ

解析結果オブジェクト生成時に、IllegalArgumentException, SAXException, IOException のどれかが発生しました。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

保守員に連絡してください。

KDEC40024-E

オブジェクトプールのためのオブジェクト生成に失敗しました。原因 = 原因となる例外のメッセージ

オブジェクト生成時に、ParserConfigurationException が発生しました。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

保守員に連絡してください。

KDEC40025-E

オブジェクトプールが初期化されていません。
プールの初期化チェックで異常が発生しました。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

保守員に連絡してください。

KDEC40026-E

オブジェクトの開放を待つスレッドが、他のスレッドによって妨害されました。原因 = 原因となる例外のメッセージ

待ちスレッドがある状態で、InterruptedException を受け取りました。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

保守員に連絡してください。

KDEC40027-E

高速パース機能の設定時にエラーが発生しました。logicalname = loginname, 原因 = 原因となる例外のメッセージ

解析結果オブジェクトを設定中に、SAXNotRecognizedException または SAXNotSupportedException が発生しました。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

保守員に連絡してください。

KDEC40100-E

フォーマット定義オブジェクトの生成に失敗しました。
createBinaryDataHandler 処理中に例外が発生しました。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

保守員に連絡してください。

KDEC40101-E

日立コード変換ライブラリのクラスが見つかりません。
createBinaryDataHandler を呼び出したときに、日立コード変換ライブラリのクラスを見つけることができませんでした。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

保守員に連絡してください。

KDEC40200-E

バイナリデータの入力でエラーが発生しました。error=ByteArrayInputStream.read メソッドのリターンコード

フォーマット定義に対して入力データが短く、変換途中で入力データが終わりに到達しました。

ByteArrayInputStream.read メソッドのリターンコード

- -1：すでに入力データがない
- 正の整数：入力要求のサイズに対して入力データが短かった場合の入力データの

11. メッセージ

サイズ

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

フォーマット定義または入力データを確認してください。

KDEC40201-E

バイナリデータの出力に失敗しました。e= 例外

バイナリデータ出力時に例外が発生しました。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

保守員に連絡してください。

KDEC40202-E

フォーマット定義で定義されていないバイナリデータがあります。size= 残りのバイト数

フォーマット定義で定義されていないバイナリデータがあり、処理されないバイナリデータが残りしました。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

フォーマット定義または入力データを確認してください。

KDEC40210-E

文字コードの種別が不正です。encode= 文字形式

フォーマット定義の文字コード種別に処理できない種別が現れました。encode=NONEを出力します。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

フォーマット定義を確認してください。

KDEC40211-E

文字コード変換中にエラーが発生しました。変換結果が NULL です。

日立コード変換ライブラリの変換結果が null です。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

保守員に連絡してください。

KDEC40212-E

文字コード変換中にエラーが発生しました。code=HJCCConverters.getConvertState メソッドのリターンコード

日立コード変換ライブラリの変換結果のリターンコードが「正常終了」以外でした。

HJCCConverters.getConvertState メソッドのリターンコード

リターンコードの詳細については、uCosminexus 日立コード変換 - Server Runtime または uCosminexus 日立コード変換 - Runtime に添付されているドキュメントを参照してください。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

保守員に連絡してください。

KDEC40213-E

日立コード変換ライブラリを使用するためのシステムプロパティが指定されていません。

日立コード変換ライブラリを使用するためのシステムプロパティ (csc.dt.codetablepath) の値が指定されていません。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

保守員に連絡してください。

KDEC40214-E

文字コード変換中に例外が発生しました。e= 例外

日立コード変換ライブラリで例外が発生しました。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

保守員に連絡してください。

KDEC40220-E

SAX のパース時にエラーが発生しました。e= 例外

DOM 作成時に例外が発生しました。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

11. メッセージ

(O)

保守員に連絡してください。

KDEC40221-E

サイズノードまたは出現回数ノードの値が不正です。node= 基準ノード ,path=XPath,value= サイズまたは出現回数の値

基準ノードおよび XPath で指定された , サイズノードまたは出現回数ノードの値が不正です。

(S)

メッセージを表示して , 処理を続行します。

(O)

フォーマット定義または入力データを確認してください。

KDEC40222-E

指定されたノードが取得できませんでした。node= 基準ノード ,path=XPath

基準ノードおよび XPath で指定されたノードが取得できません。

(S)

メッセージを表示して , 処理を続行します。

(O)

フォーマット定義または入力データを確認してください。

KDEC40310-E

バイナリデータから DOM への変換でエラーが発生しました。e= 例外

バイナリデータから DOM への変換で例外が発生しました。

(S)

メッセージを表示して , 処理を続行します。

(O)

保守員に連絡してください。

KDEC40311-E

DOM からバイナリデータへの変換でエラーが発生しました。e= 例外

DOM からバイナリデータへの変換で例外が発生しました。

(S)

メッセージを表示して , 処理を続行します。

(O)

保守員に連絡してください。

KDEC40330-E

フォーマット情報の検証でエラーが発生しました。e= 例外

フォーマット定義のフォーマット情報の検証でエラーが発生しました。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

フォーマット定義を確認してください。

KDEC40331-E

Element の定義が不正です。attr= 要素名

Element で複合内容要素または単純内容要素以外の要素が出現しました。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

フォーマット定義を確認してください。

KDEC40332-E

Element の解析処理でエラーが発生しました。e= 例外

Element の解析処理で例外が発生しました。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

保守員に連絡してください。

KDEC40333-E

Element の検証処理でエラーが発生しました。e= 例外

Element の検証処理で例外が発生しました。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

フォーマット定義を確認してください。

KDEC40334-E

単純内容要素または複合内容要素の属性が不正です。e= 例外

単純内容要素または複合内容要素の検証で例外が発生しました。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

11. メッセージ

(O)

フォーマット定義を確認してください。

KDEC40335-E

単純内容要素または複合内容要素の定義が存在しません。

単純内容要素または複合内容要素の定義が存在しません。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

フォーマット定義を確認してください。

KDEC40400-E

データサイズの属性が不正です。node= ノード ,position= 出現位置 ,kind= 属性

データサイズの属性がノード指定またはデータ終端までではありません。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

フォーマット定義または入力データを確認してください。

KDEC40401-E

データサイズの指定が不正です。node= ノード ,position= 出現位置 ,source= 入力サイズ ,target= 出力サイズ

入力データサイズと出力データサイズに不整合があります。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

フォーマット定義または入力データを確認してください。

KDEC40402-E

DOM 作成時にエラーが発生しました。node= ノード ,position= 出現位置 ,e= 例外

バイナリデータから DOM への変換で例外が発生しました。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

保守員に連絡してください。

KDEC40404-E

パック形式の符号部が不正です。node= ノード ,position= 出現位置 ,str= 文字列
パック形式の符号部に予期しないデータが入力されました。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

フォーマット定義または入力データを確認してください。

KDEC40405-E

パック形式の小数部が不正です。node= ノード ,position= 出現位置 ,str= 文字列
パック形式の小数部に予期しないデータが入力されました。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

フォーマット定義または入力データを確認してください。

KDEC40406-E

パック形式が不正です。node= ノード ,position= 出現位置 ,source= 入力データ
パック形式に適合しないデータが入力されました。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

フォーマット定義または入力データを確認してください。

KDEC40407-E

パック形式の整数部データ長が不正です。node= ノード ,position= 出現位置 ,source= 入力サイズ ,target= 出力サイズ

パック形式の整数部のデータ長が、出力サイズよりも入力サイズの方が大きいです。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

フォーマット定義または入力データを確認してください。

KDEC40408-E

パック形式の小数部データ長が不正です。node= ノード ,position= 出現位置 ,source= 入力サイズ ,target= 出力サイズ

パック形式の小数部のデータ長が、出力サイズよりも入力サイズの方が大きいです。

11. メッセージ

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

フォーマット定義または入力データを確認してください。

KDEC40409-E

入力データに数値文字ではない文字が含まれています。node= ノード ,position= 出現位置 ,str= 文字列

入力データに数値文字でない文字が含まれています。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

フォーマット定義または入力データを確認してください。

KDEC40413-E

ゾーン形式の符号部が不正です。node= ノード ,position= 出現位置 ,str= 文字列
ゾーン形式の符号部に予期しないデータが入力されました。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

フォーマット定義または入力データを確認してください。

KDEC40414-E

ゾーン形式の小数部が不正です。node= ノード ,position= 出現位置 ,str= 文字列
ゾーン形式の小数部に予期しないデータが入力されました。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

フォーマット定義または入力データを確認してください。

KDEC40415-E

ゾーン形式が不正です。node= ノード名 ,position= 出現位置 ,source= 入力データ
ゾーン形式に適合しないデータが入力されました。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

フォーマット定義または入力データを確認してください。

KDEC40416-E

ゾーン形式の整数部データ長が不正です。node= ノード名 ,position= 出現位置 ,source= 入力サイズ ,target= 出力サイズ

ゾーン形式の整数部のデータ長が、出力サイズよりも入力サイズの方が大きいです。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

フォーマット定義または入力データを確認してください。

KDEC40419-E

ゾーン形式の小数部データ長が不正です。node= ノード名 ,position= 出現位置 ,source= 入力サイズ ,target= 出力サイズ

ゾーン形式の小数部のデータ長が、出力サイズよりも入力サイズの方が大きいです。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

フォーマット定義または入力データを確認してください。

KDEC40420-E

フォーマット情報の検証でエラーが発生しました。error= エラー内容

フォーマット定義のフォーマット情報の検証でエラーが発生しました。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

フォーマット定義を確認してください。

KDEC40430-E

選択条件ノードの値に該当するノードがフォーマット定義に存在しません。choice= 選択条件ノード

選択条件ノードの値に該当するノードがフォーマット定義上で定義されていません。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

フォーマット定義または入力データを確認してください。

KDEC40431-E

選択条件ノードが存在しません。choice= 選択条件ノード

11. メッセージ

選択条件ノードで指定されたノードが入力データに存在しません。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

フォーマット定義または入力データを確認してください。

KDEC40432-E

選択構造が不正です。error= リターンコード

選択構造の属性指定に予期しないデータが指定されています。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

フォーマット定義を確認してください。

KDEC40433-E

選択構成に余分な構成要素が存在します。choice= 選択構成ノード ,node= 余分なノード

選択構成の最後に余分な構成要素が存在します。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

フォーマット定義または入力データを確認してください。

KDEC40435-E

選択条件ノードの値と出現した選択ノードの条件値が一致しません。choice= 選択条件ノード

選択条件ノードに指定された値と、出現した選択ノードの条件値が一致しません。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

フォーマット定義または入力データを確認してください。

KDEC40436-E

選択構成に構成要素が存在しません。choice= 選択構成ノード

選択構成に構成要素が存在しません。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

フォーマット定義または入力データを確認してください。

KDEC40437-E

選択条件開始セパレータに該当するノードがフォーマット定義に存在しません。choice= 選択条件ノード

選択条件に設定した、構成要素の開始セパレータに該当するノードがフォーマット定義上で定義されていません。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

入力データを確認してください。

KDEC40440-E

複合内容要素の属性が不正です。attr= 属性

複合内容要素の属性が逐次構造または選択構造ではありません。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

フォーマット定義を確認してください。

KDEC40450-E

出現回数の属性が不正です。kind= 属性

出現回数の属性がノード指定またはデータ終端までではありません。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

フォーマット定義を確認してください。

KDEC40451-E

最小出現回数が不正です。value= 出現回数

最小出現回数の指定が数値ではありません。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

フォーマット定義を確認してください。

KDEC40452-E

最大出現回数が不正です。value= 出現回数

最大出現回数の指定が数値ではありません。

11. メッセージ

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

フォーマット定義を確認してください。

KDEC40453-E

サイズと出現回数の指定の組合せが不正です。size= サイズ指定 ,occurs= 出現回数指定
サイズに EOD が指定されていますが、出現回数が 1 回以外で指定されています。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

フォーマット定義または入力データを確認してください。

KDEC40454-E

出現回数が EOD で省略不可の設定に対して、入力バイナリデータがありません。
出現回数が EOD で省略不可の設定に対して、入力データがありません。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

フォーマット定義または入力データを確認してください。

KDEC40455-E

出現回数が EOD で省略不可の設定に対して、入力 XML データがありません。
出現回数が EOD で省略不可の設定に対して、入力データがありません。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

フォーマット定義または入力データを確認してください。

KDEC40456-E

フォーマット定義と入力 XML のノードが一致しません。fdx=fdx ノード名 ,xml=xml ノード名
フォーマット定義と入力 XML のノードが一致しません。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

フォーマット定義または入力データを確認してください。

KDEC40462-E

サイズノードまたは出現回数ノードは既に設定されています。node= 基準ノード ,path=XPath
基準ノードおよび XPath で指定されたサイズノードまたは出現回数ノードはすでに値が
設定されています。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

フォーマット定義または入力データを確認してください。

KDEC40463-E

指定された出現回数と、入力 XML の出現回数が一致しません。node= ノード名
ノード名で指定されたノードの出現回数が、フォーマット定義または出現回数ノードの
値と異なります。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

フォーマット定義または入力データを確認してください。

KDEC40464-E

文字列の字数が指定された日付時刻形式と異なります。node= ノード名 ,position= 出現位置
,str= 文字列

入力文字列が指定された日付時刻形式と異なります。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

フォーマット定義または入力データを確認してください。

KDEC40466-E

文字列に小数部が存在します。node= ノード名 ,position= 出現位置 ,str= 文字列
小数部桁数が指定されていないのに、小数部が存在しています。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

フォーマット定義または入力データを確認してください。

KDEC40467-E

指定された小数部桁数と文字列の小数部桁数が一致しません。node= ノード名 ,position= 出現位置 ,source= 入力サイズ ,target= 出力サイズ

指定された小数部桁数と文字列の小数部桁数が一致しません。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

フォーマット定義または入力データを確認してください。

KDEC40468-E

文字列に小数部が存在しません。node= ノード名 ,position= 出現位置 ,str= 文字列
小数部桁数が指定されているのに、小数部が存在しません。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

フォーマット定義または入力データを確認してください。

KDEC40471-E

有効な数値が指定されていません。node= ノード ,position= 出現位置 ,str= 文字列
埋め字が SPACE で、入力データがすべて半角スペースになっています。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

入力データを確認してください。

KDEC40472-E

数値フォーマットが不正です。node= ノード名 ,position= 出現位置 ,str= 文字列
入力データが指定されたデータ形式の数値フォーマットと異なります。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

入力データを確認してください。

KDEC40473-E

入力されたバイナリデータは不正な文字が含まれています。node= ノード名 ,position= 出現位置 ,str= 文字列

入力されたバイナリデータに不正な文字が含まれています。

- (S) メッセージを表示して、処理を続行します。
- (O) 入力データを確認してください。

KDEC40474-E

符号フォーマットが不正です。node= ノード名 ,position= 出現位置 ,sign= 符号指定 ,str= 文字列
符号フォーマットに予期しない文字列が現れました。

- (S) メッセージを表示して、処理を続行します。
- (O) フォーマット定義または入力データを確認してください。

KDEC40475-E

有効桁がシステムの制限を超えています。node= ノード名 ,position= 出現位置 ,str= 文字列
入力データの有効桁がシステムの制限を超えました。

- (S) メッセージを表示して、処理を続行します。
- (O) 入力データを確認してください。

KDEC40477-E

指定されたサイズより入力文字列のサイズが大きいです。node= ノード名 ,position= 出現位置
指定されたサイズより入力文字列のサイズが大きいです。

- (S) メッセージを表示して、処理を続行します。
- (O) フォーマット定義または入力データを確認してください。

KDEC40478-E

指定されたサイズと入力文字列のサイズが異なります。node= ノード名 ,position= 出現位置
指定されたサイズと入力文字列のサイズが異なります。

- (S) メッセージを表示して、処理を続行します。
- (O) フォーマット定義または入力データを確認してください。

KDEC40482-E

入力文字列が hexBinary 形式ではありません。node= ノード名 ,position= 出現位置 ,str= 文字列
入力文字列が hexBinary 形式の文字列ではありません。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

入力データを確認してください。

KDEC40510-E

逐次構造の名称がありません。

逐次構造のグローバル名称がありません。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

フォーマット定義を確認してください。

KDEC40511-E

フォーマット定義で定義されていない構成要素が存在します。node= 定義されていないノード
名

フォーマット定義で定義されていない構成要素が存在します。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

入力データを確認してください。

KDEC40520-E

指定できないパラメタです。node= ノード名 ,position= 出現位置 ,str= 文字列
単純内容要素の属性で予期しない属性が指定されています。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

フォーマット定義を確認してください。

KDEC40521-E

データタイプの指定が不正です。str= 文字列
単純内容要素のデータタイプが不正です。

- (S) メッセージを表示して、処理を続行します。
- (O) フォーマット定義を確認してください。

KDEC40522-E

サイズの指定が0より小さいです。node= ノード名 ,position= 出現位置 ,str= 文字列
単純内容要素のデータサイズが0未満です。

- (S) メッセージを表示して、処理を続行します。
- (O) フォーマット定義または入力データを確認してください。

KDEC40523-E

小数点桁数の指定が0より小さいです。node= ノード名 ,position= 出現位置 ,str= 文字列
小数点桁数の指定が0未満です。

- (S) メッセージを表示して、処理を続行します。
- (O) フォーマット定義を確認してください。

KDEC40524-E

符号の指定が NULL です。node= ノード名 ,position= 出現位置
単純内容要素の符号の指定がありません。

- (S) メッセージを表示して、処理を続行します。
- (O) フォーマット定義を確認してください。

KDEC40525-E

符号の指定が不正です。node= ノード名 ,position= 出現位置 ,str= 文字列
単純内容要素の符号の指定で予期しない文字列が入力されました。

- (S) メッセージを表示して、処理を続行します。
- (O) フォーマット定義を確認してください。

KDEC40526-E

埋め字の指定が NULL です。node= ノード名 ,position= 出現位置
単純内容要素の埋め字の指定がありません。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

フォーマット定義を確認してください。

KDEC40527-E

埋め字の指定が不正です。node= ノード名 ,position= 出現位置 ,str= 文字列
単純内容要素の埋め字の指定で予期しない文字列が入力されました。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

フォーマット定義を確認してください。

KDEC40528-E

日付時刻形式の指定が不正です。node= ノード名 ,position= 出現位置 ,str= 文字列
単純内容要素の日付時刻形式の指定で予期しない文字列が入力されました。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

フォーマット定義を確認してください。

KDEC40529-E

日付時刻形式の指定が NULL です。node= ノード名 ,position= 出現位置
単純内容要素の日付時刻形式の指定がありません。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

フォーマット定義を確認してください。

KDEC40605-E

入力の数値は指定サイズの範囲から外れています。node= ノード名 ,position= 出現位置 ,size=
サイズ ,value= 値

符号付きの 2 進数値または符号無し の 2 進数値で、入力した数値がサイズの範囲外です。

(S)
メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)
フォーマット定義または入力データを確認してください。

KDEC40606-E

データサイズが不正です。node= ノード名 ,position= 出現位置 ,size= サイズ
データサイズが 1, 2, 4, または 8 以外の数字です。

(S)
メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)
フォーマット定義を確認してください。

KDEC40610-E

入力された日付時刻データの形式は不正です。node= ノード名 ,position= 出現位置 ,str= 文字列
日付時刻データの形式で予期しない形式が入力されました。

(S)
メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)
フォーマット定義を確認してください。

KDEC40611-E

存在しない日付です。node= ノード名 ,position= 出現位置 ,str= 文字列
日付指定で存在しない日付が指定されました。

(S)
メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)
入力データを確認してください。

KDEC40613-E

指定された小数部桁数と入力データの小数部桁数が一致しません。
日付時刻指定で指定された小数部桁数と入力データの小数部桁数が一致しません。

(S)
メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)
フォーマット定義または入力データを確認してください。

KDEC40614-E

存在しない時刻です。node= ノード名 ,position= 出現位置 ,str= 文字列
時刻指定で存在しない時刻が指定されました。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

入力データを確認してください。

KDEC40615-E

2桁年号の指定が不正です。node= ノード名 ,position= 出現位置 ,str= 文字列
2桁年号の指定が 1951 ~ 2050 の範囲にありません。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

入力データを確認してください。

KDEC40616-E

小数部桁数の指定が最大桁数を超えています。node= ノード名 ,position= 出現位置 ,str= 小数部
桁数

日付時刻データ型で小数部桁数が 3 桁を超えています。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

入力データを確認してください。

KDEC40618-E

小数部桁数が文字列のサイズより大きいです。node= ノード名 ,position= 出現位置 ,str= 文字列
小数部桁数が文字列のサイズより大きいです。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

入力データを確認してください。

KDEC40701-E

入力バイナリデータの出現回数は指定された値と一致しません。node= ノード名
実際に出現した回数と指定された出現回数が一致しません。

- (S) メッセージを表示して、処理を続行します。
- (O) 入力データを確認してください。

KDEC40702-E

入力バイナリデータの出現回数は指定された最小値より少ないです。node= ノード名
実際に出現した回数が指定された出現回数より少ないです。

- (S) メッセージを表示して、処理を続行します。
- (O) 入力データを確認してください。

KDEC40703-E

入力バイナリデータの出現回数は指定された最大値より多いです。node= ノード名
実際に出現した回数が指定された出現回数より多いです。

- (S) メッセージを表示して、処理を続行します。
- (O) 入力データを確認してください。

KDEC40704-E

指定されているセパレータが出現しません。node= ノード名
データを区切るためのセパレータが出現しません。

- (S) メッセージを表示して、処理を続行します。
- (O) 入力データを確認してください。

KDEC40705-E

指定されている開始文字が出現しません。node= ノード名
指定されている開始文字が出現しません。

- (S) メッセージを表示して、処理を続行します。
- (O) 入力データを確認してください。

KDEC40706-E

指定されている終了文字が出現しません。node= ノード名
指定されている終了文字が出現しません。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

入力データを確認してください。

KDEC40707-E

必要なセパレータが指定されていません。node= ノード名
データを区切るために必要なセパレータが指定されていません。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

フォーマット定義を確認してください。

KDEC40708-E

データがダブルクォーテーションで囲まれていません。node= ノード名
CSV形式時にダブルクォーテーション付与指定ありの場合に、データがダブルクォー
テーションで囲まれていません。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

入力データを確認してください。

KDEC40709-E

開始文字の指定が不正です。node= ノード名 ,separator= 開始文字
開始文字がラテン文字の範囲外です。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

フォーマット定義を確認してください。

KDEC40710-E

中間文字の指定が不正です。node= ノード名 ,separator= 中間文字
中間文字がラテン文字の範囲外です。

- (S) メッセージを表示して、処理を続行します。
- (O) フォーマット定義を確認してください。

KDEC40711-E

終了文字の指定が不正です。node= ノード名,separator= 終了文字
終了文字がラテン文字の範囲外です。

- (S) メッセージを表示して、処理を続行します。
- (O) フォーマット定義を確認してください。

KDEC40712-E

エスケープ文字の指定が不正です。esc= エスケープ文字
エスケープ文字がラテン文字の範囲外です。または2文字以上です。

- (S) メッセージを表示して、処理を続行します。
- (O) フォーマット定義を確認してください。

KDEC40713-E

値検索が失敗しました。property= 変換テーブルのプロパティ名,key= 検索キー
変換テーブルに指定された検索キーが見つかりません。

- (S) メッセージを表示して、処理を続行します。
- (O) 入力データを確認してください。

KDEC40714-E

セパレータが出現しません。property= 変換テーブルのプロパティ名
データを区切るためのセパレータが出現しません。

- (S) メッセージを表示して、処理を続行します。
- (O) 入力データを確認してください。

KDEC40715-E

バイナリデータの入力でエラーが発生しました。error=ByteArrayInputStream.read メソッドのリターンコード ,property= 変換テーブルのプロパティ名

フォーマット定義に対して入力データが短いため、変換途中で入力データが終わりに到達しました。

ByteArrayInputStream.read メソッドのリターンコード

- -1：すでに入力データがない
- 正の整数：入力要求のサイズに対して入力データが短かった場合の入力データのサイズ

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

フォーマット定義または入力データを確認してください。

KDEC40716-E

変換テーブルファイルの読み込み時にエラーが発生しました。property= 変換テーブルのプロパティ名

プロパティに設定されたテーブルファイルが存在しません。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

フォーマット定義を確認してください。

KDEC40717-E

値置換えのパスプロパティがシステムプロパティで指定されていません。property= パスプロパティ名称

システムプロパティに値置換えのパスプロパティが指定されていません。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

システムプロパティファイル (usrconf.properties) の定義を確認してください。

KDEC40718-E

値置換えのコードプロパティがシステムプロパティで指定されていません。property= コードプロパティ名称

システムプロパティに値置換えのコードプロパティが指定されていません。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

- (O) システムプロパティファイル (`usrconf.properties`) の定義を確認してください。

KDEC40719-E

変換テーブルのプロパティ名称が不正です。property= 変換テーブルのプロパティ名
変換テーブルのプロパティ名称が指定されていません。

- (S) メッセージを表示して、処理を続行します。
- (O) フォーマット定義を確認してください。

KDEC40720-E

検索キーが不正です。property= 変換テーブルのプロパティ名
検索キーが指定されていません。

- (S) メッセージを表示して、処理を続行します。
- (O) フォーマット定義を確認してください。

KDEC40721-E

検索キーの位置が不正です。property= 変換テーブルのプロパティ名
検索キーの位置が指定されていません。または予期しない値が指定されています。

- (S) メッセージを表示して、処理を続行します。
- (O) フォーマット定義を確認してください。

KDEC40722-E

デフォルト値が不正です。property= 変換テーブルのプロパティ名
デフォルト値が指定されていません。

- (S) メッセージを表示して、処理を続行します。
- (O) フォーマット定義を確認してください。

KDEC40723-E

検索失敗時の動作フラグが不正です。property= 変換テーブルのプロパティ名

11. メッセージ

検索失敗時の動作フラグが指定されていません。または予期しない値が指定されていません。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

フォーマット定義を確認してください。

KDEC40724-E

最大出現回数が最小出現回数を下回っています。node= ノード名
指定された最大出現回数が最小出現回数より少ないです。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

フォーマット定義を確認してください。

KDEC40725-E

指定された改行コードと異なるセパレータが指定されています。node= ノード名
指定された改行コードと異なる改行が指定されました。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

フォーマット定義を確認してください。

KDEC40726-E

エスケープ文字が存在しません。node= ノード名
CSV形式時にエスケープ文字が指定されていません。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

フォーマット定義を確認してください。

KDEC40727-E

エスケープ文字で終了しています。node= ノード名
最後の文字がエスケープ文字です。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

- (O) フォーマット定義を確認してください。

KDEC40728-E

16 進数ではない値がセパレータに指定されています。node= ノード名
16 進数でない値がセパレータに指定されています。

- (S) メッセージを表示して、処理を続行します。
- (O) フォーマット定義を確認してください。

KDEC40729-E

セパレータタイプが不正です。node= ノード名 ,type= セパレータタイプ
セパレータタイプに string または byte 以外が指定されています。

- (S) メッセージを表示して、処理を続行します。
- (O) フォーマット定義を確認してください。

KDEC40730-E

変換テーブルファイルのサイズがシステムプロパティの指定値を超えました。file size= ファイルサイズ , property= プロパティ指定サイズ

変換テーブルファイルのサイズがシステムプロパティファイルで指定した値を超えました。

- (S) メッセージを表示して、処理を続行します。
- (O) システムプロパティファイル (usrconf.properties) の定義を確認してください。

KDEC40731-E

変換テーブルファイルのサイズの指定が不正です。valueTableSize= ファイルサイズ
変換テーブルファイルのサイズに指定した値が整数値ではありません。

- (S) メッセージを表示して、処理を続行します。
- (O) システムプロパティファイル (usrconf.properties) の定義を確認してください。

KDEC40732-E

余分なセパレータが出現しています。node= ノード名

データを区切るためのセパレータが余分に出現しています。

(S)

メッセージを表示して、処理を続行します。

(O)

入力データを確認してください。

KDEC50000-I

Migration preprocessing will now start. (HCSC server name = HCSC サーバ名)

移行前処理を開始します。

(S)

移行前処理を開始します。

KDEC50001-I

Migration preprocessing was successful. (HCSC server name = HCSC サーバ名)

移行前処理が成功しました。

(S)

移行前処理を終了します。

KDEC50100-I

Creation of component information will now start. (HCSC server name = HCSC サーバ名)

HCSC コンポーネント情報の作成を開始します。

(S)

HCSC コンポーネント情報の作成を開始します。

KDEC50101-I

Component information was created successfully. (HCSC server name = HCSC サーバ名)

HCSC コンポーネント情報の作成が成功しました。

(S)

HCSC コンポーネント情報の作成を終了します。

KDEC50200-I

Migration processing will now start. (HCSC server name = HCSC サーバ名)

移行処理を開始します。

(S)

移行処理を開始します。

KDEC50201-I

Migration processing was successful. (HCSC server name = HCSC サーバ名)

移行処理が成功しました。

(S)

移行処理を終了します。

KDEC50300-I

Initialize of Migration-ID processing will now start. (HCSC server name = HCSC サーバ名,
Migration-ID = 移行 ID)

移行 ID の初期化処理を開始します。

(S)

移行 ID の初期化処理を開始します。

KDEC50301-I

Initialize of Migration-ID processing was successful. (HCSC server name = HCSC サーバ名,
Migration-ID = 移行 ID)

移行 ID の初期化処理が成功しました。

(S)

移行 ID の初期化処理を終了します。

KDEC51000-E

An attempt to execute the J2EE server command has failed. (J2EE server name = J2EE サーバ名,
HCSC server name = HCSC サーバ名, operation = オペレーション名, cause = エラー原因)

J2EE サーバのコマンドの実行に失敗しました。

(S)

メッセージを表示して、処理を終了します。

(O)

オペレーション名に表示されているコマンドの例外の内容を確認してください。

KDEC51001-E

An attempt to acquire the status of the J2EE server has failed. (J2EE server name = J2EE サーバ名,
HCSC server name = HCSC サーバ名, cause = エラー原因)

J2EE サーバの状態の取得に失敗しました。

(S)

メッセージを表示して、処理を終了します。

(O)

状態取得コマンドの例外の内容を確認してください。

KDEC51003-E

The J2EE server has not stopped. (J2EE server name = J2EE サーバ名, HCSC server name = HCSC サーバ名)

J2EE サーバが停止していません。

(S)

メッセージを表示して、処理を終了します。

(O)

J2EE サーバを停止してください。

KDEC51004-E

An attempt to start the J2EE server has failed. (J2EE server name = J2EE サーバ名, HCSC server name = HCSC サーバ名)

J2EE サーバの起動に失敗しました。

(S)

メッセージを表示して、処理を終了します。

(O)

J2EE サーバ起動コマンドの例外の内容を確認してください。

KDEC51005-E

The J2EE server is not running. (J2EE server name = J2EE サーバ名, HCSC server name = HCSC サーバ名)

J2EE サーバが起動していません。

(S)

メッセージを表示して、処理を終了します。

(O)

J2EE サーバを起動してください。

KDEC51006-E

An attempt to stop the J2EE server has failed. (J2EE server name = J2EE サーバ名, HCSC server name = HCSC サーバ名)

J2EE サーバの停止に失敗しました。

(S)

メッセージを表示して、処理を終了します。

(O)

J2EE サーバ停止コマンドの例外の内容を確認してください。

KDEC51007-E

An attempt to switch component EAR files has failed. (HCSC server name = HCSC サーバ名 , componentID = HCSC コンポーネントのサービス ID または受付 ID)

HCSC コンポーネントの EAR ファイルの入れ替えに失敗しました。

(S)

メッセージを表示して、処理を終了します。

(O)

直前に出力しているエラーメッセージを参照してください。

KDEC51008-E

An attempt to switch EAR files for User reception service has failed. (HCSC server name = HCSC サーバ名 , componentID = HCSC コンポーネントのサービス ID または受付 ID)

ユーザ定義受付の EAR ファイルの入れ替えに失敗しました。

(S)

メッセージを表示して、処理を終了します。

(O)

直前に出力しているエラーメッセージを参照してください。

KDEC51009-E

An attempt to update EAR file update information has failed. (HCSC server name = HCSC サーバ名 , componentID = HCSC コンポーネントのサービス ID または受付 ID)

EAR ファイルの情報の更新に失敗しました。

(S)

メッセージを表示して、処理を終了します。

(O)

直前に出力しているエラーメッセージを参照してください。

KDEC51010-E

An attempt to switch HCSC server EAR files has failed. (HCSC server name = HCSC サーバ名 , componentID = HCSC コンポーネントのサービス ID または受付 ID)

HCSC サーバ本体の EAR ファイルの入れ替えに失敗しました。

(S)

メッセージを表示して、処理を終了します。

(O)

直前に出力しているエラーメッセージを参照してください。

KDEC51011-E

The specified JDBC driver type is invalid. (HCSC server name = HCSC サーバ名, driver type = JDBC ドライバ種別)

JDBC ドライバの種別の指定が不正です。

(S)

メッセージを表示して、処理を終了します。

(O)

HCSC サーバセットアップ定義ファイルの JDBC ドライバ種別を確認してください。

KDEC51012-E

The specified JDBC driver type and database type are invalid. (HCSC server name = HCSC サーバ名, driver type = JDBC ドライバ種別, database type = データベース種別)

JDBC ドライバ, およびデータベースの種別の指定が不正です。

(S)

メッセージを表示して、処理を終了します。

(O)

HCSC サーバセットアップ定義ファイルの JDBC ドライバ種別とデータベース種別を確認してください。

KDEC51015-E

An attempt to register the JDBC driver has failed. (HCSC server name = HCSC サーバ名, driver type = JDBC ドライバ種別, cause = エラー原因)

JDBC ドライバの登録に失敗しました。

(S)

メッセージを表示して、処理を終了します。

(O)

例外の内容を確認してください。

KDEC51016-E

An attempt to acquire a connection has failed. (HCSC server name = HCSC サーバ名, driver type = JDBC ドライバ種別, cause = エラー原因)

DB コネクションの取得に失敗しました。

(S)

メッセージを表示して、処理を終了します。

(O)

例外の内容を確認してください。

KDEC51017-E

An attempt to commit the transaction processing has failed. (HCSC server name = HCSC サーバ名, cause = エラー原因)

トランザクション処理のコミットが失敗しました。

(S)

メッセージを表示して、処理を終了します。

(O)

例外の内容を確認してください。

KDEC51018-E

An attempt to roll back the transaction processing has failed. (HCSC server name = HCSC サーバ名, cause = エラー原因)

トランザクション処理のロールバックが失敗しました。

(S)

メッセージを表示して、処理を終了します。

(O)

例外の内容を確認してください。

KDEC51019-E

The database cannot be disconnected from. (HCSC server name = HCSC サーバ名, cause = エラー原因)

データベースとの接続を切断できません。

(S)

メッセージを表示して、処理を終了します。

(O)

例外の内容を確認してください。

KDEC51020-E

An attempt to execute an SQL statement has failed. (HCSC server name = HCSC サーバ名, cause = エラー原因)

SQL の実行に失敗しました。

(S)

メッセージを表示して、処理を終了します。

(O)

例外の内容を確認してください。

KDEC51023-E

An attempt to output the XML file that contains component information failed. (HCSC server name = HCSC サーバ名, path = ファイルパス, cause = エラー原因)

HCSC コンポーネント情報の XML ファイルの出力に失敗しました。

(S)

メッセージを表示して、処理を終了します。

(O)

例外の内容を確認してください。

KDEC51024-E

An attempt to read the file has failed. (HCSC server name = HCSC サーバ名, path = ファイルパス, cause = エラー原因)

ファイル情報の読み込みに失敗しました。

(S)

メッセージを表示して、処理を終了します。

(O)

例外の内容を確認してください。

KDEC51025-E

An attempt to output the file has failed. (HCSC server name = HCSC サーバ名, path = ファイルパス, cause = エラー原因)

ファイルの出力に失敗しました。

(S)

メッセージを表示して、処理を終了します。

(O)

例外の内容を確認してください。

KDEC51027-E

An error occurred during migration preprocessing. (HCSC server name = HCSC サーバ名)

移行前処理でエラーが発生しました。

(S)

メッセージを表示して、処理を終了します。

(O)

直前に出力しているエラーメッセージを参照してください。

KDEC51029-E

An error occurred during setup of the component information. (HCSC server name = HCSC サーバ名)

HCSC コンポーネントの情報設定でエラーが発生しました。

(S)

メッセージを表示して、処理を終了します。

(O)

直前に出力しているエラーメッセージを参照してください。

KDEC51031-E

An error occurred during migration processing. (HCSC server name = HCSC サーバ名)

移行処理でエラーが発生しました。

(S)

メッセージを表示して、処理を終了します。

(O)

直前に出力しているエラーメッセージを参照してください。

KDEC51035-E

The Cosminexus integrated version at the migration source cannot be acquired. (HCSC server name = HCSC サーバ名, cause = エラー原因)

移行元の Cosminexus 統合バージョンが取得できません。

(S)

メッセージを表示して、処理を終了します。

(O)

例外の内容を確認してください。

KDEC51036-E

The volume cannot be migrated. (HCSC server name = HCSC サーバ名, expected version = 期待するバージョン, current version = 現状のバージョン)

移行の対象外です。

(S)

メッセージを表示して、処理を終了します。

(O)

移行元の Cosminexus のバージョンを確認してください。

KDEC51038-E

An attempt to read the setup file has failed. (HCSC server name = HCSC サーバ名, path = ファイルパス)

セットアップファイルの読み込みに失敗しました。

(S)

メッセージを表示して、処理を終了します。

(O)

直前に出力しているエラーメッセージを参照してください。

KDEC51039-E

The database cannot be connected to. (HCSC server name = HCSC サーバ名, cause = エラー原因)

データベースに接続できません。

(S)

メッセージを表示して、処理を終了します。

(O)

例外の内容を確認してください。

KDEC51055-E

The XML document that contains migration information cannot be converted to a DOM. (HCSC server name = HCSC サーバ名, cause = エラー原因)

移行情報の XML ファイルを DOM に変換できません。

(S)

メッセージを表示して、処理を終了します。

(O)

例外の内容を確認してください。

KDEC51056-E

An attempt to modify the version information has failed. (HCSC server name = HCSC サーバ名, cause = エラー原因)

バージョン情報の更新に失敗しました。

(S)

メッセージを表示して、処理を終了します。

(O)

例外の内容を確認してください。

KDEC51057-E

File deletion failed. (HCSC server name = HCSC サーバ名 ,path = ファイルパス , cause = エラー原因)

ファイルの削除に失敗しました。

(S)

メッセージを表示して、処理を終了します。

(O)

例外の内容を確認してください。

KDEC51058-E

An attempt to rename the file has failed. (HCSC server name = HCSC サーバ名 ,path = ファイルパス , cause = エラー原因)

ファイルのリネームに失敗しました。

(S)

メッセージを表示して、処理を終了します。

(O)

例外の内容を確認してください。

KDEC51059-E

An attempt to create a directory has failed. (HCSC server name = HCSC サーバ名 ,path = ディレクトリパス , cause = エラー原因)

ディレクトリの作成に失敗しました。

(S)

メッセージを表示して、処理を終了します。

(O)

例外の内容を確認してください。

KDEC51060-E

The Cosminexus home directory could not be acquired. (HCSC server name = HCSC サーバ名 , cause = エラー原因)

Cosminexus ホームディレクトリが取得できませんでした。

(S)

メッセージを表示して、処理を終了します。

(O)

プロパティファイル、または環境変数の設定内容を確認してください。

KDEC51061-E

The database is running. (HCSC server name = HCSC サーバ名)

データベースが起動しています。

(S)

メッセージを表示して、処理を終了します。

(O)

データベースを停止してください。

KDEC51062-E

The HCSC server is running. (HCSC server name = HCSC サーバ名)

HCSC サーバが起動しています。

(S)

メッセージを表示して、処理を終了します。

(O)

HCSC サーバ名に表示されている HCSC サーバを停止してください。

KDEC51063-E

The HCSC server and requester service are not running. (HCSC server name = HCSC サーバ名)

HCSC サーバおよびリクエストサービスが起動していません。

(S)

メッセージを表示して、処理を終了します。

(O)

HCSC サーバ名に表示されている HCSC サーバ、およびリクエストサービスを起動してください。

KDEC51064-E

The status of HCSC server is invalid. (HCSC server name = HCSC サーバ名, status = HCSC サーバ状態)

HCSC サーバの状態が不正です。

(S)

メッセージを表示して、処理を終了します。

(O)

HCSC サーバ名に表示されている HCSC サーバを停止または起動してください。

KDEC51065-E

The migration processing cannot execute because another migration processing is executing. (HCSC server name = HCSC サーバ名)

ほかの移行処理が実行中のため、移行処理が実行できません。

(S)

メッセージを表示して、処理を終了します。

(O)

ほかの移行処理が実行中のため、実行中の移行処理が終了してからコマンドを再実行してください。

KDEC51900-E

An internal error occurred. (cause = エラー原因)

内部エラーが発生しました。

(S)

メッセージを表示して、処理を終了します。

(O)

保守員に連絡してください。

KDEC51901-E

An internal error occurred. (HCSC server name = HCSC サーバ名, cause = エラー原因)

内部エラーが発生しました。

(S)

メッセージを表示して、処理を終了します。

(O)

保守員に連絡してください。

KDEC51902-E

An input parameter is invalid. (HCSC server name = HCSC サーバ名, parameter = パラメタ値)

入力パラメタが不正です。

(S)

メッセージを表示して、処理を終了します。

(O)

保守員に連絡してください。

11.5 KDEC60000 ~ KDEC79999 のメッセージ

KDEC60000-E

Initialization of the DB adapter has failed. (adapter name = サービスアダプタのサービスID, cause = 原因コード)

DB アダプタの初期化に失敗しました。

サービスアダプタのサービス ID

- 原因コードが 02 の場合：*
- 原因コードが 02 以外の場合：アダプタ名

原因コード	内容
01	定義解析処理に失敗
02	DB アダプタのサービス ID の取得に失敗
03	HCSC サーバ名の取得に失敗
90 ~ 99	そのほか

(S)

処理を中止します。

(O)

Cosminexus 管理者に連絡してください。

対策

原因コードが「01」または「90 ~ 99」の場合は、このメッセージより前に出力されているメッセージを参照して、原因を取り除いてください。それ以外の原因コードの場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC60001-E

An attempt to parse the definition has failed. (adapter name = サービスアダプタのサービス ID, operation name = オペレーション名, cause = 原因コード, information1 = 情報 1, information2 = 情報 2)

定義解析処理に失敗しました。

- オペレーション名：オペレーション名が特定できない場合は表示されません。

原因コード	内容	情報 1	情報 2
01	ファイルの読み込みに失敗	ファイル名	DB アダプタがトラブルシュートで使用する情報です。
02	定義指定値不正	パラメタ名	定義指定値
03	独自定義ファイル名の指定値不正	独自定義ファイルの種別 <ul style="list-style-type: none"> SQL-Operation : SQL オペレーション定義 Application attributes : アプリケーション統合属性ファイル 	なし
04	定義項目不正	パラメタ名	<ul style="list-style-type: none"> 01 : パラメタが存在しない 02 : パラメタが複数存在する 03 : パラメタの値が省略されている
05	標準電文の電文種別に「XML」または「BINARY」以外が指定されました。	パラメタ名 <ul style="list-style-type: none"> input/standard-message/message-type : 要求電文の電文種別 output/standard-message/message-type : 応答電文の電文種別 	定義指定値
06	DB アダプタ電文の電文種別に「XML」以外が指定されました。	パラメタ名 <ul style="list-style-type: none"> input/service-message/message-type : 要求電文の電文種別 output/service-message/message-type : 応答電文の電文種別 	定義指定値

(S)

処理を中止します。

(O)

Cosminexus 管理者に連絡してください。

対策

原因コードによって次のようにしてください。

- 「01」の場合

該当ファイルの有無、アクセス権、ファイルの内容、ファイルサイズ、および別プロセスでの使用を確認してください。また、開発環境で DB アダプタ EAR ファイルを作成し直してください。改善しない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

- 「02」～「06」の場合

11. メッセージ

汎用カスタムアダプタ定義の設定内容を見直して、開発環境で DB アダプタ EAR ファイルを作成し直してください。

KDEC60002-E

A service call was interrupted. (adapter name = サービスアダプタのサービス ID, HCSCCommonID = HCSC メッセージ共通 ID, ServiceRequestID = サービスリクエスト ID, ClientID = クライアント関連 ID, operation name = オペレーション名, cause = 原因コード)
サービス部品処理に失敗しました。

原因コード	内容
90 ~ 99	そのほか

(S)

処理を中止します。

(O)

このメッセージより前に出力されているメッセージを参照して、原因を取り除いてください。

KDEC60003-E

An exception occurred during finish processing for the DB adapter. (adapter name = サービスアダプタのサービス ID, cause = 原因コード)
DB アダプタの終了処理中にエラーが発生しました。

原因コード	内容
90 ~ 99	そのほか

(S)

処理を中止します。

(O)

このメッセージより前に出力されているメッセージを参照して、原因を取り除いてください。

KDEC62000-E

The specified telegram is invalid. (cause = 原因コード, information = 情報)
要求電文が不正です。

原因コード	内容	情報
01	電文の種別不一致	input_telegram type = 指定されたリクエスト電文の種別 defined_telegram type = 定義されている電文の種別 「電文の種別」は次のどれかです。 <ul style="list-style-type: none"> • XML : XML 電文 • BINARY : バイナリ電文 • NONE : サービスリクエストからの要求電文なし
02	オペレーション名が定義されていません。	operationName = 指定されたオペレーション名
03	内部障害が発生しました。	operationName = 指定されたオペレーション名

(S)

処理を中止します。

(O)

Cosminexus 管理者に連絡してください。

対策

原因コードを基に原因を取り除いてください。取り除けない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC62001-E

An attempt to convert a telegram has failed. (cause = 原因コード , information = 情報)

電文の変換に失敗しました。

原因コード	内容	情報
01	データ変換処理で失敗しました。	beforeFormatId = 変換前フォーマット ID afterFormatId = 変換後フォーマット ID
60	要求電文の処理中に異常が発生しました。要求電文の構文不正のおそれがあります。	なし
61	サービスリクエストでリクエストフォーマット ID またはレスポンスフォーマット ID に NULL 以外を指定し、かつ、指定したフォーマット ID に対するデータ変換定義ファイルまたはフォーマット定義ファイルが登録されていません。	beforeFormatId = 変換前フォーマット ID afterFormatId = 変換後フォーマット ID
70 ~ 79	EAR ファイルが不正です。	DB アダプタがトラブルシュートで使用する情報です。
80 ~ 99	内部障害が発生しました。	DB アダプタがトラブルシュートで使用する情報です。

11. メッセージ

(S)

処理を中止します。

(O)

Cosminexus 管理者に連絡してください。

対策

原因コードおよびこれより前に出力されたメッセージを基に、原因を取り除いてください。70 ~ 99 については EAR ファイルを再生成してください。取り除けない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC63000-E

An unsupported telegram was specified. (message type = 電文種別, telegram type = 電文形式)
未サポートの電文形式が指定されました。

電文種別

- REQUEST : 要求電文

電文形式

- BINARY : バイナリ電文
- UNKNOWN : 判断不能

(S)

処理を中止します。

(O)

Cosminexus 管理者に連絡してください。

対策

DB アダプタが対応している電文形式 (XML 電文) を指定して、再度、サービス部品呼び出し要求を実行してください。

KDEC63001-E

The specified telegram is invalid. (cause = 原因コード, information = 情報)
要求電文の内容が不正です。

原因コード	内容	情報	
		単一の SQL 文を実行する場合	複数の SQL 文を実行する場合 ^{1 2}
01	ルート要素名が不正	指定したルート要素名	
02	SQL 識別子名称の要素がない、または SQL 識別子名称の要素が複数存在する	SQL 識別子名称の指定数	SQL 識別子名称の指定数 (位置)
03	SQL オペレーション定義で定義していない SQL 識別子を指定	指定した SQL 識別子名称	指定した SQL 識別子名称 (位置)

原因コード	内容	情報	
		単一の SQL 文を実行する場合	複数の SQL 文を実行する場合 ^{1 2}
04	DBA_IN_DATA 要素が存在しない	なし	SQL 識別子名称 (位置)
05	DBA_MULTI_SQL 要素がない, または上限値を超える数が存在する	-	DBA_MULTI_SQL 要素の指定数
06	DBAdapter 要素下に DBA_MULTI_SQL 以外の要素名の要素が存在する	-	指定した要素名
11	引数要素が不足している	要素名	SQL 識別子名称 . 要素名 (位置)
12	引数要素下に, Text ノード, CDATASection ノード, および Comment ノード以外が存在する	要素名	SQL 識別子名称 . 要素名 (位置)
13	引数要素名が重複している	要素名	SQL 識別子名称 . 要素名 (位置)
14	SQL 識別子名称の要素下に, パラメタ要素および IN パラメタ要素以外の要素を指定している	要素名	SQL 識別子名称 . 要素名 (位置)
21	属性値が不正	要素名 . 属性名 = 属性値	SQL 識別子名称 . 要素名 . 属性名 = 属性値 (位置)

(凡例)

- : 該当しません。

注 1

複数の要素で内容に不正がある場合, 最初に不正を検知した要素に関する情報を出力します。

注 2

位置は, 要求電文の DBA_MULTI_SQL 要素のうち, 該当する DBA_MULTI_SQL 要素の位置を数字で示します。位置の先頭は 1 から始まります。

(S)

処理を中止します。

(O)

Cosminexus 管理者に連絡してください。

対策

原因コードを基にサービス部品呼び出し時の処理を見直して, 再度, サービス部品呼び出し要求を実行してください。

KDEC63002-E

The telegram operation failed. (cause = 原因コード, information = 情報)

11. メッセージ

電文の操作に失敗しました。

原因コード	内容	情報
01	電文の取得に失敗しました。	DB アダプタがトラブルシュー トで使用する情報です。
02	電文の設定に失敗しました。	DB アダプタがトラブルシュー トで使用する情報です。
11	電文の操作中に DOM 障害が発 生しました。	DB アダプタがトラブルシュー トで使用する情報です。

(S)

処理を中止します。

(O)

Cosminexus 管理者に連絡してください。

対策

このメッセージより前に出力されているメッセージを参照して、原因を取り除いてください。取り除けない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC64000-E

An I/O error occurred. (file name = エラーが発生したファイル名, reason = エラーの原因)
I/O エラーが発生しました。

(S)

処理を中止します。

(O)

Cosminexus 管理者に連絡してください。

対策

該当ファイルの有無、アクセス権、および別プロセスでの使用を確認してください。
対策ができない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC64001-E

The SQL operation definition file is not a well-formed XML document.

SQL オペレーション定義ファイルが整形 XML 文書ではありません。

(S)

処理を中止します。

(O)

Cosminexus 管理者に連絡してください。

対策

SQL オペレーション定義ファイルの内容を見直して、開発環境で DB アダプタ EAR

ファイルを作成し直してください。

KDEC64002-E

SQL operation definition file error: The name of the root element is invalid.

SQL オペレーション定義ファイルの形式不正があります。ルート要素の名称が <DBadapter_SQL_OPERATION> ではありません。

(S)

処理を中止します。

(O)

Cosminexus 管理者に連絡してください。

対策

SQL オペレーション定義ファイルの内容を見直して、開発環境で DB アダプタ EAR ファイルを作成し直してください。

KDEC64003-E

SQL operation definition file error: The element has an invalid node. (element = 形式不正を検知した要素名, error type = エラー種別)

SQL オペレーション定義ファイルの形式不正があります。不正ノードが存在します。

エラー種別

- 01 : 異常な属性が存在します。
- 02 : 該当する要素下に異常なノードが存在します。

(S)

処理を中止します。

(O)

Cosminexus 管理者に連絡してください。

対策

SQL オペレーション定義ファイルの内容を見直して、開発環境で DB アダプタ EAR ファイルを作成し直してください。

KDEC64004-E

SQL operation definition file error: The format of an element name is incorrect. (element = 形式不正を検知した要素名, error type = 不正のある要素が従う名称形式種別)

SQL オペレーション定義ファイルの形式不正があります。名称形式に誤りのある要素が存在します。設定した名称の文字数が 256 より大きい場合、SQL 識別子名称に「DBadapter」または「DBA_MULTI_SQL」を指定した場合に出力されます。

形式不正を検知した要素名

- 要素名が取得できる場合：形式不正を検知した要素名
- 要素名が取得できない場合：*

不正のある要素が従う名称形式種別

- 01 : SQL 識別子名称形式 (文字数が 256 より大きい場合)
- 02 : 引数要素名称形式 (文字数が 256 より大きい場合)
- 03 : SQL 識別子名称形式 (名称に「DBadapter」または「DBA_MULTI_SQL」を指定した場合)

(S)

処理を中止します。

(O)

Cosminexus 管理者に連絡してください。

対策

SQL オペレーション定義ファイルの内容を見直して、開発環境で DB アダプタ EAR ファイルを作成し直してください。

KDEC64005-E

SQL operation definition file error: An element was duplicated. (element = 形式不正を検知した要素名, duplicated element = 重複する要素名)

SQL オペレーション定義ファイルの形式不正があります。

形式不正を検知した要素名

- 要素名が取得できる場合 : 形式不正を検知した要素名
- 要素名が取得できない場合 : *

(S)

処理を中止します。

(O)

Cosminexus 管理者に連絡してください。

対策

SQL オペレーション定義ファイルの内容を見直して、開発環境で DB アダプタ EAR ファイルを作成し直してください。

KDEC64006-E

SQL operation definition file error: A required element could not be found. (element = 形式不正を検知した要素名, required element = 必須の要素名)

SQL オペレーション定義ファイルの形式不正があります。必須となる要素がありません。

必須の要素名

- SQL 識別子の場合 : SQL_ID

(S)

処理を中止します。

(O)

Cosminexus 管理者に連絡してください。

対策

SQL オペレーション定義ファイルの内容を見直して、開発環境で DB アダプタ EAR ファイルを作成し直してください。

KDEC64007-E

SQL operation definition file error: An invalid value for an element or attribute was detected.

(element = 形式不正を検知した要素名, attribute = 形式不正を検知した属性名, cause = 不正要因)

SQL オペレーション定義ファイルの形式不正があります。要素, または属性の設定値に異常を検知しました。

形式不正を検知した要素名

- 要素名が取得できる場合: 形式不正を検知した要素名
- 属性値異常または要素名が取得できない場合: *

形式不正を検知した属性名

- 要素の設定値が正常な場合: 形式不正を検知した属性名
- 要素の設定値が異常な場合: *

不正要因

- 01: DB 種別ではありません。
- 02: Y, N の形式ではありません。
- 03: SQL 命令ではありません。
- 04: 数字以外の文字, または int 型の範囲外の数値です。
- 05: 設定できる範囲外の数字です。
- 06: 空要素になっています。

(S)

処理を中止します。

(O)

Cosminexus 管理者に連絡してください。

対策

SQL オペレーション定義ファイルの内容を見直して、開発環境で DB アダプタ EAR ファイルを作成し直してください。

KDEC64008-E

SQL operation definition file error: A required attribute for a parameter element was not found. (SQL ID = 不正を検知した SQL 識別子名称, parameter element = 不正を検知した引数要素名称, required attribute = 必須の属性名)

SQL オペレーション定義ファイルの形式不正があります。引数要素に必須となる属性が

ありません。

不正を検知した SQL 識別子名称

- SQL 識別子名称が取得できる場合：不正を検知した SQL 識別子名称
- SQL 識別子名称が取得できない場合：*

不正を検知した引数要素名称

- 引数要素名称が取得できる場合：不正を検知した引数要素名称
- 引数要素名称が取得できない場合：*

(S)

処理を中止します。

(O)

Cosminexus 管理者に連絡してください。

対策

SQL オペレーション定義ファイルの内容を見直して、開発環境で DB アダプタ EAR ファイルを作成し直してください。

KDEC64009-E

SQL operation definition file error: An invalid value for a parameter element or attribute was detected. (SQL ID = 不正を検知した SQL 識別子名称, parameter element = 不正を検知した引数要素名称, attribute = 形式不正を検知した属性名, cause = 不正要因)

SQL オペレーション定義ファイルの形式不正があります。引数要素の要素, または属性の設定値に異常を検知しました。

不正を検知した SQL 識別子名称

- SQL 識別子名称が取得できる場合：不正を検知した SQL 識別子名称
- SQL 識別子名称が取得できない場合：*

不正を検知した引数要素名称

- 引数要素名称が取得できる場合：不正を検知した引数要素名称
- 引数要素名称が取得できない場合：*

形式不正を検知した属性名

- Cause の値が 03, 04, または 05 の場合：*
- 上記以外の場合：形式不正を検知した属性名

不正要因

- 01 : dba_inf で指定できない文字列です。
- 02 : data_type で指定できない文字列です。
- 03 : 異常な属性が存在します。
- 04 : 異常なノードが存在します。
- 05 : 重複する引数要素の属性値が一致していません。

(S)
処理を中止します。

(O)
Cosminexus 管理者に連絡してください。

対策

SQL オペレーション定義ファイルの内容を見直して、開発環境で DB アダプタ EAR ファイルを作成し直してください。

KDEC64010-E

A DOM error occurred during an attempt to acquire SQL operation definition file information. (class = クラス名, method = メソッド名, element = エラーが発生した要素名, attribute = エラーが発生した属性名, error code = エラーコード)

SQL オペレーション定義ファイル情報取得時に DOM エラーが発生しました。

エラーが発生した要素名

- 要素名が取得できる場合：エラーが発生した要素名
- 属性でエラーが発生、または要素名が取得できない場合：*

エラーが発生した属性

- 要素でエラーが発生していない場合：エラーが発生した属性
- 要素でエラーが発生した場合：*

(S)
処理を中止します。

(O)
Cosminexus 管理者に連絡してください。

対策

ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC64011-E

An invalid value is specified for an encoding declaration in the SQL operation definition file.

SQL オペレーション定義ファイルの encoding 宣言に無効な値が指定されています。

(S)
処理を中止します。

(O)
Cosminexus 管理者に連絡してください。

対策

SQL オペレーション定義ファイルの内容を見直して、開発環境で DB アダプタ EAR ファイルを作成し直してください。

KDEC64012-E

The message file was not found.

メッセージファイルが見つかりません。

(S)

処理を中止します。

(O)

Cosminexus 管理者に連絡してください。

対策

ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC66000-E

An attempt to connect to the database has failed. (DataSource name = データベース参照名, error information = DBMS 固有のエラーメッセージ, SQL state = SQL 状態, error code = SQL コード)

データベースとのコネクションの確立に失敗しました。

SQL 状態

- HiRDB の場合: SQLSTATE
- Oracle の場合: SQL 状態を示すコード
- 取得できない場合: *

SQL コード

- HiRDB の場合: SQLCODE
- Oracle の場合: ORA 番号

(S)

処理を中止します。

(O)

Cosminexus 管理者に連絡してください。

対策

このメッセージ, および DBMS のエラー情報を基に障害の原因を取り除いてください。取り除けない場合は, ログ・トレースを採取し, 保守員に連絡してください。

KDEC66001-E

An attempt to close a connection to the database has failed. (DataSource name = データベース参照名, error information = DBMS 固有のエラーメッセージ, SQL state = SQL 状態, error code = SQL コード)

データベースとのコネクションの切断に失敗しました。

SQL 状態

- HiRDB の場合: SQLSTATE
- Oracle の場合: SQL 状態を示すコード

- 取得できない場合：*

SQL コード

- HiRDB の場合：SQLCODE
- Oracle の場合：ORA 番号

(S)

処理を中止します。

(O)

Cosminexus 管理者に連絡してください。

対策

このメッセージ、および DBMS のエラー情報を基に障害の原因を取り除いてください。取り除けない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC66002-E

An attempt to acquire a data source has failed. (DataSource name = データベース参照名)
データベースリソースの取得に失敗しました。

(S)

処理を中止します。

(O)

Cosminexus 管理者に連絡してください。

対策

アプリケーション統合属性ファイルの <res-ref-name> 要素と、SQL オペレーション定義ファイルの <DB_NAME> 要素の値が一致しているか見直してください。対策ができない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC66003-E

An SQL statement has a syntax error. (DataSource name = データベース参照名, SQL ID = SQL 識別子名称, error information = DBMS 固有のエラーメッセージ, SQL state = SQL 状態, error code = SQL コード)

SQL 文の構文不正によって、SQL 文の実行に失敗しました。検索結果に Cosminexus DB Connector が使用する JDBC ドライバで未サポートのデータ型を含む SQL 文を指定している、または DB にアクセスできない場合にも出力されます。

複数の SQL 文を実行する場合、最初に検知したエラーに関する情報を出力します。

SQL 識別子名称

単一の SQL 文を実行する場合	複数の SQL 文を実行する場合
SQL 識別子名称	SQL 識別子名称 (位置)

11. メッセージ

注

位置は、要求電文の DBA_MULTI_SQL 要素のうち、該当する DBA_MULTI_SQL 要素の位置を数字で示します。位置の先頭は 1 から始まります。

SQL 状態

- HiRDB の場合：SQLSTATE
- Oracle の場合：SQL 状態を示すコード
- 取得できない場合：*

SQL コード

- HiRDB の場合：SQLCODE
- Oracle の場合：ORA 番号

(S)

処理を中止します。

(O)

Cosminexus 管理者に連絡してください。

対策

- エラーの原因が SQL 文の構文不正の場合
このメッセージ、および DBMS のエラー情報を基に障害の原因を取り除いてください。
- エラーの原因が SQL 文の構文不正以外の場合
このメッセージ、および DBMS のエラー情報を基に障害の原因を取り除いてください。取り除けない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC66004-E

An attempt to access the database has failed. (DataSource name = データベース参照名, SQL ID = SQL 識別子名称, error information = DBMS 固有のエラーメッセージ, SQL state = SQL 状態, error code = SQL コード)

DB アクセスに失敗しました。

複数の SQL 文を実行する場合、最初に検知したエラーに関する情報を出力します。

SQL 識別子名称

単一の SQL 文を実行する場合	複数の SQL 文を実行する場合
SQL 識別子名称	SQL 識別子名称 (位置)

注

位置は、要求電文の DBA_MULTI_SQL 要素のうち、該当する DBA_MULTI_SQL 要素の位置を数字で示します。位置の先頭は 1 から始まります。

SQL 状態

- HiRDB の場合：SQLSTATE

- Oracle の場合：SQL 状態を示すコード
- 取得できない場合：*

SQL コード

- HiRDB の場合：SQLCODE
- Oracle の場合：ORA 番号

(S)

処理を中止します。

(O)

Cosminexus 管理者に連絡してください。

対策

このメッセージ、および DBMS のエラー情報を基に障害の原因を取り除いてください。取り除けない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC66005-E

At least one unsupported data type is present in the search results. (DataSource name = データベース参照名, SQL ID = SQL 識別子名称, table name = 表名, column name = 列名 (列番号), data type = データベース固有の型名)

検索結果に DB アダプタで未サポートのデータ型があります。検索結果に DB アダプタで未サポートのデータ型が複数存在する場合、最初に検知した未サポートのデータ型の情報を出力します。

複数の SQL 文を実行する場合、最初に検知したエラーに関する情報を出力します。

SQL 識別子名称

単一の SQL 文を実行する場合	複数の SQL 文を実行する場合
SQL 識別子名称	SQL 識別子名称 (位置)

注

位置は、要求電文の DBA_MULTI_SQL 要素のうち、該当する DBA_MULTI_SQL 要素の位置を数字で示します。位置の先頭は 1 から始まります。

表名

- 表名が取得できる場合：表名
- 表名が取得できない場合：*

列名

- 列名が取得できる場合：列名
- 列名が取得できない場合：*

データベース固有の型名

- データベース固有の型名が取得できる場合：ResultSetMetaData クラスの getColumnTypeName で取得したデータベース固有の型名

11. メッセージ

- データベース固有の型名が取得できない場合：*

(S)

処理を中止します。

(O)

Cosminexus 管理者に連絡してください。

対策

データ型で示される型の値が検索結果に含まれないように、実行する SQL 文を見直してください。

KDEC66006-E

The format of the parameter element value is invalid. (SQL ID = SQL 識別子名称, parameter element = 引数要素名称, data type = SQL オペレーション定義ファイルの属性 data_type の値)

引数要素の値の形式不正を検知しました。

複数の SQL 文を実行する場合、最初に検知したエラーに関する情報を出力します。

SQL 識別子名称

単一の SQL 文を実行する場合	複数の SQL 文を実行する場合
SQL 識別子名称	SQL 識別子名称 (位置)

注

位置は、要求電文の DBA_MULTI_SQL 要素のうち、該当する DBA_MULTI_SQL 要素の位置を数字で示します。位置の先頭は 1 から始まります。

(S)

処理を中止します。

(O)

Cosminexus 管理者に連絡してください。

対策

引数要素の値の形式が、SQL オペレーション定義ファイルの属性 data_type で指定した型と一致しているか見直してください。

KDEC66007-E

An attempt to set the IN parameter has failed. (DataSource name = データベース参照名, SQL ID = SQL 識別子名称, parameter element = 引数要素名称, data type = SQL オペレーション定義ファイルの属性 data_type の値, error information = DBMS 固有のエラーメッセージ, SQL state = SQL 状態, error code = SQL コード)

IN パラメタの設定に失敗しました。

複数の SQL 文を実行する場合、最初に検知したエラーに関する情報を出力します。

SQL 識別子名称

単一の SQL 文を実行する場合	複数の SQL 文を実行する場合
SQL 識別子名称	SQL 識別子名称 (位置)

注

位置は、要求電文の DBA_MULTI_SQL 要素のうち、該当する DBA_MULTI_SQL 要素の位置を数字で示します。位置の先頭は 1 から始まります。

SQL 状態

- HiRDB の場合：SQLSTATE
- Oracle の場合：SQL 状態を示すコード
- 取得できない場合：*

SQL コード

- HiRDB の場合：SQLCODE
- Oracle の場合：ORA 番号

(S)

処理を中止します。

(O)

Cosminexus 管理者に連絡してください。

対策

SQL オペレーション定義ファイルの属性 data_type の値が、データベースのデータ型に対応する値と一致しているか見直してください。一致している場合は、このメッセージ、および DBMS のエラー情報を基に障害の原因を取り除いてください。取り除けない場合は、ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC68000-I

The XML schema file was created successfully. (command = コマンド名, file name = XML スキーマファイル名)

XML スキーマファイルの作成が完了しました。

(S)

コマンドを終了します。

KDEC68001-E

Usage: csamkxmls -o <SQL operation definition file> -x <XML schema file> [-f]

指定したオプションやオプション引数が不正な場合に出力されます。このメッセージを参照してコマンドを実行し直してください。

KDEC68002-E

The specified option parameter is invalid. (command = コマンド名, option = 不正な引数名)

指定したオプション引数が正しくありません。

(S)

処理を中止します。

(O)

このあとに出力されるヘルプメッセージを参照してコマンドを再実行してください。

KDEC68003-E

A required option was not specified. (command = コマンド名)

必要なオプションがありません。-o オプション, または -x オプションがない場合に出力されます。

(S)

処理を中止します。

(O)

このあとに出力されるヘルプメッセージを参照してコマンドを再実行してください。

KDEC68004-E

The specified file was not found. (command = コマンド名, file name = 指定したファイル名)

指定したファイルが見つかりません。指定した SQL オペレーション定義ファイルが見つからない場合に出力されます。

(S)

処理を中止します。

(O)

SQL オペレーション定義ファイル名, およびパス名を確認してコマンドを再実行してください。

KDEC68005-E

The specified file already exists. (command = コマンド名, file name = 指定したファイル名)

指定したファイルはすでに存在しています。指定した XML スキーマファイルがすでに存在しており, かつ -f オプションを指定しなかった場合に出力されます。

(S)

処理を中止します。

(O)

別の XML スキーマファイルを指定するか, -f オプションを指定してコマンドを再実行してください。

KDEC68006-E

The user does not have permission to access the specified file. (command = コマンド名, file name = 指定したファイル名, permission = 必要とするアクセス権)

指定したファイルに対するアクセス権がありません。指定した XML ファイルに書き込み権限がない場合 (-f オプション指定), または指定した SQL オペレーション定義ファイルに読み込み権限がない場合に出力されます。

(S)

処理を中止します。

(O)

ファイルに必要な権限を追加してコマンドを再実行してください。

KDEC68007-E

An invalid file was specified. (command = コマンド名, file name = 指定したファイル名)

不正なファイルを指定しました。拡張子が .xml, .xsd 以外のファイルを指定した場合, または隠しファイルを指定した場合に出力されます。

(S)

処理を中止します。

(O)

ファイル名およびパス名を確認してコマンドを再実行してください。

KDEC68008-E

The specified file name is invalid. (command = コマンド名, file name = 指定したファイル名)

ファイル名が不正です。
以下の条件のどれかの場合に出力されます。

- SQL オペレーション定義ファイルが, csa_sql_ で始まる名前ではない。
- XML スキーマファイル名 (絶対パス) の長さが 200 バイトより大きい。
- XML スキーマファイル名にファイル名として使用できない文字が含まれている。

(S)

処理を中止します。

(O)

ファイル名を確認してコマンドを再実行してください。

KDEC68009-E

The message file was not found.

メッセージファイルが見つかりません。

(S)

処理を中止します。

11. メッセージ

(O)

Cosminexus 管理者に連絡してください。

対策

このメッセージ以降に出力される例外情報を採取し、保守員に連絡してください。

KDEC68010-E

The command cannot be executed because you do not have administrator privileges.

管理者特権がないため、コマンドを実行できません。

(S)

処理を中止します。

(O)

管理者として実行したコマンドプロンプト上で、再度コマンドを実行してください。

KDEC68011-E

An error occurred while the permissions were being checked.

権限の判定中にエラーが発生しました。

(S)

処理を中止します。

(O)

メモリが不足している可能性があります。空きメモリを増やしたあと、再度コマンドを実行してください。

問題が解決しない場合は、保守員に連絡してください。

KDEC68020-E

The SQL operation definition file is not a well-formed XML document. (command = コマンド名)

SQL オペレーション定義ファイルが整形 XML 文書ではありません。

(S)

処理を中止します。

(O)

SQL オペレーション定義ファイルの内容を見直してください。

KDEC68021-E

SQL operation definition file error: The name of the root element is invalid.

SQL オペレーション定義ファイルの形式不正があります。ルート要素の名称が <DBadapter_SQL_OPERATION> ではありません。

(S)

処理を中止します。

(O)

SQL オペレーション定義ファイルの内容を見直してください。

KDEC68022-E

SQL operation definition file error: The element has an invalid node. (element = 形式不正を検知した要素名, error type = エラー種別)

SQL オペレーション定義ファイルの形式不正があります。不正ノードが存在します。

エラー種別

- 01 : 異常な属性が存在します。
- 02 : 該当する要素下に異常なノードが存在します。

(S)

処理を中止します。

(O)

SQL オペレーション定義ファイルの内容を見直してください。

KDEC68023-E

SQL operation definition file error: The format of an element name is incorrect. (element = 形式不正を検知した要素名, error type = 不正のある要素が従う名称形式種別)

SQL オペレーション定義ファイルの形式不正があります。名称形式に誤りのある要素が存在します。設定した名称の文字数が 256 より大きい場合, SQL 識別子名称に「DBadapter」または「DBA_MULTI_SQL」を指定した場合に出力されます。

形式不正を検知した要素名

- 要素名が取得できる場合 : 形式不正を検知した要素名
- 要素名が取得できない場合 : *

不正のある要素が従う名称形式種別

- 01 : SQL 識別子名称形式 (文字数が 256 より大きい場合)
- 02 : 引数要素名称形式 (文字数が 256 より大きい場合)
- 03 : SQL 識別子名称形式 (名称に「DBadapter」または「DBA_MULTI_SQL」を指定した場合)

(S)

処理を中止します。

(O)

SQL オペレーション定義ファイルの内容を見直してください。

KDEC68024-E

SQL operation definition file error: An element was duplicated. (element = 形式不正を検知した要素名, duplicated element = 重複する要素名)

SQL オペレーション定義ファイルの形式不正があります。重複する要素が存在します。

形式不正を検知した要素名

- 要素名が取得できる場合：形式不正を検知した要素名
- 要素名が取得できない場合：*

(S)

処理を中止します。

(O)

SQL オペレーション定義ファイルの内容を見直してください。

KDEC68025-E

SQL operation definition file error: A required element could not be found. (element = 形式不正を検知した要素名, required element = 必須の要素名)

SQL オペレーション定義ファイルの形式不正があります。必須となる要素がありません。

必須の要素名

- SQL 識別子の場合：SQL_ID

(S)

処理を中止します。

(O)

SQL オペレーション定義ファイルの内容を見直してください。

KDEC68026-E

SQL operation definition file error: An invalid value for an element or attribute was detected.

(element = 形式不正を検知した要素名, attribute = 形式不正を検知した属性名, cause = 不正要因)

SQL オペレーション定義ファイルの形式不正があります。要素, または属性の設定値に異常を検知しました。

形式不正を検知した要素名

- 要素名が取得できる場合：形式不正を検知した要素名
- 属性値異常または要素名が取得できない場合：*

形式不正を検知した属性名

- 要素の設定値が正常な場合：形式不正を検知した属性名
- 要素の設定値が異常な場合：*

不正要因

- 01：DB 種別ではありません。
- 02：Y, N の形式ではありません。
- 03：SQL 命令ではありません。
- 04：数字以外の文字, または int 型の範囲外の数値です。

- 05 : 設定できる範囲外の数字です。
- 06 : 空要素になっています。

(S)

処理を中止します。

(O)

SQL オペレーション定義ファイルの内容を見直してください。

KDEC68027-E

SQL operation definition file error: A required attribute for a parameter element was not found. (SQL ID = 不正を検知した SQL 識別子名称, parameter element = 不正を検知した引数要素名称, required attribute = 必須の属性名)

SQL オペレーション定義ファイルの形式不正があります。引数要素に必須となる属性がありません。

不正を検知した SQL 識別子名称

- SQL 識別子名称が取得できる場合 : 不正を検知した SQL 識別子名称
- SQL 識別子名称が取得できない場合 : *

不正を検知した引数要素名称

- 引数要素名称が取得できる場合 : 不正を検知した引数要素名称
- 引数要素名称が取得できない場合 : *

(S)

処理を中止します。

(O)

SQL オペレーション定義ファイルの内容を見直してください。

KDEC68028-E

SQL operation definition file error: An invalid value for a parameter element or attribute was detected. (SQL ID = 不正を検知した SQL 識別子名称, parameter element = 不正を検知した引数要素名称, attribute = 形式不正を検知した属性名, cause = 不正要因)

SQL オペレーション定義ファイルの形式不正があります。引数要素の要素, または属性の設定値に異常を検知しました。

不正を検知した SQL 識別子名称

- SQL 識別子名称が取得できる場合 : 不正を検知した SQL 識別子名称
- SQL 識別子名称が取得できない場合 : *

不正を検知した引数要素名称

- 引数要素名称が取得できない場合 : 不正を検知した引数要素名称
- 引数要素名称が取得できない場合 : *

11. メッセージ

形式不正を検知した属性名

- Cause の値が 03, 04, または 05 の場合：*
- 上記以外の場合：形式不正を検知した属性名

不正要因

- 01：dba_inf で指定できない文字列です。
- 02：data_type で指定できない文字列です。
- 03：異常な属性が存在します。
- 04：異常なノードが存在します。
- 05：重複する引数要素の属性値が一致していません。

(S)

処理を中止します。

(O)

SQL オペレーション定義ファイルの内容を見直してください。

KDEC68029-E

A DOM error occurred during an attempt to acquire SQL operation definition file information. (class = クラス名, method = メソッド名, element = エラーが発生した要素名, attribute = エラーが発生した属性名, error code = エラーコード)

SQL オペレーション定義ファイル情報取得時に DOM エラーが発生しました。

エラーが発生した要素名

- 要素名が取得できる場合：エラーが発生した要素名
- 属性でエラーが発生, または要素名が取得できない場合：*

エラーが発生した属性名

- 要素でエラーが発生していない場合：エラーが発生した属性名
- 要素でエラーが発生している場合：*

(S)

処理を中止します。

(O)

Cosminexus 管理者に連絡してください。

対策

このメッセージ以降に出力される例外情報を採取し、保守員に連絡してください。

KDEC68030-E

An I/O error occurred. (command = コマンド名, file name = エラーが発生したファイル名, cause = エラーの原因)

I/O エラーが発生しました。

(S)

処理を中止します。

(O)

該当ファイルの有無，アクセス権，および別プロセスでの使用を確認してください。

KDEC68031-E

An internal error occurred in during XML analysis. (class = クラス名, method = メソッド名, information = 詳細情報, error code = エラーコード)

XML 解析時に内部エラーが発生しました。

(S)

処理を中止します。

(O)

Cosminexus 管理者に連絡してください。

対策

このメッセージ以降に出力される例外情報を採取し，保守員に連絡してください。

KDEC68032-E

An invalid value is specified for an encoding declaration in the SQL operation definition file. (command = コマンド名)

SQL オペレーション定義ファイルの encoding 宣言に無効な値が指定されています。

(S)

処理を中止します。

(O)

SQL オペレーション定義ファイルの内容を見直してください。

KDEC68099-E

An internal error occurred during command execution. (class = クラス名, method = メソッド名, information = 詳細情報, exception = 発生例外名)

コマンド実行時内部エラーが発生しました。csamkxmls コマンド実行時，XML スキーマファイルが作成された場合は破棄してください。

クラス名

- クラス名が取得できる場合：クラス名
- クラス名が取得できない場合：*

メソッド名

- メソッド名が取得できる場合：メソッド名
- メソッド名が取得できない場合：*

詳細情報

11. メッセージ

- 詳細情報が取得できる場合：詳細情報
- 詳細情報が取得できない場合：*

発生例外名

- 該当する例外名がある場合：発生例外名
- 該当する例外名がない場合：*

(S)

処理を中止します。

(O)

Cosminexus 管理者に連絡してください。

対策

このメッセージ以降に出力される例外情報を採取し、保守員に連絡してください。

KDEC70002-E

The message file was not found.

メッセージファイルが見つかりません。

(S)

処理を中止します。

(O)

Cosminexus 管理者に連絡してください。

対策

保守員に連絡してください。

KDEC70003-W

Initialization of the method trace writer failed. (cause = エラーの原因 , error location = エラーの発生した場所)

メソッドトレースの初期化処理に失敗しました。

(S)

メソッドトレースを出力しない状態で処理を継続します。

(O)

Cosminexus 管理者に連絡してください。

対策

ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC70004-W

An attempt to close the method trace writer failed. (cause = エラーの原因 , error location = エラーの発生した場所)

メソッドトレースの終了処理に失敗しました。

(S)

メソッドトレースの終了処理を継続します。

(O)

Cosminexus 管理者に連絡してください。

対策

ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

KDEC79000-E

An internal error occurred. (class = クラス名, method = メソッド名, maintenance information = 保守情報)

内部エラーが発生しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

Cosminexus 管理者に連絡してください。

対策

ログ・トレースを採取し、保守員に連絡してください。

11.6 KEOS50000 ~ KEOS59999 のメッセージ

11.6.1 KEOS50000 ~ KEOS50999

KEOS50000-E

コマンド引数の構文が不正です。コマンド引数 =[不正な引数]

The command argument syntax is invalid. (command argument = 不正な引数)

コマンド引数の構文が不正です。

(S)

処理を停止します。

(O)

コマンド引数を見直してください。

KEOS50002-E

認証に失敗しました。ユーザ =[認証失敗時のユーザ ID]

Authentication failed. (user = 認証失敗時のユーザ ID)

HSCS-Manager による認証に失敗しました。

(S)

処理を停止します。

(O)

HSCS-Manager へのログインユーザ ID , ログインパスワードを確認してください。

KEOS50003-E

認証に失敗しました。マネージャ識別名 =[接続先のマネージャ識別名] ホスト名 =[接続先のホスト名または IP アドレス] ポート番号 =[接続先のポート番号] ユーザ =[認証失敗時のユーザ ID] 詳細情報 =[詳細情報]

Authentication failed. (Cosminexus Manager name = 接続先のマネージャ識別名 , host = 接続先のホスト名または IP アドレス , port = 接続先のポート番号 , user = 認証失敗時のユーザ ID, details = 詳細情報)

Manager のリモート管理機能による認証に失敗しました。

(S)

処理を停止します。

(O)

Manager のリモート管理機能へのログインユーザ ID , ログインパスワードを確認

してください。必要に応じて、cscpasswd コマンドでユーザ ID、パスワードを変更してください。

KEOS50004-E

接続に失敗しました。マネージャ識別名 =[接続先のマネージャ識別名] ホスト名 =[接続先のホスト名または IP アドレス] ポート番号 =[接続先のポート番号] ユーザ =[認証失敗時のユーザ ID] 詳細情報 =[詳細情報]

The connection failed. (Cosminexus Manager name = 接続先のマネージャ識別名, host = 接続先のホスト名または IP アドレス, port = 接続先のポート番号, user = 認証失敗時のユーザ ID, details = 詳細情報)

Manager のリモート管理機能への接続に失敗しました。

(S)

処理を停止します。

(O)

Manager のリモート管理機能が指定のホスト名 (または IP アドレス) : ポート番号で起動されているか確認してください。

KEOS50005-E

オブジェクト名のフォーマットが不正です。マネージャ識別名 =[マネージャ識別名] オブジェクト名 =[オブジェクト名] 詳細情報 =[詳細情報]

The format of the object name is invalid. (Cosminexus Manager name = マネージャ識別名, object name = オブジェクト名, details = 詳細情報)

オブジェクト名のフォーマットが不正です。

(S)

処理を停止します。

(O)

cscutil コマンドの target 引数の値 (フォーマット) を確認してください。

KEOS50006-E

オブジェクトが見つかりません。マネージャ識別名 =[マネージャ識別名] オブジェクト名 =[オブジェクト名] 詳細情報 =[詳細情報]

The object was not found. (Cosminexus Manager name = マネージャ識別名, object name = オブジェクト名, details = 詳細情報)

オブジェクトが見つかりません。

(S)

処理を停止します。

11. メッセージ

(O)

csutil コマンドの target 引数の値 (内容) の確認, および HCSC サーバ環境を見直してください。

KEOS50007-E

オペレーション実行中にエラーが発生しました。マネージャ識別名 =[マネージャ識別名] オブジェクト名 =[オブジェクト名] オペレーション =[オペレーション] 詳細情報 =[詳細情報]

An exception occurred during the operation. (Cosminexus Manager name = マネージャ識別名, object name = オブジェクト名, operation = オペレーション, details = 詳細情報)

オペレーション実行中にエラーが発生しました。

(S)

処理を停止します。

(O)

詳細情報を基に原因を取り除き, 再度実行してください。なお, 詳細メッセージに含まれるメッセージ ID が警告レベルのときは, 処理が完了しているおそれがあります。詳細メッセージを見て問題が解決しない場合は, Management Server の統合メッセージログ, および J2EE サーバのメッセージログを参照して, 問題を解決してください。

KEOS50008-E

通信障害が発生しました。マネージャ識別名 =[マネージャ識別名] 詳細情報 =[詳細情報]

A communication error occurred. (Cosminexus Manager name = マネージャ識別名, details = 詳細情報)

通信障害が発生しました。

(S)

処理を停止します。

(O)

ネットワークを見直し, 再度実行してください。

KEOS50009-E

ファイルのアクセスに失敗しました。詳細情報 =[詳細情報]

File access failed. (details = 詳細情報)

ファイルのアクセスに失敗しました。

(S)

処理を停止します。

(O)

詳細情報を基に原因を取り除き, 再度実行してください。

KEOS50010-E

XML ファイルの読み込みに失敗しました。詳細情報 =[詳細情報]

An attempt to read an XML file has failed. (details = 詳細情報)

リポジトリまたはユーザ定義の読み込みに失敗しました。

(S)

処理を停止します。

(O)

詳細情報を基に原因を取り除き、再度実行してください。

KEOS50011-E

XML ファイルの書き込みに失敗しました。詳細情報 =[詳細情報]

An attempt to write an XML file has failed. (details = 詳細情報)

リポジトリまたはユーザ定義の書き込みに失敗しました。

(S)

処理を停止します。

(O)

詳細情報を基に原因を取り除き、再度実行してください。

KEOS50012-E

情報が見つかりませんでした。識別名 =[識別名]

The information was not found. (id = 識別名)

リポジトリまたはユーザ定義から指定された識別名に対応する情報が見つかりませんでした。

(S)

処理を停止します。

(O)

識別名を基にコマンド引数内容または引数定義内容を見直し、再度実行してください。

KEOS50013-E

リポジトリのインポート途中でエラーが発生しました。

An error occurred while importing the repository.

リポジトリのインポート途中でエラーが発生しました。

(S)

処理を終了します。

11. メッセージ

(O)

リポジトリルートに指定したパスが長過ぎないか見直してください。
コマンド、画面で行っている処理をすべて停止してください。例外ログを参照し、
エラーの要因を取り除いてください。その後、システム管理者に連絡してください。

KEOS50014-E

環境が不正です。

The environment is invalid.

環境が不正（環境変数 COSMINEXUS_HOME が見つからない）です。正規の方法で
Cosminexus をインストールしてください。

(S)

処理を停止します。

(O)

環境変数を見直してください。

KEOS50015-E

オペレーションが見つかりません。マネージャ識別名=[マネージャ識別名] オブジェクト名 =[
オブジェクト名] オペレーション =[オペレーション] 詳細情報 =[詳細情報]

An operation was not found. (Cosminexus Manager name = マネージャ識別名 , object name = オ
ブジェクト名 , operation = オペレーション , details = 詳細情報)

オペレーションが見つかりません。

(S)

処理を停止します。

(O)

cscutil コマンドの operation 引数の値（内容）を確認してください。

KEOS50016-E

排他資源の取得に失敗しました。排他資源は使用中です。

An attempt to acquire a lock resource has failed. The lock resource is being used.

他プロセスで排他資源を使用中です。

(S)

処理を停止します。

(O)

排他資源を使用中のプロセスが終了したら再度実行してください。

KEOS50017-E

指定した ZIP ファイル名が不正です。ファイル名 =[ZIP ファイル名]

The specified ZIP file name is invalid. (file name = ZIP ファイル名)

指定した ZIP ファイル名が不正です。

(S)

処理を停止します。

(O)

-import オプションや -export オプションに指定したオプション値を確認してください。

KEOS50018-E

コンポーネントのステータスが不正です。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名] コンポーネント種別 =[コンポーネント種別] コンポーネント名 =[コンポーネント名] 期待しているステータス =[コンポーネントの予期しているステータス] ステータス =[コンポーネントの現状のステータス]

The component status is invalid. (HCSC-Server name = HCSC サーバ名 , component type = コンポーネント種別 , component name = コンポーネント名 , expected status = コンポーネントの予期しているステータス , current status = コンポーネントの現状のステータス)

コンポーネントのステータスが不正です。

コンポーネント種別

- bp : ビジネスプロセス
- adapter : サービスアダプタ
- urcptn : ユーザ定義受付

コンポーネントの現状のステータス

- deployed : デプロイ状態
- active : 起動状態
- inactive : 停止状態
- deleted : 未配備状態

(S)

処理を停止します。

(O)

コンポーネントのステータスを一致させてから再度実行してください

KEOS50019-I

HCSC サーバへ通信しコンポーネントの配備を開始します。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名] コンポーネント種別 =[配備するコンポーネント種別] コンポーネント名 =[配備するコンポーネント名]

11. メッセージ

Communication with the HCSC-Server, for component deployment, will now start. (HCSC-Server name = HCSC サーバ名 , component type = 配備するコンポーネント種別 , component name = 配備するコンポーネント名)

コンポーネントを配備します。

配備するコンポーネント種別

- bp : ビジネスプロセス
- adapter : サービスアダプタ
- ureptn : ユーザ定義受付

(S)

処理を続行します。

KEOS50020-I

HCSC サーバへのコンポーネントの配備が終了しました。

Component distribution to HCSC-Server has ended.

コンポーネントを配備しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS50021-I

HCSC サーバへ通信しコンポーネントの削除を開始します。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名]
コンポーネント種別 =[削除するコンポーネント種別] コンポーネント名 =[削除するコンポーネント名]

Communication with the HCSC-Server, for component deletion, will now start. (HCSC-Server name = HCSC サーバ名 , component type = 削除するコンポーネント種別 , component name = 削除するコンポーネント名)

コンポーネントを削除します。

削除するコンポーネント種別

- bp : ビジネスプロセス
- adapter : サービスアダプタ
- ureptn : ユーザ定義受付

(S)

処理を続行します。

KEOS50022-I

HCSC サーバからのコンポーネントの削除が終了しました。

Communication with the HCSC-Server and component deletion have ended.

コンポーネントを削除しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS50023-I

コンポーネントのステータスチェックが開始されました。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名] コンポーネント種別 =[コンポーネント種別] コンポーネント名 =[コンポーネント名] ステータス =[予期しているステータス]

Checking of the component status has started. (HCSC-Server name = HCSC サーバ名 , component type = コンポーネント種別 , component name = コンポーネント名 , component status = 予期しているステータス)

指定したコンポーネントのステータスを確認します。

コンポーネント種別

- bp : ビジネスプロセス
- adapter : サービスアダプタ
- urcptn : ユーザ定義受付

予期しているステータス

- deployed : デプロイ状態
- active : 起動状態
- inactive : 停止状態
- deleted : 未配備状態

(S)

処理を続行します。

KEOS50024-I

コンポーネントのステータスチェックが終了しました。

Checking of the component status ended.

指定したコンポーネントのステータスを確認しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS50025-W

すでに連携アンセットアップされています。連携元 HCSC サーバ名 =[連携元 HCSC サーバ名] 連携先クラスタ名 =[連携先クラスタ名]

Linkage unsetup has already been performed. (name of HCSC-Server at linkage source = 連携元 HCSC サーバ名 , name of cluster at linkage destination = 連携先クラスタ名)

すでに連携がアンセットアップされています。

11. メッセージ

(S)

処理を終了します。

(O)

指定した HCSC サーバ名, クラスタ名を確認してください。また, 連携セットアップが正常終了したかどうか確認してください。

KEOS50026-E

プロパティファイルの定義値の検証でエラーが発生しました。キー名称 =[キー名] 指定値 =[指定された値] エラー種別 =[エラー種別]

An error occurred while checking defined values in the property file. (key name = キー名 , value = 指定された値 , error type = エラー種別)

プロパティファイルの定義値の検証でエラーが発生しました。

エラー種別

- NO_KEY : 必須プロパティが指定されていません。
- BAD_KEY : 不正なキーが指定されています。
- INVALID_VALUE : キー値が不正です。

(S)

処理を終了します。

(O)

仕様を確認し, 再度実施してください。

KEOS50027-E

リポジトリのバージョンが不正です。詳細情報 =[詳細情報]

The version of the repository is invalid. (details = 詳細情報)

リポジトリのバージョンが不正です。

(S)

処理を中断します。

(O)

リポジトリが正しいかどうかを確認し, 再度実行してください。

KEOS50028-I

HCSC サーバがセットアップされているか確認します。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名]

The program will now confirm that the HCSC-Server is set up. (HCSC-Server name = HCSC サーバ名)

HCSC サーバがセットアップされているか確認します。

(S)

処理を続行します。

KEOS50029-I

HCSC サーバがセットアップされていることを確認しました。

The program has confirmed that the HCSC-Server is set up.

HCSC サーバがセットアップされていることを確認しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS50030-I

HCSC サーバ状態取得のために HCSC サーバに通信を行います。サーバ名 =[CSC サーバ名]

Communication with the HCSC-Server, to acquire the HCSC-Server status, will now start.

(HCSC-Server name = CSC サーバ名)

HCSC サーバ状態取得のために HCSC サーバに通信を行います。

(S)

処理を続行します。

KEOS50031-I

HCSC サーバに通信を行い、HCSC サーバの情報取得が完了しました。

Communication with the HCSC-Server and acquisition of the HCSC-Server information are complete.

HCSC サーバに通信を行い、HCSC サーバの情報取得が完了しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS50032-E

指定されたコンポーネントは連携しているシステムですすでに配備されています。コンポーネント名称 =[コンポーネント名] HCSC サーバ名 =[CSC サーバ名]

The component is already deployed in connected system. (component name = コンポーネント名, HCSC-Server name = CSC サーバ名)

指定されたコンポーネントは連携しているシステムですすでに配備されています。

(S)

処理を終了します。

(O)

連携アンセットアップを行うか、コンポーネントを削除して再度実行してください。

KEOS50033-E

ZIP ファイルの形式が不正です。詳細情報 =[指定した Zip ファイル名]

11. メッセージ

The ZIP file format is invalid. (details = 指定した Zip ファイル名)

指定した ZIP ファイルが不正です。

(S)

処理を中断します。

(O)

正しい CSC-Manager 環境バックアップファイルを指定してください。

KEOS50034-E

リポジトリにクラスタが見つかりません。クラスタ名 =[見つからないクラスタ名]

The cluster was not found in the repository. (cluster name = 見つからないクラスタ名)

リポジトリにクラスタが見つかりません。

(S)

処理を終了します。

(O)

指定したクラスタ名称が正しいかどうか確認してください。また、セットアップコマンドが正常終了しているかどうか確認してください。

KEOS50035-I

HCSC サーバの状態を確認します。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名] ステータス =[期待しているステータス]

The program is checking the HCSC-Server status. (HCSC-Server name = HCSC サーバ名 , status = 期待しているステータス)

HCSC サーバのステータスを確認します。

期待しているステータス

- active : 起動状態
- inactive : 停止状態
- starting : 起動処理中
- startfailed : 起動失敗状態
- stopping : 停止処理中
- stopfailed : 停止失敗状態

(S)

処理を続行します。

KEOS50036-I

HCSC サーバの状態を確認しました。

The HCSC-Server status has been checked.

HCSC サーバのステータスを確認しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS50037-E

HCSC サーバの状態が不正です。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名] 期待しているステータス =[予期しているステータス] ステータス =[HCSC サーバの現状のステータス]

The HCSC-Server status is invalid. (HCSC-Server name = HCSC サーバ名 , expected status = 予期しているステータス , current status = HCSC サーバの現状のステータス)

HCSC サーバのステータスが不正です。

HCSC サーバの現状のステータス

- active : 起動状態
- inactive : 停止状態
- starting : 起動処理中
- startfailed : 起動失敗状態
- stopping : 停止処理中
- stopfailed : 停止失敗状態

(S)

処理を終了します。

(O)

HCSC サーバのステータスを一致させてください。

KEOS50038-I

HCSC サーバのアンセットアップを開始します。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名]

Unsetup of the HCSC-Server will now start. (HCSC-Server name = HCSC サーバ名)

HCSC サーバのアンセットアップを行います。

(S)

処理を続行します

KEOS50039-I

HCSC サーバのアンセットアップに成功しました。

Unsetup of the HCSC-Server was successful.

HCSC サーバのアンセットアップが完了しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS50040-I

HCSC-Manager へのログイン処理を開始します。

11. メッセージ

Logging in to HCSC-Manager will now start.

HCSC-Manager へのログイン処理を開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS50041-I

HCSC-Manager へのログイン処理が完了しました。

The user has logged in to HCSC-Manager.

HCSC-Manager へのログイン処理が完了しました。

(S)

処理を終了します。

KEOS50042-E

リポジトリに HCSC サーバが見つかりません。HCSC サーバ名 =[見つからない HCSC サーバ名]

An HCSC-Server was not found in the repository. (HCSC-Server name = 見つからない HCSC サーバ名)

リポジトリに HCSC サーバが見つかりません。

(S)

処理を終了します。

(O)

指定した CSC サーバ名称が正しいかどうか確認してください。またセットアップコマンドが正常終了しているか確認してください。

KEOS50043-I

HCSC サーバのセットアップを開始します。クラスタ名称 =[クラスタ名] HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名] 初期セットアップ =[初期セットアップを判別するフラグ]

Setup of the HCSC-Server will now start. (cluster name = クラスタ名 , HCSC-Server name = HCSC サーバ名 , initial setup = 初期セットアップを判別するフラグ)

HCSC サーバのセットアップを行います。

初期セットアップを判別するフラグ

- true : 初期セットアップ
- false : 追加セットアップ

(S)

処理を続行します

KEOS50044-I

HCSC サーバのセットアップに成功しました。

Setup of the HCSC-Server was successful.

HCSC サーバのセットアップが完了しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS50045-I

システム構成定義ファイルの読み込みを開始します。

Loading of the system configuration definition file will now start.

リポジトリの読み込みを実行します。

(S)

処理を続行します。

KEOS50046-I

システム構成定義ファイルの読み込みに成功しました。

Loading of the system configuration definition file was successful.

リポジトリの読み込みが完了しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS50047-E

システム構成定義ファイルが見つかりません。

The system configuration definition file was not found.

システム構成定義ファイルが見つかりません。

(S)

処理を終了します。

(O)

セットアップコマンドが正常終了しているかどうか確認してください。

KEOS50048-I

プロセス間排他を実行します。種別 =[排他の種類]

An inter-process lock will now be executed. (type = 排他の種類)

プロセス間排他を実行します。

排他の種類

- EXCLUSIVE : 排他ロック
- SHARED : 共有ロック

11. メッセージ

(S)

処理を続行します。

KEOS50049-I

プロセス間排他に成功しました。

The inter-process lock was successful.

プロセス間排他を正常に実行しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS50050-I

プロセス間排他を解除します。

The inter-process lock was released.

プロセス間排他を解除します。

(S)

処理を続行します。

KEOS50051-I

プロセス間排他の解除に成功しました。

The inter-process lock was successfully released.

プロセス間排他解除が正常に完了しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS50052-I

リポジトリのバックアップを開始します。

The repository will now be backed up.

リポジトリのバックアップを実行します。

(S)

処理を続行します。

KEOS50053-I

リポジトリのバックアップに成功しました。

The repository was successfully backed up.

リポジトリのバックアップが完了しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS50054-I

リポジトリの書き込みを開始します。

Writing of repository information will now start.

リポジトリの書き込みを実行します。

(S)

処理を続行します。

KEOS50055-I

リポジトリの書き込みに成功しました。

Writing of repository information was successful.

リポジトリの書き込みが完了しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS50056-E

ファイルのバックアップに失敗しました。

File backup failed.

ファイルのバックアップに失敗しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

cscsvsetup , cscconsetup , csccomposetup , cscpasswd , cscconunsetup ,
csccompounsetup の場合 :

エラーの要因を調査・対策し、再度処理を実施してください。

cscsvunsetup の場合 :

エラーの原因を調査・対策し、-force オプションを付与して再度処理を実施し
てください。

KEOS50057-I

コンポーネントの情報取得のために HCSC サーバに通信を行います。サーバ名=[HCSC サーバ名] 種別 =[情報取得するコンポーネント種別]

Communication with the HCSC-Server, to acquire component information, will now start.

(HCSC-Server name = HCSC サーバ名, component type = 情報取得するコンポーネント種別)

コンポーネントの情報取得のために HCSC サーバに通信を行います。

情報取得するコンポーネント種別

- bp : ビジネスプロセス
- adapter : サービスアダプタ

11. メッセージ

- urecptn : ユーザ定義受付

(S)

処理を続行します。

KEOS50058-I

HCSC サーバに通信を行い、コンポーネントの情報取得が完了しました。

Communication with the HCSC-Server and acquisition of component information are complete.

HCSC サーバに通信を行い、コンポーネントの情報取得が完了しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS50059-E

リポジトリ情報にコンポーネントが見つかりません。クラスタ名 =[クラスタ名] 名称 =[コンポーネント名]

The component was not found in the repository information. (cluster name = クラスタ名 , component name = コンポーネント名)

リポジトリ情報からコンポーネント情報を取得できません。

(S)

処理を停止します。

(O)

クラスタ名、コンポーネント名称を確認し、再度実施してください。

KEOS50062-I

ユーザ情報を変更します。変更対象 =[対象]

User information will now be changed. (target = 対象)

ユーザ情報を変更します。

対象

- HCSC-Manager : HCSC-Manager
- Cosminexus Manager : Cosminexus Management-Server
- HCSC-Server : HCSC サーバ

(S)

処理を続行します。

KEOS50063-I

ユーザ情報を変更しました。変更対象 =[対象]

User information has been changed. (target = 対象)

ユーザ情報を変更しました。

対象

- HCSC-Manager : HCSC-Manager
- Cosminexus Manager : Cosminexus Management-Server
- HCSC-Server : HCSC サーバ

(S)

処理を続行します。

KEOS50064-I

リポジトリ情報からコンポーネント情報を取得します。サーバ名 =[HCSC サーバ名] 名称 =[コンポーネント名]

Component information will now be acquired from the repository. (HCSC-Server name = HCSC サーバ名, component name = コンポーネント名)

リポジトリ情報からコンポーネント情報を取得します。

(S)

処理を続行します。

KEOS50065-I

リポジトリ情報からコンポーネント情報を取得しました。

Component information has been acquired from the repository.

リポジトリ情報からコンポーネント情報を取得しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS50066-E

リポジトリ情報にコンポーネントが見つかりません。サーバ名 =[HCSC サーバ名] 名称 =[コンポーネント名]

The component was not found in the repository. (HCSC-Server name = HCSC サーバ名, component name = コンポーネント名)

リポジトリ情報からコンポーネント情報を取得できません。

(S)

処理を停止します。

(O)

HCSC サーバ名, コンポーネント名称を確認し, 再度実施してください。

KEOS50067-E

再実行したプロセスインスタンスからの、応答電文のファイル出力に失敗しました。出力先ディレクトリ=[出力先ディレクトリ]出力ファイル名=[出力ファイル名]出力エンコード=[出力エンコーディング]

Failed in the file output of the response from the process re-executed. (output directory = 出力先ディレクトリ, output file name = 出力ファイル名, output encoding = 出力エンコーディング)

再実行したプロセスインスタンスからの、応答電文のファイル出力に失敗しました。

(S)

出力処理を終了します。

(O)

存在するディレクトリ, エンコードを指定しているか確認してください。

KEOS50068-I

再実行したプロセスインスタンスからの応答電文は存在しません。BP 定義名=[ビジネスプロセス定義名]プロセスインスタンス ID=[プロセスインスタンス ID]

A response telegram from the re-executed process instance does not exist. (business process definition name = ビジネスプロセス定義名, process instance ID = プロセスインスタンス ID)

再実行したプロセスインスタンスからの応答電文は存在しませんでした。

(S)

再実行処理を続行します。

KEOS50069-I

再実行したプロセスインスタンスからの応答電文をファイル出力しました。出力先ディレクトリ=[出力先ディレクトリ]出力ファイル名=[出力ファイル名]出力エンコード=[出力エンコーディング]

A response telegram from the re-executed process instance was output normally. (output directory = 出力先ディレクトリ, output file name = 出力ファイル名, output encoding = 出力エンコーディング)

再実行したプロセスインスタンスからの応答電文をファイルに出力しました。

(S)

再実行処理を続行します。

KEOS50070-I

HCSC サーバに通信し連携のセットアップ処理を行います。連携元 HCSC サーバ名=[連携元 HCSC サーバ名]連携先クラスタ名=[連携先クラスタ名]

Communication with the HCSC-Server, to set up linkage, will now start. (HCSC-Server name = 連携元 HCSC サーバ名, connect cluster name = 連携先クラスタ名)

HCSC サーバに通信し HCSC サーバ間連携のセットアップ処理を実行します。

(S)

処理を続行します。

KEOS50071-I

HCSC サーバに通信し HCSC サーバ間連携のセットアップが正常終了しました。

Communication with the HCSC-Server and setup of linkage between HCSC-Servers ended normally.

HCSC サーバに通信し HCSC サーバ間連携のセットアップが正常終了しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS50072-I

SOAP フォルト情報を取得しました。BP 定義名 =[ビジネスプロセス定義名] プロセスインスタンス ID =[プロセスインスタンス ID] フォルトコード =[フォルトコード] フォルト文字列 =[フォルト文字列] フォルト生成者 =[フォルト生成者]

SOAP Fault information has been acquired. (business process definition name = ビジネスプロセス定義名 , process instance ID = プロセスインスタンス ID, FaultCode = フォルトコード , FaultString = フォルト文字列 , FaultActor = フォルト生成者)

再実行中に SOAP フォルトが発生し、その詳細情報を取得しました。

(S)

再実行処理を続行します。

KEOS50073-E

サービス情報の読み込み中にエラーが発生しました。

An error occurred while the service information was being read.

サービス情報の読み込み中にエラーが発生しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

メッセージログでエラーの要因を調査し、対策してください。対策後に再度コマンドを実行してください。

KEOS50074-I

HCSC サーバに通信し HCSC サーバ間連携のアンセットアップ処理を行います。連携元 HCSC サーバ名 =[連携元 HCSC サーバ名] 連携先クラスタ名 =[連携先クラスタ名]

11. メッセージ

Communication with the HCSC-Server, for unsetup of the linkage between HCSC-Servers, will now start. (HCSC-Server name = 連携元 HCSC サーバ名 , connect cluster name = 連携先 HCSC クラスタ名)

HCSC サーバに通信し HCSC サーバ間連携のアンセットアップ処理を実行します。

(S)

処理を続行します。

KEOS50075-I

HCSC サーバに通信し HCSC サーバ間連携のアンセットアップが正常終了しました。

Communication with the HCSC-Server and unsetup of linkage between HCSC-Servers ended normally.

HCSC サーバに通信し HCSC サーバ間連携のアンセットアップが正常終了しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS50076-E

リポジトリ情報にアクセスできません。

Repository information cannot be accessed.

リポジトリ情報にアクセスできません。

(S)

処理を中断します。

(O)

リポジトリルートへのパスが正しいかどうか確認してください。また、HCSC サーバがセットアップされているか確認してください。

KEOS50077-E

指定した ZIP ファイルが不正です。ファイル名 =[ZIP ファイル名]

The specified zip file is invalid. (file name = ZIP ファイル名)

指定した ZIP ファイルが不正です。

(S)

処理を中断します。

(O)

指定した ZIP ファイルが存在しているかどうか、ファイルであるかどうか、読み込みできるかどうかを確認し、再度実行してください。

KEOS50079-I

ユーザ情報のバックアップを開始します。

User information will now be backed up.

ユーザ情報のバックアップを開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS50080-I

ユーザ情報のバックアップが完了しました。

The backup of user information is complete.

ユーザ情報のバックアップが完了しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS50081-I

ユーザ情報の書き込みを開始します。

Writing of user information will now start.

ユーザ情報の書き込みを開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS50082-I

ユーザ情報の書き込みが完了しました。

Writing of user information is complete.

ユーザ情報の書き込みが完了しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS50083-I

Cosminexus Manager とのコネクション確立を開始します。接続先ホスト = 接続するホストの IP アドレス : 接続するホストのポート番号

A connection with Cosminexus Manager will now be established. (host to be connected = 接続するホストの IP アドレス : 接続するホストのポート番号)

Cosminexus Manager とのコネクション確立を開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS50084-I

Cosminexus Manager とのコネクション確立が完了しました。

11. メッセージ

A connection with Cosminexus Manager has been established.

Cosminexus Manager とのコネクション確立が完了しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS50085-I

ZIP ファイルからリポジトリ情報の読み込みを開始します。ファイル名=[ZIP ファイル名]

Repository information will now be loaded from the zip file. (file name = ZIP ファイル名)

ZIP ファイルからリポジトリ情報の読み込みを開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS50086-I

ZIP ファイルからのリポジトリ情報の読み込みが正常に完了しました。

Loading of repository information from the zip file is complete.

ZIP ファイルからのリポジトリ情報の読み込みが正常に完了しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS50087-I

アカウント認証を開始します。user=[ログインするユーザ ID]

Account check is started. (user = ログインするユーザ ID)

アカウント認証を開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS50088-I

アカウント認証に成功しました。

Account check was finished normally.

アカウント認証に成功しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS50089-I

HCSC-Manager からのログアウト処理を開始します。user=[ログアウトするユーザ ID]

The user is logging out from HCSC-Manager. (user = ログアウトするユーザ ID)

HCSC-Manager からのログアウト処理を開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS50090-I

HCSC-Manager からのログアウト処理が完了しました。

The user has logged out from HCSC-Manager.

HCSC-Manager からのログアウト処理が完了しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS50091-E

ユーザ情報から指定された情報が見つかりません。種別 =[種別] 名称 =[見つからなかった情報名]

The specified user information was not found. (type = 種別 , name = 見つからなかった情報名)

ユーザ情報から指定された名称が見つかりません。

種別

- Cosminexus Manager : Cosminexus Manager 情報
- HCSC-Server : HCSC サーバ情報

(S)

処理を中断します。

(O)

指定した名称が正しいか確認してください。指定した名称が正しい場合 , HCSC サーバのセットアップが正常終了しているか確認してください。

KEOS50092-E

同一クラスタ内であるため , 連携情報を追加できません。連携元 HCSC サーバ名 =[連携元 HCSC サーバ名] 連携先クラスタ名 =[連携先クラスタ名]

The linkage information cannot be added because it is within the same cluster. (name of HCSC-Server at linkage source = 連携元 HCSC サーバ名 , name of cluster at linkage destination = 連携先クラスタ名)

同一クラスタ内であるため , 連携情報を追加できません。

(S)

処理を中断します。

(O)

指定した名称が正しいか確認してください。

KEOS50093-I

クラスタがセットアップされているかどうか確認します。名称 =[クラスタ名]

The program is checking whether the cluster is set up. (cluster name = クラスタ名)

クラスタがセットアップされているかどうか確認します。

(S)

処理を続行します。

KEOS50094-I

クラスタがセットアップされているかどうか確認しました。

The program is checking whether cluster has been set up.

クラスタがセットアップされているかどうか確認しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS50095-E

クラスタがリポジトリに存在しません。名称 =[クラスタ名]

A cluster does not exist in the repository. (cluster name = クラスタ名)

クラスタがリポジトリに存在しません。

(S)

処理を中断します。

(O)

指定した名称が正しいか確認してください。指定した名称が正しい場合、HCSC
サーバのセットアップが正常終了しているか確認してください。

KEOS50096-E

接続タイムアウトが発生しました。マネージャ識別名 =[接続先のマネージャ識別名] ホスト名
=[接続先のホスト名または IP アドレス] ポート番号 =[接続先のポート番号] ユーザ =[ユーザ
ID] 詳細情報 =[詳細情報]

A connection timeout occurred. (Cosminexus Manager name = 接続先のマネージャ識別名, host
= 接続先のホスト名または IP アドレス, port = 接続先のポート番号, user = ユーザ ID, details =
詳細情報)

接続タイムアウトが発生しました。

(S)

処理を中断します。

(O)

ネットワークを見直し、再度実行してください。

KEOS50097-E

読み込みタイムアウトが発生しました。マネージャ識別名 =[接続先のマネージャ識別名] 詳細 =[詳細情報]

A read timeout occurred. (Cosminexus Manager name = 接続先のマネージャ識別名 , details = 詳細情報)

読み込みタイムアウトが発生しました。

(S)

処理を中断します。

(O)

ネットワークと通信タイムアウト定義 ([cscmng.properties]cscmng.manager.< マネージャ識別名 >.timeout) を見直し , 再度実行してください。

KEOS50098-E

コンポーネント名称が重複しています。コンポーネント名称 =[コンポーネント名] クラスタ名 =[クラスタ名] クラスタ名称 =[クラスタ名]

A component name is duplicated. (component name = コンポーネント名 , cluster name = クラスタ名 , cluster name = クラスタ名)

コンポーネントが重複しています。

(S)

処理を中断します。

(O)

重複しているコンポーネントを削除してください。または , 連携サービスをアンセットアップしてください。

KEOS50099-I

指定した連携情報のステータスを確認します。サーバ名称 =[HCSC サーバ名] 連携先クラスタ名 =[連携先クラスタ名] 期待しているステータス =[期待しているステータス]

The status of the specified linkage information will now be checked. (HCSC-Server name = HCSC サーバ名 , name of the cluster at the connection destination = 連携先クラスタ名 , status = 期待しているステータス)

指定した連携情報のステータスを確認します。

期待しているステータス

- CONNECT : 接続状態
- ONLINE : 連携開始状態
- OFFLINE : 連携停止状態
- ONLINE_WAIT : 連携開始要求の応答待ち状態
- OFFLINE_WAIT : 連携終了要求の応答待ち状態

11. メッセージ

- IO_ERROR：連携開始時障害時の終了応答待ち状態
- SERVICE_STOP：連携閉塞状態
- DISCONNECT：切断状態

(S)

処理を続行します。

KEOS50100-I

指定した連携情報のステータスを確認しました。

The status of the specified linkage information has been checked.

指定した連携情報のステータスを確認しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS50101-E

連携情報のステータスが不正です。サーバ名称 =[HCSC サーバ名] 連携先クラスタ名称 =[連携先クラスタ名] ステータス =[連携情報の予期しているステータス] ステータス =[連携情報の現在のステータス]

The linkage information status is invalid. (HCSC-Server name = HCSC サーバ名, name of the connection destination cluster = 連携先クラスタ名, expected status = 連携情報の予期しているステータス, current status = 連携情報の現在のステータス)

連携情報のステータスが不正です。

連携情報の現在のステータス

- CONNECT：接続状態
- ONLINE：連携開始状態
- OFFLINE：連携停止状態
- ONLINE_WAIT：連携開始要求の応答待ち状態
- OFFLINE_WAIT：連携終了要求の応答待ち状態
- IO_ERROR：連携開始時障害時の終了応答待ち状態
- SERVICE_STOP：連携閉塞状態
- DISCONNECT：切断状態

(S)

処理を停止します。

(O)

連携情報のステータスを一致させてから再度実行してください。

KEOS50102-E

セットアップ情報が不正です。

The setup information is invalid.

セットアップ情報が不正です。

(S)

処理を停止します。

(O)

直前に実施したセットアップ、アンセットアップ、配備、削除コマンドが正常終了しているかどうか確認してください。

KEOS50103-E

セットアップ情報のロードでエラーが発生しました。詳細情報 =[エラーの詳細情報]

An error occurred during loading of setup information. (details = エラーの詳細情報)

セットアップ情報のロードでエラーが発生しました。

(S)

処理を停止します。

(O)

エラーの詳細情報を参照し、対策をし、再度実行してください。

KEOS50104-E

セットアップ情報の更新でエラーが発生しました。詳細情報 =[エラーの詳細情報]

An error occurred during updating of setup information. (details = エラーの詳細情報)

セットアップ情報の更新でエラーが発生しました。

(S)

処理を停止します。

(O)

実行環境とのアンマッチが発生しているおそれがあります。HCSC-Manager の処理をすべて停止し、保守員に連絡してください。

KEOS50105-I

セットアップ情報のバックアップを行います。

Setup information will now be backed up.

セットアップ情報のバックアップを実行します。

(S)

処理を続行します。

KEOS50106-I

セットアップ情報のバックアップが完了しました。

The backup of setup information is complete.

11. メッセージ

セットアップ情報のバックアップが完了しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS50107-I

セットアップ情報の書き込みを行います

Writing of setup information will now start.

リポジトリの書き込みを実行します。

(S)

処理を続行します。

KEOS50108-I

セットアップ情報の書き込みが完了しました。

Writing of setup information is complete.

リポジトリの書き込みが完了しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS50109-E

クラスタがセットアップ情報に存在しません。名称 =[クラスタ名]

A cluster does not exist in the setup information. (cluster name = クラスタ名)

クラスタがセットアップ情報に存在しません。

(S)

処理を停止します。

(O)

指定した名称が正しいか確認してください。指定した名称が正しい場合、HCSC
サーバのセットアップが正常終了しているか確認してください。

KEOS50110-E

HCSC サーバがセットアップ情報に存在しません。サーバ名 =[HCSC サーバ名]

An HCSC-Server does not exist in the setup information. (HCSC-Server name = HCSC サーバ名)

HCSC サーバがセットアップ情報に存在しません。

(S)

処理を停止します。

(O)

指定した名称が正しいか確認してください。指定した名称が正しい場合、HCSC
サーバのセットアップが正常終了しているか確認してください。

KEOS50111-E

リポジトリインポート実行時にリポジトリが存在しません。

The repository did not exist when the repository import operation was executed.

インポートを実行する時にリポジトリが存在しません。

(S)

処理を停止します。

(O)

セットアップを実施してリポジトリ作成してから実行してください。

KEOS50112-I

ユーザ情報を読み込みます。

User information will now be loaded.

ユーザ情報を読み込みます。

(S)

処理を続行します。

KEOS50113-I

ユーザ情報の読み込みを完了しました。

Loading of user information is complete.

ユーザ定義の読み込みが完了しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS50114-E

リポジトリインポート時のバックアップに失敗しました。詳細情報 =[エラーの詳細情報]

Backup failed during import of the repository. (details = エラーの詳細情報)

リポジトリインポート時のバックアップに失敗しました。

(S)

処理を停止します。

(O)

エラーの要因を調査し、対策してください。対策後に再度コマンドを実行してください。エラーの要因として主に次が考えられます。

1. ディレクトリのパーミッションが存在しない
2. ディレクトリ階層が深い

KEOS50115-E

HCSC サーバ構築定義ファイルの検証でエラーが発生しました。HCSC サーバ構築定義ファイル名 =[HCSC サーバ構築定義ファイル名]

An error occurred during checking of the HCSC-Server configuration definition file. (file name = HCSC サーバ構築定義ファイル名)

HCSC サーバ構築定義ファイルの検証でエラーが発生しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

KEOS52142-E メッセージを参照し、対策してください。

KEOS50116-I

HCSC サーバへ通信しランタイム定義の設定処理を開始します。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名] HCSC サーバランタイム定義ファイル名 =[HCSC サーバランタイム定義ファイル名]

Communication with the HCSC-Server, to set the HCSC-Server runtime definition, will now start. (HCSC-Server name = HCSC サーバ名, HCSC-Server runtime definition file name = HCSC サーバランタイム定義ファイル名)

HCSC サーバのランタイム定義の設定処理を開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS50117-I

ランタイム定義の設定処理を終了します。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名]

Setup of the runtime definition has ended. (HCSC-Server name = HCSC サーバ名)

HCSC サーバのランタイム定義の設定処理を終了します。

(S)

処理を続行します。

KEOS50118-I

HCSC サーバへ通信しランタイム定義の取得処理を開始します。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名]

Communication with the HCSC-Server, to acquire the HCSC-Server runtime definition, will now start. (HCSC-Server name = HCSC サーバ名)

HCSC サーバのランタイム定義の取得処理を開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS50119-I

ランタイム定義の取得処理を終了します。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名]

Acquisition of the runtime definition has ended. (HCSC-Server name = HCSC サーバ名)

HCSC サーバのランタイム定義の取得処理を終了します。

(S)

処理を続行します。

KEOS50120-E

リポジトリ情報が見つかりません。詳細情報 =[見つからない情報]

Repository information was not found. (details =見つからない情報)

リポジトリ情報が見つかりません。

(S)

処理を終了します。

(O)

指定した ZIP ファイルが正しいファイルであるかどうかを確認し、再度実行してください。

KEOS50121-W

連携セットアップが完全ではありません。連携元クラスタ名 -> 連携先クラスタ名 : 連携状態 , 連携元クラスタ名 -> 連携先クラスタ名 : 連携状態

Linkage setup is incomplete. 連携元クラスタ名 -> 連携先クラスタ名 : 連携状態 , 連携元クラスタ名 -> 連携先クラスタ名 : 連携状態)

連携セットアップが完全ではありません。

連携状態

- connected : 接続している
- disconnected : 接続していない

連携状態

- connected : 接続している
- disconnected : 接続していない

(S)

処理を続行します。

(O)

クラスタ間で一意になるように連携セットアップ, または連携アンセットアップを行ってください。

KEOS50122-W

連携元クラスタ名から連携先クラスタ名への連携セットアップが完全ではありません。情報 =[連携情報]

Setup of linkage from 連携元クラスタ名 to 連携先クラスタ名 is incomplete. (info = 連携情報)
連携セットアップが完全ではありません。

連携情報

HCSC サーバ名：連携情報，・・・の形で出力します。連携情報は以下のとおりです。

- connected：接続している
- disconnected：接続していない

(S)

処理を続行します。

(O)

クラスタ間で一意になるように連携セットアップ，または連携アンセットアップを行ってください。

KEOS50123-W

クラスタ単位でコンポーネントの配備情報が統一化されていません。コンポーネント名称 =[コンポーネント名] クラスタ名称 =[クラスタ名] 情報 =[配備状況]

Component deployment information is inconsistent regarding the cluster. (component name = コンポーネント名，cluster = HCSC サービスユニット名，info = 配備状況)

サービスユニット単位でコンポーネントの配備情報が一致していません。

配備状況

HCSC サーバ名：配備情報，・・・の形で出力します。配備情報は以下のとおりです。

- deployed：配備済み
- deleted：未配備状態

(S)

処理を続行します。

(O)

クラスタ内でコンポーネントの配備情報が一意になるようにコンポーネントの配備，またはコンポーネントの削除を行ってください。

KEOS50124-E

読み込んだシステム構成定義情報に誤りがあります。詳細情報 =[詳細情報]

The loaded system configuration definition information is invalid. (details = 詳細情報)

読み込んだシステム構成定義情報に誤りがあります。

(S)

処理を終了します。

(O)

システム構成定義情報が正しいかどうかを確認し、再度実行してください。

KEOS50125-E

構築情報の書き込みに失敗しました。

An error occurred during writing of setup information.

構築情報の書き込みに失敗しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

コマンド、画面で行っている処理をすべて停止してください。例外ログを参照し、エラーの要因を取り除いてください。その後、システム管理者に連絡してください。

KEOS50126-I

連携情報取得のために HCSC サーバに通信を行います。サーバ名 =[HCSC サーバ名]

Communication with the HCSC-Server, to acquire linkage information, will now start.

(HCSC-Server name = HCSC サーバ名)

連携情報取得のために HCSC サーバに通信を行います。

(S)

処理を続行します。

KEOS50127-I

HCSC サーバに通信を行い、コンポーネントの情報取得が完了しました。

Communication with the HCSC-Server and acquisition of component information are complete.

HCSC サーバに通信を行い、コンポーネントの情報取得が完了しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS50128-E

コネクションのクローズに失敗しました。詳細情報 =[詳細情報]

An attempt to close a connection has failed. (details = 詳細情報)

コネクションのクローズに失敗しました。

(S)

処理を続行します。

(O)

詳細情報を確認してください。

KEOS50129-I

コネクションをクローズします。

Connection close is started.

コネクションをクローズします。

(S)

処理を続行します。

KEOS50130-I

コネクションをクローズしました。

Connection close was finished normally.

コネクションをクローズしました。

(S)

処理を続行します。

KEOS50131-E

バックアップ情報を削除することができませんでした。種別 =[削除できなかった種別]

Cannot delete backup information. (type = 削除できなかった種別)

ファイルを削除できませんでした。

削除できなかった種別

- passwd : パスワード管理情報
- setup : セットアップ情報
- repository : リポジトリ情報
- import : リポジトリ import 時の一時情報

(S)

処理を続行します。

(O)

CSC-Manager インストールディレクトリ以下すべてに読み書き削除権限があることを確認してください。

KEOS50132-E

cscmng.properties に指定された値が不正です。定義 =[定義] 値 =[値] 理由 =[理由]

The value specified for cscmng.properties is invalid. (key = 定義 , value = 値 , reason = 理由)

cscmng.properties に指定された値が不正です。

理由

- not exist : 存在しない
- not directory : ディレクトリではない
- cannot read : 読み込み権限がない

- cannot write : 書き込み権限がない

(S)

処理を終了します。

(O)

定義の仕様を確認してください。

KEOS50133-E

バックアップディレクトリにファイルが残っています。ファイル=[削除できなかった種別]

The file exists in the backup directory. (type = 削除できなかった種別)

バックアップディレクトリにファイルが残っています。

削除できなかった種別

- passwd : パスワード管理情報
- setup : セットアップ情報
- repository : リポジトリ情報
- import : リポジトリ import 時の一時情報

(S)

処理を終了します。

(O)

直前に実施したセットアップ, アンセットアップ, 配備, 削除コマンドが正常終了しているかどうか確認してください。

KEOS50134-I

バックアップしたユーザ情報の削除を行います。

The deletion of user information backed up is started.

バックアップしたユーザ情報を削除します。

(S)

処理を続行します。

KEOS50135-I

バックアップしたユーザ情報の削除を行いました。

The deletion of user information backed up was finished normally.

バックアップしたユーザ情報を削除しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS50136-I

バックアップしたリポジトリ情報の削除を行います。

11. メッセージ

The deletion of repository backed up is started.

バックアップしたリポジトリ情報を削除します。

(S)

処理を続行します。

KEOS50137-I

バックアップしたリポジトリ情報の削除を行いました。

The deletion of repository backed up was finished normally.

バックアップしたリポジトリ情報を削除しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS50138-I

バックアップしたセットアップ情報の削除を行います。

The deletion of setup information backed up is started.

バックアップしたセットアップ情報を削除します。

(S)

処理を続行します。

KEOS50139-I

バックアップしたセットアップ情報の削除を行いました。

The deletion of setup information backed up was finished normally.

バックアップしたセットアップ情報を削除しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS50140-W

バックアップ情報の削除に失敗しました。種別 =[削除できなかった種別]

An error occurred in deletion backed up information. (type = 削除できなかった種別)

バックアップ情報の削除に失敗しました。

削除できなかった種別

- passwd : パスワード管理情報
- setup : セットアップ情報
- repository : リポジトリ情報
- import : リポジトリ import 時の一時情報

(S)

処理を続行します。

(O)

<COSMINEXUS_HOME インストールディレクトリ>/CSC 以下に読み書き削除権限があるかどうか確認してください。そのあとシステム管理者に連絡してください。

KEOS50141-W

連携先クラスタが存在しません。連携元 HCSC サーバ名称 =[連携元 HCSC サーバ名] 連携先クラスタ名称 =[連携先クラスタ名]

The cluster at the linkage destination does not exist. (HCSC-Server name = 連携元 HCSC サーバ名 cluster name = 連携先クラスタ名)

連携先クラスタが存在しません。

(S)

処理を続行します。

(O)

連携アンセットアップコマンドを使用して連携情報を削除してください。

KEOS50142-W

追加した受付種別がクラスタ内の HCSC サーバで一致していません。クラスタ名 =[クラスタ名] 詳細情報 =[詳細情報]

An added reception type differs between the HCSC-Server instances in the cluster. (cluster name = クラスタ名 , details = 詳細情報)

クラスタ内の受付情報が不一致です。

詳細情報

- HCSC サーバ名 : 受付種別 =ON : 受付種別が一致している
- HCSC サーバ名 : 受付種別 =OFF : 受付種別が不一致である

(S)

処理を続行します。

(O)

クラスタ内の受付情報が不一致です。

HCSC サーバのセットアップ, またはアンセットアップコマンドを実施して, 受付種別を一致させてください。

KEOS50143-W

クラスタ内で HCSC サーバの受付種別が一致していません。クラスタ名 =[クラスタ名] 受付種別 =[受付種別] 詳細情報 =[詳細情報]

A reception type differs between the HCSC--Server instances in the cluster. (cluster name = クラスタ名 reception type = 受付種別 , details = 詳細情報)

クラスタ内の受付情報の内容が不一致です。

11. メッセージ

受付種別

- reception-ejb : EJB 受付
- reception-jms : JMS 受付
- reception-soap : SOAP 受付
- reception-dbq : DBQ 受付

詳細情報

- HCSC サーバ名称 : 設定値

(S)

処理を続行します。

(O)

クラスタ内の受付情報が不一致です。

HCSC サーバのセットアップ,またはアンセットアップコマンドを実施して, 受付種別を一致させてください。

KEOS50144-I

ZIP のインポートを開始します。

The ZIP import will now start.

ZIP のインポートを開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS50145-I

ZIP のインポートに成功しました。

The ZIP import was successful.

ZIP のインポートに成功しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS50146-E

HCSC サーバとの通信互換がありません。マネージャ識別名=[接続先のマネージャ識別名]

There is no convertible communication with the HCSC-Server.

HCSC サーバとの通信互換性がありません。

(S)

処理を終了します。

(O)

通信元と通信先のバージョンを合わせてください。

KEOS50147-I

HCSC サーバとの互換性を確認します。マネージャ識別名 =[接続先のマネージャ識別名]

The conversion with the HCSC-Server will be checked. (Cosminexus Manager name = 接続先のマネージャ識別名)

HCSC サーバとの互換性を確認します。

(S)

処理を続行します。

KEOS50148-I

HCSC サーバとの互換性を確認しました。

The conversion with the HCSC-Server has been checked.

HCSC サーバとの通信互換を確認しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS50149-E

読み込み対象のシステム構成定義のバージョンが不正です。詳細情報 =[詳細情報]

The version of system configuration definition file is invalid. (details = 詳細情報)

システム構成定義のバージョンが不正です。

(S)

処理を中断します。

(O)

リポジトリが正しいかどうかを確認し、再度実行してください。

KEOS50150-E

クラスタの一括運用はロードバランスクラスタでのみ実行可能です。

Batch operations for a cluster can only be executed for a load-balanced cluster.

クラスタの一括運用はロードバランスクラスタでだけ実行可能です。

(S)

処理を終了します。

(O)

HCSC サーバごとに操作してください。

KEOS50151-E

HCSC サーバとの機能互換がありません。マネージャ識別名 =[接続先のマネージャ識別名]

11. メッセージ

There is no corresponding function in HCSC-Server. (Cosminexus Manager name = 接続先のマネージャ識別名)

HCSC サーバとの機能互換がありません。

(S)

処理を終了します。

(O)

CSC サーバのバージョンを確認し、必要に応じてアップグレードしてください。

KEOS50152-I

HCSC サーバへ通信しコンポーネントのランタイム定義の設定処理を開始します。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名] コンポーネント名 =[コンポーネント名] コンポーネントランタイム定義ファイル名 =[コンポーネントランタイム定義ファイル名]

Communication with the HCSC-Server will be performed, and then processing to apply the settings in the component runtime definition will start. (HCSC-Server name = HCSC サーバ名, component name = コンポーネント名, component runtime definition file name = コンポーネントランタイム定義ファイル名)

コンポーネントのランタイム定義の設定処理を開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS50153-I

コンポーネントのランタイム定義の設定処理を終了します。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名] コンポーネント名 =[コンポーネント名]

Processing to apply the settings in the component runtime definition will now end. (HCSC-Server name = HCSC サーバ名, component name = コンポーネント名)

コンポーネントのランタイム定義の設定処理を終了します。

(S)

処理を続行します。

KEOS50154-I

HCSC サーバへ通信しコンポーネントのランタイム定義の取得処理を開始します。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名] コンポーネント名 =[コンポーネント名]

Communication with the HCSC-Server will be performed, and then processing to acquire the component runtime definition will start. (HCSC-Server name = HCSC サーバ名, component name = コンポーネント名)

コンポーネントのランタイム定義の取得処理を開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS50155-I

コンポーネントのランタイム定義の取得処理を終了します。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名]
コンポーネント名 =[コンポーネント名]

Processing to acquire the component runtime definition will now end. (HCSC-Server name = HCSC
サーバ名, component name = コンポーネント名)

コンポーネントのランタイム定義の取得処理を終了します。

(S)

処理を続行します。

KEOS50156-W

ステータスの取得に失敗したため、コンポーネント [コンポーネント名] および関連コンポーネ
ントのステータスの妥当性チェックが実施できませんでした。

The validity check of the statuses of the component [コンポーネント名] and related components
could not be executed because an attempt to acquire these statuses failed.

ステータスの組み合わせ確認を実施できませんでした。

(S)

処理を続行します。

KEOS50157-W

ビジネスプロセスのステータスに対してユーザ定義受付のステータスが不適切です。HCSC
サーバ名 =[HCSC サーバ名] ビジネスプロセス名 =[ビジネスプロセスのサービス ID] ユーザ定
義受付名 =[ユーザ定義受付の受付 ID]

The user-defined reception status cannot be used with the status of the business process.
(HCSC-Server name = [HCSC サーバ名], business process = [ビジネスプロセスのサービス ID],
user-defined reception = [ユーザ定義受付の受付 ID])

ステータスの組み合わせが不正です。

(S)

処理を続行します。

(O)

ビジネスプロセスの開始、またはユーザ定義受付の停止を行ってください。

KEOS50158-E

対象のコンポーネントは配備されていません。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名] コンポーネ
ント名 =[コンポーネント名]

11. メッセージ

The component has not been deployed. (HCSC-Server name = HCSC サーバ名 , component name = コンポーネント名)

コンポーネントが配備されていません。

(S)

処理を続行します。

KEOS50159-W

HCSC サーバアンセットアップ時の論理サーバの停止に失敗しました。論理サーバ名 =[論理サーバ名]

An attempt to stop the logical server failed during HCSC-Server unsetup. (logical server name = 論理サーバ名)

HCSC サーバアンセットアップ時の論理サーバの停止に失敗しました。

(S)

処理を続行します。

(O)

論理サーバを停止してください。

KEOS50160-I

論理サーバを起動します。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名] 論理サーバ名 =[論理サーバ名]

The logical server will now start. (HCSC-Server name = HCSC サーバ名 , logical server name = 論理サーバ名)

論理サーバを起動します。

(S)

処理を続行します。

KEOS50161-I

論理サーバを起動しました。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名] 論理サーバ名 =[論理サーバ名]

The logical server has started. (HCSC-Server name = HCSC サーバ名 , logical server name = 論理サーバ名)

論理サーバを起動しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS50162-I

論理サーバを停止します。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名] 論理サーバ名 =[論理サーバ名]

The logical server will now stop. (HCSC-Server name = HCSC サーバ名 , logical server name = 論理サーバ名)

論理サーバを停止します。

(S)

処理を続行します。

KEOS50163-I

論理サーバを停止しました。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名] 論理サーバ名 =[論理サーバ名]

The logical server has stopped. (HCSC-Server name = HCSC サーバ名 , logical server name = 論理サーバ名)

論理サーバを停止しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS50164-E

同期制御に失敗しました。詳細情報 =[詳細情報]

Synchronization failed. (details = 詳細情報)

同期制御に失敗しました。

(S)

処理を続行します。

(O)

詳細メッセージを確認し、再度実行してください。

KEOS50165-W

ファイルの削除に失敗しました。ファイル名 =[ファイル名]

File deletion failed. (file name = ファイル名)

ファイルの削除に失敗しました。

(S)

処理を続行します。

(O)

HCSC-Manager の各種コマンド、GUI が起動していない状態で、このメッセージに指定されているファイルを削除してください。

KEOS50166-E

サービス情報が不正です。キー名称 =[キー名] 値 =[値]

The service information is invalid. (key name = キー名 , value = 値)

処理を試みたサービス情報が不正です。

11. メッセージ

(S)

処理を終了します。

(O)

詳細情報に従って対策を行い、再実施してください。エラーの原因が不明な場合、メッセージログの詳細情報を参照してください。

KEOS50167-E

サービスアダプタのサービス情報が見つかりません。クラスタ名 =[クラスタ名] サービスアダプタ名 =[サービスアダプタのサービス ID]

The service information for the service adapter was not found. (cluster name = クラスタ名, service adapter name = サービスアダプタのサービス ID)

サービスアダプタのサービス情報が見つかりません。

(S)

処理を終了します。

(O)

メッセージに表示されているサービスアダプタがリポジトリに存在しないか、またはインポートされていません。インポートを実施してから、再度実行してください。

KEOS50168-E

サービス情報の属性は不正です。属性 =[属性]

An attribute of the service information is invalid. (attribute = 属性)

サービス情報の変更 に失敗しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

サービス情報表示コマンドを実行して、属性を確認してください。

KEOS50169-E

サービス情報のサービス種別は不正です。サービス種別 =[サービス種別]

The service type of the service information is invalid. (service type = サービス種別)

サービス情報の変更 に失敗しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

サービス情報表示コマンドを実行して、サービス種別を確認してください。

KEOS50170-E

サービス情報のキーは不正です。キー =[キー]

The key of the service information is invalid. (key = キー)

サービス情報の変更失敗しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

サービス情報表示コマンドを実行して、キーを確認してください。

KEOS50171-E

サービス情報の値は不正です。値 =[値]

The value of the service information is invalid. (value = 値)

サービス情報の変更失敗しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

設定できる値をマニュアルで確認してください。

KEOS50172-E

サービスアダプタが配備されているため、そのサービス情報を変更できません。クラスタ名 =[クラスタ名] サービスアダプタ名 =[サービスアダプタのサービス ID]

The service information cannot be changed because the service adapter has already been deployed. (cluster name = クラスタ名 , service adapter name = サービスアダプタのサービス ID)

サービス情報の変更失敗しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

サービスアダプタをクラスタ内のすべての HCSC サーバから削除して、再度実施してください。

KEOS50173-E

サービス情報のバックアップ中にエラーが発生しました。

An error occurred during a backup of the service information.

サービス情報のバックアップ中にエラーが発生しました。

(S)

処理を終了します。

11. メッセージ

(O)

メッセージログからエラーの要因を調査し、対策してください。対策後に再度コマンドを実行してください。

KEOS50174-E

サービス情報のバックアップ削除中にエラーが発生しました。

An error occurred during deletion of the backup of the service information.

サービス情報のバックアップ削除中にエラーが発生しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

メッセージログからエラーの要因を調査し、対策してください。対策後に再度コマンドを実行してください。

KEOS50175-I

HCSC サーバを起動します。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名]

The HCSC-Server will now start. (HCSC-Server name = HCSC サーバ名)

HCSC サーバを開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS50176-I

HCSC サーバを起動しました。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名]

The HCSC-Server has started. (HCSC-Server name = HCSC サーバ名)

HCSC サーバを開始しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS50177-I

HCSC サーバを停止します。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名] 強制オプション =[強制停止オプションの判定]

The HCSC-Server will now stop. (HCSC-Server name = HCSC サーバ名 , force option = 強制停止オプションの判定)

HCSC サーバを停止します。

強制停止オプションの判定

- true : 強制停止
- false : 通常停止

(S)

処理を続行します。

KEOS50178-I

HCSC サーバを停止しました。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名] 強制オプション =[強制停止オプションの判定]

The HCSC-Server has stopped. (HCSC-Server name = HCSC サーバ名 , force option = 強制停止オプションの判定)

HCSC サーバを停止しました。

強制停止オプションの判定

- true : 強制停止
- false : 通常停止

(S)

処理を続行します。

KEOS50179-I

HCSC サーバの標準受付を開始します。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名]

The standard reception for the HCSC-Server will now start. (HCSC-Server name = HCSC サーバ名)

標準受付を開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS50180-I

HCSC サーバの標準受付を開始しました。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名]

The standard reception for the HCSC-Server has started. (HCSC-Server name = HCSC サーバ名)
標準受付を開始しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS50181-I

HCSC サーバの標準受付を停止します。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名] 停止種別 =[停止種別]

The standard reception for the HCSC-Server will now stop. (HCSC-Server name = HCSC サーバ名 , stop type = 停止種別)

標準受付を停止します。

停止種別

11. メッセージ

- normal : 通常停止
- wait : 計画停止
- force : 強制停止

(S)

処理を続行します。

KEOS50182-I

HCSC サーバの標準受付を停止しました。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名] 停止種別 =[停止種別]

The standard reception for the HCSC-Server has stopped. (HCSC-Server name = HCSC サーバ名 , stop type = 停止種別)

標準受付を停止しました。

停止種別

- normal : 通常停止
- wait : 計画停止
- force : 強制停止

(S)

処理を続行します。

KEOS50183-I

HCSC サーバの連携受付を開始します。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名]

The linkage reception for the HCSC-Server will now start. (HCSC-Server name = HCSC サーバ名)
連携受付を開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS50184-I

HCSC サーバの連携受付を開始しました。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名]

The linkage reception for the HCSC-Server has started. (HCSC-Server name = HCSC サーバ名)
連携受付を開始しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS50185-I

HCSC サーバの連携受付を停止します。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名] 停止種別 =[停止種別]

The linkage reception for the HCSC-Server will now stop. (HCSC-Server name = HCSC サーバ名 , stop type = 停止種別)

連携受付を停止します。

停止種別

- normal : 通常停止
- wait : 計画停止
- force : 強制停止

(S)

処理を続行します。

KEOS50186-I

HCSC サーバの連携受付を停止しました。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名] 停止種別 =[停止種別]

The linkage reception for the HCSC-Server has stopped. (HCSC-Server name = HCSC サーバ名 , stop type = 停止種別)

連携受付を停止しました。

停止種別

- normal : 通常停止
- wait : 計画停止
- force : 強制停止

(S)

処理を続行します。

KEOS50187-I

HCSC サーバとクラスタの連携を開始します。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名] クラスタ名 =[クラスタ名]

The HCSC-Server will now link with the cluster. (HCSC-Server name = HCSC サーバ名 , cluster name = クラスタ名)

連携を開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS50188-I

HCSC サーバとクラスタの連携を開始しました。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名] クラスタ名 =[クラスタ名]

The HCSC-Server linked with the cluster. (HCSC-Server name = HCSC サーバ名 , cluster name = クラスタ名)

11. メッセージ

連携を開始しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS50189-I

HCSC サーバとクラスタの連携を停止します。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名] クラスタ名 =[クラスタ名]

The linkage of the HCSC-Server and the cluster will now be disconnected. (HCSC-Server name = HCSC サーバ名 , cluster name = クラスタ名)

連携を停止します。

(S)

処理を続行します。

KEOS50190-I

HCSC サーバとクラスタの連携を停止しました。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名] クラスタ名 =[クラスタ名]

The linkage of the HCSC-Server and the cluster has been disconnected. (HCSC-Server name = HCSC サーバ名 , cluster name = クラスタ名)

連携を停止しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS50191-I

HCSC サーバへ通信しコンポーネントを開始します。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名] コンポーネント種別 =[配備するコンポーネント種別] コンポーネント名 =[配備するコンポーネント名]

Communication with the HCSC-Server will be performed, and then the component will start. (HCSC-Server name = HCSC サーバ名 , component type = 配備するコンポーネント種別 , component name = 配備するコンポーネント名)

コンポーネントを開始します。

配備するコンポーネント種別

- bp : ビジネスプロセス
- adapter : サービスアダプタ
- ureptn : ユーザ定義受付

(S)

処理を続行します。

KEOS50192-I

コンポーネントを開始しました。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名] コンポーネント種別 =[配備するコンポーネント種別] コンポーネント名 =[配備するコンポーネント名]

The component has started. (HCSC-Server name = HCSC サーバ名 , component type = 配備するコンポーネント種別 , component name = 配備するコンポーネント名)

コンポーネントを開始しました。

配備するコンポーネント種別

- bp : ビジネスプロセス
- adapter : サービスアダプタ
- urcptn : ユーザ定義受付

(S)

処理を続行します。

KEOS50193-I

HCSC サーバへ通信しコンポーネントを停止します。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名] コンポーネント種別 =[配備するコンポーネント種別] コンポーネント名 =[配備するコンポーネント名]

Communication with the HCSC-Server will be performed, and then the component will stop. (HCSC-Server name = HCSC サーバ名 , component type = 配備するコンポーネント種別 , component name = 配備するコンポーネント名)

コンポーネントを停止します。

配備するコンポーネント種別

- bp : ビジネスプロセス
- adapter : サービスアダプタ
- urcptn : ユーザ定義受付

(S)

処理を続行します。

KEOS50194-I

コンポーネントを停止しました。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名] コンポーネント種別 =[配備するコンポーネント種別] コンポーネント名 =[配備するコンポーネント名]

The component has stopped. (HCSC-Server name = HCSC サーバ名 , component type = 配備するコンポーネント種別 , component name = 配備するコンポーネント名)

コンポーネントを停止しました。

配備するコンポーネント種別

- bp : ビジネスプロセス
- adapter : サービスアダプタ

11. メッセージ

- urecptn : ユーザ定義受付

(S)

処理を続行します。

KEOS50195-W

ビジネスプロセスとユーザ定義受付の配備状態が一致していません。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名] ビジネスプロセス名 =[ビジネスプロセスのサービス ID] 詳細情報 =[詳細情報]

The deployment status of the business process does not match the status of the user-defined reception. (HCSC-Server name = HCSC サーバ名, business process = ビジネスプロセスのサービス ID, details = 詳細情報)

ビジネスプロセスとユーザ定義受付の配備状態が一致していません。

詳細情報

「ユーザ定義受付の受付 ID : 配備状態」の形式で出力されます。配備状態は次のとおりです。

- 配備状態 : deployed
- 削除済み : deleted

(S)

処理を続行します。

(O)

必要に応じて、ビジネスプロセスの削除、またはユーザ定義受付の配備を行ってください。

KEOS50196-E

不正なサービスアダプタです。クラスタ名 =[クラスタ名] サービスアダプタ名 =[サービスアダプタのサービス ID] サービス種別 =[サービス種別]

The service adapter is invalid. (cluster name = クラスタ名, service adapter name = サービスアダプタのサービス ID, service type = サービス種別)

不正なサービスアダプタです。

(S)

処理を終了します。

(O)

保守員に連絡してください。

KEOS50197-I

アプリケーションへの操作を開始します。J2EE サーバ名 =[J2EE サーバ名] アプリケーション名 =[アプリケーション名 (指定がない場合は - を出力)] 操作 =[オペレーション名]

The operation for the J2EE application will now start. (J2EE server name = J2EE サーバ名 , application name = アプリケーション名 (指定がない場合は - を出力), operation = オペレーション名)

アプリケーションへの操作を開始します。

アプリケーション名

アプリケーションの指定がない場合は「-」が出力されます。

オペレーション名

- start : J2EE アプリケーションの起動
- stop : J2EE アプリケーションの停止
- delete : J2EE アプリケーションの削除
- list : J2EE アプリケーションの状態表示

(S)

処理を続行します。

KEOS50198-I

アプリケーションの操作が完了しました。

The operation for the J2EE application has finished.

アプリケーションの操作が完了しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS50199-W

起動順序を取得することができません。論理サーバ名 =[論理サーバ名]

The start order cannot be acquired. (logical server name = 論理サーバ名)

起動順序を取得できません。

(S)

処理を続行します。

(O)

必要に応じて、起動順序の設定を行ってください。

KEOS50200-I

サービス情報の読み込みに成功しました。

The service information was read successfully.

サービス情報の読み込みに成功しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS50201-I

サービス情報の削除を開始します。

The service information will now be deleted.

サービス情報の削除を開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS50202-I

サービス情報の削除に成功しました。

The service information was deleted successfully.

サービス情報の削除に成功しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS50203-I

サービスアダプタの変更を開始します。

The service adapter will now be changed.

サービスアダプタの変更を開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS50204-I

サービスアダプタの変更に成功しました。

The service adapter was changed successfully.

サービスアダプタの変更に成功しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS50205-E

サービスアダプタへのアクセス中にエラーが発生しました。

An error occurred during access to the service adapter.

サービスアダプタへのアクセス中にエラーが発生しました。

(S)

処理を続行します。

(O)

保守員に連絡してください。

KEOS50206-I

サービス情報のチェックを開始します。

The service information will now be checked.

サービス情報のチェックを開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS50207-I

サービス情報のチェックに成功しました。

The service information was checked successfully.

サービス情報のチェックに成功しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS50208-I

サービス情報ファイルの更新を開始します。

The service information file will now be updated.

サービス情報ファイルの更新を開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS50209-I

サービス情報ファイルの更新に成功しました。

The service information file was updated successfully.

サービス情報ファイルの更新に成功しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS50210-I

サービス情報のアクセスを開始します。

The service information file will now be accessed.

サービス情報のアクセスを開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS50211-I

サービス情報のアクセスに成功しました。

11. メッセージ

The service information file was accessed successfully.

サービス情報のアクセスに成功しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS50212-E

サービス情報の書き込み中にエラーが発生しました。詳細情報 =[詳細情報]

An error occurred during writing of the service information. (details = 詳細情報)

サービス情報の書き込み中にエラーが発生しました。

(S)

処理を続行します。

(O)

詳細情報を参照し、原因を解消してから再度実行してください。ただし、リポジトリのインポート中にこの問題が発生した場合は、リポジトリをコマンド実行前の状態に戻してから、対処してください。

KEOS50213-I

サービス情報の読み込みを開始します。

The service information will now be read.

サービス情報の読み込みを開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS50214-E

サービスアダプタの呼び出し設定がローカル呼び出しのため、サービス情報を変更できません。クラスタ名 =[クラスタ名] サービスアダプタ名 =[サービスアダプタのサービス ID]

The service information cannot be changed because the service adapter is set to be invoked locally. (cluster name = クラスタ名 , service adapter name = サービスアダプタのサービス ID)

サービスアダプタの呼び出し設定がローカル呼び出しのため、サービス情報を変更できません。

(S)

処理を終了します。

KEOS50215-I

コマンド引数 =[コマンド引数の内容]

The command arguments.(コマンド引数の内容)

コマンド引数の内容を表示します。

コマンド引数の内容

「コマンド引数 = コマンド引数値 ,・・・」の形式で出力されます。

(S)

処理を続行します。

KEOS50216-E

論理サーバが見つかりません。サーバ名 =[サーバ名]

The logical server was not found. (server name = サーバ名)

論理サーバが見つかりません。

(S)

処理を終了します。

(O)

-logical オプションで指定した論理サーバ名, または HCSC-Manager 定義 cscmng.server.<CSC サーバ名 >.system に定義されている論理サーバ名が Management Server に登録されていることを確認してください。

KEOS50217-E

J2EE サーバが見つかりません。サーバ名 =[サーバ名]

The J2EE server was not found. (server name = サーバ名)

J2EE サーバが見つかりません。

(S)

処理を終了します。

(O)

-j2ee オプションで指定した J2EE サーバ名を確認してください。

KEOS50218-E

サービスアダプタの呼び出し設定をリモート呼び出しに変更できません。クラスタ名 =[クラスタ名] サービスアダプタ名 =[サービスアダプタ名] 属性名 =[属性名] 属性値 =[属性値]

The setting for invoking the service adapter cannot be changed to [Remote invoke]. (cluster name = クラスタ名, service adapter name = サービスアダプタ名, attribute name = 属性名, attribute value = 属性値)

リモート呼び出しの条件を満たしていません。

(S)

処理を終了します。

(O)

cscsvectl コマンドに指定したオプションによって, 対応が異なります。

-setfile オプションを指定した場合

サービス情報変更定義ファイルの次の属性名に対する値を確認してください。

- max_message_num
- qos_in_order
- rdarea_name

-props オプションを指定した場合

次のキー名に対する値を確認してください。

- MaxMessageNum
- QosInOrder
- RdAreaName

KEOS50219-E

接続に失敗しました。J2EE サーバ名 =[接続先の J2EE サーバ名] URL=[接続先の URL] 詳細情報 =[詳細情報]

The connection failed. (J2EE Server name = 接続先の J2EE サーバ名 , url = 接続先の URL, details = 詳細情報)

J2EE サーバへの接続に失敗しました。

(S)

処理を停止します。

(O)

メッセージの URL 部分に表示されている IP アドレス (ホスト名) とポート番号が正しいか確認してください。ポート番号は、J2EE サーバが利用する RMI レジストリのポート番号です。

KEOS50220-E

URL のフォーマットが不正です。J2EE サーバ名 =[J2EE サーバ名] URL=[URL] 詳細情報 =[詳細情報]

The format of the URL is invalid. (J2EE Server name = J2EE サーバ名 , URL= URL, details = 詳細情報)

JMXServiceURL のフォーマットが不正です。

(S)

処理を終了します。

(O)

保守員に連絡してください。

KEOS50221-E

オブジェクトが見つかりません。J2EE サーバ名 =[J2EE サーバ名] オブジェクト名 =[オブジェクト名] 詳細情報 =[詳細情報]

The object was not found. (J2EE Server name = J2EE サーバ名 , object name = オブジェクト名 , details = 詳細情報)

オブジェクトが見つかりません。

(S)

処理を停止します。

(O)

HCSC サーバの環境を見直してください。

KEOS50222-E

オペレーション実行中にエラーが発生しました。J2EE サーバ名 =[J2EE サーバ名] オブジェクト名 =[オブジェクト名] オペレーション =[オペレーション] 詳細情報 =[詳細情報]

An exception occurred during the operation. (J2EE Server name = J2EE サーバ名 , object name = オブジェクト名 , operation = オペレーション , details = 詳細情報)

オペレーション実行中にエラーが発生しました。

(S)

処理を停止します。

(O)

詳細情報を基に原因を取り除いて、再度実行してください。なお、詳細メッセージに含まれるメッセージ ID が警告レベルのときは、処理が完了している場合があります。詳細メッセージを見て問題が解決しない場合は、J2EE サーバのメッセージログを参照し、問題を解決してください。

KEOS50223-E

通信障害が発生しました。J2EE サーバ名 =[J2EE サーバ名] 詳細情報 =[詳細情報]

A communication error occurred. (J2EE Server name = J2EE サーバ名 , details = 詳細情報)

通信障害が発生しました。

(S)

処理を停止します。

(O)

ネットワーク環境を見直して、再度実行してください。

KEOS50224-E

通信先のバージョンが不正です。(通信元のバージョン =[通信元のバージョン] 通信先のバージョン =[通信先のバージョン])

11. メッセージ

The remote version of the HCSC server is invalid. (local version = 通信元のバージョン , remote version = 通信先のバージョン)

通信先のバージョンが不正です。

(S)

処理を停止します。

(O)

通信元と通信先のバージョンを合わせてください。

KEOS50225-E

バックアップファイルのバージョンが不正です。詳細情報 =[詳細情報]

The version of the backup file is invalid. (details = 詳細情報)

バックアップファイルのバージョンが不正です。

(S)

処理を中断します。

(O)

バックアップファイルが正しいかどうかを確認して、再度実行してください。

KEOS50226-E

論理サーバのステータスが不正です。(論理サーバ名 =[J2EE サーバ名] 期待しているステータス =[期待しているステータス] 現在のステータス =[現在のステータス])

The logical server status is invalid. (logical server name = J2EE サーバ名 , expected status = 期待しているステータス , current status = 現在のステータス)

論理サーバのステータスが不正です。

期待しているステータス、および現在のステータスには、次のどれかが表示されます。

- inactive : 停止
- active : 稼働中
- abnormal ended : 異常停止
- stopping : 停止中
- starting : 起動中
- recovering : 回復中
- communication error : 通信障害
- auto stopping : 自動停止中
- auto restarting : 自動再起動中
- force stopping : 強制停止中
- planned stopping : 計画停止中
- unknown : 不明

(S)

処理を中断します。

(O)

論理サーバの現在のステータスを期待しているステータスに合わせて、再度実行してください。

KEOS50227-I

すでに移行済みです。(HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名])

Migration to the HCSC server has already been performed. (HCSC-Server name = HCSC サーバ名)

すでに移行済みです。

(S)

処理を終了します。

KEOS50228-E

構成が異なるためトラッキングできません。(HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名] db-use=[セットアップされている db-use の値] rm-use=[セットアップされている rm-use の値])

Tracking cannot be performed because the configuration is invalid. (HCSC-Server name = HCSC サーバ名, db-use = セットアップされている db-use プロパティの値, rm-use = セットアップされている rm-use プロパティの値)

構成が異なるためトラッキングできません。

(S)

処理を中断します。

(O)

現在の HCSC サーバのセットアップ環境では、この機能を利用できません。この機能を利用する場合は、HCSC サーバを再セットアップしてください。

KEOS50250-E

管理者特権がないためコマンドの実行ができません。

The command cannot be executed because you do not have administrator privileges.

管理者特権がないためコマンドの実行ができません。

(S)

処理を終了します。

(O)

管理者として実行したコマンドプロンプト上で、再度実行してください。

KEOS50251-E

権限の判定中にエラーが発生しました。

An error occurred while the permissions were being checked.

11. メッセージ

権限の判定中にエラーが発生しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

メモリが不足しているおそれがあります。空きメモリを増やしたあと、再度実行してください。

問題が解決しない場合は、保守員に連絡してください。

KEOS50252-E

HCSC サーバとの機能単位の通信互換がありません。マネージャ識別名=[接続先のマネージャ識別名]

The operation cannot be performed, because this function cannot communicate with the HCSC server. (Cosminexus Manager name = 接続先のマネージャ識別名)

HCSC サーバとの通信互換性がありません。

(S)

処理を終了します。

(O)

接続先の HCSC サーバのバージョンを確認してください。そのあと、HCSC サーバをバージョンアップしてください。

KEOS50999-E

予期しないエラーが発生しました。詳細情報 =[詳細情報]

An unexpected exception occurred. (details = 詳細情報)

予期しないエラーが発生しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

保守員に連絡してください。

11.6.2 KEOS52000 ~ KEOS52499

KEOS52000-I

Usage:

cscpasswd [-h] -user <User Id> -pass <Password>

```
{  
  -print
```



```

| -cscmnguser <Change User Id> -cscmngpass <Change Password>
| -mng <Cosminexus Manager Name> -mnguser <Change User Id>
|   [-mngpass <Change Password>]
| -csc <HCSC-Server Name> -cscuser <Change User Id>
|   -cscpass <Change Password>
}

```

--

Version Cosminexus のバージョン (Cosminexus の製品名)

cscpasswd の使用方法です。

(S)

処理を終了します。

(O)

メッセージを参照して、コマンドの使用方法を確認してください。

KEOS52001-I

Usage:

```

cscsvsetup [-h] -user <User Id> -pass <Password>
|   [-csc <Setup HCSC-Server Name>] [-cluster <Cluster Name>]
|   -profile <Setup File Path>

```

--

Version Cosminexus のバージョン (Cosminexus の製品名)

cscsvsetup の使用方法です。

(S)

処理を終了します。

(O)

メッセージを参照して、コマンドの使用方法を確認してください。

KEOS52002-I

Usage:

```

cscsvunsetup [-h] -user <User Id> -pass <Password>
|   -csc <Unsetup HCSC-Server Name> [-ignore]

```

--

Version Cosminexus のバージョン (Cosminexus の製品名)

cscsvunsetup の使用方法です。

11. メッセージ

(S)

処理を終了します。

(O)

メッセージを参照して、コマンドの使用方法を確認してください。

KEOS52003-I

Usage:

```
csccompodeploy [-h] -user <User Id> -pass <Password>
{
  -csc <HCSC-Server Name> { -name <ServiceID> | -all }
  | -cluster <Cluster Name> { -name <ServiceID> | -all }
}
```

--

Version Cosminexus のバージョン (Cosminexus の製品名)

csccompodeploy の使用方法です。

(S)

処理を終了します。

(O)

メッセージを参照して、コマンドの使用方法を確認してください。

KEOS52004-I

Usage:

```
csccompoundeploy [-h] -user <User Id> -pass <Password>
{
  -csc <HCSC-Server Name> { -name <ServiceID> | -all }
  | -cluster <Cluster Name> { -name <ServiceID> | -all }
}
[-force] [-ignore]
```

--

Version Cosminexus のバージョン (Cosminexus の製品名)

csccompoundeploy の使用方法です。

(S)

処理を終了します。

(O)

メッセージを参照して、コマンドの使用方法を確認してください。

KEOS52005-I

Usage:

```
cscconsetup [-h] -user <User Id> -pass <Password>
           -csc <HCSC-Server Name> -connect <Cluster Name>
           -propfile <Setup File Path>
```

--

Version Cosminexus のバージョン (Cosminexus の製品名)
 cscconsetup の使用方法です。

(S)

処理を終了します。

(O)

メッセージを参照して、コマンドの使用方法を確認してください。

KEOS52006-I

Usage:

```
cscconunsetup [-h] -user <User Id> -pass <Password>
           -csc <HCSC-Server Name> -connect <Cluster Name>
           [-ignore]
```

--

Version Cosminexus のバージョン (Cosminexus の製品名)
 cscconunsetup の使用方法です。

(S)

処理を終了します。

(O)

メッセージを参照して、コマンドの使用方法を確認してください。

KEOS52007-I

Usage:

```
cscsvconfig [-h] -user <User Id> -pass <Password>
           {
           -operation get -csc <HCSC-Server Name>
           | -operation set -propfile <Property File Path>
           { -csc <HCSC-Server Name> | -cluster <Cluster Name> }
           }
```

11. メッセージ

--

Version Cosminexus のバージョン (Cosminexus の製品名)
cscsvconfig の使用方法です。

(S)

処理を終了します。

(O)

メッセージを参照して、コマンドの使用方法を確認してください。

KEOS52008-I

Usage:

cscrepctl [-h] -user <User Id> -pass <Password>

{ -import <Import File Name> [-overwrite] | -export <Export File Name> | -autoexport }

--

Version Cosminexus のバージョン (Cosminexus の製品名)
cscrepctl の使用方法です。

(S)

処理を終了します。

(O)

メッセージを参照して、コマンドの使用方法を確認してください。

KEOS52009-I

Usage:

cscrepls [-h] -user <User Id> -pass <Password>

{ [-replfile <Export Zip File Name>] |

[-envbackfile <HCSC-Manager Backup Zip File Name>] }

[{ -csc <HCSC-Server Name> | -oldtype }]

--

Version Cosminexus のバージョン (Cosminexus の製品名)
cscrepls の使用方法です。

(S)

処理を終了します。

(O)

メッセージを参照して、コマンドの使用方法を確認してください。

KEOS52010-I

Usage:

```
cscsvstart [-h] [-user <User Id>] [-pass <Password>]
           { -csc <HCSC-Server Name> | -cluster <Cluster Name> }
           [ { -logical <Logical Server Name> | -system } ]
```

--

Version Cosminexus のバージョン (Cosminexus の製品名)

cscsvstart の使用方法です。

(S)

処理を終了します。

(O)

メッセージを参照して、コマンドの使用方法を確認してください。

KEOS52011-I

Usage:

```
cscpiselect [-h] [-user <User Id>] [-pass <Password>]
            [-csc <HCSC-Server Name>]
            [-table { process | activity | link | set | string | numeric |
                    boolean | message | relation | process_set } ]
            [-detail] [-separator { comma | tab } ]
            [ { -count | -orderby <Sort Condition> } ]
            [ { -where <Where Condition> | -wherefile <Where Group File Path> } ]
            [-encoding <Encoding name>]
```

--

Version Cosminexus のバージョン (Cosminexus の製品名)

cscpiselect の使用方法です。

(S)

処理を終了します。

(O)

メッセージを参照して、コマンドの使用方法を確認してください。

KEOS52012-I

Usage:

```
cscpidelete [-h] [-user <User Id>] [-pass <Password>]
```

11. メッセージ

```
[-csc <HCSC-Server Name>]
{
  -where <Where Condition> | -idlist <ID List File Path> |
  -wherefile <Where Group File Path> | -force
}
[-encoding <Encoding Name>]
```

--

Version Cosminexus のバージョン (Cosminexus の製品名)
cscpidelete の使用方法です。

(S)

処理を終了します。

(O)

メッセージを参照して、コマンドの使用方法を確認してください。

KEOS52013-I

Usage:

```
cscpireexec [-h] [-user <User Id>] [-pass <Password>]
[-csc <HCSC-Server Name>]
{
  -processname <Business Process Definition Name> |
  -processnamefile <Business Process Definition File Path>
}
[ { -processid <ProcessId Name> |
  -processidfile <ProcessId File Path> } ]
[-encoding <Encoding Name>]
```

--

Version Cosminexus のバージョン (Cosminexus の製品名)
cscpireexec の使用方法です。

(S)

処理を終了します。

(O)

メッセージを参照して、コマンドの使用方法を確認してください。

KEOS52014-I

cscrepls will now start.

cscrepls コマンドを起動します。

(S)

処理を続行します。

KEOS52015-I

cscrepls ended normally.

cscrepls コマンドが正常終了しました。

(S)

処理を終了します。

KEOS52016-E

An argument is invalid. (argument = 不正な引数)

引数が不正です。

(S)

処理を終了します。

(O)

コマンドの書式を確認してください。

KEOS52017-I

cscsvconfig will now start.

cscsvconfig コマンドを起動します。

(S)

処理を続行します。

KEOS52018-I

cscsvconfig ended normally.

cscsvconfig コマンドが正常終了しました。

(S)

処理を終了します。

KEOS52019-I

cscpiselect will now start.

cscpiselect コマンドを起動します。

(S)

処理を続行します。

KEOS52020-I

cscpiselect ended normally.

cscpiselect コマンドが正常終了しました。

(S)

処理を終了します。

KEOS52021-E

cscpiselect ended abnormally.

cscpiselect コマンドが異常終了しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

直前に出力しているエラーメッセージを参照してください。

KEOS52022-I

cscpidelete will now start.

cscpidelete コマンドを起動します。

(S)

処理を続行します。

KEOS52023-I

cscpidelete ended normally.

cscpidelete コマンドが正常終了しました。

(S)

処理を終了します。

KEOS52024-E

cscpidelete ended abnormally.

cscpidelete コマンドが異常終了しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

直前に出力しているエラーメッセージを参照してください。

KEOS52025-E

cscrepls ended abnormally.

cscrepls コマンドが異常終了しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

直前に出力しているエラーメッセージを参照してください。

KEOS52026-E

cscsvconfig ended abnormally.

cscsvconfig コマンドが異常終了しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

直前に出力しているエラーメッセージを参照してください。

KEOS52027-E

An unexpected error occurred. (details = 例外の詳細メッセージ)

予期しない例外が発生しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

保守員に連絡してください。

KEOS52028-E

The combination of arguments is invalid.

引数の組み合わせが不正です。

(S)

処理を終了します。

(O)

コマンドの書式を確認してください。

KEOS52029-I

The row count is MBean からの受け取った行数 .

cscpiselect で -count を指定したときの結果出力用メッセージ

(S)

処理を終了します。

KEOS52030-I

Analysis of command arguments will now start.

11. メッセージ

コマンド引数を解析します。

(S)

処理を続行します。

KEOS52031-I

Analysis of command arguments is complete.

コマンド引数の解析が完了しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52032-I

The user information will now be updated.

ユーザ情報を更新します。

(S)

処理を続行します。

KEOS52033-W

Unsetup of HCSC-Server has already been performed. (HCSC-Server name = HCSC サーバ名)

HCSC サーバがすでにアンセットアップされています。

(S)

処理を終了します。

(O)

引数の値を確認し、再度実行してください。

KEOS52034-E

The specified HCSC-Server name, cluster name, or Cosminexus Manager name already exists.

(specified HCSC-Server type or cluster type or Cosminexus Manager type= 種別, specified name = 指定した名称, duplicated type = 重複している種別, duplicated name = 重複している名称)

指定されている HCSC サーバ名, クラスタ名または Cosminexus マネージャ名が重複しています。

種別

- cluster : クラスタ名
- HCSC-Server : HCSC サーバ名
- CosminexusManager : Cosminexus マネージャ名

重複している種別

- cluster : クラスタ名
- HCSC-Server : HCSC サーバ名
- CosminexusManager : Cosminexus マネージャ名

(S)

処理を終了します。

(O)

重複しない値を指定して再度セットアップしてください。

KEOS52035-E

The specified file path is too long. (bytes in specified file path = 指定したファイルのバイト数 , maximum bytes = 最大バイト数 , file path = ファイルパス)

指定されたファイルパスが長過ぎます。

(S)

処理を終了します。

(O)

指定したファイルパスを最大バイト数以下に修正し、再度実行してください。

KEOS52036-I

cscsvstart will now start.

cscsvstart コマンドを起動します。

(S)

処理を続行します。

KEOS52037-I

cscsvstart ended normally.

cscsvstart コマンドが正常終了しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52038-E

cscsvstart ended abnormally.

cscsvstart コマンドが異常終了しました。

(S)

処理を続行します。

(O)

直前に出力しているエラーメッセージを参照してください。

KEOS52039-I

Usage:

cscsvstop [-h] [-user <User Id>] [-pass <Password>]

11. メッセージ

```
{ -csc <HCSC-Server Name> | -cluster <Cluster Name> }  
[ { -logical <Logical Server Name> | -system } ]  
[-force]
```

--

Version Cosminexus のバージョン (Cosminexus の製品名)

cscsvstop の使用方法です。

(S)

処理を終了します。

(O)

メッセージを参照して、コマンドの使用方法を確認してください。

KEOS52040-I

Communication with the HCSC-Server, to re-execute a process instance, will now start.

プロセスインスタンスを再実行するために通信を行います。

(S)

処理を続行します。

KEOS52041-I

Communication with the HCSC-Server, to re-execute a process instance, is complete.

プロセスインスタンスを再実行するための通信が完了しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52042-E

The maximum number of HCSC-Servers connected to each cluster has been exceeded. (cluster

type = クラスタ種別, cluster name = クラスタ名)

一つのクラスタに設定できる HCSC サーバの上限値を超えています。

クラスタ種別

- HA : HA クラスタ
- LB : ロードバランスクラスタ

(S)

処理を停止します。

(O)

HA クラスタの場合は 2 台, ロードバランスクラスタの場合は 1,024 台までの HCSC サーバしかセットアップできません。クラスタ名を変更して再度セットアップしてください。

KEOS52043-I

cscsvstop will now start.

cscsvstop コマンドを起動します。

(S)

処理を続行します。

KEOS52044-E

A memory shortage occurred.

メモリ不足が発生しました。

(S)

処理を中断します。

(O)

JavaVM のメモリ使用量を増やして再度実行してください。

KEOS52045-I

cscsvstop ended normally.

cscsvstop コマンドが正常終了しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52046-E

An error was detected during checking of the properties file. At least one of the specified keys should be set to ON. (file name = プロパティファイル名, keys = 少なくとも一つは ON にしなければいけないキーを, で区切った文字列)

プロパティファイルの検証でエラーが発生しました。指定されたキーのうち少なくとも一つは ON を設定する必要があります。

(S)

処理を終了します。

(O)

再度実施してください。

KEOS52047-E

cscsvstop ended abnormally.

cscsvstop コマンドが異常終了しました。

(S)

処理を続行します。

11. メッセージ

(O)

直前に出力しているエラーメッセージを参照してください。

KEOS52048-I

Usage:

```
cscrcptnstart [-h] [-user <User Id>] [-pass <Password>]  
    { -csc <HCSC-Server Name> | -cluster <Cluster Name> }  
    [ { -standard | -userdef } ]
```

--

Version Cosminexus のバージョン (Cosminexus の製品名)

cscrcptnstop の使用方法です。

(S)

処理を終了します。

(O)

メッセージを参照して、コマンドの使用方法を確認してください。

KEOS52049-I

Communication with the HCSC-Server, to search for process instances, will now start.

プロセスインスタンスを検索するために通信を行います。

(S)

処理を続行します。

KEOS52050-I

Communication with the HCSC-Server, to search for process instances, is complete.

プロセスインスタンスを検索するための通信が完了しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52051-I

Communication with the HCSC-Server, to delete a process instance, will now start.

プロセスインスタンスを削除するために通信を行います。

(S)

処理を続行します。

KEOS52052-I

Communication with the HCSC-Server, to delete a process instance, is complete.

プロセスインスタンスを削除するための通信が完了しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52053-E

An error was detected during checking of the combination of the properties file and XML file.
(properties file name = プロパティファイル名, key = エラーが発生したプロパティキー, value =
設定されている値. But XML = XML ファイル名, tag = タグ名, type = タグの種別)

プロパティファイルと XML ファイルの組み合わせ確認でエラーが発生しました。

タグ名

XPath 形式で設定します。

タグの種別

- EXIST : 存在している
- NON EXIST : 存在していない

(S)

処理を終了します。

(O)

XML ファイルとプロパティファイルの組み合わせは正しく行わないといけません。
XML ファイルとプロパティファイルの組み合わせを見直し, 再度コマンド実行して
ください。

KEOS52054-I

The deleted row count is 削除された行数.

削除した行数は削除された行数です。

(S)

処理を終了します。

KEOS52055-I

cscutil will now start.

cscutil コマンドを起動します。

(S)

処理を続行します。

KEOS52056-I

cscutil ended normally.

cscutil コマンドが正常終了しました。

(S)

処理を終了します。

KEOS52057-I

cscrcptnstart will now start.

cscrcptnstart コマンドを起動します。

(S)

処理を続行します。

KEOS52058-I

cscrcptnstart ended normally.

cscrcptnstart コマンドが正常終了しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52059-E

An error occurred during reading of a file. (encoding = 指定されたエンコーディング名, file = エラーが発生したファイル名, details = エラーの詳細メッセージ)

ファイル読み込みでエラーが発生しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

指定されたエンコーディング名を確認し、再度実行してください。

KEOS52060-E

An error occurred during reading of a file. (file name = エラーが発生したファイル名, details = エラーの詳細メッセージ)

ファイル読み込みでエラーが発生しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

エラーの原因を対策し、再度実行してください。

KEOS52061-E

cscrcptnstart ended abnormally.

cscrcptnstart コマンドが異常終了しました。

(S)

処理を続行します。

(O)

直前に出力しているエラーメッセージを参照してください。

KEOS52062-E

An empty file is specified. (file name = 空のファイル名)

空のファイルが指定されています。

(S)

処理を終了します。

(O)

指定したファイルを確認して、再度オペレーションを実施してください。

KEOS52063-E

A specified file cannot be accessed. (file name = アクセスできなかったファイル名)

指定ファイルは、何らかの原因によって、アクセスできません。

(S)

処理を終了します。

(O)

指定したファイルを確認して、再度オペレーションを実施してください。

KEOS52064-E

cscutil ended abnormally.

cscutil コマンドが異常終了しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

直前に出力しているエラーメッセージを参照してください。

KEOS52065-I

Usage:

cscutil [-h] [-user <id>] [-pass <passwd>]

{-mng <manager name> |

-host <host>:<port> -mnguser <manager id> [-mngpass <manager passwd>]}

[-target <target name>] [-operation <operation name>]

[-props <property> | -propfile <property file>]}

[-binary <binary file>]

--

Version Cosminexus のバージョン (Cosminexus の製品名)

cscutil の使用方法です。

11. メッセージ

(S)

処理を続行します。

KEOS52066-I

Checking of the command arguments will now start.

コマンドの引数のチェックを開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS52067-I

Checking of the command arguments ended normally.

コマンドの引数のチェックが正常終了しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52068-I

Authentication for HCSC-Manager will now start.

HCSC-Manager への認証を開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS52069-I

Authentication for HCSC-Manager ended normally.

HCSC-Manager への認証が正常終了しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52070-I

Now connecting to " マネージャ識別名 " ...

Manager のリモート管理機能への接続を開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS52071-I

Connection to the remote management function was established successfully.

Manager のリモート管理機能への接続が正常終了しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52072-I

オペレーションを開始します。オブジェクト名=[オブジェクト名] オペレーション名=[オペレーション]

Operation is started. (target = オブジェクト名 , operation = オペレーション)

オペレーションを開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS52073-I

オペレーションが正常終了しました。

Operation was finished normally.

オペレーションが正常終了しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52074-W

A file with the same name cannot be deleted when writing re-execution results to a file. (file = ファイル名 , data = 出力しようとしたデータ)

再実行結果をファイル出力する際に同一名のファイルを削除できません。

(S)

処理を続行します。

(O)

ファイルを削除できない理由を調査してください。

KEOS52075-W

An attempt to write re-execution results to a file has failed. (details = エラーの詳細情報 , file = ファイル名 , data = 出力しようとしたデータ)

再実行結果のファイル出力に失敗しました。

(S)

処理を続行します。

(O)

詳細メッセージを参考にして、ファイルの書き込みに失敗する理由を調査してください。

KEOS52076-I

cscpireexec will now start.

cscpireexec コマンドを起動します。

11. メッセージ

(S)

処理を続行します。

KEOS52077-I

cscpireexec ended normally.

cscpireexec コマンドが正常終了しました。

(S)

処理を終了します。

KEOS52078-E

cscpireexec ended abnormally.

cscpireexec コマンドが異常終了しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

直前に出力しているエラーメッセージを参照してください。

KEOS52079-I

cscpasswd will now start.

cscpasswd コマンドを起動します。

(S)

処理を続行します。

KEOS52080-I

cscpasswd ended normally.

cscpasswd コマンドが正常終了しました。

(S)

処理を終了します。

KEOS52081-E

cscpasswd ended abnormally.

cscpasswd コマンドが異常終了しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

直前に出力しているエラーメッセージを参照してください。

KEOS52082-I

cscrepctl will now start.

cscrepctl コマンドを起動します。

(S)

処理を続行します。

KEOS52083-I

cscrepctl ended normally.

cscrepctl コマンドが正常終了しました。

(S)

処理を終了します。

KEOS52084-E

cscrepctl ended abnormally.

cscrepctl コマンドが異常終了しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

直前に出力しているエラーメッセージを参照してください。

KEOS52085-I

cscsvsetup will now start.

cscsvsetup コマンドを起動します。

(S)

処理を続行します。

KEOS52086-I

cscsvsetup ended normally.

cscsvsetup コマンドが正常終了しました。

(S)

処理を終了します。

KEOS52087-E

cscsvsetup ended abnormally.

cscsvsetup コマンドが異常終了しました。

(S)

処理を終了します。

11. メッセージ

(O)

直前に出力しているエラーメッセージを参照してください。

KEOS52088-I

cscsvunsetup will now start.

cscsvunsetup コマンドを起動します。

(S)

処理を続行します。

KEOS52089-I

cscsvunsetup ended normally.

cscsvunsetup コマンドが正常終了しました。

(S)

処理を終了します。

KEOS52090-E

cscsvunsetup ended abnormally.

cscsvunsetup コマンドが異常終了しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

直前に出力しているエラーメッセージを参照してください。

KEOS52091-I

cscconsetup will now start.

cscconsetup コマンドを起動します。

(S)

処理を続行します。

KEOS52092-I

cscconsetup ended normally.

cscconsetup コマンドが正常終了しました。

(S)

処理を終了します。

KEOS52093-E

cscconsetup ended abnormally.

cscconsetup コマンドが異常終了しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

直前に出力しているエラーメッセージを参照してください。

KEOS52094-I

cscconunsetup will now start.

cscconunsetup コマンドを起動します。

(S)

処理を続行します。

KEOS52095-I

cscconunsetup ended normally.

cscconunsetup コマンドが正常終了しました。

(S)

処理を終了します。

KEOS52096-E

cscconunsetup ended abnormally.

cscconunsetup コマンドが異常終了しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

直前に出力しているエラーメッセージを参照してください。

KEOS52097-I

csccompodeploy will now start.

csccompodeploy コマンドを起動します。

(S)

処理を続行します。

KEOS52098-I

csccompodeploy ended normally.

csccompodeploy コマンドが正常終了しました。

(S)

処理を終了します。

KEOS52099-E

csccompodeploy ended abnormally.

csccompodeploy コマンドが異常終了しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

直前に出力しているエラーメッセージを参照してください。

KEOS52100-I

csccompounddeploy will now start.

csccompounddeploy コマンドを起動します。

(S)

処理を続行します。

KEOS52101-I

csccompounddeploy ended normally.

csccompounddeploy コマンドが正常終了しました。

(S)

処理を終了します。

KEOS52102-E

csccompounddeploy ended abnormally.

csccompounddeploy コマンドが異常終了しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

直前に出力しているエラーメッセージを参照してください。

KEOS52103-W

There is a conflict with information that has already been set. The set information will be ignored.

(key = 構成定義ファイルに定義してある要素への XPath, value = 指定した値, already set value = すでに設定されている値)

すでにセットアップされている情報と異なります。設定した情報は無視されます。

(S)

処理を続行します。

(O)

すでにセットアップされている情報を変更したい場合はアンセットアップを行って

ください。

KEOS52104-E

The request type that is already set up is not set to ON. (type = リクエスト種別)

すでにセットアップされているリクエスト種別が ON に設定されていません。

リクエスト種別

- request-ejb : EJB 呼び出し
- request-jms : JMS 呼び出し
- request-soap : SOAP 呼び出し
- request-dbq : DBQ 呼び出し

(S)

処理を終了します。

(O)

すでにセットアップされているリクエスト種別を ON にして再度セットアップを行ってください。

KEOS52105-E

Cosminexus Manager does not exist, even though HCSC-Server is in the repository.

(HCSC-Server name = HCSC サーバ名, Cosminexus Manager name = Cosminexus Manager 名)

HCSC サーバがリポジトリ内に存在しているにもかかわらず CosminexusManager が存在していません。

(S)

処理を終了します。

(O)

指定した CosminexusManager 名と HCSC サーバ名について次の内容を確認してください。

1. 指定した HCSC サーバと CosminexusManager が存在しているかどうか。
2. 指定した CosminexusManager 上に HCSC サーバが存在しているかどうか。

KEOS52106-E

The cluster does not exist, even though HCSC-Server is in the repository. (HCSC-Server name = HCSC サーバ名, cluster name = クラスタ名)

HCSC サーバがリポジトリ内に存在しているにもかかわらずクラスタが存在していません。

(S)

処理を終了します。

(O)

指定したクラスタ名と HCSC サーバ名について次の内容を確認してください。

11. メッセージ

1. 指定した HCSC サーバとクラスタが存在しているかどうか。
2. 指定した CosminexusManager 上にクラスタが存在しているかどうか。

KEOS52107-E

An error occurred because it differed from the value to which the set value had already been set in properties. (file = エラーが発生したファイル名, key = 構成定義ファイルに定義してある要素への XPath, またはエラーが発生したプロパティファイルのキー, value = 指定した値, already setup value = すでに設定されている値)

設定した値がすでに設定されている値と異なるためエラーが発生しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

すでに設定されている値を確認し, 再度セットアップを実施してください。

KEOS52108-E

The new reception information differs from the already set up HCSC-Server reception information. (cluster name = クラスタ名, current setup = すでにセットアップされている受付情報, new setup information = セットアップ時に指定した受付情報)

セットアップする HCSC サーバの受付情報が不一致です。

すでにセットアップされている受付情報

- HCSC サーバ名: 受付情報の形式で出力されます。

セットアップ時に指定した受付情報

- 受付情報 =ON または OFF の形式で出力されます。

(S)

処理を終了します。

(O)

受付情報が一致するように HCSC サーバのセットアップを実施してください。

KEOS52109-E

Please perform unsetup of the HCSC-Server that has fewer reception types. (cluster name = クラスタ名, current setup = すでにセットアップされている受付情報)

受付種別の多い HCSC サーバをアンセットアップしようとしてしました。

すでにセットアップされている受付情報

- HCSC サーバ名: 受付情報の形式で出力します。

(S)

処理を終了します。

(O)

HCSC サーバのアンセットアップを行う場合、受付種別の少ない HCSC サーバから先にアンセットアップしてください。

KEOS52110-I

Usage:

```
cscrcptnstop [-h] [-user <User Id>] [-pass <Password>]
               { -csc <HCSC-Server Name> | -cluster <Cluster Name> }
               [ { -standard | -userdef } ]
               [-stopfg { normal | wait | force } ]
```

--

Version Cosminexus のバージョン (Cosminexus の製品名)
cscrcptnstop の使用方法です。

(S)

処理を終了します。

(O)

メッセージを参照して、コマンドの使用方法を確認してください。

KEOS52111-I

cscrcptnstop will now start.

cscrcptnstop コマンドを起動します。

(S)

処理を続行します。

KEOS52112-I

cscrcptnstop ended normally.

cscrcptnstop コマンドが正常終了しました。

(S)

処理を終了します。

KEOS52113-E

cscrcptnstop ended abnormally.

cscrcptnstop コマンドが異常終了しました。

(S)

処理を終了します。

11. メッセージ

(O)

直前に出力しているエラーメッセージを参照してください。

KEOS52114-I

Usage:

```
csccompostart [-h] [-user <User Id>] [-pass <Password>]
  {
    -csc <HCSC-Server Name> { -name <ServiceID> | -all }
  | -cluster <Cluster Name> { -name <ServiceID> | -all }
  }
```

--

Version Cosminexus のバージョン (Cosminexus の製品名)

csccompostart の使用方法です。

(S)

処理を終了します。

(O)

メッセージを参照して、コマンドの使用方法を確認してください。

KEOS52115-I

csccompostart will now start.

csccompostart コマンドを起動します。

(S)

処理を続行します。

KEOS52116-I

csccompostart ended normally.

csccompostart コマンドが正常終了しました。

(S)

処理を終了します。

KEOS52117-E

csccompostart ended abnormally.

csccompostart コマンドが異常終了しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

直前に出力しているエラーメッセージを参照してください。

KEOS52118-I

Usage:

```
csccompostop [-h] [-user <User Id>] [-pass <Password>]
    {
    -csc <HCSC-Server Name> { -name <ServiceID> | -all }
    | -cluster <Cluster Name> { -name <ServiceID> | -all }
    }
```

--

Version Cosminexus のバージョン (Cosminexus の製品名)

csccompostop の使用方法です。

(S)

処理を終了します。

(O)

メッセージを参照して、コマンドの使用方法を確認してください。

KEOS52119-I

csccompostop will now start.

csccompostop コマンドを起動します。

(S)

処理を続行します。

KEOS52120-I

csccompostop ended normally.

csccompostop コマンドが正常終了しました。

(S)

処理を終了します。

KEOS52121-E

csccompostop ended abnormally.

csccompostop コマンドが異常終了しました。

(S)

処理を終了します。

11. メッセージ

(O)

直前に出力しているエラーメッセージを参照してください。

KEOS52122-I

cscenvbackup will now start.

cscenvbackup コマンドを起動します。

(S)

処理を続行します。

KEOS52123-I

cscenvbackup ended normally.

cscenvbackup コマンドが正常終了しました。

(S)

処理を終了します。

KEOS52124-E

cscenvbackup ended abnormally.

cscenvbackup コマンドが異常終了しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

直前に出力しているエラーメッセージを参照してください。

KEOS52125-I

cscenvrestore will now start.

cscenvrestore コマンドを起動します。

(S)

処理を続行します。

KEOS52126-I

cscenvrestore ended normally.

cscenvrestore コマンドが正常終了しました。

(S)

処理を終了します。

KEOS52127-W

The component is already deleted. (HCSC-Server name = HCSC サーバ名, component type = 配備するコンポーネント種別, component name = 配備するコンポーネント名)

指定したコンポーネントはすでに削除されています。

配備するコンポーネント種別

- bp : ビジネスプロセス
- adapter : サービスアダプタ
- urcptn : ユーザ定義受付

(S)

処理を終了します。

KEOS52128-I

Usage:

```
cscrepdiff [-h] [-user <User Id>] [-pass <Password>]
```

```
-replib <Zip File Name>
```

```
--
```

Version Cosminexus のバージョン (Cosminexus の製品名)

cscrepdiff の使用方法です。

(S)

処理を終了します。

(O)

メッセージを参照して, コマンドの使用方法を確認してください。

KEOS52129-I

cscrepdiff will now start.

cscrepdiff コマンドを起動します。

(S)

処理を続行します。

KEOS52130-I

cscrepdiff ended normally.

cscrepdiff コマンドが正常終了しました。

(S)

処理を終了します。

KEOS52131-E

cscrepdiff ended abnormally.

cscrepdiff コマンドが異常終了しました。

(S)

処理を続行します。

(O)

直前に出力しているエラーメッセージを参照してください。

KEOS52132-I

Usage:

cscstatus [-h] [-user <User Id>] [-pass <Password>]

[-csc <HCSC-Server Name> -type { reception | compo | system }]

--

Version Cosminexus のバージョン (Cosminexus の製品名)

cscstatus の使用方法です。

(S)

処理を終了します。

(O)

メッセージを参照して、コマンドの使用方法を確認してください。

KEOS52133-I

cscstatus will now start.

cscstatus コマンドを起動します。

(S)

処理を続行します。

KEOS52134-I

cscstatus ended normally.

cscstatus コマンドが正常終了しました。

(S)

処理を終了します。

KEOS52135-E

cscstatus ended abnormally.

cscstatus コマンドが異常終了しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

直前に出力しているエラーメッセージを参照してください。

KEOS52136-E

An error occurred because the specified value is already set. (file in which error occurred = エラーが発生したファイル名, key = 構成定義ファイルに定義してある要素への XPath, またはエラーが発生したプロパティファイルのキー, specified value = 指定した値, already set value = すでに設定されている値)

設定した値がすでに設定されている値と同一であるため、エラーが発生しました。

すでに設定されている値

- HCSC サーバ名：値の形式で出力します。

(S)

処理を終了します。

(O)

すでに設定されている値を確認し、再度セットアップを実施してください。

KEOS52137-E

cscenvrestore ended abnormally.

cscenvrestore コマンドが異常終了しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

直前に出力しているエラーメッセージを参照してください。

KEOS52138-I

Usage:

```
cscenvbackup [-h] [-user <User Id>] [-pass <Password>]
              [-backupdir <ZipFileOutputDirectory>]
```

--

Version Cosminexus のバージョン (Cosminexus の製品名)

cscenvbackup の使用方法です。

(S)

処理を終了します。

(O)

メッセージを参照して、コマンドの使用方法を確認してください。

KEOS52139-I

Usage:

```
cscenvrestore [-h] [-user <User Id>] [-pass <Password>]
               [-restorefile <BackupZipFileName>]
```

--

Version Cosminexus のバージョン (Cosminexus の製品名)
cscenvrestore の使用方法です。

(S)

処理を終了します。

(O)

メッセージを参照して、コマンドの使用方法を確認してください。

KEOS52140-E

An attempt to parse the HCSC-Server configuration definition file has failed. (file name = HCSC
サーバ構築定義ファイル名, details = エラーの詳細)

HCSC サーバ構築定義ファイルの解析に失敗しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

詳細メッセージを参照してください。詳細メッセージが **** の場合は、メッセージ
ログに出力されている KEOS52141-E メッセージを参照し、対策してください。

KEOS52141-E

A parsing error occurred. (type = 種別, details = 発生したエラーの詳細)
解析エラーの詳細です。

種別

- warning : 警告が発生しました。
- error : エラーが発生しました。
- fatalError : 致命的エラーが発生しました。

(S)

処理を続行します。

(O)

詳細メッセージを参照して対策してください。

KEOS52142-E

An error occurred while checking the values specified in the XML file. (tag name = タグ名, value = 指定した値)

XML ファイルに指定された値の検証でエラーが発生しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

仕様を確認し、タグに指定した値を確認し、再度実施してください。

KEOS52143-E

An error occurred while checking the properties file. (file name = プロパティファイル名)

プロパティファイルの検証でエラーが発生しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

メッセージログに出力されている KEOS50026-E メッセージを参照し、対策してください。

KEOS52144-E

An error occurred while checking the defined values in the properties file. (key name = キー名, value = 指定された値, error type = エラー種別)

プロパティファイルの定義値の検証でエラーが発生しました。

エラー種別

- NO_KEY : 必須プロパティが指定されていません。
- BAD_KEY : 不正なキーが指定されています。
- INVALID_VALUE : キー値が不正です。

(S)

処理を終了します。

(O)

仕様を確認し、再度実施してください。

KEOS52145-E

An error occurred while checking the HCSC-Server setup file. (file name = エラーが発生したファイル名)

HCSC サーバのセットアップファイルの検証でエラーが発生しました。

(S)

処理を終了します。

11. メッセージ

(O)

メッセージログに出力されている KEOS52142-E メッセージを参照し、対策してください。

KEOS52146-I

Usage:

```
cscsvccctl [-h] [-user <User Id>] [-pass <Password>]
```

```
{  
  -getfile <Get File Path>  
  | -setfile<Set File Path>  
  | [-cluster <Cluster Name>] -name <ServiceID> -props <property>  
}
```

--

Version Cosminexus のバージョン (Cosminexus の製品名)

cscsvccctl の使用方法です。

(S)

処理を終了します。

(O)

メッセージを参照して、コマンドの使用方法を確認してください。

KEOS52147-I

cscsvccctl will now start.

cscsvccctl コマンドを起動します。

(S)

処理を続行します。

KEOS52148-I

cscsvccctl ended normally.

cscsvccctl コマンドが正常終了しました。

(S)

処理を終了します。

KEOS52149-E

cscsvccctl ended abnormally.

cscsvccctl コマンドが異常終了しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

直前に出力しているエラーメッセージを参照してください。

KEOS52150-I

Usage:

cscsvcls [-h] [-user <User Id>] [-pass <Password>] [-detail]

--

Version Cosminexus のバージョン (Cosminexus の製品名)

cscsvcls の使用方法です。

(S)

処理を終了します。

(O)

メッセージを参照して、コマンドの使用方法を確認してください。

KEOS52151-I

cscsvcls will now start.

cscsvcls コマンドを起動します。

(S)

処理を続行します。

KEOS52152-I

cscsvcls ended normally.

cscsvcls コマンドが正常終了しました。

(S)

処理を終了します。

KEOS52153-E

cscsvcls ended abnormally.

cscsvcls コマンドが異常終了しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

直前に出力しているエラーメッセージを参照してください。

KEOS52154-E

The Service information was not found.

サービス情報が見つかりませんでした。

(S)

処理を終了します。

(O)

サービスアダプタがインポートされていません。インポートを実施してから、再度実行してください。

KEOS52159-I

Usage:

csccompoconfig [-h] -user <User Id> -pass <Password>

```
{
  -operation get -csc <HCSC-Server Name> -name <ReceptionID>
| -operation set -propfile <Component Property File Path>
  { -csc <HCSC-Server Name> -name <ReceptionID>
    | -cluster <Cluster Name> -name <ReceptionID> }
}
```

--

Version Cosminexus のバージョン (Cosminexus の製品名)

csccompoconfig の使用方法です。

(S)

処理を続行します。

(O)

メッセージを参照して、コマンドの使用方法を確認してください。

KEOS52160-I

csccompoconfig will now start.

csccompoconfig コマンドを起動します。

(S)

処理を続行します。

KEOS52161-I

csccompoconfig ended normally.

csccompoconfig コマンドが正常終了しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52162-E

cscscompoconfig ended abnormally.

cscscompoconfig コマンドが異常終了しました。

(S)

処理を続行します。

(O)

直前に出力しているエラーメッセージを参照してください。

KEOS52163-W

The specified service has not been deployed. (service name = サービス名)

指定したサービス部品は配備されていません。

(S)

処理を続行します。

(O)

指定したサービス部品が配備されているか確認してください。

KEOS52164-W

The deployment check of the service could not be executed.

サービス部品の配備チェックができませんでした。

(S)

処理を続行します。

KEOS52165-W

The specified component has already been deleted. (cluster name = クラスタ名, component name = 配備するコンポーネント名)

指定したコンポーネントはすでに削除されています。

(S)

処理を終了します。

KEOS52166-W

The status of some information could not be acquired.

状態が取得できなかった情報があります。

(S)

処理を続行します。

11. メッセージ

(O)

メッセージログを参照し、エラー内容を確認してください。

KEOS52175-I

The values in the cluster that must be unique will now be verified.

クラスタ内でユニークであるべき値の検証を開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS52176-I

The values in the cluster that must be unique were verified successfully.

クラスタ内でユニークであるべき値の検証が完了しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52177-I

The validity of the set value(s) will now be verified.

設定値の妥当性の検証を開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS52178-I

The validity of the set value(s) was verified successfully.

設定値の妥当性の検証が完了しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52179-E

The operation for the specified component cannot be executed. (HCSC-Server name = HCSC サーバ名, component type = 指定されたコンポーネント種別, component name = 指定されたコンポーネント名)

指定されたコンポーネントに対する操作は実行できません。

指定されたコンポーネント種別

- bp : ビジネスプロセス
- adapter : サービスアダプタ

(S)

処理を終了します。

(O)

指定したコンポーネント ID がその操作で有効な ID かどうか確認してください。

KEOS52180-W

An attempt to automatically back up the HCSC-Manager environment has failed.

HCSC-Manager 環境の自動バックアップが失敗しました。

(S)

処理を続行します。

(O)

HCSC-Manager 環境の自動バックアップが失敗した要因を取り除き、必要に応じて cscenvbackup コマンドで HCSC-Manager 環境のバックアップファイルを取得してください。

KEOS52181-I

Usage:

```
cscapputil [-h] -user <User Id> -pass <Password>
  {
    -mng <Manager Name>
  | -host <Host>:<Port> -mnguser <Manager Id>
    [-mngpass <Manager Passwd>]
  }
  {
    -operation { start | stop | delete }
    -j2ee <J2EE Server Name> -app <Application Name>
  | -operation list -j2ee <J2EE Server Name>
  }

```

--

Version Cosminexus のバージョン (Cosminexus の製品名)

cscapputil の使用方法です。

(S)

処理を続行します。

(O)

メッセージを参照して、コマンドの使用方法を確認してください。

KEOS52182-I

cscapputil will now start.

cscapputil コマンドを起動します。

(S)

処理を続行します。

KEOS52183-I

cscapputil ended normally.

cscapputil コマンドが正常終了しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52184-E

cscapputil ended abnormally.

cscapputil コマンドが異常終了しました。

(S)

処理を続行します。

(O)

直前に出力しているエラーメッセージを参照してください。

KEOS52185-E

An error occurred while the definition file used to change the service information was being output.

(details = 詳細情報)

サービス情報変更定義ファイルの出力中にエラーが発生しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

詳細情報を参照し、問題を解決してから再度実行してください。

KEOS52186-I

The service information will now be acquired.

サービス情報の取得を開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS52187-I

The service information was acquired successfully.

サービス情報の取得に成功しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52188-I

The service information will now be set.

サービス情報の設定を開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS52189-I

The service information was set successfully.

サービス情報の設定に成功しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52190-I

HCSC-Manager"s backup file has been acquired. (file name = HCSC-Manager のバックアップ
ファイル名)

HCSC-Manager 環境のバックアップに成功しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52191-I

Backup file of repository has been acquired. (file name = リポジトリのバックアップファイル名)

リポジトリのバックアップに成功しました。

なお、バックアップファイルはコマンドがエラーになる場合は、削除される可能性があります。

(S)

処理を続行します。

KEOS52192-I

Usage:

cscrestinfo [-h] -user <UserID> -pass <Password>

-csc <HCSC-Server Name>

--

Version Cosminexus のバージョン (Cosminexus の製品名)

11. メッセージ

cscresinfo の使用方法です。

(S)

処理を終了します。

(O)

メッセージを参照して、コマンドの使用方法を確認してください。

KEOS52193-I

cscresinfo will now start.

cscresinfo コマンドを起動します。

(S)

処理を続行します。

KEOS52194-I

cscresinfo ended normally.

cscresinfo コマンドが正常終了しました。

(S)

処理を終了します。

KEOS52195-E

cscresinfo ended abnormally.

cscresinfo コマンドが異常終了しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

直前に出力されたエラーメッセージを参照してください。

KEOS52196-E

An error occurred during the checking of properties-file combinations. (properties file name = プロパティファイル名, property key of the error = エラーが発生したプロパティキー, value = 設定されている値, property key of the error = エラーが発生したプロパティキー, value = 設定されている値)

プロパティファイルの組み合わせの確認でエラーが発生しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

プロパティファイルの組み合わせを見直して、再度コマンドを実行してください。

KEOS52197-I

Usage:

cscenvupdate [-h] -csc <HCSC-Server Name> [-force]

--

Version Cosminexus のバージョン (Cosminexus の製品名)

cscenvupdate の使用方法です。

(S)

処理を終了します。

(O)

メッセージを参照して、コマンドの使用方法を確認してください。

KEOS52198-I

cscenvupdate will now start.

cscenvupdate コマンドを起動します。

(S)

処理を続行します。

KEOS52199-I

cscenvupdate ended normally.

cscenvupdate コマンドが正常終了しました。

(S)

処理を終了します。

KEOS52200-E

cscenvupdate ended abnormally.

cscenvupdate コマンドが異常終了しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

直前に出力されたエラーメッセージを参照してください。

KEOS52201-I

The version of HCSC-Server will now be updated. (HCSC-Server name = HCSC サーバ名)

HCSC サーバをバージョンアップします。

(S)

処理を続行します。

11. メッセージ

KEOS52202-I

The version of HCSC-Server has been updated. (HCSC-Server name = HCSC サーバ名)
HCSC サーバをバージョンアップしました。

(S)

処理を終了します。

KEOS52203-E

cscenvupdate has already been executed. (HCSC-server name = HCSC サーバ名)
cscenvupdate コマンドがすでに実行されています。

(S)

処理を終了します。

(O)

cscenvupdate コマンドを実行しているユーザがいるかどうか確認してください。
cscenvupdate コマンドを実行しているユーザがない場合は、-force オプションを付けて、再度 cscenvupdate コマンドを実行してください。

11.6.3 KEOS52500 ~ KEOS52999

KEOS52500-I

HCSC-Manager を起動しました。

HCSC-Manager has started.

HCSC-Manager が起動しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52501-I

HCSC-Manager を終了しました。

HCSC-Manager ended.

HCSC-Manager が終了しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52502-I

ログインが選択されました。

Login was selected.

メニューからログインが選択されました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52503-I

HCSC-Manager へのログインを中断します。詳細情報 =[中断の原因]

Login to HCSC-Manager will now stop. (details = 中断の原因)

ログイン処理を中止します。

(S)

ログイン処理を終了します。

(O)

エラーによる中止の場合は、エラー原因を取り除いた後に再度ログインを実行してください。

KEOS52504-W

HCSC-Manager へログイン済みです。

Login to HCSC-Manager has already finished.

ログイン状態なので、ログインできません。

(S)

ログイン処理を終了します。

KEOS52505-I

ログアウトが選択されました。

Logout was selected.

メニューからログアウトが選択されました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52506-I

HCSC-Manager からのログアウトを中断します。

Logout from HCSC-Manager will now stop.

ログアウト処理を中止します。

(S)

ログアウト処理を終了します。

(O)

エラーによる中止の場合は、エラー原因を取り除いた後に再度ログアウトを実行してください。

KEOS52507-W

HCSC-Manager からログアウト済みです。

Logout from HCSC-Manager has already finished.

ログアウト状態なので、ログアウトできません。

(S)

ログアウト処理を終了します。

KEOS52508-Q

HCSC-Manager からログアウトします。よろしいですか？

The user will be logged out from HCSC-Manager. Is this OK?

ログアウト実行の確認メッセージです。

(S)

処理を続行します。

(O)

ログアウトする場合は [OK] ボタン , ログアウトしない場合は [キャンセル] ボタンを押してください。

KEOS52509-I

ダイアログで [はい] が選択されました。

In the dialog box, [Yes] was selected.

ダイアログで [はい] が選択されました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52510-I

ダイアログで [いいえ] が選択されました。

In the dialog box, [No] was selected.

ダイアログで [いいえ] が選択されました。

(S)

処理を終了します。

KEOS52514-I

HCSC-Manager ビューを作成します。

The HCSC-Manager view will be created.

HCSC-Manager ビューを作成します。

KEOS52515-I

HCSC-Manager ビューの作成が完了しました。

The creation of the HCSC-Manager view has finished.

HCSC-Manager ビューの作成が完了しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52516-E

HCSC-Manager ビューの表示でエラーが発生しました。詳細情報 =[エラー詳細情報]

An error occurred in the display of the HCSC-Manager view. (details = エラー詳細情報)

HCSC-Manager ビューを作成する処理中にエラーが発生しました。

(S)

HCSC-Manager ビューの作成処理を終了します。

(O)

エラー詳細情報を確認してください。

KEOS52517-I

HCSC-Manager ビューを閉じました。

The HCSC-Manager view closed.

HCSC-Manager ビューを閉じました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52518-I

情報の取得を開始します。

The information acquisition will now start.

情報の取得を開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS52519-I

情報の取得に成功しました。

The information was acquired successfully.

情報の取得に成功しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52520-Q

HCSC サーバ [HCSC サーバ名] を起動します。よろしいですか？

The HCSC-Server "HCSC サーバ名" will start. Is this OK?

HCSC サーバの起動確認メッセージです。

(S)

処理を続行します。

(O)

ログアウトする場合は [OK] ボタン , ログアウトしない場合は [キャンセル] ボタンを押してください。

KEOS52521-Q

HCSC サーバ [HCSC サーバ名] を停止します。よろしいですか？

The HCSC-Server "HCSC サーバ名" will stop. Is this OK?

HCSC サーバの停止確認メッセージです。

(S)

処理を続行します。

(O)

ログアウトする場合は [OK] ボタン , ログアウトしない場合は [キャンセル] ボタンを押してください。

KEOS52522-Q

HCSC サーバ [HCSC サーバ名] の標準受付を開始します。よろしいですか？

The standard reception for the HCSC-Server "HCSC サーバ名" will now start. Is this OK?

HCSC サーバ標準受付の開始確認メッセージです。

(S)

処理を続行します。

(O)

ログアウトする場合は [OK] ボタン , ログアウトしない場合は [キャンセル] ボタンを押してください。

KEOS52523-Q

HCSC サーバ [HCSC サーバ名] の標準受付を通常停止します。よろしいですか？

A normal stop of the standard reception for the HCSC-Server "HCSC サーバ名" will now be performed. Is this OK?

HCSC サーバ標準受付の通常停止確認メッセージです。

(S)

処理を続行します。

(O)

ログアウトする場合は [OK] ボタン , ログアウトしない場合は [キャンセル] ボタンを押してください。

KEOS52524-Q

HCSC サーバ [HCSC サーバ名] の標準受付を計画停止します。よろしいですか？

A planned stop of the standard reception for the HCSC-Server "HCSC サーバ名 " will now be performed. Is this OK?

HCSC サーバ標準受付の計画停止確認メッセージです。

(S)

処理を続行します。

(O)

ログアウトする場合は [OK] ボタン , ログアウトしない場合は [キャンセル] ボタンを押してください。

KEOS52525-Q

HCSC サーバ [HCSC サーバ名] の連携受付を開始します。よろしいですか？

The linkage reception for the HCSC-Server "HCSC サーバ名 " will now start. Is this OK?

HCSC サーバ連携受付の開始確認メッセージです。

(S)

処理を続行します。

(O)

ログアウトする場合は [OK] ボタン , ログアウトしない場合は [キャンセル] ボタンを押してください。

KEOS52526-Q

HCSC サーバ [HCSC サーバ名] の連携受付を通常停止します。よろしいですか？

A normal stop of the linkage reception for the HCSC-Server "HCSC サーバ名 " will now be performed. Is this OK?

HCSC サーバ連携受付の通常停止確認メッセージです。

(S)

処理を続行します。

(O)

ログアウトする場合は [OK] ボタン , ログアウトしない場合は [キャンセル] ボタンを押してください。

KEOS52527-Q

HCSC サーバ [HCSC サーバ名] の連携受付を計画停止します。よろしいですか？

A planned stop of the linkage reception for the HCSC-Server "HCSC サーバ名" will be performed. Is this OK?

HCSC サーバ連携受付の計画停止確認メッセージです。

(S)

処理を続行します。

(O)

ログアウトする場合は [OK] ボタン，ログアウトしない場合は [キャンセル] ボタンを押してください。

KEOS52528-Q

HCSC サーバ [連携元 HCSC サーバ名] とクラスタ [連携先クラスタ名] の連携を開始します。よろしいですか？

The HCSC-Server "連携元 HCSC サーバ名" and the cluster "連携先クラスタ名" will be linked. Is this OK?

HCSC サーバとクラスタの連携開始確認メッセージです。

(S)

処理を続行します。

(O)

ログアウトする場合は [OK] ボタン，ログアウトしない場合は [キャンセル] ボタンを押してください。

KEOS52529-Q

HCSC サーバ [連携元 HCSC サーバ名] とクラスタ [連携先クラスタ名] の連携を停止します。よろしいですか？

The linkage of the HCSC-Server "連携元 HCSC サーバ名" and the cluster "連携先クラスタ名" will be stopped. Is this OK?

HCSC サーバとクラスタの連携停止確認メッセージです。

(S)

処理を続行します。

(O)

ログアウトする場合は [OK] ボタン，ログアウトしない場合は [キャンセル] ボタンを押してください。

KEOS52530-Q

ビジネスプロセス [ビジネスプロセスのサービス ID] を開始します。よろしいですか？

The business process " ビジネスプロセスのサービス ID" will start. Is this OK?

ビジネスプロセスの開始確認メッセージです。

(S)

処理を続行します。

(O)

ログアウトする場合は [OK] ボタン , ログアウトしない場合は [キャンセル] ボタンを押してください。

KEOS52531-Q

ビジネスプロセス [ビジネスプロセスのサービス ID] を停止します。よろしいですか？

The business process " ビジネスプロセスのサービス ID" will stop. Is this OK?

ビジネスプロセスの停止確認メッセージです。

(S)

処理を続行します。

(O)

ログアウトする場合は [OK] ボタン , ログアウトしない場合は [キャンセル] ボタンを押してください。

KEOS52532-Q

サービスアダプタ [サービスアダプタのサービス名] を開始します。よろしいですか？

The service adapter " サービスアダプタのサービス名 " will start. Is this OK?

サービスアダプタの開始確認メッセージです。

(S)

処理を続行します。

(O)

ログアウトする場合は [OK] ボタン , ログアウトしない場合は [キャンセル] ボタンを押してください。

KEOS52533-Q

サービスアダプタ [サービスアダプタのサービス名] を停止します。よろしいですか？

The service adapter " サービスアダプタのサービス名 " will stop. Is this OK?

サービスアダプタの停止確認メッセージです。

(S)

処理を続行します。

(O)

ログアウトする場合は [OK] ボタン , ログアウトしない場合は [キャンセル] ボタンを押してください。

KEOS52534-I

HCSC サーバの起動に成功しました。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名]

The HCSC-Server started successfully. (HCSC-Server = HCSC サーバ名)

HCSC サーバの起動成功メッセージです。

(S)

処理を続行します。

KEOS52535-I

HCSC サーバの停止に成功しました。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名]

The HCSC-Server stopped successfully. (HCSC-Server = HCSC サーバ名)

HCSC サーバの停止に成功しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52536-I

HCSC サーバの標準受付開始に成功しました。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名]

The standard reception for the HCSC-Server started successfully. (HCSC-Server = HCSC サーバ名)

HCSC サーバの標準受付開始に成功しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52537-I

HCSC サーバの標準受付通常停止に成功しました。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名]

The normal stop of the standard reception for the HCSC-Server was successful. (HCSC-Server = HCSC サーバ名)

HCSC サーバの標準受付通常停止に成功しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52538-I

HCSC サーバの連携受付開始に成功しました。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名]

The linkage reception for the HCSC-Server started successfully. (HCSC-Server = HCSC サーバ名)

HCSC サーバの連携受付開始に成功しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52539-I

HCSC サーバの連携受付通常停止に成功しました。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名]

The normal stop of the linkage reception for the HCSC-Server was successful. (HCSC-Server = HCSC サーバ名)

HCSC サーバの連携受付通常停止に成功しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52540-I

HCSC サーバとクラスタの連携開始に成功しました。HCSC サーバ名 =[連携元 HCSC サーバ名] クラスタ名 =[連携先クラスタ名]

The HCSC-Server and the cluster linked successfully. (HCSC-Server = 連携元 HCSC サーバ名 , cluster = 連携先クラスタ名)

HCSC サーバとクラスタの連携開始に成功しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52541-I

HCSC サーバとクラスタの連携停止に成功しました。HCSC サーバ名 =[連携元 HCSC サーバ名] クラスタ名 =[連携先クラスタ名]

The linkage of the HCSC-Server and the cluster ended normally. (HCSC-Server = 連携元 HCSC サーバ名 , cluster = 連携先クラスタ名)

HCSC サーバとクラスタの連携停止に成功しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52542-I

ビジネスプロセスの開始に成功しました。ビジネスプロセス名 =[ビジネスプロセスのサービス ID]

The business process started successfully. (business process = ビジネスプロセスのサービス ID)

ビジネスプロセスの開始に成功しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52543-I

ビジネスプロセスの停止に成功しました。ビジネスプロセス名 =[ビジネスプロセスのサービス ID]

The business process ended normally. (business process = ビジネスプロセスのサービス ID)

ビジネスプロセスの停止に成功しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52544-I

サービスアダプタの開始に成功しました。サービスアダプタ名 =[サービスアダプタのサービス名]

The service adapter started successfully. (service adapter = サービスアダプタのサービス名)

サービスアダプタの開始に成功しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52545-I

サービスアダプタの停止に成功しました。サービスアダプタ名 =[サービスアダプタのサービス名]

The service adapter stopped successfully. (service adapter = サービスアダプタのサービス名)

サービスアダプタの停止に成功しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52546-E

HCSC サーバの起動に失敗しました。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名] 詳細情報 =[エラー詳細情報]

An attempt to start the HCSC-Server has failed. (HCSC-Server = HCSC サーバ名 , details = エラー詳細情報)

HCSC サーバの起動に失敗しました。

(S)

HCSC サーバの起動処理を終了します。

(O)

エラー詳細情報を確認してください。

KEOS52547-E

HCSC サーバの停止に失敗しました。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名] 詳細情報 =[エラー詳細情報]

An attempt to stop the HCSC-Server has failed. (HCSC-Server = HCSC サーバ名 , details = エラー詳細情報)

HCSC サーバの停止に失敗しました。

(S)

HCSC サーバの停止処理を終了します。

(O)

エラー詳細情報を確認してください。

KEOS52548-E

HCSC サーバの標準受付開始に失敗しました。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名] 詳細情報 =[エラー詳細情報]

An attempt to start the standard reception for the HCSC-Server has failed. (HCSC-Server = HCSC サーバ名 , details = エラー詳細情報)

HCSC サーバの標準受付開始に失敗しました。

(S)

HCSC サーバの標準受付開始処理を終了します。

(O)

エラー詳細情報を確認してください。

KEOS52549-E

HCSC サーバの標準受付通常停止に失敗しました。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名] 詳細情報 =[エラー詳細情報]

An attempt to execute a normal stop of the standard reception for the HCSC-Server has failed. (HCSC-Server = HCSC サーバ名 , details = エラー詳細情報)

HCSC サーバの標準受付通常停止に失敗しました。

(S)

HCSC サーバの標準受付通常停止処理を終了します。

(O)

エラー詳細情報を確認してください。

KEOS52550-E

HCSC サーバの連携受付開始に失敗しました。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名] 詳細情報 =[エラー詳細情報]

11. メッセージ

An attempt to start the Linkage service for the HCSC-Server has failed. (HCSC-Server = HCSC サーバ名, details = エラー詳細情報)

HCSC サーバの連携受付開始に失敗しました。

(S)

HCSC サーバの連携受付開始処理を終了します。

(O)

エラー詳細情報を確認してください。

KEOS52551-E

HCSC サーバの連携受付通常停止に失敗しました。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名] 詳細情報 =[エラー詳細情報]

An attempt to execute a normal stop of the linkage reception for the HCSC-Server has failed. (HCSC-Server = HCSC サーバ名, details = エラー詳細情報)

HCSC サーバの連携受付通常停止に失敗しました。

(S)

HCSC サーバの連携受付通常停止処理を終了します。

(O)

エラー詳細情報を確認してください。

KEOS52552-E

HCSC サーバとクラスタの連携開始に失敗しました。HCSC サーバ名 =[連携元 HCSC サーバ名] クラスタ名 =[連携先クラスタ名] 詳細情報 =[エラー詳細情報]

An attempt to link the HCSC-Server and the cluster has failed. (HCSC-Server = 連携元 HCSC サーバ名, cluster = 連携先クラスタ名, details = エラー詳細情報)

HCSC サーバとクラスタの連携開始に失敗しました。

(S)

HCSC サーバとクラスタの連携開始処理を終了します。

(O)

エラー詳細情報を確認してください。

KEOS52553-E

HCSC サーバとクラスタの連携停止に失敗しました。HCSC サーバ名 =[連携元 HCSC サーバ名] クラスタ名 =[連携先クラスタ名] 詳細情報 =[エラー詳細情報]

An attempt to end the linkage for the HCSC-Server and the cluster has failed. (HCSC-Server = 連携元 HCSC サーバ名, cluster = 連携先クラスタ名, details = エラー詳細情報)

HCSC サーバとクラスタの連携停止に失敗しました。

- (S) HCSC サーバとクラスタの連携停止処理を終了します。
- (O) エラー詳細情報を確認してください。

KEOS52554-E

ビジネスプロセスの開始に失敗しました。ビジネスプロセス名=[ビジネスプロセスのサービス ID] 詳細情報=[エラー詳細情報]

An attempt to start the business process has failed. (business process = ビジネスプロセスのサービス ID details = エラー詳細情報)

ビジネスプロセスの開始に失敗しました。

- (S) ビジネスプロセスの開始処理を終了します。
- (O) エラー詳細情報を確認してください。

KEOS52555-E

ビジネスプロセスの停止に失敗しました。ビジネスプロセス名=[ビジネスプロセスのサービス ID] 詳細情報=[エラー詳細情報]

An attempt to stop the business process has failed. (business process = ビジネスプロセスのサービス ID details = エラー詳細情報)

ビジネスプロセスの停止に失敗しました。

- (S) ビジネスプロセスの停止処理を終了します。
- (O) エラー詳細情報を確認してください。

KEOS52556-E

サービスアダプタ開始に失敗しました。サービスアダプタ名=[サービスアダプタのサービス名] 詳細情報=[エラー詳細情報]

An attempt to start the service adapter has failed. (service adapter = サービスアダプタのサービス名, details = エラー詳細情報)

サービスアダプタ開始に失敗しました。

- (S) サービスアダプタ開始処理を終了します。
- (O) エラー詳細情報を確認してください。

KEOS52557-E

サービスアダプタの停止に失敗しました。サービスアダプタ名 =[サービスアダプタのサービス名] 詳細情報 =[エラー詳細情報]

An attempt to stop the service adapter has failed. (service adapter = サービスアダプタのサービス名 , details = エラー詳細情報)

サービスアダプタの停止に失敗しました。

(S)

サービスアダプタ停止処理を終了します。

(O)

エラー詳細情報を確認してください。

KEOS52558-I

管理対象種別 [管理対象名] の HCSC-Manager エディタを作成しました。

The HCSC-Manager editor for " 管理対象種別 " " 管理対象名 " was created.

HCSC-Manager エディタを作成しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52559-I

管理対象種別 [管理対象名] の HCSC-Manager エディタを閉じました。

The HCSC-Manager editor for " 管理対象種別 " " 管理対象名 " was closed.

HCSC-Manager エディタを閉じました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52560-E

HCSC-Manager の [管理対象名] エディタの作成に失敗しました。詳細情報 =[エラー詳細情報]

An attempt to create the HCSC-Manager editor for " 管理対象名 " has failed. (details = エラー詳細情報)

HCSC-Manager エディタの作成に失敗しました。

(S)

HCSC-Manager エディタの作成を終了します。

(O)

管理対象の情報を確認してください。

KEOS52561-W

管理対象種別 [管理対象名] は配備前状態です。

管理対象種別 " 管理対象名 " does not yet have the "Assigned" status.

管理対象種別は配備前状態なのでエディタを作成できません。

(S)

HCSC-Manager エディタの作成を終了します。

(O)

コマンドで管理対象の配備を行ってください。

KEOS52562-W

排他解除に失敗しました。解除するためには一度 Eclipse を終了してください。

An attempt to cancel the lock has failed. Please close Eclipse first, and then cancel the lock.

排他解除に失敗しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

Eclipse を再起動してください。

KEOS52563-I

クラスタ内のサーバ稼働状態を確認します。

The operation status of the server in the cluster will be checked.

クラスタ内のサーバ稼働状態を確認します。

(S)

処理を続行します。

KEOS52564-I

クラスタ内のサーバ稼働状態の確認が完了しました。

The operation status of the server in the cluster has been checked.

クラスタ内のサーバ稼働状態の確認が完了しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52565-I

HCSC サーバの標準受付計画停止に成功しました。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名]

The planned stop of the standard reception for the HCSC-Server was successful. (HCSC-Server = HCSC サーバ名)

11. メッセージ

HCSC サーバの標準受付計画停止に成功しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52566-I

HCSC サーバの連携受付計画停止に成功しました。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名]

The planned stop of the linkage reception for the HCSC-Server was successful. (HCSC-Server = HCSC サーバ名)

HCSC サーバの連携受付計画停止に成功しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52567-E

表示情報の更新中にエラーが発生しました。詳細情報 =[エラー詳細情報]

An error occurred while the displayed information was being modified. (details = エラー詳細情報)

表示情報の更新中にエラーが発生しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

エラー詳細情報を確認してください。

KEOS52568-E

ツリー作成の際、情報の取得に失敗しました。

An attempt to acquire the information failed during creation of the tree.

ツリー作成の際、情報の取得に 1 回以上失敗しました。

(S)

処理を続行します。

(O)

直前のエラー内容を確認してください。

KEOS52569-I

ただいま処理中です。しばらくお待ちください。

Processing is currently being performed. Please wait a while.

通信を伴う処理を実行中です。

(S)

処理を続行します。

(O)

プログレスダイアログが消えるまでお待ちください。

KEOS52570-I

稼働情報を正しく取得できませんでした。詳細情報 =[エラー詳細情報]

The operation information was not acquired correctly. (details = エラー詳細情報)

実行環境から状態が正しく取得できませんでした。

(S)

処理を続行します。

(O)

エラー詳細情報を確認してください。

KEOS52571-Q

ユーザ定義受付 [ユーザ定義受付] を開始します。よろしいですか？

The user-defined reception " ユーザ定義受付 " will now start. Is this OK?

ユーザ定義受付の開始確認メッセージです。

(S)

処理を続行します。

(O)

処理を続行する場合は [OK] ボタン , 中断する場合は [キャンセル] ボタンを押してください。

KEOS52572-Q

ユーザ定義受付 [ユーザ定義受付] を停止します。よろしいですか？

The user-defined reception " ユーザ定義受付 " will now stop. Is this OK?

ユーザ定義受付の停止確認メッセージです。

(S)

処理を続行します。

(O)

処理を続行する場合は [OK] ボタン , 中断する場合は [キャンセル] ボタンを押してください。

KEOS52574-Q

HCSC-Manager に適したパースペクティブに切り替えますか？

Do you want to switch to a valid perspective for the HCSC-Manager?

HCSC 運用環境に適したパースペクティブに切り替えるかの確認メッセージです。

11. メッセージ

(S)

処理を続行します。

(O)

HCSC-Manager パースペクティブに切り替える場合は [はい] ボタンを、現在のパースペクティブのままよい場合は [いいえ] ボタンを押してください。

KEOS52575-I

[管理対象名] エディタの [ページ名] ページを表示します。

Page " 管理対象名 " of the " ページ名 " editor will be displayed.

アクティブエディタを変更します。

(S)

処理を続行します。

KEOS52576-E

ページの追加に失敗しました。詳細情報 =[エラー詳細情報]

An attempt to add a page has failed. (details = エラー詳細情報)

HCSC-Manager エディタへのページ追加に失敗しました。

(S)

HCSC-Manager エディタの作成処理を終了します。

(O)

エラー詳細情報を確認してください。

KEOS52577-E

HCSC-Manager ビューの表示に失敗しました。詳細情報 =[エラー詳細情報]

An attempt to display the HCSC-Manager view has failed. (details = エラー詳細情報)

HCSC-Manager ビューの表示に失敗しました。

(S)

HCSC-Manager ビューの表示処理を終了します。

(O)

エラー詳細情報を確認してください。

KEOS52578-W

ログアウトは HCSC-Manager パースペクティブで行ってください。

Please log out from the HCSC-Manager perspective.

HCSC-Manager パースペクティブ以外ではログアウトを実行できません。

(S)

ログアウト処理を終了します。

(O)

ログアウトは HCSC-Manager パースペクティブで行ってください。

KEOS52579-I

HCSC-Manager パースペクティブを展開します。

The HCSC-Manager perspective will be expanded.

現在のパースペクティブに HCSC-Manager パースペクティブを設定します。

(S)

処理を続行します。

KEOS52580-W

実行環境とリポジトリで状態が不一致です。環境を見直してください。種別 =[不一致情報の種別]

The status of the execution environment does not match the status of the repository. Please make sure the environment is correct (type = 不一致情報の種別)

実行環境とリポジトリで状態が不一致です。環境を見直してください。

不一致情報の種別

- DeployFlag : 配備状態
- ModifiedTime : 更新日時

(S)

HCSC-Manager ビューで表示するメモリ内の配備状態を実行環境に合わせます。

(O)

実行環境 : 配備済み , リポジトリ : 配備前の場合

もう一度 csccompodeploy コマンドを実行してください。

実行環境 : 配備前 , リポジトリ : 配備済みの場合

csccompoundeploy コマンドを -ignore オプションで実行してください。

更新日時が不一致の場合

実行環境に配備されているコンポーネントを csccompoundeploy コマンドで削除したあと , csccompodeploy コマンドを実行してください。

KEOS52701-I

検索を開始します。検索条件 (WHERE 句)=[検索条件] ソート条件 (ORDER BY 句)=[ソート条件] 検索範囲 =[検索開始行 ~ 検索終了行件目]

11. メッセージ

The search will now start. (search condition (WHERE phrase) = 検索条件, sort condition (ORDER BY phrase) = [ソート条件], search range = [No. 検索開始行 -No. 検索終了行])

検索条件 (WHERE 句) = [検索条件], ソート条件 (ORDER BY 句) = [ソート条件],
検索範囲 = [検索開始行 ~ 検索終了行件目] の条件で検索を開始します。

(S)

検索処理を続行します。

KEOS52702-E

日時の指定が不正です。

The specified date or time is invalid.

日時の指定が不正です。

(S)

検索処理を終了します。

(O)

日時の範囲指定が反転 (ex.10月1日から8月1日) しています。正しく入力してください。

KEOS52703-E

状態が選択されていません。

No status has been selected.

状態が選択されていません。

(S)

検索処理を終了します。

(O)

検索するプロセスインスタンスの状態を選択してください。

KEOS52704-E

条件が入力されていません。

No condition has been entered.

条件が入力されていません。

(S)

検索処理を終了します。

(O)

関連セット定義名, 関連セット値を両方入力してください。

KEOS52706-E

検索に失敗しました。詳細情報 =[エラー詳細情報]

A search failed. (details = エラー詳細情報)

検索に失敗しました。

(S)

検索処理を終了します。

(O)

エラー詳細情報を確認してください。

KEOS52707-I

検索に成功しました。

The search was successful.

検索に成功しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52708-I

選択タブ名タブの検索条件をリセットしました。

The search conditions for the 選択タブ名 tab were reset.

選択タブ名タブの検索条件をリセットしました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52709-I

選択タブ名タブの検索条件をリセットします。

The search conditions for the 選択タブ名 tab will be reset.

選択タブ名タブの検索条件をリセットします。

(S)

処理を続行します。

KEOS52711-I

選択詳細情報名の取得を開始します。検索条件 (WHERE)=[検索条件] ソート条件 (ORDER BY)=[ソート条件] 検索範囲 =[検索開始行 ~ 検索終了行件目]

選択詳細情報名 will be acquired. (search condition (WHERE) = 検索条件 , sort condition (ORDER BY) = [ソート条件], search range = [No. 検索開始行 -No. 検索終了行])

検索条件 (WHERE) = [検索条件], ソート条件 (ORDER BY) = [ソート条件], 検索範囲 =[検索開始行 ~ 検索終了行件目] の条件で選択詳細情報名の取得を開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS52712-E

選択詳細情報名の取得に失敗しました。詳細情報 =[エラー詳細情報]

An attempt to acquire 選択詳細情報名 has failed. (details = エラー詳細情報)

選択詳細情報名の取得に失敗しました。

(S)

詳細情報取得処理を終了します。

(O)

エラー詳細情報を確認してください。

KEOS52713-I

選択詳細情報名の取得に成功しました。

選択詳細情報名 was acquired successfully.

選択詳細情報名の取得に成功しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52714-I

変数 [選択変数定義名] の値を表示しました。

The value for the variable 選択変数定義名 was displayed.

変数選択変数定義名の値を表示しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52715-I

ダイアログで OK が選択されました。

In the dialog box, [OK] was selected.

ダイアログで OK が選択されました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52716-I

ダイアログでキャンセルが選択されました。

In the dialog box, [Cancel] was selected.

ダイアログでキャンセルが選択されました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52717-I

選択したプロセスインスタンスの実行履歴削除を開始します。削除条件 (WHERE)=[削除条件]

Deletion of the execution logs for the selected process instance will now start. (deletion condition (WHERE) = [削除条件])

削除条件 (WHERE) = [削除条件] の条件でプロセスインスタンスの実行履歴削除を開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS52718-Q

選択したプロセスインスタンスの実行履歴を削除します。よろしいですか？

The execution logs for the selected process instance will be deleted. Is this OK?

実行履歴削除の確認メッセージです。

(S)

処理を続行します。

(O)

削除する場合は [OK] ボタンを , 削除しない場合は [キャンセル] ボタンを押してください。

KEOS52719-Q

「実行中」のプロセスインスタンスが含まれます。本当に削除してよろしいですか？

A process instance that is currently executing will be deleted. Are you sure you want to delete it?

選択したプロセスインスタンスに「実行中」状態が含まれていた場合の実行履歴削除の確認メッセージです。

(S)

処理を続行します。

(O)

削除する場合は [OK] ボタンを , 削除しない場合は [キャンセル] ボタンを押してください。

KEOS52720-I

選択したプロセスインスタンス [削除件数] 件の実行履歴削除に成功しました。 ([すでに削除されていた件数] 件はすでに削除されています。)

The execution logs for [削除件数] selected process instance(s) were deleted successfully. ([すでに削除されていた件数] process instance(s) have already been deleted.)

選択したプロセスインスタンスの実行履歴削除に成功しました (すでに削除されているプロセスインスタンスの実行履歴もありました)。

11. メッセージ

(S)

処理を続行します。

KEOS52721-E

選択したプロセスインスタンスの実行履歴削除に失敗しました。詳細情報 =[エラー詳細情報]

An attempt to delete the execution logs for the selected process instance has failed. (details = エラー詳細情報)

選択したプロセスインスタンスの実行履歴削除に失敗しました。詳細情報 =[エラー詳細情報]

(S)

削除処理を終了します。

(O)

エラー詳細情報を確認してください。

KEOS52722-I

選択したプロセスインスタンス [削除件数] 件の実行履歴削除に成功しました。

The execution logs for [削除件数] selected process instance(s) were deleted successfully.

選択したプロセスインスタンスの実行履歴削除に成功しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52723-I

選択したプロセスインスタンスの再実行を開始します。プロセスインスタンス ID=[再実行対象プロセスインスタンスの ID]

The selected process instance will be executed again. (process instance ID = [再実行対象プロセスインスタンスの ID])

プロセスインスタンス ID= [再実行対象プロセスインスタンスの ID] のプロセスインスタンスの再実行を開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS52724-Q

選択したプロセスインスタンスの再実行を開始します。よろしいですか？

The selected process instance will be executed again. Is this OK?

再実行の確認メッセージです。

(S)

処理を続行します。

(O)

再実行する場合は [OK] ボタンを、再実行しない場合は [キャンセル] ボタンを押してください。

KEOS52726-E

選択したプロセスインスタンスの再実行に失敗しました。詳細情報 =[エラー詳細情報]

An attempt to re-execute the selected process instance has failed. (details = エラー詳細情報)

選択したプロセスインスタンスの再実行に失敗しました。

(S)

再実行処理を終了します。

(O)

エラー詳細情報を確認してください。

KEOS52727-I

選択したプロセスインスタンスの再実行に成功しました。

The selected process instance was re-executed successfully.

選択したプロセスインスタンスの再実行に成功しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52728-I

ボタン名ボタンが押下されました。

The [ボタン名] button was selected.

ボタン名ボタンが押されました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52729-I

検索結果の次表示ボタンが押下されました。

The [Display Next] button for the search results was selected.

検索結果の次表示ボタンが押されました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52730-I

検索結果の前表示ボタンが押下されました。

The [Display Previous] button for the search results was selected.

11. メッセージ

検索結果の前表示ボタンが押されました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52731-I

詳細情報の次表示ボタンが押下されました。

The [Display Next] button for the detailed information was selected.

詳細情報の次表示ボタンが押されました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52732-I

詳細情報の前表示ボタンが押下されました。

The [Display Previous] button for the detailed information was selected.

詳細情報の前表示ボタンが押されました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52733-I

検索条件の誤入力チェックを開始します。

The check for invalid search conditions will now start.

検索条件の誤入力チェックを開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS52734-I

検索条件の誤入力チェックに成功しました。

The check for invalid search conditions was executed successfully.

検索条件の誤入力チェックに成功しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52735-W

選択したプロセスインスタンスはすでに削除されています。

The selected process instance has already been deleted.

選択したプロセスインスタンスの実行履歴はすでに削除されています。

(S)
処理を続行します。

(O)
再度、検索を実行してください。

KEOS52736-I

DB 情報の取得を開始します。

The database information will be acquired.

DB 情報の取得を開始します。

(S)
処理を続行します。

KEOS52737-I

DB 情報の取得に成功しました。UserID=[UserID]

The database information was acquired successfully. (UserID = UserID)

DB 情報の取得に成功しました。

(S)
処理を続行します。

KEOS52738-I

ユーザ定義受付の開始に成功しました。ユーザ定義受付名 =[ユーザ定義受付名]

The user-defined reception started successfully. (user-defined reception = ユーザ定義受付名)

ユーザ定義受付の開始に成功しました。

(S)
処理を続行します。

KEOS52739-I

ユーザ定義受付の停止に成功しました。ユーザ定義受付名 =[ユーザ定義受付名]

The user-defined reception stopped successfully. (user-defined reception = ユーザ定義受付名)

ユーザ定義受付の停止に成功しました。

(S)
処理を続行します。

KEOS52740-E

ユーザ定義受付の開始に失敗しました。ユーザ定義受付名 =[ユーザ定義受付名] 詳細情報 =[エラー詳細情報]

11. メッセージ

An attempt to start the user-defined reception has failed. (user-defined reception = ユーザ定義受付名, details = エラー詳細情報)

ユーザ定義受付の開始に失敗しました。

(S)

ユーザ定義受付の開始処理を終了します。

(O)

エラー詳細情報を確認してください。

KEOS52741-E

ユーザ定義受付の停止に失敗しました。ユーザ定義受付名 =[ユーザ定義受付名] 詳細情報 =[エラー詳細情報]

An attempt to stop the user-defined reception has failed. (user-defined reception = ユーザ定義受付名, details = エラー詳細情報)

ユーザ定義受付の停止に失敗しました。

(S)

ユーザ定義受付の停止処理を終了します。

(O)

エラー詳細情報を確認してください。

KEOS52742-I

結果を反映します。

The results will be applied.

結果を反映します。

(S)

処理を続行します。

KEOS52743-I

結果を反映しました。

The results have been applied.

結果を反映しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52744-I

HCSC サーバ起動ボタンが押下されました。

The [Start] button for the HCSC-Server was selected.

HCSC サーバ起動ボタンが押されました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52745-I

HCSC サーバ停止ボタンが押下されました。

The [Stop] button for the HCSC-Server was selected.

HCSC サーバ停止ボタンが押されました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52746-I

標準受付開始ボタンが押下されました。

The [Start] button for the standard reception was selected.

標準受付開始ボタンが押されました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52747-I

標準受付通常停止ボタンが押下されました。

The [Normal Stop] button for the standard reception was selected.

標準受付通常停止ボタンが押されました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52748-I

標準受付計画停止ボタンが押下されました。

The [Planned Stop] button for the standard reception was selected.

標準受付計画停止ボタンが押されました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52749-I

連携受付開始ボタンが押下されました。

The [Start] button for the linkage reception was selected.

連携受付開始ボタンが押されました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52750-I

連携受付通常停止ボタンが押下されました。

The [Normal Stop] button for the linkage reception was selected.

連携受付通常停止ボタンが押されました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52751-I

連携受付計画停止ボタンが押下されました。

The [Planned Stop] button for the linkage reception was selected.

連携受付計画停止ボタンが押されました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52752-I

サーバ間連携開始ボタンが押下されました。

The [Start] button for linked inter-server was selected.

サーバ間連携開始ボタンが押されました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52753-I

サーバ間連携停止ボタンが押下されました。

The [Stop] button for linked inter-server was selected.

サーバ間連携停止ボタンが押されました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52754-I

サービスアダプタ開始ボタンが押下されました。

The [Start] button for the service adapter was selected.

サービスアダプタ開始ボタンが押されました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52755-I

サービスアダプタ停止ボタンが押下されました。

The [Stop] button for the service adapter was selected.

サービスアダプタ停止ボタンが押されました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52756-I

ビジネスプロセス開始ボタンが押下されました。

The [Start] button for the business process was selected.

ビジネスプロセス開始ボタンが押されました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52757-I

ビジネスプロセス停止ボタンが押下されました。

The [Stop] button for the business process was selected.

ビジネスプロセス停止ボタンが押されました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52758-E

HCSC サーバの標準受付計画停止に失敗しました。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名] 詳細情報 =[エラー詳細情報]

An attempt to execute a planned stop of the standard reception for the HCSC-Server has failed.

(HCSC-Server = HCSC サーバ名, details = エラー詳細情報)

HCSC サーバの標準受付計画停止に失敗しました。

(S)

HCSC サーバの標準受付計画停止処理を終了します。

(O)

エラー詳細情報を確認してください。

KEOS52759-E

HCSC サーバの連携受付計画停止に失敗しました。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名] 詳細情報 =[エラー詳細情報]

An attempt to execute a planned stop of the linkage reception for the HCSC-Server has failed.

(HCSC-Server = HCSC サーバ名, details = エラー詳細情報)

HCSC サーバの連携受付計画停止に失敗しました。

11. メッセージ

(S)

HCSC サーバの連携受付計画停止処理を終了します。

(O)

エラー詳細情報を確認してください。

KEOS52760-I

削除確認ダイアログを表示します。

The deletion confirmation dialog box will be displayed.

削除確認ダイアログを表示します。

(S)

処理を続行します。

KEOS52761-I

再実行確認ダイアログを表示します。

The re-execution confirmation dialog box will be displayed.

再実行確認ダイアログを表示します。

(S)

処理を続行します。

KEOS52762-I

結果の更新を開始します。

The results will be modified.

結果の更新を開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS52763-I

結果の更新を終了しました。

The results have been modified.

結果の更新を終了しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52770-I

HCSC-Manager ビューとエディタの表示内容を最新の情報に更新します。

The displayed content of the HCSC-Manager view and editor will now be updated to the latest information.

HCSC-Manager ビューとエディタの表示内容を最新の情報に更新します。

(S)

処理を続行します。

KEOS52771-I

表示内容の更新が完了しました。

The refresh of the displayed content is complete.

表示内容の更新が完了しました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52772-I

ユーザ定義受付開始ボタンが押下されました。

The [Start] button for the user-defined reception was selected.

ユーザ定義受付開始ボタンが押されました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52773-I

ユーザ定義受付停止ボタンが押下されました。

The [Stop] button for the user-defined reception was selected.

ユーザ定義受付停止ボタンが押されました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52777-I

J2EE サーバのインプロセスネーミングサービス情報を取得します。

The in-process naming service information of the J2EE server will be acquired.

J2EE サーバのインプロセスネーミングサービス情報を取得します。

(S)

処理を続行します。

KEOS52778-I

J2EE サーバのインプロセスネーミングサービス情報の取得に成功しました。

The in-process naming service information of the J2EE server was acquired successfully.

J2EE サーバのインプロセスネーミングサービス情報の取得に成功しました。

11. メッセージ

(S)

処理を続行します。

KEOS52779-I

リソース稼働情報通知 "ON" ボタンが押下されました。

The [ON] button for resource information notification was selected.

リソースの稼働情報通知の ON ボタンが押されました。

(S)

稼働情報通知機能を ON にします。

KEOS52780-I

リソース稼働情報通知 "OFF" ボタンが押下されました。

The [OFF] button for resource information notification was selected.

リソースの稼働情報通知の OFF ボタンが押されました。

(S)

稼働情報通知機能を OFF にします。

KEOS52781-I

リソース稼働情報通知機能を ON にしました。

The notification function for HCSC-Server resource information has been set to [ON].

稼働情報通知機能が有効になりました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52782-I

リソース稼働情報通知機能を OFF にしました。

The notification function for HCSC-Server resource information has been set to [OFF].

稼働情報通知機能が無効になりました。

(S)

処理を続行します。

KEOS52783-E

リソース稼働情報更新中にエラーが発生しました。詳細情報 =[エラー詳細情報]

An error occurred while the resource information was being modified. (details = エラー詳細情報)

リソース稼働情報の更新中にエラーが発生しました。

(S)
処理を終了します。

(O)
エラー詳細情報を確認してください。

KEOS52784-W

稼働確認ページが表示できませんでした。

The resource information page could not be displayed.

Cosminexus Manager との接続に失敗しているため、稼働確認ページを表示できませんでした。

(S)
処理を続行します。

(O)
稼働確認ページを表示するためには、直前に出力された接続失敗を示すエラーメッセージを参照し、CosminexusManager との接続を確立したあと、再度ログインしてください。

KEOS52800-E

HCSC サーバの基本情報取得に失敗しました。HCSC サーバ名 =[HCSC サーバ名] 詳細情報 =[エラー詳細情報]

An attempt to acquire the basic information of the HCSC-Server has failed. (HCSC-Server =HCSC サーバ名, details = エラー詳細情報)

HCSC サーバの基本情報取得に失敗しました。

(S)
基本情報取得処理を終了します。

(O)
エラー詳細情報を確認してください。

KEOS52801-W

HCSC-Manager からログアウトしています。ログインしてから操作を実行してください。

The user is logged out from HCSC-Manager. Please log in first, and then execute the operation.

HCSC-Manager からログアウトしているので操作を実行できません。

(S)
処理を終了します。

11.6.4 KEOS53500 ~ KEOS54500

KEOS53500-I

HCSC 簡易セットアップ画面を開始します。

The HCSC Easy Setup window will now open.

HCSC 簡易セットアップ画面を開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53501-I

HCSC 簡易セットアップ画面を終了します。

The HCSC Easy Setup window will now close.

HCSC 簡易セットアップ画面を終了します。

(S)

処理を終了します。

KEOS53502-E

Cosminexus 統合形式名の製品名では HCSC 簡易セットアップ画面は使用できません。

The HCSC Easy Setup window cannot be used with Cosminexus 統合形式名の製品名 .

実行環境が不正なため、HCSC 簡易セットアップ画面が使用できません。

(S)

HCSC 簡易セットアップ画面を終了します。

(O)

uCosminexus Service Architect をインストールした状態で実行してください。

KEOS53503-I

HCSC 簡易セットアップ機能のセットアップを開始します。

Setup of the HCSC Easy Setup functionality will now start.

HCSC 簡易セットアップ機能のセットアップを開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53504-I

HCSC 簡易セットアップ機能のセットアップを終了します。

Setup of the HCSC Easy Setup functionality will now end.

HCSC 簡易セットアップ機能のセットアップを終了します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53505-I

HCSC 簡易セットアップ機能のアンセットアップを開始します。

Unsetup of the HCSC Easy Setup functionality will now start.

HCSC 簡易セットアップ機能のアンセットアップを開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53506-I

HCSC 簡易セットアップ機能のアンセットアップを終了します。

Unsetup of the HCSC Easy Setup functionality will now end.

HCSC 簡易セットアップ機能のアンセットアップを終了します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53507-I

ファイルコピーを開始します。

File copying will now start.

ファイルコピーを開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53508-I

ファイルコピーを実行します。詳細情報 =[詳細情報]

File copying will now be executed. (details = 詳細情報)

ファイルコピーを実行します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53509-I

ファイルコピーを終了します。

File copying will now end.

ファイルコピーを終了します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53510-I

ファイル編集を開始します。

File editing will now start.

ファイル編集を開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53511-I

ファイル編集を実行します。詳細情報 =[詳細情報]

File editing will now be executed. (details = 詳細情報)

ファイル編集を実行します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53512-I

ファイル編集を終了します。

File editing will now end.

ファイル編集を終了します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53513-I

組み込みデータベースの構築を開始します。

Building of the embedded database will now start.

組み込みデータベースの構築を開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53514-I

組み込みデータベースの構築を実行します。詳細情報 =[詳細情報]

Building of the embedded database will now be executed. (details = 詳細情報)

組み込みデータベースの構築を実行します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53515-I

組み込みデータベースの構築を終了します。

Building of the embedded database will now end.
組み込みデータベースの構築を終了します。

(S)
処理を続行します。

KEOS53516-I

Cosminexus Manager の構築を開始します。
Building of Cosminexus Manager will now start.
Cosminexus Manager の構築を開始します。

(S)
処理を続行します。

KEOS53517-I

Cosminexus Manager の構築を実行します。詳細情報 =[詳細情報]
Building of Cosminexus Manager will now be executed. (details = 詳細情報)
Cosminexus Manager の構築を実行します。

(S)
処理を続行します。

KEOS53518-I

Cosminexus Manager の構築を終了します。
Building of Cosminexus Manager will now end.
Cosminexus Manager の構築を終了します。

(S)
処理を続行します。

KEOS53519-I

Cosminexus Manager の起動を開始します。
Cosminexus Manager will now start.
Cosminexus Manager の起動を開始します。

(S)
処理を続行します。

KEOS53520-I

Cosminexus Manager の起動を実行します。詳細情報 =[詳細情報]
Startup of Cosminexus Manager will now be executed. (details = 詳細情報)

11. メッセージ

Cosminexus Manager の起動を実行します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53521-I

Cosminexus Manager の起動を終了します。

Startup of Cosminexus Manager will now end.

Cosminexus Manager の起動を終了します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53522-I

論理サーバの構築を開始します。

Building of the logical server will now start.

論理サーバの構築を開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53523-I

論理サーバの構築を実行します。詳細情報 =[詳細情報]

Building of the logical server will now be executed. (details = 詳細情報)

論理サーバの構築を実行します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53524-I

論理サーバの構築を終了します。

Building of the logical server will now end.

論理サーバの構築を終了します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53525-I

論理サーバの起動を開始します。

The logical server will now start.

論理サーバの起動を開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53526-I

論理サーバの起動を実行します。詳細情報 =[詳細情報]

Startup of the logical server will now be executed. (details = 詳細情報)

論理サーバの起動を実行します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53527-I

論理サーバの起動を終了します。

Startup of the logical server will now end.

論理サーバの起動を終了します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53528-I

リソースアダプタの構築を開始します。

Building of the resource adapter will now start.

リソースアダプタの構築を開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53529-I

リソースアダプタの構築を実行します。詳細情報 =[詳細情報]

Building of the resource adapter will now be executed. (details = 詳細情報)

リソースアダプタの構築を実行します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53530-I

リソースアダプタの構築を終了します。

Building of the resource adapter will now end.

リソースアダプタの構築を終了します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53531-I

リソースアダプタの開始を開始します。

The resource adapter will now start.

リソースアダプタの開始を開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53532-I

リソースアダプタの開始を実行します。詳細情報 =[詳細情報]

Startup of the resource adapter will now be executed. (details = 詳細情報)

リソースアダプタの開始を実行します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53533-I

リソースアダプタの開始を終了します。

Startup of the resource adapter will now end.

リソースアダプタの開始を終了します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53534-I

アプリケーションの構築を開始します。

Building of the application will now start.

アプリケーションの構築を開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53535-I

アプリケーションの構築を実行します。詳細情報 =[詳細情報]

Building of the application will now be executed. (details = 詳細情報)

アプリケーションの構築を実行します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53536-I

アプリケーションの構築を終了します。

Building of the application will now end.

アプリケーションの構築を終了します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53537-I

アプリケーションの開始を開始します。

The application will now start.

アプリケーションの開始を開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53538-I

アプリケーションの開始を実行します。詳細情報 =[詳細情報]

Startup of the application will now be executed. (details = 詳細情報)

アプリケーションの開始を実行します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53539-I

アプリケーションの開始を終了します。

Startup of the application will now end.

アプリケーションの開始を終了します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53540-I

HCSC サーバの構築を開始します。

Building of HCSC-Server will now start.

HCSC サーバの構築を開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53541-I

HCSC サーバの構築を実行します。詳細情報 =[詳細情報]

Building of HCSC-Server will now be executed. (details = 詳細情報)

HCSC サーバの構築を実行します。

11. メッセージ

(S)

処理を続行します。

KEOS53542-I

HCSC サーバの構築を終了します。

Building of HCSC-Server will now end.

HCSC サーバの構築を終了します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53543-I

HCSC サーバの停止を開始します。

HCSC-Server will now stop.

HCSC サーバの停止を開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53544-I

HCSC サーバの停止を実行します。詳細情報 =[詳細情報]

Stopping of HCSC-Server will now be executed. (details = 詳細情報)

HCSC サーバの停止を実行します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53545-I

HCSC サーバの停止を終了します。

Stopping of HCSC-Server will now end.

HCSC サーバの停止を終了します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53546-I

論理サーバの停止を開始します。

Stopping of the logical server will now start.

論理サーバの停止を開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53547-I

論理サーバの停止を実行します。詳細情報 =[詳細情報]

Stopping of the logical server will now be executed. (details = 詳細情報)

論理サーバの停止を実行します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53548-I

論理サーバの停止を終了します。

Stopping of the logical server will now end.

論理サーバの停止を終了します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53549-I

HCSC サーバの削除を開始します。

Deletion of HCSC-Server will now start.

HCSC サーバの削除を開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53550-I

HCSC サーバの削除を実行します。詳細情報 =[詳細情報]

Deletion of HCSC-Server will now be executed. (details = 詳細情報)

HCSC サーバの削除を実行します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53551-I

HCSC サーバの削除を終了します。

Deletion of HCSC-Server will now end.

HCSC サーバの削除を終了します。

11. メッセージ

(S)

処理を続行します。

KEOS53552-I

論理サーバの削除を開始します。

Deletion of the logical server will now start.

論理サーバの削除を開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53553-I

論理サーバの削除を実行します。詳細情報 =[詳細情報]

Deletion of the logical server will now be executed. (details = 詳細情報)

論理サーバの削除を実行します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53554-I

論理サーバの削除を終了します。

Deletion of the logical server will now end.

論理サーバの削除を終了します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53555-I

Cosminexus Manager の停止を開始します。

Stopping of Cosminexus Manager will now start.

Cosminexus Manager の停止を開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53556-I

Cosminexus Manager の停止を実行します。詳細情報 =[詳細情報]

Stopping of Cosminexus Manager will now be executed. (details = 詳細情報)

Cosminexus Manager の停止を実行します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53557-I

Cosminexus Manager の停止を終了します。

Stopping of Cosminexus Manager will now end.

Cosminexus Manager の停止を終了します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53558-I

Cosminexus Manager の削除を開始します。

Deletion of Cosminexus Manager will now start.

Cosminexus Manager の削除を開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53559-I

Cosminexus Manager の削除を実行します。詳細情報 =[詳細情報]

Deletion of Cosminexus Manager will now be executed. (details = 詳細情報)

Cosminexus Manager の削除を実行します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53560-I

Cosminexus Manager の削除を終了します。

Deletion of Cosminexus Manager will now end.

Cosminexus Manager の削除を終了します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53561-I

組み込みデータベースの削除を開始します。

Deletion of the embedded database will now start.

組み込みデータベースの削除を開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53562-I

組み込みデータベースの削除を実行します。詳細情報 =[詳細情報]

Deletion of the embedded database will now be executed. (details = 詳細情報)

組み込みデータベースの削除を実行します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53563-I

組み込みデータベースの削除を終了します。

Deletion of the embedded database will now end.

組み込みデータベースの削除を終了します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53564-E

HCSC 簡易セットアップ機能のセットアップに失敗しました。

An attempt to set up the HCSC Easy Setup functionality has failed.

HCSC 簡易セットアップ機能のセットアップに失敗しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

アンセットアップを行ったあとに、セットアップのエラー要因の対策を行い、再度セットアップを実施してください。

KEOS53565-W

HCSC 簡易セットアップ機能のアンセットアップに失敗しました。

An attempt to unsetup of the HCSC Easy Setup functionality has failed.

HCSC 簡易セットアップ機能のアンセットアップに失敗しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

出力されたメッセージを参照してエラー要因の対策が必要か判断してください。必要な場合は、対策を行ってください。

KEOS53566-E

ファイルコピーに失敗しました。詳細情報 =[詳細情報]

An attempt to copy a file has failed. (details = 詳細情報)

ファイルコピーに失敗しました。

(S)

処理を続行します。

(O)

出力されたメッセージを参照してエラー要因の対策を行ってください。

KEOS53567-E

既に HCSC 簡易セットアップ画面が起動されているため、HCSC 簡易セットアップ画面の起動に失敗しました。

An attempt to open the HCSC Easy Setup window failed because one is already open.

すでに HCSC 簡易セットアップ画面が起動されているため、HCSC 簡易セットアップ画面の起動に失敗しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

別のユーザが同じマシン内で HCSC 簡易セットアップ画面を起動していないか確認してください。

KEOS53568-E

組み込みデータベースの構築に失敗しました。詳細情報 =[詳細情報]

An attempt to build the embedded database has failed. (details = 詳細情報)

組み込みデータベースの構築に失敗しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

次の要因が考えられます。それぞれの要因に応じて、対処してください。

- HiRDB/EmbeddedEdition_CS0 サービス部品は開始されていません。
HiRDB/EmbeddedEdition_CS0 サービス部品を開始してください。
- その他
出力されたメッセージを参照してエラー要因の対策を行ってください。

KEOS53569-E

Cosminexus Manager の構築に失敗しました。詳細情報 =[詳細情報]

An attempt to build Cosminexus Manager has failed. (details = 詳細情報)

Cosminexus Manager の構築に失敗しました。

11. メッセージ

(S)

処理を終了します。

(O)

出力されたメッセージを参照してエラー要因の対策を行ってください。

KEOS53570-E

Cosminexus Manager の起動に失敗しました。詳細情報 =[詳細情報]

An attempt to start Cosminexus Manager has failed. (details = 詳細情報)

Cosminexus Manager の起動に失敗しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

出力されたメッセージを参照してエラー要因の対策を行ってください。

KEOS53571-E

論理サーバの構築に失敗しました。詳細情報 =[詳細情報]

An attempt to build the logical server has failed. (details = 詳細情報)

論理サーバの構築に失敗しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

出力されたメッセージを参照してエラー要因の対策を行ってください。

KEOS53572-E

論理サーバの起動に失敗しました。詳細情報 =[詳細情報]

An attempt to start the logical server has failed. (details = 詳細情報)

論理サーバの起動に失敗しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

出力されたメッセージを参照してエラー要因の対策を行ってください。

KEOS53573-E

リソースアダプタの構築に失敗しました。詳細情報 =[詳細情報]

An attempt to build the resource adapter has failed. (details = 詳細情報)

リソースアダプタの構築に失敗しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

出力されたメッセージを参照してエラー要因の対策を行ってください。

KEOS53574-E

リソースアダプタの開始に失敗しました。詳細情報 =[詳細情報]

An attempt to start the resource adapter has failed. (details = 詳細情報)

リソースアダプタの開始に失敗しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

出力されたメッセージを参照してエラー要因の対策を行ってください。

KEOS53575-E

アプリケーションの構築に失敗しました。詳細情報 =[詳細情報]

An attempt to build the application has failed. (details = 詳細情報)

アプリケーションの構築に失敗しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

出力されたメッセージを参照してエラー要因の対策を行ってください。

KEOS53576-E

アプリケーションの開始に失敗しました。詳細情報 =[詳細情報]

An attempt to start the application has failed. (details = 詳細情報)

アプリケーションの開始に失敗しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

出力されたメッセージを参照してエラー要因の対策を行ってください。

KEOS53577-E

HCSC サーバの構築に失敗しました。詳細情報 =[詳細情報]

An attempt to build HCSC-Server has failed. (details = 詳細情報)

HCSC サーバの構築に失敗しました。

11. メッセージ

(S)

処理を終了します。

(O)

出力されたメッセージを参照してエラー要因の対策を行ってください。

KEOS53578-W

HCSC サーバの停止に失敗しました。詳細情報 =[詳細情報]

An attempt to stop HCSC-Server has failed. (details = 詳細情報)

HCSC サーバの停止に失敗しました。

(S)

処理を続行します。

(O)

出力されたメッセージを参照してエラー要因の対策が必要か判断して、必要な場合対策を行ってください。

KEOS53579-W

論理サーバの停止に失敗しました。詳細情報 =[詳細情報]

An attempt to stop the logical server has failed. (details = 詳細情報)

論理サーバの停止に失敗しました。

(S)

処理を続行します。

(O)

出力されたメッセージを参照してエラー要因の対策が必要か判断して、必要な場合対策を行ってください。

KEOS53580-W

HCSC サーバの削除に失敗しました。詳細情報 =[詳細情報]

An attempt to delete HCSC-Server has failed. (details = 詳細情報)

HCSC サーバの削除に失敗しました。

(S)

処理を続行します。

(O)

出力されたメッセージを参照してエラー要因の対策が必要か判断して、必要な場合対策を行ってください。

KEOS53581-W

論理サーバの削除に失敗しました。詳細情報 =[詳細情報]

An attempt to delete the logical server has failed. (details = 詳細情報)

論理サーバの削除に失敗しました。

(S)

処理を続行します。

(O)

出力されたメッセージを参照してエラー要因の対策が必要か判断して、必要な場合対策を行ってください。

KEOS53582-W

Cosminexus Manager の停止に失敗しました。詳細情報 =[詳細情報]

An attempt to stop Cosminexus Manager has failed. (details = 詳細情報)

Cosminexus Manager の停止に失敗しました。

(S)

処理を続行します。

(O)

出力されたメッセージを参照してエラー要因の対策が必要か判断して、必要な場合対策を行ってください。

KEOS53583-W

Cosminexus Manager の削除に失敗しました。詳細情報 =[詳細情報]

An attempt to delete Cosminexus Manager has failed. (details = 詳細情報)

Cosminexus Manager の削除に失敗しました。

(S)

処理を続行します。

(O)

出力されたメッセージを参照してエラー要因の対策が必要か判断して、必要な場合対策を行ってください。

KEOS53584-W

組み込みデータベースの削除に失敗しました。詳細情報 =[詳細情報]

An attempt to delete the embedded database has failed. (details = 詳細情報)

組み込みデータベースの削除に失敗しました。

(S)

処理を続行します。

(O)

出力されたメッセージを参照してエラー要因の対策が必要か判断して、必要な場合対策を行ってください。

KEOS53585-E

wSDL4j.jar がインストールされていません。

wSDL4j.jar is not installed.

wSDL4j.jar がインストールされていません。

(S)

処理を終了します。

(O)

<Cosminexus インストールディレクトリ >/c4web/lib ディレクトリに wSDL4j.jar をインストールした状態で実行してください。

KEOS53586-E

ディレクトリの指定に失敗しました。

An attempt to specify the directory has failed.

ディレクトリの指定に失敗しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

再度選択ボタンを押してください。問題が解決しない場合は、保守員に連絡してください。

KEOS53587-E

ポート番号が不正です。

ポート番号 is invalid.

指定したポート番号が不正です。

(S)

処理を終了します。

(O)

指定できる範囲の整数を指定してください。

KEOS53588-E

既に使用されているポート番号を指定しました。ラベル名=[ラベル名] 入力値=[入力値]

The specified port number is already being used. (label name = ラベル名, entered value = 入力値)

指定されたポート番号は、すでに使用されています。別のポート番号を指定してください。

(S)

処理を終了します。

(O)

ポート番号は重ならないように指定してください。

KEOS53589-I

スクリプトファイル編集を開始します。

Editing of the script file will now start.

スクリプトファイル編集を開始します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53590-E

ファイルの読み込みに失敗しました。詳細情報 =[詳細情報]

An attempt to read a file has failed. (details = 詳細情報)

ファイルの読み込みに失敗しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

出力されたメッセージを参照してエラー要因の対策を行ってください。

KEOS53591-E

ファイルの書き込みに失敗しました。詳細情報 =[詳細情報]

An attempt to write a file has failed. (details = 詳細情報)

ファイルの書き込みに失敗しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

出力されたメッセージを参照してエラー要因の対策を行ってください。

KEOS53592-E

ファイル編集に失敗しました。詳細情報 =[詳細情報]

An attempt to edit a file has failed. (details = 詳細情報)

ファイル編集に失敗しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

出力されたメッセージを参照してエラー要因の対策を行ってください。

KEOS53593-I

スクリプトファイル編集を実行します。詳細情報 =[詳細情報]

Editing of the script file will now be executed. (details = 詳細情報)

ファイル編集を実行します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53594-I

スクリプトファイル編集を終了します。

Editing of the script file will now end.

ファイル編集を終了します。

(S)

処理を続行します。

KEOS53699-E

予期しないエラーが発生しました。詳細情報 =[詳細情報]

An unexpected error occurred. (details = 詳細情報)

予期しないエラーが発生しました。

(S)

処理を終了します。

(O)

保守員に連絡してください。

付録

付録 A Cosminexus Service Coordinator 管理者の変更方法

付録 B 画面とコマンドで実施できる内容

付録 C データベースのテーブルの情報

付録 D SQL スクリプトファイルの設定

付録 E HCSC サーバのリソース稼働情報の統計情報

付録 F JP1 イベント通知をするメッセージ

付録 G 下位バージョンからのリポジトリの移行

付録 H 用語解説

付録 A Cosminexus Service Coordinator 管理者の変更方法

UNIX の場合に、`cjenvsetup` (Cosminexus Component Container 管理者のセットアップ) コマンドを使用して Cosminexus Component Container 管理者を変更したときは、Cosminexus Service Coordinator 管理者を変更する必要があります。Cosminexus Service Coordinator 管理者の変更方法と注意事項について次に説明します。なお、ここでは、管理者のオーナーを `user1`、グループを `group1` として説明します。

付録 A.1 変更方法

(1) /opt/Cosminexus/CSC ディレクトリ配下のファイル属性の変更

/opt/Cosminexus/CSC ディレクトリ配下のファイル属性を、管理者のオーナー、グループに変更します。

(例)

```
chown -R user1 /opt/Cosminexus/CSC
chgrp -R group1 /opt/Cosminexus/CSC
```

(2) リポジトリルート配下のファイル属性の変更

/opt/Cosminexus/CSC/config/manager/cscmng.properties を参照し、次のように変更します。

リポジトリルート (`cscmng.repository.root`) に /opt/Cosminexus/CSC/repository 以外のディレクトリを設定している場合

リポジトリルート配下のファイル属性を、管理者のオーナー、グループに変更します。

(例) リポジトリルートが /home/user1/repisotiry のとき

```
chown -R user1 /home/user1/repisotiry
chgrp -R group1 /home/user1/repisotiry
```

(3) ログディレクトリ配下のファイル属性の変更

/opt/Cosminexus/CSC/config/manager/cscmng.properties を参照し、次のように変更します。

ログディレクトリ (`cscmng.log.dir`) に /opt/Cosminexus/CSC/log/manager 以外のディレクトリを設定している場合

ログディレクトリ配下のファイル属性を、管理者のオーナー、グループに変更します。

(例) ログディレクトリが /home/user1/log のとき

```
chown -R user1 /home/user1/log
chgrp -R group1 /home/user1/log
```

(4) 応答電文出力ディレクトリ配下のファイル属性の変更

/opt/Cosminexus/CSC/config/manager/cscmng.properties を参照し、次のように変更します。

応答電文出力ディレクトリ (cscmng.pireexec.response.dir) に値を設定している場合
 応答電文出力ディレクトリ配下のファイル属性を、管理者のオーナー、グループに変更します。

(例) 応答電文出力ディレクトリに /home/user1/response を設定しているとき

```
chown -R user1 /home/user1/response
chgrp -R group1 /home/user1/response
```

付録 A.2 注意事項

- Cosminexus Service Coordinator 管理者は、Cosminexus Component Container 管理者と同一にしてください。
- リポジトリルート (cscmng.repository.root)、ログディレクトリ (cscmng.log.dir)、応答電文出力ディレクトリ (cscmng.pireexec.response.dir) に指定したディレクトリ配下に、ファイルを生成しないでください。また、すでにファイルが存在しているディレクトリ (/opt, /usr など) を設定しないでください。
- 管理者の変更は、Cosminexus Component Container、Cosminexus Manager、および Cosminexus Service Coordinator 提供コマンドが起動している状態で実施しないでください。実施した場合の動作は保障しません。
- 異なる管理者でコマンドを実行した場合や不正な環境でコマンドを実行した場合、次のメッセージが出力されることがあります。
 - Because the user <コマンド実行ユーザ名> and file owner of /opt/Cosminexus/CSC <ディレクトリオーナーユーザ名> is different, the command cannot be executed.
 - Cannot get owner name of /opt/Cosminexus/CSC
 - Cannot get user name(failed:/usr/bin/id -un)
 - Cannot get owner id(failed:/usr/bin/id <ディレクトリオーナーユーザ名> -u)
 - Cannot get user id(failed:/usr/bin/id -u)

付録 B 画面とコマンドで実施できる内容

Cosminexus サービスプラットフォームでは、システム構築およびシステム運用時に、コマンドと画面で実施できる内容が異なります。画面とコマンドで実施できる内容を次の表に示します。

表 B-1 画面とコマンドで実施できる内容

環境	分類		内容	画面	コマンド	コマンド名
	機能分類	対象				
運用環境	管理系	ユーザ	ログイン情報の変更	×		cscpasswd
		リポジトリ	リポジトリのインポート	×		cscrepctl
			リポジトリのエクスポート	×		cscrepctl
			リポジトリ情報の表示	×		cscrepls
			リポジトリの差分情報の管理	×		cscrepdiff
		サービス情報	情報の表示	×		cscsvcls
			情報の管理	×		cscsvctl
		環境情報	環境のバックアップ	×		cscenvbackup
	環境のリストア		×		cscenvrestore	
	構築系	HCSCサーバ	HCSC サーバのセットアップ	×		cscsvsetup
			HCSC サーバのアンセットアップ	×		cscsvunsetup
			連携のセットアップ	×		cscconsetup
			連携のアンセットアップ	×		cscconunsetup
		HCSC コンポーネント	HCSC コンポーネントの配備	×		csccompodeploy
HCSC コンポーネントの削除			×		csccompoundeplo y	
運用系		HCSCサーバ	HCSC サーバの起動			cscsvstart
			HCSC サーバの停止			cscsvstop
	HCSC サーバのランタイム定義情報の設定・取得				cscsvconfig	

環境	分類		内容	画面	コマンド	コマンド名
	機能分類	対象				
			HCSC サーバの稼働状態の確認			cscstatus
			HCSC サーバのセットアップ情報の確認	×		cscutil
			HCSC サーバのランタイム情報の確認	×		cscutil csmllsstate
			HCSC サーバのリソースの稼働情報の表示	×		cscresinfo
	標準受付, または ユーザ定義受付		標準受付またはユーザ定義受付の開始			cscrcptnstart
			標準受付またはユーザ定義受付の停止			cscrcptnstop
			標準受付またはユーザ定義受付の稼働状態の確認			cscstatus
	HCSC コンポーネント		HCSC コンポーネントの開始			csccompostart
			HCSC コンポーネントの停止			csccompostop
			HCSC コンポーネントのランタイム情報の確認			csccompoconfig
			HCSC コンポーネントの稼働状態の確認			cscstatus
	プロセスインスタンス		プロセスインスタンスの実行履歴の検索			cscpiselect
			プロセスインスタンスの実行履歴の関連セット情報の取得			cscpiselect
			プロセスインスタンスの実行履歴の変数情報の取得			cscpiselect
			プロセスインスタンスの実行履歴のアクティビティ情報の取得			cscpiselect
			プロセスインスタンスの実行履歴の削除			cscpidelete
			プロセスインスタンスの実行履歴の一括削除			cscpidelete
			プロセスインスタンスの再実行			cscpireexec

付録 B 画面とコマンドで実施できる内容

環境	分類		内容	画面	コマンド	コマンド名
	機能分類	対象				
			プロセスインスタンスの一括再実行			cscpireexec
		アプリケーション	アプリケーションの操作	×		cscapputil
	ツール	HCSCサーバ	HCSC サーバのバージョンアップ	×		cscenvupdate
実行環境	実行履歴管理	電文	電文の実行履歴の表示	×		csmlshistory
			電文の実行履歴の削除	×		csmdeletehistory
	情報表示		配備したサービスアダプタまたはビジネスプロセスの情報表示	×		csmlslocation
			配備したユーザ定義受付の情報表示	×		csmlsreception
			HCSC サーバの状態および設定情報の一覧表示	×		csmlsstate

(凡例)

: 実施できます。

× : 実施できません。

付録 C データベースのテーブルの情報

付録 C.1 プロセスインスタンスの実行履歴の管理に関する テーブルの情報

(1) テーブルの情報

HCSC クラスタごとに、次に示すテーブルが必要です。

- 基本情報テーブル
- 変数情報テーブル
- メッセージ履歴関連づけ情報テーブル

(a) 基本情報テーブル

ビジネスプロセスが実行する上で基本的な要素（インスタンス）の情報が格納されます。

- CSCBP_<クラスタ名>_PROCESS テーブル

項番	列名	説明	HiRDB 型	ORACLE 型	インデクスの有無	NULL 値	更新	省略値
1	ProcessID	プロセスインスタンスの識別子	MVARCH AR(240)	VARCHA R2(240)	あり	不可	不可	不可
2	ProcessDefinitionName	BP 定義名	MVARCH AR(64)	VARCHA R2(64)	あり	不可	不可	不可
3	ProcessDefinitionVersion	BP 定義バージョン	SMALLI NT	NUMBER (5)	なし	不可	不可	不可
4	State	プロセスインスタンスの状態	VARCHA R(20)	VARCHA R2(20)	あり	不可	可	不可
5	ChangeCount	データの更新回数	SMALLI NT	NUMBER (5)	なし	不可	可	不可
6	StartTime	プロセスインスタンスの開始時刻 (GMT)	TIMESTA MP(0)	TIMESTA MP(0)	あり	可	可	NUL L
7	EndTime	プロセスインスタンスの終了時刻 (GMT)	TIMESTA MP(0)	TIMESTA MP(0)	あり	可	可	NUL L

注 実行時に内部管理用に使われる項目のため、値を意識する必要はありません。

• CSCBP_< クラスタ名 >_ACTIVITY テーブル

項番	列名	説明	HiRDB 型	ORACLE 型	インデクス	NULL	更新	省略値
1	ProcessID	プロセスインスタンスの識別子	MVARCHAR(240)	VARCHAR2(240)	あり	不可	不可	不可
2	ActivityNumber	アクティビティインスタンスの識別番号。プロセスインスタンス内で一意。	SMALLINT	NUMBER(5)	あり	不可	不可	不可
3	ActivityDefinitionName	アクティビティ定義名	MVARCHAR(64)	VARCHAR2(64)	なし	不可	不可	不可
4	ActivityKind	アクティビティの種別	VARCHAR(16)	VARCHAR2(16)	なし	不可	不可	不可
5	ParentNumber	親アクティビティインスタンスの識別番号	SMALLINT	NUMBER(5)	なし	不可	不可	不可
6	ScopeNumber	所属するスコープインスタンスの識別番号	SMALLINT	NUMBER(5)	なし	不可	不可	不可
7	RepeatNumber	所属する繰り返し処理の識別番号	SMALLINT	NUMBER(5)	なし	不可	不可	不可
8	State	アクティビティインスタンスの状態	VARCHAR(20)	VARCHAR2(20)	なし	不可	可	不可
9	FirstChildNumber	子アクティビティインスタンスの最小の識別番号	SMALLINT	NUMBER(5)	なし	不可	可	不可
10	LastChildNumber	子アクティビティインスタンスの最大の識別番号	SMALLINT	NUMBER(5)	なし	不可	可	不可
11	StartTime	アクティビティの開始時刻 (GMT)	TIMESTAMP(0)	TIMESTAMP(0)	なし	可	可	NULL
12	EndTime	アクティビティの終了時刻 (GMT)	TIMESTAMP(0)	TIMESTAMP(0)	なし	可	可	NULL

注 実行時に内部管理用に使用される項目のため、値を意識する必要はありません。

• CSCBP_<クラスタ名>_LINK テーブル

項番	列名	説明	HiRDB 型	ORACLE 型	インデクス	NULL	更新	省略値
1	ProcessID	プロセスインスタンスの識別子	MVARCH AR(240)	VARCHA R2(240)	あり	不可	不可	不可
2	LinkDefinition Name	リンク定義名	MVARCH AR(64)	VARCHA R2(64)	あり	不可	不可	不可
3	RepeatNumbe r	所属する繰り返し処理の識別番号	SMALLI NT	NUMBER (5)	あり	不可	不可	不可
4	State	リンクの状態 (真偽値)	CHAR(1)	CHAR(1)	なし	不可	不可	不可

注 実行時に内部管理用に使用される項目のため、値を意識する必要はありません。

• CSCBP_<クラスタ名>_CORRELATIONSET テーブル

項番	列名	説明	HiRDB 型	ORACLE 型	インデクス	NULL	更新	省略値
1	ProcessID	プロセスインスタンスの識別子	MVARCH AR(240)	VARCHA R2(240)	あり	不可	不可	不可
2	ProcessDefinit ionName	BP 定義名	MVARCH AR(64)	VARCHA R2(64)	あり	不可	不可	不可
3	ProcessDefinit ionVersion	BP 定義バージョン	SMALLI NT	NUMBER (5)	なし	不可	不可	不可
4	ScopeDefinitio nName	スコープ定義名	MVARCH AR(64)	VARCHA R2(64)	あり	不可	不可	不可
5	ScopeNumber	スコープインスタンスの識別番号	SMALLI NT	NUMBER (5)	あり	不可	不可	不可
6	CorrelationSet Name	相関セット定義名	MVARCH AR(64)	VARCHA R2(64)	あり	不可	不可	不可
7	CorrelationSet Value	相関セット値。文字列化および連結されて格納されます。	MVARCH AR(512)	VARCHA R2(512)	あり	不可	不可	不可
8	State	相関セットの有効性(真偽値)	CHAR(1)	CHAR(1)	なし	不可	可	不可

(b) 変数情報テーブル

ユーザが定義した変数について、ビジネスプロセスが実行していく過程での変数の値が

格納されます。

• CSCBP_< クラスタ名 >_STR_VARIABLE テーブル

項番	列名	説明	HiRDB 型	ORACLE 型	インデクス	NULL 値	更新	省略値
1	ProcessID	プロセスインスタンスの識別子	MVARCH AR(240)	VARCHA R2(240)	あり	不可	不可	不可
2	ScopeNumber	スコープインスタンスの識別番号	SMALLI NT	NUMBER (5)	あり	不可	不可	不可
3	VariableName	変数定義名	MVARCH AR(64)	VARCHA R2(64)	あり	不可	不可	不可
4	VariableValue	変数値	MVARCH AR(4000)	VARCHA R2(4000)	なし	可	可	不可

注 HiRDB の場合は NULL 値を指定できませんが、Oracle の場合は NULL 値を指定できます。

• CSCBP_< クラスタ名 >_NUM_VARIABLE テーブル

項番	列名	説明	HiRDB 型	ORACLE 型	インデクス	NULL	更新	省略値
1	ProcessID	プロセスインスタンスの識別子	MVARCH AR(240)	VARCHA R2(240)	あり	不可	不可	不可
2	ScopeNumber	スコープインスタンスの識別番号	SMALLI NT	NUMBER (5)	あり	不可	不可	不可
3	VariableName	変数定義名	MVARCH AR(64)	VARCHA R2(64)	あり	不可	不可	不可
4	VariableValue	変数値	DOUBLE PRECISI ON	NUMBER	なし	不可	可	不可

• CSCBP_< クラスタ名 >_BOOL_VARIABLE テーブル

項番	列名	説明	HiRDB 型	ORACLE 型	インデクス	NULL	更新	省略値
1	ProcessID	プロセスインスタンスの識別子	MVARCH AR(240)	VARCHA R2(240)	あり	不可	不可	不可

項番	列名	説明	HiRDB 型	ORACLE 型	インデクス	NULL	更新	省略値
2	ScopeNumber	スコープインスタンスの識別番号	SMALLINT	NUMBER(5)	あり	不可	不可	不可
3	VariableName	変数定義名	MVARCH AR(64)	VARCHA R2(64)	あり	不可	不可	不可
4	VariableValue	変数値	CHAR(1)	CHAR(1)	なし	不可	可	不可

• CSCBP_<クラスタ名>_MSG_VARIABLE テーブル

項番	列名	説明	HiRDB 型	ORACLE 型	インデクス	NULL	更新	省略値
1	ProcessID	プロセスインスタンスの識別子	MVARCH AR(240)	VARCHA R2(240)	あり	不可	不可	不可
2	ScopeNumber	スコープインスタンスの識別番号	SMALLINT	NUMBER(5)	あり	不可	不可	不可
3	VariableName	変数定義名	MVARCH AR(64)	VARCHA R2(64)	あり	不可	不可	不可
4	VariableValue	変数値	BINARY(2147483639)	BLOB	なし	可	可	不可

注 HiRDB の場合は NULL 値を指定できませんが、Oracle の場合は NULL 値を指定できます。

(c) メッセージ履歴関連づけ情報テーブル

メッセージ履歴との関連づけデータが格納されます。

• CSCBP_<クラスタ名>_MSG_RELATION テーブル

項番	列名	説明	HiRDB 型	ORACLE 型	インデクス	NULL	更新	省略値
1	MessageID	メッセージ共通 ID	VARCHA R(75)	VARCHA R2(75)	あり	不可	不可	不可
2	ProcessID	プロセスインスタンスの識別子	MVARCH AR(240)	VARCHA R2(240)	あり	不可	不可	不可
3	ActivityNumber	アクティビティインスタンスの識別番号	SMALLINT	NUMBER(5)	あり	不可	不可	不可

項番	列名	説明	HiRDB 型	ORACLE 型	インデクス	NULL	更新	省略値
4	SendOrReceive	メッセージの送受信フラグ	CHAR(1)	CHAR(1)	あり	不可	不可	不可
5	Asynchronous MessagingID	非同期メッセージングでの ID	VARCHAR(255)	VARCHAR2(255)	あり	可	不可	NUL L

注 実行時に内部管理用に使用される項目のため、値を意識する必要はありません。

(2) ステータスの情報

テーブルに格納する値の意味と実際の値（文字列）を説明します。

(a) HCSC クラスタ名

英数字 8 文字以内を指定します。

(b) プロセスインスタンスの識別子

プロセスインスタンスを一意に識別する識別子です。

(c) プロセスインスタンスの状態

項番	名称	説明	データベース上の値
1	未実行	プロセスインスタンスが未実行で、今後実行される可能性のある状態を示します。	Unexecution
2	実行中	プロセスインスタンスが実行中の状態を示します。	Executing
3	完了	プロセスのグローバルスコープが完了して、プロセスインスタンスが完了した状態を示します。	Completed
4	フォルト終了	フォルトが発生し、グローバルスコープでもキャッチできないで、プロセスインスタンスがフォルト終了した状態を示します。	Faulted
5	強制終了	終了アクティビティで、プロセスインスタンスが強制終了した状態を示します。	Terminated

(d) アクティビティの種別

項番	名称	説明	データベース上の値
1	receive	受付アクティビティを示します。	RECEIVE
2	reply	応答アクティビティを示します。	REPLY
3	invoke	サービス呼出アクティビティを示します。	INVOKE
4	assign	代入アクティビティを示します。	ASSIGN
5	scope	スコープアクティビティを示します。	SCOPE

項番	名称	説明	データベース上の値
6	sequence	アクティビティを定義した順番に実行することを示します。	SEQUENCE
7	flow	並列処理アクティビティを示します。	FLOW
8	switch	分岐アクティビティを示します。	SWITCH
9	while	繰り返しアクティビティを示します。	WHILE
10	java	Java 呼出アクティビティを示します。	JAVA
11	empty	無操作アクティビティを示します。	EMPTY
12	throw	フォルト送出アクティビティを示します。	THROW

(e) アクティビティインスタンスの状態

項番	名称	説明	データベース上の値
1	未実行	アクティビティのインスタンスが未実行で、今後実行される可能性のある状態を示します。	Unexecution
2	未省略	アクティビティのインスタンスが未実行で、今後実行が省略される状態を示します。	Unomission
3	実行中	アクティビティインスタンスが実行中の状態を示します。	Executing
4	待ち受け	受付アクティビティのインスタンスが受け付け可能になっている状態を示します。	Awaiting
5	フォルト中	スコープアクティビティのインスタンスがフォルト処理でキャッチしたアクティビティを実行している状態を示します。	Faulting
6	完了	アクティビティのインスタンスが正常に実行され終了した状態を示します。	Completed
7	キャンセル	フォルトが発生しアクティビティのインスタンスの実行がキャンセルされた状態を示します。	Canceled
8	フォルト終了	アクティビティのインスタンスの実行中にフォルトが発生して終了した状態を示します。	Faulted
9	実行省略	アクティビティのインスタンスの実行が省略され終了した状態を示します。	Omitted

(f) リンクの状態

項番	名称	説明	データベース上の値
1	真	true 活性の状態を示します	1
2	偽	false 活性の状態を示します	0

(g) 相関セットの状態

項番	名称	説明	データベース上の値
1	有効	有効状態を示します	1
2	無効	無効状態を示します	0

(h) 真偽値型変数の変数値

項番	名称	説明	データベース上の値
1	真	真 (true) 値を示します	1
2	偽	偽 (false) 値を示します	0

(i) メッセージの送受信フラグ

項番	名称	説明	データベース上の値
1	reply 送信	該当メッセージを応答アクティビティで送信したことを示すフラグです。	S
2	receive 受信	該当メッセージを受付アクティビティで受信したことを示すフラグです。	R
3	invoke 送信	該当メッセージをサービス呼出アクティビティで送信したことを示すフラグです。	O
4	Invoke 受信	該当メッセージをサービス呼出アクティビティで受信したことを示すフラグです。	T

(j) 所属する繰り返し処理の識別番号 (RepeatNumber)

- 親アクティビティ定義が繰り返し処理の場合、自アクティビティインスタンスの識別番号を設定します。
- 親アクティビティ定義が繰り返し処理でない場合、親アクティビティインスタンスの繰り返し処理の識別番号を設定します。

(k) 子アクティビティインスタンスの最小識別番号・最大識別番号 (FirstChildNumber/LastChildNumber)

- 初期値は、自アクティビティのインスタンスの識別番号を示します。
- 子アクティビティインスタンスの生成時に、それらの識別番号の最小値または最大値を設定します。

(3) インデクスの情報

それぞれのテーブルに付与するインデクスの情報について、次に示します。

• CSCBP_<クラスタ名>_PROCESS テーブルのインデクス

項番	インデクス名	UNIQUE 属性	インデクス中の 順位	カラム名
1	CSCBP_<クラスタ名>_PROCESS_IDX1	あり	1	ProcessID
2	CSCBP_<クラスタ名>_PROCESS_IDX2	なし	1	ProcessDefinitionName
			2	State
			3	StartTime
3	CSCBP_<クラスタ名>_PROCESS_IDX3	なし	1	ProcessDefinitionName
			2	State
			3	EndTime

• CSCBP_<クラスタ名>_ACTIVITY テーブルのインデクス

項番	インデクス名	UNIQUE 属性	インデクス中の 順位	カラム名
1	CSCBP_<クラスタ名>_ACTIVITY_IDX	あり	1	ProcessID
			2	ActivityNumber

• CSCBP_<クラスタ名>_LINK テーブルのインデクス

項番	インデクス名	UNIQUE 属性	インデクス中の 順位	カラム名
1	CSCBP_<クラスタ名>_LINK_IDX	あり	1	ProcessID
			2	LinkDefinitionName
			3	RepeatNumber

• CSCBP_<クラスタ名>_CORRELATIONSET テーブルのインデクス

項番	インデクス名	UNIQUE 属性	インデクス中の 順位	カラム名
1	CSCBP_<クラスタ名>_CORREL_IDX1	あり	1	ProcessID
			2	ScopeNumber
			3	CorrelationSetName

項番	インデクス名	UNIQUE 属性	インデクス中の 順位	カラム名
2	CSCBP_<クラスタ名 >_CORREL_IDX2	あり	1	ProcessDefinitionName
			2	ScopeDefinitionName
			3	CorrelationSetName
			4	CorrelationSetValue

• CSCBP_<クラスタ名>_STR_VARIABLE テーブルのインデクス

項番	インデクス名	UNIQUE 属性	インデクス中の 順位	カラム名
1	CSCBP_<クラスタ名 >_STR_VAR_IDX	あり	1	ProcessID
			2	ScopeNumber
			3	VariableName

• CSCBP_<クラスタ名>_NUM_VARIABLE テーブルのインデクス

項番	インデクス名	UNIQUE 属性	インデクス中の 順位	カラム名
1	CSCBP_<クラスタ名 >_NUM_VAR_IDX	あり	1	ProcessID
			2	ScopeNumber
			3	VariableName

• CSCBP_<クラスタ名>_BOOL_VARIABLE テーブルのインデクス

項番	インデクス名	UNIQUE 属性	インデクス中の 順位	カラム名
1	CSCBP_<クラスタ名 >_BOOL_VAR_IDX	あり	1	ProcessID
			2	ScopeNumber
			3	VariableName

• CSCBP_<クラスタ名>_MSG_VARIABLE テーブルのインデクス

項番	インデクス名	UNIQUE 属性	インデクス中の 順位	カラム名
1	CSCBP_<クラスタ名> >_MSG_VAR_IDX	あり	1	ProcessID
			2	ScopeNumber
			3	VariableName

• CSCBP_<クラスタ名>_MSG_RELATION テーブルのインデクス

項番	インデクス名	UNIQUE 属性	インデクス中の 順位	カラム名
1	CSCBP_<クラスタ名> >_MSG_REL_IDX1	なし	1	MessageID
2	CSCBP_<クラスタ名> >_MSG_REL_IDX2	あり	1	ProcessID
			2	ActivityNumber
			3	SendOrReceive
3	CSCBP_<クラスタ名> >_MSG_REL_IDX3	なし	1	AsynchronousMessagingI D

(4) ビュー表の情報

ビュー表の情報を次に示します。

• CSCBP_<クラスタ名>_V_ACTIVITY ビュー表

項番	列名	参照先テーブル	参照先カラム
1	ProcessID	ACTIVITY	ProcessID
2	ActivityNumber	ACTIVITY	ActivityNumber
3	ProcessDefinitionName	PROCESS	ProcessDefinitionName
4	ProcessDefinitionVersion	PROCESS	ProcessDefinitionVersion
5	ActivityDefinitionName	ACTIVITY	ActivityDefinitionName
6	ActivityKind	ACTIVITY	ActivityKind
7	ParentNumber	ACTIVITY	ParentNumber
8	ScopeNumber	ACTIVITY	ScopeNumber
9	RepeatNumber	ACTIVITY	RepeatNumber
10	State	ACTIVITY	State
11	FirstChildNumber	ACTIVITY	FirstChildNumber
12	LastChildNumber	ACTIVITY	LastChildNumber

項番	列名	参照先テーブル	参照先カラム
13	StartTime	ACTIVITY	StartTime
14	EndTime	ACTIVITY	EndTime

注 実行時に内部管理用に使用される項目のため、値を意識する必要はありません。

• CSCBP_< クラスタ名 >_V_LINK ビュー表

項番	列名	参照先テーブル	参照先カラム
1	ProcessID	LINK	ProcessID
2	ProcessDefinitionName	PROCESS	ProcessDefinitionName
3	ProcessDefinitionVersion	PROCESS	ProcessDefinitionVersion
4	LinkDefinitionName	LINK	LinkDefinitionName
5	RepeatNumber	LINK	RepeatNumber
6	State	LINK	State

注 実行時に内部管理用に使用される項目のため、値を意識する必要はありません。

• CSCBP_< クラスタ名 >_V_STR_VARIABLE ビュー表

項番	列名	参照先テーブル	参照先カラム
1	ProcessID	STR_VARIABLE	ProcessID
2	ProcessDefinitionName	PROCESS	ProcessDefinitionName
3	ProcessDefinitionVersion	PROCESS	ProcessDefinitionVersion
4	ScopeDefinitionName	ACTIVITY	ActivityDefinitionName
5	ScopeNumber	STR_VARIABLE	ScopeNumber
6	VariableName	STR_VARIABLE	VariableName
7	VariableValue	STR_VARIABLE	VariableValue

• CSCBP_< クラスタ名 >_V_NUM_VARIABLE ビュー表

項番	列名	参照先テーブル	参照先カラム
1	ProcessID	NUM_VARIABLE	ProcessID
2	ProcessDefinitionName	PROCESS	ProcessDefinitionName
3	ProcessDefinitionVersion	PROCESS	ProcessDefinitionVersion
4	ScopeDefinitionName	ACTIVITY	ActivityDefinitionName
5	ScopeNumber	NUM_VARIABLE	ScopeNumber
6	VariableName	NUM_VARIABLE	VariableName

項番	列名	参照先テーブル	参照先カラム
7	VariableValue	NUM_VARIABLE	VariableValue

• CSCBP_<クラスタ名>_V_BOOL_VARIABLE ビュー表

項番	列名	参照先テーブル	参照先カラム
1	ProcessID	BOOL_VARIABLE	ProcessID
2	ProcessDefinitionName	PROCESS	ProcessDefinitionName
3	ProcessDefinitionVersion	PROCESS	ProcessDefinitionVersion
4	ScopeDefinitionName	ACTIVITY	ActivityDefinitionName
5	ScopeNumber	BOOL_VARIABLE	ScopeNumber
6	VariableName	BOOL_VARIABLE	VariableName
7	VariableValue	BOOL_VARIABLE	VariableValue

• CSCBP_<クラスタ名>_V_MSG_VARIABLE ビュー表

項番	列名	参照先テーブル	参照先カラム
1	ProcessID	MSG_VARIABLE	ProcessID
2	ProcessDefinitionName	PROCESS	ProcessDefinitionName
3	ProcessDefinitionVersion	PROCESS	ProcessDefinitionVersion
4	ScopeDefinitionName	ACTIVITY	ActivityDefinitionName
5	ScopeNumber	MSG_VARIABLE	ScopeNumber
6	VariableName	MSG_VARIABLE	VariableName
7	VariableValue	MSG_VARIABLE	VariableValue

付録 C.2 電文の実行履歴の管理に関するテーブルの情報

(1) テーブルの情報

クラスタごとに、次に示すテーブルが必要です。

- 実行履歴情報テーブル

(a) 実行履歴情報テーブル

・ CSCMSG_C< クラスタ名 >_EXECHISTORY テーブル

項番	列名	説明	HiRDB 型	ORACLE 型	インデックスの有無	NULL 値	UNIQUE 属性
1	MESSAGE_ID	メッセージごとに付与する UNIQUE な識別子 ・ CSC + HCSC サーバ名 + 現在時刻 (ミリ秒) + 通番	VARCHAR(75)	VARCHAR2(75)	あり	可	なし
2	MESSAGE_ID_CSC_MSG	HCSC サーバ内のメッセージング基盤のメッセージを識別するための UNIQUE な識別子 ・ MSG + HCSC サーバ名 + 受付種別 + 現在時刻 (ミリ秒) + 通番	VARCHAR(84)	VARCHAR2(84)	なし	可	なし
3	REQUEST_CSC_SERVER_NAME	要求を受け付けた HCSC サーバ名	VARCHAR(8)	VARCHAR2(8)	なし	可	なし
4	HISTORY_KIND_DIRECTION	実行履歴採取方向 Service Request Direction/ Service Response Direction/ Service Error/ Service Fault	VARCHAR(26)	VARCHAR2(26)	なし	可	なし
5	TIME_STAMP	実行履歴を採取した時刻 (ミリ秒単位) タイムスタンプ	TIMESTAMP(4)	NUMBER(20,0)	なし	可	なし
6	REQUEST_SYNCHRONOUS_KIND	リクエスト側の プロトコル WebService/ SessionBean/ MDB_WSR/ MDB_DBQ	VARCHAR(16)	VARCHAR2(16)	なし	可	なし

項番	列名	説明	HiRDB 型	ORACLE 型	インデックスの有無	NULL 値	UNIQUE 属性
7	SERVICE_REQUEST_TYPE	サービスリクエストの種類 <ul style="list-style-type: none"> ClientProgram (クライアントプログラム) BusinessProcesses (ビジネスプロセス) ConnectHCSCServer (連携 HCSC サーバ) 	VARCHAR(24)	VARCHAR2(24)	なし	可	なし
8	REQUEST_USER_TEL_TYPE	要求ユーザ電文の種類を示す種別 XML/BINARY	VARCHAR(8)	VARCHAR2(8)	なし	可	なし
9	RESPONSE_USER_TEL_TYPE	応答ユーザ電文の種類を示す種別 XML/BINARY	VARCHAR(8)	VARCHAR2(8)	なし	可	なし
10	SERVICE_NAME	リクエストからの入力サービス名 (リクエスト要求先サービス部品)	MVARCHAR(64)	NVARCHAR2(64)	なし	可	なし
11	CLIENT_ID	クライアントプログラムが指定したメッセージを識別するための関連識別子	VARCHAR(255)	VARCHAR2(255)	あり	可	なし
12	SERVICE_OPERATION_NAME	同期 (Web サービス) の場合に必要サービス部品のオペレーション WSDL の Operation <wsdl:operation >	MVARCHAR(255)	NVARCHAR2(255)	なし	可	なし
13	REPLY_TO_QUEUE_NAME	非同期 (MDB (WS-R), MDB (DB キュー)) の場合の応答を受け取るためのキューの名称	VARCHAR(30)	VARCHAR2(30)	なし	可	なし
14	ADAPTER_NAME	サービスアダプタまたはビジネスプロセスのサービス ID	VARCHAR(8)	VARCHAR2(8)	なし	可	なし

付録 C データベースのテーブルの情報

項番	列名	説明	HiRDB 型	ORACLE 型	インデクスの有無	NULL 値	UNIQUE 属性
15	ADAPTER_SERVICE_NAME	サービス名 <ul style="list-style-type: none"> サービスアダプタのサービス名 ビジネスプロセスのサービス名 サービスグループ名 	MVARCHA R(64)	NVARCHA R2(64)	なし	可	なし
16	ADAPTER_CLUSTER_NAME	アダプタが属するクラスタの情報	VARCHAR(8)	VARCHAR2(8)	なし	可	なし
17	ADAPTER_KIND	アダプタ側のサービス部品の種類 ServiceAdapter/ BusinessProcess/ /ServiceGroup	VARCHAR(32)	VARCHAR2(32)	なし	可	なし
18	ADAPTER_SYNCHRONOUS_KIND	アダプタ先のサービス部品のプロトコル WebService/ SessionBean/ MDB_WSR/ MDB_DBQ/ Custom	VARCHAR(16)	VARCHAR2(16)	なし	可	なし
19	INTERLOCK_CSC_PROTOCOL	連携 HCSC サーバへ転送する際のプロトコル WebService/ SessionBean/ MDB_WSR	VARCHAR(32)	VARCHAR2(32)	なし	可	なし
20	MESSAGE_ID_CSC_BP_ACTIVITY	ビジネスプロセスのアクティビティ番号（ビジネスプロセスアクティビティインスタンスを識別するための番号） 値なし：-1	SMALLINT	NUMBER(5,0)	なし	可	なし
21	MESSAGE_ID_CSC_BP_PROCESS	ビジネスプロセスのプロセス ID	MVARCHA R(240)	NVARCHA R2(240)	なし	可	なし

項番	列名	説明	HiRDB 型	ORACLE 型	インデクスの有無	NULL 値	UNIQUE 属性
2 2	CSC_BP_REQU EST_TYPE	ビジネスプロセス用要求タイプ • REPLY_AFTER : reply 後の継続実行要求 • RECOVER : プロセス再実行の要求	VARCHAR(32)	VARCHAR2(32)	なし	可	なし
2 3	JMS_HEADER_ JMS_MESSAG E_ID	JMS ヘッダ • JMSMessageID	VARCHAR(255)	VARCHAR2(255)	なし	可	なし
2 4	JMS_HEADER_ JMS_CORRELA TION_ID	JMS ヘッダ • JMSCorrelationID	VARCHAR(255)	VARCHAR2(255)	なし	可	なし
2 5	ROUTE_HISTO RY	経路履歴として通過した情報 (<HCSC サーバ名> または <サービス ID> を「->」でつないだ文字列で表示)	VARCHAR(255)	VARCHAR2(255)	なし	可	なし
2 6	ERROR_CODE	サービス部品、ビジネスプロセス、またはカスタムアダプタからのエラー (Fault) 情報	MVARCHA R(4000)	NVARCHA R2(1333)	なし	可	なし
2 7	USER_TEL_OR G_BINARY	ユーザ電文本体	BINARY(2 147483639)	LONG RAW	なし	可	なし
2 8	OPTION1	予備 1	BINARY(2 000)	RAW(2000)	なし	可	なし
2 9	OPTION2	予備 2	BINARY(2 000)	RAW(2000)	なし	可	なし
3 0	OPTION3	予備 3	BINARY(2 000)	RAW(2000)	なし	可	なし

(2) インデクスの情報

テーブルに付与するインデクスの情報について、次に示します。

- CSCMSG_C<クラスタ名>_EXECHISTORY テーブルのインデクス

項番	インデクス名	UNIQUE 属性	インデクス中の順位	カラム名
1	CSCMSG_<individualname>_ EXECHISTORY_1	なし	1	MESSAGE_ID

項番	インデクス名	UNIQUE 属性	インデクス中の 順位	カラム名
2			2	CLIENT_ID

注 自 HCSC サーバでのメッセージの実行履歴情報が蓄積されます。また、サービス部品呼び出しの数だけレコード数が増加します。

付録 C.3 実行環境の設定に関するテーブルの情報

(1) テーブルの情報

HCSC サーバまたはクラスタごとに、次に示すテーブルが必要です。

- HCSC 基本情報テーブル
- HCSC 連携ディレクトリ情報テーブル
- ロケーションディレクトリ情報テーブル
- ルーティングルールディレクトリ情報テーブル
- データ変換定義ディレクトリ情報テーブル

(a) HCSC 基本情報テーブル

- CSCMSG_S<HCSC サーバ名>_CSC_PERSIST テーブル

項番	列名	説明	HiRDB 型	ORACLE 型	インデクスの有無	NULL 値	UNIQUE 属性
1	CSC_SERVER_NAME	自 HCSC サーバの名称	VARCHAR(8)	VARCHAR2(8)	なし	不可	なし
2	CSC_SERVER_STATUS	HCSC サーバ本体の状態（未使用） 1：開始処理中 2：開始 3：開始失敗 4：停止 5：停止処理中 6：停止失敗	INTEGER	NUMBER(10,0)	なし	不可	なし
3	CSC_REQUEST_STATUS	同期受付の状態 1：開始処理中 2：開始 3：開始失敗 4：停止 5：停止処理中 6：停止失敗	INTEGER	NUMBER(10,0)	なし	不可	なし

項番	列名	説明	HiRDB 型	ORACLE 型	インデクスの有無	NULL 値	UNIQUE 属性
4	CSC_CONNECT_STATUS	連携受付の状態 1：開始処理中 2：開始 3：開始失敗 4：停止 5：停止処理中 6：停止失敗	INTEGER	NUMBER(10,0)	なし	不可	なし
5	CSC_TABLE_VERSION	HCSC 全体のテーブルバージョン番号	INTEGER	NUMBER(10,0)	なし	不可	なし
6	CSC_TABLE_REVISION	HCSC 全体のテーブルリビジョン番号	INTEGER	NUMBER(10,0)	なし	不可	なし
7	OPTION1	予備 1	BINARY(2000)	RAW(2000)	なし	可	なし
8	OPTION2	予備 2	BINARY(2000)	RAW(2000)	なし	可	なし
9	OPTION3	予備 3	BINARY(2000)	RAW(2000)	なし	可	なし

注 デフォルトでは、INDEX を使用しません。

(b) HCSC 連携ディレクトリ情報テーブル

• CSCMSG_C<クラスタ名>_CSC_CONNECT テーブル

項番	列名	説明	HiRDB 型	ORACLE 型	インデクスの有無	NULL 値	UNIQUE 属性
1	CONNECT_CLUSTER_NAME	連携先クラスタ名	VARCHAR(8)	VARCHAR2(8)	なし	不可	あり
2	CONNECT_VERSION	要求元の HCSC サーババージョン番号	INTEGER	NUMBER(10,0)	なし	不可	なし
3	CONNECT_REVISION	要求元の HCSC サーバリビジョン番号	INTEGER	NUMBER(10,0)	なし	不可	なし
4	CONNECT_ID	要求元の HCSC サーバでの連携開始時のタイムスタンプ	TIMESTAMP(4)	NUMBER(20,0)	なし	不可	なし

項番	列名	説明	HiRDB 型	ORACLE 型	インデクスの有無	NULL 値	UNIQUE 属性
5	CONNECT_STATUS	HCSC サーバとの連携状態 <ul style="list-style-type: none"> 1: OFFLINE (未連携状態) 2: ONLINE (連携中状態) 	INTEGER	NUMBER(10,0)	なし	不可	なし
6	CONNECT_OPTION	同期種別 (同期インターフェースについて、次のどちらで連携するか) <ul style="list-style-type: none"> SOAP EJB 	VARCHAR(16)	VARCHAR2(16)	なし	可	なし
7	CONNECT_WEB_URL	SOAP 転送用 Web サービスの URL	VARCHAR(2086)	VARCHAR2(2086)	なし	可	なし
8	CONNECT_WEB_USER_ID	SOAP 転送用 ユーザ ID	VARCHAR(256)	VARCHAR2(256)	なし	可	なし
9	CONNECT_WEB_PASSWORD	SOAP 転送用パスワード	VARCHAR(256)	VARCHAR2(256)	なし	可	なし
10	CONNECT_J2EE_NAME	転送用の EJB 呼び出しで使用する J2EE サーバ名称	VARCHAR(255)	VARCHAR2(255)	なし	可	なし
11	CONNECT_NAMING_HOST	転送用の EJB 呼び出しで使用するネーミングサービスのホスト名称	VARCHAR(255)	VARCHAR2(255)	なし	可	なし
12	CONNECT_NAMING_PORT	転送用の EJB 呼び出しで使用するネーミングサービスのポート番号	VARCHAR(5)	VARCHAR2(5)	なし	可	なし
13	OPTION1	予備 1	BINARY(2000)	RAW(2000)	なし	可	なし
14	OPTION2	予備 2	BINARY(2000)	RAW(2000)	なし	可	なし
15	OPTION3	予備 3	BINARY(2000)	RAW(2000)	なし	可	なし

注 CONNECT_CLUSTER_NAME は、UNIQUE CLUSTER KEY で定義します (自動的にインデクスが作成されます)。

(c) ロケーションディレクトリ情報テーブル

• CSCMSG_S<HCSC サーバ名>_LC_DIRECTORY テーブル

項番	列名	説明	HiRDB 型	ORACLE 型	インデックスの有無	NULL 値	UNIQUE 属性
1	SERVICE_NAME	サービス名 (リクエスト要求先サービス部品) <ul style="list-style-type: none"> サービスアダプタのサービス名 ビジネスプロセスのサービス名 サービスグループ名 	MVARCHARR(64)	NVARCHARR2(64)	なし	不可	あり
2	ADAPTER_NAME	サービスアダプタのサービス ID, またはビジネスプロセスのサービス ID	VARCHAR(8)	VARCHAR2(8)	なし	可	なし
3	SERVICE_KIND	サービス部品の種別 <ul style="list-style-type: none"> 単体サービス部品 ビジネスプロセス サービスグループ ユーザ定義受付 	INTEGER	NUMBER(10,0)	なし	不可	なし
4	SERVICE_PROTOCOL_KIND	サービスアダプタの種類 <ul style="list-style-type: none"> 1: MDB_WSR (非同期) 2: MDB_DBQ (非同期) 3: SessionBean (同期) 4: Webservice (同期) 5: Custom 	INTEGER	NUMBER(10,0)	なし	不可	なし

項番	列名	説明	HiRDB 型	ORACLE 型	インデクスの有無	NULL 値	UNIQUE 属性
5	SERVICE_STAT US	HCSC コンポー ネントまたは サービスグルー プの状態 <ul style="list-style-type: none"> • 1: 起動状態 ACTIVE • 2: 停止状態 INACTIVE • 3: 停止失敗状 態 STOP_FAIL ED • 4: 停止処理中 STOPPING • 5: 起動失敗状 態 START_FAIL ED • 6: 起動処理中 STARTING • 7: 削除処理中 DELETING 	INTEGER	NUMBER(10,0)	なし	不可	なし
6	ADAPTER_ENT RY_TIME	アダプタ定義追 加時間	TIMESTA MP(4)	NUMBER(20,0)	なし	不可	なし
7	LC_VERSION	ロケーション ディレクトリ バージョン番号	INTEGER	NUMBER(10,0)	なし	不可	なし
8	LC_REVISION	ロケーション ディレクトリリ ビジョン番号	INTEGER	NUMBER(10,0)	なし	不可	なし
9	ADAPTER_LOC AL_CALL	アダプタ定義 ファイルのパラ メタ (local-call) の指定値	INTEGER	NUMBER(10,0)	なし	不可	なし
1 0	ADAPTER_MO DIFIED_TIME	サービスアダプ タまたはビジネ スプロセスの更 新時刻	TIMESTA MP(4)	NUMBER(20,0)	なし	不可	なし
1 1	OPTION1	ユーザ指定イン ターフェースの 受付関連情報	BINARY(2 000)	RAW(2000)	なし	可	なし
1 2	OPTION2	予備 2	BINARY(2 000)	RAW(2000)	なし	可	なし
1 3	OPTION3	予備 3	BINARY(2 000)	RAW(2000)	なし	可	なし

注 SERVICE_NAME は、UNIQUE CLUSTER KEY で定義します (自動的にインデクスが作成

されます。

• CSCMSG_S<HCSC サーバ名>_LC_BPFORMAT テーブル

項番	列名	説明	HiRDB 型	ORACLE 型	インデクスの有無	NULL 値	UNIQUE 属性
1	SERVICE_NAME	サービス名 (リクエスト要求先サービス部品) • ビジネスプロセスのサービス名	MVARCHA R(64)	NVARCHA R2(64)	なし	不可	なし
2	OPERATION_NAME	サービス定義ファイルのオペレーション名	MVARCHA R(255)	NVARCHA R2(255)	なし	不可	なし
3	REQ_FORMAT_ID	サービス定義ファイルの要求フォーマット ID	VARCHAR(1024)	VARCHAR2(1024)	なし	可	なし
4	RES_FORMAT_ID	サービス定義ファイルの応答フォーマット ID	VARCHAR(1024)	VARCHAR2(1024)	なし	可	なし
5	OPTION1	予備 1	BINARY(2000)	RAW(2000)	なし	可	なし
6	OPTION2	予備 2	BINARY(2000)	RAW(2000)	なし	可	なし
7	OPTION3	予備 3	BINARY(2000)	RAW(2000)	なし	可	なし

注 デフォルトでは、INDEX を使用しません。

(d) ルーティングルールディレクトリ情報テーブル

• CSCMSG_S<HCSC サーバ名>_RT_RULE テーブル

項番	列名	説明	HiRDB 型	ORACLE 型	インデクスの有無	NULL 値	UNIQUE 属性
1	SERVICE_GROUP_NAME	サービスグループ名	MVARCHA R(64)	NVARCHA R2(64)	なし	不可	あり
2	RULES	ルーティング定義の XML のバイト列	BINARY(2147483639)	LONG RAW	なし	可	なし
3	OPTION1	予備 1	BINARY(2000)	RAW(2000)	なし	可	なし
4	OPTION2	予備 2	BINARY(2000)	RAW(2000)	なし	可	なし
5	OPTION3	予備 3	BINARY(2000)	RAW(2000)	なし	可	なし

注 SERVICE_GROUP_NAME は、UNIQUE CLUSTER KEY で定義します（自動的にインデックスが作成されます）。

(e) データ変換定義ディレクトリ情報テーブル

- CSCMSG_S<HCSC サーバ名>_CV_MAPPING テーブル

項番	列名	説明	HiRDB 型	ORACLE 型	インデックスの有無	NULL 値	UNIQUE 属性
1	BEF_FORMAT_ID	電文フォーマット ID (変換元用)	VARCHAR(1024)	VARCHAR2(1024)	なし	可	なし
2	AFT_FORMAT_ID	電文フォーマット ID (変換先用)	VARCHAR(1024)	VARCHAR2(1024)	なし	可	なし
3	ENTRY_TIME	データ変換定義追加時刻	TIMESTAMP(4)	NUMBER(20,0)	なし	可	なし
4	ROOT_FILE	ルートかルートでないかを判定するためのフラグ • 0 : false • 1 : true	INTEGER	NUMBER(10,0)	なし	可	なし
5	DEFINITION_NAME	データ変換定義ファイル名称	MVARCHAR(255)	NVARCHAR2(255)	なし	可	なし
6	TRANSFORM_DEFINITION	データ変換定義	BINARY(2147483639)	LONG RAW	なし	可	なし
7	OPTION1	予備 1	BINARY(2000)	RAW(2000)	なし	可	なし
8	OPTION2	予備 2	BINARY(2000)	RAW(2000)	なし	可	なし
9	OPTION3	予備 3	BINARY(2000)	RAW(2000)	なし	可	なし

注 デフォルトでは、INDEX を使用しません。

- CSCMSG_S<HCSC サーバ名>_CV_FORMAT テーブル

項番	列名	説明	HiRDB 型	ORACLE 型	インデックスの有無	NULL 値	UNIQUE 属性
1	FORMAT_ID	電文フォーマット ID • 変換元用 • 変換先用	VARCHAR(1024)	VARCHAR2(1024)	なし	可	なし

項番	列名	説明	HiRDB 型	ORACLE 型	インデックスの有無	NULL 値	UNIQUE 属性
2	FORMAT_TYPE	電文フォーマットの種別 • 1 : XML • 2 : BINARY	INTEGER	NUMBER(10,0)	なし	可	なし
3	ENTRY_TIME	電文フォーマット定義追加時刻	TIMESTAMP(4)	NUMBER(20,0)	なし	可	なし
4	ROOT_FILE	ルートかルートでないかを判定するためのフラグ • 0 : false • 1 : true	INTEGER	NUMBER(10,0)	なし	可	なし
5	DEFINITION_NAME	フォーマット定義ファイル名称	MVARCHAR(255)	NVARCHAR2(255)	なし	可	なし
6	FORMAT_DEFINITION	電文フォーマット定義 (データ定義)	BINARY(2147483639)	LONG RAW	なし	可	なし
7	OPTION1	予備 1	BINARY(2000)	RAW(2000)	なし	可	なし
8	OPTION2	予備 2	BINARY(2000)	RAW(2000)	なし	可	なし
9	OPTION3	予備 3	BINARY(2000)	RAW(2000)	なし	可	なし

付録 D SQL スクリプトファイルの設定

次に示す場合に、SQL スクリプトファイルを使用して、メッセージング基盤やビジネスプロセス基盤で使用するテーブルをカスタマイズします。

- 細分化された複数のテーブルごとに、RD エリア、または表領域（テーブルスペース）を分けて、データベースを構築する場合
一つのテーブルに複数のテーブルがある（ルーティングルールディレクトリ情報テーブル、またはデータ変換定義ディレクトリ情報テーブルなど）場合、HCSC サーバのセットアップ定義ファイルでは、一つの RD エリア、または表領域（テーブルスペース）しか設定できません。
- 検索時の性能を向上させる場合
この場合は、運用に応じて、よく使う機能についてインデクスが指定されていない列にインデクスを設定します。例えば、実行履歴情報の表示の際にキーとなる情報にインデクスを設定するなどができます。
ただし、インデクスを設定すると、出力時（SQL の INSERT 命令実行）の性能に影響が発生するおそれがあるため注意が必要です。

(1) SQL スクリプトファイルの種類と格納先

SQL スクリプトファイルは、次に示すディレクトリに格納されているサンプルファイルを利用して作成します。

```
<Cosminexusのインストールディレクトリ>¥CSC¥sql
```

ディレクトリ内には次に示すファイルがあり、データベースのタイプや用途に応じて使用するファイルが異なります。

表 D-1 SQL スクリプトファイルの種類

データベースのタイプ	分類	ファイル名	説明
HiRDB	テーブル作成用	CreateTables_HiRDB.sql	スタンドアロンの HCSC サーバのセットアップ、またはクラスタ構成の 1 台目 HCSC サーバのセットアップに使用します。
		CreateCSCIndividualTables_HiRDB.sql	クラスタ構成の 2 台目 HCSC サーバのセットアップに使用します。
	テーブル削除用	DeleteTables_HiRDB.sql	スタンドアロンの HCSC サーバのアンセットアップ、またはクラスタ構成の 1 台目 HCSC サーバのアンセットアップに使用します。

データベース のタイプ	分類	ファイル名	説明
		DeleteCSCIndividualTables_HiRDB.sql	クラスタ構成の 2 台目 HCSC サーバのアンセットアップに使用します。
Oracle 9i/ Oracle 10g	テーブル 作成用	CreateTables_Oracle.sql	スタンドアロンの HCSC サーバのセットアップ, またはクラスタ構成の 1 台目 HCSC サーバのセットアップに使用します。
		CreateCSCIndividualTables_Oracle.sql	クラスタ構成の 2 台目 HCSC サーバのセットアップに使用します。
	テーブル 削除用	DeleteTables_Oracle.sql	スタンドアロンの HCSC サーバのアンセットアップ, またはクラスタ構成の 1 台目 HCSC サーバのアンセットアップに使用します。
		DeleteCSCIndividualTables_Oracle.sql	クラスタ構成の 2 台目 HCSC サーバのアンセットアップに使用します。

(2) SQL スクリプトファイルの設定方法

SQL スクリプトファイルを設定する場合, テーブル名, および RD エリア名または表領域名を変更します。

(a) テーブル名の変更

SQL スクリプトファイル内にある, 各テーブルの次の個所を変更します。

<individualname> : クラスタ名, または HCSC サーバ名

テーブルごとの変更規則を次の表に示します。

表 D-2 テーブル名の変更規則

置換前のテーブル名またはインデクス名	置換方法	例
CSCMSG_<individualname>_CSC_CONN ECT CSCMSG_<individualname>_EXECHIST ORY CSCMSG_<individualname>_EXECHIST ORY_I	C< クラスタ名 >	<ul style="list-style-type: none"> クラスタ名が「MyCLS」の場合 CSCMSG_CMycLS_CSC_CON NECT

置換前のテーブル名またはインデクス名	置換方法	例
CSCMSG_<individualname>_CSC_PERSI ST CSCMSG_<individualname>_LC_DIRECT ORY CSCMSG_<individualname>_LC_BPFOR MAT CSCMSG_<individualname>_RT_RULE CSCMSG_<individualname>_CV_MAPPI NG CSCMSG_<individualname>_CV_FORMA T	S<HCSC サーバ 名 >	<ul style="list-style-type: none"> HCSC サーバ名が「MyCSC」の場合 CSCMSG_SMyCSC_CSC_CON NECT
CSCBP_<individualname>_PROCESS CSCBP_<individualname>_ACTIVITY CSCBP_<individualname>_LINK CSCBP_<individualname>_CORRELATIO NSET CSCBP_<individualname>_STR_VARIAB LE CSCBP_<individualname>_NUM_VARIAB LE CSCBP_<individualname>_BOOL_VARIA BLE CSCBP_<individualname>_MSG_VARIAB LE CSCBP_<individualname>_MSG_RELATI ON	<クラスタ名 >	<ul style="list-style-type: none"> クラスタ名が「MyCLS」の場合 CSCBP_MyCLS_PROCESS

(b) RD エリア名または表領域名の変更

データベースごとに次に示すように変更します。

- HiRDB の場合
SQL スクリプトファイル内にある、各テーブルの次の個所を書き換えます。RD エリアを指定しない場合は、「IN <RDDATA>」または「IN <RDINDX>」を削除します。
 - IN <RDDATA> : 各テーブルを格納する RD エリア名を指定します。
 - IN <RDINDX> : 各インデクスを格納する RD エリア名を指定します。
- Oracle の場合
SQL スクリプトファイル内にある、各テーブル、またはインデクスの次の個所を書き換えます。表領域を指定しない場合は、「TABLESPACE <EXAMPLE>」削除します。
 - TABLESPACE <EXAMPLE>
使用する表領域 (テーブルスペース), または message 変数テーブル内の message 変数の値 (BLOB) を格納する表領域を指定します。

(3) SQL スクリプトファイル設定時の注意事項

(a) 次に示すように、各テーブルの列名、データ型、および制約キーは変更できません。また、列の順番は入れ替えられません。

(例)

列名 : CSC_SERVER_NAME , CSC_SERVER_STATUS など

データ型 : VARCHAR2(8) , NUMBER(10,0) など

制約キー : NOT NULL 指定 , UNIQUE 指定 など

(b) テーブル , およびインデクス作成の順番は変更できません。

(c) テンプレートで定義されているインデクスは削除できません。インデクスやインデクスとして定義されている列名を削除すると , 動作しないおそれがあります。

付録 E HCSC サーバのリソース稼働情報の統計情報

HCSC サーバのリソース稼働情報は、統計情報として参照できます。統計情報を参照するには、Cosminexus のアプリケーションサーバで出力している稼働情報ファイルを利用します。稼働情報ファイルとは、J2EE サーバと SFO サーバ内の稼働情報が、定期的に出力されるファイルです。このファイルに、HCSC サーバのリソース稼働情報も記録されています。

稼働情報ファイルの詳細については、マニュアル「Cosminexus 機能解説」の稼働情報ファイルの出力に関する内容を参照してください。

付録 E.1 稼働情報ファイルの出力

稼働情報ファイルは、デフォルトの設定の場合、次のフォルダに作成されます。

Windows の場合

<作業ディレクトリ> %ejb%<J2EE サーバ名称>%stats

UNIX の場合

<作業ディレクトリ> /ejb/<J2EE サーバ名称>/stats

注

<作業ディレクトリ> は、次のどちらかの方法で確認できます。

運用環境ポータルから確認する場合

[J2EE コンテナの設定] 画面で確認します。詳細については、マニュアル「Cosminexus 運用管理操作ガイド」の J2EE コンテナの設定に関する内容を参照してください。

簡易構築定義ファイルから確認する場合

簡易構築定義ファイルの論理 J2EE サーバ (j2ee-server) の <configuration> タグ内に指定されている、ejb.public.directory パラメタで確認します。詳細については、マニュアル「Cosminexus 簡易構築・運用ガイド」の簡易構築定義ファイルに関する内容を参照してください。

なお、<作業ディレクトリ> のデフォルト値は、Windows の場合、「<Cosminexus のインストールディレクトリ>%CC%server%public」、UNIX の場合、「/opt/Cosminexus/CC/server/public」に設定されています。

また、稼働情報ファイルは、デフォルトの設定の場合、出力するに設定されています。

稼働情報ファイルの出力先ディレクトリや、稼働情報ファイルを出力するかどうかの設定を変更したい場合は、次に示すマニュアルを参照してください。

運用環境ポータルから変更する場合

マニュアル「Cosminexus 運用管理操作ガイド」の稼働情報監視の設定 (J2EE サー

バ)に関する内容を参照してください。

Smart Composer 機能を使って変更する場合

マニュアル「Cosminexus システム構築ガイド」の稼働情報ファイルの取得とイベント発行の設定に関する内容を参照してください。

付録 E.2 統計情報の参照方法

統計情報の参照方法を次に示します。

1. 統計情報を参照したいリソース (JavaVM, DB コネクション, 標準受付 (Web サービス), ユーザ定義受付, サービスアダプタ, およびビジネスプロセス) を決定します。
2. 手順 1 で決めたリソースに対応する稼働情報ファイルとヘッダファイルを, 稼働情報ファイルの出力先から任意のディレクトリにコピーします。
リソースに対応する稼働情報ファイルとヘッダファイルについては, 「付録 E.3 HCSC サーバのリソースに対応する情報」を参照してください。また, 稼働情報ファイルの出力先については, 「付録 E.1 稼働情報ファイルの出力」を参照してください。
3. 手順 2 でコピーした稼働情報ファイルとヘッダファイルを一つのファイルに編集し, Excel などのアプリケーションプログラムで参照します。
4. ObjectName の識別値から, 統計情報を参照したいリソースを探します。
Excel を使用する場合, 一つに編集したファイルのヘッダにフィルタを設定し, ObjectName の識別値から統計情報を参照したいリソースを選択します。
ObjectName の識別値とリソースの対応については, 「付録 E.3 HCSC サーバのリソースに対応する情報」を参照してください。
5. 手順 4 で探したリソースの稼働情報の種類を特定します。
リソースの稼働情報の種類は, ヘッダファイルの項目名から特定します。リソースの稼働情報の種類と, ヘッダファイルの項目名の対応については, 「付録 E.4 リソースの稼働情報の種類」を参照してください。

付録 E.3 HCSC サーバのリソースに対応する情報

HCSC サーバのリソースに対応する, 稼働情報ファイル, ヘッダファイル, および ObjectName の識別値を次の表に示します。

表 E-1 HCSC サーバのリソースに対応する情報

リソース名	稼働情報ファイル	ヘッダファイル	ObjectName の識別値
JavaVM	HJVMStats_<YYYYMMDDh hmm><TZ>.csv	HJVMStats.txt	-

リソース名	稼働情報ファイル	ヘッダファイル	ObjectName の識別値
DB コネクション	HJCAConnectionPoolStats_<YYYYMMDDhhmm><TZ>.csv	HJCAConnectionPoolStats.txt	J2EEServer=<J2EEサーバ名> ResourceAdapter=<リソースアダプタ表示名>
標準受付 (Web サービス)	HWebModuleStats_<YYYYMMDDhhmm><TZ>.csv	HWebModuleStats.txt	J2EEApplication=CS CMsgSyncServiceDeliveryWS
ユーザ定義受付	HWebModuleStats_<YYYYMMDDhhmm><TZ>.csv	HWebModuleStats.txt	J2EEApplication=<ユーザ定義受付の受付ID>
サービスアダプタ	HStatelessSessionBeanStats_<YYYYMMDDhhmm><TZ>.csv	HStatelessSessionBeanStats.txt	J2EEApplication=<サービス ID>
ビジネスプロセス	HStatelessSessionBeanStats_<YYYYMMDDhhmm><TZ>.csv	HStatelessSessionBeanStats.txt	J2EEApplication=<サービス ID> name=CSCBPMMessageReceiverEJB

(凡例) - : 識別値はありません。

注 識別値が二つある場合は、二つで一意的値になります。

付録 E.4 リソースの稼働情報の種類

リソースの稼働情報の種類は、リソースによって異なります。リソースの稼働情報の種類と、ヘッダファイルの項目名の対応を次の表に示します。

表 E-2 リソースの稼働情報の種類とヘッダファイルの項目名の対応

リソース名	リソースの稼働情報の種類	ヘッダファイルの項目名	
JavaVM	ヒープサイズ	上限値	HeapSize.UpperBound
		最大値	HeapSize.HighWaterMark
DB コネクション	コネクション数	上限値	PoolSize.UpperBound
		最大値	PoolSize.HighWaterMark
標準受付 (Web サービス)	キュー滞留数	上限値	WaitingRequestCount.UpperBound
		最大値	WaitingRequestCount.HighWaterMark
ユーザ定義受付	実行数	上限値	ActiveThreadCount.UpperBound
		最大値	ActiveThreadCount.HighWaterMark
サービスアダプタ	実行数	上限値	ActivePooledInstanceCount.UpperBound

リソース名	リソースの稼働情報の種類	ヘッダファイルの項目名
ビジネスプロセス		ActivePooledInstanceCount.HighWaterMark

付録 F JP1 イベント通知をするメッセージ

JP1 連携機能を使用した場合、Cosminexus サービスプラットフォームで発生した障害のメッセージを JP1 イベントとして JP1 に通知します。メッセージマッピングファイルを編集して、JP1 イベント通知の有無を自由に変更できます。Cosminexus サービスプラットフォームで出力されるメッセージと初期値で設定されている JP1 イベント通知の有無を次の表に示します。

(1) KDEC00001 ~ KDEC19999 のメッセージ (メッセージング基盤に関するメッセージ)

メッセージ ID	JP1 イベント通知の有無
KDEC00001	
KDEC00002	
KDEC00003	
KDEC00005	
KDEC00010	
KDEC00011	
KDEC00012	
KDEC00013	
KDEC00014	
KDEC00016	
KDEC00018	
KDEC00019	
KDEC00020	
KDEC00021	
KDEC00022	
KDEC00023	
KDEC00024	
KDEC00025	
KDEC00026	
KDEC00027	
KDEC00028	
KDEC00029	
KDEC00030	
KDEC00031	
KDEC00032	

メッセージ ID	JP1 イベント通知の有無
KDEC00033	
KDEC00034	
KDEC00035	
KDEC00036	
KDEC00037	
KDEC00038	
KDEC00039	
KDEC00040	
KDEC00041	
KDEC00042	
KDEC00043	
KDEC00044	
KDEC00501	
KDEC00502	
KDEC00503	
KDEC00504	
KDEC00505	
KDEC00506	
KDEC00508	
KDEC00509	×
KDEC00510	×
KDEC00511	×
KDEC00512	
KDEC00513	
KDEC00514	
KDEC00515	
KDEC00516	
KDEC00517	
KDEC00518	
KDEC00519	
KDEC00520	
KDEC00521	
KDEC00522	
KDEC00523	
KDEC00524	

付録 F JP1 イベント通知をするメッセージ

メッセージ ID	JP1 イベント通知の有無
KDEC00525	
KDEC00526	
KDEC00527	
KDEC01001	
KDEC01002	
KDEC01003	
KDEC01004	
KDEC01005	
KDEC01006	
KDEC01007	
KDEC01008	
KDEC01009	
KDEC01011	
KDEC01012	×
KDEC01013	
KDEC01015	
KDEC01016	
KDEC01017	
KDEC01018	
KDEC01019	
KDEC01020	
KDEC01021	
KDEC01022	
KDEC01023	
KDEC01024	
KDEC01025	
KDEC01026	
KDEC01501	
KDEC01502	
KDEC01503	
KDEC01504	
KDEC01505	
KDEC01506	
KDEC01507	
KDEC01508	

メッセージ ID	JP1 イベント通知の有無
KDEC01509	
KDEC01510	
KDEC01511	
KDEC01512	
KDEC01513	
KDEC01514	
KDEC01515	
KDEC01516	
KDEC01517	
KDEC01518	
KDEC01519	
KDEC01520	
KDEC01521	
KDEC01522	
KDEC02001	
KDEC02002	
KDEC02003	
KDEC02004	
KDEC02005	
KDEC02501	
KDEC02502	
KDEC02503	
KDEC02504	
KDEC02511	
KDEC02512	
KDEC02513	
KDEC02514	
KDEC02515	
KDEC02516	
KDEC02517	
KDEC02518	
KDEC02519	
KDEC02520	
KDEC02521	
KDEC02523	

付録 F JP1 イベント通知をするメッセージ

メッセージ ID	JP1 イベント通知の有無
KDEC02524	
KDEC03001	
KDEC03002	
KDEC03003	
KDEC03005	
KDEC03006	
KDEC03011	
KDEC03012	
KDEC03013	
KDEC03014	
KDEC03015	
KDEC03016	
KDEC03017	
KDEC03018	
KDEC03019	
KDEC03020	
KDEC03021	
KDEC04501	
KDEC04502	
KDEC04503	
KDEC04504	
KDEC04505	
KDEC04506	
KDEC04510	
KDEC04511	
KDEC04512	
KDEC04513	
KDEC04514	
KDEC04515	
KDEC04516	
KDEC04517	
KDEC04518	
KDEC04519	
KDEC04520	
KDEC04601	×

メッセージ ID	JP1 イベント通知の有無
KDEC04602	×
KDEC04603	×
KDEC04604	×
KDEC04605	×
KDEC04609	
KDEC05001	
KDEC05002	
KDEC05003	
KDEC05004	
KDEC05005	
KDEC05006	
KDEC05008	
KDEC05009	
KDEC05010	
KDEC05011	
KDEC05012	
KDEC05013	
KDEC05014	
KDEC05101	
KDEC05102	
KDEC05103	
KDEC05104	
KDEC05105	
KDEC05106	
KDEC05107	
KDEC05108	
KDEC05201	
KDEC05202	
KDEC05203	
KDEC05204	
KDEC05205	
KDEC05206	
KDEC05207	
KDEC05208	
KDEC05209	

付録 F JP1 イベント通知をするメッセージ

メッセージ ID	JP1 イベント通知の有無
KDEC05210	
KDEC05211	
KDEC05212	
KDEC05501	
KDEC05502	
KDEC05503	
KDEC05504	
KDEC05505	
KDEC05506	
KDEC06001	
KDEC06002	
KDEC06003	
KDEC06004	
KDEC06005	
KDEC06006	
KDEC06007	
KDEC06008	
KDEC06009	
KDEC06010	
KDEC06011	
KDEC06012	
KDEC06013	
KDEC06014	
KDEC06501	
KDEC06502	
KDEC06504	
KDEC06505	
KDEC06506	
KDEC06507	
KDEC06509	
KDEC06510	
KDEC07001	
KDEC07002	
KDEC07003	
KDEC07004	×

メッセージ ID	JP1 イベント通知の有無
KDEC07005	×
KDEC07006	
KDEC10001	×
KDEC10002	×
KDEC10003	×
KDEC10004	×
KDEC10005	×
KDEC10006	×
KDEC10007	×
KDEC10008	×
KDEC10009	×
KDEC10010	×
KDEC10011	×
KDEC10012	×
KDEC10013	×
KDEC10014	×
KDEC10015	×
KDEC10016	×
KDEC10017	×
KDEC10020	×
KDEC10021	×
KDEC10022	×
KDEC10023	×
KDEC10024	×
KDEC10025	×
KDEC10026	×
KDEC10027	×
KDEC10028	×
KDEC10029	×
KDEC10030	×
KDEC10031	×
KDEC10033	×
KDEC10034	×
KDEC10035	×
KDEC10036	×

付録 F JP1 イベント通知をするメッセージ

メッセージ ID	JP1 イベント通知の有無
KDEC10037	×
KDEC10038	×
KDEC10039	×
KDEC10040	×
KDEC10041	×
KDEC10042	×
KDEC10043	×
KDEC10044	×
KDEC10045	×
KDEC10046	×
KDEC10047	×
KDEC10048	×
KDEC10049	×
KDEC10050	×
KDEC10051	×
KDEC10052	×
KDEC10053	×
KDEC10054	×
KDEC10055	×
KDEC10056	×
KDEC10057	×
KDEC10058	×
KDEC10059	×
KDEC10060	×
KDEC10061	×
KDEC10062	×
KDEC10063	×
KDEC10064	×
KDEC10065	×
KDEC10066	×
KDEC10067	×
KDEC10068	×
KDEC10069	×
KDEC10070	×
KDEC10071	×

メッセージ ID	JP1 イベント通知の有無
KDEC10072	×
KDEC10073	×
KDEC10074	×
KDEC10075	×
KDEC10400	×
KDEC10401	×
KDEC10403	×
KDEC10407	×
KDEC10408	×
KDEC10409	×
KDEC10410	×
KDEC10411	×
KDEC10501	×
KDEC10502	×
KDEC19901	
KDEC19902	
KDEC19903	

(凡例)

: 通知します。

× : 通知しません。

(2) KDEC20000 ~ KDEC39999 のメッセージ (ビジネスプロセス基盤に関するメッセージ)

メッセージ ID	JP1 イベント通知の有無
KDEC20000	
KDEC20001	
KDEC20002	×
KDEC20003	×
KDEC20004	
KDEC20005	
KDEC20006	×
KDEC20007	×
KDEC20008	×
KDEC20009	
KDEC20010	

付録 F JP1 イベント通知をするメッセージ

メッセージ ID	JP1 イベント通知の有無
KDEC20012	
KDEC20013	×
KDEC20014	
KDEC20015	
KDEC20016	×
KDEC20017	×
KDEC20018	×
KDEC20023	×
KDEC20024	×
KDEC20025	×
KDEC20026	×
KDEC20027	
KDEC20028	×
KDEC20029	
KDEC20030	×
KDEC20031	×
KDEC20032	×
KDEC20033	
KDEC20034	×
KDEC20035	
KDEC20036	×
KDEC20037	×
KDEC20038	×
KDEC20039	×
KDEC20040	×
KDEC20041	×
KDEC20042	×
KDEC20043	×
KDEC20044	×
KDEC20045	×
KDEC20046	
KDEC20047	
KDEC20048	
KDEC20049	
KDEC20051	×

メッセージ ID	JP1 イベント通知の有無
KDEC20052	×
KDEC20053	×
KDEC20054	×
KDEC20055	×
KDEC20056	×
KDEC20057	×
KDEC20058	
KDEC20059	
KDEC20060	×
KDEC20061	×
KDEC20062	×
KDEC20063	×
KDEC20064	×
KDEC20065	×
KDEC20066	×
KDEC20067	×
KDEC20068	
KDEC20069	×
KDEC20070	
KDEC20071	×
KDEC35000	×
KDEC35001	×
KDEC35002	×
KDEC35003	×
KDEC35004	×
KDEC35005	×
KDEC35006	×
KDEC35007	×
KDEC35008	×
KDEC35009	×
KDEC35011	×
KDEC35012	×
KDEC35013	×
KDEC35014	×

(凡例)

: 通知します。

x : 通知しません。

(3) KDEC40000 ~ KDEC59999 のメッセージ (データ変換基盤に関するメッセージ)

KDEC40000 ~ KDEC59999 のメッセージはすべて JP1 イベント通知をします。

(4) KDEC60000 ~ KDEC79999 のメッセージ (DB アダプタ連携基盤に関するメッセージ)

メッセージ ID	JP1 イベント通知の有無
KDEC60000	
KDEC60001	
KDEC60002	x
KDEC60003	x
KDEC62000	
KDEC62001	
KDEC63000	x
KDEC63001	x
KDEC63002	
KDEC64000	
KDEC64001	
KDEC64002	
KDEC64003	
KDEC64004	
KDEC64005	
KDEC64006	
KDEC64007	
KDEC64008	
KDEC64009	
KDEC64010	
KDEC64011	
KDEC64012	
KDEC66000	
KDEC66001	x
KDEC66002	
KDEC66003	

メッセージ ID	JP1 イベント通知の有無
KDEC66004	
KDEC66005	
KDEC66006	
KDEC66007	
KDEC70002	
KDEC70003	×
KDEC70004	×
KDEC79000	

(凡例)

- : 通知します。
- × : 通知しません。

(5) KEOS50000 ~ KEOS59999 のメッセージ (HCSC-Manager に関するメッセージ)

KEOS50000 ~ KEOS59999 のメッセージはすべて JP1 イベント通知をしません。

付録 G 下位バージョンからのリポジトリの移行

旧バージョンの Cosminexus サービスプラットフォームで構築した開発環境，運用環境および実行環境を 07-60 にバージョンアップできます。その際，旧バージョンで使用していたリポジトリ情報（HCSC コンポーネントや配備定義など）をバージョンアップ後も使用する場合，リポジトリの情報をバージョンアップ後にも使用できる形式に移行してからバージョンアップします。

このマニュアルでは，バージョンアップ前に使用していたリポジトリ情報をそのまま使用して，バージョンアップ後も運用する場合のバージョンアップ方法について説明します。

旧バージョンで使用していたリポジトリ情報をバージョンアップ前後に開発環境で変更し，変更したリポジトリ情報を使用して運用する場合のバージョンアップ方法については，マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド」を参照してください。

付録 G.1 移行の対象となるバージョン

リポジトリ情報の移行の対象となる旧バージョンを次に示します。これらのバージョンのリポジトリ情報を移行して，各環境を 07-60 にバージョンアップできます。

- uCosminexus Service Architect 07-10
- uCosminexus Service Platform 07-10
- uCosminexus Service Architect 07-20
- uCosminexus Service Platform 07-20
- uCosminexus Service Architect 07-50
- uCosminexus Service Platform 07-50

なお，07-50 より前のバージョンから 07-60 に移行する場合と，07-50 から 07-60 に移行する場合とで，次のように移行方法が異なります。

07-50 より前のバージョンから 07-60 に移行する場合

旧バージョンをアンインストールして，07-60 を新規にインストールします。移行手順の詳細については，「付録 G.2 新規にインストールする場合の移行手順」を参照してください。

07-50 から 07-60 に移行する場合

次の三つの移行方法があります。

- 07-50 をアンインストールして，07-60 を新規にインストールします。HCSC 簡易セットアップ機能を利用してセットアップした場合は，この方法をお勧めします。移行手順の詳細については，「付録 G.2 新規にインストールする場合の移行手順」を参照してください。
- 07-60 を上書きインストールします。移行手順の詳細については，「付録 G.3 上

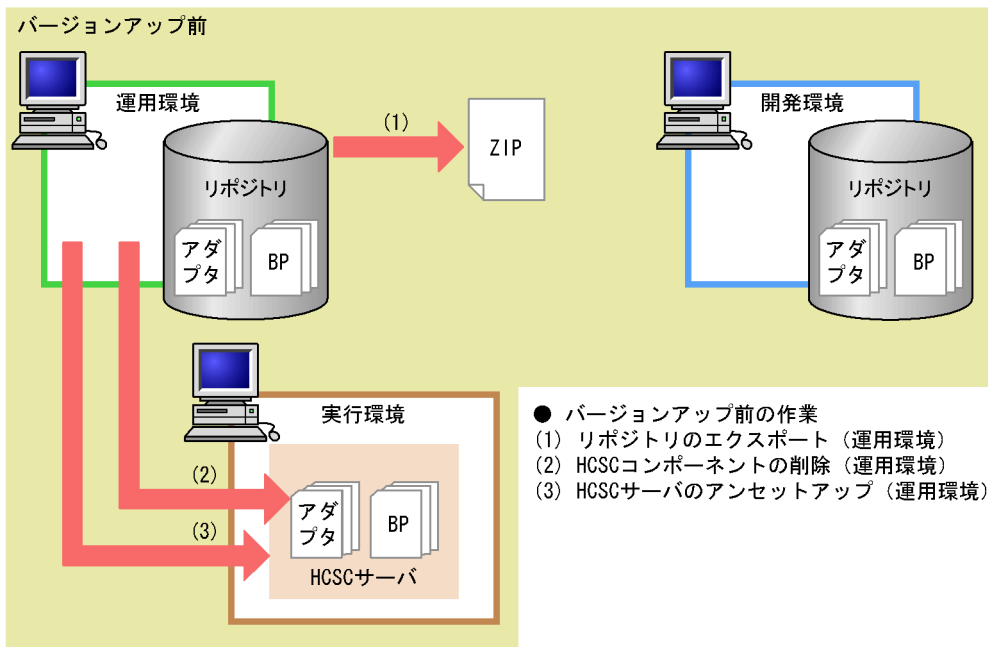
書きインストールする場合の移行手順」を参照してください。

- システムを全面停止しないで、07-60 を上書きインストールします（**ローリングアップデート**）。ロードバランスクラス構成で運用している場合は、この方法を実施します。移行手順の詳細については、「付録 G.4 ローリングアップデートの場合の移行手順」を参照してください。

付録 G.2 新規にインストールする場合の移行手順

次の図に示す (1) ~ (10) の手順に従って、Cosminexus サービスプラットフォームを旧バージョンから 07-60 へ移行してください。

図 G-1 新規にインストールする場合の移行手順



----- (4) 各環境のアンインストール -----

----- (5) 各環境のインストール -----

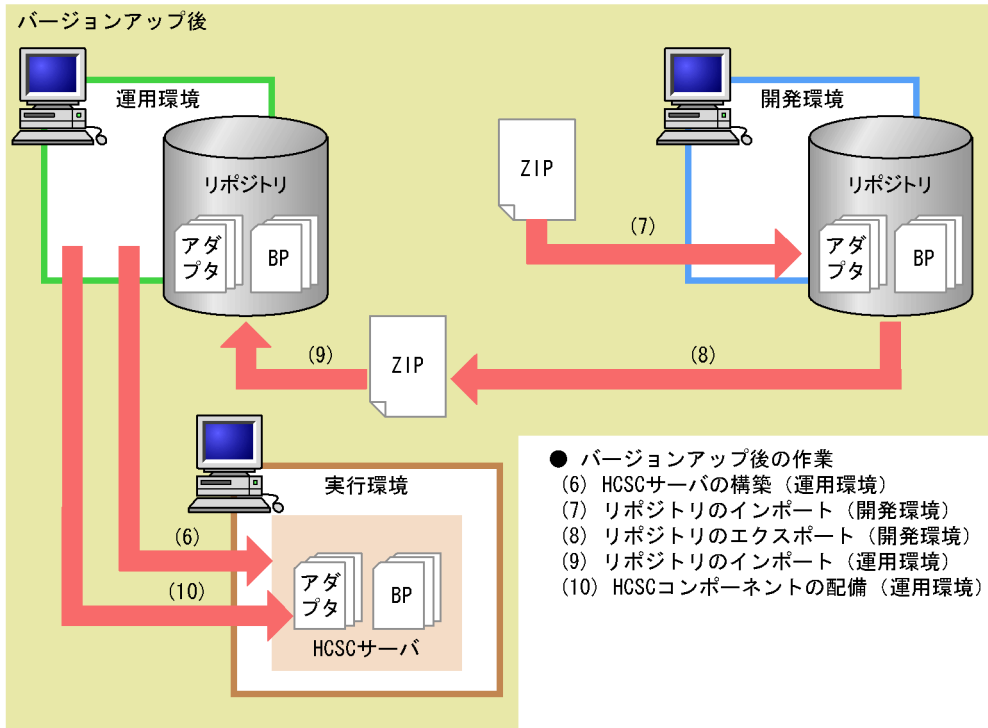


図 G-1 の (1) ~ (10) の手順の詳細を次に示します。

なお、手順内で使用するコマンドの詳細については、「10. コマンド」を参照してください。また、開発環境で実施する作業の詳細については、マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド」を参照してください。

! 注意事項

バージョン 07-60 以降では、開発環境と運用環境で同じリポジトリを共有できません。下位バージョンでリポジトリを共有していた場合、開発環境と運用環境で別々のリポジトリを用意して、移行してください。移行手順については、マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド」の下位バージョンで開発環境と運用環境のリポジトリを共有していた場合の移行手順を参照してください。

(1) リポジトリのエクスポート (運用環境)

バージョンアップ前の運用環境のリポジトリをエクスポートして、いったん退避します。複数のリポジトリを使用している場合、必要なリポジトリをすべてエクスポートして、退避します。

cscprepctl コマンド (-export オプション) を運用環境で実行して、バージョンアップ前のリポジトリをエクスポートしてください。

リポジトリのエクスポート方法の詳細については、「4.2 リポジトリのエクスポート」を参照してください。

(2) HCSC コンポーネントの削除 (運用環境)

実行環境の HCSC サーバに配備されている HCSC コンポーネントをすべて削除します。バージョンアップする実行環境のすべての HCSC サーバに配備されている HCSC コンポーネントをすべて削除します。

csccompounddeploy コマンドを運用環境で実行して、HCSC サーバに配備されている HCSC コンポーネントを削除してください。

```
csccompounddeploy -csc <HCSCサーバ名> -type {adapter|bp} -name <サービスアダプタのサービスID>
```

(3) HCSC サーバのアンセットアップ (運用環境)

バージョンアップする実行環境のすべての HCSC サーバをアンセットアップします。

cscsvunsetup コマンドを運用環境で実行して、すべての HCSC サーバをアンセットアップしてください。

HCSC サーバのアンセットアップ方法については、「3.2.5 HCSC サーバをアンセット

アップする」を参照してください。

なお、アンセットアップしないでバージョンアップしてしまった場合、07-50 より前のバージョンから 07-60 に移行するときは、手動で HCSC サーバを削除してください。07-50 から 07-60 に移行するときは、手動で HCSC サーバを削除する必要はありません。

(4) 各環境のアンインストール

開発環境、運用環境、実行環境で旧バージョンの Cosminexus サービスプラットフォームをアンインストールします。Cosminexus 以下のディレクトリ情報を退避したあとに、旧バージョンの Cosminexus サービスプラットフォームをアンインストールすることをお勧めします。

注意

アンインストールする場合の注意

- J2EE サーバ、Management Server、PRF など実行環境の構成要素を停止してからアンインストールしてください。
- 組み込みデータベースを使用している場合、組み込みデータベースを停止してからアンインストールしてください。

07-50 より前のバージョンから移行する場合の注意

- 必ずすべての HCSC サーバをアンセットアップしてからバージョンアップしてください。
- 実行環境をバージョンアップする場合、cscrepls コマンドを使って HCSC サーバ情報が残っていないことを確認してから実施してください。HCSC サーバ情報が残っていたら、必ず HCSC サーバをアンセットアップしてからバージョンアップしてください。HCSC サーバ情報が残っていてもバージョンアップは実行できますが、正しくバージョンアップされないので注意してください。
- HCSC サーバをアンセットアップしたあとに、リポジトリルート配下を削除してください。

開発環境をバージョンアップする場合の注意

開発環境では、バージョンアップ前に HCSCTE プロジェクトをいったん削除し、バージョンアップ後に新しく作成し直してください。

(5) 各環境のインストール

開発環境、運用環境、実行環境で 07-60 の Cosminexus サービスプラットフォームをインストールしてバージョンアップします。

(6) HCSC サーバの構築 (運用環境)

前回作成した HCSC サーバと同一の環境を構築し、定義します。前回作成した次のファイルを基に、HCSC サーバを構築し、定義します。

- HCSC サーバ構成定義ファイル
- HCSC サーバセットアップ定義ファイル
- 連携セットアップ定義ファイル
- HCSC サーバランタイム定義ファイル
- ユーザ定義受付ランタイム定義ファイル

(7) リポジトリのインポート（開発環境）

(1) でエクスポートしたリポジトリ情報を開発環境にインポートします。インポートするときは、Eclipse のメニューの [プロジェクト] - [自動的にビルド] をオフにしてから、リポジトリをインポートしてください。リポジトリのインポート終了後は、オンに戻してください。

旧バージョンのリポジトリをインポートすると、パッケージングおよび配備定義が自動で実施され、リポジトリ情報が今バージョンに引き継がれます。なお、パッケージングおよび配備定義が自動で実施されるのは、旧バージョンでパッケージングおよび配備定義した HCSC コンポーネントだけです。

注意

07-50 より前のバージョンから移行する場合の注意

サービスアダプタ (SessionBean) のユーザ定義クラスに次のファイル名が設定されているときは、警告メッセージが表示されます。

- csmsvcadpdef.jar
- cscmsg_adpejb.jar

警告メッセージが表示された場合、サービスアダプタ定義画面で、上記のユーザ定義クラスを削除し、ファイル名を変更してから、再度設定してください。

メモリについての注意

旧バージョンのリポジトリをインポートするときは、メモリを多く必要とします。そのため、次の手順でメモリサイズが十分かどうかを確認し、メモリが不足している場合は、メモリサイズを増やしてからリポジトリをインポートしてください。

1. Eclipse のメニューから、[MyEclipse] - [ガーベッジ・コレクションの実行] を選択します。
2. [メモリー使用量 (MB)] ダイアログの [ガーベッジ・コレクション後] に表示されている、「最大許容メモリー・サイズ」および「メモリー使用量」を確認します。
3. 次の条件に当てはまる場合、マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド」の「Eclipse の設定ファイルの確認」を参照し、推奨値に従ってメモリサイズ (-Xmx の値) を大きくします。条件に当てはまらない場合、対処は不要です。
条件 : 「メモリー使用量」 + 定義済みサービス数 × 3 > 「最大許容メモリー・サイズ」

推奨値：変更後の「-Xmx」の値 = 定義済みサービス数 × 3 + 変更前の「-Xmx」の値

クライアント定義ファイルについての注意

開発環境でサービスアダプタ（Web サービス）を定義した場合、クライアント定義ファイル（c4webcl.properties）の「c4web.logger.log_file_prefix」の値は、自動的にサービス ID に変更されます。必要に応じて、移行前のクライアント定義ファイルを削除してください。詳細については、マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド」のクライアント定義ファイルの作成と設定に関する内容を参照してください。

(8) リポジトリのエクスポート（開発環境）

(7) でインポートしたリポジトリをエクスポートします。

(9) リポジトリのインポート（運用環境）

(8) でエクスポートしたリポジトリをインポートします。なお、旧バージョンのリポジトリはインポートできません。

cscreptcl コマンド（-import オプション）を運用環境で実行してください。

リポジトリのインポート方法の詳細については、「4.3 リポジトリのインポート」を参照してください。

(10) HCSC コンポーネントの配備（運用環境）

(9) でインポートしたリポジトリ情報に含まれる HCSC コンポーネントを HCSC サーバに配備します。(1) でリポジトリをエクスポートしたときと同じ環境となるように配備します。

csccompodeploy コマンド（-all オプション）を運用環境で実行してください。

HCSC コンポーネントの配備方法の詳細については、「3.1.9 サービスアダプタを配備する」「3.1.10 ビジネスプロセスを配備する」を参照してください。

HCSC コンポーネントの配備後は、バージョンアップ前と同様に HCSC コンポーネントを操作できます。

なお、旧バージョンで使用していたリポジトリ情報をバージョンアップ前後に開発環境で変更し、変更したリポジトリ情報を使用して運用する場合のバージョンアップ方法については、マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド」を参照してください。

付録 G.3 上書きインストールする場合の移行手順

上書きインストールで移行できるのは、バージョンが 07-50 のときだけです。07-50 より前のバージョンを移行する場合は、07-60 を新規にインストールして移行してください。

次の図に示す (1) ~ (6) の手順に従って、Cosminexus サービスプラットフォームを 07-50 から 07-60 へ移行してください。

図 G-2 上書きインストールする場合の移行手順

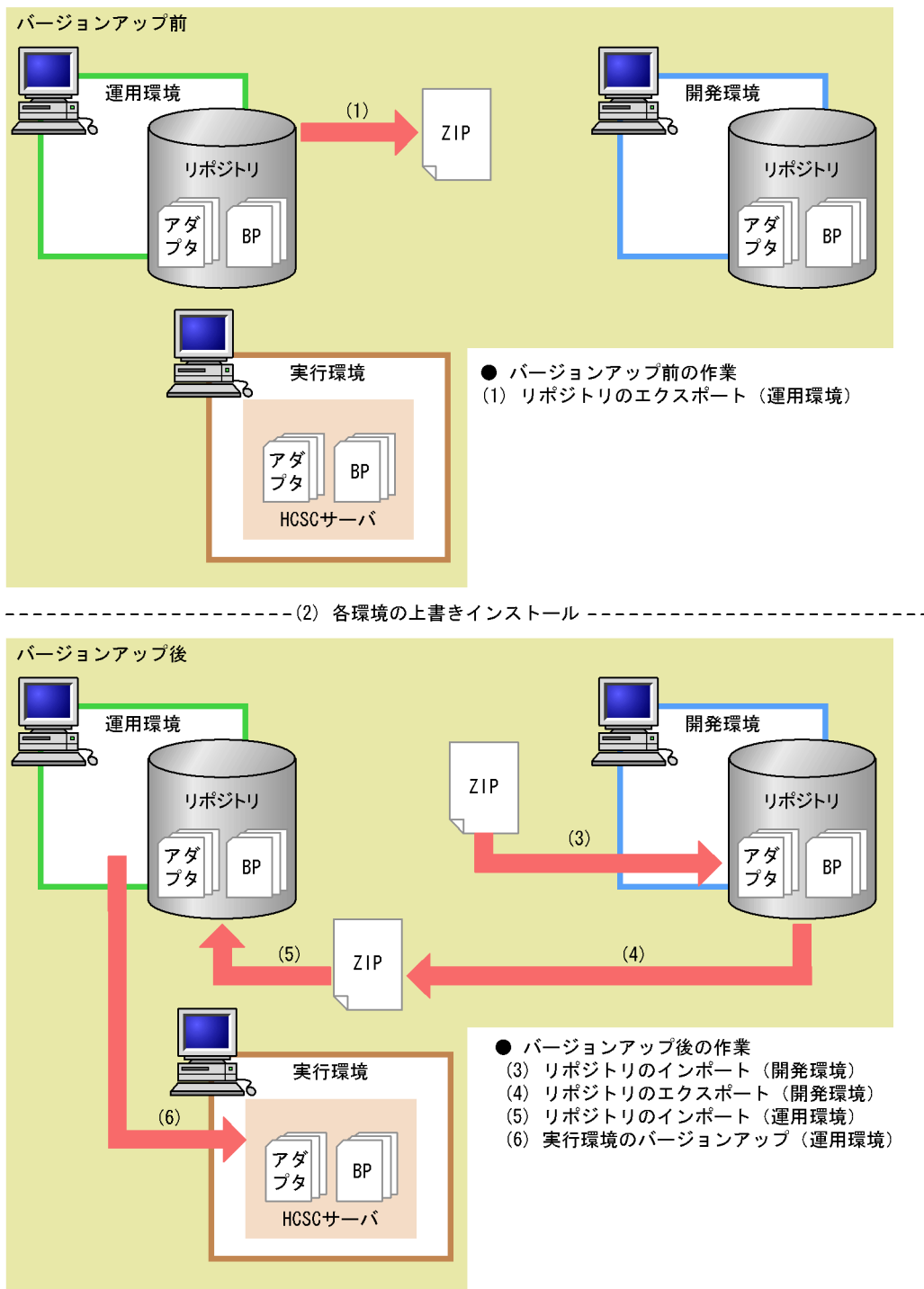


図 G-2 の (1) ~ (6) の手順の詳細を次に示します。

なお、手順内で使用するコマンドの詳細については、「10. コマンド」を参照してください。また、開発環境で実施する作業の詳細については、マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド」を参照してください。

! 注意事項

バージョン 07-60 以降では、開発環境と運用環境で同じリポジトリを共有できません。下位バージョンでリポジトリを共有していた場合、開発環境と運用環境で別々のリポジトリを用意して、移行してください。移行手順については、マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド」の下位バージョンで開発環境と運用環境のリポジトリを共有していた場合の移行手順を参照してください。

参考

リポジトリを共有している場合は、配備済みのコンポーネントをすべて削除してから、(1) ~ (6) の作業を実施することをお勧めします。

(1) リポジトリのエクスポート（運用環境）

バージョンアップ前の運用環境のリポジトリをエクスポートして、いったん退避します。複数のリポジトリを使用している場合、必要なリポジトリをすべてエクスポートして、退避します。

cscrepctl コマンド（-export オプション）を運用環境で実行して、バージョンアップ前のリポジトリをエクスポートしてください。

リポジトリのエクスポート方法の詳細については、「4.2 リポジトリのエクスポート」を参照してください。

(2) 各環境の上書きインストール

開発環境、運用環境、実行環境で 07-60 の Cosminexus サービスプラットフォームを上書きインストールしてバージョンアップします。

注意

アンインストールする場合の注意

- J2EE サーバ、Management Server、PRF など実行環境の構成要素を停止してから上書きインストールしてください。
- 組み込みデータベースを使用している場合、組み込みデータベースを停止してから上書きインストールしてください。

開発環境をバージョンアップする場合の注意

開発環境では、バージョンアップ前に HCSCTE プロジェクトをいったん削除し、バージョンアップ後に新しく作成し直してください。

(3) リポジトリのインポート (開発環境)

(1) でエクスポートしたリポジトリ情報を開発環境にインポートします。旧バージョンのリポジトリをインポートすると、パッケージングおよび配備定義が自動で実施され、リポジトリ情報が今バージョンに引き継がれます。なお、パッケージングおよび配備定義が自動で実施されるのは、旧バージョンでパッケージングおよび配備定義した HCSC コンポーネントだけです。

注意

旧バージョンのリポジトリをインポートするときは、メモリを多く必要とします。そのため、次の手順でメモリサイズが十分かどうかを確認し、メモリが不足している場合は、メモリサイズを増やしてからリポジトリをインポートしてください。

1. Eclipse のメニューから、[MyEclipse] - [ガーベッジ・コレクションの実行] を選択します。
2. [メモリー使用量 (MB)] ダイアログの [ガーベッジ・コレクション後] に表示されている、「最大許容メモリー・サイズ」および「メモリー使用量」を確認します。
3. 次の条件に当てはまる場合、マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド」の「Eclipse の設定ファイルの確認」を参照し、推奨値に従ってメモリサイズ (-Xmx の値) を大きくします。条件に当てはまらない場合、対処は不要です。

条件：「メモリー使用量」+ 定義済みサービス数 × 3 > 「最大許容メモリー・サイズ」

推奨値：変更後の「-Xmx」の値 = 定義済みサービス数 × 3 + 変更前の「-Xmx」の値

(4) リポジトリのエクスポート (開発環境)

(3) でインポートしたリポジトリをエクスポートします。

(5) リポジトリのインポート (運用環境)

(4) でエクスポートしたリポジトリをインポートします。なお、旧バージョンのリポジトリはインポートできません。

cscrcpctl コマンド (-import オプション) を運用環境で実行してください。

リポジトリのインポート方法の詳細については、「4.3 リポジトリのインポート」を参照してください。

(6) 実行環境のバージョンアップ (運用環境)

運用環境から実行環境のバージョンアップを実施します。

(a) 前提条件

実行環境をバージョンアップするには、次の条件を満たす必要があります。

- データベースが起動していること
- Cosminexus および Cosminexus RM の移行が完了していること
Cosminexus の移行方法については、マニュアル「Cosminexus システム構築ガイド」を参照してください。Cosminexus RM の移行方法については、マニュアル「Cosminexus Reliable Messaging」を参照してください。
- Management Server が起動していること
- HCSC サーバ、J2EE サーバ、および HCSC コンポーネントが停止していること

前提条件を満たしていない場合、上記の順番で起動、停止、およびバージョンアップを実施してください。

(b) バージョンアップ方法

次に示すコマンドを運用環境で実行してください。

```
cscenvupdate -csc <バージョンアップするHCSCサーバ名>
```

なお、旧バージョンで使用していたリポジトリ情報をバージョンアップ前後に開発環境で変更し、変更したリポジトリ情報を使用して運用する場合のバージョンアップ方法については、マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド」を参照してください。

付録 G.4 ローリングアップデートの場合の移行手順

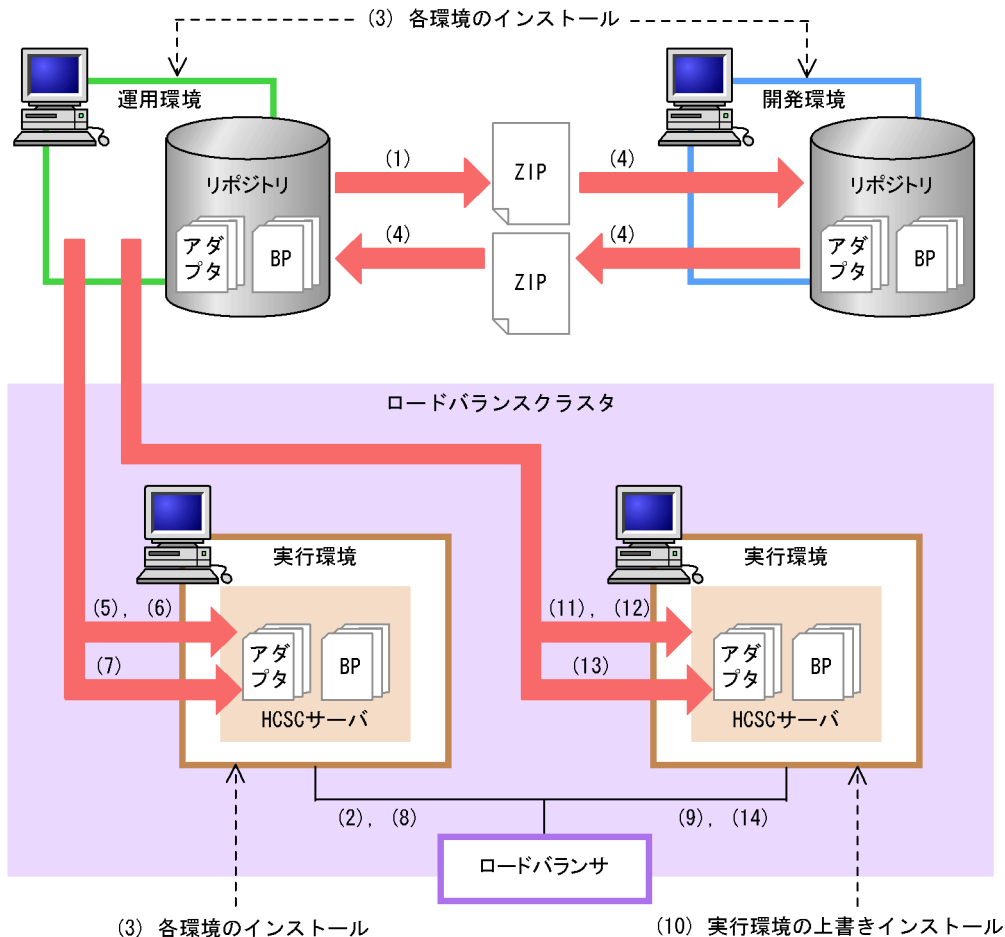
ローリングアップデートとは、システムを全面停止しないで、上書きインストールで移行する方法です。

ローリングアップデートで移行できるのは、バージョンが 07-50 のときだけです。07-50 より前のバージョンを移行する場合は、07-60 を新規にインストールして移行してください。

また、ローリングアップデートで移行する場合、2 台以上の HCSC サーバでロードバランスクラスタを構成している必要があります。

次の図に示す (1) ~ (14) の手順に従って、Cosminexus サービスプラットフォームを 07-50 から 07-60 へ移行してください。

図 G-3 ローリングアップデートの場合の移行手順



●バージョンアップ前の作業

(1) リポジトリのエクスポート (運用環境)

● 1台目の作業

- (2) リクエストの送信制御 (ロードバランサ)
- (4) リポジトリのインポート・エクスポート (開発環境・運用環境)
- (5) 実行環境のバージョンアップ (運用環境)
- (6) HCSCサーバの起動 (運用環境)
- (7) HCSCコンポーネントの開始 (運用環境)
- (8) リクエストの送信制御の解除 (ロードバランサ)

● 2台目の作業

- (9) リクエストの送信制御 (ロードバランサ)
- (11) 実行環境のバージョンアップ (運用環境)
- (12) HCSCサーバの起動 (運用環境)
- (13) HCSCコンポーネントの開始 (運用環境)
- (14) リクエストの送信制御の解除 (ロードバランサ)

図 G-3 の (1) ~ (14) の手順の詳細を次に示します。

なお、手順内で使用するコマンドの詳細については、「10. コマンド」を参照してください。また、開発環境で実施する作業の詳細については、マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド」を参照してください。

！ 注意事項

- バージョン 07-60 以降では、開発環境と運用環境で同じリポジトリを共有できません。下位バージョンでリポジトリを共有していた場合、開発環境と運用環境で別々のリポジトリを用意して、移行してください。移行手順については、マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド」の下位バージョンで開発環境と運用環境のリポジトリを共有していた場合の移行手順を参照してください。
- ローリングアップデートでの移行が完了するまで、07-50 のシステムに対して、次の操作はできません。
 - cscsvsetup コマンドで、新規に HCSC サーバをセットアップする
 - csccompodeploy コマンドで、新規に HCSC コンポーネントを配備する

(1) リポジトリのエクスポート（運用環境）

バージョンアップ前の運用環境のリポジトリをエクスポートして、いったん退避します。複数のリポジトリを使用している場合は、すべてのリポジトリをエクスポートして退避します。

cscsreptl コマンド（-export オプション）を運用環境で実行して、バージョンアップ前のリポジトリをエクスポートしてください。

リポジトリのエクスポート方法の詳細については、「4.2 リポジトリのエクスポート」を参照してください。

(2) リクエストの送信制御（ロードバランサ）

バージョンアップする HCSC サーバ（1 台目）に対してリクエストを送信しないように、ロードバランサを設定します。その際、仕掛かり中のリクエストがないことを確認してください。なお、設定方法は各ロードバランサの仕様によって異なります。

(3) 各環境のインストール

開発環境、運用環境、実行環境（1 台目）で 07-60 の Cosminexus サービスプラットフォームをインストールしてバージョンアップします。

次のどちらかの方法でインストールします。

新規にインストールする場合

「付録 G.2 新規にインストールする場合の移行手順」の (2) ~ (6) の作業を実施します。

上書きインストールする場合

「付録 G.3 上書きインストールする場合の移行手順」の (2) の作業を実施します。

注意

上書きインストールをする場合、次の点に注意してください。

- ・ J2EE サーバ, Management Server, PRF など実行環境の構成要素を停止してから上書きインストールしてください。
- ・ 組み込みデータベースを使用しているときは, 組み込みデータベースを停止してから上書きインストールしてください。

(4) リポジトリのインポート・エクスポート (開発環境・運用環境)

(1) でエクスポートしたリポジトリ情報を開発環境にインポートします。インポートによって, 古いバージョンで作成したリポジトリ情報が今バージョンに引き継がれます。そのあと, 開発環境のリポジトリ情報を運用環境にインポートし, 運用環境にもリポジトリ情報を引き継ぎます。

リポジトリのインポート・エクスポートで実施する作業は, (3) のインストール方法によって次のように異なります。

新規にインストールした場合

「付録 G.2 新規にインストールする場合の移行手順」の (7) ~ (9) の作業を実施します。

上書きインストールした場合

「付録 G.3 上書きインストールする場合の移行手順」の (3) ~ (6) の作業を実施します。

(5) 実行環境のバージョンアップ (運用環境)

運用環境から実行環境 (1 台目) のバージョンアップを実施します。

(a) 前提条件

実行環境をバージョンアップするには, 次の条件を満たす必要があります。

- ・ データベースが起動していること
- ・ Cosminexus および Cosminexus RM の移行が完了していること
Cosminexus の移行方法については, マニュアル「Cosminexus システム構築ガイド」を参照してください。Cosminexus RM の移行方法については, マニュアル「Cosminexus Reliable Messaging」を参照してください。
- ・ Management Server が起動していること
- ・ HCSC サーバおよび J2EE サーバが停止していること

前提条件を満たしていない場合, 上記の順番で起動, 停止, およびバージョンアップを実施してください。

(b) バージョンアップ方法

次に示すコマンドを運用環境で実行してください。

```
cscenvupdate -csc <バージョンアップするHCSCサーバ名>
```

(6) HCSC サーバの起動 (運用環境)

バージョンアップした HCSC サーバ (1 台目) を起動します。

(7) HCSC コンポーネントの開始 (運用環境)

(6) で起動した HCSC サーバに配備されている HCSC コンポーネントを開始します。

(8) リクエストの送信制御の解除 (ロードバランサ)

バージョンアップした HCSC サーバ (1 台目) に対してリクエストを送信するように、ロードバランサを設定します。なお、設定方法は各ロードバランサの仕様によって異なります。

(9) リクエストの送信制御 (ロードバランサ)

バージョンアップする HCSC サーバ (2 台目) に対してリクエストを送信しないように、ロードバランサを設定します。その際、仕掛かり中のリクエストがないことを確認してください。なお、設定方法は各ロードバランサの仕様によって異なります。

(10) 実行環境の上書きインストール (実行環境)

実行環境 (2 台目) で 07-60 の Cosminexus サービスプラットフォームを上書きインストールしてバージョンアップします。なお、開発環境および運用環境のバージョンアップは、(4) で実施しているため不要です。

注意

- J2EE サーバ, Management Server, PRF など実行環境の構成要素を停止してから上書きインストールしてください。
- 組み込みデータベースを使用している場合, 組み込みデータベースを停止してから上書きインストールしてください。

(11) 実行環境のバージョンアップ (運用環境)

運用環境から実行環境 (2 台目) のバージョンアップを実施します。

実行環境のバージョンアップ方法については、「(5) 実行環境のバージョンアップ (運用環境)」を参照してください。

(12) HCSC サーバの起動 (運用環境)

バージョンアップした HCSC サーバ (2 台目) を起動します。

(13) HCSC コンポーネントの開始 (運用環境)

(12) で起動した HCSC サーバに配備されている HCSC コンポーネントを開始します。

(14) リクエストの送信制御の解除 (ロードバランサ)

バージョンアップした HCSC サーバ (2 台目) に対してリクエストを送信するように、ロードバランサを設定します。なお、設定方法は各ロードバランサの仕様によって異なります。

(15) 3 台目以降の HCSC サーバ (実行環境) に対しての作業

ロードバランスクラスタを構成しているすべての HCSC サーバに対して、(9) ~ (14) の作業を実施します。

なお、旧バージョンで使用していたリポジトリ情報をバージョンアップ前後に開発環境で変更し、変更したリポジトリ情報を使用して運用する場合のバージョンアップ方法については、マニュアル「Cosminexus サービスプラットフォーム 開発ガイド」を参照してください。

付録 H 用語解説

(英字)

CTM (Cosminexus Component Transaction Monitor)

構成ソフトウェアの一つです。サービス部品の実行要求が集中しないようにスケジューリングをするための機能です。

DB Connector

データベースに接続するためのリソースアダプタです。

DB アダプタ

データベースの操作をサービス部品として利用する場合に、操作するデータベースや実行する SQL を定義した HCSC コンポーネントです。

DB キュー

データベースを介してシステム間で連携する、TP1/EE (TP1/Server Base Enterprise Option) の機能です。DB キュー機能を使用すると、データベースをキューとして、TP1/EE と J2EE との間で、非同期型のメッセージ送受信ができます。

EAR (Enterprise Archive) ファイル

J2EE アプリケーションを構成する複数のファイルを EAR ファイル形式でパッケージ化したものです。

Cosminexus サービスプラットフォームでは、HCSC コンポーネントをパッケージングして、EAR ファイルを作成します。

Eclipse

Eclipse プロジェクト (eclipse.org) が提供するオープンソースの統合開発環境です。ソースコードの編集支援機能やデバッグ機能など、アプリケーションの開発効率を向上させる各種機能を備えています。

Cosminexus サービスプラットフォームでは、Eclipse に必要な機能をプラグインして利用します。

EJB (Enterprise JavaBeans)

業務ロジックをプログラムとして記述したビジネスロジック、および永続的データを格納するオブジェクトであるエンティティを Java コンポーネント化したものです。Sun Microsystems, Inc. から EJB 仕様が公開されています。

HCSC (Hitachi Cosminexus Service Coordinator)

uCosminexus Service Platform を構成する構成ソフトウェアの一つです。Cosminexus サービスプラットフォームで SOA を適用したシステムを構築、運用するための機能として、ビジネスプロセス実行機能、データ変換機能、DB アダプタ機能、実行環境の運用管理機能、およびメッセージング制御機能を提供しています。

HCSC-Business Process (ビジネスプロセス基盤)

ビジネスプロセスの定義に従って、適切なサービス部品を呼び出すための機能です。

HCSC-Data Transform (データ変換基盤)

データ変換定義に従って、要求電文・応答電文の電文フォーマットを変換する機能です。

HCSC-DB Adapter (DB アダプタ連携基盤)

DB アダプタの定義に従って適切なサービス部品 (データベースの操作) を呼び出す機能です。

HCSC-Manager

Cosminexus サービスプラットフォームの運用環境で利用する運用管理機能です。

HCSC サーバのセットアップ機能, HCSC コンポーネントの配備機能, プロセスインスタンスの実行履歴管理機能などが含まれます。

HCSC-Manager コマンド共通定義ファイル (csccmd.properties)

運用環境で使用するコマンドの必須項目の省略値を定義するファイルです。J2SE のプロパティ形式のファイルとして作成します。

このファイルに省略値を定義しておくこと、コマンド入力時に該当するオプションの入力を省略できます。

HCSC-Manager 定義ファイル (cscmng.properties)

運用環境のカスタマイズに必要な情報を定義するファイルです。J2SE のプロパティ形式のファイルとして作成します。

リポジトリのインポート先となるディレクトリや、ログファイルの大きさ・面数などを定義できます。

HCSC-Messaging (メッセージング基盤)

サービスアダプタの定義に従って適切なサービス部品を呼び出す機能です。

HCSC コンポーネント

開発環境で作成するサービスアダプタ, DB アダプタ, ビジネスプロセス, およびユーザ定義受付の総称です。

HCSC サーバ

実行環境でサービス部品の実行を管理するサーバ機能です。メッセージング基盤, DB アダプタ連携基盤, ビジネスプロセス基盤, データ変換基盤など, 実行環境に必要な機能が含まれます。また, 標準受付や連携受付などの機能も含まれます。

HCSC サーバ構成定義ファイル (cscsvsetup.xml)

HCSC サーバの構成を定義するファイルです。XML 形式のファイルとして作成します。

HCSC サーバ, クラスタ, Cosminexus Manager などの情報を定義できます。

HCSC サーバセットアップ定義ファイル (cscsvsetup.properties)

HCSC サーバのセットアップに必要な情報を定義するファイルです。J2SE のプロパティ形式のファイルとして作成します。

HCSC サーバに設定するクラスタ名や使用できる標準受付の種類などを定義できます。

HCSC サーバランタイム定義ファイル (cscsvconfig.properties)

HCSC サーバの起動時に必要なランタイム情報を定義するファイルです。J2SE のプロパティ形式のファイルとして作成します。

実行履歴を採取するかどうかや、トレースファイルのレベル・出力先などを定義できます。

HTTP

インターネットで、WWW サーバと WWW クライアントの間で HTML 文書を送受信するための通信プロトコルです。

J2EE (Java™ 2 Platform, Enterprise Edition)

Sun Microsystems, Inc. から J2EE 仕様が公開されています。

J2EE サーバ

アプリケーションを実行するためのサーバ基盤である J2EE コンテナを生成、実行する環境です。Cosminexus サービスプラットフォームは、J2EE サーバとして Cosminexus Component Container を使用します。

Java

1991 年に Sun Microsystems 社内の研究グループが開発したインタプリタ言語を基に、C++ をより移植性と信頼性が高くなるように改良した言語です。Web の普及によってブラウザに应用されています。

JDBC (Java Database Connectivity)

Java のプログラムでデータベースを利用するための API です。

JavaSoft が 1996 年前半に仕様を公開しました。Java プログラムから、JDBC API を経由して「JDBC ドライバ」を呼び出し、ドライバがデータベース・サーバへの接続機能を提供します。

JP1

日立の統合システム運用管理ミドルウェアの総称です。

MBean (Managed Bean)

管理対象となるリソースを表す Java オブジェクトです。JMX 仕様に基づいて実装されます。マネージャに対するリソースのインターフェースとして機能し、リソースに関する情報や操作をマネージャに提供します。

MyEclipse

Java アプリケーションの開発環境です。MyEclipse には、Eclipse でアプリケーションを開発するときに使用するプラグインがまとめられています。MyEclipse を使用すると、アプリケーションの作成、J2EE サーバへのアプリケーションのデプロイ、J2EE サーバの起動・停止、データベースの操作などができます。

Cosminexus では、構成ソフトウェアとして、MyEclipse の日本語版環境である MyEclipse for Cosminexus を提供しています。

RMI-IIOP

JavaRMI と JavaIDL を統合した API です。

SessionBean

セッション単位での処理を行う機能がある、EJB で規定されている Bean の一つです。

SOAP (Simple Object Access Protocol)

ネットワーク上のサービス部品を呼び出す際のメッセージを規定したものです。HTTP と XML がベースとなっています。

TP1 アダプタ

Cosminexus サービスプラットフォームの実行環境から既存の OpenTP1 システム内にあるサービス部品を呼び出す場合に利用するアダプタです。

uCosminexus Service Architect

Cosminexus サービスプラットフォームの開発環境を構築・運用するための製品です。

uCosminexus Service Platform

Cosminexus サービスプラットフォームの実行環境・運用環境を構築・運用するための製品です。

W3C (World Wide Web Consortium)

XML や DOM を含む Web 関連技術の標準化を推進する非営利団体です。

Web サービス

インターネット上に分散するアプリケーションが提供するサービスを、クライアントに API として提供するサービス部品です。

WS-R (Web Services Reliability)

標準化団体 OASIS で標準化された、インターネット向けのオープンな非同期通信プロトコルです。

XML スキーマ

W3C 勧告で定められた仕様で、XML 文書内の論理的なデータ構造を規定するための仕組みです。

(ア行)

アダプタ

サービスリクエストからの要求電文を受け取り、アダプタ内で定義されているサービス部品へ要求電文を送信して、サービス部品を呼び出すアプリケーションです。

アダプタには、標準で使用するサービスアダプタ (標準アダプタ) と、ユーザが必要に応じて使用するカスタムアダプタ (DB アダプタ、TP1 アダプタなど) があります。サービスアダプタは、Web サービス、SessionBean、MDB (WS-R)、および MDB (DB キュー) のサービス部品を呼び出すアダプタです。カスタムアダプタは、それ以外のサービス部品を呼び出すアダプタです。

運用環境

開発環境で作成した EAR ファイルをリポジトリから読み込み、実行環境に配備する環境です。また、実行環境で利用する HCSC サーバをセットアップします。実行環境での業務の運用を開始したあとは、システムの起動・停止、および状態を監視します。

永続化

ビジネスプロセスのプロセスインスタンスの実行状況を履歴として、データベースに記録することです。

応答電文

サービス部品の実行結果を返すための電文です。応答電文には、サービス部品から HCSC サーバに送信される電文と、HCSC サーバからサービスリクエストに送信される電文があります。

(カ行)

開発環境

実行環境でサービス部品を呼び出すために必要な HCSC コンポーネントを作成したり、作成した HCSC コンポーネントを HCSC サーバおよびクラスタにどのように配備するか定義（配備定義）したりする環境です。

カスタムアダプタ

呼び出すサービス部品の種類が、Web サービス、SessionBean、MDB (WS-R)、MDB (DB キュー) 以外のアダプタです。

クラスタ

ある共通の機能を提供するサーバの集合です。
Cosminexus サービスプラットフォームでは、複数の HCSC サーバでクラスタを構成するロードバランスクラスタと、二つの HCSC サーバで実行系と待機系を構成する HA クラスタがあります。

(サ行)

サービス

業務と一対一に対応し、業務に必要な機能を再利用できるソフトウェア部品のことです。SOA では、サービスを組み合わせることで業務システムを構築します。これによって、業務の変化に対して、システムを迅速に変更できます。

サービスアダプタ

どのサービス部品を実行するかを定義した HCSC コンポーネントです。呼び出すサービス部品の種類（Web サービス、SessionBean、MDB (WS-R)、MDB (DB キュー)）ごとに定義する内容は異なります。

サービス部品

サービスアダプタおよび DB アダプタから実行できる業務処理のことです。Web サービス、SessionBean、MDB (WS-R)、MDB (DB キュー)、およびデータベースの操作をサービス部品として利用できます。

サービスリクエスト

HCSC サーバへサービス部品の実行要求（要求電文）を送信するアプリケーションです。HCSC サーバの標準受付が同期標準受付（Web サービス / SessionBean）か、非同期標準受付（MDB (WS-R) / MDB (DB キュー)）か、またはユーザ定義受付（Web サービス）かによって、作成するサービスリクエストの形式が異なります。

標準受付にサービス部品の実行を要求するサービスリクエストを作成するときは、HCSC サーバに送信される要求電文の電文フォーマットを、標準電文に合わせる必要があります。

ユーザ定義受付にサービス部品の実行を要求するサービスリクエストを作成するときは、サービス

部品またはビジネスプロセスに定義した電文フォーマット（WSDL）に合わせることができます。

システム構成定義

HCSC サーバおよびクラスタのセットアップ情報と、HCSC コンポーネントを HCSC サーバおよびクラスタにどのように配備するかの情報が含まれる定義情報です。

HCSC サーバおよびクラスタのセットアップ情報は、運用環境で更新されます。開発環境では、HCSC サーバおよびクラスタに HCSC コンポーネントをどのように配備するかの情報を定義しません。

実行環境

サービスリクエストで受け付けた実行要求に応じて、HCSC サーバを介して適切なサービス部品を呼び出し、業務を実行する環境です。

実行履歴

ビジネスプロセスのプロセスインスタンスの実行履歴と電文の実行履歴とがあります。ビジネスプロセスの実行状況や応答状況を確認したり、サービス部品の情報や電文の配送経路や配送状態を確認したりできます。

実行履歴情報テーブル

ビジネスプロセスや電文のプロセスインスタンスおよび電文の実行履歴を管理するテーブルです。

性能解析トレース

Cosminexus システムの性能解析をするためのトレース情報です。

関連セット

サービスリクエストから送信された要求電文を一意に識別するために利用する文字列です。HCSC サーバには、サービスリクエストから関連セットを含む要求電文が送信されます。サービス部品の HCSC サーバは、関連セットを含んだ応答電文をサービスリクエストに返信します。その結果、サービスリクエストは受信した応答電文が、どの要求電文に対する応答であるのかを一意に識別できます。

(夕行)

データ変換

標準電文とサービス部品電文の電文フォーマットが異なる場合に、データ変換定義に従って、標準電文をサービス部品電文の電文フォーマットに変換することです。

データ変換定義

標準電文とサービス部品電文の電文フォーマットの相違を解消するためのデータ変換方法を定義したものです。標準電文とサービス部品電文の電文フォーマット定義ファイルの各要素をマッピングし、必要に応じてファンクションを設定して定義します。

電文フォーマット

要求電文および応答電文のデータ構造です。

サービスリクエストから HCSC サーバに送信される要求電文の電文フォーマットは、標準電文の電文フォーマットに合わせる必要があります。標準電文とサービス部品に実行要求するための電文（サービス部品電文）の電文フォーマットが異なる場合は、データ変換定義を作成して、電文フォー

マットの相違を解消します。

電文フォーマット定義ファイル

電文の構造（電文フォーマット）を定義したファイルです。XML フォーマット定義ファイルとバイナリフォーマット定義ファイルとがあります。サービス部品の実行に利用する電文で XML 形式のデータを扱う場合は、XML フォーマット定義ファイルを、バイナリ形式（XML 形式以外）のデータを扱う場合は、バイナリフォーマット定義ファイルを利用します。

（八行）

配備

HCSC コンポーネントを適切な HCSC サーバに配置することです。開発環境で作成した HCSC コンポーネントは、運用環境を利用して実行環境（HCSC サーバ）に配備します。

配備定義

開発環境で、HCSC コンポーネントを HCSC サーバおよびクラスタにどのように配備するか定義し、システム構成定義を更新することです。運用環境から HCSC コンポーネントを配備するときには、開発環境で配備定義したシステム構成定義の内容に従って配備します。

パッケージング

開発環境で作成した HCSC コンポーネントを、実行環境に配備できるように EAR ファイルに組み立てることです。

ビジネスプロセス

複数のサービス部品の処理の順番や条件などを定義して、一連の業務の流れとして定義したものです。Cosminexus サービスプラットフォームの開発環境では、複数のアクティビティを画面上に配置し、コネクションで連結して定義します。

標準受付

サービスリクエスタからの要求電文を受け付けるための機能（インターフェース）です。HCSC サーバに含まれる機能です。標準受付を開始すると、サービスリクエスタからの要求電文を受け付けられる状態になります。

同期受付（Web サービス / SessionBean）および非同期受付（MDB（WS-R） / MDB（DB キュー））の要求を受け付けることができます。

標準電文（標準電文フォーマット）

Cosminexus サービスプラットフォームで提供する標準的な電文フォーマットです。

プロセスインスタンス

ビジネスプロセスで実行している業務の一つの実体です。ワークフローの案件に相当します。

（マ行）

メソッドトレース

障害が発生し、原因の究明が困難な場合に必要な情報です。

(ヤ行)

ユーザ定義受付

サービスリクエストからの実行要求を受け付けるための機能（インターフェース）です。HCSC サーバに含まれる標準受付とは異なり、ユーザが任意のインターフェースを定義できます。定義したユーザ定義受付を HCSC サーバに配備して開始すると、サービスリクエストからの要求電文を受け付けられる状態になります。

ユーザ電文

サービスリクエストから送信される要求電文です。

要求電文

サービス部品の実行を要求するための電文です。要求電文には、サービスリクエストから HCSC サーバに送信される電文と HCSC サーバ内のアダプタからサービス部品に送信される電文があります。

(ラ行)

リクエスト受付

標準受付およびユーザ定義受付の総称です。サービスリクエストからの実行要求を受け付けるための機能（インターフェース）です。

リクエストトレース

メッセージング基盤での、標準受付、ビジネスプロセス受付、またはサーバ間転送受付で受け付けたリクエストの BP やサービスアダプタの呼び出し先やその結果を把握するための情報です。

リポジトリ

定義した HCSC コンポーネントやシステム構成定義を格納するディレクトリです。格納した情報は、リポジトリの管理機能（リポジトリのインポート/エクスポート機能）を利用して、開発環境と運用環境との間で受け渡します。

連携受付

クラスタ間の連携を有効にするための機能です。HCSC サーバに含まれる機能です。連携受付を開始すると、クラスタ間の連携が有効になります。

索引

C

Cosminexus (EJB コンテナ) との関係 337
Cosminexus Manager 243
Cosminexus Manager にアクセスするユーザの設定 97
Cosminexus Manager の状態を確認する 243
Cosminexus Reliable Messaging のセットアップ 151
Cosminexus RM との関係 [MDB (DB キュー)] 357
Cosminexus RM との関係 [MDB (WS-R)] 342
Cosminexus Service Coordinator-Manager のセットアップ 152
Cosminexus Service Coordinator 管理者の変更方法 1258
Cosminexus サービスプラットフォームの全体像 2
Cosminexus サービスプラットフォームを構成する環境 3
cscapputil 752
csccmd.properties [用語解説] 1328
csccompoconfig 755
csccompodeploy 758
csccompostart 760
csccompostop 762
csccompounddeploy 764
cscconsetup 766
cscconunsetup 768
cscenvbackup 770
cscenvrestore 772
cscenvupdate 774
cscmng.properties [用語解説] 1328
cscpasswd 775
cscpidelete 779
cscpireexec 783
cscpiselect 787
cscrcptnstart 802
cscrcptnstop 804

cscrcpctl 806
cscrcpdiff 809
cscrcpls 812
cscresinfo 824
cscstatus 828
cscsvctl 832
cscsvcls 835
cscsvconfig 838
cscsvconfig.properties [用語解説] 1328
cscsvsetup 840
cscsvsetup.properties [用語解説] 1328
cscsvsetup.xml [用語解説] 1328
cscsvstart 842
cscsvstop 845
cscsvunsetup 848
cscutil 850
csmdeletehistory 857
csmshistory 860
csmlocation 868
csmreception 873
csmstate 877
CTM [用語解説] 1327

D

DB Connector [用語解説] 1327
DB Connector のセットアップ [Cosminexus RM を使用しない場合] 175
DB Connector のセットアップ [Cosminexus RM を使用する場合] 146
DB アダプタ [用語解説] 1327
DB アダプタ連携基盤 [用語解説] 1328
DB キュー [用語解説] 1327

E

EAR ファイル [用語解説] 1327
Eclipse [用語解説] 1327
EJB [用語解説] 1327

H

- HA クラスタ構成〔HCSC サーバの構成〕 37
HA クラスタ構成〔環境構築〕 109
HA クラスタ構成時の環境構築 109
HA クラスタ構成時の実行環境のセットアップ 114
HA クラスタ構成での運用 299
HA モニタ〔環境構築〕 109
HA モニタ〔関連ソフトウェア〕 30
HCSC〔用語解説〕 1327
HCSC-Business Process〔用語解説〕 1327
HCSC-Data Transform〔用語解説〕 1328
HCSC-DB Adapter〔用語解説〕 1328
HCSC-Manager〔用語解説〕 1328
HCSC-Manager 環境のバックアップ 770
HCSC-Manager 環境のリストア 772
HCSC-Manager コマンド共通定義ファイル〔定義ファイル〕 685
HCSC-Manager コマンド共通定義ファイル〔用語解説〕 1328
HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルの作成 98
HCSC-Manager 定義ファイル〔定義ファイル〕 730
HCSC-Manager 定義ファイル〔用語解説〕 1328
HCSC-Manager 定義ファイルの作成 94
HCSC-Manager にアクセスするユーザの変更 96
HCSC-Messaging〔用語解説〕 1328
HCSC-Messaging コマンド共通定義ファイル〔定義ファイル〕 687
HCHC コンポーネント〔用語解説〕 1328
HCSC コンポーネントの開始 760
HCSC コンポーネントの構成を変更する 264
HCSC コンポーネントの定義 755
HCSC コンポーネントの停止 762
HCSC コンポーネントの配備 758
HCSC サーバ〔用語解説〕 1328
HCSC サーバ構成定義ファイル〔定義ファイル〕 689
HCSC サーバ構成定義ファイル〔用語解説〕 1328
HCSC サーバ構成定義ファイルの作成 57
HCSC サーバセットアップ定義ファイル〔定義ファイル〕 696
HCSC サーバセットアップ定義ファイル〔用語解説〕 1328
HCSC サーバセットアップ定義ファイルの作成 59
HCSC サーバにアクセスするユーザの設定 97
HCSC サーバのアンセットアップ 848
HCSC サーバの起動 842
HCSC サーバの構成（HA クラスタ構成の場合） 37
HCSC サーバの構成（クラスタを連携させる場合） 40
HCSC サーバの構成（単一の場合） 34
HCSC サーバの構成（複数の場合） 35
HCSC サーバの構成（連携の場合） 39
HCSC サーバの構成（ロードバランスクラスタ構成の場合） 36
HCSC サーバの状態の表示 877
HCSC サーバの情報を確認する 245
HCSC サーバのセットアップ 840
HCSCサーバのセットアップ情報を確認する 244
HCSC サーバの定義情報を設定する 157
HCSC サーバの定義内容を確認する 158
HCSC サーバの定義を変更する 262
HCSC サーバの停止 845
HCSCサーバのリソース稼働情報の統計情報 1292
HCSCサーバのリソース稼働情報を確認する 249
HCSC サーバランタイム定義ファイル〔定義ファイル〕 718
HCSC サーバランタイム定義ファイル〔用語解説〕 1328
HCSCサーバランタイム定義ファイルの作成 64
HCSC サーバランタイムの定義 838
HCSC サーバをアンセットアップする 188

HCSC サーバを起動する 221
 HCSC サーバをセットアップする 154
 HCSC サーバを停止する 287
 Hitachi Web Server の状態を確認する 243
 Hitachi Web Server を起動する 224
 Hitachi Web Server を停止する 287
 HTTP〔用語解説〕 1329

I

iWay アダプタ 32

J

J2EE〔用語解説〕 1329
 J2EE サーバ〔用語解説〕 1329
 J2EE サーバのセットアップ 137
 Java〔用語解説〕 1329
 JDBC〔用語解説〕 1329
 JDBC ドライバのセットアップ 143
 JP1 32
 JP1〔用語解説〕 1329
 JP1/Base のイベントサーバ名の設定 122
 JP1/Base の構成定義の作成 123
 JP1 イベント通知をするメッセージ 1296
 JP1 イベント発行の設定 121
 JP1 と連携した障害監視の流れ 119
 JP1 連携機能を使用する場合の環境構築 119
 JP1 連携の設定 120

M

Management Server 環境設定ファイル 49
 Management Server の起動 50
 Management Server のセットアップ 136
 Management Server 用オプション定義ファイル 49
 MBean〔用語解説〕 1329
 MBean の起動確認 50
 Microsoft Cluster Service 30, 109
 mserver.cfg 49
 mserver.properties 49
 MyEclipse〔用語解説〕 1329

O

Object Wrapper システムとの接続 390
 OpenTP1 との接続 386

P

PRF の状態を確認する 242
 PRF のセットアップ 136
 PRF を起動する 221
 PRF を停止する 291

R

RMI-IIOP〔用語解説〕 1329

S

SessionBean〔用語解説〕 1329
 SOAP〔用語解説〕 1330
 SOAP Fault 動作定義ファイル 740
 SOAP 通信基盤との関係 332
 SQL スクリプトファイル設定時の注意事項 1290
 SQL スクリプトファイルの種類と格納先 1288
 SQL スクリプトファイルの設定 1288
 SQL スクリプトファイルの設定方法 1289

T

TP1 アダプタ〔用語解説〕 1330

U

uCosminexus Operator の前提 OS 27
 uCosminexus Service Adapter Architect for Flat Files 31
 uCosminexus Service Adapter Architect for Object Access 32
 uCosminexus Service Adapter Architect for TP1 31
 uCosminexus Service Adapter for Flat Files 32
 uCosminexus Service Adapter for Object Access 32

uCosminexus Service Adapter for TP1 31
 uCosminexus Service Architect〔用語解説〕
 1330
 uCosminexus Service Platform〔用語解説〕
 1330
 uCosminexus Service Platform の前提 OS
 27
 uCosminexus TP1/Server Base Enterprise
 Option 30
 uCosminexus TP1 Gateway 31
 uCosminexus 日立コード変換 -
 Development Kit 31
 uCosminexus 日立コード変換 - Runtime 31
 uCosminexus 日立コード変換 - Runtime の
 セットアップ 152
 uCosminexus 日立コード変換 - Server
 Runtime 31
 uCosminexus 日立コード変換 - Server
 Runtime のセットアップ 152
 usrconf.properties 74

W

W3C〔用語解説〕 1330
 Web サーバ (HTTP サーバ) のセットアッ
 プ 139
 Web サービス〔用語解説〕 1330
 WS-R〔用語解説〕 1330

X

XML スキーマ〔用語解説〕 1330

あ

アクティビティ 375
 アダプタ〔用語解説〕 1330
 アプリケーションの操作 752
 アンインストール 51

い

移行の対象となるバージョン 1310
 インストールログ 505
 インポート 806

う

上書きインストールする場合の移行手順
 1317
 運用環境 3
 運用環境〔用語解説〕 1330
 運用環境のバックアップ 638
 運用環境の復旧 639
 運用管理エージェントの起動 50

え

永続化〔電文の実行履歴〕 424
 永続化〔プロセスインスタンスの実行履歴〕
 396
 永続化〔用語解説〕 1330
 永続化しないビジネスプロセス 379
 永続化するビジネスプロセス 378
 エクスポート 806
 エディタエリア 645

お

応答電文〔用語解説〕 1331

か

下位バージョンからのリポジトリの移行
 1310
 開発環境 3
 開発環境〔用語解説〕 1331
 開発環境とテスト環境との関係 6
 各種操作 850
 カスタムアダプタ〔用語解説〕 1331
 稼働運用ページ 657
 稼働確認ページ 668
 稼働情報ファイルの出力 1292
 画面構成 644
 環境の関係 4
 関連ソフトウェア 30

き

基本情報 432
 基本情報ページ 647

キューの名称と個数〔MDB (DB キュー)〕
369
キューの名称と個数〔MDB (WS-R)〕 357
共有ロック 205

く

クラスタ〔用語解説〕 1331
クラスタ構成時の運用 292
クラスタソフトウェアの設定 117

こ

構成ソフトウェア 28
構成ソフトウェアの位置づけ 29
コマンドの種類 744
コマンドの同時実行 747
コマンドの入力形式 749
コマンドの文法の記述形式 751
コンソールビュー 646

さ

サーバチェックインポート 208
サービス〔用語解説〕 1331
サービスアダプタ〔用語解説〕 1331
サービスアダプタの情報を確認する 251
サービスアダプタまたはビジネスプロセスの情報の表示 868
サービスアダプタを開始する 225
サービスアダプタを削除する 181
サービスアダプタを停止する 281
サービスアダプタを配備する 163
サービス情報 161
サービス情報の管理 832
サービス情報の表示 835
サービス情報変更定義ファイル〔定義ファイル〕 736
サービス情報を確認する 163
サービス情報を変更する 161
サービス部品〔用語解説〕 1331
サービス部品の接続先を変更する 265
サービス部品呼び出し〔MDB (DB キュー)〕
357

サービス部品呼び出し〔MDB (WS-R)〕
342
サービス部品呼び出し〔基本的な流れ〕 301
サービス部品呼び出し〔メッセージの流れ
(MDB (DB キュー)〕 359
サービス部品呼び出し〔メッセージの流れ
(MDB (WS-R)〕 343
サービス部品呼び出し〔ユーザ電文と
WSDL の関係〕 333
サービス部品呼び出し〔ユーザ電文とサービ
ス部品のスタブとの関係〕 338
サービス部品を呼び出す〔応答電文の扱い
(MDB (DB キュー)〕 366
サービス部品を呼び出す〔応答電文の扱い
(MDB (WS-R)〕 349
サービス部品を呼び出す流れ 301, 304
サービス呼び出し〔SessionBean〕 337
サービス呼び出し〔Web サービス (SOAP
通信)〕 332
サービスリクエスト〔用語解説〕 1331

し

識別情報 313
システム構成定義〔用語解説〕 1332
システムのアンセットアップ 181
実行環境 3
実行環境〔用語解説〕 1332
実行環境 (現用系) のセットアップ 116
実行環境 (待機系) のセットアップ 115
実行環境に必要なソフトウェアの設定 130
実行環境の設定 71
実行環境のバージョンアップ 774
実行履歴〔用語解説〕 1332
実行履歴情報テーブル〔用語解説〕 1332
実行履歴情報テーブルの管理 448
実行履歴情報テーブルのバックアップ取得の
運用 449
実行履歴情報テーブルのバックアップを取得
する 448
状態表示 828
新規にインストールする場合の移行手順
1311

せ

性能解析トレース 490
 性能解析トレース〔用語解説〕 1332
 性能解析トレースの取得ポイント 492
 性能解析トレースファイルの出力形式と出力される内容 491
 セットアップ後の内容を確認・変更する 172
 セットアップ情報の追加・変更 156

そ

相関セット〔用語解説〕 1332
 相関セットの役割 378

た

タイマの設定 326
 他社 ERP パッケージとの接 391
 多重度 316
 タブ 646

つ

通信タイムアウト値を変更する 268
 ツリービュー 644

て

定義情報ページ 654
 定義ファイルの種類 682
 定義ファイルの入力形式 683
 定義ファイルの文法の記述形式 684
 データベースとの接続 384
 データベースのクライアント側のセットアップ 140
 データベースのサーバ側のセットアップ 132
 データベースの状態を確認する 242
 データベースのテーブルの情報 1263
 データベースのテーブル容量を見積もる 68
 データベースの領域への配置 73
 データベースを起動する 220
 データベースを停止する 291
 データ変換〔用語解説〕 1332
 データ変換基盤〔用語解説〕 1328
 データ変換定義〔用語解説〕 1332

テーブル容量の見積もり〔実行環境の設定〕 71
 テーブル容量の見積もり〔電文の実行履歴の管理〕 70
 テーブル容量の見積もり〔プロセスインスタンスの実行履歴の管理〕 68
 テスト環境から本番環境への移行手順 190
 テスト環境と本番環境との関係 7
 デッドメッセージキュー〔MDB (DB キュー)〕 368
 デッドメッセージキュー〔MDB (WS-R)〕 356
 電文の実行履歴採取のタイミング 424
 電文の実行履歴情報テーブルのレコードの削除 857
 電文の実行履歴情報の表示 860
 電文の実行履歴の概要 424
 電文の実行履歴の管理 424
 電文の実行履歴を削除する 445
 電文の実行履歴を表示する 437
 電文フォーマット〔用語解説〕 1332
 電文フォーマット定義ファイル〔用語解説〕 1333

と

統計情報の参照方法 1293
 トランザクション〔MDB (DB キュー)〕 368
 トランザクション〔MDB (WS-R)〕 351
 トランザクション〔SessionBean〕 340
 トランザクション〔Web サービス (SOAP 通信)〕 337
 トレースファイルの見積もり 481

は

排他ロック 205
 配備〔用語解説〕 1333
 配備済みの HCSC コンポーネントの削除 764
 配備定義〔用語解説〕 1333
 バックアップ 216
 パッケージング〔用語解説〕 1333

ひ

ビジネスプロセス〔用語解説〕 1333
 ビジネスプロセス基盤〔用語解説〕 1327
 ビジネスプロセスの再実行 380
 ビジネスプロセスの再実行〔運用環境画面〕
 381
 ビジネスプロセスの再実行〔コマンド〕 381
 ビジネスプロセスの再実行〔サービスリクエ
 スタ (SessionBean)〕 382
 ビジネスプロセスの再実行〔サービスリクエ
 スタ (SOAP 通信)〕 381
 ビジネスプロセスの仕組み 370
 ビジネスプロセスの情報を確認する 255
 ビジネスプロセスの処理の流れ 370
 ビジネスプロセスの通信モデル 371
 ビジネスプロセスを開始する 228
 ビジネスプロセスを削除する 183
 ビジネスプロセスを使った運用 370
 ビジネスプロセスを停止する 284
 ビジネスプロセスを配備する 166
 標準インポート 208
 標準受付〔用語解説〕 1333
 標準受付およびユーザ定義受付の開始 802
 標準受付およびユーザ定義受付の停止 804
 標準受付を開始する 239
 標準受付を停止する 270
 標準電文〔用語解説〕 1333
 標準電文フォーマット〔用語解説〕 1333
 標準プロトコル以外のシステムとの接続 384

ふ

ファイルを扱うシステムとの接続 392
 プロセスインスタンス〔ビジネスプロセスを
 使った運用〕 372
 プロセスインスタンス〔用語解説〕 1333
 プロセスインスタンスの検索 787
 プロセスインスタンスの再実行 783
 プロセスインスタンスの実行履歴の管理 396
 プロセスインスタンスの実行履歴の削除 779
 プロセスインスタンスの実行履歴の詳細情報
 を取得する 408

プロセスインスタンスの実行履歴を検索する
 397
 プロセスインスタンスの実行履歴を削除する
 415
 プロセスインスタンスを再実行する 419

へ

変換テーブルを登録する 74
 変数の種類 377
 変数の役割 377

め

メソッドトレース〔障害対策〕 466, 505
 メソッドトレース〔用語解説〕 1333
 メッセージの形式 882
 メッセージの種類 882
 メッセージマッピングファイルの編集 124
 メッセージログ 484
 メッセージング基盤〔用語解説〕 1328
 メニューバー 644
 メンテナンスログ〔障害情報の取得〕 466
 メンテナンスログ〔障害情報の種類〕 505

ゆ

ユーザ定義受付〔用語解説〕 1334
 ユーザ定義受付の情報の表示 873
 ユーザ定義受付の情報を確認する 258
 ユーザ定義受付の定義情報を確認する 171
 ユーザ定義受付の定義情報を設定する 170
 ユーザ定義受付の定義情報を変更する 262
 ユーザ定義受付ランタイム定義ファイル〔定
 義ファイル〕 729
 ユーザ定義受付ランタイム定義ファイルの作
 成 67
 ユーザ定義受付を開始する 231
 ユーザ定義受付を削除する 185
 ユーザ定義受付を停止する 278
 ユーザ定義受付を配備する 168
 ユーザ電文〔用語解説〕 1334
 ユーザの管理 775

よ

要求電文〔用語解説〕 1334

り

リクエスト受付〔用語解説〕 1334
 リクエストトレース〔障害対策〕 485
 リクエストトレース〔用語解説〕 1334
 リクエストトレースの取得ポイント 487
 リクエストトレースの取得方法 490
 リソース稼働情報の表示 824
 リソースに対応する情報 1293
 リソースの稼働情報の種類 1294
 リポジトリ〔用語解説〕 1334
 リポジトリ情報の差分の表示 809
 リポジトリ情報の表示 812
 リポジトリとして使用するディレクトリ 204
 リポジトリのインポート 208
 リポジトリのエクスポート 207
 リポジトリの概要 204
 リポジトリの差分情報の参照 212
 リポジトリの情報 204
 リポジトリの情報の参照 211
 リポジトリの排他 205
 リポジトリへのアクセスの制御 216
 流量制御値を変更する 267
 履歴管理ページ 673

れ

例外ログ〔障害情報の取得〕 466
 例外ログ〔障害情報の種類〕 504
 連携受付〔用語解説〕 1334
 連携受付を開始する 235
 連携受付を停止する 275
 連携情報を確認する 250
 連携セットアップ定義ファイル〔定義ファイル〕 715
 連携セットアップ定義ファイルの作成 63
 連携のアンセットアップ 768
 連携のセットアップ 766
 連携をアンセットアップする 187
 連携を開始する 237
 連携をセットアップする 159

連携を停止する 273

ろ

ロードバランサの設定 107
 ロードバランスクラスタ機能 99
 ロードバランスクラスタ構成〔HCSC サーバの構成〕 35
 ロードバランスクラスタ構成〔環境構築〕 99
 ロードバランスクラスタ構成時の環境構築 99
 ロードバランスクラスタ構成時の実行環境のセットアップ 105
 ロードバランスクラスタ構成での運用 292
 ローリングアップデート 1321
 ローリングアップデートの場合の移行手順 1321
 ログアウトする 215
 ログインする 214
 ログイン時の注意事項 215
 ログおよびトレース取得時の注意事項 482
 論理サーバの登録 216

ソフトウェアマニュアルのサービス ご案内

1. マニュアル情報ホームページ

ソフトウェアマニュアルの情報をインターネットで公開しています。

URL <http://www.hitachi.co.jp/soft/manual/>

ホームページのメニューは次のとおりです。

マニュアル一覧	日立コンピュータ製品マニュアルを製品カテゴリ、マニュアル名称、資料番号のいずれかから検索できます。
CD-ROMマニュアル	日立ソフトウェアマニュアルと製品群別CD-ROMマニュアルの仕様について記載しています。
マニュアルのご購入	マニュアルご購入時のお申し込み方法を記載しています。
オンラインマニュアル	一部製品のマニュアルをインターネットで公開しています。
サポートサービス	ソフトウェアサポートサービスお客様向けページでのマニュアル公開サービスを記載しています。
ご意見・お問い合わせ	マニュアルに関するご意見、ご要望をお寄せください。

2. インターネットでのマニュアル公開

2種類のマニュアル公開サービスを実施しています。

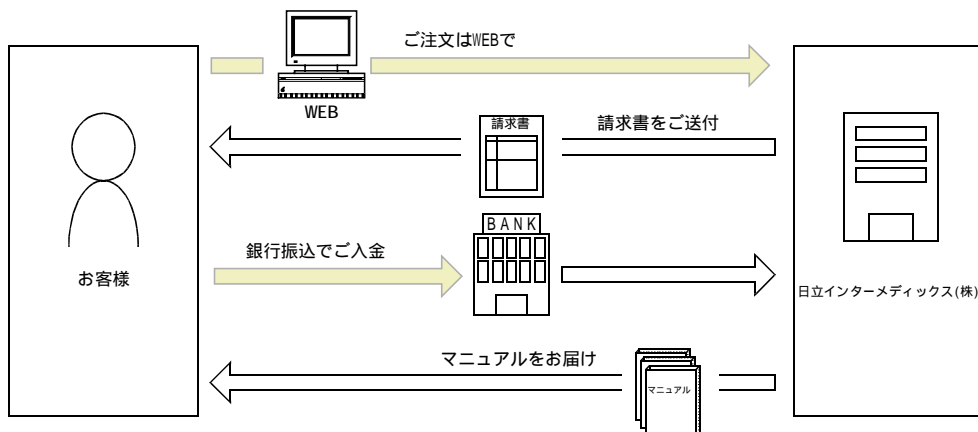
(1) マニュアル情報ホームページ「オンラインマニュアル」での公開

製品をよりご理解いただくためのご参考として、一部製品のマニュアルを公開しています。

(2) ソフトウェアサポートサービスお客様向けページでのマニュアル公開

ソフトウェアサポートサービスご契約のお客様向けにマニュアルを公開しています。公開しているマニュアルの一覧、本サービスの対象となる契約の種別などはマニュアル情報ホームページの「サポートサービス」をご参照ください。

3. マニュアルのご注文



マニュアル情報ホームページの「マニュアルのご購入」にアクセスし、お申し込み方法をご確認のうえWEBからご注文ください。ご注文先は日立インターメディアックス(株)となります。

ご注文いただいたマニュアルについて請求書をお送りします。

請求書の金額を指定銀行へ振り込んでください。

入金確認後7日以内にお届けします。在庫切れの場合は、納期を別途ご案内いたします。